平成13年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

一本木前遺跡 Ⅲ

本　文　編

（第一分冊）

2002

埼玉県熊谷市教育委員会

平成13年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

一本木前遺跡 Ⅲ

本　文　編

（第一分冊）

2002

埼玉県熊谷市教育委員会



一本木前遺跡遠景



一本木前遺跡Ｂ区



一本木前遺跡Ｅ・Ｆ区

序

私たちの郷土熊谷には、原始・古代の集落や中世の館跡等の埋蔵文化財が、数多く分布しております。

こうした埋蔵文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たち子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代に伝え、さらに豊かな熊谷市形成の礎としていかなければならないと考えております。

本書は、準用河川新奈良川の調節池の建設に伴い、平成12年6月から平成13年3月にかけて実施された一本木前遺跡の第三次発掘調査の成果をまとめたものです。

今回の発掘調査では、古墳時代を中心とする住居跡が166軒確認され、同期の大集落が形成されていたことが分かりました。住居跡からは大量の土器が出土し、中には祭祀を行ったものもみられました。また、平成11年度調査に引き続き人骨を伴う土坑墓も確認されました。土坑墓は方形周溝墓の主体部と思われ、その検出は極めて注目すべき成果だと言えます。

本書の成果が、埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され御理解、御協力を賜りました熊谷市建設部河川課並びに地元関係者には厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

熊谷市教育委員会

教育長　**飯塚　誠一郎**

例　言

1　本書は埼玉県熊谷市大字東別府字一本木前1340番地他に所在する一本木前遺跡第３次調査（平成12年度分）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は新奈良川第３調節池掘削工事に伴う事前調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。

3　本事業の組織は第Ⅰ章３のとおりである。

4　発掘調査期間は平成12年６月１日から平成13年３月31日であり、整理報告書作成期間は、平成13年６月１日から平成14年３月29日である。

5　発掘調査は寺社下博、小林貴郎、小野寺弘光、越前谷理、整理報告書作成作業は寺社下博、松田哲がそれぞれ担当した。

6　発掘調査の写真撮影は寺社下博、小林貴郎、越前谷理、小野寺弘光、遺物の写真撮影は寺社下がそれぞれ担当した。

7　出土品の整理及び図版の作成は寺社下、松田が行った。

8　本書の執筆は松田が行った。

9　遺跡の基準点測量と航空写真は(株)東京航業研究所、遺物の実測は（有）アルケーリサーチ、大成エンジニアリング株式会社にそれぞれ委託した。

10　本書の編集は松田が行った。

11　本書にかかる資料は熊谷市教育委員会が保管する。

12　本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、埼玉県立埋蔵文化財センター、

㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団、大里郡市町村文化財担当者会

凡　例

1　各遺構の番号は、発掘調査時に付したものを、整理時に調査区の東から西へ・北から南への順序で付け直した。

2　遺構挿図の縮尺は、原則として次のとおりである。

遺構配置図　1／400　　住居跡・掘立柱建物跡・柵列　1／60

カマド平面図　1／30　　溝跡平面図　1／400　　溝跡断面図　1／60

土坑・井戸・不明遺構　1／40　　畠跡　1／100

他の縮尺については、その都度示した。

3　遺構・遺物挿図中のスクリーントーン等は、原則として次の内容を示す。

地　山 ＝ 　　炭化物・黒色処理 ＝ 　焼土・赤彩 ＝ 

噴　砂 ＝ 

4　遺構挿図中のレベル基準点は、各挿図中内で統一した。なお、統一できなかった遺構については、各々示した。

5　遺構覆土の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・1998年版）に照らし、最も近似した色相を表示した。

6　遺物挿図の縮尺は、原則として1／4である。他の縮尺についてはその都度示した。

7　遺物観察表中の単位は、すべてcmを示す。なお、実測できず、推定復元した場合については、推定値として（　）で括って表示した。

8　遺物観察表中の胎土は、肉眼で観察できる次のような包含物質について、多い順に示した。

①白色粒子　②黒色粒子　③赤色粒子　④片岩粒子　⑤白色針状物質　⑥礫

9　遺物観察表中の焼成は、次のように3段階に区分して、該当する項目を数字で示した。

①良好（良く焼きしまっている）　②普通　③不良（脆く、崩れやすい）

10　遺物の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・1998年版）に照らし、最も近似した色相を表示した。

目　次

口　絵
序
例　言
凡　例
目　次

I　発掘調査の概要 …… 1
1　調査に至る経過 …… 1
2　発掘調査・報告書作成の経過 …… 1
3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織 …… 2
II　遺跡の立地と環境 …… 3
III　遺跡の概要 …… 8
1　調査の方法 …… 8
2　B区における検出された遺構と遺物 …… 8
3　E・F区における検出された遺構と遺物 …… 15
IV　B区の遺構と遺物 …… 20
1　住居跡 …… 20
2　掘立柱建物跡 …… 77
3　溝　跡 …… 79
4　土　坑 …… 89
5　井戸跡 …… 100
6　不明遺構 …… 107
7　畠　跡 …… 108
8　河川跡・遺構外出土遺物 …… 119
V　E・F区の遺構と遺物 …… 122
1　住居跡 …… 122
2　掘立柱建物跡・柵列 …… 391
3　溝　跡 …… 398
4　土　坑 …… 404
5　井戸跡 …… 430
6　畠　跡 …… 431
7　遺構外出土遺物 …… 433
VI　調査のまとめ …… 435

挿図目次

第１図　埼玉県の地形図…… 3
第２図　一本木前遺跡周辺遺跡分布図…… 4
第３図　一本木前遺跡位置図…… 9
第４図　一本木前遺跡調査区全測図……10
第５図　Ｂ区遺構配置図……11
第６図　Ｂ区住居跡・掘立柱建物跡配置図…12
第７図　Ｅ・Ｆ区遺構配置図 ……13・14
第８図　Ｅ・Ｆ区住居跡・掘立柱建物跡
　　配置図(1)……16
第９図　Ｅ・Ｆ区住居跡・掘立柱建物跡
　　配置図(2) ……17・18
第10図　基本土層図……19
第11図　Ｂ区１号住居跡・出土遺物……20
第12図　Ｂ区２号住居跡……22
第13図　Ｂ区２号住居跡出土遺物(1)……23
第14図　Ｂ区２号住居跡出土遺物(2)……24
第15図　Ｂ区３号住居跡・出土遺物……25
第16図　Ｂ区５号住居跡・出土遺物……26
第17図　Ｂ区６号住居跡・出土遺物……27
第18図　Ｂ区７号住居跡・出土遺物……28
第19図　Ｂ区８・９号住居跡……29
第20図　Ｂ区８号住居跡出土遺物……30
第21図　Ｂ区９号住居跡出土遺物……32
第22図　Ｂ区10号住居跡・出土遺物……33
第23図　Ｂ区11号住居跡……34
第24図　Ｂ区11号住居跡出土遺物……35
第25図　Ｂ区12号住居跡・出土遺物……36
第26図　Ｂ区13号住居跡・出土遺物……37
第27図　Ｂ区14・15号住居跡……38
第28図　Ｂ区14・15号住居跡出土遺物……39
第29図　Ｂ区16号住居跡・出土遺物……41
第30図　Ｂ区17号住居跡……42
第31図　Ｂ区17号住居跡出土遺物……43
第32図　Ｂ区18号住居跡・出土遺物……44
第33図　Ｂ区19号住居跡……45
第34図　Ｂ区20号住居跡……46
第35図　Ｂ区21号住居跡・出土遺物……48
第36図　Ｂ区23号住居跡・出土遺物……49
第37図　Ｂ区24号住居跡……50
第38図　Ｂ区24号住居跡出土遺物(1)……51
第39図　Ｂ区24号住居跡出土遺物(2)……52
第40図　Ｂ区25号住居跡……54
第41図　Ｂ区25号住居跡出土遺物……55
第42図　Ｂ区26号住居跡・出土遺物……56
第43図　Ｂ区27号住居跡……57
第44図　Ｂ区27号住居跡出土遺物(1)……58
第45図　Ｂ区27号住居跡出土遺物(2)……59
第46図　Ｂ区28号住居跡・出土遺物……60
第47図　Ｂ区29号住居跡……61
第48図　Ｂ区29号住居跡出土遺物……62
第49図　Ｂ区30・31号住居跡・30号住居跡
　　出土遺物……64
第50図　Ｂ区33号住居跡・出土遺物……66
第51図　Ｂ区34・35号住居跡……68
第52図　Ｂ区34号住居跡出土遺物(1)……69
第53図　Ｂ区34号住居跡出土遺物(2)……70
第54図　Ｂ区35号住居跡出土遺物(1)……71
第55図　Ｂ区35号住居跡出土遺物(2)……72
第56図　Ｂ区36号住居跡……73
第57図　Ｂ区36号住居跡出土遺物(1)……74
第58図　Ｂ区36号住居跡出土遺物(2)……75
第59図　Ｂ区37号住居跡……76
第60図　Ｂ区37号住居跡出土遺物……77
第61図　Ｂ区１号掘立柱建物跡……78
第62図　Ｂ区２号掘立柱建物跡……79
第63図　Ｂ区３号掘立柱建物跡……80
第64図　Ｂ区溝跡配置図……81
第65図　Ｂ区溝跡断面図……82

第66図　B区溝跡出土遺物……88
第67図　B区土坑(1)……91
第68図　B区土坑(2)……92
第69図　B区土坑(3)……93
第70図　B区土坑(4)……94
第71図　B区土坑(5)……95
第72図　B区土坑(6)……96
第73図　B区土坑(7)……97
第74図　B区土坑(8)……98
第75図　B区土坑(9)……99
第76図　B区土坑出土遺物 ……100
第77図　B区井戸跡(1) ……102
第78図　B区井戸跡(2) ……103
第79図　B区井戸跡(3) ……104
第80図　B区井戸跡出土遺物 ……105
第81図　B区1号不明遺構 ……106
第82図　B区1号不明遺構出土遺物 ……107
第83図　B区1号畠跡 ……108
第84図　B区2号畠跡 ……109
第85図　B区3号畠跡 ……110
第86図　B区4号畠跡 ……111•112
第87図　B区4号畠跡断面図 ……113
第88図　B区5号畠跡 ……114
第89図　B区6号畠跡 ……115
第90図　B区7号畠跡 ……116
第91図　B区8号畠跡 ……117
第92図　B区畠跡出土遺物 ……118
第93図　B区河川跡出土遺物(1) ……120
第94図　B区河川跡出土遺物(2) ……121
第95図　B区遺構外出土遺物 ……121
第96図　E・F区1号住居跡出土遺物 ……122
第97図　E・F区1・7号住居跡・
　1号住居跡カマド ……123
第98図　E・F区1号住居跡小鍛冶遺構 …124
第99図　E・F区2・3号住居跡 ……125
第100図　E・F区2・3号住居跡
　出土遺物……126
第101図　E・F区4・5・6・8号
　住居跡……128
第102図　E・F区4号住居跡出土遺物……129
第103図　E・F区5号住居跡出土遺物……130
第104図　E・F区6号住居跡出土遺物……131
第105図　E・F区7号住居跡出土遺物……132
第106図　E・F区9号住居跡・出土遺物…133
第107図　E・F区10号住居跡……134
第108図　E・F区10号住居跡出土遺物……135
第109図　E・F区11・12・13号住居跡……136
第110図　E・F区11号住居跡出土遺物(1)…137
第111図　E・F区11号住居跡出土遺物(2)…138
第112図　E・F区13号住居跡出土遺物……140
第113図　E・F区14・15・16号
　住居跡……141•142
第114図　E・F区15号住居跡カマド……143
第115図　E・F区14号住居跡出土遺物(1)…144
第116図　E・F区14号住居跡出土遺物(2)…145
第117図　E・F区14号住居跡出土遺物(3)…146
第118図　E・F区15号住居跡出土遺物……148
第119図　E・F区17号住居跡・出土遺物…150
第120図　E・F区18・19・20号住居跡……151
第121図　E・F区18号住居跡
　遺物出土状況……152
第122図　E・F区18号住居跡出土遺物(1)…153
第123図　E・F区18号住居跡出土遺物(2)…154
第124図　E・F区18号住居跡出土遺物(3)…155
第125図　E・F区18号住居跡出土遺物(4)…156
第126図　E・F区19号住居跡出土遺物……158
第127図　E・F区20・21号住居跡
　出土遺物……158
第128図　E・F区21・22号住居跡・
　22号住居跡カマド……159
第129図　E・F区22号住居跡出土遺物……160
第130図　E・F区23号住居跡……162
第131図　E・F区23号住居跡出土遺物……163
第132図　E・F区24号住居跡……164

第133図　E・F区24号住居跡出土遺物(1)…165
第134図　E・F区24号住居跡出土遺物(2)…166
第135図　E・F区25・26号住居跡……168
第136図　E・F区27・29号住居跡……169
第137図　E・F区27号住居跡出土遺物……170
第138図　E・F区28号住居跡……171
第139図　E・F区28号住居跡出土遺物(1)…172
第140図　E・F区28号住居跡出土遺物(2)…173
第141図　E・F区29号住居跡出土遺物……174
第142図　E・F区30号住居跡……174
第143図　E・F区30号住居跡出土遺物……175
第144図　E・F区31号住居跡……176
第145図　E・F区32号住居跡……177
第146図　E・F区32号住居跡出土遺物……178
第147図　E・F区33・34・35・36・
37号住居跡……181・182
第148図　E・F区33号住居跡
遺物出土状況……183
第149図　E・F区33号住居跡出土遺物(1)…184
第150図　E・F区33号住居跡出土遺物(2)…185
第151図　E・F区33号住居跡出土遺物(3)…186
第152図　E・F区34号住居跡出土遺物……187
第153図　E・F区35号住居跡出土遺物……189
第154図　E・F区36号住居跡出土遺物……190
第155図　E・F区38・39・41号住居跡(1)…192
第156図　E・F区38・39・41号住居跡(2)…193
第157図　E・F区38・39号住居跡
出土遺物……194
第158図　E・F区40・44・47・48・49号
住居跡(1)……195
第159図　E・F区40・44・47・48・49号
住居跡(2)……196
第160図　E・F区40号住居跡出土遺物……197
第161図　E・F区42号住居跡・出土遺物…198
第162図　E・F区43・45・46号住居跡……200
第163図　E・F区46号住居跡カマド周辺
遺物出土状況……201
第164図　E・F区43号住居跡出土遺物……202
第165図　E・F区44号住居跡出土遺物……203
第166図　E・F区45号住居跡出土遺物……203
第167図　E・F区46号住居跡出土遺物……205
第168図　E・F区48号住居跡出土遺物……206
第169図　E・F区49号住居跡出土遺物……207
第170図　E・F区50号住居跡……208
第171図　E・F区50号住居跡出土遺物……209
第172図　E・F区51号住居跡……210
第173図　E・F区51号住居跡出土遺物……211
第174図　E・F区52・53号住居跡・52号
住居跡カマド……212
第175図　E・F区52号住居跡出土遺物……213
第176図　E・F区53号住居跡出土遺物……215
第177図　E・F区54・55・56号住居跡(1)…216
第178図　E・F区54・55・56号住居跡(2)・
56号住居跡カマド……217
第179図　E・F区54号住居跡出土遺物……218
第180図　E・F区55号住居跡出土遺物……219
第181図　E・F区56号住居跡出土遺物(1)…220
第182図　E・F区56号住居跡出土遺物(2)…221
第183図　E・F区57号住居跡……223
第184図　E・F区57号住居跡出土遺物……224
第185図　E・F区58・59号住居跡(1)……225
第186図　E・F区58・59号住居跡(2)……226
第187図　E・F区58号住居跡出土遺物(1)…227
第188図　E・F区58号住居跡出土遺物(2)…228
第189図　E・F区58号住居跡出土遺物(3)…229
第190図　E・F区58号住居跡出土遺物(4)…230
第191図　E・F区59号住居跡出土遺物……231
第192図　E・F区60号住居跡……234
第193図　E・F区60号住居跡出土遺物(1)…235
第194図　E・F区60号住居跡出土遺物(2)…236
第195図　E・F区61・65号住居跡……238
第196図　E・F区61号住居跡出土遺物……239
第197図　E・F区62・63・64号住居跡……241

第198図　Ｅ・Ｆ区62号住居跡
遺物出土状況……243
第199図　Ｅ・Ｆ区62・64号住居跡
出土遺物(1)……244
第200図　Ｅ・Ｆ区62・64号住居跡
出土遺物(2)……245
第201図　Ｅ・Ｆ区62・64号住居跡
出土遺物(3)……246
第202図　Ｅ・Ｆ区65号住居跡出土遺物……247
第203図　Ｅ・Ｆ区66号住居跡……249
第204図　Ｅ・Ｆ区66号住居跡カマド……250
第205図　Ｅ・Ｆ区66号住居跡出土遺物(1)…251
第206図　Ｅ・Ｆ区66号住居跡出土遺物(2)…252
第207図　Ｅ・Ｆ区67・68号住居跡……254
第208図　Ｅ・Ｆ区67号住居跡出土遺物……256
第209図　Ｅ・Ｆ区68・69号住居跡
出土遺物……257
第210図　Ｅ・Ｆ区69・71号住居跡……258
第211図　Ｅ・Ｆ区70号住居跡……259
第212図　Ｅ・Ｆ区70号住居跡出土遺物……260
第213図　Ｅ・Ｆ区71号住居跡出土遺物……263
第214図　Ｅ・Ｆ区72号住居跡……265
第215図　Ｅ・Ｆ区72号住居跡出土遺物……266
第216図　Ｅ・Ｆ区73号住居跡……268
第217図　Ｅ・Ｆ区73号住居跡出土遺物……269
第218図　Ｅ・Ｆ区74号住居跡……270
第219図　Ｅ・Ｆ区74号住居跡出土遺物……271
第220図　Ｅ・Ｆ区75・77号住居跡……272
第221図　Ｅ・Ｆ区75号住居跡出土遺物……273
第222図　Ｅ・Ｆ区76号住居跡・出土遺物…274
第223図　Ｅ・Ｆ区77号住居跡出土遺物……275
第224図　Ｅ・Ｆ区78号住居跡……276
第225図　Ｅ・Ｆ区78・79号住居跡
出土遺物……277
第226図　Ｅ・Ｆ区79・80号住居跡・
80号住居跡出土遺物……279
第227図　Ｅ・Ｆ区81号住居跡・出土遺物…280
第228図　Ｅ・Ｆ区82号住居跡・カマド……281
第229図　Ｅ・Ｆ区82号住居跡出土遺物(1)…282
第230図　Ｅ・Ｆ区82号住居跡出土遺物(2)…283
第231図　Ｅ・Ｆ区83号住居跡……285
第232図　Ｅ・Ｆ区83号住居跡カマド……286
第233図　Ｅ・Ｆ区83号住居跡出土遺物……287
第234図　Ｅ・Ｆ区84号住居跡……289
第235図　Ｅ・Ｆ区84号住居跡出土遺物……290
第236図　Ｅ・Ｆ区85号住居跡……291
第237図　Ｅ・Ｆ区85号住居跡カマド……292
第238図　Ｅ・Ｆ区85号住居跡出土遺物……293
第239図　Ｅ・Ｆ区86号住居跡……295
第240図　Ｅ・Ｆ区86号住居跡出土遺物……296
第241図　Ｅ・Ｆ区87号住居跡……297
第242図　Ｅ・Ｆ区87号住居跡出土遺物……298
第243図　Ｅ・Ｆ区88号住居跡……299
第244図　Ｅ・Ｆ区88号住居跡出土遺物……300
第245図　Ｅ・Ｆ区89号住居跡……301
第246図　Ｅ・Ｆ区89号住居跡出土遺物……302
第247図　Ｅ・Ｆ区90・91・93・101号
住居跡(1)……303
第248図　Ｅ・Ｆ区90・91・93・101号
住居跡(2)……304
第249図　Ｅ・Ｆ区90・91・93号住居跡
カマド……305
第250図　Ｅ・Ｆ区90号住居跡出土遺物(1)…306
第251図　Ｅ・Ｆ区90号住居跡出土遺物(2)…307
第252図　Ｅ・Ｆ区92号住居跡・カマド……309
第253図　Ｅ・Ｆ区92号住居跡出土遺物(1)…310
第254図　Ｅ・Ｆ区92号住居跡出土遺物(2)…311
第255図　Ｅ・Ｆ区93号住居跡出土遺物(1)…312
第256図　Ｅ・Ｆ区93号住居跡出土遺物(2)…313
第257図　Ｅ・Ｆ区94・96号住居跡(1)……315
第258図　Ｅ・Ｆ区94・96号住居跡(2)……316
第259図　Ｅ・Ｆ区94号住居跡出土遺物……317
第260図　Ｅ・Ｆ区95・100号住居跡(1) ……318
第261図　Ｅ・Ｆ区95・100号住居跡(2) ……319

第262図　E・F区95・96号住居跡
出土遺物……320
第263図　E・F区97号住居跡……321
第264図　E・F区98・99号住居跡……322
第265図　E・F区97・98号住居跡
出土遺物……323
第266図　E・F区99号住居跡出土遺物(1)…324
第267図　E・F区99号住居跡出土遺物(2)…325
第268図　E・F区100号住居跡出土遺物 …327
第269図　E・F区101号住居跡出土遺物 …328
第270図　E・F区102号住居跡・
出土遺物……329
第271図　E・F区103号住居跡 ……330
第272図　E・F区103号住居跡出土遺物 …331
第273図　E・F区104号住居跡 ……332
第274図　E・F区104号住居跡出土遺物 …333
第275図　E・F区105・106号住居跡……334
第276図　E・F区105号住居跡出土遺物 …335
第277図　E・F区106号住居跡
出土遺物(1)……336
第278図　E・F区106号住居跡
出土遺物(2)……337
第279図　E・F区107号住居跡 ……338
第280図　E・F区107号住居跡出土遺物 …339
第281図　E・F区108・114・115号住居跡・
108号住居跡出土遺物 ……340
第282図　E・F区109・111・112・113号
住居跡(1)……341
第283図　E・F区109・111・112・113号
住居跡(2)・112号住居跡出土遺物…342
第284図　E・F区109号住居跡出土遺物 …343
第285図　E・F区110号住居跡 ……344
第286図　E・F区110号住居跡出土遺物 …346
第287図　E・F区111号住居跡出土遺物 …347
第288図　E・F区116号住居跡 ……350
第289図　E・F区116号住居跡出土遺物 …350
第290図　E・F区117号住居跡 ……351
第291図　E・F区117号住居跡出土遺物 …352
第292図　E・F区118号住居跡・
遺物出土状況(1)……353
第293図　E・F区118号住居跡
遺物出土状況(2)……354
第294図　E・F区118号住居跡
出土遺物(1)……355
第295図　E・F区118号住居跡
出土遺物(2)……356
第296図　E・F区118号住居跡
出土遺物(3)……357
第297図　E・F区119号住居跡 ……359
第298図　E・F区119号住居跡出土遺物 …360
第299図　E・F区120号住居跡 ……362
第300図　E・F区120号住居跡カマド脇
遺物出土状況……363
第301図　E・F区120号住居跡
出土遺物(1)……364
第302図　E・F区120号住居跡
出土遺物(2)……365
第303図　E・F区120号住居跡
出土遺物(3)……366
第304図　E・F区121号住居跡・カマド …368
第305図　E・F区121号住居跡
出土遺物(1)……369
第306図　E・F区121号住居跡
出土遺物(2)……370
第307図　E・F区122・123・124号
住居跡……372
第308図　E・F区122号住居跡出土遺物 …373
第309図　E・F区123号住居跡出土遺物 …374
第310図　E・F区125号住居跡・
遺物出土状況(1)……376
第311図　E・F区125号住居跡遺物
出土状況(2)……377
第312図　E・F区125号住居跡
出土遺物(1)……378

第313図　E・F区125号住居跡
出土遺物(2)……379
第314図　E・F区125号住居跡
出土遺物(3)……380
第315図　E・F区125号住居跡
出土遺物(4)……381
第316図　E・F区126・128号住居跡……384
第317図　E・F区126号住居跡出土遺物 …385
第318図　E・F区127号住居跡 ……386
第319図　E・F区127号住居跡出土遺物 …387
第320図　E・F区128号住居跡出土遺物 …388
第321図　E・F区129号住居跡・カマド …389
第322図　E・F区129号住居跡出土遺物 …390
第323図　E・F区1号掘立柱建物跡……392
第324図　E・F区2号掘立柱建物跡……393
第325図　E・F区3・4号掘立柱建物跡・
1号柵列……395・396
第326図　E・F区5号掘立柱建物跡・
2号柵列……397
第327図　E・F区溝跡配置図(1)……399
第328図　E・F区溝跡配置図(2)……401
第329図　E・F区溝跡断面図……402
第330図　E・F区土坑(1)……407
第331図　E・F区土坑(2)……408
第332図　E・F区土坑(3)……409
第333図　E・F区土坑(4)……410
第334図　E・F区土坑(5)……411
第335図　E・F区土坑(6)……412
第336図　E・F区土坑(7)……413
第337図　E・F区土坑(8)……414
第338図　E・F区土坑(9)……415
第339図　E・F区土坑(10)……416
第340図　E・F区土坑(11)……417
第341図　E・F区土坑(12)……418
第342図　E・F区土坑(13)……419
第343図　E・F区土坑(14)……420
第344図　E・F区土坑(15)……421
第345図　E・F区土坑(16)……422
第346図　E・F区土坑(17)……423
第347図　E・F区土坑(18)……424
第348図　E・F区土坑(19)……425
第349図　E・F区土坑(20)……426
第350図　E・F区土坑(21)……427
第351図　E・F区土坑(22)……428
第352図　E・F区土坑出土遺物(1)……429
第353図　E・F区土坑出土遺物(2)……430
第354図　E・F区井戸跡……431
第356図　E・F区1号畠跡……432
第357図　E・F区遺構外出土遺物……433

表目次

第1表　遺跡一覧表…… 7
第2表　B区1号住居跡出土遺物観察表……21
第3表　B区2号住居跡出土遺物観察表……23
第4表　B区3号住居跡出土遺物観察表……25
第5表　B区5号住居跡出土遺物観察表……26
第6表　B区6号住居跡出土遺物観察表……27
第7表　B区7号住居跡出土遺物観察表……28
第8表　B区8号住居跡出土遺物観察表……30
第9表　B区9号住居跡出土遺物観察表……33
第10表　B区10号住居跡出土遺物観察表……34
第11表　B区11号住居跡出土遺物観察表……35
第12表　B区12号住居跡出土遺物観察表……36
第13表　B区13号住居跡出土遺物観察表……37
第14表　B区14号住居跡出土遺物観察表……39
第15表　B区15号住居跡出土遺物観察表……39
第16表　B区16号住居跡出土遺物観察表……41

第17表　B区17号住居跡出土遺物観察表……43
第18表　B区18号住居跡出土遺物観察表……44
第19表　B区21号住居跡出土遺物観察表……48
第20表　B区23号住居跡出土遺物観察表……49
第21表　B区24号住居跡出土遺物観察表……52
第22表　B区25号住居跡出土遺物観察表……55
第23表　B区26号住居跡出土遺物観察表……56
第24表　B区27号住居跡出土遺物観察表……59
第25表　B区28号住居跡出土遺物観察表……60
第26表　B区29号住居跡出土遺物観察表……63
第27表　B区30号住居跡出土遺物観察表……64
第28表　B区33号住居跡出土遺物観察表……67
第29表　B区34号住居跡出土遺物観察表……72
第30表　B区35号住居跡出土遺物観察表……72
第31表　B区36号住居跡出土遺物観察表……75
第32表　B区37号住居跡出土遺物観察表……77
第33表　B区溝跡出土遺物観察表……88
第34表　B区土坑一覧表……90
第35表　B区土坑出土遺物観察表 ……100
第36表　B区井戸跡一覧表 ……101
第37表　B区井戸跡出土遺物観察表 ……105
第38表　B区不明遺構出土遺物観察表 ……107
第39表　B区畠跡出土観察表 ……118
第40表　B区河川跡出土観察表 ……119
第41表　B区遺構外出土遺物観察表 ……121
第42表　E・F区1号住居跡
出土遺物観察表 ……124
第43表　E・F区2号住居跡
出土遺物観察表 ……126
第44表　E・F区3号住居跡
出土遺物観察表 ……126
第45表　E・F区4号住居跡
出土遺物観察表 ……129
第46表　E・F区5号住居跡
出土遺物観察表 ……130
第47表　E・F区6号住居跡
出土遺物観察表 ……131
第48表　E・F区7号住居跡
出土遺物観察表 ……132
第49表　E・F区9号住居跡
出土遺物観察表 ……133
第50表　E・F区10号住居跡
出土遺物観察表 ……135
第51表　E・F区11号住居跡
出土遺物観察表 ……138
第52表　E・F区13号住居跡
出土遺物観察表 ……140
第53表　E・F区14号住居跡
出土遺物観察表 ……146
第54表　E・F区15号住居跡
出土遺物観察表 ……149
第55表　E・F区17号住居跡
出土遺物観察表 ……150
第56表　E・F区18号住居跡
出土遺物観察表 ……157
第57表　E・F区19号住居跡
出土遺物観察表 ……158
第58表　E・F区20号住居跡
出土遺物観察表 ……158
第59表　E・F区21号住居跡
出土遺物観察表 ……158
第60表　E・F区22号住居跡
出土遺物観察表 ……161
第61表　E・F区23号住居跡
出土遺物観察表 ……163
第62表　E・F区24号住居跡
出土遺物観察表 ……167
第63表　E・F区27号住居跡
出土遺物観察表 ……170
第64表　E・F区28号住居跡
出土遺物観察表 ……173
第65表　E・F区29号住居跡
出土遺物観察表 ……174

第66表　E・F区30号住居跡
出土遺物観察表 ……175
第67表　E・F区32号住居跡
出土遺物観察表 ……179
第68表　E・F区33号住居跡
出土遺物観察表 ……186
第69表　E・F区34号住居跡
出土遺物観察表 ……188
第70表　E・F区35号住居跡
出土遺物観察表 ……189
第71表　E・F区36号住居跡
出土遺物観察表 ……190
第72表　E・F区38号住居跡
出土遺物観察表 ……194
第73表　E・F区39号住居跡
出土遺物観察表 ……194
第74表　E・F区40号住居跡
出土遺物観察表 ……197
第75表　E・F区42号住居跡
出土遺物観察表 ……199
第76表　E・F区43号住居跡
出土遺物観察表 ……202
第77表　E・F区44号住居跡
出土遺物観察表 ……203
第78表　E・F区45号住居跡
出土遺物観察表 ……204
第79表　E・F区46号住居跡
出土遺物観察表 ……206
第80表　E・F区48号住居跡
出土遺物観察表 ……206
第81表　E・F区49号住居跡
出土遺物観察表 ……207
第82表　E・F区50号住居跡
出土遺物観察表 ……209
第83表　E・F区51号住居跡
出土遺物観察表 ……211
第84表　E・F区52号住居跡
出土遺物観察表 ……214
第85表　E・F区53号住居跡
出土遺物観察表 ……215
第86表　E・F区54号住居跡
出土遺物観察表 ……218
第87表　E・F区55号住居跡
出土遺物観察表 ……219
第88表　E・F区56号住居跡
出土遺物観察表 ……222
第89表　E・F区57号住居跡
出土遺物観察表 ……224
第90表　E・F区58号住居跡
出土遺物観察表 ……232
第91表　E・F区59号住居跡
出土遺物観察表 ……233
第92表　E・F区60号住居跡
出土遺物観察表 ……237
第93表　E・F区61号住居跡
出土遺物観察表 ……240
第94表　E・F区62号住居跡
出土遺物観察表 ……247
第95表　E・F区64号住居跡
出土遺物観察表 ……248
第96表　E・F区65号住居跡
出土遺物観察表 ……248
第97表　E・F区66号住居跡
出土遺物観察表 ……253
第98表　E・F区67号住居跡
出土遺物観察表 ……256
第99表　E・F区68号住居跡
出土遺物観察表 ……257
第100表　E・F区69号住居跡
出土遺物観察表……257
第101表　E・F区70号住居跡
出土遺物観察表……261
第102表　E・F区71号住居跡
出土遺物観察表……264

第103表　E・F区72号住居跡
出土遺物観察表……267
第104表　E・F区73号住居跡
出土遺物観察表……269
第105表　E・F区74号住居跡
出土遺物観察表……271
第106表　E・F区75号住居跡
出土遺物観察表……273
第107表　E・F区76号住居跡
出土遺物観察表……274
第108表　E・F区77号住居跡
出土遺物観察表……275
第109表　E・F区78号住居跡
出土遺物観察表……278
第110表　E・F区79号住居跡
出土遺物観察表……278
第111表　E・F区80号住居跡
出土遺物観察表……279
第112表　E・F区81号住居跡
出土遺物観察表……280
第113表　E・F区82号住居跡
出土遺物観察表……284
第114表　E・F区83号住居跡
出土遺物観察表……288
第115表　E・F区84号住居跡
出土遺物観察表……290
第116表　E・F区85号住居跡
出土遺物観察表……294
第117表　E・F区86号住居跡
出土遺物観察表……296
第118表　E・F区87号住居跡
出土遺物観察表……298
第119表　E・F区88号住居跡
出土遺物観察表……300
第120表　E・F区89号住居跡
出土遺物観察表……302
第121表　E・F区90号住居跡
出土遺物観察表……307
第122表　E・F区92号住居跡
出土遺物観察表……311
第123表　E・F区93号住居跡
出土遺物観察表……314
第124表　E・F区94号住居跡
出土遺物観察表……317
第125表　E・F区95号住居跡
出土遺物観察表……320
第126表　E・F区96号住居跡
出土遺物観察表……320
第127表　E・F区97号住居跡
出土遺物観察表……323
第128表　E・F区98号住居跡
出土遺物観察表……323
第129表　E・F区99号住居跡
出土遺物観察表……325
第130表　E・F区100号住居跡
出土遺物観察表……327
第131表　E・F区101号住居跡
出土遺物観察表……328
第132表　E・F区102号住居跡
出土遺物観察表……329
第133表　E・F区103号住居跡
出土遺物観察表……331
第134表　E・F区104号住居跡
出土遺物観察表……333
第135表　E・F区105号住居跡
出土遺物観察表……335
第136表　E・F区106号住居跡
出土遺物観察表……337
第137表　E・F区107号住居跡
出土遺物観察表……339
第138表　E・F区108号住居跡
出土遺物観察表……340
第139表　E・F区109号住居跡
出土遺物観察表……343

第140表　E・F区110号住居跡
出土遺物観察表……347
第141表　E・F区111号住居跡
出土遺物観察表……347
第142表　E・F区112号住居跡
出土遺物観察表……347
第1表　E・F区116号住居跡
出土遺物観察表……350
第144表　E・F区117号住居跡
出土遺物観察表……352
第145表　E・F区118号住居跡
出土遺物観察表……358
第146表　E・F区119号住居跡
出土遺物観察表……361
第147表　E・F区120号住居跡
出土遺物観察表……366
第148表　E・F区121号住居跡
出土遺物観察表……371
第149表　E・F区122号住居跡
出土遺物観察表……374
第150表　E・F区123号住居跡
出土遺物観察表……375
第151表　E・F区125号住居跡
出土遺物観察表……382
第152表　E・F区126号住居跡
出土遺物観察表……385
第153表　E・F区127号住居跡
出土遺物観察表……387
第154表　E・F区128号住居跡
出土遺物観察表……388
第155表　E・F区129号住居跡
出土遺物観察表……390
第156表　E・F区土坑一覧表 ……405
第157表　E・F区土坑出土遺物観察表 ……430
第158表　E・F区遺構外出土遺物観察表 …434

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至る経過

平成９年10月９日、熊谷市長から熊谷市教育委員会教育長に対して、熊谷市大字東別府1340番地他地内の面積61,280㎡に及ぶ準用河川新奈良川第３調節池事業地定地内における文化財の所在及び取扱いについて協議があった。

この協議に対して、開発予定地が現時点では埋蔵文化財の存在は確認されていないものの、周知の遺跡（別府条里遺跡・遺跡番号59―49）の縁辺部にあたり、遺跡の存在する可能性が非常に高い地域であるため、事前に埋蔵文化財の存在を確認するための試掘調査を必要とする旨、平成９年10月15日付けで回答した。

この回答に対し、熊谷市長から平成９年10月15日付けで、埋蔵文化財の存在を確認するための試掘調査の依頼を受けた。

平成９年12月１日から９日にかけて試掘調査を実施した結果、古墳時代から平安時代に及ぶ複合集落であることが確認された（一本木前遺跡・遺跡番号59―115）ため、当該地は、現状で保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい旨、平成９年12月19日付けで回答した。

その後、保存策について協議を重ねたが、緊急性があり、工事の中止及び他所への変更は不可能である点が確認され、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査は、対象が広範囲に及ぶため、６区に区分された工区にあわせて分割し、平成10年度・Ａ地区、平成11年度・Ａ地区の北地域、Ｂ地区の東道路域及びＤ・Ｅ地区、平成12年度・Ｂ地区の中央部及びＥ・Ｆ地区、平成13年度・Ｂ地区西地域及びＣ地区南地域、平成14年度・Ｃ地区中央から北地域及びＢ地区西地域というように、平成10年度から平成14年度の５ヵ年にわたって実施することとなった。今回報告するのは平成12年度発掘調査分である。

発掘調査に先立って、熊谷市長から文化財保護法第57条の３第１項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が、平成13年９月４日付け熊河発第93号で提出された。これに対し、埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について、平成13年10月４日付け教文第３―561号をもって、発掘調査実施の指示通知があった。

また、熊谷市教育委員会教育長は、文化財保護法第58条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘の報告を、平成13年９月４日付け熊教社発第448号で提出した。

2　発掘調査・報告書作成の経過

第１次発掘調査は、平成10年６月１日より平成11年３月31日まで、第２次発掘調査は、平成11年６月１日より平成12年７月28日までそれぞれ実施した。

今回報告する第３次発掘調査は、平成12年６月１日から開始した。重機による遺構確認面

までの掘削、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、遺物取り上げ、実測、写真撮影と一連の調査を繰り返し、平成13年３月31日に終了した。調査対象面積は、遺跡面積61,280㎡のうち14,771㎡である。

第１・２次発掘調査分については、既に報告書を刊行済みである。

第３次発掘調査分の整理・報告書作成作業は、平成13年６月１日から開始した。遺物の洗浄・注記・復元作業を行い、それと同時に遺構の図面整理作業を行った。７月に入り遺物の実測作業・拓本取りを行い、10月から遺物・遺構のトレース、版組み、遺物の写真撮影等を行っていった。その後11月から原稿執筆、割付、写真図版作成等を行い、平成13年１月に印刷業者を決定した。入稿後、３ヶ月にわたって校正を行い、本報告書の刊行に至ったものである。

3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　熊谷市教育委員会

(1)　発掘調査（平成12年度）

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	野辺良雄
社会教育課長	浜島義雄
副参事	浅野晴樹
課長補佐	北　俊明
主幹兼係長	金子正之
主査	浅見敦夫
主任	寺社下博
主任	吉野　健
主事	松田　哲
発掘調査員	小林貴郎
発掘調査員	越前谷理
発掘調査員	小野寺弘光

(2)　整理調査（平成13年度）

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	小林武夫
社会教育課長	岩田　隆
副参事	浅野晴樹
課長補佐	北　俊明
主幹兼係長	金子正之
主査	寺社下博
主査	浅見敦夫
主任	吉野　健
主事	松田　哲
発掘調査員	小野寺弘光
発掘調査員	蔵持俊輔
発掘調査員	加藤隆則

II　遺跡の立地と環境

遺跡の立地
（第１図）

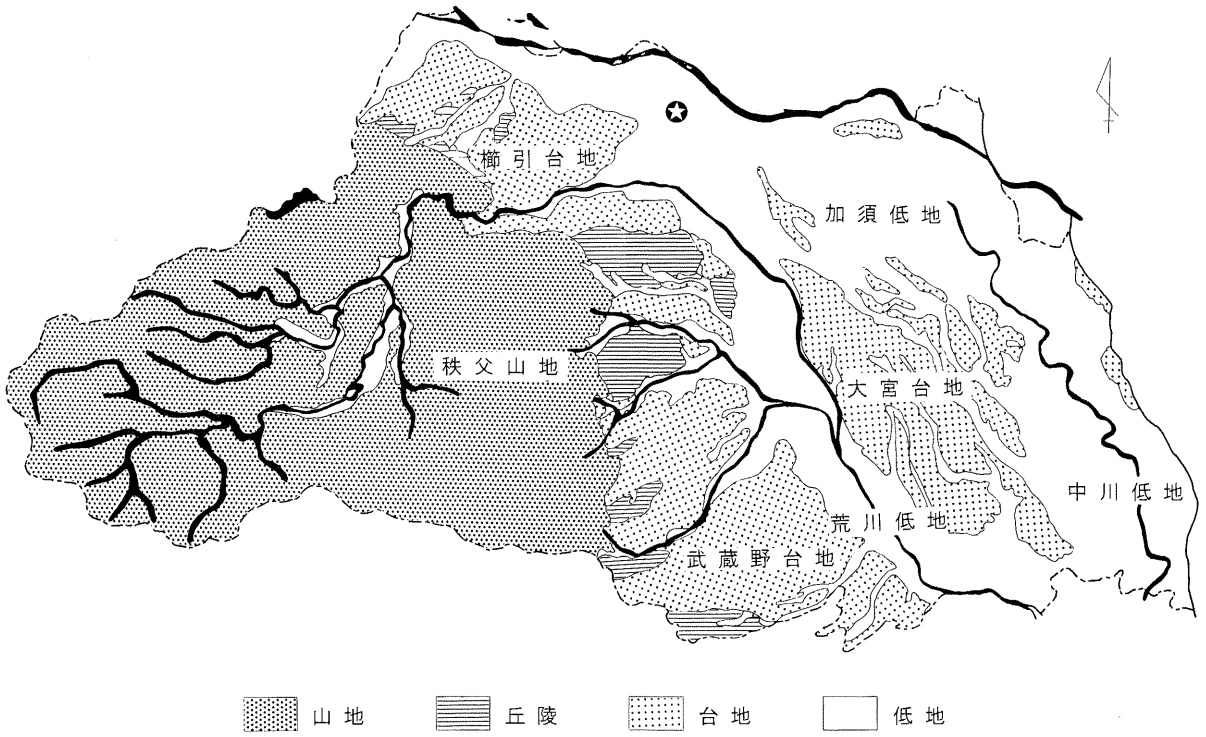
一本木前遺跡は、熊谷市大字東別府字一本木前1340番地他に所在し、JR 高崎線籠原駅の北約3.0kmに当たり、利根川から南へ約5.2km、荒川から北へ約5.2kmの、両河川のほぼ中間に位置している。

本遺跡の所在する東別府地区は、熊谷市の北西部に当たり、利根川の南岸に広がる妻沼低地と、熊谷市域の大半に及ぶ新荒川扇状地（沖積扇状地であり、熊谷低地と呼称されている）が接している地である。

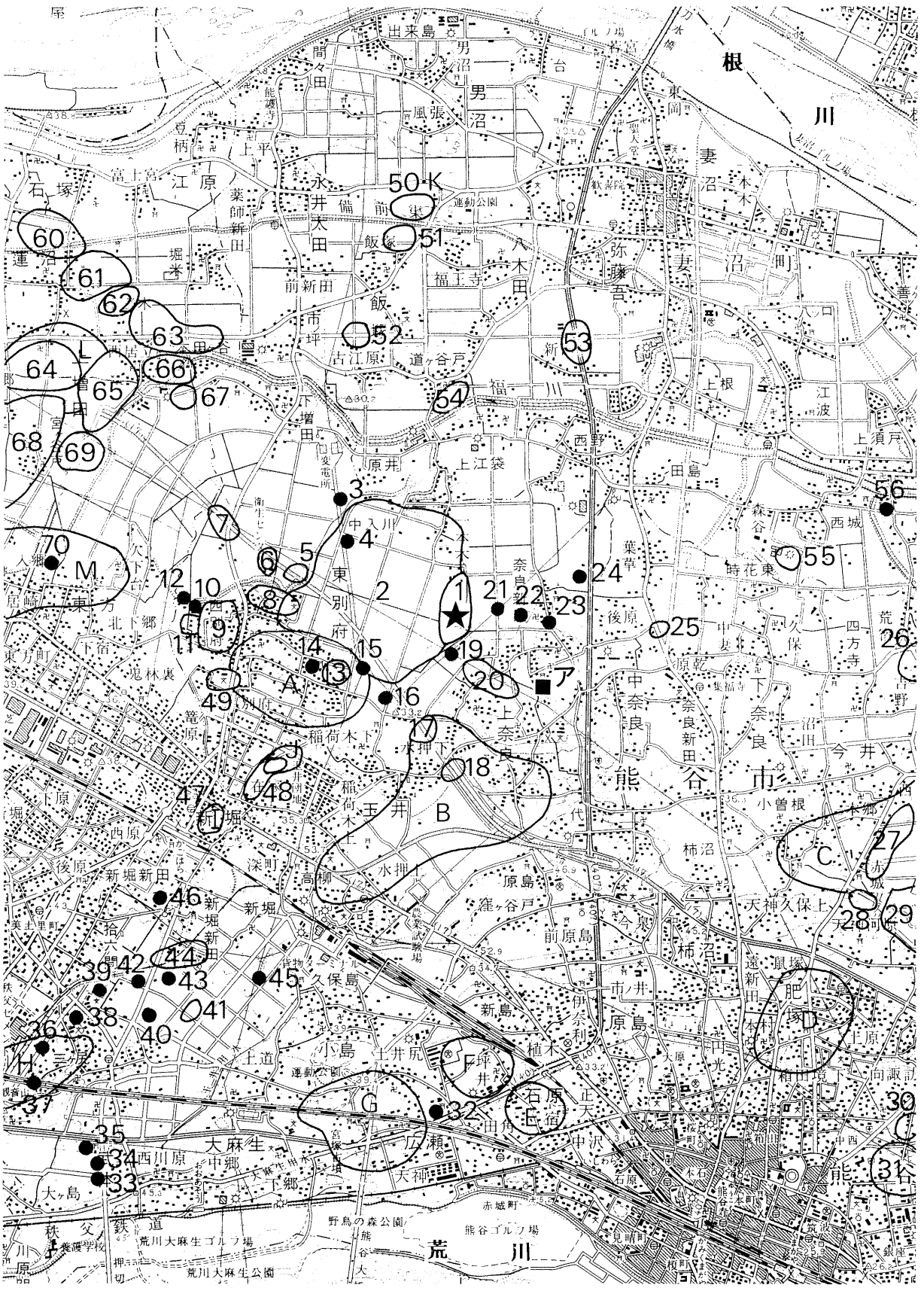
また、市域の西から西南部にかけては、寄居町末野付近を扇頂として、洪積世に形成された荒川扇状地である櫛挽台地が広がっている。

こうした地であるため、現況では麦畑あるいは水田として利用されている土地でもある。標高は30.0m前後である。

本遺跡は、まさにこの両低地の接する位置にあるため、両河川の氾濫等によって砂・シルト層が厚く堆積し、あるいは関東造盆地運動による地盤の沈降もあって、遺跡が深く埋没しており、遺跡の発見が遅れた原因となっている。こうした土地の性格上、まだまだ知られていない遺跡が多数存在することが予想されるが、現時点では、本遺跡周辺の遺跡は少ないことから、主に妻沼低地・熊谷低地を中心にみていくこととする。



第１図　埼玉県の地形図



第２図　一本木前遺跡周辺遺跡分布図

歴史的環境（第２図）　縄文時代晩期から弥生時代前期にかけては、僅かな遺物の確認はあるが、その実態はほとんど把握されない。

弥生時代中期初頭に至ると、櫛挽台地上では、三ヶ尻遺跡内上古地点(38)、妻沼低地上では、再葬墓16基が検出された横間栗遺跡(６)、関下遺跡(５)、深谷市の明戸東遺跡(64)、上敷免遺跡（地図上未掲載)、妻沼町の飯塚北遺跡（50)、飯塚遺跡（51)、飯塚南遺跡（52)等が点在し、再葬墓を中心に広い展開がみられるようになる。

一方、熊谷低地では北島遺跡（29)、前中西遺跡（31）がある。北島遺跡は、隅丸方形を呈する竪穴住居跡(床面に壺棺を伴う例もみられる)、掘立柱建物跡、墓域、河川跡、堰跡(長さ15m、高さ約１mで盛り土が施される)、用水路跡、水田跡等で構成される集落・生産域が確認された貴重な例である。そこでの墓制は方形周溝墓ではなく、土坑墓が採用されていた。北島遺跡の南東約２kmに位置する前中西遺跡においても、同時期の集落と墓域が確認されている。ここでは、墓制に方形周溝墓が採用されており、現在までに９基が検出されている。北島遺跡とは異なる様相を示しており、注目すべき点である。

後期の遺跡としては、深谷市の明戸東遺跡、妻沼町の弥藤吾新田遺跡（53）等、妻沼低地上でやや規模の大きな集落が営まれるようになってくるが、調査された遺跡数は多くない。

古墳時代に入ると、前代に形成された低地帯での大規模な集落経営が継続され、増加・拡大されてくるようになる。

前期には、妻沼低地上には、横間栗遺跡をはじめとして、根絡遺跡(７)、中耕地遺跡(21)、中条遺跡群内の雷電遺跡(地図上未掲載)、妻沼町の弥藤吾新田遺跡の他、深谷市内には東川端遺跡（69)、明戸東遺跡等、比較的大規模な集落が営まれる。

また、熊谷低地上でも、天神遺跡（28)、北島遺跡、天神東遺跡（地図上未掲載)、東沢遺跡（地図上未掲載）等、大規模な集落が営まれる。いずれも湧水地帯に隣接する地であり、後背湿地を控えた、初期稲作農業に適した地といえる。これらの遺跡のうち、北島遺跡や東沢遺跡等では農具が出土しており、雷電遺跡では剣型等の滑石製模造品、Ｓ字条口縁の台付甕、穿孔高坏、器台等が出土している。また、東川端遺跡、上敷免遺跡、行田市小敷田遺跡(地図上未掲載)、北島遺跡では方形周溝墓群が検出されており、東川端遺跡２号墓では、パレススタイルの大型壺を伴うことが確認されている。この他、北島遺跡では、割竹形木棺も検出されている。

この時期に至って、墓制は櫛挽台地、妻沼低地、熊谷低地の区別なく、ほぼ統一される。

中期の遺跡は、前期の様相を踏襲しているようであるが、点在する傾向にあり、不明な部分が多い。そんな中、妻沼低地と熊谷低地の接点地域である中条遺跡群内の権現山遺跡（地図上未掲載）では、出現期のカマドをもつ住居跡が検出され、また常光院東遺跡（地図上未掲載）等でも遺構・遺物が検出されている。

後期に至ると、台地上、あるいは低地の自然堤防上を問わず、遺跡数は増大し、その規模も飛躍的に拡大してくる。また、その後継続して、奈良・平安時代まで集落が営まれる場合が多い。櫛挽台地東縁部とそれに接する熊谷低地西端部では、樋の上遺跡(44)、樋の

上遺跡内下辻地点（43）、三ヶ尻遺跡内三尻中学地点（39）、同遺跡内天王地点（36）等、大規模な遺跡が集中する様子をみせ、拠点となっていた可能性が窺える。

妻沼低地では、別府・奈良地域の拠点として、250軒以上の住居が検出されている一本木前遺跡（１）を中心とした、天神下遺跡（19）、根絡遺跡等の各遺跡が確認されている。このうち、一本木前遺跡では、馬頭骨、滑石製模造品、土師器・須恵器を中心とした水辺での土器祭祀が検出されており、注目される。西側にはこの後展開される、別府条里遺跡（２）が広がる。さらには妻沼町においても、飯塚北遺跡、飯塚南遺跡、道ヶ谷戸遺跡（54）等拠点となるべく遺跡が確認されている。

熊谷低地では、中条地域の拠点として、北島遺跡が前期から規模を拡大して展開されている。周囲には、光屋敷遺跡（26）、中島遺跡（地図上未掲載）、諏訪木遺跡（地図上未掲載）等、規模の大きな集落遺跡がみられ、当地域随一の規模をみせている。東側にはこの後展開される中条条里遺跡、東沢遺跡が広がる。このうち、諏訪木遺跡では、平安時代にかけて営々と水辺祭祀が行われ、馬頭骨、滑石製臼玉、腕輪、玉類、土師器・須恵器、さらには斎串、人形、農具等の木製品等が検出されている。

このように、律令制度に組み込まれる前段階で、すでにその下地が出来上がっていた様相が見て取れる。

一方、当地の古墳も、妻沼低地と熊谷低地の境界線上に出現してくる。Ｂ種横刷毛の埴輪を有する横塚山古墳（24）を始めとし、墓前祭祀を伴う鎧塚古墳、女塚１号墳を中心とする中条古墳群（Ｃ）へと繋がる。そして、埴輪祭祀の全盛を迎え、各所に古墳群がみられるようになる。その後、終末期に至ると、荒川旧流路脇に立地し、蕨手刀出土古墳や上円下方墳である宮塚古墳を含む広瀬古墳群（Ｇ）、櫛挽台地北東端部に立地する小石室をもつ在家古墳群（Ｊ）、八角分等多角形墳を含む籠原裏古墳群（Ｉ）等に集約されてくる。

こうした終末期古墳の築かれた櫛挽台地北東端部の別府では、８世紀初頭に創建されたとされる西別府廃寺（11）が確認（９世紀初頭まで継続されたとされる）され、一大拠点を造り出していたと考えられている。奈良時代から平安時代初頭に一大拠点を成す『別府』の北に大集落（一本木前遺跡＜平安時代まで継続＞を中心とする）が造営され、さらには条里も展開されていたという状況は、容易にうなずけるものであり、新奈良川（荒川古流路）を挟んで東に隣接する『奈良』の地もまた、こうした一角を成すものと思われる。

また、広瀬古墳群の所在地は、武蔵国府から東山道武蔵路を北上し、荒川渡航直前の地であり、別府あるいは秩父・児玉方面への分岐点であったと推定される。そして、この地から北へ東山道武蔵路を約４km進んだ地に式内社・奈良神社（ア）が鎮座しているのである。

こうした地『奈良』『別府』の中間に、一本木前遺跡は所在しているのである。

第1表　遺跡一覧表

〈熊谷市〉	
1	一本木前遺跡
2	別府条里遺跡
3	入川遺跡
4	深町遺跡
5	関下遺跡
6	横間栗遺跡
7	根絡遺跡
8	石田遺跡
9	西別府館跡
10	西方遺跡
11	西別府廃寺
12	西別府祭祀遺跡
13	別府氏館跡
14	別府城跡
15	寺東遺跡
16	稲荷東遺跡
17	新ケ谷戸遺跡
18	水押下遺跡
19	天神下遺跡
20	土用ケ谷戸遺跡
21	中耕地遺跡
22	西通遺跡
23	東通遺跡
24	横塚山古墳
25	奈良東耕地遺跡
26	光屋敷遺跡
27	赤城遺跡
28	天神遺跡
29	北島遺跡
30	藤之宮遺跡
31	前中西遺跡
32	不二ノ腰遺跡
33	社裏南遺跡
34	社裏遺跡
35	社裏北遺跡
36	三ヶ尻遺跡天王地点
37	三ヶ尻遺跡林地点
38	三ヶ尻遺跡上古地点
39	三ヶ尻遺跡三尻中学校地点
40	松原遺跡
41	黒沢遺跡
42	樋の上遺跡上辻地点
43	樋の上遺跡下辻地点
44	樋の上遺跡
45	東遺跡
46	堂西遺跡
47	籠原裏遺跡
48	在家遺跡
49	原遺跡
A	別府古墳群
B	玉井古墳群
C	中条古墳群
D	肥塚古墳群
E	石原古墳群
F	坪井古墳群
G	広瀬古墳群
H	三ヶ尻古墳群
I	籠原裏古墳群
J	在家古墳群
ア	奈良神社
〈妻沼町〉	
50	飯塚北遺跡
51	飯塚遺跡
52	飯塚南遺跡
53	弥藤吾遺跡新田遺跡
54	道ケ谷戸遺跡
55	鵜森入胎遺跡
56	東城遺跡
ア	飯塚北古墳群
〈深谷市〉	
60	ウツギ内遺跡
61	砂田遺跡
62	柳町遺跡
63	城北遺跡
64	明戸東遺跡
65	原遺跡
66	居立遺跡
67	前遺跡
68	宮ヶ谷戸堀ノ内遺跡
69	東川端遺跡
70	城下遺跡
L	上増田古墳群
M	木の本古墳群

III　遺跡の概要

1　調査の方法

発掘調査は、調査範囲全体の北東を基点として、一辺10mのグリッド方式をとり、グリッド名は、北東隅をA－0グリッドとして、順次南へB・C・D……、西へ1・2・3……と呼称した。南へのZ以降の呼称は、AA・AB・AC……とした。このうち、　ポイントを国家座標X＝21.100.000、Y＝42.410.000上に合わせて設定した。

第1次調査区域は、すべてA地区に含まれ、南北N～AEグリッド、東西2～10グリッドの範囲に包含される。

第2次調査区域のうち、A区の北地域及び、B区東道路域（A区の南部西地域に当たる）は、南北H～ACグリッド、東西2～12グリッドの範囲に及ぶ。一方、D・E区は、南北AD～APグリッド、東西6～20グリッドの範囲に包含される。

今回報告する第3次調査区域は、B区とE・F区である。B区は、南北R～ACグリッド、東西9～17グリッドの範囲、E・F区は南北Z～APグリッド、東西12～30グリッドの範囲にそれぞれ包含される。

発掘調査は、試掘調査及び第1・2次調査の結果を受けて、遺構確認面の上位30cmの保護土層を重機によって削除し、上記のグリッド設定から開始した。

その後、人力によって遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構の手掘りでの掘り下げを行った。途中、検出された土器等の遺物は、写真撮影・測量をした後、慎重に取り上げ、収納した。また、遺構に対しても、掘り下げ途中で必要に応じて、あるいは完掘時に写真撮影・測量を実施した。遺構の測量は、グリッド基本杭を基準として、水糸による1mメッシュを設定する簡易遣り方の方法をとった。

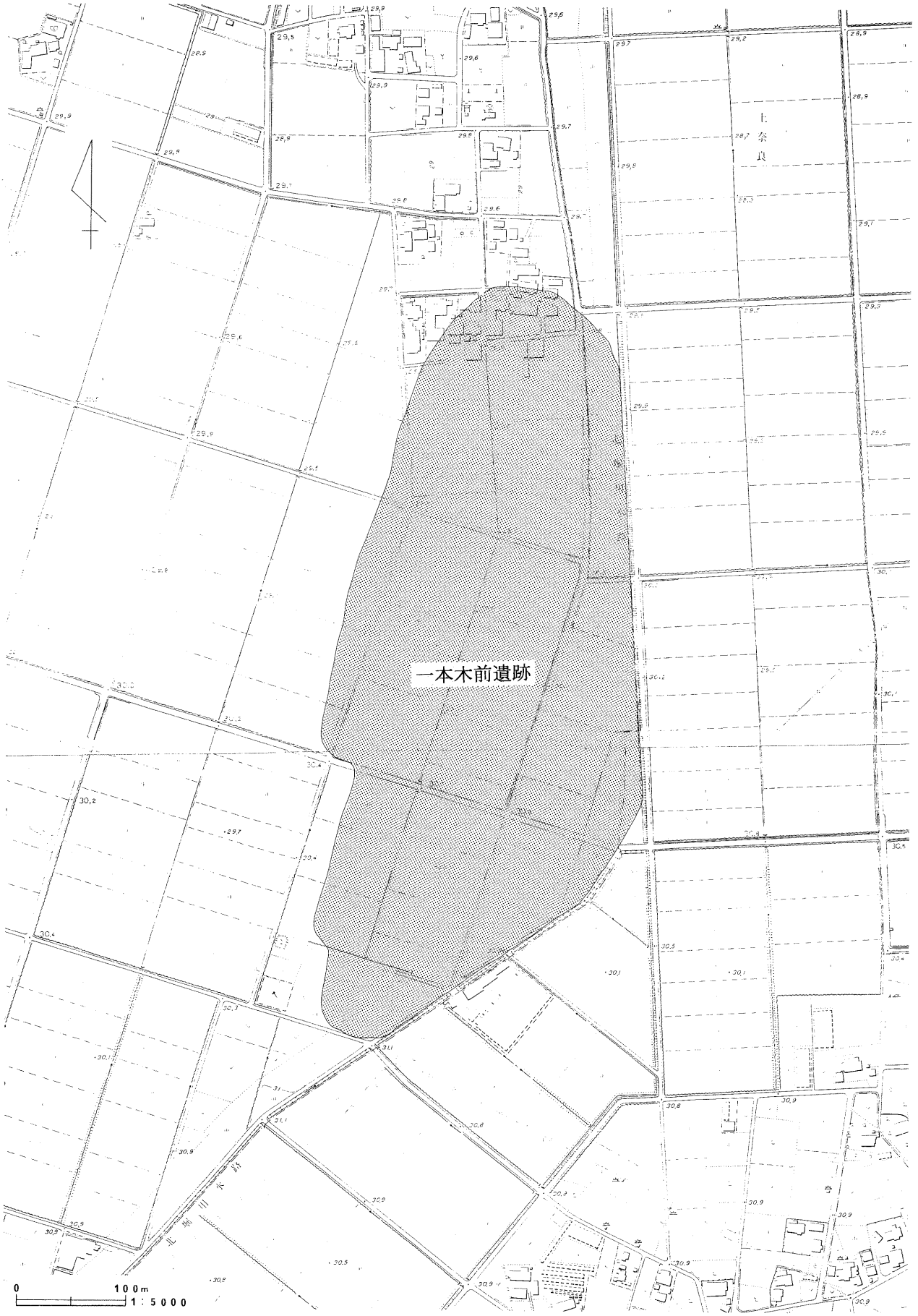
なお、B区、E区は遺構確認面が二面あったことから、上面を第一確認面、下面を第二確認面として上記の作業を繰り返し行った。

そして、最後に遺跡全体の空中写真撮影を行い、本調査を完了した。

2　B区における検出された遺構と遺物

B区から検出された遺構は、第一・二確認面を通じて、住居跡、掘立柱建物跡、土坑、井戸跡、溝跡、不明遺構、ピット等である（第5図）。第1・2次調査同様、煩雑さを避けるため、名称は新たに付すこととした。

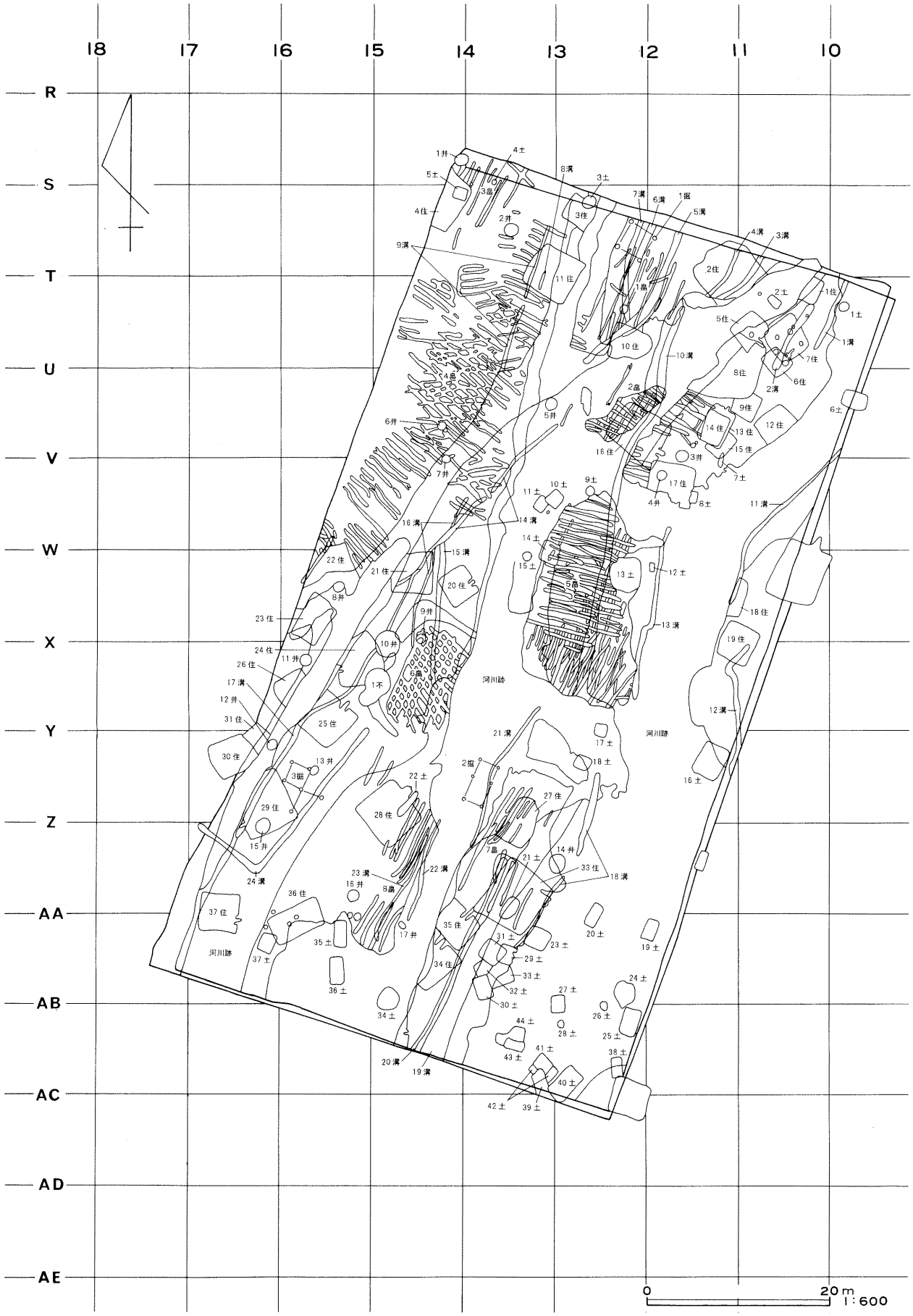
住居跡は総数37軒が検出された。古墳時代前期と同時代後期、平安時代のものがみられ、古墳時代前期は13軒、後期は19軒、平安時代は5軒が検出されている。古墳時代前期の住居跡は、調査区北側に集中している。そのほとんどが河川跡により切られているため、全形を検出できたものは少ない。すべて第二確認面からの検出である。古墳時代後期の住居



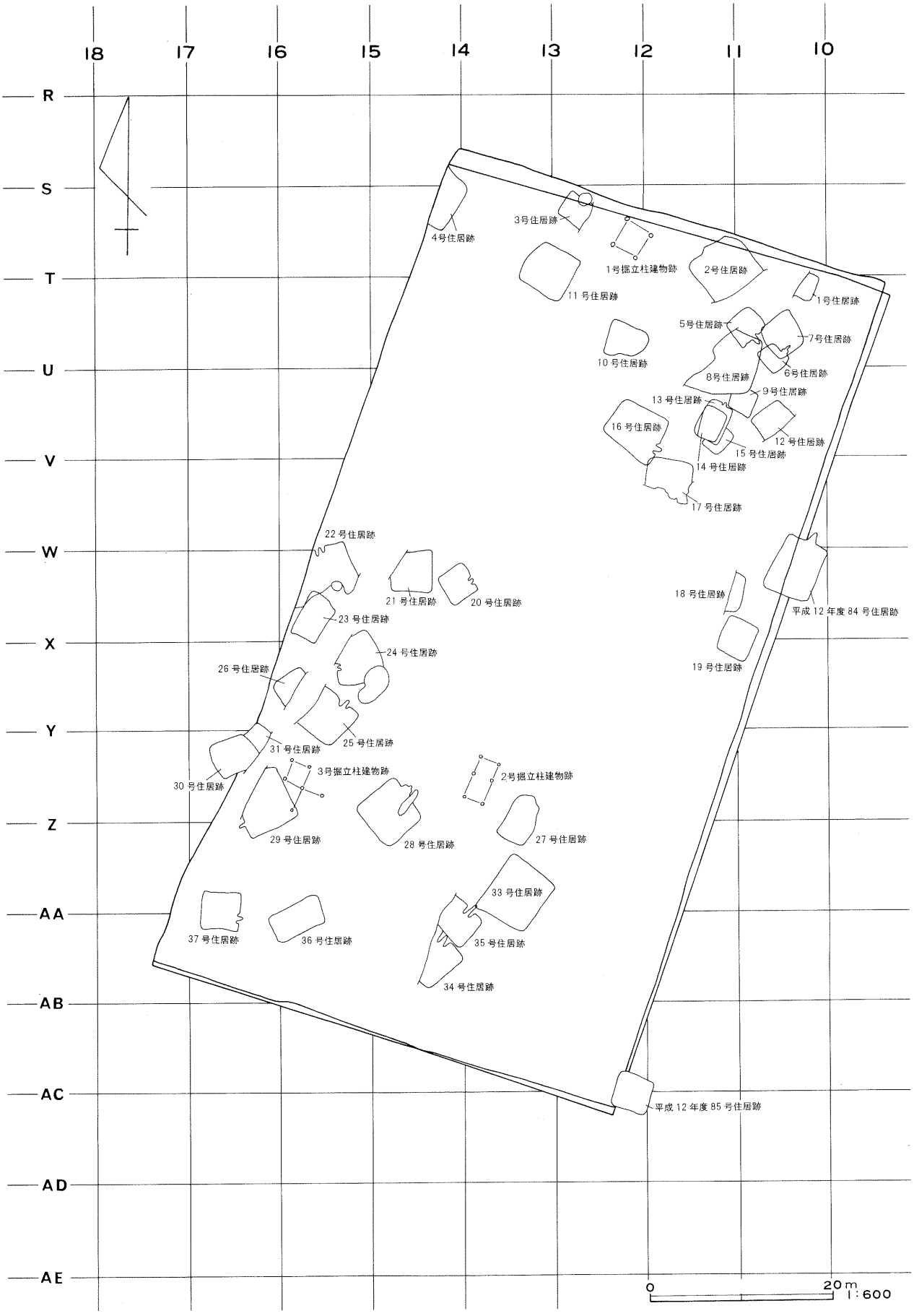
第3図　一本木前遺跡位置図



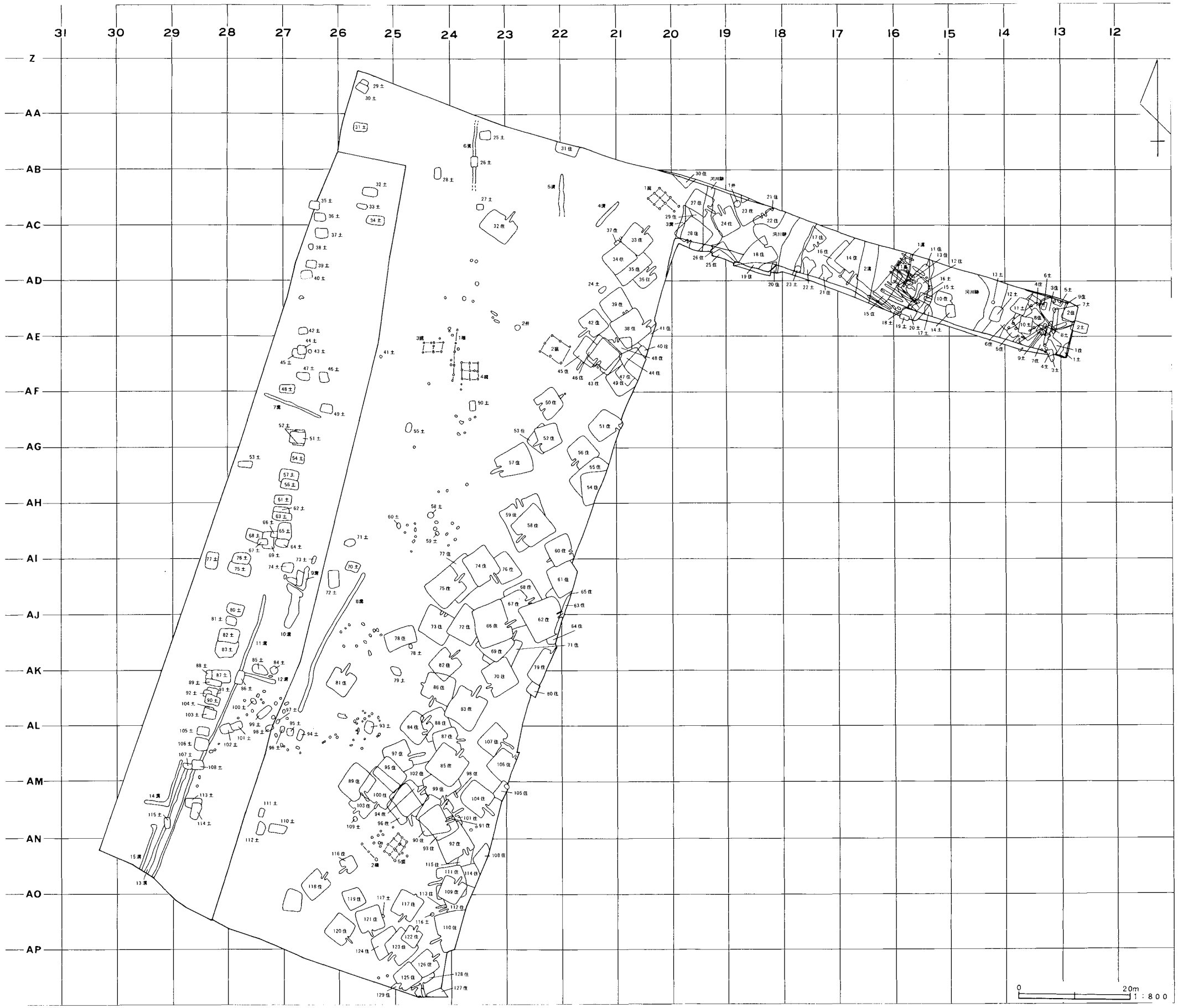
第４図　一本木前遺跡調査区全測図



第5図　B区遺構配置図



第 6 図　B 区住居跡・掘立柱建物跡配置図



第７図　Ｅ・Ｆ区遺構配置図

跡は、調査区の北東部から南西部にかけてみられるが、概して南西部に集中している。河川跡に沿って分布しているものの、切られているものが多い。両確認面から検出されているが、第一確認面での検出が多い。平安時代の住居跡は、調査区北東部と南西部にみられるが、前者に多くみられる。第一確認面からの検出である。

掘立柱建物跡は３棟が検出された。調査区内に点在し、すべて第二確認面からの検出である。出土遺物がないため、時期決定に苦しむが、いずれも軸が同一方向に構築されていることから同時期のものと考えられる。

溝跡は総数24条が検出された。河川が埋没した後に掘られており、第一確認面での検出が多い。そのほとんどが南北方向に走っている。

土坑は総数44基が検出されている。調査区のほぼ全面に散在しているが、概して南東部において多数みられた。すべて第一確認面からの検出である。第２次調査のD・E区同様、５つのタイプに分類される。

井戸跡は総数17基が検出された。土坑同様、調査区のほぼ全面に散在するが、主に西側において多数みられた。すべて第一確認面からの検出である。出土遺物がほとんどないため、時期決定に苦しむ。井戸跡もその形態から５つのタイプに分類される。

畠跡は調査区の中央から西側半分にかけて検出された。河川跡によりその大半が切られている。東西方向と南北方向に走るものの二者があり、前者が主体となる。また、両者が重複している箇所もみられた。確認したのは第二確認面であるが、出土遺物には後期の土器等も含まれており、時期決定に苦しむ。

その他の遺構としては、不明遺構が１基検出された。確認段階では、土坑ないし井戸が２基重複しているものと考えていたが、土層断面の観察で重複関係が認められないことから、１つの遺構とした。第一確認面からの検出である。用途・性格は不明である。

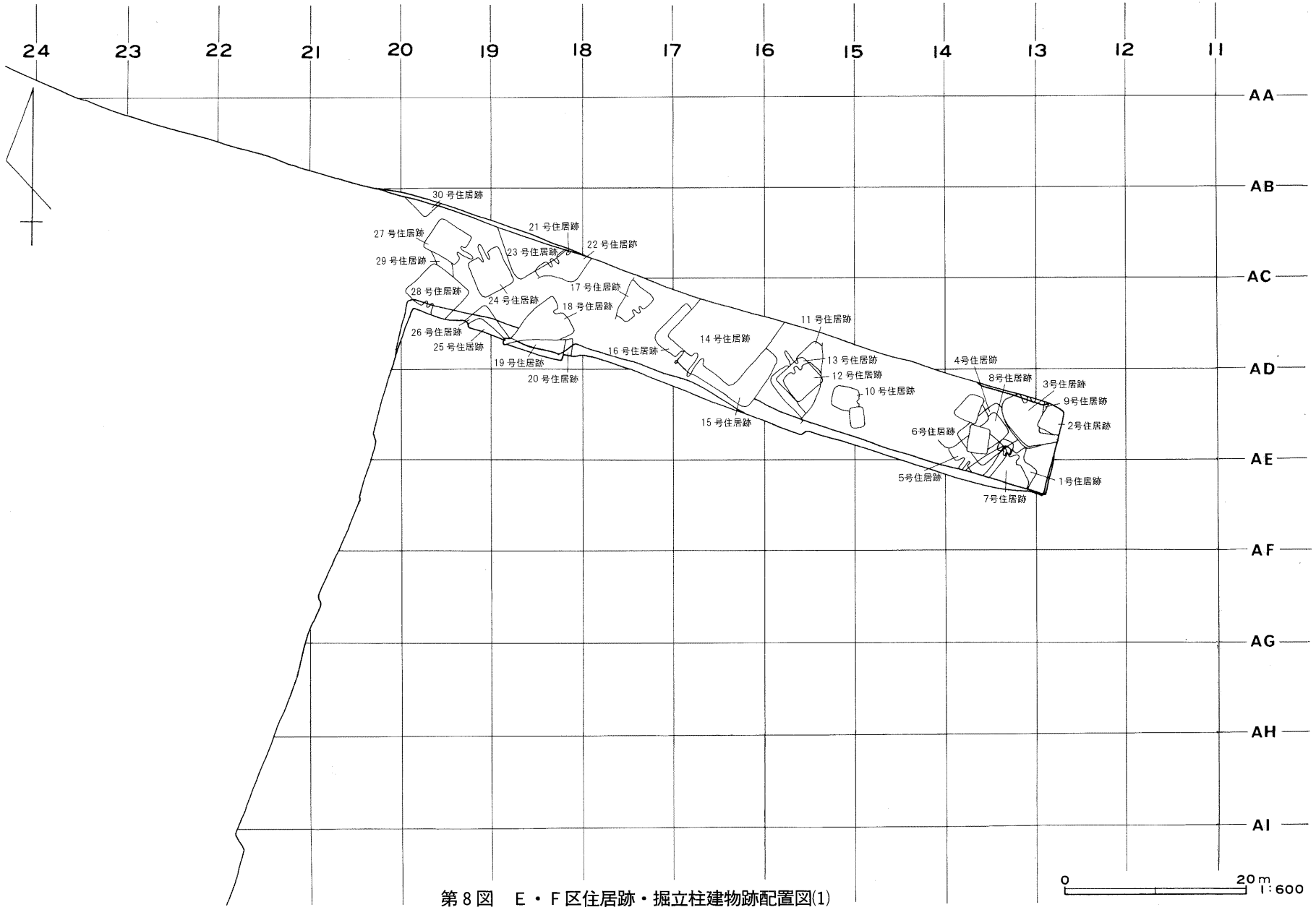
遺物は、古墳時代の土器を中心に多数検出された。大部分が住居跡からの検出である。土器は、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の土師器・須恵器、奈良・平安時代の土師器・須恵器がみられる。また、土器以外にも、鉄製品、土製品、石製品等が検出されているが、これらもほとんどが住居跡からの検出である。

3　E・F区における検出された遺構と遺物

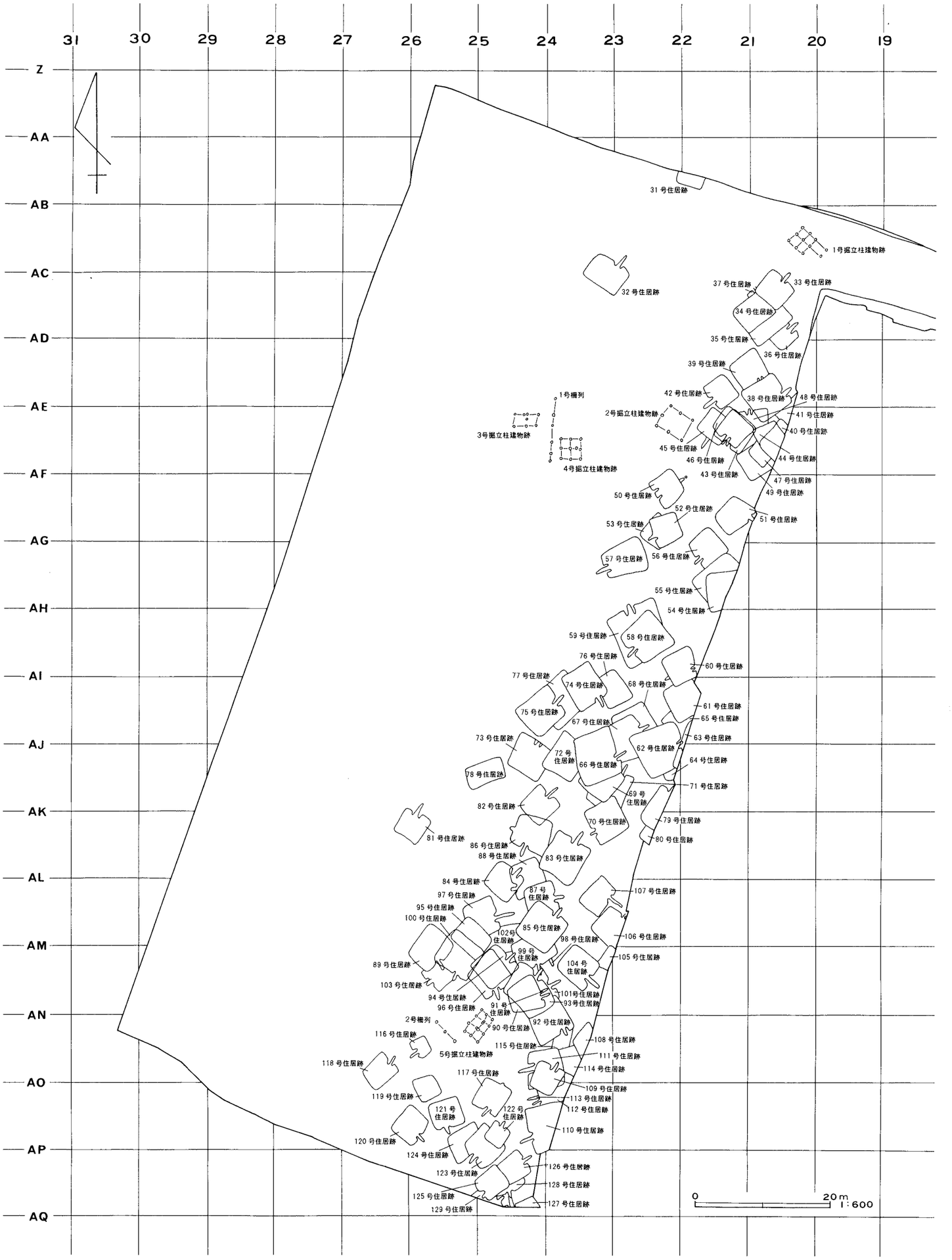
E・F区から検出された遺構は、住居跡、掘立柱建物跡、柵列、土坑、井戸跡、溝跡、ピット等である（第７図）。E区のみ確認面が二面みられた。E・F区も名称は、第１・２次調査及びB区同様、煩雑さを避けるため新たに付すこととした。

住居跡は総数129軒を数える。古墳時代前期から奈良・平安時代までのものがみられるが、古墳時代後期のものが主体となる。E区は全面、F区は調査区東側から検出された。E区では30軒、F区では99軒を数える。住居跡同士の重複関係が著しく、全形を把握できるものは少ない。

掘立柱建物跡は総数５棟が検出された。また、一部の掘立柱建物跡に伴って柵列も２基



第8図　E・F区住居跡・掘立柱建物跡配置図(1)



第９図　Ｅ・Ｆ区住居跡・掘立柱建物跡配置図(2)

検出されている。これらは主に住居跡群の間、ないしは西側に隣接して位置していた。出土遺物がないため、時期決定に苦しむが、軸が住居跡とほぼ同一方向を向くものと南北方向を向くものの二者がみられた。

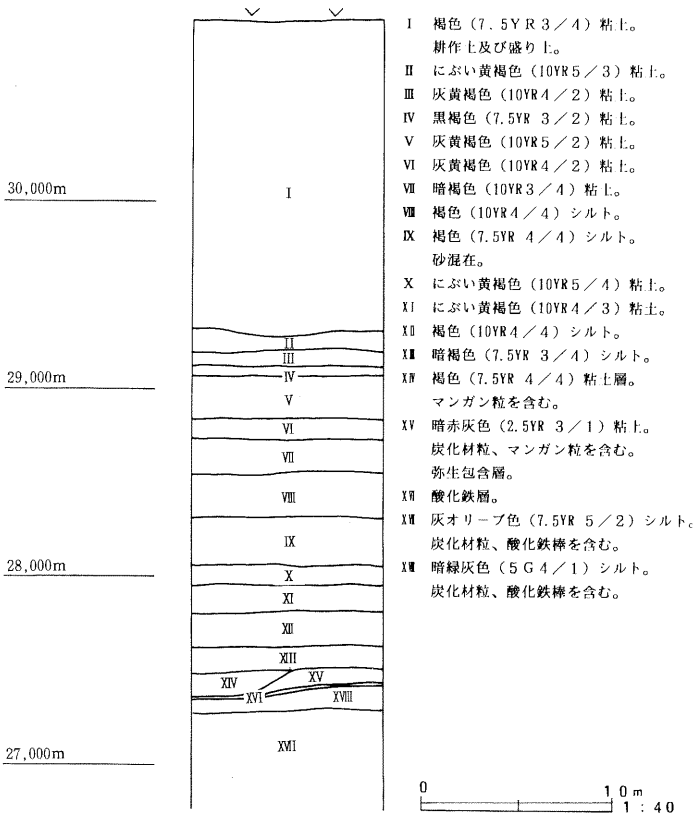
土坑は総数117基と多数検出された。E区からはほぼ全面に点在する形で検出されているが、F区では住居跡のある東側とは反対の西側に集中してみられた。E区からは25基、F区からは92基が検出されている。B区同様、5つのタイプに分類される。

井戸跡は2基と少ない。E・F区からそれぞれ1基ずつ検出されており、ともに調査区の北側に位置している。出土遺物がないことから、時期決定に苦しむ。

溝跡は総数15条が検出された。南北方向に走るものが多くみられた。E区からは3条、F区からは12条が検出された。E区では河川埋没後に掘削されており、第一確認面で検出された。F区では住居跡の密集しない西側に位置している。

畠跡はE区からのみ検出されており、F区では確認されなかった。E区のほぼ中央部にみられた。東西方向に走る溝が主体となるが、一部南北方向に走るものもある。B区同様、確認したのは第二確認面からであるが、出土遺物がほとんどみられないことから、時期決定に苦しむ。

遺物は、古墳時代の土器を中心に多数検出された。B区同様、大部分が住居跡からの検出である。土器は、古墳時代後期から奈良・平安時代までの土師器・須恵器が大量に出土した。また、土器以外にも、鉄製品、土製品、石製品等が検出されているが、これらもそのほとんどが住居跡からの検出である。



第10図　基本土層図

基本土層は、第10図のとおりである。標高28.5m付近で粘土からシルト質となり、VIII層以下に7世紀以前の遺物を包含する。B区及びE区の調査で第一確認面としたのはVIII層であり、二面としたのはIX層である。なお、前回確認された弥生土器はXV層から検出されたが、今回は認められなかった。VIII層とXV層の間には、古墳時代の遺物を包含する粘土層とシルト層が相剋する。XV層の下には酸化鉄層（XVI層）が帯状に堆積し、さらにその下に酸化鉄棒を多量含む灰オリーブシルト層（XVII）が堆積している。XV層下は沼地状であったと考えられる。

Ⅳ　B区の遺構と遺物

1　住居跡

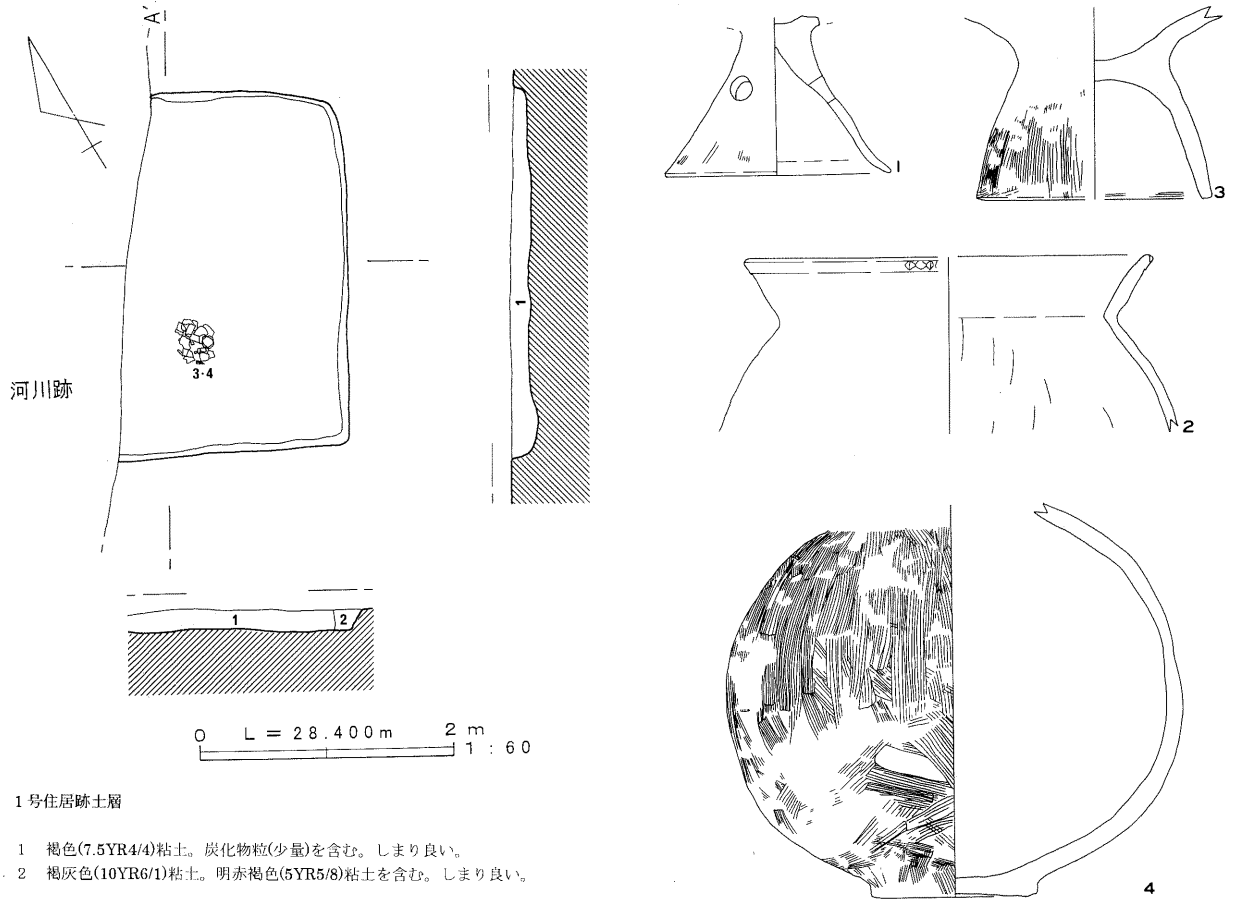
平成12年度B区の調査における住居跡の検出数は、37軒を数える。このうち13軒が古墳時代前期、19軒が古墳時代後期、残りの5軒が平安時代のものである。

古墳時代前期の住居跡は、すべて第二確認面からの検出である。調査区北側に集中して分布するが、河川跡に切られているものが多く、全形を知り得たものは少ない。

古墳時代後期の住居跡は、主に第一確認面から検出されたが、第二面で確認されたものもある。調査区ほぼ全面に分布するが、特に南西部に集中してみられる。河川埋没後に構築されているものが多く、E・F区のような密集した状況はみられない。また、住居跡同士で重複関係にあるものも少ない。

平安時代の住居跡は、すべて第一確認面からの検出である。調査区北東部に4軒、南西部に1軒分布する。検出数は少ないが、東側のA区からは多数検出されており、同時代の住居跡はこの辺りに分布している。

なお、調査区北西端に位置する4号住居跡と、西側中央付近にある22号住居跡、今年度調査区域外にある32号住居跡は、全形を検出していないため、報告は来年度とした。



1号住居跡土層

1　褐色(7.5YR4/4)粘土。炭化物粒(少量)を含む。しまり良い。
2　褐灰色(10YR6/1)粘土。明赤褐色(5YR5/8)粘土を含む。しまり良い。

第11図　B区1号住居跡・出土遺物

第2表　B区1号住居跡出土遺物観察表　(第11図)

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　考
1	土師器高杯	-	-	12.0	③①④	②	橙	脚部のみ	三方透かし。
2	土師器甕	(21.6)	-	-	③①④	②	橙	上位3/4	外面黒斑有。磨滅。
3	土師器台付甕	-	-	12.4	③①④	②	橙	台部1/2	
4	土師器壺	-	-	8.6	③①④	②	黄橙	1/2	外面黒斑有。

1号住居跡
(第11図)

T—10グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。北西部から南西部にかけて、河川跡に切られている。

規模・平面形は不明であるが、南東壁は2.68mを測る。主軸方向はN—30°—Eを指す。確認面からの深さは17cmを測り、南西壁沿いはやや窪んでおり、22cmを測る。床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は褐色粘土（1層）を主体とする自然堆積層であった。

壁溝、ピット、炉跡、貯蔵穴等は検出されなかった。

出土遺物（第11図）には、土師器高杯（No.1）、甕（2）、台付甕（3）、壺（4）等がある。すべて覆土中からの検出であり、3・4はほぼ中央付近からまとまって検出された。1は脚部に円形の透かし孔が三つ施されている。2は口縁部に刻目が施され、外面に黒斑がみられた。3は台部のみの検出である。4は全面刷毛目調整による。

2号住居跡
(第12図)

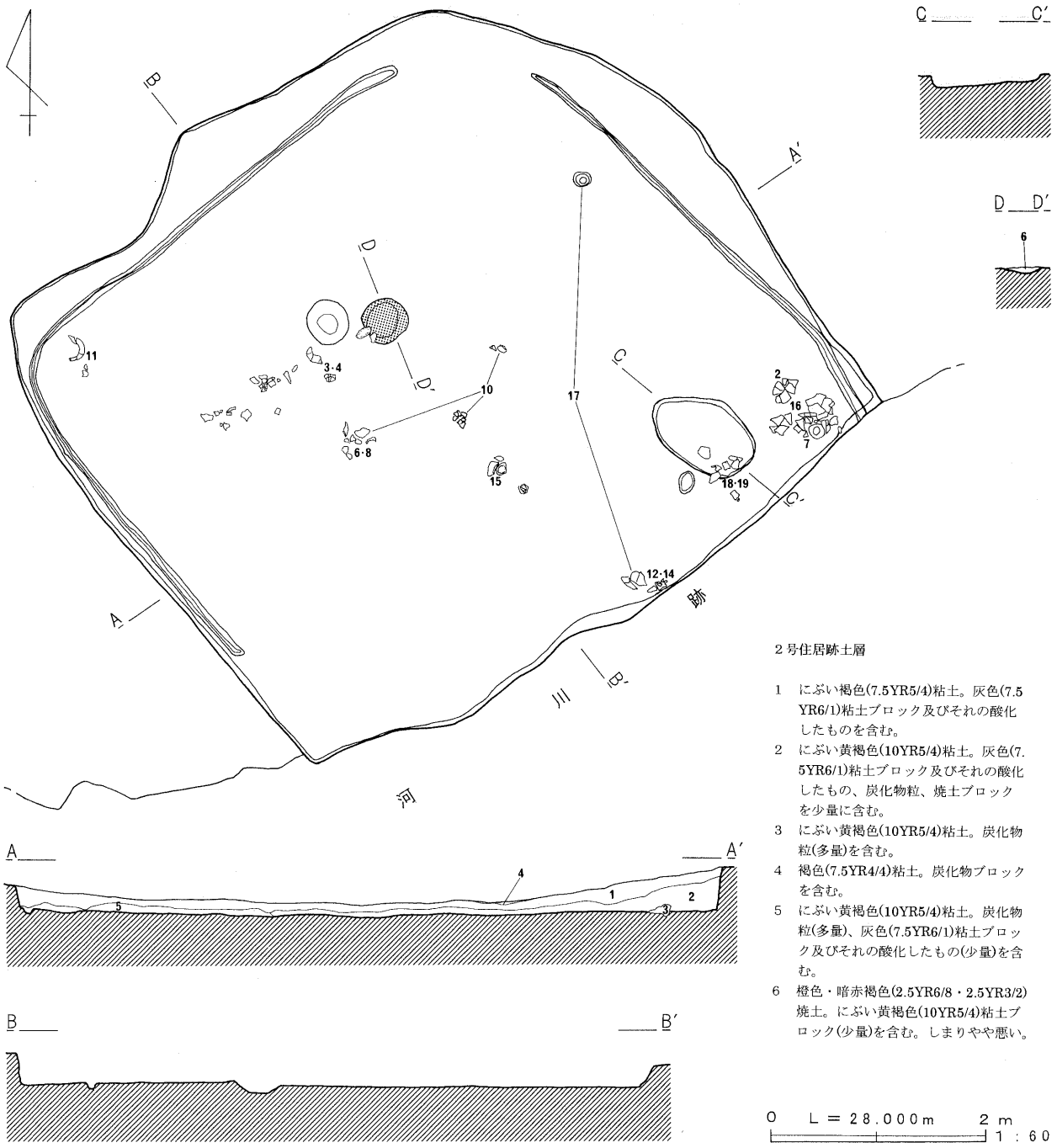
S・T—10・11グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。南東部を河川跡に切られている。また、直接的な重複関係はないが、上部には、3・4号溝がみられた。

規模・平面形は不明であるが、北西壁は4.99mを測る。主軸方向はN—50°—Wを指す。確認面からの深さは42cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は中央部を削平してしまったため、全体を観察できなかったが、黄褐色ないし褐色の粘土五層（1～5層）からなる自然堆積層であった。壁溝は途切れる箇所もみられるが、ほぼ全周している。幅は6～12cm、床面からの深さは3～6cmを測る。ピットは北西部に1つ、南東部に1つみられた。北西部のピットは炉跡の北西に隣接することから、柱穴ではないと考えられる。床面からの深さは9cmと浅い。南東部のピットは貯蔵穴の脇に位置している。深さ15cmを測る。

炉跡は住居跡中央付近からやや北西に設けられている。径40cm前後、床面からの深さ6cmの円形を呈する。覆土は焼土層（6層）のみである。

貯蔵穴は南東部に設けられている。径1.05×0.68m、床面からの深さは11cmを測り、楕円形を呈する。底面から覆土上層にかけて土師器壺（18・19）が検出された。

出土遺物（第13・14図）には、土師器高杯（No.1～6）、甕（9～12・15～17）、台付甕（7・8・13・14）、壺（18～20）等がある。主に炉跡周辺、貯蔵穴及びその周辺から検出された。いずれも摩滅が顕著であった。高杯は杯部の深いもの（1・2）と、浅いもの（4～6）の二者がみられた。1と3は脚部に円形の透かし孔を4つ持つ。甕は台部が付くものとつかないものがみられ、いずれも口縁部に刻目を持たない。また、外面に黒斑を有するものが多い。15～17は台部を持たないが、破片資料である9～12は台部が付く可能性がある。17は他の甕と異なり、口径が大きく、刷毛目調整後にヘラナデが施されている。7・8は

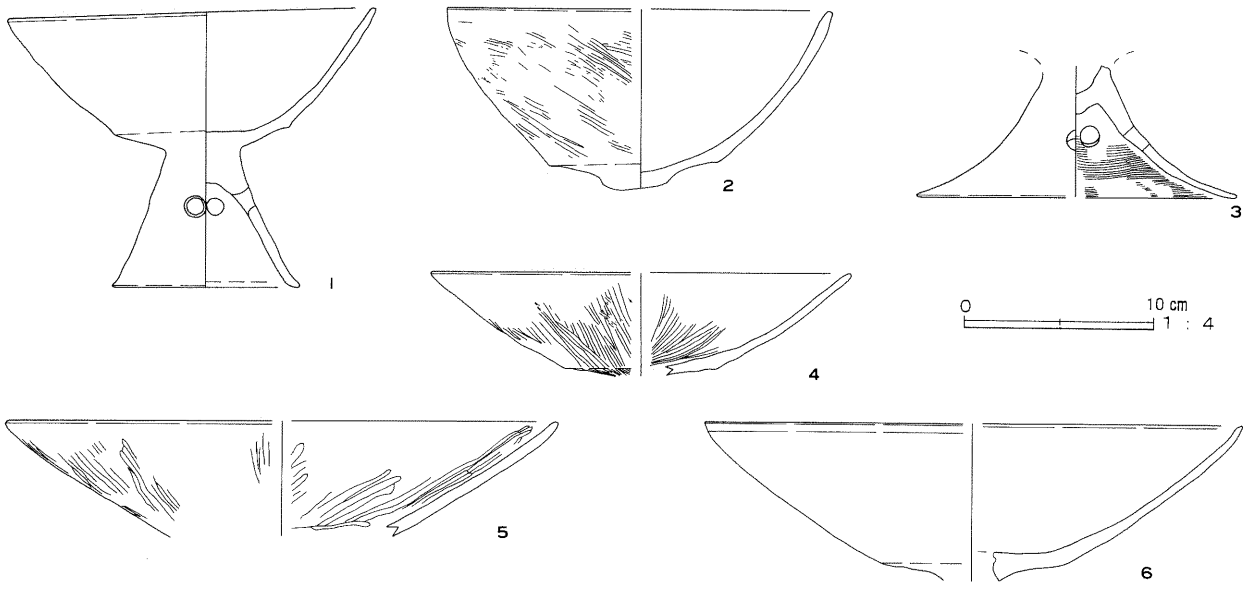


第12図　B区2号住居跡

口縁部がS字状を呈し、7はS字口縁の屈曲が弱く、器壁が厚い。ともに台付甕と考えられる。壺は刷毛目調整のものが主体となるが、20のみ肩部に縄文が施文されている。

3号住居跡（第15図）　S—12グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。北東壁を3号土坑、北東部から南東部にかけて河川跡に切られている。

規模・平面形は不明であるが、北西壁は2.95mを測る。主軸方向はN—45°—Eを指す。確認面からの深さは7cmと浅い。床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。



第13図　B区2号住居跡出土遺物(1)

第3表　B区2号住居跡出土遺物観察表　(第13・14図)

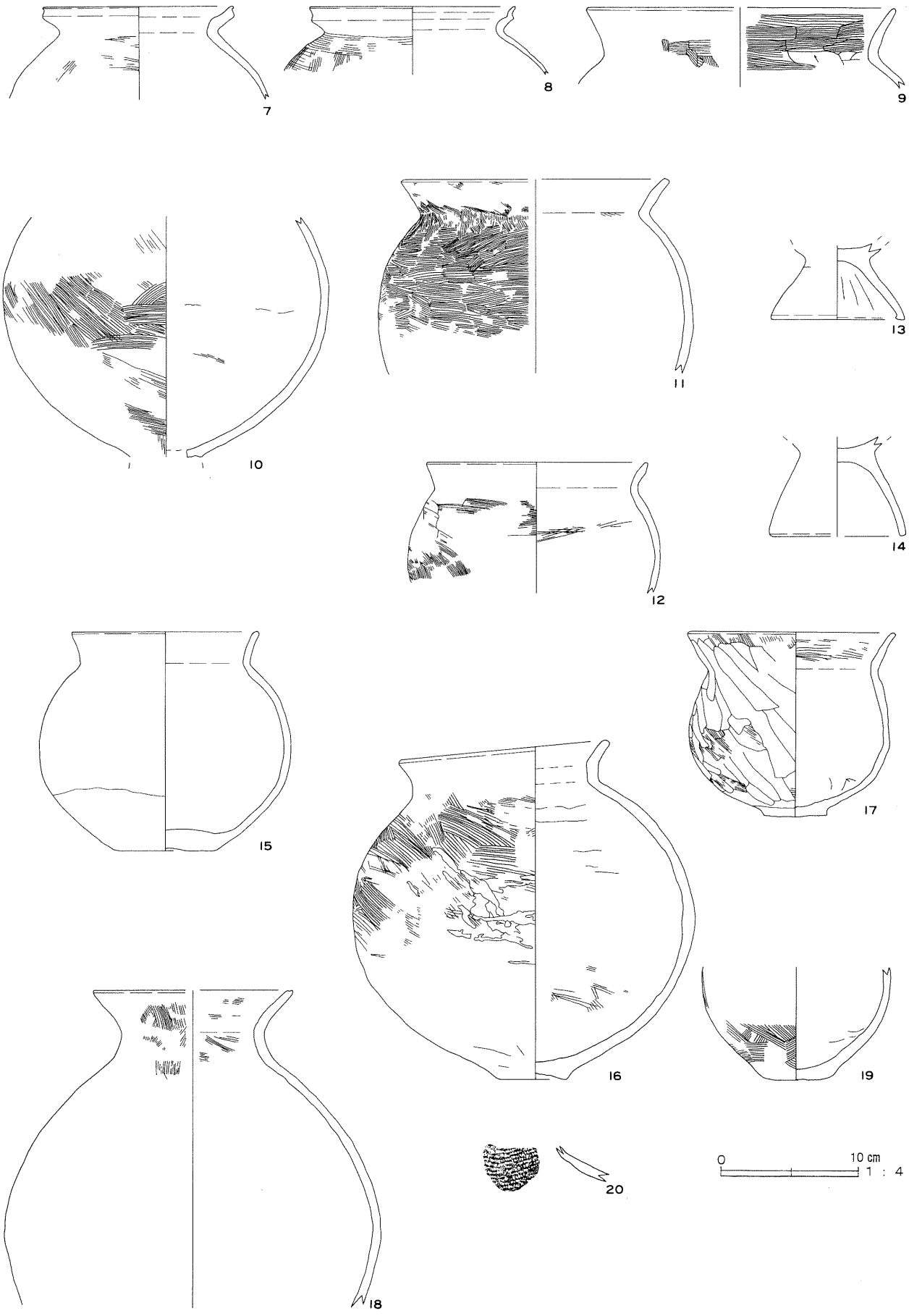
No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器高杯	19.6	14.9	10.0	③①④	②	橙	4/5	四方透かし。外面黒斑有。磨滅。
2	土師器高杯	(20.5)	9.7	8.8	③①	②	橙	3/4	磨滅。
3	土師器高杯	-	-	(17.0)	③⑥①④	②	にぶい黄橙	器台のみ	四方透かし。外面磨滅。
4	土師器高杯	(22.4)	-	-	③①⑥④	②	橙	器受部1/4	
5	土師器高杯	(29.4)	-	-	③④⑥	②	橙	上位1/5	
6	土師器高杯	(28.6)	-	-	③①④⑥	②	橙	器受部1/5	磨滅。
7	土師器台付甕	13.8	-	-	③⑥	②	浅黄橙	上位2/3	礫を多量含む。
8	土師器台付甕	15.0	-	-	⑥③①	②	にぶい褐	口縁部のみ	
9	土師器甕	(22.6)	-	-	③①⑥	②	にぶい橙	口縁部1/6	内面黒斑有。
10	土師器甕	-	-	-	③①⑥	②	にぶい黄橙	胴部下位1/4	外面黒斑有。
11	土師器甕	(19.6)	-	-	①③④	②	橙	上位1/2	
12	土師器甕	16.2	-	-	③⑥④	②	橙	上位4/5	内外面煤付着。
13	土師器台付甕	-	-	(9.8)	①④	②	明褐	脚部2/3	磨滅。
14	土師器台付甕	-	-	(10.0)	③①④	②	橙	脚部1/3	内面黒斑有。全面磨滅。
15	土師器甕	13.8	16.1	7.5	④③①⑥	②	橙	3/5	外面黒斑有。磨滅。
16	土師器甕	15.6	24.8	5.0	③⑥④	②	にぶい黄橙	5/6	外面胴下部磨滅。
17	土師器甕	15.2	13.6	4.7	⑥③①	②	橙	一部欠	外面黒斑有。
18	土師器壺	(14.6)	-	-	③①④	②	浅黄橙	上位1/4	外面黒斑有。磨滅。
19	土師器壺	-	-	5.2	③①④	②	浅黄橙	下位のみ	
20	土師器壺	-	-	-	④①②③⑥	②	黄橙	一部のみ	

覆土は暗褐色及び暗灰黄色の粘土二層（1・3層）からなる。住居跡中央からは柱材を残す柱穴が検出されたが、炉跡の南西に隣接しており、他の遺構の可能性がある。径は22cm、床面からの深さは33cmを測る。

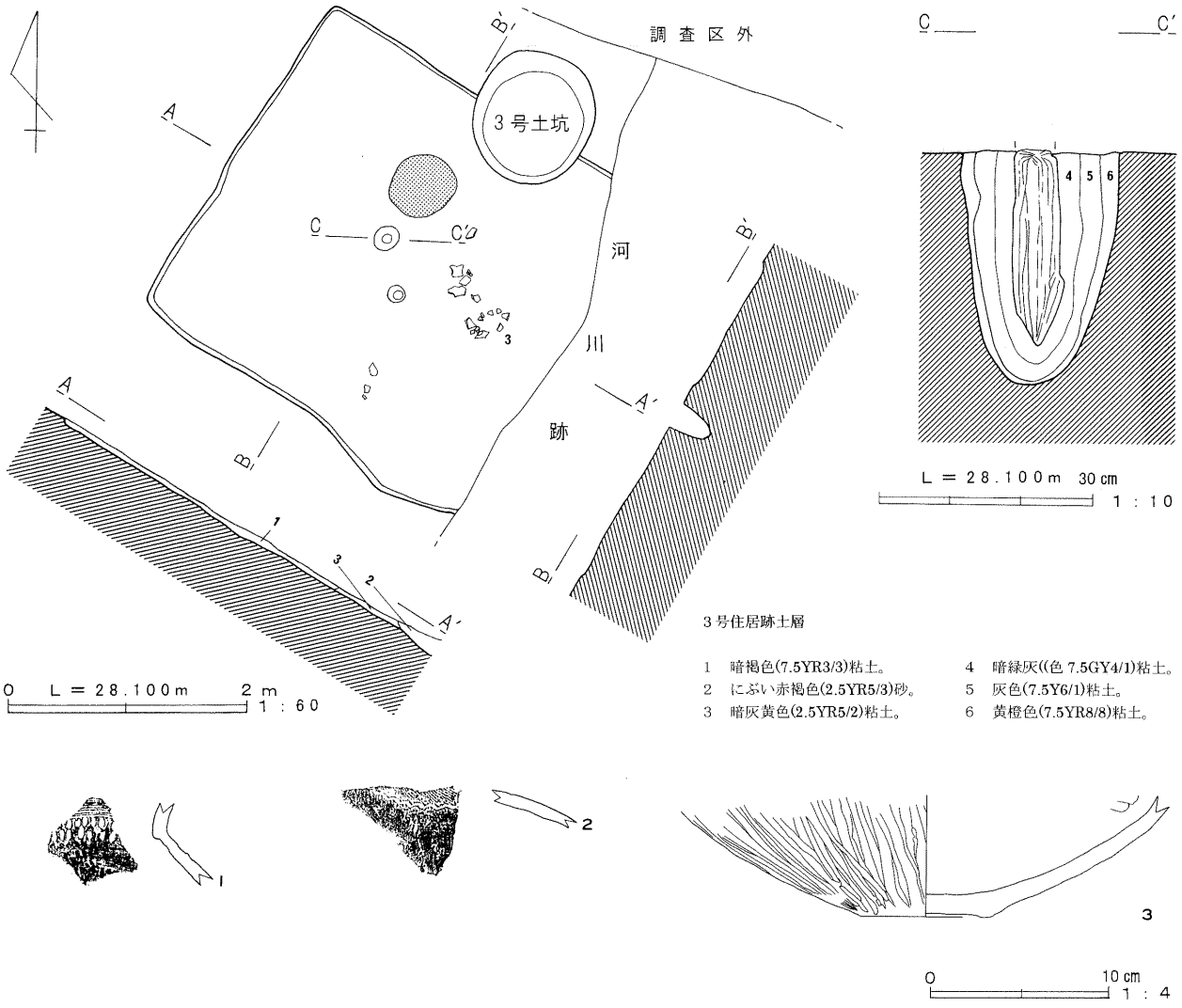
壁溝、貯蔵穴等は検出されなかった。

炉跡は住居跡中央からやや北東に設けられている。掘り込みはほとんどなく、径55cm前後の範囲で焼土が広がっていたのみである。

出土遺物（第15図）は、土師器壺（No.1～3）のみである。1の頸部には、横位に巡る沈線下に楕円状の刺突が施文されている。2は肩部片。細かいRL単節縄文下にS字状結節による区画線が施されている。3は胴下部のみであるが、全面ミガキが施されている。



第14図　B区2号住居跡出土遺物(2)



第15図　B区3号住居跡・出土遺物

第4表　B区3号住居跡出土遺物観察表　(第15図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器壺	-	-	-	①④③②⑥	②	橙	一部のみ	
2	土師器壺	-	-	-	①④②③⑥	②	橙	一部のみ	
3	土師器壺	-	-	7.5	⑥③④	②	にぶい黄橙	下位3/4	

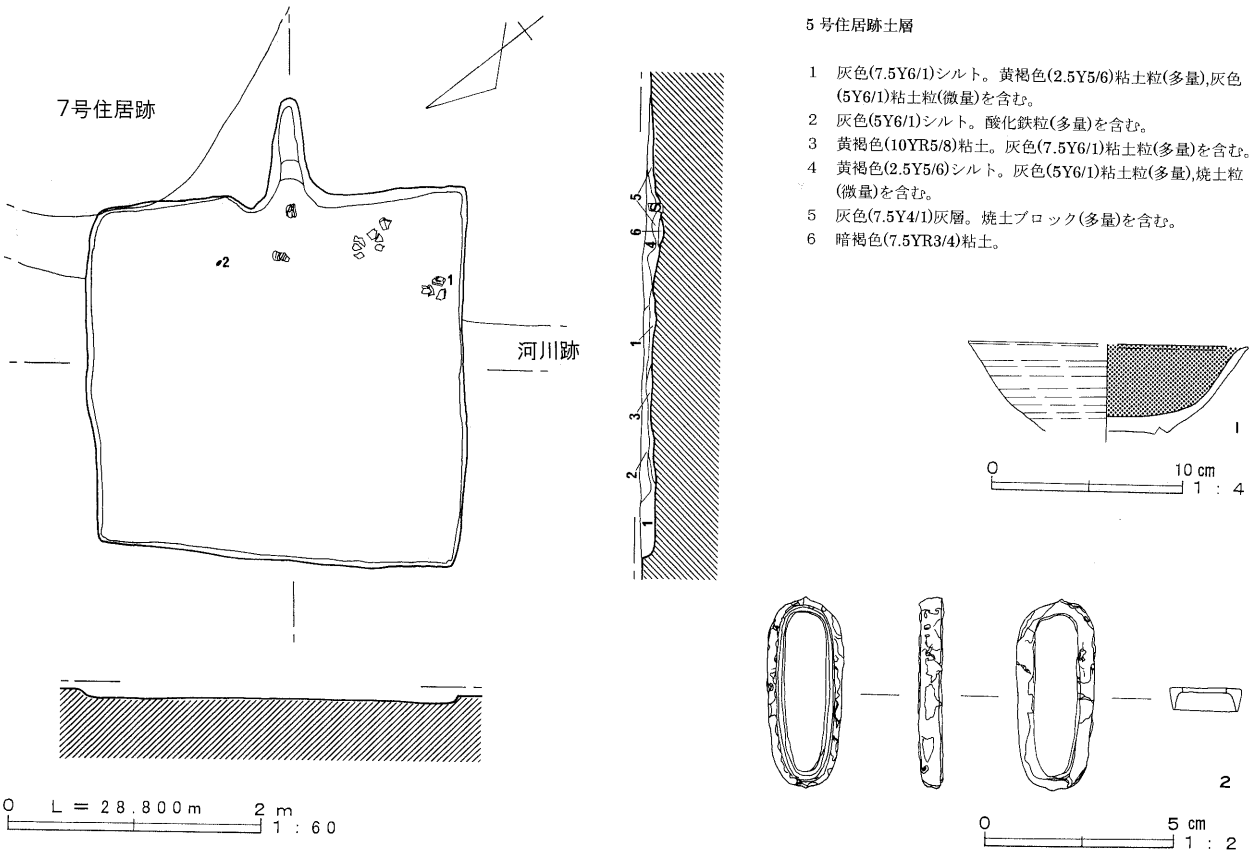
5号住居跡　(第16図)

T—10・11グリッドに位置する。第一確認面からの検出である。住居跡は河川埋没後、河川跡上に構築されている。南東部で7号住居跡を切っている。また、直接的な重複関係にないが、古墳時代前期の8号住居跡北東上部に位置している。

長軸3.02m、短軸3mの方形を呈する。主軸方向はS—52°—Eを指す。確認面からの深さは12cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。覆土は灰色及び黄褐色の粘土とシルトの四層（1～4層）からなる。

壁溝、ピット、貯蔵穴等は検出されなかった。

カマドは南東壁中央に設けられている。袖部は僅かに張り出している程度であった。内側には被熱した箇所が僅かに確認された。焚口部の幅は38cm、燃焼部は33cm、煙道部先端は14cmを測り、徐々に狭まる。焚口部から燃焼部は床面から僅かに窪む程度である。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は僅かに2cmであった。煙道部は先端に



第16図　B区5号住居跡・出土遺物

第5表　B区5号住居跡出土遺物観察表　(第16図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器高台椀	(14.8)	4.7	6.6	④①③	②	橙	1/2	内外面煤付着。内面黒色処理。
2	責金	長さ 5.1	幅 2.1	厚さ 0.6				完形	

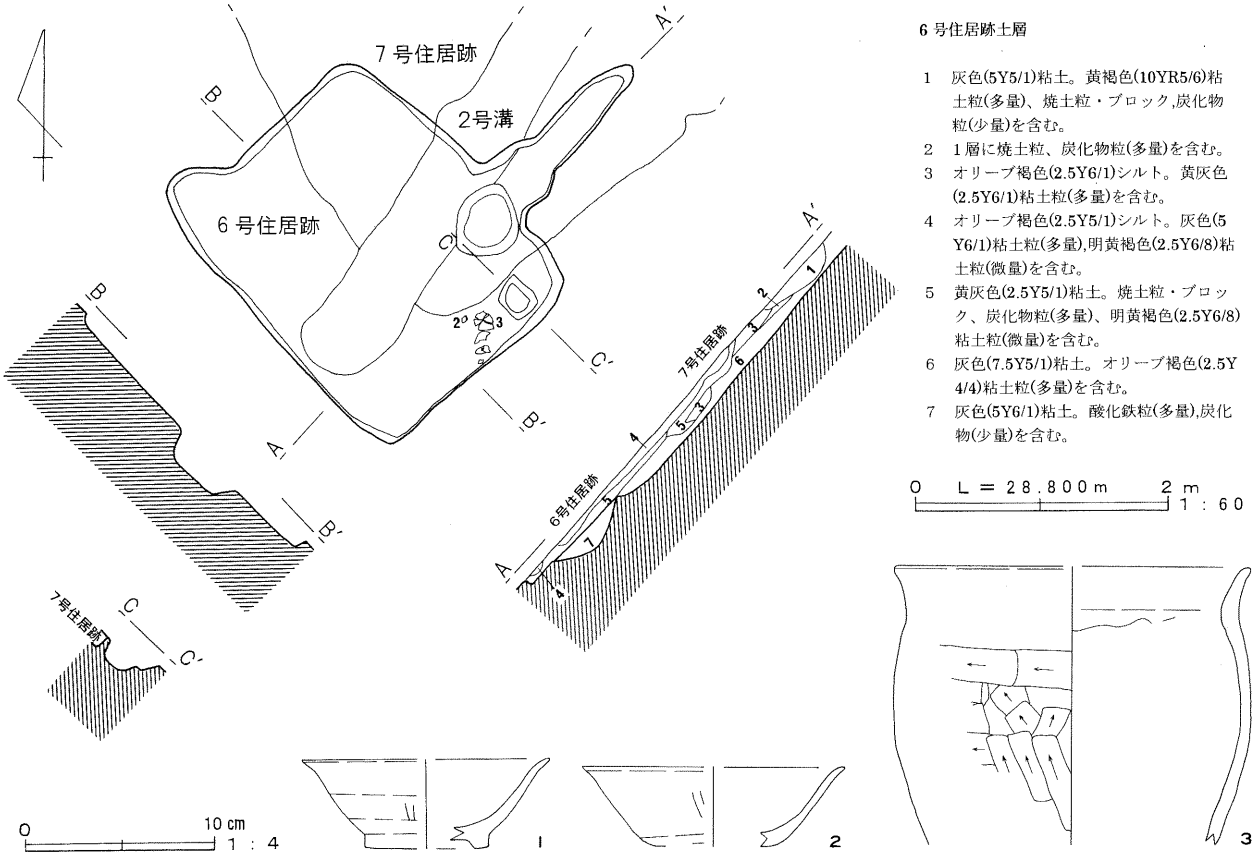
向かって緩やかに立ち上がる。壁外へは0.78mを測る。覆土に天井部等はみられず、住居跡覆土下に灰層（5層）がみられた。

出土遺物（第16図）は、土師器高台椀（1）、銅製責金（2）のみである。カマド付近から検出された。1はロクロ調整によるもので、内面を黒色処理している。摩滅が顕著であったため、図示できなかったが、ミガキ調整が施されている。高台部を欠く。内外面に煤が付着していた。2は完形品。

6号住居跡
(第17図)

T・U—10グリッドに位置する。第一確認面からの検出である。住居跡中央上部で2号溝、カマドを含めた北東壁では7号住居跡を切っている。また、直接的な重複関係にないが、南西隅下には古墳時代前期の8号住居跡が位置する。

長軸2.58m、短軸2.14mの長方形を呈する。主軸方向はN—46°—Eを指す。確認面からの深さは22cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は色調の異なるシルトと粘土の二層（4・5層）からなる。5層には焼土・炭化物が含まれていた。自然堆積と考えられる。壁溝、ピットはみられないが、カマド手前に径55cm前後、床面からの深さは12cmを測る床下土坑が検出された。



第17図　B区6号住居跡・出土遺物

第6表　B区6号住居跡出土遺物観察表　(第17図)

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　考
1	土師器高台椀	(13.2)	4.7	(6.6)	④③①	②	浅黄橙	1/5	
2	土師器高台椀	(14.0)	4.2	(6.4)	④③①	②	橙	1/4	
3	土師器甕	(19.0)	-	-	③①④	②	にぶい褐	上位1/6	

カマドは北東壁中央から南東寄りに設けられている。袖部はみられず、焚き口部から燃焼部は住居跡外に張り出している。焚き口部に礫等はみられなかった。幅は、焚き口部で55cm、燃焼部で50cmを測る。煙道部では30cm前後の幅で、先端で15cmにすぼまる。焚き口部から煙道部までは、やや凹凸がみられるものの、先端に向かって徐々に下り、先端で緩やかに立ち上がる。壁外へは1.44mほど張り出している。覆土に天井部等はみられず、焼土・炭化物等を含む層（1～3層）がみられた。

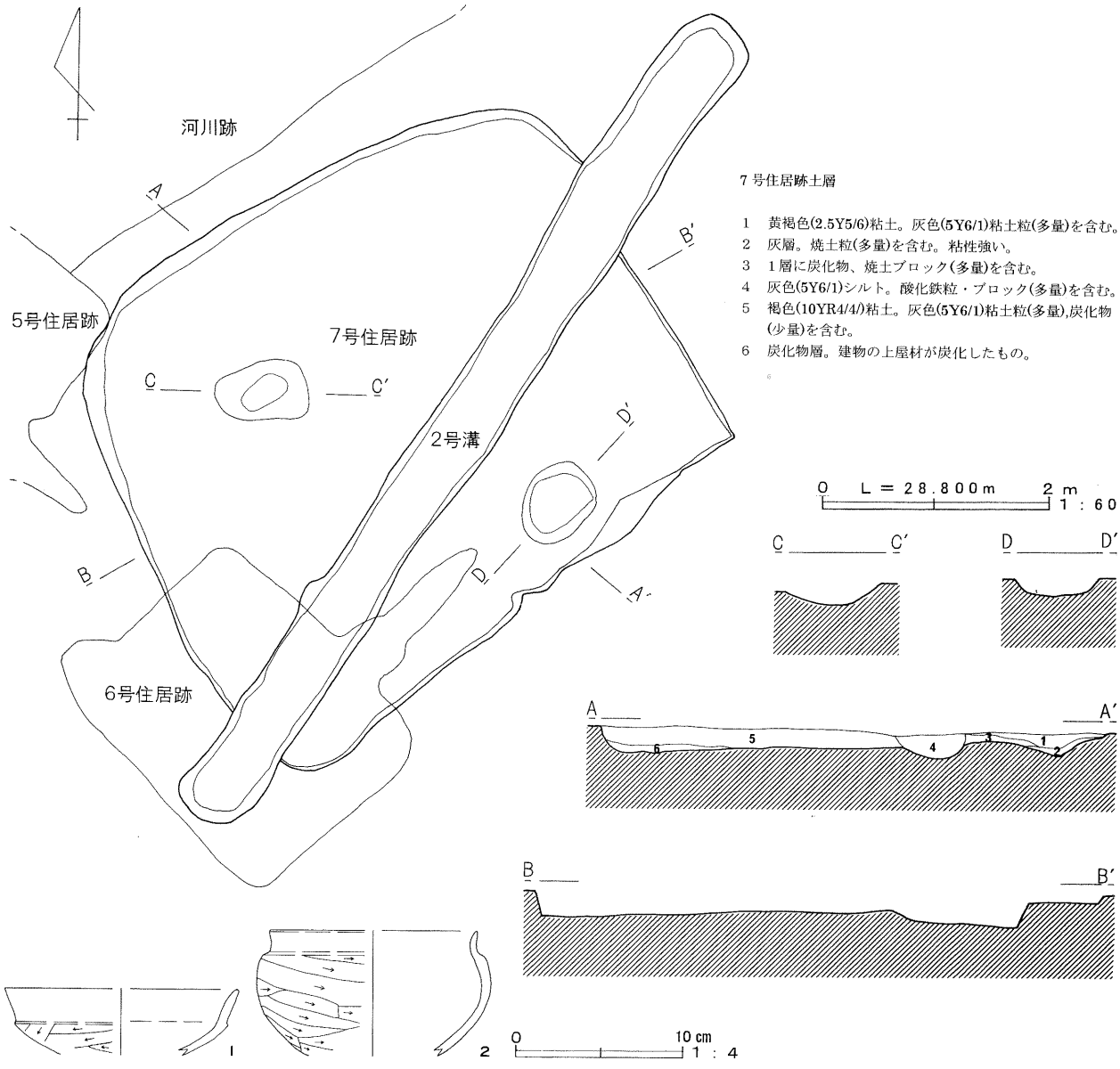
カマド南東脇の北東隅には、径29×24cm、床面からの深さ13cmの貯蔵穴がみられた。平面は方形を呈する。

出土遺物（第17図）は、土師器高台椀（No.1・2）、甕（3）等である。貯蔵穴の南西からまとまって検出された。1・2はロクロ成形による。2は高台部を欠く。3は器壁が厚く、口縁部は僅かに外反する。胴上部は横方向に、胴下部は縦方向もしくは斜方向にヘラ削りされている。

7号住居跡　（第18図）

T—10グリッドに位置する。第一確認面からの検出である。ほぼ中央を2号溝、南西隅を5号住居跡、南東部を6号住居跡に切られている。

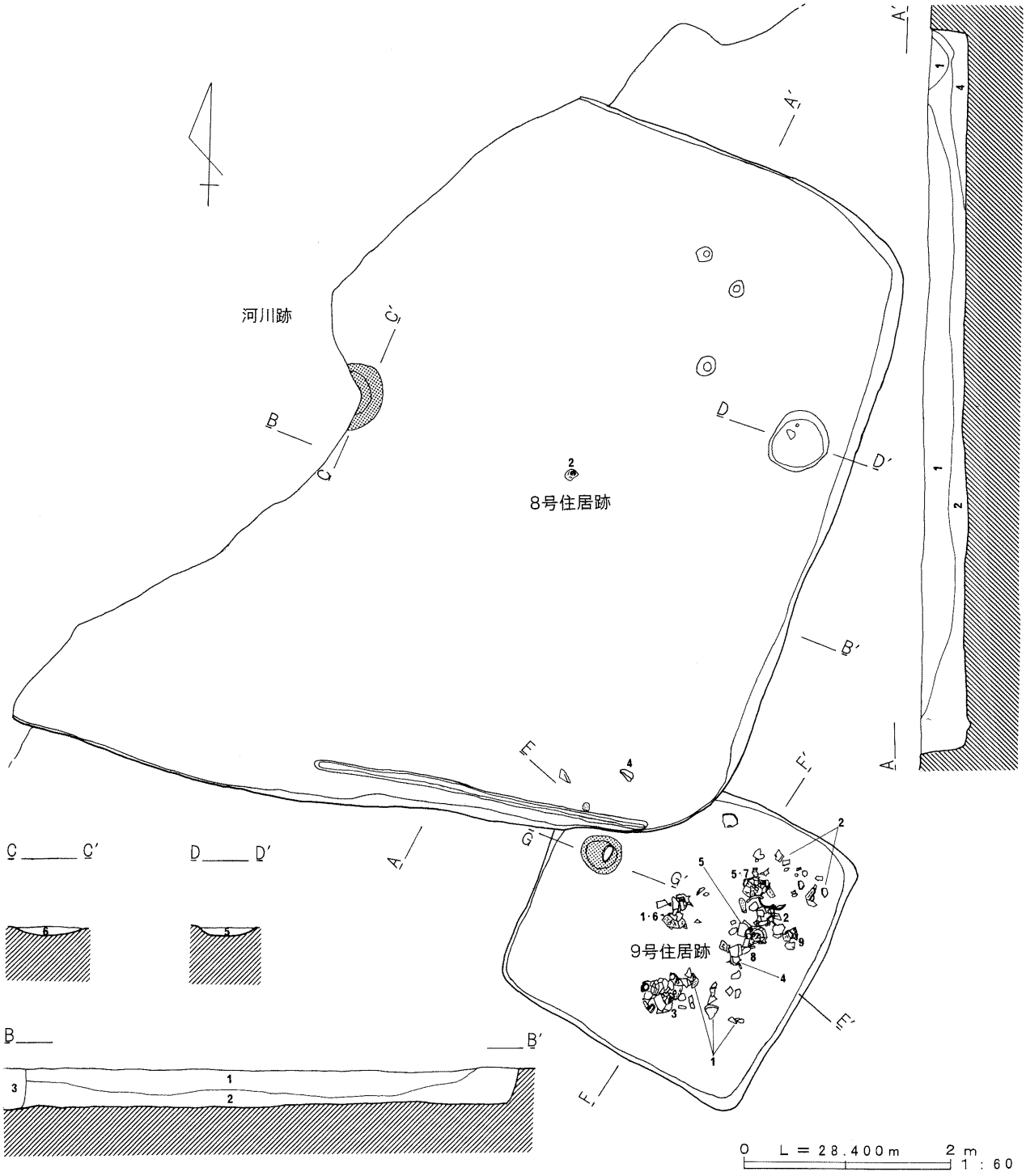
長軸5.21m、短軸4.47mを測り、ややいびつな長方形を呈する。主軸方向はN—30°—Eを指す。確認面からの深さは23cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。覆土は褐色粘土（5層）を主体とし、北西部の床面直上には薄く炭化物層（6層）がみられた。ピットは南西部で1つ検出された。径83×53cm、床面からの深さは15cmを測る。



第18図　B区7号住居跡・出土遺物

第7表　B区7号住居跡出土遺物観察表　（第18図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(14.0)	-	-	①③④	②	明赤褐	1/4	
2	土師器盤	(12.4)	-	-	⑥①④③	②	にぶい黄褐	1/3	内外面煤付着。



8・9号住居跡土層

1　にぶい黄褐色(10YR6/4)粘土。炭化物粒(極微量)を含む。
2　暗褐色(7.5Y3/3)粘土。炭化物粒(少量)を含む。
3　灰白色(2.5Y7/1)粘土。ところどころ酸化している。
4　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土。
5　暗褐色(7.5Y3/3)粘土。炭化物を含む。
6　暗赤色・にぶい橙色(7.5R3/4・5YR7/4)焼土。炭化物を含む。
7　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土。
8　暗褐色(7.5YR3/3)粘土。炭化物ブロックを含む。
9　明黄褐色(2.5Y7/6)粘土。褐灰色(10YR6/1)粘土・炭化物ブロック、焼土粒を含む。
10　暗赤褐色・橙色(2.5YR7/8・2.5Y7/8)粘土。炭化物粒を含む。

第19図　B区8・9号住居跡

壁溝、貯蔵穴等はみられなかった。

カマドは、南東壁中央から北東寄りに焼土・炭化物等を含む層（1～3層）や掘り込みが検出されたことから、この辺りに設けられていたと考えられる。

出土遺物（第18図）は、土師器杯（No.1）、盌（2）2点のみである。いずれも覆土中からの検出である。1は模倣杯である。2は内外面に煤の付着がみられた。

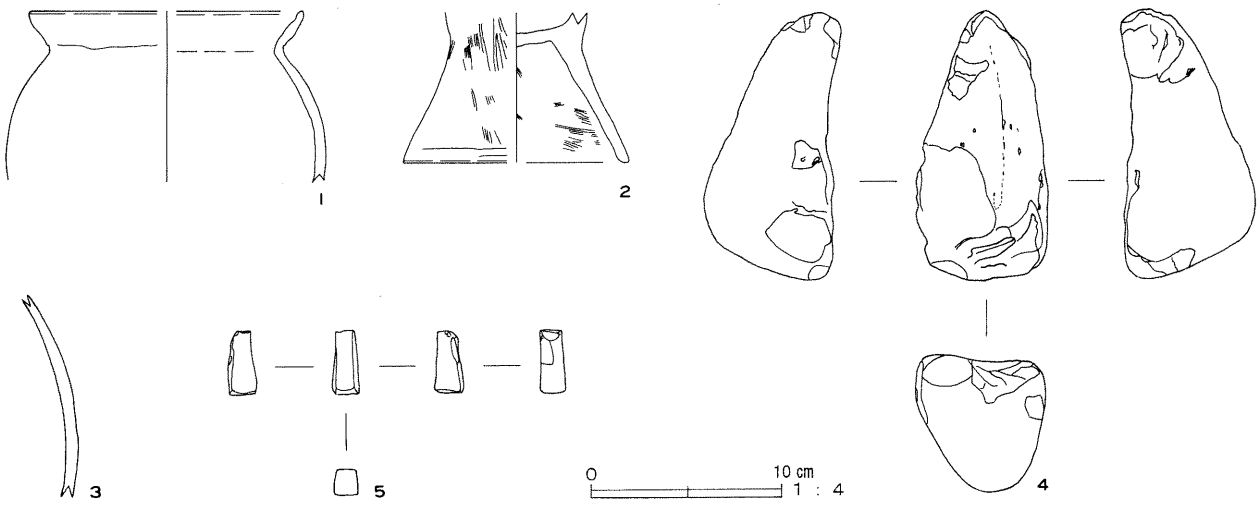
8号住居跡（第19図）

T・U—10・11グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。北西部から南西部にかけて河川跡に切られ、南東隅で9号住居跡を切っている。また、直接的な重複関係にないが、北東上部に古墳時代後期の5・6号住居跡が位置している。

規模・平面形は不明であるが、南東壁は5.88mを測る。主軸方向はN—73°—Wを指す。確認面からの深さは44cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。覆土は色調の異なる粘土三層（1・2・4層）からなる。自然堆積と考えられる。壁溝は南西壁にのみみられた。幅8～12cm、床面からの深さ5cm程を測り、壁から2～25cm程離れて巡っている。ピットは北東部で3つ確認された。いずれも径15～22cm、深さ8cm前後と小さい。

炉跡は住居跡中央から北西寄りに設けられているが、北西側を河川跡に切られている。径は不明であるが、深さは床面から9cmを測る。覆土は炭化物を含む焼土層（6層）が確認された。

貯蔵穴は北東隅からやや南西寄りに設けられている。径60cm前後の円形を呈し、床面からの深さは8cmを測る。



第20図　B区8号住居跡出土遺物

第8表　B区8号住居跡出土遺物観察表　（第19図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器甕	(14.6)	-	-	③④①	②	橙	上位1/5	磨滅。
2	土師器台付甕	-	-	(12.0)	①③④⑥	②	明褐	脚部2/3	
3	土師器壺	-	-	-	⑥	②	赤	一部のみ	外面赤彩。
4	砥石	長さ 14.3	幅 6.8	厚さ 6.9				一部欠	
5	砥石	長さ 3.4	幅 1.4	厚さ 6.4				ほぼ完形	

出土遺物（第20図）には、土師器甕（No.1）、台付甕（2）、壺（3）、砥石（4・5）等がある。2と4が床面直上から検出された以外は、すべて覆土中からの検出である。土器はいずれも摩滅が顕著であった。1は上部のみの検出であるため、台付甕の可能性がある。2は台部のみである。3は胴部片であり、外面には赤彩が施されている。4は川原石を使用している。5は小型のものである。

9号住居跡（第19図）　U—10・11グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。北西隅を8号住居跡に切られている。

長軸2.92m、短軸2.83mの方形を呈する小形の住居跡である。主軸方向はN—68°—Wを指す。確認面からの深さは29cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は褐色系の粘土二層（7・8層）からなる自然堆積層であった。7層が厚く堆積し、8層は床面直上に薄くみられた。8層には炭化物をブロック状に含んでいた。

壁溝、ピット、貯蔵穴等はみられない。

炉跡は北西壁寄りに設けられている。径42×38cmの円形を呈し、床面からの深さは3cmを測る。覆土は被熱により赤色化した粘土層（10層）である。覆土上面からは、平らな川原石が検出された。

出土遺物（第21図）には、土師器甕（1・5～8）、台付甕（2～4）、壺（9）等があり、甕類が多数検出された。これらは住居跡中央から南東部にかけて検出されたが、中央では床面直上から、南東部では床面からやや浮いた状態でそれぞれ検出された。甕はすべて刷毛目調整であり、口縁部に刻目を持たないものが主体となる。また、内外面に煤が付着しているものが多い。なお、甕の中には下部を欠くものがあるため、本来は台付甕である可能性も考えられる。4は唯一口縁部に刻目が施されている。9は頸部と肩部の境に刺突の施された突帯が巡っており、その下にRL単節縄文が施文されている。

10号住居跡（第22図）　T—11・12グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。北東部から南西部にかけて河川跡に切られ、北東部で畠畑と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。また、直接的な重複関係にないが、北西上部には5・6号溝が走っている。

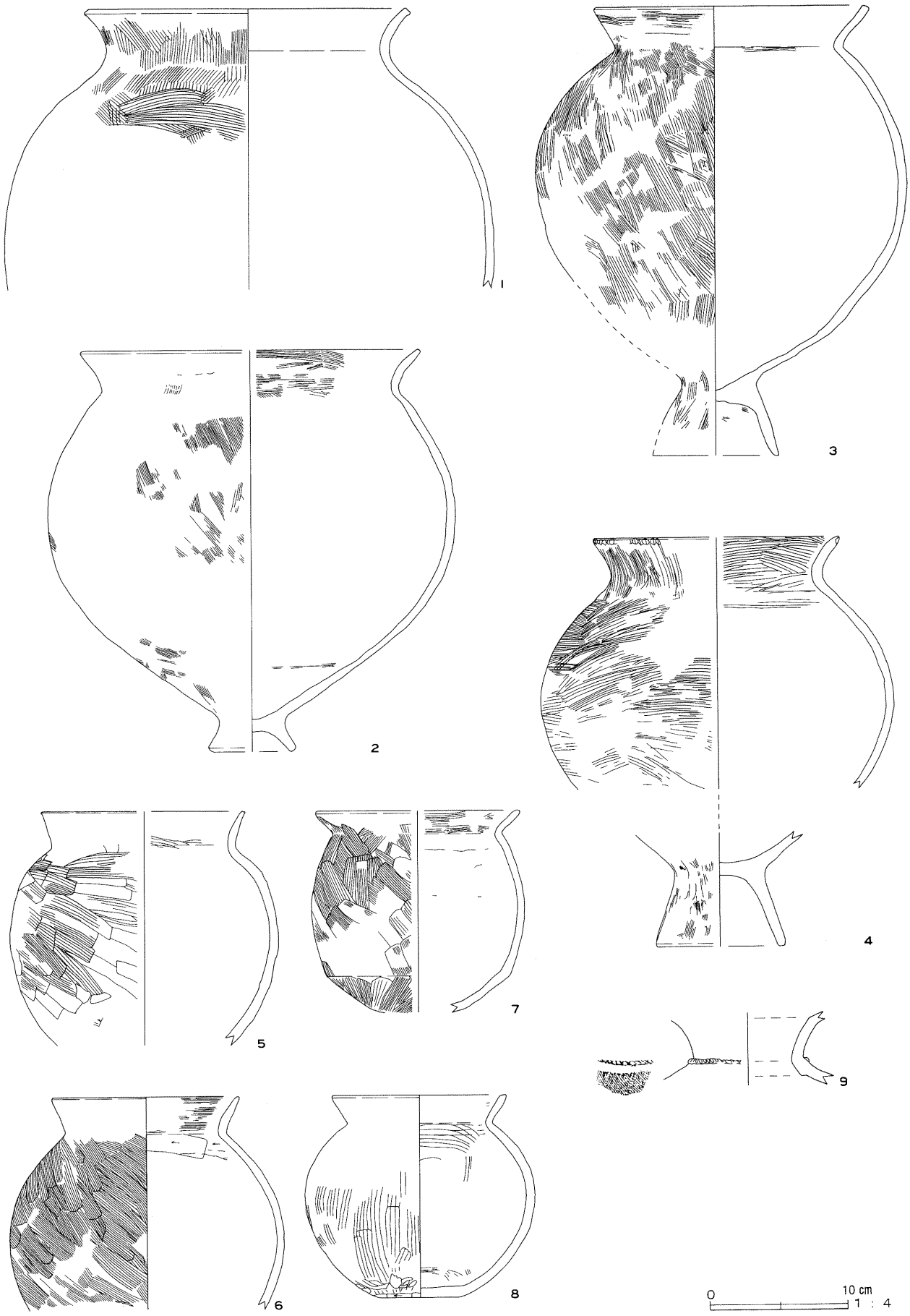
規模・平面形は不明である。主軸方向はN—65°—Wを測る。確認面からの深さは8cmと浅い。床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は暗灰黄色シルト（1層）が主体となり、一部床面直上に炭化物層（2層）がみられた。自然堆積と考えられる。

壁溝、ピットはみられない。

炉跡は北西寄りに設けられている。径52×47cm、床面からの深さは8cmを測り、円形を呈する。覆土は、焼土層（6層）のみ確認された。

貯蔵穴は北西隅に設けられている。径51×42cm、床面からの深さは8cmを測り、円形を呈する。

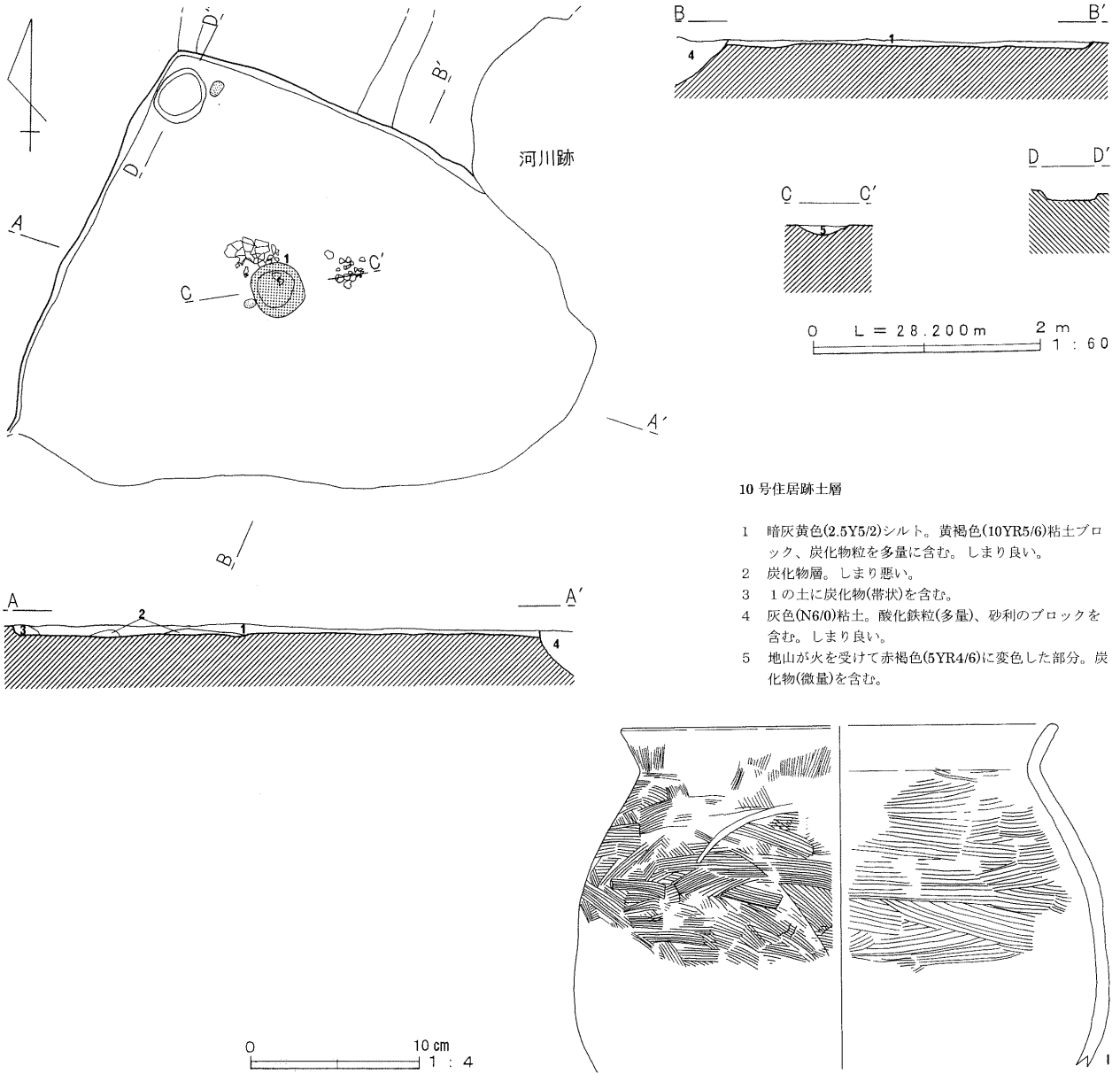
出土遺物（第22図）は土師器甕（No.1）のみである。炉跡周辺から検出された。上部のみの検出であり、台付甕の可能性がある。全面刷毛目調整であり、口縁部に刻目は持たない。



第21図　B区9号住居跡出土遺物

第9表　B区9号住居跡出土遺物観察表　(第21図)

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器甕	23.9	-	-	⑥③①④	②	橙	口縁部4/5	磨滅。
2	土師器台付甕	(25.0)	29.7	(6.4)	③⑥①	②	浅黄橙	1/3	内外面煤付着。磨滅。
3	土師器台付甕	20.0	33.2	9.0	③⑥	②	浅黄橙	5/6	外面煤付着。
4	土師器台付甕	(17.9)	(30.2)	(9.3)	③⑥	②	淡黄	1/3	
5	土師器甕	15.0	-	-	③⑥①④	②	浅黄橙	1/3	
6	土師器甕	13.8	-	-	③①④⑥	②	橙	上位3/4	外面煤付着。
7	土師器甕	(15.0)	-	-	⑥①③④	②	にぶい黄橙	3/4	全体的に剝離。
8	土師器甕	(12.8)	14.9	6.0	③①⑥④	②	浅黄橙	3/4	外面黒斑有。
9	土師器壺	-	-	-	③①⑥	②	橙	頸部のみ	肩部に縄文有。



10号住居跡土層

1　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。黄褐色(10YR5/6)粘土ブロック、炭化物粒を多量に含む。しまり良い。
2　炭化物層。しまり悪い。
3　1の土に炭化物(帯状)を含む。
4　灰色(N6/0)粘土。酸化鉄粒(多量)、砂利のブロックを含む。しまり良い。
5　地山が火を受けて赤褐色(5YR4/6)に変色した部分。炭化物(微量)を含む。

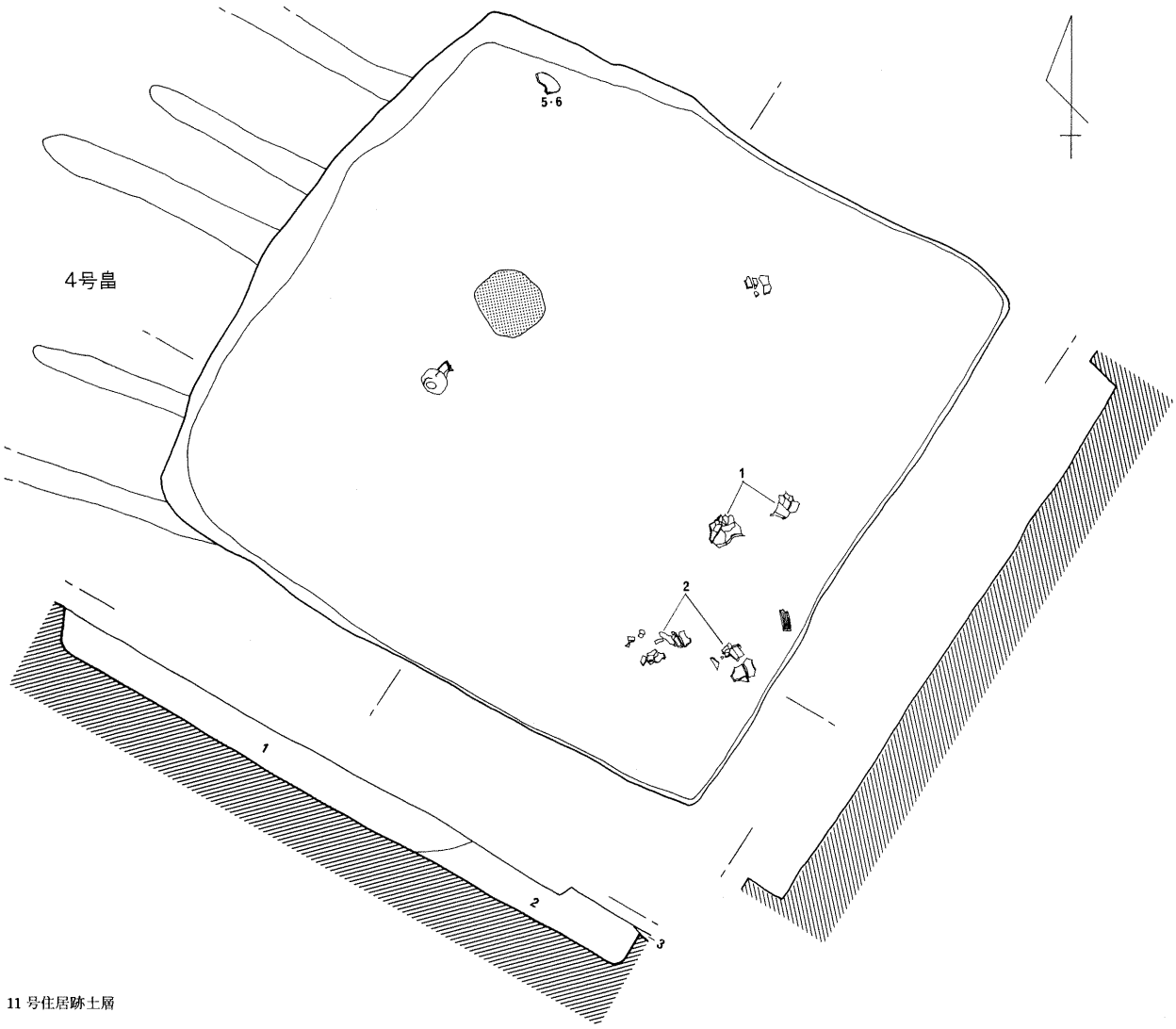
第22図　B区10号住居跡・出土遺物

11号住居跡　(第23図)　S・T—12・13グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。北東部から南東部にかけて河川跡に切られており、北西部から南西部にかけて畠跡と重複関係にある。また、直接的な重複関係にないが、南西上部には8・9号溝が位置している。

長軸5.51m、短軸5.37mの方形を呈する。主軸方向はN—59°—Wを指す。確認面からの

第10表　B区10号住居跡出土遺物観察表　（第22図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器甕	(26.2)	-	-	③⑥①④	②	橙	胴上位1/2	磨滅。



11号住居跡土層

1　暗褐色(7.5YR3/3)粘土。下部に炭化物ブロックを含む。
2　黄灰色(2.5Y5/1)粘土。下部に炭化物ブロックを含む。
3　暗褐色(5YR3/2)砂。

0　L＝28.100m　2m
1：60

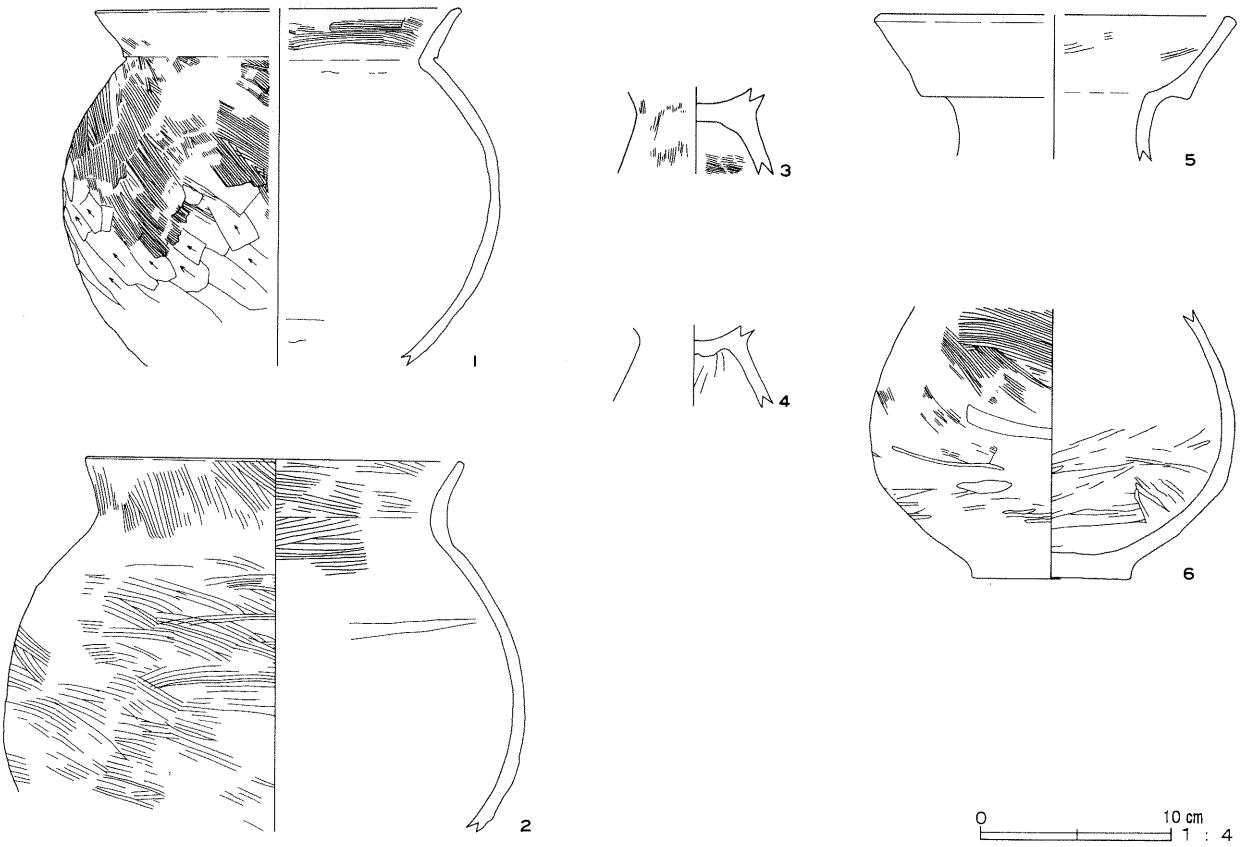
第23図　B区11号住居跡

深さは34cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。覆土は色調の異なる粘土二層（1・2層）からなる自然堆積層であった。床面直上には炭化物がブロック状にみられた。

壁溝、ピット、貯蔵穴等はみられなかった。

炉跡は住居跡中央からやや北西寄りに設けられている。掘り込みは確認されなかったが、径55cm範囲で焼土が検出された。

出土遺物（第24図）には、土師器甕（No.1・2）、台付甕（3・4）、壺（5・6）等がある。1・2・5・6は床面上に散在して検出されたが、その他は覆土中からの検出であ



第24図　B区11号住居跡出土遺物

第11表　B区11号住居跡出土遺物観察表　(第24図)

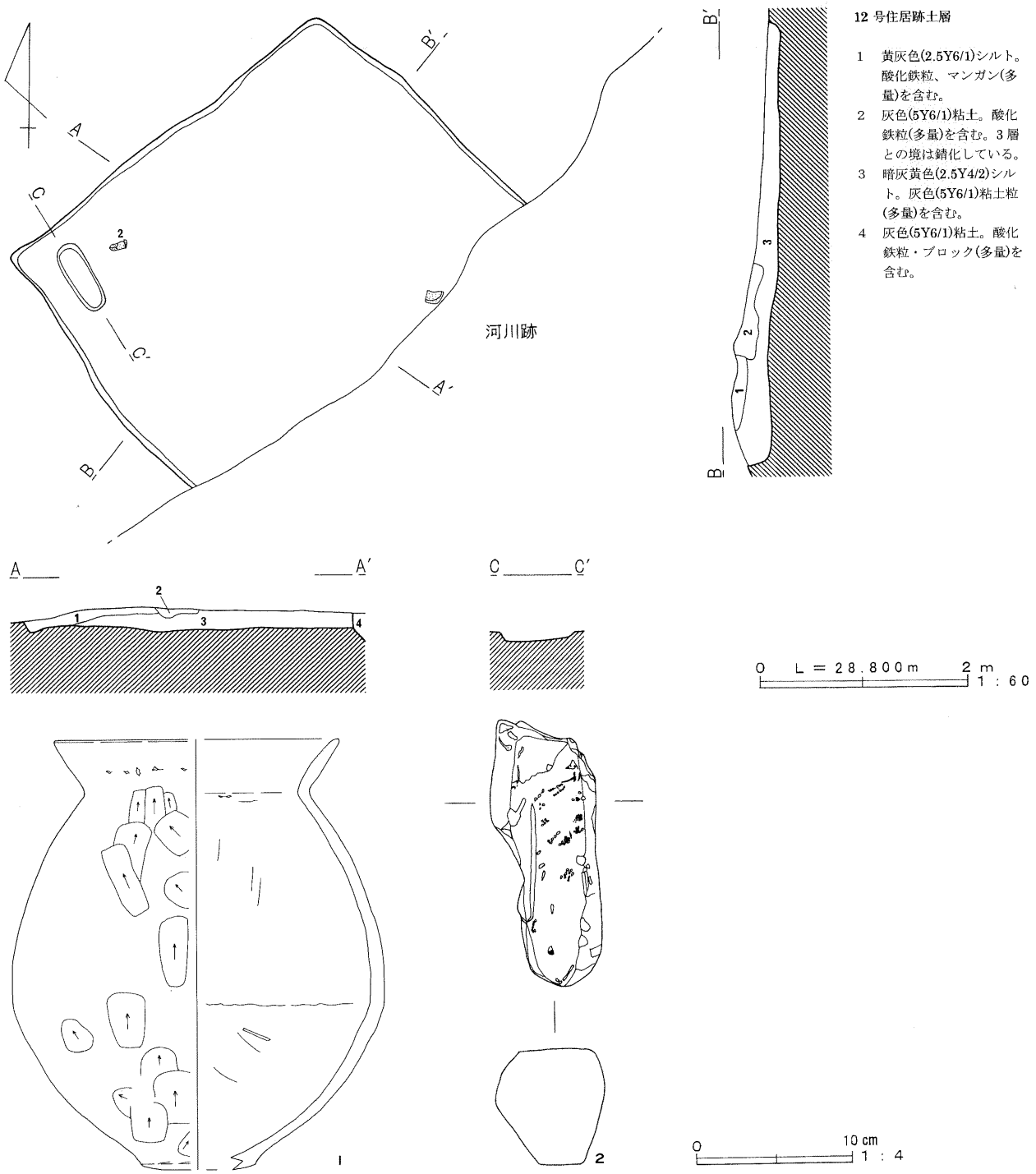
No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器甕	19.2	-	-	③①④	②	橙	胴上位4/5	
2	土師器甕	20.2	-	-	③①	②	明赤褐	上位2/3	二次加熱。
3	土師器台付甕	-	-	-	③①	②	明赤褐	脚部上位のみ	内面煤付着。
4	土師器台付甕	-	-	-	③⑥①	②	橙	脚部上位のみ	内外面煤付着。外面磨滅。
5	土師器壺	(19.2)	-	-	③	②	橙	口縁部1/4	磨滅。
6	土師器壺	-	-	8.4	③①④	②	橙	下位1/2	

る。甕類は口縁部に刻目を持たず、刷毛目調整を主体とするが、1のみ胴下部に刷毛目調整前にヘラナデが施されている。1・2は上部のみの検出であるため、本来は台付甕である可能性がある。2は二次加熱を受けており、3・4は煤の付着がみられた。5は摩滅が顕著であったため、図示できなかったが、頸部には縦位のミガキが施されている。6は胴上部に刷毛目、胴下部にヘラナデ調整が施されている。

12号住居跡　U—10グリッドに位置する。第一確認面からの検出である。南東部を河川跡に切られている。

(第25図)

規模・平面形は不明であるが、北西壁は3.75mを測る。南北軸方向はN—39°—Wを指す。確認面からの深さは23cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は色調の異なる粘土とシルト三層（1～3層）からなるが、3層が主体となる。自然堆積と考えられる。ピットは南西隅から一つ検出された。径72×27cmの長方形を呈し、床面からの深さは13cmを測る。



第25図　B区12号住居跡・出土遺物

第12表　B区12号住居跡出土遺物観察表　（第25図）

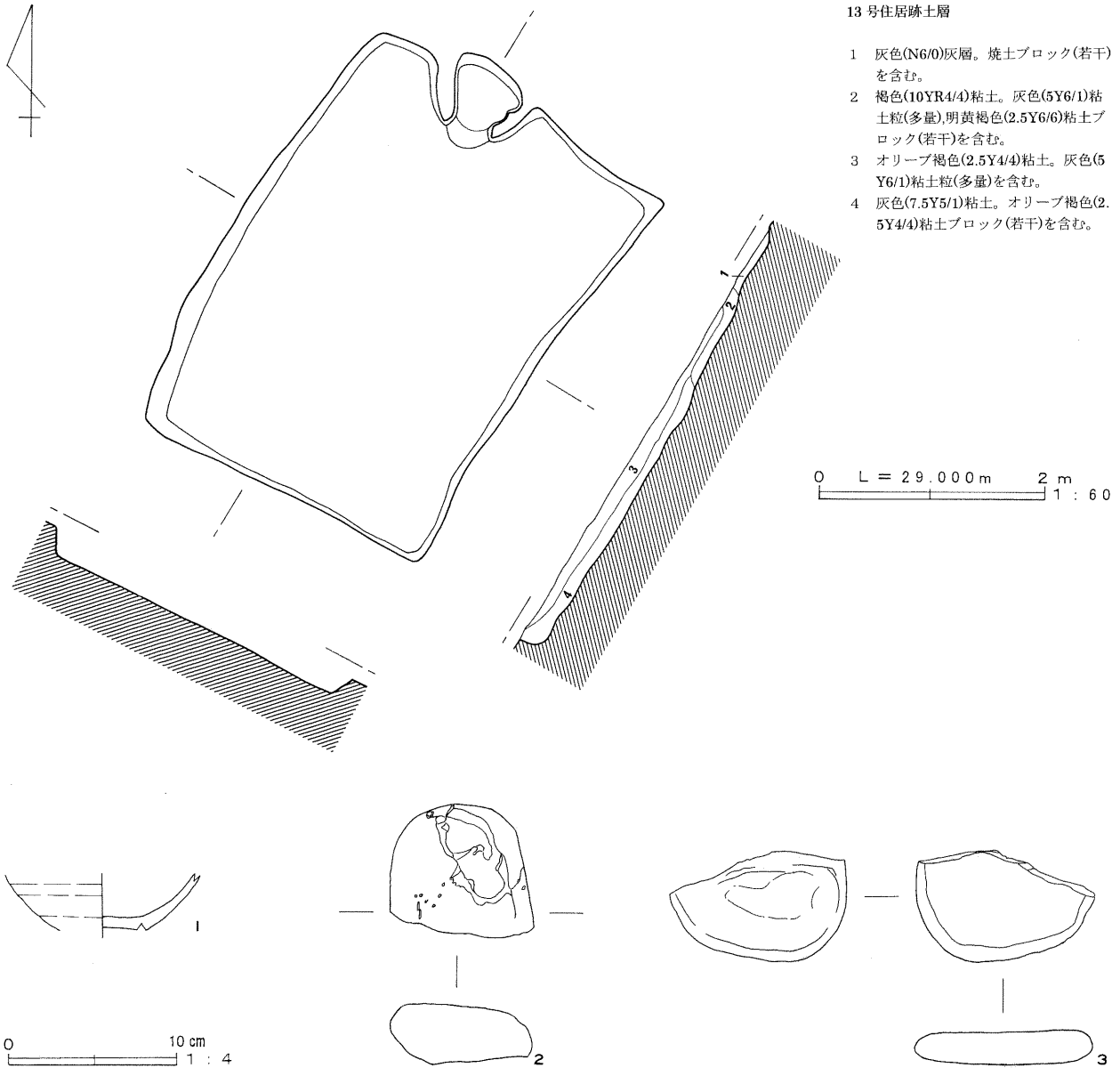
No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　考
1	土師器甕	(18.4)	28.0	(7.4)	③④①⑥	②	橙・黄橙	1/3	磨滅。
2	砥石	長さ 17.3	幅 6.9	厚さ 7.5				完形	一面使用。

壁溝、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

出土遺物（第25図）は、土師器甕（No.1）、砥石（2）の2点のみである。1は覆土中、2は北西隅上層から検出された。1は長胴甕であるが、やや胴がつまっている。2は側面を全面使用している。

13号住居跡（第26図）　U—10・11グリッドに位置する。第一確認面からの検出である。直接的な重複関係にないが、本住居跡の下に古墳時代前期の14号住居跡、南東下部に15号住居跡、北西部から南西部にかけて畠跡がみられた。

長軸4.15m、短軸2.97mの長方形を呈する。主軸方向はN—36°—Eを指す。確認面からの深さは23cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は色調の異なる粘土三層（2～4層）からなる。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。



第26図　B区13号住居跡・出土遺物

第13表　B区13号住居跡出土遺物観察表　（第26図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器高台椀	-	-	5.2	①⑥③	②	にぶい黄橙	下位1/2	内面煤付着。
2	磨石	長さ　8.1　幅　8.0　厚さ　3.6						半分欠	
3	砥石	長さ　6.6　幅　10.6　厚さ　2.0						半分欠	二面使用。

壁溝、ピット、貯蔵穴等はみられない。

カマドは北東壁中央に設けられている。本住居跡のカマドは構造が他の住居跡とは異なっている。袖部は地山の掘り残しで、内側には被熱した箇所が僅かに確認された。焚口部の幅は36cm、燃焼部幅は56cm、煙道部幅は68cmを測る。燃焼部から煙道部まではほぼ平坦で、先端で立ち上がる。壁外へは20cmほど張り出すのみである。覆土に天井部等はみられず、灰層（１層）のみ検出された。

出土遺物（第26図）には、土師器高台椀（№１）、磨石（２）、砥石（３）等がある。いずれも覆土中からの検出である。１はロクロ成形による。高台を欠く。２は半分を欠く。３は川原石を使用している。半分を欠く。

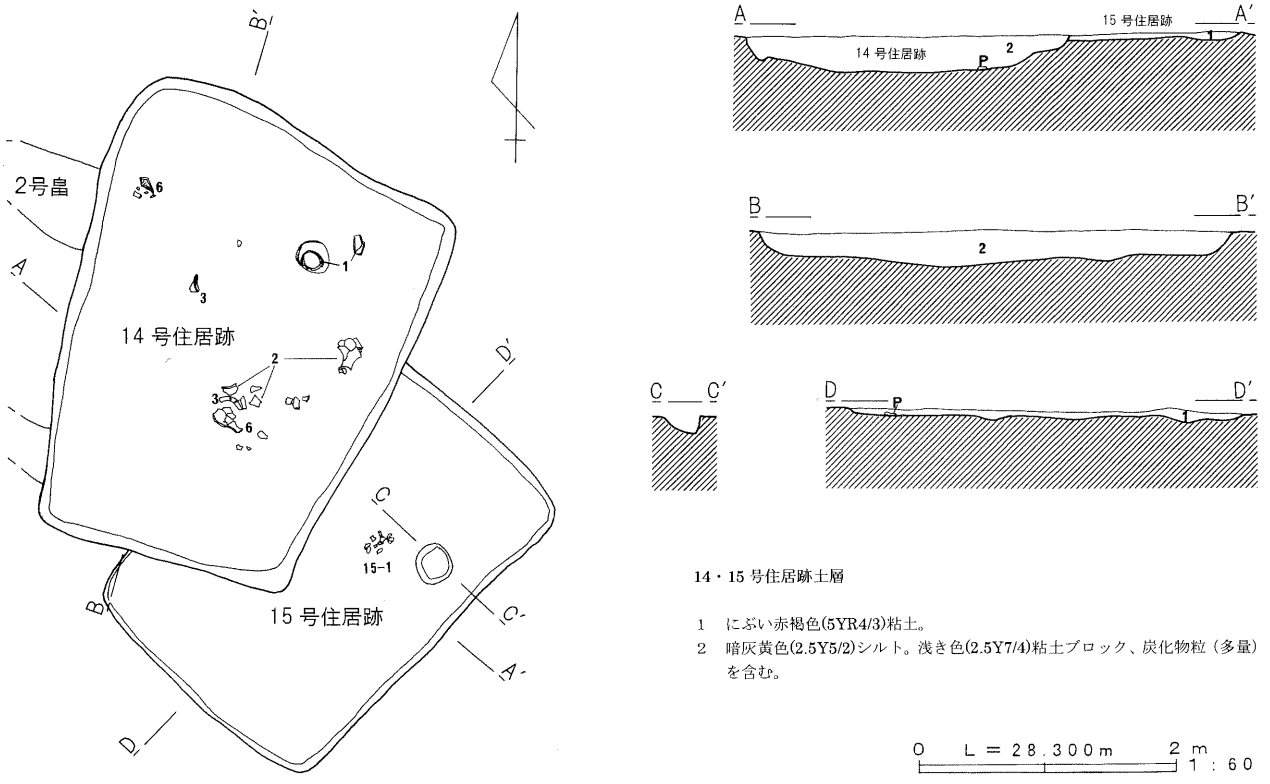
14号住居跡（第27図）

U—11グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。南東部で15号住居跡を切っており、北西部から南西部にかけて畠跡と重複関係にある。また、直接的な重複関係にないが、本住居跡の上には、13号住居跡が位置している。

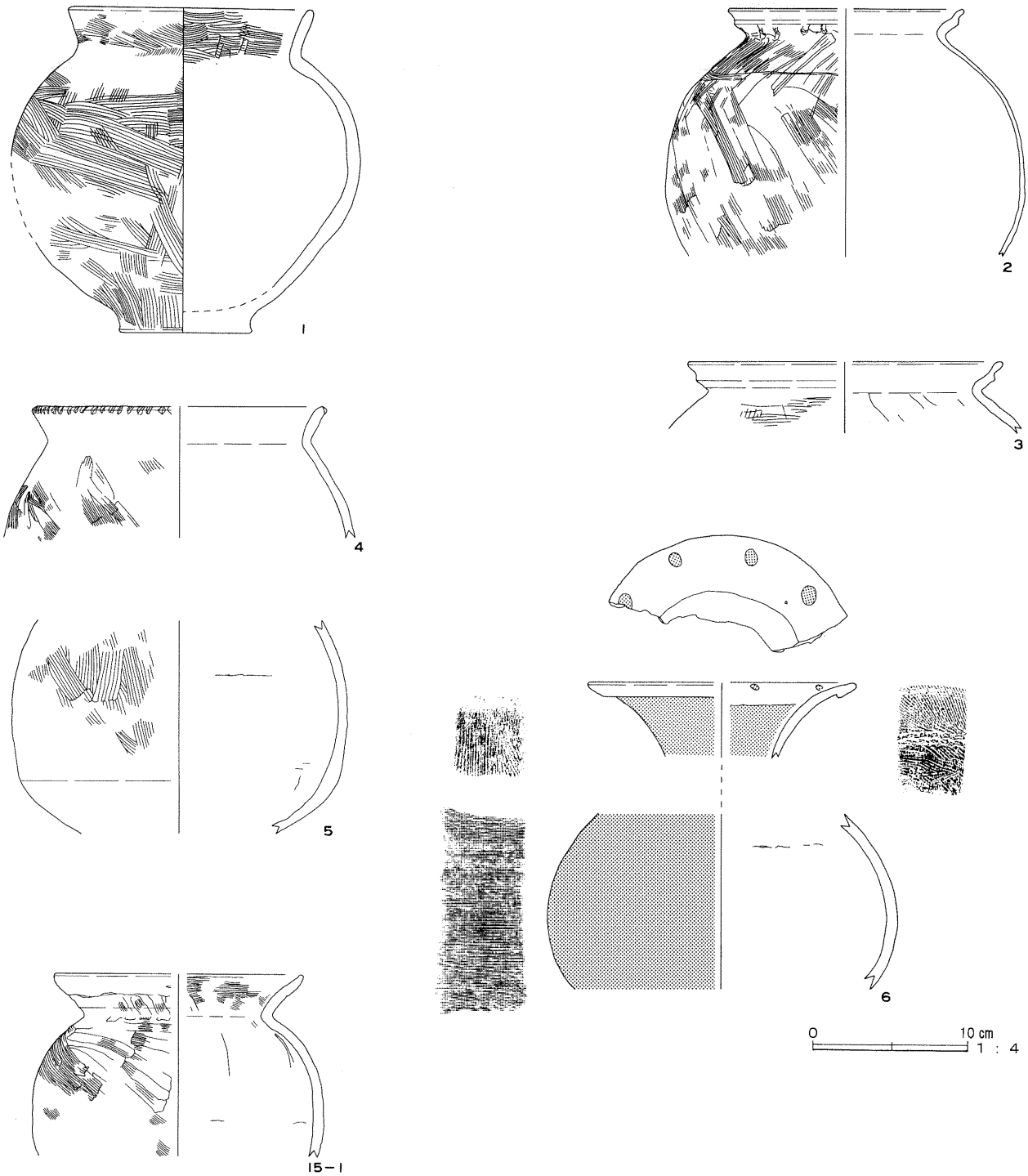
長軸3.74m、短軸2.85mの長方形を呈する。南北軸方向はN—15°—Eを指す。確認面からの深さは28cmを測り、床面はやや凹凸がみられ、中央部が窪んでいた。覆土は暗灰黄色シルトの単一層（２層）であり、粘土ブロックや炭化物を多量含んでいた。自然堆積と考えられる。

壁溝、ピット、炉跡、貯蔵穴等はみられなかった。

出土遺物（第28図）には、土師器甕（№１～５）、壺（６）等があり、甕が多く検出され



第27図　B区14・15号住居跡



第28図　B区14・15号住居跡出土遺物

第14表　B区14号住居跡出土遺物観察表　（第28図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器甕	15.9	21.2	8.6	③④①	②	黄橙	3／4	
2	土師器甕	(15.2)	-	-	③①④⑥	②	黄橙	胴部上位1／2	
3	土師器甕	(20.4)	-	-	③①④	②	浅黄橙	口縁部1／4	
4	土師器甕	(19.2)	-	-	③①④	②	明赤褐	口縁部1／3	二次加熱。
5	土師器甕	-	-	-	③①④	②	明赤褐	胴部下位1／5	剝離。二次加熱。
6	土師器壺	(17.4)	-	-	③①④	②	浅黄橙	口縁・胴部1／2	赤彩。

第15表　B区15号住居跡出土遺物観察表　（第28図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器甕	(16.2)	-	-	③①④	②	黄橙	上位1／4	剝離。

た。1～3・6が床面上から散在して検出され、4・5は覆土中からの検出である。甕はいずれも刷毛目調整であり、口縁部に刻目を持たないものが主体となる。1は台部を持たないが、その他は台付甕である可能性がある。このうち、S字状口縁である2・3は上部のみの検出であるが、本来は台部を持つものと考えられる。4は口縁部に唯一刻目を持つ。4・5は二次加熱を受けている。6は口縁部が大きく外反し、胴部は球形を呈する。調整は内外面ともに刷毛目調整を主体とするが、部位によってその施文方向が異なる。胴部内面は横位のヘラナデ調整である。口縁部を除いた全面に赤彩が施されており、口縁部内面には円形朱文が等間隔に施こされ、赤彩箇所との境にはS字状結節が巡っている。

15号住居跡
(第27図)

U—11グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。北西部を14号住居跡に切られている。また、直接的な重複関係にないが、北西上部に13号住居跡、南東上部に7号土坑が位置している。

長軸3.17m、短軸2.25mの長方形を呈する。南北軸方向はN—41°—Eを指す。確認面からの深さは7cmと浅い。床面は凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土はにぶい赤褐色粘土の単一層（1層）である。自然堆積と考えられる。ピットは北東部で一つ検出された。径32cm、床面からの深さは13cmを測る。

壁溝、炉跡、貯蔵穴等はみられない。

出土遺物（第28図）は、土師器甕（№15—1）のみである。ピット北西の床面上から検出された。上部のみの検出であり、台付甕の可能性が考えられる。口縁部に刻目を持たず、輪積痕を残す。刷毛目調整による。

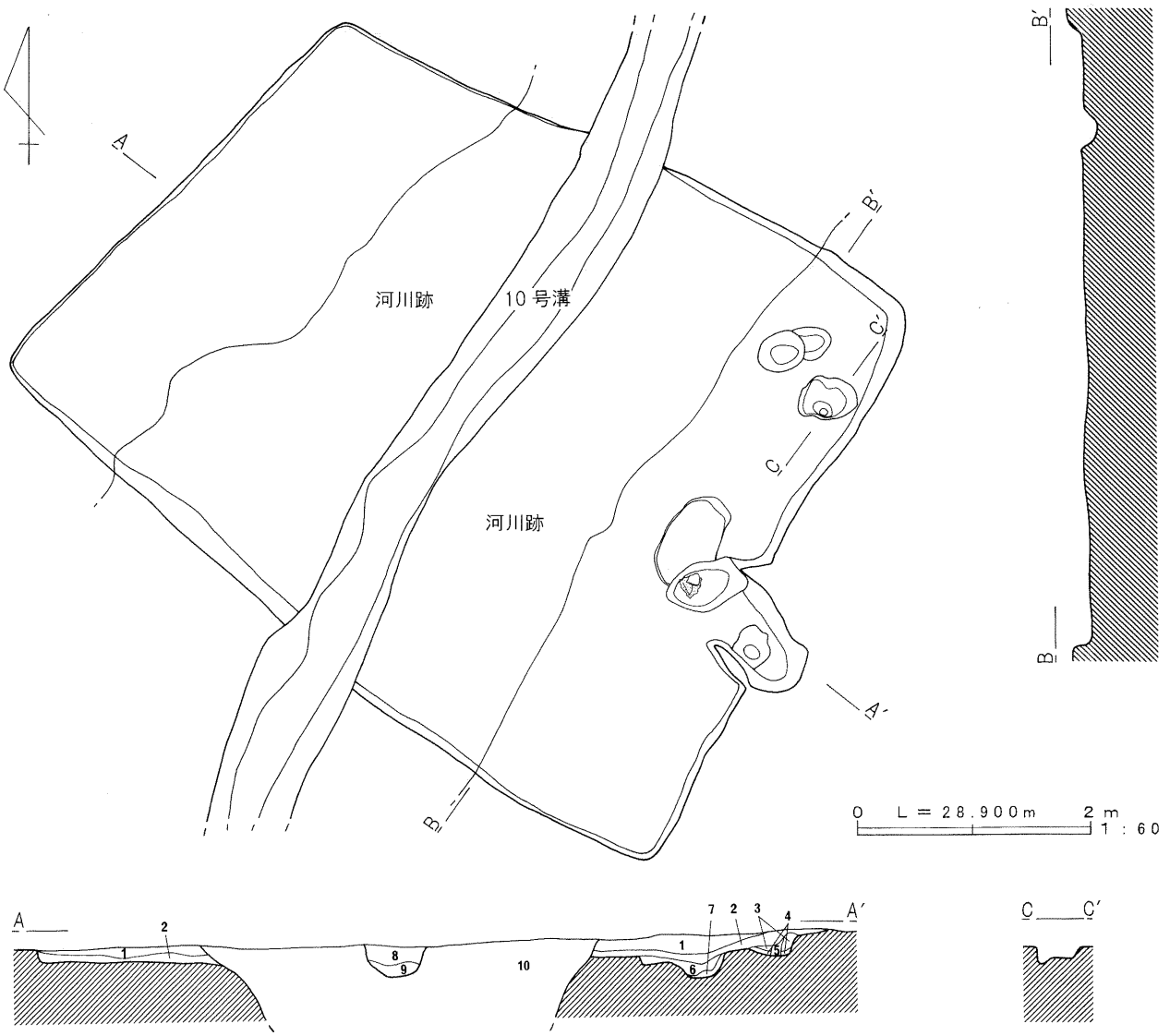
16号住居跡
(第29図)

U・V—11・12グリッドに位置する。第一確認面からの検出である。住居跡中央を河川跡や10号溝に切られている。また、直接的な重複関係にないが、本住居跡下部には畠跡がみられた。

長軸6.65m、短軸5.44mのいびつな長方形を呈する。主軸方向はS—45°—Eを指す。確認面からの深さは15cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は色調の異なる粘土ないしシルト二層（1・2層）からなる自然堆積層であった。ピットは南東隅に一つのみ検出された。径65×33cm、床面からの深さは13cmを測り、北東側にテラスを持つ。壁溝はみられない。

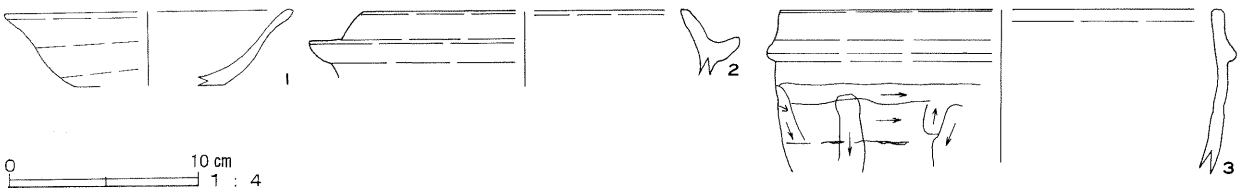
カマドは南東壁中央から南西寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内側には被熱した箇所が僅かに確認された。焚口部から煙道部先端までは幅58cmを測り、ほぼ一定となっている。燃焼部には径30cm前後、深さ7cmの掘り込みがみられる、煙道部は先端で急速に立ち上がる。壁外へは49cmほど張り出している。覆土に天井部等はみられず、住居跡覆土の下から焼土層（3層）、焼土をブロック状に含む層（5層）、灰層（4層）が確認された。また、カマド前には床下土坑がみられた。径87cmの楕円形を呈し、床面からの深さ8cmを測る。

貯蔵穴は南東隅に設けられている。径50×38cmの不整円形を呈し、床面からの深さは15



16号住居跡土層

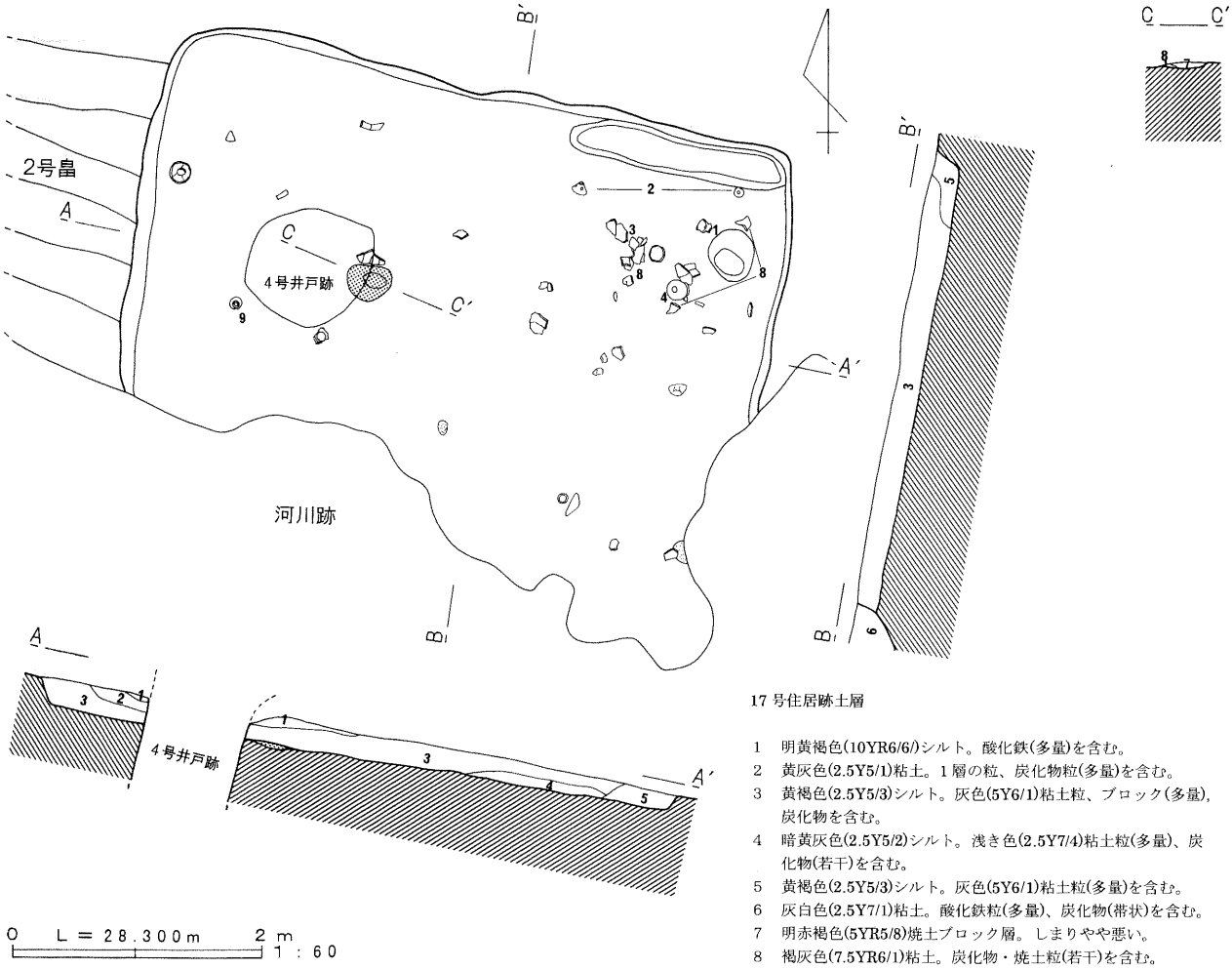
1　褐色(7.5YR4/3)粘土。焼土粒、炭化物(少量)を含む。
2　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。焼土粒、炭化物(少量)を含む。土器を包含する。
3　赤色(10YR5/8)粘土。焼土ブロック、炭化物(少量)を含む。
4　暗赤褐色(10YR2/2)灰層。炭化物が充填している。
5　暗赤灰色(2.5YR3/1)粘土。焼土ブロック(多量)を含む。
6　褐色(7.5YR4/3)粘土。炭化物(少量)を含む。しまり悪い。
7　褐色(7.5YR4/3)粘土。炭化物(多量)を含む。しまり悪い。
8　黄褐色(2.5Y5/4)砂。酸化鉄(多量)を含む。
9　灰オリーブ色(5Y5/2)砂。酸化鉄、礫(多量)を含む。
10　にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト。礫(少量)を含む。しまり非常に良い。



第29図　B区16号住居跡・出土遺物

第16表　B区16号住居跡出土遺物観察表　(第29図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(15.4)	3.9	(7.8)	⑥①④	②	にぶい黄橙	1/4	
2	土師器羽釜	(17.0)	－	－	②④①③⑥	②	橙	口縁部1/8	
3	土師器羽釜	(23.4)	－	－	⑥①②③④	②	黄橙	上位1/6	



第30図　B区17号住居跡

cmを測る。

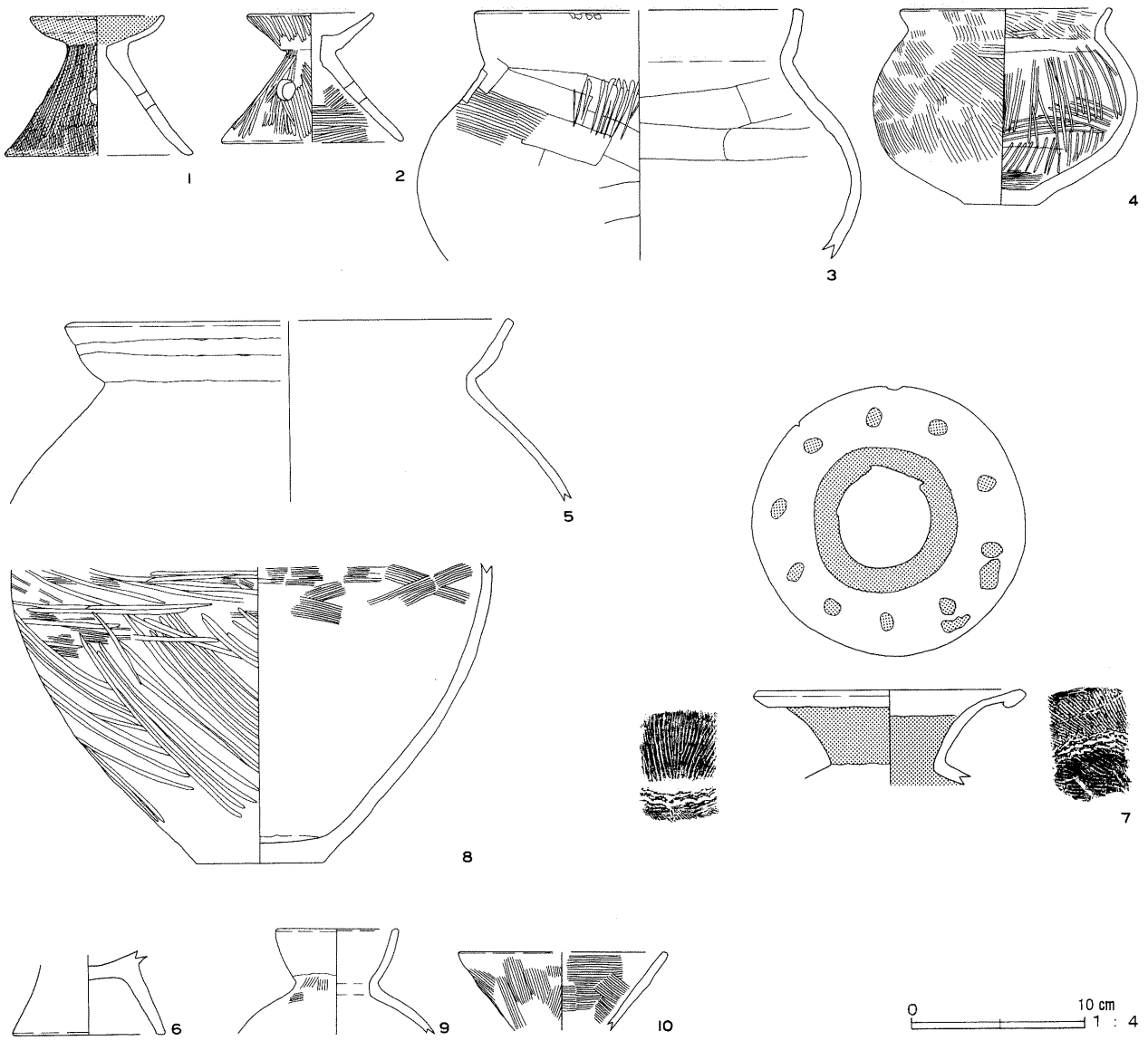
出土遺物（第29図）には、土師器杯（№1）、羽釜（2・3）等がある。いずれも破片であり、覆土中からの検出である。1はロクロ成形による。羽釜はともに口縁部のみの検出である。2は口縁部が内傾し、突帯がしっかりしている。3は口縁部が直立し、突帯が低い。

17号住居跡
（第30図）

Ⅴ—11グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。住居跡中央から南側半分にかけて河川跡、北西部を4号井戸跡に切られている。また、直接的な重複関係にないが、北西隅の上部には16号住居跡、東壁上には8号土坑が位置している。

規模・平面形は不明であるが、北壁は4.97mを測る。主軸方向はN—80°—Wを指す。確認面からの深さは24cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。覆土は黄色系のシルトないし粘土五層（1～5層）からなる自然堆積層であった。壁溝は北東隅にのみみられた。幅28～33cm、床面からの深さは7cmを測る。ピットはみられない。

炉跡は住居跡中央からやや西側に設けられている。径36×30cmの円形を呈し、床面からの深さ6cmを測る。覆土は焼土層（7層）が主体となり、その下に焼土・炭化物を含む粘



第31図　B区17号住居跡出土遺物

第17表　B区17号住居跡出土遺物観察表　（第31図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器器台	7.9	8.2	(11.1)	③④	②	にぶい黄橙	2/3	四方透かし。内外面黒斑有。赤彩。
2	土師器器台	7.4	7.6	(10.7)	③	②	赤褐	脚部1/2欠	三方透かし。内外面黒斑有。
3	土師器甕	(19.3)	-	-	④③	②	にぶい黄橙	上位1/4	
4	土師器甕	11.3	11.7	4.1	④③	②	にぶい黄橙	口縁部2/3欠	外面下位に黒斑有。
5	土師器甕	(26.2)	-	-	④③⑥	②	にぶい黄橙	上位1/10	磨滅。
6	土師器台付甕	-	-	9.0	③④	②	橙	台部1/2	磨滅。
7	土師器壺	16.0	-	-	③	②	浅黄	口縁部のみ	赤彩。
8	土師器壺	-	-	7.5	④②	②	にぶい黄橙	下位1/2	内外面黒斑有。
9	土師器坩	7.2	-	-	③	②	橙	口縁部のみ	磨滅。
10	土師器坩	(12.2)	-	-	③	②	にぶい黄橙	口縁部1/3	

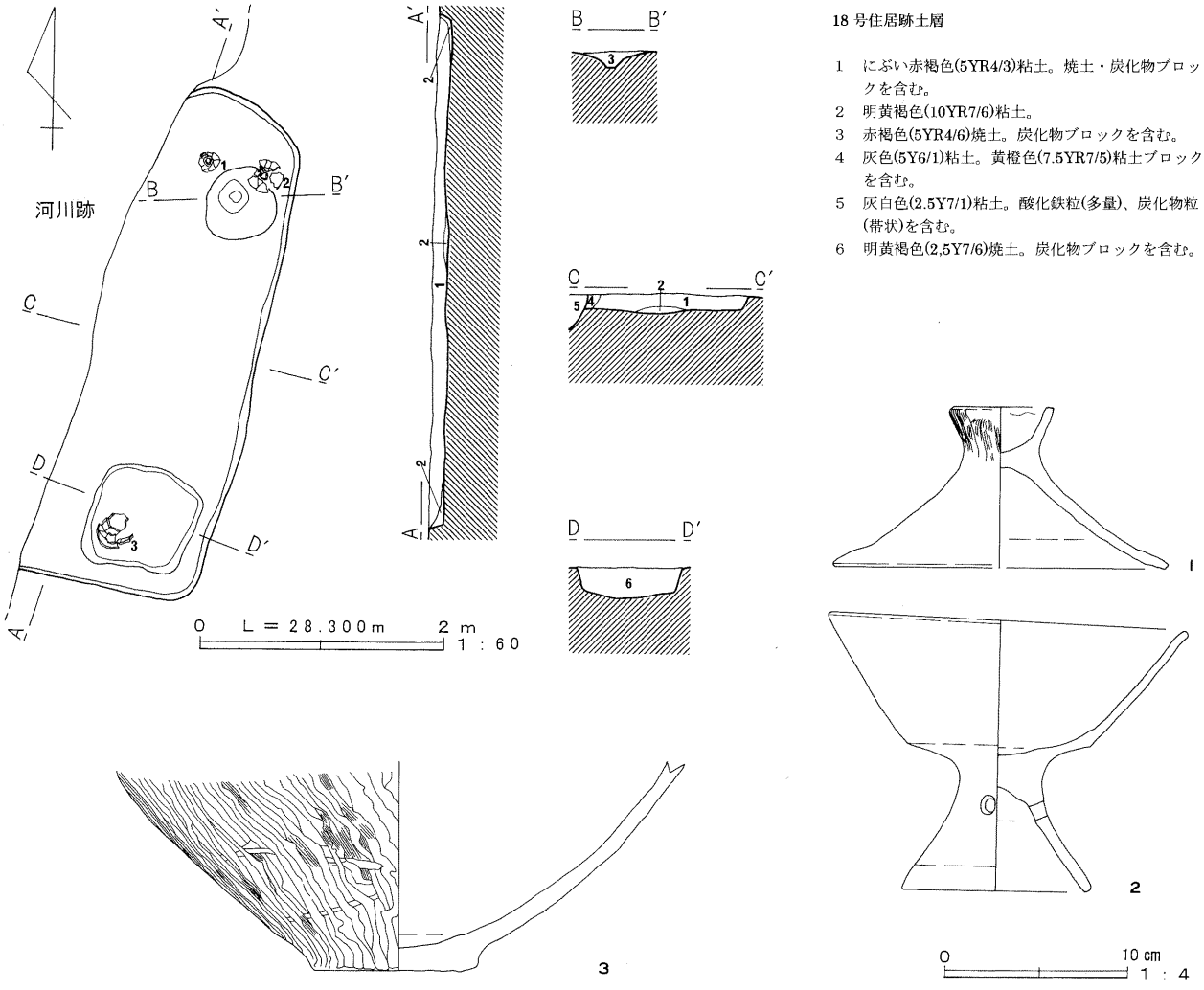
土層（8層）がみられた。

貯蔵穴は北東隅に設けられている。径40cm前後の円形を呈する。

出土遺物（第31図）には、土師器器台（No.1・2）、甕（3～5）、台付甕（6）、壺（7・8）、坩（9・10）等がある。住居跡のほぼ全面から検出されたが、主に北東隅からまとまって検出された。器台は1がミガキ調整でほぼ全面赤彩しているのに対し、2は刷毛目調整

で赤彩はなされていない。透かし孔は1が4つ、2が3つ施されている。ともに内外面に黒斑を有する。甕は大型（3・5）と小型（4）のものがみられる。3はヘラナデ調整後、所々に刷毛目調整を施している。4は内外面に刷毛目調整を行う。5はS字状口縁を呈するが、屈曲が弱い。摩滅が顕著であることから、調整は図示不可能であった。台付甕の可能性がある。7は口縁部が大きく外反する壺である。調整は内外面ともに刷毛目調整であり、部位によってその施文方向が異なる。口縁部と肩部外面を除いた箇所に赤彩が施されており、口縁部内面には円形朱文が等間隔に施されている。口縁部内面や肩部付近には、赤彩が施され、S字状結節が巡っている。

18号住居跡（第32図）　W—10・11グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。西側大半を河川跡に切られている。また、直接的な重複関係にないが、上部に11号溝が走っている。



第32図　B区18号住居跡・出土遺物

第18表　B区　18号住居跡出土遺物観察表　（第32図）

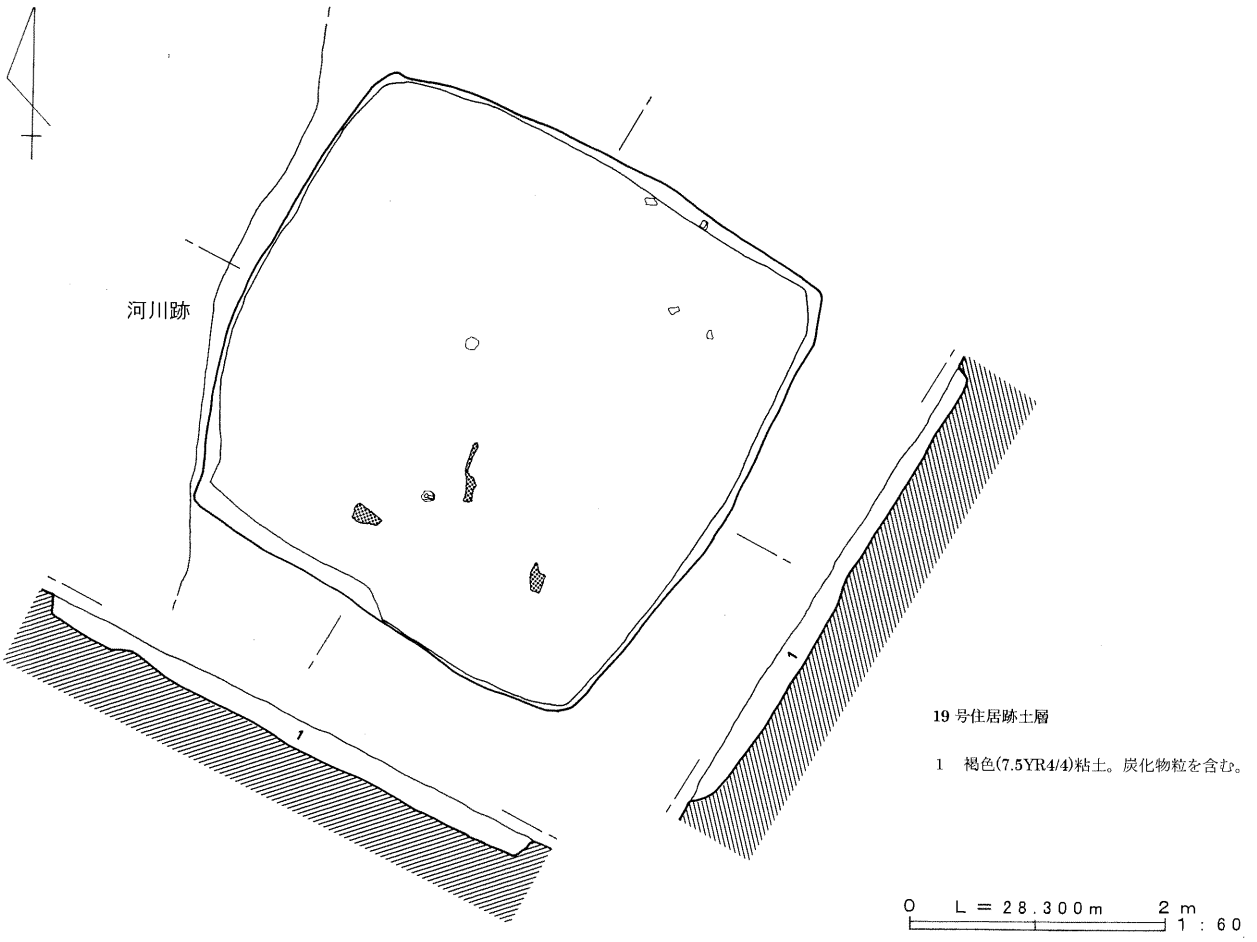
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器蓋	(18.6)	8.9	－	⑥③	②	にぶい黄橙	3/4	磨滅。
2	土師器高杯	19.3	15.0	10.4	③⑥	②	浅黄橙	4/5	三方透かし。磨滅。
3	土師器壺	－	－	9.0	③④①	②	橙	胴下位のみ	外面黒斑有、煤付着。

規模・平面形は不明であるが、北東壁は3.82mを測る。南北軸方向はN—78°—Wを指す。確認面からの深さは16cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は色調の異なる粘土三層（1・2・4層）からなる自然堆積層であった。1層が厚く堆積しており、主体となる。焼土・炭化物を含んでいた。

壁溝、ピット、炉跡等は検出されなかった。

貯蔵穴は2つ検出され、北東隅と南東隅にみられた。北東隅の貯蔵穴は径60cm前後、床面からの深さは13cmを測り、方形を呈する。南東部のものは径87cmの方形を呈し、床面からの深さは24cmを測る。ともに覆土は炭化物を含む焼土層（3・6層）であった。南東部の貯蔵穴覆土上層からは、土師器壺（No.3）が検出された。

出土遺物（第32図）には、土師器蓋（No.1）、高杯（2）、壺（3）等がある。1・2は北東隅、3は貯蔵穴からの検出である。1は摩滅が顕著であるが、全面刷毛目調整による。2は杯部が深く、脚部に円形の透かし孔を3つ持つ。3は刷毛目調整後にミガキが施されている。外面に黒斑を有し、煤の付着がみられた。



第33図　B区19号住居跡

19号住居跡　W・X—10・11グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。他の遺構と直接的な重複関係はみられないが、南東上部に12号溝が走っている。

(第33図)

長軸4.23m、短軸4.15mの方形を呈する、南北軸方向はN—29°—Wを指す。確認面からの深さは22cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は褐色粘土による単一層（１層）であり、自然堆積と考えられる。南西部床面直上には炭化物がみられた。

壁溝、ピット、炉跡、貯蔵穴等はみられなかった。

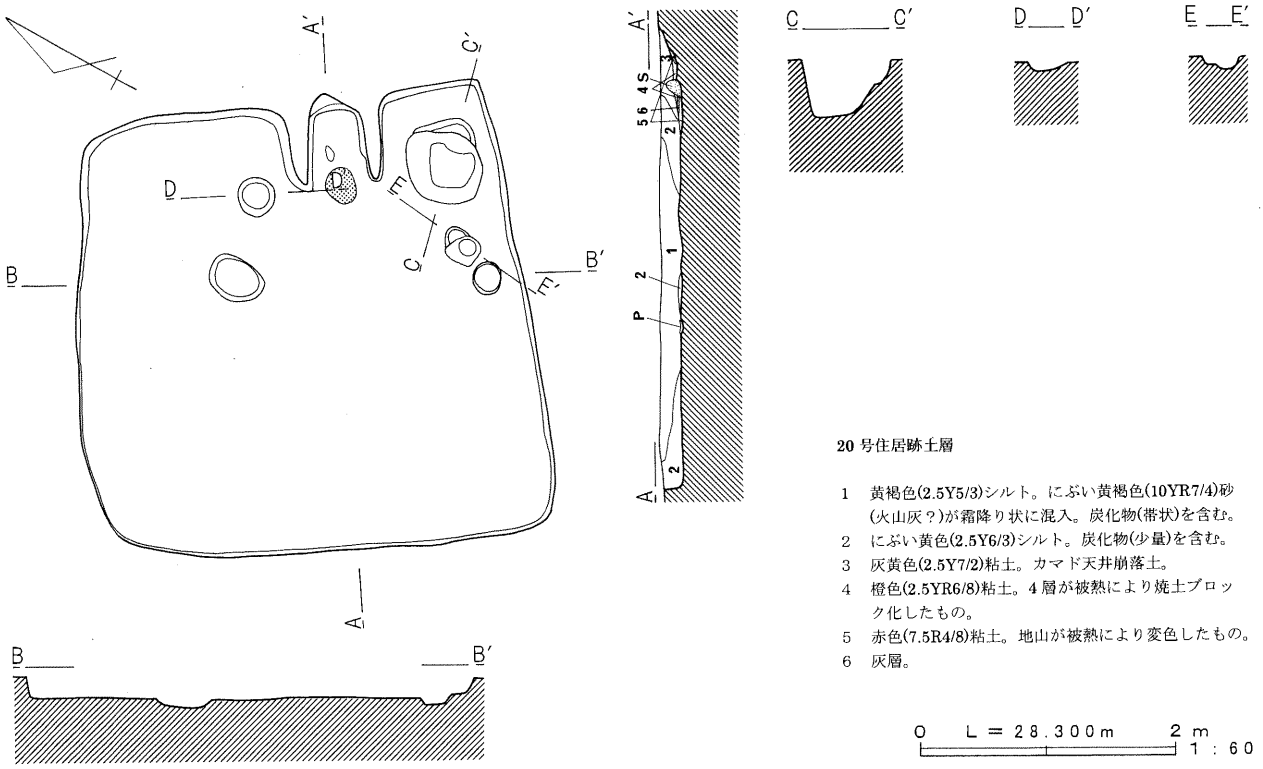
遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

20号住居跡　W—13・14グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。南西隅で15号溝に切られている。

(第34図)

長軸3.71m、短軸3.62mの方形を呈する。主軸方向はN—57°—Eを指す。確認面からの深さは17cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色のシルト二層（１・２層）からなる自然堆積層であった。１層には火山灰らしき混入物がみられた。壁溝はみられない。ピットはカマドの周辺から４つ検出された。いずれも浅く、柱穴かどうかは不明である。

カマドは北東壁中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内側には被熱した箇



第34図　B区20号住居跡

所が確認された。焚口部の幅は50cm、燃焼部の幅は45cmを測る。煙道部は確認面の関係からかほとんどみられず、壁外へは6cmほど張り出す。煙道部先端の幅は14cmを測る。焚口部から煙道部までは、床面と同一レベルでほぼ平坦である。焚口部は被熱により地山が赤色化している。燃焼部からは、支脚として使用された川原石が検出された。覆土は天井部崩落土（3層）の下から、焼土ブロック（4層）、灰層（6層）、火床面（5層）が確認された。

カマドの南東脇には径69×64cmの方形を呈し、床面からの深さ44cmの貯蔵穴がみられた。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

21号住居跡
（第35図）

W—14グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。河川跡に北西隅を切られている。また、直接的な重複関係にないが、14・16・17号溝が住居跡全面に北東方向から南西方向に走っている。

長軸4.64m、短軸4.32mの方形を呈する。主軸方向はN—92°—Wを指す。確認面からの深さは4cmと浅く、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、黄褐色系の粘土による単一層であった。ピットは北東隅に1つみられたが、床面から4cmと浅く、柱穴かどうかは不明である。

壁溝、カマドはみられないが、貯蔵穴と思われる掘り込みが、南東壁沿い中央からやや西寄りにみられた。径68×55cm、床面からの深さは54cmを測る。底面から、土師器杯(No.1)と甕（2）が検出された。

出土遺物（第35図）には、土師器杯（No.1）、甕（2）、砥石（3）がある。1は口縁部が内湾し、丸底を呈する。器壁が厚い。内外面に煤の付着がみられた。2は長胴甕である。内外面に黒斑を有する。3は川原石によるもので、一面のみ使用している。南東隅寄りから検出された。

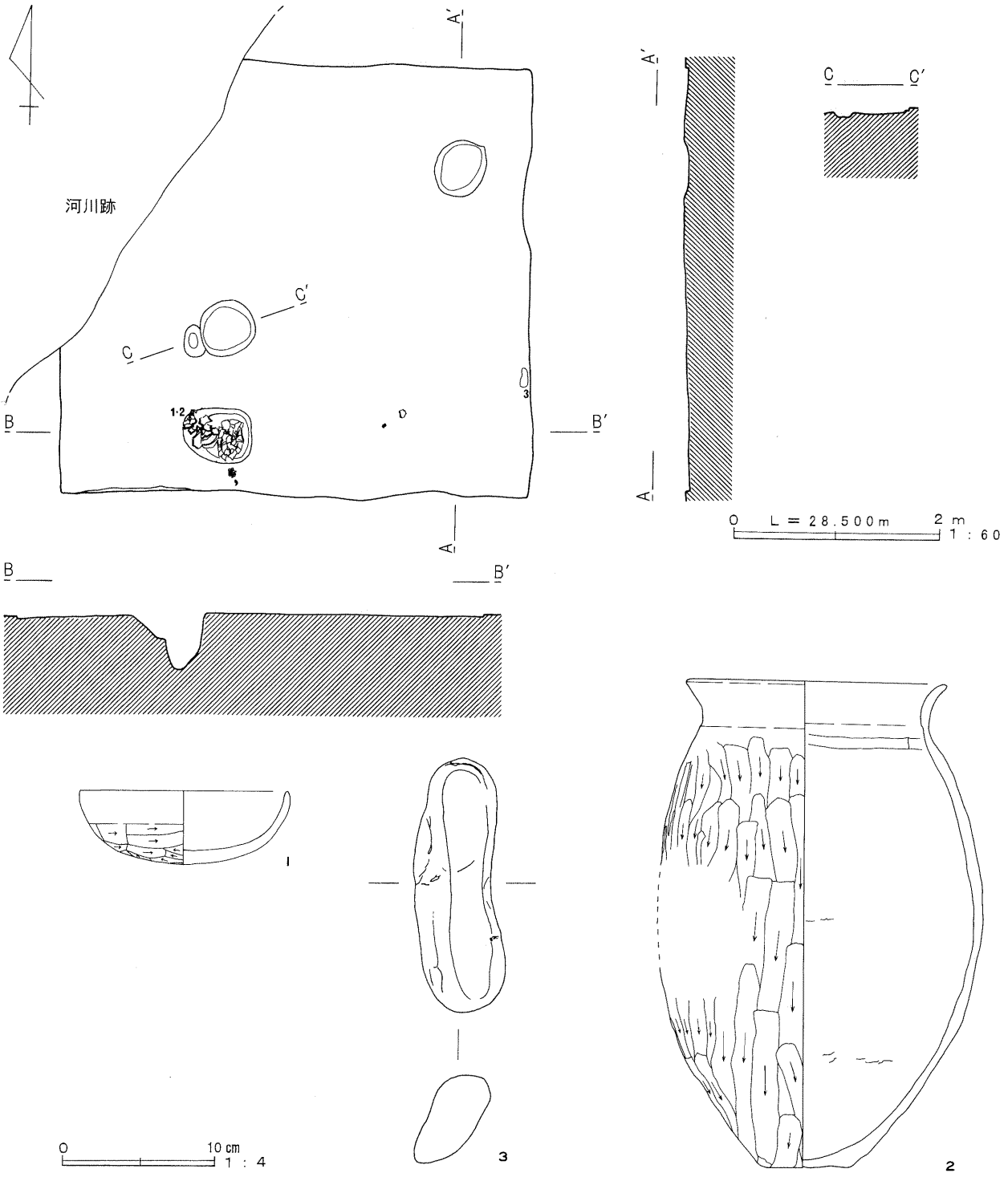
23号住居跡
（第36図）

W・X—15グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。河川埋没後に構築されている。また、直接的な重複関係にないが、河川跡との重複関係から北西に位置する22号住居跡は本住居跡よりも古い。

長軸5.26m、短軸3.53mのいびつな長方形を呈する。主軸方向はN—33°—Eを指す。確認面からの深さは9cmと浅く、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、黄褐色系の粘土による自然堆積層であった。ピットは南西隅に1つみられた。柱穴かどうかは不明である。

壁溝、カマド、貯蔵穴はみられなかったが、住居跡中央から径1.36×1.05m、床面からの深さ12cmの土坑が検出された。床下土坑と考えられる。

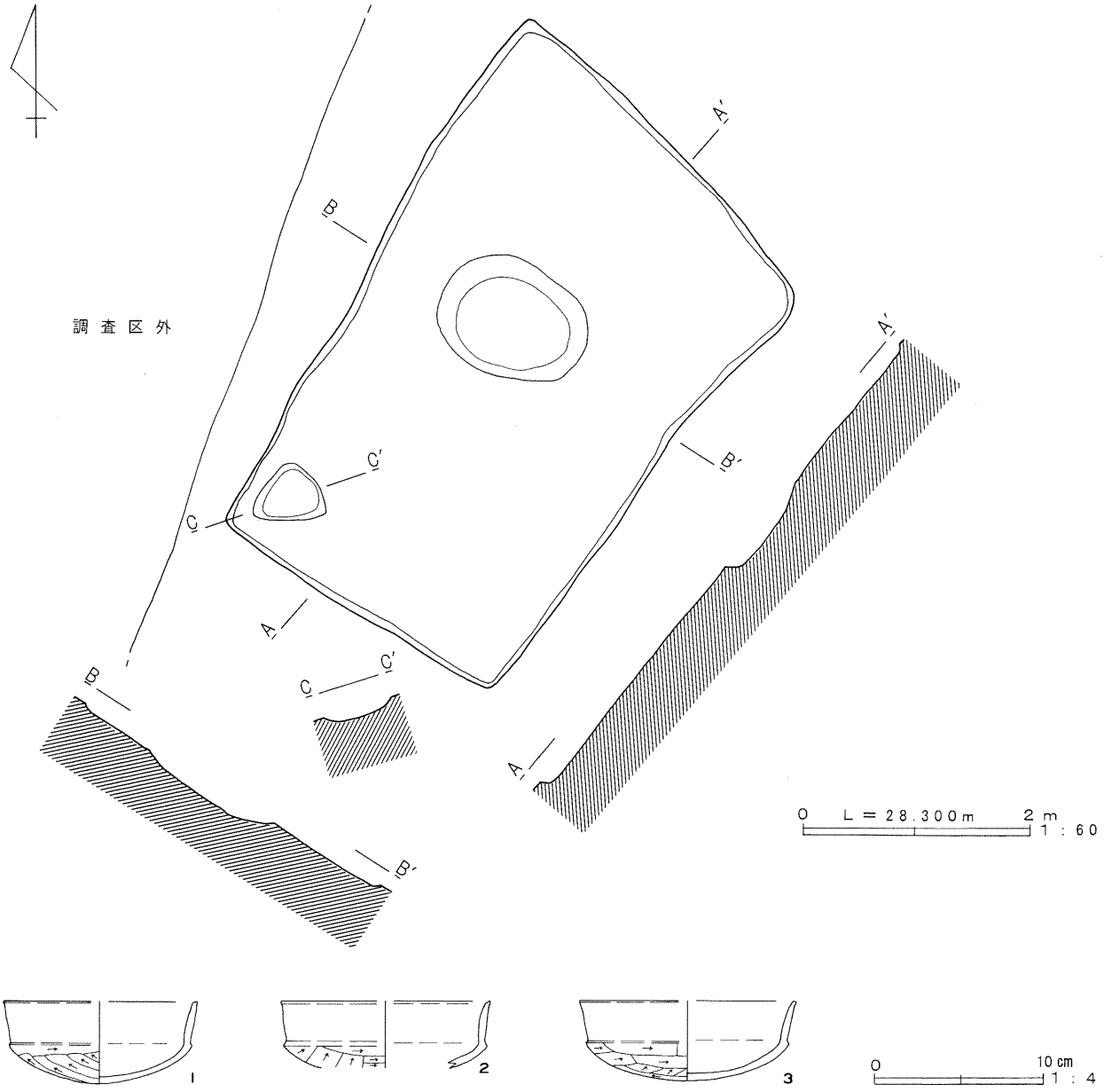
出土遺物（第36図）は、土師器杯（No.1～3）のみである。すべて覆土中からの検出であり、身の深い模倣杯である。3の内外面には煤の付着がみられた。



第35図　B区21号住居跡・出土遺物

第19表　B区　21号住居跡出土遺物観察表　（第35図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	13.8	4.8	-	④①③⑥	②	橙	口縁部1/3欠	内外面煤付着。
2	土師器甕	17.1	32.2	5.4	③①④⑥	②	浅黄橙	3/4	内外面黒斑有。
3	砥石	長さ　16.8　幅　6.1　厚さ　5.9						完形	一面使用。



第36図　B区23号住居跡・出土遺物

第20表　B区23号住居跡出土遺物観察表　（第36図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(11.6)	4.9	-	④③①	②	橙	1/4	
2	土師器杯	(12.6)	-	-	③④①	②	明赤褐	上位1/2	
3	土師器杯	(13.0)	4.7	-	①④③	②	明赤褐	1/2	内外面煤付着。

24号住居跡（第37図）　W・X—14・15グリッドに位置する。第一確認面からの検出である。南東部を1号不明遺構、北西部を河川跡に切られている。また上部には、17号溝がみられた。

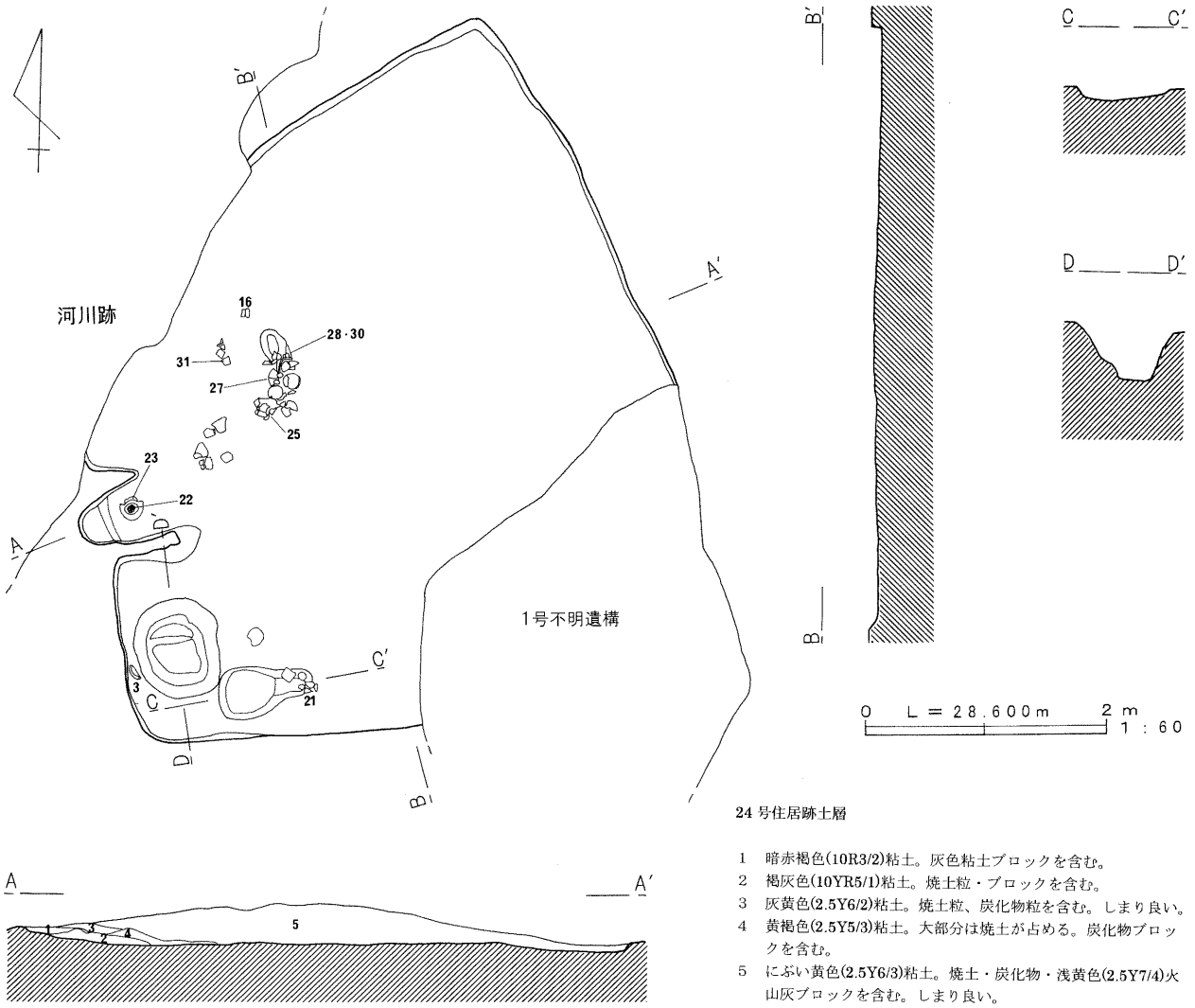
長軸5.3m、短軸4.91mのいびつな長方形を呈する。主軸方向はS—65°—Wを指す。確認面からの深さは13cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土はにぶい黄色粘土（5層）の単一層であった。自然堆積と考えられる。ピットは南西隅の貯蔵穴に隣接してみられた。径80×44cmで瓢箪状を呈し、床面からの深さ9cmを測る。柱穴か

どうかは不明である。壁溝はみられない。

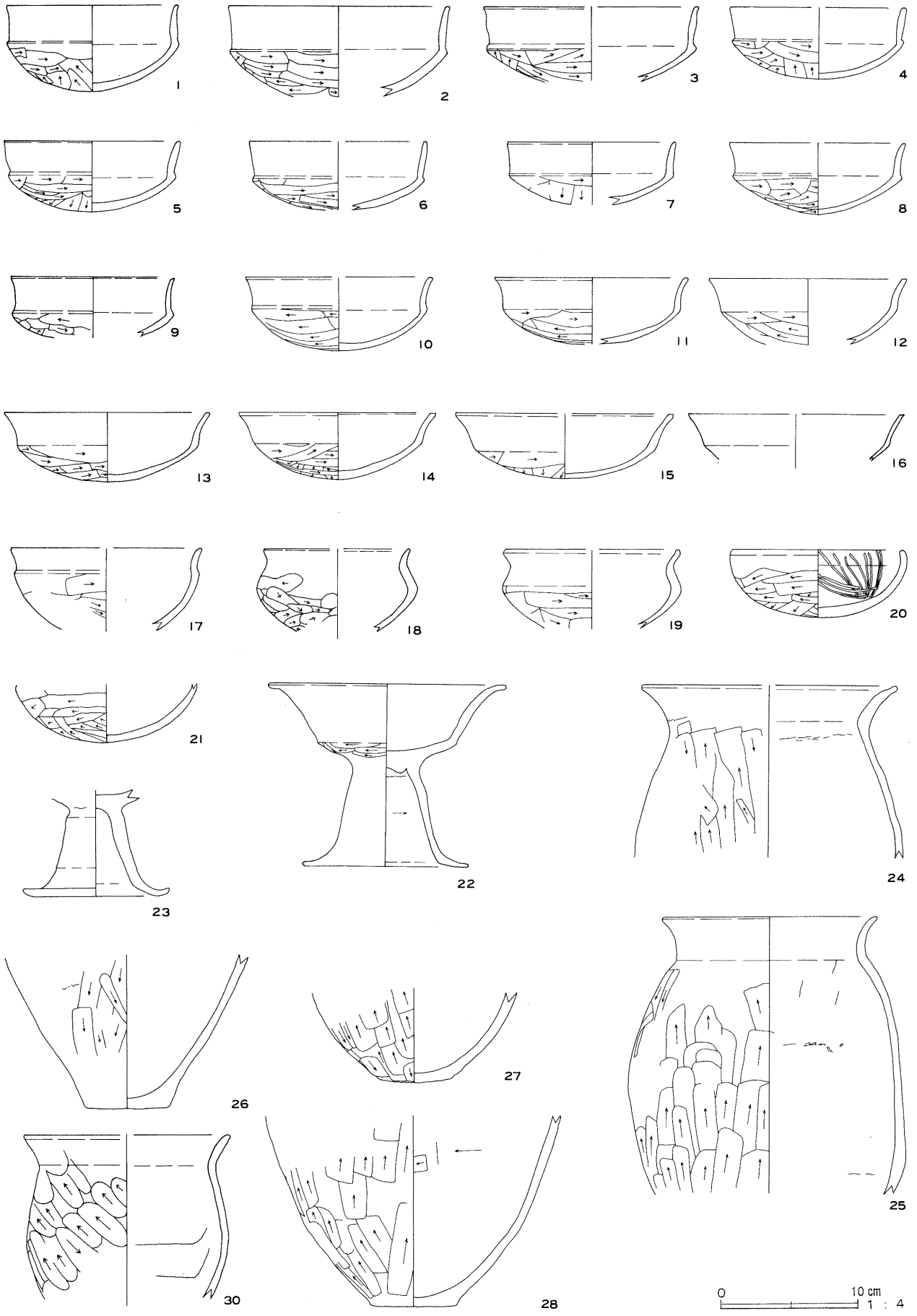
カマドは南西壁中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内側には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は55cm、燃焼部は50cmを測る。遺構検出面が深かったため煙道部の削平が著しく、壁外へ23cmほど確認されたのみである。焚口部から煙道部にかけては、床面同様にほぼ平坦であった。燃焼部からは、支脚として使用された土師器高杯(No.22・23)が伏せた状態で重なって検出された。覆土に天井部崩落土等はみられず、住居跡覆土下から焼土・炭化物を含む層(1～4層)が確認された。

カマドの南脇には貯蔵穴が検出された。径84×70cmで隅丸方形を呈し、床面からの深さ44cmを測る。

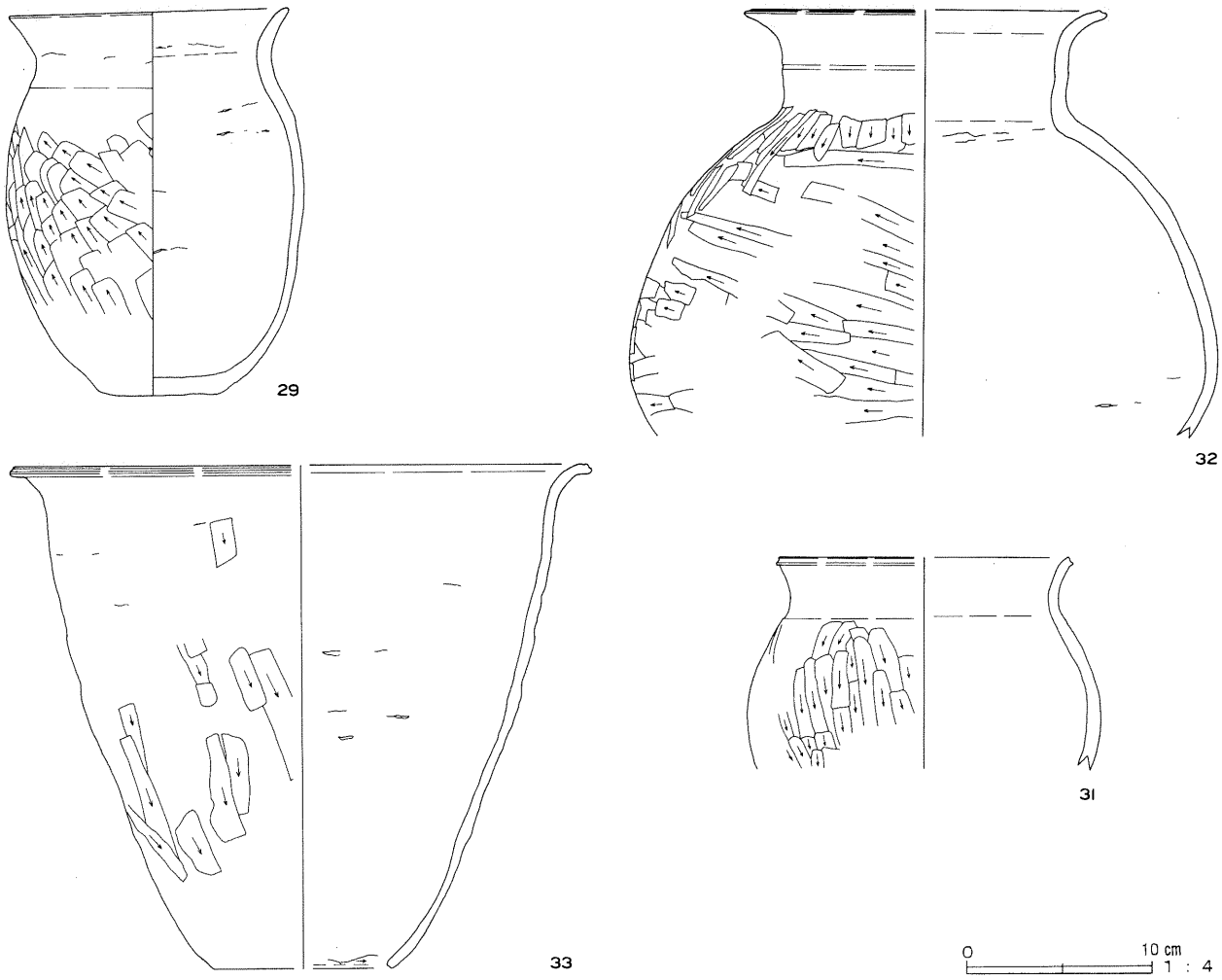
出土遺物(第38・39図)には、土師器杯(No.1～16・20・21)、盤(17～19)、高杯(22・23)、甕(24～31)、壺(32)、甑(33)等があり、杯が多数検出された。杯は模倣杯(1～16)と口縁部が内湾するもの(20・21)の二者に大別されるが、前者が圧倒的に多い。煤の付着や黒斑を有するものがみられる。模倣杯のうち、1～10は口縁部がほぼ直立し、11～16は口縁部がやや外反する。20の内面には不規則な暗文が施文されている。17～19はその形態



第37図　B区24号住居跡



第38図　B区24号住居跡出土遺物(1)



第39図　B区24号住居跡出土遺物(2)

から盤とした。高杯はともに脚部が高く、裾が大きく広がる。22はほぼ完形品であり、口縁部が大きく外反している。黒斑を有する。甕はすべて長胴甕である。杯同様、煤の付着や黒斑を有するものがある。29はやや胴がつまっており、小型の部類に入るものである。32は胴部が膨らむことから壺とした。下部を欠く。33は把手を持たないタイプである。外面に黒斑を有する。

第21表　B区24号住居跡出土遺物観察表　(第38・39図)

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	12.6	6.2	-	③①④⑥	②	にぶい赤褐	一部欠	内外面煤付着。
2	土師器杯	(16.2)	-	-	④①③	②	明赤褐	1/3	
3	土師器杯	(15.8)	-	-	③①④	②	橙	1/4	
4	土師器杯	(12.8)	5.2	-	①④③	②	橙	1/2	外面煤付着。
5	土師器杯	13.0	5.1	-	④①③	②	橙	1/2	
6	土師器杯	(13.0)	-	-	⑥①③	②	赤褐	口縁部1/2欠	内外面煤付着。
7	土師器杯	12.4	-	-	①④③	②	橙	2/3	外面に黒斑あり。
8	土師器杯	(12.8)	5.2	-	④①③	②	橙	1/3	
9	土師器杯	(12.0)	-	-	③②①④	②	橙	1/5	
10	土師器杯	(13.8)	5.3	-	④③①⑥	②	橙	1/4	外面に黒斑あり。
11	土師器杯	14.2	-	-	④③①⑥	②	橙	下位1/4欠	
12	土師器杯	14.5	-	-	①③④	②	橙	上位1/2	
13	土師器杯	15.2	5.0	-	④①③	②	橙	一部欠	外面に黒斑あり。

14	土師器杯	14.5	4.8	-	③①④	②	橙	完形	
15	土師器杯	(16.0)	4.7	-	④③①	②	橙	1/3	
16	土師器杯	(15.6)	-	-	③②①	②	橙	口縁部1/2	磨滅。
17	土師器盌	(14.0)	-	-	③④①	②	明赤褐	上位1/3	内外面煤付着。
18	土師器盌	(10.1)	-	-	①④②⑥	②	橙	1/3	
19	土師器盌	(12.5)	-	-	③④①	②	橙	上位1/3	
20	土師器杯	13.0	5.0	-	④①③	②	橙	1/2	暗文。外面に黒斑あり。
21	土師器杯	(13.2)	4.3	-	③④①	②	橙	1/3	内外面煤付着。
22	土師器高杯	17.4	-	-	③①④	②	橙	3/5	口縁部に黒斑有。
23	土師器高杯	-	-	10.8	①③④	②	明赤褐	脚部のみ	
24	土師器甕	18.8	-	-	③①④	②	明黄褐	上位1/4	黒斑有。
25	土師器甕	15.7	-	-	③④①⑥	②	橙	1/2	黒斑有。
26	土師器甕	-	-	6.3	③①④⑥	②	明赤褐	下位のみ	外面煤付着。
27	土師器甕	-	-	5.3	③①④	②	赤褐	下位のみ	
28	土師器甕	-	-	6.4	③①⑥④	②	にぶい橙	下位1/3	
29	土師器甕	15.3	21.0	7.2	③⑥①④	②	明赤褐	4/5	二次加熱。
30	土師器甕	(15.1)	-	-	②①④⑥	②	橙	1/5	
31	土師器甕	16.0	-	-	③①④⑥	②	明赤褐	上位1/5	
32	土師器壺	(19.7)	-	-	③①	②	橙	上位2/3	
33	土師器甑	(31.8)	27.5	(9.8)	③①④	②	灰白	1/3	外面黒斑有。磨滅。

25号住居跡（第40図）　Ｘ・Ｙ―15グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。北西部で河川跡に切られ、覆土上層を17号溝に切られている。

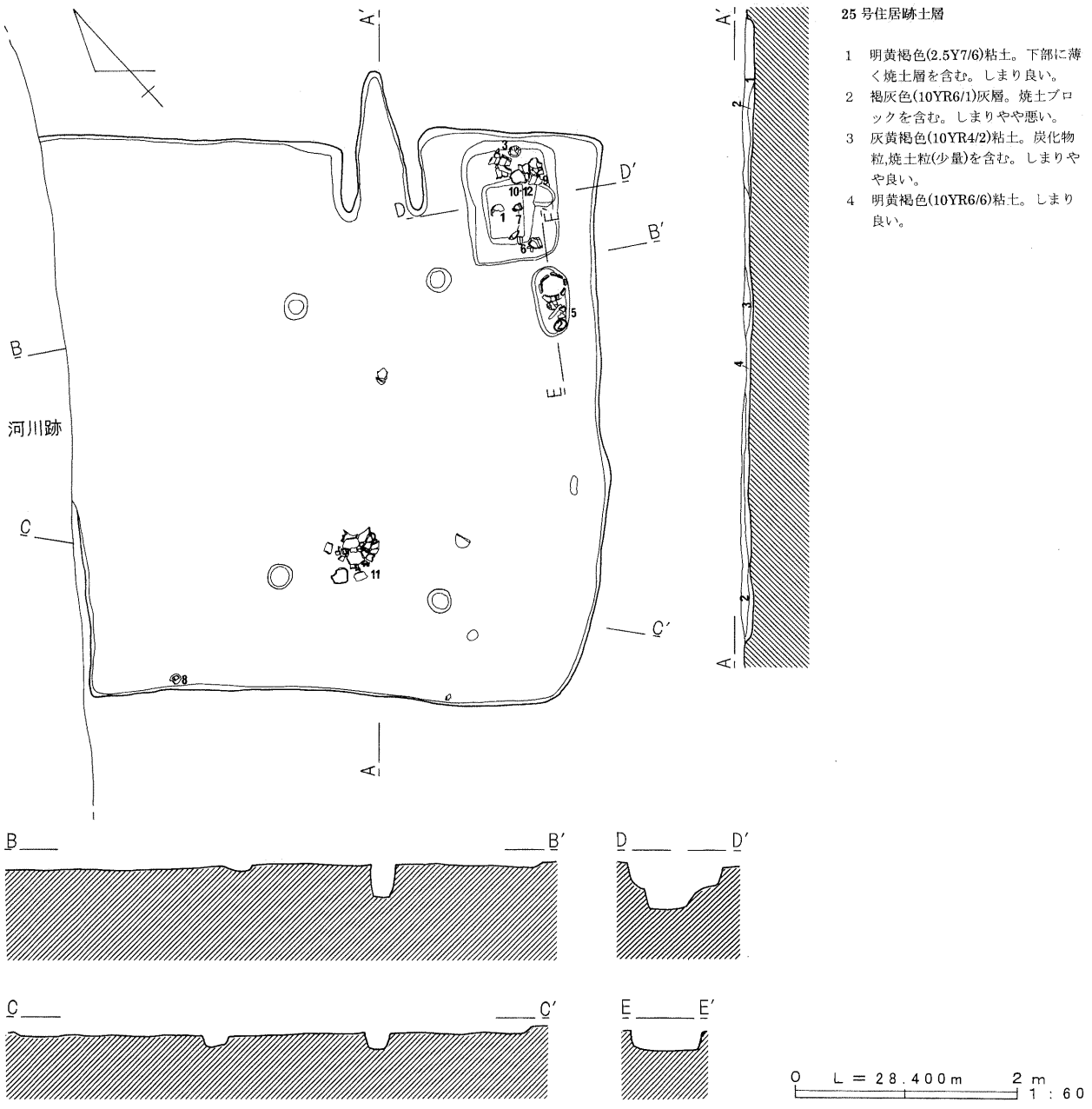
長軸は不明、短軸は5.32ｍを測り、平面形は長方形を呈すると考えられる。主軸方向はＮ―43°―Ｅを指す。確認面からの深さは９cmと浅い。床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系の粘土二層（３・４層）からなる自然堆積層であった。ピットは４つ検出された。いずれも径が小さいが、柱穴と考えられる。壁溝はみられない。

カマドは北東壁中央から南東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内側には、被熱した箇所が僅かに確認された。焚口部の幅は55cm、燃焼部の幅は43cm、煙道部先端は15cmを測る。焚口部から煙道部にかけては、床面と同レベルでほぼ平坦である。壁外へは60cmほど張り出している。覆土に天井部崩落土等はみられず、焼土を含む層（１層）、灰層（２層）が確認されたのみである。

カマド南東脇には貯蔵穴が二つみられた。北東側の貯蔵穴は、径1.12×0.85ｍの方形を呈し、床面からの深さ39cmを測る。南西側の貯蔵穴は、径64cm×33cmの長方形を呈し、床面からの床面からの深さ17cmを測り、長円形を呈する。ともに土師器が多数検出された。

出土遺物（第41図）には、土師器杯（№１～５）、高杯（６～８）、甕（９・10）、壺（11）、坩（12）等がある。ほとんどが貯蔵穴からの検出である。杯は身の深い模倣杯（１～３）と平底で口縁部が内湾するもの（４・５）がみられた。１・５には煤の付着がみられた。高杯はいずれも模倣杯に低い脚部の付くタイプである。甕はともに長胴甕であり、外面に黒斑を有する。11は胴部が膨らむことから壺とした。外面に黒斑を有する。12は底部を穿孔している。

26号住居跡（第42図）　Ｘ―15・16グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。北東部から南西部にかけて河川跡に切られている。河川跡を挟んで南東には25号住居跡がみられるが、新旧関係



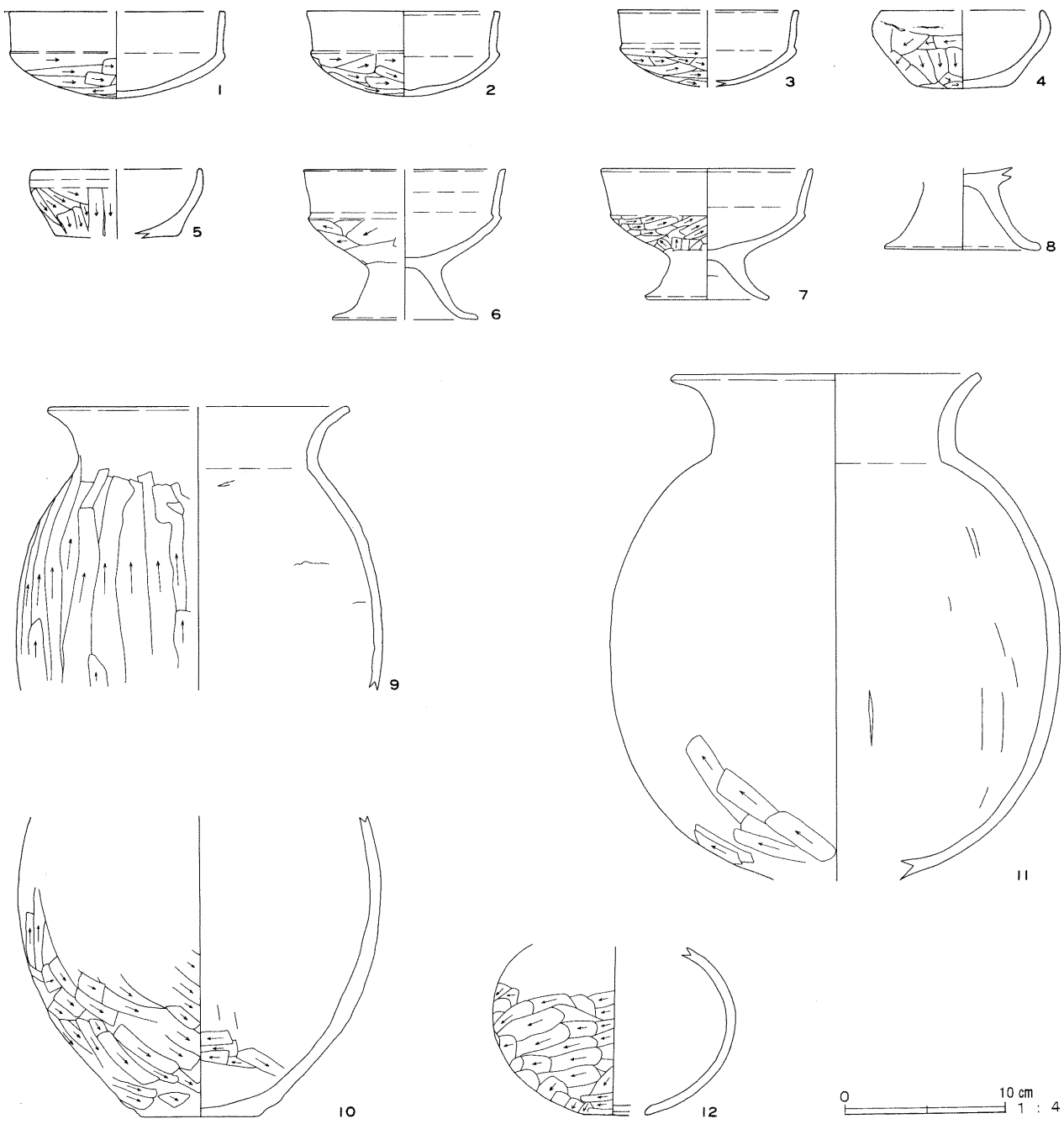
第40図　B区25号住居跡

は不明である。

規模・平面形は不明であるが、北西壁は3.44mを測る。南北軸方向はN—60°—Eを指す。確認面からの深さは26cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は色調の異なる粘土三層（1～3層）からなる自然堆積層であった。2層には炭化物を帯状に含んでいた。

壁溝、ピット、カマド、貯蔵穴等はみられない。

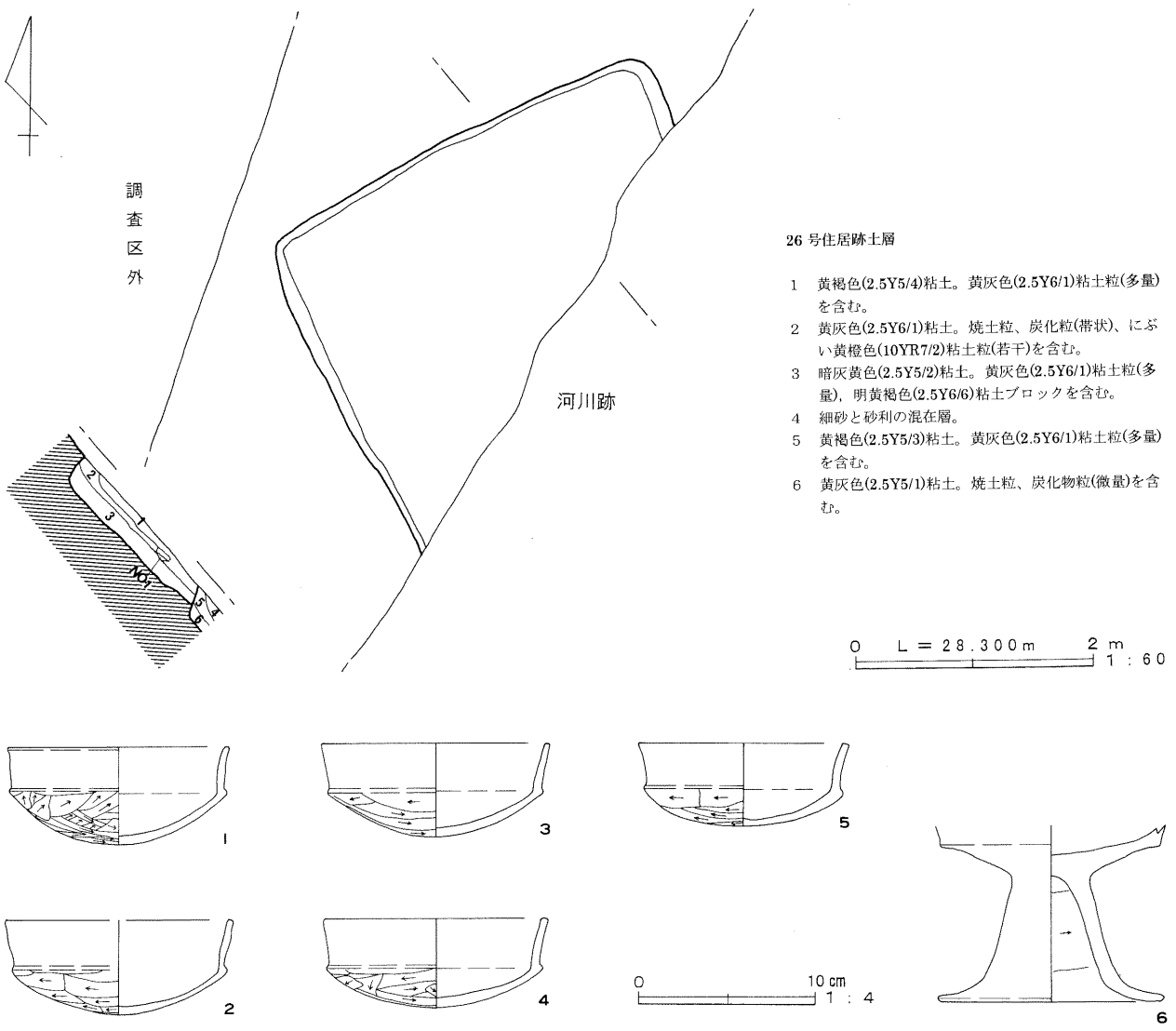
出土遺物（第42図）には、土師器杯（№1～5）、高杯（6）等がある。杯はすべて身の深い模倣杯である。2の外面には黒斑を有し、3・4の内外面には煤の付着がみられた。6は口縁部を欠くが、脚部が高く、裾が大きく広がる。内外面に黒斑を有する。



第41図　B区25号住居跡出土遺物

第22表　B区25号住居跡出土遺物観察表　（第41図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	(13.6)	5.4	-	③①④	②	橙	上位1/2欠	内外面煤付着。
2	土師器杯	12.2	5.3	-	③④①	②	明赤褐	完形	
3	土師器杯	(11.3)	-	-	④③①⑥	②	橙	口縁部1/2欠	
4	土師器杯	(10.2)	4.9	(5.0)	⑥④①③	②	にぶい黄橙	1/5	
5	土師器杯	(10.4)	4.3	(7.5)	⑥④③	②	橙	1/4	内外面煤付着。
6	土師器高杯	(12.7)	9.5	(9.2)	③①④	②	橙	3/5	
7	土師器高杯	(13.4)	8.3	7.8	③①④	②	橙	3/5	
8	土師器高杯	-	-	9.8	③①④	②	橙	脚部4/5	裾部煤付着。
9	土師器甕	(19.0)	-	-	③①⑥	②	橙	胴上位1/2	外面黒斑有。
10	土師器甕	-	-	7.0	③①⑥	②	橙	胴下位のみ	外面黒斑有。
11	土師器壺	19.5	-	-	③①④⑥	②	橙	1/2	外面黒斑有。外面磨滅。
12	土師器坩	-	-	-	③①④	②	橙	胴部のみ	底部穿孔。



第42図　B区26号住居跡・出土遺物

第23表　B区26号住居跡出土遺物観察表　(第42図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	12.6	5.5	-	③④①②	②	橙	完形	
2	土師器杯	(13.0)	5.4	-	③④①②	②	橙	2/3	外面黒斑有。
3	土師器杯	13.0	5.3	-	③①④⑥	②	橙	上位1/4欠	内外面煤付着。
4	土師器杯	12.8	5.0	-	③④①②⑥	②	橙	一部欠	内外面煤付着。
5	土師器杯	12.0	4.7	-	③①④②	②	橙	完形	
6	土師器高杯	-	-	12.8	③①④	②	黄橙	器台のみ	内外面黒斑有。

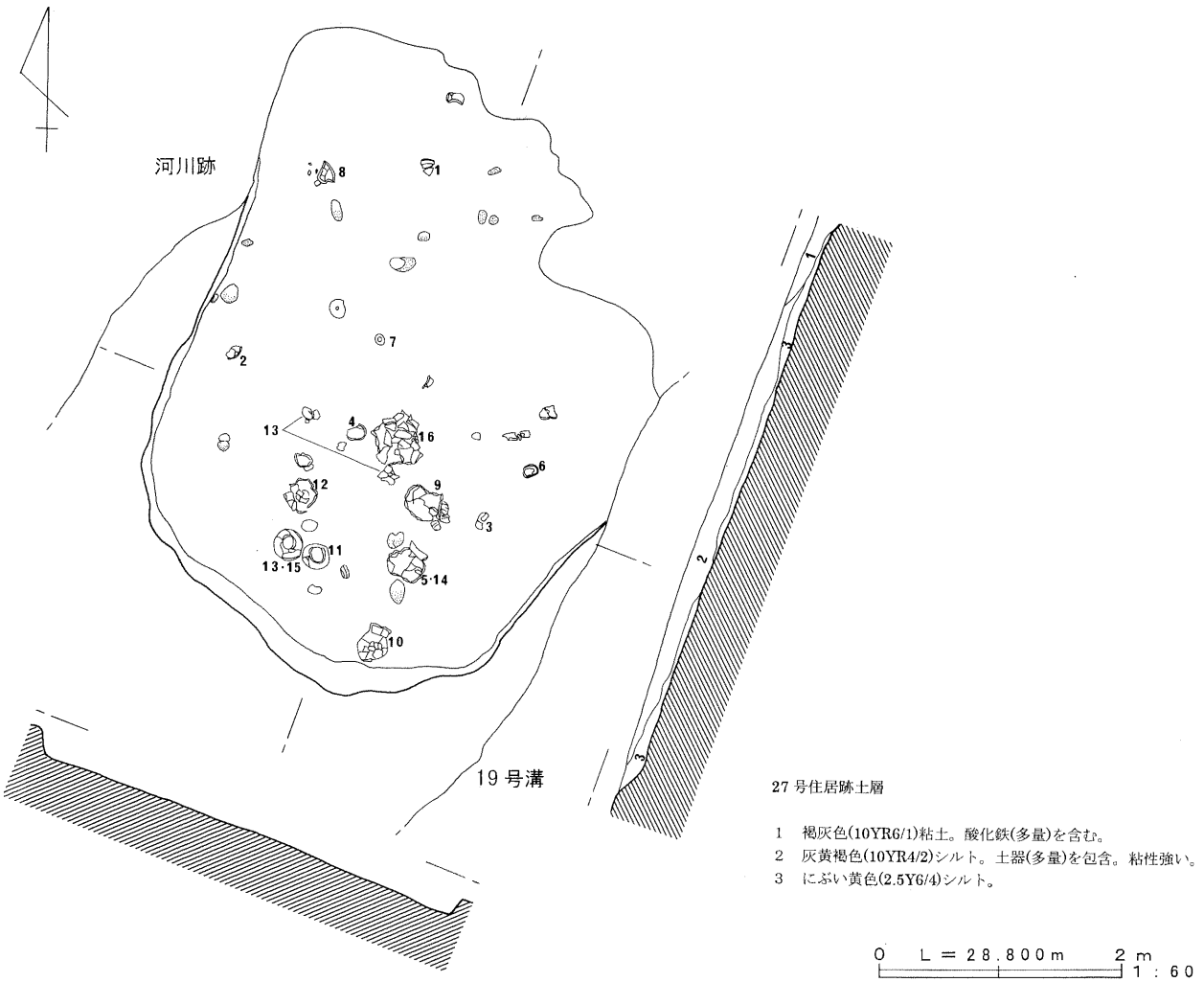
27号住居跡　(第43図)

Y・Z—13グリッドに位置する。第一確認面からの検出である。北東壁及び南東壁を河川跡に切られている。また、直接的な重複関係にないが、本住居跡下部から畠跡が確認された。

規模・平面形は不明であるが、南西壁は3.28mを測る。南北軸方向はN—21°—Eを指す。確認面からの深さは20cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄色系のシルト層（2・3層）からなる自然堆積層であった。

壁溝、ピット、カマド、貯蔵穴は検出されなかった。

出土遺物（第44・45図）には、土師器杯（No.1～7）、高杯（8）、甕（9～15）、甑（16）、

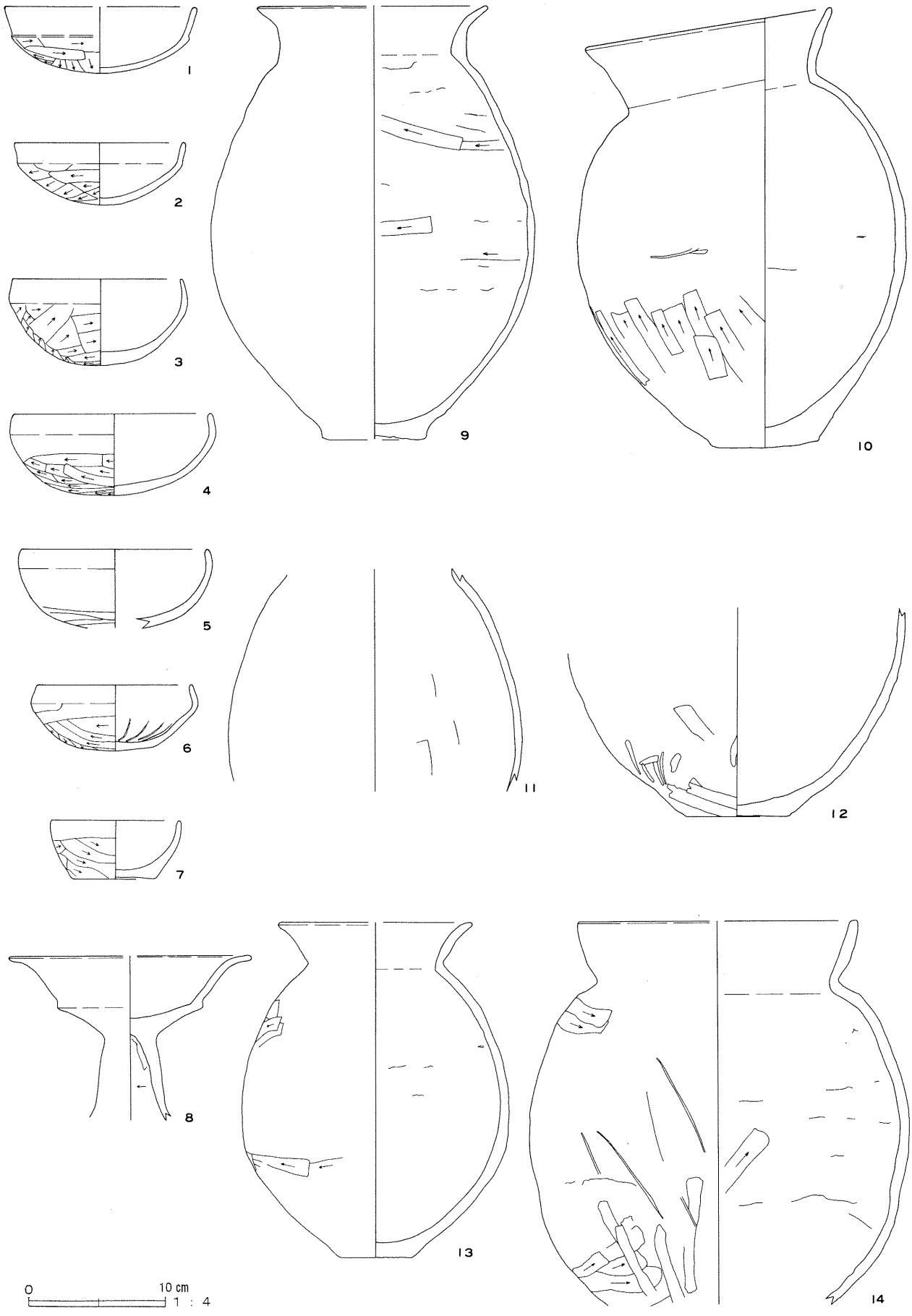


第43図　B区27号住居跡

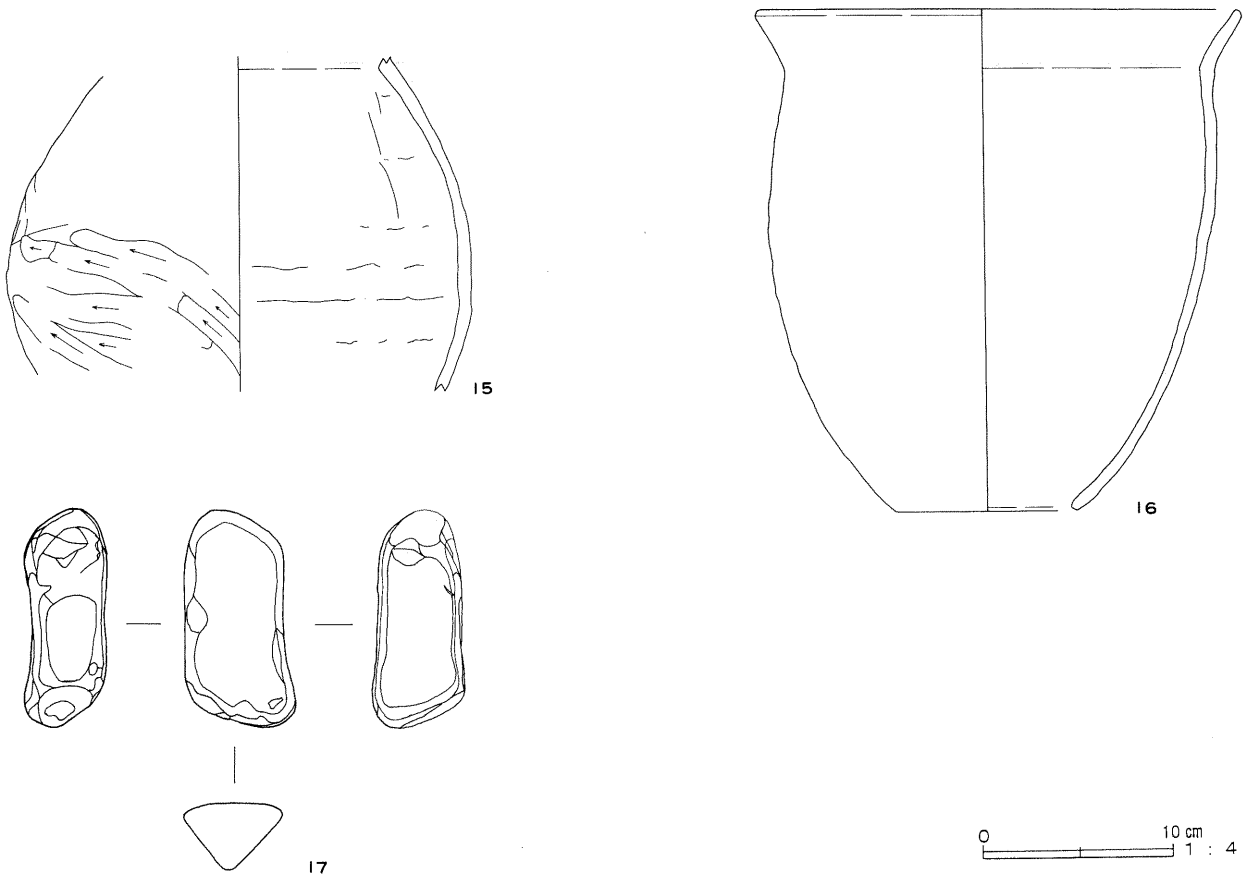
砥石（17）等がある。床面ほぼ全面から検出された。杯は模倣杯（1・2）、口縁部が内湾するタイプ（3～6）、平底で口縁部が内湾気味に立ち上がるタイプ（8）がある。2・4・5には煤の付着がみられ、6の内面には放射状の暗文が施文されている。7の外面には黒斑がみられた。8は口縁部が大きく外反し、脚部の高いタイプである。甕はいずれも長胴甕である。そのほとんどは摩滅が顕著であり、黒斑を有する。13は二次的に被熱していた。16は把手を持たない。甕同様、摩滅が顕著であった。17は川原石によるもので、側面全面を使用している。

28号住居跡（第46図）　Y・Z—14・15グリッドに位置する。第一確認面からの検出である。北東部を22号土坑に切られている。また、直接的な重複関係にないが、本住居跡下部から畠跡が確認された。

長軸5.55m、短軸4.7mの長方形を呈する。主軸方向はN—40°—Eを指す。確認面からの深さは16cmを測る。床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は浅黄色シルト及び砂二層（1・2層）からなる自然堆積層であった。



第44図　B区27号住居跡出土遺物(1)



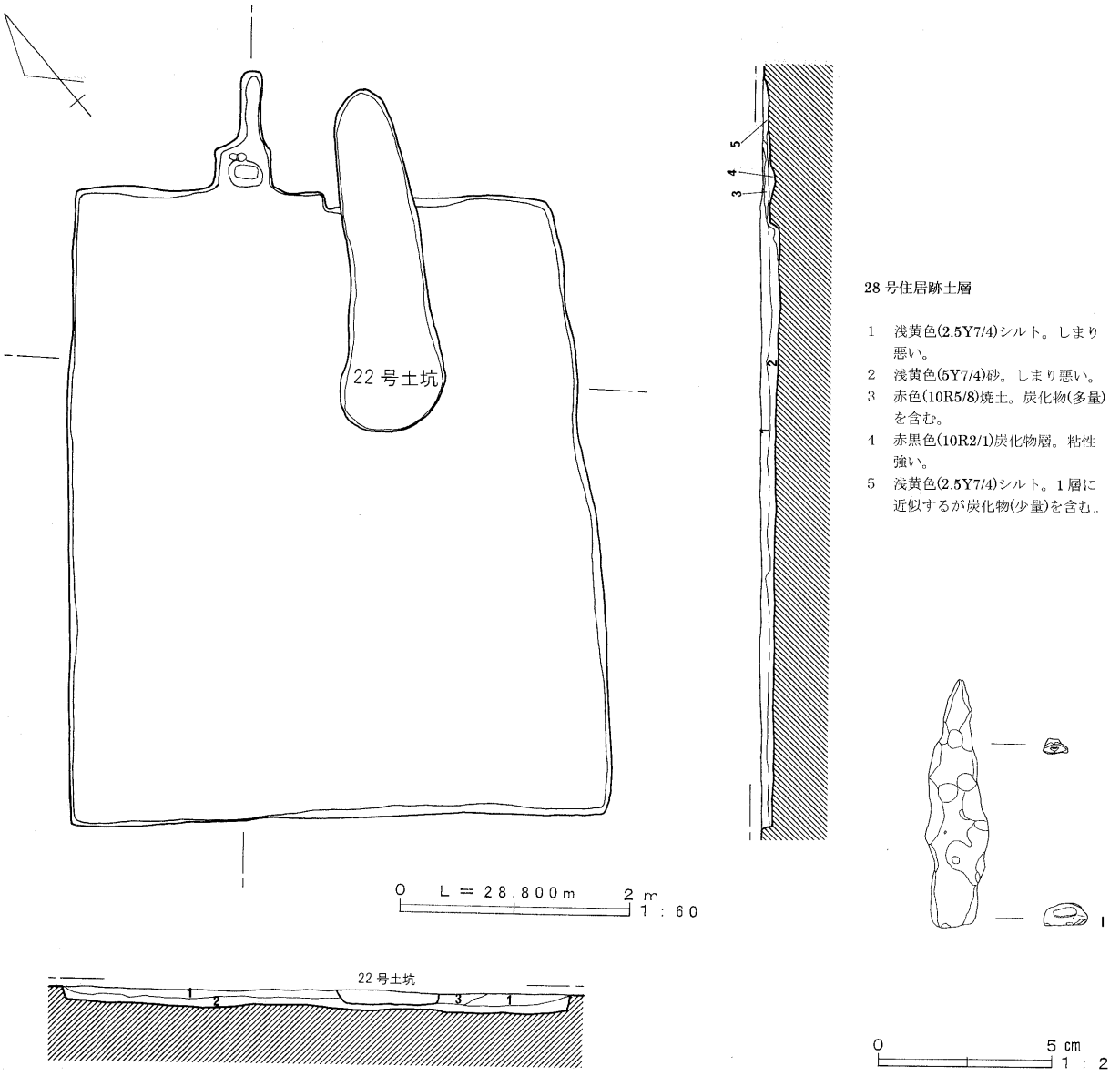
第45図　B区27号住居跡出土遺物(2)

第24表　B区27号住居跡出土遺物観察表　(第44・45図)

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	(14.0)	4.8	-	③①④	②	橙	1/4	
2	土師器杯	12.5	4.5	-	④③①	②	橙	2/3	外面煤付着。
3	土師器杯	12.5	6.3	-	③①④⑥	②	橙	一部欠	
4	土師器杯	14.6	5.9	-	③④①	②	赤橙	2/3	内外面煤付着。
5	土師器杯	13.8	-	-	④①③	②	明赤褐	1/2	内外面煤付着。
6	土師器杯	11.5	4.8	-	③①④⑥	②	橙	完形	暗文。
7	土師器杯	9.5	4.2	6.0	④①②⑥③	②	にぶい黄橙	完形	外面黒斑有。
8	土師器高杯	(17.8)	-	-	③①④⑤	②	橙	1/2	
9	土師器甕	(16.8)	32.0	(7.5)	③⑥①	②	にぶい黄橙	1/3	内外面黒斑有。外面磨滅。
10	土師器甕	18.2	32.4	7.8	③①⑥④	②	浅黄橙	一部欠	外面黒斑有。
11	土師器甕	-	-	-	③①⑥④	②	橙	胴上位のみ	外面黒斑有。外面磨滅。
12	土師器甕	-	-	7.4	⑥③	②	明赤褐	下位のみ	外面黒斑有。磨滅。
13	土師器甕	(14.2)	24.7	5.2	③①④	②	にぶい黄橙	1/3	黒斑有。磨滅。
14	土師器甕	(20.4)	-	-	③①④	②	橙	2/5	外面黒斑有。内面胴下部剝離。
15	土師器甕	-	-	-	③①④⑥	②	橙	胴上位のみ	二次加熱。
16	土師器甑	25.6	26.8	9.7	③①⑥④	②	橙	一部欠	全面磨滅。
17	砥石	長さ　11.6　幅　5.2　厚さ　3.6						完形	側面使用。

壁溝、ピット、貯蔵穴等はみられない。

カマドは北東壁のやや北西寄りに設けられている。袖部はみられず、焚口部から燃焼部は住居壁の外にある。壁外へは1.03mほど張り出している。焚口部の幅は52cm、燃焼部の幅は47cm、煙道部先端の幅は17cmを測る。燃焼部は径30×23cm、床面からの深さ4cm程の窪みとなっている。燃焼部から煙道部までは、ほぼ平坦であった。覆土に天井部崩落土等はみられず、住居跡覆土の下から、焼土層(3層)、炭化物層(4層)、炭化物を含む層(5



第46図　B区28号住居跡・出土遺物

第25表　B区28号住居跡出土遺物観察表　（第46図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	刀子	長さ 5.6	最大幅 1.8	厚さ 0.7				茎のみ	

層）が確認された。

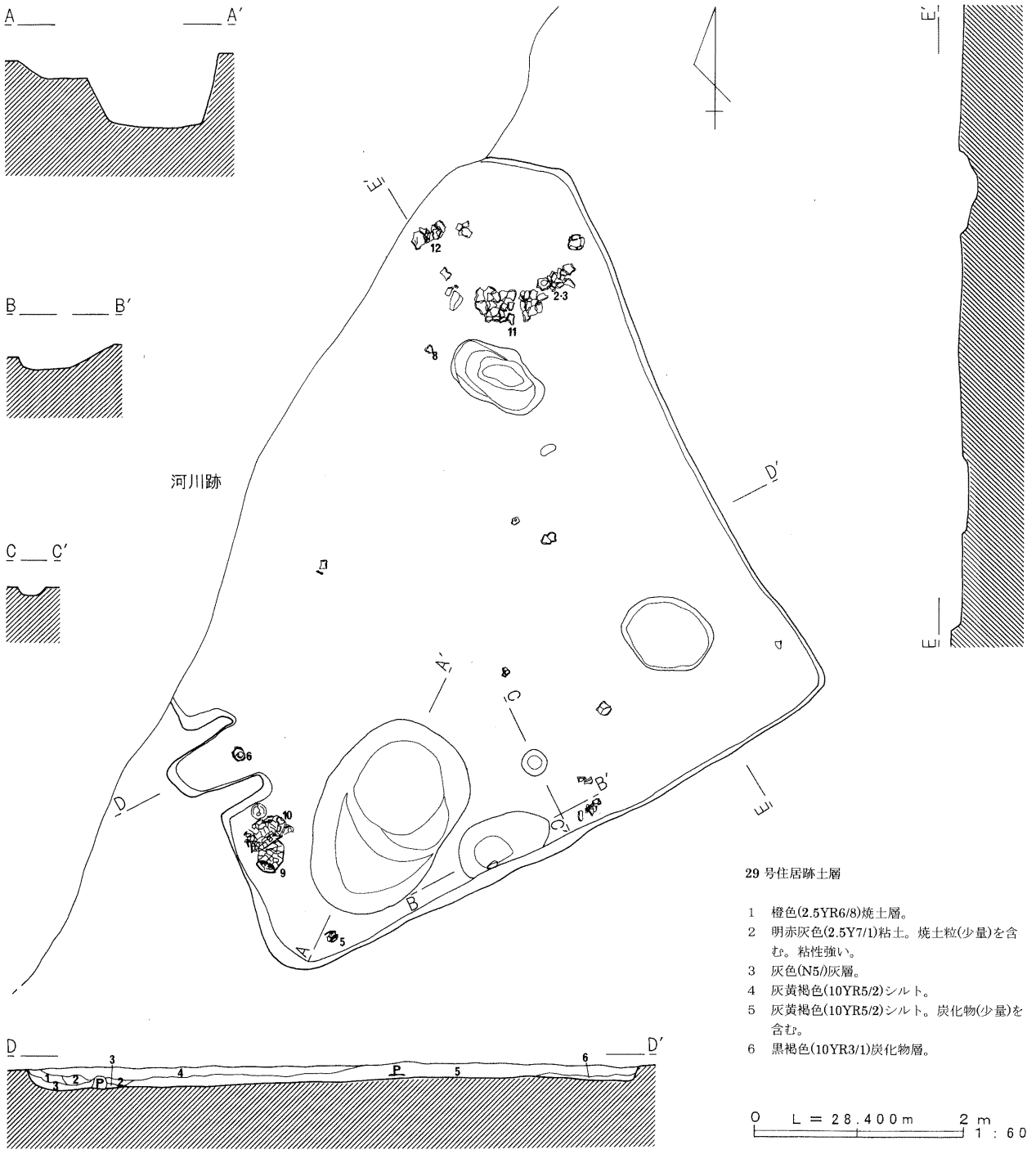
出土遺物（第46図）は、鉄製の刀子1点のみである。その他に土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

29号住居跡（第47図）　Y・Z－15・16グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。北西部を河川跡、南西隅を15号井戸跡に切られている。

長軸は不明、短軸5.87mの長方形を呈する。主軸方向はS－60°－Wを指す。確認面からの深さは18cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は灰黄褐色シルト（4・5層）を主体とする自然堆積層であった。また、北東壁沿いには炭化物層（6

層）がみられた。壁溝はみられない。ピットは２つ検出された。いずれも浅いが、柱穴と考えられる。

カマドは南西壁中央からやや南東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内側には被熱した箇所が僅かに確認された。焚口部の幅は55cm、燃焼部の幅は46cm、煙道部先端の幅は40cmを測る。焚口部から煙道部までは、床面と同レベルで平坦であった。壁外へは34cmほど張り出している。焚口部からは、支脚として使用された土師器高杯（No.６）が伏せた状態で検出された。覆土に天井部崩落土等はみられず、住居跡覆土下から焼土層

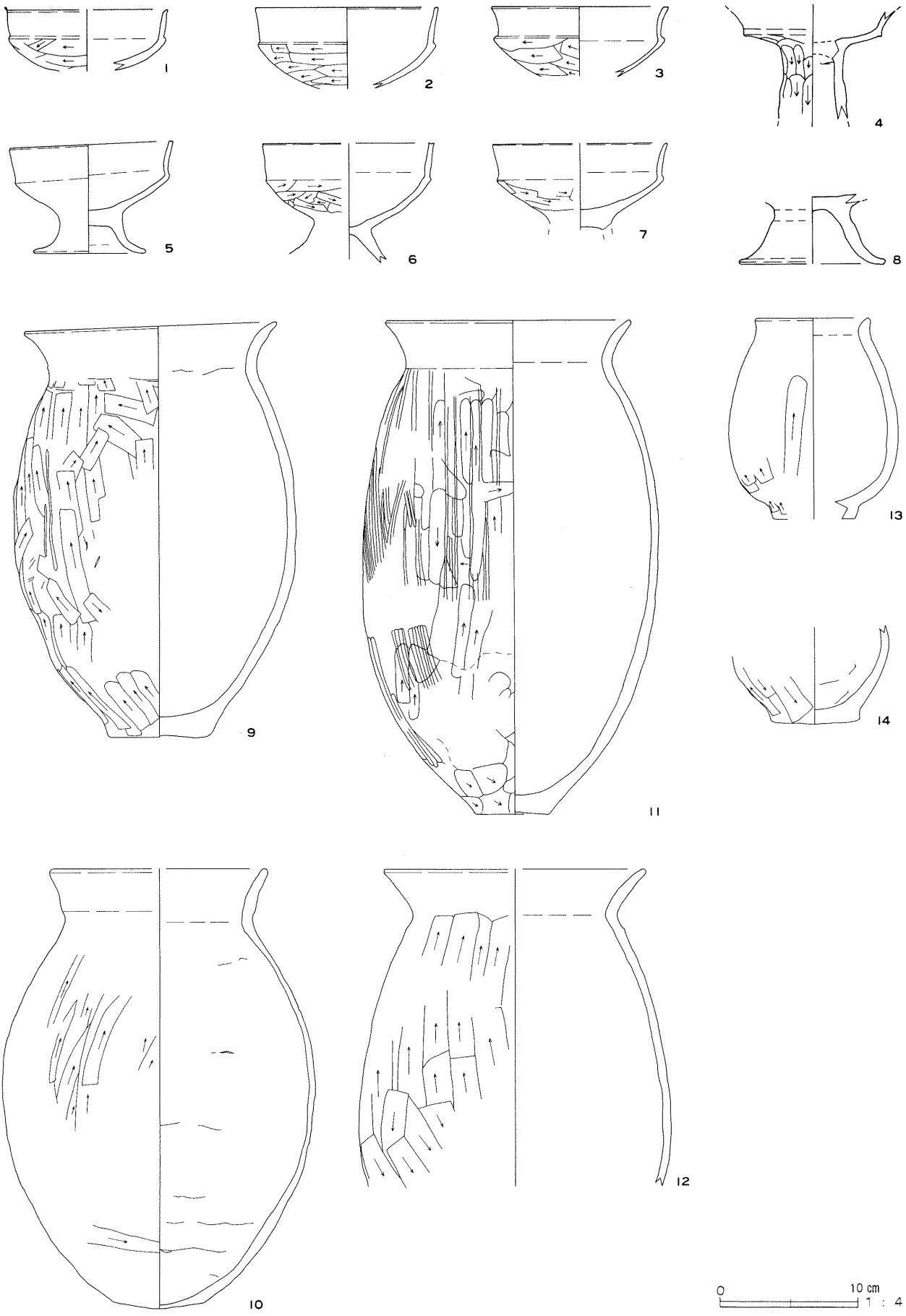


29 号住居跡土層

1　橙色(2.5YR6/8)焼土層。
2　明赤灰色(2.5Y7/1)粘土。焼土粒(少量)を含む。粘性強い。
3　灰色(N5/)灰層。
4　灰黄褐色(10YR5/2)シルト。
5　灰黄褐色(10YR5/2)シルト。炭化物(少量)を含む。
6　黒褐色(10YR3/1)炭化物層。

0　L＝28.400m　2m
1：60

第47図　B区29号住居跡



第48図　B区29号住居跡出土遺物

第26表　B区29号住居跡出土遺物観察表　(第48図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(11.8)	-	-	③①④②	②	橙	上位1/3	内外面煤付着。
2	土師器杯	13.4	-	-	③①④②⑥	②	橙	下位欠	外面に黒斑有。
3	土師器杯	13.0	-	-	③①④⑥	②	橙	下位欠	
4	土師器高杯	-	-	-	①④②③	②	明赤褐	1/3	
5	土師器高杯	12.0	8.3	8.2	③①④	③	橙	一部欠	全面的に磨滅。
6	土師器高杯	(12.6)	-	-	③①④	②	橙	3/5	
7	土師器高杯	(12.8)	-	-	③①	②	橙	器受部2/3	全面的に磨滅。
8	土師器高杯	-	-	(10.4)	②③①④⑥	②	橙	脚部のみ	
9	土師器甕	18.5	29.5	7.1	③④⑥	②	橙	一部欠	
10	土師器甕	(16.0)	32.3	6.8	③①⑥	②	赤褐	2/3	外面黒斑有、剝離。二次加熱。
11	土師器甕	18.0	36.2	5.2	⑥①④②③	②	明褐	4/5	
12	土師器甕	(19.2)	-	-	④③	②	明褐	1/5	
13	土師器甕	8.4	14.8	(6.0)	④③⑥	②	明赤褐	1/3	煤付着。磨滅。
14	土師器甕	-	-	6.5	③⑥	②	明赤褐	底部のみ	

(1層)、焼土を含む層(2層)、灰層(3層)が確認された。

カマド南東脇には貯蔵穴が二つみられた。一つはカマドの南東脇に位置し、径1.97×1.27mの楕円形を呈し、床面からの深さ69cmを測る。もう一つはさらに南東に位置し、南東壁に接している。径95×45cmの楕円形を呈し、床面からの深さは15cmを測る。

出土遺物(第48図)には土師器杯(No.1～3)、高杯(4～8)、甕(9～14)等がある。主にカマド南東脇と北東隅からまとまって検出された。杯はすべて身の深い模倣杯である。1は内外面に煤の付着、2は外面に黒斑を有する。高杯は模倣杯に低い脚部の付くタイプが主体となるが、4のみ口縁部が外反し、脚部が棒状を呈する。5は摩滅が顕著であった。甕は長胴甕(9～12)と小型のもの(13・14)がある。長胴甕は胴部が球形を呈する。10は外面に黒斑を有し、二次加熱を受けていた。13は外面に煤の付着がみられた。

30号住居跡(第49図)　Y—16グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。北東壁で31号住居跡を切っており、南東隅を河川跡に切られている。

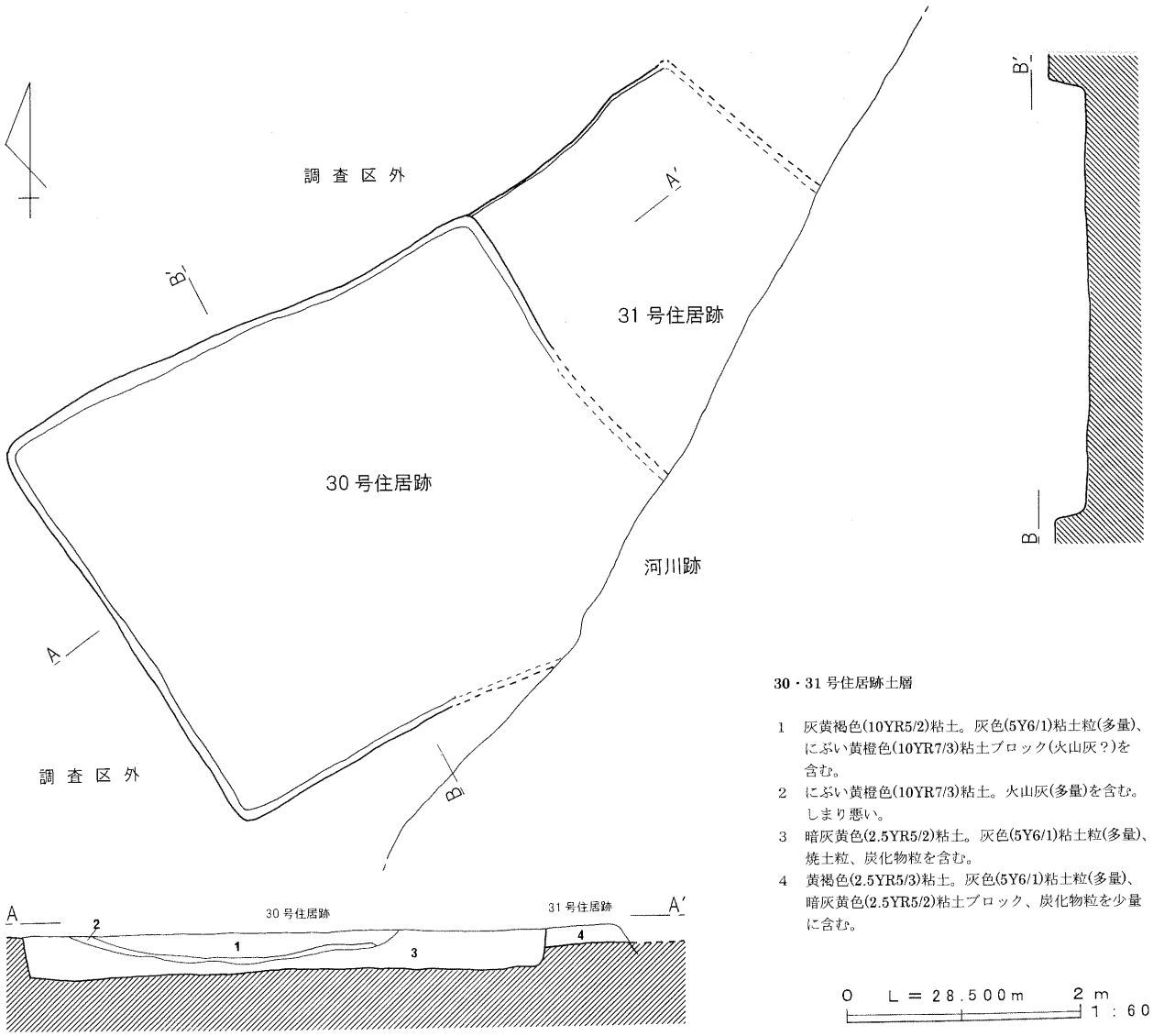
長軸4.59m、短軸3.93mの長方形を呈する。南北軸方向はN—59°—Eを指す。確認面からの深さは34cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄色系の粘土三層(1～3層)からなる。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。1・2層には火山灰らしき混入物がみられた。

壁溝、ピット、カマド、貯蔵穴はみられない。

出土遺物(第49図)には、土師器杯(No.1)、盌(2)、甕(3・5)、台付甕(4)等がある。すべて覆土中からの検出である。1は模倣杯である。2は外面に黒斑を有する。甕は丸胴甕(3)と小型のもの(5)がある。ともに口縁部のみの検出である。4は小型の甕に台部が付いており、器形的に珍しい。4は内外面、5は外面に黒斑を有する。

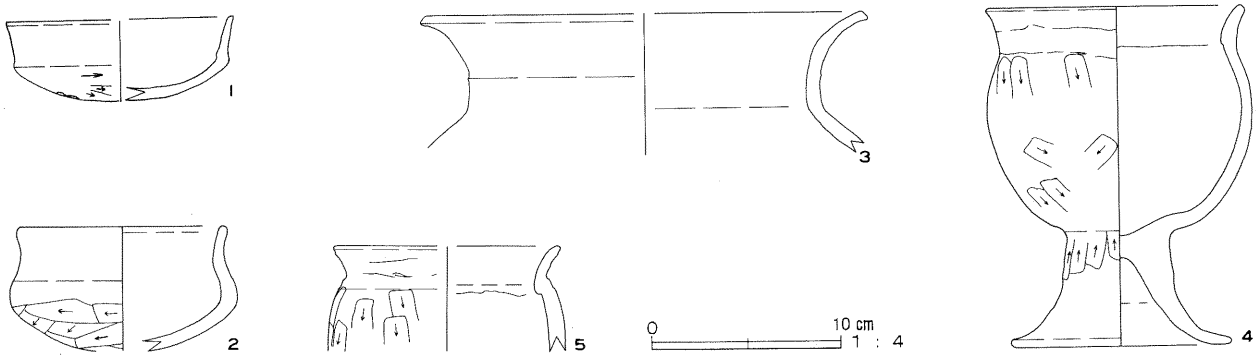
31号住居跡(第49図)　X・Y—16グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。南西部を30号住居跡、南東部を河川跡に切られている。

規模・平面形は不明である。南北軸方向はN—47°—Eを指し、30号住居跡とはほぼ同軸



30・31 号住居跡土層

1 灰黄褐色(10YR5/2)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、にぶい黄橙色(10YR7/3)粘土ブロック(火山灰?)を含む。
2 にぶい黄橙色(10YR7/3)粘土。火山灰(多量)を含む。しまり悪い。
3 暗灰黄色(2.5YR5/2)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒、炭化物粒を含む。
4 黄褐色(2.5YR5/3)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、暗灰黄色(2.5YR5/2)粘土ブロック、炭化物粒を少量に含む。



第49図　B区30・31号住居跡・30号住居跡出土遺物

第27表　B区30号住居跡出土遺物観察表　(第49図)

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残 存 率	備　考
1	土師器杯	(12.0)	-	-	②③①④	①	橙	1/3	
2	土師器盌	11.0	-	-	③①④②⑥	②	橙	1/2	外面に黒斑有。
3	土師器甕	(28.8)	7.5	-	③④①	②	明赤褐	口縁部1/6	
4	土師器台付甕	13.7	18.1	11.6	⑥④	②	橙	一部欠	内外面黒斑有。
5	土師器甕	(12.0)	-	-	③④⑥	②	にぶい褐	口縁部1/3	外面黒斑有。

方向を向く。確認面からの深さは16cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色粘土による単一層（4層）である。自然堆積と考えられる。

壁溝、ピット、カマド、貯蔵穴等はみられない。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

33号住居跡（第50図）　Z・AA—13グリッドに位置する。第一確認面からの検出である。住居跡中央を21号土坑、19号溝、北東部を18号溝、南西部を20号溝に切られ、南西隅で35号住居跡のカマドを僅かに切っている。また、直接的な重複関係にないが、下部からは畠跡が確認された。

長軸7.55m、短軸6.1mのいびつな長方形を呈する。主軸方向はN—3°—Eを指す。確認面からの深さは48cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄色ないし黄褐色のシルト層（2～5層）を主体とする。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。2層には火山灰らしき混入物がみられ、4層下部の床面直上には炭化物が帯状に堆積していた。ピットは西壁中央沿いに1つ検出された。柱穴かどうかは不明である。

壁溝、カマド、貯蔵穴等はみられない。

出土遺物（第50図）は土師器杯（№1）、甕（2）、甑（3）の3点のみであり、いずれも破片である。1は模倣杯、2は小型のものである。3は把手部分のみの検出である。

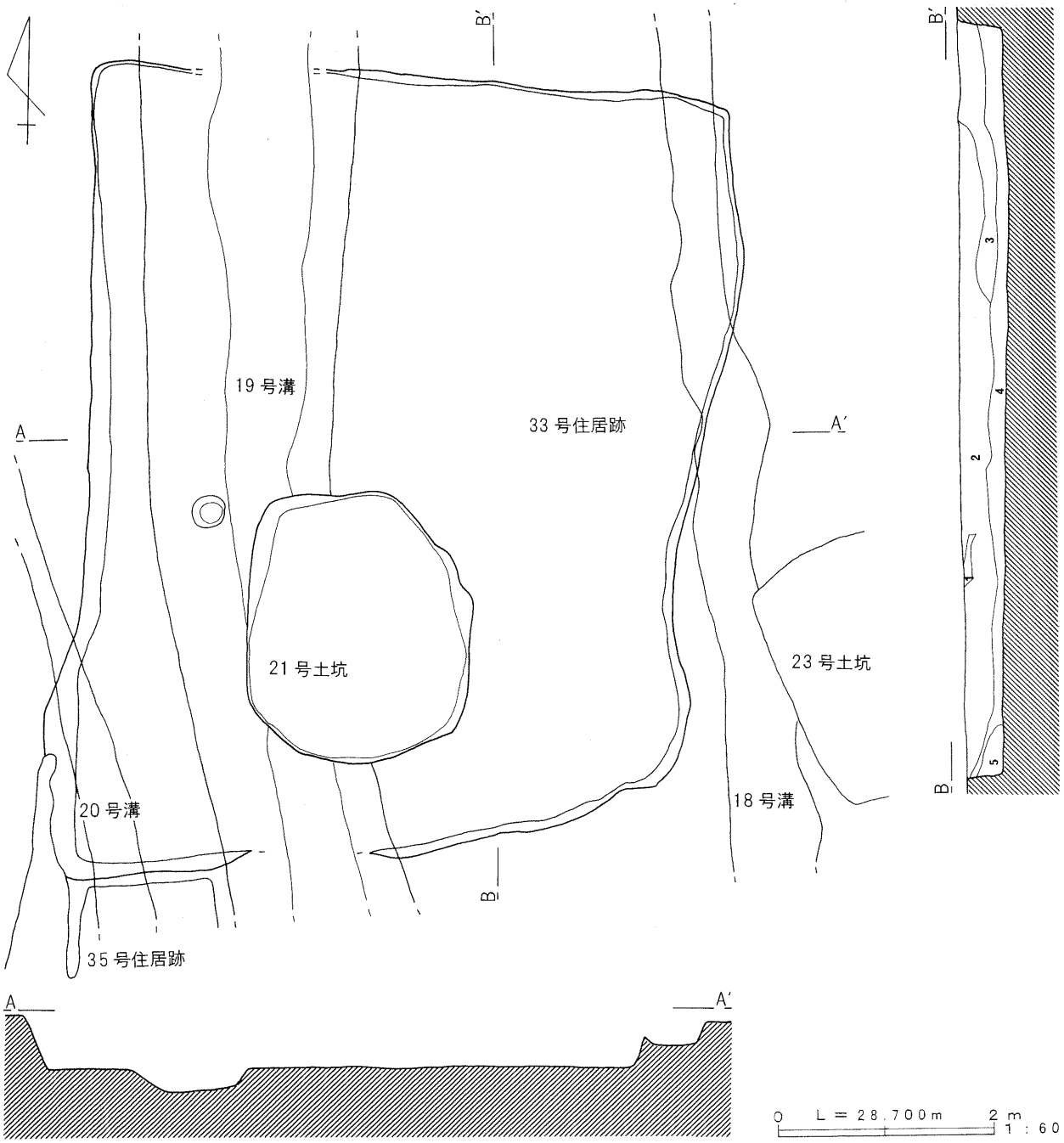
34号住居跡（第51図）　AA—14グリッドに位置する。第一確認面からの検出である。北東壁で35号住居跡を切っており、北東部は20号溝、南西部は河川跡に切られている。

規模・平面形は不明であるが、南東壁は4.37mを測る。主軸方向はN—40°—Eを指す。確認面からの深さは52cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であり、貼り床面が認められた。覆土は黄色系のシルト及び黄褐色系の粘土三層（1～3層）からなる自然体積層であった。ピットは3つ検出され、その位置から柱穴と考えられる。

壁溝、貯蔵穴はみられない。

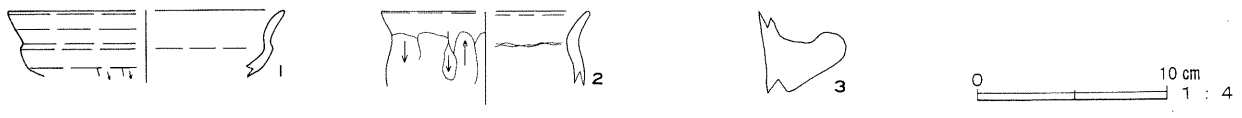
カマドは北東壁に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内側には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は58cm、燃焼部の幅は40cm、煙道部先端は18cmを測る。焚口部から燃焼部までは、床面同様にほぼ平坦である。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は12cmを測る。煙道部は先端に向かって緩やかに立ち上がる。壁外へは70cmほど張り出している。覆土は住居跡覆土下から天井部崩落土（4・6層）、焼土層（5層）、炭化物層（7・8層）の順で確認された。

出土遺物（第52・53図）には土師器杯（№1・2）、鉢（3）、甕（4～11）、甑（15）、須恵器甕（12～14）、土製支脚（16）、土錘（17・18）等がある。杯は模倣杯であるが、1は杯身模倣杯、2は杯蓋模倣杯である。1は内外面に煤の付着がみられた。3は外面に輪積痕を残す。甕は長胴甕（4～9）、小型のもの（10）、丸胴甕（11）がある。長胴甕は胴部の膨らみが弱い。7は摩滅が顕著であり、8・11は外面に黒斑を有する。11の底部には木葉痕がみられた。15は胴部最大径に把手を持つ。須恵器甕はいずれも破片での検出である。



33 号住居跡土層

1　黒色(2.5YR2/1)炭化物層。焼土粒(少量)を含む。
2　にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト。にぶい黄橙色(10YR7/4)砂(火山灰？)を微小ブロック状に含む。土器(少量)を包含。
3　黄褐色(2.5Y5/3)シルト。炭化物、焼土粒を少量に含む。しまり悪い。
4　黄褐色(2.5Y5/3)シルト。最下部に炭化物が帯状に堆積。
5　明黄褐色(2.5Y6/6)シルト。地山に近似する。しまり悪い。



第50図　B区33号住居跡・出土遺物

第28表　B区33号住居跡出土遺物観察表　（第50図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	(14.6)	-	-	②①④	②	橙	口縁部1/6	
2	土師器甕	(10.8)	-	-	①④③⑥②	②	橙	口縁部1/4	
3	土師器甑	-	-	-	①③②	②	橙	把手のみ	

産地は不明である。土錘は2点検出された。ともに完形品である。

35号住居跡
（第51図）

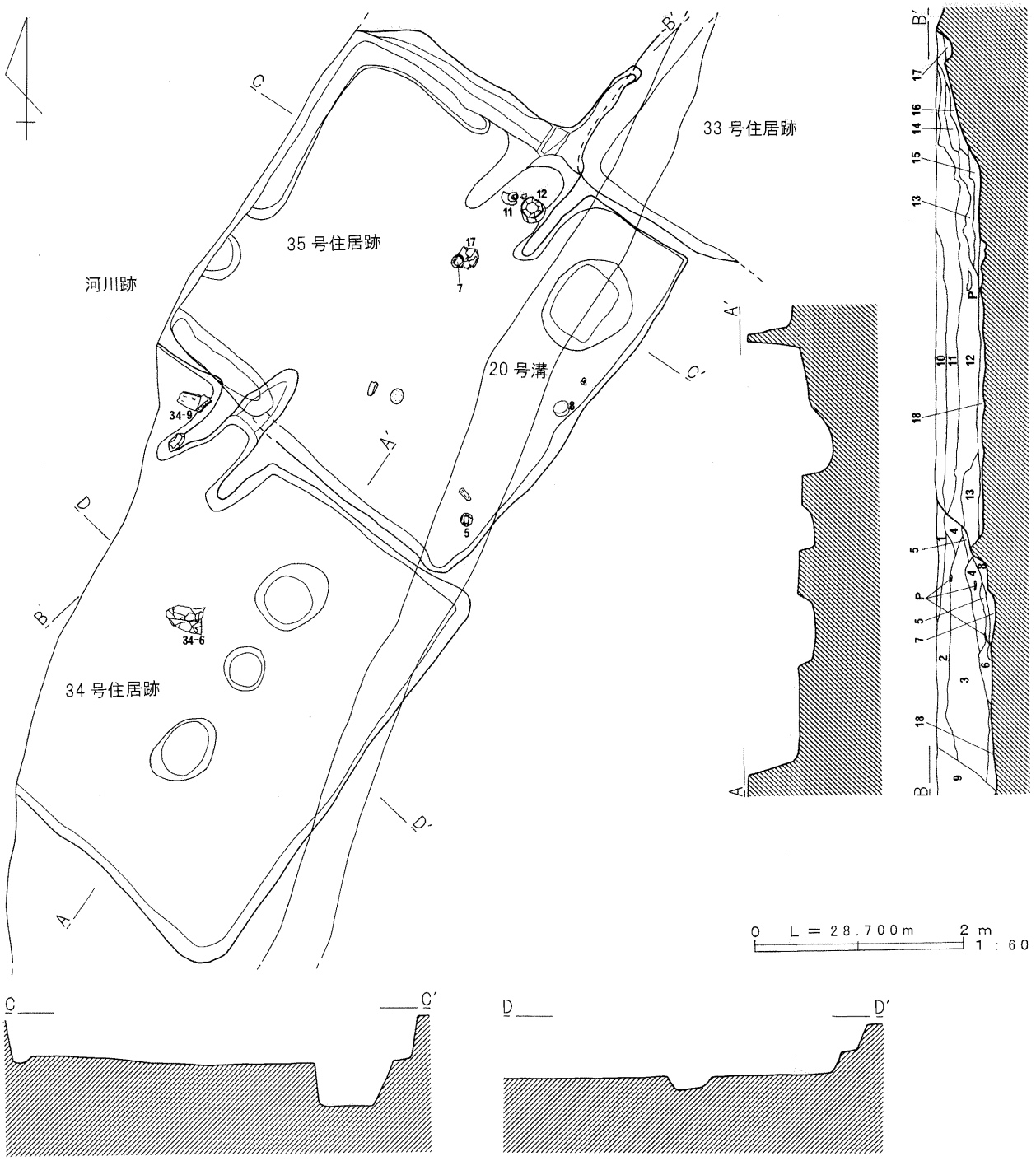
Z・AA—13・14グリッドに位置する。第一確認面からの検出である。南西部を34号住居跡、北東部から南東部にかけて20号溝に切られている。

長軸は4.03m、短軸は4.02mを測り、方形を呈する。主軸方向はN—35°—Eを指し、34号住とほぼ同軸方向を向く。確認面からの深さは47cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であり、貼り床面が認められた。覆土は黄色系のシルト及び黄褐色系の粘土三層（10～12層）からなり、レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。12層には炭化物が帯状に含まれていた。壁溝はカマド北西脇から北西壁沿い、南西隅までにみられた。幅は15～32cm、床面からの深さは6cm程を測り、南西部では途切れている。ピットはみられない。

カマドは北東壁に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内側には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は55cm、燃焼部の幅は45cm、煙道部は33号住居跡に切られているため不明である。焚口部から燃焼部までは、床面同様にほぼ平坦である。燃焼部からは支脚として使用された土師器高杯（No.11）が伏せた状態で検出され、その南東には甕（12）が立った状態で検出された。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は12cmを測る。煙道部は先端に向かって緩やかに上がり、先端でピット状となっている。壁外へは1.07mほど張り出している。覆土は天井部崩落土（13層）、焼土を含む層（14層）、炭化物層（15・16層）、焼土・炭化物を含む層（17層）が確認された。

カマド南東脇には、径95×78cmの楕円形を呈し、床面からの深さ42cmの貯蔵穴が確認された。

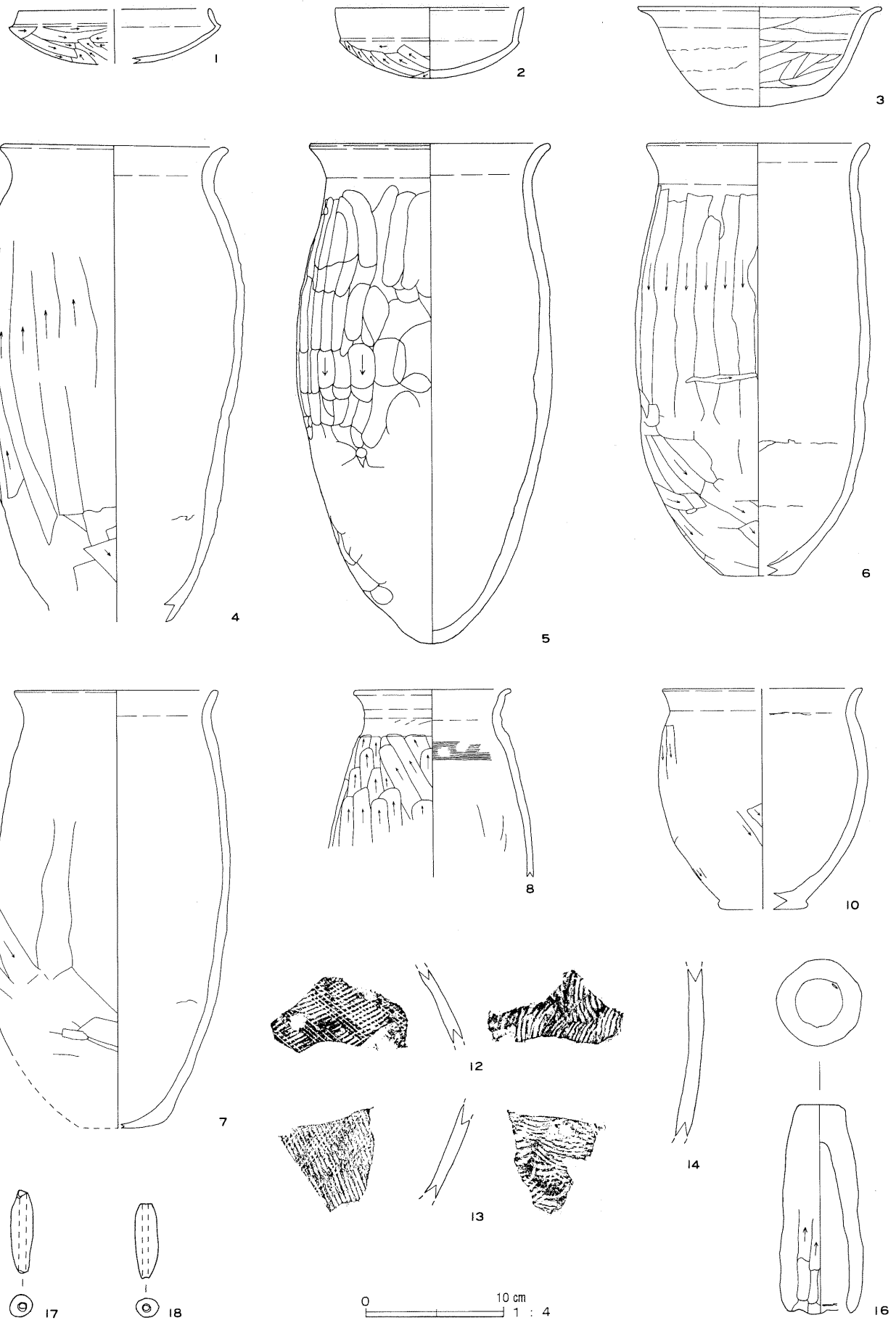
出土遺物（第54・55図）には、土師器杯（No.1～10）、高杯（11）、甕（12～17）、甑（18）、石錘（19）、砥石（20）、石製櫛形模造品（21）等がある。11・12がカマド、5・7・8・17が床面上から検出され、その他は覆土中からの検出である。杯はすべて身の深い模倣杯である。そのほとんどに黒斑や煤の付着が認められた。11は口縁部が大きく外反し、脚部が高く、裾が大きく広がる。甕は長胴甕（12～15）、小型のもの（16）、丸胴甕（17）がある。17は下部のみの検出であり、外面に黒斑を有する。18は把手を持たないタイプである。摩滅が顕著であった。19は側面にひび割れが生じている。20は川原石によるもので、一面のみ使用している。21は横形の櫛を模造したものである。僅かに縦方向の線刻がみられ、両端中央に1つずつ穿孔がなされている。



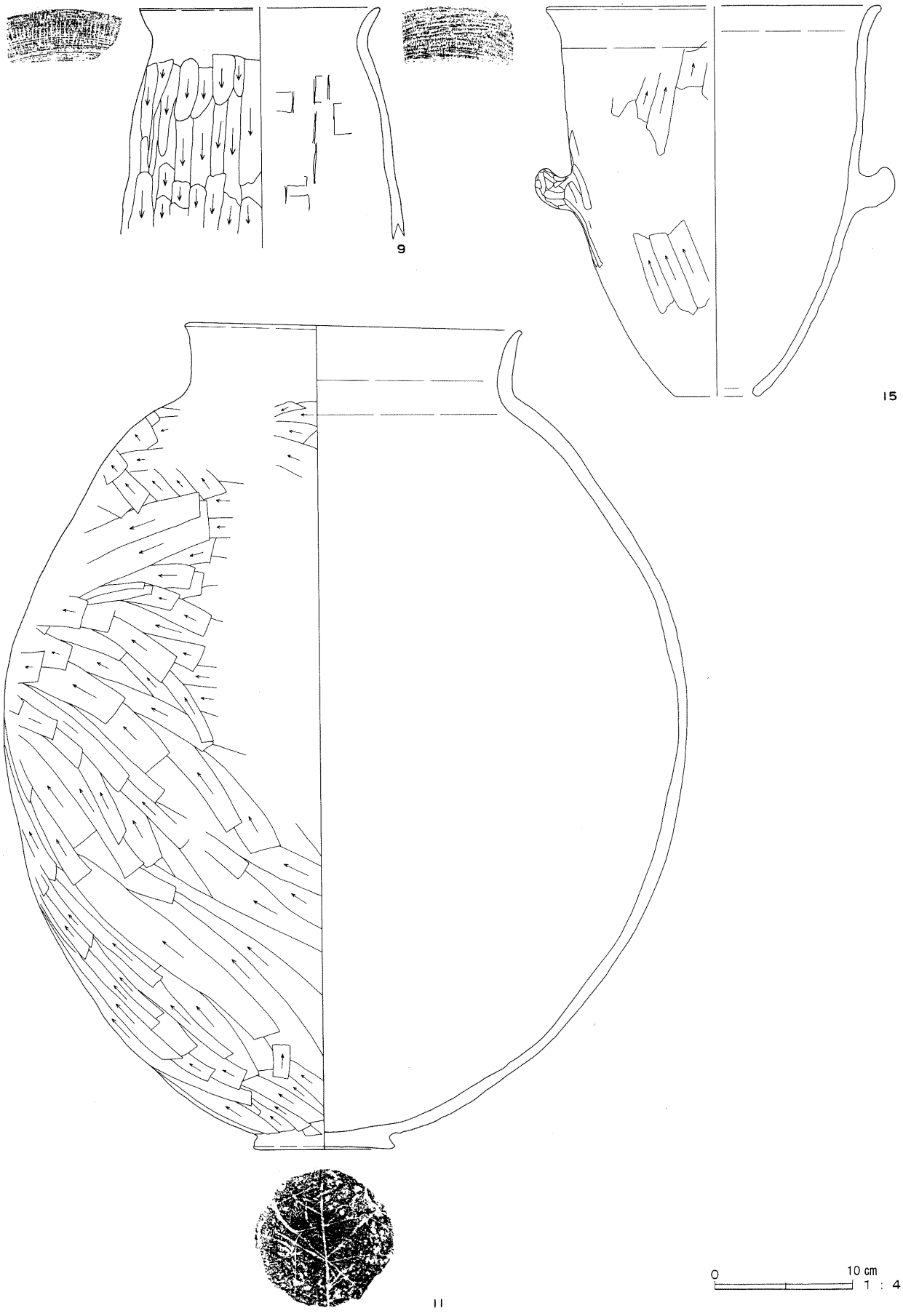
34・35 号住居跡土層

1 浅黄色(2.5Y7/4)シルト。しまり良い。
2 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト。しまり良い。
3 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。焼土粒(微量)、炭化物(極微量)を含む。土器(多量)を包含。
4 灰オリーブ色(5Y6/2)粘土。カマド天井崩落部。しまり非常に良い。
5 橙色(2.5YR6/8)粘土。4 層が被熱により焼土化。
6 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。4 層を多量に含みカマド天井部が流出している。
7 黒褐色(5YR3/1)炭化物層。5 層を粒子状に少量含む。粘性強い。
8 黒褐色(5YR3/1) 炭化物層。5 層をブロック状に多量含む。しまり悪い。
9 オリーブ灰色(2.5GY6/1)砂・褐色(7.5YR4/3)粘土の混在層。礫(多量)を含む。
10 浅黄色(2.5Y7/4)シルト。焼土粒(少量)を含む。
11 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト。焼土粒(微量)を含む。
12 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。炭化物を帯状に含む。土器(多量)を包含。
13 灰オリーブ色(5Y6/2)粘土。カマド天井崩落部。しまり非常に良い。
14 灰オリーブ色(5Y6/2)粘土。焼土ブロック(少量)を含む。しまり悪い。
15 黒褐色(5YR3/1)炭化物層。焼土粒(少量)を含む。
16 黒褐色(5YR3/1)炭化物層。焼土ブロック(多量)を含む。
17 にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト。炭化物，焼土粒を少量に含む。
18 黄色(2.5Y8/6)粘土。貼床。

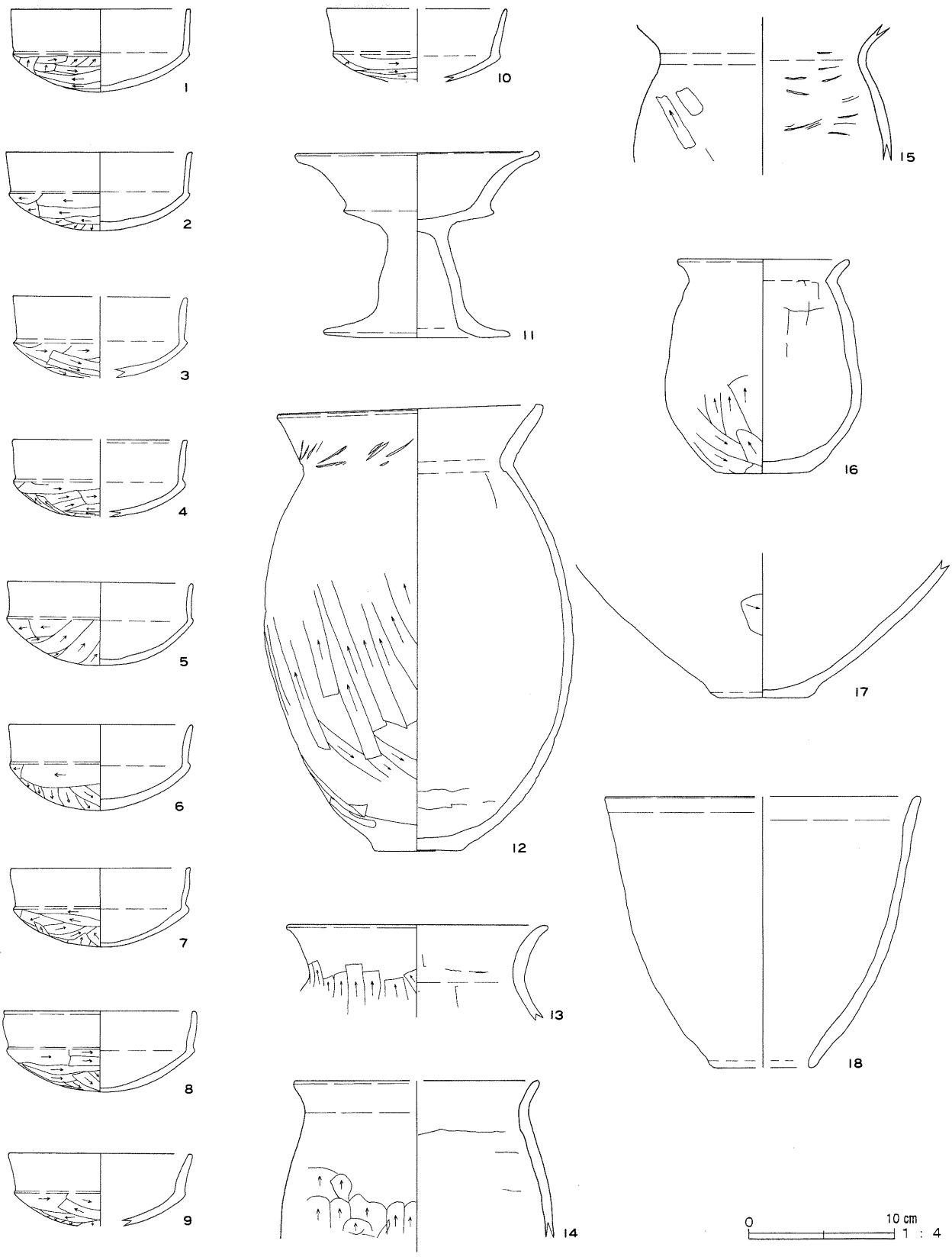
第51図　B区34・35号住居跡



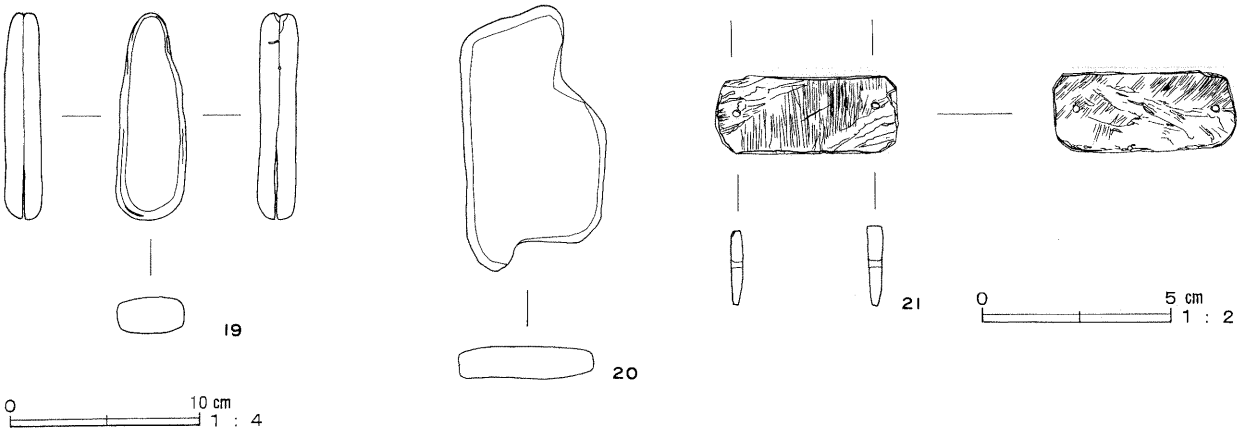
第52図　B区34号住居跡出土遺物(1)



第53図　B区34号住居跡出土遺物(2)



第54図　B区35号住居跡出土遺物(1)



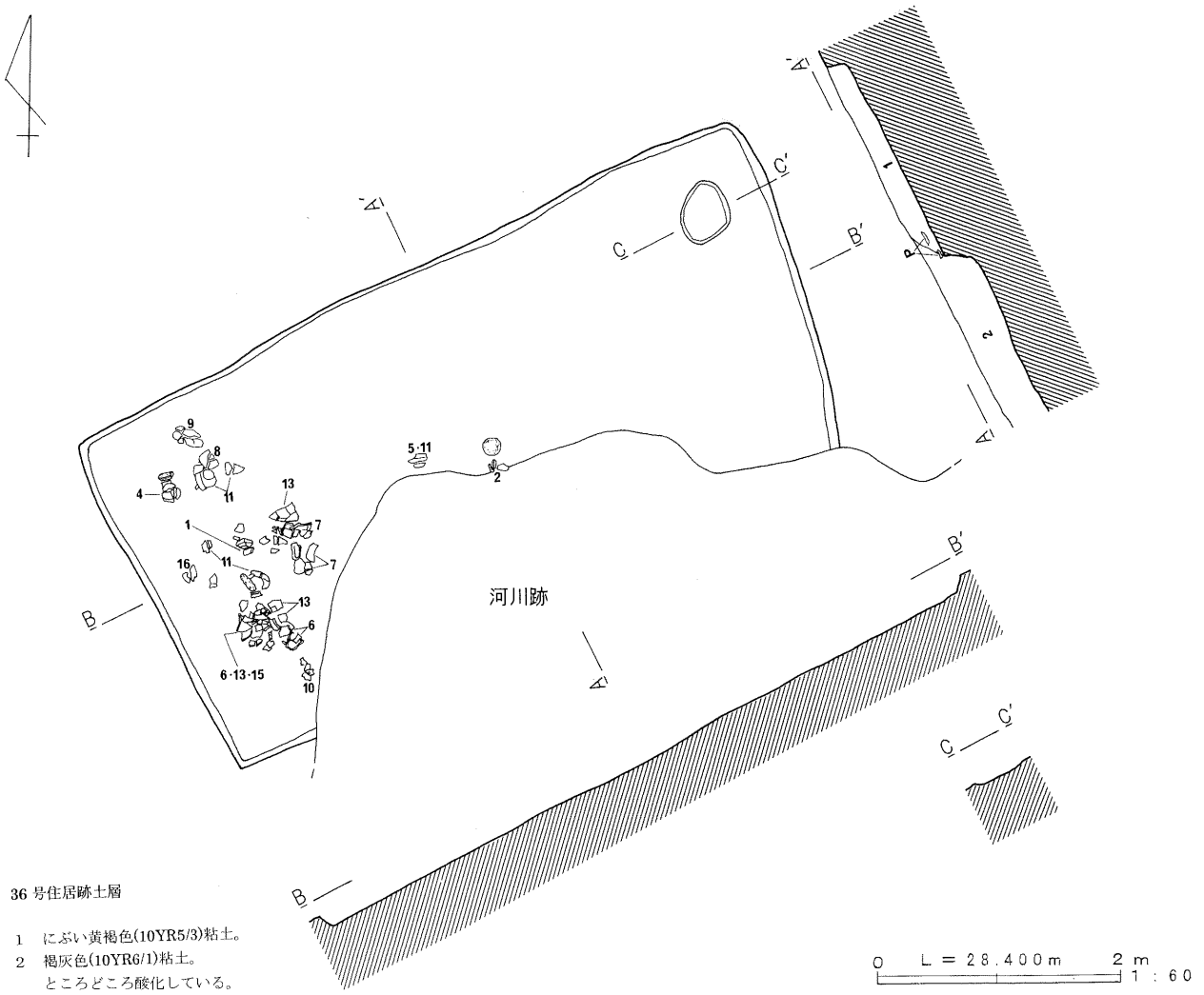
第55図　B区35号住居跡出土遺物(2)

第29表　B区34号住居跡出土遺物観察表　(第52・53図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(14.0)	-	-	①③④	②	明赤褐	1/4	内外面煤付着。
2	土師器杯	13.8	5.1	-	③①④	②	にぶい橙	2/3	
3	土師器鉢	17.8	7.3	8.6	③⑥④①	②	にぶい橙	3/4	
4	土師器甕	16.6	-	-	⑥③	②	橙	2/3	
5	土師器甕	17.0	36.6	(3.0)	①④②③⑥	②	橙	3/4	
6	土師器甕	16.2	31.9	5.3	③①④⑥	②	浅黄橙	一部欠	
7	土師器甕	14.9	32.2	(5.8)	③①	③	淡橙・灰黄	2/3	全面磨滅。
8	土師器甕	11.4	-	-	③①	②	橙	上位のみ	外面黒斑有。
9	土師器甕	(17.4)	-	-	③①⑥	②	橙	上半1/4	
10	土師器甕	(14.6)	16.2	(6.5)	③⑥①	②	明赤褐	3/4	内外面剝離。
11	土師器甕	24.8	60.5	10.4	③①④⑥	②	橙	3/4	外面黒斑有。
12	須恵器甕	-	-	-		②	黒褐・橙	一部のみ	
13	須恵器甕	-	-	-		②	黒褐・橙	一部のみ	
14	須恵器甕	-	-	-	①④②⑥	①	オリーブ灰	一部のみ	
15	土師器甑	(24.2)	28.6	(5.8)	③①⑥	②	にぶい黄橙	1/3	内面褐灰色。磨滅。
16	土製支脚	上部径　3.5　器高　15.3　底径　4.1							
17	土錘	長さ　6.1　最大径　1.7　孔径　0.5						完形	
18	土錘	長さ　5.5　最大径　1.6　孔径　0.4						完形	

第30表　B区35号住居跡出土遺物観察表　(第54・55図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	12.5	5.7	-	③①④⑥	②	橙	一部欠	内外面黒斑有。
2	土師器杯	13.0	5.4	-	③④①②	②	橙	3/4	外面黒斑有。
3	土師器杯	(12.2)	-	-	③①④	②	橙	上位1/3	内面煤付着。外面黒斑有。
4	土師器杯	(12.2)	-	-	①④③②	②	橙	1/3	内外面煤付着。
5	土師器杯	13.0	5.7	-	③①④	②	橙	1/2	外面黒斑有。
6	土師器杯	12.8	5.9	-	③④①⑥	②	橙	完形	
7	土師器杯	12.5	5.4	-	③④①②	②	橙	完形	
8	土師器杯	13.4	5.6	-	③①④②	②	橙	口縁部1/4欠	外面黒斑有。
9	土師器杯	12.8	-	-	③④①⑥	②	橙	上位2/3	
10	土師器杯	(12.6)	-	-	①④③	②	橙	上位1/3	内外面黒斑有。
11	土師器高杯	17.0	13.0	13.0	③①④	②	明赤褐	3/4	磨滅。
12	土師器甕	18.5	31.2	6.2	③①④⑥	②	橙	一部欠	黒斑有。外面剝離。
13	土師器甕	18.2	-	-	③④⑥	②	橙	口縁部1/2	
14	土師器甕	(16.7)	-	-	④⑥①②	②	にぶい黄橙	上位1/3	
15	土師器甕	-	-	-	②④①③⑥	②	灰褐	上位1/3	外面磨滅。
16	土師器甕	(12.0)	14.9	6.5	③①⑥	②	橙	1/3	胴上部外面磨滅。
17	土師器甕	-	-	7.3	③①④	②	橙	下位のみ	外面黒斑有。磨滅。
18	土師器甑	(21.8)	18.9	(6.6)	①⑥③④	②	橙	1/3	口縁部黒斑有。磨滅。
19	石錘	長さ　11.0　幅　3.5　厚さ　1.9						完形	
20	砥石	長さ　14.1　幅　7.5　厚さ　1.8						完形	砂岩製。一面使用。
21	櫛形模造品	長さ　2.2　幅　4.9　厚さ　2.0～4.0						完形	滑石製。



36号住居跡土層

1　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。
2　褐灰色(10YR6/1)粘土。
　ところどころ酸化している。

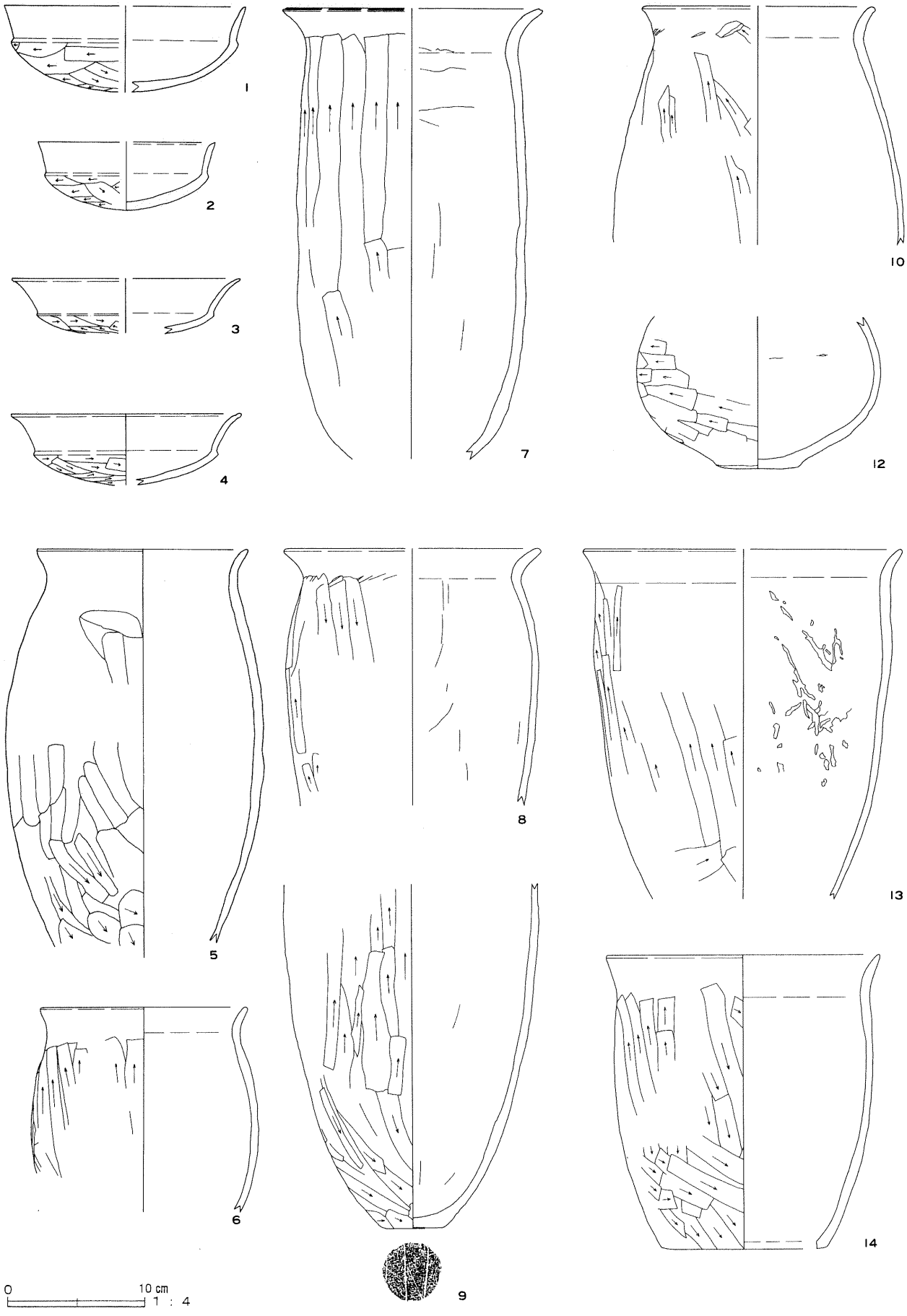
第56図　B区36号住居跡

36号住居跡（第56図）　Z・AA—15・16グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。住居跡中央から南東部にかけて河川跡に切られている。

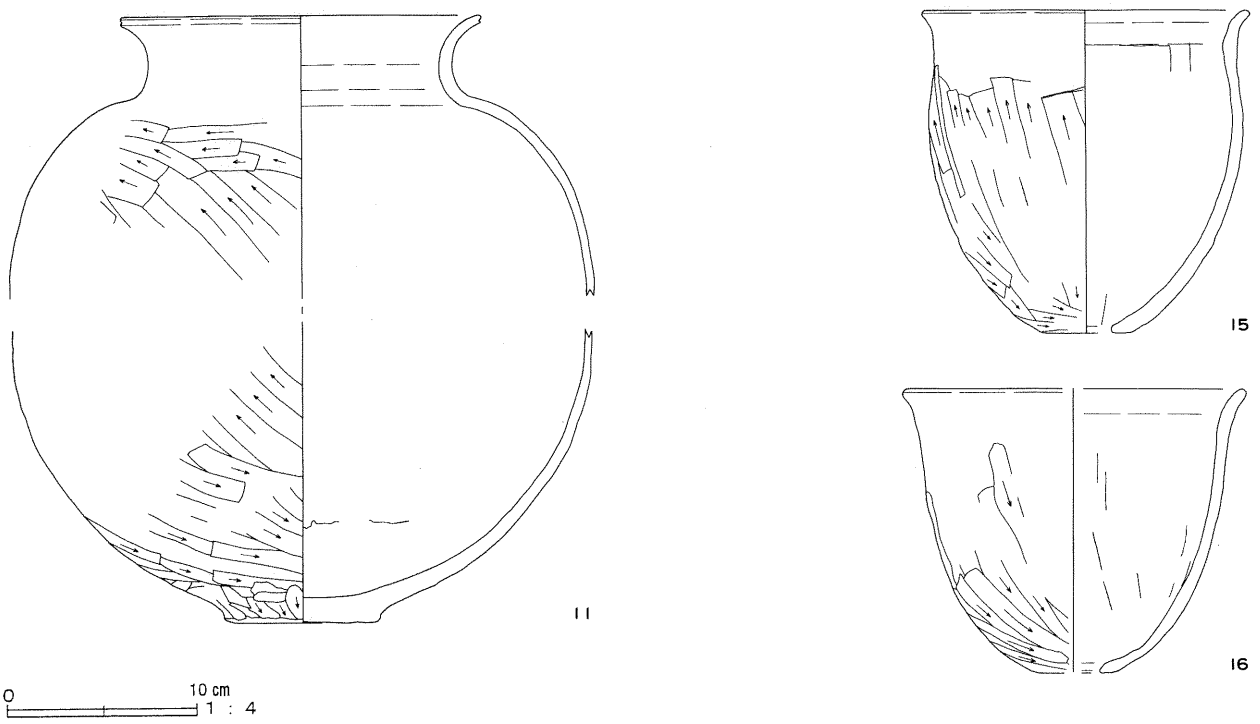
長軸6.25m、短軸3.14mの長方形を呈する。南北軸方向はN—61°—Eを指す。確認面からの深さは20cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土はにぶい黄褐色粘土による単一層（1層）である。自然堆積と考えられる。ピットは北東隅で1つ検出された。床面から5cm程と浅く、柱穴かどうかは不明である。

壁溝、カマド、貯蔵穴はみられない。

出土遺物（第57・58図）には土師器杯（№1～4）、甕（5～11）、壺（12）、甑（13～16）等がある。主に住居跡中央から西側半分にかけてまとまって検出された。杯は大小様々であるが、すべて模倣杯である。いずれも口縁部が外反しているが、3・4は外反度が強い。1・3は煤の付着がみられ、2は外面に黒斑を有する。甕は長胴甕（5～10）と丸胴甕（11）がある。9の底部には木葉痕がみられた。12は下部のみであるが、その器形から壺とした。甑はすべて把手を持たないタイプである。黒斑を有する。



第57図　B区36号住居跡出土遺物(1)



第58図　B区36号住居跡出土遺物(2)

第31表　B区36号住居跡出土遺物観察表　(第57・58図)

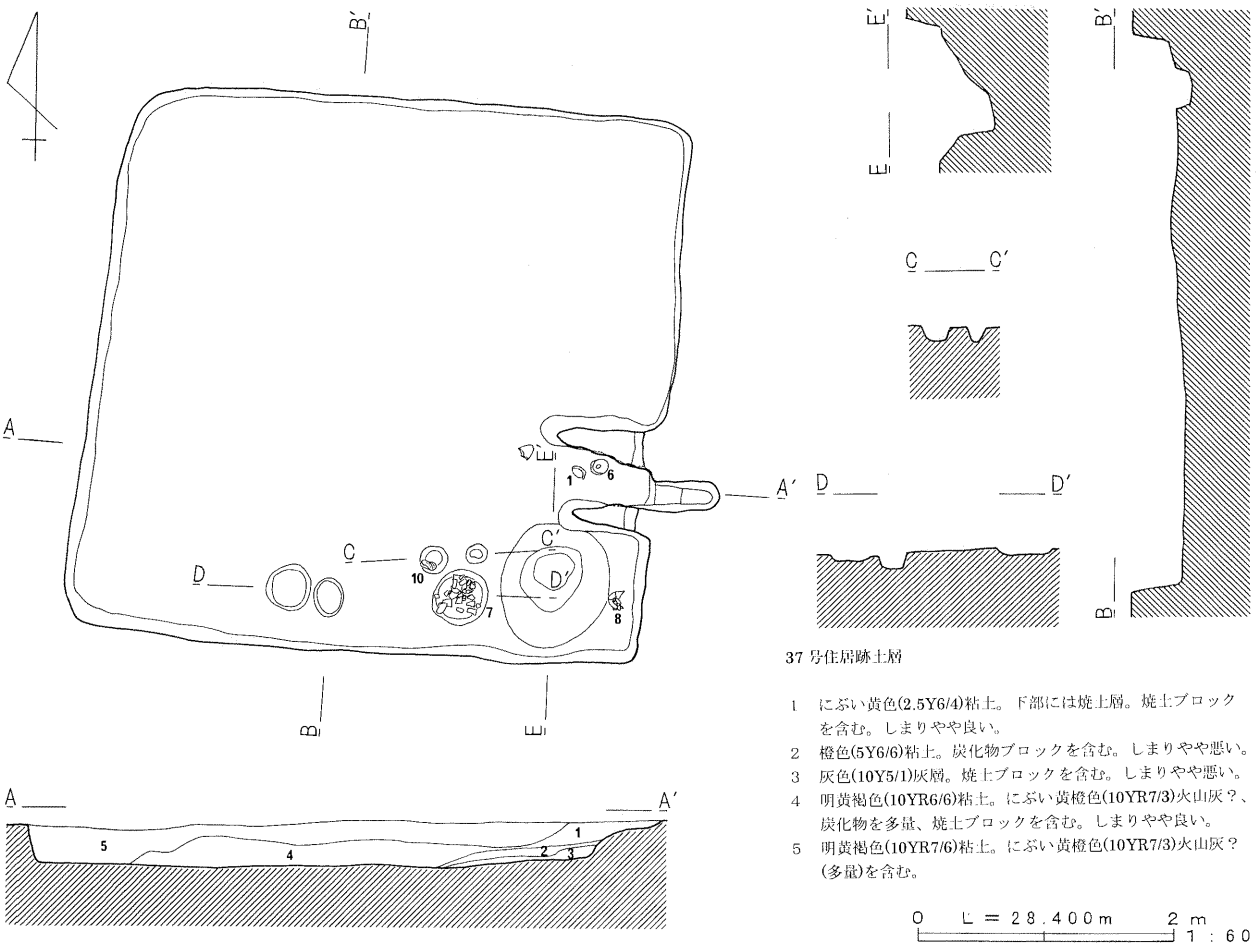
No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	(17.8)	6.3	-	⑥①④③	②	橙	1/3	内外面煤付着。
2	土師器杯	(13.0)	5.0	-	⑥③④	②	橙	1/3	外面黒斑有。
3	土師器杯	(16.8)	-	-	③④⑥①	②	赤	1/4	
4	土師器杯	17.0	-	-	①③④⑥	②	明赤褐	3/4	外面煤付着。
5	土師器甕	15.4	-	-	②①③⑥④	②	橙	底部欠	
6	土師器甕	15.2	-	-	③①	②	橙	上位3/4	
7	土師器甕	(19.0)	-	-	③①	②	橙	1/2	胴下部外面剝離。
8	土師器甕	(18.8)	-	-	③①④⑥	②	橙	上位1/4	口縁部内面黒斑有。
9	土師器甕	-	-	4.1	③①	②	橙	下位1/3	外面黒斑有。
10	土師器甕	(17.0)	-	-	③①④⑥	②	橙	上位1/3	外面黒斑有。
11	土師器甕	19.0	(32.5)	8.2	③①④	②	橙	1/3	外面黒斑有。底部にヘラ記号。
12	土師器壺	-	-	6.2	③①	②	にぶい赤褐	胴下位1/3	外面吸炭。
13	土師器甑	23.3	-	-	⑥①④	②	黄橙	1/5	
14	土師器甑	20.0	21.6	(12.0)	③④⑥	②	橙	3/5	内外面黒斑有。
15	土師器甑	17.2	17.2	4.8	③①	②	橙	2/3	外面黒斑有。
16	土師器甑	(18.2)	15.1	(3.8)	③④①⑥	②	橙	1/3	外面黒斑有。

37号住居跡
(第59図)

Z・AA—16グリッドに位置する。第二確認面からの検出である。河川埋没後、構築している。

長軸4.57m、短軸4.44mの方形を呈する。主軸方向はN—85°—Eを指す。確認面からの深さは42cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は明黄褐色粘土二層（4・5層）からなる自然堆積層であった。4層には火山灰らしき混入物や焼土・炭化物を含んでいた。ピットは4つ検出された。いずれも南壁沿い中央付近に位置する。柱穴かどうかは不明である。壁溝はみられない。

カマドは東壁中央から南寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内側には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は46cm、燃焼部は36cm、煙道部先端は22cmを測り、徐々に狭まる。焚口部から燃焼部までは、床面同様にほぼ平坦である。燃焼部と煙道部の

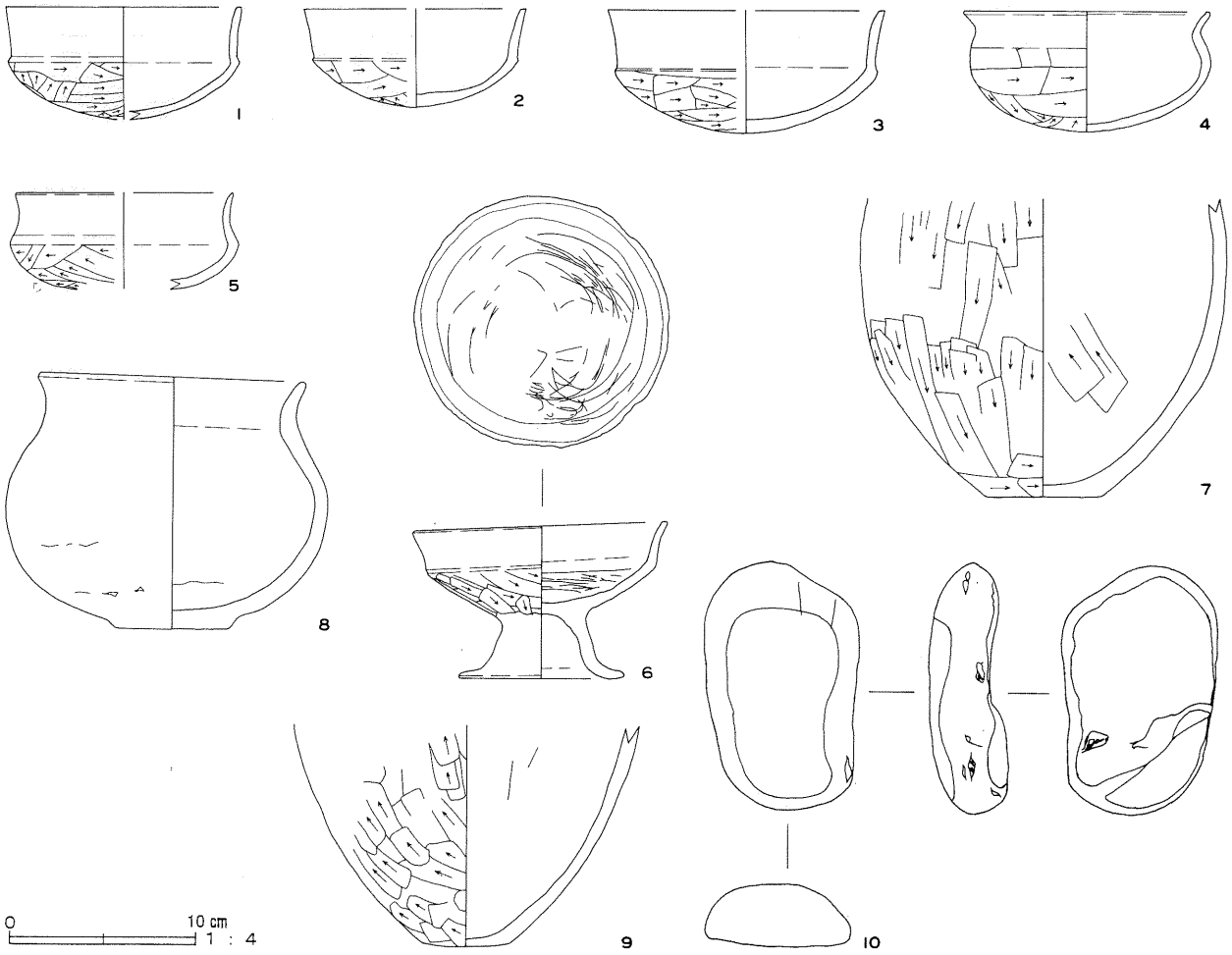


第59図　B区37号住居跡

境には段が設けられており、高低差は10cmを測る。燃焼部からは土師器杯（No.1）と高杯（6）が検出された。煙道部は先端に向かって緩やかに立ち上がる。壁外へは50cmほど張り出している。覆土に天井部崩落土等はみられず、上から焼土、焼土ブロックを含む層（1層）、焼土層（2層）、灰層（3層）の順で確認された。

カマドの南脇には貯蔵穴が2つ検出された。1つはカマドの袖に接して位置する。径99×85cmの円形を呈し、床面からの深さ40cmを測る。もう1つは前述の貯蔵穴の西側に位置する。径45cm前後の円形で、深さは4cmと浅い。覆土中からは土師器甕（No.7）が検出されたため、貯蔵穴とした。

出土遺物（第60図）には、土師器杯（No.1～3）、盌（4・5）、高杯（6）、甕（7～9）、砥石（10）等がある。1・6はカマド、8は南東隅、7は貯蔵穴、10はピットからそれぞれ検出された。その他のものはすべて覆土中からの検出である。1～3は身の深い模倣杯である。4・5は口縁部が屈曲していることから、盌とした。4は外面に黒斑を有する。6は模倣杯に低い脚部の付くタイプである。杯部内面にヘラによる線刻がみられた。甕は長胴甕（7・9）と小型のもの（8）がある。前者は下部のみの検出である。8・9は外面に黒斑を有する。10は川原石によるもので、両面を使用している。



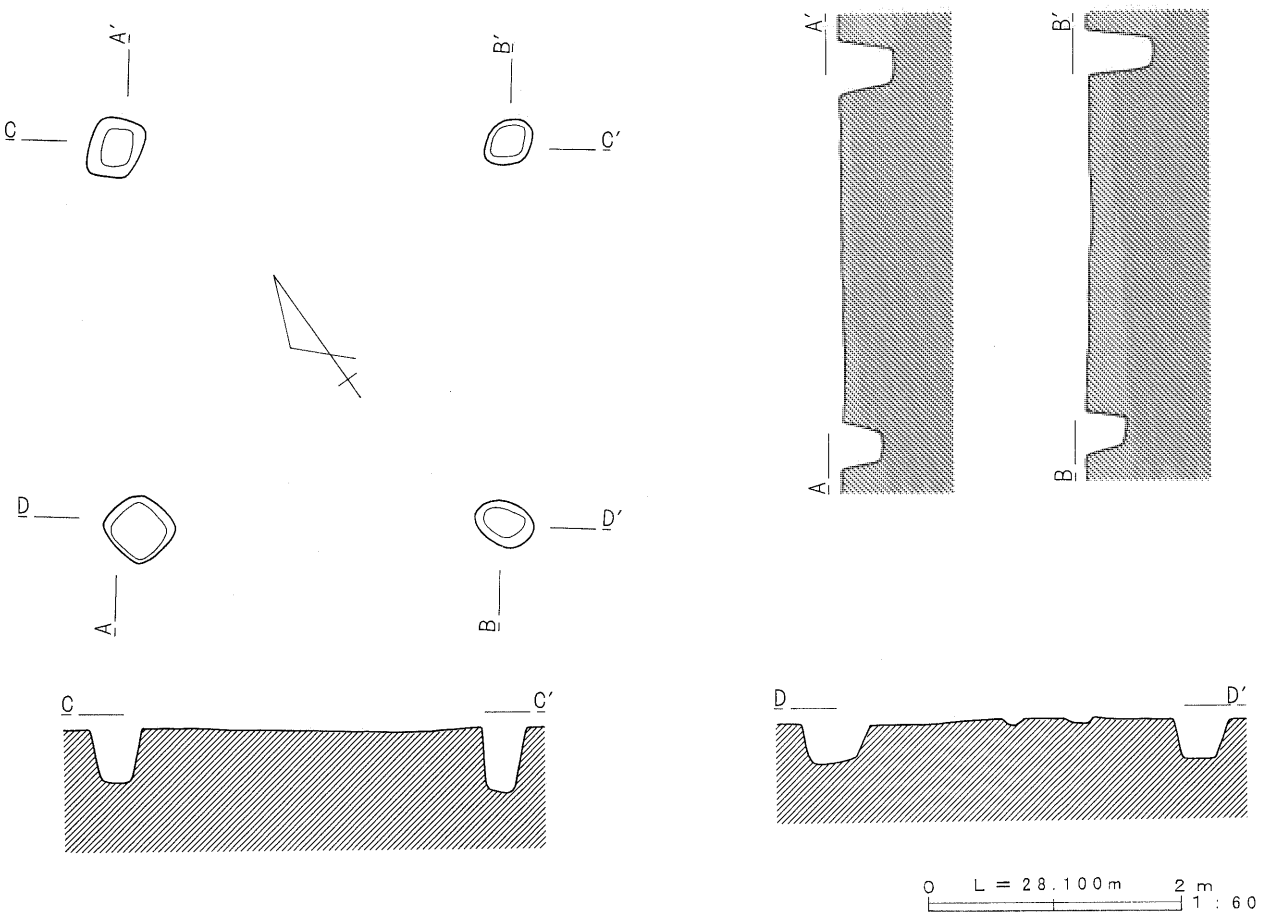
第60図　B区37号住居跡出土遺物

第32表　B区37号住居跡出土遺物観察表　(第60図)

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	12.8	-	-	③①④②⑥	②	橙	4/5	
2	土師器杯	(12.0)	5.3	-	③④①②	②	明赤褐	口縁部1/2欠	
3	土師器杯	(15.0)	6.6	-	③①④⑥	②	橙	1/3	
4	土師器盌	13.3	6.5	-	③①④	②	橙	1/2	外面黒斑有。
5	土師器盌	(11.6)	-	-	③①④	②	赤	1/2	
6	土師器高杯	13.7	8.5	8.9	③①④	②	橙	一部欠	内面部分的に剝離。
7	土師器甕	-	-	6.3	③⑥	②	にぶい赤褐	下位1/2	
8	土師器甕	14.3	13.6	6.2	③①④⑥	②	橙	一部欠	外面黒斑有。磨滅。
9	土師器甕	-	-	4.8	①③	②	黄橙	下位のみ	黒斑有。
10	砥石	長さ　13.3　幅　8.0　厚さ　3.4						完形	両面使用。

2　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は3棟が検出されている。調査区北側に1棟、南側に2棟みられ、1号が第二確認面、2・3号が第一確認面からの検出である。1号掘立柱建物跡は、他の遺構と直接的な重複関係はみられず、溝跡の下から検出されたが、2・3号掘立柱建物跡は、井戸跡、溝等と重複関係にある。新旧関係は様々である。いずれもほぼ同軸方向を向いている。



第61図　B区1号掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡
(第61図)

S—11・12グリッド、B区北端中央に位置する。6・7号溝とは直接的な重複関係にないが、これらの遺構の下から検出された。

本建物跡は一間×一間の側柱建物跡であり、桁行・梁行ともに3mを測る。柱間はすべて1.5mを測り、主軸方向はN—37°—Eを指す。

柱穴は、径36～50cm、深さは32～52cmを測り、平面形は南東部の柱穴を除いて方形のものが主体となる。

いずれの柱穴からも、柱痕、遺物は検出されなかった。

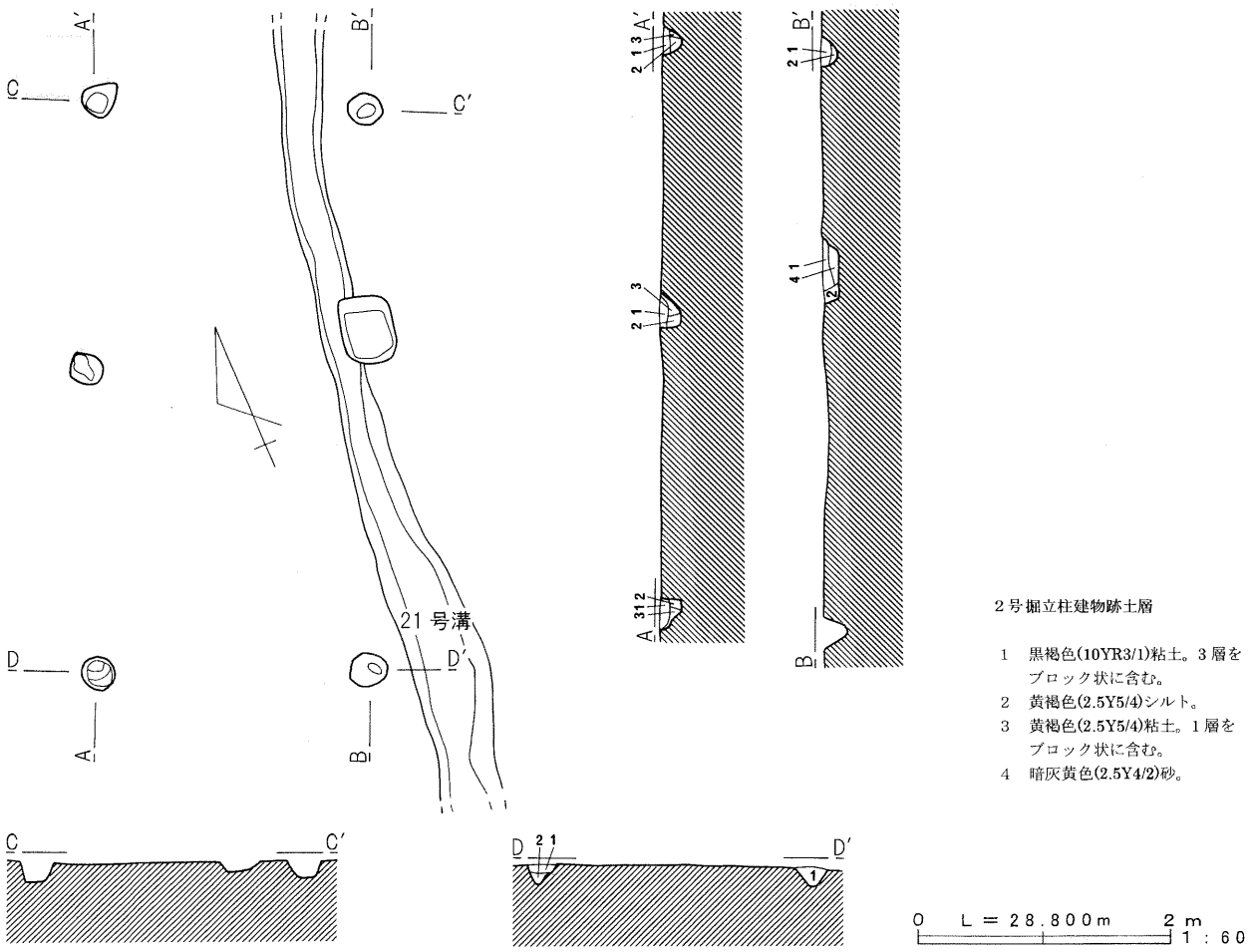
2号掘立柱建物跡
(第62図)

Y—13・14グリッドに位置する。河川埋没後に構築され、21号溝を切っている。

本建物跡は一間×二間の側柱建物跡であり、桁行4.5m、梁行2.1mの南北棟である。柱間は、西側の桁行が北から2.1m、2.4m、東側が北から1.8m、2.7mを測る。主軸方向はN—23°—Eを指す。

柱穴は、径25cm前後、深さ15cm前後のものが主体となるが、東側桁行中央の柱穴のみ径55×42cmと大きが、深さは12cmと浅い。

いずれの柱穴からも、柱痕、遺物は検出されなかった。



第62図　B区2号掘立柱建物跡

3号掘立柱建物跡（第63図）

Y—15グリッドに位置する。13号井戸跡、24号溝、29号住居跡に切られている。

本建物跡は一間×二間の側柱建物跡であり、桁行5.1m、梁行2.4mの東西棟である。柱間は南側の桁行が西から2.7m、2.4mを測る。北側は、13号井戸跡、24号溝に切られているため、詳細は不明であるが、中央の柱穴の西側が僅かに検出されたことからみて、北側の桁行と同じであると考えられる。梁行は東側が不明であるが、西側と同様、2.4mであると考えられる。主軸方向はN—26°—Eを指す。

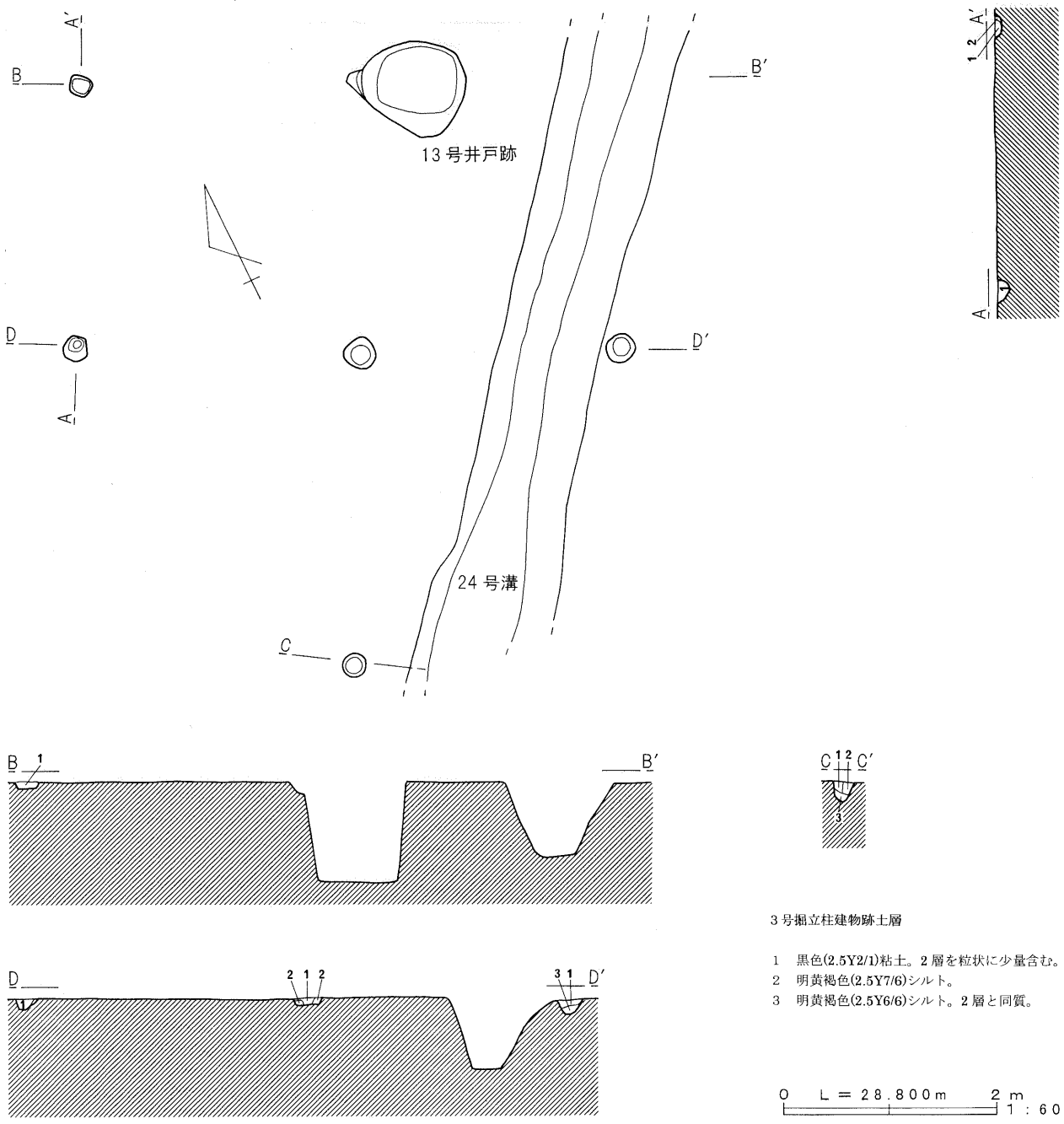
本建物跡の南西側には、柱穴が1つみられるが、中央柱列の延長上に位置することから、本建物跡に付随するもの判断した。庇とも考えられるが、1つのみの検出であるため、断定はできない。建物跡との柱間は3mを測る。

柱穴は、径20～30cm、深さは6～12cmと浅いが、庇のみ18cmと深い。

いずれの柱穴からも柱痕、遺物は検出されなかった。

3　溝　跡

溝跡は24条検出された。第一確認面から検出されたものが多いが、二面から検出されたものがある。B区のほぼ全面にみられ、河川埋没後に掘られているものが多いが、河川跡



第63図　B区3号掘立柱建物跡

に沿って走るものが多い。覆土に酸化鉄を多量含むものがほとんどであった。

1号溝跡　T－9・10グリッドに位置する。第一確認面から確認された。ほぼ南北方向に走っており、

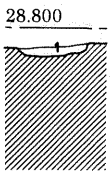
(第64図)　北側は調査区域外に延びている。河川埋没後に掘られている。

(第65図)　検出された長さは4.9m、幅は0.36～0.6mであり、確認面からの深さは5cmと浅い。断面形は逆台形状を呈する。覆土は青灰色粘土による単一層（1層）で、酸化鉄を多量含んでいた。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。



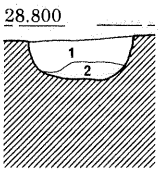
第64図　B区溝跡配置図



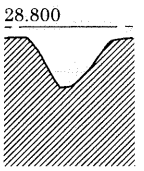
1 号溝土層
1 青灰色(5PB6/1)粘土。
酸化鉄粒(多量)、灰色(N4/0)
粘土ブロック(少量)を含む。



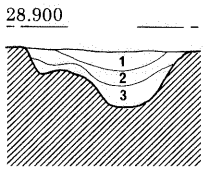
2 号溝



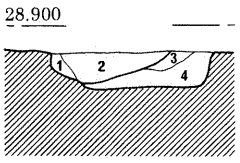
3 号溝土層
1 褐色(10YR4/4)砂。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒・ブロック
(多量)、明黄褐色(2.5Y6/6)粘土ブロック(微量)を含む。
2 灰色(5Y6/1)粘土。酸化鉄粒(多量)を含む。



4 号溝



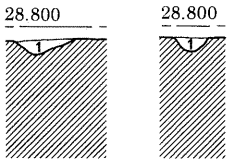
5 号溝土層
1 灰白色(5Y7/1)粘土。酸化鉄粒(多量)を含む。
2 灰白色(5Y7/1)粘土。1 層と同質。
酸化鉄(少量)を含む。
3 灰色(5Y6/1)砂。酸化鉄(少量)を含む。



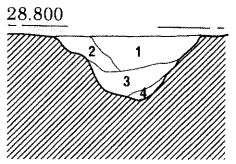
6 号・7 号溝土層
1 暗灰黄色(2.5Y6/2)シルト。
2 層をブロック状に含む。
2 灰白色(5Y7/1)粘土。酸化鉄(多量)を含む。
3 灰白色(5Y7/1)砂。酸化鉄を含む。
4 灰色(5Y6/1)砂。酸化鉄(少量)を含む。



8 号溝



9 号溝土層
1 灰色(5Y6/1)粘土。
酸化鉄(多量)、暗赤褐色
粘土ブロック(少量)を含む。



10 号溝土層
1 青灰色(5BG6/1)粘土。酸化鉄を(少量)を含む。
2 青灰色(5BG6/1)粘土。5 層をブロック状に含む。
3 青灰色(5BG6/1)粘土。酸化鉄(多量)を含む。
4 灰黄褐色(10YR4/2)シルト。青灰色(5BG6/1)粘土
(多量)をブロック状に含む。



11 号溝



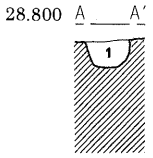
12 号溝土層
1 黄灰色(2.5Y6/1)シルト。
酸化鉄粒(多量)を含む。
2 1 層に黄灰色(2.5Y6/1)
粘土粒(多量)を含む。



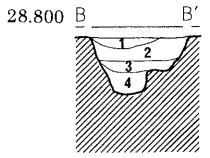
13 号溝土層
1 灰色(5Y4/1)粘土。
黄褐色(10YR5/6)
粘土ブロック、
白色微細粒を
多く含む。



14 号溝土層
1 緑灰色(5G6/1)砂。
酸化鉄(多量)を含む。



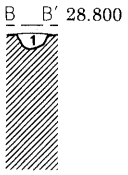
15 号溝土層（A A'）
1 灰色(5Y5/1)粘土。
酸化鉄、暗赤褐色
(2.5YR3/2)粘土ブ
ロック(多量)を含む。



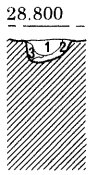
15 号溝土層（B B'）
1 灰色(5Y5/1)砂。にぶい黄褐色(10YR5/3)
粘土をブロック状に含む。
2 灰色(5Y5/1)粘土。酸化鉄(多量)を含む。
3 灰色(5Y5/1)粘土。酸化鉄を 2 層より多く含む。
4 灰色(5Y5/1)砂。にぶい黄褐色(10YR5/3)
粘土をブロック状に含む。



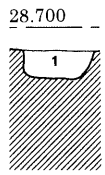
16 号溝土層（A A'）
1 灰色(5Y6/1)粘土。
酸化鉄、暗赤褐色
(2.5YR3/2)粘土ブ
ロック(多量)を含む。



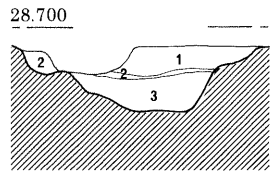
16 号溝土層（B B'）
1 灰色(5Y6/1)粘土。
酸化鉄、暗赤褐色
(2.5YR3/2)粘土ブ
ロック(多量)を含む。



17 号溝土層
1 明黄褐色(2.5Y7/6)シルト。
2 明黄褐色(2.5Y7/6)粘土。1 層と同質。
褐色(7.5YR4/4)粘土(多量)を粒子状に含む。
3 明黄褐色(2.5Y7/6)粘土。1 層と同質。
黒褐色(7.5YR3/1)粘土(多量)を含む。



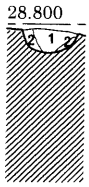
18 号溝土層
1 灰色(7.5Y5/1)粘土。
酸化鉄粒(多量)を含む。



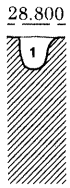
19 号溝土層
1 灰色(7.5Y6/1)細砂。
酸化鉄(多量)を含む。
2 黄褐色(2.5Y5/6)粘土。
砂利をブロック状に含む。
3 黄灰色(2.5Y6/1)粘土(酸化鉄粒を
多く含む)と細砂の混在層。



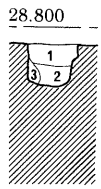
20 号溝土層
1 灰色(10Y6/1)砂。
2 灰色(10Y6/1)砂。
酸化鉄(少量)を含む。
3 明黄褐色(10YR7/6)粘土。
2 層がブロック状、酸化
鉄(少量)を含む。



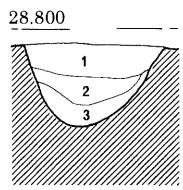
21 号溝土層
1 暗オリーブ褐色(2.5Y3/5)粘土。
鉄分(少量)を含む。
2 オリーブ褐色(2.5Y4/6)砂。
鉄分(多量)を含む。



22 号溝土層
1 灰色(10Y6/1)砂。



23 号溝土層
1 灰色(5Y5/1)砂。
酸化鉄を密に含む。
2 灰色(5Y5/1)粘土。
酸化鉄を疎に含む。
3 暗赤褐色(5YR3/2)粘土。
褐灰色粘土粒・ブロックを含む。



24 号溝土層
1 褐灰色(10YR6/1)粘土。
明黄褐色(10YR7/6)粘土を
ブロック状に含む。
2 褐灰色(10YR6/1)粘土。
酸化鉄(多量)を含む。
3 灰黄褐色(10YR5/2)砂。
2 層を粒子状に含む。



第65図　B区溝跡断面図

2号溝跡　T・U—10グリッドに位置する。第一確認面から検出された。北東方向から南西方向へ走っ
(第64図)　ており、6・7号住居跡を切っている。
(第65図)　長さ5.80m、幅0.42～0.56m、確認面からの深さ10cm前後である。断面形は逆台形状を呈する。覆土は図示しなかったが、灰色系の粘土による単一層であった。酸化鉄を多量含んでいた。自然堆積と考えられる。

遺物には土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

3号溝跡　S・T—10・11グリッドに位置する。第一確認面から検出された。北東方向から南西方向
(第64図)　へやや曲がりながら走っており、北東側は調査区域外に延びている。河川埋没後に掘られて
(第65図)　おり、2号住居跡に切っている。

検出された長さは4.91m、幅は0.59～0.79m、確認面からの深さは20cm前後である。断面形は逆台形状を呈する。覆土は二層（1・2層）からなり、上層には砂層（1層）がみられた。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

4号溝跡　S・T—11グリッドに位置する。第一確認面から検出された。北東方向から南西方向へ走っ
(第64図)　ており、北東側は調査区域外に延びている。2号住居跡を切っており、T—11グリッドで河
(第65図)　川跡に切られている。

検出された長さは5.62m、幅は0.45～0.68m、確認面からの深さは25cm前後である。断面形はV字状を呈する。覆土は図示しなかったが、灰色系の粘土による単一層であった。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

5号溝跡　S・T—11・12グリッドに位置する。第一確認面から検出された。北東方向から南西方向
(第64図)　へ走るが、T—11・12グリッド付近で向きを変えている。河川埋没後に掘られており、T—12
(第65図)　グリッドで6・7号溝と重複関係にある。6号溝を切っており、7号溝との新旧関係は不明である。また、直接的な重複関係にないが、下部に畠跡がみられた。

検出された長さは13.04m、幅は概ね0.70m前後であるが、最小で0.28m、最大で1.22mを測る箇所もみられた。確認面からの深さは30cm前後である。断面形は、いびつな逆台形状を呈する。覆土は上層に灰白色粘土、下層に灰色砂がみられ、三層（1～3層）からなる自然堆積層であった。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

6号溝跡　S・T—11・12グリッドに位置する。第一確認面から検出された。北東方向から南西方向
(第64図)　へ走っており、S—11・12グリッド境で1号掘立柱建物跡、T—12グリッドで河川跡、5・
(第65図)　7号溝に切られている。また、直接的な重複関係にないが、下部に畠跡がみられた。

検出された長さは10.44m、幅は北側で0.50m前後、南側で1m前後を測り、南側に行くに

従って幅が広くなる。確認面からの深さは19cm前後である。断面形は逆台形状を呈する。覆土は、灰白色及び灰色の砂二層（３・４層）からなる自然堆積層であった。酸化鉄を含んでいた。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

７号溝跡（第64図）（第65図）　Ｓ・Ｔ—12グリッドに位置する。第一確認面から検出された。Ｓ—12グリッドでは北東方向から南西方向へ走っているが、Ｔ—12グリッドでは南東方向へ向きを変えている。南側で併走する６号溝を切っており、５号溝に接続している。５号溝との新旧関係は不明である。また、直接的な重複関係にないが、下部に畠跡がみられた。

検出された長さは7.74m、幅は0.50m前後であり、確認面からの深さは15cm前後である。断面形は舟底状を呈する。覆土は、暗灰黄色シルトと灰白色粘土二層（１・２層）からなる。２層には酸化鉄を多量含んでいた。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

８号溝跡（第64図）（第65図）　Ｓ・Ｔ—13グリッドに位置する。第一確認面から検出された。９号溝の東側を北東方向から南西方向へ走っている。直接的な重複関係にないが、下部に11号住居跡がみられた。

長さは1.36mと非常に短い。幅は0.15m前後、確認面からの深さは５cmと浅い。断面形はＵ字状を呈する。覆土は図示しなかったが、黄色系の粘土による単一層であり、酸化鉄を含んでいた。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

９号溝跡（第64図）（第65図）　Ｓ～Ｕ—13グリッドに位置する。第一確認面から検出された。８号溝の西側を北東方向から南西方向へ走っており、Ｔ—13グリッド内で一部途切れている。Ｕ—13グリッドで河川跡に切られており、直接的な重複関係にないが、下部に11号住居跡、畠跡がみられた。

検出された長さは12.11m、幅は0.18～0.30m前後であり、確認面からの深さは８cmと浅い。断面形は舟底状を呈する。覆土は灰色粘土による単一層（１層）であり、酸化鉄を多量含んでいた。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

10号溝跡（第64図）（第65図）　Ｔ～Ｘ—11・12グリッドに位置する。第一確認面から検出された。13号溝の西側を北東方向から南西方向へやや蛇行しながら走っている。河川跡と重複関係にあり、Ｔ～Ｖ—11・12グリッドでは河川埋没後に掘られているが、Ｘ—12グリッドでは河川跡に切られている。Ｕ—11・12グリッドでは、16号住居跡を切っている。また、直接的な重複関係にないが、Ｕ—11グリッド、Ｖ～Ｘ—12グリッドでは、下部に畠跡がみられた。河川跡を挟んで南側にある19号溝とは同一のものの可能性がある。

検出された長さは29.40m、幅は0.48～1.12m、確認面からの深さは33cmである。断面形はいびつな逆台形状を呈する。覆土は青灰色粘土（１～３層）を主体とし、最下層に灰黄褐色

シルト（4層）がみられた。1・3層に酸化鉄を含んでいた。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

11号溝跡（第64図）（第65図）　U～W－9～11グリッドに位置する。第一確認面から検出された。北東方向から南西方向へやや蛇行しながら走っており、北東側はA区に延びている。河川埋没後に掘られており、直接的な重複関係にないが、W－10グリッドでは上部に18号住居跡がある。

検出された長さは13.49m、幅は0.30m前後であり、確認面からの深さは3cmと浅い。断面形は逆台形状を呈する。覆土は図示しなかったが、灰色系の粘土による単一層であった。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

12号溝跡（第64図）（第65図）　X・Y－10・11グリッドに位置する。第一確認面から検出された。X－10・11グリッドまで北東方向から南西方向へ走っているが、それより南ではほぼ南北方向に向きを変えている。また、直接的な重複関係にないが、W・X－10・11グリッド境には、上部に19号住居跡がある。

長さ10.58m、幅は北側では0.40m前後と幅が狭いが、南側では0.90m前後と幅広となる。確認面からの深さは9cm程である。断面形は逆台形状を呈する。覆土は黄灰色シルト二層（1・2層）からなり、1層に酸化鉄を多量含んでいた。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

13号溝跡（第64図）（第65図）　V～X－11・12グリッドに位置する。第一確認面から検出された。10号溝の東側を北東方向から南西方向へやや蛇行しながら走っている。河川埋没後に掘られている。本溝跡の南に位置する18号溝とは同一のものの可能性がある。

長さ12.81m、幅は北側では0.20m前後と狭いが、南側では0.5m前後と幅広となる。確認面からの深さは9cm程である。断面形は逆台形状を呈する。覆土は灰色粘土による単一層（1層）であった。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

14号溝跡（第64図）（第65図）　U～W－12～14グリッドに位置する。第一確認面から検出された。北東方向から南西方向へやや蛇行しながら走っており、所々で途切れている。U・V－12・13グリッドでは河川埋没後に掘られているが、W－14グリッドでは河川跡に接続している。新旧関係は不明である。V・W－14グリッド境付近では15・16号溝、W－14グリッドでは21号住居跡を切っており、W－14グリッドでは17号溝に切られている。V－13グリッドでは、直接的な重複関係にないが、下部に畠跡がみられた。

長さ19.42m、幅は0.35m前後、確認面からの深さは8cm程である。断面形は逆台形状を呈する。覆土は緑灰色砂による単一層（1層）であった。酸化鉄を多量含んでいた。自然堆積と考えられる。

出土遺物（第66図）には、土師器杯（№1～3）がある。すべて覆土中からの検出である。1は口径小さく、身の深い模倣杯である。2・3は丸底で、口縁部がほぼ直立するタイプであるが、3は小型で器壁が厚い。2は外面に煤が付着していた。3は外面に黒斑がみられた。

15号溝跡（第64図）（第65図）　V～X—14グリッドに位置する。第一確認面から検出された。V・W—14グリッド境付近で14号溝から派生してほぼ南北方向に走っている。16号溝とも一部重複関係にあるが、新旧関係は不明である。W—14グリッドでは20号住居跡を切っており、直接的な重複関係にないが、X—14グリッドでは下部に畠跡がみられた。

長さ10.46m、幅は北側では0.71mと幅広であるが、南側では0.39mと狭くなる。確認面からの深さは、北側では30cmを測り、二段落ちとなっているのに対し、南側では深さ14cmであり、断面形は逆台形状を呈する。覆土は灰色粘土による単一層（1層）であり、酸化鉄を多量含んでいた。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

16号溝跡（第64図）（第65図）　V～X—13・14グリッドに位置する。第一確認面から検出された。V—14グリッドでは北東方向から南西方向に走っているが、W・X—14グリッドでは南北方向に走っている。V・W—14グリッド境付近では14号溝に切られており、16号溝とも一部重複関係にあるが、新旧関係は不明である。W—14グリッドで21号住居跡を切っている。

長さ11.84m、幅0.25m前後、確認面からの深さは7cm程である。断面形は舟底状を呈する。覆土は灰色粘土による単一層（1層）であり、酸化鉄を多量含んでいた。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

17号溝跡（第64図）（第65図）　W～Z—14～16グリッドに位置する。第一確認面から検出された。北東方向から南西方向に走っている。X～Z—15・16グリッドでは河川埋没後に掘られているが、河川跡に沿って走っている。W—14グリッドでは14号溝、21号住居跡、X—14・15グリッドでは24・25号住居跡、Y—15・16グリッドでは29号住居跡を切っており、W・X—14・15グリッド境では10号井戸跡に切られている。

長さ24.47m、幅0.30m前後、確認面からの深さは11cm程である。断面形は舟底状を呈する。覆土は、明黄褐色シルトないし粘土三層（1～3層）からなる。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

18号溝跡（第64図）（第65図）　Y～AA—12・13グリッドに位置する。第一確認面から検出された。19号溝の東側を北東方向から南西方向に走っており、Z—12グリッドで途切れている。河川埋没後に掘られており、AA—13グリッドでは23号土坑を切っており、29号土坑に切られている。本溝跡の北側に位置する13号溝とは同一のものの可能性がある。

検出された長さは5.67m、幅0.23～0.52m、確認面からの深さは15cm程である。断面形は

逆台形状を呈する。覆土は灰色粘土による単一層（1層）であり、酸化鉄を多量含んでいた。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

19号溝跡
（第64図）
（第65図）

Y～AB—12～14グリッドに位置する。第一確認面から検出された。18･20号溝の間を北東方向から南西方向に走っており、南西側は調査区域外に延びている。Y・Z—12・13グリッド境付近では河川跡と重複関係にあり、新旧関係は様々である。Z･AA—13グリッドで33号住居跡を切っており、21号土坑に切られている。また、直接的な重複関係にないが、下部に畠跡がみられた。河川跡を挟んで北側に位置する10号溝とは同一のものの可能性がある。

検出された長さは21.45m、幅1.09～2.13m、確認面からの深さは35cm程である。断面形はいびつな逆台形状を呈する。覆土は上層に灰色砂（1層）、中･下層に黄褐色ないし黄灰色粘土（2・3層）がみられた。1層は酸化鉄を多量含んでいた。自然堆積と考えられる。

出土遺物（第66図）には、土師器杯（№1・2）、甕（3）、土錘（4～9）等がある。すべて覆土中からの検出である。1は口径小さく、身の深い模倣杯である。2は底部のみの検出であり、平底である。土錘は6点検出された。ほとんどが欠損しているが、4のみ他と比べて大きい。

20号溝跡
（第64図）
（第65図）

Z～AB—13･14グリッドに位置する。第一確認面から検出された。20号溝の西側を北東方向から南西方向に走っており、南西側は調査区域外に延びている。Z—13グリッドでは33号住居跡、AA・AB—14グリッドでは34・35号住居跡を切っている。

検出された長さは15.89m、幅0.30m前後、確認面からの深さは13cm程である。断面形は箱状に掘り込まれている。覆土は上・中層に灰色砂（1・2層）、下層に明黄褐色粘土（3層）がみられた。2・3層は酸化鉄を含んでいた。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

21号溝跡
（第64図）
（第65図）

X～Z—13・14グリッドに位置する。第一確認面から検出された。北東方向から南西方向に走っているが、Y—13グリッドでは西側に大きく蛇行している。河川埋没後に掘られており、Y—13グリッドで2号掘立柱建物跡を切っている。

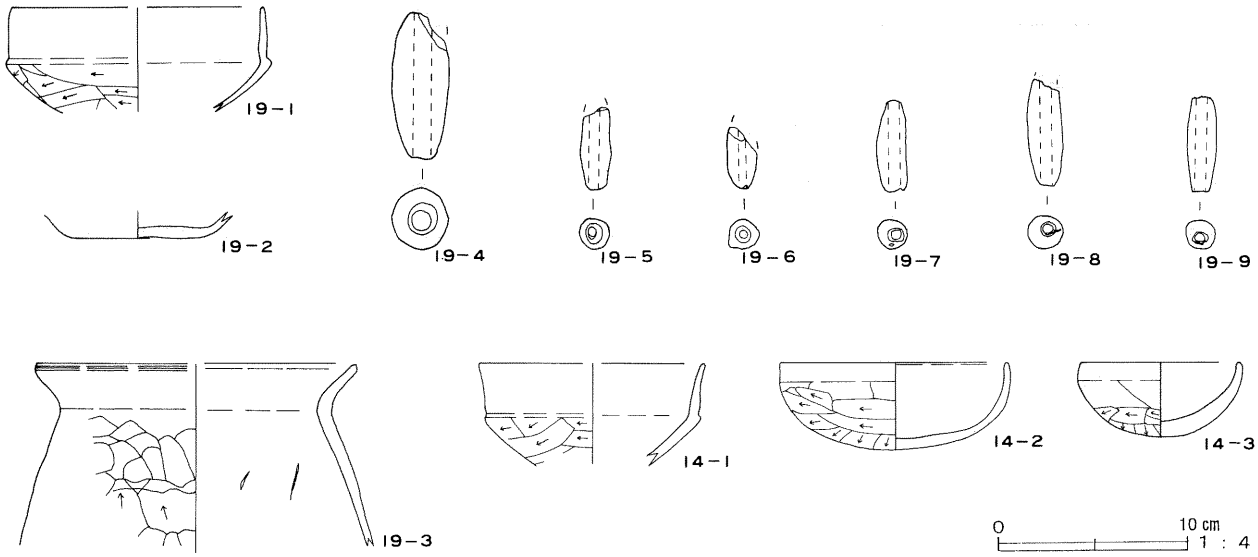
長さ11.89m、幅0.30m前後、確認面からの深さは12cm程である。断面形は舟底状を呈する。覆土はオリーブ褐色の粘土及び砂（1・2層）からなり、酸化鉄を含んでいた。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

22号溝跡
（第64図）
（第65図）

Y～AA—14グリッドに位置する。第一確認面から検出された。23号溝の東側を北東方向から南西方向に走っている。河川埋没後に掘られている。

長さ8m、幅0.19～0.34m、確認面からの深さは17cm程である。断面形は縦長の逆台形状を呈する。覆土は灰色砂による単一層（1層）であった。混入物はみられない。自然堆積と



第66図　B区溝跡出土遺物

第33表　B区溝跡出土遺物観察表　（第66図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(13.4)	-	-	③④①	②	明赤褐	上位1/3	19号溝跡出土。
2	土師器杯	-	-	6.9	⑥②①④	②	灰白	底部のみ	19号溝跡出土。
3	土師器甕	(16.8)	-	-	⑥④①②	②	橙	口縁部1/4	19号溝跡出土。
4	土錘	長さ 7.8	最大径 3.0	孔径 1.0				一部欠	19号溝跡出土。
5	土錘	長さ -	最大径 1.6	孔径 0.5				一部欠	19号溝跡出土。
6	土錘	長さ -	最大径 1.6	孔径 0.4				一部欠	19号溝跡出土。
7	土錘	長さ 4.9	最大径 1.6	孔径 0.6				完形	19号溝跡出土。
8	土錘	長さ -	最大径 1.8	孔径 0.6				一部欠	19号溝跡出土。
9	土錘	長さ 0.5	最大径 1.6	孔径 0.6				完形	19号溝跡出土。
1	土師器杯	12.0	-	-	③④①	②	橙	上位1/9	14号溝跡出土。
2	土師器杯	12.2	4.6	-	③①④	②	橙	3/5	14号溝跡出土。外面煤付着。
3	土師器杯	8.5	3.9	-	③①④⑥	②	赤	上位2/5欠	14号溝跡出土。外面黒斑有。

考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

23号溝跡　Z・AA—14・15グリッドに位置する。第一確認面から検出された。22号溝の西側を北東方向から南西方向に走っている。直接的な重複関係にないが、下部に畠跡がみられた。

（第64図）

（第65図）　長さ9.22m、幅0.21～0.42m、確認面からの深さは22cm程である。断面形は箱状に掘り込まれている。覆土は、上層に灰色砂（1層）、下層に灰色ないし暗赤褐色粘土（2・3層）がみられた。1・2層は酸化鉄を含んでいた。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

24号溝跡（第64図）（第65図）　X～Z－15・16グリッドに位置する。第一確認面から検出された。X－15グリッドからZ－16グリッド北東部までは北東方向から南西方向に走っているが、Z－16グリッド中央付近で北西方向へ向きを変えている。L字状を呈する。河川埋没後に掘られており、Y－15グリッドで僅かに29号住居跡を切っている。

長さ18.32m、幅0.42～0.78m、確認面からの深さは44cm程である。断面形は舟底状を呈する。覆土は、上・中層に褐灰色粘土（1・2層）、下層に灰黄褐色砂（3層）がみられた。2層に酸化鉄を多量含んでいた。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

4　土　坑

土坑は44基検出されている。B区のほぼ全面に分布するが、概して南東部に集中してみられる。すべて第一確認面より検出されており、他の遺構を切っている。また、河川埋没後に構築されているものがほとんどである。遺物を含む土坑が極めて少なく、各土坑の時期はほとんど分からない。

土坑はその形態から五つのタイプに分類される(熊教委　2001)。1タイプは小型で円形を呈するもの、2タイプは小型で浅く、長円形もしくは長方形を呈するもの、3タイプは小型で深く、円形を呈するもの、4タイプは大型で深く、方形もしくは長方形を呈するもの、5タイプはその他の不整形を呈するものである。五つのタイプのなかで主体となるのは4タイプであり、これは他の調査区においても同様である。以下、各タイプ別に説明を加えたい。各土坑の詳細については、第34表を参照して頂きたい。

1タイプ　1タイプに属する土坑は、4・9・15号土坑等である。

B区の北西部とほぼ中央に位置する。覆土は褐色系の粘土ないしシルトであり、酸化鉄ブロックを含んでいた。自然堆積と考えられる。

遺物は検出されなかったため、時期は不明であるが、河川埋没後に構築されていることから、河川跡よりは新しい。

2タイプ　2タイプに属する土坑は、2・7・8・12号土坑等である。

主にB区北東部においてみられる。隣接するA区においても調査区北側から同タイプの土坑が検出されていることから、このあたりに集中している。覆土は1タイプ同様、褐色系の粘土ないしシルトであり、酸化鉄を多量含んでいた。自然堆積と考えられる。

遺物が検出されなかったため、時期は不明であるが、1タイプ同様、河川埋没後に構築されていることから、河川跡よりは新しい。

3タイプ　3タイプに属する土坑は、1・3・26・28・34号土坑等である。

B区の南北両端にそれぞれ分布がみられる。覆土は1・2タイプ同様、褐色系の粘土ない

第34表　B区土坑一覧

土坑番号	挿図番号	グリッド	平面形	タイプ	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備　　考
1号土坑	第67図	T-9	円形	3	1.18	0.99	0.57	
2号土坑	第67図	T-10	長方形	2	1.59	0.77	0.19	
3号土坑	第67図	S-12	円形	3	1.55	1.39	0.51	3号住より新。
4号土坑	第67図	R-13	円形	1	0.66	0.56	0.28	
5号土坑	第67図	S-13・14	方形	4	1.36	1.26	0.27	4号住より新。
6号土坑	第67図	U-9	長方形	4	2.63	1.46	0.45	
7号土坑	第67図	U・V-11	長方形	2	1.83	0.63	0.31	15号住より新。
8号土坑	第67図	V-11	長方形	2	1.23	0.68	0.06	
9号土坑	第67図	V-12	円形	1	0.82	0.72	0.32	
10号土坑	第68図	V・W-12・13	長方形	4	2.15	1.56	0.32	11号土坑より新。
11号土坑	第68図	V-13	長方形	4	2.02	1.37	0.28	10号土坑より古。
12号土坑	第68図	W-11	長方形	2	1.44	0.44	0.09	
13号土坑	第68図	W-12	円形	5	—	—	0.83	10号溝より古。河川跡との新旧不明。
14号土坑	第68図	V・W-12・13	方形	4	2.04	1.95	0.13	
15号土坑	第69図	W-13	円形	1	1.11	0.92	0.12	
16号土坑	第69図	Y-11	長方形	4	3.56	3.09	0.97	
17号土坑	第69図	X・Y-12	方形	4	1.52	1.53	0.45	
18号土坑	第69図	Y-12	長方形	4	2.03	1.43	0.44	
19号土坑	第69図	AA-11・12	長方形	4	2.16	1.82	0.27	
20号土坑	第70図	Z・AA-12	長方形	4	3.40	1.43	0.65	
21号土坑	第70図	Z・AA-13	長方形	4	2.51	2.05	0.80	33号住より新。
22号土坑	第70図	Y-14	長方形	4	2.99	0.92	0.11	28号住より新。
23号土坑	第70図	AA-13	長方形	4	2.47	2.08	0.73	
24号土坑	第71図	AA・AB-12	不整形	4	2.63	2.65	1.25	
25号土坑	第71図	AB-12	長方形	4	2.92	1.93	0.71	
26号土坑	第71図	AA・AB-12	円形	3	1.37	0.94	0.67	
27号土坑	第71図	AA・AB-12・13	長方形	4	2.40	1.45	0.22	
28号土坑	第71図	AB-12	円形	3	0.92	0.92	0.55	
29号土坑	第72図	AA-13	方形	4	2.34	2.18	0.41	31・33号土坑より新。
30号土坑	第72図	AA-13	長方形	4	2.46	1.43	0.55	32・33号土坑より新。
31号土坑	第72図	AA-13	長方形	4	2.22	1.94	0.49	29号土坑より古。32・33号土坑より新。
32号土坑	第72図	AA-13	方形	4	—	—	0.30	
33号土坑	第72図	AA-13	長方形	4	—	2.35	0.45	29～32号土坑より古。
34号土坑	第73図	AA・AB-14	円形	3	2.32	2.08	0.64	
35号土坑	第73図	AA-15	長方形	4	2.83	1.58	0.82	
36号土坑	第73図	AA-15	長方形	4	3.16	1.70	0.98	36号住より新。
37号土坑	第74図	AA-16	長方形	4	2.77	1.70	0.71	
38号土坑	第74図	AB-12	長方形	4	2.38	1.93	0.33	
39号土坑	第75図	AB・AC-13	長方形	4	—	1.71	0.12	
40号土坑	第75図	AB・AC-12・13	長方形	4	—	2.28	0.43	
41号土坑	第75図	AB-13	方形	4	2.01	1.97	0.59	42号土坑より新。
42号土坑	第75図	AB-12・13	方形	4	—	—	0.26	39号土坑より古。42号土坑より新。
43号土坑	第74図	AB-13	長方形	4	2.73	1.40	0.80	44号土坑より新。
44号土坑	第74図	AB-13	不整形	5		—	0.64	43号土坑より古。

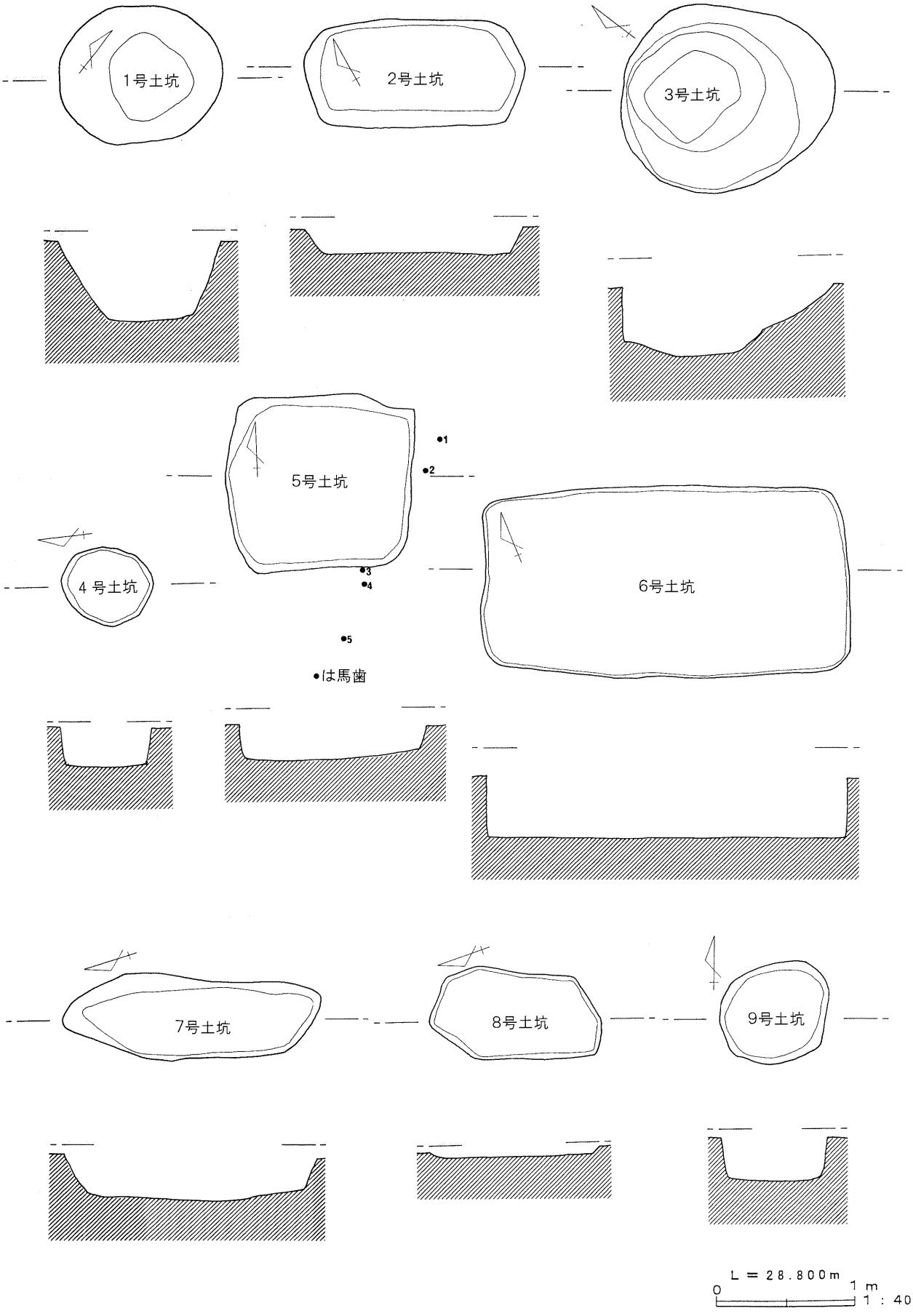
しシルトであった。自然堆積と考えられる。

遺物は34号から土師器皿（第76図34－1）が一点検出されただけで、その他の土坑からは検出されなかった。皿はロクロ成形によるものであり、外面に煤の付着がみられた。底部は未調整で、回転糸切り痕を残す。平安時代末のものである。

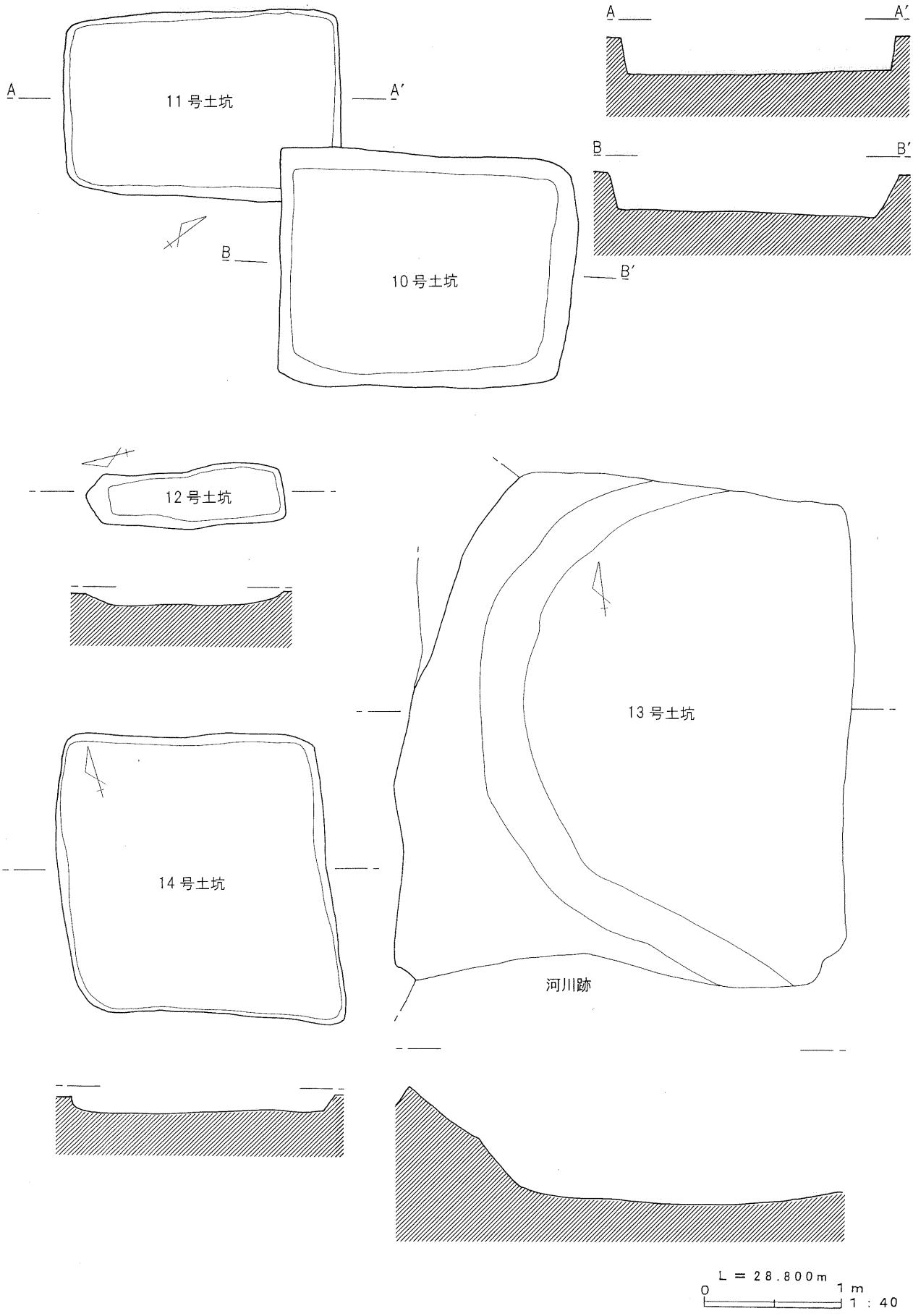
土坑は、河川埋没後に構築されており、34号からは平安時代末の遺物が検出されていることから、平安時代末頃のものと考えられる。

4タイプ　4タイプに属する土坑は、5・6・10・11・14・16～25・27・29～33・35～43号土坑等であり、最も多く検出されている。

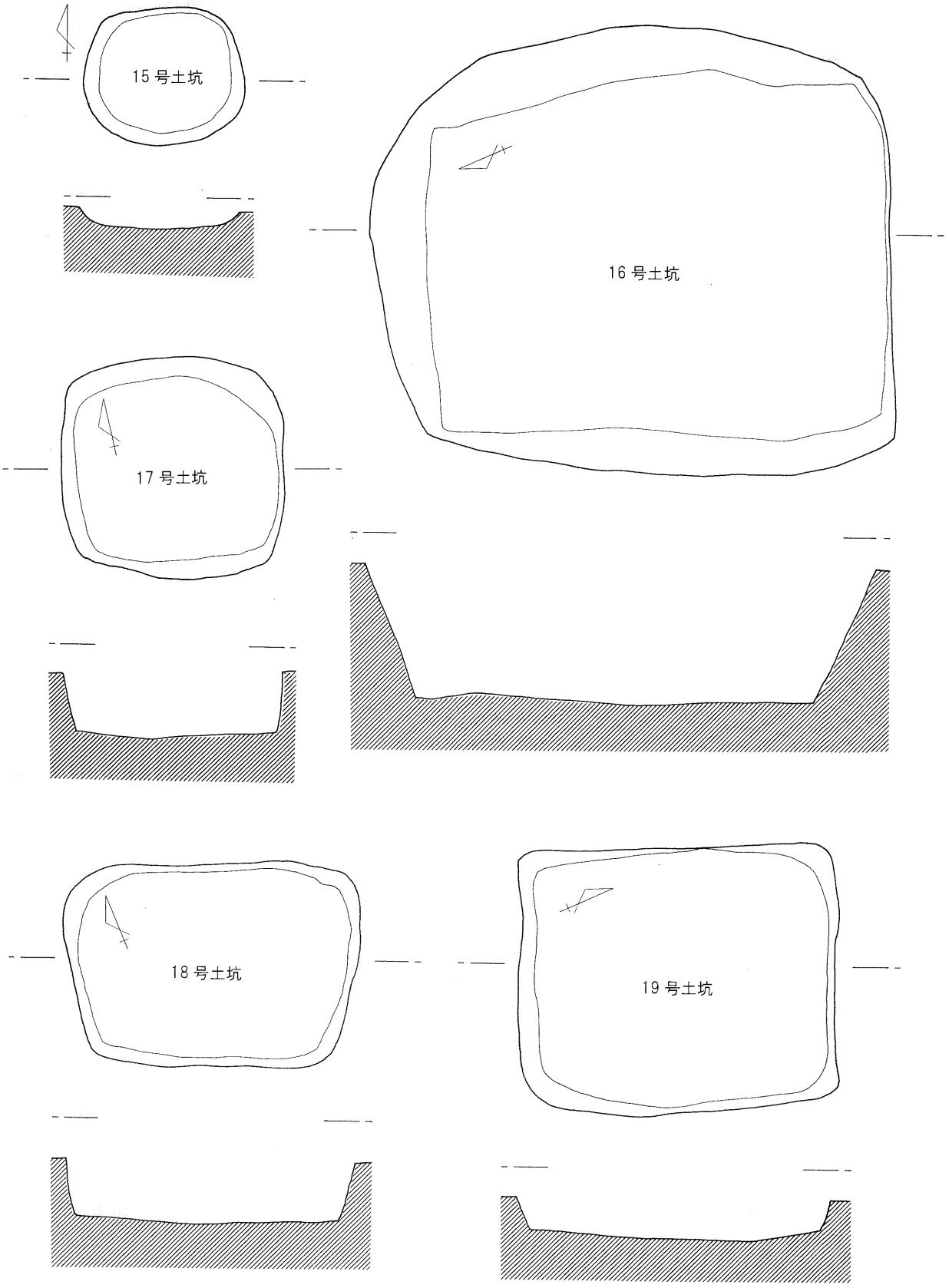
主にB区の南東部に集中してみられ、A区でも南側から同タイプの土坑がまとまって検出


1号土坑
2号土坑
3号土坑
5号土坑
4号土坑
6号土坑
7号土坑
8号土坑
9号土坑
•1
•2
•3
•4
•5
•は馬歯
L＝28.800m
0
1m
1：40

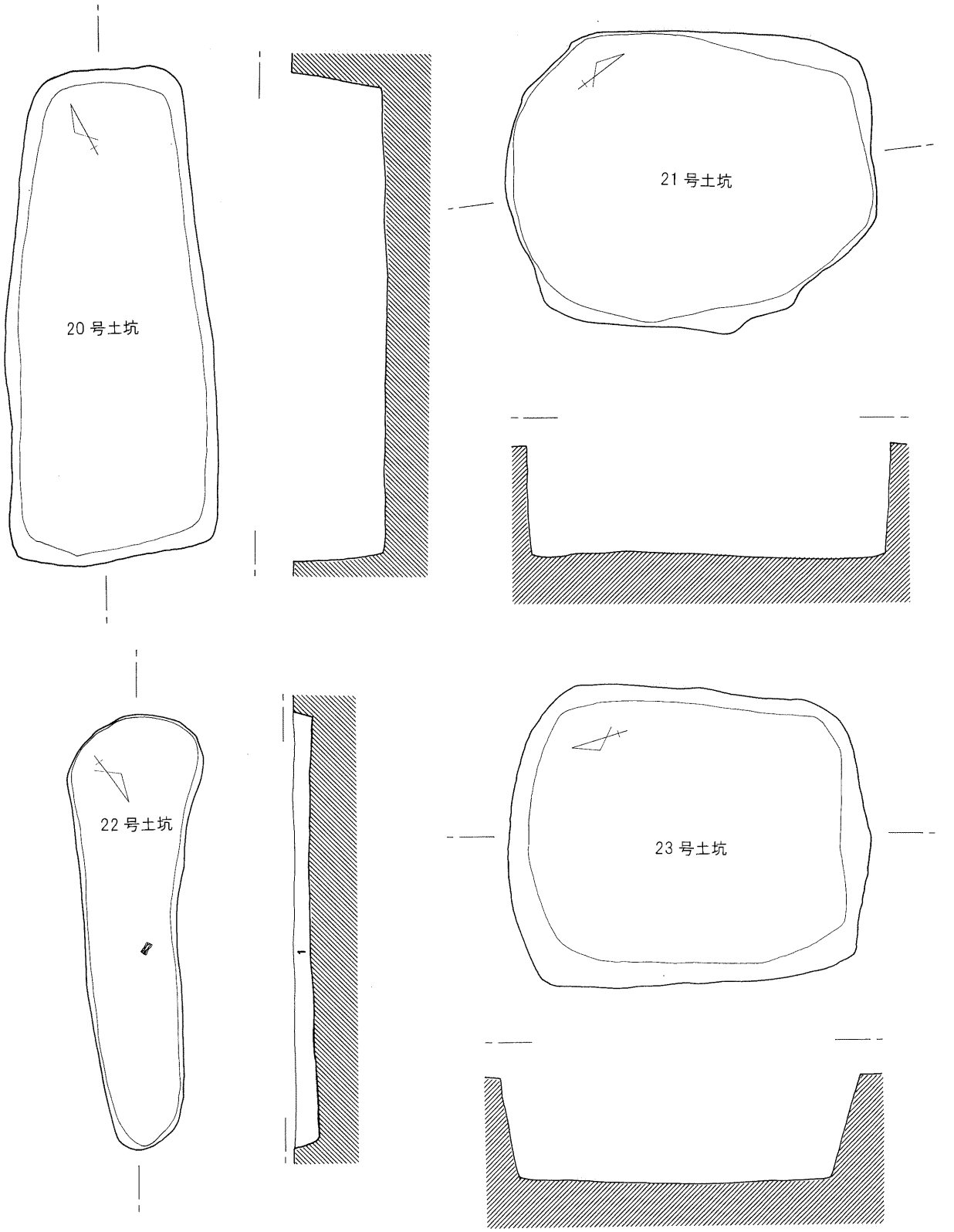
第67図　B区土坑(1)



第68図　B区土坑(2)



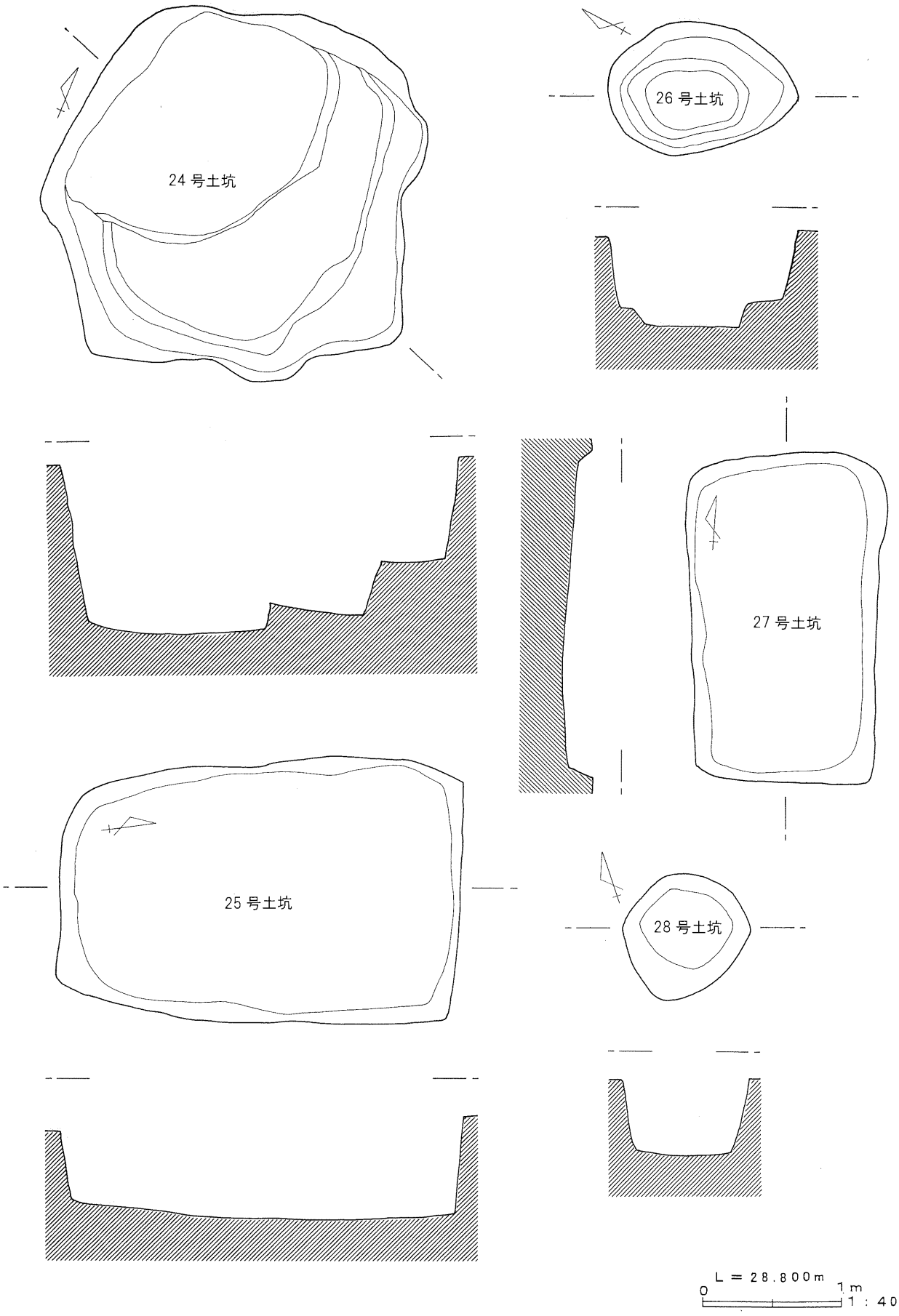
第69図　B区土坑(3)



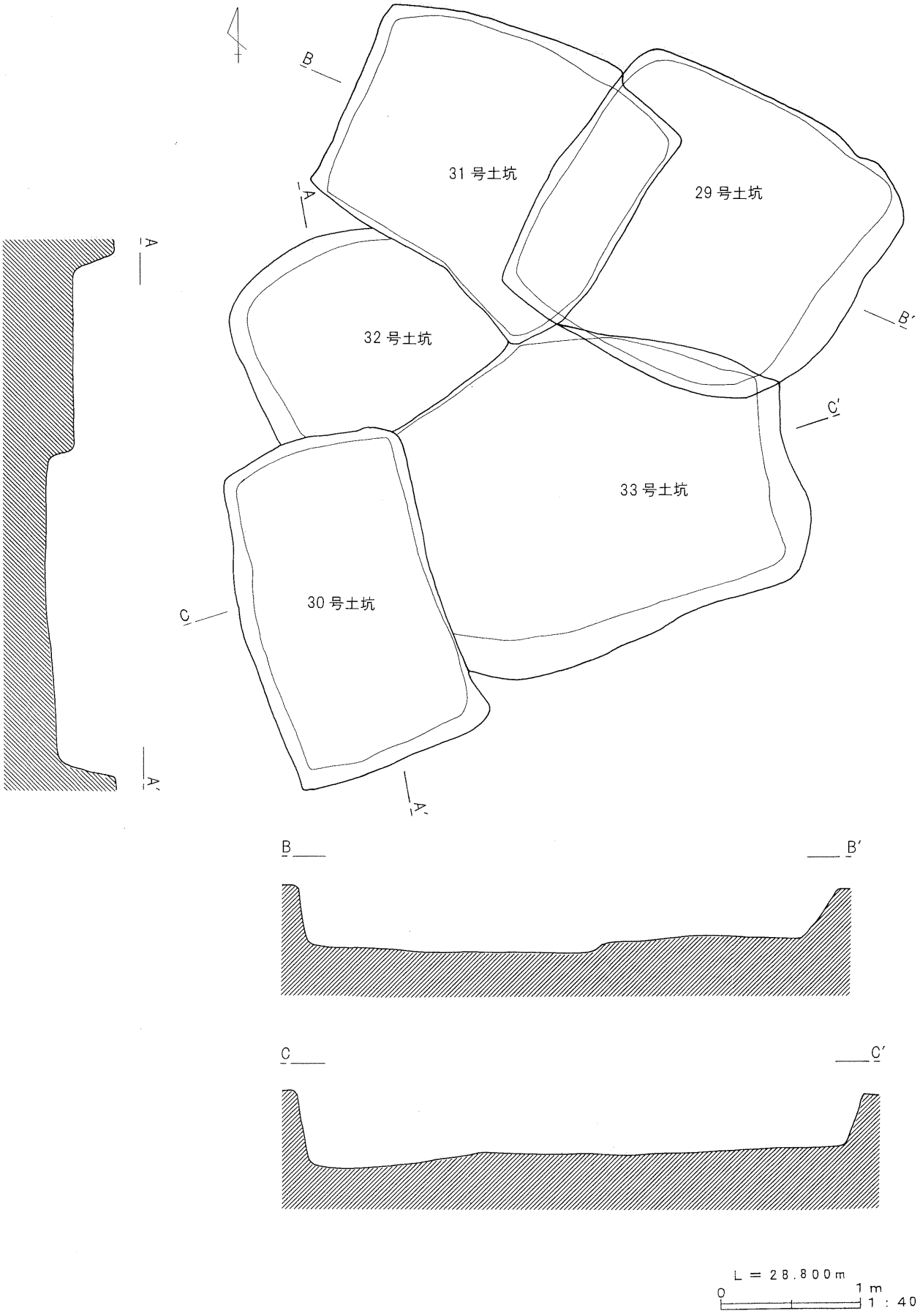
22 号土坑

1　灰色(10YR6/1)砂。酸化鉄(少量)を含む。

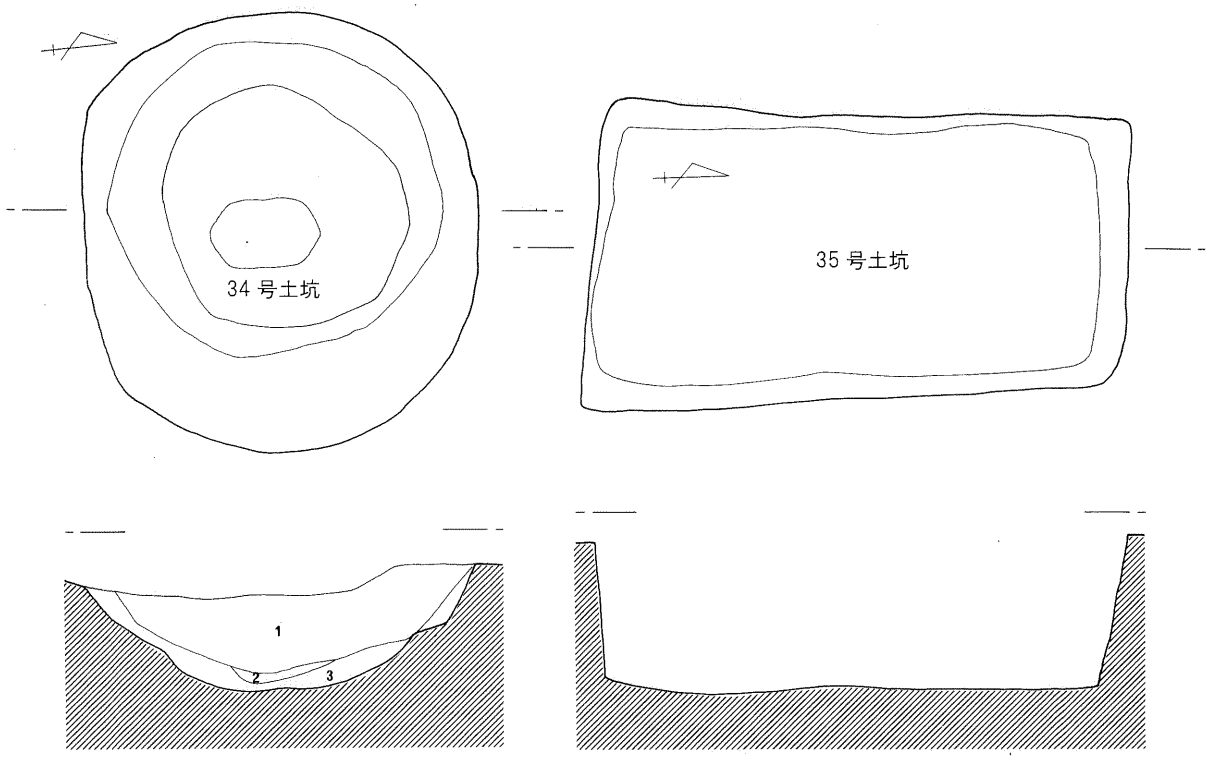
第70図　B区土坑(4)



第71図　B区土坑(5)

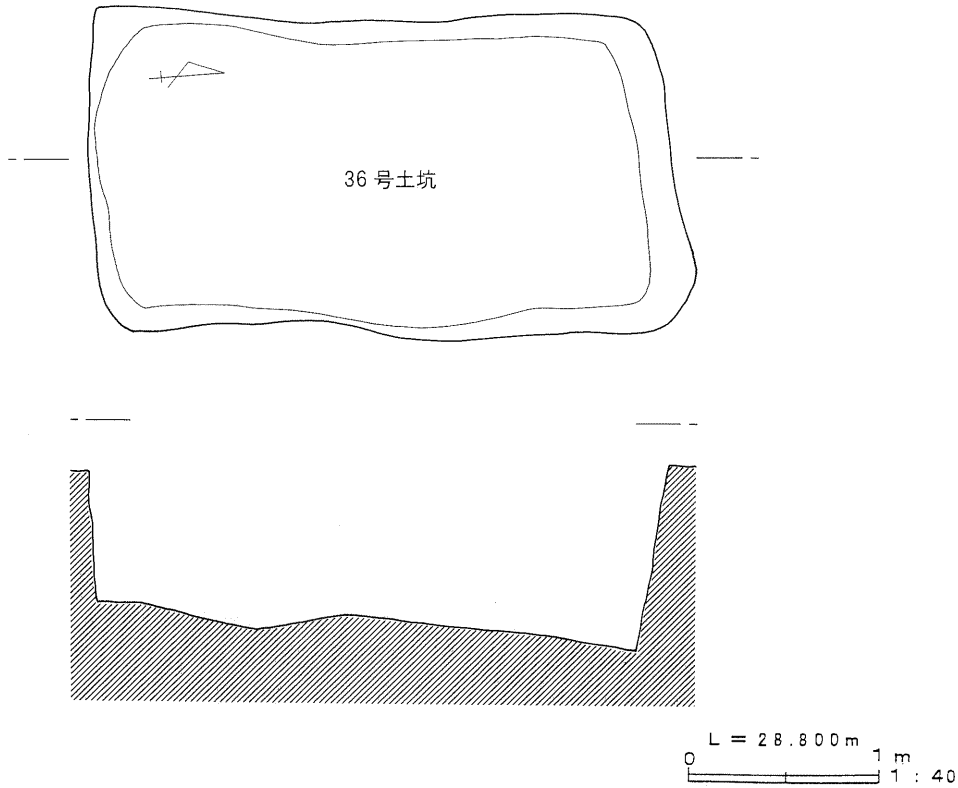


第72図　B区土坑(6)

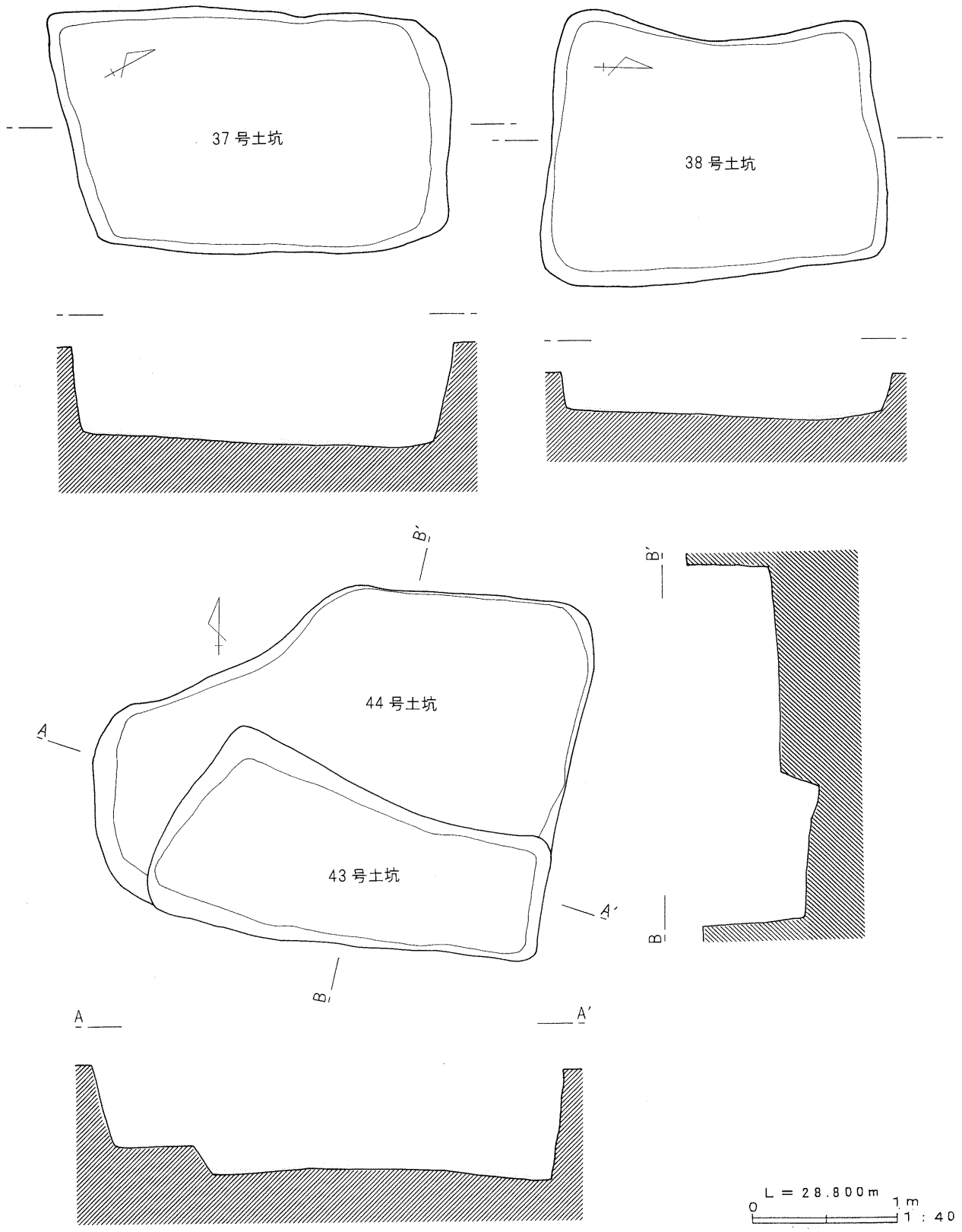


34 号土坑土層

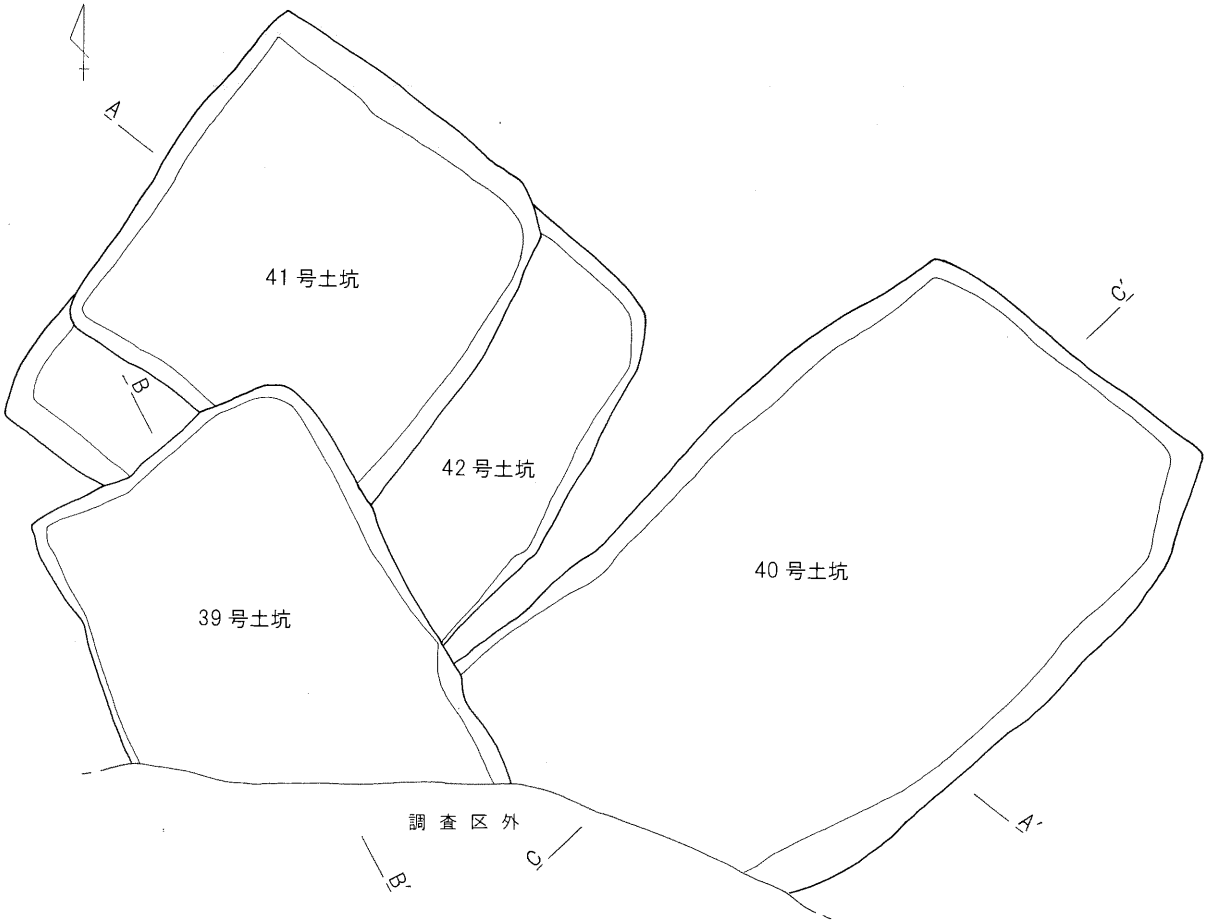
1　暗褐色(7.5YR3/4)粘土。褐灰色粘土粒・ブロックを含む。
2　黒色(10YR2/1)炭化物層。
3　黄灰色(2.5Y6/1)粘土。炭を含む。

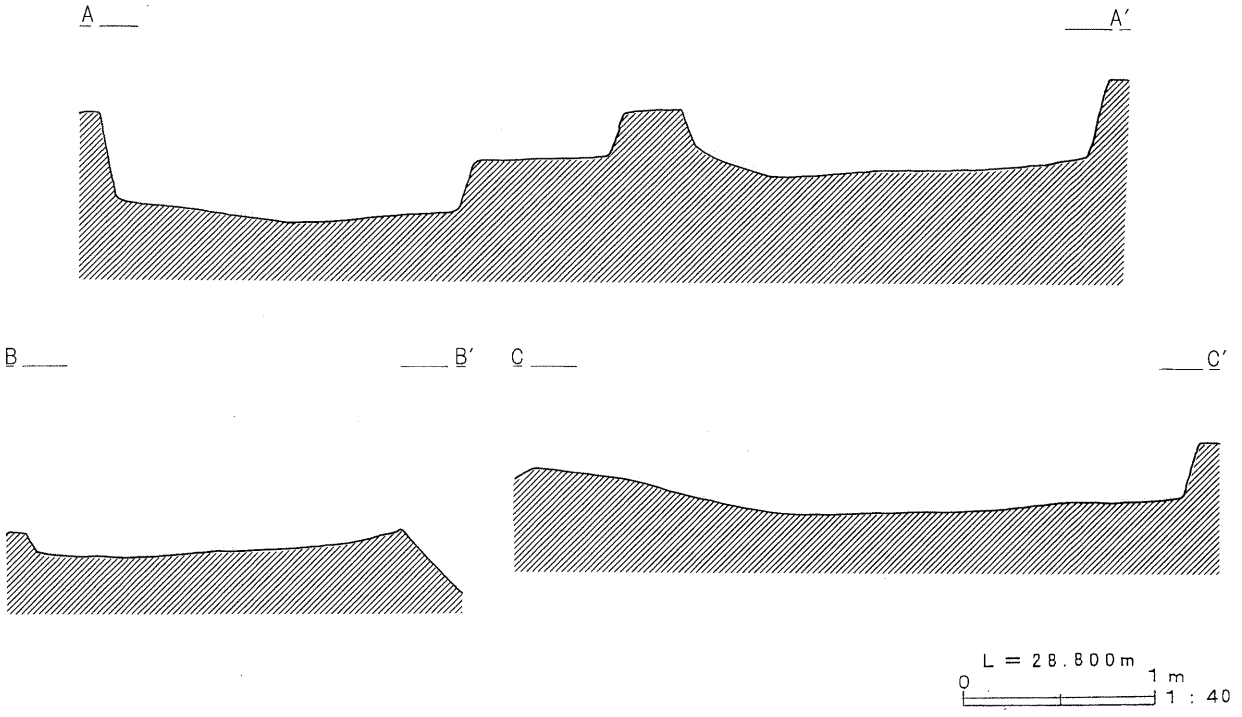


第73図　B区土坑(7)



第74図　B区土坑(8)





第75図　B区土坑(9)

されている。覆土には多量の粘土ブロックを含んでおり、人為的に埋め戻されたものと考えられる。主に長軸を南北方向に向けているが、同タイプの土坑同士で重複関係にある29～33号土坑や39～42号土坑は、軸方向が様々である。

遺物は、24号から須恵器杯（第76図№24－1）が検出されただけである。杯は口径推定13.4cmを測り、口縁部がやや外反する。底部は未調整で、回転糸切り痕を残す。末野産。9世紀中頃のものである。

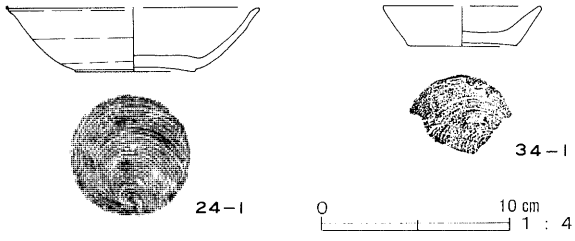
その他の土坑から遺物は検出されなかったが、5号の周辺からは馬の歯が散らばって検出された。本土坑に伴うものかどうかは不明である。

土坑は、河川埋没後に構築されており、遺物が検出された24号土坑からみて、平安時代前半のものと考えられる。

5タイプ　5タイプに属する土坑は、13・44号土坑である。

13号は半円状を呈するが、唯一河川跡との新旧関係が不明である。土層断面の観察では河川跡に接続するようにもみえたため、井戸跡ではないと考えられる。

44号はB区の南東部に位置し、43号に切られている。覆土は4タイプと同様、多量の粘土ブロックを含み、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は検出されなかった。本土坑はL字状を呈しているが、これは長方形の土坑が二基重複している可能性も考えられ、覆土や遺物を含まないこと等からみても4タイプに属する土坑としてもいいかもしれない。



第76図　B区土坑出土遺物

第35表　B区土坑出土遺物観察表　（第76図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器杯	(13.4)	3.3	6.4	①②⑥	②	灰	上位3/4欠	24号土坑出土。
1	土師器皿	(8.4)	2.1	5.8	③②④①	②	にぶい黄橙	2/5	34号土坑出土。外面煤付着。

5　井戸跡

井戸跡は17基検出されている。主にB区の西側から検出されている。古墳時代前・後期の住居跡を切っており、河川埋没後に構築されたものが多く、土坑とは重複関係にない。また、土坑同様、すべて第一確認面からの検出である。出土遺物が少ないため、時期決定に苦しむ。

井戸跡も、その形態から五つのタイプに分類される。円形でほぼ直角ないしオーバーハングぎみに掘られた素彫りのタイプ（1タイプ）、円形で、中段の深さまで斜め、それ以降は、ほぼ垂直に掘り込まれたタイプ（2タイプ）、円形で、ほぼ垂直に掘り込まれ、さらに底面中央にピット状の掘り込みを持つタイプ（3タイプ）、円形で、斜めに掘り込まれたタイプ（4タイプ）、平面形が方形ないし長方形で、ほぼ垂直に掘り込まれたタイプ（5タイプ）に分類

される。径は1～1.3m、深さは1.30～1.60m程のものが主体となるが、10号井戸跡は径2.75～2.97mと非常に大きい。なお、タイプ別による分布状況に違いはみられなかった。

以下、タイプ別に述べる。各井戸跡の詳細については、第36表を参照して頂きたい。

1タイプ　1タイプに属する井戸跡は、1・4・6～9・11・12号井戸跡等があり、最も多く検出されたタイプである。調査区北西部に分布する傾向にある。

1号はB区中、最も深く、また断面形も唯一オーバーハングしている。9号は完堀していないため、詳細は不明であるが、1号以外はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はほとんど図示できなかったが、いずれも色調の異なる粘土ないしシルトによる自然堆積層であった。

遺物は、1号井戸跡から須恵器杯(第80図№1－1)、11号井戸跡から須恵器甕(№11－1)が検出されただけである。いずれも破片であり、覆土中からの検出であるため、伴うものかどうかは不明である。1－1は杯の底部片であり、回転糸切り痕が残る。11－1は甕の底部片である。

2タイプ　2タイプに属する井戸跡は、5・15・16号井戸跡である。

調査区北西端及び西側中央付近にみられるが、分布状況に偏りはみられない。規模にバラツキがあるが、深さは0.85～1mと浅い。覆土は黄色系及び灰色系の粘土ないしシルトからなる自然堆積層であった。

遺物は土師器片が検出されたが、図示可能なものはみられない。また、それらの土師器が井戸に確実に伴うものかどうかも不明であった。

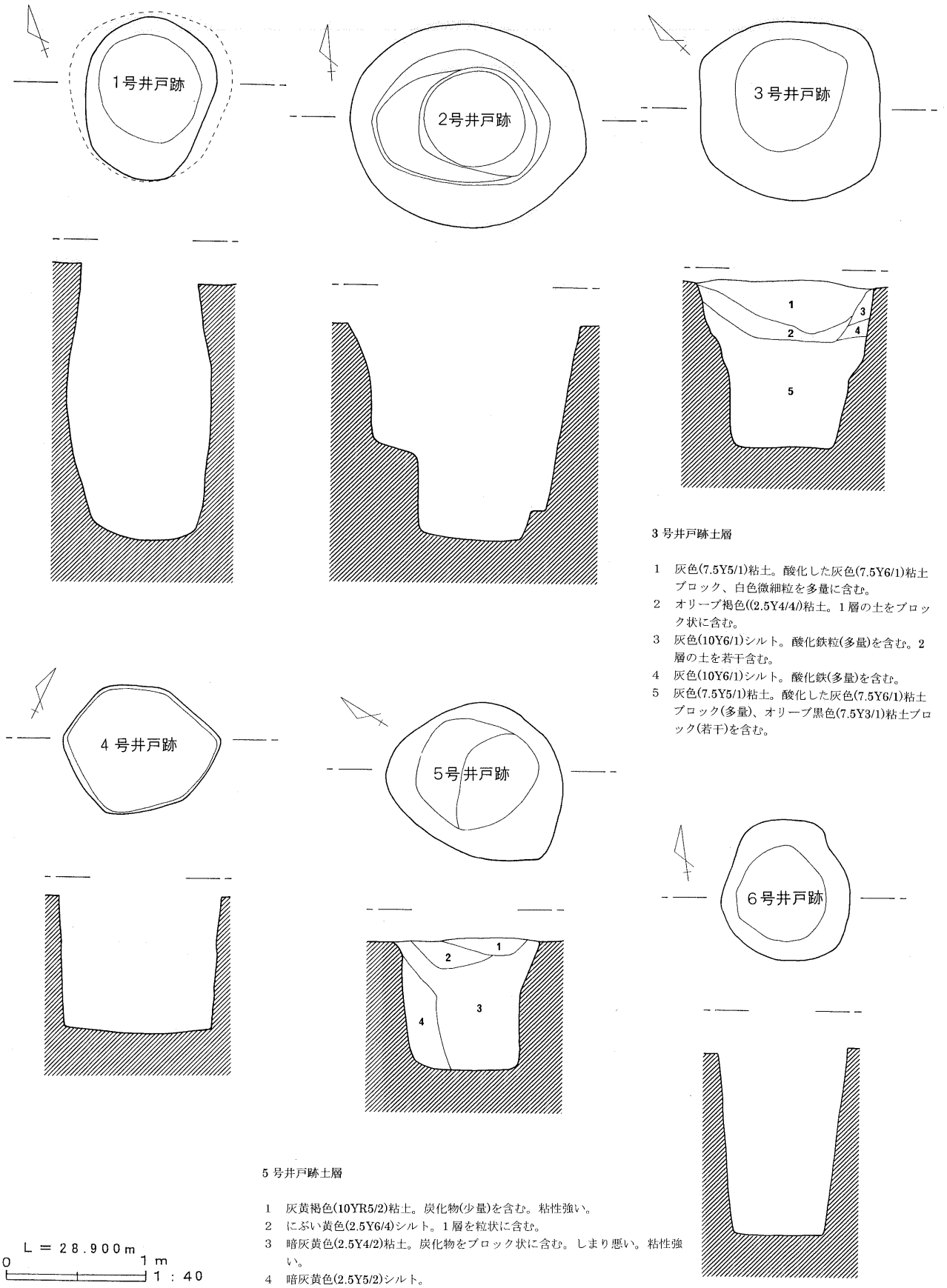
3タイプ　3タイプに属する井戸跡は、2・10号井戸跡である。

調査区北西端及び西側中央付近から検出されたが、分布に偏りはみられない。

規模に違いがみられるが、形態が二段落ちになるものであることから、同一タイプとみな

第36表　B区井戸一覧

土坑番号	挿図番号	グリッド	平面形	タイプ	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備　考
1号井戸	第77図	R-13・14	円形	1	1.17	0.92	1.92	3号畠跡より新。
2号井戸	第77図	S-13	円形	3	1.67	1.46	1.54	4号畠跡より新。
3号井戸	第77図	U・V-11	方形	5	1.28	1.27	1.19	
4号井戸	第77図	V-11	円形	1	1.10	0.94	0.97	17号住より新。
5号井戸	第77図	U-13	円形	2	1.28	1.10	0.95	
6号井戸	第77図	U-14	円形	1	1.02	0.91	1.33	4号畠跡より新。
7号井戸	第78図	U・V-14	円形	1	0.99	0.95	0.69	4号畠跡より新。
8号井戸	第78図	W-15	円形	1	1.11	1.01	1.66	
9号井戸	第78図	W・X-14	円形	1	0.99	0.87	—	6号畠跡より新。
10号井戸	第78図	W・X-14	円形	3	2.98	2.71	1.65	24号住より新。
11号井戸	第78図	X-15	円形	1	1.34	1.20	1.33	
12号井戸	第79図	Y-16	円形	1	1.11	0.89	0.96	
13号井戸	第79図	Y-15	円形	5	1.32	1.16	0.96	3号堀立柱建物跡より新。
14号井戸	第79図	Z-12・13	円形	4	2.32	2.02	0.98	
15号井戸	第79図	Y・Z-16	円形	2	1.81	1.69	1.32	29号住より新。
16号井戸	第79図	Z-14	円形	2	1.24	1.20	1.02	
17号井戸	第79図	AA-13	長方形	5	0.97	0.70	0.88	



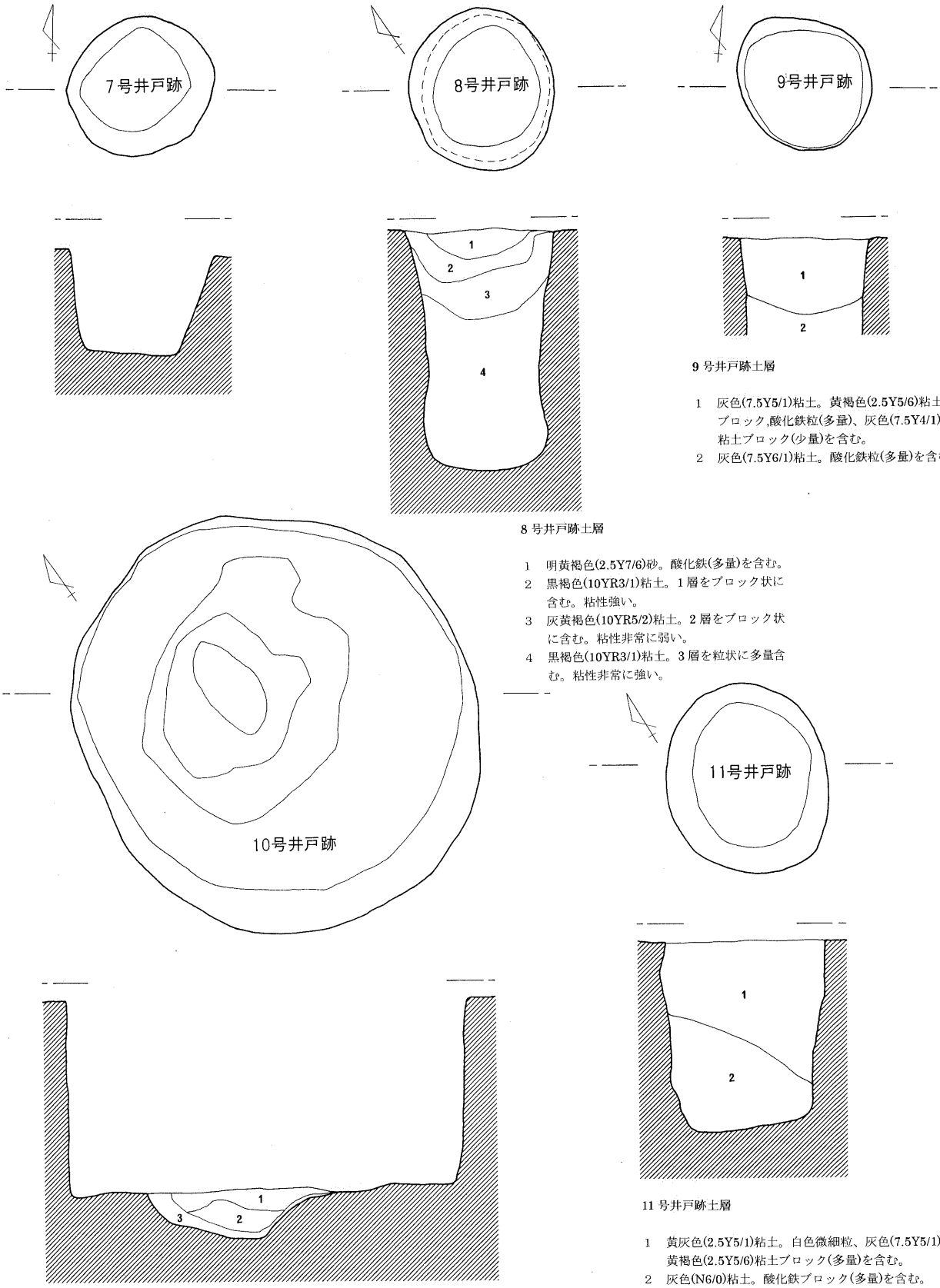
3号井戸跡土層

1　灰色(7.5Y5/1)粘土。酸化した灰色(7.5Y6/1)粘土ブロック、白色微細粒を多量に含む。
2　オリーブ褐色((2.5Y4/4/)粘土。1層の土をブロック状に含む。
3　灰色(10Y6/1)シルト。酸化鉄粒(多量)を含む。2層の土を若干含む。
4　灰色(10Y6/1)シルト。酸化鉄(多量)を含む。
5　灰色(7.5Y5/1)粘土。酸化した灰色(7.5Y6/1)粘土ブロック(多量)、オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土ブロック(若干)を含む。

5号井戸跡土層

1　灰黄褐色(10YR5/2)粘土。炭化物(少量)を含む。粘性強い。
2　にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト。1層を粒状に含む。
3　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土。炭化物をブロック状に含む。しまり悪い。粘性強い。
4　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。

第77図　B区井戸跡(1)



9 号井戸跡土層

1　灰色(7.5Y5/1)粘土。黄褐色(2.5Y5/6)粘土ブロック,酸化鉄粒(多量)、灰色(7.5Y4/1)粘土ブロック(少量)を含む。
2　灰色(7.5Y6/1)粘土。酸化鉄粒(多量)を含む。

8 号井戸跡土層

1　明黄褐色(2.5Y7/6)砂。酸化鉄(多量)を含む。
2　黒褐色(10YR3/1)粘土。1層をブロック状に含む。粘性強い。
3　灰黄褐色(10YR5/2)粘土。2層をブロック状に含む。粘性非常に弱い。
4　黒褐色(10YR3/1)粘土。3層を粒状に多量含む。粘性非常に強い。

11 号井戸跡土層

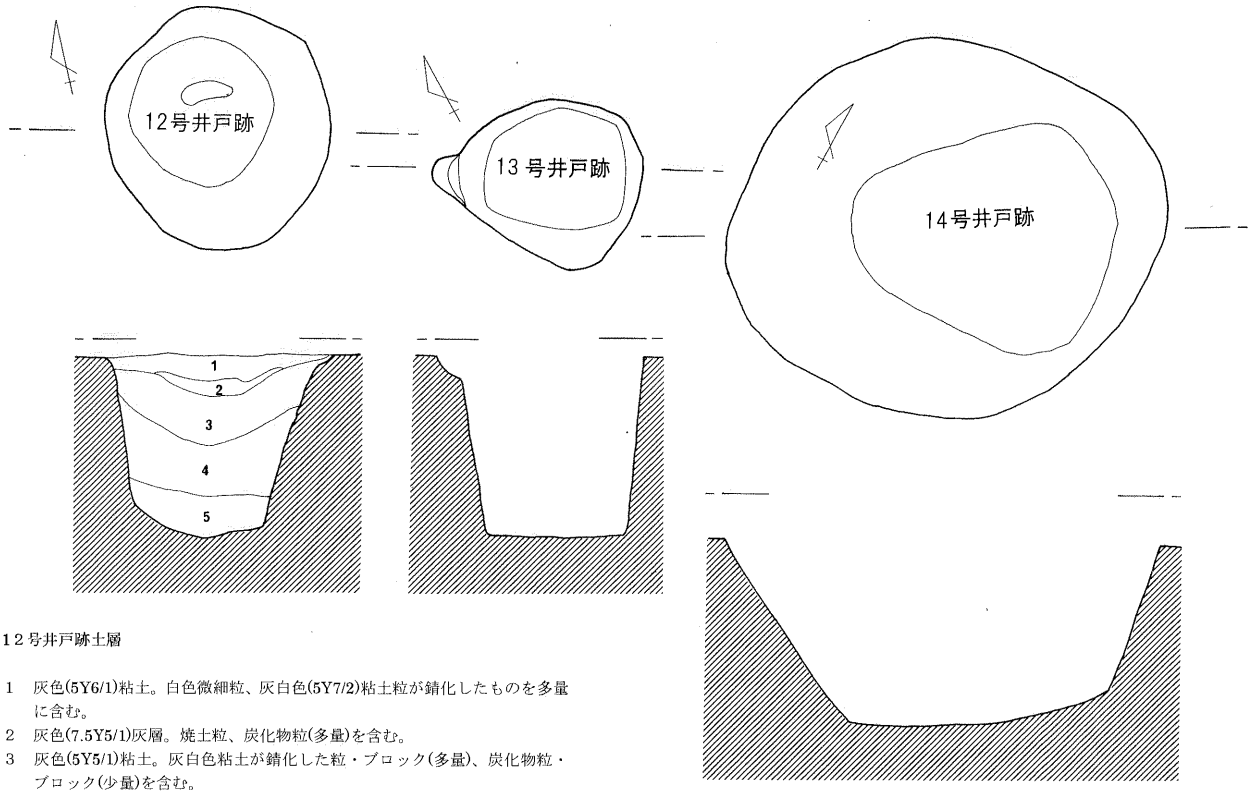
1　黄灰色(2.5Y5/1)粘土。白色微細粒、灰色(7.5Y5/1)・黄褐色(2.5Y5/6)粘土ブロック(多量)を含む。
2　灰色(N6/0)粘土。酸化鉄ブロック(多量)を含む。

10 号井戸跡土層

1　灰色(N5/0)粘土。2層の粘土ブロックを含む。
2　黄褐色(2.5Y5/4)粘土。酸化鉄粒(多量)を含む。
3　灰色(5Y6/1)粘土。黄褐色(10YR5/6)に錆かしたものを帯状に含む。

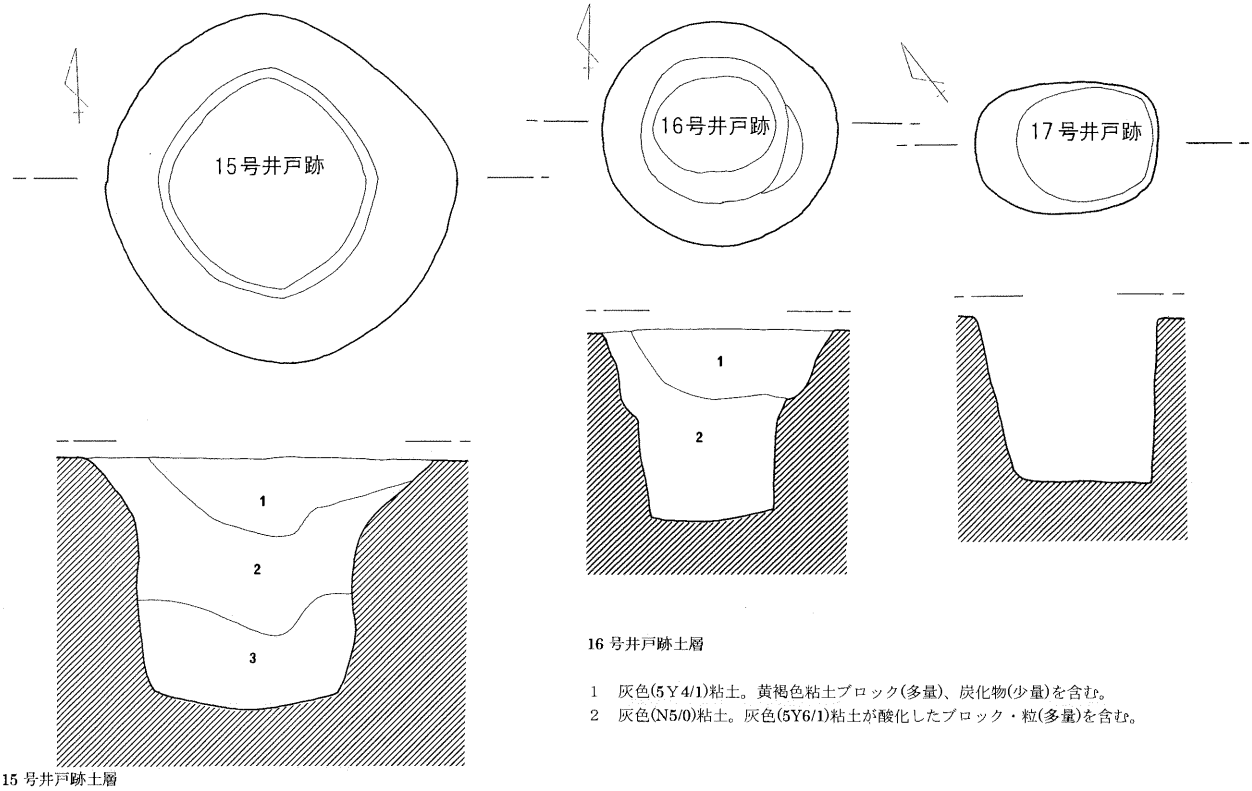
L＝28.800m
0　1m
1：40

第78図　B区井戸跡(2)



12号井戸跡土層

1　灰色(5Y6/1)粘土。白色微細粒、灰白色(5Y7/2)粘土粒が錆化したものを多量に含む。
2　灰色(7.5Y5/1)灰層。焼土粒、炭化物粒(多量)を含む。
3　灰色(5Y5/1)粘土。灰白色粘土が錆化した粒・ブロック(多量)、炭化物粒・ブロック(少量)を含む。
4　オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土。灰オリーブ色(5Y6/2)粘土粒(多量),炭化物(若干)を含む。
5　灰色(5Y5/1)粘土。灰白色粘土が錆化した粒(多量)、腐食土を含む。



15号井戸跡土層

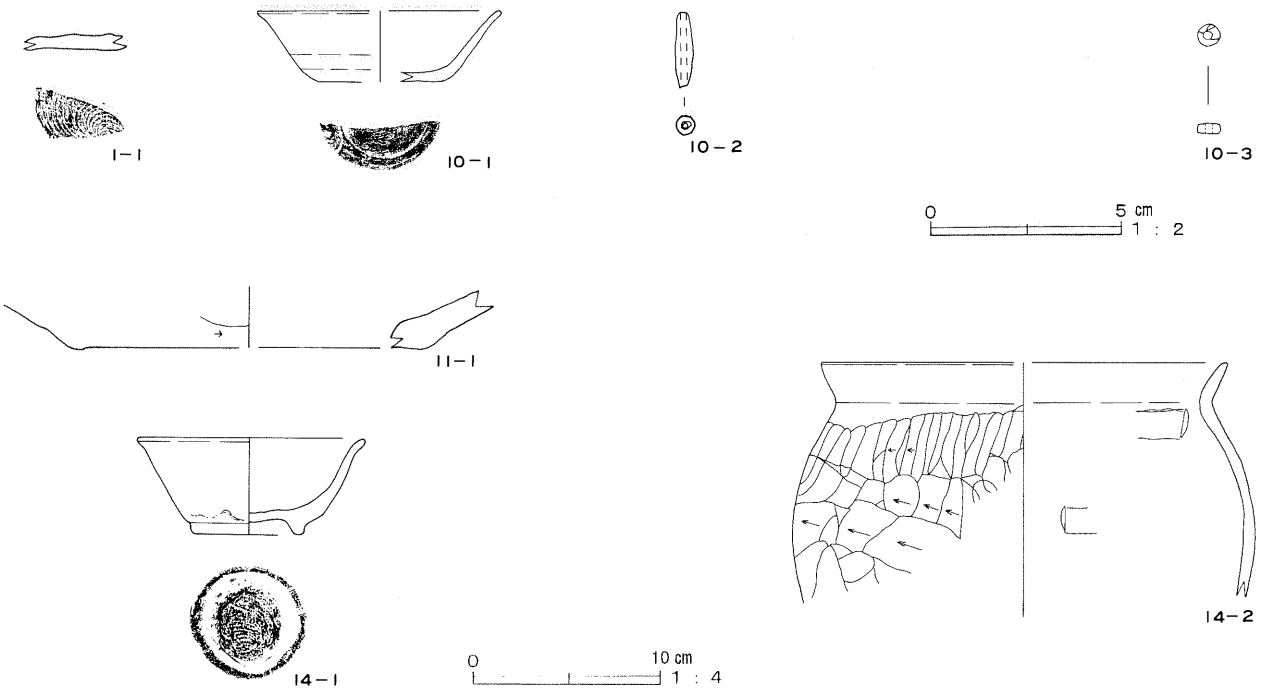
1　灰色(7.5Y4/1)粘土。酸化鉄粒、白色微細粒(多量)、黄褐色(2.5Y5/6)粘土粒・ブロック,焼土粒(少量)を含む。
2　灰色(7.5Y4./1)粘土。酸化鉄粒(多量)、黄褐色(2.5Y5/6)粘土粒・ブロック,焼土粒(少量)を含む。
3　2の土に灰を含む。

16号井戸跡土層

1　灰色(5Y4/1)粘土。黄褐色粘土ブロック(多量)、炭化物(少量)を含む。
2　灰色(N5/0)粘土。灰色(5Y6/1)粘土が酸化したブロック・粒(多量)を含む。

L = 28.800m
0　1m
1 : 40

第79図　B区井戸跡(3)



第80図　B区井戸跡出土遺物

第37表　B区井戸跡出土遺物観察表　（第80図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　考
1	須恵器杯	-	-	-	②③①④	②	にぶい黄橙	一部のみ	1号井戸跡出土。
1	土師器杯	(13.0)	3.7	6.5	③②④①	②	にぶい黄橙	1/2	10号井戸跡出土。内外面煤付着。
2	土錘	長さ　4.0　最大径　1.0　孔径　0.3						完形	10号井戸跡出土。
3	石製臼玉	径　0.6　孔径　0.2　厚さ　0.3						完形	10号井戸跡出土。滑石製。
1	須恵器甕	-	-	(15.0)	①	①	灰	底部一部のみ	11号井戸跡出土。
1	土師器椀	12.2	5.1	6.0	④①②③	②	にぶい黄橙	上位1/2欠	14号出土。内面煤付着。
2	土師器甕	(21.2)	-	-	②④①⑥	②	浅黄橙	口縁部1/4	14号井戸跡出土。

した。深さはともに1.6m前後である。覆土は、2号については図示できなかったが、両遺構ともに最下層に灰色粘土がみられた。他のタイプ同様、酸化鉄を多量含む傾向にあった。

出土遺物は、10号井戸跡から土師器杯（第80図№10－1）、土錘（10－2）、臼玉（10－3）が検出されただけである。10－1はロクロ成形によるものである。底部には回転ヘラ削りが施されている。10－2・3は完形品。いずれも覆土中からの検出であり、伴うものかどうかは不明である。

4タイプ　4タイプに属する井戸跡は、14号井戸跡のみである。

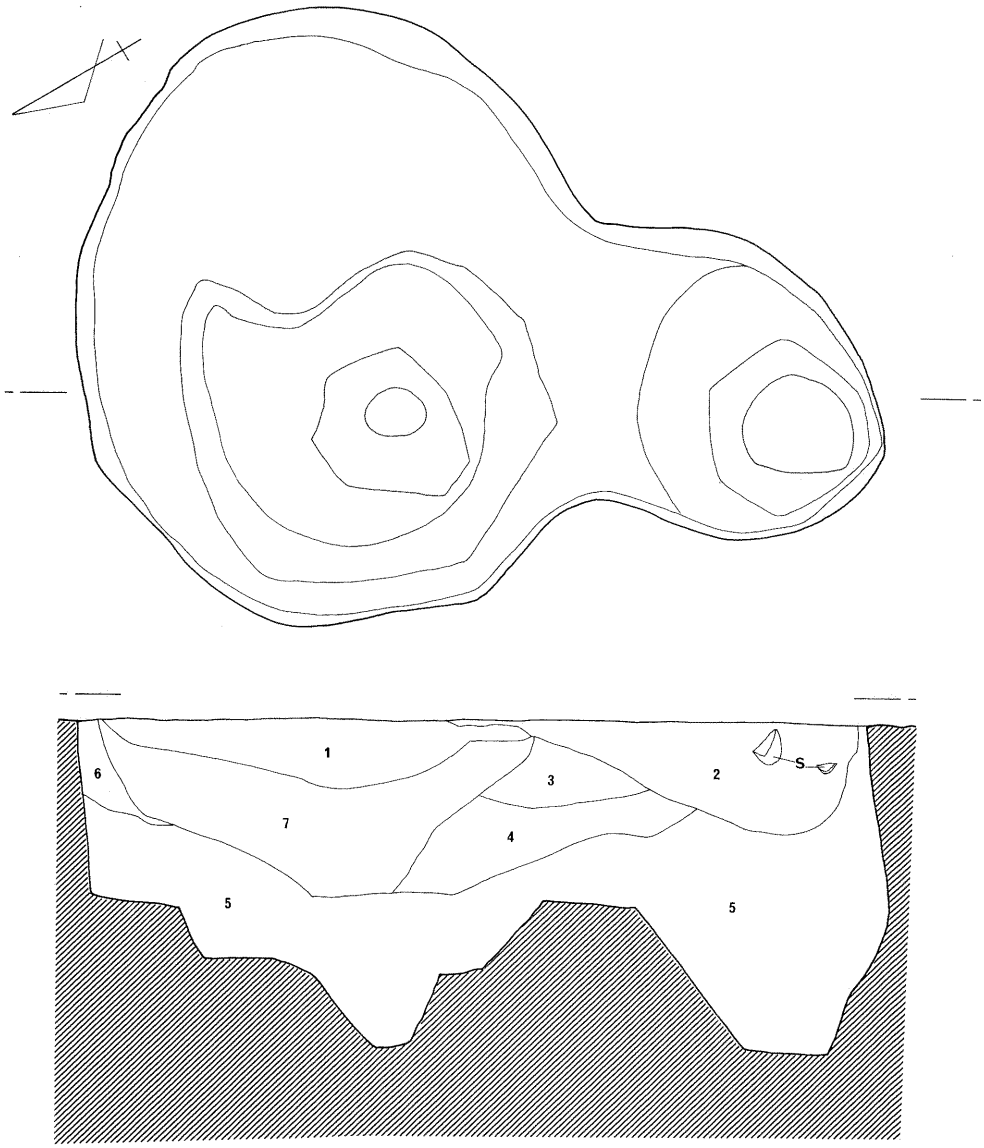
井戸跡の中で唯一、土坑の密集する南東部に位置する。土坑の可能性も考えられたが、径2.34×2.04mと大きく、深さが1m近くあることから井戸跡とした。覆土は図示できなかったが、黄色系の粘土を主体とする自然堆積層であった。酸化鉄を多量含む。

出土遺物は、土師器高台椀（第80図№14－1）、甕（14－2）等がある。14－1はロクロ成形によるものであり、底部に回転糸切り痕を残す。内面に煤の付着がみられた。14－2は口縁部が短く、器壁が全体的に厚い。胴上部は横位のヘラ削りが施されている。

遺物は平安時代末頃のものであることから、14号は同段階のものと考えられる。

5タイプ　5タイプに属する井戸跡は、3・13・17号井戸跡等である。調査区西側に広く点在している。

3号は、径・深さともに13・17号に比べてやや大きい。13・17号は、ほぼ同様の規模である。覆土は3号のみ図示した。粘土ないしシルトによる自然堆積層であり、下層にいくにつれて酸化鉄を多量含む。13・17号は図示できなかったが、3号と同じ様相を呈していた。なお、13号は西側で3号掘立柱建物跡の柱穴を切っている。



1号不明遺構土層

1　黄褐色(2.5Y5/3)シルト。7層を粒・ブロック状に多量含む。
2　黄褐色(2.5Y5/3)シルト。礫(少量)を含む。
3　黄褐色(2.5Y5/3)粘土。ほぼ1層と同質。7層を粒・ブロック状に少量含む。
4　オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト。7層をブロック状に多量含む。
5　オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト。礫、炭化物(極微量)を含む。
6　にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト。オリーブ褐色(7.5Y4/3)粘土粒(多量)を含む。
7　にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト。にぶい褐色(7.5YR5/4)粘土粒(少量)を含む。

0　L＝28.800m　2m
1：60

第81図　B区1号不明遺構

遺物は、土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。また、伴うものかどうかも不明である。

6　不明遺構

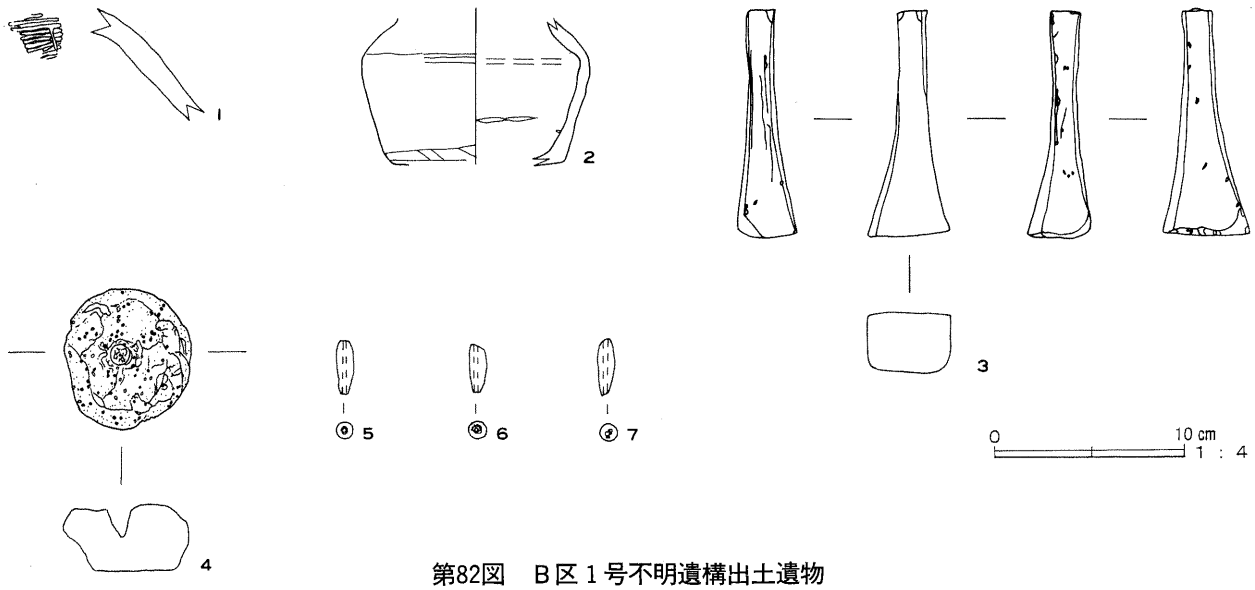
性格不明の遺構は一基のみ検出されている。第一確認面からの検出である。当初は、土坑ないし井戸跡が二つ重複しているものと考えられたが、土層断面の観察では切り合った状況はみられなかったことから、一つの遺構とみなした。性格・用途は不明であるが、酸化鉄がみられなかったことから井戸跡ではないと考えられる。

1号不明遺構
(第81図)

X—14・15グリッドに位置する。24号住居跡を切っており、河川埋没後に構築されている。

長軸4.39m、短軸は南西で1.55m、北東で3.27mを測る。平面形は瓢箪状を呈する。確認面からの深さは南西で1.77m、北東で1.73mを測る。覆土は下層にオリーブ褐色（4・5層)、北東部中層はにぶい黄色（6・7層)、上層に黄褐色（1～3層）の粘土ないしシルトを含む自然堆積層であった。2層と5層に礫を含み、5層には炭化物が微量みられた。

出土遺物（第82図）には、常滑甕（No.1)、備前壺（2)、砥石（3)、凹石（4)、土錘（5～6）等がある。いずれも覆土中からの検出である。1・2はともに破片での検



第82図　B区1号不明遺構出土遺物

第38表　B区1号不明遺構出土遺物観察表　(第82図)

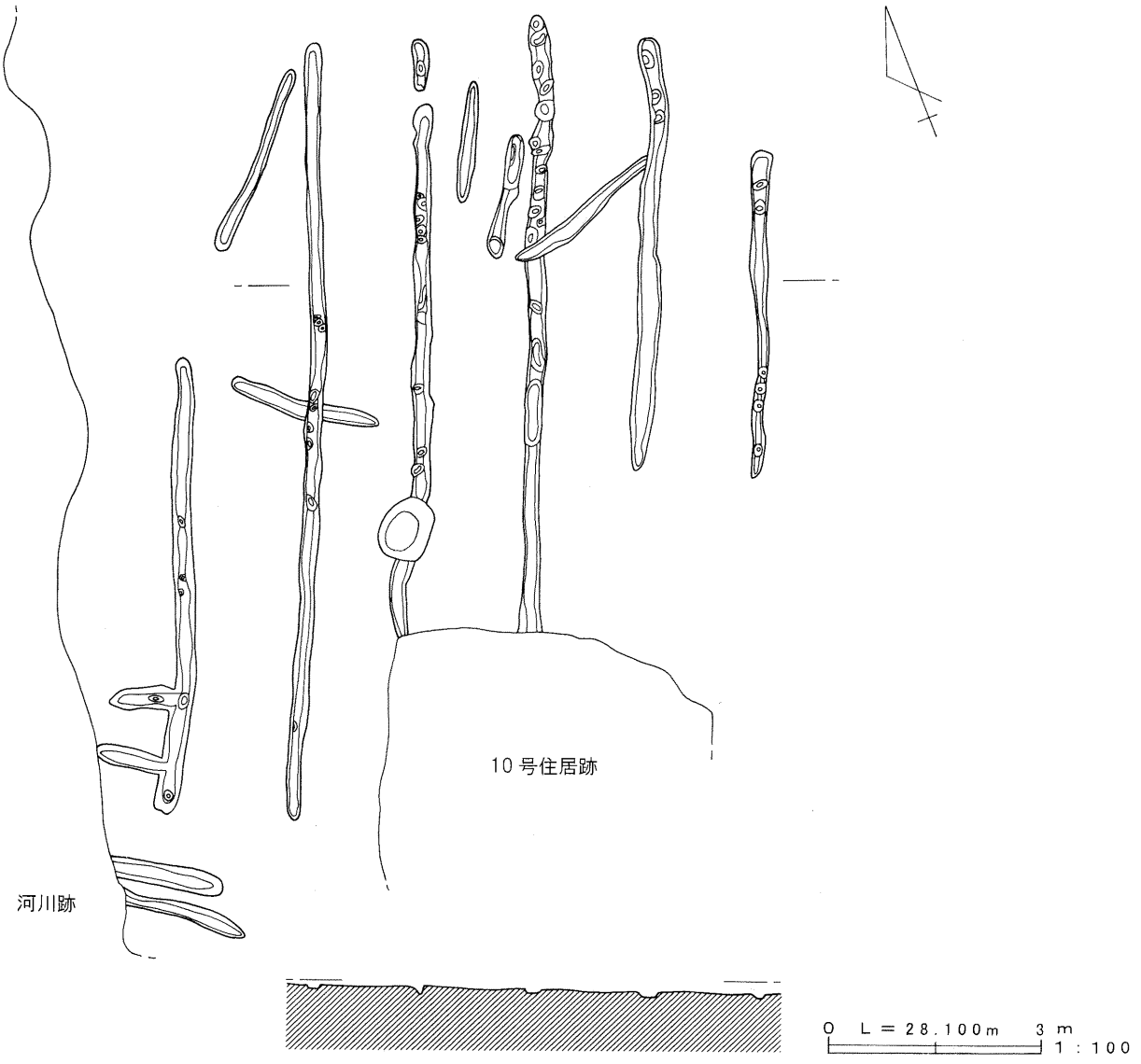
No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	常滑甕	-	-	-			暗オリーブ	一部のみ	釉。
2	備前壺	-	-	(9.2)	③①②⑥	①	明赤褐	1/3	
3	砥石	長さ　12.1　幅　4.5　厚さ　3.2						完形	全面使用。
4	凹石	長さ　7.4　幅　6.7　厚さ　3.5						完形	
5	土錘	長さ　2.9　最大径　0.9　孔径　0.2						完形	
6	土錘	長さ　2.6　最大径　1.0　孔径　0.2						完形	
7	土錘	長さ　3.0　最大径　0.9　孔径　0.3						完形	

出である。３は全面を使用している。完形品。土錘は３点検出された。長さ３cm前後、最大径0.9～１cm、孔径0.2～0.3cmを測る。

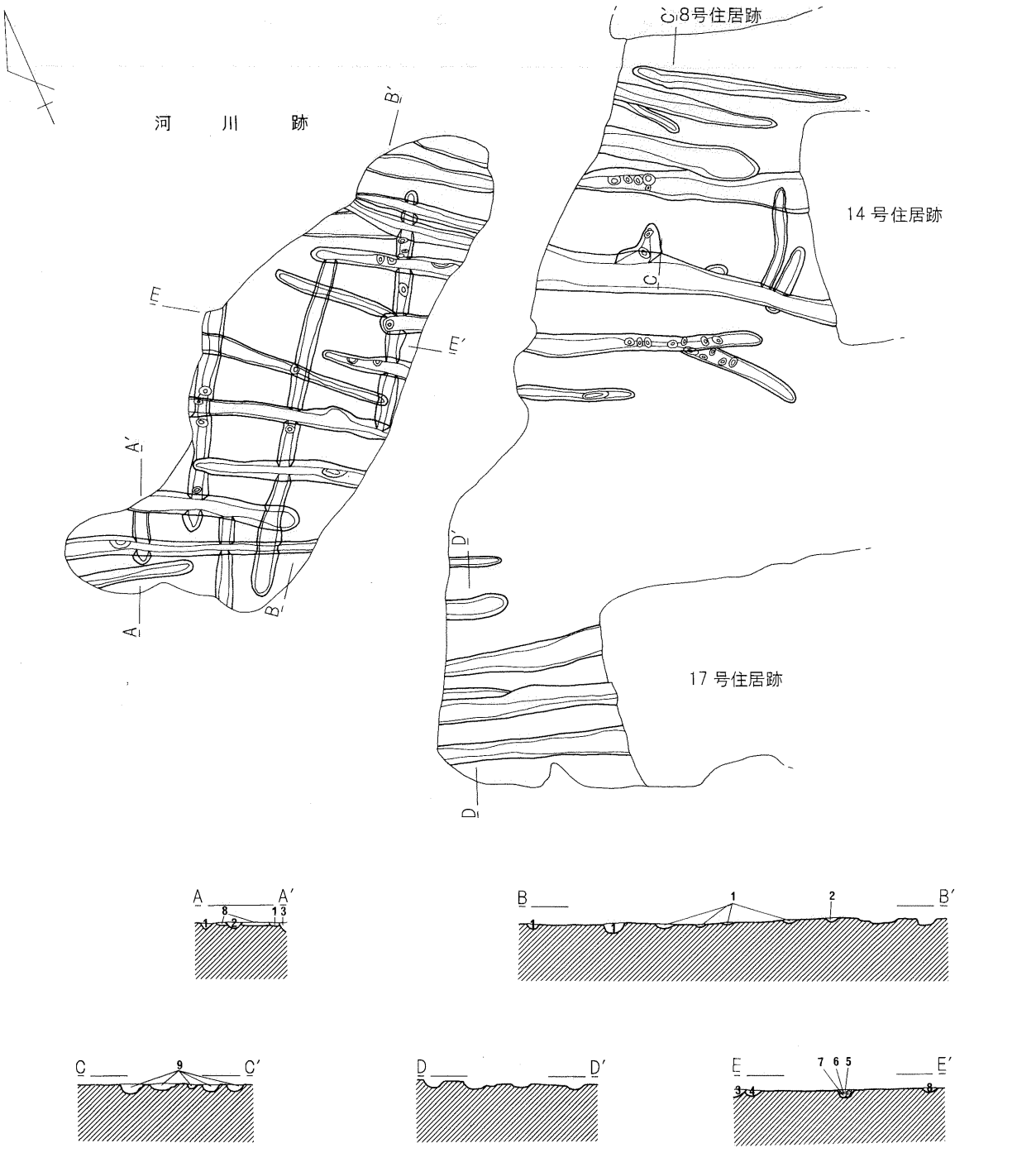
7　畠　跡

畠跡は主にＢ区西側から検出された。確認されたのは、古墳時代前期の住居跡が検出された第二確認面においてであるが、出土遺物中には古墳時代後期のものも含まれ、時期決定に苦しむ。大半が河川跡に切られているため、全体は把握できないが、８ブロックに分けられる。以下、各ブロックについて個別に述べていくこととする。

１号畠跡（第83図）　Ｓ・Ｔ―11・12リッドに位置する。約13×9.5mに亘って検出されたが、西側を河川跡に切られている。南側では10号住居跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。



第83図　Ｂ区１号畠跡



2 号畠跡土層

1　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。マンガン(多量),黄褐色(10YR5/6)粘土ブロック、炭化物(微量)を含む。
2　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。マンガン(多量)を含む。
3　灰色(5Y5/1)粘土。酸化鉄粒(多量)を含む。
4　灰黄褐色(10YR5/2)粘土。灰色(5Y5/1)粘土粒、にぶい黄橙色(10YR7/4)砂(火山灰？)を含む。
5　灰黄褐色(10YR5/2)粘土。黄灰色粘土粒、マンガン(多量)を含む。
6　にぶい黄橙色(10YR7/4)粘土。4 層の砂(火山灰?)を含む。
7　5 層に明黄褐色(10YR6/6)を少量含む。
8　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。黄褐色(10YR5/6)粘土ブロック多量を含む。
9　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土ブロック、マンガンを多量含む。

0　L＝28.100m　3 m
1：100

第84図　B区 2 号畠跡

畝は、ほぼ南北方向へ走るものとほぼ東西方向へ走るもの、南西方向から北東方向へ走るものの三者がみられるが、後二者は僅かであり、ほぼ南北方向へ走るものが主体となる。三者の新旧関係は不明である。

畝の幅は概ね25cm前後であるが、最小で19cm、最大で36cmを測る箇所がみられた。

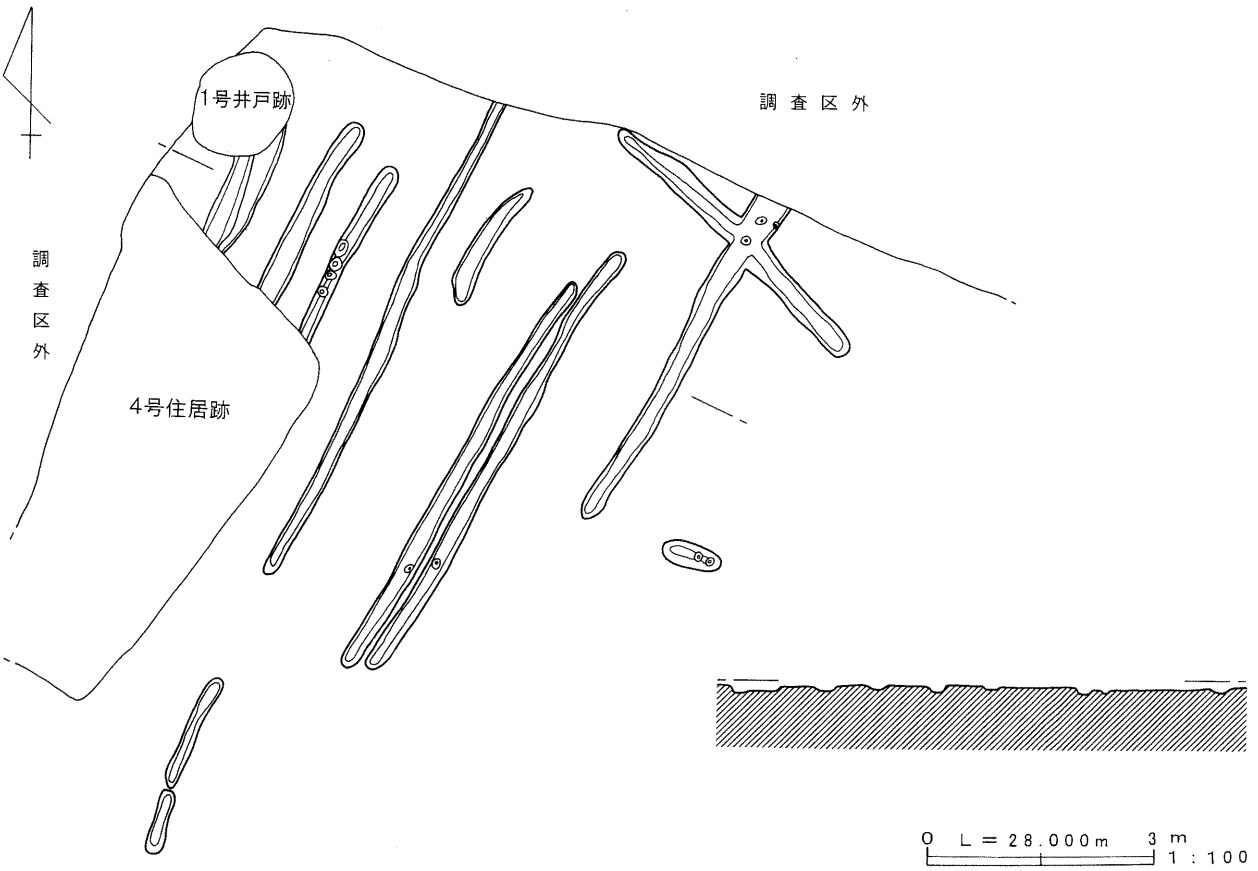
畝間は概ね1.3m前後を測る。確認面からの深さは4～12cmを測り、底面には所々にピット状の掘り込みがみられた。覆土は図示できなかったが、黄色ないし灰色系の粘土層であり、酸化鉄・マンガンを含んでいた。自然堆積と考えられる。

遺物は、土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

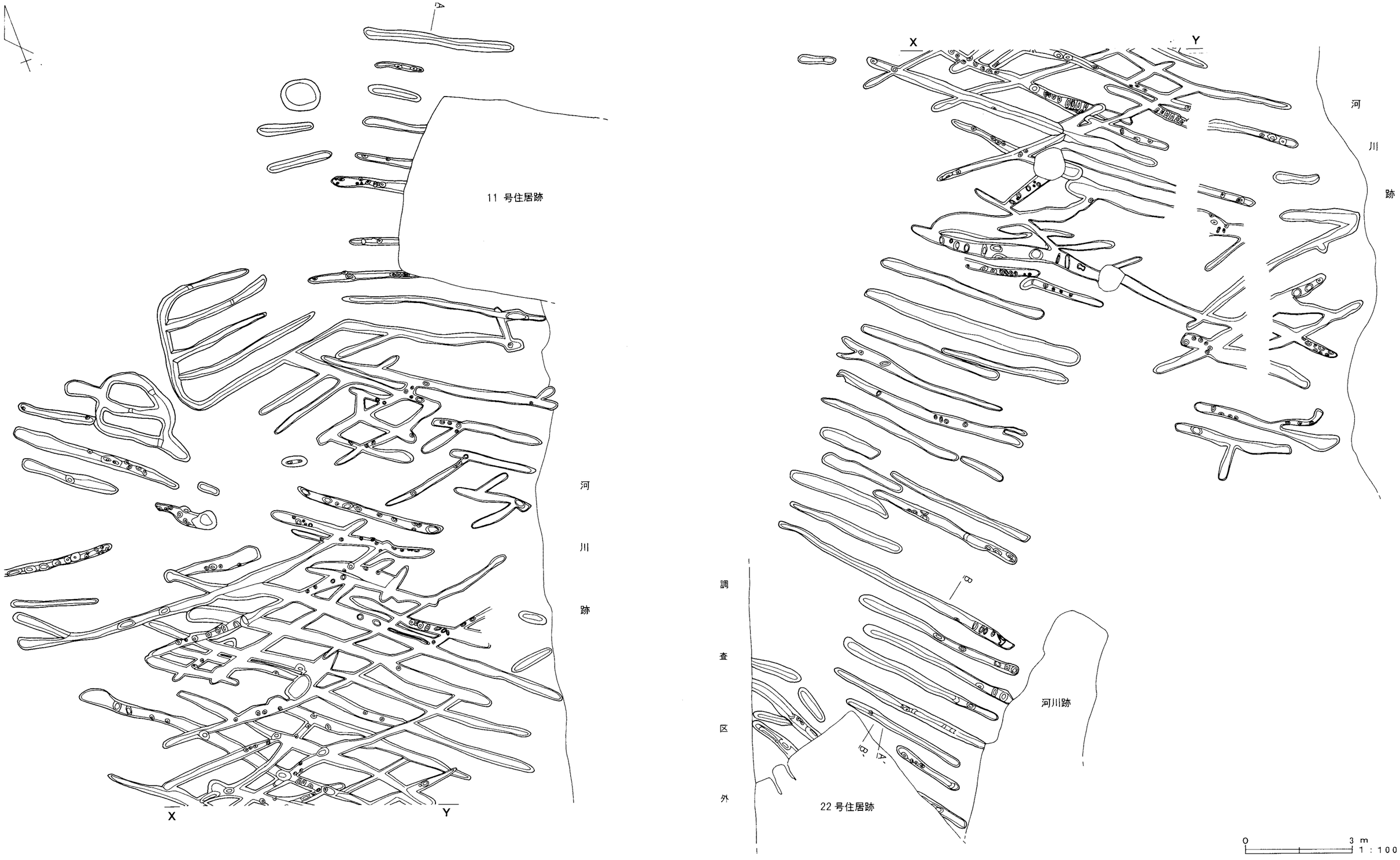
2号畠跡（第84図）　U・V—11・12グリッドに位置する。約12m四方に亘って検出されたが、中央及び周囲を河川跡によって切られている。また、北東部では14号住居跡、南東部では17号住居跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

畝は、南西方向から北東方向に走るものと、北西方向から南東方向に走るものの二者がみられ、新旧関係は土層断面の観察から、後者の方が新しい。畝は等間隔に走っているものの、同方向に走る畝同士で重複関係にあるものがみられることから、数回に亘って掘り替えられている。

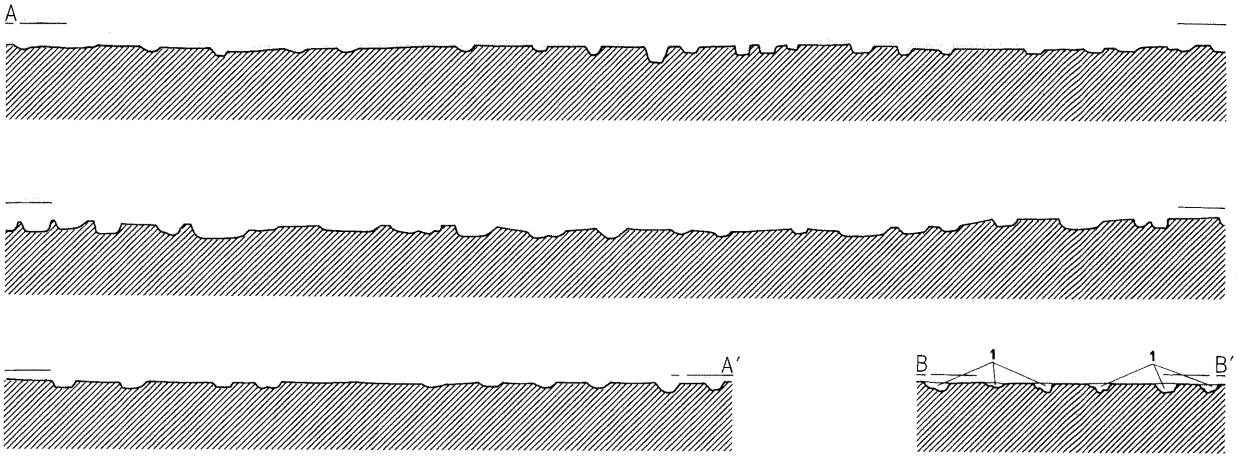
畝の幅は概ね25cm前後であるが、最小で17cm、最大で72cmを測る箇所もみられた。畝間は30～70cmを測るが、最小で5cm、最大で1.2mを測る箇所もみられた。確認面からの深さは5～15cmを測り、底面には所々にピット状の掘り込みがみられた。覆土は場所によって色調が



第85図　B区3号畠跡



第86図　B区4号畠跡



4号畠跡土層

1　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、黄褐色(2.5Y5/6)粘土ブロック(少量)を含む。しまり良い。

0　L＝28.200m　3 m
1：100

第87図　B区4号畠跡断面図

異なるが、すべて粘土層（1～9層）であり、マンガンを多量含む傾向にあった。自然堆積と考えられる。

遺物は、土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

3号畠跡（第85図）　R・S－13・14グリッドに位置する。約11.5×8.5mに亘って検出された。北東部で1号井戸跡に切られており、4号住居跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。北東側と西側は調査区域外にある。

畝は、北東方向から南西方向に走るものが多く、北東部の調査区域境では北西方向から南東方向に走るものもみられた。新旧関係は不明である。

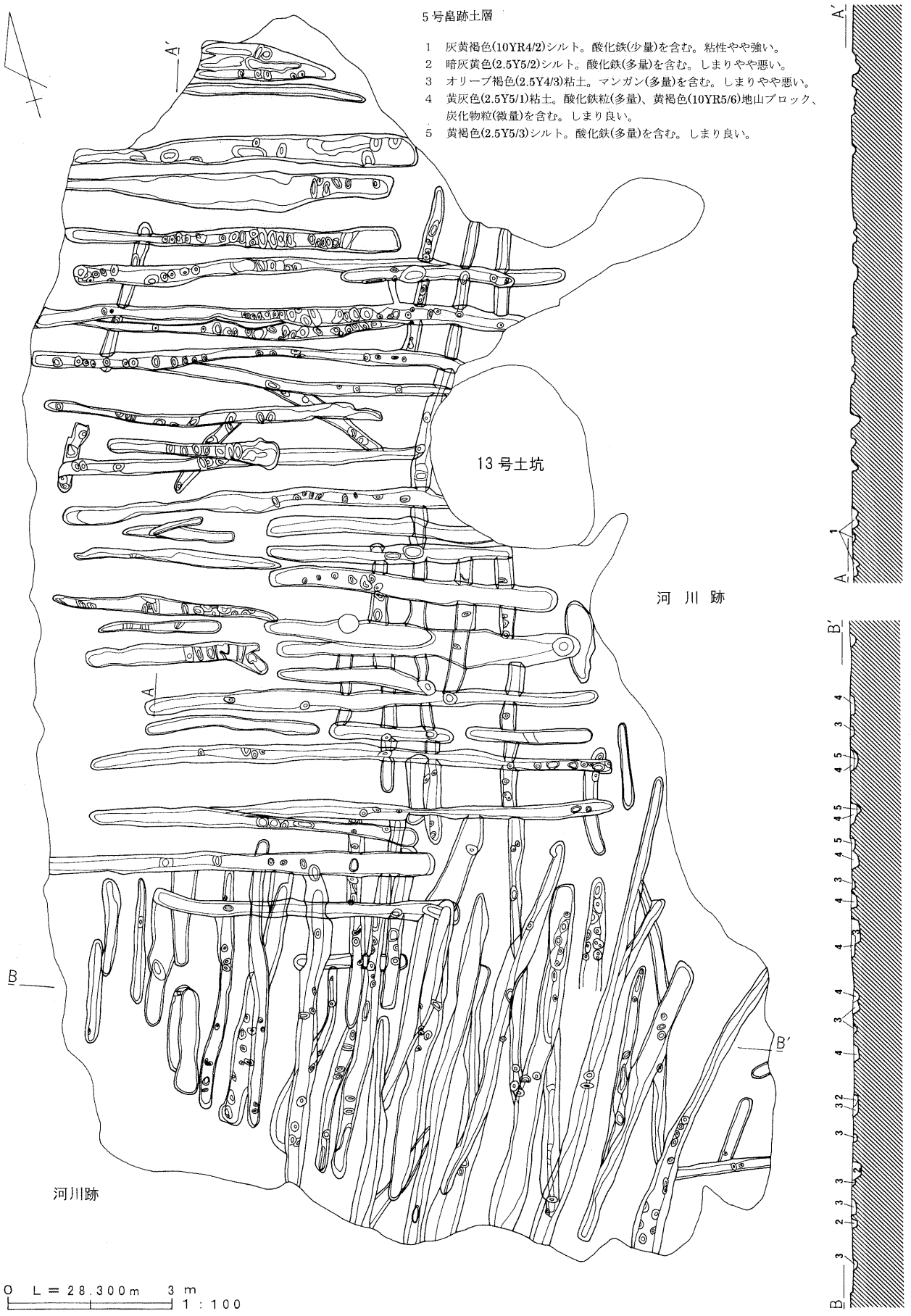
畝の幅は概ね25cm前後であるが、最小で19cm、最大で40cmを測る箇所もみられた。畝間は1cmから1.58mまでと幅がみられた。確認面からの深さは8cm程を測り、底面には一部ピット状の掘り込みがみられた。覆土は図示しなかったが、黄色系の粘土による単一層であり、自然堆積であった。

出土遺物（第92図）は、土師器壺（No.3－1）のみである。他にも土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。3－1は底部のみの検出である。古墳時代前期のものである。

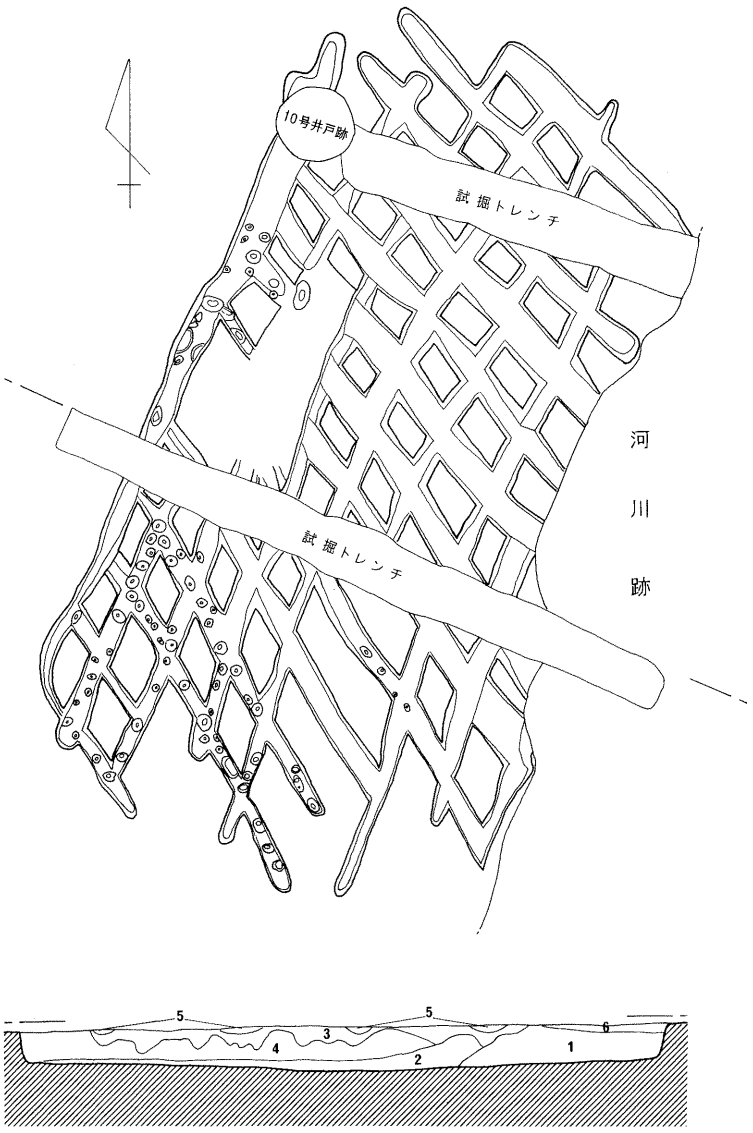
4号畠跡（第86図）　S～W－12～15グリッドに位置する。約44×15mと広範囲に亘って検出された。東側及び南側を河川跡に切られている。北東部で11号住居跡、南西部で22号住居跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。西側は調査区域外にある。

畝は、北西方向から南東方向に走るものと北東方向から南西方向に走るものがみられるが、前者が主体となる。新旧関係は不明である。

畝の幅は概ね30cm前後であるが、最小で16cm、最大で57cmを測る箇所もみられた。畝間は


5号畠跡土層
1 灰黄褐色(10YR4/2)シルト。酸化鉄(少量)を含む。粘性やや強い。
2 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。酸化鉄(多量)を含む。しまりやや悪い。
3 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土。マンガン(多量)を含む。しまりやや悪い。
4 黄灰色(2.5Y5/1)粘土。酸化鉄粒(多量)、黄褐色(10YR5/6)地山ブロック、炭化物粒(微量)を含む。しまり良い。
5 黄褐色(2.5Y5/3)シルト。酸化鉄(多量)を含む。しまり良い。
13号土坑
河川跡
河川跡
A
A′
B
B′
0 L＝28.300m 3m
1：100

第88図　B区5号畠跡



6号畠跡土層

1　黄灰色(2.5Y6/1)粘土。ところどころ酸化している。しまり良い。
2　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト。大部分は暗赤褐色(10YR3/4)粘土粒が占める。しまりやや良い。
3　暗赤褐色(5YR3/3)粘土。しまりやや良い。
4　にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土。暗赤褐色(10YR3/4)粘土粒を含む。しまり良い。
5　浅黄色(2.5Y7/4)粘土。しまり良い。
6　にぶい赤褐色(2.5YR4/3)砂。しまり悪い。

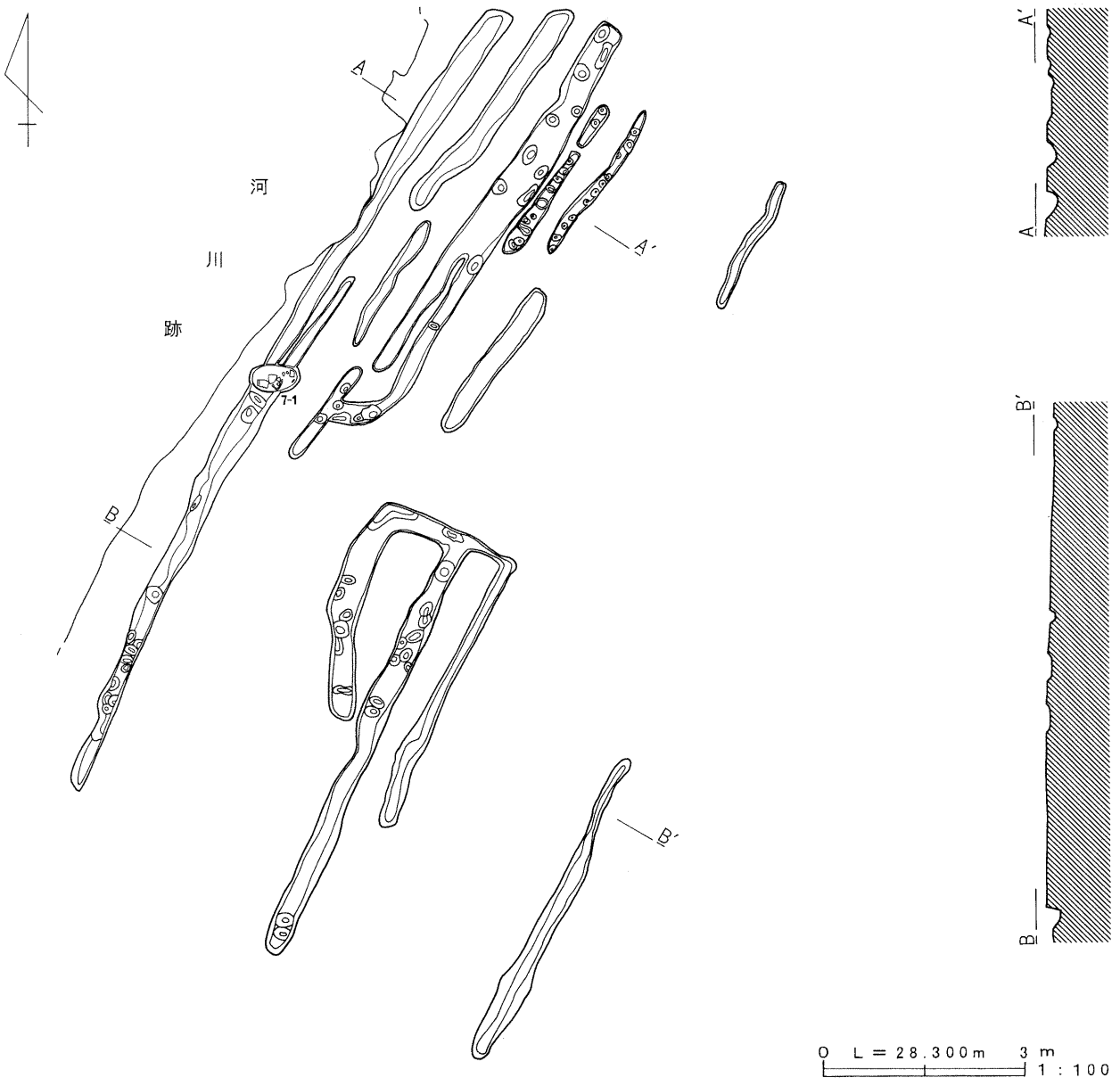
第89図　B区6号畠跡

5㎝から1.17mまでと幅がみられた。確認面からの深さは5～12㎝程を測り、底面には一部ピット状の掘り込みがみられた。覆土は図示しなかったが、黄色系の粘土による単一層であり、自然堆積であった。

出土遺物（第92図）には、土師器椀（№4－1）、壺（4－2）、土錘（4－3）等がある。他にも土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。4－1・2が古墳時代前期、4－3が古墳時代後期のものである。4－1は口縁部を除く外面に刷毛目調整、内面はヘラナデ調整が施されている。4－2は口縁部である。外面はヘラナデ調整、内面には網目状撚糸文が施されている。4－3は完形品。

5号畠跡（第88図）　V～X－11･12グリッドに位置する。約22×13.5mに亘って検出されたが、周囲を河川跡、東側では13号土坑に切られている。

畝はほぼ南北方向に走るものと東西方向に走るものの二者があり、両者が重複する箇所も



第90図　B区7号畠跡

あるが、主に北側では前者、南側では後者がみられる。両者の新旧関係は不明である。また、ともに同方向に走る畝同士で重複関係にあるものがみられることから、数回に亘って掘り替えられている。

畝の幅は概ね25cm前後であるが、最小で16cm、最大で78cmを測る箇所もみられた。畝間は概ね50cm前後であるが、最小で8cm、最大で80cmを測る箇所もみられた。確認面からの深さは9～19cmを測り、底面には所々にピット状の掘り込みがみられた。覆土は黄色系の粘土ないしシルト（1～5層）からなり、酸化鉄を多量含んでいた。自然堆積と考えられる。

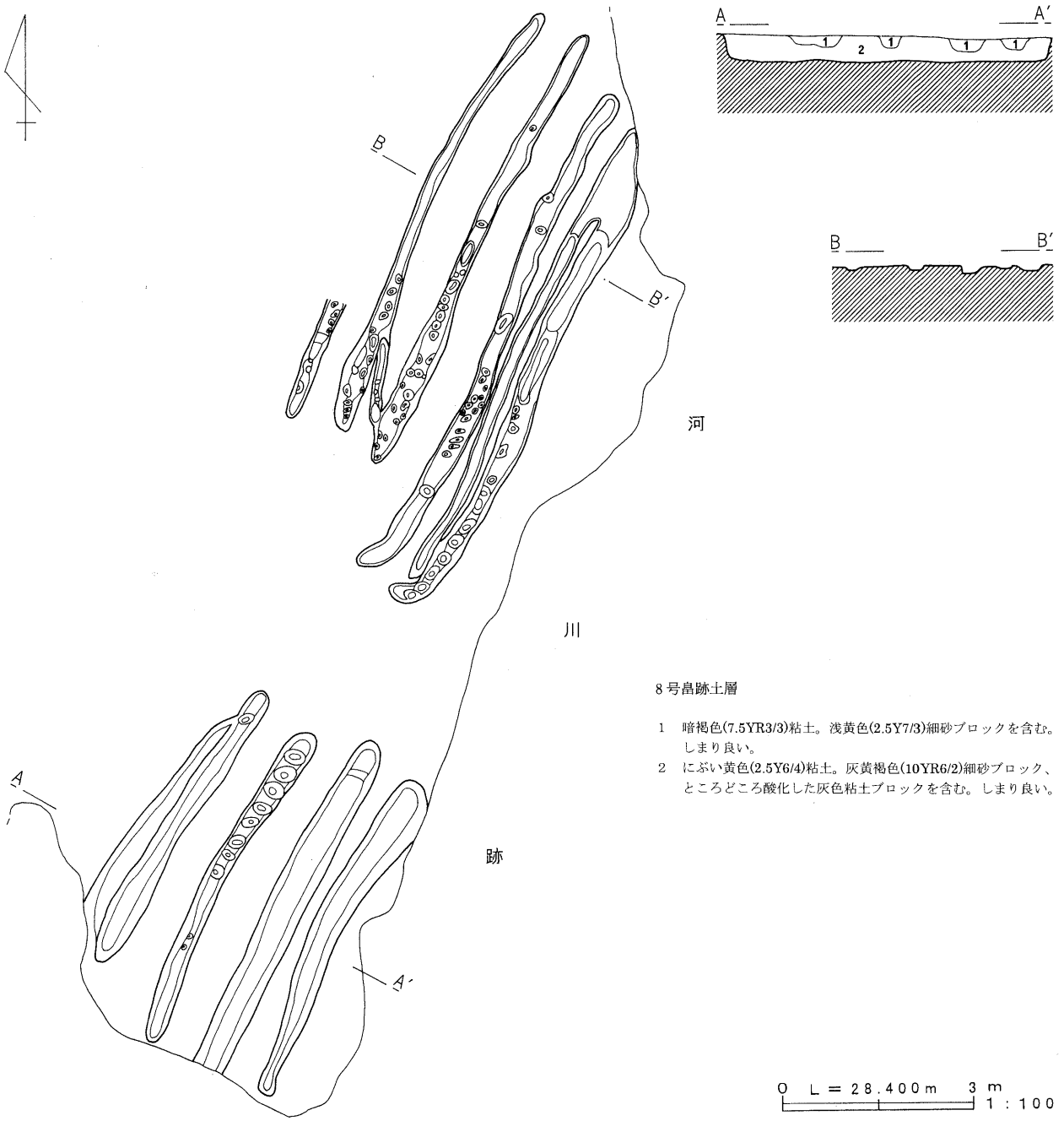
遺物は、土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

6号畠跡　W～Y—13・14グリッドに位置する。約12×6.5mに亘って検出されたが、東側を河川跡、北西部で10号井戸跡に切られている。

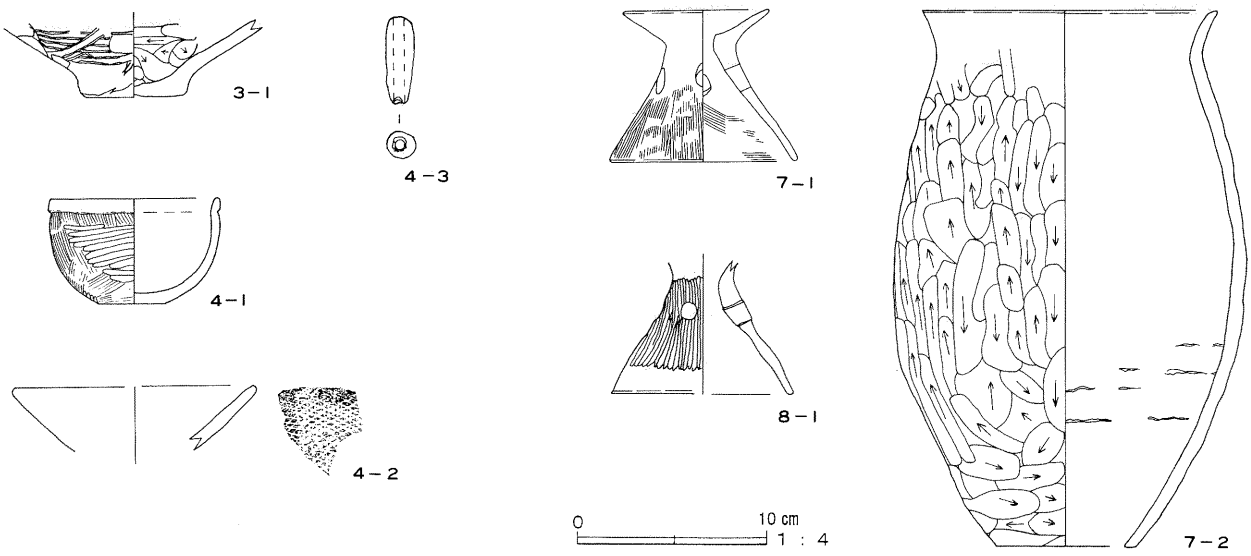
（第89図）

畝は南西方向から北東方向に走るものと、南東方向から北西方向に走るものの二者があり、新旧関係は前者の方が新しい。以下、前者を新段階、後者を古段階とする。

畝の幅は概ね30cm前後であるが、最小で18cm、最大で55cmを測る箇所もみられた。畝間は概ね30cm前後を測るが、最小で18cm、最大で69cmを測る箇所もみられた。確認面からの深さは概ね25cm前後であり、南西部では底面にピット状の掘り込みがみられた。覆土は新段階が浅黄色粘土、古段階が暗赤褐色粘土である。ともに混入物はみられない。自然堆積と考えら



第91図　B区8号畠跡



第92図　B区畠跡出土遺物

第39表　B区畠跡出土遺物観察表　（第92図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器甕	-	-	(5.0)	①③②④⑥	②	にぶい橙	底部1/2	3号出土。
1	土師器椀	(8.8)	5.5	3.7	③①④②	②	橙	口縁部1/2欠	4号出土。外面黒斑有。
2	土師器壺	(12.8)	-	-	①⑥③	②	にぶい橙	一部のみ	4号出土。
3	土錘	長さ　4.1	最大径	1.1	孔径　0.6			完形	4号出土。
1	土師器器台	7.8	8.1	(10.0)	③④①	②	橙	裾部一部欠	7号出土。四方透かし。
2	土師器甑	15.4	28.5	7.2	④①③②⑥	②	褐灰	2/3	7号出土。
1	土師器器台	-	-	-	②⑥①	②	橙	脚部1/2	8号出土。三方透かし。

れる。

遺物は、土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

7号畠跡（第90図）　Y～AA—13・14グリッドに位置する。約15×8.5mに亘って検出された。北西部で一部河川跡に切られている。

畝は南東方向から北東方向へ走っており、所々で途切れている。また、重複している箇所もみられたことから、数回に亘って掘り替えられている。

畝の幅は概ね30cm前後であるが、最小で16cm、最大で60cmを測る箇所もみられた。畝間は3cmから2.63mと幅がみられ、一定していない。確認面からの深さは4～21cmを測り、底面には所々にピット状の掘り込みがみられた。覆土は図示しなかったが、黄色系の粘土による単一層であり、自然堆積であった。

出土遺物（第92図）は、土師器器台（No.7－1）、甑（7－2）の二点のみである。他にも土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。7－1が古墳時代前期、7－2が古墳時代後期のものである。7－1は内外面刷毛目調整による。台部には4つ透かし孔がみられる。7－2は長胴甕を転用したものと考えられる。

8号畠跡（第91図）　Y～AA—14・15グリッドに位置する。約17.5×6mに亘って検出されたが、北東部と南西部を河川跡に切られている。

畝は南西方向から北東方向へ走っている。検出された範囲の中央で途切れており、北側と南側のブロックに分かれている。北側のブロックでは、畝同士で重複関係にあるものがみられることから、数回に亘って掘り替えられている。

畝の幅は、北側では30cm前後、南側では50cm前後を測る。畝間は南北ともに一定しておらず、最小で3cm、最大で72cmを測る。確認面からの深さは3～18cmを測り、底面には所々にピット状の掘り込みがみられた。覆土は暗褐色粘土（1層）のみであり、細かい砂をブロック状に含んでいた。自然堆積と考えられる。

出土遺物（第92図）は、土師器器台（No.8－1）のみである。他にも土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。8－1は台部のみであり、3つの穿孔が施されている。外面は縦方向のミガキ、内面はヘラナデが施されている。古墳時代前期のものである。

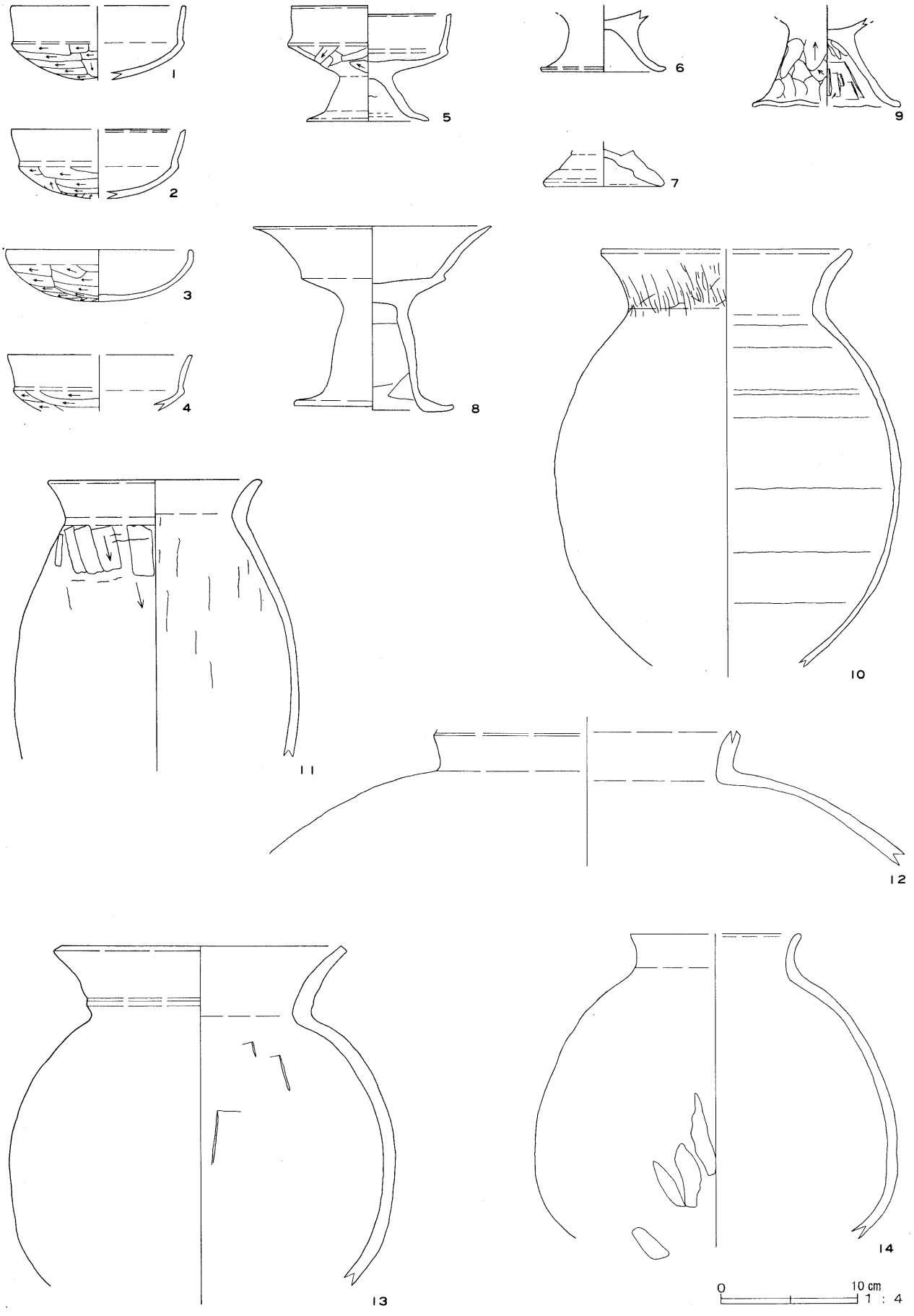
8　河川跡・遺構外出土遺物

河川跡からは古墳時代前期及び後期の遺物が検出されたが、後者が多い。図示可能なものは、土師器杯（第93図No.1～4）、高杯（5～9）、甕（10～14・第94図15～18）、壺（19）、土錘（20・21）等である。いずれも摩滅が顕著であった。17と19が古墳時代前期のものであり、その他は後期のものである。17は小型の甕であり、刷毛目調整による。外面に赤彩が施された痕跡がみられた。19は全面ミガキ調整による。文様はみられない。土師器杯は、口径小さく、身の深い模倣杯（1・2・4）と、丸底で、口縁部がほぼ直立する北武蔵型杯（3）がある。煤が付着していたものが多い。3の内面には放射状暗文が施されていたが、図示不可能であった。高杯は、模倣杯に低い脚部が付くタイプ（5～9）と、口縁部が大きく外反し、脚部が高く、裾が大きく広がるタイプ（8）がみられるが、前者が多く、脚部のみ検出されたものがほとんどである。甕は長胴甕（10・11・18）、丸胴甕（12～14）、小型のもの（15・16）がある。12は上部のみの検出であるが、かなり大型のものである。14とともに口縁部が短い。土錘はともにほぼ同じ大きさのものであるが、7は完形品であり、8は一部を欠く。

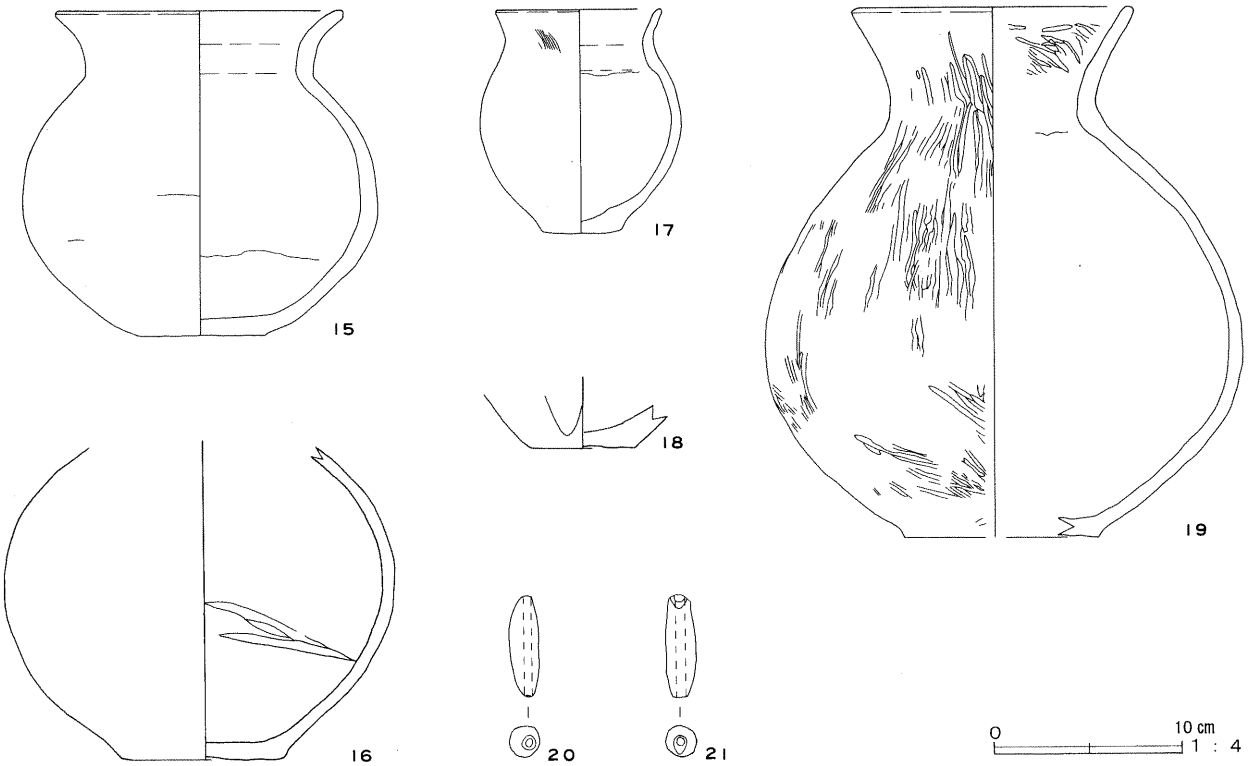
遺構外出土遺物（第95図）は、土師器杯（No.1）、須恵器杯（2）、灰釉陶器椀（3）、土師器壺（4）、土錘（5・6）等がある。4が古墳時代前期、1・5・6が古墳時代後期、2が奈良時代、3が平安時代末のものである。1は身の深い模倣杯である。2は8世紀中頃のものである。3は底部のみの検出である。4は内外面刷毛目調整による。土錘はともにほぼ同じ大きさのものであるが、5は片側先端を欠き、6は完形品である。

第40表　B区　河川跡出土遺物観察表　（第93・94図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	(12.8)	-	-	③①④	②	橙	1/4	
2	土師器杯	(12.8)	-	-	③①④	②	橙	1/5	
3	土師器杯	13.6	3.8	-	④③①	②	にぶい橙	上位1/4欠	
4	土師器杯	(13.5)	-	-	③①④②	②	橙	上位1/3	
5	土師器高杯	11.5	8.5	8.8	③①②④	②	橙	完形	
6	土師器高杯	-	-	8.8	②①④⑥	②	橙	脚部のみ	
7	土師器台付甕	-	-	(8.3)	④②③①	②	にぶい黄橙	脚部1/2	
8	土師器高杯	17.4	13.3	17.6	②①⑥④	②	明赤褐	一部欠	磨滅。
9	土師器高杯	-	-	(10.5)	③①④②⑥	②	にぶい赤褐	脚部2/3	

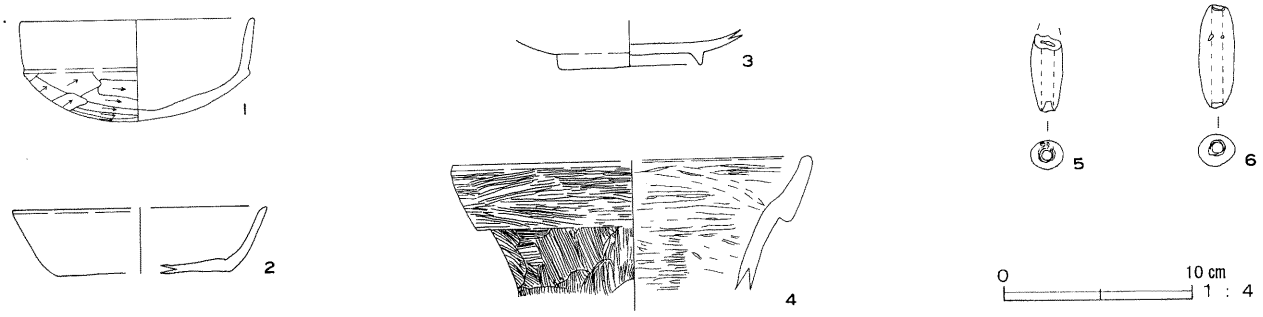


第93図　B区河川跡出土遺物(1)



第94図　B区河川跡出土遺物(2)

10	土師器甕	(18.0)	-	-	④①③②⑥	②	橙	4/5	胴部外面磨滅。
11	土師器甕	15.6	-	-	⑥①④②	②	橙	上半	
12	土師器甕	(21.4)	-	-	①④②③⑥	②	橙	上位1/4	磨滅。
13	土師器甕	21.6	-	-	③①②	②	淡赤橙	1/2	磨滅。
14	土師器甕	(12.4)	-	-	⑥①③④	③	明赤褐	2/5	磨滅。
15	土師器甕	15.2	17.3	6.5	③①④	②	橙	3/4	磨滅。
16	土師器壺	-	-	8.6	②①③⑥	②	明褐灰	胴部1/2	磨滅。
17	土師器甕	(8.8)	11.9	4.0	③①⑥④	②	橙	3/5	外面赤彩か。全面磨滅。
18	土師器甕	5.2	-	-	①②⑥	③	明赤褐	底部2/3	
19	土師器壺	14.9	28.3	(10.8)	③①④	②	浅黄橙	底部欠	
20	土錘	長さ　5.3	最大径　1.6	孔径　0.4				完形	
21	土錘	長さ　5.4	最大径　1.6	孔径　0.5				一部欠	



第95図　B区遺構外出土遺物

第42表　B区遺構外出土遺物観察表　(第95図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	12.5	5.3	-	③①④	②	橙	上位1/4欠	
2	須恵器杯	(13.4)	3.5	(9.2)	②①	②	灰	1/8	
3	灰釉陶器椀	-	-	-	①②	①	灰白	一部のみ	
4	土師器壺	(18.8)	-	-	③①④②	②	浅黄橙	上位1/2	
5	土錘	長さ　4.1	最大径　1.7	孔径　0.6				一部欠	
6	土錘	長さ　5.4	最大径　1.9	孔径　0.6				完形	

V　E・F区の遺構と遺物

1　住居跡

平成12年度E・F区の調査における住居跡の検出数は129軒であった。E区からは30軒、F区からは99軒の検出である。E・F区合わせて、古墳時代後期が128軒、奈良・平安時代が1軒の検出であった。その大半が古墳時代後期の住居跡である。

E区は全域に分布し、F区では調査区の東側に集中して分布する。E・F区とも同時期の住居跡同士で重複関係にあるものが多く、かつ調査区域外にかかるものもみられることから、全形を知りえたものは少ない。

1号住居跡
(第97図)

AD・AE－13グリッド、E区の南東端に位置する。南西部大半が調査区域外にある。5号住居跡、7号住居跡と重複する。新旧関係は、古い順に5号住居跡、7号住居跡、本住居跡であった。北東部では隣接する1号土坑が覆土上層を切り込んでいる。

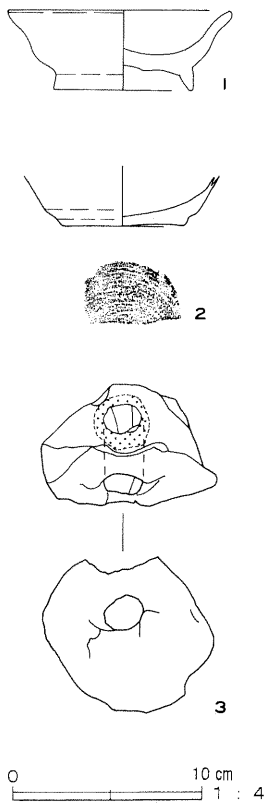
規模・平面形は不明であるが、北東壁は4.82mを測る。主軸方向はN－31°－Eを指す。確認面からの深さは26cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は灰黄色シルトの単一層（12層）で、自然堆積と考えられる。酸化鉄を多量含み、火山灰らしき混入物も含んでいた。

カマドは北東壁中央に設けられている。焚口部から煙道部は住居跡の外に1.01m程張り出している。焚口部の幅は77cmを測り、焚口部南東壁には片岩系の板石が埋め込まれていた。煙道部先端の幅は32cmを測り、先に行くに従って狭まる。焚口部から煙道部先端へは、凹凸があるものの緩やかに立ち上がる。燃焼部からは、土師器高台椀（No.1）が伏せた状態で検出された。燃焼部では灰層（9層）、焼土層（10層）が検出され、煙道部では炭化物等を含む層（11・12層）がみられた。

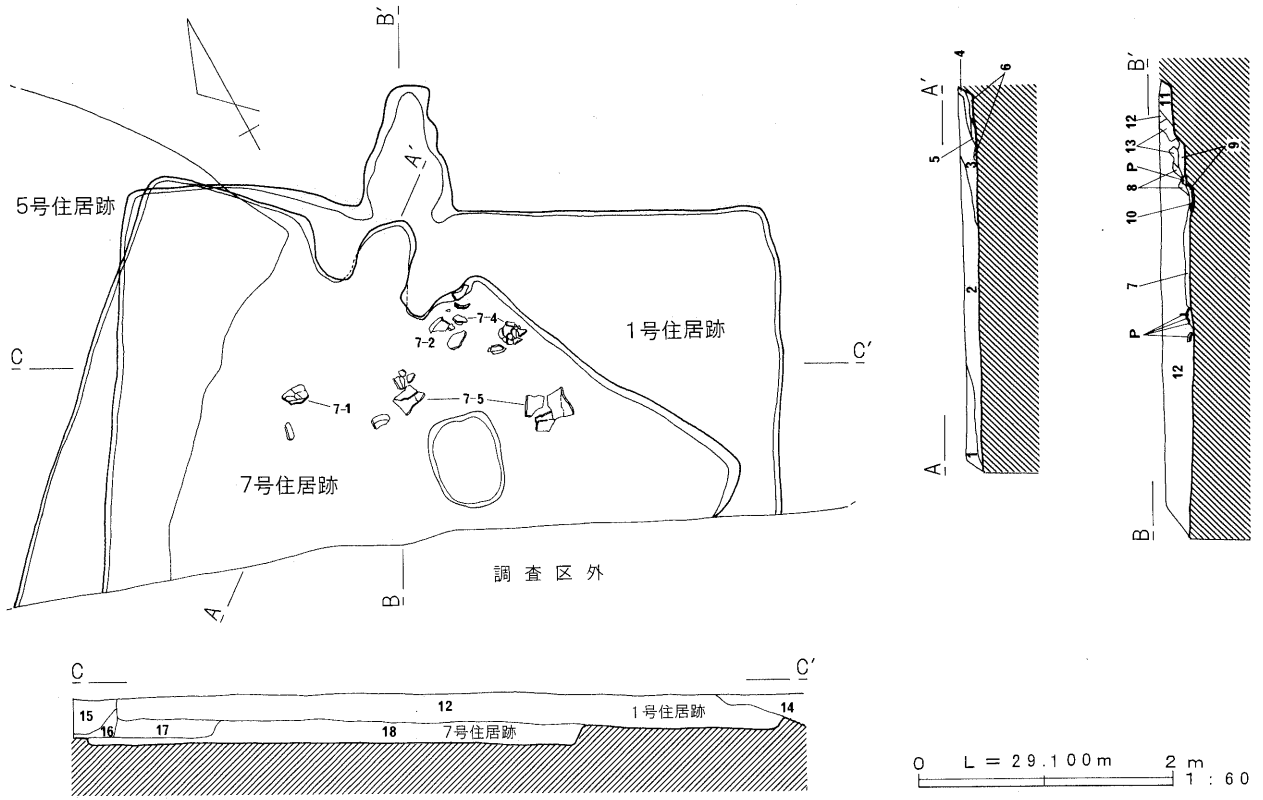
壁溝、柱穴、貯蔵穴等はみられない。

住居内から小鍛冶遺構が検出された（第98図）。長軸1.47m、短軸1.12m、床面からの深さ19cmの隅丸の長方形を呈する。焼土・炭化物を含む層（3・4層）の上から焼土、スラグが確認された。焼土は南側、スラグは北側に集中しており、これらに混じって礫、羽口（No.3）が検出された。

出土遺物（第96図）には、土師器高台椀（No.1）、杯（2）、羽口（3）等がある。1はカマド、2は覆土中から検出された。1は高台貼り付け後、底部に回転ヘラナデが施されている。2の底部には回転糸切り痕を残す。3は半分を欠くが、孔内は被熱し、外面にはスラグが付着していた。



第96図　E・F区
1号住居跡出土遺物

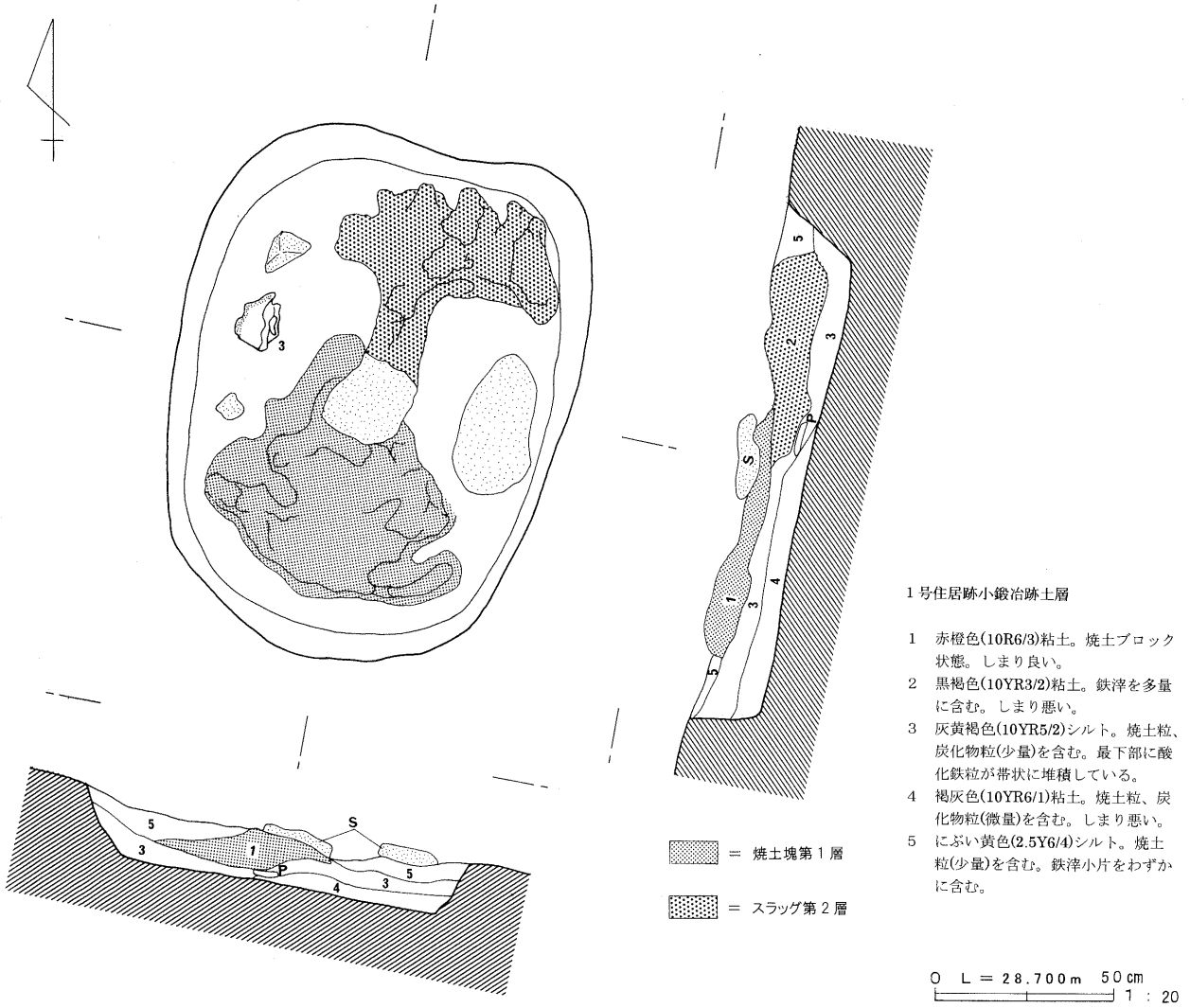




1号・7号住居跡土層

1　にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト。焼土粒、炭化物(微量)を含む。しまり悪い。
2　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。焼土粒、炭化物(微量)を含む。しまり悪い。
3　にぶい褐色(7.5YR5/3)シルト。焼土粒(多量)、炭化物(少量)を含む。4層がブロック状に混入する。しまり悪い。
4　赤色(10R5/8)粘土。焼土ブロック層。カマド天井崩落土。しまり悪い。
5　赤色(10R5/8)粘土。炭化物(多量)を含む。4層と同質だが、しまり無い。
6　褐灰色(10YR4/1)灰層。
7　灰白色(5Y7/2)粘土。焼土ブロック(少量)を含む。カマド天井崩落土。粘性非常に強い。
8　灰白色(5Y7/2)粘土。1層と同質だが6層と混じり合い、しまり悪い。
9　黒褐色(2.5Y3/1)灰層。焼土粒(少量)を含む。
10　赤色(10R4/6)粘土。
11　オリーブ黄色(5Y6/4)粘土。炭化物(少量)を含む。しまり悪い。
12　灰黄色(2.5Y6/2)シルト。酸化鉄粒(多量)を含む。にぶい黄橙色(10YR7/2)砂(火山灰？)少量含む。
13　浅黄色(2.5Y7/4)シルト。炭化物(少量)を含む。しまり良い。
14　灰色(5Y6/1)シルト。酸化鉄粒(多量)を含む。炭化物が帯状に堆積する。
15　浅黄色(2.5Y7/4)シルト。焼土粒、炭化物(少量)を含む。しまり悪い。
16　浅黄色(2.5Y7/4)粘土。3層に灰(5Y6/1)砂をブロック状に含む。
17　灰黄褐色(10YR6/2)シルト。炭化物(少量)を含む。やや粘性有。
18　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。焼土粒、炭化物(微量)を含む。しまり悪い。

第97図　E・F区1・7号住居跡・1号住居跡カマド



第98図　E・F区1号住居跡小鍛冶遺構

第42表　E・F区1号住居跡出土遺物観察表　(第96図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器高台椀	11.8	4.2	7.4	②①③④	③	灰白	3/4	
2	土師器杯	-	-	(6.6)	⑥③④①	③	黄橙	底部1/4	
3	羽口	最大径 9.1 孔径 2.1						半分欠	孔内被熱。外面スラグ付着。

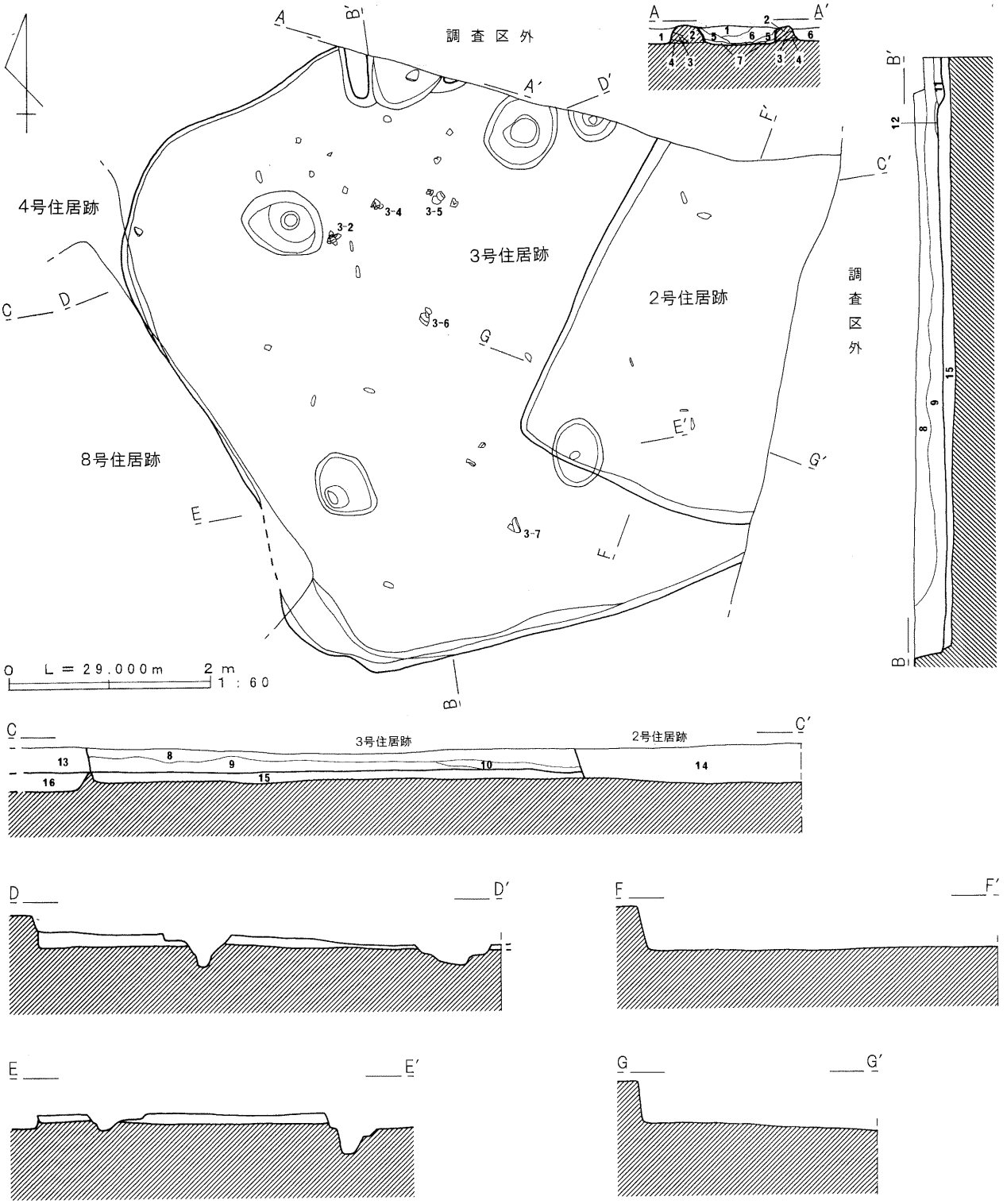
2号住居跡　(第99図)

AD－12グリッド、E区北東端に位置する。大半が調査区域外にあり、検出できたのは南西隅付近のみである。3号住居跡と本住居跡下に位置する9号住居跡を切っている。

規模・平面形は不明である。南北軸方向はN－24°－Eを指す。確認面からの深さは49cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は灰黄褐色シルトの単一層（14層）で、焼土・炭化物を少量含んでいた。自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

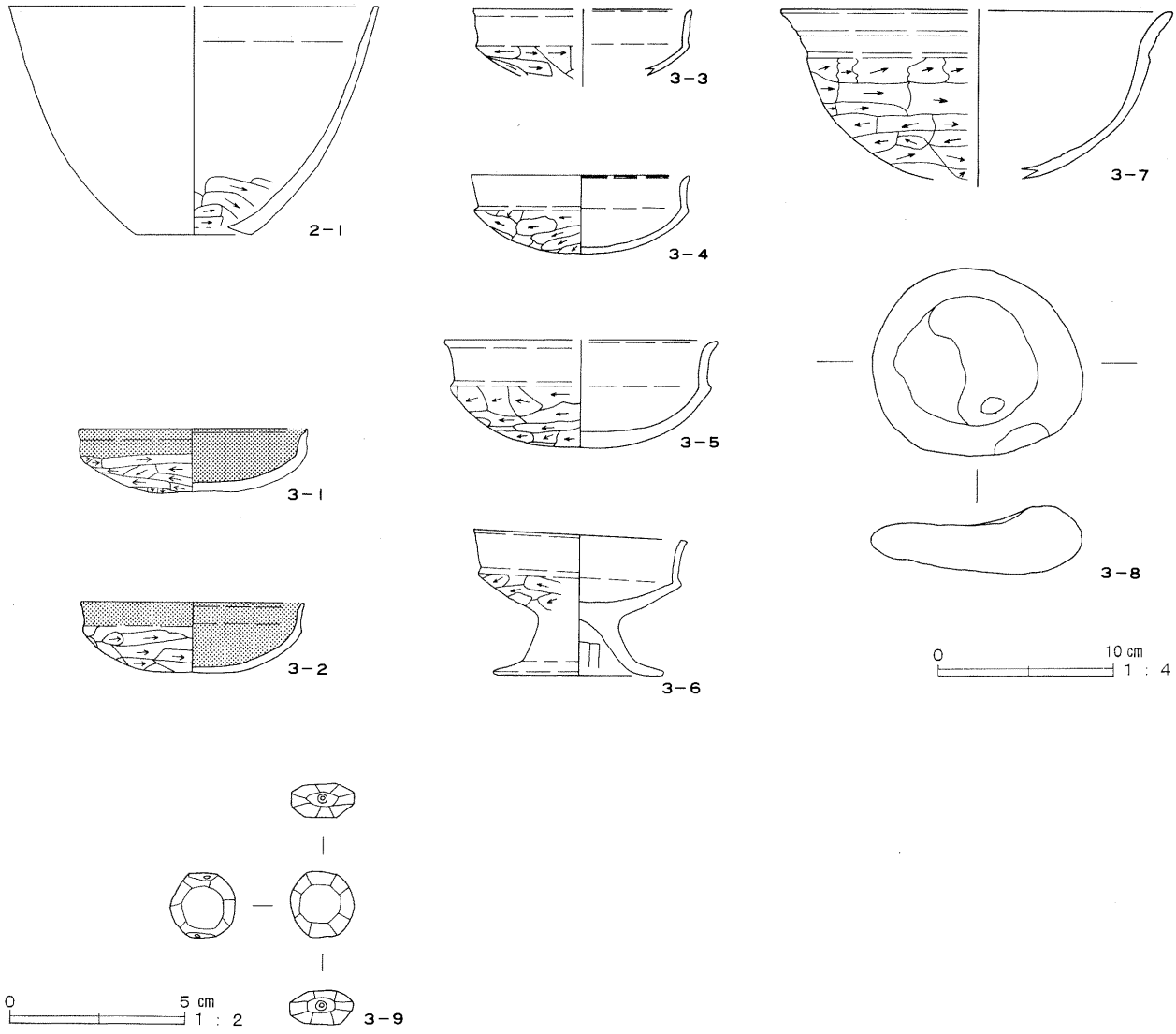
出土遺物（第100図）は、土師器片及び礫等が床面よりやや浮いた位置で検出されたが、図示できたものは土師器甑（No.2－1）のみである。器高が低く、把手を持たない。内外面ともに摩滅が著しく、調整は図示不可能であった。



2号・3号住居跡土層

1　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト。炭化物、焼土粒(少量)を含む。
2　明褐灰色(7.5YR7/1)粘土。カマド燃焼部側は被熱により焼土ブロック化している。
3　明褐灰色(7.5YR7/1)粘土。しまり非常に良い。
4　明褐灰色(7.5YR7/1)粘土。3層と同質だがしまりやや悪い。
5　赤色(7.5R4/8)粘土。カマド天井崩落土。明褐灰色粘土が被熱により焼土ブロック化したもの。しまり悪い。
6　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土。灰色(5Y6/1)砂を含む。1層に比べしまり悪い。
7　黒色(5YR1.7/1)灰層。
8　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト。炭化物、焼土粒(少量)を含む。
9　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土。灰色(5Y6/1)砂を含む。1層に比べしまり悪い。下面が硬化している。
10　灰色(5Y6/1)砂。2層を含む。
11　黒色(5YR1.7/1)粘土。炭化物(多量)、焼土粒(少量)を含む。
12　赤色(7.5R4/8)粘土。焼土粒(少量)を含む。地山が被熱により赤色化。
13　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。焼土粒子、炭化物(少量)を含む。粘性有。
14　灰黄褐色(10YR4/2)シルト。炭化物(少量)、焼土粒(極微量)を含む。しまり悪い。
15　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト。14層とほぼ同質。下面が硬化している。
16　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト。焼土粒、炭化物(少量)を含む。

第99図　E・F区2・3号住居跡



第100図　E・F区2・3号住居跡出土遺物

第43表　E・F区2号住居跡出土遺物観察表　(第100図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器甕	(41.0)	13.0	6.6	③①④	②	赤褐	3/5	胴部外面黒斑有。外面磨滅。

第44表　E・F区3号住居跡出土遺物観察表　(第100図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	12.8	3.6	-	⑥③①④	②	赤	一部欠	赤彩。比企型杯。
2	土師器杯	12.6	4.1	-	⑥③①④	②	赤	1/2	赤彩。比企型杯。
3	土師器杯	(12.4)	-	-	⑥①④③	②	明赤褐	1/4	
4	土師器杯	12.2	4.5	-	①②③④	②	明赤褐	1/2	
5	土師器杯	15.4	6.1	-	⑥①③④	②	橙	1/4	
6	土師器高杯	12.1	8.3	9.1	③①④⑥	②	橙	2/3	
7	土師器鉢	(21.8)	-	-	②④⑥①	②	橙	1/4	
8	磨石	最大径　10.2　厚さ　2.7						完形	花崗閃緑岩製。
9	土製平玉	最大径　1.8　厚さ　0.9　孔径　0.3						完形	

3号住居跡　(第99図)

AD－12･13グリッド、E区北東端に位置する。複数の住居跡と重複関係にある。北東部は2号住居跡に切られ、南東部では4・8号住居跡を切っている。北東部及び南東部は調査区域外にある。

本住居跡は造り替えを行っており、南西壁と南東壁を拡張し、さらに床を張り替えてい

る。上面の住居跡を新段階、下面の住居跡を旧段階と呼称する。

規模・平面形は新旧段階ともに不明であるが、南東－北西軸は新段階で4.97m、旧段階で4.85mを測る。主軸方向はN－25°－Wを指す。確認面からの深さは、新段階が24cm、旧段階が35cmを測り、床面は前者にやや凹凸が目立つが、後者はほぼ平坦である。覆土は、新段階が黄色系の粘土層（８・９・10層）で、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と考えられる。９層下面はやや硬化している。旧段階はにぶい黄褐色シルト層（15層）のみであり、新段階の床面形成のため埋め戻されたものと考えられる。15層も下面が硬化していた。壁溝は新旧段階ともみられず、ピットは新段階に伴って５つ確認された。北東部の調査区との境にあるピット以外は、柱穴と考えられる。床面からの深さは16～41cmとバラツキがみられる。

カマドは北西壁に設けられており、南西側と北東側の袖一部と焚口部が検出された。袖部は地山を掘り残している。壁は熱を受け、硬化している。焚口部の幅は74cmを測る。覆土は５層が天井部崩落土であり、その下から灰層（７層）が検出された。焚口部から燃焼部は床面から６cmほど掘り込まれており、その層には焼土・炭化物を含んでいた。また、焚口部前の床面は、被熱して赤色化していた。貯蔵穴は検出されなかった。

出土遺物（第100図）には、土師器杯（№３－１～５）、高杯（６）、鉢（７）、磨石（８）、土製平玉（９）等がみられた。遺物の大半は、新段階住居跡のほぼ中央の床面から検出された。１・２は比企型杯で、内外面に赤彩を施している。その他の杯はすべて身の深い模倣坏である。６は模倣杯に低い脚部を付したものである。７は丸底で、口縁部が外反する。８は側面が磨り減っている。９は八角形を呈し、表面に何かを塗っている。

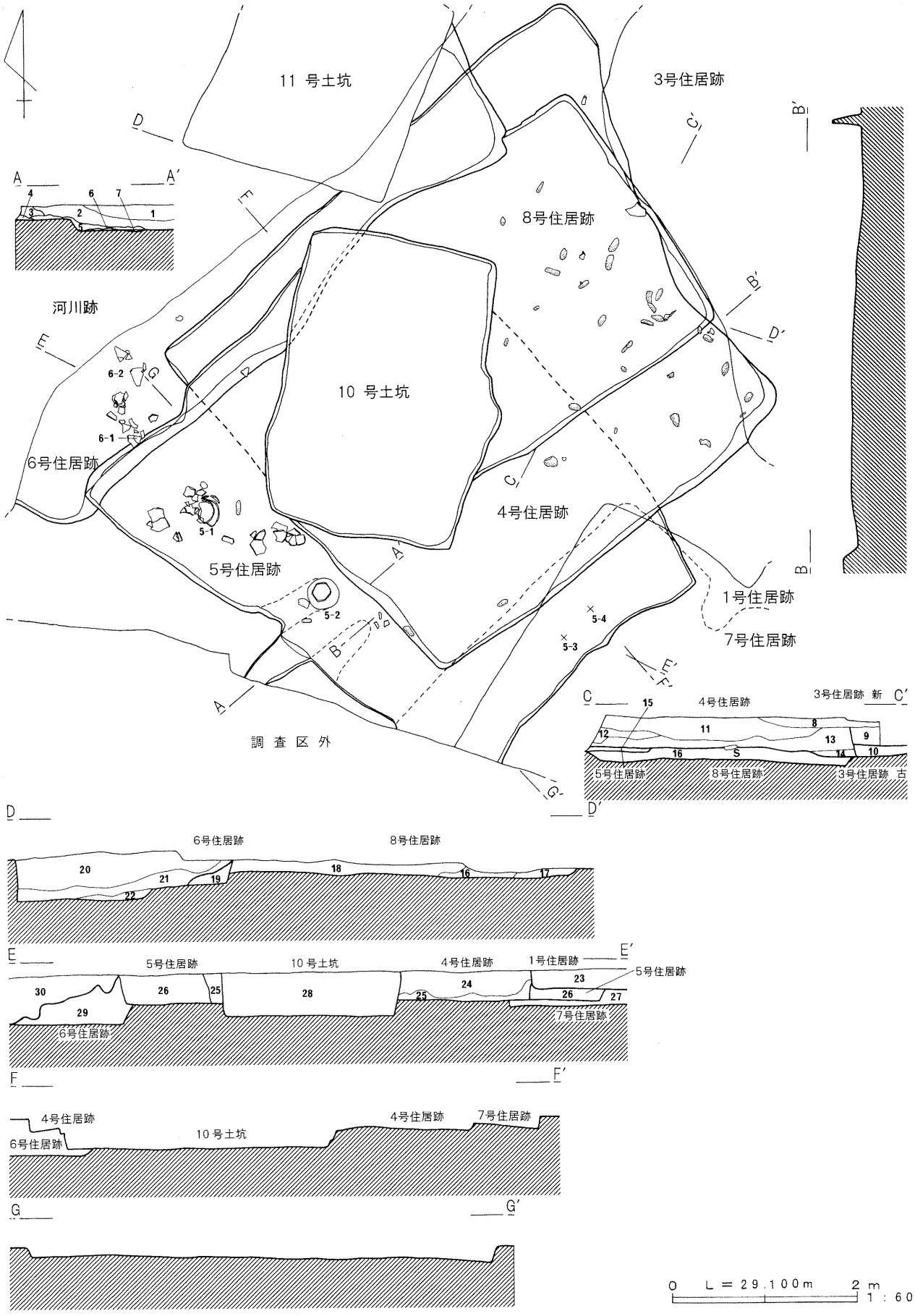
４号住居跡
（第101図）

AD・AE－13グリッドに位置する。北西部は10号土坑、南東部は３号住居跡、南東壁中央は１号住居跡に切られて、南西部で５号住居跡、北西壁では６号住居跡、南東部では７号住居跡、そして北東部では８号住居跡を切っている。８号住居跡とは同軸方向を向き、北東壁及び北西壁が重なることから、本住居跡を拡張する前段階のものとも考えられたが、５号住居跡が間に入ることから別ものと判断した。

長軸5.24m、短軸4.57mの長方形を呈する。南北軸方向はN－49°－Eを指す。確認面からの深さは32cmを測り、床面はかなり凹凸がみられる。覆土は上層（11・12層）が黄褐色系のシルトで炭化物を含み、下層（13層）が灰色の粘土で、自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

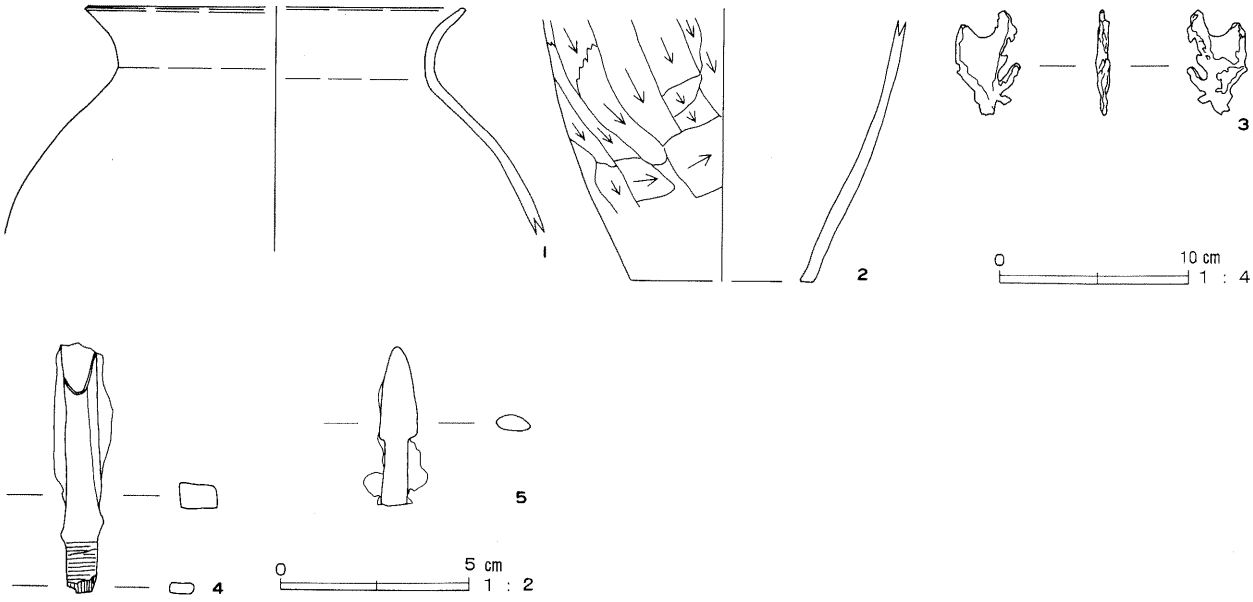
出土遺物（第102図）は、土師器甕（№１）、甑（２）、銅製品（３）、鉄鏃（４・５）等がある。すべて覆土中からの検出である。土器は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものは１・２のみである。１は丸胴甕である。２は胴下部のみの検出である。３は形状が不明である。４は柄の部分に弦が残存していた。５は先端部分。なお、図示しなかったが、編み物石らしき礫が北東壁沿いの床面から多数散らばって検出された。



第101図　E・F区4・5・6・8号住居跡

4・5・6・8号住居跡、10号土坑土層

1　灰黄褐色(10YR6/2)シルト。
2　灰黄褐色(10YR6/2)シルト。炭化物(少量)を含む。粘性やや強い。
3　灰黄褐色(10YR6/2)シルト。炭化物(少量)、焼土粒・ブロック(微量)を含む。しまり悪い。
4　灰黄褐色(10YR6/2)シルト。焼土ブロック(多量)を含む。
5　灰オリーブ色(5Y6/2)シルト。最下部は被熱により焼土ブロック化。粘性非常に強い。
6　褐灰色(10YR4/1)灰層。
7　赤色(10YR4/8)粘土。カマド燃焼部。地山が被熱により焼土化。
8　にぶい橙色(2.5Y6/3)シルト。
9　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト。炭化物粒、焼土粒(少量)を含む。最下面に炭化物が帯状に堆積し直下が硬化している。しまり悪い。
10　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト。9層とほぼ同質。最下面が硬化している。しまり悪い。
11　浅黄色(2.5Y7/4)シルト。焼土粒・炭化物粒(少量)を含む。しまり悪い。
12　(2.5Y7/4)シルト。11層に灰色(5Y6/1)砂がブロック状に混入。
13　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。焼土粒、炭化物粒(少量)を含む。最下面が硬化している。粘性やや強い。
14　黒褐色(10YR2/2)灰層。焼土粒(少量)を含む。炭化物粒が蜜に充填。
15　灰黄褐色(10YR6/2)シルト。炭化物粒を含む。粘性やや強い。
16　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト。焼土粒・炭化物粒(少量)を含む。
17　にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト。酸化鉄粒を含む。
18　黄褐色(2.5Y5/4)シルト。炭化物粒(少量)を含む。しまり悪い。
19　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。炭化物粒(少量)を含む。しまり良い。土器(多量)を包含している。
20　灰色(5Y6/1)粘土。酸化鉄粒を含む。
21　黄褐色(2.5Y5/4)砂。
22　灰色(5Y6/1)粘土。
23　灰黄色(2.5Y6/2)粘土。酸化鉄粒(多量)、にぶい黄橙色(10YR7/2)砂(火山灰?)を含む。
24　浅黄色(2.5Y7/4)シルト。焼土粒、炭化物粒(少量)を含む。しまり悪い。
25　浅黄色(2.5Y7/4)シルト。24層に灰色(5Y6/1)砂がブロック状に混入。
26　灰黄褐色(10YR6/2)シルト。炭化物粒(少量)を含む。粘性やや強い。
27　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。焼土粒、炭化物粒(微量)を含む。しまり悪い。
28　青灰色(5BG6/1)粘土。しまり悪い。
29　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。炭化物(少量)を含む。しまり悪い。土器(多く)を包含している。
30　灰色(5Y6/1)粘土。酸化鉄粒(多量)を含む。



第102図　E・F区4号住居跡出土遺物

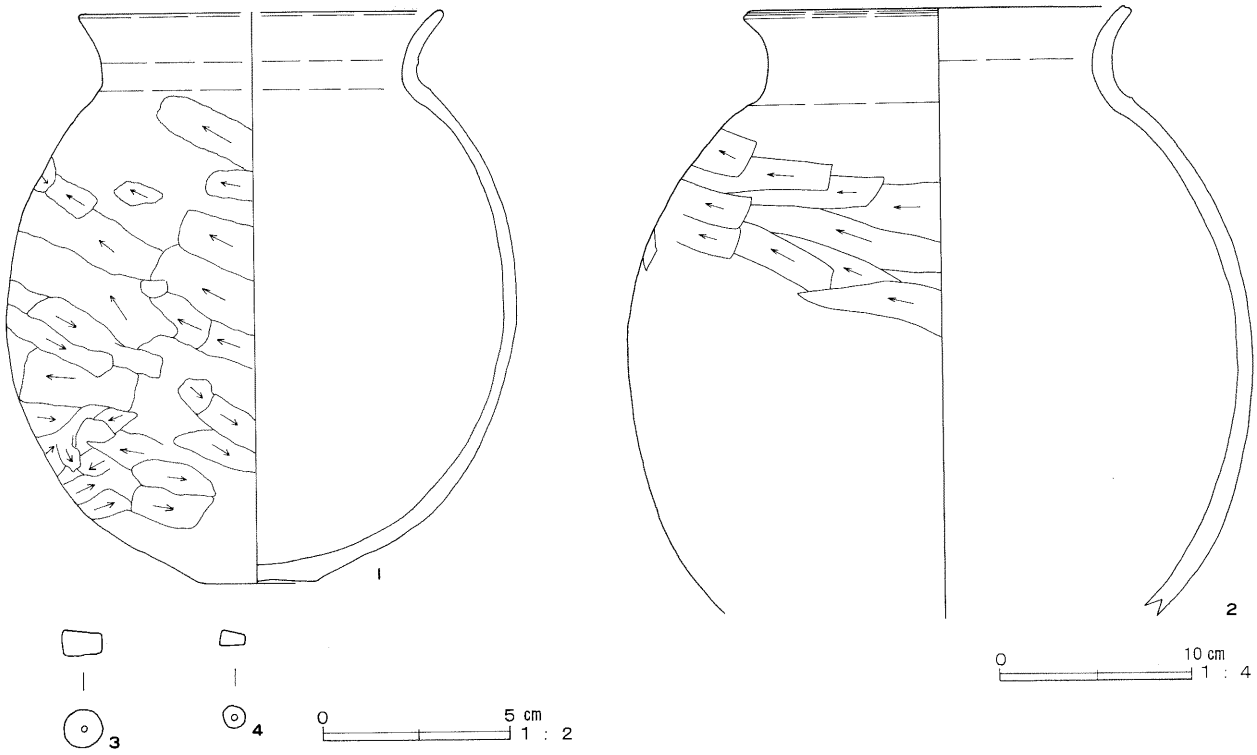
第45表　E・F区4号住居跡出土遺物観察表　(第102図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器甕	(20.0)	-	-	⑥①③④	②	橙	上位1/4	磨滅。
2	土師器甑	-	-	(9.6)	⑥③①④	②	橙	下位1/4	
3	銅製品	最厚部　0.8						大半欠	
4	鉄鏃	長さ　6.8　幅　1.1						基部のみ	
5	鉄鏃	長さ　4.3　幅　1.0						刃部のみ	

5号住居跡(第101図)　AD・AE－13グリッドに位置する。南東部で1号住居跡、中心から北西部にかけて4号住居跡と10号土坑に切られて、南東部では7号住居跡、北西部で8号住居跡、北西壁で6号住居跡をそれぞれ切っている。

長軸5.28m、短軸4.38m程の長方形を呈する。主軸方向はS－46°－Wを指す。確認面からの深さは32cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。

カマドは南西壁のほぼ中央に設けられている。袖には補強材として使用された土師器甕(No.5－2)が伏せて置かれていた。燃焼部は床面と同一レベルで平坦であった。燃焼部と煙道部の間には13cmの高低差があった。煙道部は先端を欠くが、確認された箇所はほぼ平



第103図　E・F区5号住居跡出土遺物

第46表　E・F区5号住居跡出土遺物観察表　(第103図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器甕	(19.3)	30.4	6.0	③①②④	②	橙	1/2	内外面煤付着。二次加熱。
2	土師器甕	24.0	-	-	③①⑥④	②	黄橙	7/8	胴下部外面磨滅。
3	石製臼玉	径 1.1	孔径 0.2	厚さ 0.6				完形	滑石製。
4	石製臼玉	径 0.7	孔径 0.2	厚さ 0.4				完形	滑石製。

坦である。覆土に天井部の崩落土はみられず、上位から炭化物を含む層（2層)、焼土・炭化物を含む層（3・4層)、灰層（6層)、被熱した焼土層（7層）により構成されている。

壁溝、柱穴、貯蔵穴等は検出されなかった。

出土遺物（第103図）は、土師器甕（No.1・2)、臼玉（3・4）等がある。1はカマド北西脇の床面から浮いた状態で検出された。2はカマドの補強材である。甕はいずれも丸胴甕で、1は内外面に煤が付着しており、二次加熱を受けている。3・4は南東壁沿いの床面から検出された。ともに完形品である。

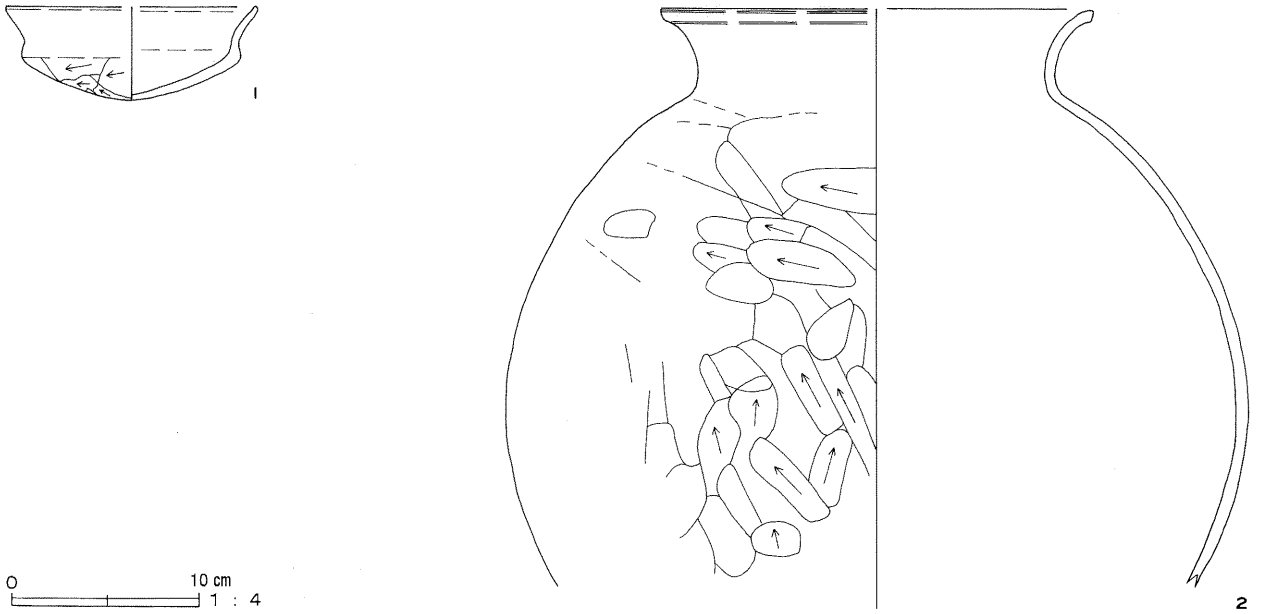
6号住居跡
(第101図)

AD－13・14グリッドに位置する。大半が河川跡に切られて、検出されたのは南東壁のみである。4・5号住居跡と10号土坑に切られ、8号住居跡を切っている。

規模・平面形は不明であるが、南東壁は6.46mを測る。南北軸方向はN－47°－Eを指す。確認面からの深さは54cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は上層を河川跡に切り込まれており、下層（29層）のみ確認できた。自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

出土遺物（第104図）は、南東隅から土師器杯（No.1)、甕（2）が検出された以外にみられなかった。1は模倣杯、2は丸胴甕である。



第104図　E・F区6号住居跡出土遺物

第47表　E・F区6号住居跡出土遺物観察表　(第104図)

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	(13.2)	5.0	-	⑥④③①	②	明赤褐	1/4	
2	土師器甕	(22.8)	-	-	③①⑥	②	橙	1/4	

7号住居跡
(第97図)

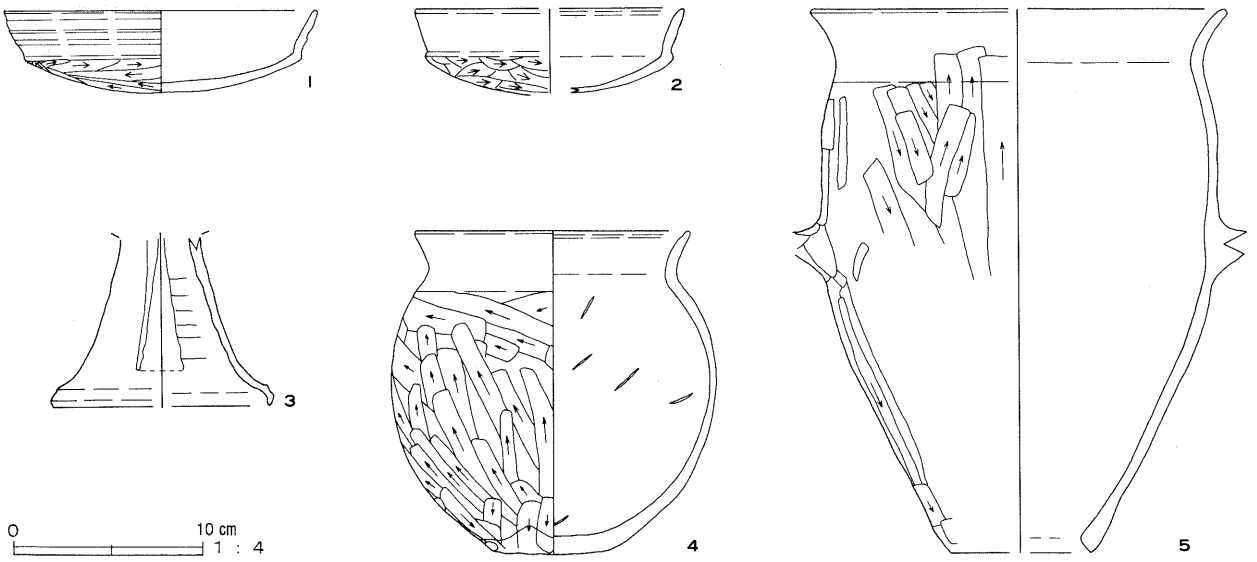
AD・AE－13グリッドに位置する。ほぼ全面を1号住居跡に削平されており、北西部を5号住居跡に切られている。南西部分は調査区域外にある。

規模・平面形は不明であるが、北東壁は5.32mを測る。主軸方向はN－47°－Eを指す。深さは確認面からは40cmを測り、1号住居跡床面からは19cmを測る。床面はほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系のシルト（1・2・18層）を主体とする。各層に焼土・炭化物を微量含む自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴、貯蔵穴等は検出されなかった。

カマドは北東壁の北西寄りに設けられている。上面を1号住居跡に削平されているため残存状態はよくない。袖部は地山の掘り残しで、内側には被熱した痕跡が僅かに確認できた。燃焼部の幅は41cmを測る。煙道部はほとんど削平され、壁外へわずか24cm程張り出している。焚口部から燃焼部はほぼ平坦であり、燃焼部から煙道部に向かって急速に立ち上がる。覆土は僅かにカマド天井部崩落土（4層）が確認され、その下から焼土・炭化物を含む層（5層）と灰層（6層）が検出された。

出土遺物（第105図）には、土師器杯（No.1・2）、甕（4）、甑（5）、須恵器高杯（3）等がある。1・2・4・5はカマド南東脇、3は住居跡覆土中から検出された。杯はともに身の浅い模倣杯である。2は内外面に煤が付着していた。3は脚部に三角形の透かし孔をもつ。末野産。4は小型の甕。外面に黒斑を有する。5は胴部に把手がつくタイプである。二次加熱を受けている。



第105図　E・F区7号住居跡出土遺物

第48表　E・F区7号住居跡出土遺物観察表　（第105図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	16.4	4.3	-	①②④③	②	橙	一部欠	
2	土師器杯	(14.2)	(4.6)	-	④③②①	②	明赤褐	1/3	内外面煤付着。
3	須恵器高杯	-	-	(11.4)	①④②	②	灰	脚部1/4	末野産。三角形透かし孔有。
4	土師器甕	14.6	17.2	6.2	⑥②①④	②	橙	胴部一部欠	黒斑有。
5	土師器甑	(22.0)	29.0	(7.4)	③⑥①	②	浅黄橙	1/2	二次加熱。

8号住居跡　AD－13グリッドに位置する。4・5号住居跡の下から検出された。また、北東部は3号住居跡、北西部は6号住居跡、南東部は10号土坑に切られている。

（第101図）

長軸は不明であるが、短軸は3.04mを測り、長方形を呈するものと考えられ、南北軸方向はN－55°－Eを指す。確認面からの深さは53cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系のシルト二層（15・16層）からなり、焼土・炭化物を含んでいた。自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物は、土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはなかった。

9号住居跡　AD－12グリッド、E区北東端に位置する。本住居跡を2号住居跡が切っている。

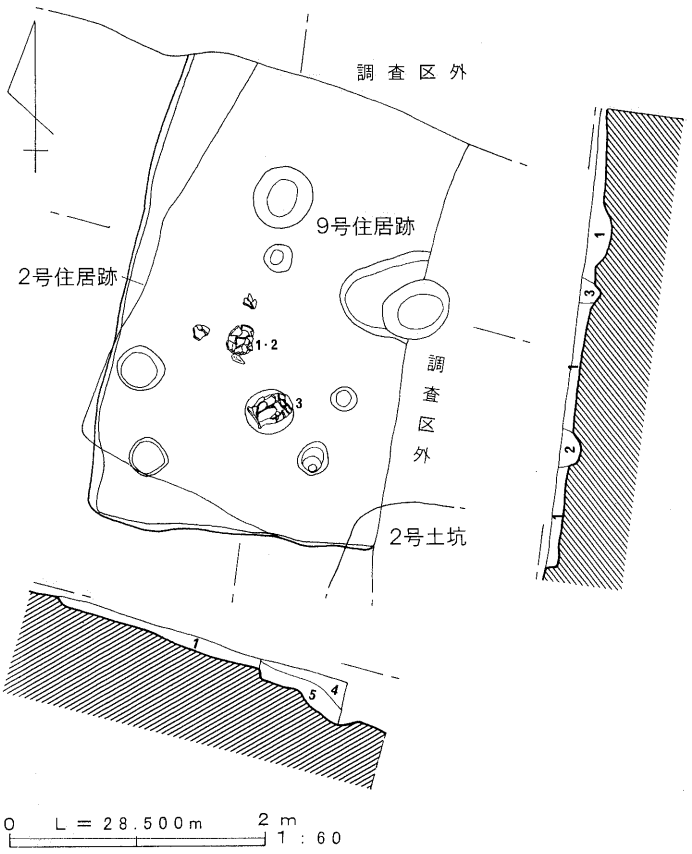
（第106図）

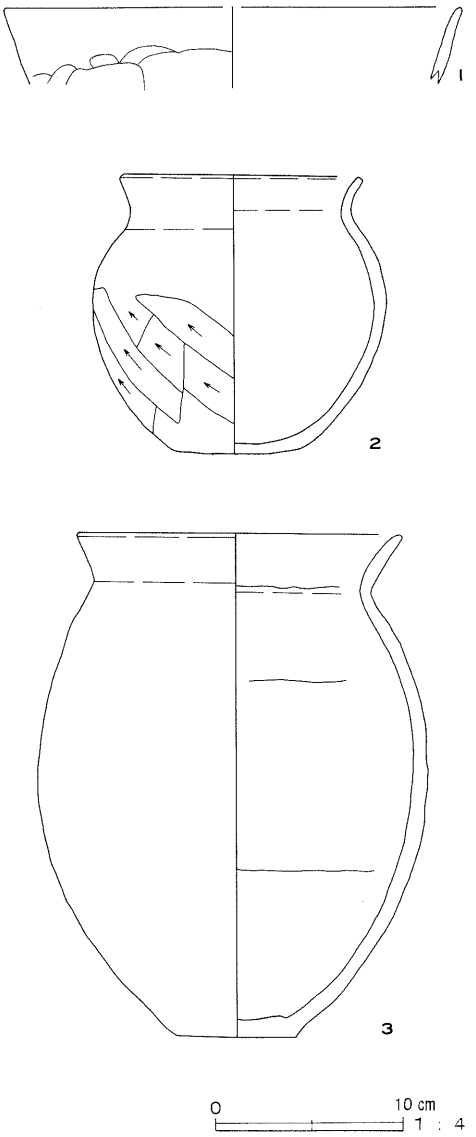
東側は調査区域外にある。床面からはピットが幾つか検出されたが、本住居の柱穴とは断定できない。直接的な切り合い関係はないが、南東上部に2号土坑がみられた。

規模・平面形は不明である。南北軸方向はN－26°－Wを指す。深さは2号住居跡床下の確認面から12cmを測り、床面はやや凹凸がみられる。覆土はにぶい黄褐色シルトの単一層（1層）で、黄色系粘土の混入物と炭化物がみられた。自然堆積と考えられる。

壁溝、カマド、貯蔵穴等はみられない。

出土遺物（第106図）は、土師器鉢（No.1）、甕（2・3）のみである。いずれも床面直上からの検出である。1は甑の可能性もある。甕は小型のもの（2）と長胴甕（3）がみられる。3は摩滅が顕著であるため、調整は図示不可能であった。ともに黒斑がみられる。





9号住居跡土層

1　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、にぶい黄橙色(10YR7/3)粘土粒、炭化物粒を多く含む。しまり良い。
2　黄褐色(2.5Y6/5)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒、炭化物粒(帯状)を含む。しまり良い。
3　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。焼土粒、炭化物粒(多量)を含む。しまりやや悪い。
4　黄褐色(10YR5/6)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒、炭化物粒(微量)を含む。しまりやや悪い。
5　黄褐色(10YR5/6)シルト。炭化物ブロックを多く含む。

第106図　E・F区9号住居跡・出土遺物

第49表　E・F区9号住居跡出土遺物観察表　(第106図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器鉢	(24.0)	-	-	③②⑥①	②	橙	上位のみ	
2	土師器甕	12.8	14.9	6.6	③②	②	赤褐	6/5	胴部外面黒斑有。
3	土師器甕	17.1	27.0	6.4	⑥④③①	②	橙	8/9	黒斑有。磨滅。

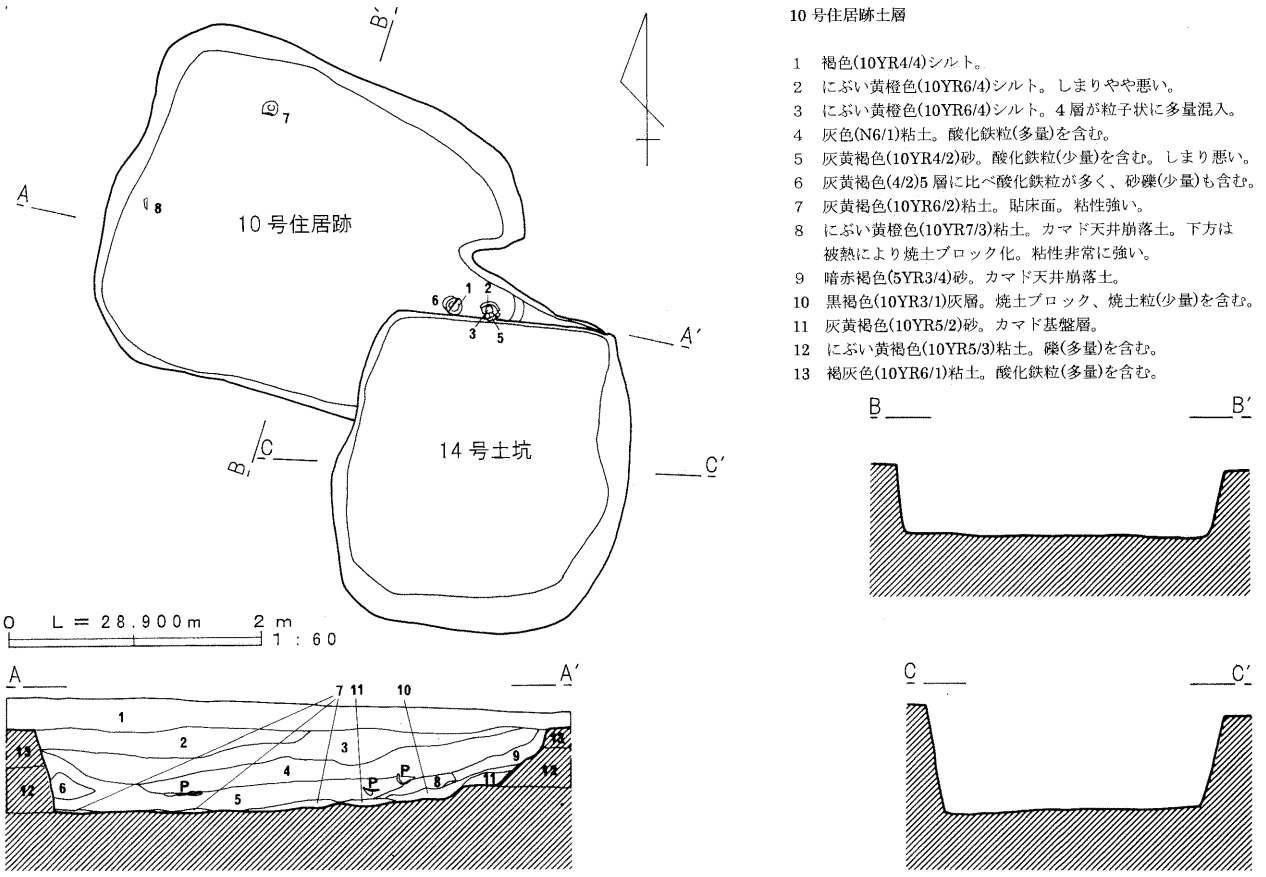
10号住居跡　(第107図)

AD－14･15グリッドに位置する。河川埋没後に構築されており、南東部を14号土坑に切られている。

長軸3.24m、短軸2.3mの長方形を呈する。主軸方向はN－68°－Eを指す。確認面からの深さは65cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。カマド前は貼床が顕著であった。覆土は堆積状況から自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴、貯蔵穴等はみられない。

カマドは南東壁中央に設けられている。袖部は14号土坑に切られているため、北東側のみの検出である。地山の掘り残しで、内側には被熱した箇所が僅かに確認された。燃焼部は床面とほぼ同一レベルで平坦であった。燃焼部と煙道部の境には10cm程の段差がある。



10 号住居跡土層

1 褐色(10YR4/4)シルト。
2 にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト。しまりやや悪い。
3 にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト。4 層が粒子状に多量混入。
4 灰色(N6/1)粘土。酸化鉄粒(多量)を含む。
5 灰黄褐色(10YR4/2)砂。酸化鉄粒(少量)を含む。しまり悪い。
6 灰黄褐色(4/2)5 層に比べ酸化鉄粒が多く、砂礫(少量)も含む。
7 灰黄褐色(10YR6/2)粘土。貼床面。粘性強い。
8 にぶい黄橙色(10YR7/3)粘土。カマド天井崩落土。下方は被熱により焼土ブロック化。粘性非常に強い。
9 暗赤褐色(5YR3/4)砂。カマド天井崩落土。
10 黒褐色(10YR3/1)灰層。焼土ブロック、焼土粒(少量)を含む。
11 灰黄褐色(10YR5/2)砂。カマド基盤層。
12 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。礫(多量)を含む。
13 褐灰色(10YR6/1)粘土。酸化鉄粒(多量)を含む。

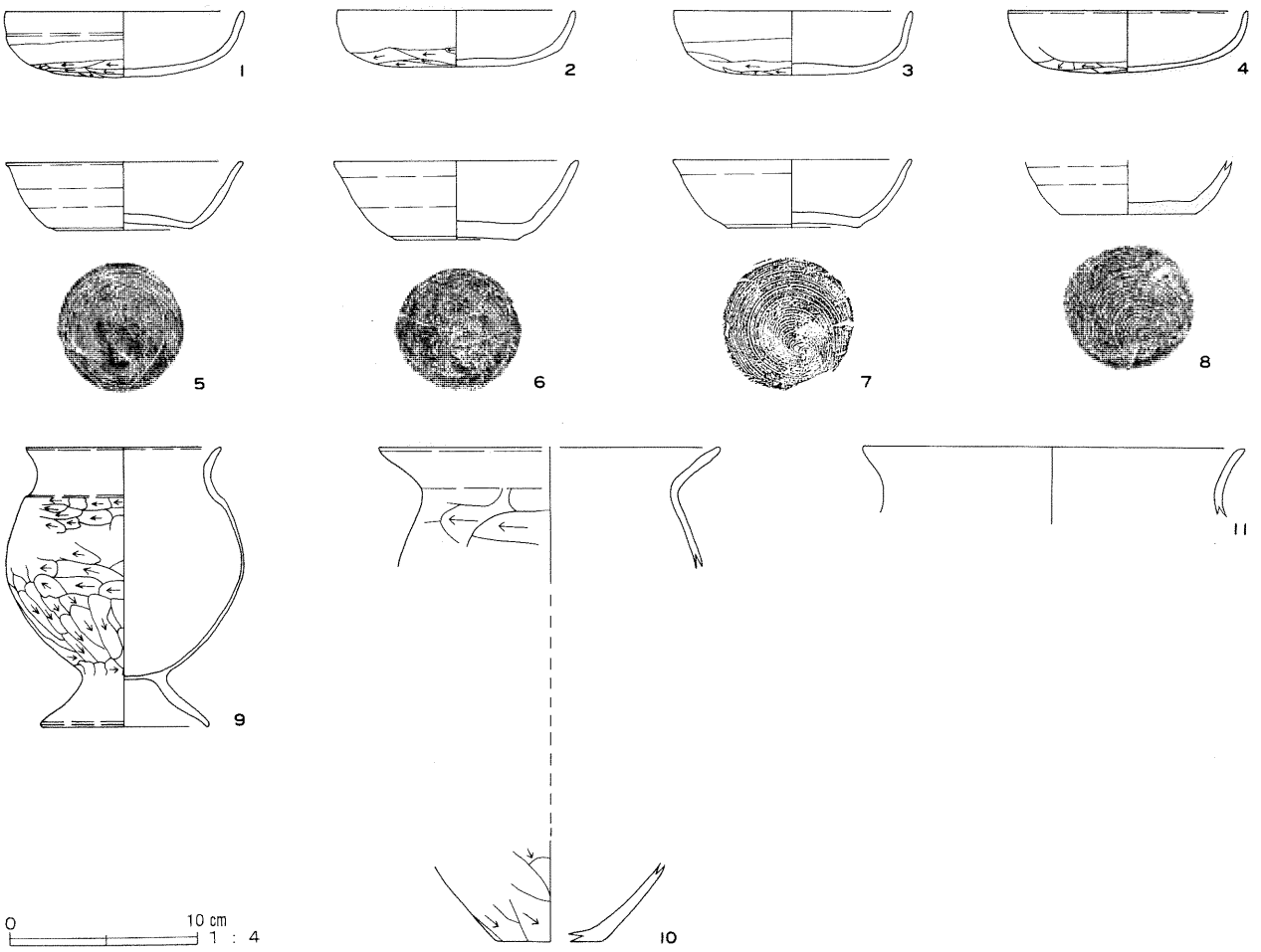
第107図　E・F区10号住居跡

燃焼部には、土器が重なった状態で検出された。煙道部は、ほぼ平坦であり、先端で緩やかに立ち上がる。覆土は8・9層が天井部崩落土であり、その下から灰層（10層）が検出された。

出土遺物（第108図）には、土師器杯（№1～4）、台付甕（9）、甕（10・11）、須恵器杯（5～8）等がある。土師器、須恵器ともに杯が多数検出された。№1～3・5・6はカマド燃焼部、7・8は北西部床面、4・9～11は覆土中からの検出である。1～4は平底ぎみで、口縁部はほぼ直立する。口縁部は横ナデ、体部は無調整、底部にはヘラ削りが施こされている。器壁が薄い。5～8は平底ないしやや上げ底で、体部から口縁部にかけて内湾しながら直線的に立ち上がる。いずれも末野産で、9世紀前半のものである。9は小型のものである。胴上部は横位、胴下部は斜位のヘラ削りが施されている。10は口縁部が「く」の字状を呈する長胴甕であり、流れ込みと思われる。11は口縁部でも上端のみの検出であるが、「コ」の字状を呈する長胴甕である。

11号住居跡（第109図）　AC・AD－15グリッドに位置する。ほぼ同軸方向を向く12・13号住居跡を削平しており、南東部は河川跡に切られている。

規模・平面形は不明であるが、北西壁は6.75mを測る。主軸方向はN－42°－Wを指す。確認面からの深さは28cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄色粘土（1層）が厚く堆積しており、その下の床面直上に炭化物層（8層）等がみら



第108図　E・F区10号住居跡出土遺物

第50表　E・F区10号住居跡出土遺物観察表　（第108図）

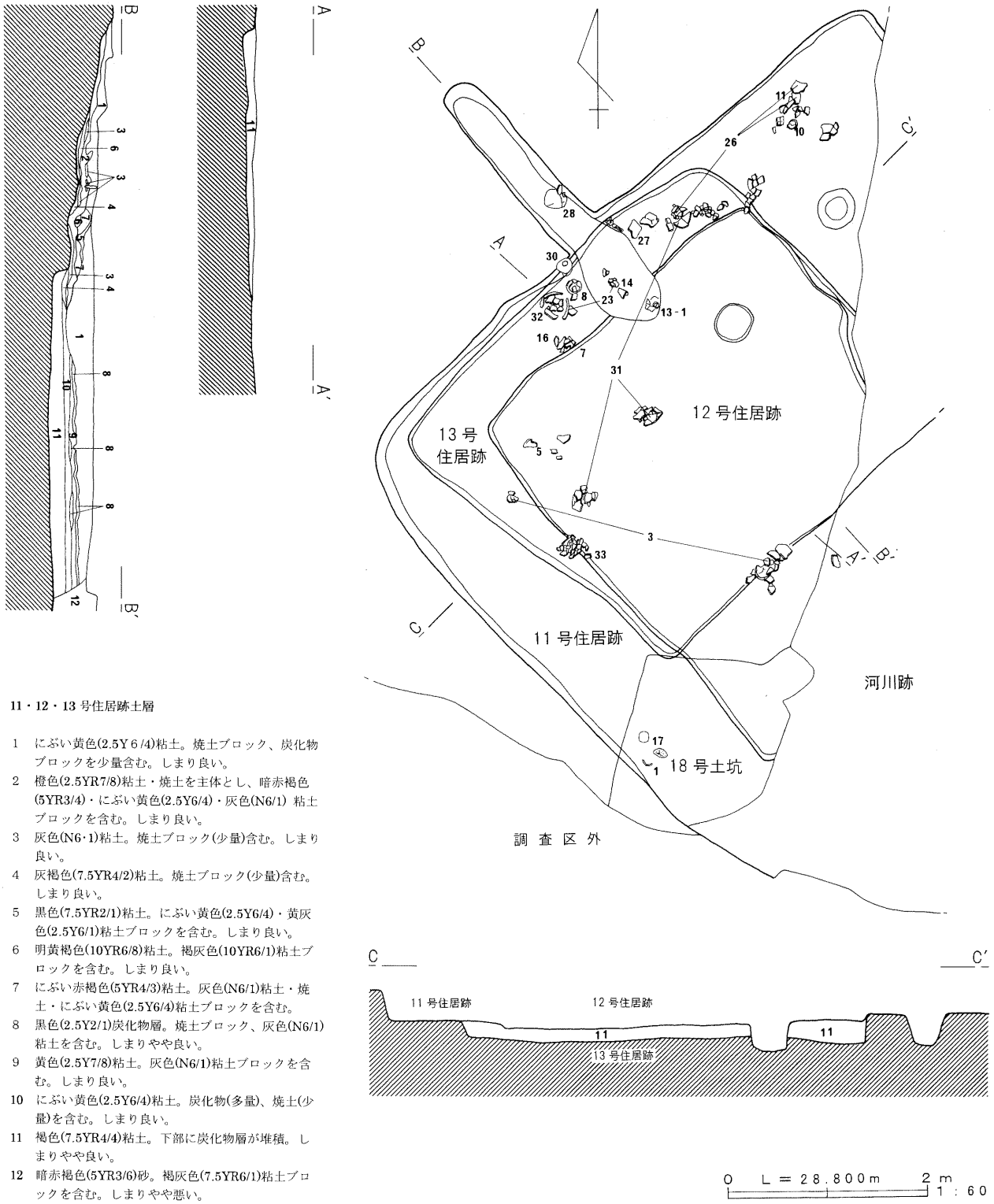
No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	12.5	3.5	-	②①④③	②	橙	一部欠	
2	土師器杯	12.5	3.0	-	②①④③	②	橙	4/5	
3	土師器杯	12.5	3.5	-	②①④③	②	橙	5/6	
4	土師器杯	12.5	3.3	-	④②①③	②	にぶい橙	4/5	
5	須恵器杯	12.6	3.6	7.0	⑤②①③⑥	①	灰	4/5	末野産。
6	須恵器杯	13.0	4.2	6.5	⑥②①③	②	紫灰	一部欠	末野産。
7	須恵器杯	12.6	3.6	7.0	⑤②①⑥③	①	青灰	一部欠	末野産。
8	須恵器杯	-	(3.9)	7.0	⑥①②④③	③	灰白	下位のみ	末野産。
9	土師器台付甕	10.4	14.9	9.0	②①④③⑥	②	明赤褐	2/3	
10	土師器甕	(18.2)	-	(5.6)	⑥④①③	②	赤褐	上・下位のみ	
11	土師器甕	(20.2)	-	-	⑥①②④	③	赤褐	口縁部5/8	

れた。自然堆積と考えられる。ピットは1つ確認されたが、柱穴の1つと考えられる。径43×37cm、床面からの深さは34cmを測る。

壁溝・貯蔵穴等はみられない。

カマドは北西壁中央に設けられている。袖部は検出されなかった。燃焼部は床面から5cm程掘り込まれている。燃焼部から煙道部には凹凸がみられるが、先端に向かって緩やかに立ち上がる。幅は約43cm、壁外へは1.92m張り出している。カマド上層は住居跡内覆土と同じで、その下から焼土を含む層（2・3・4層）が検出された。

出土遺物（第110・111図）には、土師器杯（No.1～16）、盌（17～20）、高杯（21～25）、甕（26～32）、甑（33）、土製丸玉（34）、滑石製模造品（35）等がある。主にカマド周辺か

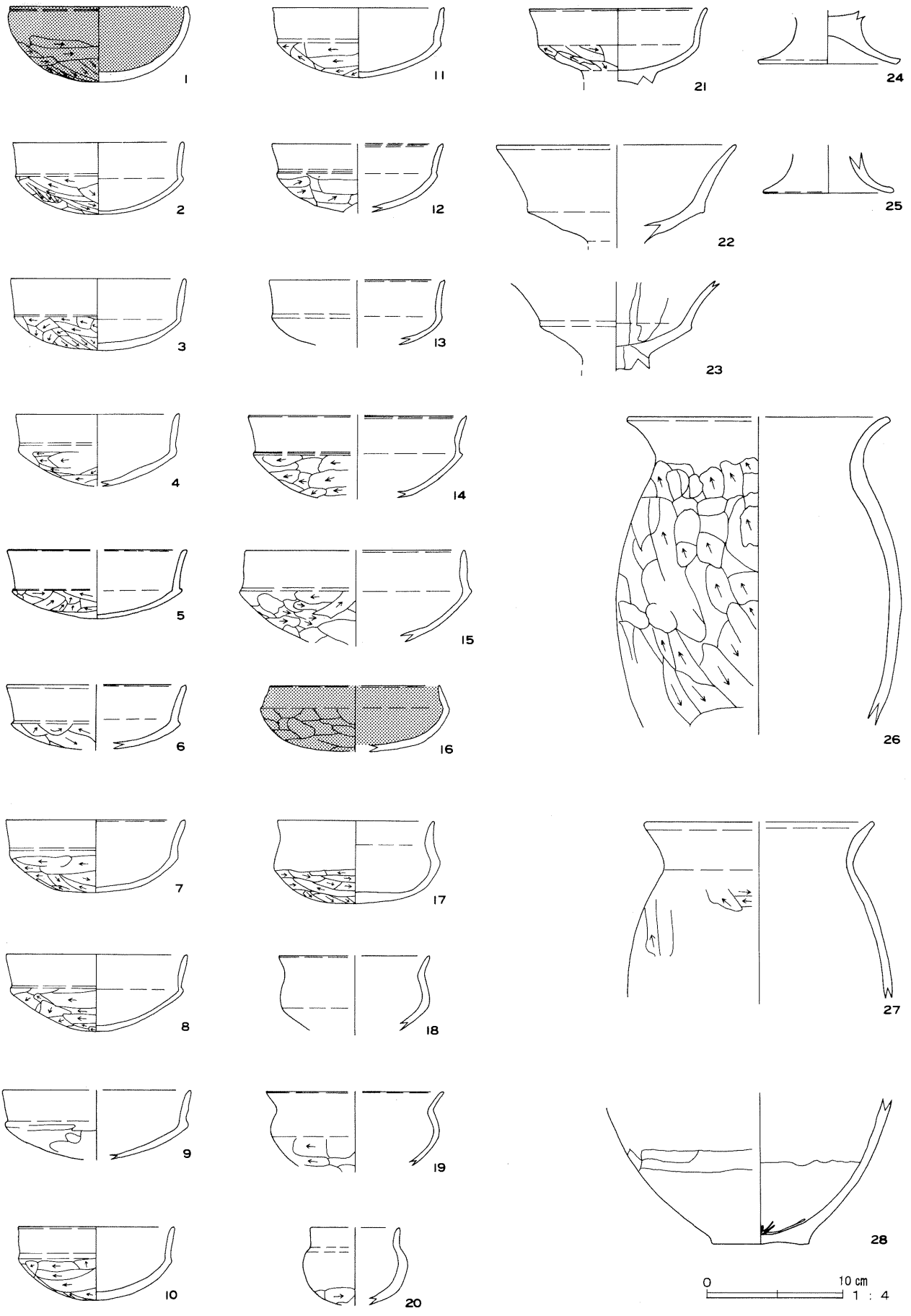


11・12・13 号住居跡土層

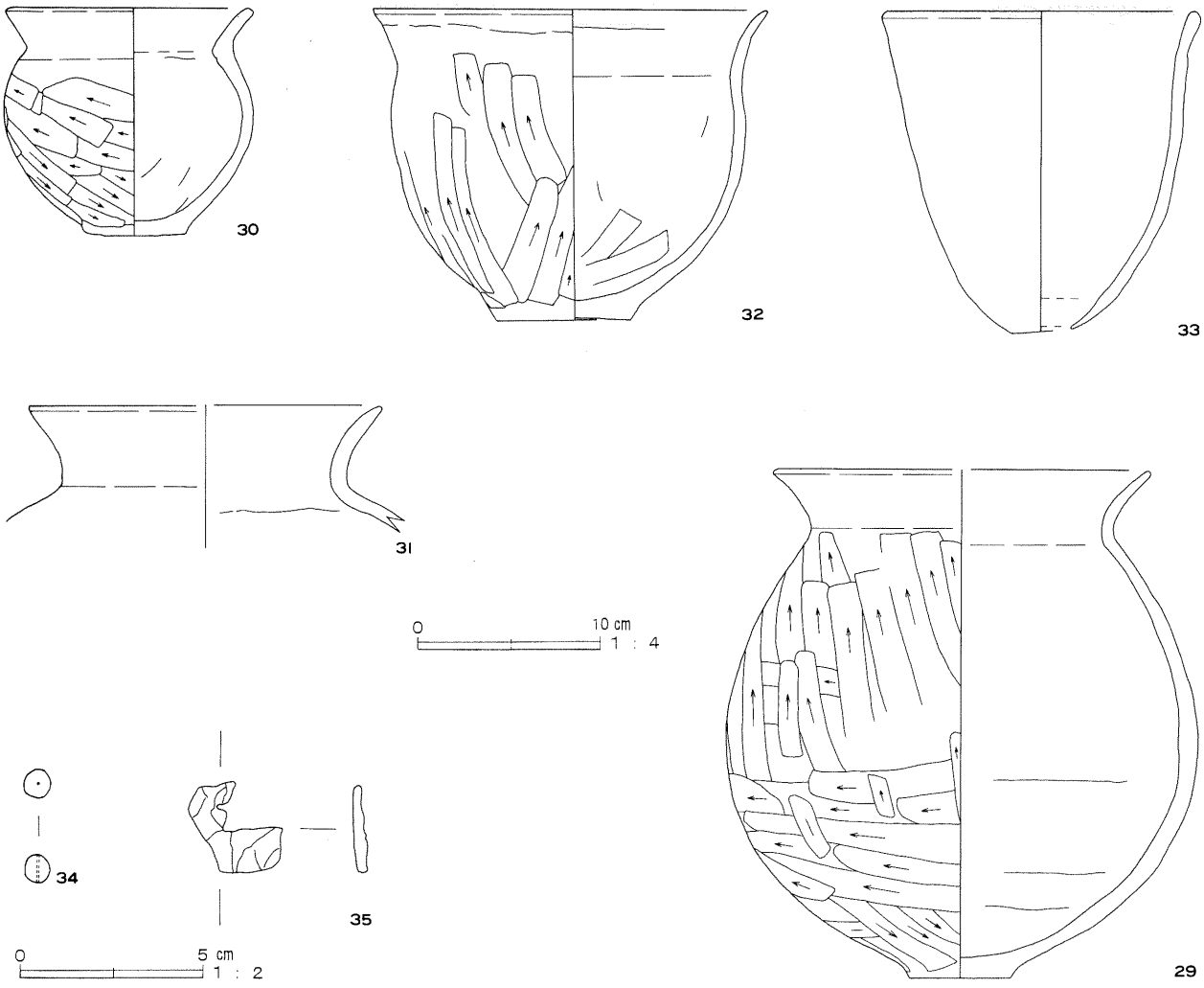
1 にぶい黄色(2.5Y 6 /4)粘土。焼土ブロック、炭化物ブロックを少量含む。しまり良い。
2 橙色(2.5YR7/8)粘土・焼土を主体とし、暗赤褐色(5YR3/4)・にぶい黄色(2.5Y6/4)・灰色(N6/1) 粘土ブロックを含む。しまり良い。
3 灰色(N6・1)粘土。焼土ブロック(少量)含む。しまり良い。
4 灰褐色(7.5YR4/2)粘土。焼土ブロック(少量)含む。しまり良い。
5 黒色(7.5YR2/1)粘土。にぶい黄色(2.5Y6/4)・黄灰色(2.5Y6/1)粘土ブロックを含む。しまり良い。
6 明黄褐色(10YR6/8)粘土。褐灰色(10YR6/1)粘土ブロックを含む。しまり良い。
7 にぶい赤褐色(5YR4/3)粘土。灰色(N6/1)粘土・焼土・にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土ブロックを含む。
8 黒色(2.5Y2/1)炭化物層。焼土ブロック、灰色(N6/1)粘土を含む。しまりやや良い。
9 黄色(2.5Y7/8)粘土。灰色(N6/1)粘土ブロックを含む。しまり良い。
10 にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。炭化物(多量)、焼土(少量)を含む。しまり良い。
11 褐色(7.5YR4/4)粘土。下部に炭化物層が堆積。しまりやや良い。
12 暗赤褐色(5YR3/6)砂。褐灰色(7.5YR6/1)粘土ブロックを含む。しまりやや悪い。

第109図　E・F区11・12・13号住居跡

ら集中して検出され、中でも杯が多数みられた。34•35は覆土中からの検出である。杯は、丸底で内湾しながらそのまま立ち上がるもの（1）と、身の深い模倣杯（2～16）があるが、後者が圧倒的に多い。1・16は赤彩が施されている。17～20は口縁部に屈曲がみられることから盤としたが、大きさにややバラツキがある。18は摩滅が顕著であり、二次加熱



第110図　E・F区11号住居跡出土遺物(1)



第111図　E・F区11号住居跡出土遺物(2)

第51表　E・F区11号住居跡出土遺物観察表　(第110・111図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	13.0	5.5	-	②①⑥	②	灰白	4/5	赤彩。
2	土師器杯	12.5	5.3	-	②⑥①	②	明赤褐	一部欠	
3	土師器杯	12.8	5.3	-	③②①④	②	黄橙	一部欠	
4	土師器杯	12.0	(5.3)	-	③①⑥	②	橙	1/2	
5	土師器杯	(13.0)	5.1	-	③①④②	②	明赤褐	1/2	
6	土師器杯	(13.2)	(4.8)	-	④①③	②	明褐	1/3	
7	土師器杯	13.1	5.3	-	③②①	②	橙	3/4	
8	土師器杯	13.2	5.6	-	③②①	②	橙	4/5	
9	土師器杯	(13.6)	-	-	①③②	②	明赤褐	1/4	
10	土師器杯	11.5	5.4	-	③①④⑥	②	橙	一部欠	
11	土師器杯	12.6	5.0	-	③①	②	橙	一部欠	
12	土師器杯	(12.4)	-	-	③①④	②	橙	1/3	
13	土師器杯	(12.8)	-	-	③②①④	②	赤	1/4	二次加熱。磨滅。
14	土師器杯	16.0	-	-	③②①④	②	橙	1/3	
15	土師器杯	(16.0)	-	-	③①②④	②	橙	1/3	
16	土師器杯	(12.4)	(4.9)	-	①③⑥④	②	赤	1/2	赤彩。
17	土師器盤	11.4	6.0	-	①②③④	②	黄橙	完形	
18	土師器盤	(11.0)	-	-	③①④	②	明赤褐	1/3	二次加熱。外面磨滅。
19	土師器盤	(13.0)	-	-	③④①②	②	橙	1/3	
20	土師器盤	(6.6)	-	-	⑥①②	②	橙	1/2	
21	土師器高杯	13.0	-	-	③①⑥④	②	明赤褐	杯部3/4	二次加熱。
22	土師器高杯	(17.8)	-	-	①④②③	②	明赤褐	杯部1/4	二次加熱。
23	土師器高杯	-	-	-	①④③②⑥	②	明赤褐	杯部2/3	水拭き。

24	土師器高杯	-	-	14.0	③①④②	②	橙	脚部4/5	二次加熱。
25	土師器高杯	-	-	9.6	③②①④	②	橙	脚部2/3	
26	土師器甕	(19.2)	-	-	⑥①④③	②	橙	上半1/3	二次加熱。下面煤付着。
27	土師器甕	(16.4)	-	-	⑥②	②	橙	上位1/2	
28	土師器甕	-	-	7.0	⑥①②④③	②	橙	底部	磨滅。
29	土師器甕	(20.8)	28.3	5.6	①③⑥④	②	橙	1/2	
30	土師器甕	14.7	12.7	5.5	③⑥①	②	明赤褐	一部欠	底部外面黒斑有。
31	土師器甕	(19.4)	-	-	⑥③②①	②	浅黄橙	口縁部1/3	
32	土師器甕	30.9	17.4	7.4	⑥④②	②	にぶい橙	完形	内面黒斑有。
33	土師器甑	17.6	18.0	3.4	①③⑥	③	橙	一部欠	二次加熱。磨滅。
34	土製丸玉	径　0.8　孔径　0.1						完形	
35	石製模造品	最大長　2.3　最大厚0.4						大半欠	滑石製。

を受けている。高杯は模倣杯に低い脚部がつくもの（21・24・25）と、口縁部が大きく外反し、器高の高い脚部がつくもの（22・23）がある。22・24は二次加熱を受けている。甕は長胴甕（26～28）、丸胴甕（29・31）、小型（30・32）等がある。二次加熱を受けたものや、煤の付着、黒斑を有するもの等がある。34は完形品。35は大半を欠くため、形状は不明である。なお、床面中央から桃と思われる種子も出土した。

12号住居跡（第109図）　AC・AD－15グリッドに位置する。ほぼ同軸方向を向く13号住居跡を切り、さらにその上から11号住居跡が被さるように造られている。南東部は河川跡に切られている。

長軸4.4m、短軸3.65mの長方形を呈する。南北軸方向はN－42°－Wを指す。確認面からの深さは48cmを測り、床面は凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土はにぶい黄色粘土の単一層（10層）で、炭化物を含んでいた。自然堆積と考えられる。ピットが1つ検出された。径40×35cm、床面からの深さは28cmを測り、柱穴かどうかは不明である。

壁溝、カマド、貯蔵穴等はみられない。

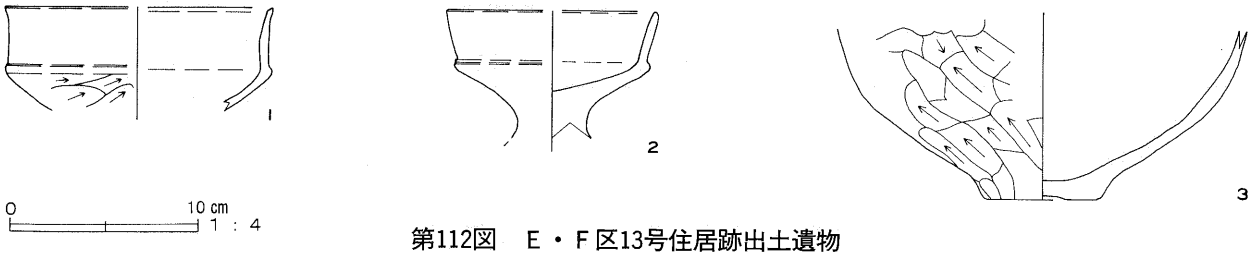
遺物は、土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはなかった。

13号住居跡（第109図）　AC・AD－15グリッドに位置する。ほぼ同軸方向の11・12号住居跡の下から検出され、南東部は切られている。

長軸4.16m、短軸3.64m程の長方形を呈する。南北軸方向はN－46°－Wを指す。確認面からの深さは63cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は褐色粘土の単一層（11層）であり、床面直上には炭化物が堆積していた。自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴、カマド、貯蔵穴等はみられない。

出土遺物（第112図）には、土師器杯（No.1）、高杯（2）、甕（3）等がある。1は北西部床面からの検出であり、2・3は覆土中からの検出である。1は身の深い模倣杯、2は身の深い模倣杯に脚部が付くタイプである。3は長胴甕で、下部のみ検出された。内面は被熱によって黒色化していた。



第112図　E・F区13号住居跡出土遺物

第52表　E・F区13号住居跡出土遺物観察表　(第112図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(14.0)	-	-	③④①	②	橙	1/4	
2	土師器高杯	(11.2)	-	-	③①②④	②	橙	2/3	磨滅。
3	土師器甕	-	-	(6.4)	⑥④①③	②	にぶい橙	下半1/4	内面黒色。

14号住居跡　(第113図)

AC・AD－15～17グリッドに位置する。南西部から南東部にかけては15・16号住居跡を切っており、北東部は調査区域外になる。また、住居跡中央の覆土上部は2号溝跡が重複する。

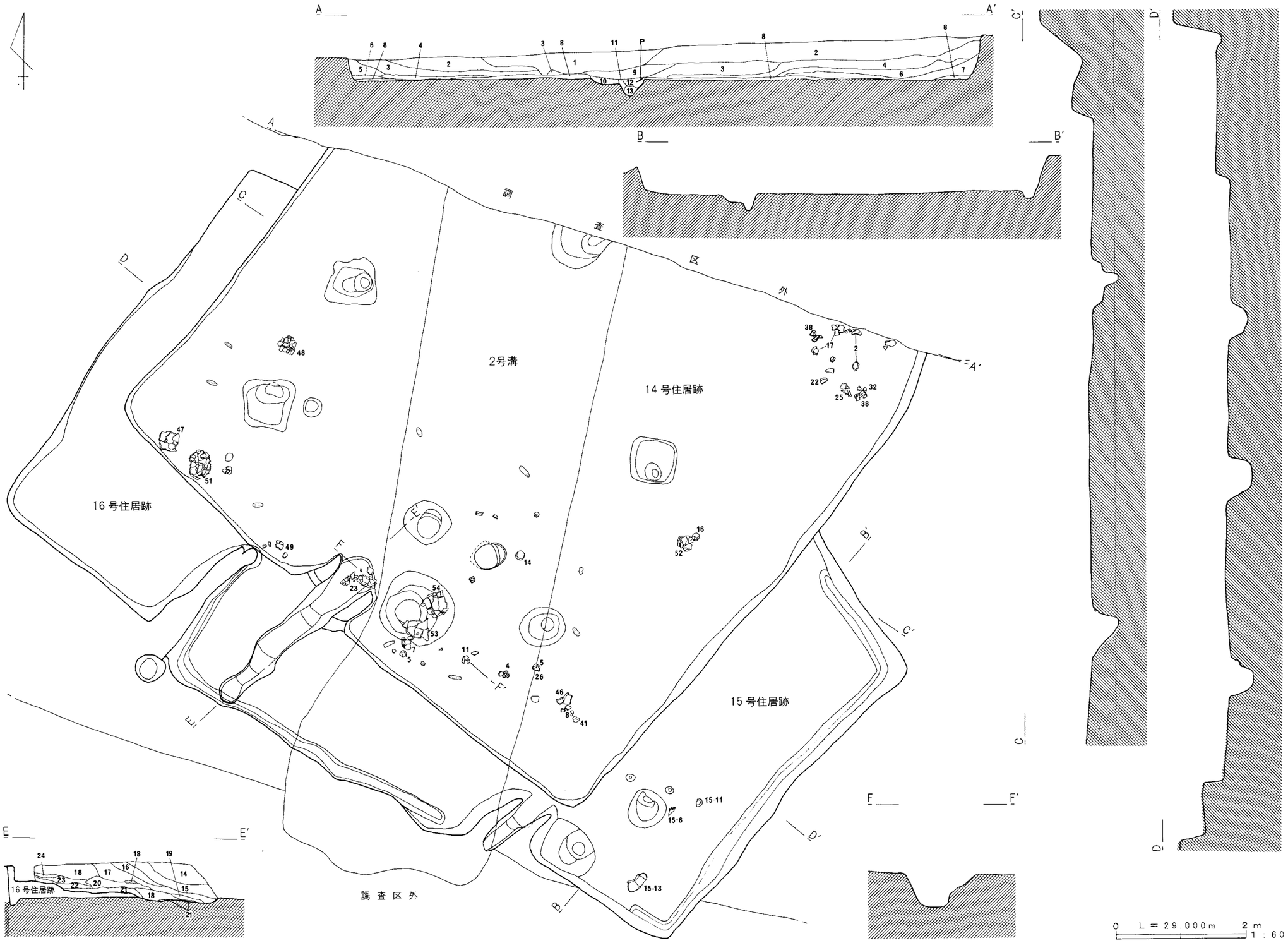
規模・平面形は不明であるが、南西壁は9.27mを測り、大きな住居跡である。主軸方向はS－39°－Wを指す。確認面からの深さは77cmを測り、床面はやや凹凸がみられる。ほぼ全面に貼床が確認された。覆土は黄橙色の粘土ないしシルト（2～13層）を主体とする。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。壁溝はみられない。ピットは7つ確認された。北側の調査区との境にあるピット以外は、柱穴と考えられる。径70～80cm、床面からの深さは30～40cmといずれも深い掘り込みであった。

カマドは南西壁のほぼ中央に設けられている。袖部は地山を掘り残して造られて、内側には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は61cm、燃焼部は53cmを測る。煙道部はやや蛇行しており、先端はピット状となる。幅は燃焼部との境で48cm、先端で33cmを測る。燃焼部には掘り込みが造られており、床面からの深さは11cmであった。燃焼部と煙道部の境には14cm程の段が設けられている。煙道部はほぼ平坦であり、先端でほぼ直角に立ち上がる。壁外へは2.09m程張り出している。覆土は18層が天井部となり、その下に焼土・炭化物を含む層（19・20・23・24層）があり、最下層に灰層（21層）がみられた。

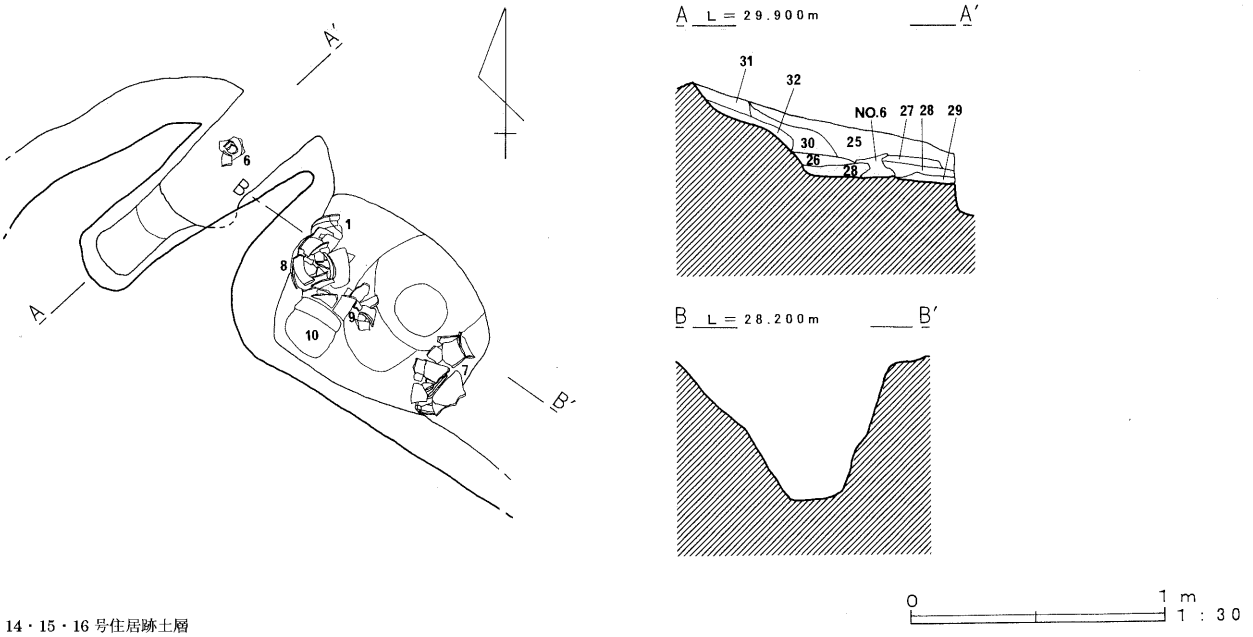
カマドの南東脇には、径1.1m前後、床面からの深さ48cmの円形の貯蔵穴がみられた。

出土遺物(第115～117図)には、土師器杯(No.1～36)、高杯(38～41)、盌(42)、坩(43)、壺(45)、甕(46～52)、甑(53・54)、須恵器高台付椀(37)、瑯(44)、管玉(55)、土製丸玉(56)、滑石製臼玉(57)、石製紡錘車(58)、土錘(59～64)等がある。

土器類は、北東部の調査区との境辺りから杯類(2・17・22・25・32・38)、南西隅では甕(47・48・51)、貯蔵穴からは甑(53・54)が検出された。杯は丸底で口縁部がほぼ直立する北武蔵型杯(1～9)と、模倣杯(10～36)等がある。模倣杯には、杯蓋模倣杯(10～14)と杯身模倣杯(15～36)があるが、後者が多く検出されている。煤が付着しているものや、二次加熱を受けているものが多く見られた。37は末野産で、2号溝からの流れ込みである。高杯はすべて模倣杯に低い脚部が付くタイプである。42は小型のものであり、ミニチュア



第113図　E・F区14・15・16号住居跡



14・15・16号住居跡土層

1　灰白色(5Y7/1)砂。酸化鉄粒(多量)を含む。
2　灰黄褐色(10YR5/2)シルト。焼土粒子・炭化物(微量)を含む。しまり良い。
3　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト。しまり良い。
4　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト。炭化物が蜜に充填している。
5　にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土。地山がブロック状、粒子状に多量混じる。しまり非常に悪い。
6　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト。炭化物(少量)、焼土粒(微量)を含む。
7　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。土器を包含。粘性やや強い。
8　黄橙色(10YR8/6)粘土。貼り床。しまり非常に良い。
9　にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土。しまり悪い。
10　にぶい黄色(2.5YR6/3)粘土。しまり非常に良い。
11　にぶい黄色(2.5YR6/3)粘土。12層が粒子状に混入。しまり悪い。
12　黄褐色(2.5Y5/3)粘土。しまり悪い。
13　黒褐色(2.5Y3/2)粘土。12層が粒状に混入。炭化物が充填している。
14　灰黄褐色(10YR5/2)シルト。炭化物・焼土粒(微量)を含む。しまり良い。
15　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト。しまり良い。
16　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト。炭化物(多量)を含む。
17　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。粘性やや強い。
18　灰黄色(2.5YR7/2)粘土。カマド天井部。しまり非常に良い。
19　灰黄色(2.5YR7/2)粘土。炭化物(少量)を含む。しまり良い。18層が前方へ流出したもの。
20　灰黄色(2.5YR7/2)粘土。炭化物、焼土粒・ブロックを多量に含む。
21　褐灰色(7.5YR5/1)灰層。
22　浅黄色(2.5Y7/4)粘土。焼土ブロック(多量)を含む。しまり非常に悪い。
23　浅黄色(2.5Y7/4)粘土。焼土ブロック(少量)を含む。しまり悪い。
24　浅黄色(2.5Y7/4)粘土。しまり悪い。
25　オリーブ黄色(5Y6/4)シルト。酸化鉄粒を含む。
26　赤色(19YR4/8)粘土。焼土ブロックを含む。カマド天井燃焼部。
27　26層と同一。炭化物(少量)を含む。
28　黒褐色(10YR2/2)灰層。炭化物が充填している。
29　赤色(10YR4/8)粘土。地山が被熱により赤色土化。
30　灰オリーブ色(5Y6/2)粘土。粘性強い。カマド天井。
31　オリーブ黄色(5Y6/4)粘土。焼土粒、炭化物粒(少量)を含む。しまり悪い。
32　オリーブ黄色(5Y6/4)粘土。炭化物(少量)を含む。

第114図　E・F区15号住居跡カマド

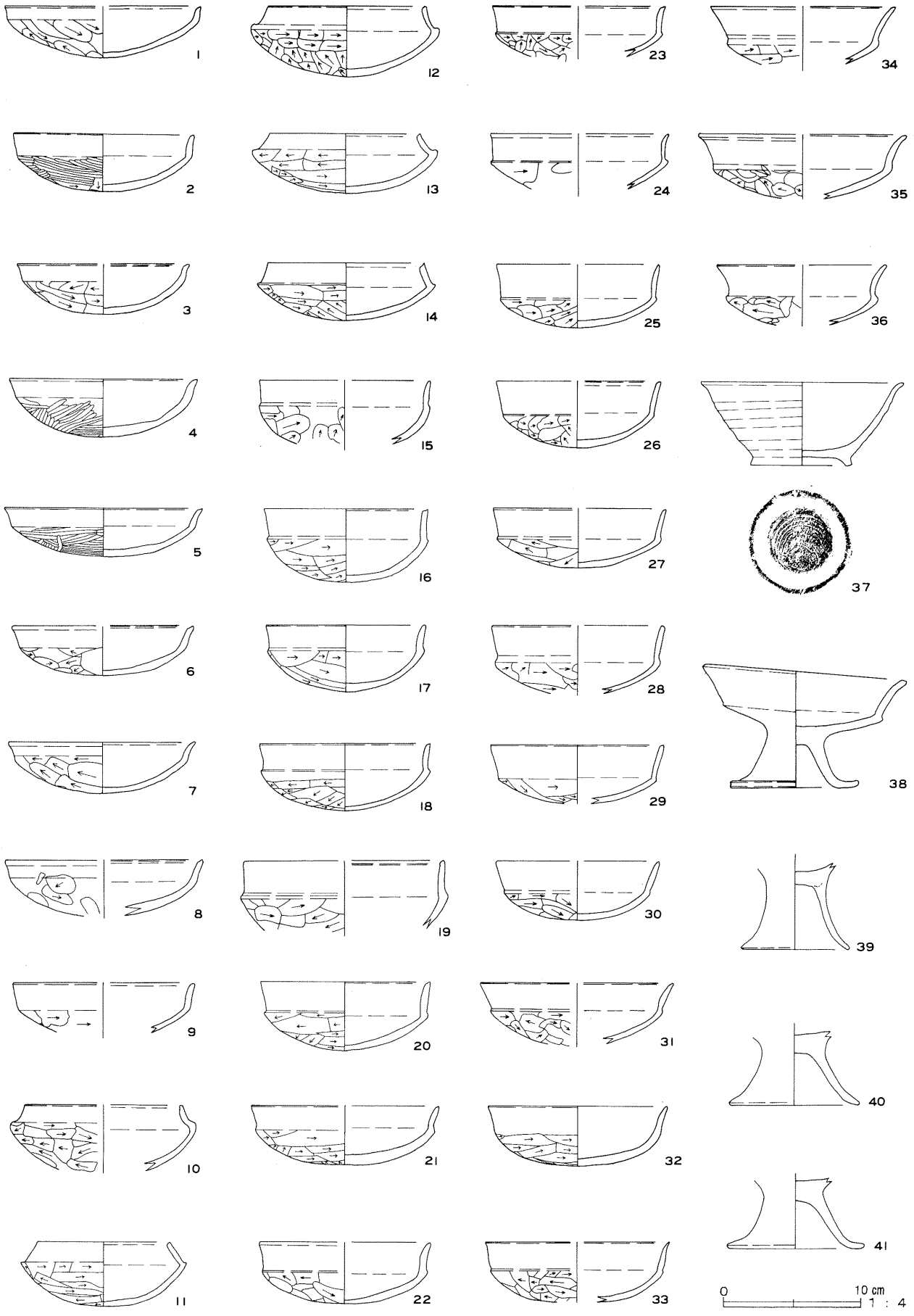
土器としてもよいものかもしれない。43は摩滅が顕著であり。調整は図示不可能であった。44は本住居跡に伴う唯一の須恵器である。産地は不明である。45は口縁部形態から壺とした。二次加熱を受けている。甕は長胴甕（47～51）と小型のもの（46・52）があり、前者が多く検出されている。煤の付着や黒斑を有するもの、二次加熱を受けているものが多い。甑はいずれも胴部最大径に把手が付く。55～57はすべて完形品である。58はその形態から紡錘車としたが、中心に孔がみられないことから、製作途上段階のものであろう。土錘は6点検出された。長さ5cm、径1.5cm前後のものが主体となる。

15号住居跡（第113図）

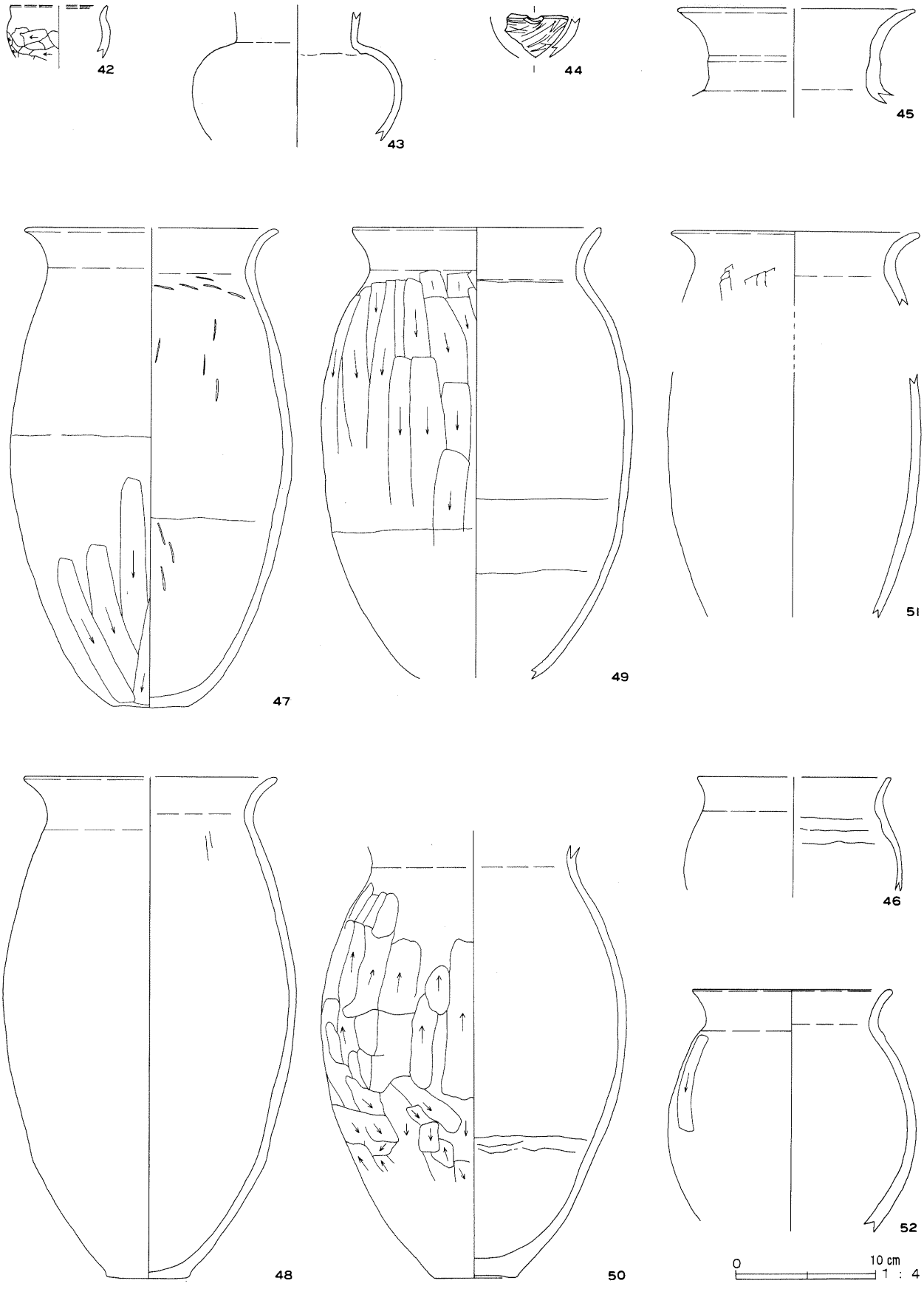
AC・AD－15・16グリッドに位置する。14・16号住居跡に切られている。

長軸9.08m、短軸6.89m程の長方形を呈する。主軸方向はS－35°－Wを指す。

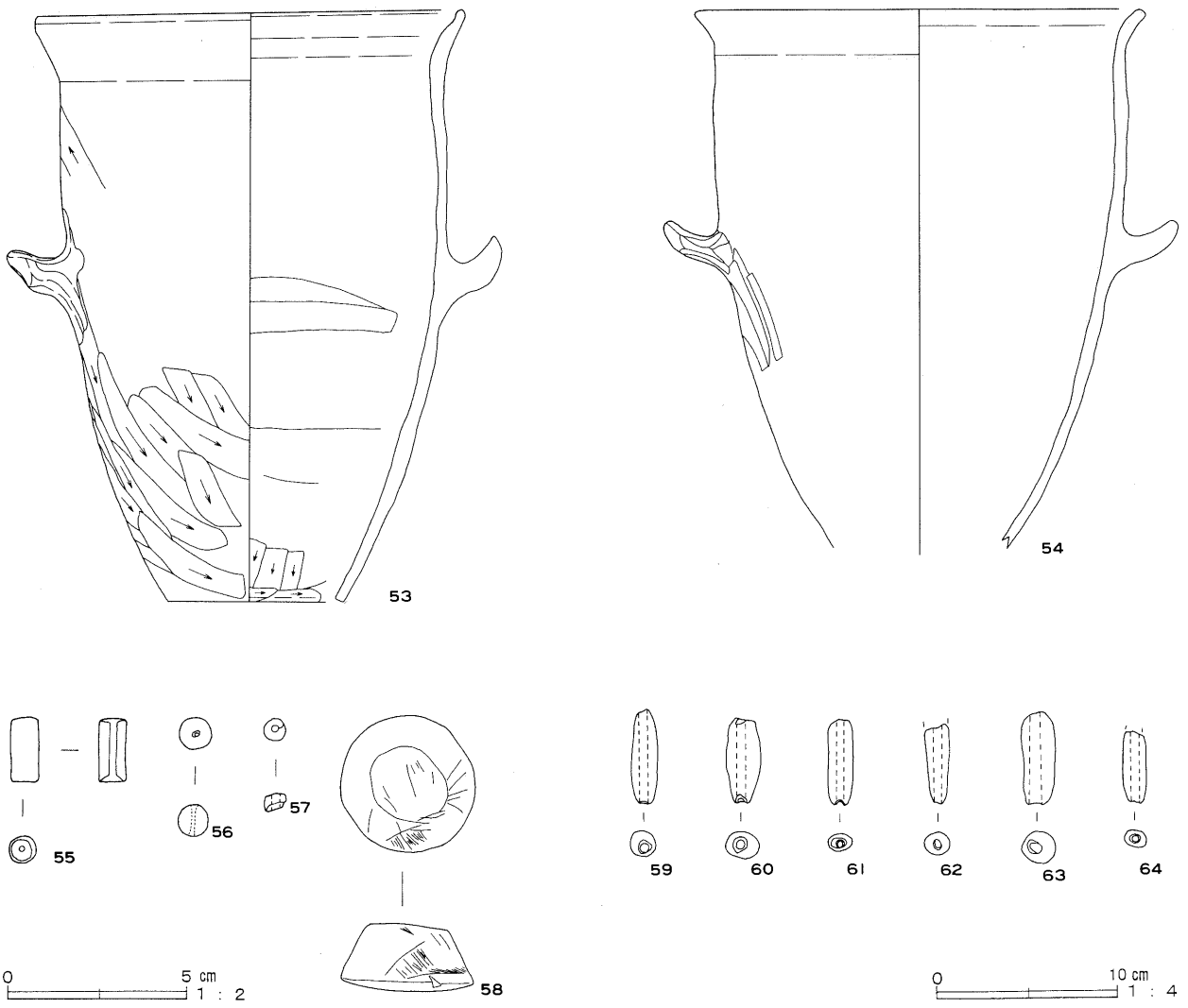
確認面からの深さは64cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、黄色系のシルトで炭化物を含んでいた。自然堆積と考えられる。壁溝はほぼ全周しているが、南東隅と北東壁の14号住居跡との境で途切れている。幅は10～42cm、床面からの深さ



第115図　E・F区14号住居跡出土遺物(1)



第116図　E・F区14号住居跡出土遺物(2)



第117図　E・F区14号住居跡出土遺物(3)

第53表　E・F区14号住居跡出土遺物観察表　(第115～117図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(14.2)	3.8	-	⑥④③①	②	褐灰	1/4	
2	土師器杯	13.2	4.2	-	⑥①④	②	橙	3/4	内外面煤付着。
3	土師器杯	(12.6)	3.7	-	⑥④①	②	黒褐	1/3	
4	土師器杯	13.6	4.3	-	④①⑥	②	灰褐	口縁部一部欠	内外面煤付着。
5	土師器杯	14.4	3.5	-	④③①	②	黒褐	3/4	内外面煤付着。
6	土師器杯	(13.2)	3.6	-	①⑥④	②	赤黒	1/4	
7	土師器杯	13.7	3.8	-	①③②④	②	灰褐	2/3	二次加熱。
8	土師器杯	(14.6)	-	-	①③②	②	橙	1/4	
9	土師器杯	(13.2)	-	-	①⑥③	②	橙	1/3	
10	土師器杯	(11.6)	-	-	①③④②	②	黒褐	1/3	黒色処理。
11	土師器杯	9.6	4.7	-	①⑥④	②	黒褐	口縁部1/6欠	内外面煤付着。
12	土師器杯	11.7	-	-	③①②⑥④	②	明赤褐	2/3	二次加熱。剝離。
13	土師器杯	11.0	4.4	-	①⑥④	②	褐灰	完形	
14	土師器杯	11.4	4.2	-	①⑥④	②	橙	完形	外面黒斑有。内面煤付着。
15	土師器杯	(12.5)	-	-	③①②④⑥	②	橙	1/4	二次加熱。内面煤付着。
16	土師器杯	12.0	5.3	-	③⑥②④	②	橙	口縁部1/5欠	
17	土師器杯	11.6	5.0	-	③①④	②	明赤褐	5/6	
18	土師器杯	12.4	4.9	-	①⑥	②	橙	2/3	外面黒斑有。
19	土師器杯	(14.6)	-	-	⑥①③	②	明赤褐	1/4	
20	土師器杯	12.3	5.0	-	①②④	②	明赤褐	一部欠	外面黒斑有。
21	土師器杯	(13.6)	4.3	-	③①④	②	橙	1/2	外面黒斑有。
22	土師器杯	(12.4)	-	-	③①⑥	②	橙	1/3	

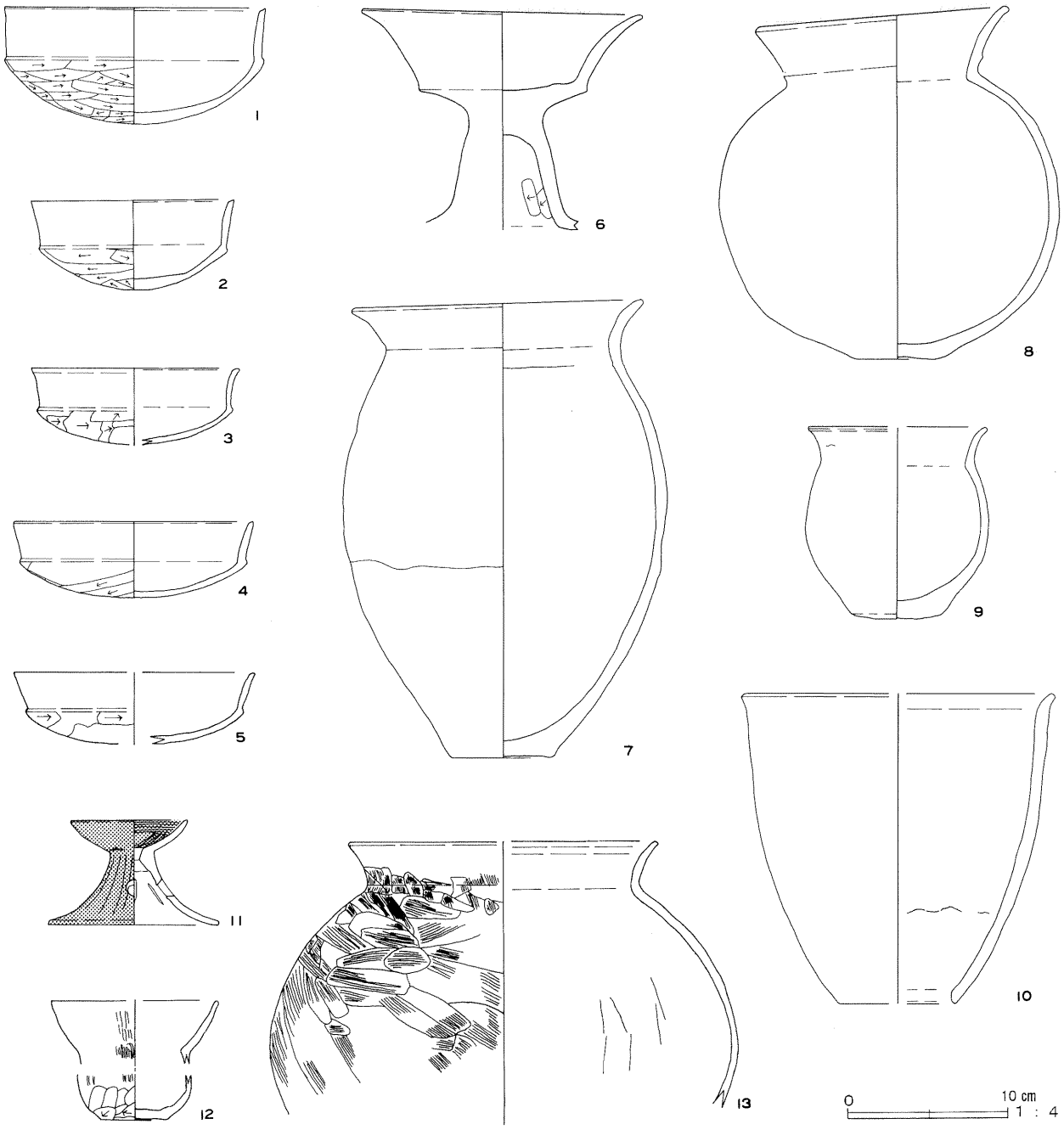
23	土師器杯	(12.2)	-	-	③②①⑥④	②	にぶい橙	1/3	
24	土師器杯	(12.8)	-	-	③②①	②	浅黄橙	1/3	
25	土師器杯	(12.0)	4.7	-	③①②④⑥	②	黒褐	3/5	全面炭化物付着。
26	土師器杯	(12.0)	-	-	③①②④⑥	②	橙	1/2	
27	土師器杯	(12.6)	4.3	-	③①⑥④	②	明赤褐	1/3	二次加熱。表面磨滅。
28	土師器杯	(12.4)	-	-	⑥①③	②	橙	1/3	
29	土師器杯	12.6	-	-	③①④	②	橙	3/4	外面黒斑有。
30	土師器杯	(11.8)	4.3	-	⑥③①④	②	橙	1/3	
31	土師器杯	(14.0)	-	-	③①②④	②	橙	1/3	
32	土師器杯	13.0	4.4	-	⑥①④	②	橙	完形	
33	土師器杯	(13.4)	-	-	③①④②	②	浅黄橙	1/3	
34	土師器杯	(13.4)	-	-	⑥①③④	②	橙	1/4	
35	土師器杯	(15.2)	-	-	⑥①③④	②	明赤褐	2/5	二次加熱。表面剝離。
36	土師器杯	(12.2)	-	-	①⑥②	②	橙	1/3	
37	須恵器高台椀	14.8	6.1	7.4	①⑥②	③	灰	3/4	
38	土師器高杯	15.0	9.2	9.4	⑥③	②	にぶい橙	3/4	
39	土師器高杯	-	-	(7.9)	⑥①②	②	橙	脚部のみ	
40	土師器高杯	-	-	(9.6)	⑥①②	②	橙	脚部のみ	
41	土師器高杯	-	-	10.0	①⑥②	②	橙	脚部のみ	
42	土師器盌	(7.0)	-	-	①⑥④③②	②	明赤褐	1/3	
43	土師器坩	-	-	-	①⑥②③軽石粒	②	黄褐	2/3	表面剝離。
44	須恵器甕	-	-	-	①③②		橙	一部のみ	
45	土師器壺	(17.1)	-	-	⑥①②③④	②	にぶい赤褐	口縁部1/2	二次加熱。
46	土師器甕	(14.0)	-	-	①⑥④	②	にぶい褐	上位1/2	二次加熱。外面磨滅。
47	土師器甕	(18.2)	34.6	5.4	①⑥②	②	にぶい橙	3/4	内外面黒斑有。
48	土師器甕	(18.2)	36.3	6.0	③①⑥	②	にぶい黄橙	3/4	二次加熱、外面煤付着、黒斑有。磨滅。
49	土師器甕	17.2	-	-	⑥④①	②	にぶい橙	2/3	内外面黒斑有。胴下部外面磨滅。
50	土師器甕	-	-	5.8	⑥③②①	②	橙	3/5	二次加熱。内外面煤付着。
51	土師器甕	17.8	-	-	③①⑥	②	浅黄橙	1/2	胴部内外面黒斑有。磨滅。
52	土師器甕	14.4	-	-	⑥③①	②	にぶい赤褐	2/3	胴部外面黒斑有。磨滅。
53	土師器甑	24.1	33.5	9.9	①②⑥	②	にぶい橙	完形	
54	土師器甑	25.3	-	-	③①⑥	②	にぶい黄橙	底部欠	外面黒斑有。磨滅。
55	管玉	長さ 1.8 最大径 0.8 孔径 0.2						完形	碧玉製。
56	土製丸玉	径 0.8 孔径 0.1						完形	
57	石製臼玉	径 0.6 孔径 0.2 厚さ 0.5						完形	滑石製。
58	石製紡錘車	上径 2.1 下径 4.9 最大厚 1.9						完形	未製品。滑石製。
59	土錘	長さ 5.4 最大径 1.4 孔径 0.5						完形	
60	土錘	長さ 4.9 最大径 1.9 孔径 0.5						完形	
61	土錘	長さ 4.9 最大径 1.4 孔径 0.3						完形	
62	土錘	長さ 4.6 最大径 1.5 孔径 0.3						一部欠	
63	土錘	長さ 5.2 最大径 2.0 孔径 0.6						完形	
64	土錘	長さ 4.1 最大径 1.4 孔径 0.5						一部欠	

は10cm前後である。径58×55cm、床面からの深さは27cmのピットが確認された。その位置から柱穴の1つと考えられる。

カマドは南西壁の南東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は38cm、燃焼部は30cm程を測り、煙道部は2号溝跡により切られているため、残存しない。燃焼部は床面とほぼ同一レベルで平坦であった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は18cmを測る。燃焼部からは土師器高杯（No.6）が検出された。覆土は、30層が天井部で、26層が天井部被熱層となる。燃焼部下層には、灰層（28層）と被熱により赤色化した地山（29層）がみられ、煙道部には焼土・炭化物を含む層（31・32層）がみられた。

カマドの南東脇には、径85×69cmの隅丸方形を呈し、床面からの深さ56cmの貯蔵穴がみられた。覆土上層から、土師器が多数検出された。

出土遺物（第118図）には、土師器杯（No.1～5）、高杯（6）、甕（7～9・13）、甑（10）、器台（11）、坩（12）等がある。1・7～10は貯蔵穴、6・11・13は柱穴周辺の床面から検



第118図　E・F区15号住居跡出土遺物

出された。その他は覆土中からの検出である。このうち、11～13は古墳時代前期のものであり、流れ込みである。杯はすべて身の深い模倣杯である。1が他と比べてやや大きい。煤の付着や黒斑を有するもの、二次加熱を受けているもの等がある。6は口縁部が大きく外反し、脚部が高く、裾が広がっている。甕は長胴甕(7)、丸胴甕(8)、小型のもの(9)がある。摩滅が顕著であるため、調整が図示不可能なものが多い。7は胴部外面に輪積痕を残す。8は黒斑を有し、9は煤が付着し、二次加熱を受けている。10は把手を持たない。摩滅が顕著であるため、調整は図示不可能であった。内面には輪積痕を残す。11は脚部に円形の透かし孔を3つ持ち、赤彩が施されている。12は平底である。13は外面が刷毛目調

第54表　E・F区15号住居跡出土遺物観察表　（第118図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	16.1	7.2	-	④①③	②	赤褐	3/4	内外面煤付着。
2	土師器杯	12.6	5.6	-	③①④	②	にぶい橙	3/4	外面黒斑有。
3	土師器杯	(12.8)	-	-	③②④⑥	②	黄橙	1/3	
4	土師器杯	14.9	4.7	-	①②④⑤	②	赤	4/5	外面黒斑有。
5	土師器杯	(15.0)	-	-	①⑥④	②	明褐	1/4	二次加熱。
6	土師器高杯	17.5	-	-	③①④	②	明赤褐	5/6	
7	土師器甕	18.2	28.8	6.6	⑥①②④	②	にぶい橙	3/4	磨滅。
8	土師器甕	15.8	22.2	5.5	①③	②	橙	一部欠	胴下部外面黒斑有。磨滅。
9	土師器甕	(11.2)	12.1	5.6	③①⑥	②	赤	3/4	二次加熱。磨滅。内外面煤付着。
10	土師器甑	(19.6)	19.5	(7.2)	③⑥	②	浅黄橙	5/6	磨滅。
11	土師器器台	7.2	6.6	10.5	③②①	③	浅黄橙	脚裾部1/3欠	赤彩。
12	土師器坩	(10.4)	7.5	4.2	⑥③①②④	②	浅黄橙・橙	1/3	
13	土師器甕	(19.4)	-	-	⑥③④①	②	明黄褐	上半1/2	

整、内面がヘラナデによる。

16号住居跡
（第113図）

AC・AD－16・17グリッドに位置する。北東部を14号住居跡、東側を15号住居跡に切られており、大半を欠く。

規模・平面形は不明であるが、北西壁は6.48mを測る。主軸方向はS－37°－Wを指す。確認面からの深さは39cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。覆土は図示できなかったが、炭化物を含む黄色系の粘土であった。自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴、貯蔵穴等は検出されなかった。

カマドは南西壁に設けられている。北西側の袖部を境に15号住居跡に切られているため、袖部は片側のみ検出された。カマド主要部分は検出されなかった。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が僅かに確認された。その他の詳細については不明である。また、袖部の壁外にピット状の掘り込みがみられたが、付随するかどうかは不明である。

遺物は、土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

17号住居跡
（第119図）

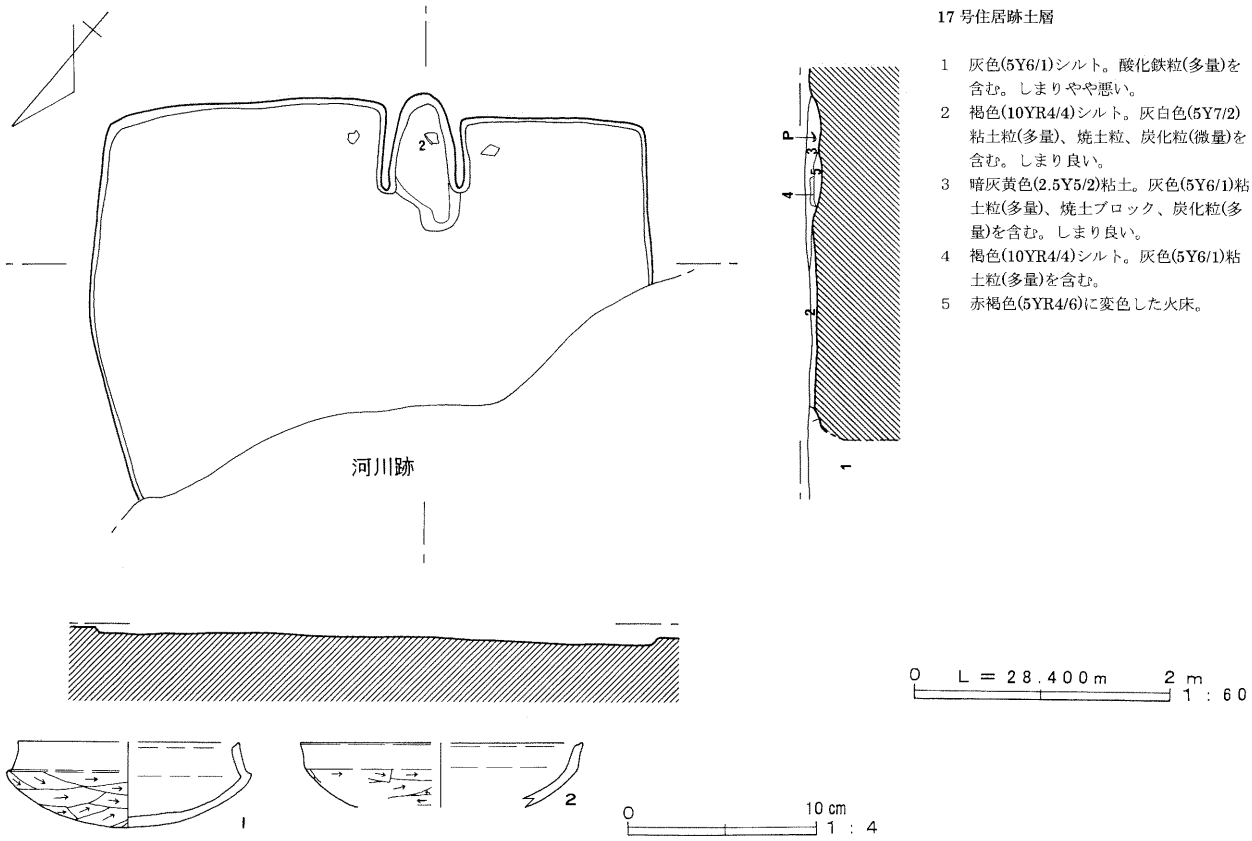
AC－17グリッドに位置する。北西部を河川跡に切られている。

規模・平面形は不明であるが、南東壁は4.24mを測る。主軸方向はS－39°－Wを指す。確認面からの深さは7cmと非常に浅い。床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は焼土・炭化物を含む暗灰黄色粘土（2層）が主体で、自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴、貯蔵穴等はみられない。

カマドは南東壁ほぼ中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しである。焚口部の幅は52cm、燃焼部幅は47cmを測る。煙道の大半は削平され、壁外へ僅かに15cmほど張り出すのみであった。燃焼部は床面を掘り込んでおり、深さは7cmほどであった。煙道部先端は緩やかに立ち上がる。覆土に天井部崩落土等はみられず、焼土・炭化物を含む層（3層）と、その下から火床面（5層）が検出された。

出土遺物（第119図）は、土師器杯（No.1・2）2点のみである。1は覆土中、2はカマドから検出された。ともに模倣杯であるが、1は杯身模倣杯、2は杯蓋模倣杯である。



第119図　E・F区17号住居跡・出土遺物

第55表　E・F区17号住居跡出土遺物観察表　(第119図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(15.0)	-	-	①④⑥	②	赤灰	口縁部1/3	内外面煤付着。
2	土師器杯	(11.8)	4.5	-	①⑥④	②	明赤褐	1/2	

18号住居跡　(第120図)

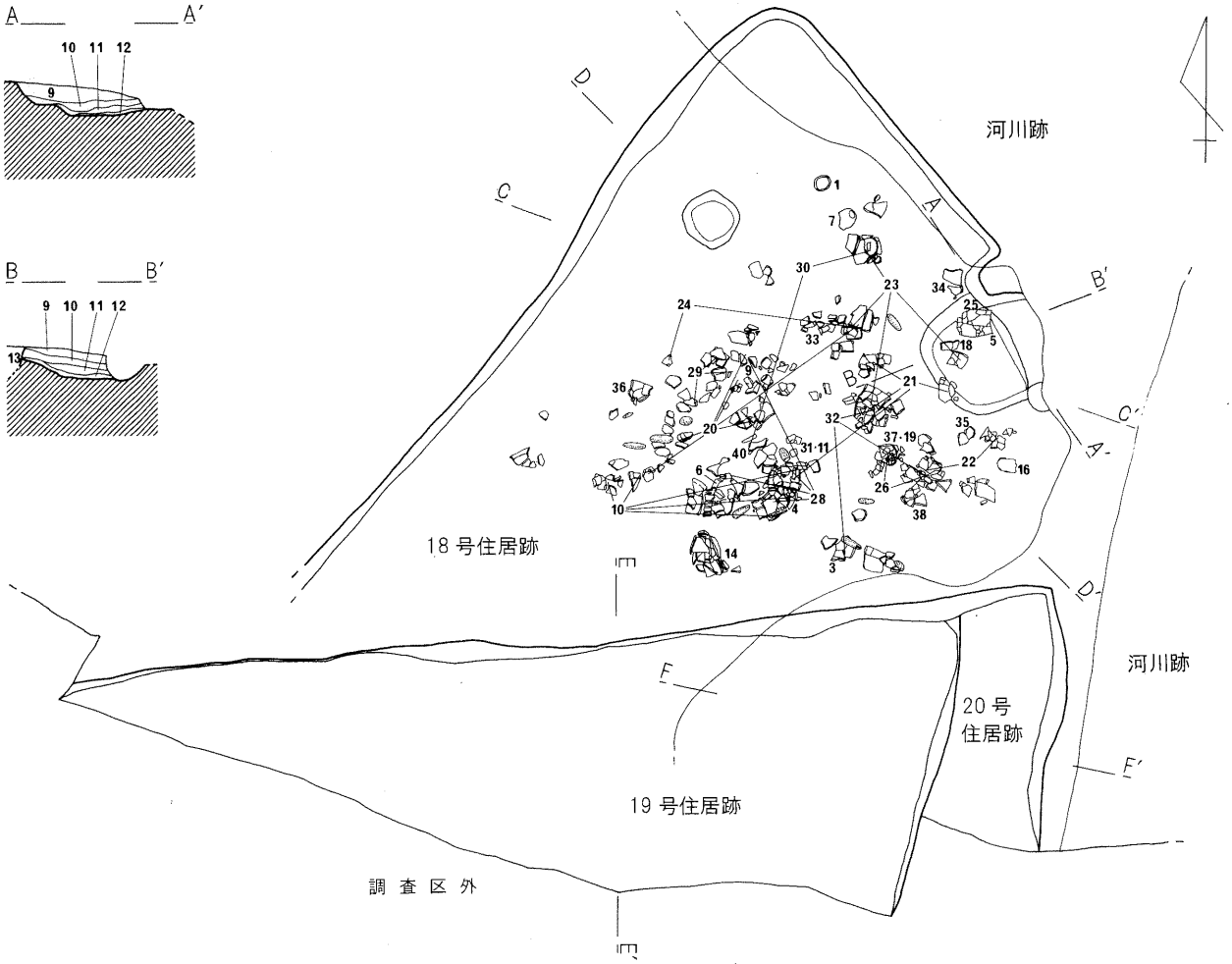
AC－18グリッドに位置する。カマドは河川跡に切られている。南側に位置する19・20号住居跡との新旧関係は不明である。

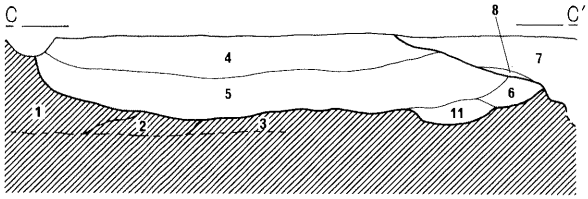
規模・平面形等は不明である。主軸方向はN－48°－Eを指す。確認面からの深さは66cmを測り、床面は凹凸がみられる。覆土は褐色のシルト（4・5層）を主体とする自然堆積層である。ピットは1つのみ検出された。径45cm前後、床面からの深さは僅かに5cm程を測る。柱穴かどうかは不明である。

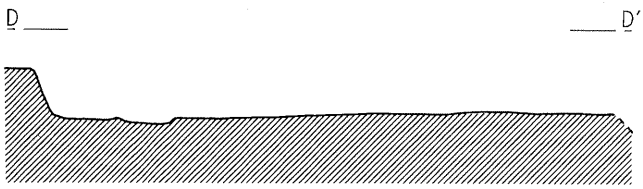
カマドは北東壁に設けられている。袖部の中心から煙道部にかけて河川跡により切られている。袖部は地山の掘り残しで、内側には被熱した箇所がわずかに確認された。燃焼部は掘り込んでおり、幅82cm、床面からの深さは14cmを測る。

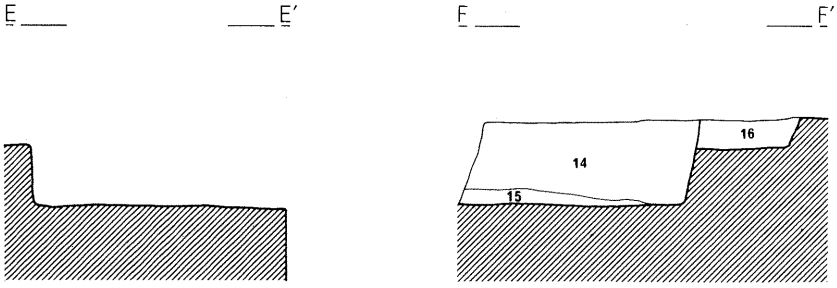
壁溝・貯蔵穴は検出されなかった。

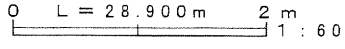
出土遺物（第122～125図）には、土師器杯（No.1～5）、高杯（6）、壺（9）、甕（7・8・10～31）、甑（32～38）、土製支脚（39・40）、土錘（41）等がある。カマド及びカマド前から本住居跡中央付近にかけてまとまって検出された。そのほとんどが床面から浮いた状態で検出されたことから、住居廃絶後に投棄されたと思われる。杯は内湾するタイプ（1）と身の浅い模倣杯（2～5）がみられる。1は外面に黒斑を有する。6は脚部のみの検出







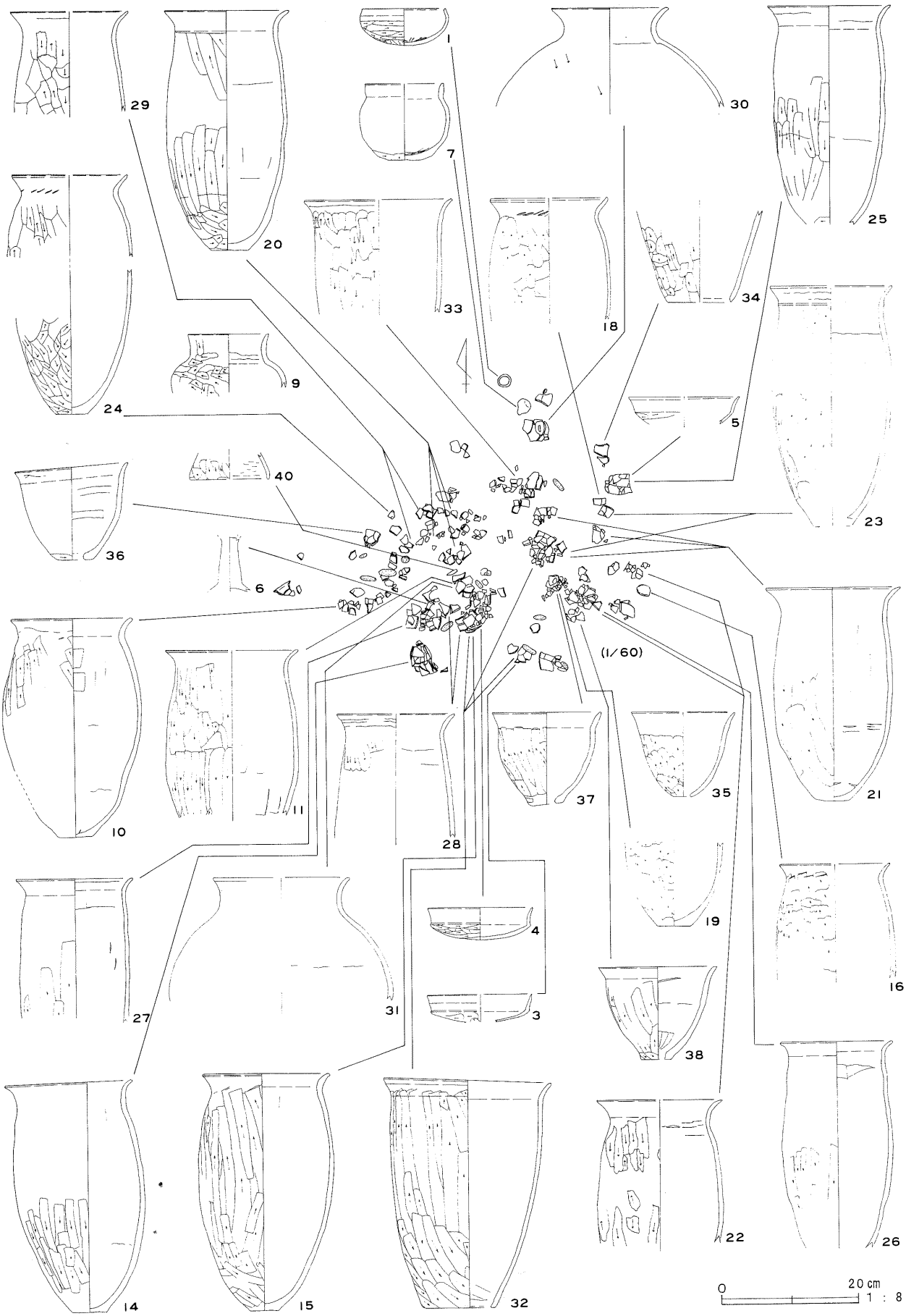




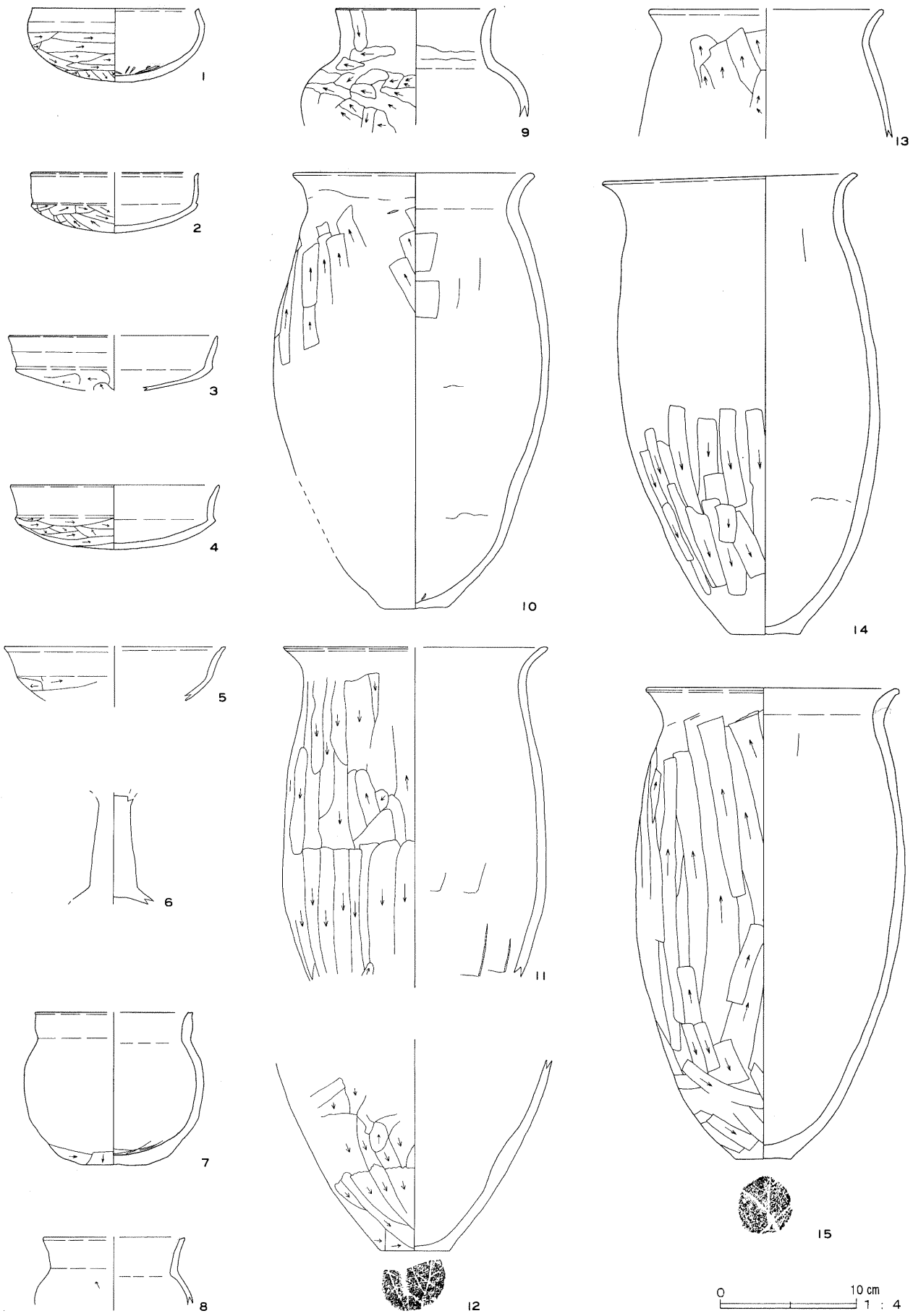
１８・１９・２０号住居跡土層

1　黄褐色(2.5Y5/3)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒(少量)を含む。
2　黄褐色(2.5Y5/6)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。
3　オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、にぶい黄橙(10YR6/3)粘土ブロック(火山灰？・少量)を含む。
4　褐色(10YR4/4)シルト。炭化物(帯状)を含む。
5　褐色(10YR4/4)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒(帯状)を含む。
6　黄褐色(2.5Y5/6)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。
7　黄褐色(10YR5/8)シルト。灰白色(2.5Y7/1)粘土粒(多量)、灰黄褐色(10YR4/2)粘土ブロック(少量)を含む。
8　灰黄褐色(10YR4/2)粘土。7層を若干含む。
9　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒・炭化粒(少量)を含む。
10　褐色(10YR4/4)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒・焼土粒・炭化粒(多量)を含む。
11　にぶい黄褐色(10YR4/2)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、3の灰(若干)を含む。
12　灰層。
13　黄褐色(10YR5/8)シルト。
14　にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト。焼土粒、炭化物粒(少量)を含む。
15　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土。炭化物帯状に堆積。粘性強い。
16　にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト。炭化物帯状に堆積。しまり良い。

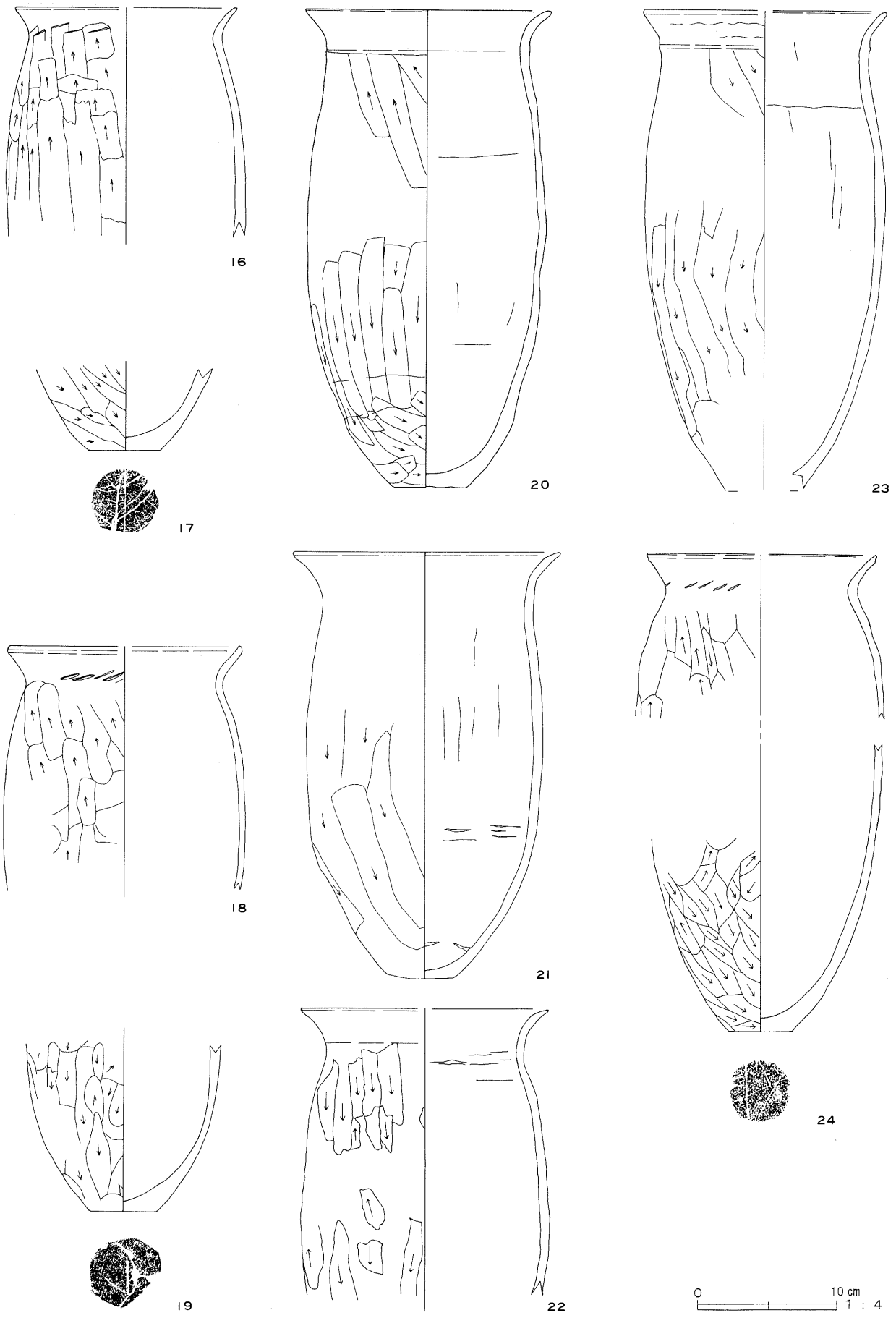
第120図　E・F区18・19・20号住居跡



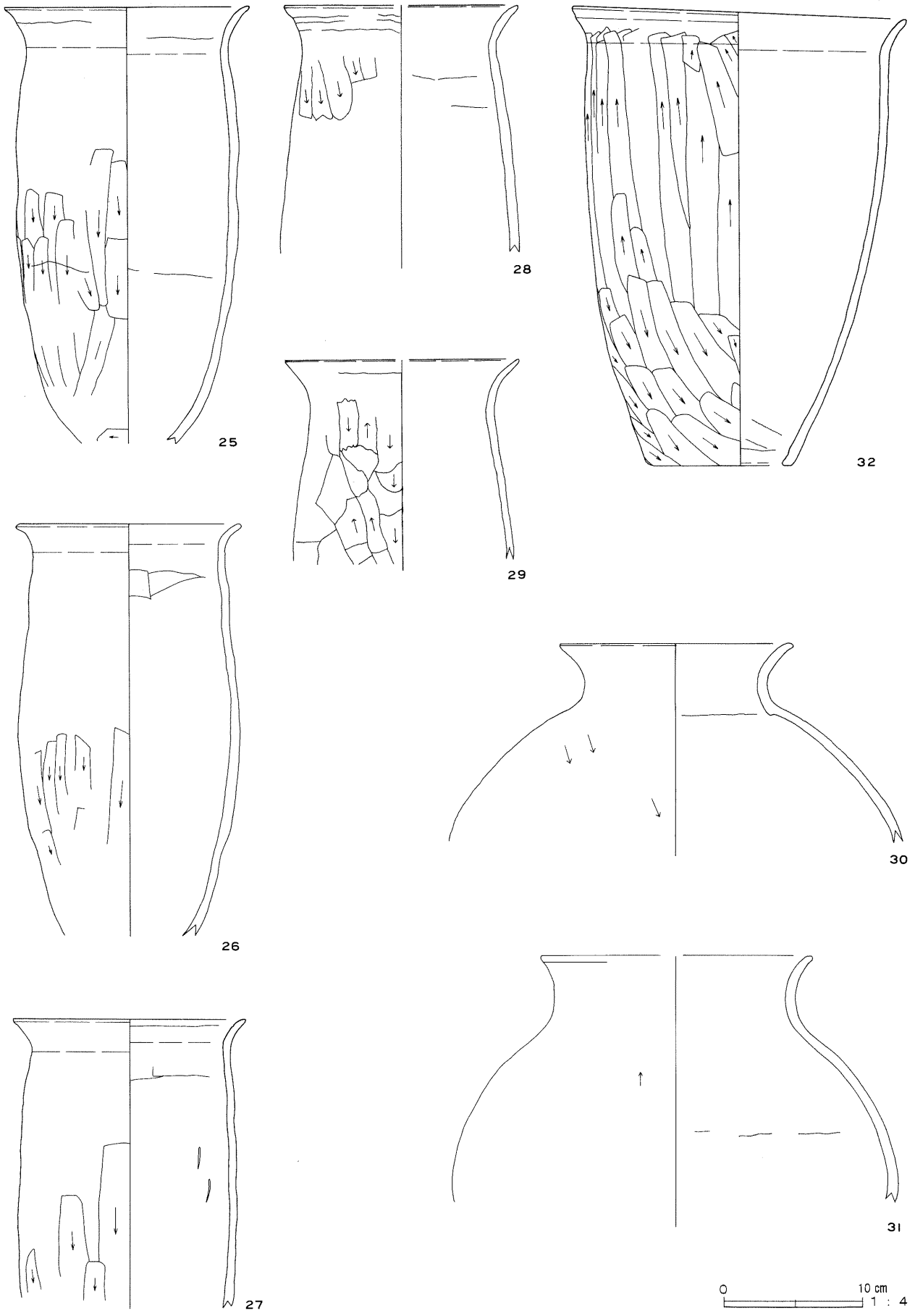
第121図　E・F区18号住居跡遺物出土状況



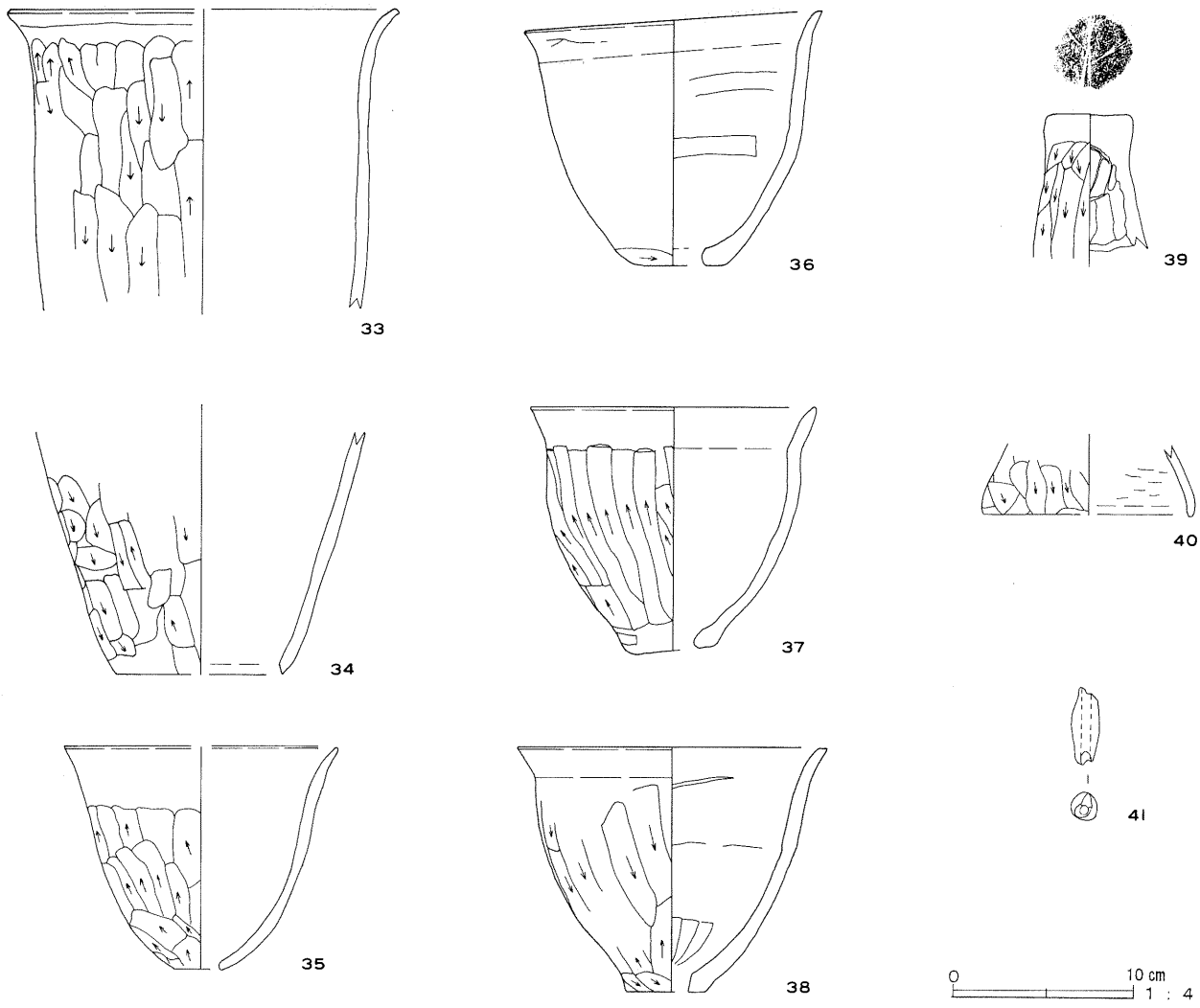
第122図　E・F区18号住居跡出土遺物(1)



第123図　E・F区18号住居跡出土遺物(2)



第124図　E・F区18号住居跡出土遺物(3)



第125図　E・F区18号住居跡出土遺物(4)

である。棒状を呈している。甕は小型のもの（7・8）、長胴甕（10～29）、丸胴甕（30・31）等があるが、長胴甕が多数検出された。二次加熱を受けたものや黒斑を有するもの、煤の付着がみられるもの等がある。12・15・17・19・24の底部には木葉痕がみられた。9は短頸壺である。甑はすべて把手を持たない。外面に黒斑を有するものがみられた。土製支脚は2点検出された。いずれも破片での検出である。39の上面には木葉痕がみられた。土錘は1点のみ検出された。完形品。

19号住居跡（第120図）

AC－18グリッドに位置する。20号住居跡を切っているが、ともに南側は調査区域外にあるため、規模・平面形等は不明である。北側に位置する18号住居跡との新旧関係は不明である。

確認面からの深さは65cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は黄色系のシルトないし粘土2層（14・15層）からなる。上層（14層）は厚く堆積し、下層（15層）には炭化物が帯状に薄く堆積していた。自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

第56表　E・F区18号住居跡出土遺物観察表　（第122～125図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	12.2	5.3	-	②①⑥④	②	明赤褐	完形	外面黒斑有。
2	土師器杯	(12.2)	4.5	-	①④②⑥	②	赤褐	1/2	
3	土師器杯	(15.4)	-	-	①⑥④③	②	明赤褐	1/4	
4	土師器杯	15.4	4.7	-	①④③	②	橙	3/4	
5	土師器杯	(16.2)	-	-	①②⑥④	②	橙	1/4	
6	土師器高杯	-	-	-	②①④③⑥	②	赤褐	脚部のみ	
7	土師器甕	(11.6)	11.2	4.8	②④①⑥	②	にぶい橙	2/3	胴部外面磨滅。
8	土師器甕	(10.4)	-	-	⑥①④	②	橙	口縁部1/2	
9	土師器壺	11.5	-	-	⑥②①④	②	黄橙	上位4/5	
10	土師器甕	17.8	32.2	5.0	③①⑥	②	明黄褐	4/5	外面煤付着、剝離、二次加熱。
11	土師器甕	(19.4)	-	-	⑥②①③	②	橙	上半1/3	
12	土師器甕	-	-	5.2	②①⑥④③	②	橙	下位1/3	
13	土師器甕	(17.0)	-	-	⑥②①③④	②	明赤褐	上位2/5	
14	土師器甕	18.6	34.1	5.0	③①⑥	②	橙	4/5	胴上部外面磨滅。
15	土師器甕	18.5	35.9	4.0	③⑥①	②	橙	一部欠	胴部外面黒斑有。
16	土師器甕	(15.8)	-	-	⑥②①	②	明赤褐	1/4	
17	土師器甕	-	-	52.0	⑥②①③④	②	明赤褐	下位1/2	
18	土師器甕	(16.8)	-	-	⑥①④	②	橙	上位1/4	
19	土師器甕	-	-	5.0	②③①④⑥	②	橙	下位1/3	
20	土師器甕	18.1	35.2	4.9	⑥①②	②	にぶい橙	3/4	内外面黒斑有。
21	土師器甕	19.4	31.2	5.1	⑥①②	②	橙	2/3	胴上部外面磨滅。
22	土師器甕	(17.9)	-	-	⑥②①	②	明赤褐	1/3	
23	土師器甕	(17.6)	35.1	5.6	⑥①③④	②	明赤褐	4/5	
24	土師器甕	(16.6)	-	4.6	⑥①③④	②	明赤褐	1/2	
25	土師器甕	17.8	-	-	②⑥①	②	にぶい橙	2/3	
26	土師器甕	16.6	-	-	③①⑥	②	橙	2/3	外面黒斑有、煤付着。磨滅。
27	土師器甕	17.0	-	-	①④⑥	②	橙	底部欠	二次加熱。
28	土師器甕	(17.0)	-	-	⑥①④③	②	明赤褐	1/2	磨滅。
29	土師器甕	(17.0)	-	-	⑥①④③	②	明赤褐	上半1/2	外面磨滅。
30	土師器甕	17.0	-	-	⑥①③②	②	橙	上位のみ	磨滅。
31	土師器甕	(19.6)	-	-	⑥①④	②	明赤褐	上半1/4	磨滅。
32	土師器甑	24.3	33.9	10.6	①⑥②	②	明赤褐	9/10	外面黒斑有。
33	土師器甑	(21.6)	-	-	⑥①③②④	②	明赤褐	上半1/4	
34	土師器甑	-	-	9.0	⑥③①④	②	明赤褐	底部1/2	
35	土師器甑	(15.0)	12.4	2.4	①②③⑥	②	橙	3/5	
36	土師器甑	16.5	13.6	5.0	⑥③①④	②	明褐	4/5	胴下部外面黒斑有。
37	土師器甑	15.9	13.5	5.0	③①⑥	②	明褐	5/6	胴下部外面黒斑有。
38	土師器甑	17.2	13.6	4.3	①⑥④	②	橙	3/4	
39	土製支脚	上部径　4.4　器高　-　底径　-						上位のみ	
40	土製支脚	上部径　-　器高　-　底径　(11.4)						裾部1/4	
41	土錘	長さ　4.3　最大径　1.5　孔径　0.5						完形	

出土遺物（第126図）には、土師器杯（No.1・2）、甕（3）、土錘（4・5）等がある。いずれも覆土中からの検出である。杯はともに模倣杯である。1は外面に黒斑を有する。3は長胴甕である。上部のみの検出である。土錘は2点検出された。長さ4.5cm前後、最大径1.2～1.3cmを測る。完形品。

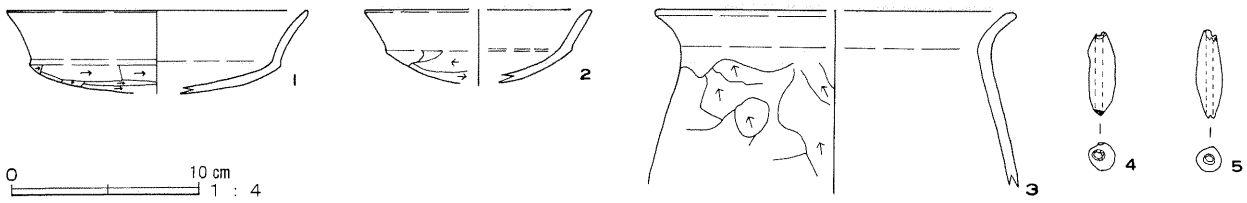
20号住居跡（第120図）

AC－18グリッドに位置する。西側を19号住居跡に切られており、南側は調査区域外にあるため、規模・平面形等は不明である。また、18号住居跡との新旧関係は、不明である。

確認面からの深さは22cmと浅い。覆土はにぶい黄色のシルトからなる単一層（16層）で、炭化物を帯状に含んでいた。自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

出土遺物（第127図）は、図示できたものは土製支脚（No.20－1）のみである。覆土中から検出された。内面に輪積痕を残す。完形品。



第126図　E・F区19号住居跡出土遺物

第57表　E・F区19号住居跡出土遺物観察表　(第126図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	16.0	-	-	①②④	②	橙	3/4	外面黒斑有。
2	土師器杯	(12.0)	(3.9)	-	①④③⑥②	②	黄橙	1/3	
3	土師器甕	(19.0)	-	-	①⑥④	②	明赤褐	上位1/2	
4	土錘	長さ 4.3	最大径 1.3	孔径 0.5				完形	
5	土錘	長さ 4.7	最大径 1.2	孔径 0.4				完形	外面黒斑有。

21号住居跡　AB－18グリッドに位置する。カマドの煙道部先端のみの確認であり、大半が調査区域外にある。22号住居跡を切っている。

(第128図)

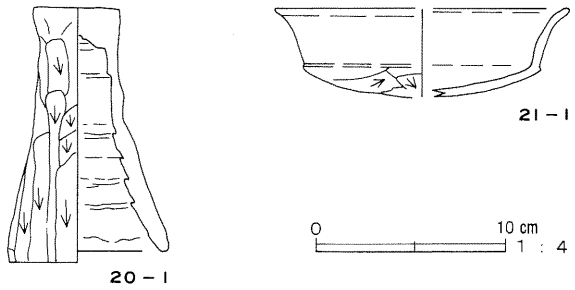
規模・平面形等は不明であり、煙道部先端の確認面からの深さは47cmを測る。覆土は上層（2・3層）以外は焼土・炭化物等を含んでおり、最下層には灰層（5層）がみられ、奥壁は被熱して赤色化していた（1層)。その他の詳細については不明である。

出土遺物（第127図）は、土師器杯（No.21－1）のみである。模倣杯。カマド覆土中から検出された。

22号住居跡　AB－17･18グリッドに位置する。北東部は調査区域外にあり、また21号住居跡のカマドに切られている。カマドを含めた北西壁で23号住居跡を切っており、南東部は河川跡に切られている。

(第128図)

規模・平面形は不明である。主軸方向はN－36°－Eを指す。確認面からの深さは71cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は上層を河川跡に切られているため、下層(18～22層)のみの確認である。色調は様々であり、ランダムな層位であるが、自然堆積と考えられる。20・22層中には火山灰らしき混入物がみられた。柱穴は1つのみ検出された。径64×55cm、床面からの深さは22cmを測る。



第127図　E・F区20・21号住居跡出土遺物

壁溝・貯蔵穴はみられない。

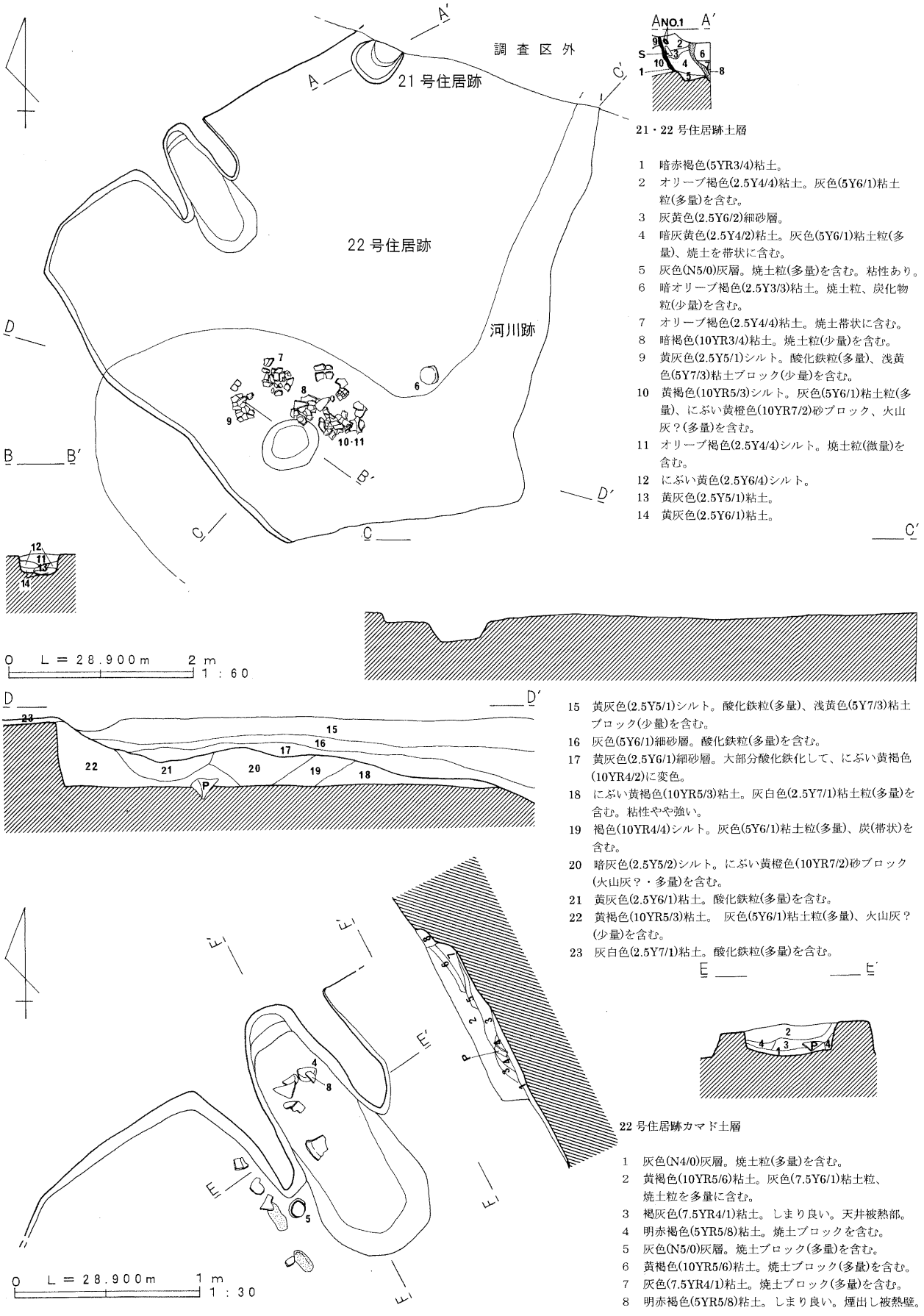
カマドは北西壁に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が

第58表　E・F区20号住居跡出土遺物観察表　(第127図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土製支脚	4.5	13.6	8.5	⑥④①③	②	橙	完形	

第59表　E・F区21号住居跡出土遺物観察表　(第127図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(15.8)	(4.7)	-	①③④②	②	橙	1/3	



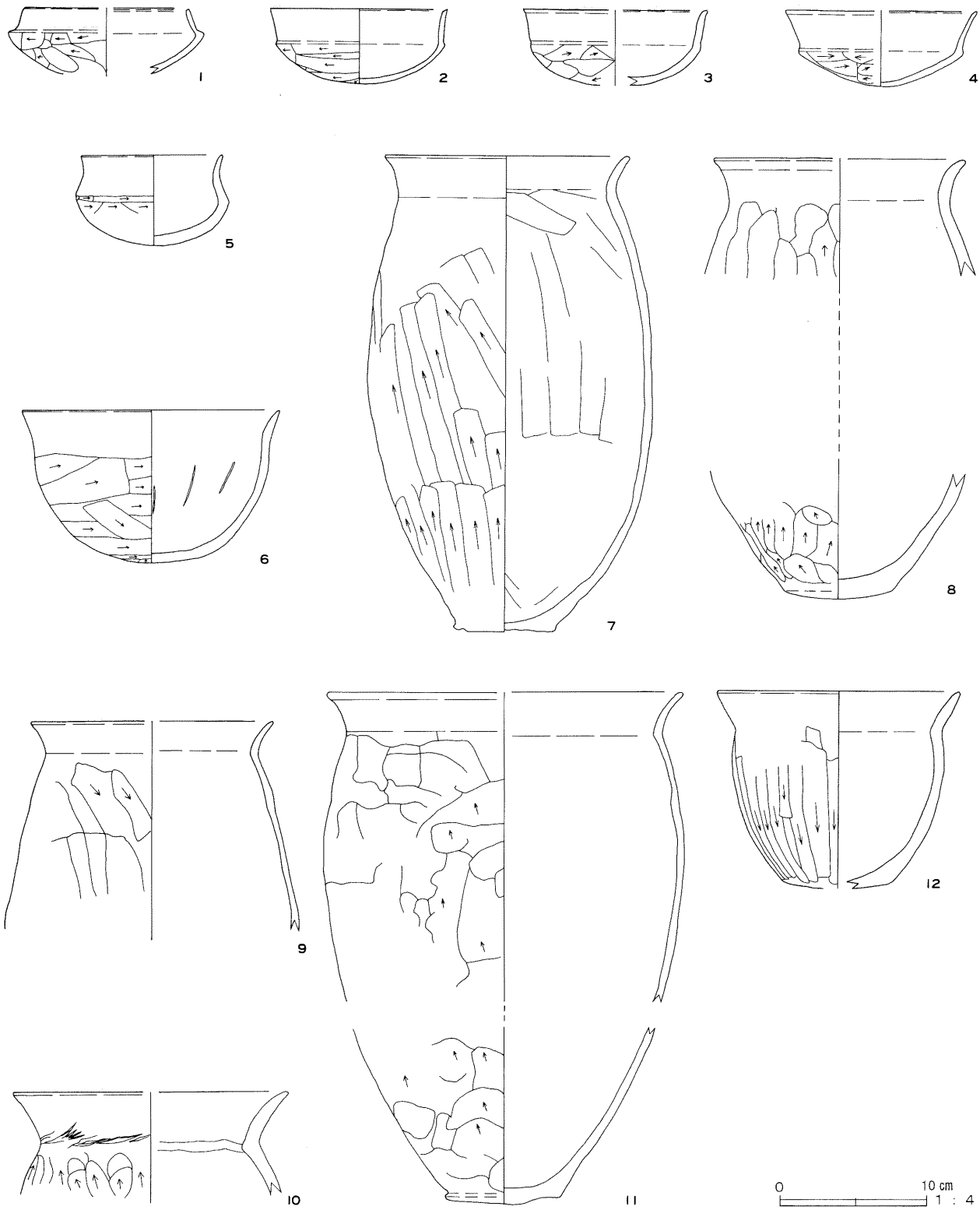
21・22号住居跡土層

1　暗赤褐色(5YR3/4)粘土。
2　オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。
3　灰黄色(2.5Y6/2)細砂層。
4　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土を帯状に含む。
5　灰色(N5/0)灰層。焼土粒(多量)を含む。粘性あり。
6　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘土。焼土粒、炭化物粒(少量)を含む。
7　オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土。焼土帯状に含む。
8　暗褐色(10YR3/4)粘土。焼土粒(少量)を含む。
9　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。酸化鉄粒(多量)、浅黄色(5Y7/3)粘土ブロック(少量)を含む。
10　黄褐色(10YR5/3)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、にぶい黄橙色(10YR7/2)砂ブロック、火山灰？(多量)を含む。
11　オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト。焼土粒(微量)を含む。
12　にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト。
13　黄灰色(2.5Y5/1)粘土。
14　黄灰色(2.5Y6/1)粘土。
15　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。酸化鉄粒(多量)、浅黄色(5Y7/3)粘土ブロック(少量)を含む。
16　灰色(5Y6/1)細砂層。酸化鉄粒(多量)を含む。
17　黄灰色(2.5Y6/1)細砂層。大部分酸化鉄化して、にぶい黄褐色(10YR4/2)に変色。
18　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。灰白色(2.5Y7/1)粘土粒(多量)を含む。粘性やや強い。
19　褐色(10YR4/4)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、炭(帯状)を含む。
20　暗灰色(2.5Y5/2)シルト。にぶい黄橙色(10YR7/2)砂ブロック(火山灰？・多量)を含む。
21　黄灰色(2.5Y6/1)粘土。酸化鉄粒(多量)を含む。
22　黄褐色(10YR5/3)粘土。　灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、火山灰？(少量)を含む。
23　灰白色(2.5Y7/1)粘土。酸化鉄粒(多量)を含む。

22号住居跡カマド土層

1　灰色(N4/0)灰層。焼土粒(多量)を含む。
2　黄褐色(10YR5/6)粘土。灰色(7.5Y6/1)粘土粒、焼土粒を多量に含む。
3　褐灰色(7.5YR4/1)粘土。しまり良い。天井被熱部。
4　明赤褐色(5YR5/8)粘土。焼土ブロックを含む。
5　灰色(N5/0)灰層。焼土ブロック(多量)を含む。
6　黄褐色(10YR5/6)粘土。焼土ブロック(多量)を含む。
7　灰色(7.5YR4/1)粘土。焼土ブロック(多量)を含む。
8　明赤褐色(5YR5/8)粘土。しまり良い。煙出し被熱壁。

第128図　E・F区21・22号住居跡・22号住居跡カマド



第129図　E・F区22号住居跡出土遺物

確認された。焚口部の幅は56cm、燃焼部は42cm程を測る。煙道部は確認の際に削平が著しく、壁外へは僅かに14cmと短いが、本来は他の住居跡同様に長かったと考えられる。焚口部から燃焼部には浅い掘り込みがみられ、床面からの深さは僅かに３cmである。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は９cmを測る。僅かに残存する煙道部は、先

第60表　E・F区22号住居跡出土遺物観察表　（第129図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(11.2)	-	-	①④③②	②	橙	1/3	
2	土師器杯	12.0	5.1	-	③②①④	②	橙	4/5	
3	土師器杯	(12.6)	5.2	-	④①③②⑥	②	橙	1/2	
4	土師器杯	(12.8)	5.2	-	⑥②①	②	橙	1/2	
5	土師器盌	9.6	6.2	-	①③②④	②	橙	口縁部1/4欠	外面黒斑有。
6	土師器鉢	17.4	10.3	-	⑥③①②	②	明赤褐	口縁部1/3欠	内外面黒斑有。
7	土師器甕	16.6	32.6	6.5	①②⑥	②	にぶい橙	3/4	
8	土師器甕	(17.0)	(30.0)	7.2	①②④③	②	明赤褐	胴部欠	
9	土師器甕	(16.4)	-	-	①④⑥③②	②	黄橙	上位1/2	
10	土師器甕	(18.4)	-	-	②⑥①③④	②	橙	上位1/2	
11	土師器甕	(24.0)	(35.0)	7.8	①③⑥	②	橙	2/3	
12	土師器甕	16.6	-	7.2	③①	②	橙	4/5	口縁部、胴部外面黒斑有。

端で急速に立ち上がる。覆土に天井部はみられないが、焼土を含む層（2・6・7層）の下に天井部被熱層と思われる層（3・4層）が確認され、最下層には灰層（1層）がみられた。また、奥壁には被熱した層（8層）が確認された。

出土遺物（第129図）には、土師器杯（No.1～4）、盌（5）、鉢（6）、甕（7～12）等がある。カマド及び南西部の柱穴周辺からまとまって検出された。カマドからは杯類、柱穴周辺からは甕類が検出された。杯はすべて身の深い模倣杯であるが、1は杯身模倣杯、2～4は杯蓋模倣杯である。5・6は外面及び内外面に黒斑を有する。甕は長胴甕（7～11）と小型のもの（12）がみられる。12は外面に黒斑を有する。

23号住居跡
（第130図）

AB－18グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。北側は調査区域外にあるため、規模・平面形等は不明であるが、南東壁で現長6m程を測ることから、大型の部類に入る。南北軸方向は、N－30°－Wを指す。

確認面からの深さは73cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。覆土はにぶい黄色のシルト4層（1～4層）からなり、1層下部及び4層の床面直上には炭化物が帯状に堆積していた。自然堆積と考えられる。

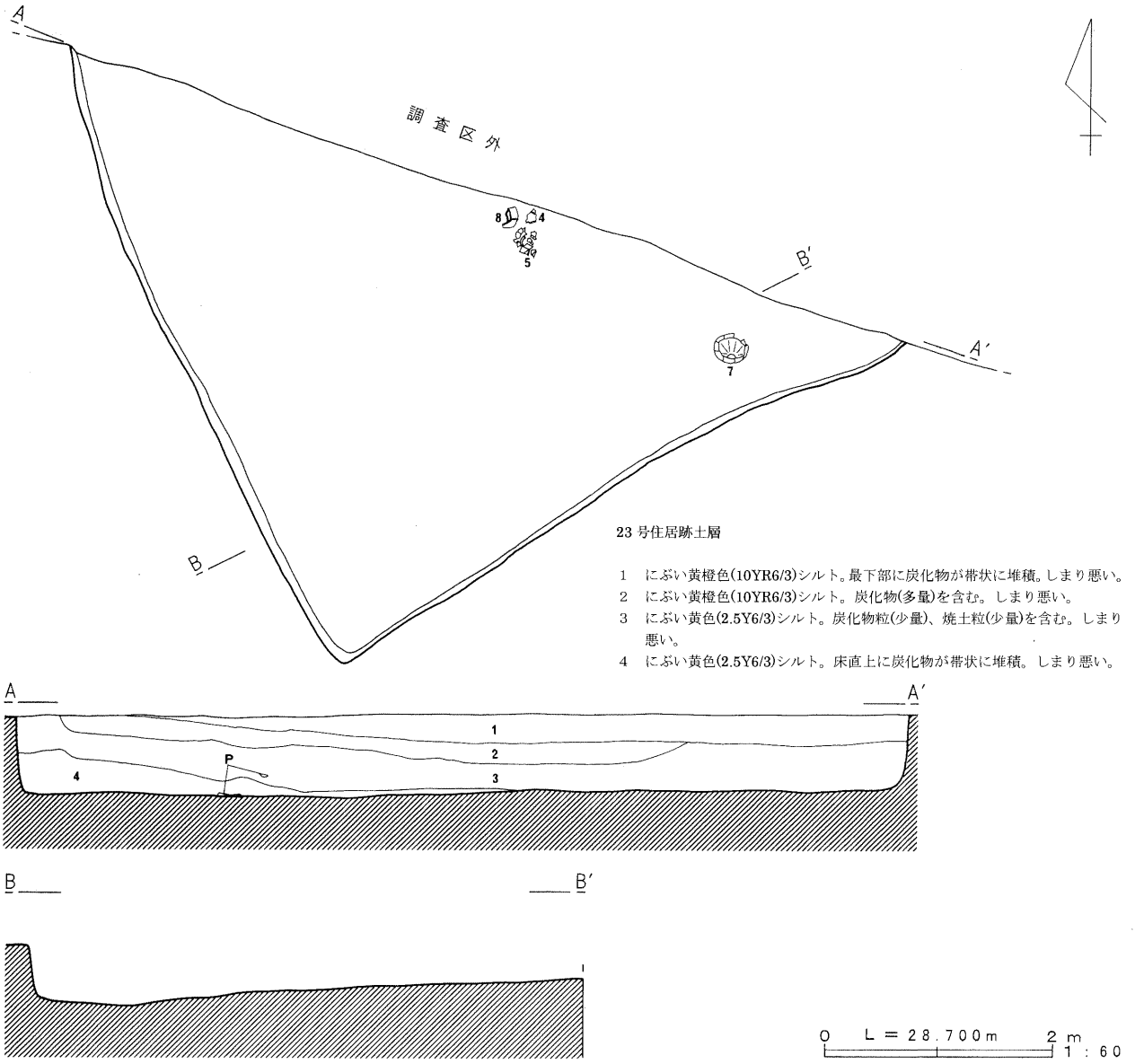
壁溝、柱穴、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

出土遺物（第131図）には、土師器杯（No.1～3）、高杯（4）、甕（5・6）、甑（7・8）等がある。4・5・7・8は住居跡中央及び南東部の調査区域との境から検出された。その他は覆土中からの検出である。杯はすべて身の深い模倣杯である。4は口縁部が大きく外反する。甕は小型のもの（5）と丸胴甕（6）がある。7・8は口縁部形態が異なるが、ともに把手の付かないタイプである。7は内面に黒斑を有する。

24号住居跡
（第132図）

AB・AC－18・19グリッドに位置する。南西部で河川跡と重複関係にあり、本住居跡の方が新しい。

長軸4.26m、短軸3.77mの長方形を呈する。主軸方向はN－27°－Wを指す。確認面からの深さは68cmを測り、床面はやや西側に傾く。覆土は色調が様々であるが、レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。6・7層の下部には炭化物層がみられた。壁溝はみられない。ピットは5つ確認された。コーナー対角線上に位置する4つのピットは、柱穴と考えられるが、南西側の柱穴間にみられるピットは、本住居跡に伴うものか不

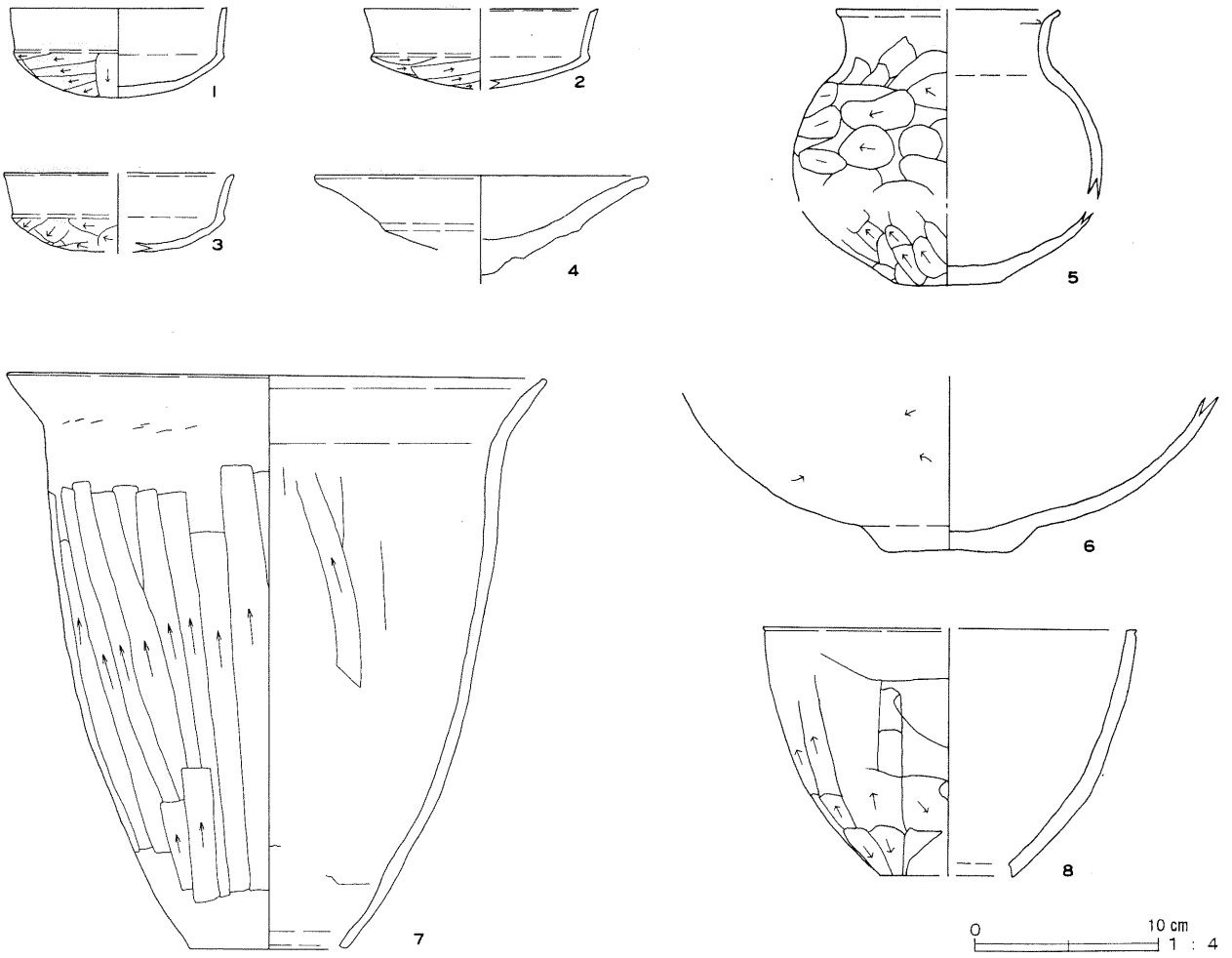


第130図　E・F区23号住居跡

明である。

カマドは北西壁に設けられている。残存状態は良好である。袖部は地山の掘り残しで、内側には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は52cm、燃焼部は50cm程、煙道部は20～30cmの幅で、先端をピット状になっている。径は24cmを測る。焚口部から燃焼部までは床面と同じレベルで平坦であった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は15cmを測る。燃焼部には土師器杯（No.8・20）が伏せた状態で重なっており、支脚として利用されたと考えられる。煙道部はほぼ平坦であり、先端でピット状の掘り込みとなる。壁外へは1.39cmほど張り出している。覆土は2層が天井部の崩壊層と思われ、下部が被熱していた。燃焼部では2層の下に焼土層（4層）と灰層（3層）が堆積し、煙道部では焼土・炭化物を含む層（1層）が確認された。

カマド南西脇には径82×67cmの貯蔵穴がみられた。平面形は楕円形を呈し、北西部は壁



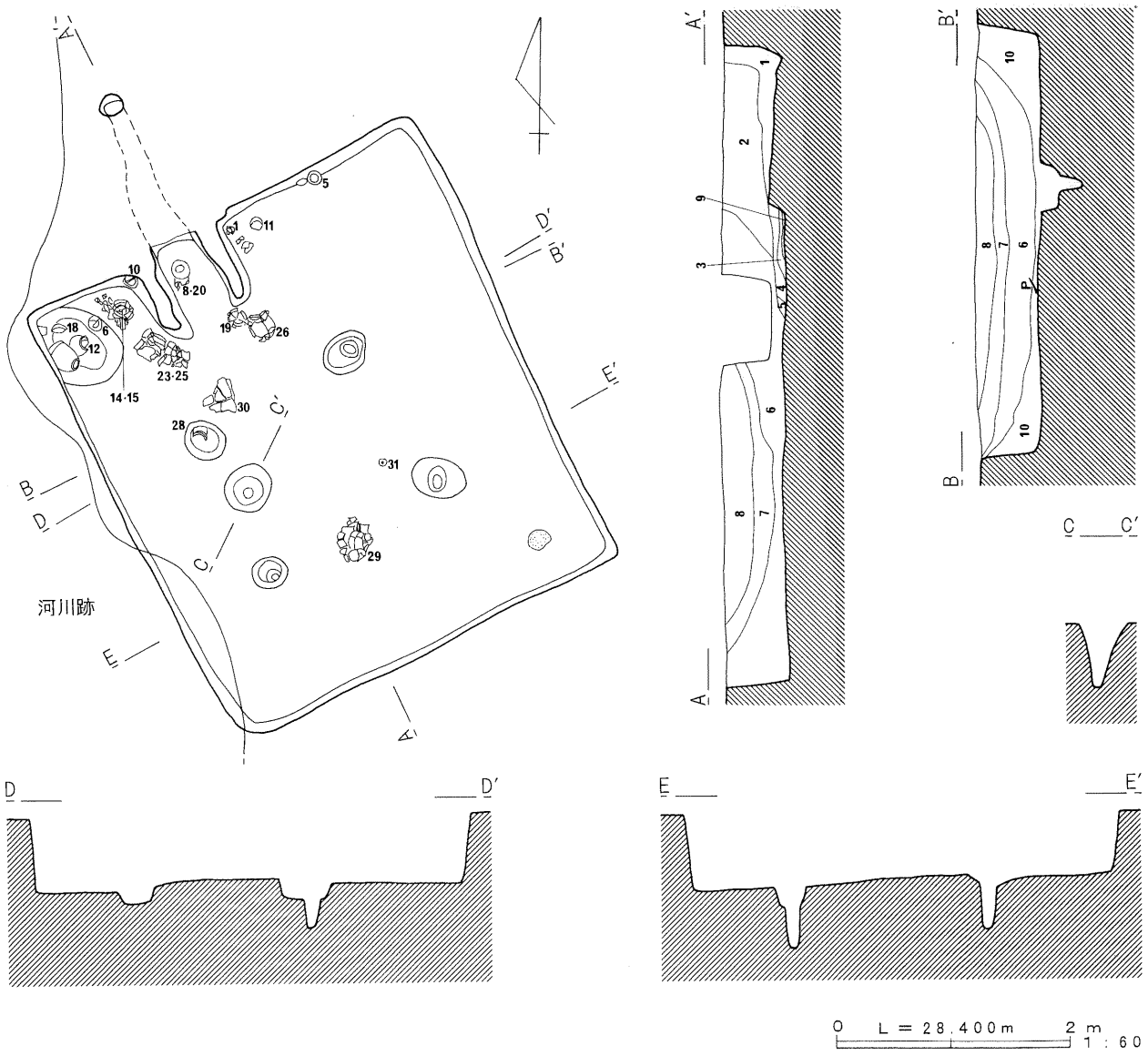
第131図　E・F区23号住居跡出土遺物

第61表　E・F区23号住居跡出土遺物観察表　(第131図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	11.8	4.8	-	③①④	②	橙	1/2	
2	土師器杯	(12.8)	-	-	③①⑥	②	明赤褐	1/2	
3	土師器杯	(12.4)	-	-	①④③	②	明赤褐	1/3	
4	土師器高杯	17.8	-	-	③②①④	②	橙	杯部5/6	
5	土師器甕	(12.2)	(15.0)	5.6	⑥①④③	②	明赤褐	2/3	
6	土師器甕	-	-	7.5	③④①②	②	橙	下位のみ	磨滅。
7	土師器甑	29.5	31.2	8.6	③①⑥	②	橙	一部欠	内面黒斑有。
8	土師器甑	(11.0)	(13.5)	(7.2)	③⑥①④②	②	浅黄橙	3/5	

と接している。

出土遺物（第133・134図）には、土師器杯（No.1～21）、高杯（22）、甕（23～26）、壺（27・28）、甑（29・30）、石製紡錘車（31）、土製支脚（32）、土錘（33）等がある。主にカマド及びその周辺、貯蔵穴等から検出された。杯はすべて模倣杯である。1のみ杯身模倣杯であり、その他は杯蓋模倣杯である。6・9・10は外面に黒斑を有し、18・19は内外面に煤の付着がみられた。22は低い脚部のみの検出である。甕は長胴甕（23・24）と小型のもの（25・26）がある。23・25は二次加熱を受けており、24・25は外面に黒斑を有する。壺は、口縁部が大きく開くもの（27）と短頸壺（28）がある。甑はともに把手のつかないタイプである。29は外面に黒斑を有する。31は側面に格子目状ないし放射状の線刻が施されている。



24号住居跡土層

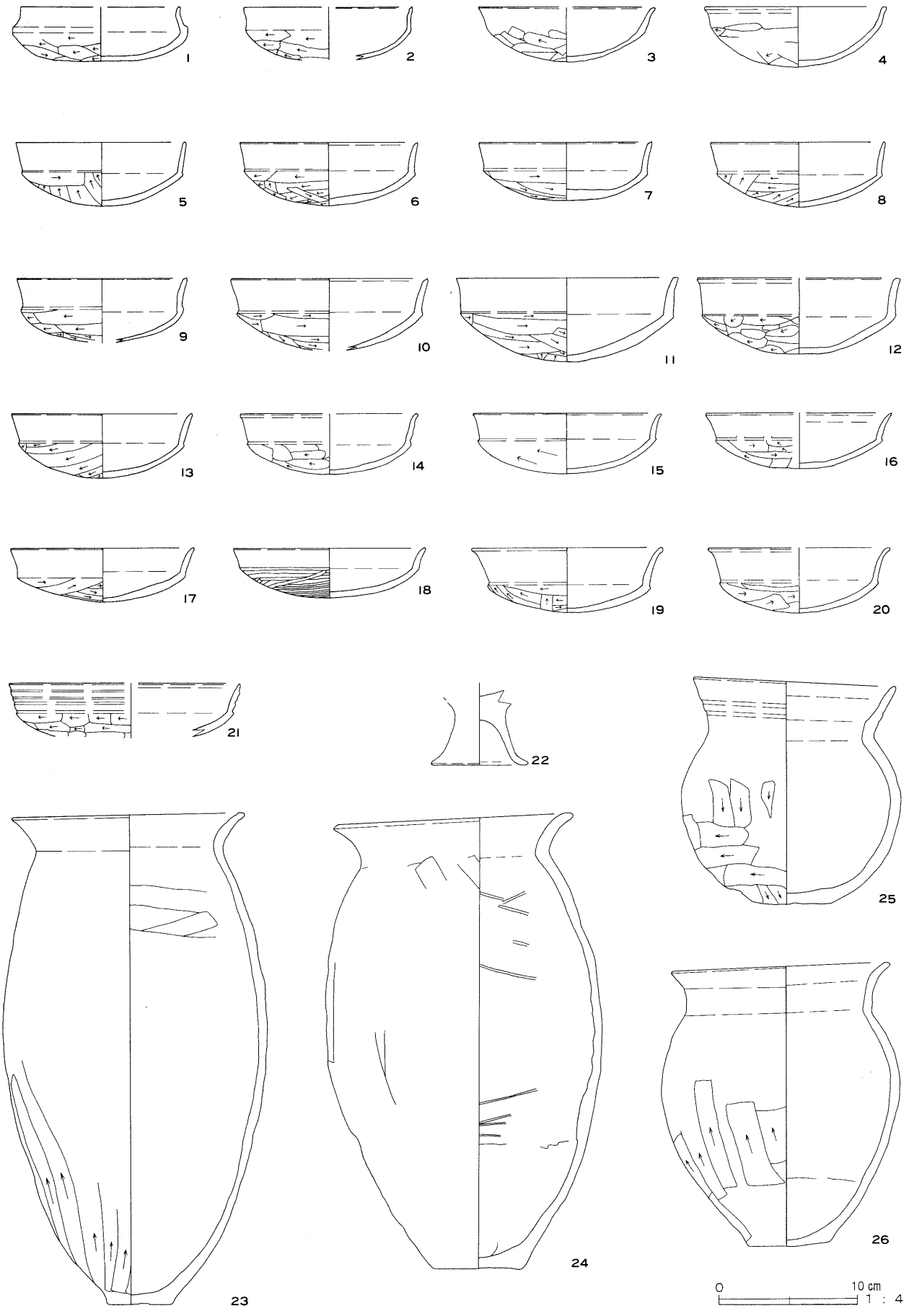
1 灰黄褐色(10YR5/2)粘土。下部に焼土層が入る。焼土粒・炭化物粒を含む。しまりやや良い。
2 灰黄褐色(10YR4/2)粘土。下部に焼土層が入る。しまりやや良い。
3 褐灰色(10YR5/1)灰層。しまりやや悪い。
4 明赤褐色(2.5YR5/6)焼土層。しまりやや悪い。
5 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土。しまり良い。
6 灰黄褐色(10YR5/2)粘土。下部に炭化物層が入る。炭化物粒を含む。しまり良い。
7 褐灰色(10YR4/1)粘土。下部に炭化物層が入る。炭化物粒を含む。しまり良い。
8 灰黄褐色(10YR4/2)粘土。炭化物粒、焼土粒(少量)を含む。しまり良い。
9 極暗赤褐色(2.5YR2/4)焼土層。しまりやや悪い。
10 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土。しまり良い。

第132図　E・F区24号住居跡

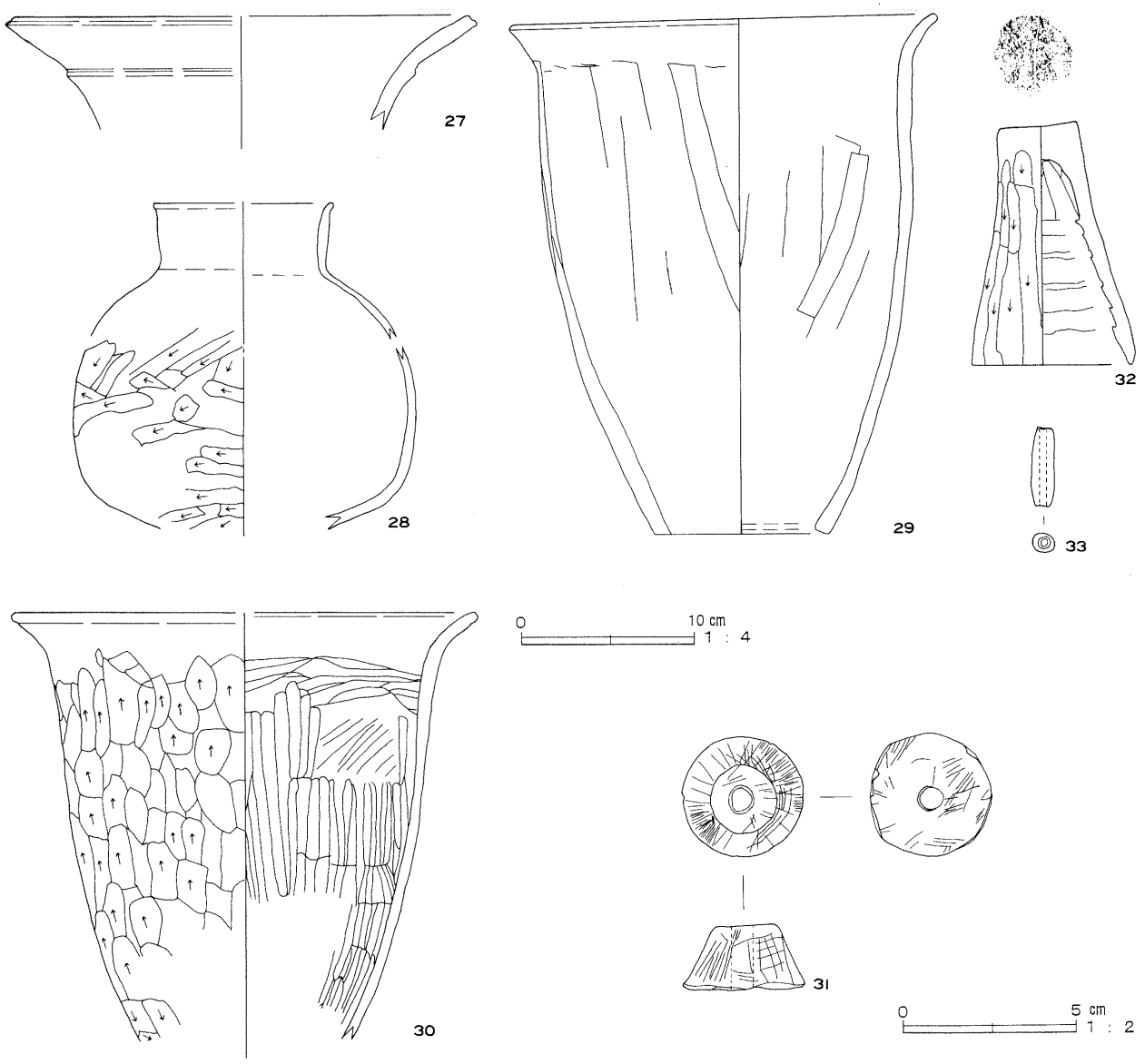
32は上面に木葉痕、内面に輪積痕を残す。完形品。土錘は1点のみ検出された。完形品。

25号住居跡（第135図）　AC－18•19グリッドに位置する。ほぼ同軸方向を向く26号住居跡を切っている。南側は調査区域外となるため、規模・平面形は不明である。南北軸方向はN－51°－Wを指す。

確認面からの深さは28cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は黄色系の粘土ないしシルト三層からなる自然堆積層（1～3層）である。床面直上には炭化物が帯状に堆積していた。壁溝は壁から7～24cm程離れて巡っていた。幅は7～13cm、床面からの深さは13



第133図　E・F区24号住居跡出土遺物(1)



第134図　E・F区24号住居跡出土遺物(2)

cm程である。北西隅から貯蔵穴が検出された。径1.12×0.69m、床面からの深さは33.5cmを測り、不整形を呈する。カマドは確認できなかったが、貯蔵穴の位置から北西壁に設けられていたと考えられる。柱穴は確認できなかった。

遺物は、土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはなかった。

26号住居跡（第135図）　AC－18･19グリッドに位置する。ほぼ同軸方向を向く25号住居跡に切られている。南側は調査区域外にあるため、規模･平面形は不明である。南北軸方向は、N－36°－Wを指す。

確認面からの深さは16cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は浅く、オリーブ黄色シルトの単一層(４層)である。自然堆積と考えられる。ピットは25号住居跡との境で１つ

第62表　E・F区24号住居跡出土遺物観察表　（第133・134図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(11.6)	(4.0)	-	⑥①②④	②	黒・橙	1/4	
2	土師器杯	(12.4)	-	-	③①④⑥	②	橙	1/4	
3	土師器杯	(13.0)	4.0	-	①⑥②④	②	橙	1/3	
4	土師器杯	13.3	4.5	-	②①④⑥③	②	明赤褐	1/2	
5	土師器杯	12.4	4.7	-	③①④	②	橙	完形	
6	土師器杯	13.0	4.6	-	③①④	②	橙	口縁部1/4欠	外面黒斑有。
7	土師器杯	12.7	4.2	-	①③⑥	②	橙	3/4	
8	土師器杯	12.7	4.7	-	③①	②	橙	3/4	
9	土師器杯	12.4	-	-	③⑥①	②	明赤褐	3/4	外面黒斑有。
10	土師器杯	14.4	-	-	①②⑥	②	橙	一部欠	外面黒斑有。
11	土師器杯	16.2	6.2	-	③①④	②	明赤褐	口縁部一部欠	
12	土師器杯	(14.8)	5.6	-	③①④⑥②	②	橙	2/5	
13	土師器杯	13.2	4.8	-	③①④⑥	②	橙	口縁部1/6欠	
14	土師器杯	(13.0)	4.5	-	③④①⑥②	②	橙	2/3	
15	土師器杯	13.8	4.4	-	③①④②⑥	②	橙	一部欠	磨滅。
16	土師器杯	(13.6)	4.2	-	②①⑥	②	明赤褐	口縁部1/2欠	
17	土師器杯	13.4	4.0	-	③①⑥④	②	橙	口縁部1/4欠	
18	土師器杯	14.0	3.6	-	①②④⑥	②	明赤褐	1/2	内外面煤付着。
19	土師器杯	14.0	4.7	-	③④	②	明赤褐	下位一部欠	内外面煤付着。
20	土師器杯	(13.2)	4.8	-	④①②③⑥	②	明赤褐	1/3	
21	土師器杯	(17.0)	-	-	③①②④	②	橙	1/4	
22	土師器高杯	-	-	7.2	②⑥①③④	②	橙	脚部のみ	
23	土師器甕	17.0	36.3	4.7	①②③⑥④	②	灰黄	3/4	二次加熱。胴上部外面磨滅。
24	土師器甕	17.6	33.6	6.4	③⑥①④	②	にぶい橙	5/6	外面黒斑有。外面磨滅。
25	土師器甕	14.9	16.7	5.6	③①④	②	明赤褐	胴下位一部欠	外面黒斑有、二次加熱、剝離。
26	土師器甕	15.8	20.9	6.0	⑥③①④	②	にぶい橙	5/6	
27	土師器壺	27.4	-	-	③①④⑥②	②	橙	口縁部1/2	
28	土師器壺	(10.4)	-	-	①⑥②	②	にぶい橙	2/5	
29	土師器甑	24.9	30.6	10.2	⑥③①	②	橙	一部欠	外面黒斑有。磨滅。
30	土師器甑	(27.0)	-	-	①④③⑥②	②	にぶい橙	1/2	
31	石製紡錘車	上径　1.9　下径　3.6　最大厚　1.9　孔径　0.7						完形	滑石製。
32	土製支脚	上部径　4.1　器高　14.2　底径　13.4						完形	
33	土錘	長さ　4.7　最大径　1.3　孔径　0.4						完形	

検出された。柱穴と考えられる。

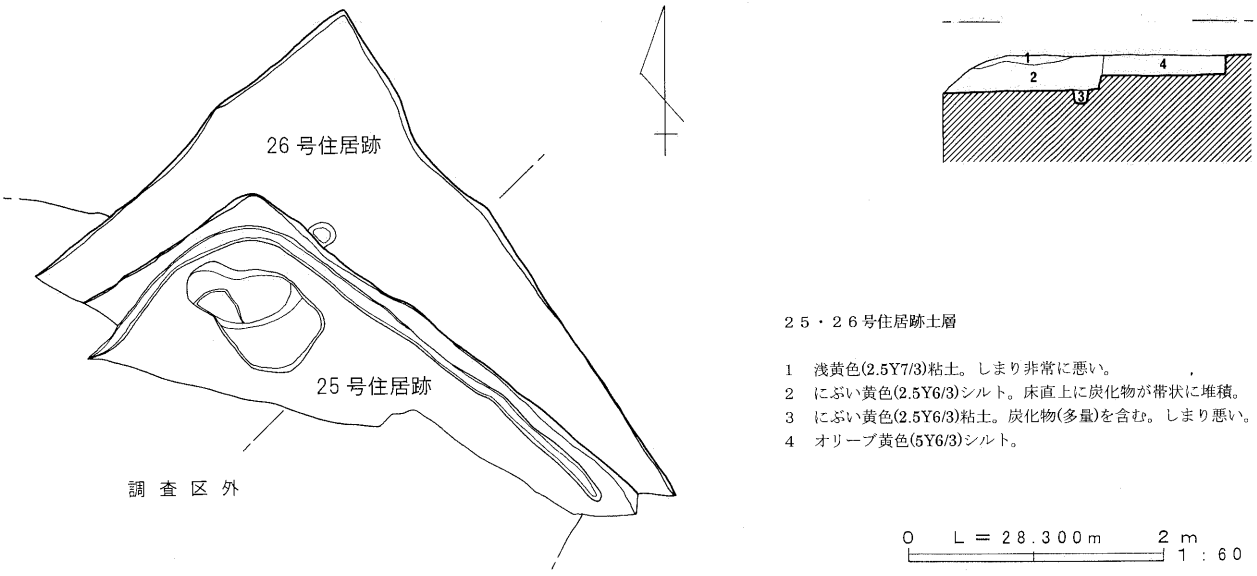
壁溝・カマド・貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物は、土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはなかった。

27号住居跡（第136図）　AB－19グリッドに位置する。北東部から南東部にかけて、29号住居跡を切っており、河川埋没後に構築している。

長軸4.22m、短軸3.75mの長方形を呈する。主軸方向はS－58°－Eを指す。確認面からの深さは35cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、概ね平坦であった。覆土はにぶい黄褐色粘土の単一層（5層）であり、自然堆積と考えられる。壁溝は南西壁中央から南西隅にかけてみられた。幅10cm前後、床面からの深さは僅かに3cm程である。柱穴は4つ検出された。南東部の柱穴は、貯蔵穴と重複している。柱穴の規模は径40～56cm、床面からの深さは51～66cmを測り、いずれもしっかりした掘り込みであった。

カマドは南東壁中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内側には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は42cm、燃焼部は32cm程であり、煙道部は中央で18cmと狭くなるが、先端で25cmとやや幅広になる。焚口部から燃焼部は緩やかに立ち上がり、燃焼部と煙道部の境には段が設けられる。煙道部は先端に向かってやや下るが、先端部は直角に立ち上がる。壁外へは1.51mを測る。燃焼部には土師器杯（No.11）と高杯（13）が支脚と



第135図　E・F区25・26号住居跡

して利用されていた。覆土は焼土・炭化物を含む層（2・3層）と、その下の燃焼部下層には被熱層（4層）、煙道部下層には灰層（1層）と炭化物層（6層）がみられた。

カマドの南西脇には、径89×70cm、床面からの深さ46cmの貯蔵穴がみられた。平面形は瓢箪状を呈する。

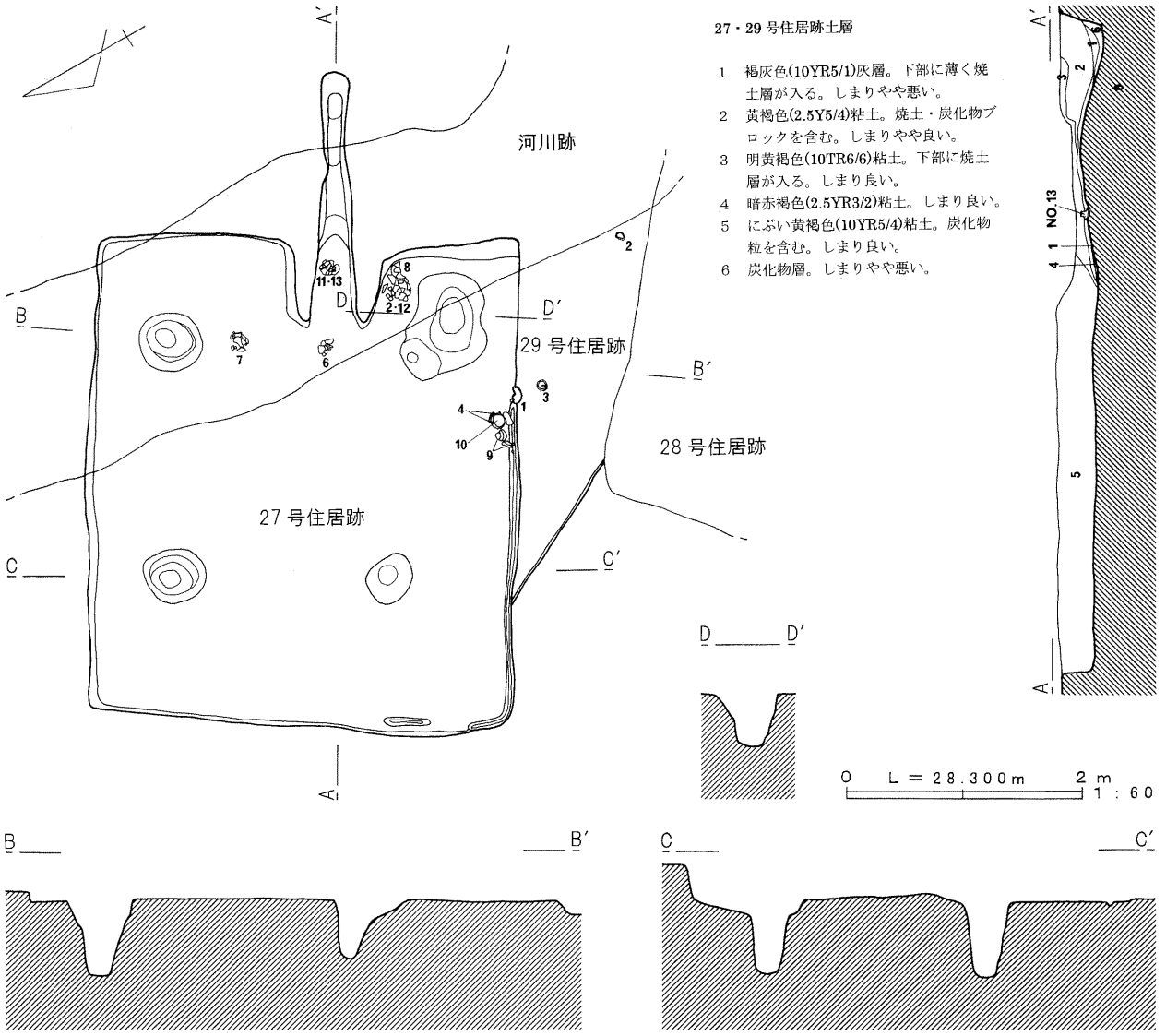
出土遺物（第137図）には、土師器杯（No.1～12）、高杯（13～15）、坩（16）、石錘（17）等がある。杯はカマド内とその周辺からまとまって出土した。すべて模倣杯であり、1のみ杯身模倣杯である。その他は杯蓋模倣杯。1・8・12は内外面に煤が付着し、9は外面に黒斑を有する。高杯は脚部が高いもの（13・14）と低いもの（15）がみられる。13は模倣杯に高い脚部が付くタイプであり、脚部に円形の透かし孔を3つもつ。14は脚部のみの検出である。棒状を呈している。16は古墳時代前期のものであり、流れ込みである。17は川原石を使用しており、側面にひび割れがみられる。

28号住居跡
（第138図）

AB・AC－19グリッドに位置する。南東部は調査区域外となる。

長軸5.43m、短軸5.07mの長方形を呈する。主軸方向はS－42°－Wを指す。確認面からの深さは52cmを測り、床面は凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系の粘土三層（7～9層）からなる。中層（8層）は厚く堆積し、7・8層の下部には炭化物層がみられた。自然堆積と考えられる。柱穴は4つ確認され、その規模は径35～68cm、床面からの深さは20～37cmを測る。このうち、北西部の柱穴には土師器甑（No.22）が伏した状態で検出された。

カマドは南西壁のほぼ中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、北西側の袖はやや短いが、本来は反対側の袖と同じ長さであったと思われる。内面壁は被熱していた。焚口部の幅は37cm、燃焼部は32cmを測る。焚口部から燃焼部まではほぼ平坦であり、煙道

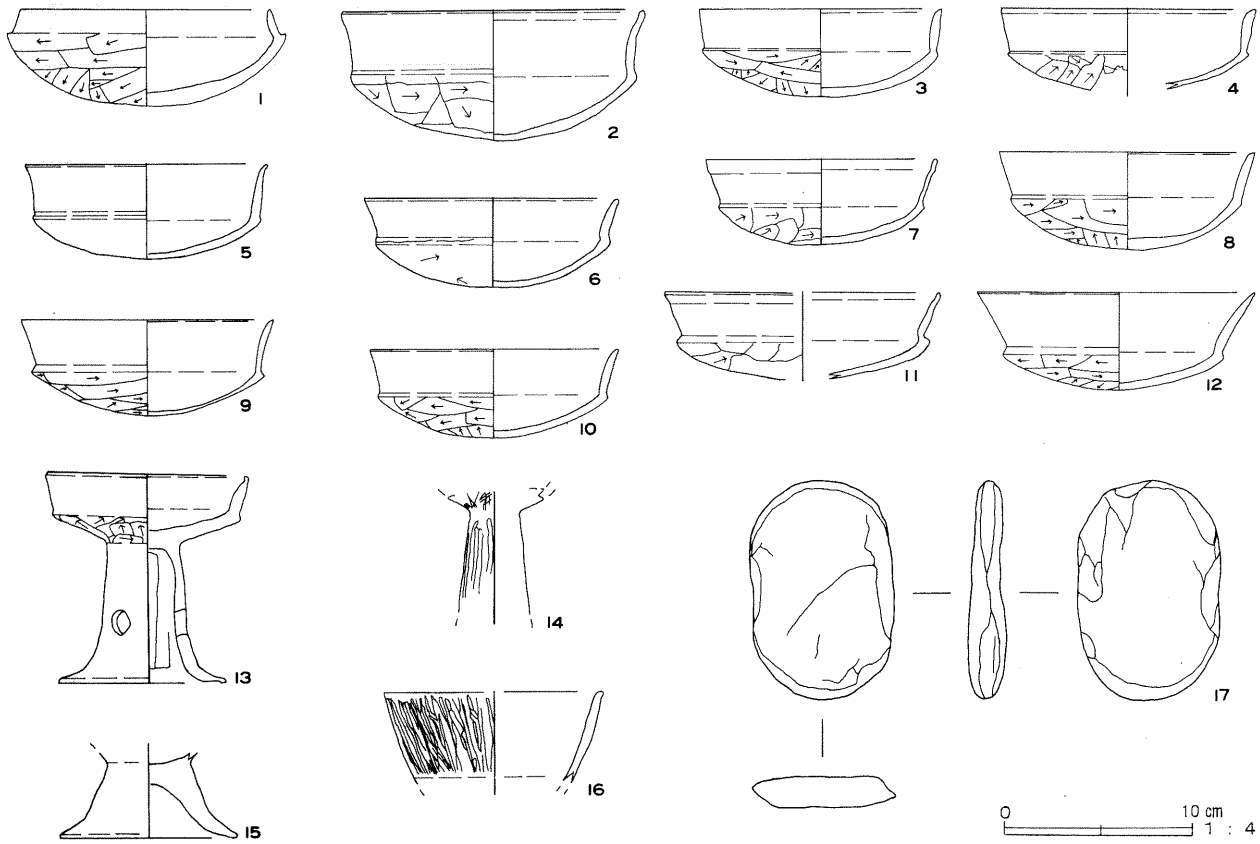


第136図　E・F区27・29号住居跡

部と燃焼部の境付近から緩やかに立ち上がる。燃焼部には高杯の脚部（No.10）が据えられていた。覆土は上層に焼土・炭化物を含む層（1・2層）があり、混入物を含まない黄橙色の粘土層（3層）を挟んで焼土層（4・6層）、灰層（5層）が検出された。

カマド南東脇には径1.14×0.92m、深さ47cmの貯蔵穴が検出された。平面形は楕円形を呈する。

出土遺物（第139・140図）には、須恵器蓋（No.1）、杯（8）、土師器杯（2～7）、高杯（9～12）、甕（13～20）、台付甕（21）、甑（22～24）等がある。10・22以外はすべて覆土中からの出土で、床面直上から検出された遺物はなかった。8は平安時代の須恵器杯で混入品である。1は末野産。土師器杯はすべて身の深い模倣杯である。6・7には煤が付着していた。高杯は脚部のみの検出が多い。脚部が高く、中途でやや膨らむもの（9・10）と低いもの（11・12）に分けられる。9は口縁部まで残存しており、大きく外反している。甕は長胴甕（13～16・19・20）と小型のもの（17・18）がある。17は外面に黒斑を有する。21は台部のみの検出である。甑は胴部に把手を持つタイプ（22）と持たないタイプ（23・



第137図　E・F区27号住居跡出土遺物

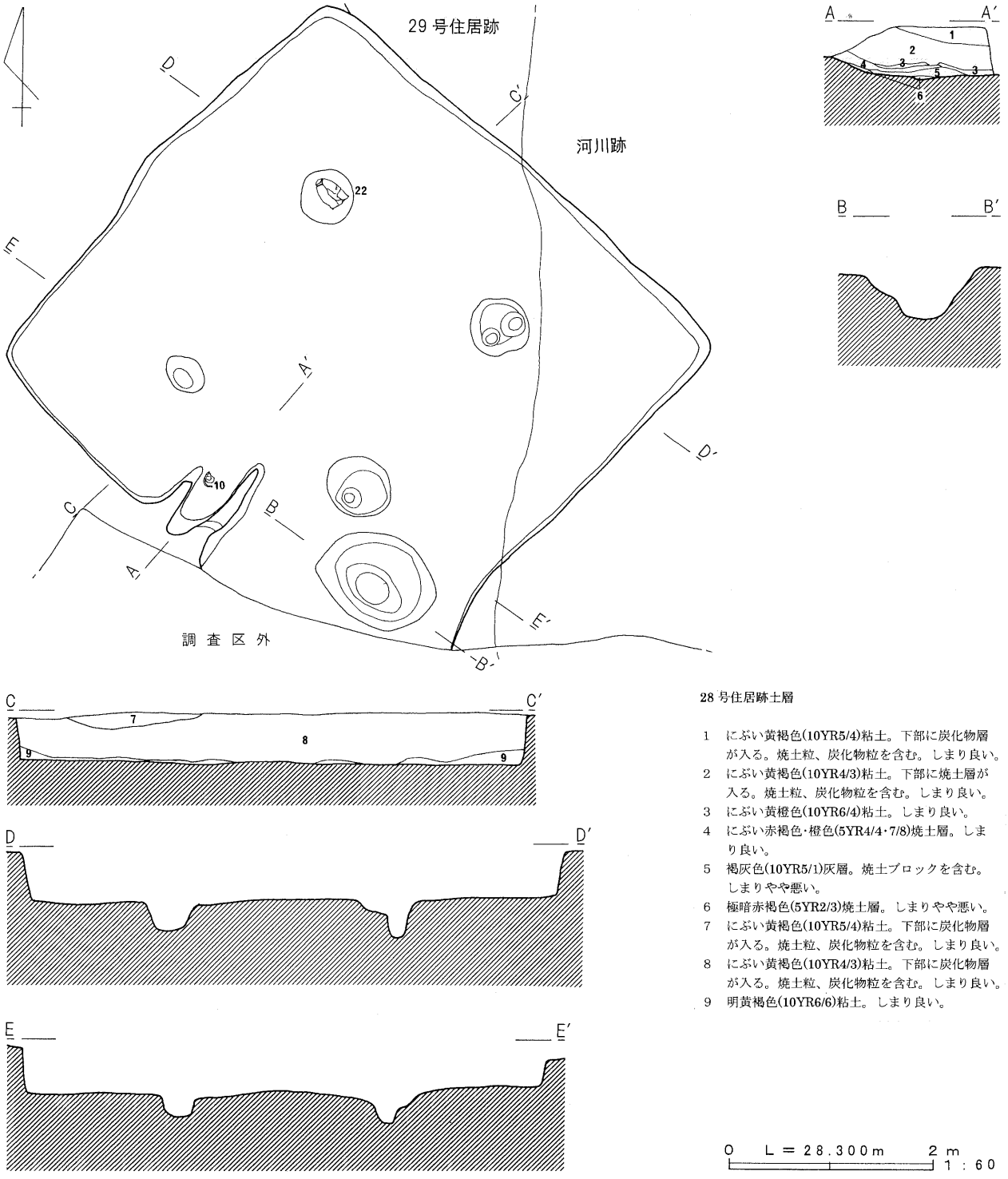
第63表　E・F区27号住居跡出土遺物観察表　(第137図)

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	13.2	5.1	-	③⑥①④	②	明赤褐	口縁部1/3欠	内外面煤付着。
2	土師器杯	(15.8)	-	-	⑥①②	②	明赤褐	2/3	
3	土師器杯	12.8	4.7	-	③⑥①④	②	橙	口縁部1/3欠	
4	土師器杯	13.2	-	-	①④⑥②③	②	橙	3/5	
5	土師器杯	12.7	5.0	-	⑥②③①	②	橙	2/3	磨滅。
6	土師器杯	13.8	4.7	-	①③②④⑥	②	橙	一部欠	磨滅。
7	土師器杯	12.2	4.6	-	①④⑥②③	②	橙	3/4	
8	土師器杯	13.4	5.2	-	③①④⑥	②	橙	3/4	内外面煤付着。
9	土師器杯	13.2	5.1	-	③⑥①④	②	橙	2/3	外面黒斑有。
10	土師器杯	13.1	4.7	-	③①⑥④	②	橙	口縁部一部欠	
11	土師器杯	(14.6)	(4.7)	-	①③	②	明赤褐	1/4	
12	土師器杯	14.5	5.1	-	③①⑥④	②	橙	3/4	内外面煤付着。
13	土師器高杯	10.6	11.3	8.8	①②④	②	橙	7/8	三方透かし。
14	土師器高杯	-	-	-	④②①③	②	明赤褐	脚部のみ	
15	土師器高杯	-	-	(9.4)	②①④⑥	②	にぶい赤褐	脚部のみ	
16	土師器坩	(11.5)	-	-	⑥②④①③	②	明赤褐	口縁部1/3	
17	石錘	長さ　17.0　最大幅　6.9　最大厚　1.6						完形	千枚岩製。

24）がある。23・24は外面に黒斑を有する。

29号住居跡　(第136図)　AB－19グリッドに位置する。北側を27号住居跡、南東部から南西部にかけて28号住居跡、そして東側を河川跡により切られているため、ほとんど残っていない。検出されたのは、南西壁の一部と床面のみである。

規模・平面形・主軸方向は不明である。確認面からの深さは33cmを測り、隣接する27・28号住居跡と床のレベルは同じであった。床面はほぼ平坦で、貼り床であった。

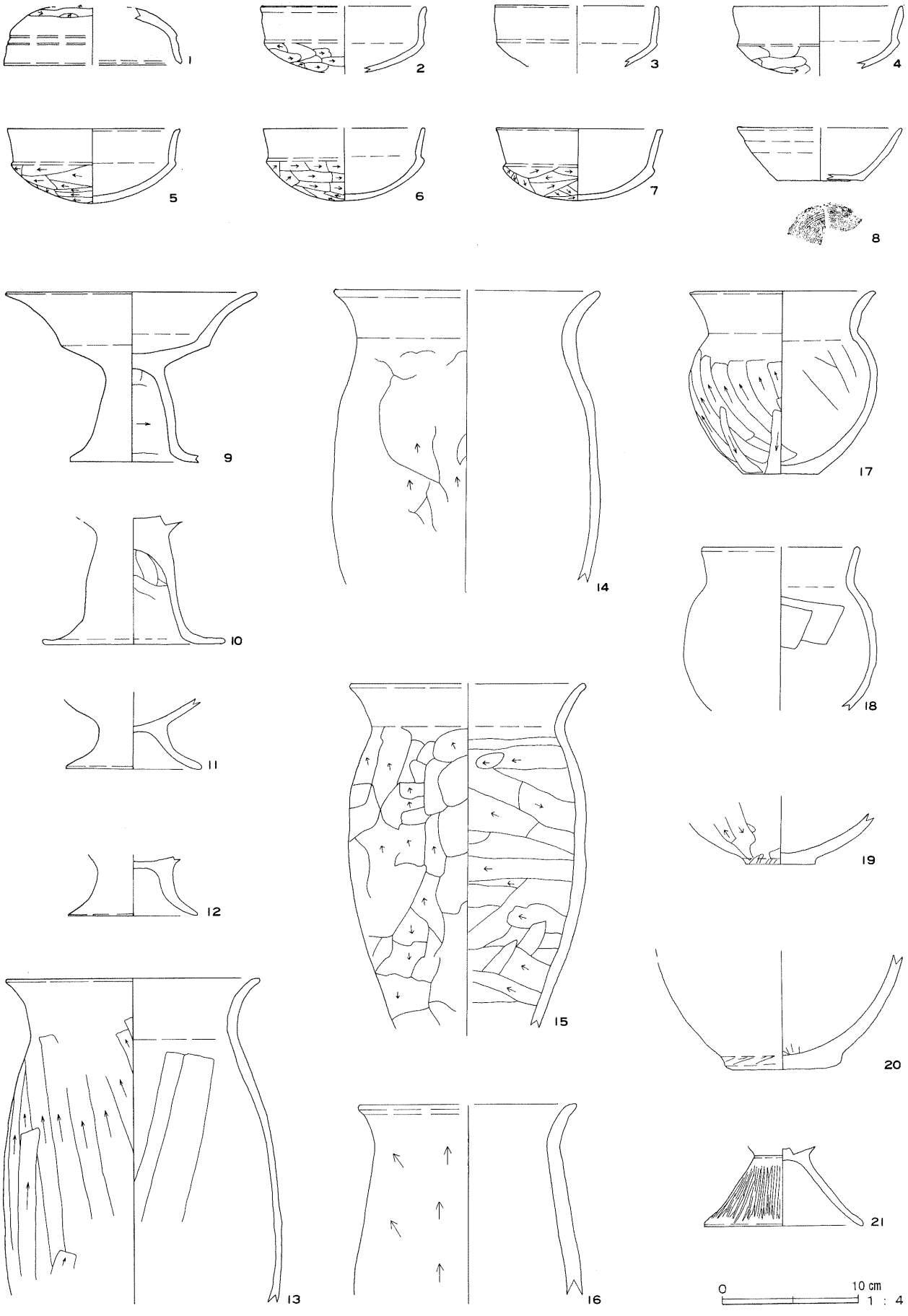


第138図　E・F区28号住居跡

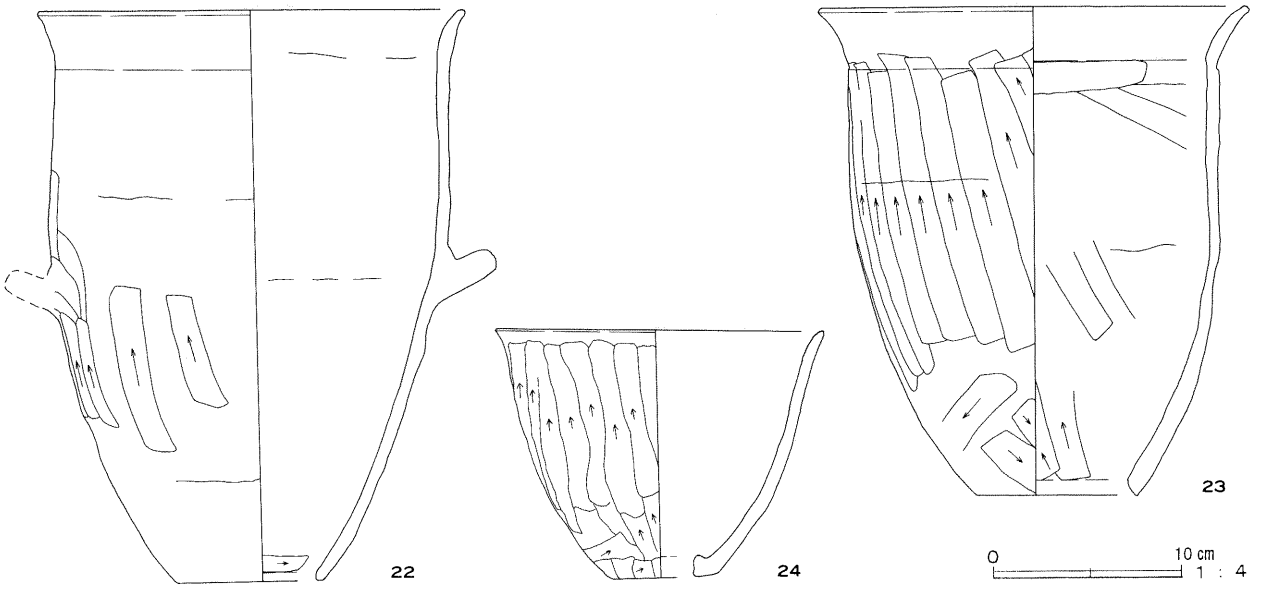
覆土は図示できなかったが、黄褐色系の粘土による自然堆積層であった。

壁溝、柱穴、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

出土遺物（第141図）には、土師器高杯（No.1）、手捏ね土器（2）、台付甕（3）等がある。すべて床面からの検出である。1は杯部のみの検出である。深身で、外面は刷毛目調整が施されている。2は口縁部を欠く。3は台部のみの検出である。外面は刷毛目調整による。



第139図　E・F区28号住居跡出土遺物(1)



第140図　E・F区28号住居跡出土遺物(2)

第64表　E・F区28号住居跡出土遺物観察表　(第139・140図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器蓋	(12.8)	-	-	⑤④	②	褐灰	1/2	
2	土師器杯	(11.8)	-	-	③⑥①④②	②	橙	1/3	
3	土師器杯	(12.0)	-	-	③①⑥④②	②	橙	口縁部1/2	外面磨滅。
4	土師器杯	12.2	5.0	-	①②③⑥	②	橙	2/3	
5	土師器杯	12.7	5.4	-	③①④②	②	明赤褐	口縁部1/3欠	
6	土師器杯	(11.8)	5.3	-	③①④	②	明赤褐	1/2	内外面煤付着。
7	土師器杯	12.3	5.2	-	①③②④	②	にぶい橙	3/4	外面煤付着。
8	須恵器杯	(12.0)	3.8	(6.2)	⑤①②③⑥	②	灰	1/4	末野産。
9	土師器高杯	18.5	-	-	③①	②	明赤褐	裾部一部欠	磨滅。
10	土師器高杯	-	-	13.1	②③①⑥④	②	橙	脚部のみ	
11	土師器高杯	-	-	(10.0)	⑥③②①④	②	橙	脚部のみ	
12	土師器高杯	-	-	9.5	③①④⑥②	②	橙	脚部のみ	
13	土師器甕	18.6	-	-	①③②⑥	②	にぶい橙	1/2	
14	土師器甕	(19.6)	-	-	①④⑥	②	橙	上半1/4	磨滅。
15	土師器甕	(17.2)	-	-	①③④	②	にぶい橙	1/4	
16	土師器甕	(16.0)	-	-	⑥①④②③	②	明黄褐	上位1/4	磨滅。
17	土師器甕	13.5	13.5	5.4	②①⑥	②	浅黄橙	完形	胴部外面黒斑有。
18	土師器甕	(11.6)	-	-	②①③⑥	②	にぶい赤褐	1/2	外面磨滅。
19	土師器甕	-	-	5.0	⑥②①④③	②	にぶい黄橙	2/3	
20	土師器甕	-	-	8.5	⑥③①④	②	橙	下位1/2	磨滅。
21	土師器台付甕	-	-	11.1	①④②③⑥	②	橙	台部5/6	
22	土師器甑	22.5	30.5	7.7	①③②⑥④	②	橙	一部欠	外面磨滅。
23	土師器甑	22.7	26.0	8.4	①⑥②④	②	にぶい褐	2/3	外面黒斑有。
24	土師器甑	17.4	13.4	5.7	⑥③①④	②	明赤褐	4/5	胴部外面黒斑有。

30号住居跡　AB－19グリッドに位置する。北側は調査区域外にある。

(第142図)　規模・平面形は不明であるが、南西壁は3.75mを測る。南北軸方向は、N－36°－Wを指す。確認面からの深さは64cmを測る。覆土は色調の異なる四層（2～5層）からなるが、灰黄褐色粘土を主体とし、4層が厚く堆積していた。自然堆積と考えられる。壁溝はみられず、ピットは1つのみ検出された。その位置から柱穴と考えられる。径52×43cm、床面からの深さは9cmと浅い。

カマド、貯蔵穴等は確認できなかった。

出土遺物（第143図）には、須恵器杯（No.1）、甕（6）、土師器杯（2・3）、甕（4・



第141図　E・F区29号住居跡出土遺物

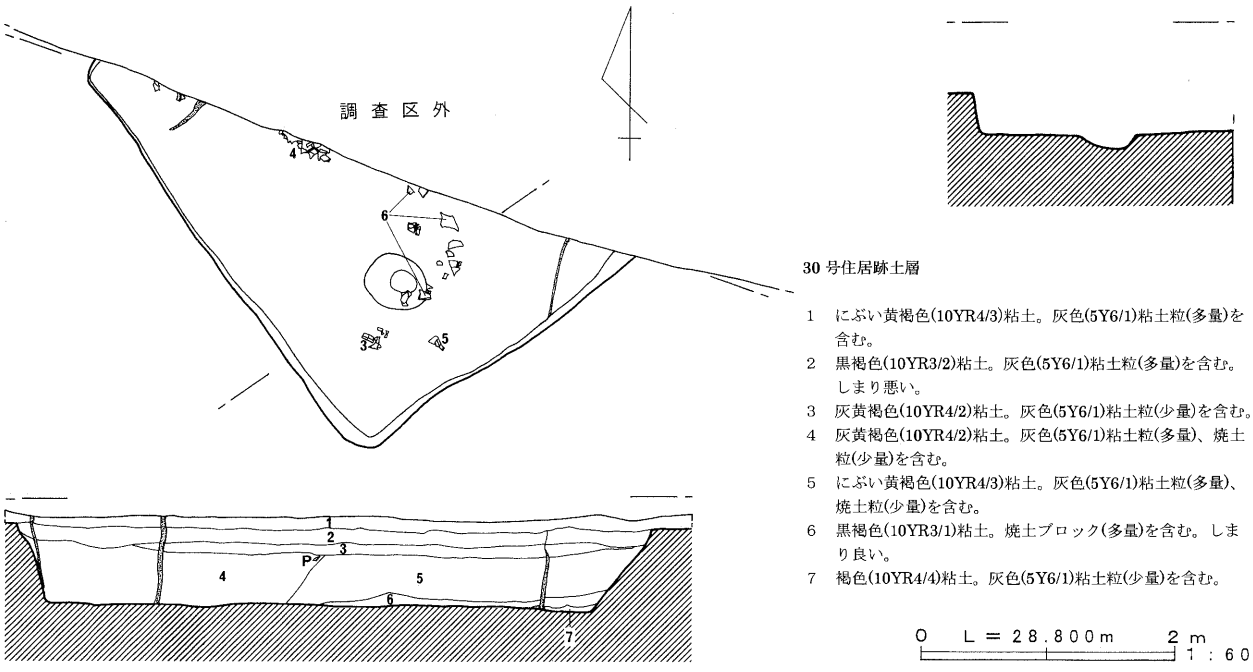
第65表　E・F区29号住居跡出土遺物観察表　（第141図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器高杯	(14.6)	-	-	②①④	②	明赤褐	上半1/2	
2	手捏ね土器	-	-	2.5	⑥②④	②	橙	体部2/3	
3	土師器台付甕	-	-	9.6	⑥①④	②	明赤褐	脚部のみ	

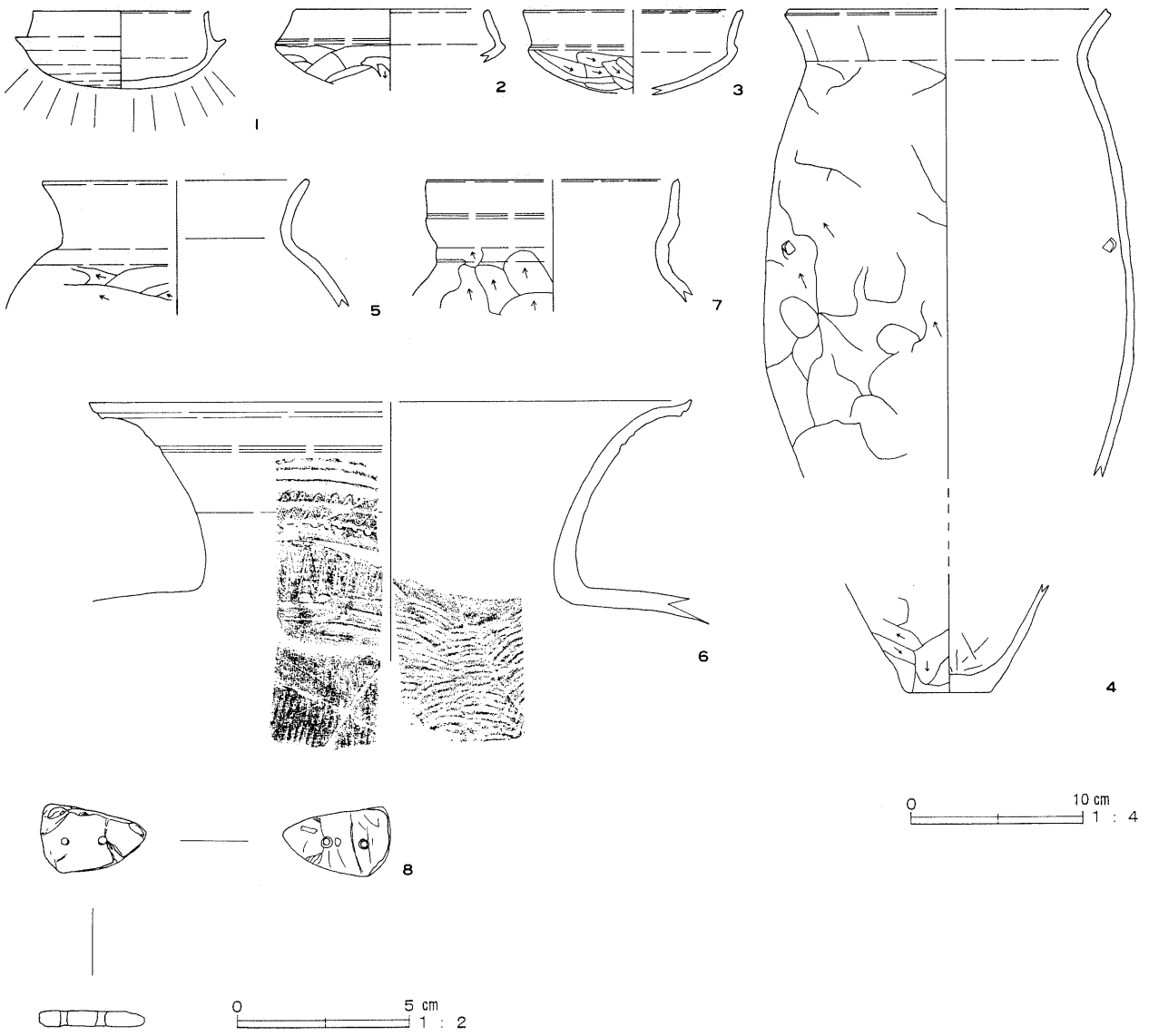
5）、壺（7）、滑石製双孔円板等がある。3～6が柱穴周辺の床面から検出された。その他は覆土中からの検出である。1・6は末野産である。土師器杯は模倣杯であるが、2は杯身模倣杯、3は杯蓋模倣杯である。甕は長胴甕（4）と丸胴甕（5）がある。7は口縁部形態から壺とした。8は中央に2つ穿孔がみられる。

31号住居跡　AA－21･22グリッドに位置する。北側が調査区域外にあり、南側は試掘トレンチにより欠いている。
（第144図）

規模・平面形等は不明であるが、北西－南東軸は4.21mを測る。確認面からの深さは46cmを測る。床面はほぼ平坦で、貼り床面が確認された。覆土は上層に黄褐色のシルト（1層）が厚く堆積し、その下位には炭化物が帯状にみられた。下層には黄色の砂層（2層）がみられた。自然堆積と考えられる。柱穴は2つ検出された。いずれも径12～15cmと小さく、床面からの深さは15cm程であった。



第142図　E・F区30号住居跡



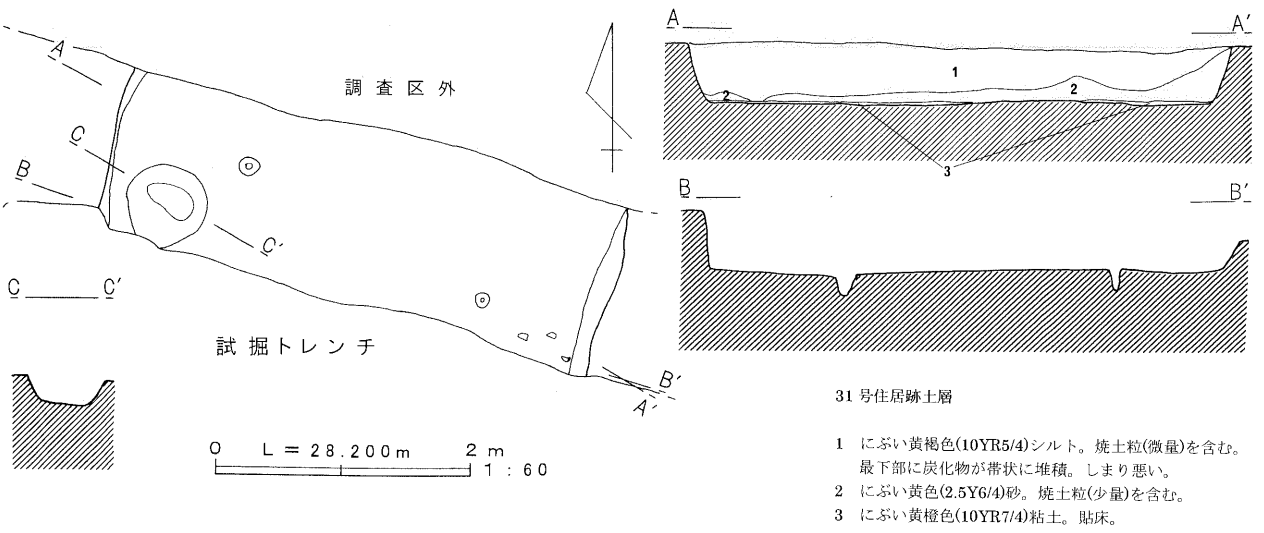
第143図　E・F区30号住居跡出土遺物

第66表　E・F区30号住居跡出土遺物観察表　(第143図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器杯	10.2	4.5	-	⑥①④	②	黒褐	一部欠	
2	土師器杯	11.1	-	-	①②③④	②	黒褐	2/3	
3	土師器杯	(12.8)	-	-	①④②③	②	明赤褐	1/3	
4	土師器甕	(18.6)	(40.0)	4.6	①③⑥	②	にぶい橙	1/3	
5	土師器甕	(15.6)	-	-	①④②⑥	②	明赤褐	上位1/3	
6	須恵器甕	(35.0)	-	-	②①④③	②	灰白	上位1/5	
7	土師器壺	(14.6)	-	-	③①④⑥②	②	橙	上位のみ	
8	石製双孔円板	長さ　2.0　最大幅　3.1　最大厚　0.45						完形	孔2つ有。滑石製。

南西部の試掘トレンチとの境には貯蔵穴がみられた。推定で径65cm、床面からの深さ21cmの円形を呈するものと思われる。カマドは調査区域外に位置すると推測される。

遺物は南東部の試掘トレンチとの境から礫、土師器片が検出されたが、図示可能なものはみられなかった。



第144図　E・F区31号住居跡

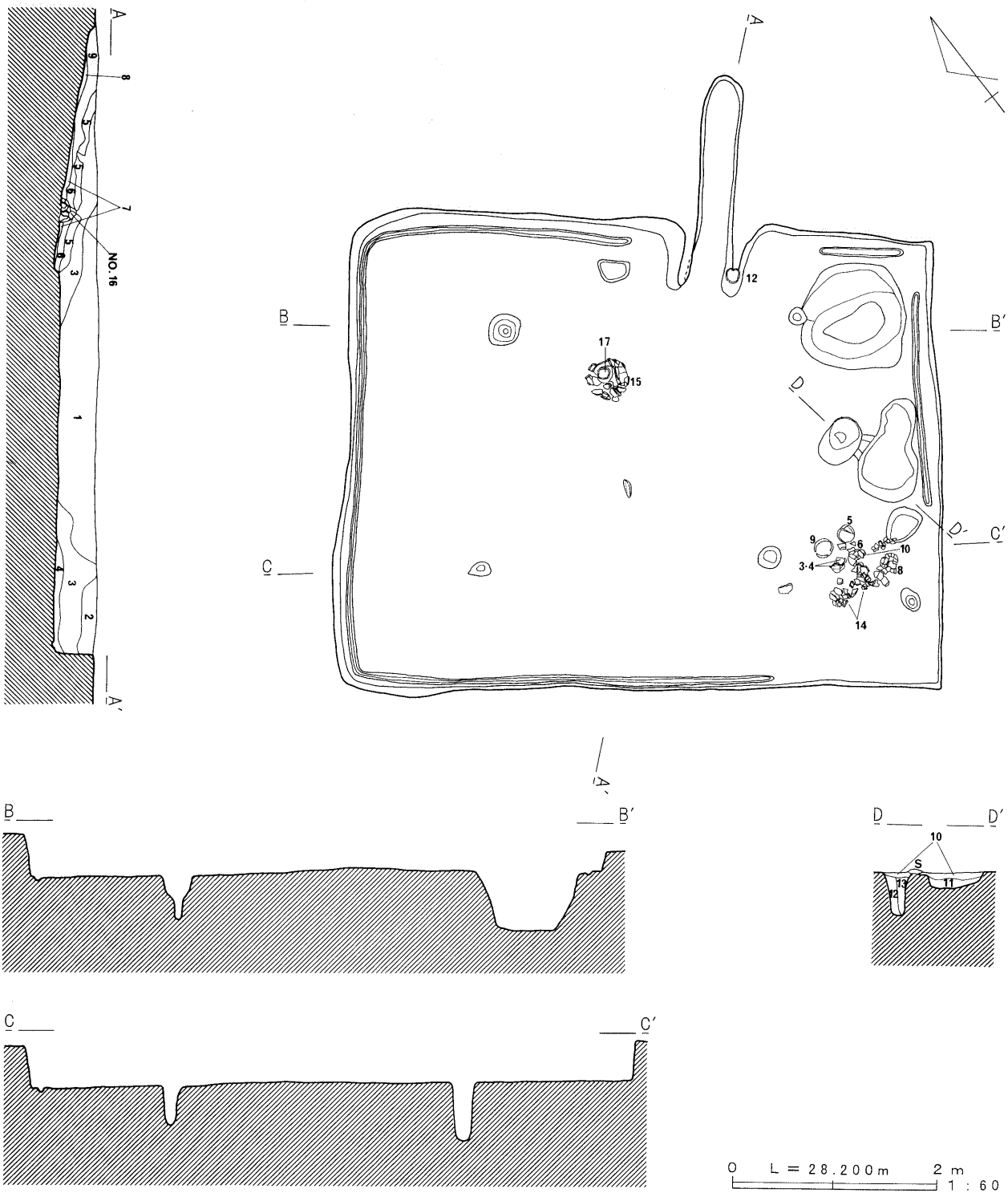
32号住居跡　AB・AC－22・23グリッドに位置する。河川埋没後に造られている。

（第145図）　長軸6.06m、短軸4.76mの長方形を呈する。主軸方向はN－39°－Eを指す。確認面からの深さは43cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色ないし黄色のシルト（1～4層）を主体とし、床面直上には炭化物が帯状に堆積していた。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。壁溝は南東隅、北東隅を除いたすべての壁沿いにみられた。ただし北東壁及び南東壁沿いは、壁からやや離れて巡っている。幅10cm前後で床面からの深さは3cmと浅い。ピットは床面から7つ確認された。径17～35cm、床面からの深さは29～57cmを測り、大きさにややバラツキがみられる。北東壁沿いにあるピットのうち、壁溝に接している瓢箪形のものは、貯蔵穴の可能性が考えられる。

カマドは北東壁のやや南東寄りに設けられている。残存状態は良好である。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。北東側の袖には土師器甕（No.12）が補強材として据えられていた。焚口部の幅は40cm、燃焼部は46cm、煙道部先端は35cmを測る。燃焼部から煙道部の境に段はみられず、焚口部から煙道部先端までは凹凸がみられるが、緩やかに立ち上がる。壁外へは1.48mほど張り出している。覆土は5層が天井部崩落土、6層が天井部下の被熱層であり、これらの下に灰層（7層）がみられた。また、煙道部最下部には、被熱して赤色化した焼土層（8層）が確認された。

カマド北東脇には貯蔵穴がみられた。径1.05×1m、床面からの深さ56cmを測り、円形を呈する。

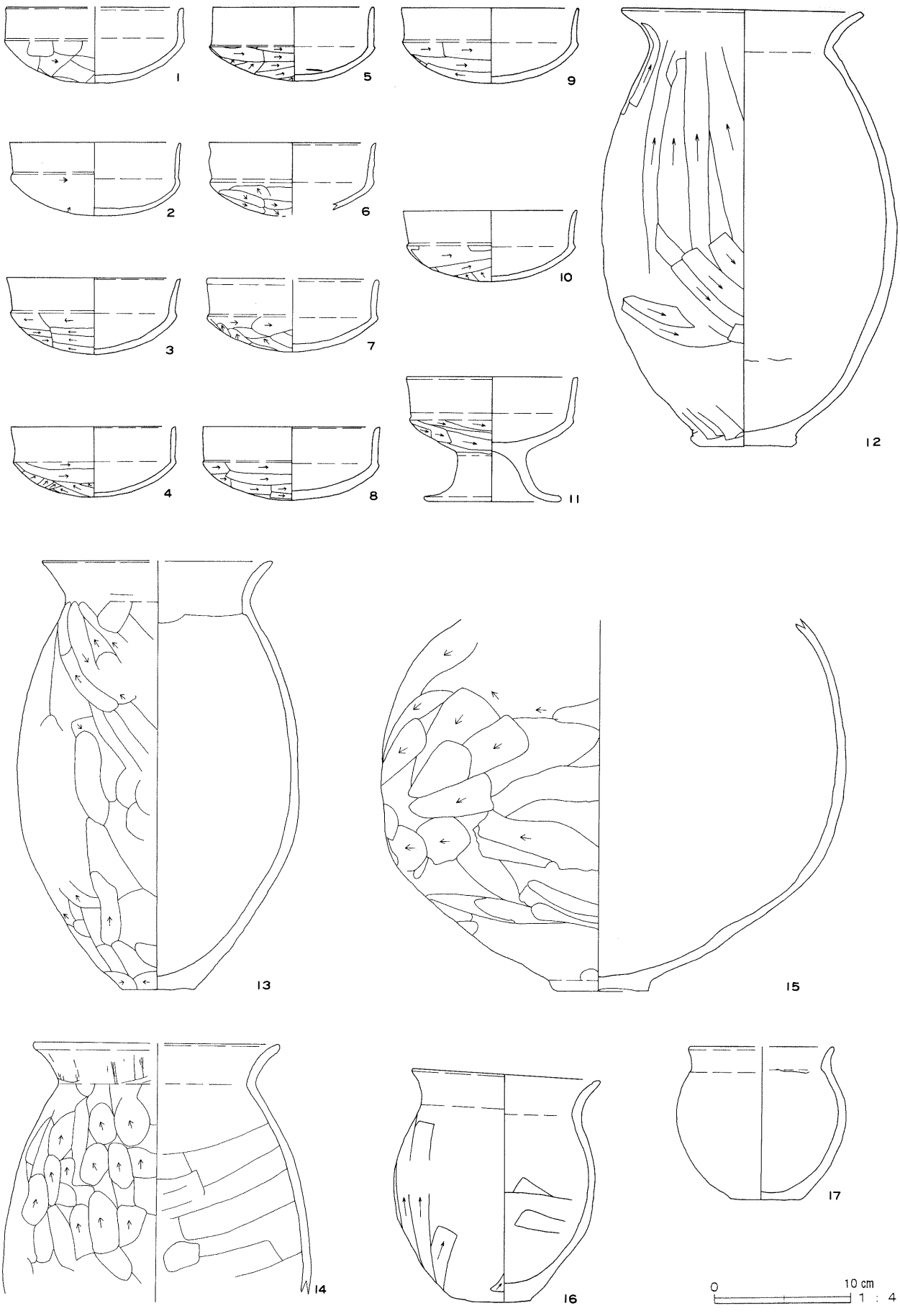
出土遺物（第146図）には、土師器杯（No.1～10）、高杯（11）、甕（12～17）等がある。主に住居跡中央付近と南東隅から検出された。杯はすべて身の深い模倣杯である。3・4には煤が付着し、9・10は黒斑がみられた。11は深身の模倣杯に低い脚部が付くタイプである。甕は長胴甕（12～14）、丸胴甕（15）、小型のもの（16・17）がみられる。17は胴部外面に黒斑がみられた。



32 号住居跡土層

1　黄褐色(2.5Y5/3)シルト。炭化物(少量)を含む。しまり悪い。
2　黄褐色(2.5Y5/3)シルト。しまり悪い。
3　にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト。最下部に炭化物が帯状に堆積。しまり悪い。
4　にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト。最下部(床面直上)に炭化物が帯状に堆積。しまり悪い。
5　灰白色(5Y7/2)粘土。カマド天井崩落上。しまり非常に良い。
6　橙色(5YR6/6)粘土。カマド天井崩落上。5 層が被熱により焼土ブロック化したもの。
7　黒褐色(5YR3/1)灰層。炭化物が密に充填している。
8　赤色(10R4/8)粘土。地山が被熱により焼土化。
9　にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト。
10　黄褐色(2.5Y5/3)粘土。炭化物(多量)を含む。しまり悪い。
11　黄褐色(2.5Y5/3)粘土。炭化物(多量)、焼土粒・焼土ブロック(少量)を含む。
12　浅黄色(2.5Y7/4)粘土。しまり悪い。
13　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。しまり悪い。粘性やや強い。

第145図　E・F区32号住居跡



第146図　E・F区32号住居跡出土遺物

第67表　E・F区32号住居跡出土遺物観察表　(第146図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(12.0)	5.6	-	③①④②⑥	②	橙	2/3	
2	土師器杯	12.6	5.4	-	③①②⑥	③	橙	2/3	外面磨滅。
3	土師器杯	12.7	5.6	-	③①⑥	②	橙	一部欠	外面煤付着。
4	土師器杯	12.0	5.2	-	③⑥①	②	明赤褐	2/3	内外面煤付着。
5	土師器杯	11.8	5.4	-	③⑥④①	②	明赤褐	一部欠	
6	土師器杯	12.2	-	-	①②③④⑥	③	橙	2/3	
7	土師器杯	(12.4)	5.4	-	②①③⑥④	②	赤褐	1/4	
8	土師器杯	13.0	5.4	-	③①④	②	橙	一部欠	
9	土師器杯	12.9	5.6	-	③①④	②	橙	一部欠	外面黒斑有。
10	土師器杯	12.8	5.3	-	③①④	②	黄橙	一部欠	外面黒斑有。
11	土師器高杯	12.6	9.2	10.2	③①④	②	橙	3/4	
12	土師器甕	17.5	32.4	7.0	⑥③④	②	浅黄橙	一部欠	内外面黒斑有。
13	土師器甕	(17.0)	31.5	5.3	⑥②①③④	②	橙	1/3	
14	土師器甕	(18.2)	-	-	⑥①④③	②	にぶい橙	上半2/3	
15	土師器甕	-	-	7.2	②①④⑥	②	橙	3/5	
16	土師器甕	13.8	17.2	6.0	①⑥④	②	にぶい橙	3/4	
17	土師器甕	(10.6)	11.3	5.1	①③⑥④	②	にぶい黄橙	口縁部一部欠	胴部外面黒斑有。磨滅。

33号住居跡　AB・AC－20グリッドに位置する。本住居跡が最も新しい。南西部で34・35号住居跡、南東部で35号住居跡を切っている。

(第147図)

(第148図)　長軸4.76m、短軸4.65mの方形を呈する。主軸方向はN－37°－Eを指す。確認面からの深さは33cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。中央には貼り床が確認された。覆土はほとんど図示できなかったが、黄灰色粘土を主体とする自然堆積層であった。壁溝はみられない。柱穴は4つ確認されており、いずれも3～7cmと浅い。

カマドは北東壁の南東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内側には被熱した箇所が確認された。燃焼部には土師器杯（No.10・42）が伏せた状態で確認された。燃焼部の幅は41cm、煙道部は北東へ34cmから23cmとなり、先端で径28cmのピット状となる。燃焼部と煙道部の境に段はみられず、焚口部から煙道部まで緩やかに上り、先端でピット状の掘り込みとなっている。壁外へは1.21m程張り出している。覆土は、上部を削平してしまったため、天井部は焚口部から燃焼部では検出されず、天井部下の被熱層（10層）のみ確認された。煙道部ではかろうじて天井部（4層）と天井部被熱層（6層）が確認でき、被熱した奥壁（1層）との間には、焼土を含む層（2・3・5層）がみられ、最下層に灰層（7・8層）がみられた。

カマド南東脇には貯蔵穴がみられた。径1.21×1.06m、床面からの深さ90cmの長方形を呈する。北東側は壁に接している。覆土上層から、土師器が多数検出された。

出土遺物（第149～151図）には、土師器杯（No.1～50）、高杯（52・53）、盌（54・55）、椀（56）、鉢（57・58）、甕（59～65）、坩（66）、甑（67）須恵器高杯（51）、滑石製臼玉（68）、土製丸玉（69）等があり、杯類が多数みられた。主にカマド、貯蔵穴、床面中央付近から検出された。杯はすべて模倣杯であり、1～9は杯身模倣杯、10～50は杯蓋模倣杯である。黒斑を有するものや煤が付着しているものがみられた。51は接合部のみの検出であるが、脚部は棒状を呈している。52・53は低い脚部である。54・55は外面に黒斑を有する。56は平底ぎみで口縁部が僅かに外反する。鉢は形態が異なり、57は扁平であるのに対し、58は

器高が高い。甕は長胴甕（59～62）と丸胴甕（63～65）がある。60は二次加熱を受けている。65は摩滅が顕著であり、調整は図示不可能であった。底部に黒斑を有する。66は外面に煤の付着がみられた。67は胴上部に把手を持つタイプであるが、把手を欠く。図示しなかったが、胴部に２つ穿孔がみられた。68・69はともに完形品である。

34号住居跡
（第147図）

AC－20･21グリッドに位置する。北側で33号住居跡に切られ、37号住居跡を切っている。35号住居跡とは南西壁と北西壁が共通し、軸も同じであることから、本住居跡の拡張と考えられる。南東壁は壁溝のみの確認である。

長軸5.14m、短軸4.31mの長方形を呈する。南北軸方向はＮ－49°－Ｅを指す。確認面からの深さは34cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。壁溝は北東壁以外にみられ、北西壁沿いは壁からやや離れて巡っている。幅は３～11cm、床面からの深さは３cm程である。柱穴は４つ確認された。

北西隅に貯蔵穴が確認できた。規模は径65×60cmの円形で、床面からの深さ９cmを測る。貯蔵穴の位置から推測して、カマドは北東壁に造られていたと推測される。

出土遺物（第152図）は、土師器杯（№１～５）、甕（６・７）、須恵器甕（８）等がある。５が北西隅の床面から検出された以外は、すべて覆土中からの検出である。杯はすべて模倣杯であるが、１・２は身が深く、３～５は器高が低い。また、４・５は体部と底部境の稜が不明瞭である。甕はともに長胴甕である。上部のみの検出である。８は頸部から肩部にかけての破片である。末野産。

35号住居跡
（第147図）

AC・AD－20・21グリッドに位置する。本住居跡は34号住居跡を東に拡張したものと判断される。北西部で33号住居跡に切られ、北西部で37号住居跡、南東部で36号住居跡を切っている。

長軸7.25m、短軸6.67mの方形を呈する。南北軸方向は、34号住居跡と同じくＮ－49°－Ｅを指す。確認面からの深さは34cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は上層（13・14層）に黄色系のシルトを含み、床面直上には炭化物が薄く帯状に堆積していた。自然堆積と考えられる。壁溝は途切れる箇所もみられるが、ほぼ全周している。幅５～12cm、床面からの深さは２～８cmを測る。本住居跡に付随する柱穴はみられない。南東壁沿いに２つみられるが、これは36号住居跡のものである。

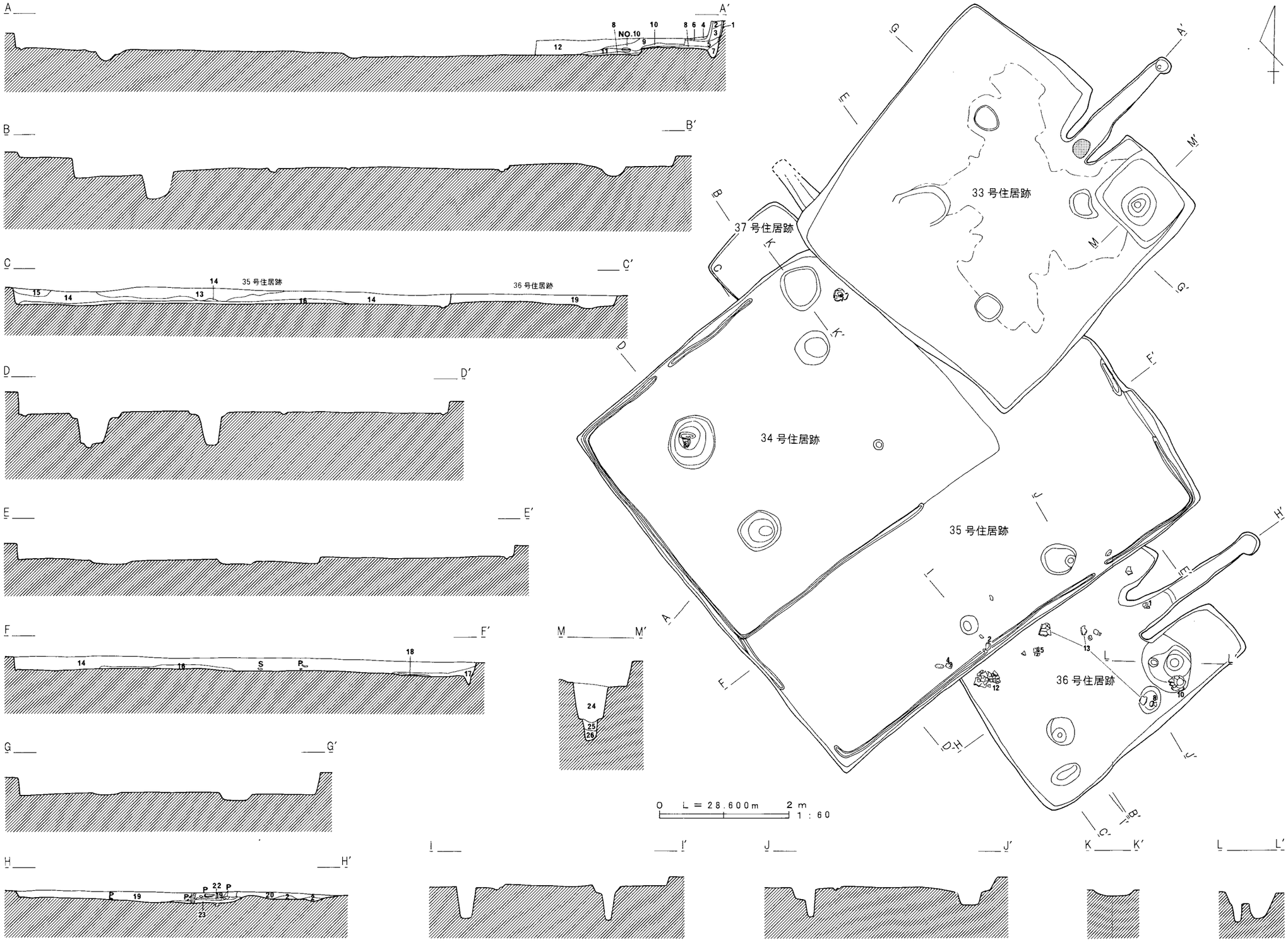
カマド・貯蔵穴はみられない。

出土遺物（第153図）には、土師器杯（№１～５）、高杯（６～９）等があり、杯類のみである。そのほとんどが覆土中からの検出である。杯はすべて身の深い模倣杯である。煤の付着や黒斑等を有するものが多い。高杯は模倣杯に低い脚部が付くタイプが多いが、７のみ脚部の器高がやや高い。

36号住居跡
（第147図）

AC・AD－20グリッドに位置する。北西壁を35号住居跡に切られている。

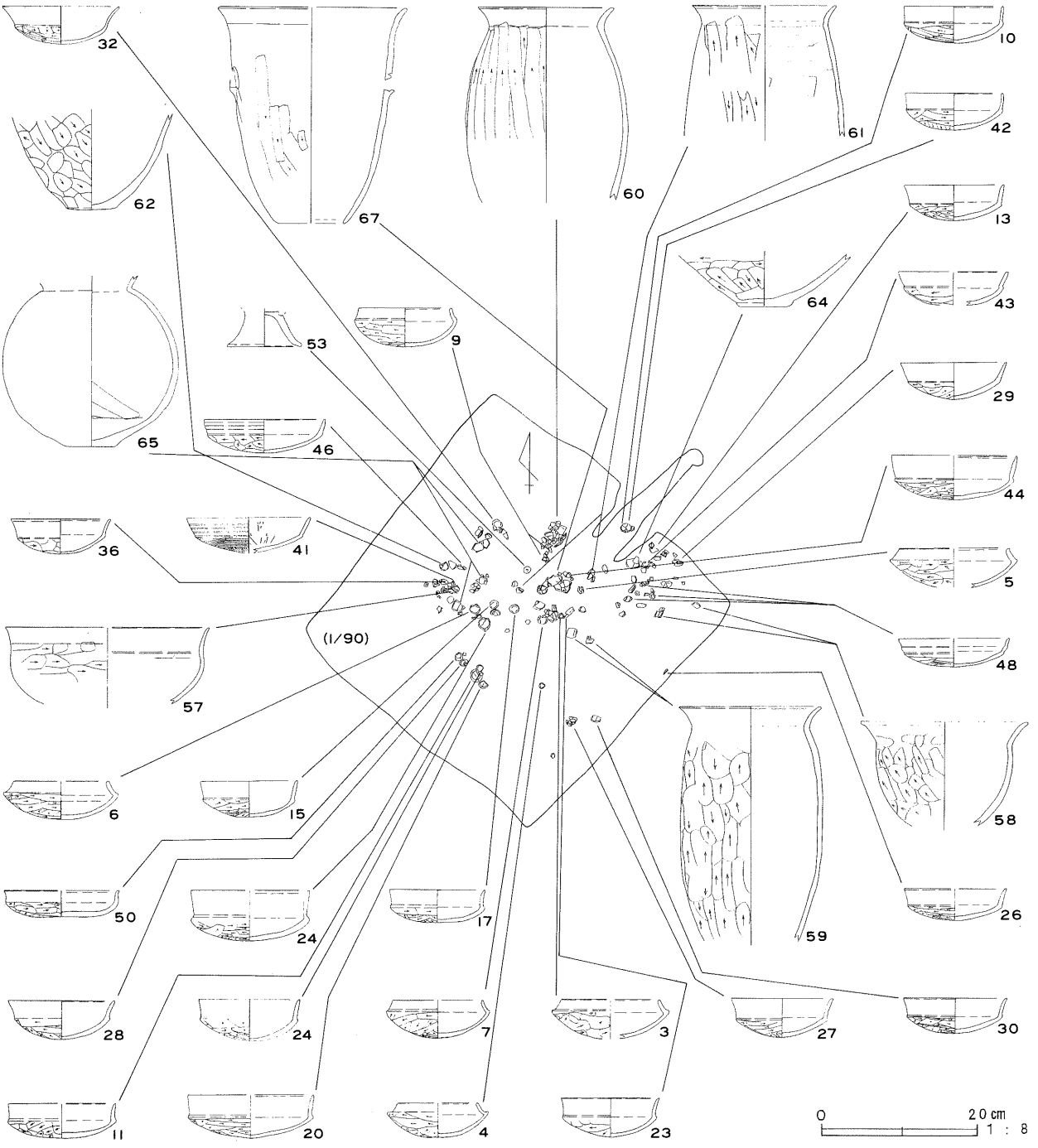
規模・平面形は不明であるが、南東壁は3.89mを測る。主軸方向はＮ－48°－Ｅを指す。



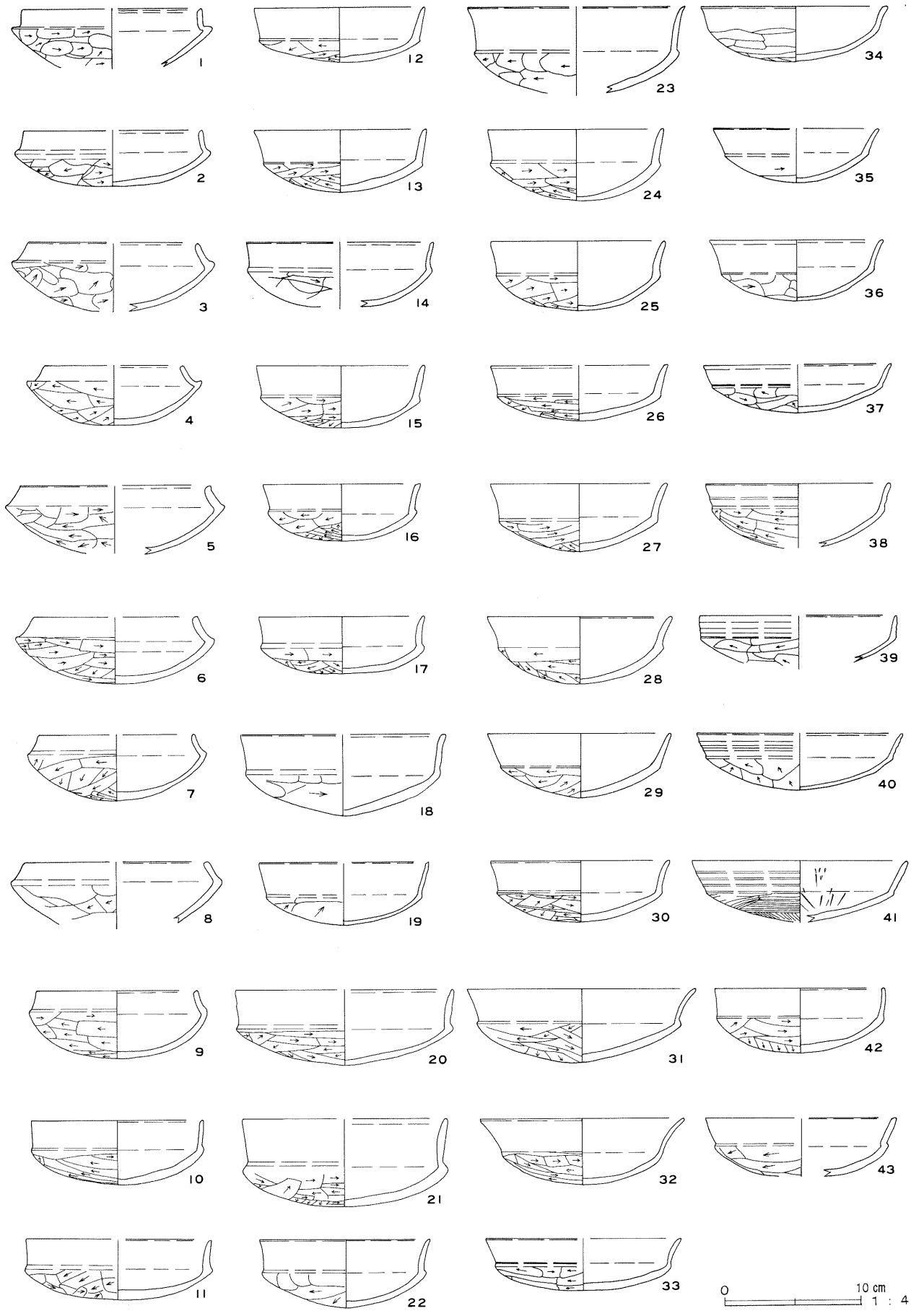
第147図　E・F区33・34・35・36・37号住居跡

33・34・35・36・37号住居跡土層

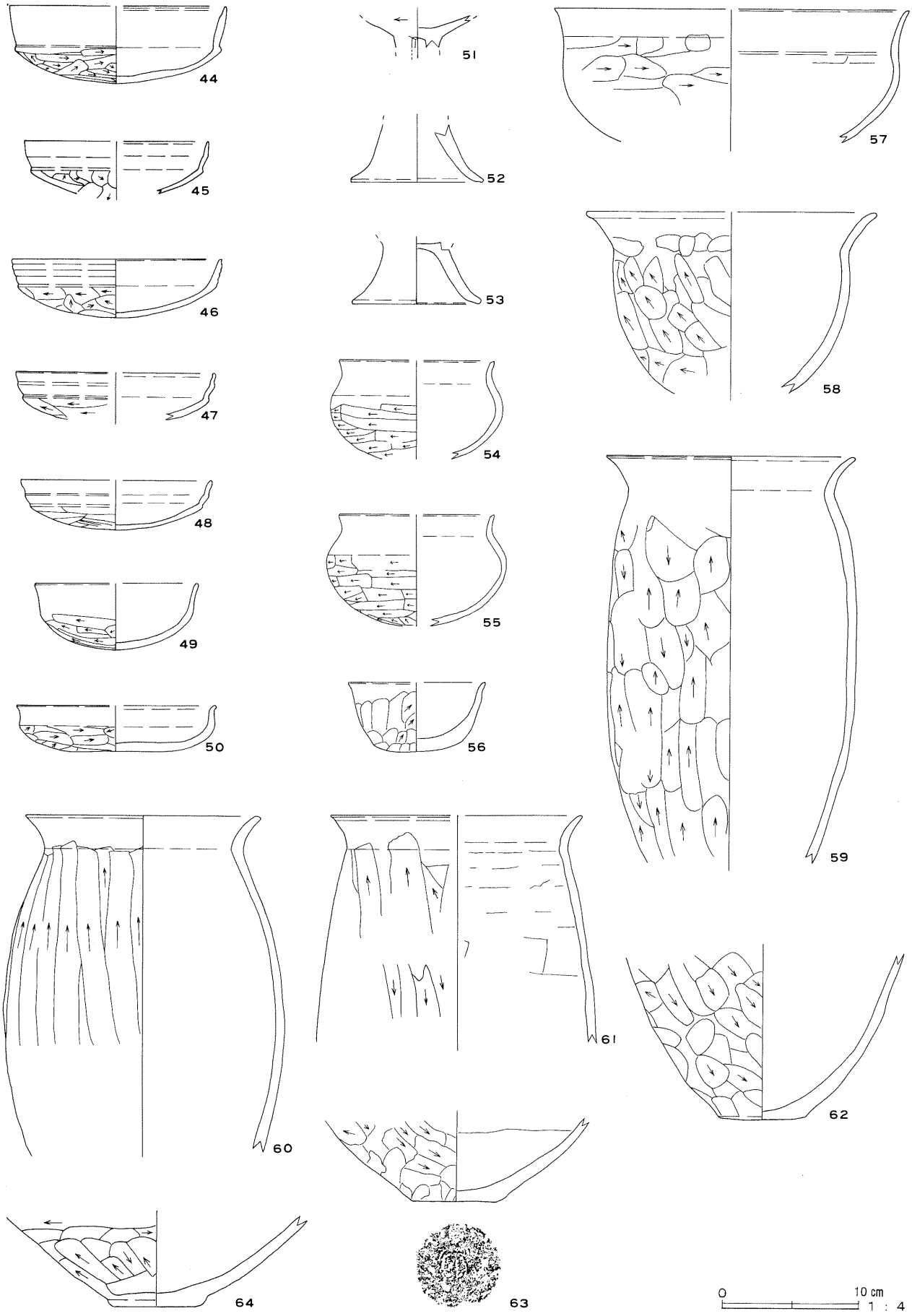
1　暗赤褐色(5YR3/3)シルト。煙出しで地山が被熱した部分。
2　黄褐色(10YR5/5)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒、焼土ブロック(若干)を含む。
3　褐灰色(10YR4/1)粘土。焼土ブロック(多量)を含む。
4　褐色(10YR4/4)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。煙道の天井。
5　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土。焼土ブロック(多量)を含む。粘性強い。
6　4層が被熱し暗赤褐色(5YR3/3)化したもの。
7　オリーブ黒色(7.5Y3/1)灰層。焼土粒(多量)を含む。粘性強い。
8　暗灰色(N3/0)灰層。粘性強い。
9　褐色(10YR4/4)粘土。焼土粒・ブロック(多量)を含む。
10　赤褐色(5YR4/6)粘土。天井が火を受けた部分。
11　暗褐色(10YR3/3)粘土。焼土ブロック(多量)を含む。
12　黄灰色(2.5Y5/1)粘土。褐色(10YR4/4)粘土粒、灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒、炭化粒を含む。
13　にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト。しまり悪い。
14　にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト。焼土粒、炭化物(少量)を含む。13層よりさらにしまり悪い。
15　灰オリーブ色(5Y5/3)粘土。しまり悪い。
16　赤黒色(2.5YR2/1)粘土。床直上に炭化物が帯状に堆積。
17　赤黒色(2.5YR2/1)粘土。
18　淡黄色(2.5Y8/4)粘土。貼床。
19　にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト。床直上に炭化物が帯状に堆積。
20　灰黄褐色(10YR5/2)粘土。焼土ブロック(少量)を含む。しまり悪い。粘性やや強い。
21　灰黄褐色(10YR5/2)粘土。焼土ブロック(少量)を含む。しまり悪い。
22　灰黄褐色(10YR6/2)粘土。カマド天井崩落土。粘性強い。
23　黒褐色(5YR2/1)灰層。焼土ブロック(多量)を含む。
24　黄褐色(2.5Y5/3)粘土。酸化鉄粒・ブロック(多量)を含む。
25　灰色(5Y5/1)粘土。酸化鉄粒(多量)、炭化粒(微量)を含む。
26　黄灰色(2.5Y4/1)粘土。酸化鉄粒(多量)を含む。しまり悪い。



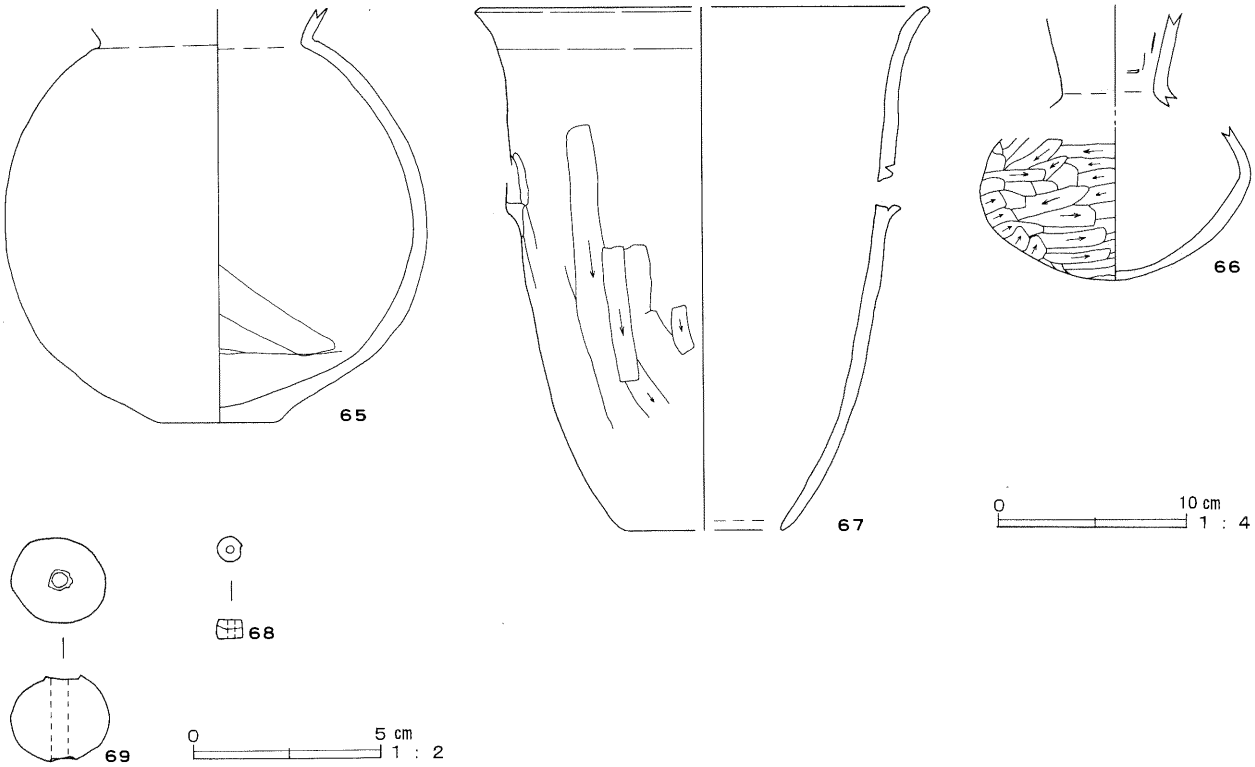
第148図　E・F区33号住居跡遺物出土状況



第149図　E・F区33号住居跡出土遺物(1)



第150図　E・F区33号住居跡出土遺物(2)

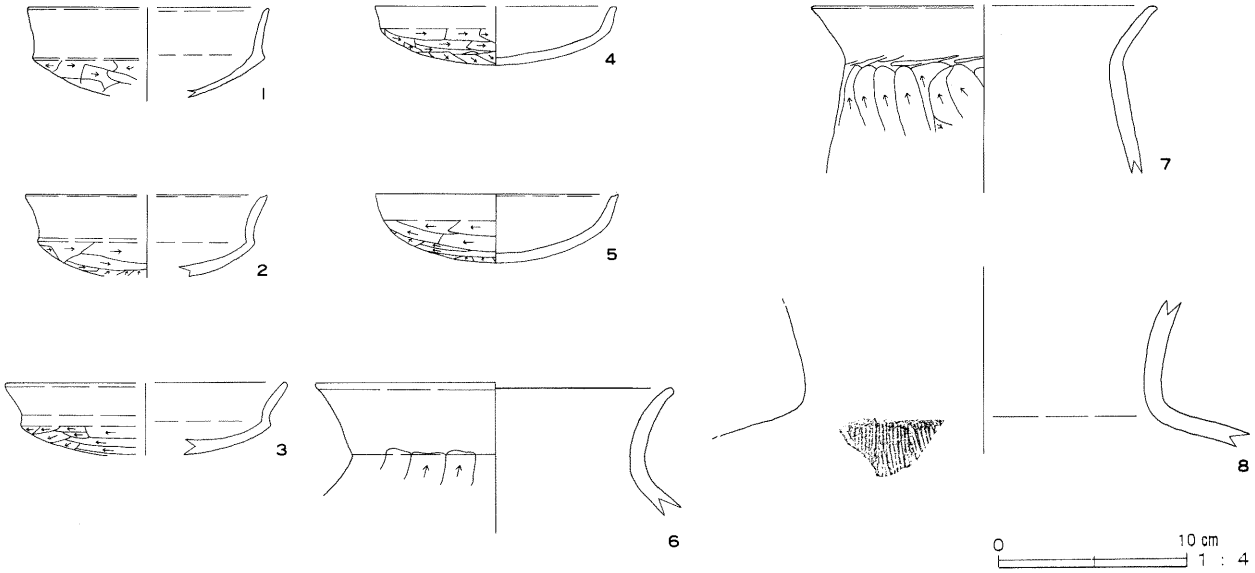


第151図　E・F区33号住居跡出土遺物(3)

第68表　E・F区33号住居跡出土遺物観察表　(第149～151図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(13.2)	-	-	①④②	②	褐灰	1/4	
2	土師器杯	(13.0)	(4.1)	-	③①④②⑥	②	黒褐	1/2	
3	土師器杯	(12.6)	-	-	④①②③	②	褐灰	1/2	
4	土師器杯	(10.2)	4.3	-	③①②④	②	赤褐	一部欠	内外面煤付着。
5	土師器杯	(14.6)	-	-	①④⑥②③	②	明赤褐	1/2	
6	土師器杯	(12.0)	4.9	-	①⑥②④	②	にぶい赤褐	2/3	外面黒斑有。
7	土師器杯	(11.5)	4.8	-	⑥②①④③	②	にぶい橙	3/4	外面黒斑有。
8	土師器杯	(14.4)	-	-	①④②⑥③	②	橙	1/5	
9	土師器杯	11.8	4.9	-	①⑥③	②	にぶい赤褐	2/3	内外面煤付着。
10	土師器杯	12.6	4.7	-	⑥①③④	②	明赤褐	口縁部1/4欠	
11	土師器杯	(13.6)	-	-	①④③	②	褐灰	1/2	
12	土師器杯	12.4	4.0	-	③①④	②	橙	1/2	外面黒斑有。
13	土師器杯	12.7	4.6	-	⑥①④	②	明赤褐	3/4	内外面煤付着。
14	土師器杯	(13.6)	-	-	⑥③①④⑤	②	橙	1/2	
15	土師器杯	12.4	4.5	-	①⑥③②	②	明赤褐	一部欠	外面黒斑有。
16	土師器杯	11.5	4.1	-	⑥③①④	②	にぶい橙	一部欠	
17	土師器杯	12.2	4.1	-	⑥③①④	②	橙	完形	外面黒斑有。
18	土師器杯	(15.0)	7.0	-	①④②⑥③	②	橙	1/3	
19	土師器杯	(12.4)	4.7	-	③①⑥④	②	にぶい橙	1/2	
20	土師器杯	(16.0)	5.5	-	③④	②	橙	2/5	外面黒斑有。
21	土師器杯	(15.0)	6.4	-	①⑥③④	②	明赤褐	口縁部1/2欠	
22	土師器杯	12.3	5.1	-	①⑥④③②	②	にぶい赤褐	2/3	
23	土師器杯	(15.8)	-	-	①②④③	②	橙	1/3	
24	土師器杯	12.8	5.2	-	⑥①④②	②	橙	一部欠	
25	土師器杯	12.8	5.1	-	③①⑥④	②	にぶい橙	一部欠	
26	土師器杯	(13.0)	4.1	-	⑥③①	②	明赤褐	3/4	
27	土師器杯	13.0	4.9	-	③①⑥④	②	橙	口縁部1/3欠	
28	土師器杯	13.6	4.9	-	③①④	②	橙	下位一部欠	外面黒斑有。
29	土師器杯	13.5	4.6	-	③①④	②	橙	3/4	
30	土師器杯	13.2	4.4	-	③①④	②	橙	口縁部1/2欠	外面黒斑有。
31	土師器杯	12.7	5.4	-	③①④	②	橙	1/2	
32	土師器杯	15.0	4.8	-	⑥①④	②	橙	口縁部1/3欠	
33	土師器杯	(14.2)	3.8	-	①②③④⑥	①	にぶい橙	3/5	
34	土師器杯	13.6	4.0	-	①⑥③	②	黒	1/2	内外面煤付着。

35	土師器杯	(12.0)	4.0	-	③①	②	明褐	1/4	
36	土師器杯	12.6	4.5	-	②①③⑥	②	橙	1/2	
37	土師器杯	(13.6)	3.6	-	④①③	②	褐灰	1/2	
38	土師器杯	13.5	-	-	⑥③①④	②	明赤褐	一部欠	
39	土師器杯	(14.4)	-	-	①④③	②	褐灰	1/4	
40	土師器杯	(15.0)	4.2	-	③①④	①	にぶい褐	一部欠	
41	土師器杯	15.7	-	-	①③②④	②	にぶい赤褐	3/4	内外面煤付着。
42	土師器杯	12.4	4.7	-	①③⑥④	②	明赤褐	3/4	
43	土師器杯	(13.9)	(4.3)	-	③④①②⑥	②	橙	1/2	
44	土師器杯	(15.8)	5.6	-	③①④	①	にぶい赤褐	1/2	外面黒斑有。
45	土師器杯	(13.4)	-	-	④①③	②	黒褐	1/2	
46	土師器杯	15.3	4.4	-	②③①⑥	②	明赤褐	1/2	
47	土師器杯	(14.4)	-	-	①④⑥②	②	褐灰	1/3	
48	土師器杯	(14.0)	3.6	-	①⑥②	②	明赤褐	3/4	外面黒斑有。
49	土師器杯	(12.0)	4.9	-	⑥①④②	②	明赤褐	2/3	外面黒斑有。
50	土師器杯	(14.4)	3.4	-	①④②③⑥	①	褐灰	3/5	
51	須恵器高杯	-	-	-	①②④③	③	灰黄	接合部のみ	三方透かし。
52	土師器高杯	-	-	9.6	⑥①④②	②	橙	脚部のみ	
53	土師器高杯	-	-	9.2	①④②⑥	②	橙	脚部のみ	
54	土師器盌	(11.4)	-	-	③①②④	②	橙	1/3	外面黒斑有。
55	土師器盌	(11.4)	-	-	③①②④	②	橙	1/2	外面黒斑有。
56	土師器椀	(10.0)	5.1	-	②④①③	②	橙	1/3	
57	土師器鉢	(26.0)	-	-	①④⑥	②	にぶい橙	1/5	
58	土師器鉢	(11.2)	-	-	④①③②	②	橙	1/2	
59	土師器甕	18.3	-	-	⑥②①④③	②	明赤褐	底部欠	
60	土師器甕	17.1	-	-	①⑥④	②	浅黄橙	底部欠	下部磨滅。二次加熱。
61	土師器甕	(18.4)	-	-	②③①⑥	②	赤褐	1/3	
62	土師器甕	-	-	6.2	⑥④①③	②	橙	下半のみ	
63	土師器甕	-	-	6.2	⑥③①②④	②	浅黄橙	下位3/4	
64	土師器甕	-	-	6.8	③②⑥①④	②	橙	下位4/5	
65	土師器甕	-	-	6.5	①③	②	橙	口縁部欠	底部黒斑有。
66	土師器坩	-	-	-	③①	②	橙	下位のみ	外面煤付着。
67	土師器甑	(24.0)	27.9	(8.4)	③①⑥	②	にぶい黄橙	4/5	胴部2ヶ所孔有。
68	石製臼玉	径　0.7　孔径　0.2　厚さ　0.5						完形	滑石製。
69	土製丸玉	長さ　2.3　径　2.6　孔径　0.4						完形	



第152図　E・F区34号住居跡出土遺物

確認面からの深さは16cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土はにぶい黄色シルトの単一層（19層）で、床面直上には炭化物が帯状に堆積していた。自然堆積と考えられる。壁溝はみられない。本住居跡にピットは5つ確認された。南東隅のピットを除いた4つが柱穴となり、このうち2つは隣接する35号住居跡内から検出された。

第69表　E・F区34号住居跡出土遺物観察表　（第152図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(12.8)	-	-	①④②③	②	明赤褐	2/3	
2	土師器杯	(12.8)	-	-	③①④②	②	橙	1/3	
3	土師器杯	(15.0)	-	-	③①②④	②	橙	1/4	
4	土師器杯	(12.8)	3.1	-	③①④	②	にぶい赤褐	1/2	
5	土師器杯	12.9	3.6	-	③①④⑥	②	にぶい赤褐	2/3	
6	土師器甕	19.0	-	-	①④③②	②	橙	上位のみ	
7	土師器甕	(18.2)	-	-	⑥③①④②	②	橙	上位1/3	
8	須恵器甕	-	-	-	②④⑤	②	青灰	上位1/3	

カマドは北東壁に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は47cm、燃焼部は36cm前後、煙道部は30cm前後で北東方向に進み、先端は径36cmのピット状となっている。焚口部から燃焼部は、床面同様にほぼ平坦である。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は6cmを測る。煙道部はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であり、先端は緩やかに立ち上がる。覆土は、燃焼部では天井部崩落土（22層）と灰層（23層）がみられ、煙道部では焼土を含む層（2・20層）が確認された。

カマド南東脇には貯蔵穴が2つ並んで確認された。北東側の貯蔵穴は径92×76cmの楕円形で、床面からの深さ46cmを測る。北西側はカマド袖に接し、南西側はピットと重複する。南西側の貯蔵穴は径43×23cmの楕円形で、深さ23cmを測る。北東側の貯蔵穴からは土師器甕（No.10）、南西側の貯蔵穴からも土師器高杯（8）が検出された。

出土遺物（第154図）には須恵器杯（No.6）、高杯（7）、土師器杯（No.1～5）、高杯（8・9）、甕（10～12）、甑（13）等がある。主に貯蔵穴及び床面の中央から南西部にかけて検出された。6・7は体部に波状文が施文されている。末野産。土師器杯はすべて身の深い模倣杯である。1・5の内外面には煤の付着がみられた。高杯は脚部のみの検出であるが、ともに低い。甕はともに丸胴甕である。甑はともに把手を持たないが、器形が異なる。13は素口縁で、外面は刷毛目調整である。煤が付着していた。

37号住居跡（第147図）

AC－20・21グリッドに位置する。南東部は33号住居跡、南西部は34号住居跡に切られている。規模・平面形は不明である。主軸方向はN－46°－Wを指す。確認面からの深さは9cmと浅く、床面は検出された範囲では、ほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、黄褐色系の粘土による自然堆積層であった。

壁溝、柱穴、貯蔵穴等は検出されなかった。

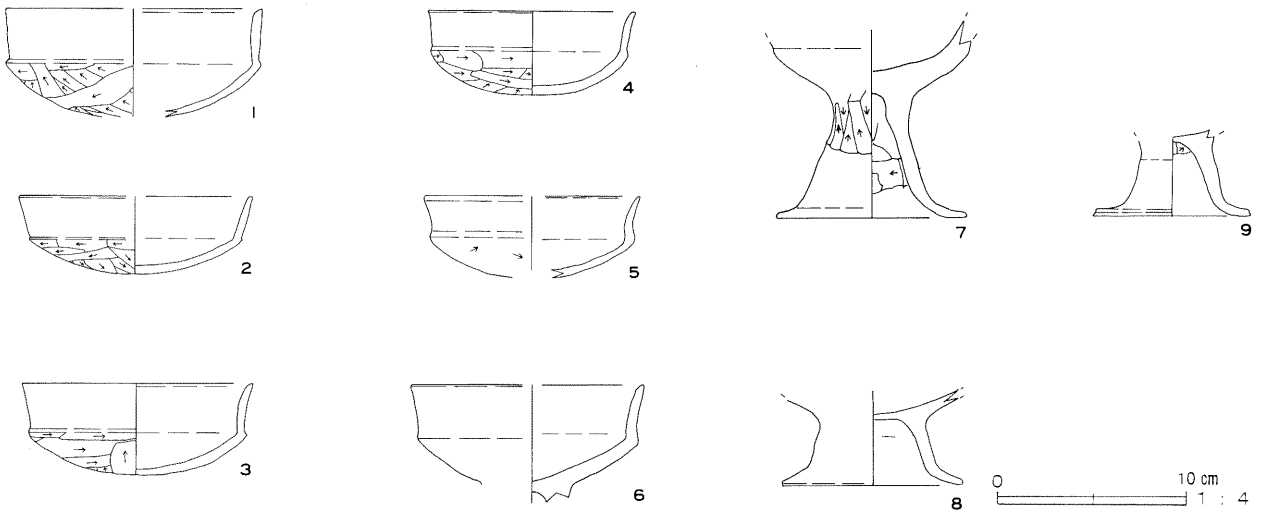
カマドは袖の一部と燃焼部から煙道部が検出された。煙道部は先端を欠く。燃焼部の幅は38cm、煙道部は欠損箇所の先端で32cmを測る。燃焼部と煙道部の境に段はみられず、先端に向かって緩やかに立ち上がる。覆土は焼土を含む層が薄くみられた。

遺物は、土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

38号住居跡（第155図）

AD・AE－20・21グリッドに位置する。北西部で39号住居跡を切っている。

長軸6.01m、短軸5.89mの方形を呈する。主軸方向はN－61°－Eを指す。確認面からの



第153図　E・F区35号住居跡出土遺物

第70表　E・F区35号住居跡出土遺物観察表　（第153図）

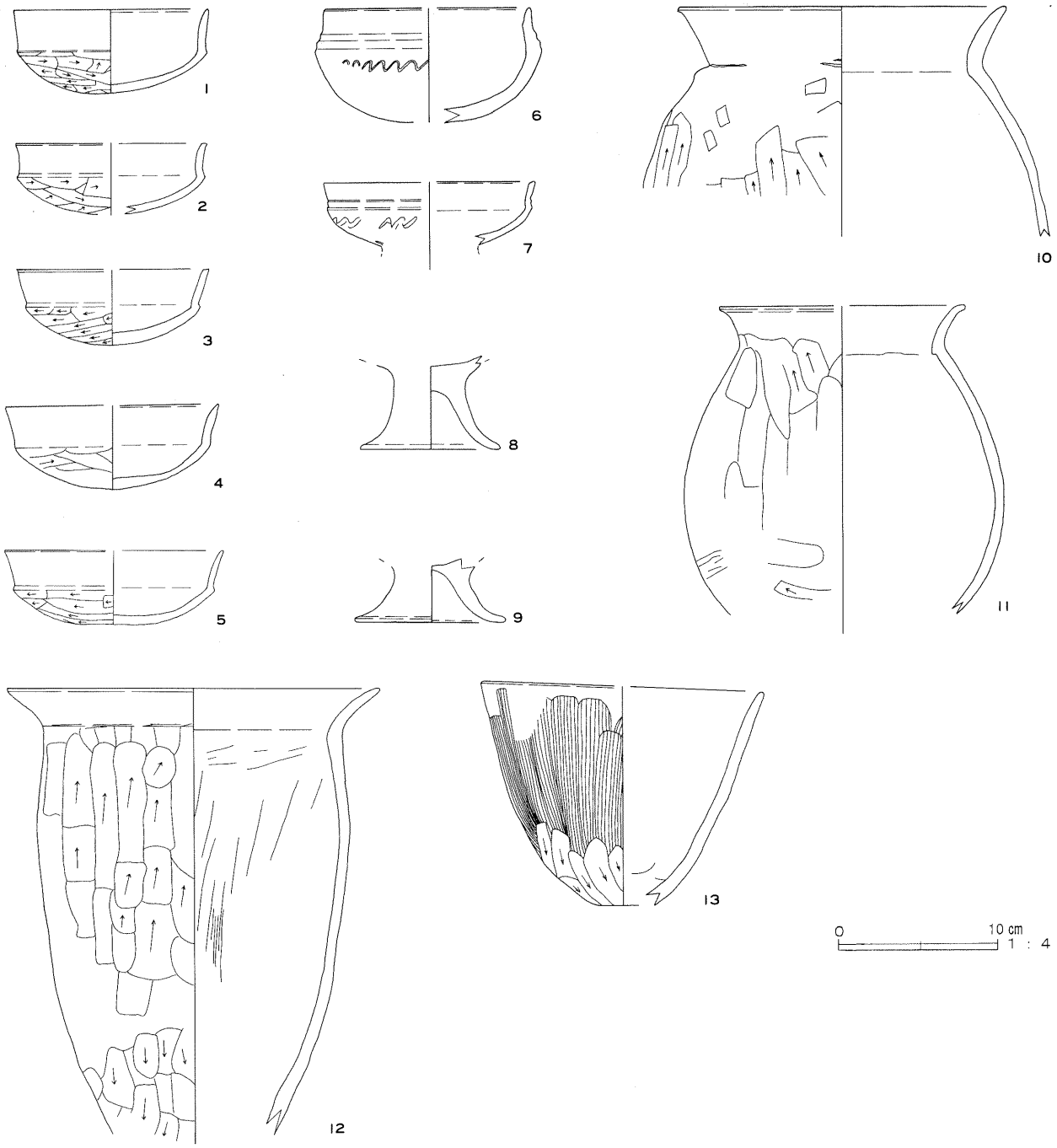
No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	(13.6)	-	-	③①④②	②	明赤褐	1/4	内外面煤付着。
2	土師器杯	(12.4)	4.1	-	③①④	②	橙	1/3	外面黒斑有、煤付着。
3	土師器杯	12.3	4.8	-	③①④⑥	②	明赤褐	1/2	外面黒斑有。
4	土師器杯	11.1	4.4	-	③①④⑥	②	明赤褐	口縁部1/5欠	
5	土師器杯	(11.6)	-	-	①④③②	②	明赤褐	1/4	磨滅。
6	土師器高杯	(12.4)	-	-	③①	②	橙	杯部のみ	全面磨滅。
7	土師器高杯	-	-	(10.1)	①④⑤	②	橙	4/5	
8	土師器高杯	-	-	9.5	②④③①⑥	②	橙	脚部1/3	
9	土師器高杯	-	-	8.2	③②①④	②	橙	脚部4/5	

（第156図）　深さは28cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土はにぶい黄褐色粘土（1層）を主体とし、床面直上には炭化物を含む層が薄く堆積していた。壁溝は南西壁沿いを除いてほぼ全周しているが、所々で途切れている。また、そのほとんどが壁から10～34cm程離れて巡っている。幅は4～12cm、床面からの深さは3cm程を測る。柱穴は4つ検出された。南東部の柱穴は、径1.63×1.25mと非常に大きい。

カマドは北東壁中央のやや南東寄りに設けられている。袖は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は54cm、燃焼部は50cmを測り、燃焼部と煙道部の境は28cmと狭くなって、煙道部先端では40cmと幅広になる。焚口部から燃焼部はほぼ平坦である。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は15cmを測る。煙道部はほぼ平坦であり、先端で緩やかに立ち上がる。壁外へは1.08mほど張り出している。覆土に天井部崩落土等はみられず、天井部材と思われる灰色粘土をブロック状に含む層（5・6層）が焚口部から燃焼部から検出された。煙道部からは焼土層（8層）が検出された。

カマド北西脇には、径45cmの円形を呈する貯蔵穴が確認された。

出土遺物（第157図）には、土師器杯（No.1～4）、高杯（5～7）、甕（8～11）等がある。9は貯蔵穴、1・2・5・7が床面直上から検出された。その他は覆土中からの出土であった。杯はすべて杯身模倣杯である。外面に煤の付着がみられたものが多い。高杯は、杯蓋模倣杯に低い脚部がつくタイプである。5の外面に煤が付着していた。甕は長胴甕（8



第154図　E・F区36号住居跡出土遺物

第71表　E・F区36号住居跡出土遺物観察表　（第154図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	12.2	5.2	-	①③④⑥	②	橙	2/3	内外面煤付着。
2	土師器杯	(12.0)	-	-	③①②④	②	橙	1/4	
3	土師器杯	(12.0)	4.7	-		②	にぶい橙	3/5	
4	土師器杯	(14.2)	5.3	-	④①③②⑥	②	橙	2/3	
5	土師器杯	(13.8)	4.6	-	①③④②	②	橙	1/4	内外面煤付着。
6	須恵器杯	(13.0)	(7.2)	-	②①④⑥	②	灰	1/4	
7	須恵器高杯	(13.2)	-	-	⑥①④②	②	灰黄	杯部1/6	
8	土師器高杯	-	-	8.8	①④②⑥	②	橙	脚部のみ	
9	土師器高杯	-	-	9.5	①④③②⑥	②	明赤褐	脚部のみ	
10	土師器甕	20.6	-	-	③①⑥④	②	橙	上位4/5	
11	土師器甕	(15.4)	-	-	①②④③⑥	②	褐・黒	1/3	
12	土師器甑	23.4	-	-	①④⑥③	②	橙	1/2	
13	土師器甑	(17.8)	13.6	(3.6)	①③⑥	②	浅黄橙	4/5	外面煤付着。

～10）と小型のもの（11）がある。

39号住居跡　AD－20・21グリッドに位置する。南東部を38号住居跡に切られている。

（第155図）　長軸は不明、短軸は4.59mを測り、長方形を呈すると考えられる。主軸方向はS－40°－

（第156図）　Eを指す。確認面からの深さは11cmと浅い。床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄橙色粘土の単一層（3層）であり、床面直上には炭化物層が薄くみられた。柱穴は2つ確認されたが、いずれも床面からの深さは9～11cmと浅い。北東側に対になる柱穴はみられなかった。

壁溝、貯蔵穴は検出されなかった。

カマドは袖部の一部が検出されたのみである。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は48cmを測る。覆土に天井部崩落土等はみられず、焼土・炭化物を含む層（11層）、焼土層（10層）が検出された。

出土遺物（第157図）は土師器杯（No.1）のみである。模倣杯。内面に煤の付着がみられた。床面直上から検出された。

40号住居跡　AE－20グリッドに位置する。複数の住居跡と重複関係にあり、本住居跡が最も新しい。

（第158図）　47号住居跡と44号住居跡を切っている。東側は調査区域外にある。

（第159図）　規模・平面形等は不明であるが、北西壁は4.74mを測る。南北軸方向はN－46°－Eを指す。確認面からの深さは42cmを測り、床面は凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系の粘土二層（1・2層）からなる。上層（1層）は厚く堆積しており、下部には炭化物が堆積していた。自然堆積と考えられる。壁溝は北西隅で確認された。幅は8～10cm、床面からの深さは6cm程を測る。柱穴は4つ確認された。南東部の柱穴のみ径が84×63cmと大きい。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。

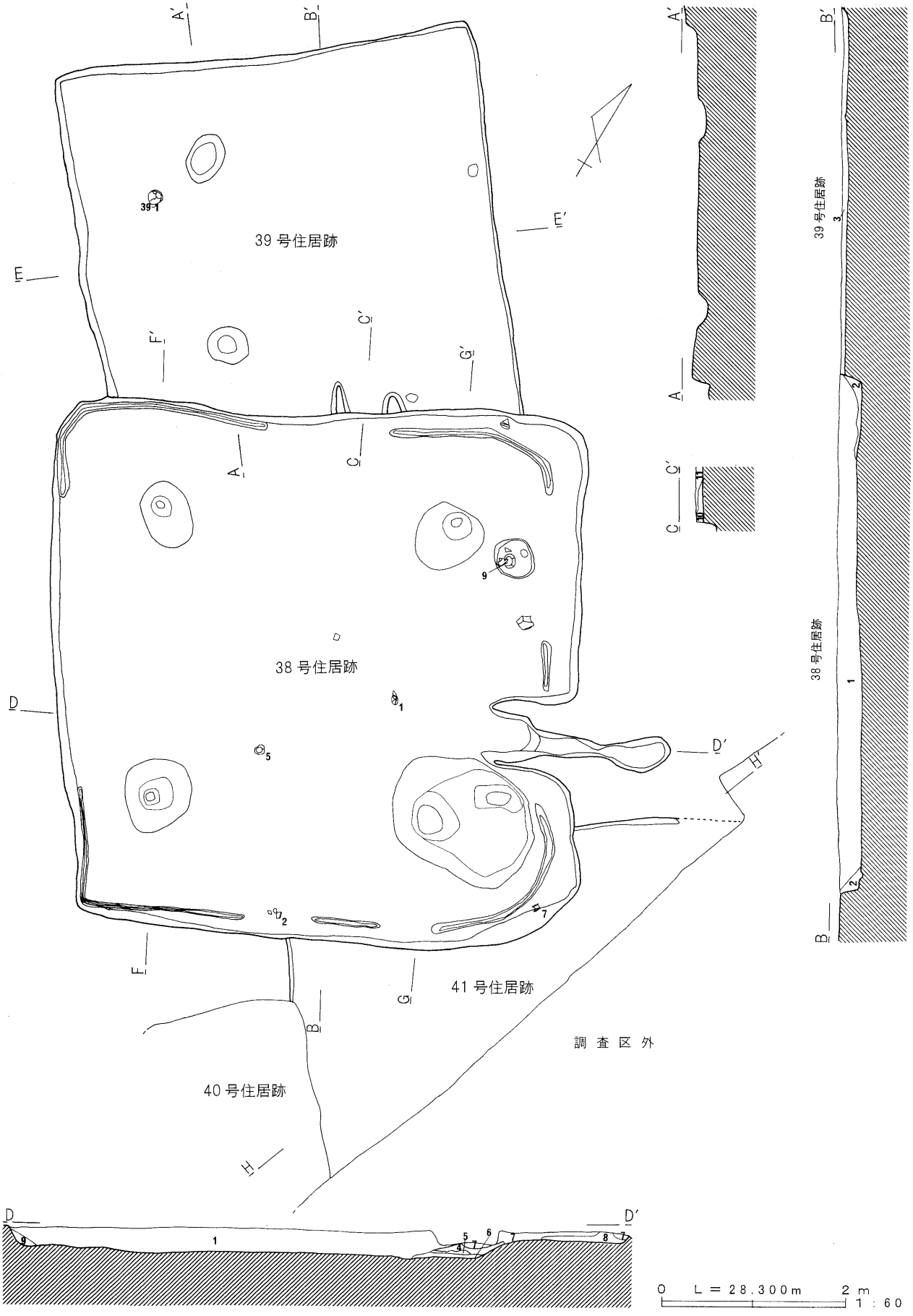
出土遺物（第160図）には、土師器杯（No.1・2）、盌（3）、高杯（4）、甕（5・6）等がある。2・4のみ床面直上から、その他は覆土中からの検出であった。杯は杯蓋模倣杯である。1は煤の付着がみられた。2は平底ぎみであり、二次加熱を受けている。3は体部無調整、底部にヘラ削り調整が施されている。4は模倣杯に低い脚部がつくタイプである。甕はすべて長胴甕である。

41号住居跡　AD・AE－20グリッドに位置する。大半が調査区域外にあり、北西部は38号住居跡、南

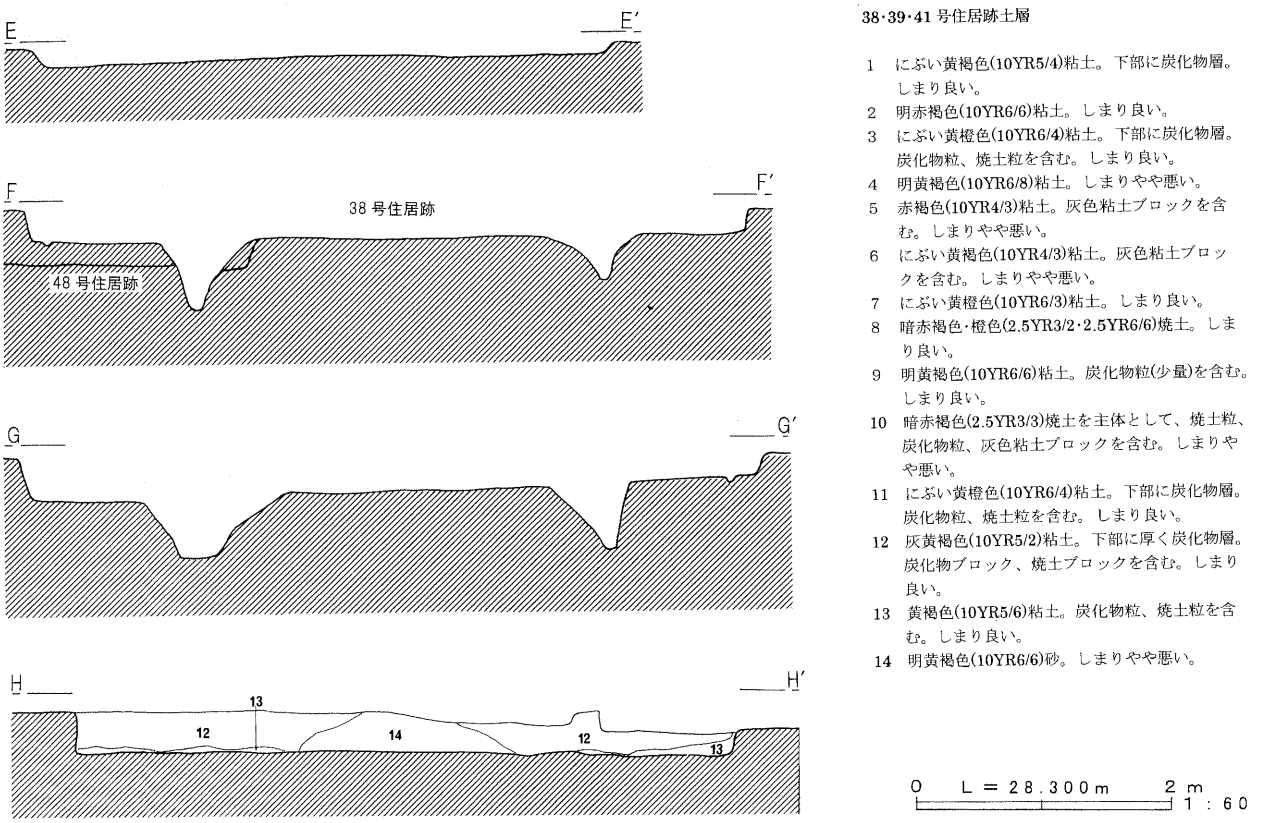
（第155図）　西壁は40号住居跡に切られている。

（第156図）　規模・平面形等は不明である。南北軸方向はN－33°－Eを指す。確認面からの深さは33cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系の粘土三層（12～14層）からなり、上層（12層）は厚く堆積しており、下部には炭化物層がみられた。やや不規則な堆積状況をなすが、自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。



第155図　E・F区38・39・41号住居跡(1)



第156図　E・F区38・39・41号住居跡(2)

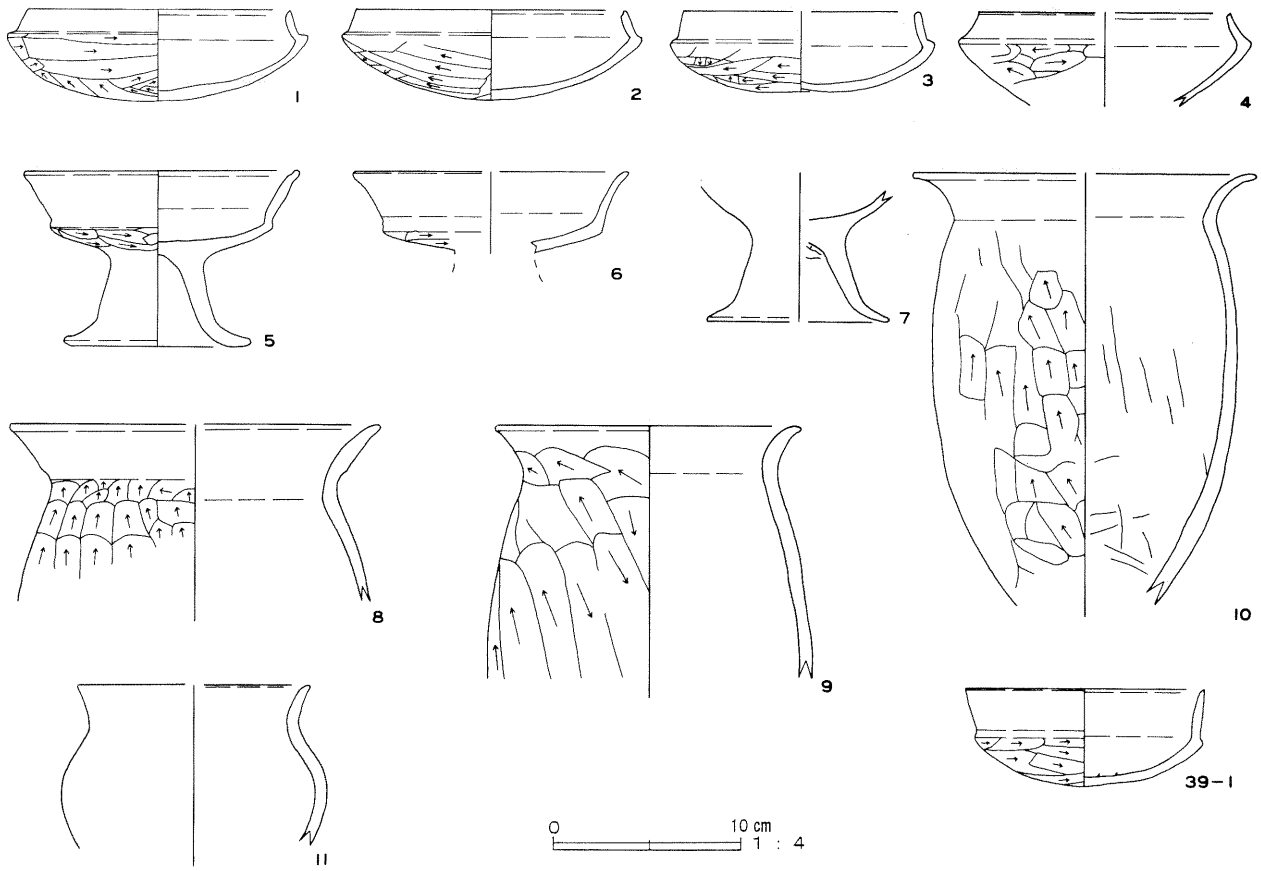
遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはなかった。

42号住居跡　AD－21グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

（第161図）　長軸4.25m、短軸4.05mの方形を呈する。主軸方向はS－52°－Wを指す。確認面からの深さは45cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系の粘土（1・2層）が主体である。堆積状況から自然堆積と考えられる。壁溝は北西隅、北東隅と南東辺の中央にみられ、いずれも壁からやや離れて巡っている。幅8～16cm、床面からの深さ4cm程を測る。柱穴は2つ確認されたが、南東側に対になるものはみられなかった。径60cm前後、床面からの深さは56～60cmを測る。

カマドは南西壁の中央からやや南東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は42cm、燃焼部は33cmを測り、煙道部は30cm前後でほぼ一定となっている。焚口部から燃焼部はほぼ平坦である。燃焼部と煙道部の境には段があり、高低差は14cmを測る。燃焼部には土師器高杯（No.3）が伏せた状態で検出された。煙道部はほぼ平坦であり、先端で直角に立ち上がる。壁外へは1.44m出ている。覆土に天井部崩落土等はみられず、住居跡覆土の下から被熱した粘土層（3・5層）等が検出された。3層下部には灰層がみられた。

出土遺物（第161図）には、土師器杯（No.1・2）、高杯（3）、甕（4・5）、壺（6）、砥石（7）等がある。主にカマド及び北東部寄りの床面直上から検出された。1・2は模



第157図　E・F区38・39号住居跡出土遺物

第72表　E・F区38号住居跡出土遺物観察表　(第157図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	13.9	4.8	-	③②①④	②	にぶい橙	2/3	外面煤付着。
2	土師器杯	14.2	4.7	-	③①④	②	橙	口縁部一部欠	
3	土師器杯	(12.6)	4.3	-	①④③⑥	②	にぶい赤褐	口縁部2/3欠	内外面煤付着。
4	土師器杯	(14.2)	-	-	①④⑥	②	黒褐	1/4	
5	土師器高杯	14.6	9.3	9.9	③①⑥④	②	橙	5/6	外面煤付着。
6	土師器高杯	(14.7)	-	-	③①④	②	橙	杯部のみ	
7	土師器高杯	-	-	(9.6)	①④②⑥③	②	橙	脚部のみ	
8	土師器甕	(19.6)	-	-	⑥④①③②	②	橙	上位1/4	
9	土師器甕	15.9	-	-	⑥②①③④	②	明赤褐	上半のみ	
10	土師器甕	(18.2)	-	-	⑥③①④	②	にぶい橙	1/3	
11	土師器甕	(12.2)	-	-	⑥①④②	②	にぶい赤褐	上位1/2	磨滅。

第73表　E・F区39号住居跡出土遺物観察表　(第157図)

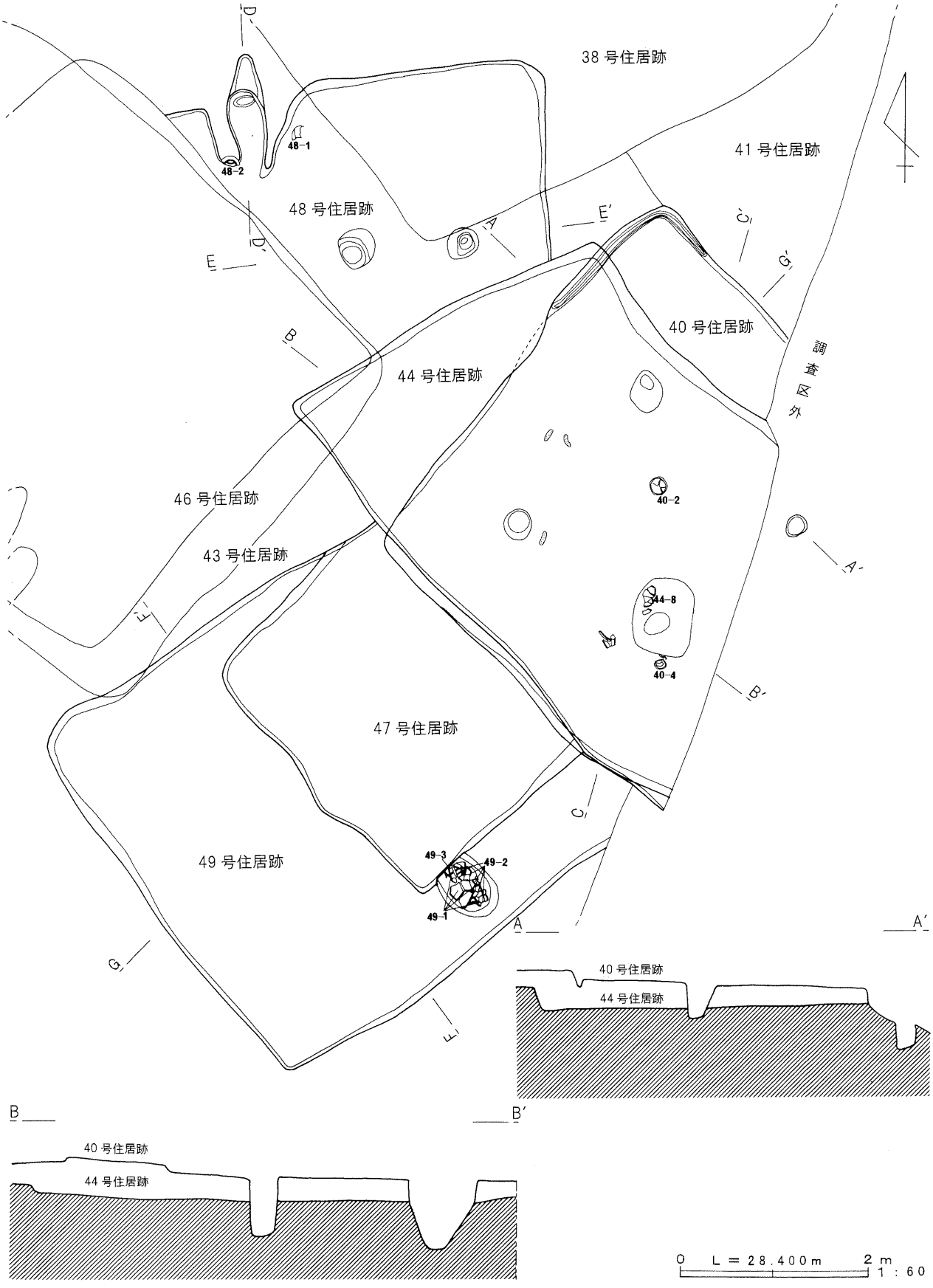
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	12.7	5.1	-	③⑥①④	②	橙	完形	内面煤付着。

倣杯、3は模倣杯に脚部のつくタイプである。甕はいずれも丸胴甕と思われる。4の外面下部には黒斑がみられた。6は口縁部形態から壺とした。7は川原石を使用している。

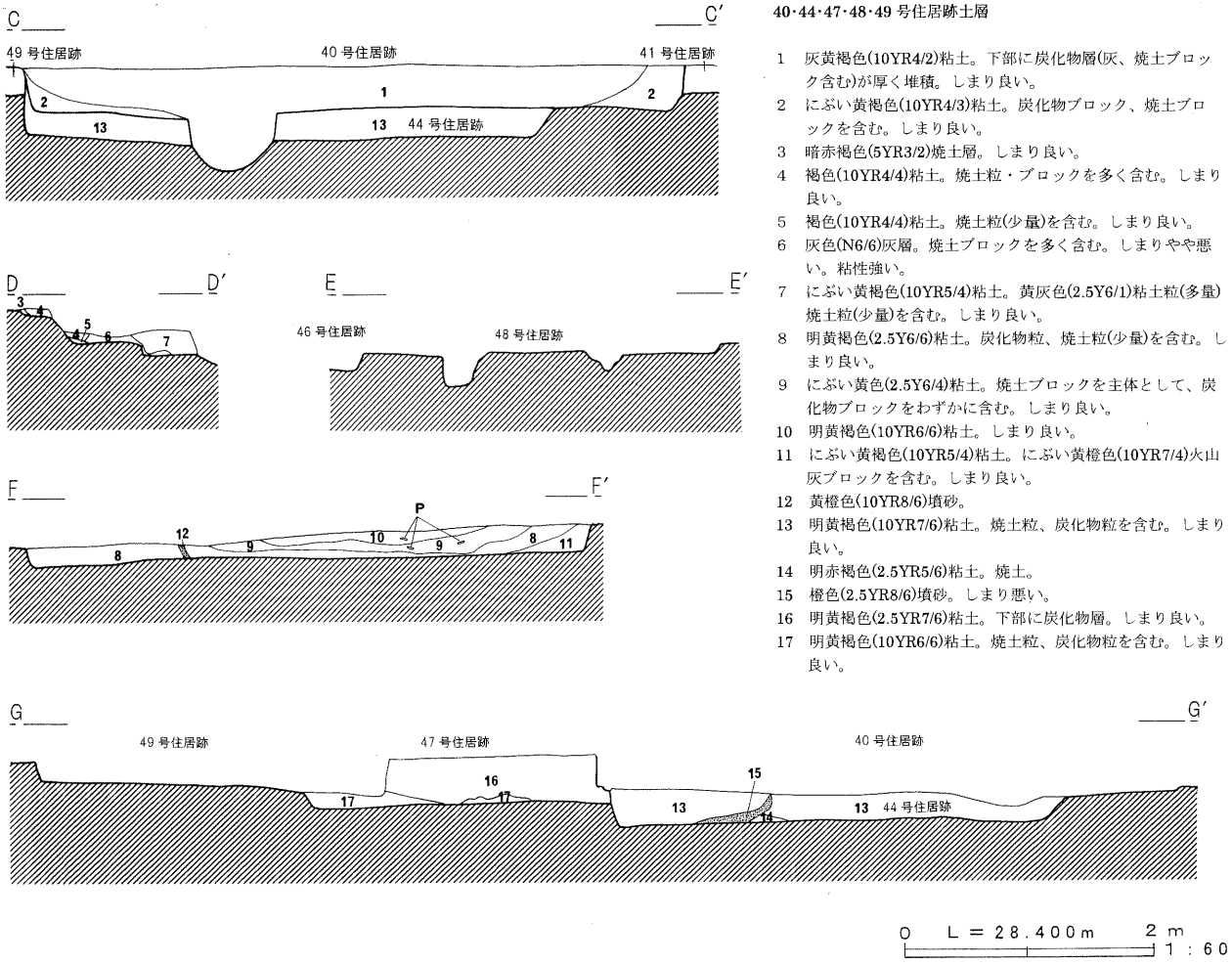
43号住居跡　(第162図)

AE－20･21グリッドに位置する。複数の同時期の住居跡と重複関係にあるが、本住居跡が最も新しい。北東部で44・48号住居跡、南西部で45号住居跡、南東部で49号住居跡を切り、さらにほぼ同軸方向を向く46号住居跡の大半を削平している。

長軸5.36m、短軸5.09mの方形を呈する。主軸方向はS－40°－Wを指す。確認面からの



第158図　E・F区40・44・47・48・49号住居跡(1)



40・44・47・48・49 号住居跡土層

1 灰黄褐色(10YR4/2)粘土。下部に炭化物層(灰、焼土ブロック含む)が厚く堆積。しまり良い。
2 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土。炭化物ブロック、焼土ブロックを含む。しまり良い。
3 暗赤褐色(5YR3/2)焼土層。しまり良い。
4 褐色(10YR4/4)粘土。焼土粒・ブロックを多く含む。しまり良い。
5 褐色(10YR4/4)粘土。焼土粒(少量)を含む。しまり良い。
6 灰色(N6/6)灰層。焼土ブロックを多く含む。しまりやや悪い。粘性強い。
7 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)焼土粒(少量)を含む。しまり良い。
8 明黄褐色(2.5Y6/6)粘土。炭化物粒、焼土粒(少量)を含む。しまり良い。
9 にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。焼土ブロックを主体として、炭化物ブロックをわずかに含む。しまり良い。
10 明黄褐色(10YR6/6)粘土。しまり良い。
11 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土。にぶい黄橙色(10YR7/4)火山灰ブロックを含む。しまり良い。
12 黄橙色(10YR8/6)墳砂。
13 明黄褐色(10YR7/6)粘土。焼土粒、炭化物粒を含む。しまり良い。
14 明赤褐色(2.5YR5/6)粘土。焼土。
15 橙色(2.5YR8/6)墳砂。しまり悪い。
16 明黄褐色(2.5YR7/6)粘土。下部に炭化物層。しまり良い。
17 明黄褐色(10YR6/6)粘土。焼土粒、炭化物粒を含む。しまり良い。

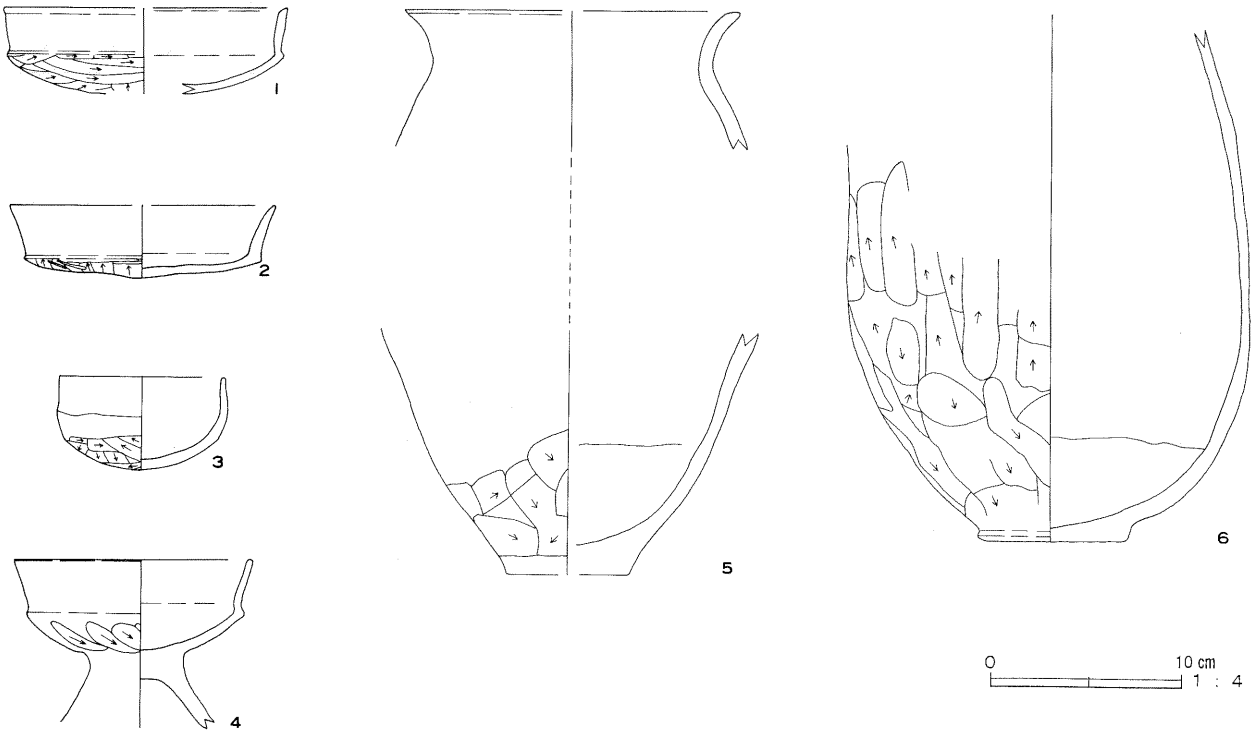
第159図　E・F区40・44・47・48・49号住居跡(2)

深さは36cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系の粘土（6・10層）ないし褐色シルト（7層）を主体とし、中層から床面直上にかけて炭化物層（9層）がみられた。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。壁溝はみられない。柱穴は2つ検出されたが、南東側に対応する柱穴はみられなかった。

カマドは南西壁中央からやや南東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は43cm、燃焼部は39cm、煙道部先端は27cmを測り、徐々に狭まる。煙道部は短く、壁外へは僅かに26cm出る。焚口部から煙道部はほぼ平坦であり、先端で緩やかに立ち上がる。燃焼部には土製支脚（No.11）が確認された。覆土に天井部崩落土はみられず、焼土を含む層（4・5層）が検出された。

カマド南東脇には、径60cmの円形で、床面からの深さ47cmの貯蔵穴が検出された。

出土遺物（第164図）には土師器杯（No.1～8）、甕（9）、甑（10）、土製支脚（11）等がある。11はカマド、1・5・7～9は床面直上からの検出であった。その他は覆土中からの検出である。杯はすべて模倣杯であり、器高が低いものが多い。1のみ杯身模倣杯であり、その他は杯蓋模倣杯である。煤が付着しているものが多い。9は丸胴甕と思われる。



第160図　E・F区40号住居跡出土遺物

第74表　E・F区40号住居跡出土遺物観察表　(第160図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(15.0)	-	-	①③④	②	明赤褐	1/2	内外面煤付着。
2	土師器杯	(14.0)	3.8	-	①④③⑥	①	にぶい赤褐	一部欠	二次加熱。
3	土師器盌	8.8	4.8	-	③①④	①	明赤褐	1/2	
4	土師器高杯	12.6	-	-	③①④	②	橙	4/5	
5	土師器甕	(18.8)	-	(6.4)	⑥①④	②	明赤褐	1/4中位欠	
6	土師器甕	-	-	7.6	⑥③①④	②	にぶい黄橙	下半のみ	

10は把手のつくタイプであるが、把手部分を欠く。11は上面に木葉痕を残す。

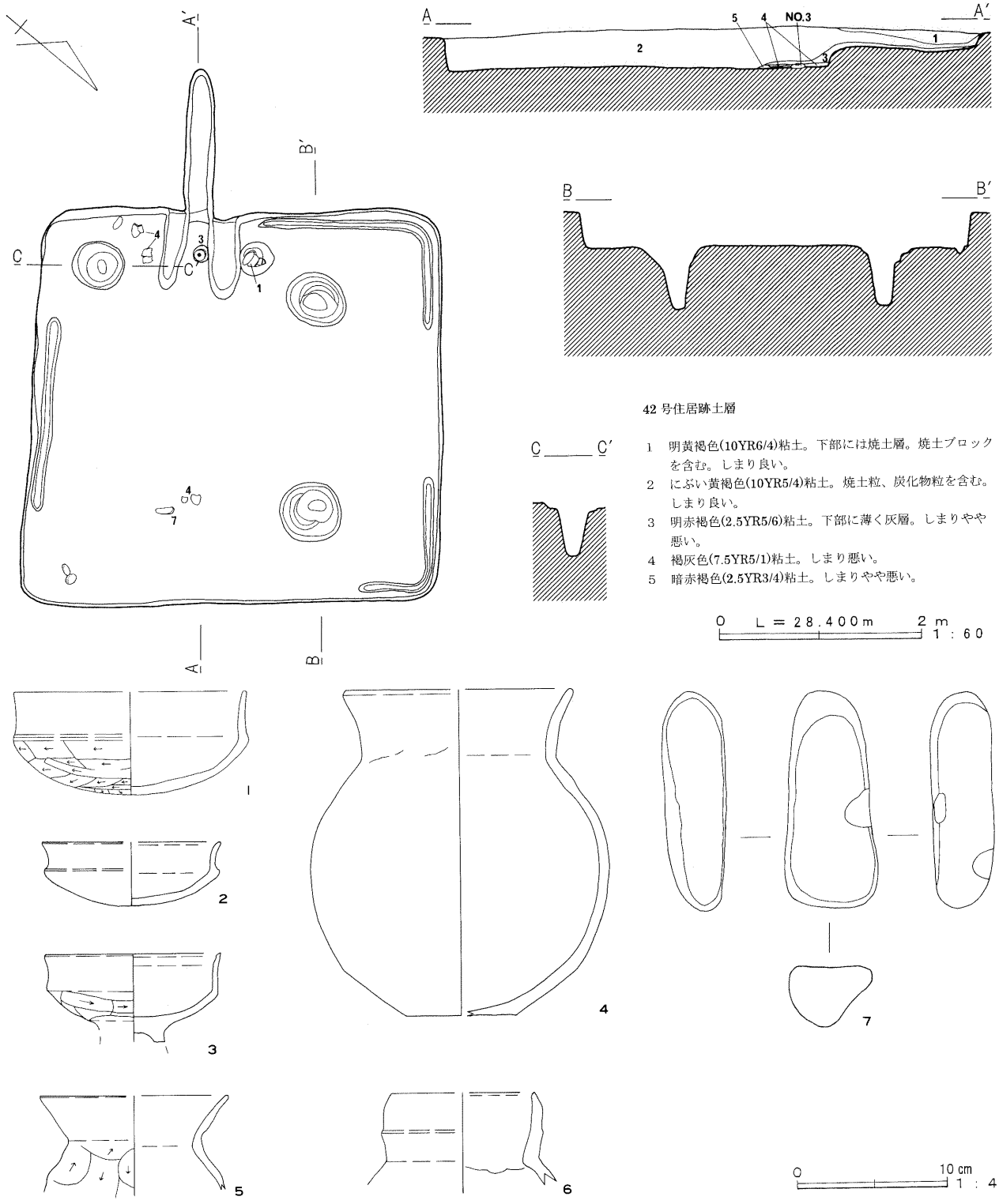
44号住居跡
(第158図)
(第159図)

AE－20グリッドに位置する。東側が調査区域外にあり、複数の住居跡と重複関係にある。上部を40号住居跡に削平され、南西隅では43号住居跡に切られている。また、同じく南西隅で46号住居跡、南西部では47・49号住居跡を切っている。

長軸は不明、短軸は3.78mを測る。南北軸方向は、N－49°－Eを指す。平面形は長方形になると思われる。確認面からの深さは56cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は明黄褐色粘土（13層）を主体とし、床面直上の一部に焼土がみられた。

壁溝、柱穴、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

出土遺物（第165図）には、土師器杯（No.1～6）、高杯（7）、甕（8）、甑（10）、須恵器壺（9）等がある。8が床面上から、その他は覆土中からの検出である。杯はすべて身の深い模倣杯である。1・2は大型、3～6は小型のものである。そのとんどに煤の付着がみられ、3・5は外面に黒斑を有する。7は口縁部が大きく開き、脚部はやや高く、裾は大きく広がっている。8は長胴甕である。9は口縁部のみの検出である。産地は不明である。10は把手を持たないタイプである。



第161図　E・F区42号住居跡・出土遺物

45号住居跡（第162図）　AE－21グリッドに位置する。北東部で46号住居跡を切り，43号住居跡に切られている。長軸4.55m、短軸は不明であるが、長方形を呈するものと推測される。主軸方向はS－36°－Wを指す。確認面からの深さは34cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は灰黄褐色粘土の単一層（1層）で、焼土・炭化物と火山灰らしき混入物

第75表　E・F区42号住居跡出土遺物観察表　(第161図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(15.6)	6.9	-	③①④⑥	②	明赤褐	口縁部2/3欠	
2	土師器杯	(11.9)	4.3	-	③①②⑥④	②	橙	3/4	磨滅。
3	土師器高杯	11.8	-	-	③①④⑥	②	明赤褐	杯部のみ	
4	土師器甕	(15.4)	21.9	(7.4)	③①⑥	②	橙	2/5	外面下部黒斑有。磨滅。
5	土師器甕	(12.6)	-	-	②①⑥④	②	橙	上位1/5	
6	土師器壺	(9.4)	-	-	③①④	②	明赤褐	上位1/4	
7	砥石	長さ　14.7　幅　5.5　厚さ　4.1						完形	側面使用。花崗閃緑岩製。

もみられた。自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴はみられない。

カマドは南西壁のほぼ中央に設けられている。袖部は確認できなかった。燃焼部と煙道部の境の幅は39cm、煙道部先端は23cmを測り、徐々に狭まる。焚口部から燃焼部は、床面と同レベルでほぼ平坦であった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられ、高低差は19cmを測る。煙道部はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であり、先端に向かって緩やかに立ち上がる。壁外へは1.41mほど出ている。覆土に天井部崩落土等はみられず、焼土層（16層）、焼土を含む層（17・19・20層）の他に、煙道部先端の最下層に灰層（18層）がみられた。

カマド北西脇には径51×29cmの楕円形を呈する貯蔵穴が確認された。

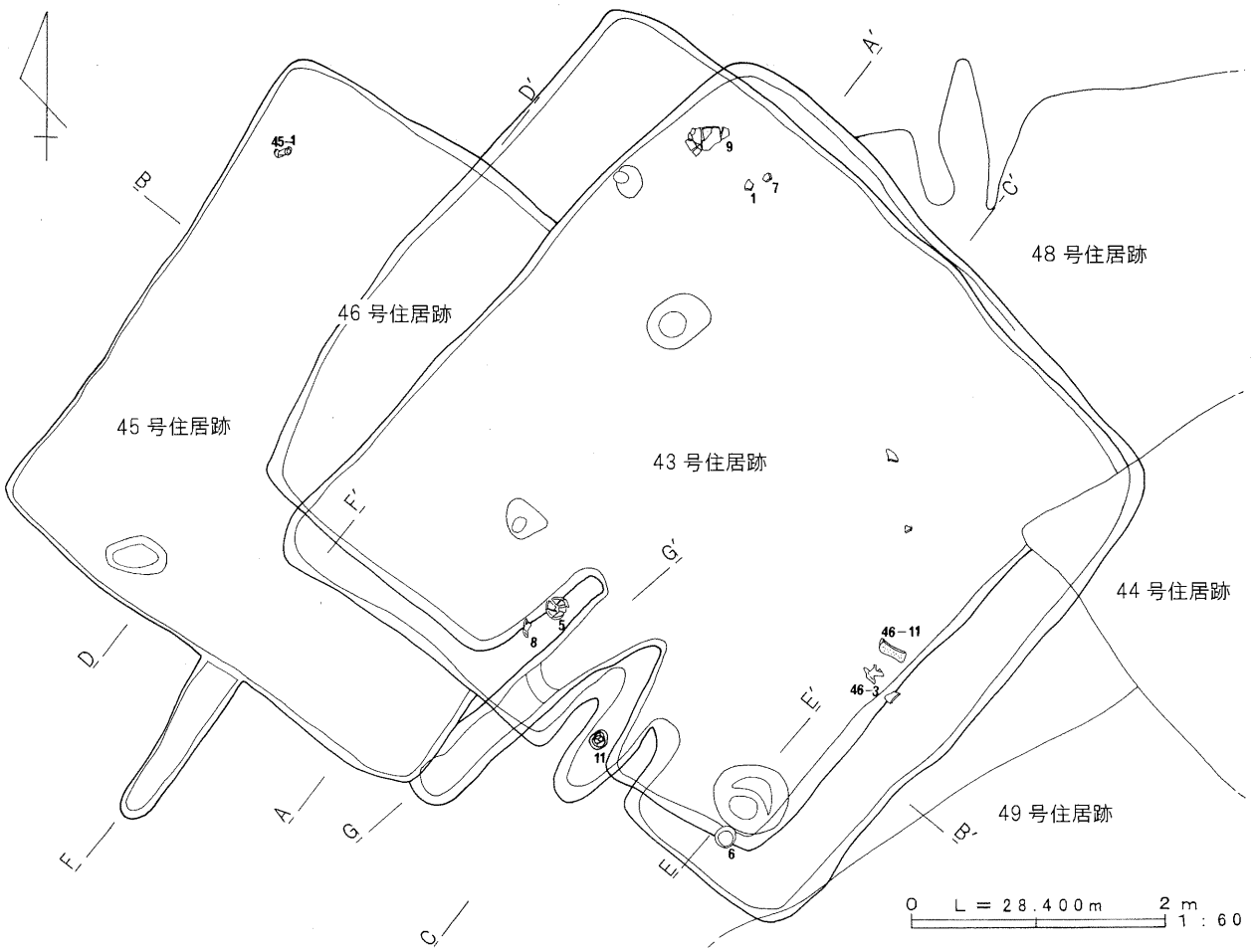
出土遺物（第166図）は、土師器杯（No.1）、盌（2）、高杯（3）、甕（4）等がある。1のみ北西隅の床面直上から検出され、他は覆土中からの検出である。1は模倣杯であるが、口縁部が屈曲しており、盌に近い器形である。2は体部が無調整であり、底部はヘラ削りが施されている。3は接合部のみの検出であるが、脚部が高い。4は長胴甕である。摩滅が顕著であることから、調整は図示不可能であった。

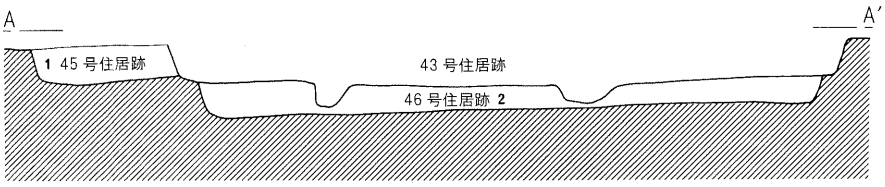
46号住居跡
(第162図)
(第163図)

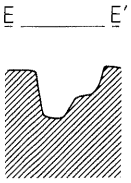
AE－20・21グリッドに位置する。本住居跡の上部を43～45号住居跡に削平されているが、北東部では48号住居跡を切っている。

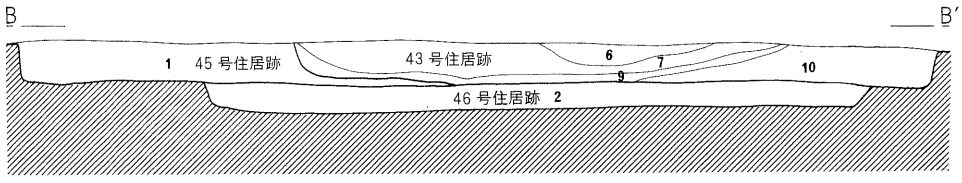
長軸5.38m、短軸4.9mの長方形を呈する。主軸方向はS－39°－Wを指し、43号住居跡とほぼ同一軸上であった。確認面からの深さは58cmを測り、床面はやや南東に傾いているが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色粘土の単一層（2層）である。43号住居跡を構築するため、人為的に埋め戻された可能性がある。壁溝はみられない。ピットは北西部で1つ検出された。柱穴とは断定できない。

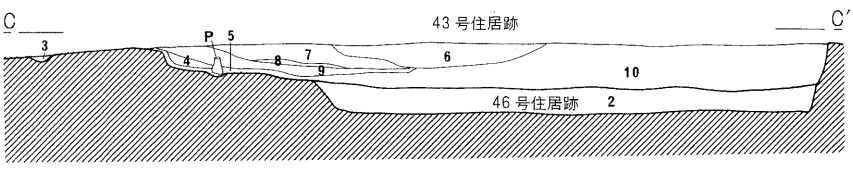
カマドは南西壁のほぼ中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は56cm、燃焼部から煙道部は40cm前後を測り、ほぼ一定となっている。焚口部から燃焼部は、床面とほぼ同一レベルで平坦であった。燃焼部と煙道部の境には段が付き、14cmほどの高低差がある。煙道部は凹凸がみられるが、ほぼ平坦であり、先端で直角に立ち上がる。先端の煙出しには補強材として土師器鉢（No.9）が据えられていた。壁外へは1.18mほど張り出している。覆土に天井部崩落土等はみられない。焚口部から燃焼部には、焼土ブロック層（11層）、灰層（12層）が確認された。煙道部では先端に天井部被熱層が確認され、被熱層と奥壁間には、灰層（15層）、焼土層（14層）等がみられ、最下層には燃焼部と同じ灰層（12層）が確認できた。

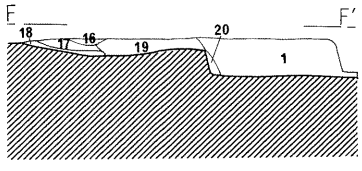


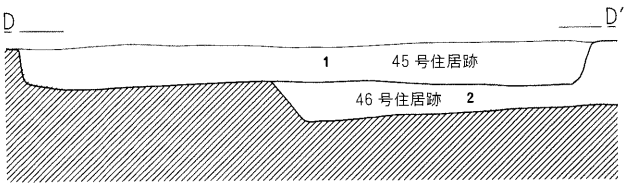


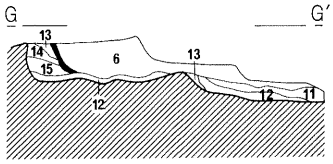








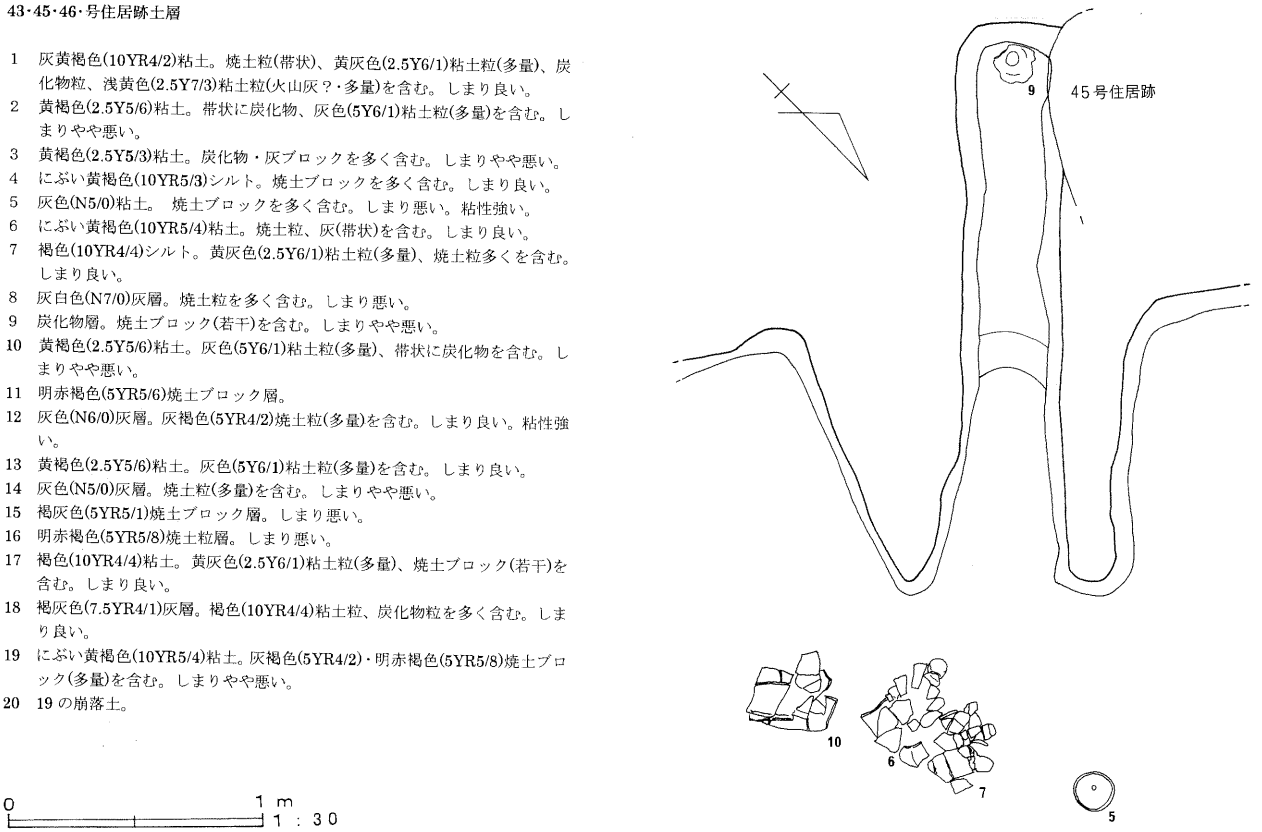




第162図　E・F区43・45・46号住居跡

43・45・46・号住居跡土層

1　灰黄褐色(10YR4/2)粘土。焼土粒(帯状)、黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、炭化物粒、浅黄色(2.5Y7/3)粘土粒(火山灰？・多量)を含む。しまり良い。
2　黄褐色(2.5Y5/6)粘土。帯状に炭化物、灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまりやや悪い。
3　黄褐色(2.5Y5/3)粘土。炭化物・灰ブロックを多く含む。しまりやや悪い。
4　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。焼土ブロックを多く含む。しまり良い。
5　灰色(N5/0)粘土。　焼土ブロックを多く含む。しまり悪い。粘性強い。
6　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土。焼土粒、灰(帯状)を含む。しまり良い。
7　褐色(10YR4/4)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒多くを含む。しまり良い。
8　灰白色(N7/0)灰層。焼土粒を多く含む。しまり悪い。
9　炭化物層。焼土ブロック(若干)を含む。しまりやや悪い。
10　黄褐色(2.5Y5/6)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、帯状に炭化物を含む。しまりやや悪い。
11　明赤褐色(5YR5/6)焼土ブロック層。
12　灰色(N6/0)灰層。灰褐色(5YR4/2)焼土粒(多量)を含む。しまり良い。粘性強い。
13　黄褐色(2.5Y5/6)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。
14　灰色(N5/0)灰層。焼土粒(多量)を含む。しまりやや悪い。
15　褐灰色(5YR5/1)焼土ブロック層。しまり悪い。
16　明赤褐色(5YR5/8)焼土粒層。しまり悪い。
17　褐色(10YR4/4)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土ブロック(若干)を含む。しまり良い。
18　褐灰色(7.5YR4/1)灰層。褐色(10YR4/4)粘土粒、炭化物粒を多く含む。しまり良い。
19　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土。灰褐色(5YR4/2)・明赤褐色(5YR5/8)焼土ブロック(多量)を含む。しまりやや悪い。
20　19の崩落土。



第163図　E・F区46号住居跡カマド周辺遺物出土状況

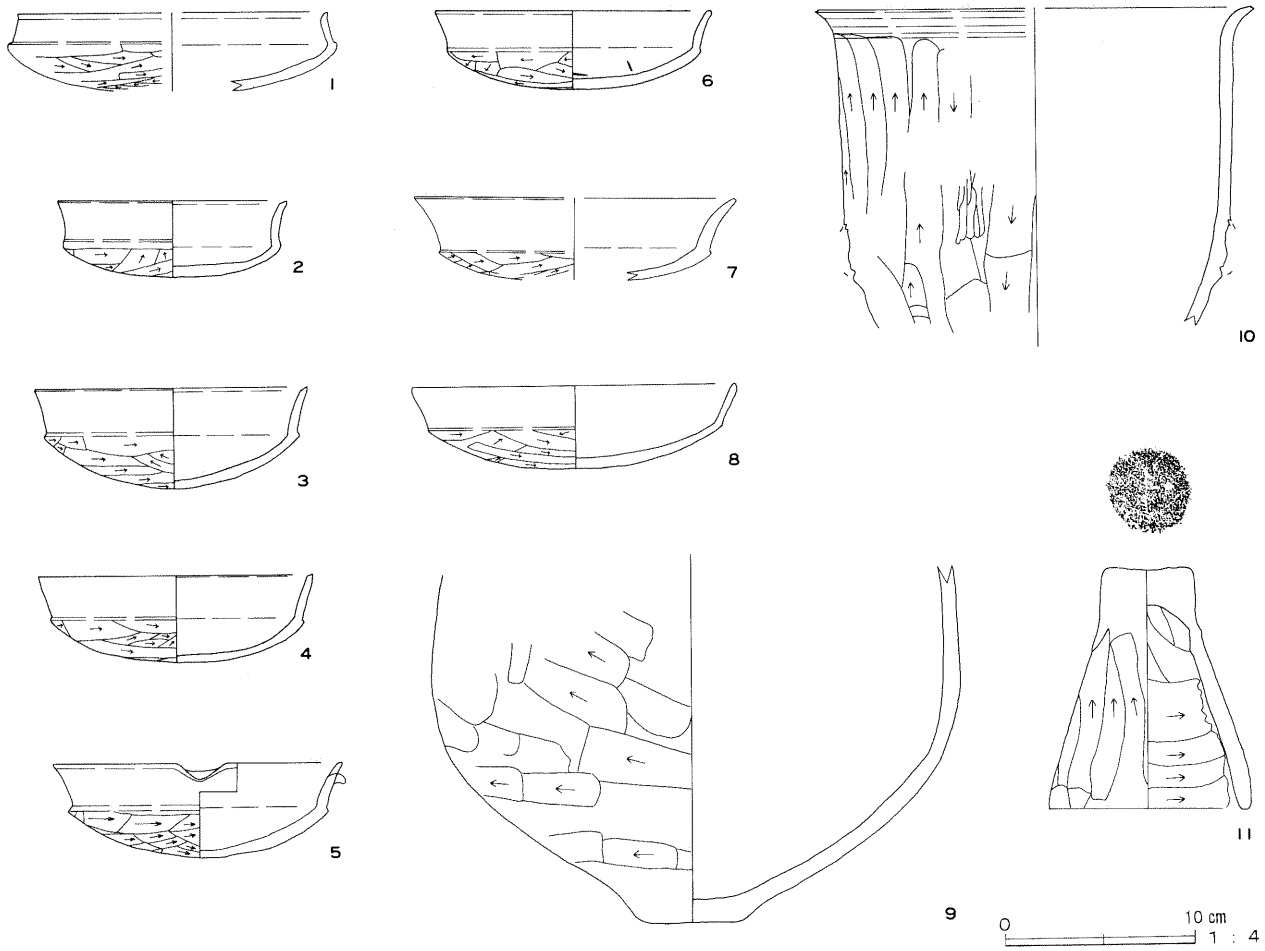
出土遺物（第167図）には、土師器蓋（№1）、杯（2）、高杯（3～5）、甕（6～8）、甑（9・10）、砥石（11）等がある。9はカマド煙道部先端、5～7・10はカマド前、3・11は南東壁沿いの床面から検出された。その他は覆土中からの検出であった。1は蓋であり、天井部が円柱状を呈する。2は模倣杯である。高杯は、いずれも口縁部が大きく外反し、脚部が高く、裾が大きく広がるタイプである。甕は長胴甕（6・7）と小型のもの（8）がある。8は底部に木葉痕を残す。9は長胴甕からの転用品と考えられる。10は把手を持たない。内外面に黒斑を有する。11は三面を使用している。完形品。

47号住居跡
（第158図）
（第159図）

AE－20グリッドに位置する。複数の住居跡と重複関係にある。北東部で40・44住住居跡に切られ、本住居跡と同箇所にある49号住居跡を切って構築している。

規模・平面形等は不明であるが、南東壁は3.23mを測る。南北軸方向は、N－48°－Eを指す。確認面からの深さは41cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は、明黄褐色粘土2層（16・17層）からなる。上層（16層）は厚く堆積しており、下部には炭化物層がみられた。自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。



第164図　E・F区43号住居跡出土遺物

第76表　E・F区43号住居跡出土遺物観察表　(第164図)

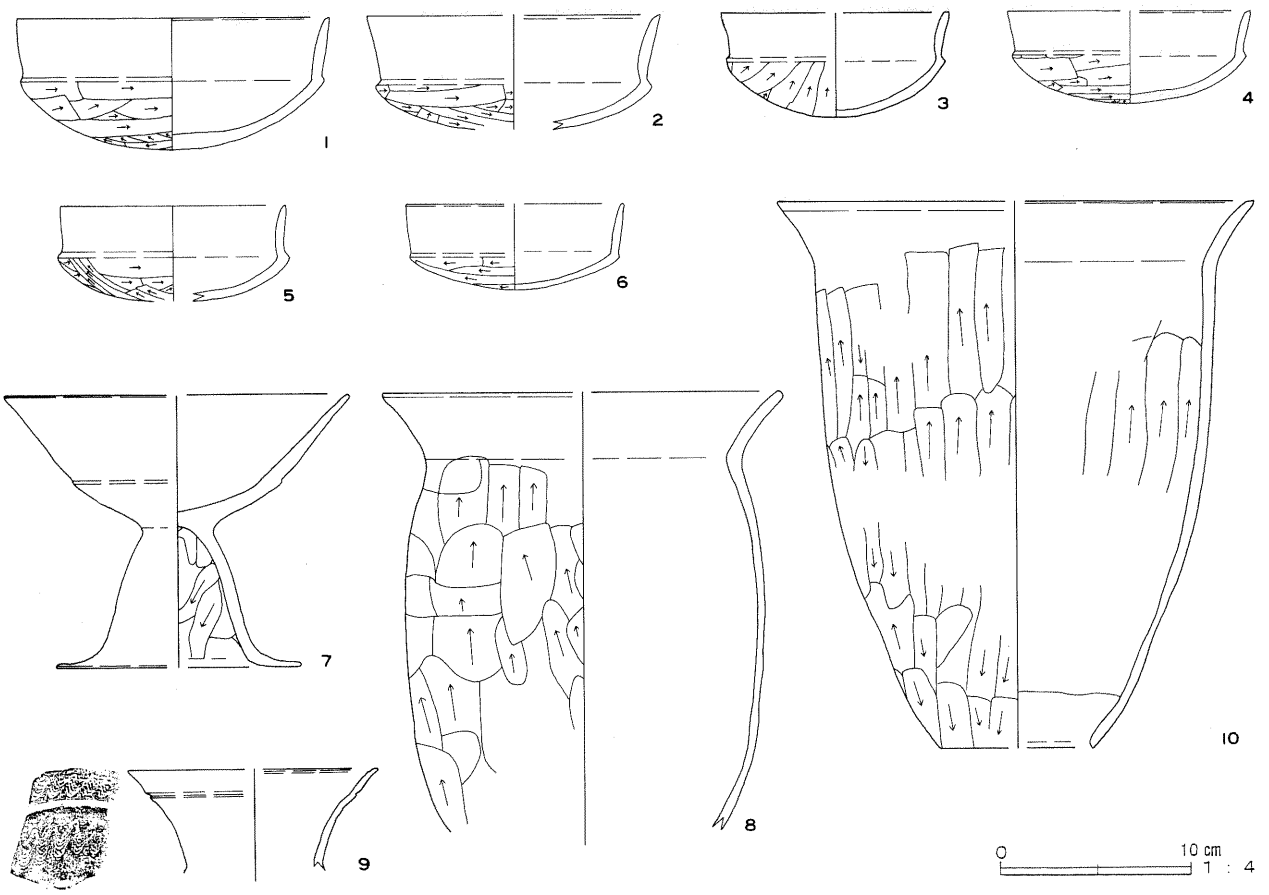
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(16.4)	-	-	①③④②	②	橙	1/5	内外面煤付着。
2	土師器杯	12.0	4.1	-	③①④	②	橙	3/4	外面黒斑有。
3	土師器杯	14.2	5.3	-	③①④	②	明赤褐	3/4	
4	土師器杯	14.4	4.6	-	③①④	②	明赤褐	口縁部一部欠	内外面煤付着。
5	土師器杯	15.3	5.0	-	③①④⑥	②	明赤褐	口縁部1/2欠	内外面煤付着。片口。
6	土師器杯	14.5	4.2	-	③①④	②	橙	完形	内外面煤付着。
7	土師器杯	(17.0)	-	-	⑥③①④	②	にぶい赤褐	1/3	
8	土師器杯	17.0	4.4	-	③①④⑥	②	明赤褐	3/4	内外面煤付着。
9	土師器甕	-	-	5.9	⑥①④②③	②	灰黄褐	下位3/4	
10	土師器甑	(22.2)	-	-	②③①⑥④	②	明赤褐	上位1/3	
11	土製支脚	上部径　4.3　器高　12.9　底径　10.5						完形	

遺物は、土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはなかった。

48号住居跡　AE－20・21グリッドに位置する。北東部で38号住居跡、南西部で43・46号住居跡、南東部で40・44号住居跡に切られており、カマド付近が確認されているのみである。

(第158図)

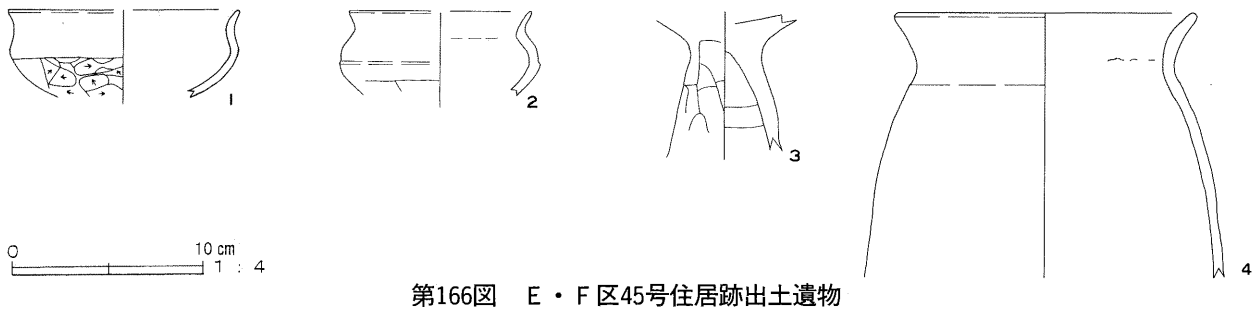
(第159図)　規模・平面形は不明である。主軸方向はN－9°－Wを指す。確認面からの深さは38cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は、黄褐色系の粘土を主体とした自然堆積層であった。床面上から2つのピットが確認された。西側のピットは柱穴と思われるが、東側のも



第165図　E・F区44号住居跡出土遺物

第77表　E・F区44号住居跡出土遺物観察表　（第165図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	16.5	6.9	-	③④①⑥	②	橙	2/3	内外面煤付着。
2	土師器杯	(15.4)	-	-	③④①	②	橙	1/3	内外面煤付着。
3	土師器杯	(12.0)	5.6	-	③④①②	②	橙	1/2	外面黒斑有。内外面煤付着。
4	土師器杯	(12.8)	4.9	-	③①④	②	橙	1/3	外面煤付着。
5	土師器杯	12.0	-	-	③①④	②	にぶい橙	2/3	外面黒斑有。
6	土師器杯	(11.6)	4.5	-	③①④②	②	橙	1/4	内外面煤付着。
7	土師器高杯	(18.2)	14.5	(13.0)	③⑥①	②	橙	4/7	磨滅。
8	土師器甕	(21.2)	-	-	⑥③①	②	浅黄橙	上半1/4	
9	須恵器壺	(13.2)	-	-	④②①③	③	浅黄橙	口縁部1/4	
10	土師器甑	(25.2)	(29.0)	(8.1)	①④③②	②	橙	1/3	



第166図　E・F区45号住居跡出土遺物

のは不明である。

壁溝、貯蔵穴は検出されなかった。

カマドは北壁に設けられている。袖部は地山の掘り残しである。西側袖部には土師器甕

第78表　E・F区45号住居跡出土遺物観察表　（第166図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(12.1)	-	-	①④②③	②	橙	1/5	
2	土師器盤	(9.5)	-	-	③①②⑥	②	橙	1/4	
3	土師器高杯	-	-	-	⑥①④②③	②	橙	接合部のみ	
4	土師器甕	16.0	-	-	③⑥④①	②	橙	上位のみ	磨滅。

(No.2)が補強材として使用されていた。内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は28cm、燃焼部は43cm、煙道部先端は18cmを測り、菱形状を呈する。焚口部から燃焼部は、床面とほぼ同レベルで平坦である。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は8cmを測る。煙道部中途にも段が設けられ、先端で緩やかに立ち上がる。壁外へは47mほど出ている。覆土に天井部崩落土等はみられず、焼土等を含む層（4・7層）の下から、灰層（6層）がみられた。煙道部先端には、被熱して赤色化した焼土層（3層）がみられた。

出土遺物（第168図）は、土師器杯（No.1）、甕（2）の2点のみであった。1はカマド東脇の床面から検出された。身の深い模倣杯であり、内外面に煤の付着がみられた。2はカマド補強材として使用された長胴甕の口縁部である。

49号住居跡
（第158図）
（第159図）

AE・AF－20・21グリッドに位置する。複数の住居跡と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。北西部は43・46号住居跡、北東部は40・44号住居跡、ほぼ真上で47号住居跡に切られている。

長軸は不明、短軸は4.38mを測り、平面形は長方形を呈するものと思われる。主軸方向はN－56°－Eを指す。確認面からの深さは30cmを測り、床面はやや凹凸がみられ、北東方向にやや傾く。覆土は黄褐色系の粘土（8～12層）を主体とし、北西部最下層（11層）には火山灰がみられた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と考えられる。南東壁際に土器を多数含む貯蔵穴と思われる掘り込みがあった。北西部は47号住居跡に切られているため、詳細な規模は把握できなかったが、残存長は55cmを測る。

壁溝、柱穴、カマド等は確認されなかった。

出土遺物（第169図）には、土師器甕（No.1）、甑（2・3）等がある。すべて貯蔵穴と思われる掘り込みから検出された。1は丸胴甕である。摩滅が顕著であった。2・3は器形が異なるが、ともに把手を持たない。1・2は外面に黒斑を有する。

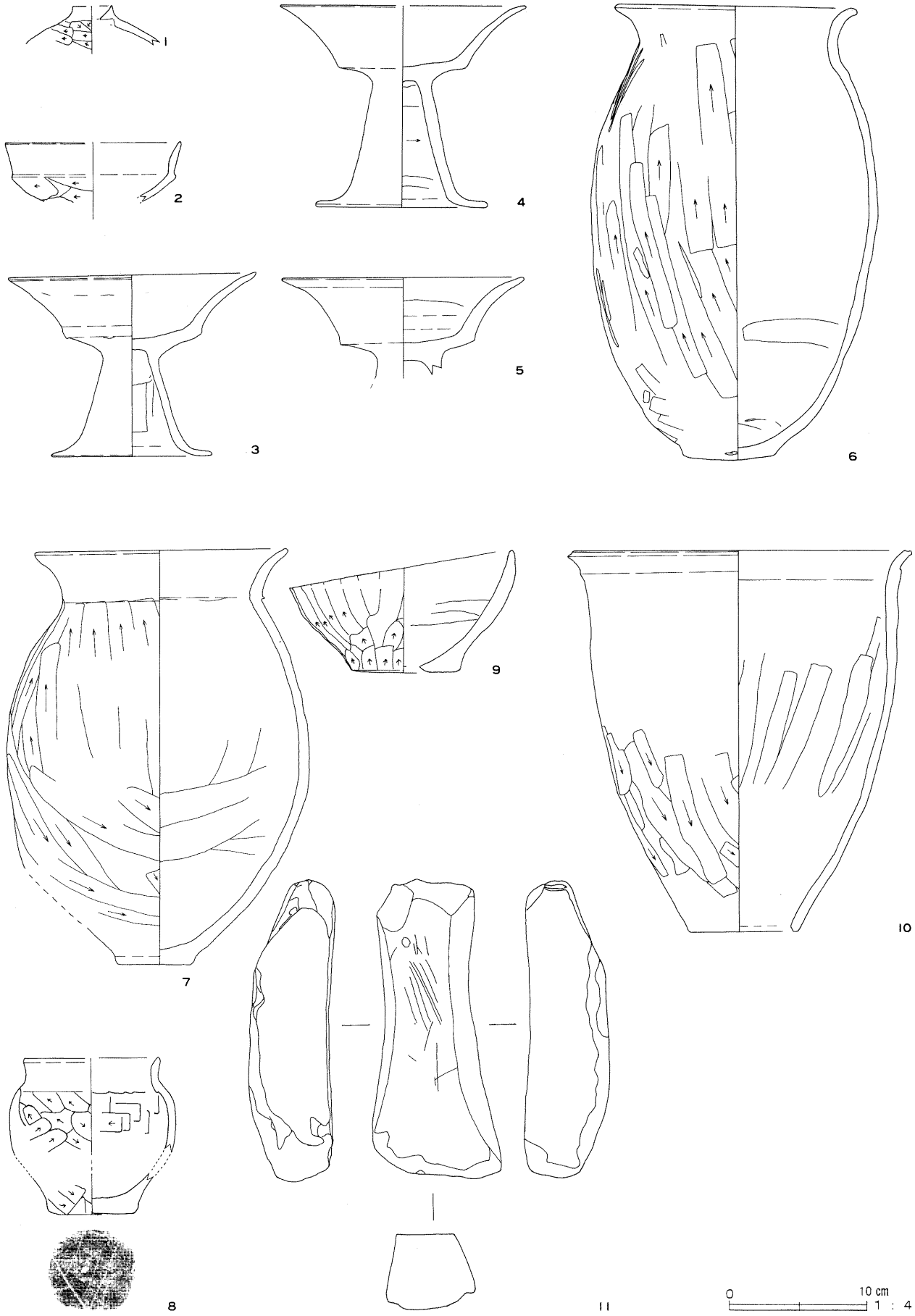
50号住居跡
（第170図）

AE・AF－21・22グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

長軸4.54m、短軸4.35mの方形を呈する。主軸方向はS－55°－Eを指す。床面は、確認面からの深さが34cmで、凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色ないしは黄橙色のシルト（1～3層）を主体とし、床面直上には炭化物層（4層）が薄く堆積していた。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。柱穴は4つ検出された。

壁溝、貯蔵穴はみられない。

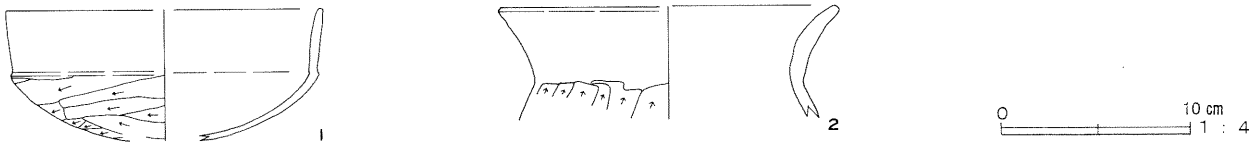
カマドは南西壁と北東壁にみられるが、土層断面や袖部の有無等から判断して、南西壁のカマドが新しい。



第167図　E・F区46号住居跡出土遺物

第79表　E・F区46号住居跡出土遺物観察表　（第167図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器蓋	-	-	-	③①④②	②	明赤褐	1/8	
2	土師器杯	(12.8)	-	-	③⑥④②①	②	橙	1/6	
3	土師器高杯	18.2	13.4	11.8	③①④	②	明赤褐	一部欠	
4	土師器高杯	(18.0)	14.8	12.6	③①④	②	橙	3/5	
5	土師器高杯	17.7	-	-	③①④	②	明赤褐	杯部のみ	
6	土師器甕	17.6	33.5	6.8	③①⑥	②	にぶい黄橙	4/5	
7	土師器甕	18.4	30.5	5.4	①⑥④	②	にぶい黄橙	1/2	
8	土師器甕	(9.8)	11.5	6.6	④①③⑥	②	にぶい赤褐	1/2	
9	土師器甑	-	-	8.0	⑥③④①②	②	にぶい赤褐	下位のみ	甕から甑に転用。
10	土師器甑	25.0	28.1	8.0	③①④⑥	②	明黄褐	一部欠	内外面黒斑有。磨滅。
11	砥石	長さ 2.2	幅 6.5	厚さ 6.1				完形	三面使用。流紋岩製。



第168図　E・F区48号住居跡出土遺物

第80表　E・F区48号住居跡出土遺物観察表　（第168図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(16.8)	-	-	③①④	②	橙	1/2	内外面煤付着。
2	土師器甕	(18.0)	-	-	④①⑥③	②	橙	口縁部1/2	

南西壁のカマドは、袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。煙道部は調査の都合上、検出されなかったが、本来はあったものと考えられる。焚口部は地山が被熱して赤色化し、燃焼部には土師器高杯（No.4・6）が重ねて伏せられていた。焚口部の幅は45cm、燃焼部は50cmを測る。焚口部から燃焼部は、ほぼ平坦であり、先端で立ち上がる。覆土は6層が天井部で、その下に被熱して赤色化した層（7層）と灰層（8層）が検出された。

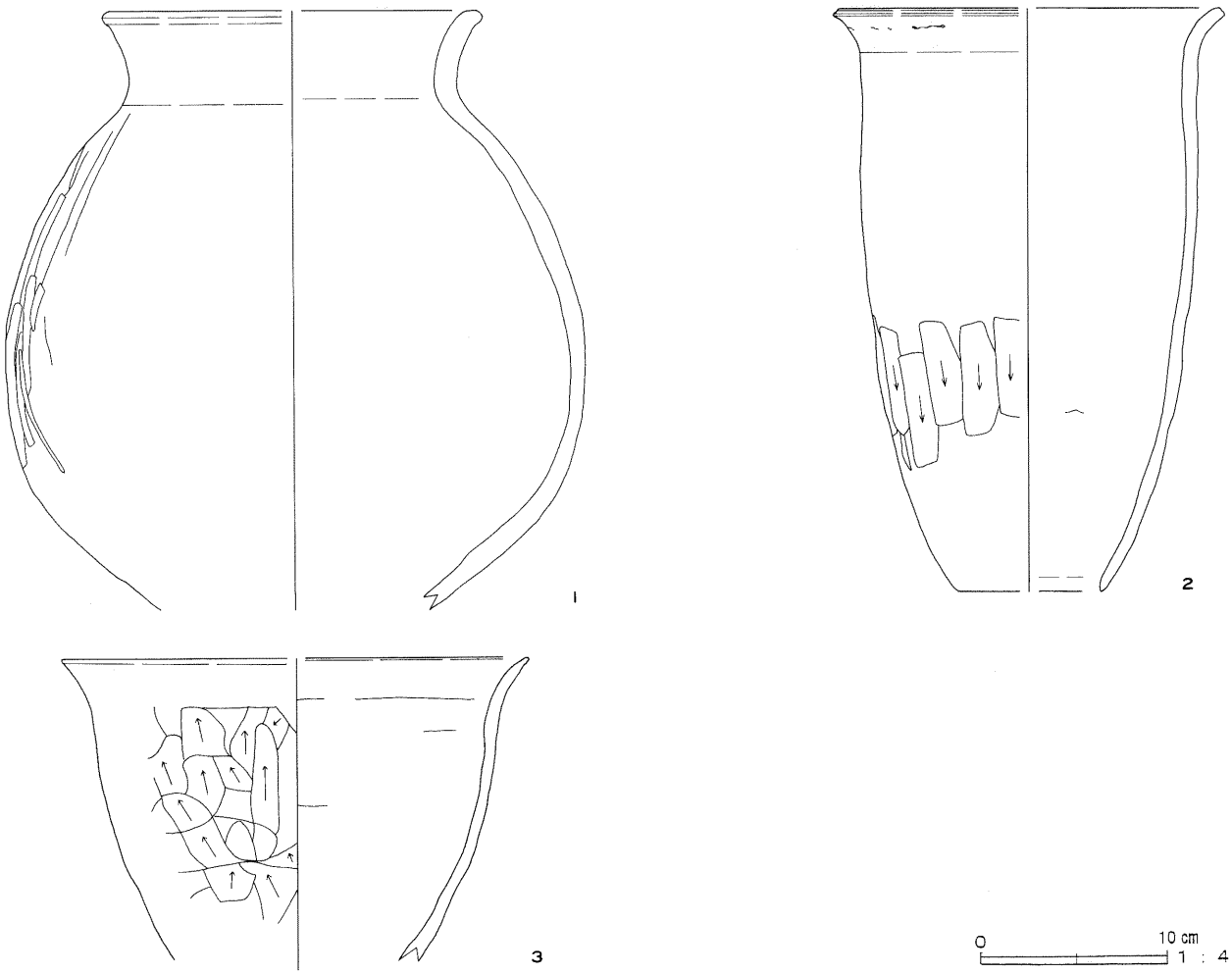
旧カマドは北東壁のほぼ中央に設けられている。煙道部のみの検出で、先端には小さなピット状の掘り込みがみられた。掘り込みは径21cm、深さ9cmを測る。壁外へは95cm程延びている。覆土は薄く、焼土ブロックを主体とする層（5層）が壁際にもみられた。ピット状の掘り込みには炭化物が多量含まれていた。

出土遺物（第171図）には、土師器杯（No.1～3）、高杯（4～6）、甕（7・8）、甑（9・10）等がある。4・6はカマド、7と9はカマド周辺の床面から検出された。その他は覆土中からの検出である。1・2は身の深い模倣杯である。3は丸底で、口縁部が短く、直立する。北武蔵型杯か。2は内外面に煤が付着していた。高杯はすべて脚部が低い。4は模倣杯に低い脚部のつくタイプである。甕は長胴甕である。9は胴部に把手のつくタイプである。内外面に黒斑がみられた。10は底部のみの検出である。

51号住居跡（第172図）

AF－20・21グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

南東壁5.6m程、北西壁4.03m、北東壁4.13m程、南西壁3.9mの台形を呈する。主軸方向はS－46°－Wを指す。確認面からの深さは30cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系の粘土二層（1・2層）からなり、1層下部には炭化



第169図　E・F区49号住居跡出土遺物

第81表　E・F区49号住居跡出土遺物観察表　（第169図）

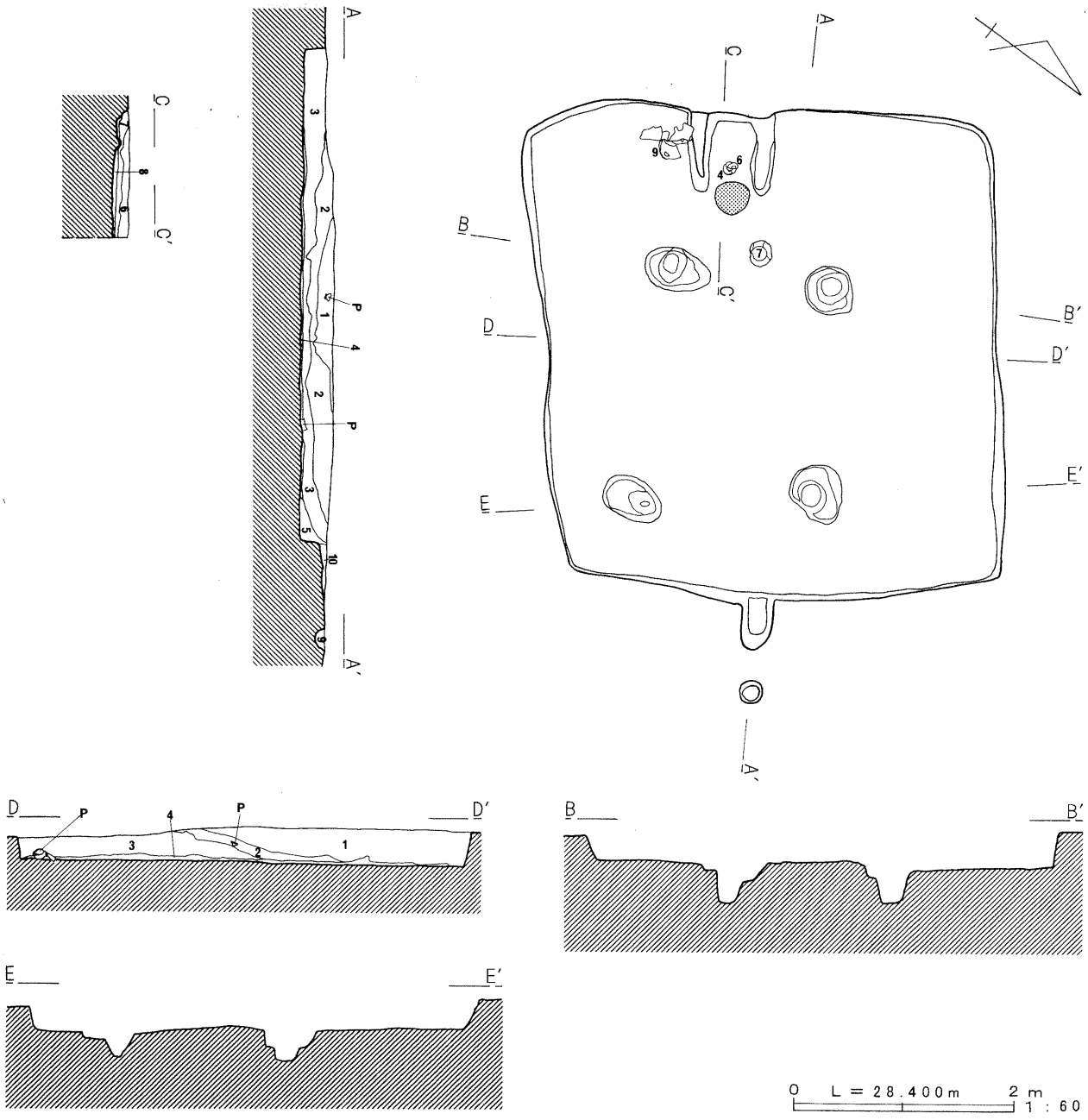
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器甕	(20.2)	32.4	-	⑥③①	②	にぶい黄橙	1/3	外面黒斑有。磨滅。
2	土師器甑	(21.0)	32.6	(7.6)	⑥③①④	②	浅黄橙	2/3	外面黒斑有。磨滅。
3	土師器甑	(25.2)	-	-	⑥①④②③	②	明赤褐	上位1/4	

物層が帯状にみられた。自然堆積と考えられる。ピットが１つ検出されたが５cmと浅く、柱穴かどうかは不明である。

カマドは南東壁の北東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで造られ、片側のみ残っていた。内面には被熱した箇所が僅かに確認された。焚口部付近の幅の規模は不明であるが、燃焼部と煙道部の境では34cmを測り、先端は17cmと狭くなる。焚口部から煙道部までは段差がなく、ほぼ平坦であり、先端部でほぼ直角に立ち上がる。壁外へは僅かに37cm張り出す。覆土に天井部崩落土等は確認されず、焼土・炭化物等を含む層（３～５層）がみられた。

カマド北東脇には径81×72cm、床面からの深さ24cmの貯蔵穴がみられた。楕円形を呈する。覆土中層から土師器が多数検出された。

出土遺物（第173図）には、土師器杯（No.１～６）、甕（８～11）、椀（12）、須恵器高杯（７）等がある。11はカマド北東脇、１・３～５・８・９は貯蔵穴から検出された。その他は

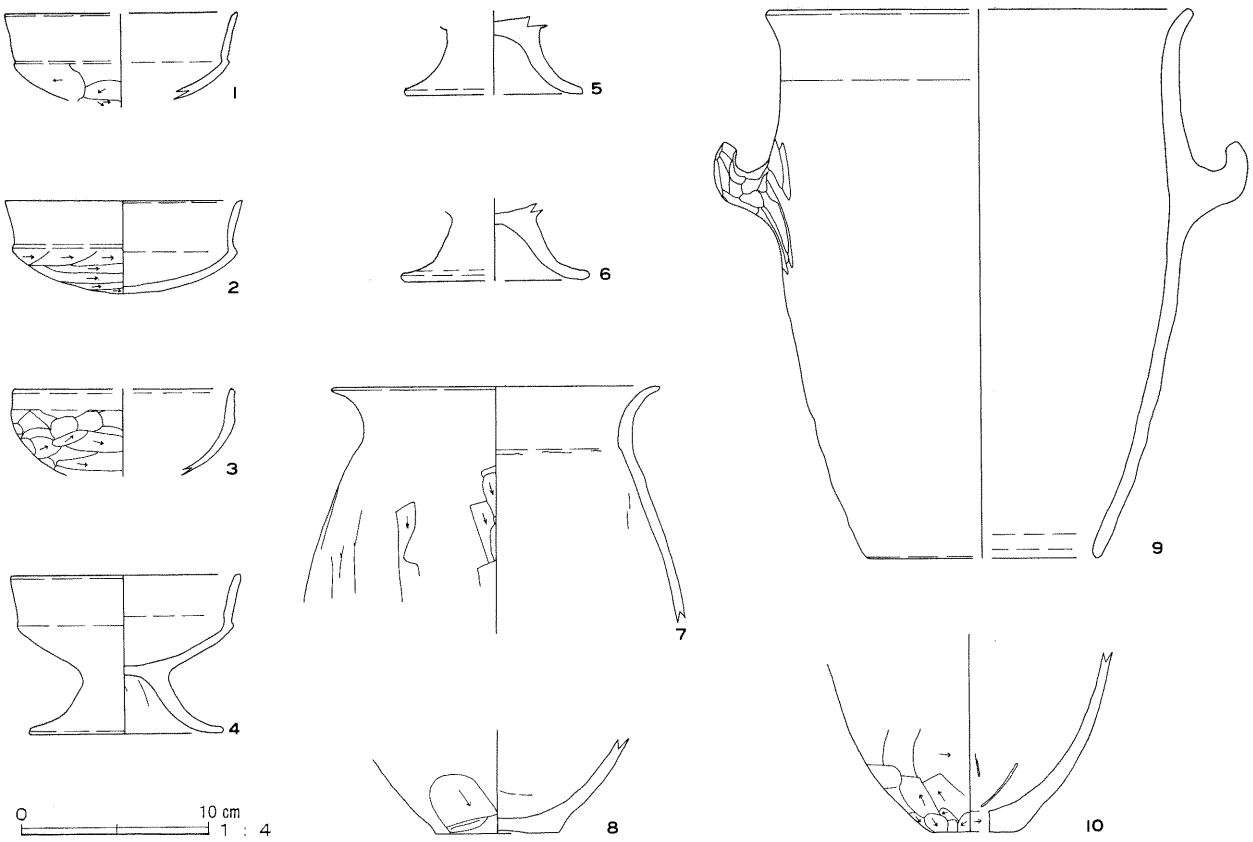


50 号住居跡土層

1 にぶい黄橙色(10YR7/4)シルト。焼土粒(少量)を含む。しまり良い。
2 にぶい黄褐色(10YR6/4)シルト。1層とほぼ同質。最下部に炭化物が帯状に堆積。
3 にぶい黄橙色(10YR7/4)シルト。焼土粒、炭化物(少量)を含む。
4 黒褐色(5YR3/1)粘土。床面上に堆積。炭化物層。
5 赤色(10YR4/8)粘土。焼土ブロック層。炭化物(多量)を含む。
6 灰黄褐色(10YR6/2)粘土。カマド天井。粘性非常に強い。
7 赤橙色(10YR6/8)粘土。カマド天井被熱部。6層下面が被熱により焼土ブロック化。
8 暗赤灰色(10R4/1)灰層。
9 暗赤灰色(2.5YR3/1)粘土。炭化物が密に充填。
10 赤褐色(10YR4/3) 粘土。炭化物(少量)を含む。

第170図　E・F区50号住居跡

覆土中からの検出である。杯はすべて模倣杯である。1・2が杯身模倣杯であり、その他は杯蓋模倣杯である。1・4は外面に黒斑を有し、2は内外面に煤の付着がみられた。7は杯部片である。末野産。甕は長胴甕（8・9）と丸胴甕（10・11）がある。前者は煤が付着しており、二次加熱を受けている。9・11は摩滅が顕著であった。12は小型の椀であ



第171図　E・F区50号住居跡出土遺物

第82表　E・F区50号住居跡出土遺物観察表　（第171図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(12.2)	-	-	②①⑥④③	②	橙	1/2	
2	土師器杯	12.6	4.9	-	③①④⑥	②	橙	1/2	内外面煤付着。
3	土師器杯	(11.6)	-	-	④①⑥	②	明赤褐	1/4	
4	土師器高杯	12.2	8.4	10.3	③①④	②	明赤褐	4/5	剝離。
5	土師器高杯	-	-	(9.6)	①④②③	②	橙	脚部のみ	
6	土師器高杯	-	-	(10.0)	①④③⑥	②	明赤褐	脚部のみ	
7	土師器甕	17.3	-	-	③①	②	橙	上位5/6	磨滅。
8	土師器甕	-	-	6.5	①③⑥④	②	褐	底部のみ	
9	土師器甑	(22.5)	29.2	(12.0)	③①⑥	②	橙	3/5	内外面黒斑有。磨滅。
10	土師器甑	-	-	4.2	①④②③⑥	①	暗赤褐	2/5	

る。口縁部が内湾している。

52号住居跡（第174図）　AF・AG－21・22グリッドに位置する。北西部で53号住居跡を切っている。

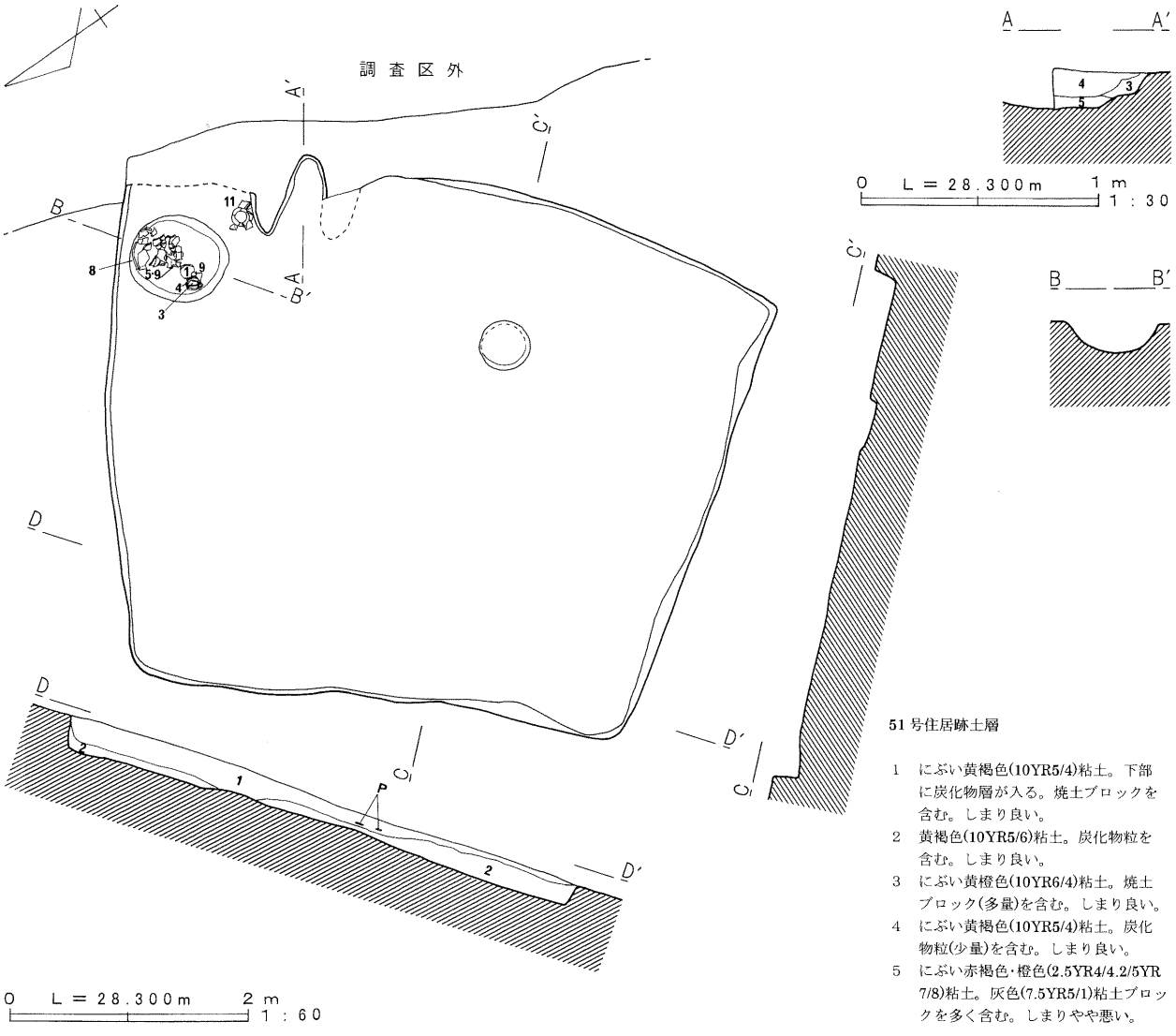
長軸4.35m、短軸4.2mの方形を呈する。主軸方向はN－70°－Wを指す。確認面からの深さは27cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色ないし黄色のシルト（2・4～7層）を主体とする。床面直上には炭化物層がみられた。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。壁溝は北西隅から北東壁、南東壁中央にかけてみられるが、南東隅は途切れている。幅6～11cm、床面からの深さは4cm程を測る。ピットは3つ確認されたが、いずれも浅く、柱穴とは考えられない。

カマドは南西壁中央からやや南東寄りに設けられている。袖部は片側のみの検出された。地山の掘り残しで、土師器甕（No.5）が補強材として使用されていた。内面には被熱した

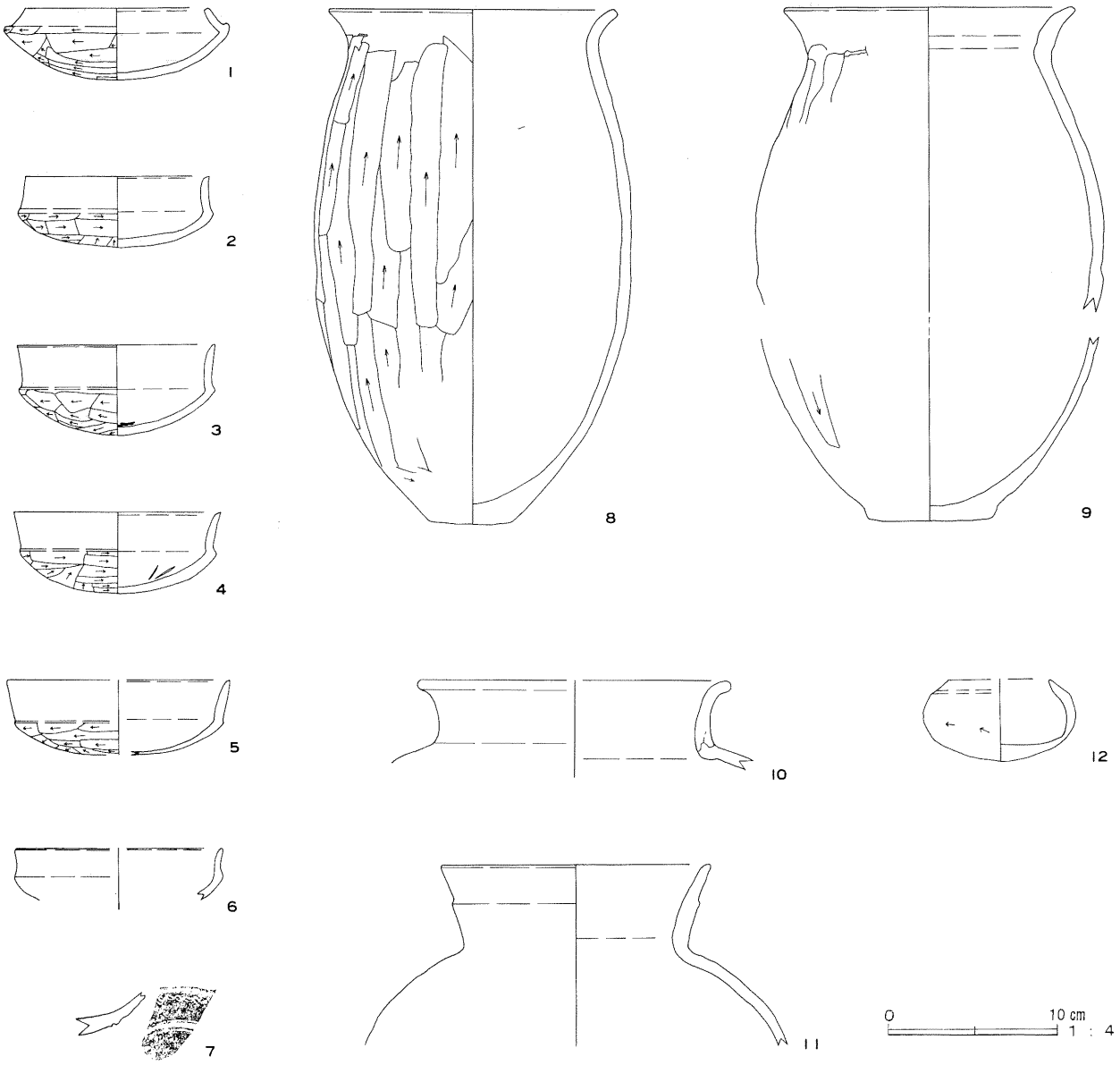
箇所が確認された。煙道部は確認面の関係から一旦途切れて先端はピット状になっている。焚口部・燃焼部の幅は不明、煙道部は32～34cmでほぼ一定となっており、先端のピット状の掘り込みは径22cmを測る。焚口部から燃焼部は、床面同様にほぼ平坦であるが、燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は10cmを測る。燃焼部からは土師器が多数検出された。煙道部は緩やかに立ち上がり、ピット状の掘り込みとなる。壁外へは1.32mを測る。覆土に天井部崩落土等はみられず、住居跡覆土の下から灰を帯状に含む層(3層)がみられた。

貯蔵穴はカマドの両脇にみられた。北西側に位置する貯蔵穴は、径51×44cmの円形である。南東側の貯蔵穴は、径70×65cmの円形で、深さ58cmを測る。

出土遺物（第175図）には土師器杯（No.1～3）、盤（4）、甕（5～9）、甑（10・11）、磨石（12）等がある。主にカマド内外及び貯蔵穴からまとまって検出された。2・3・6・7・11はカマド燃焼部、8はカマド南東脇、1・10は貯蔵穴、9・12は床面上からの検出



第172図　E・F区51号住居跡

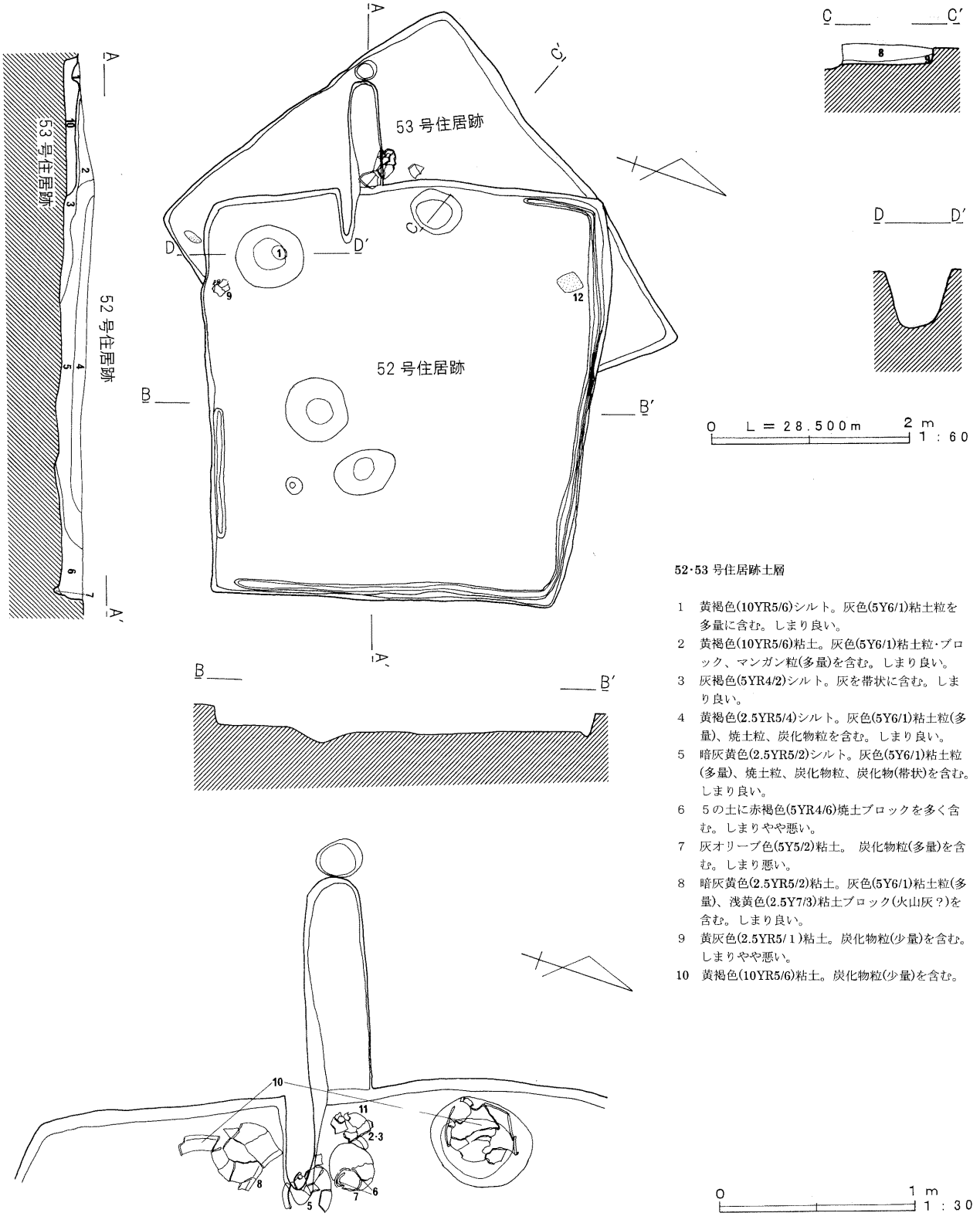


第173図　E・F区51号住居跡出土遺物

第83表　E・F区51号住居跡出土遺物観察表　(第173図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	10.8	4.3	-	③①④⑥	②	橙	完形	外面黒斑有。
2	土師器杯	10.8	4.2	-	③①④	②	橙	2/3	内外面煤付着。
3	土師器杯	11.6	5.3	-	③①④⑥	②	明赤褐	口縁部1/2欠	
4	土師器杯	12.2	4.8	-	③①④	②	橙	口縁部1/2欠	外面黒斑有。
5	土師器杯	(13.2)	-	-	③①④	②	橙	1/4	
6	土師器杯	(12.2)	-	-	①④②⑥③	②	赤	1/8	磨滅。
7	須恵器高杯	-	-	-	①②③	②	青灰	杯部一部のみ	
8	土師器甕	17.0	30.6	5.0	⑥③①④	②	黄褐	一部欠	胴部下位煤付着。二次加熱。
9	土師器甕	17.2	-	7.4	③⑥①	②	にぶい褐	一部欠	外面煤付着。二次加熱。磨滅。
10	土師器甕	(18.2)	-	-	①②⑥④	②	橙	口縁部1/2	
11	土師器甕	16.0	-	-	③①	②	暗赤褐	上位のみ	磨滅。
12	土師器椀	(6.1)	4.9	-	④①③	②	橙	2/3	外面磨滅。

である。その他は覆土中からの検出である。杯はすべて模倣杯である。1のみ杯身模倣杯であり、2・3は杯蓋模倣杯である。3は内外面に煤が付着していた。4はほぼ完形品である。甕は長胴甕（5～8）と丸胴甕（9）がある。5～7は摩滅が顕著であったため、

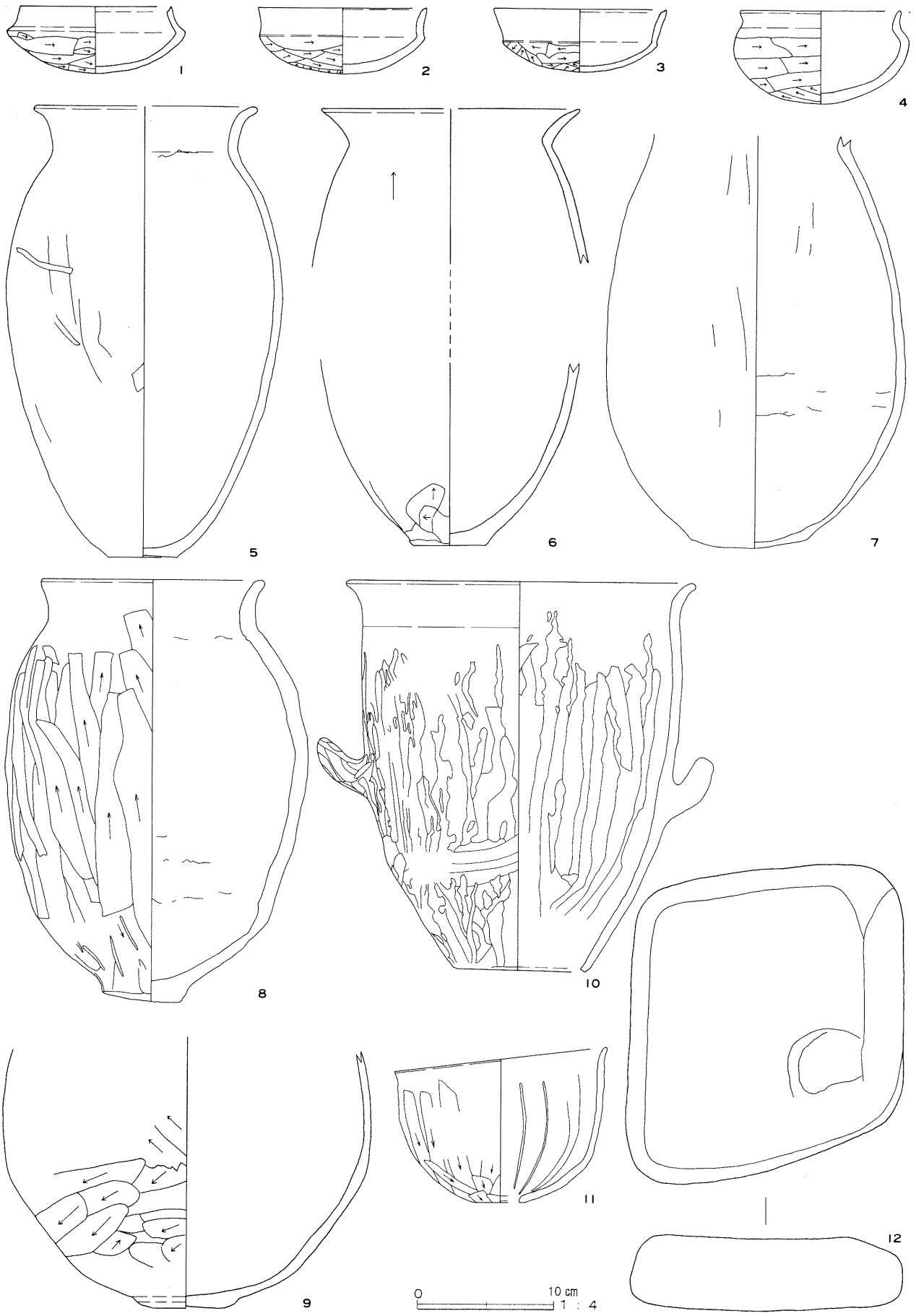


52・53 号住居跡土層

1　黄褐色(10YR5/6)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒を多量に含む。しまり良い。
2　黄褐色(10YR5/6)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒・ブロック、マンガン粒(多量)を含む。しまり良い。
3　灰褐色(5YR4/2)シルト。灰を帯状に含む。しまり良い。
4　黄褐色(2.5YR5/4)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒、炭化物粒を含む。しまり良い。
5　暗灰黄色(2.5YR5/2)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒、炭化物粒、炭化物(帯状)を含む。しまり良い。
6　5の土に赤褐色(5YR4/6)焼土ブロックを多く含む。しまりやや悪い。
7　灰オリーブ色(5Y5/2)粘土。炭化物粒(多量)を含む。しまり悪い。
8　暗灰黄色(2.5YR5/2)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、浅黄色(2.5Y7/3)粘土ブロック(火山灰?)を含む。しまり良い。
9　黄灰色(2.5YR5/1)粘土。炭化物粒(少量)を含む。しまりやや悪い。
10　黄褐色(10YR5/6)粘土。炭化物粒(少量)を含む。

第174図　E・F区52・53号住居跡・52号住居跡カマド

調整は図示不可能であった。7は二次加熱を受けており、8の外面には黒斑がみられた。甑は把手を持つタイプ（10）と把手を持たないタイプで、小型のもの（11）がある。10は内外面に黒斑がみられた。12は方形を呈し、大型である。完形品。



第175図　E・F区52号住居跡出土遺物

第84表　E・F区52号住居跡出土遺物観察表　（第175図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	11.0	4.9	-	③①⑥	②	赤	完形	
2	土師器杯	12.2	4.8	-	③①⑥	②	明赤褐	2/3	
3	土師器杯	12.6	4.6	-	①③④⑥	②	明赤褐	1/2	内外面煤付着。
4	土師器盤	11.6	6.9	-	③①④	②	赤	口縁部1/3欠	
5	土師器甕	(16.4)	33.2	(5.0)	③①	②	橙	3/4	内外面黒斑有。胴部外面煤付着。磨滅。
6	土師器甕	(19.0)	-	5.4	①④②③⑥	②	にぶい橙	中位欠	磨滅。
7	土師器甕	-	-	7.8	③⑥④①	②	にぶい黄褐	胴部のみ	二次加熱。磨滅。
8	土師器甕	16.4	31.1	6.0	⑥③④	②	橙	上位欠	外面黒斑有。
9	土師器甕	-	-	(4.2)	③①④	②	橙	1/3	
10	土師器甑	25.6	28.6	9.4	③①④⑥	②	明赤褐	5/6	内外面黒斑有。
11	土師器甑	15.6	11.4	3.4	①②④⑥	②	赤	2/3	
12	磨石	長さ　23.0　幅　19.9　厚さ　5.2						完形	砂岩製。

53号住居跡
（第174図）

AE・AG－22グリッドに位置する。北東部大半を52号住居跡に切られている。

長軸4.2m、短軸3.72m程の長方形を呈すると考えられる。南北軸方向はS－36°－Eを指す。

確認面からの深さは20cmを測り、床面は検出された範囲内は、ほぼ平坦であった。覆土は黄色系及び灰色系の粘土三層（8・9・10層）からなる。上層（8層）が厚く堆積しており、火山灰らしき混入物が含まれていた。自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

出土遺物（第176図）には土師器杯（No.1）、甕（2・3）等がある。床面の中央付近から検出された。1は北武蔵型杯である。甕は小型のもの（2）と丸胴甕（3）がある。2は煤が付着しており、3は外面に黒斑を有する。

54号住居跡
（第177図）
（第178図）

AG・AH－21グリッドに位置する。東側は調査区域外にあり、北西部で55号住居跡を切っている。

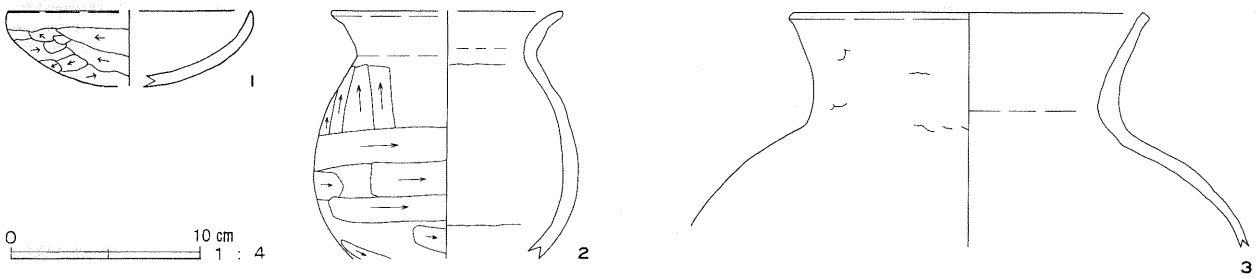
規模・平面形等は不明であるが、西壁は5.76mを測る。確認面からの深さは55cmを測り、床面は凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系の粘土及び褐灰色のシルト三層（1～3層）からなる。自然堆積と考えられる。

壁溝・柱穴・カマド・貯蔵穴等は検出されなかった。

出土遺物（第179図）には、土師器杯（No.1～3）、高杯（4）、甕（5～8）、鉢（9）、土錘（10・11）等がある。1～7・9は礫に混じって床面の中央付近から検出された。杯はすべて模倣杯である。1・3は器高低く、平底ぎみであるのに対し、2は丸底で身が深い。1は外面に黒斑を有する。4は低い脚部のみの検出である。甕は小型のもの（5）と長胴甕（6～8）がある。6は口縁部の開きが弱い。摩滅が顕著であり、外面に黒斑を有する。9は完形品である。内外面に黒斑を有する。土錘は2点検出された。10は片側先端を欠くが、大型であり、11は最大径が1cmと細身のものである。

55号住居跡
（第177図）
（第178図）

AG－21グリッドに位置する。北西部で56号住居跡を切り、南東部で54号住居跡に切られている。北東部は調査区域外となる。



第176図　E・F区53号住居跡出土遺物

第85表　E・F区53号住居跡出土遺物観察表　(第176図)

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	12.4	4.0	-	③②①④	②	にぶい橙	1/4	
2	土師器甕	(12.2)	-	-	①③④⑥	②	にぶい橙	1/4	煤付着。
3	土師器甕	18.6	-	-	③①⑥	②	橙	1/5	外面黒斑有。磨滅。

規模・平面形等は不明であるが、北西壁は6.35mを測る。南北軸方向はN－52°－Eを指す。確認面から深さは43cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は確認箇所では黄褐色系のシルトないしは粘土（4～6層）を主体とする。自然堆積と考えられる。壁溝はみられない。柱穴は北西部で1つ検出された。規模は、径32×25cm、床面からの深さ34cmを測る。

壁溝、カマド、貯蔵穴等はみられない。

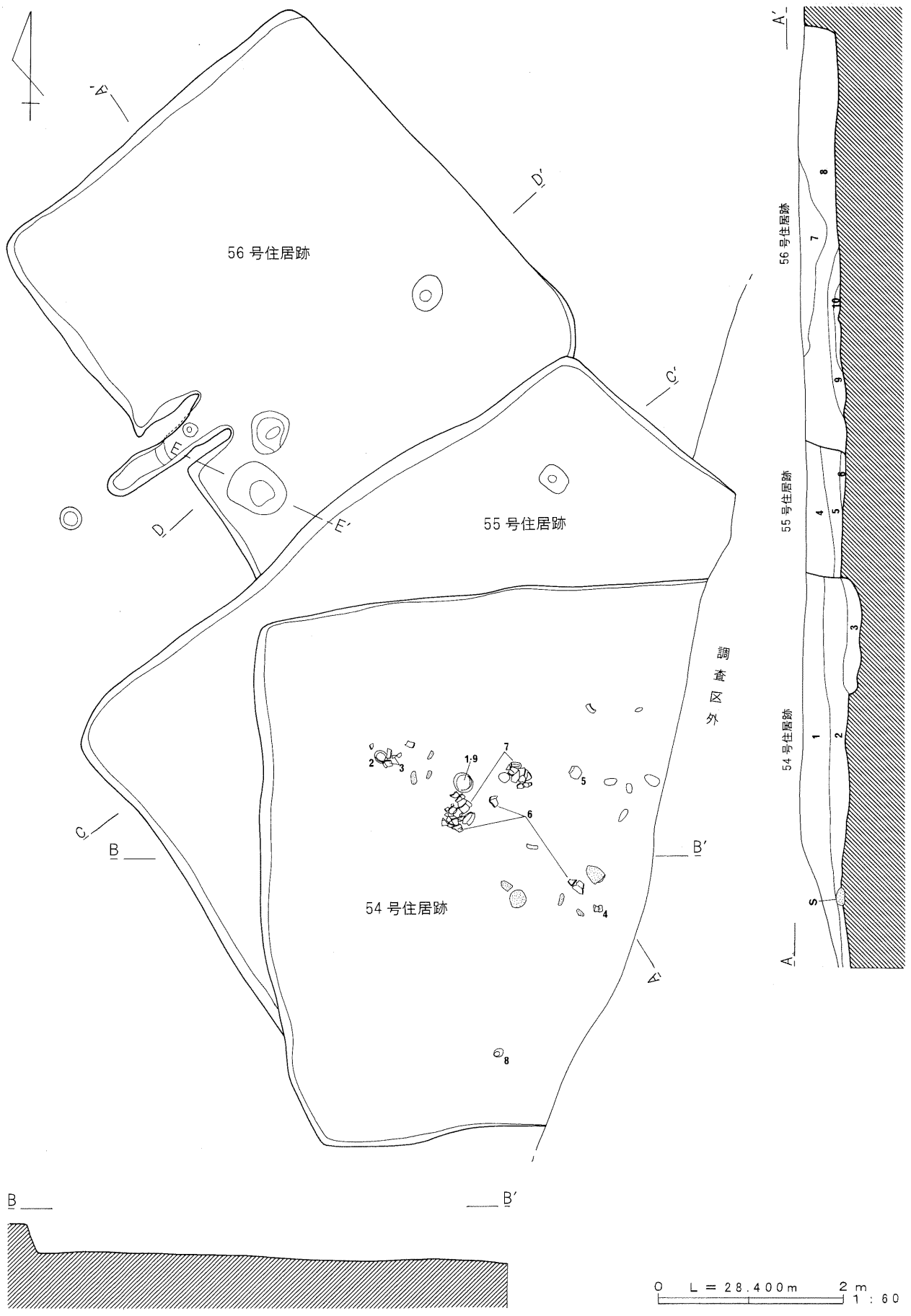
出土遺物（第180図）には、土師器杯（No.1～4）、甕（5）等がある。すべて覆土中からの検出である。杯はすべて模倣杯である。1のみ杯身模倣杯であり、その他は杯蓋模倣杯である。後者のうち、2は深身であるのに対し、3・4は器高が低く、口縁部が外反している。4は皿としても良いものかもしれない。5は長胴甕であり、上部のみの検出である。

56号住居跡
(第177図)
(第178図)

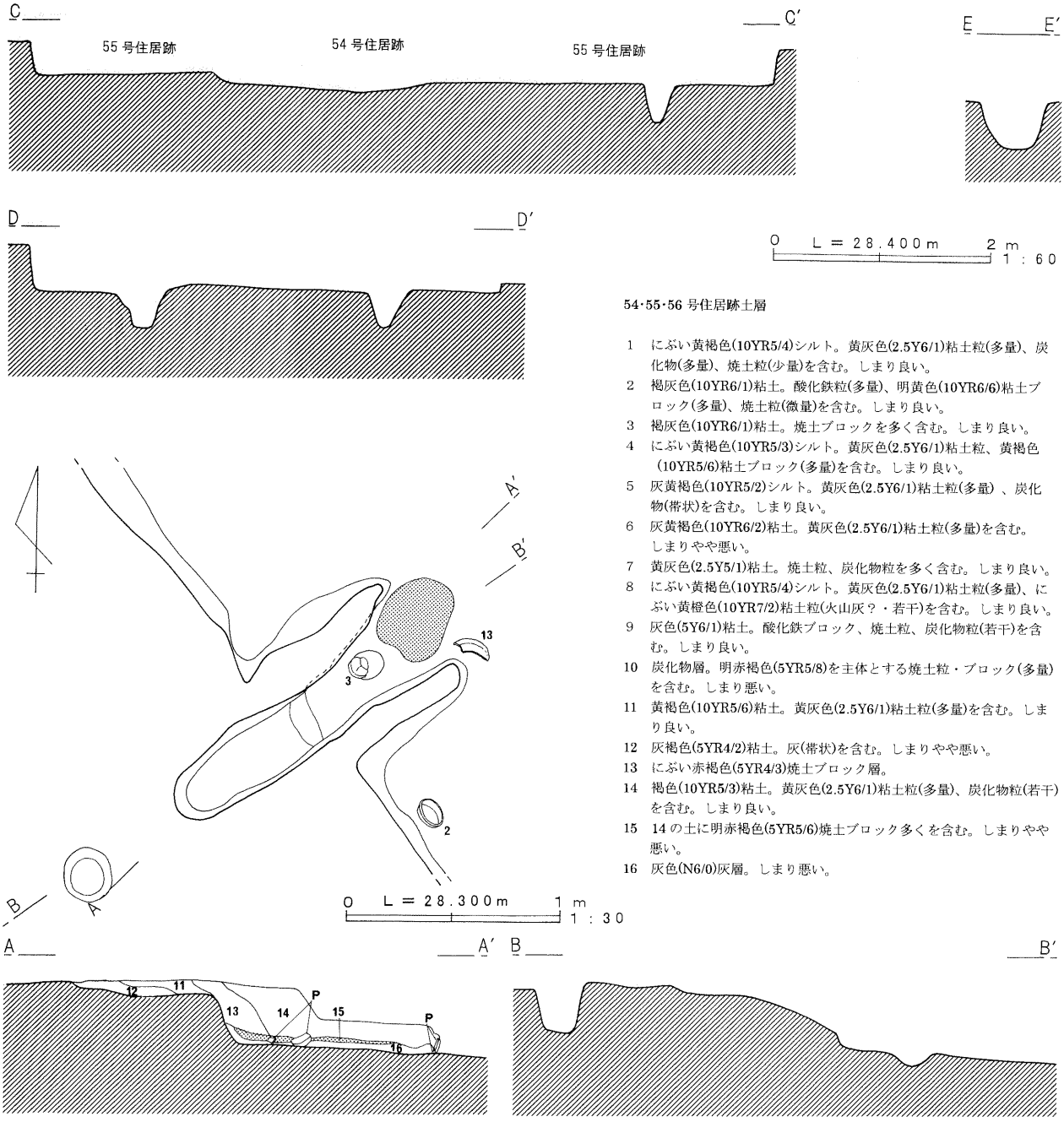
AF・AG－21グリッドに位置する。南東壁を55号住居跡に切られている。

長軸は不明、短軸は4.4mを測り、長方形を呈するものと推測される。主軸方向はS－48°－Wを指す。確認面からの深さは44cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は色調が様々であるが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と考えられる。8層には火山灰らしき混入物が、床面直上には一部炭化物層（10層）がみられた。壁溝はみられない。ピットは2つ確認できた。規模は径33～48cm、床面からの深さはともに34cmを測る。北西側に対になるものはみられず、柱穴かどうかは不明である。

カマドは南西壁に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が僅かに確認された。焚口部の幅は45cm、燃焼部は27cmを測り、煙道部は35cmと幅広になるが、先端は25cmとすぼまる。焚口部から燃焼部は、床面と同じレベルでほぼ平坦であった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は22cmを測る。焚口部の床は被熱して赤色化しており、燃焼部からは土師器杯（No.3）が伏せた状態で検出された。煙道部はほぼ平坦であり、先端に向かって緩やかに立ち上がる。煙道部先端は確認面から22cmの深



第177図　E・F区54・55・56号住居跡(1)



54・55・56 号住居跡土層

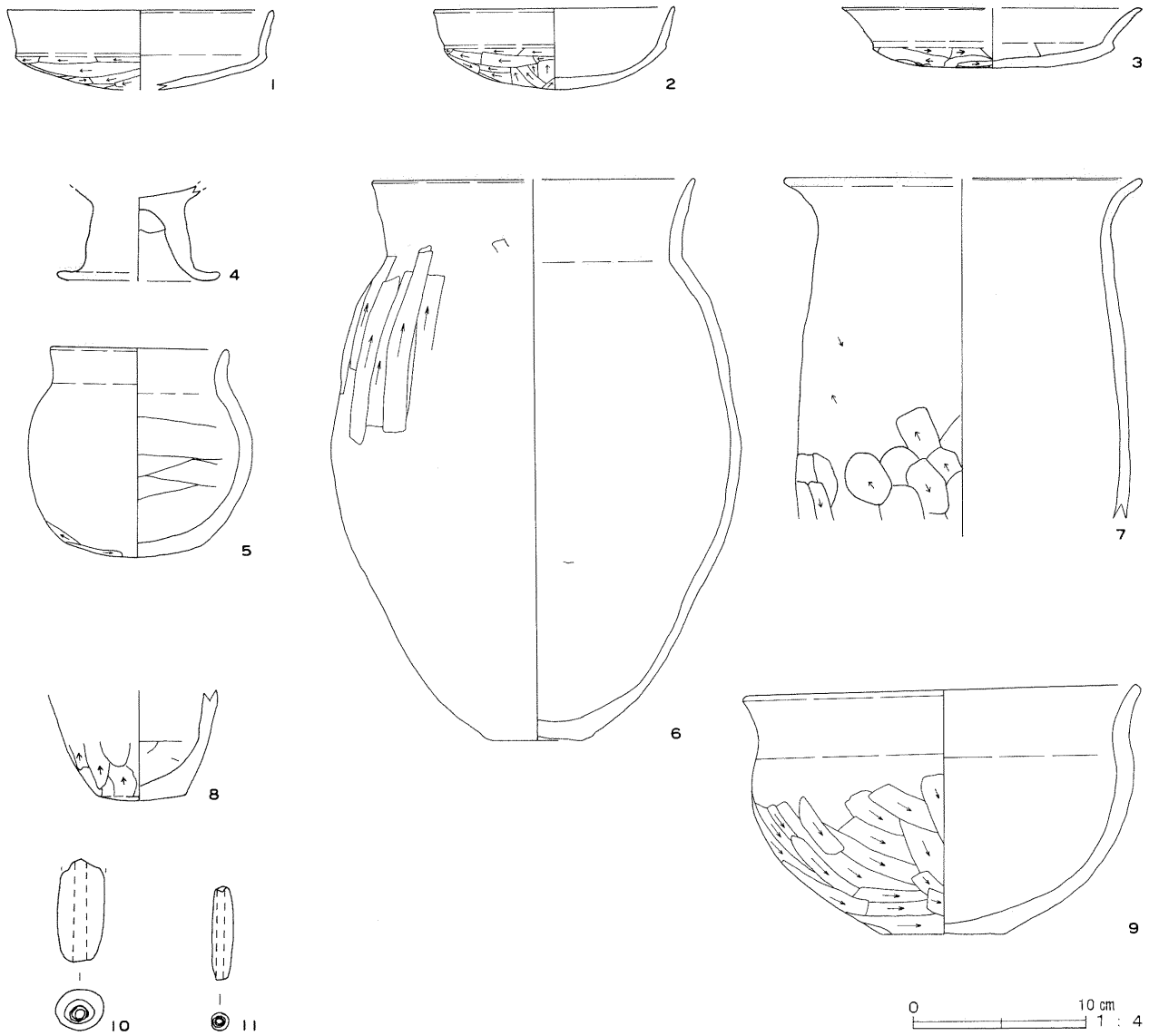
1　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、炭化物(多量)、焼土粒(少量)を含む。しまり良い。
2　褐灰色(10YR6/1)粘土。酸化鉄粒(多量)、明黄色(10YR6/6)粘土ブロック(多量)、焼土粒(微量)を含む。しまり良い。
3　褐灰色(10YR6/1)粘土。焼土ブロックを多く含む。しまり良い。
4　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒、黄褐色(10YR5/6)粘土ブロック(多量)を含む。しまり良い。
5　灰黄褐色(10YR5/2)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、炭化物(帯状)を含む。しまり良い。
6　灰黄褐色(10YR6/2)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまりやや悪い。
7　黄灰色(2.5Y5/1)粘土。焼土粒、炭化物粒を多く含む。しまり良い。
8　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、にぶい黄橙色(10YR7/2)粘土粒(火山灰？・若干)を含む。しまり良い。
9　灰色(5Y6/1)粘土。酸化鉄ブロック、焼土粒、炭化物粒(若干)を含む。しまり良い。
10　炭化物層。明赤褐色(5YR5/8)を主体とする焼土粒・ブロック(多量)を含む。しまり悪い。
11　黄褐色(10YR5/6)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。
12　灰褐色(5YR4/2)粘土。灰(帯状)を含む。しまりやや悪い。
13　にぶい赤褐色(5YR4/3)焼土ブロック層。
14　褐色(10YR5/3)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、炭化物粒(若干)を含む。しまり良い。
15　14の土に明赤褐色(5YR5/6)焼土ブロック多くを含む。しまりやや悪い。
16　灰色(N6/0)灰層。しまり悪い。

第178図　E・F区54・55・56号住居跡(2)・56号住居跡カマド

さを測るピット状の掘り込みとなる。壁外へは1.35mほど張り出している。覆土に天井部崩落土はみられず、焼土・炭化物を含む層（13・14層）の下に焼土層（15層）、灰層（16層）が確認された。

カマドの南東脇には、径64×52cmの楕円形を呈する貯蔵穴が検出された。床面からの深さは43cmであった。

出土遺物（第181・182図）には、土師器杯（No.1～8）、盌（9）、甕（10～20）、甑（21・22）、磨石（23）、土錘（24）等がある。すべて覆土中からの検出である。杯はすべて身の深い模倣杯である。黒斑を有するものや煤が付着しているものが多い。9は口縁部が屈曲

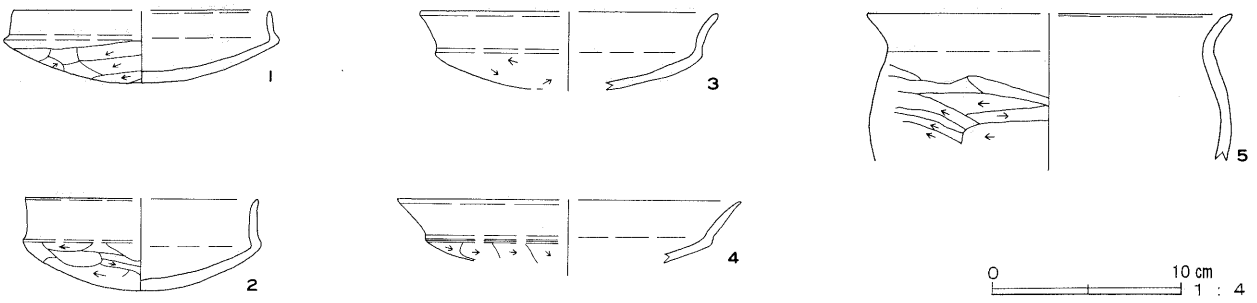


第179図　E・F区54号住居跡出土遺物

第86表　E・F区　54号住居跡出土遺物観察表　（第179図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	15.6	-	-	③①④⑥	②	明赤褐	3/4	外面黒斑有。
2	土師器杯	14.2	4.7	-	①③②④	②	橙	口縁部1/6欠	
3	土師器杯	(17.2)	3.5	-	①④②③⑥	②	明赤褐	1/3	
4	土師器高杯	-	-	(9.4)	③②①④	②	橙	裾部1/5	
5	土師器甕	10.3	12.4	7.8	①⑥	②	にぶい橙	一部欠	磨滅。
6	土師器甕	(18.8)	32.9	(5.0)	⑥③①	②	橙	3/4	胴上部外面黒斑有。外面剝離。
7	土師器甕	(20.8)	-	-	⑥①④	②	橙	上半1/2	胴上部外面磨滅。
8	土師器甕	-	-	5.2	①④②⑥③	②	橙	下位のみ	
9	土師器鉢	23.1	14.6	7.0	③①④	②	橙	完形	内外面黒斑有。
10	土錘	長さ -	最大径 2.8	孔径 0.6				一部欠	
11	土錘	長さ 5.5	最大径 1.0	孔径 0.4				完形	

していることから盌とした。甕は長胴甕（10～17・18）と丸胴甕（19・20）がある。10は外面に輪積痕を残す。19は摩滅が顕著であった。甑はともに把手が付かないタイプである。23は円形を呈する。完形品である。土錘は1点のみ検出されたが、半分を欠く。



第180図　E・F区55号住居跡出土遺物

第87表　E・F区55号住居跡出土遺物観察表　（第180図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	(13.5)	3.8	-	④①③	②	橙	3/4	
2	土師器杯	(12.4)	4.9	-	①④②③⑥	②	橙	1/2	
3	土師器杯	(15.7)	-	-	①④②③⑥	②	橙	1/5	
4	土師器杯	(18.0)	-	-	①④②③	②	橙	1/5	
5	土師器甕	(19.0)	-	-	③②①④⑥	②	橙	上位のみ	

57号住居跡　AF・AG－22・23グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

（第183図）　北東壁5.06m、北西壁6.27m、南東壁6.65m、南西壁3.6mのやや台形上を呈する。主軸方向はS－65°－Wを指す。確認面からの深さは31cm、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土はにぶい黄橙色粘土による単一層（1層）で、焼土・炭化物を含む。

壁溝、柱穴、貯蔵穴等はみられない。

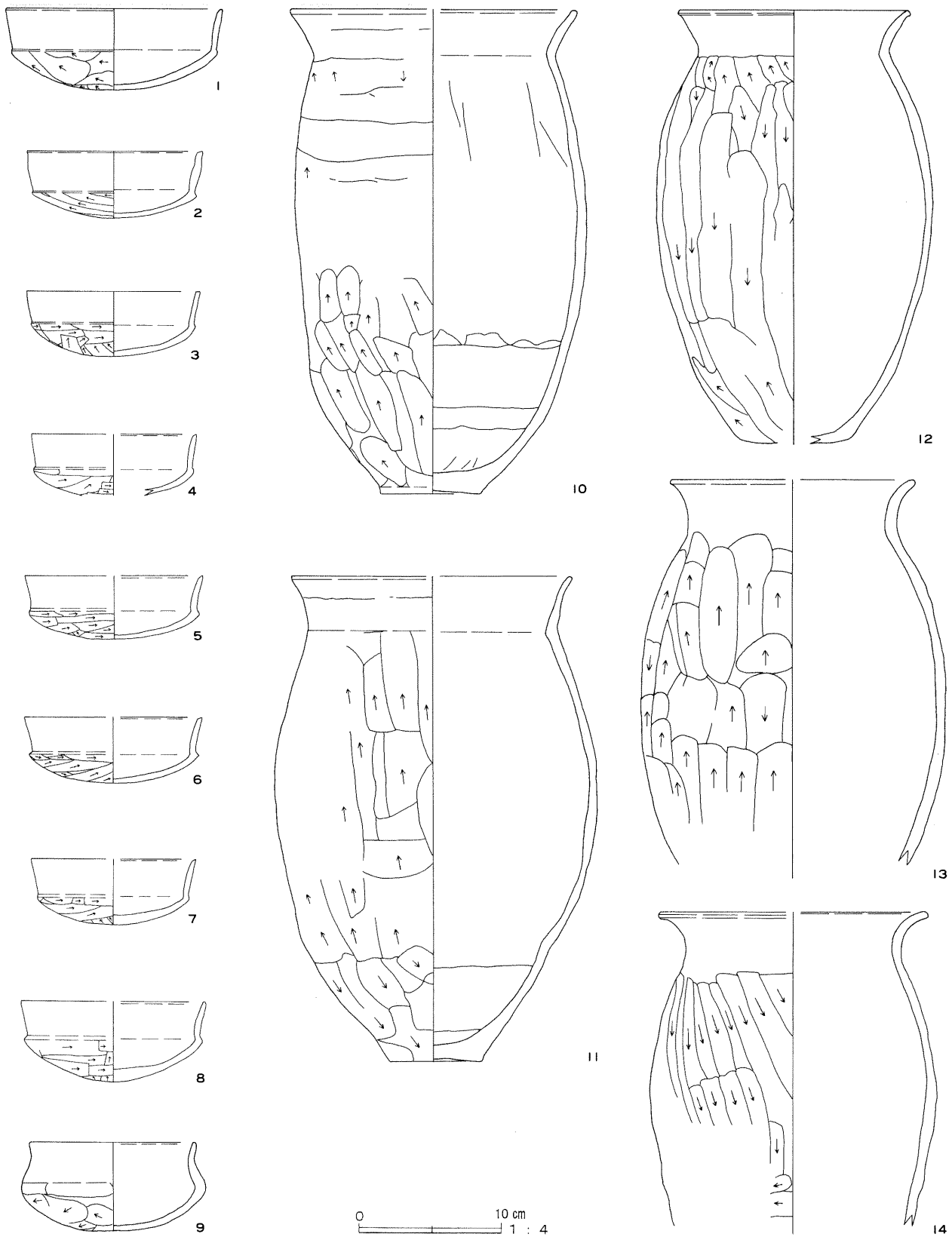
カマドは南西壁中央からやや南東寄りに設けられる。袖部は地山の掘り残しで、内面に被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は58cm、燃焼部は47cm、煙道部は30～35cmを測る。焚口部から燃焼部は、床面とほぼ同一レベルで平坦であり、燃焼部と煙道部の間には18cm程の段が設けられている。燃焼部には土師器高杯（No.3）が据えられていた。煙道部はほぼ平坦であり、先端で緩やかに立ち上がる。壁外へは1.38mほど張り出している。覆土は薄く、天井部崩落土はみられない。住居跡覆土の下から焼土層（2層）、灰層（3層）、焼土層（4層）の順で確認された。

出土遺物（第184図）には、土師器杯（No.1・2）、高杯（3）、甕（4・5）、甑（6）、須恵器甕（7）等がある。3がカマド、1・2がカマド南東脇から検出された。その他は、覆土中からの検出である。杯は模倣杯である。煤の付着がみられた。3は模倣杯に低い脚部が付くタイプである。摩滅が顕著であった。甕は長胴甕（4）と小型のもの（5）がある。いずれも上部のみの残存である。6は胴部に把手の付くタイプである。口縁部はあまり開かない。7は須恵器甕の胴部片。外面に叩き目がみられる。末野産。

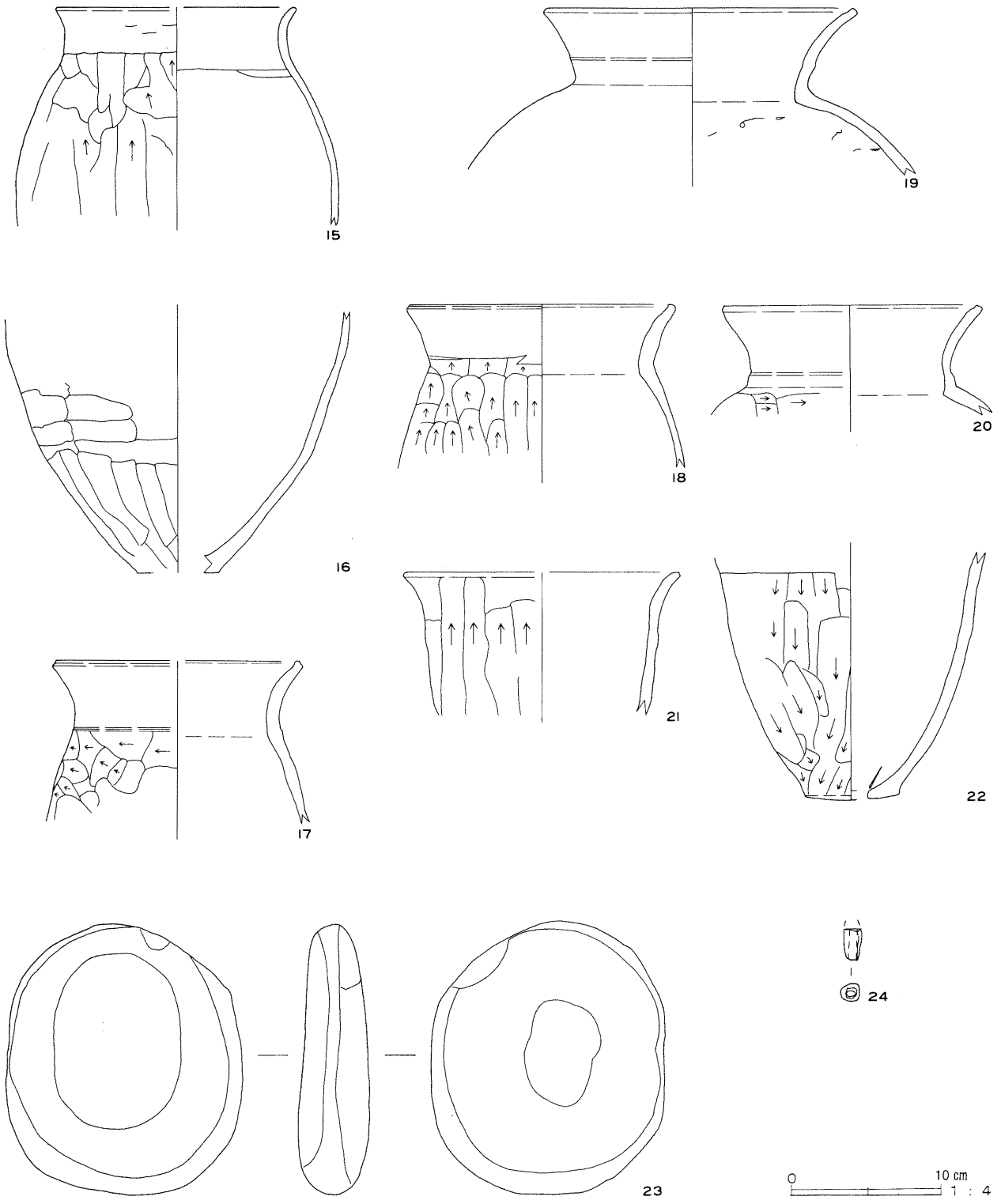
58号住居跡　AH－22グリッドに位置する。59号住居跡の大半を切って構築されている。

（第185図）　長軸6.4m、短軸6.12mの方形を呈する。主軸方向はS－47°－Wを指す。確認面からの深さは68cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は灰黄褐色、褐色粘土（6～8・17・18層）を主体とし、8層下部には炭化物層がみられた。レンズ状に堆積していることから、

（第186図）



第181図　E・F区56号住居跡出土遺物(1)



第182図　E・F区56号住居跡出土遺物(2)

自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴はみられない。

カマドは南西壁中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部から燃焼部の幅は40cm、煙道部は28cmでほぼ一定となっている。焚口部から燃焼部は床面とほぼ同一レベルで平坦である。燃焼部と煙道部の境には段が設

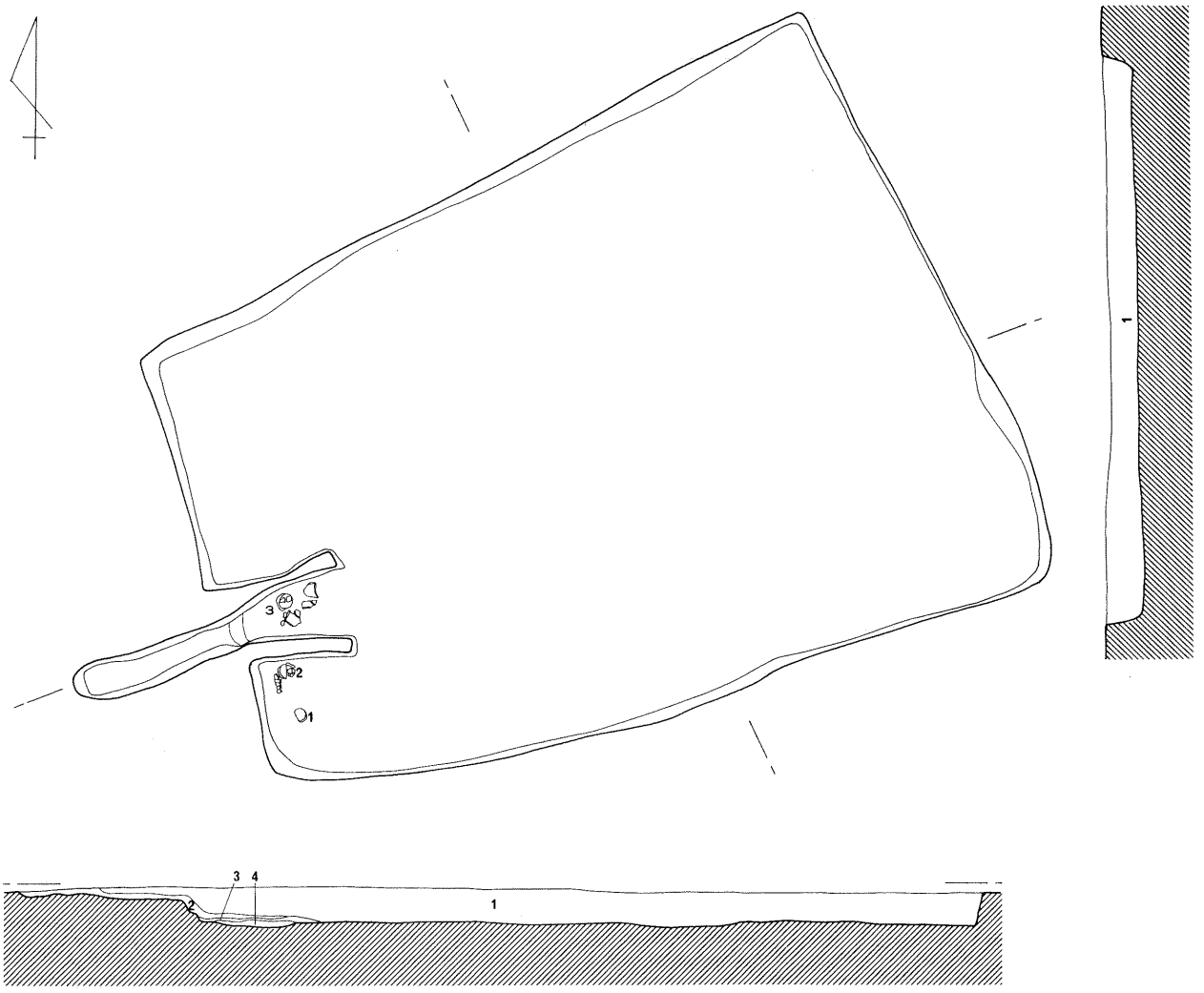
第88表　E・F区56号住居跡出土遺物観察表　（第181・182図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	15.0	5.8	-	①⑥④③②	②	橙	4/5	
2	土師器杯	12.3	4.7	-	③①⑥④	②	明赤褐	完形	
3	土師器杯	12.1	4.6	-	③①④	②	橙	1/2	外面黒斑有。
4	土師器杯	(11.6)	-	-	③①④	②	にぶい赤褐	1/3	内外面煤付着。
5	土師器杯	(12.4)	4.5	-	③⑥①④	②	橙	1/2	外面黒斑有。
6	土師器杯	(12.4)	4.6	-	③④①⑥	②	橙	1/2	外面黒斑有。
7	土師器杯	(11.6)	4.6	-	③①④②	②	橙	1/3	
8	土師器杯	(13.0)	5.6	-	③④①	②	橙	1/2	外面黒斑有、煤付着。
9	土師器盤	(11.6)	6.2	-	③②①⑥④	②	橙	2/5	
10	土師器甕	(20.2)	35.0	8.1	⑥④①③	②	にぶい橙	2/3	
11	土師器甕	(19.8)	34.0	6.5	⑥③①④	②	明褐灰	1/2	
12	土師器甕	16.2	30.4	7.8	①②④⑥③	②	橙	3/5	
13	土師器甕	(17.0)	-	-	①③⑥②④	②	明赤褐	2/3	
14	土師器甕	(15.0)	-	-	⑥①④③②	②	にぶい橙	上半のみ	
15	土師器甕	(16.0)	-	-	①②④③	②	橙	上位1/2	
16	土師器甕	-	-	5.4	⑥①④③②	①	暗赤褐	下半のみ	
17	土師器甕	(16.2)	-	-	②⑥①④③	②	明赤褐	口縁部2/3	
18	土師器甕	18.0	-	-	⑥②①④③	②	明赤褐	上位1/4	
19	土師器甕	20.9	-	-	④①②③⑥	②	橙	上位2/3	磨滅。
20	土師器甕	(16.8)	-	-	③②④①⑥	②	橙	口縁部1/2	
21	土師器甑	(18.2)	-	-	③①②⑥	①	明赤褐	2/3	
22	土師器甑	-	-	6.2	①④③②⑥	②	橙	1/3	
23	磨石	長さ　18.6　幅　15.6　厚さ　4.7						完形	輝石安山岩製。
24	土錘	長さ　—　最大径　1.2　孔径　0.6						一部欠	

けられており、高低差は18cmを測る。焚口部から燃焼部にかけて、土師器甕（No.32・37）が斜位の状態で検出された。煙道部は先端に向かって緩やかに上り、先端で直角に立ち上がる。壁外へは1.37m程張り出している、覆土に天井部はみられず、住居跡覆土の下に焼土・炭化物を含む層（9・10・13・18層）や焼土層（11・14層）がみられた。

カマド南東には貯蔵穴が2つ並んでいる。北西側の貯蔵穴は、径30cm前後、南東側のものは径56×46cmを測り、床面からの深さはともに10cm前後と浅い。ともに底面から土師器甕（34・36）が検出された。

出土遺物（第187～190図）には、土師器杯（No.1～25）、高杯（26～30）、甕（31～45）、甑（46～48）、坩（49）、手捏ね土器（50～52）、砥石（53～56）、土錘（57）、土製紡錘車（58）等がある。主にカマド及びその周辺、貯蔵穴とその周辺、南東隅から多数検出された。杯はすべて身の深い杯蓋模倣杯である。二次加熱を受けたものや黒斑を有するもの等がある。高杯はバラエティがみられる。26は杯身模倣杯に長方形の透かし孔を3つ持つ脚部がついている。27・28は模倣杯に低い脚部の付くタイプ、29は口縁部が大きく外反し、脚部が高いタイプであり、30も同じタイプと考えられる。27の外面には黒斑がみられた。甕は長胴甕（31～43）と小型のもの（44・45）があるが、前者が圧倒的に多い。杯同様、二次加熱を受けたものや黒斑を有するもの等がある。摩滅が顕著であるものが多い。甑はすべて把手の付かないタイプであり、黒斑を有する。48のみ小型である。50～52の器形は様々であるが、手捏ね土器である。砥石は4点検出された。すべて川原石を使用している。完形品。53・54は全面、55は一面、56は両側面を使用している。土錘は1点のみ検出された。58は甑の底部を利用した紡錘車と考えられる。



57号住居跡土層

1　にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土。焼土粒、炭化物粒を含む。しまり良い。
2　暗赤褐色・橙色(2.5YR3/4・2.5YR7/8)焼土。下部に灰色(10YR5/1)粘土層が薄く入る。しまりやや良い。
3　褐灰色(10YR5/1)灰層。しまりやや悪い。
4　暗赤褐色(2.5YR3/3)焼土。しまりやや悪い。

第183図　E・F区57号住居跡

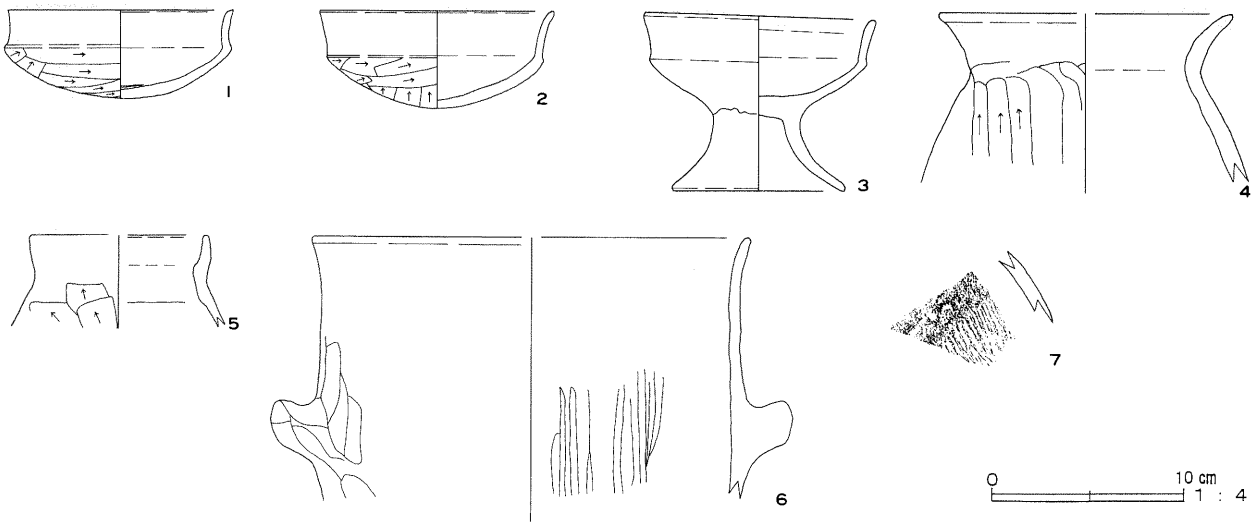
59号住居跡　AG・AH－22グリッドに位置する。本住居跡中央から南東部にかけて58号住居跡に切られている。

(第185図)

(第186図)　長軸8.35m、短軸7.26mの長方形を呈する。今回検出された住居跡の中では大きい部類に入る。主軸方向はN－24°－Wを指す。確認面からの深さは65cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は壁際での確認のみであるが、焼土・炭化物を含む黄褐色粘土（15層）が確認された。

壁溝、柱穴はみられない。

カマドは北西壁中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は67cm、燃焼部は57cm程、煙道部は37cmを測る。焚口部から燃焼部は、床面とほぼ同レベルで平坦である。燃焼部と煙道部の境には段が設けられてお



第184図　E・F区57号住居跡出土遺物

第89表　E・F区57号住居跡出土遺物観察表　（第184図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	12.0	4.6	-	③①⑥④	②	橙	2/3	外面煤付着。
2	土師器杯	12.5	5.1	-	③①④	②	橙	口縁部1/4欠	内外面煤付着。
3	土師器高杯	12.3	9.4	9.2	③①	②	橙	一部欠	全面磨滅。
4	土師器甕	(15.2)	-	-	⑥①④②③	②	明赤褐	上位1/2	
5	土師器甕	9.3	-	-	⑥①③④	②	明赤褐	口縁部のみ	
6	土師器甑	(23.1)	-	-	①④⑥③	②	橙	上位1/2	磨滅。
7	須恵器甕	-	-	-	-	-	赤	一部のみ	

り、高低差は13cmを測る。焚口部には被熱して赤色化した火床面が確認され、燃焼部からは支脚に利用された土師器杯（No.12・15）が検出された。煙道部は先端に向かって緩やかに上り、先端でピット状の掘り込みとなって立ち上がる。壁外へは84cmほど張り出している。覆土に天井部はみられず、焼土を含む層（1～4層）がみられた。

カマド北東脇には、袖部に接する形で貯蔵穴が検出された。径78×42cmの楕円形で、床面からの深さ8cmを測る。

出土遺物（第191図）には須恵器杯（No.1）、土師器杯（2～15）、高杯（16・17）、甕（18～22）等があり、杯類が多数検出された。主にカマド及びその周辺、貯蔵穴から検出された。1は末野産である。ほぼ完形品。土師器杯は深身の模倣杯（2～12）が主体となるが、丸底で、口縁部がほぼ直立するもの（13）や底部が円柱造りによるもの（14・15）等もみられる。14・15は椀としても良いものかもしれない。黒斑を有するものや煤の付着がみられるものが多い。高杯はいずれも模倣杯に低い脚部の付くタイプである。甕は長胴甕（18～21）と小型のもの（22）がある。二次加熱を受けているものが多い。

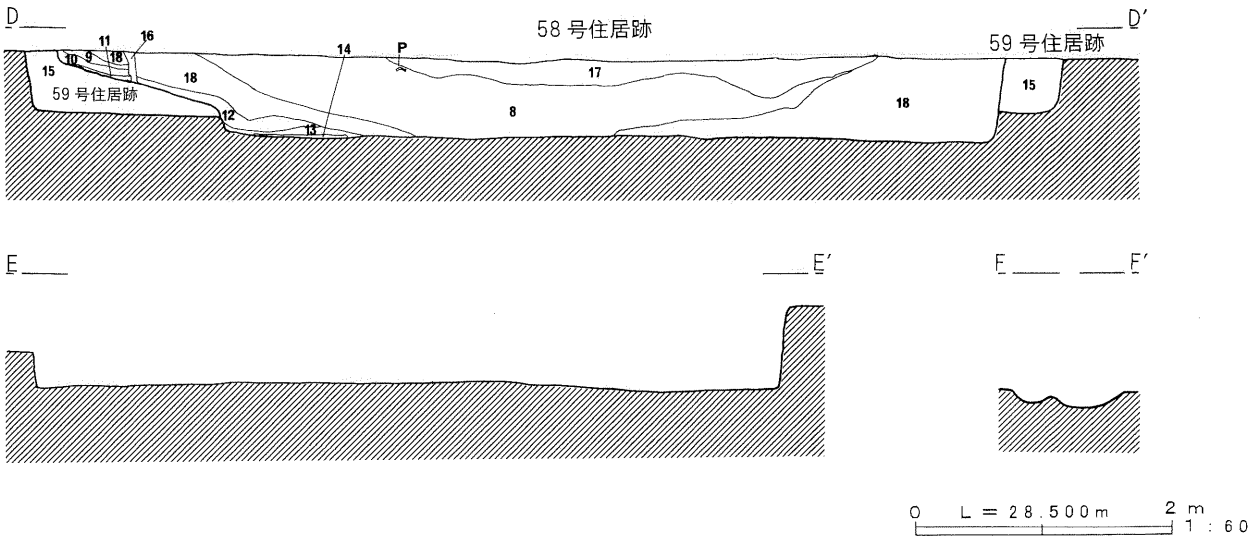
60号住居跡
（第192図）

AH・AI－21・22グリッドに位置する。南東壁で61号住居跡を切っている。

長軸5.05m、短軸4.62mの長方形を呈する。主軸方向はN－64°－Eを指す。確認面からの深さは59cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄色ない



第185図　E・F区58・59号住居跡(1)



58·59 号住居跡土層

1 暗赤褐色(2.5YR3/2)粘土。焼土ブロックを含む。しまり良い。
2 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土。焼土粒を含む。しまり良い。
3 褐灰色(10YR5/1)粘土。焼土粒を含む。しまりやや悪い。
4 褐色(10YR4/4)粘土。焼土ブロック(多量)を含む。しまり良い。
5 黄褐色(10YR5/6)粘土。炭化物粒、焼土粒を含む。しまり良い。
6 褐色(7.5YR4/3)粘土。下部はところどころに炭化物層。焼土ブロックを含む。しまり良い。
7 灰黄褐色(10YR5/2)粘土。下部はところどころに炭化物層。炭化物ブロックを含む。しまり良い。
8 褐色(7.5YR4/3)粘土。下部には炭化物層。焼土ブロックを含む。しまり良い。
9 灰褐色(7.5YR4/2)粘土。下部には焼土層。焼土ブロック(多量)を含む。しまり良い。
10 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土。焼土粒(少量)を含む。しまり良い。
11 暗赤褐色(2.5YR3/2)焼土。しまり良い。
12 橙色・暗赤褐色(2.5YR7/8·2.5YR3/2)焼土。しまりやや良い。
13 褐灰色(10YR5/1)粘土。焼土粒、灰白色(10YR8/1)シルトを含む。しまりやや悪い。
14 暗赤褐色(2.5YR3/3)焼土。しまりやや良い。
15 黄褐色(10YR5/6)粘土。炭化物粒、焼土粒を含む。しまり良い。
16 褐灰色(10YR6/1)粘土。ところどころ酸化している。しまり良い。
17 灰黄褐色(10YR5/3)粘土。下部はところどころに炭化物層。炭化物ブロックを含む。しまり良い。
18 褐色(10YR4/4)粘土。炭化物粒を含む。しまり良い。

第186図　E・F区58・59号住居跡(2)

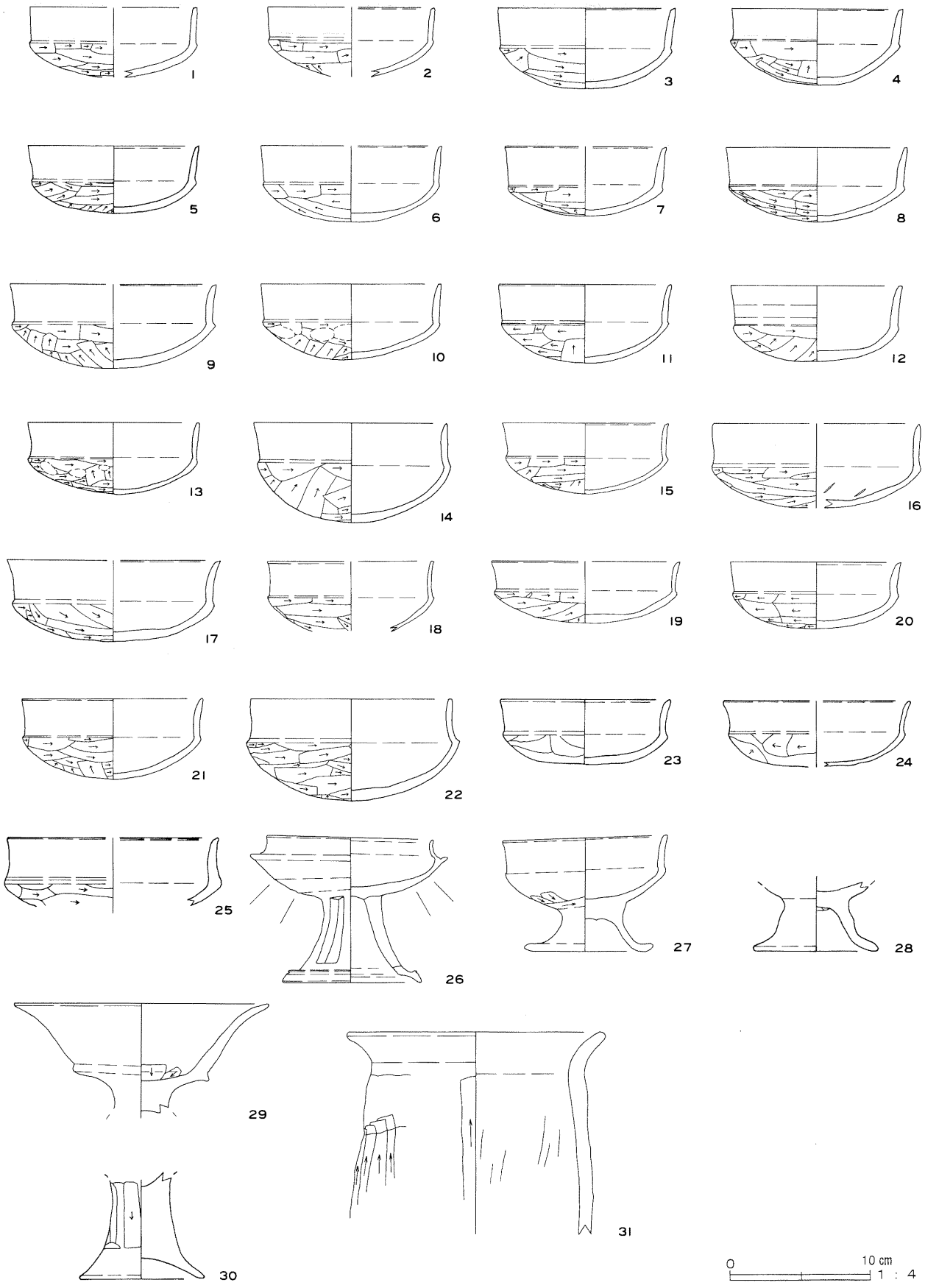
し黄褐色系の粘土、シルト（5～7・9～11・13～19層）を主体とする自然堆積層であった。床面直上には薄く灰層（8層）がみられた。壁溝はみられない。柱穴は4つ検出された。北東壁中央にも掘り込みがみられ、径58×39cmの楕円形で、床面からの深さ3cmと浅い。カマド北西脇に位置することから貯蔵穴の可能性が考えられる。

カマドは北東壁と南西壁に見られる。土層断面及び袖部の有無等から、北東壁のものが新しい。北東壁にみられるカマドは南東寄りに設けられている。煙道部は検出できなかった。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部から燃焼部の幅は36cmを測る。焚口部から燃焼部はほぼ平坦であり、燃焼部と煙道部の境で直角に立ち上がる。燃焼部からは土師器杯（No.6）が伏せた状態で検出された。覆土に天井部崩落土等はみられず、焼土層（1層）と灰層（3・4層）が検出された。

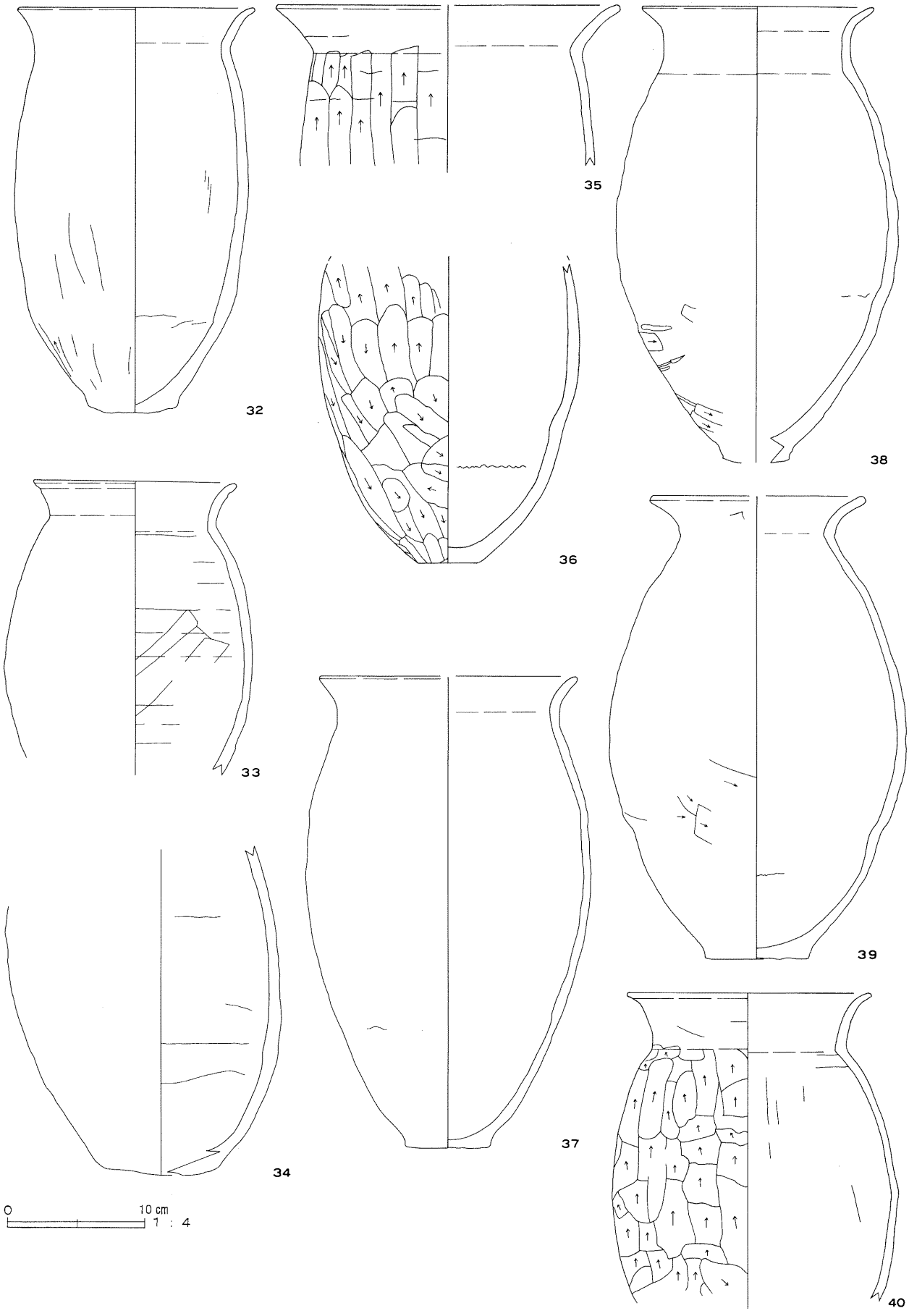
南西壁のカマドは、やや南東寄りに設けられている。袖部、火床面等はなく、煙道部のみ残存しており、途中部分が途切れ、先端がピット状の掘り込みとなっている。壁外へは1.43m程張り出している。覆土は焼土を含む単一層（12層）で、ピット状掘り込みの下層には、炭化物を主体とする層（11層）が検出された。

新カマド南東には、貯蔵穴がみられる。径78×72cmの不整楕円形で、深さ25cmを測る。覆土上層から、土師器甕（No.29）が検出された。

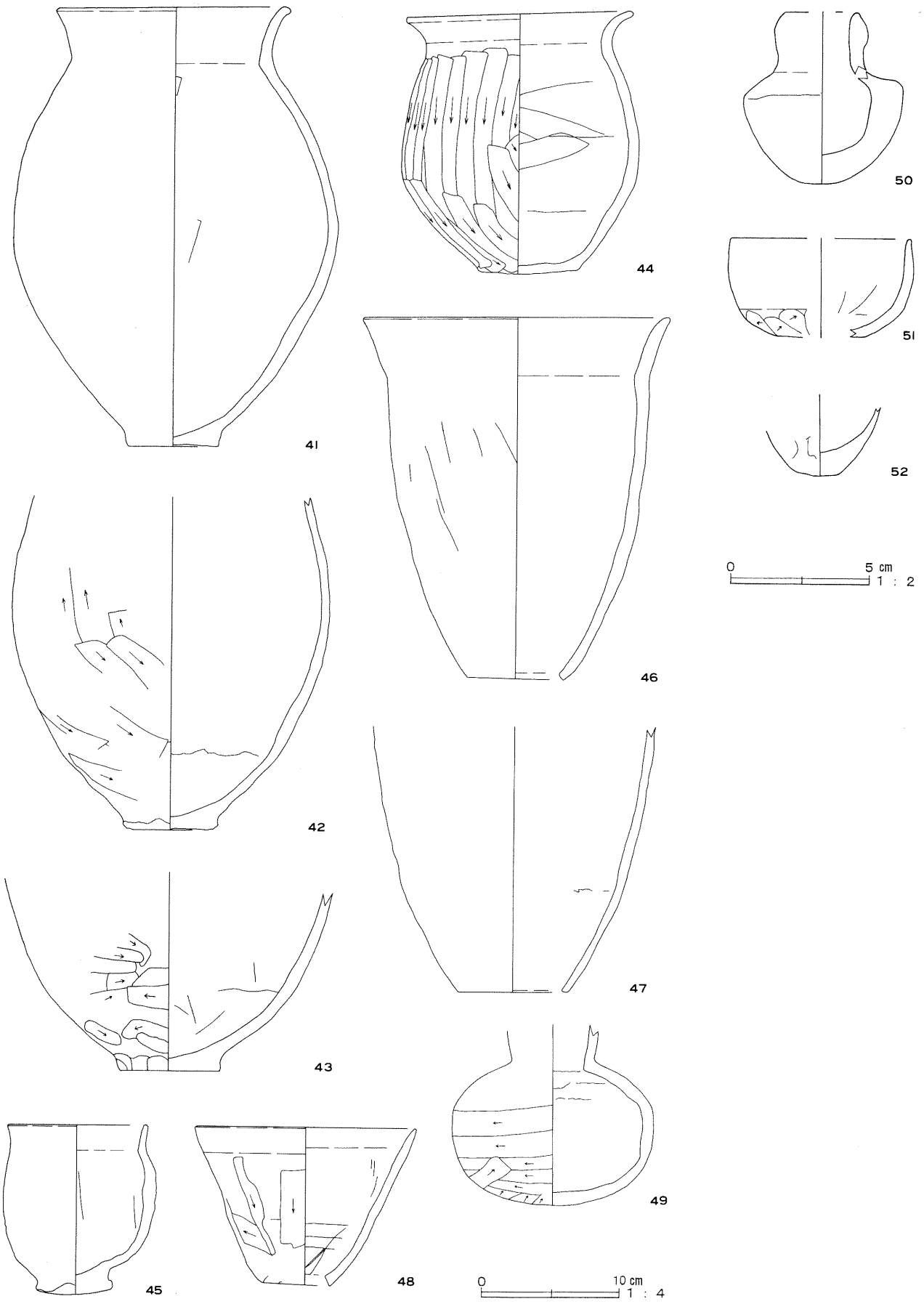
出土遺物（第193·194図）には、須恵器杯（No.1）、土師器杯（2～17）、高杯（18～21）、



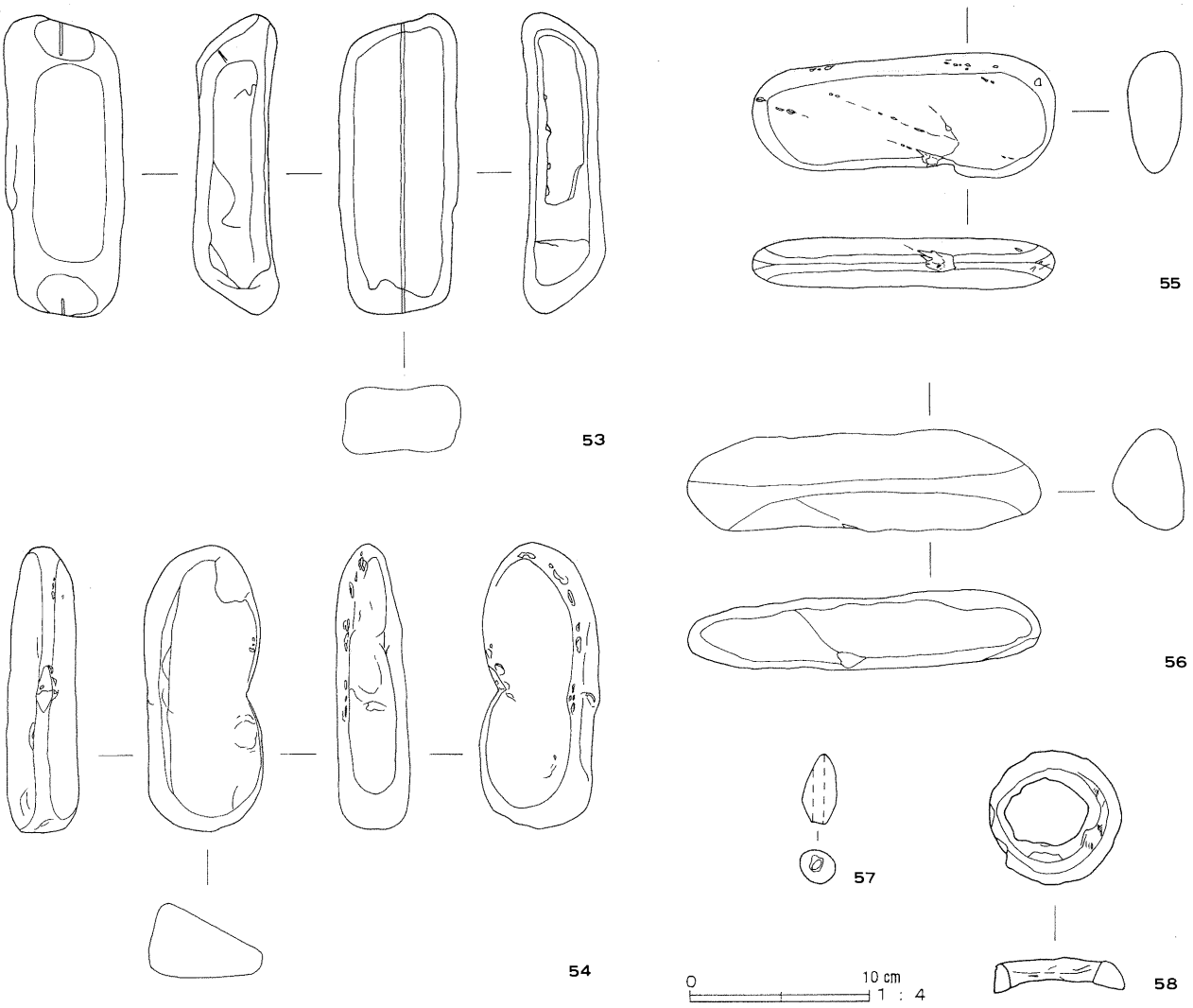
第187図　E・F区58号住居跡出土遺物(1)



第188図　E・F区58号住居跡出土遺物(2)



第189図　E・F区58号住居跡出土遺物(3)



第190図　E・F区58号住居跡出土遺物(4)

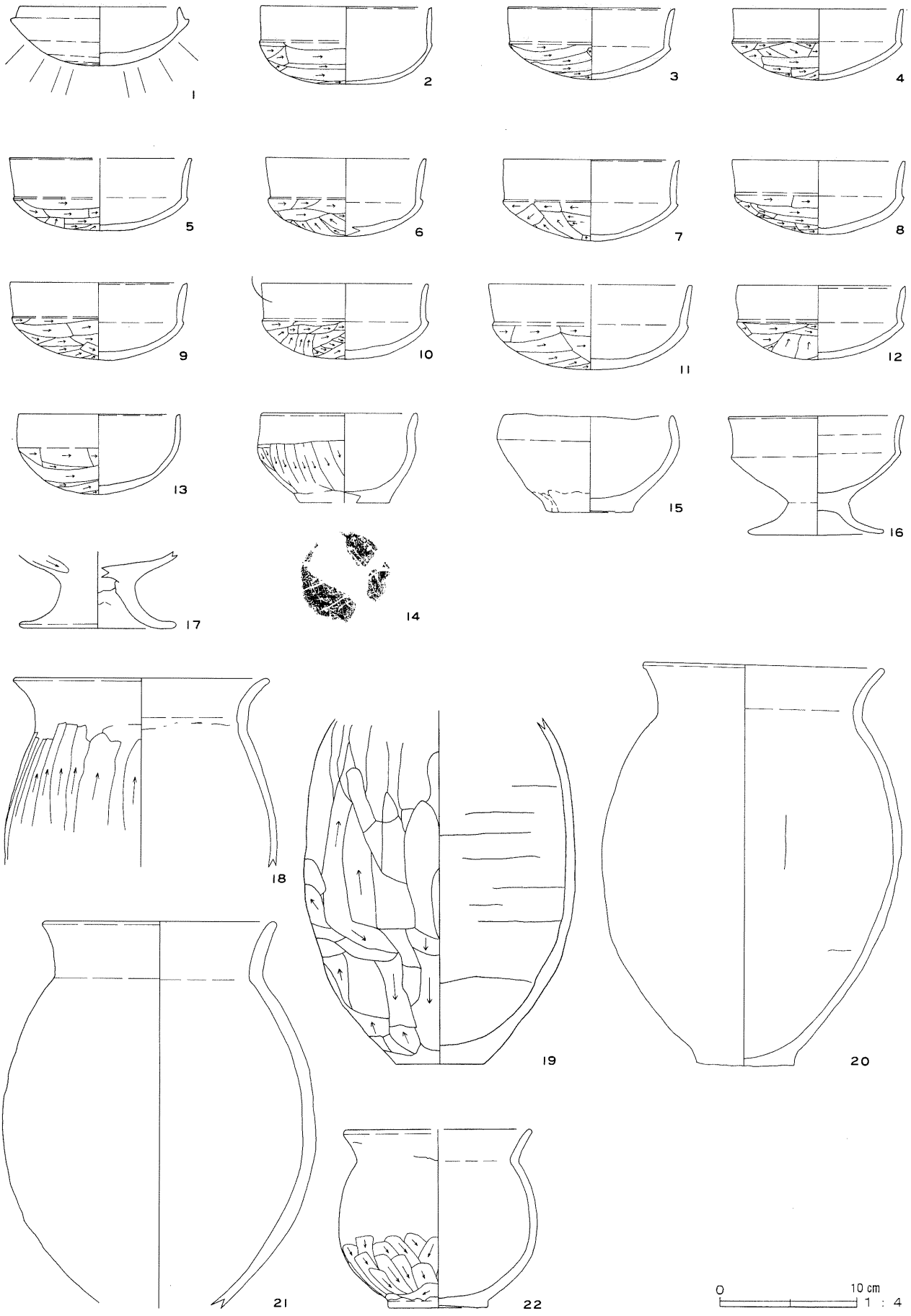
甕（22～33）、甑（34～36）、砥石（37）等がある。カマド、貯蔵穴を含めてほぼ全面から検出された。1は末野産である。土師器杯はすべて身の深い模倣杯である。2・15は黒斑を有し、7・9・17は煤の付着がみられた。高杯はすべて模倣杯に低い脚部の付くタイプである。甕は長胴甕（22～31）、丸胴甕（32）、小型のもの（33）がある。黒斑を有するものや煤の付着、二次加熱を受けたもの等がみられる。甑は器形が異なるが、すべて把手の付かないタイプである。37は川原石を使用している。

61号住居跡（第195図）

AI－21・22グリッドに位置する。北東部は調査区域外にあり、複数の同時期の住居跡と重複関係にあるが、本住居跡が最も新しい。北西部で60号住居跡に切られ、南東部で63・65号住居跡を切っている。

長軸5.34m、短軸5.07mの方形を呈するものと思われる。南北軸方向はN－26°－Eを指す。確認面からの深さは36cm、床面は、北西方向にやや傾く。覆土は黄灰色の粘土による単一層（1層）で、自然堆積と考えられる。炭化物を多量含んでいた。

壁溝、柱穴、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。



第191図　E・F区59号住居跡出土遺物

第90表　E・F区58号住居跡出土遺物観察表　（第187～190図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(12.0)	-	-	③①④	②	橙	1/3	
2	土師器杯	(12.0)	-	-	③①④	②	橙	1/2	
3	土師器杯	12.7	5.8	-	③①④	②	橙	口縁部1/5欠	
4	土師器杯	12.2	5.4	-	③⑥①④	②	明赤褐	一部欠	二次加熱。
5	土師器杯	12.3	4.8	-	③①④⑥	②	橙	一部欠	内外面煤付着。
6	土師器杯	(13.0)	5.5	-	③①④	②	橙	1/3	
7	土師器杯	(11.6)	5.0	-	③①④	②	黄橙	1/2	
8	土師器杯	13.0	5.4	-	③④①	②	明赤褐	完形	
9	土師器杯	(14.8)	6.0	-	③①④	②	橙	1/2	
10	土師器杯	12.8	5.6	-	③⑥①④	②	赤	口縁部1/5欠	外面に指頭痕。二次加熱。
11	土師器杯	12.4	5.6	-	③①④⑥	②	赤	1/2	二次加熱。
12	土師器杯	12.2	5.5	-	③①④	②	橙	1/2	外面黒斑有。
13	土師器杯	12.2	5.2	-	③①④⑥	②	赤	完形	外面に指頭痕。二次加熱。
14	土師器杯	13.9	7.2	-	③①④	②	赤	口縁部1/3欠	外面黒斑有。
15	土師器杯	12.0	5.1	-	③①	②	橙	1/2	外面黒斑有。
16	土師器杯	(14.6)	-	-	③①④	②	橙	1/3	外面黒斑有。
17	土師器杯	(15.2)	5.9	-	③①④⑥	②	橙	口縁部2/3欠	
18	土師器杯	(12.0)	-	-	③①②	②	橙	1/3	外面黒斑有。
19	土師器杯	(13.6)	4.4	-	③①④②	②	橙	1/3	
20	土師器杯	12.2	4.8	-	③①④⑥	②	橙	2/3	
21	土師器杯	12.9	5.8	-	③①④⑥	②	赤	一部欠	二次加熱。
22	土師器杯	14.4	7.4	-	③①④⑥	②	赤	完形	内面黒斑有。
23	土師器杯	12.2	4.8	-	④①②③⑥	②	にぶい橙	1/2	
24	土師器杯	(13.4)	(4.8)	-	③①②④	②	橙	1/2	
25	土師器杯	(15.0)	-	-	①④③②	②	橙	1/4	
26	須恵器高杯	11.9	10.6	10.0	②①④	②	黄灰	一部欠	三方透かし。
27	土師器高杯	11.9	8.4	9.3	③①④	②	浅黄橙	完形	外面黒斑有。
28	土師器高杯	-	-	9.0	③①④②⑥	②	橙	脚部のみ	
29	土師器高杯	18.2	-	-	①②④	②	橙	杯部のみ	
30	土師器高杯	-	-	8.1	④①⑥②③	②	にぶい黄橙	脚部のみ	
31	土師器甕	18.6	-	-	②⑥④	②	にぶい褐	1/3	磨滅。
32	土師器甕	17.3	29.9	6.4	⑥③④①	②	橙	一部欠	胴部外面黒斑有。二次加熱。磨滅。
33	土師器甕	14.8	-	-	①②④⑥	②	橙	1/2	外面黒斑有。二次加熱。外面磨滅。
34	土師器甕	-	-	8.0	①④	②	にぶい黄	1/2	外面磨滅。
35	土師器甕	(24.8)	-	-	⑥③①②	①	浅黄橙	口縁部1/2	輪積痕有。
36	土師器甕	-	-	4.4	①⑥④③②	②	橙	2/5	
37	土師器甕	(18.8)	34.7	6.2	③①⑥④	②	橙		磨滅。
38	土師器甕	16.8	-	(4.8)	⑥③④	②	橙	2/3	外面黒斑有。磨滅。
39	土師器甕	15.6	34.0	7.5	⑥③①	②	浅黄橙	3/4	磨滅。剝離。
40	土師器甕	17.4	-	-	⑥①④②	②	橙	上半2/3	
41	土師器甕	17.0	32.3	6.4	③④⑥①	②	橙	一部欠	二次加熱。磨滅。
42	土師器甕	-	-	7.0	④⑥①	②	にぶい黄橙	下半2/3	二次加熱。外面剝離。
43	土師器甕	-	-	7.4	⑥④③	②	橙	下位のみ	
44	土師器甕	16.4	19.4	7.2	①⑥③	②	にぶい橙	5/6	
45	土師器甕	10.2	12.4	5.6	⑥③④①	②	明赤褐	3/4	外面磨滅。
46	土師器甑	22.3	26.7	7.0	⑥③④①	②	橙	一部欠	外面黒斑有。
47	土師器甑	-	-	7.9	③⑥④①	②	にぶい黄橙	下位のみ	外面黒斑有。磨滅。
48	土師器甑	16.2	11.9	4.9	③⑥	②	にぶい赤褐	一部欠	胴部外面黒斑有。
49	土師器坩	-	-	-	③①④②⑥	②	橙	1/2	外面黒斑有。
50	手捏ね土器	2.6	6.3	-	⑥①④③②	①	にぶい橙	口縁部3/4欠	
51	手捏ね土器	(6.5)	-	-	③④①	②	橙	1/2	
52	手捏ね土器	-	-	-	①③④⑥	②	橙	底部のみ	
53	砥石	長さ 16.9	幅 6.6	厚さ 3.8				完形	全面使用。砂岩製。
54	砥石	長さ 16.6	幅 6.0	厚さ 4.2				完形	一面使用。
55	砥石	長さ 16.8	幅 8.0	厚さ 3.1				完形	一面使用。
56	砥石	長さ 19.6	幅 5.7	厚さ 4.2				完形	側面使用。
57	土錘	長さ 3.9	最大径 1.9	孔径 0.6				完形	
58	土製紡錘車	径 7.3	孔径 4.7	厚さ 1.6				—	甑底部転用。

出土遺物（第196図）には、須恵器杯（No.1・2）、土師器杯（3～20）、高杯（21・22）、甕（23・24）、盌（25）、壺（26・27）、管玉（28～30）等があり、杯類が多数検出された。床面ほぼ中央付近からまとまって検出され、特に北東部に集中してみられた。1・2はと

第91表　E・F区59号住居跡出土遺物観察表　（第191図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器杯	11.8	4.3	-	⑥①④	③	褐灰	一部欠	
2	土師器杯	(12.6)	5.7	-	③④①②	②	橙	1/3	外面黒斑有。
3	土師器杯	12.3	5.2	-	③②①④	②	橙	完形	
4	土師器杯	12.5	5.2	-	③①④②	②	橙	完形	外面黒斑有。
5	土師器杯	(13.4)	5.3	-	③④①	②	橙	1/2	外面黒斑有。
6	土師器杯	11.8	5.7	-	③④①	②	赤橙	一部欠	
7	土師器杯	13.0	5.9	-	③①④⑥	②	橙	1/2	
8	土師器杯	12.7	5.4	-	③④①	②	橙	一部欠	
9	土師器杯	13.0	5.6	-	③①④②	②	橙	1/2	
10	土師器杯	12.3	5.5	-	③①④	②	橙	一部欠	外面煤付着。
11	土師器杯	(15.0)	6.2	-	③①④⑥	②	橙	口縁部1/2欠	
12	土師器杯	12.8	5.4	-	③①④	②	橙	一部欠	内外面煤付着。
13	土師器杯	11.8	5.9	-	③①④	②	橙	2/3	外面黒斑有。
14	土師器杯	11.6	6.6	6.6	⑥④①	②	橙	2/3	木葉痕有。内外面煤付着。
15	土師器杯	12.4	7.1	6.4	①③④⑥	②	橙	完形	指頭痕有。磨滅。
16	土師器高杯	12.8	8.8	9.9	①④③	②	橙	一部欠	磨滅。
17	土師器高杯	-	-	(11.5)	③①④	②	明赤褐	脚部のみ	
18	土師器甕	18.8	-	-	④⑥①	②	橙	上位のみ	
19	土師器甕	-	-	6.4	①⑥②④	②	橙	4/5	
20	土師器甕	17.7	29.7	7.1	⑥③①	②	橙	5/6	二次加熱。磨滅。
21	土師器甕	17.2	-	-	③④①	②	橙	3/4	胴下部剝離。黒斑有。二次加熱。
22	土師器甕	(13.9)	13.1	7.4	③⑥④①	②	橙	2/3	二次加熱。胴上部磨滅。

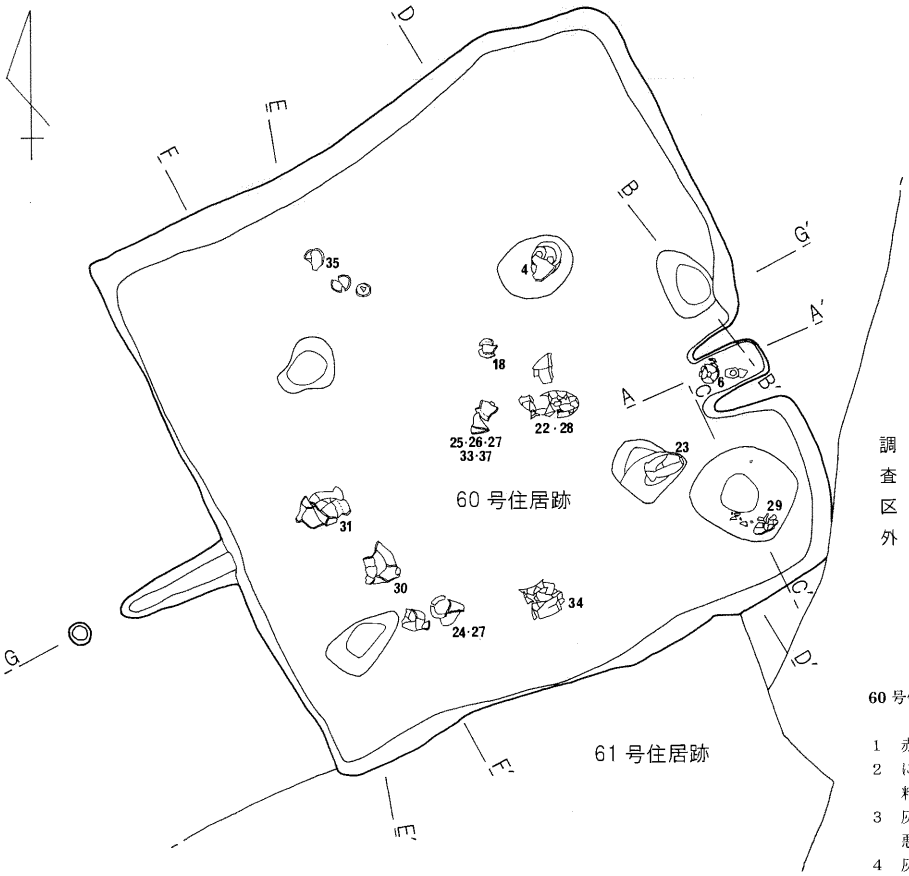
もに末野産である。内外面に煤の付着がみられた。土師器杯は、すべて模倣杯であるが、3～6は杯身模倣杯であり、その他は杯身模倣杯である。後者のうち、20は他に比べて体部と底部境にある稜が不明瞭である。煤の付着や黒斑を有するものが多数みられた。高杯はともに脚部のみの検出である。21はやや細身で高いのに対し、22は低い。21には三角形の透かし孔が3つみられた。甕は丸胴甕（23）と長胴甕（24）がある。23は外面に黒斑を有し、摩滅が顕著であった。25は口縁部の屈曲が強い。26は小型の短頸壺である。27は球形を呈する。外面に黒斑を有する。管玉は3点検出された。長さにバラツキがあるが、径はいずれも1.8cmを測る。28・29は完形品である。

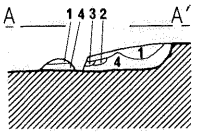
62号住居跡
（第197図）

AI・AJ－21・22グリッドに位置する。複数の同時期の住居跡と重複関係にあり、本住居跡が最も新しい。北東部で65号住居跡、南東部で63・64号住居跡、北西部で67・68号住居跡を切っている。また、カマド煙道部先端は調査区域外にある。

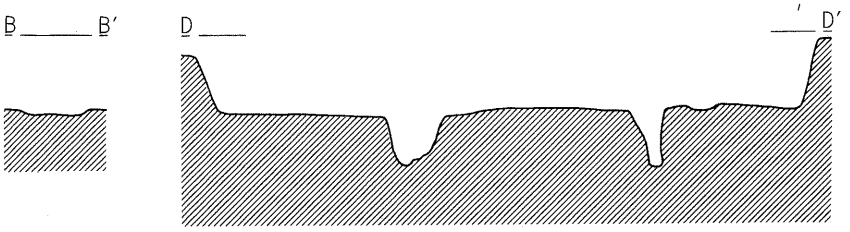
長軸7.35m、短軸6.87mの方形を呈する。主軸方向はN－61°－Eを指す。確認面からの深さは56cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄色系のシルト（8～11層）が主体となり、自然堆積と考えられる。壁溝はみられず、柱穴は3つ検出された。

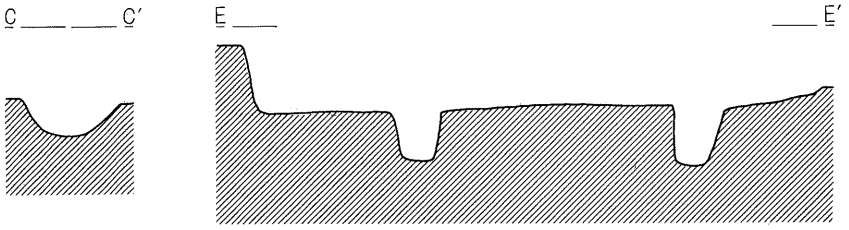
カマドは北東壁のほぼ中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面は被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は62cm、燃焼部は43cm、煙道部は調査区域外との境で30cmを測る。焚口部には径93×61cmの楕円形状の掘り込みがみられ、床面からの深さは6cmを測る。燃焼部から煙道部は、ほぼ平坦である。覆土は上部を削平してしまったが、住居跡覆土の下から天井部崩落土（12層）、炭化物層（14層）、被熱した赤色化した火床面（15層）の順で確認された。貯蔵穴はみられなかった。

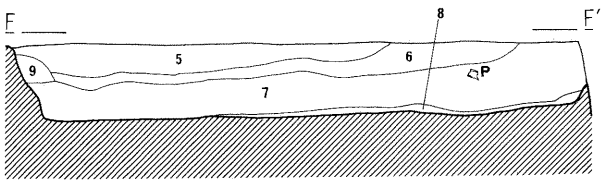


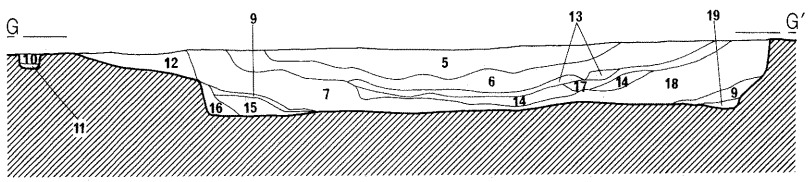


0 L＝28.000m 1m
1：30







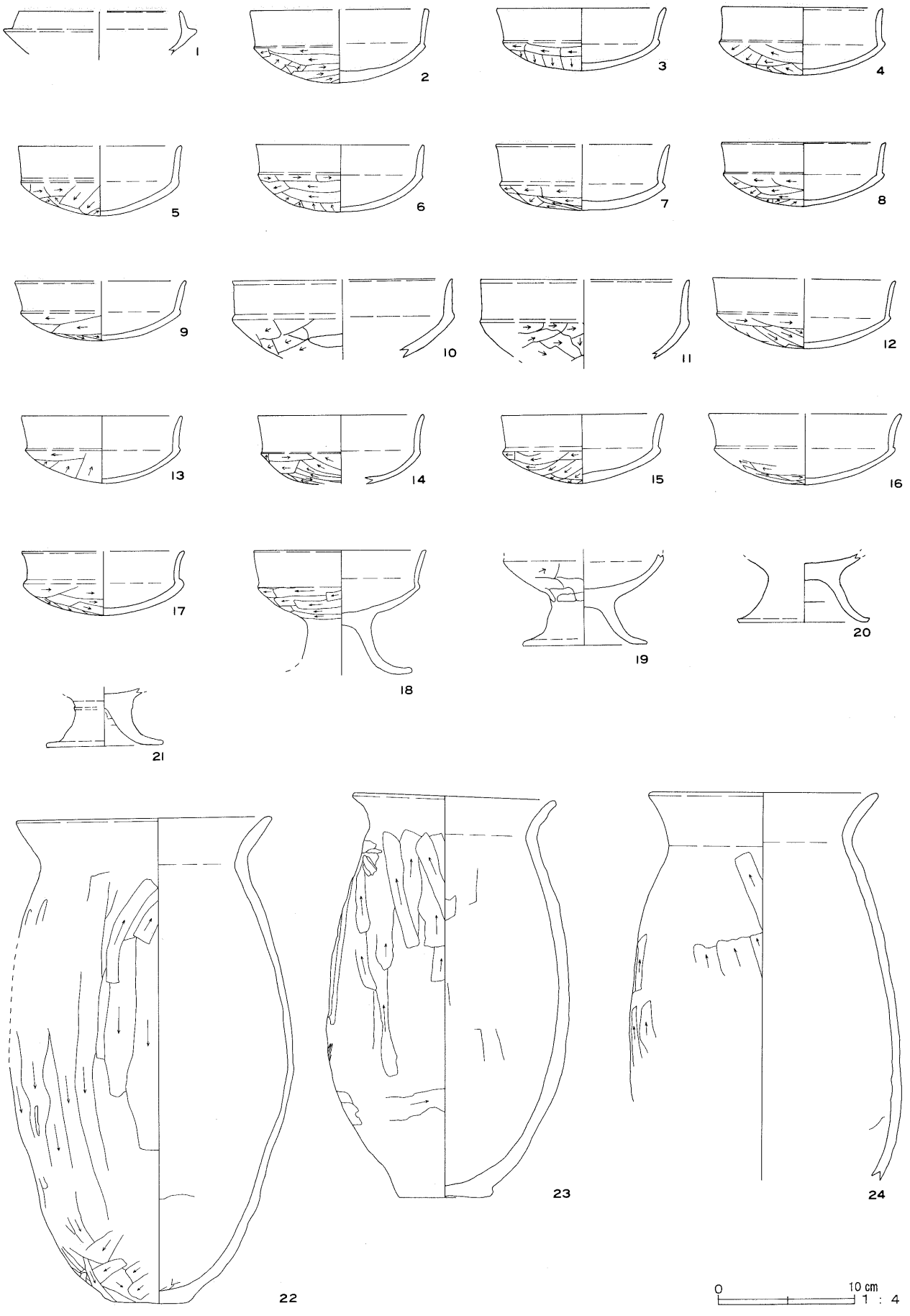


60 号住居跡土層

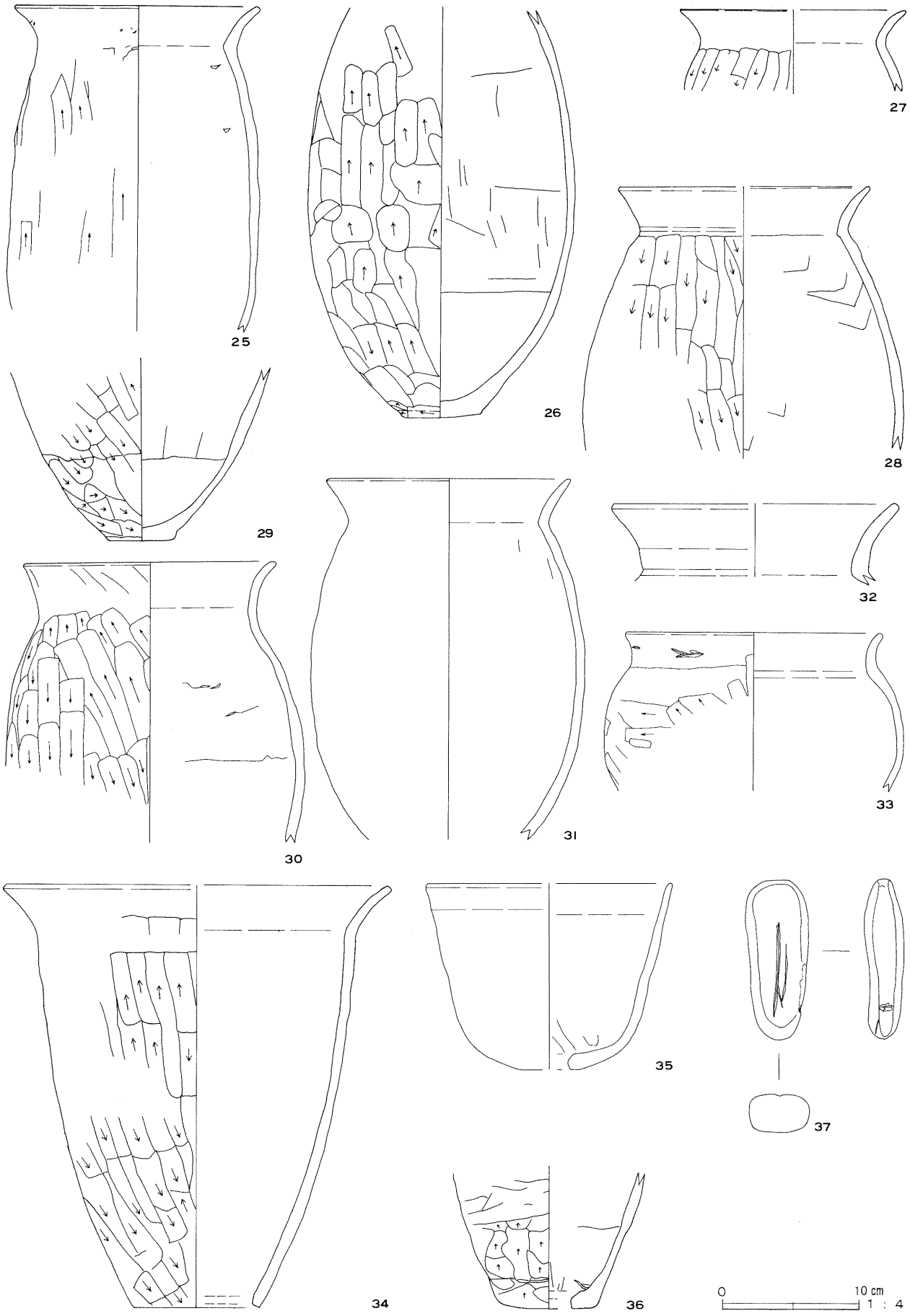
1 赤褐色(5YR4/6)焼土層。しまり悪い。
2 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。
3 灰色(N5/0)灰層。焼土粒(微量)を含む。しまり悪い。粘性強い。
4 灰色(N5/0)灰層。焼土粒、炭化物粒(多量)を含む。しまり悪い。粘性強い。
5 灰黄褐色(10YR5/2)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、黄褐色(2..5YR6/4)粘土ブロック(多量)、焼土粒、炭化物粒(少量)を含む。しまり良い。
6 褐灰色(10YR6/1)粘土。明黄褐色(2.5YR6/6)粘土ブロック(多量)、炭化物(帯状)を含む。
7 灰黄色(2.5Y6/2)粘土。焼土粒、炭化物粒(少量)を含む。しまり良い。
8 灰層。焼土ブロック(若干)を含む。しまり悪い。
9 明黄褐色(10YR6/6)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。
10 黄褐色(2.5YR5/6)粘土。焼土ブロック、灰(多量)を含む。しまり良い。
11 炭化物層。焼土粒を多く含む。しまりやや悪い。
12 黄褐色(2.5YR5/6)粘土。明赤褐色(5YR5/6)焼土ブロック(帯状)を含む。しまり良い。
13 黄灰色(2.5Y6/1)粘土。浅黄色(2.5Y7/4)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。
14 黄褐色(10YR5/6)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土ブロック、炭化物(帯状)を含む。しまり良い。
15 灰黄色(2.5Y6/2)粘土。焼土粒、炭化物粒(微量)を含む。しまり良い。
16 12 層と同質。
17 灰黄褐色(10YR5/2)粘土。焼土粒(多量)、細砂ブロック(少量)を含む。しまりやや悪い。
18 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒、灰ブロック(若干)を含む。
19 黄褐色(2.5Y5/4)粘土。焼土粒(多量)を含む。しまり悪い。

0 L＝28.400m 2m
1：60

第192図 E・F区60号住居跡



第193図　E・F区60号住居跡出土遺物(1)



第194図　E・F区60号住居跡出土遺物(2)

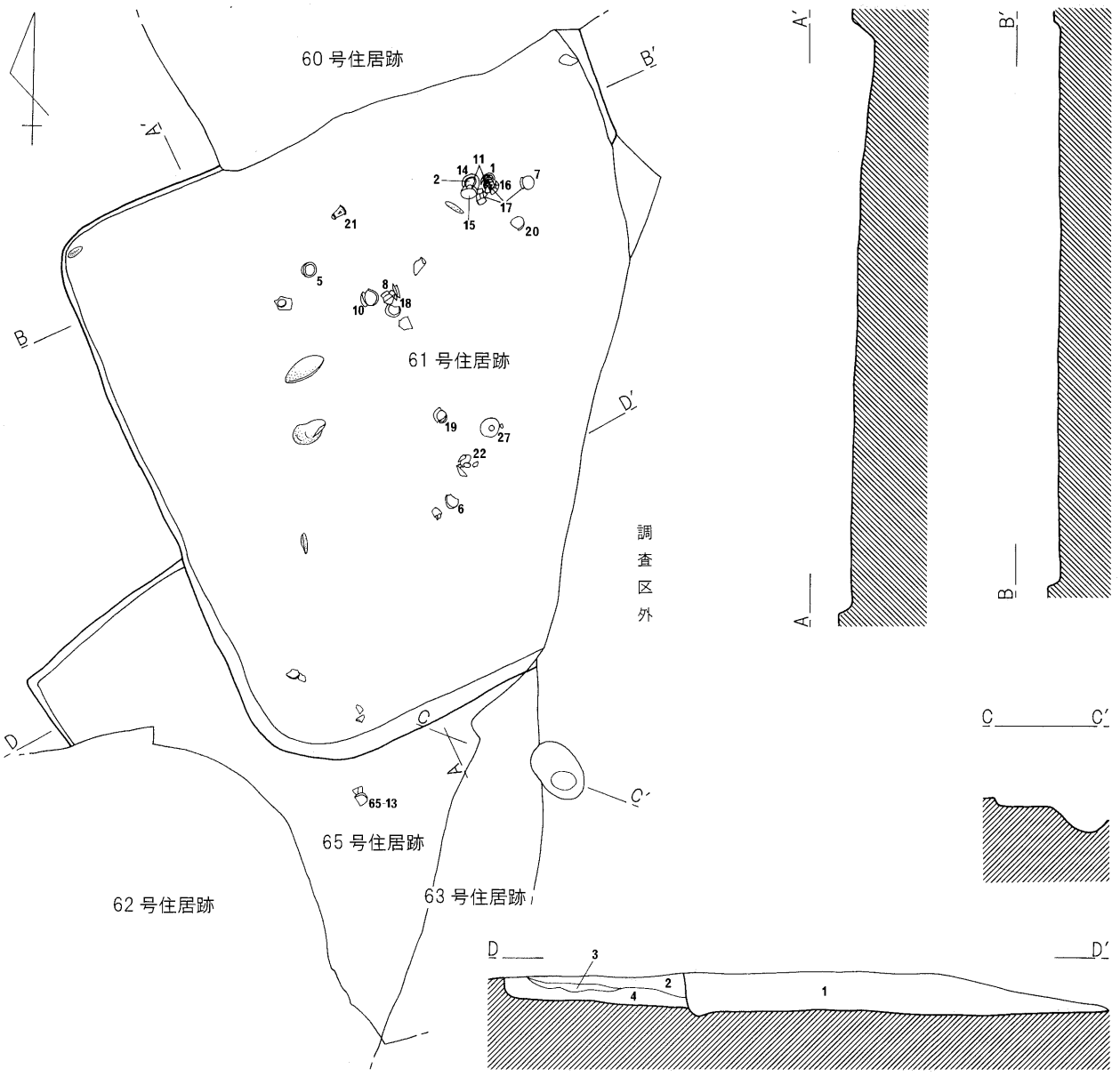
第92表　E・F区60号住居跡出土遺物観察表　(第193・194図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器杯	(12.2)	-	-	①④⑥	②	褐灰	1/5	
2	土師器杯	(13.0)	5.3	-	③⑥①④	②	明赤褐	2/3	外面黒斑有。
3	土師器杯	12.5	4.5	-	③①④	②	橙	1/2	
4	土師器杯	11.8	4.9	-	③⑥①④	②	橙	2/3	
5	土師器杯	(12.0)	5.1	-	③①④	②	橙	1/4	
6	土師器杯	12.5	4.9	-	③①⑥	②	明赤褐	口縁部1/3欠	
7	土師器杯	(12.8)	4.8	-	③①④	②	橙	1/4	内外面煤付着。
8	土師器杯	12.1	4.6	-	③①④	②	橙	口縁部1/3欠	
9	土師器杯	(12.6)	4.3	-	⑥①③④	②	橙	1/2	内外面煤付着。
10	土師器杯	(16.2)	-	-	①④③②	②	橙	1/5	
11	土師器杯	(15.4)	-	-	④①③②⑥	②	明赤褐	1/6	
12	土師器杯	(13.4)	5.1	-	③①④	②	橙	1/3	
13	土師器杯	11.9	4.9	-	③①④⑥	②	橙	3/4	
14	土師器杯	12.2	-	-	③⑥①④	②	橙	2/3	
15	土師器杯	12.0	5.0	-	③①④	②	橙	口縁部一部欠	外面黒斑有。
16	土師器杯	(14.2)	5.2	-	⑥③①④	②	橙	1/4	
17	土師器杯	(12.0)	4.7	-	③①④	②	橙	1/2	内外面煤付着。
18	土師器高杯	12.8	(9.2)	-	③①④⑥	②	橙	2/3	
19	土師器高杯	-	-	9.0	③②①④⑥	②	橙	3/5	
20	土師器高杯	-	-	(9.4)	②①④⑥③	②	橙	脚部2/3	
21	土師器高杯	-	-	8.4	①③④②	②	にぶい橙	脚部のみ	
22	土師器甕	18.9	36.2	5.0	③⑥①④	②	にぶい黄橙	3/4	外面黒斑有、煤付着。二次加熱。
23	土師器甕	15.0	30.1	7.0	③①⑥④	②	橙	一部欠	内外面黒斑有。
24	土師器甕	16.7	-	-	③①④⑥	②	にぶい橙	1/2	磨滅。
25	土師器甕	18.0	-	-	③⑥	②	橙	2/3	磨滅。
26	土師器甕	-	-	6.0	⑥①④	②	黄橙	1/2	
27	土師器甕	(16.4)	-	-	⑥①④②③	②	橙	上位2/3	
28	土師器甕	(18.0)	-	-	②①④⑥	②	橙	上半1/2	
29	土師器甕	-	-	5.0	⑥④③	②	明黄褐	下半1/2	
30	土師器甕	18.5	-	-	③①⑥④	②	浅黄橙	1/2	
31	土師器甕	17.8	-	-	⑥③①④	②	明赤褐	4/5	胴下部外面剝離。二次加熱。
32	土師器甕	(20.6)	-	-	①④②⑥③	②	橙	口縁部1/2	
33	土師器甕	18.9	-	-	③⑥	②	浅黄橙	2/3	内面黒斑有。
34	土師器甑	(28.0)	31.1	(9.2)	⑥②①④③	②	橙	1/2	
35	土師器甑	(18.2)	13.7	(4.6)	③④⑥	②	橙	1/2	外面煤付着。磨滅。
36	土師器甑	-	-	-	①③④⑥	②	にぶい橙	下位のみ	
37	砥石	長さ　11.8　幅　4.5　厚さ　2.9						完形	一面使用。シルト岩製。

出土遺物（第199～201図）には、須恵器蓋（No.1）、土師器杯（2～11）、高杯（12・13）、甕(14～30)、鉢(31)、壺(32)、甑(33～38)、羽口(39・40)、土製支脚(41)、土錘(42～69)、砥石（70）等がある。床面のほぼ全面から検出されているが、特にカマド南西部に集中してみられた。1は口縁部を欠く。末野産である。土師器杯はすべて模倣杯である。2～4は杯身模倣杯、その他は杯身模倣杯である。いずれも口径が大きく、浅身である。3・4・10・11は煤が付着していた。高杯はともに口縁部が大きく外反し、脚部が高く、裾が大きく広がるタイプである。甕は長胴甕(14～22・30)、丸胴甕(23～25)、小型のもの(26～29)等がある。18・22・24・25・28・30は摩滅が顕著であった。22は底部に木葉痕が残り、二次加熱を受けている。31は丸底で、球形を呈する。外面に黒斑を有し、煤が付着していた。32は外面にヘラ削り後、刷毛目調整が施されている。甑は把手を持つタイプ（33・34）と持たないタイプ（35～37・38）がある。38のみ他と比べて小型である。羽口はともに大半を欠く。土製支脚は上部のみの検出であり、中心に孔を持つ。39・40は外面に輪積痕が残る。土錘は合計28点と多数検出された。長さ5.5cm前後、径1.5cm前後、孔径0.6cmのものが主体となる。砥石は一面のみ使用している。

63号住居跡（第197図）　AI・AJ－21・22グリッドに位置する。大半が調査区域外にあり、検出できたのは南西壁付近のみである。また複数の同時期の住居跡と重複関係にある。北側では61号住居跡、南西部では62号住居跡に切られ、北西部では65号住居跡、南西部で64号住居跡を切っている。

規模・平面形等は不明であるが、南西壁は現長7.52mを測る。南北軸方向はN－20°－Eを指す。確認面からの深さは37cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系の粘土（2～5層）が主体となり、中層には炭化物層（3層）がみられた。自然堆積と考えられる。本住居跡に付随する柱穴はみられない。北西部の調査区域外との境にある柱穴は65

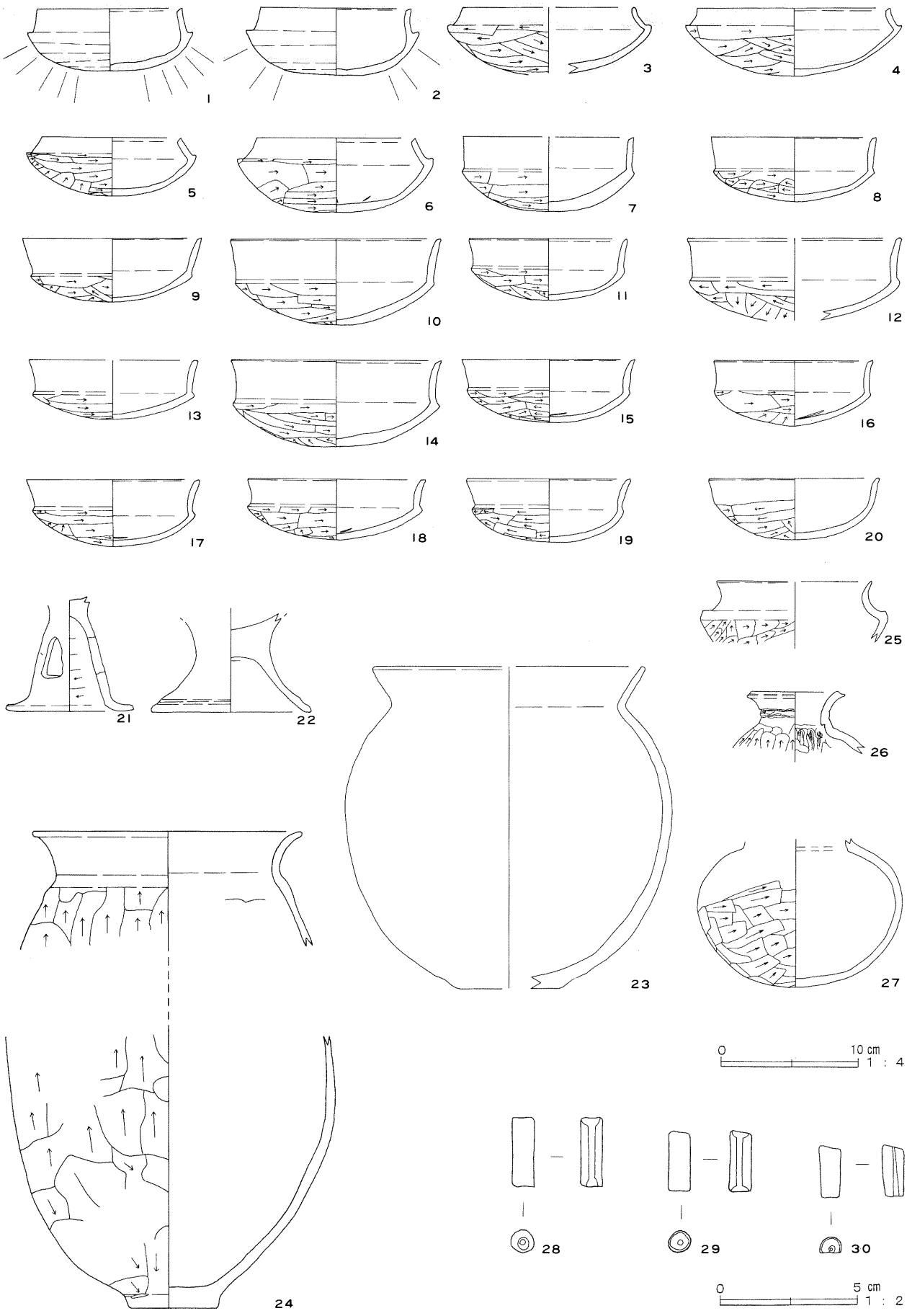


61・65 号住居跡土層

1　黄灰色(2.5Y5/1)粘土。黄褐色(10YR5/6)粘土粒、炭化物粒(多量)、焼土粒(微量)を含む。しまり良い。
2　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。
3　炭化物層。焼土粒多く含む。しまり悪い。
4　明黄褐色(10YR6/6)粘土。マンガン粒、灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、炭化物(帯状)を含む。しまり良い。

0　L＝28.400m　2m　1：60

第195図　E・F区61・65号住居跡



第196図　E・F区61号住居跡出土遺物

第93表　E・F区61号住居跡出土遺物観察表　（第196図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器杯	10.6	4.6	-	①③④⑥	③	灰	口縁部一部欠	表面剝離。内外面煤付着。
2	須恵器杯	11.0	4.9	-	①④⑥	③	灰	完形	内外面煤付着。
3	土師器杯	12.8	-	-	③①④⑥	②	橙	1/2	内外面煤付着。
4	土師器杯	14.0	5.0	-	①③④	②	にぶい褐	1/2	内外面煤付着。
5	土師器杯	10.1	4.3	-	③①④	②	橙	完形	
6	土師器杯	11.6	5.5	-	③①⑥④	②	にぶい橙	2/3	外面煤付着。
7	土師器杯	12.4	5.5	-	⑥①③	②	橙	口縁部2/3欠	外面黒斑有。
8	土師器杯	12.0	4.7	-	③①⑥	②	明赤褐	口縁部1/6欠	外面黒斑有。
9	土師器杯	13.0	4.7	-	③①④	②	橙	1/2	
10	土師器杯	15.4	6.4	-	③①④	②	橙	口縁部一部欠	
11	土師器杯	11.6	4.5	-	③①⑥	②	明赤褐	一部欠	
12	土師器杯	(15.6)	-	-	③①②④	②	橙	1/4	外面煤付着。
13	土師器杯	(12.4)	4.3	-	⑥①③④	②	橙	2/5	外面黒斑有。
14	土師器杯	15.4	6.4	-	③①⑥	②	明赤褐	完形	
15	土師器杯	12.6	4.7	-	③①④⑥	②	橙	口縁部一部欠	
16	土師器杯	11.6	4.8	-	③①⑥	②	明赤褐	2/3	外面黒斑有。
17	土師器杯	12.6	5.0	-	③①④⑥	②	明赤褐	口縁部一部欠	外面黒斑有。
18	土師器杯	13.0	4.5	-	③①⑥	②	橙	完形	外面黒斑有。
19	土師器杯	12.0	4.7	-	③①④⑥	②	橙	完形	外面黒斑有。
20	土師器杯	12.4	4.5	-	③①⑥④	②	橙	口縁部1/4欠	
21	土師器高杯	-	-	(9.4)	①③④⑥	②	橙	脚部のみ	三方透かし。
22	土師器高杯	-	-	11.7	③②①⑥	②	橙	脚部2/3	
23	土師器甕	(20.0)	(23.7)	(7.4)	③①	②	橙	2/3	外面黒斑有。磨滅。
24	土師器甕	19.8	(35.0)	5.8	①③⑥④②	②	橙	1/2	
25	土師器盌	(11.4)	-	-	②③①⑥	②	橙	1/5	
26	土師器壺	7.2	-	-	①③④⑥	①	黒褐	上位のみ	
27	土師器壺	-	-	-	③①④⑥	②	黄橙	口縁部欠	外面黒斑有。
28	管玉	長さ 2.6	最大径 0.8	孔径 0.2				完形	滑石製。
29	管玉	長さ 2.2	最大径 0.8	孔径 0.2				完形	滑石製。
30	管玉	長さ 1.9	最大径 0.8	孔径 0.2				一部欠	碧玉製。

号住居跡のものである。

壁溝、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

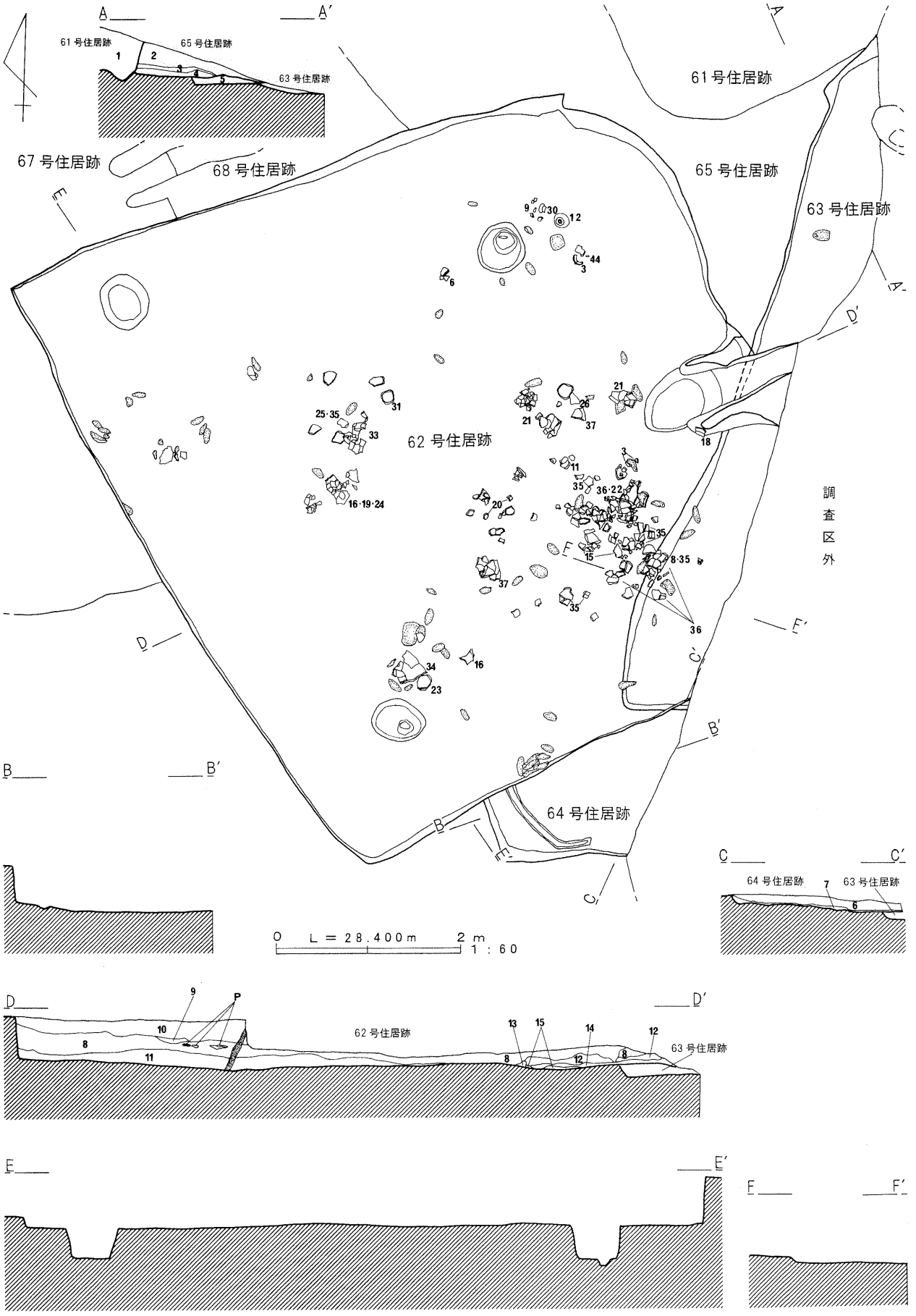
64号住居跡（第197図）　AJ－22グリッドに位置する。南西隅付近のみの検出である。東側が調査区域外にあり、北西部は62・63号住居跡に切られている。

規模・平面形等は不明である。確認面からの深さは51cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は下層のみの確認であるが、黄橙色系のシルト（6層）であり、床面直上には薄い炭化物層（7層）がみられた。自然堆積と考えられる。壁溝は壁から5～32cm離れて巡っている。幅は10cm前後、床面からの深さは4cm程を測る。

柱穴、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

出土遺物（第201図）は、土師器高杯（No.64－1）のみである。低い脚部のみの検出である。覆土中からの検出である。

65号住居跡（第195図）　AI－21・22グリッドに位置する。複数の同時期の住居跡と重複関係にあり、大半を欠く。北東部で61号住居跡、南東部で63号住居跡、南西部で62号住居跡にそれぞれ切られている。



第197図　E・F区62・63・64号住居跡

62・63・64号住居跡土層

1 黄灰色(2.5Y5/1)粘土。黄褐色(10YR5/6)粘土粒、炭化物粒(多量)、焼土粒(微量)を含む。しまり良い。
2 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。
3 炭化物層。焼土粒多く含む。しまり悪い。
4 明黄褐色(10YR6/6)粘土。マンガン粒、灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、炭化物(帯状)を含む。しまり良い。
5 黄褐色(2.5Y5/3)粘土。マンガン粒、明黄褐色(10YR6/6)粘土(多量)、炭化物(帯状)を含む。しまりやや悪い。
6 にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト。焼土粒(少量)を含む。
7 黒褐色(10YR2/2)粘土。床直上では炭化物が帯状に堆積。
8 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト。土器を多く包含。粘性強い。
9 灰黄褐色(10YR5/2)粘土。炭化物・焼土粒(多量)を含む。しまり悪い。
10 浅黄色(2.5Y7/4)シルト。炭化物(微量)を含む。
11 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト。8とほぼ同質。
12 灰黄色(2.5Y6/2)粘土。カマド天井崩落土。下部が被熱により焼土ブロック化。しまり非常に良い。
13 灰黄色(2.5Y6/2)粘土。12層と同一。焼土粒・炭化物(多量)を含む。しまり悪い。
14 黒褐色(2.5Y3/2)炭化物層。
15 赤色(10R5/8)粘土。地山が被熱により焼土化。火床。

規模・平面形等は不明である。確認面からの深さは31cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系の粘土（2・4層）を主体とし、中層には炭化物層（3層）がみられた。また、4層中には炭化物を帯状に含んでいた。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。柱穴は調査区域外との境に1つみられた。

壁溝・カマド・貯蔵穴等は検出されなかった。

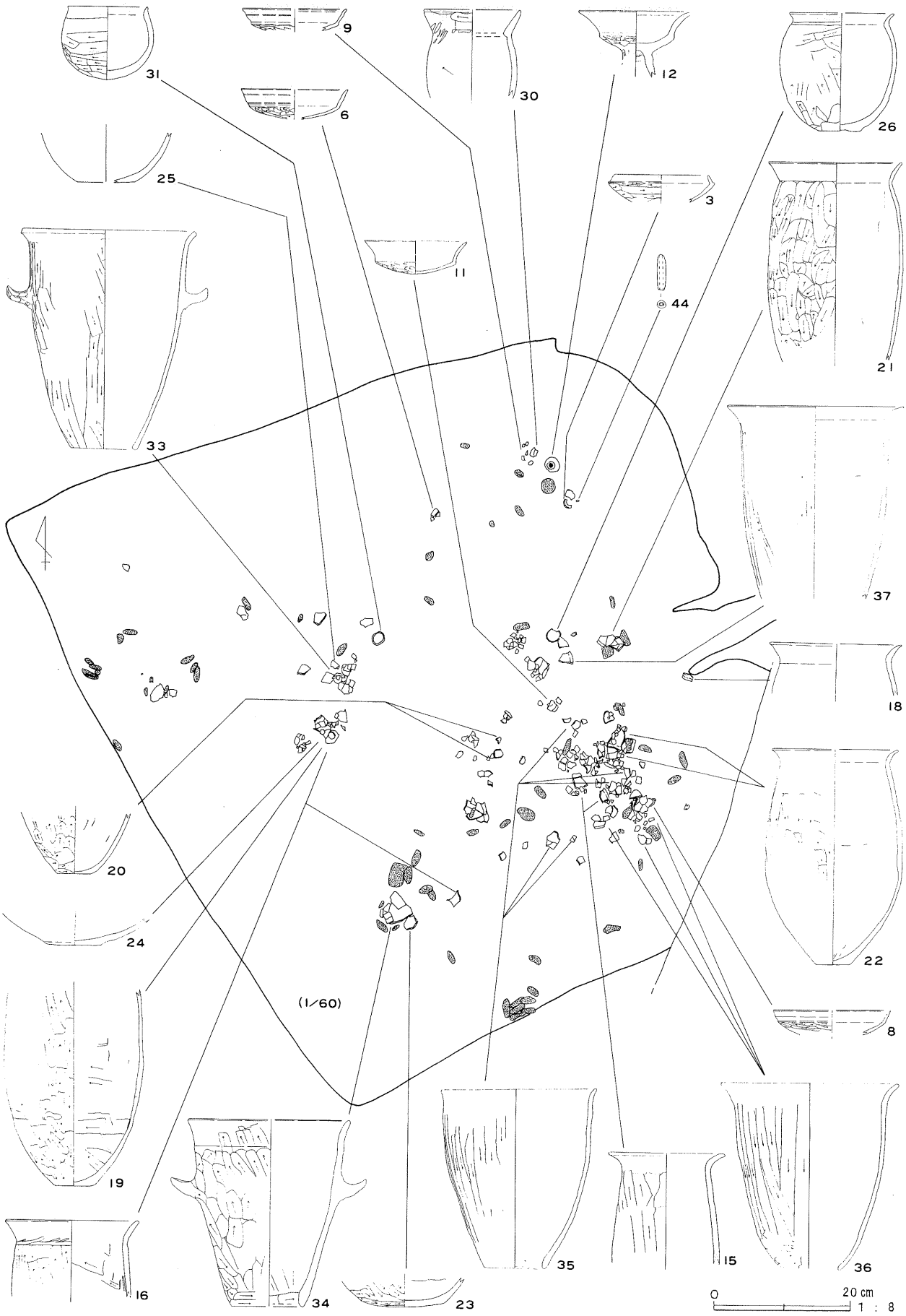
出土遺物（第202図）には、須恵器蓋（No.1・2）、土師器杯（3～12）、高杯（13）、盌（14）、甕（15・16）等がある。1以外は、すべて覆土中からの検出である。1・2はともに末野産である。土師器杯はすべて模倣杯である。4・5は他と比べてやや大きい。4・6には煤が付着しており、7の外面には黒斑がみられた。13は接合部のみの検出であるが、模倣杯に低い脚部が付くタイプである。14は口縁部がやや内傾する。底部を欠く。甕は長胴甕であるが、15は小型の部類に入る。

66号住居跡
（第203図）
（第204図）

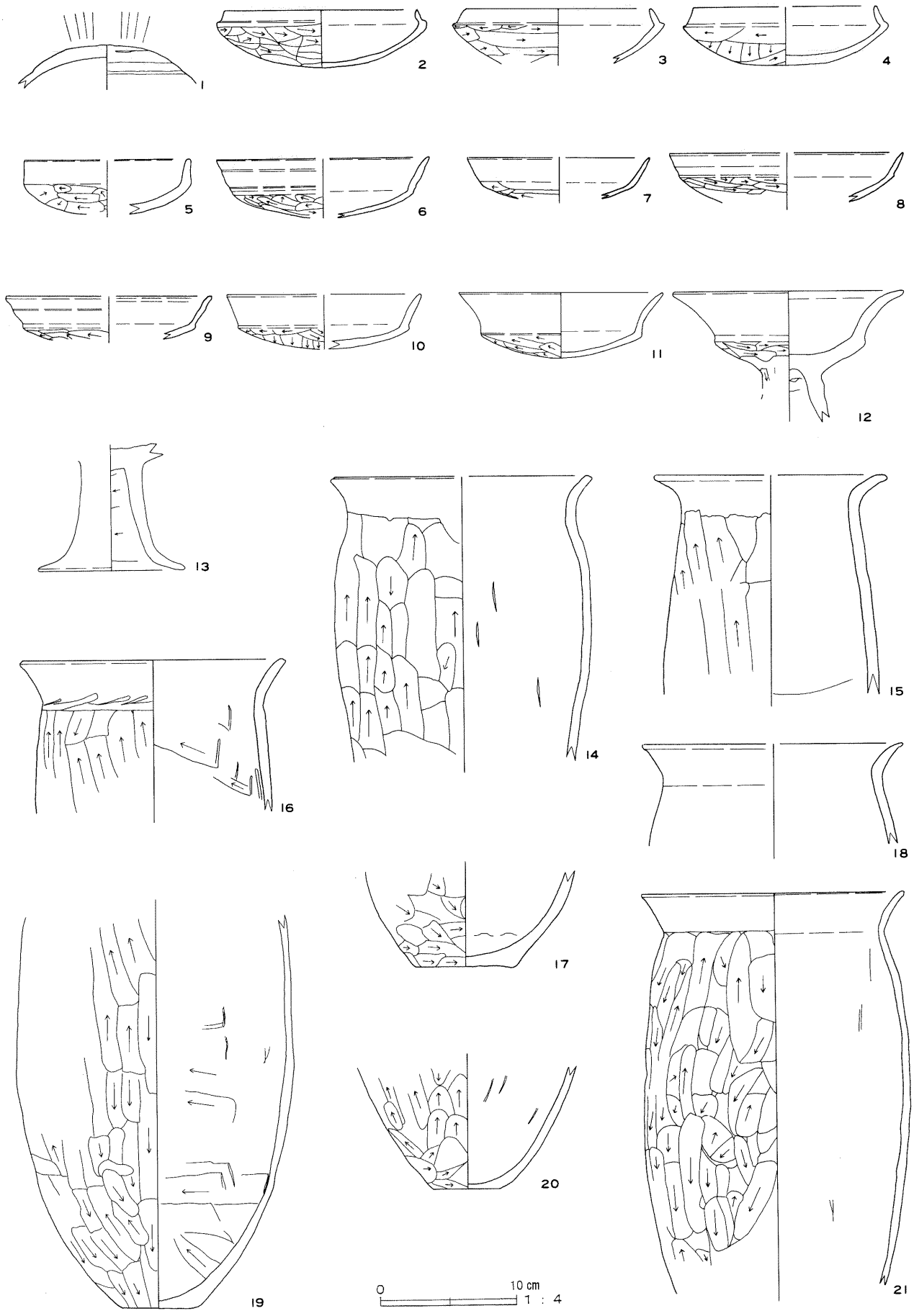
AI・AJ－22・23グリッドに位置する。複数の同時期の住居跡と重複関係にあり、本住居跡が最も新しい。北東壁で67号住居跡、北東部から南東部にかけて69・71号住居跡、北西部で72号住居跡をそれぞれ切っている。

長軸7.27m、短軸6.55mの長方形を呈する。主軸方向はN－65°－Eを指す。確認面からの深さは57cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は南東隅で八層（1～8層）確認できた。色調は様々であるが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と考えられる。下層には灰層（4層）、炭化物層（7層）がみられた。壁溝は北東隅から南西壁の中央までと北西壁沿いにみられたが、後者を検出したことで、本住居跡が北西方向に拡張したことが確認された。壁溝の幅は10～25cm、床面からの深さは3～6cmを測る。柱穴は4つ確認された。いずれもしっかりとした掘り込みであった。

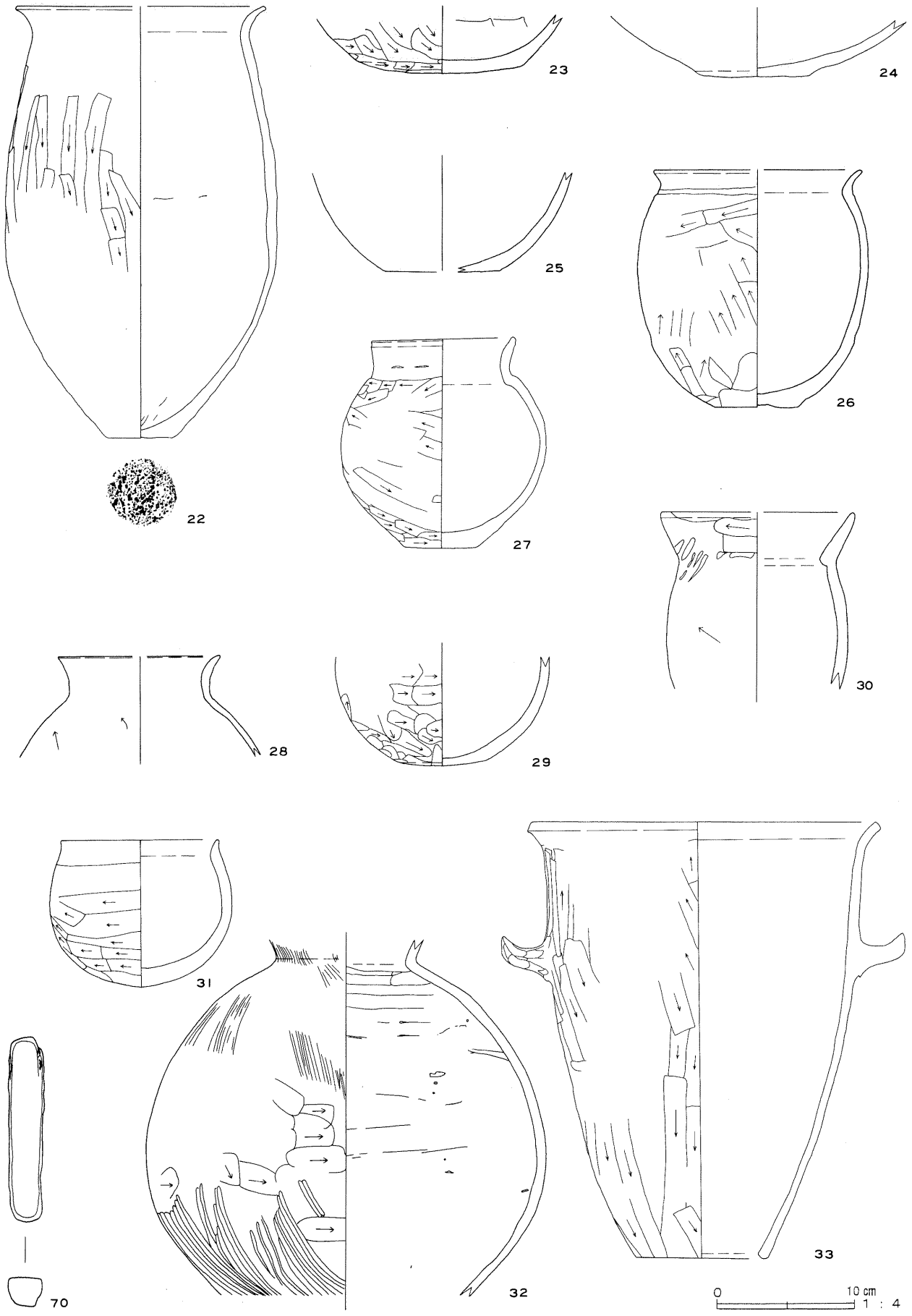
カマドは北東壁の南東寄りに設けられている。残存状態は良い。袖部は地山の削り出しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は53cm、燃焼部は45cm、煙道部先端38cmを測り、徐々に狭まる。焚口部から燃焼部は床面同と同じレベルでほぼ平坦であった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は18cmを測る。煙道部は先端に向かって緩やかに上り、先端で直角に立ち上がる。壁外へは1.32mを測る。住居跡覆土下に天井部崩落土（17層）がみられ、その下から灰層（18層）と被熱により地山がブロック化した



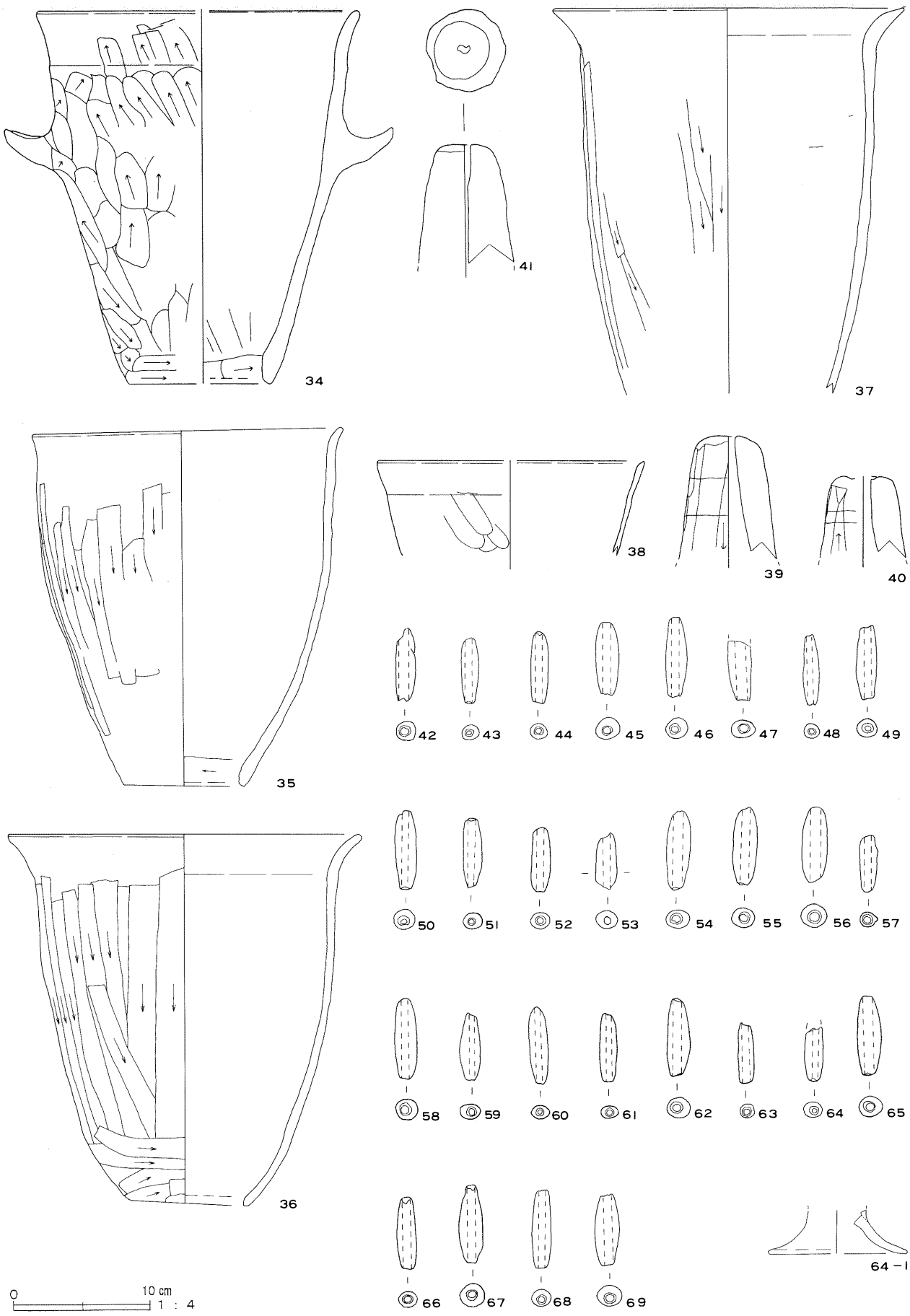
第198図　E・F区62号住居跡遺物出土状況



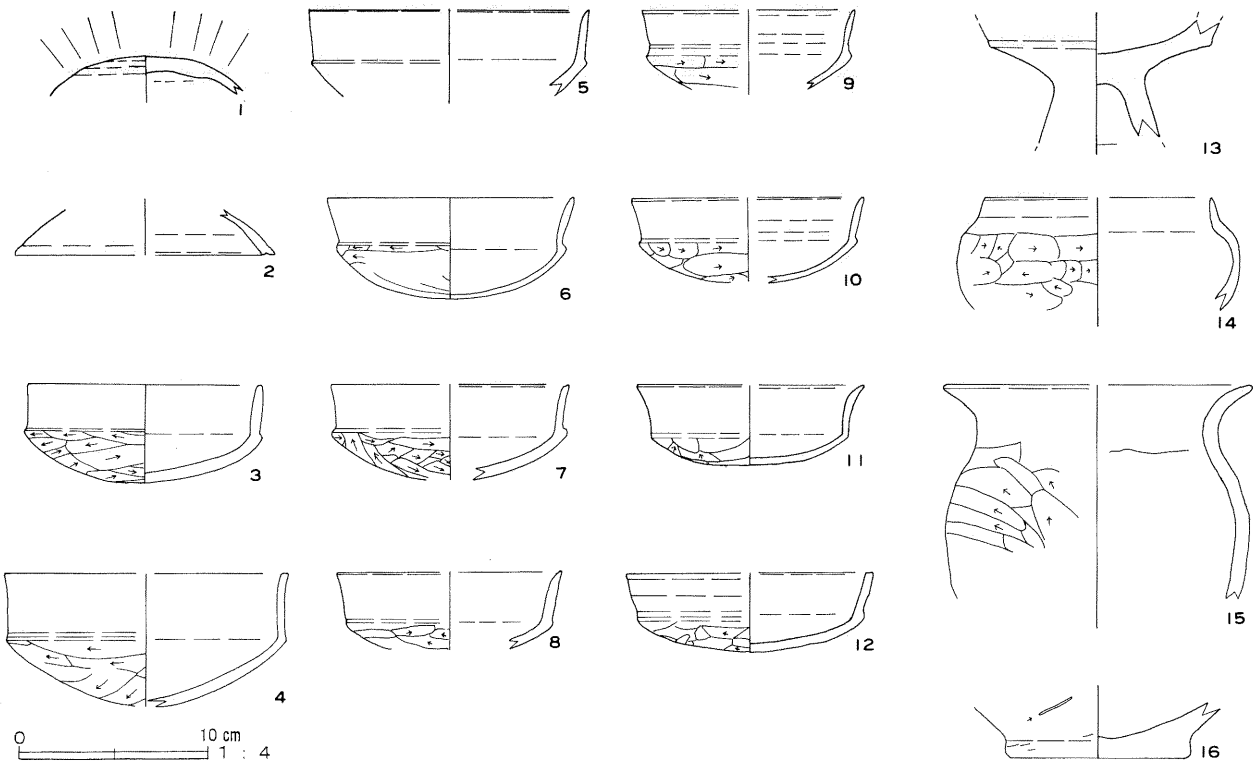
第199図　E・F区62・64号住居跡出土遺物(1)



第200図　E・F区62・64号住居跡出土遺物(2)



第201図　E・F区62・64号住居跡出土遺物(3)



第202図　E・F区65号住居跡出土遺物

第94表　E・F区62号住居跡出土遺物観察表　（第199～200図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器蓋	-	-	-	①⑥②④	②	青灰	1/5	
2	土師器杯	(14.0)	4.3	-	③②①④	②	橙	3/4	
3	土師器杯	13.6	-	-	③①④⑥	②	橙	上位1/2	内外面煤付着。
4	土師器杯	(13.3)	4.3	-	④①③	②	橙	1/3	内外面煤付着。
5	土師器杯	(11.2)	(4.0)	-	⑥①④	②	にぶい黄橙	1/4	
6	土師器杯	(15.5)	-	-	①②③④⑥	②	黒褐	1/4	
7	土師器杯	(13.3)	-	-	②③①⑥	②	橙	1/5	
8	土師器杯	(17.0)	-	-	③①②	②	橙	1/5	
9	土師器杯	(15.0)	-	-	①④②③	②	暗褐	口縁部1/3	
10	土師器杯	(14.2)	-	-	①③④	②	にぶい赤褐	2/5	外面煤付着。
11	土師器杯	15.0	4.8	-	③①④	②	橙	1/2	内外面煤付着。
12	土師器高杯	16.9	-	-	③①④	②	明褐	3/4	
13	土師器高杯	-	-	10.8	①④⑥	②	明赤褐	脚部のみ	
14	土師器甕	(18.6)	-	-	⑥④①②③	②	明赤褐	3/4	
15	土師器甕	(16.4)	-	-	①⑥	②	にぶい橙	上位1/2	
16	土師器甕	19.4	-	-	⑥③①④②	②	橙	上位1/2	
17	土師器甕	-	-	7.4	①④②③	②	にぶい黄橙	下位のみ	
18	土師器甕	(19.0)	-	-	③①②⑥	②	赤	上位1/3	磨滅。
19	土師器甕	-	-	5.4	⑥②①③④	②	にぶい褐	1/4	
20	土師器甕	-	-	5.6	③①②⑥	②	赤	下位1/4	
21	土師器甕	19.1	-	-	③①④⑥②	②	橙	3/4	
22	土師器甕	(18.2)	31.7	4.8	⑥③①	②	橙	3/4	胴部外面剝離。二次加熱。
23	土師器甕	-	-	12.0	⑥②①④③	②	にぶい橙	底部のみ	
24	土師器甕	-	-	7.4	①④②	②	にぶい黄橙	底部のみ	磨滅。
25	土師器甕	-	-	(8.4)	①④②	②	橙	下位1/3	磨滅。
26	土師器甕	(15.0)	17.4	6.0	⑥①④③②	②	赤褐	上半1/4欠	
27	土師器甕	10.6	10.5	5.2	③①④	②	橙	4/5	
28	土師器甕	(11.8)	-	-	⑥①④③②	②	にぶい黄橙	上位1/4	磨滅。
29	土師器甕	-	-	6.4	③①②④⑥	②	赤褐	下位1/4	
30	土師器甕	(14.2)	-	-	③①④⑥	②	明赤褐	上半1/2	胴部磨滅。
31	土師器鉢	11.7	10.7	-	③①⑥④	②	橙	上位3/4欠	外面黒斑有、煤付着。
32	土師器壺	-	-	-	④①③②⑥	②	橙	胴部のみ	
33	土師器甑	25.8	32.1	9.8	⑥③	②	にぶい黄橙	4/5	外面黒斑有。
34	土師器甑	(24.1)	27.4	(10.8)	⑥④③	②	明赤褐	1/3	

35	土師器甑	22.8	26.4	8.8	⑥③①	②	橙	4/5	口縁部内面黒斑有。
36	土師器甑	26.0	27.4	8.4	⑥③①	②	橙	3/4	外面黒斑有。
37	土師器甑	25.6	-	-	③①④	②	橙	4/5	外面黒斑有、磨耗。
38	土師器甑	(19.4)	-	-	①②④③⑥	②	橙	口縁部一部	
39	羽口	最大径 4.8 孔径 1.0						1/2	還元・酸化部、二次加熱無
40	羽口	最大径 4.4 孔径 1.2						1/4	
41	土製支脚	上部径 4.0 器高 — 底径 —						上位のみ	
42	土錘	長さ 5.4 最大径 1.4 孔径 0.7						完形	
43	土錘	長さ 4.8 最大径 1.3 孔径 0.4						完形	
44	土錘	長さ 5.3 最大径 1.3 孔径 0.5						完形	
45	土錘	長さ 5.4 最大径 1.8 孔径 1.2						完形	
46	土錘	長さ 5.9 最大径 1.6 孔径 0.6						完形	
47	土錘	長さ - 最大径 1.8 孔径 0.7						一部欠	
48	土錘	長さ 5.2 最大径 1.2 孔径 0.4						完形	
49	土錘	長さ 5.0 最大径 1.5 孔径 0.4						完形	
50	土錘	長さ 5.8 最大径 1.6 孔径 0.5						完形	
51	土錘	長さ 5.2 最大径 1.4 孔径 0.4						完形	
52	土錘	長さ 5.3 最大径 1.4 孔径 0.5						完形	
53	土錘	長さ - 最大径 1.6 孔径 0.6						一部欠	
54	土錘	長さ 5.8 最大径 1.7 孔径 0.7						完形	
55	土錘	長さ 5.7 最大径 1.7 孔径 0.6						完形	
56	土錘	長さ 5.5 最大径 1.9 孔径 0.7						完形	
57	土錘	長さ 4.2 最大径 1.4 孔径 0.5						完形	
58	土錘	長さ 6.0 最大径 1.6 孔径 0.5						完形	
59	土錘	長さ 5.0 最大径 1.5 孔径 0.4						完形	
60	土錘	長さ 5.7 最大径 1.4 孔径 0.4						完形	
61	土錘	長さ 5.1 最大径 1.3 孔径 0.4						完形	
62	土錘	長さ 5.8 最大径 1.7 孔径 0.6						完形	
63	土錘	長さ 4.5 最大径 1.1 孔径 0.5						完形	
64	土錘	長さ - 最大径 1.4 孔径 0.4						一部欠	
65	土錘	長さ 5.9 最大径 1.7 孔径 0.6						完形	
66	土錘	長さ 5.4 最大径 1.4 孔径 0.6						完形	
67	土錘	長さ 5.3 最大径 1.4 孔径 0.6						完形	
68	土錘	長さ 5.4 最大径 1.4 孔径 0.5						完形	
69	土錘	長さ 5.3 最大径 1.8 孔径 0.6						完形	
70	砥石	長さ 13.5 幅 2.5 厚さ 2.1						完形	一面使用。砂岩製。

第95表　E・F区64号住居跡出土遺物観察表　(第201図)

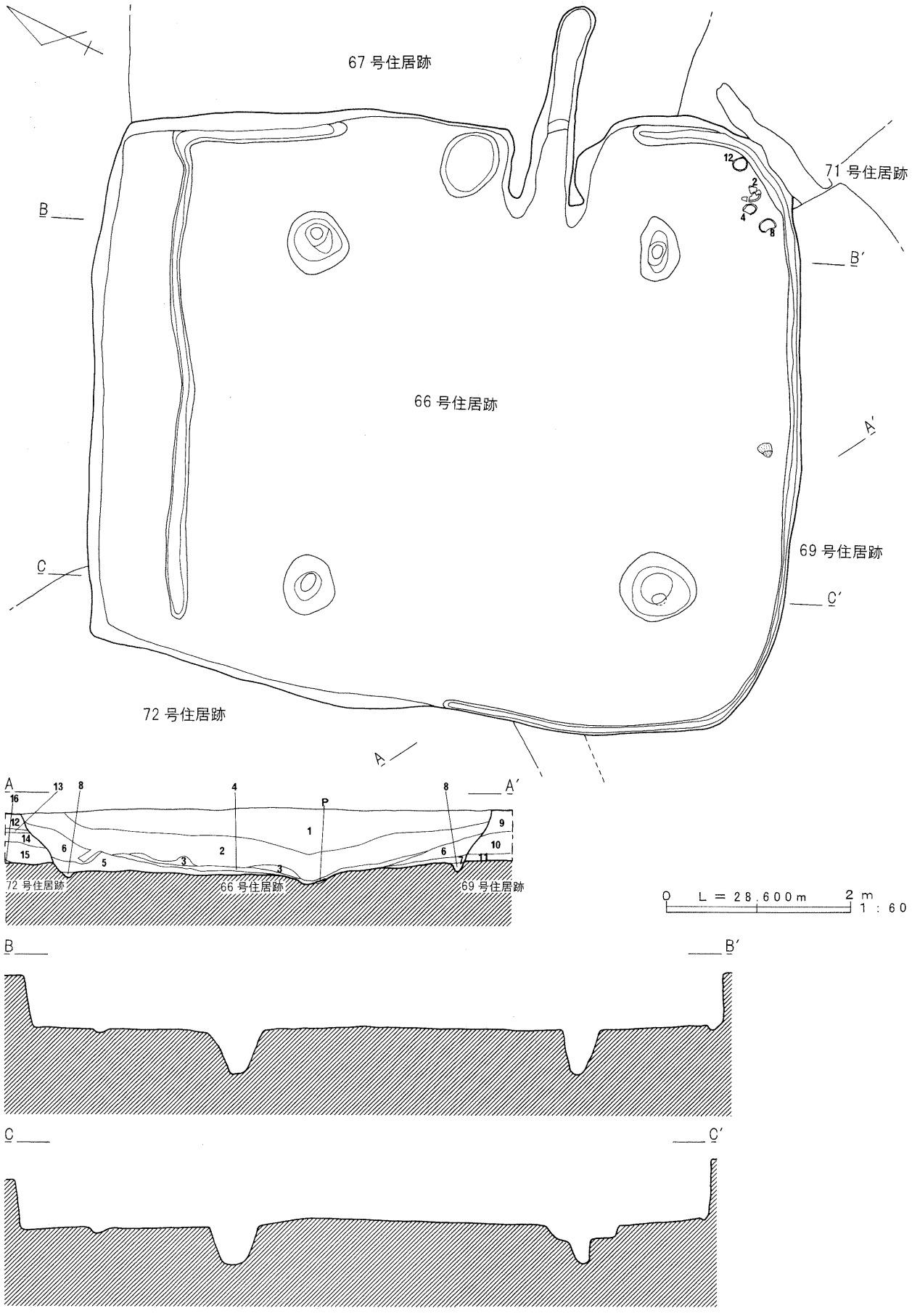
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器高杯	-	-	11.0	①④⑥②	②	橙	脚部のみ	

第96表　E・F区65号住居跡出土遺物観察表　(第202図)

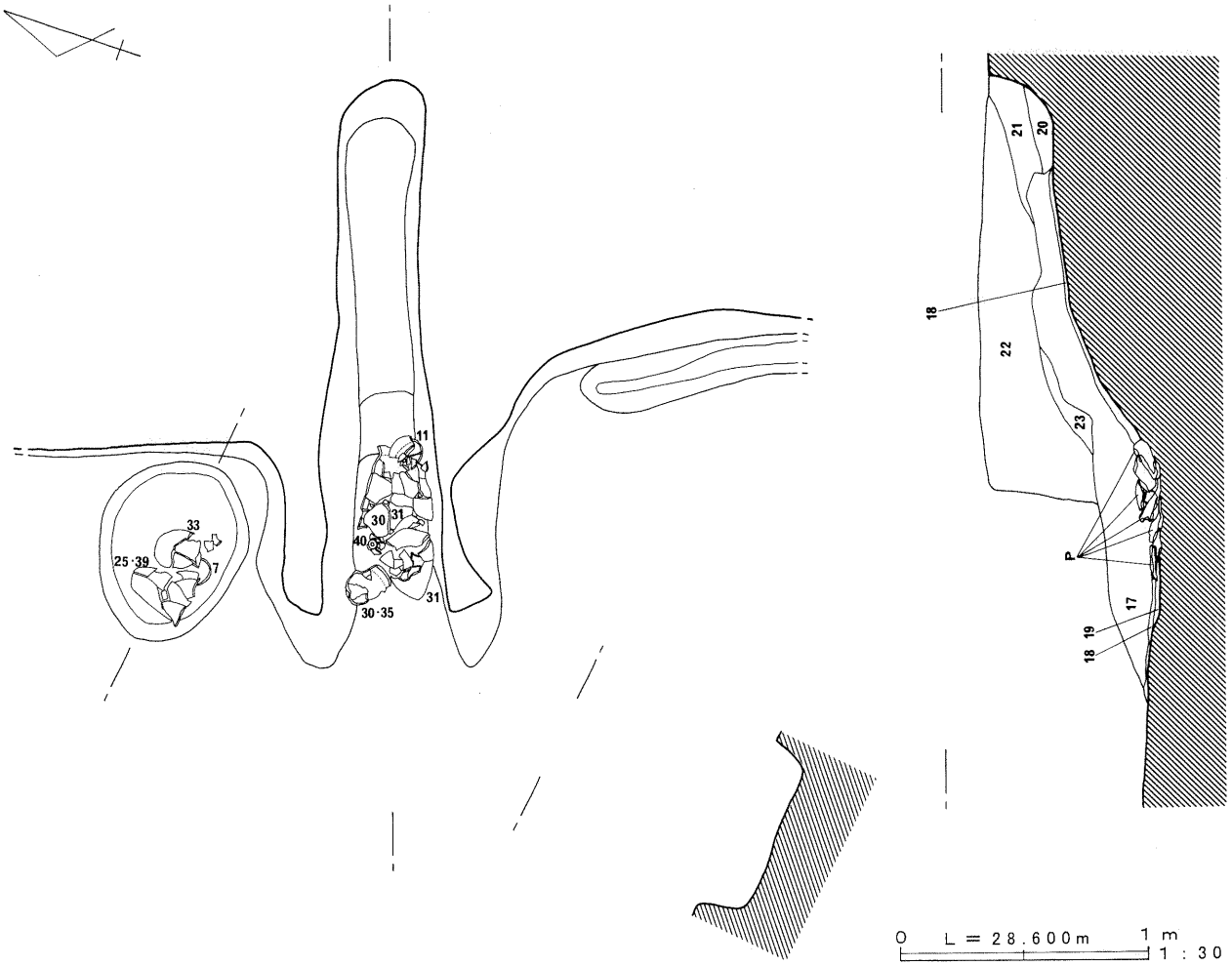
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器蓋	-	-	-	④②①⑥	②	にぶい橙	天井部のみ	
2	須恵器蓋	(13.7)	-	-	④①②③	①	灰	1/8	
3	土師器杯	12.4	5.2	-	③⑥①④	②	橙	口縁部2/5欠	
4	土師器杯	(15.0)	-	-	③①④⑥	②	橙	1/4	内外面煤付着。
5	土師器杯	(14.8)	-	-	①④③②	②	橙	1/8	磨滅。
6	土師器杯	13.0	5.3	-	③①④	②	橙	1/2	内外面煤付着。磨滅。
7	土師器杯	(12.6)	-	-	③④②①	②	橙	1/4	外面黒斑有。
8	土師器杯	(11.8)	-	-	③①④②⑥	②	明赤褐	1/5	
9	土師器杯	(11.2)	-	-	①④③	②	橙	1/5	
10	土師器杯	(12.2)	-	-	④①③	②	橙	1/5	
11	土師器杯	(11.9)	4.2	-	③②④①⑥	②	橙	1/5	
12	土師器杯	(13.0)	4.2	-	⑥①④②③	②	橙	2/3	
13	土師器高杯	-	-	-	⑥①④②③	②	橙	接合部のみ	
14	土師器盤	(12.0)	-	-	③①④②⑥	②	明赤褐	1/6	
15	土師器甕	(16.0)	-	-	①⑥②	②	明赤褐	上位1/2	
16	土師器甕	-	-	(9.7)	⑥④①③	②	にぶい橙	下位1/2	

焼土（19層）が確認された。煙道部先端からは、炭化物を含む層（20・21層）のみ検出された。

カマド北西脇には、径77×61cm、床面からの深さ19cmの貯蔵穴が確認された。平面は楕円形を呈する。



第203図　E・F区66号住居跡

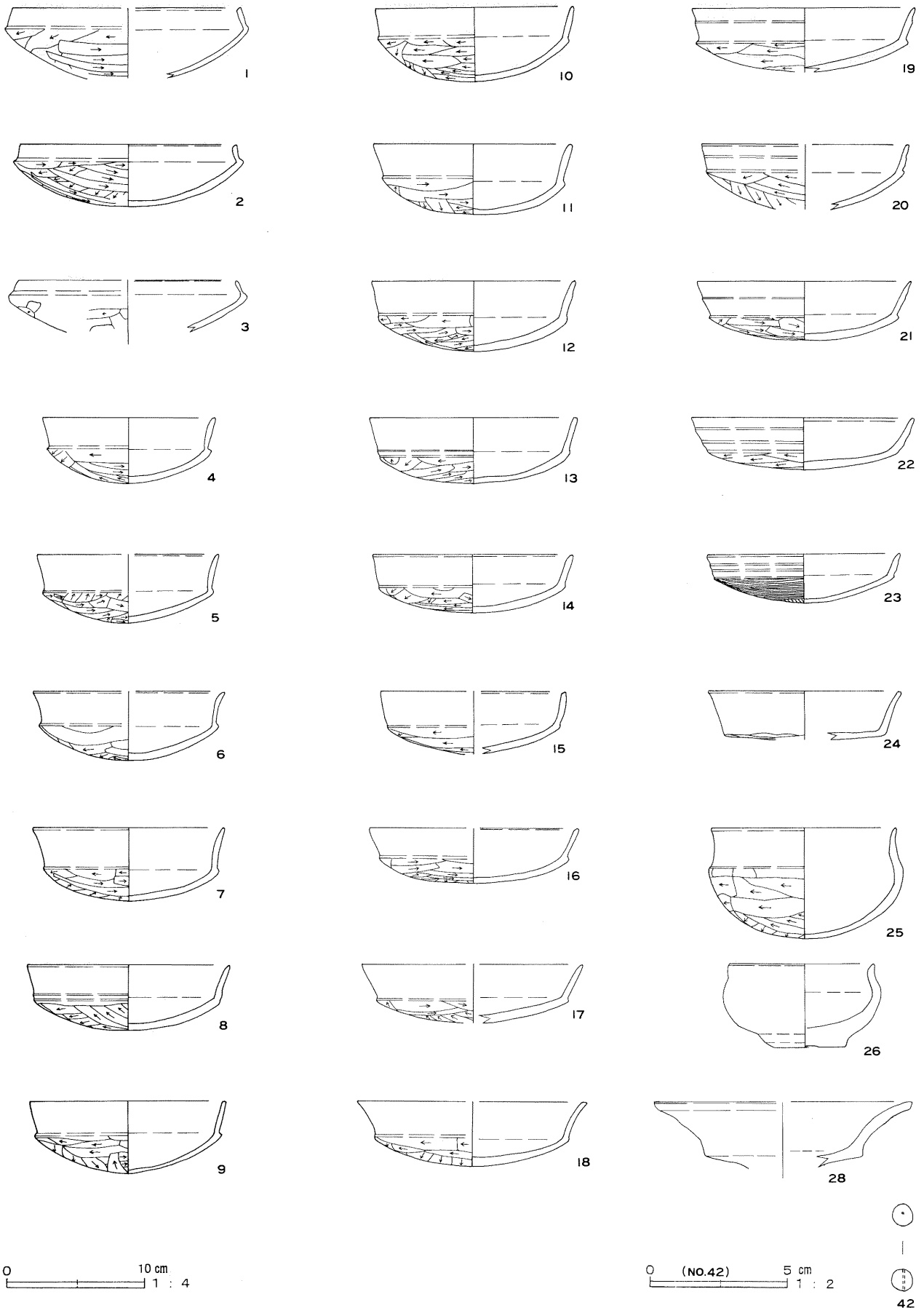


66号住居跡土層

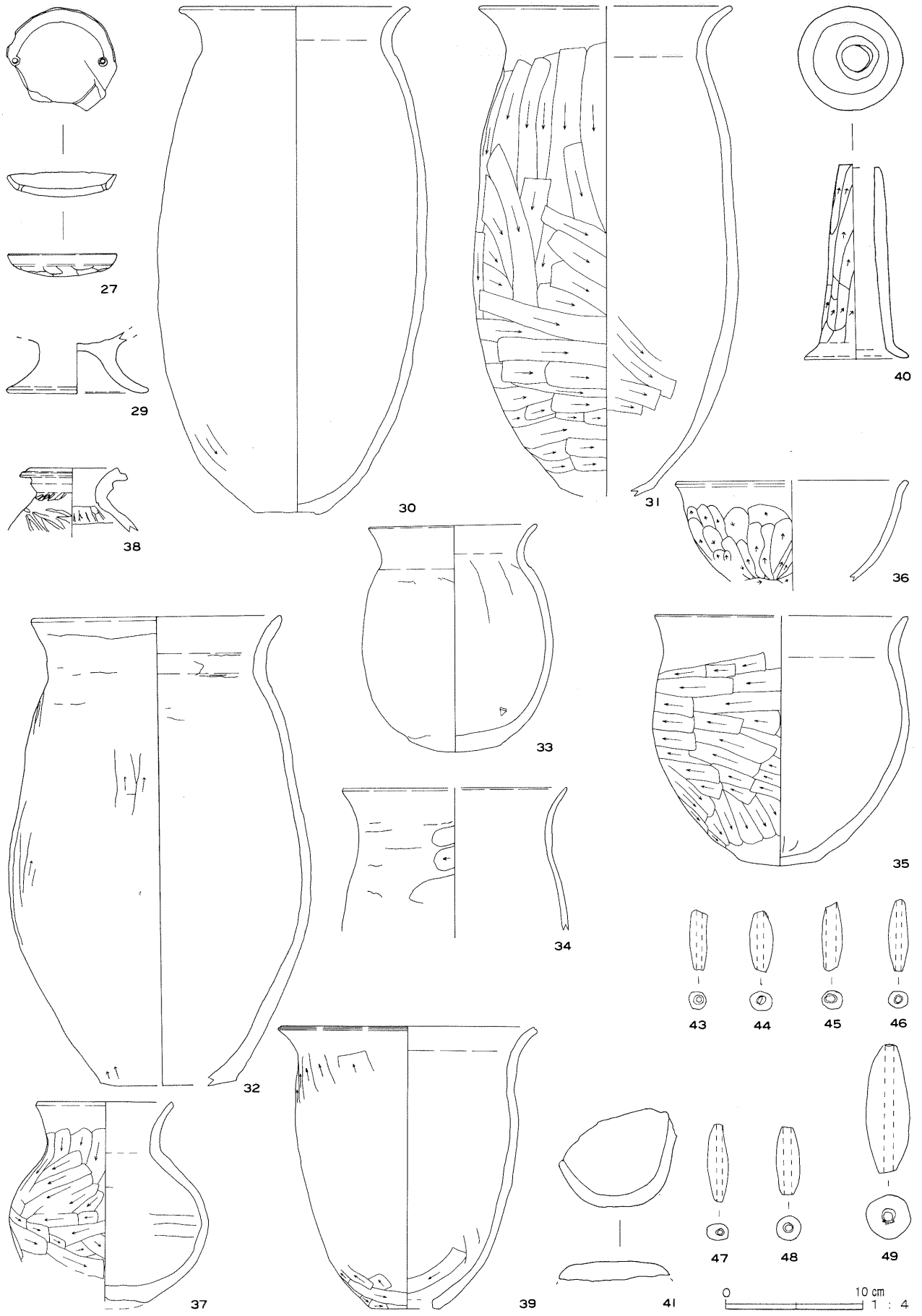
1 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒、焼土粒(多量)を含む。しまり良い。
2 黄灰色(2.5Y5/1)シルト。黄褐色(10YR5/6)粘土・ブロック(多量)、焼土粒、炭化粒(少量)を含む。しまり良い。
3 黄灰色(2.5Y5/1)粘土。酸化鉄粒を多く含む。
4 褐灰色(10YR5/1)灰層。炭化物を帯状に含む。粘性強い。
5 黄灰色(2.5Y6/1)粘土。酸化鉄粒、灰黄色(2.5Y7/2)粘土粒(多量)、炭化物(帯状)を含む。
6 褐色(10YR4/4)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒、焼土粒を多く含む。しまり良い。
7 炭化物層。赤褐色(5YR4/6)粘土を主体とした焼土ブロックを多く含む。
8 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。黄褐色(10YR5/8)粘土粒を多く含む。
9 にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。焼土粒(多量)を含む。土器(少量)を包含。
10 にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。9層と同質。炭化物、焼土粒(多量)を含む。
11 にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。10層と同質。炭化物を帯状に含む。
12 9層に同じ。
13 にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土、炭化物の混在層。
14 10層に同じ。
15 11層に同じ。
16 13層に同じ。
17 灰黄褐色(10YR6/2)粘土。焼土ブロックを含む。下部は被熱により焼土ブロック化。カマド天井崩落土。
18 黒褐色(10YR2/2)灰層。
19 明赤褐色(2.5YR5/8)粘土。地山が被熱により焼土ブロック化したもの。カマド燃焼部火床。
20 黒褐色(5YR2/2)粘土。炭化物(多量)を含む。
21 にぶい橙色(2.5Y6/4)シルト。炭化物(少量)を含む。しまり悪い。
22 にぶい橙色(2.5Y6/4)シルト。焼土粒(少量)、にぶい黄橙色(10YR7/4)粘土(火山灰？・少量)を含む。
23 にぶい橙色(2.5Y6/4)シルト。焼土粒(多量)を含む。しまりやや悪い。

第204図　E・F区66号住居跡カマド

出土遺物(第205・206図)には、土師器杯(№1～24)、盌(25・26)、高杯(28・29)、皿(27)、甕(30～35)、鉢(36)、壺(37・38)、甑(39)、土製支脚(40)、砥石(41)、土製丸玉(42)、土錘(43～49)等がある。主に貯蔵穴及びその周辺、南西部から検出された。杯はすべて模倣杯である。1～3は口径が大きく、身の浅い杯身模倣杯であり、その他は杯蓋模倣杯であ



第205図　E・F区66号住居跡出土遺物(1)

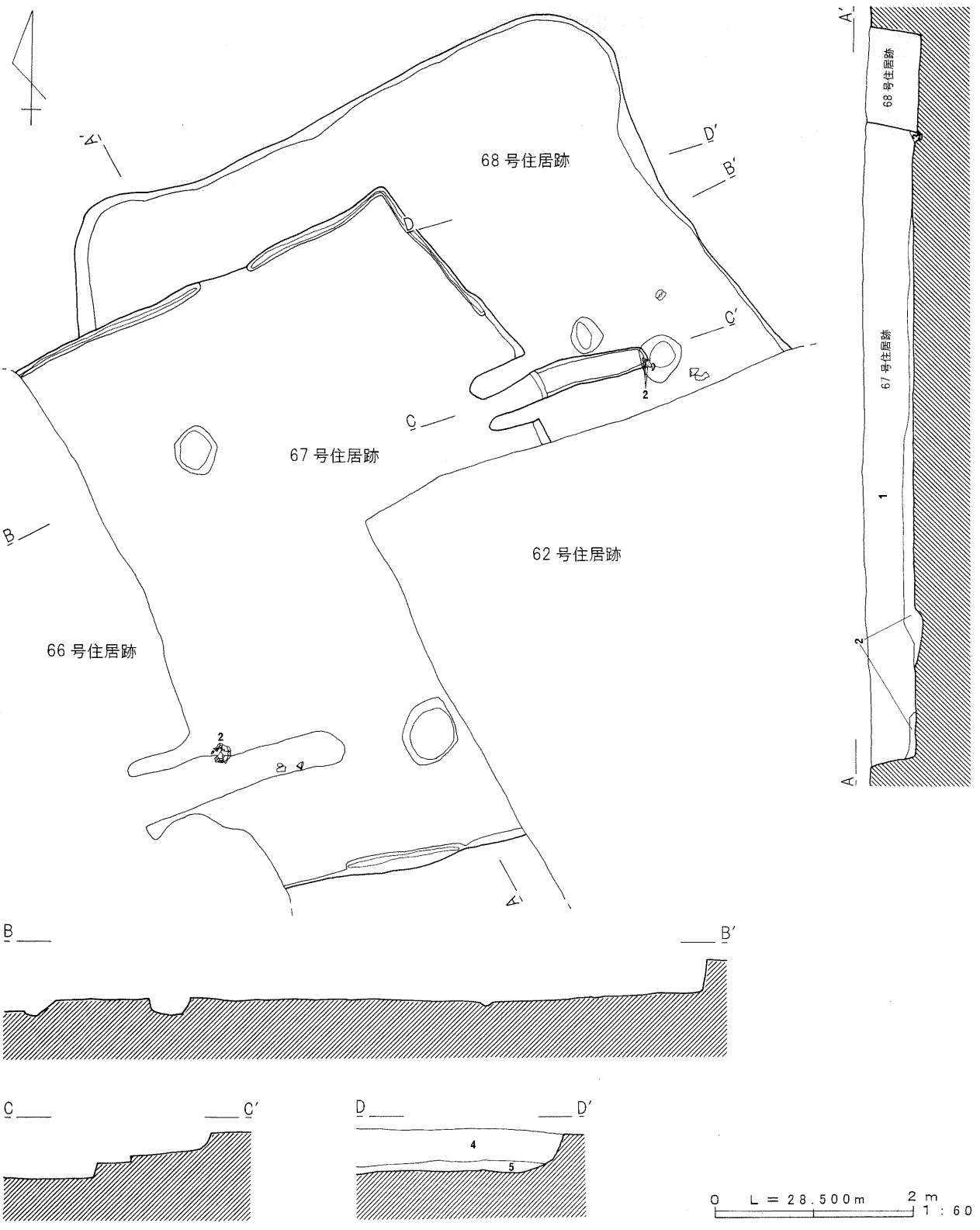


第206図　E・F区66号住居跡出土遺物(2)

第97表　E・F区66号住居跡出土遺物観察表　(第205・206図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(16.6)	-	-	①④③②	②	にぶい赤褐	1/2	外面煤付着。
2	土師器杯	15.6	4.5	-	①③④	②	明赤褐	3/4	
3	土師器杯	(15.8)	-	-	④①⑥②	②	黄橙	1/5	
4	土師器杯	12.4	4.7	-	①③④⑥	②	明赤褐	1/2	
5	土師器杯	(13.2)	5.0	-	③①④	②	橙	1/2	外面黒斑有。
6	土師器杯	(14.0)	5.0	-	①③④⑥	②	橙	2/5	外面黒斑有。
7	土師器杯	14.0	5.3	-	③①④	②	明赤褐	口縁部1/5欠	内外面煤付着。
8	土師器杯	14.8	4.7	-	①③④	②	橙	口縁部一部欠	内外面煤付着。
9	土師器杯	14.2	5.3	-	①④③	②	明赤褐	口縁部1/2欠	内面黒斑有。
10	土師器杯	14.4	5.3	-	③①④	②	橙	4/5	
11	土師器杯	14.4	5.1	-	⑥①④③	②	明赤褐	口縁部1/4欠	外面煤付着。
12	土師器杯	14.8	5.1	-	①④③	②	明赤褐	完形	内外面煤付着。
13	土師器杯	15.0	4.7	-	①③④	②	明赤褐	3/4	
14	土師器杯	14.5	4.2	-	③①⑥	②	橙	2/3	内外面煤付着。
15	土師器杯	(13.4)	-	-	③①④	②	橙	1/4	
16	土師器杯	(15.2)	4.0	-	③①②④	②	橙	1/4	外面煤付着。
17	土師器杯	(16.0)	-	-	①④⑥③	②	橙	1/3	内外面煤付着。
18	土師器杯	(16.6)	4.7	-	③①④	②	橙	1/2	
19	土師器杯	16.1	-	-	③①④	②	橙	3/4	外面黒斑有。
20	土師器杯	(15.0)	-	-	③①④②⑥	②	橙	1/2	内外面煤付着。
21	土師器杯	15.5	4.3	-	③①④	②	明赤褐	1/2	内外面煤付着。
22	土師器杯	16.2	3.7	-	①③④②	②	明赤褐	1/2	内外面煤付着。
23	土師器杯	14.0	3.5	-	①③⑥	③	明赤褐	2/3	内外面煤付着。
24	土師器杯	14.0	-	11.5	①④③⑥	②	橙	上位3/5	内外面煤付着。
25	土師器盌	13.4	8.0	-	①③④⑥	②	橙	一部欠	外面黒斑有。
26	土師器盌	10.4	6.1	6.0	⑥①②	②	明赤褐	2/3	
27	土師器皿	8.0	1.6	-	④①③	②	橙	一部欠	
28	土師器高杯	(18.6)	-	-	③②①④⑥	②	明赤褐	杯部1/6	
29	土師器高杯	-	-	10.3	④①③②	②	明赤褐	脚部のみ	
30	土師器甕	16.9	37.5	5.0	③⑥①	②	にぶい橙	5/6	外面黒斑有、煤付着。磨滅。
31	土師器甕	(18.6)	-	(6.8)	③④①⑥	②	明赤褐	1/2	内面黒斑有。内外面煤付着。
32	土師器甕	18.4	-	-	⑥③①④	②	橙	1/2	磨滅。
33	土師器甕	12.4	16.7	6.8	③①⑥	②	橙	5/6	外面黒斑有。磨滅。
34	土師器甕	(16.4)	-	-	⑥④①②	②	橙	口縁部1/2	内面黒斑有。
35	土師器甕	(18.6)	18.4	5.6	③④①⑥	②	明赤褐	1/2	
36	土師器鉢	(16.8)	-	-	⑥①④③②	②	赤褐	上半1/3	
37	土師器壺	10.1	-	-	③①⑥④	②	明赤褐	3/4	外面黒斑有。
38	土師器壺	7.9	-	-	①④③②⑥	②	黒褐・橙	上位のみ	
39	土師器甑	19.0	20.8	4.6	⑥③	②	にぶい褐	5/6	二次加熱。胴部磨滅。
40	土製支脚	上部径 2.9	器高 14.2	底径 7.6				完形	
41	砥石	長さ -	幅 -	厚さ -				半分欠	一面使用。輝石安山岩製。
42	土製丸玉	長さ 0.8	径 0.8	孔径 0.1				完形	
43	土錘	長さ 4.4	最大径 1.3	孔径 0.5				完形	
44	土錘	長さ 4.6	最大径 1.6	孔径 0.5				完形	
45	土錘	長さ 5.1	最大径 1.5	孔径 0.7				完形	
46	土錘	長さ 5.3	最大径 1.5	孔径 0.4				完形	
47	土錘	長さ 5.2	最大径 1.6	孔径 0.4				完形	
48	土錘	長さ 5.0	最大径 1.7	孔径 0.5				完形	
49	土錘	長さ 6.5	最大径 3.2	孔径 0.7				完形	

る。後者には口径が小さく、身の深いものと、口径が大きく、身の浅いものの二者がみられた。煤が付着するものが多くみられ、黒斑を有するものも僅かにみられた。盌は25が丸底であるが、26は平底であり、円柱造りによる。27は小型の皿である。底部に2つ穿孔がみられたことから、蓋の可能性も考えられる。高杯は、28が大きく外反する杯部、29は低い脚部のみの検出である。甕は長胴甕（30～32・34）と小型のもの（33・35）がある。煤の付着や黒斑を有するもの、摩滅が顕著であるものが多い。36は底部を欠く。壺はともに小型のものであるが、38は短頸壺である。39は把手を持たないタイプである。胴部の摩滅が顕著であった。二次加熱を受けている。40は中央に孔を持つ。完形品。41は大半を欠く。一面のみ使用している。土錘は7点検出された。長さ5cm前後、径1.5cm前後、孔径0.5cm



67・68 号住居跡土層

1　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土。焼土小ブロック(多量)を含む。しまり悪い。
2　黄色(2.5Y8/6)粘土。貼り床状に固くしまる。最下部に炭化物が帯状に堆積。
3　灰黄褐色(10YR5/2)粘土。2 層がブロック状に混入。しまり悪い。壁直下のみ堆積。
4　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。黄橙色(10YR7/2)粘土ブロック(火山灰？・少量)を含む。しまり良い。
5　黄褐色(2.5Y5/3)シルト。焼土粒・炭化物粒多く含む。しまり良い。

第207図　E・F 区67・68号住居跡

前後のものが主体となるが、49のみ他のものと比べて大きい。

67号住居跡（第207図）　AI・AJ－22・23グリッドに位置する。複数の同時期住居跡と重複関係にある。南西壁は66号住居跡、南東部は62号住居跡に切られ、北東部では68号住居跡を切っている。

長軸6.5m、短軸は不明、平面は長方形を呈するものと考えられる。主軸方向はN－63°－Eを指す。確認面からの深さは61cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄色及び黄褐色系の粘土２層（１・２層）からなり、上層（１層）は厚く堆積していた。下層（２層）は貼り床面状にしまっており、床面直上には炭化物が帯状に堆積していた。堆積状況から自然堆積と考えられる。壁溝は検出された壁沿いにみられるが、所々で途切れている。幅は７～20cm、床面からの深さは４cm程を測る。ピットは２つ検出された。柱穴かどうかは不明である。

カマドは北東壁の北西寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は22cm、燃焼部は27cmを測り、煙道部はやや蛇行するが、30cm前後を測る。焚口部から燃焼部は床面とほぼ同一レベルである。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は15cmを測る。煙道部はほぼ平坦であり、先端で急速に立ち上がる。壁外へは1.22mほど張り出している。覆土は図示できなかったが、焼土・炭化物を含む層が確認された。貯蔵穴は検出されなかった。

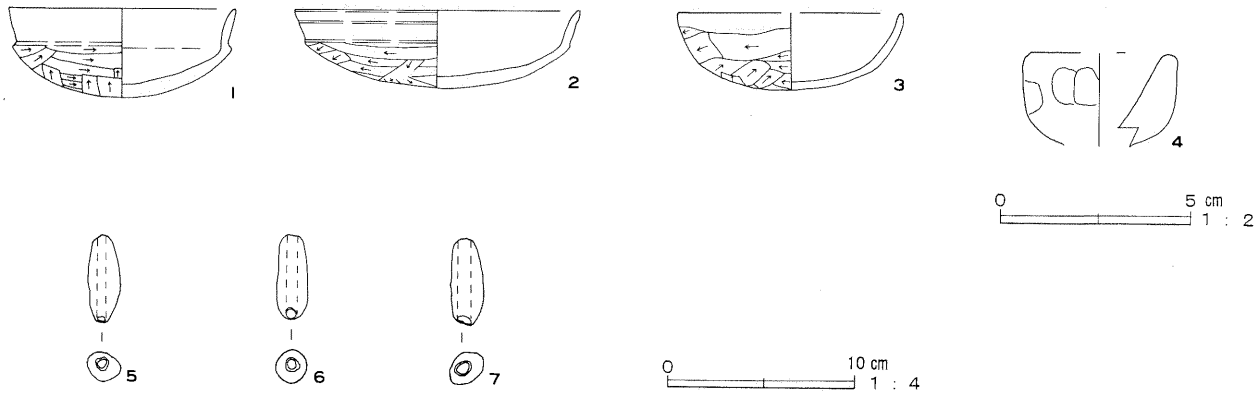
出土遺物（第208図）には、土師器杯（No.１～３）、手捏ね土器（４）、土錘（５～７）等がある。床面直上から検出された２以外は、覆土中からの検出である。１・２が模倣杯、３が丸底で、口縁部は内湾しながら立ち上がるタイプである。すべてに煤が付着していた。４は破片での検出である。土錘は３点検出された。いずれもほぼ同じ大きさのものである。

68号住居跡（第207図）　AI－22グリッドに位置する。北東部から南西部にかけて62・67号住居跡に切られており、大半を欠く。

規模・平面形は不明であるが、北西壁は5.27mを測る。南北軸方向はN－49°－Eを指す。確認面からの深さは53cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は、確認箇所では黄色及び黄褐色系の粘土、シルト二層（４・５層）のみである。上層（４層）は厚く堆積しており、火山灰らしき混入物がみられた。自然堆積と考えられる。壁溝はみられない。ピットは南東部の62号住居跡との境付近で２つ検出されたが、その位置から柱穴とは考えられない。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。

出土遺物（第209図）は、土師器杯（No.１・２）の２点のみである。ともに模倣杯であるが、１は口径大きく、浅身の杯身模倣杯である。覆土中から検出された。２は口径小さく、深身の杯蓋模倣杯であり、外面に煤が付着していた。ピットからの検出である。



第208図　E・F区67号住居跡出土遺物

第98表　E・F区67号住居跡出土遺物観察表　(第208図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	12.0	4.7	-	①④②③	②	橙	2/3	内外面煤付着。
2	土師器杯	15.4	4.4	-	③①④	②	明赤褐	口縁部一部欠	内外面煤付着。
3	土師器杯	(12.0)	4.0	-	①③④②	②	橙	1/4	外面煤付着。
4	手捏ね土器	(4.0)	-	-	①④⑥	②	黒褐	1/4	
5	土錘	長さ 4.6	最大径 1.8	孔径 0.5				完形	
6	土錘	長さ 4.5	最大径 1.1	孔径 0.5				完形	
7	土錘	長さ 4.5	最大径 1.7	孔径 0.7				完形	

69号住居跡　AJ－22・23グリッドに位置する。複数の同時期の住居跡と重複関係にある。北西部で66号住居跡に切られ、北東部から南東部にかけて70・71号住居跡を切っている。

(第210図)

長軸5.53m、短軸5.41mの方形を呈する。南北軸方向はN－36°－Eを指す。確認面からの深さは56cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土はにぶい黄色の粘土（10～14層）を主体とし、下層になるにつれて焼土・炭化物等の混入物が多くみられた。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。壁溝は北西壁以外に巡っている。幅は11～25cm、床面からの深さは7cm程を測る。柱穴は2つのみ検出された。北西部は66号住居跡に切られているため、本来は2つを含めた4つの柱穴からなるものと推察される。ともに床面からの深さは8～16cmと浅い。

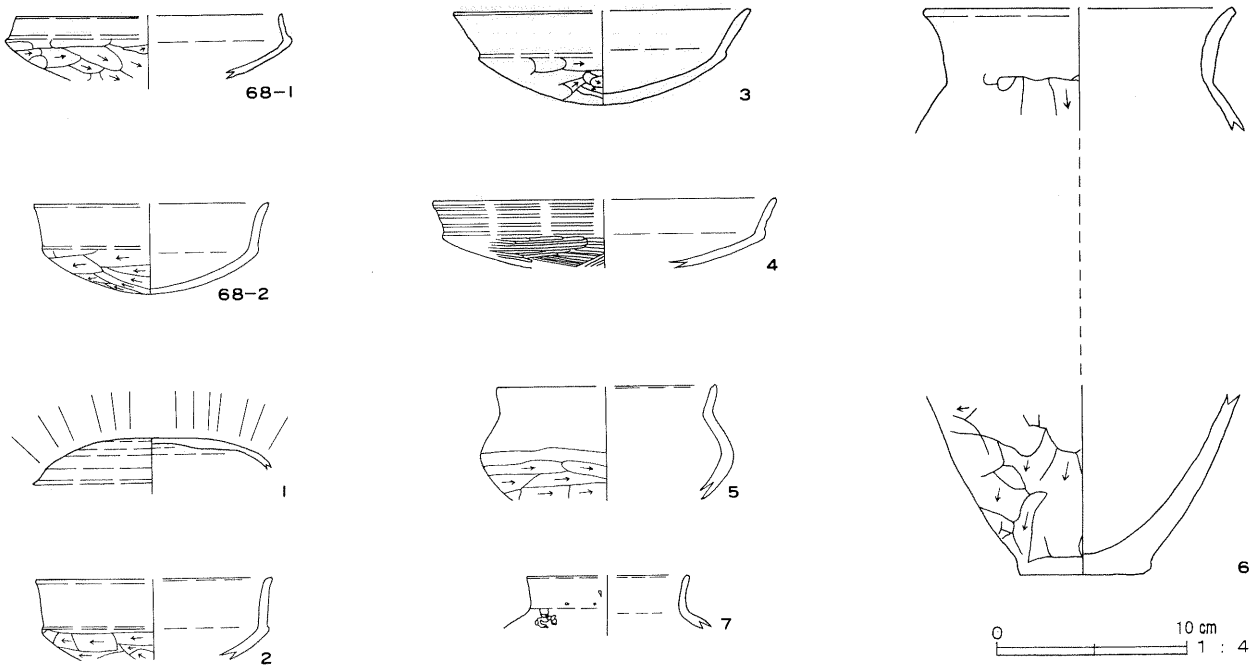
カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

出土遺物（第209図）には、須恵器蓋（No.1）、壺（7）、土師器杯（2～4）、盌（5）、甕（6）等がある。6が南東壁沿い中央の床面から検出された。その他は覆土中からの検出である。1は天井部のみの検出である。7は短頸壺。ともに末野産である。土師器杯はすべて模倣杯であるが、それぞれ形態が異なる。2は口径小さく、器高が高い。3は器高が高いが、口径が大きく、外に開く。4は口径が大きく、器高が低い。4・5は内外面に煤が付着している。6は長胴甕であるが、胴部を欠く。

70号住居跡　AJ・AK－22・23グリッドに位置する。北東部で71号住居跡を切っており、69号住居跡に切られている。

(第211図)

長軸5.63m、短軸5.49mの方形を呈する。主軸方向はS－59°－Wを指す。確認面からの深さは54cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は色調が異な



第209図　E・F区68・69号住居跡出土遺物

第99表　E・F区68号住居跡出土遺物観察表　（第209図）

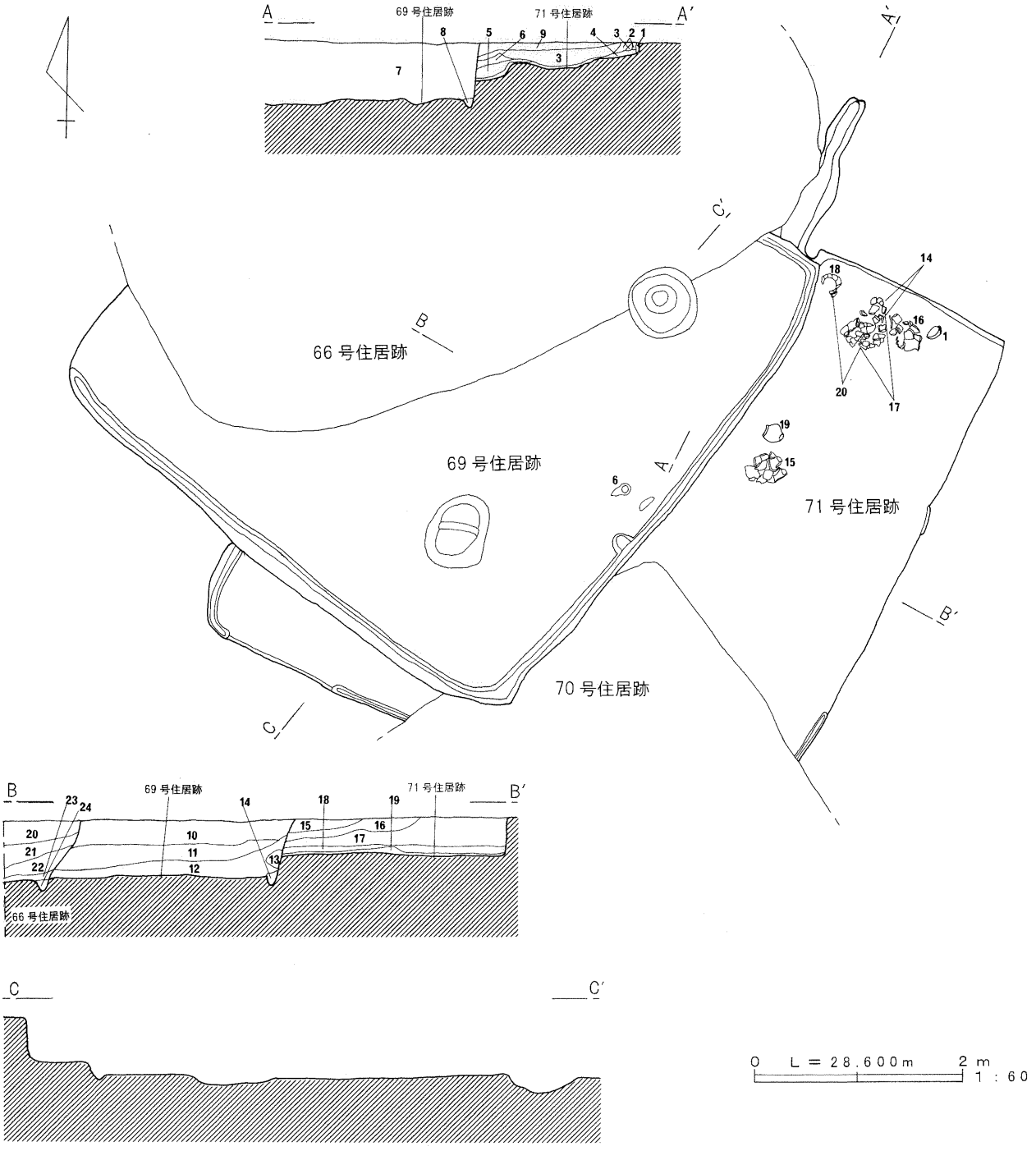
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(14.0)	-	-	①③④②	②	橙	1/3	
2	土師器杯	(12.4)	4.7	-	③④①②	②	橙	1/3	外面煤付着。

第100表　E・F区69号住居跡出土遺物観察表　（第209図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器蓋	-	-	-	①⑥②	②	灰	2/3	
2	土師器杯	(12.5)	-	-	③①②④	②	橙	1/3	内面煤付着。
3	土師器杯	(15.8)	5.0	-	①④②③⑥	②	橙	1/3	
4	土師器杯	(18.2)	-	-	①③④	②	にぶい褐	1/8	内外面煤付着。
5	土師器盌	(11.6)	-	-	①③④②	②	橙	1/4	内外面煤付着。
6	土師器甕	(16.0)	-	6.4	⑥②④①	②	にぶい褐	2/5	
7	須恵器短頸壺	(4.4)	-	-	①②④③	②	灰	口縁部1/3	

るが、主に黄色系の粘土（4・9・11～14層）が主体となる。ほぼ全層中に焼土ないしは炭化物を含んでいたが、中層（10層）及び床面直上の19層において炭化物層が明確に確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と考えられる。壁溝は全周しており、壁から5～13cm離れて巡っている。幅は12～15cm、床面からの深さは7～12cmを測る。ピットは北西部に1つのみ検出された。床面からの深さは15cmと浅く、最下層（32層）には焼土層が認められた。

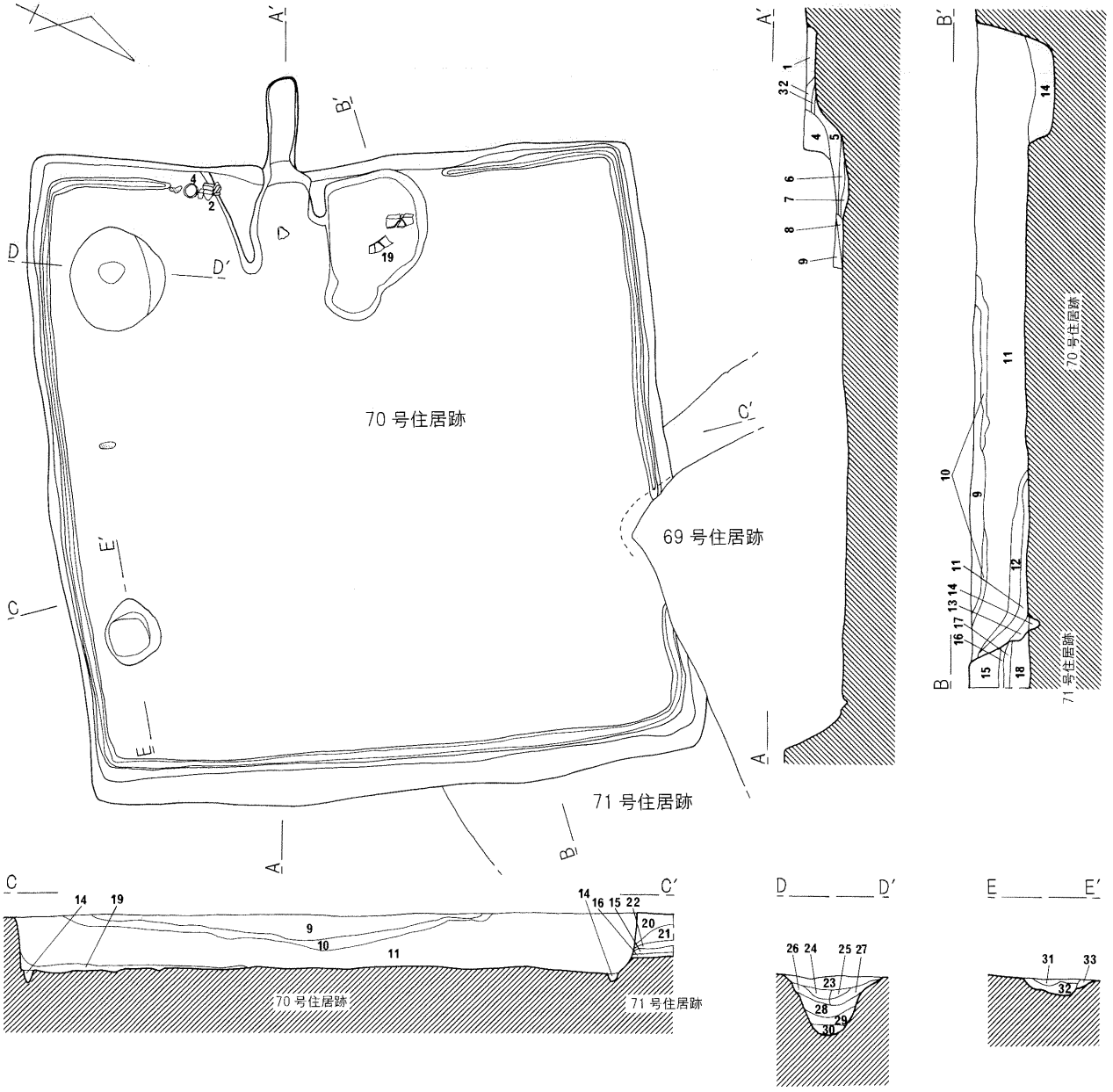
カマドは南西壁中央からやや南東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面は被熱した箇所であった。北西側の袖は小さいが、本来は南東側と同じ長さであったと考えられる。燃焼部の幅は50cm、燃焼部と煙道部の境で23cmと幅狭となり、煙道部先端で30cmとやや広がる。焚口部から燃焼部は床面と同じレベルで、ほぼ平坦である。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は18cmを測る。煙道部はほぼ平坦であり、先端で直角に立ち上がる。壁外へは85cm程張り出している。覆土は煙道部に天井部（1～3



69・71 号住居跡土層

1 暗赤褐色(5YR3/4)粘土。焼土ブロックを疎に含む。
2 褐色(10YR4/4)粘土。焼土ブロックを多く含む。
3 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土。灰色(10YR6/1)粘土ブロックを含む。
4 にぶい黄色(2.5YR6/4)粘土。灰色(5Y5/1)粘土・暗赤褐色(5YR3/4)粘土・焼土・炭化物ブロックを少量含む。
5 灰色(5Y5/1)粘土。焼土ブロックが大部分占める。
6 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土。褐灰色(10YR5/1)粘土・焼土ブロックを含む。
7 褐色(10YR4/6)粘土。焼土・灰色(5Y5/1)粘土ブロック(少量)を含む。
8 オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土。灰色(5Y5/1)粘土・炭化物ブロックを含む。
9 にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土。焼土ブロック、炭化物粒を含む。
10 にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。焼土粒(多量)、黄褐色(10YR5/8)粘土粒(少量)を含む。土器(少量)を包含。
11 にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。炭化物粒、にぶい黄橙色(10YR7/4・多量)、焼土粒(多量)を含む。
12 にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。10 層と同質。炭化物、焼土粒、にぶい黄橙色(10YR7/4)粘土粒を多量に含む。
13 黄褐色(2.5Y5/4)粘土。地山に近似するもののしまり悪い。壁際崩落土。
14 黄褐色(2.5Y5/3)粘土。炭化物(少量)を含む。粘性強い。
15 黄褐色(10YR4/4)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。
16 黄灰色(2.5Y5/1)灰層。焼土ブロック、炭化物ブロック、にぶい黄橙色(10YR7/2)粘土ブロック(火山灰?)を多く含む。
17 黄褐色(10YR5/6)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。
18 黄灰色(2.5Y6/1)シルト。
19 明黄褐色(10YR6/6)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。貼床。
20 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒、焼土粒を多量に含む。
21 黄灰色(2.5Y5/1)シルト。黄褐色(10YR5/6)粘土粒・ブロック(多量)、焼土粒、炭化粒(少量)を含む。
22 褐色(10YR4/4)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土(多量)、焼土粒を含む。
23 炭化物層。赤褐色(5Y4/6)焼土ブロックを多く含む。
24 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。黄褐色(10YR5/8)粘土粒を多く含む。

第210図　E・F区69・71号住居跡

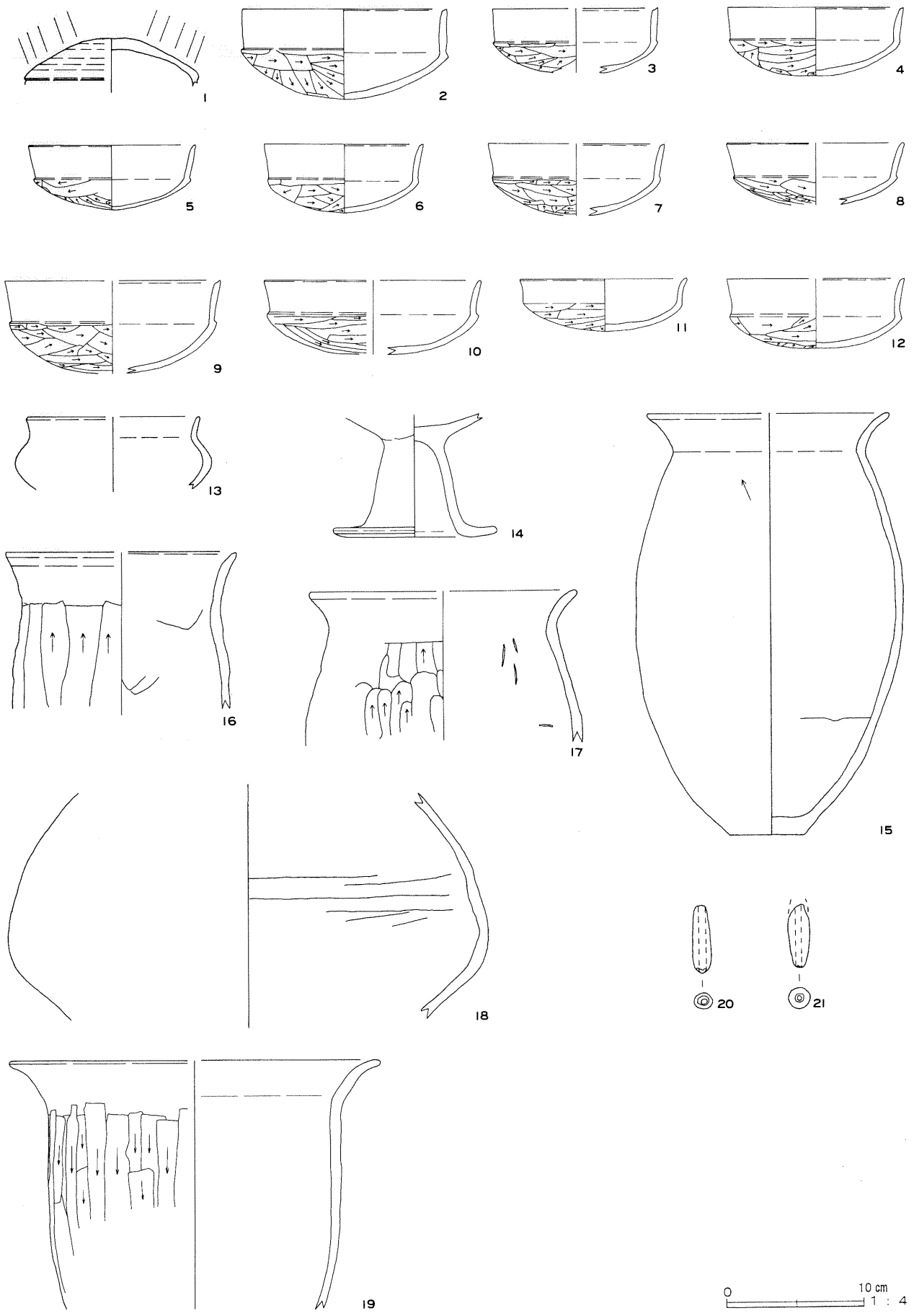


70 号住居跡土層

1　黄褐色(2.5Y5/4)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、灰褐色(5YR4/2)、焼土ブロックを含む。煙道部の崩落土。
2　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒を多く含む。煙道の天井土。
3　赤褐色(5YR4/6)粘土。被熱した天井土。
4　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒、炭化物、にぶい黄橙色(10YR7/2)粘土ブロック(火山灰？)を若干に含む。
5　灰色(N6/0)粘土。焼土粒・ブロック、炭化物粒を含む。
6　灰色(N4/0)灰層。焼土ブロックを含む。
7　灰褐色(5YR4/2)粘土。
8　黄灰色(2.5Y6/1)粘土。焼土粒、炭化物粒(若干)を含む。
9　黄褐色(2.5Y5/3)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒・炭化粒(少量)を含む。
10　褐灰色(10YR6/1)粘土。炭化物を帯状に含む。
11　4層と同一。
12　炭化物層。焼土粒(多量)を含む。
13　黄灰色(2.5Y6/1)粘土。炭化物(若干)を含む。
14　黄灰色(2.5Y6/1)粘土。黄褐色(2.5Y5/6)粘土粒を含む。
15　黄褐色(10YR5/6)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。
16　黄灰色(2.5Y6/1)シルト。
17　明黄褐色(10YR6/6)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。貼床。
18　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。
19　炭化物層。明赤褐色(5YR5/6)焼土ブロックを含む。
20　暗灰黄色(2.5Y6/1)シルト。4・11 層と同一であるが焼土粒、炭化物粒を含まない。
21　黄褐色(10YR5/6)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒・ブロックを含む。
22　灰層。焼土ブロックを含む。15 層との境は火床面。
23　黄褐色(2.5Y5/3)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒を含む。
24　黄褐色(2.5Y5/3)粘土。23 層に 26 層の焼土ブロックを多く含む。
25　黄褐色(2.5Y5/3)粘土。炭化物粒多く含む。
26　明赤褐色(5YR5/6)焼土層。
27　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。
28　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。焼土ブロック(少量)を含む。
29　黄灰色(2.5Y6/1)粘土。28 層をブロック状に含む。
30　灰黄色(2.5Y6/2)粘土。
31　オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。
32　明赤褐色(5YR5/6)焼土層。
33　黄褐色(2.5Y5/3)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒を多く含む。

0　L＝28.600m　2 m
1：60

第211図　E・F区70号住居跡



第212図　E・F区70号住居跡出土遺物

第101表　E・F区70号住居跡出土遺物観察表　(第212図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器蓋杯	-	-	-	④⑥①③②	②	浅黄	2/3	
2	土師器杯	15.1	6.6	-	①③⑥④	②	橙	4/5	内外面黒斑有。
3	土師器杯	(12.2)	-	-	③①②④⑥	②	明赤褐	1/2	
4	土師器杯	12.8	5.0	-	①③⑥④	②	橙	一部欠	外面黒斑有。内外面煤付着。
5	土師器杯	12.3	4.7	-	③①④②	②	明赤褐	1/2	外面黒斑有。
6	土師器杯	11.8	5.0	-	③①④⑥	②	橙	下位1/4欠	外面黒斑有。
7	土師器杯	(13.0)	-	-	③①④	②	橙	1/3	内外面煤付着。
8	土師器杯	(13.0)	-	-	③①④	②	橙	1/3	内外面煤付着。
9	土師器杯	(15.8)	-	-	③①④②⑥	②	明赤褐	1/3	内外面煤付着。
10	土師器杯	(16.0)	-	-	③④①②	②	明赤褐	1/5	
11	土師器杯	12.3	3.8	-	③①④	②	明赤褐	一部欠	内外面煤付着。
12	土師器杯	(13.0)	5.1	-	③①④	②	橙	1/2	外面黒斑有。
13	土師器盤	(12.5)	-	-	②①⑥④③	②	橙	1/3	磨滅。
14	土師器高杯	-	-	11.9	①④③⑥	②	橙	2/3	
15	土師器甕	(17.6)	31.0	5.4	②①③④⑥	②	にぶい赤褐	1/3	磨滅。
16	土師器甕	(16.8)	-	-	⑥②①④③	②	橙	上位1/3	
17	土師器甕	(19.6)	-	-	⑥①④③②	②	橙	上位1/4	
18	土師器壺	-	-	-	①③⑥②	②	橙	1/3	外面磨滅。
19	土師器甑	(27.2)	-	-	③⑥	②	黄灰	3/4	
20	土錘	長さ 5.0	最大径 1.3	孔径 0.5				完形	
21	土錘	長さ -	最大径 1.6	孔径 0.4				一部欠	

層）がみられ、焚口部から燃焼部には焼土・炭化物を含む層（4・5・8・9層）の下に灰層（7層）がみられた。

カマドの両脇には貯蔵穴が2つみられた。カマド北西部の貯蔵穴は、北西袖部の下場に入っている。径1.41×0.98mの瓢箪形で、床面からの深さは22cmを測る。カマド南東部にある貯蔵穴は、径95×85cmの円形で、床面からの深さは54cmを測る。覆土中層には、焼土層（26層）が認められた。

出土遺物（第212図）には、須恵器蓋（No.1）、土師器杯（2～12）、盤（13）、高杯（14）、甕（15～17）、壺（18）、甑（19）、土錘（20･21）等があり、杯類が多数みられた。主にカマド周辺からまとまって検出されたが、大半が覆土中からの検出である。1は口縁部を欠く。末野産である。土師器杯はすべて身の深い模倣杯である。黒斑を有するものや煤が付着しているものが多い。13は摩滅が顕著であった。14はやや高い脚部であり、裾が大きく広がるタイプである。甕は長胴甕である。壺は胴部のみの検出である。15・18は摩滅が顕著であった。19は把手の付かないタイプである。土錘は2点検出された。21は片側先端を欠く。

71号住居跡
(第210図)

AJ－22･23グリッドに位置する。複数の同時期の住居跡と重複関係にあるため、残存する箇所は僅かである。北西部で66・69号住居跡に、南東部で70号住居跡に切られている。

正確な規模は不明であるが、4.9m程の方形を呈すると考えられる。主軸方向はN－24°－Eを指す。確認面からの深さは38cmを測り、床面はほぼ平坦であり、貼り床面が検出された。覆土は黄褐色ないし黄灰色のシルト4層（15・17～19層）からなる。中層は灰層（16層）であり、火山灰らしき混入物がみられた。堆積状況から自然堆積と考えられる。壁溝は南東隅から南西隅まで巡っているが、一部途切れている。幅は9～15cmを測る。

柱穴、貯蔵穴等は確認されなかった。

カマドは北東壁のほぼ中央に設けられている。カマド前面を69号住居跡、煙道部北西部を66号住居跡に切られているため、残存状態は良くない。袖部、燃焼部は検出されなかった。煙道部は凹凸がみられるが、先端でほぼ直角に立ち上がる。壁外へは1.5mを測る。覆土に天井部崩落土等はみられず、焼土・炭化物を含む層（1～6・9層）が確認された。

出土遺物（第213図）には、須恵器高杯（No.6）、土師器杯（1～5）、高杯（7～9）、椀（10・11）、甕（12～19）、鉢（20）等がある。甕が北東隅付近からまとまって検出された。その他は覆土中からの検出である。6は焼き歪みが生じており、図示しなかったが、杯部に櫛描波状文が施文されている。末野産。土師器杯はすべて身の深い模倣杯である。4は外面に黒斑を有し、5は外面に煤の付着がみられた。7は口縁部が大きく開き、8・9は模倣杯に低い脚部が付くタイプである。10・11は器形が異なるが、ともにまりとした。10は摩滅が顕著であった。甕は長胴甕（12～17）、丸胴甕（18）、小型のもの（19）がある。黒斑を有するものや煤が付着するもの、二次加熱を受けているもの等が多い。14は上げ底になっている。15は胴下部にミガキ調整が施されている。17は摩滅が顕著であった。20は口縁部が内傾する。底部を欠く。

72号住居跡（第214図）

AI・AJ－23・24グリッドに位置する。北東部で66号住居跡に切られ、南東部で73号住居跡を切っている。

長軸6.26m、短軸5.22mの長方形を呈する。南北軸方向はN－33°－Eを指す。確認面からの深さは49cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、炭化物を含む黄色系の粘土を主体とする。柱穴は4つ検出された。床面からの深さは30～60cmを測る。

壁溝、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

出土遺物（第215図）には、土師器杯（No.1～12）、高杯（13）、盌（14）、甕（15～17）、甑（18・19）等がある。床面中央から検出された15・19以外は、すべて覆土中からの検出である。1・2が杯身模倣杯、3～11は杯蓋模倣杯である。11は体部と底部境の稜が不明瞭である。12のみ丸底で、口縁部が内湾しながら立ち上がる。煤が付着しているものが多く、12のみ外面に黒斑を有する。13は低い脚部のみの検出である。14は口縁部の屈曲からまりとした。甕は長胴甕（15・16）と小型のもの（17）がある。17は摩滅が顕著であった。甑はともに把手を持たないタイプである。

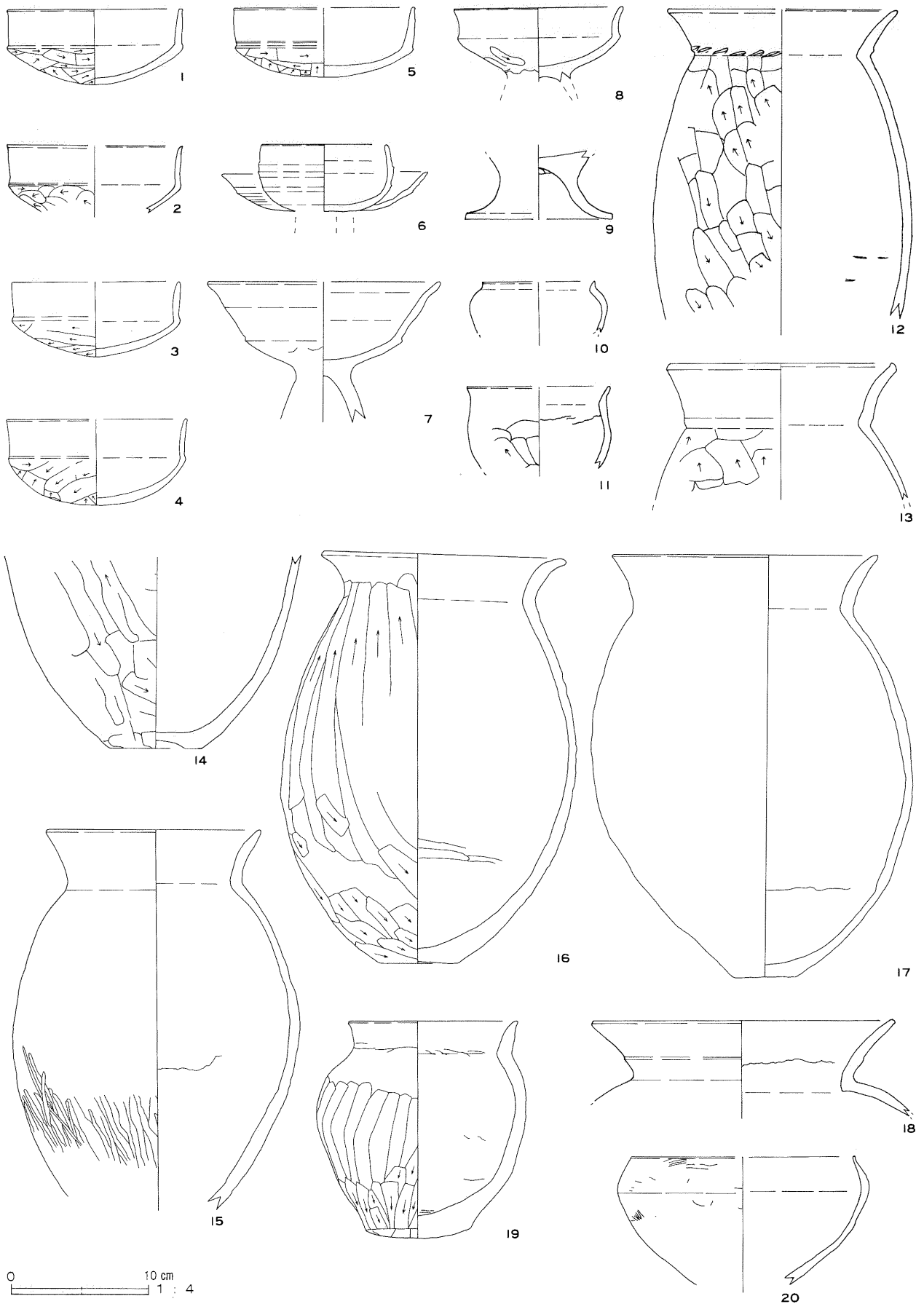
73号住居跡（第216図）

AI・AJ－23・24グリッドに位置する。北東部で72号住居跡を切っている。

長軸5.85m、短軸5.83mの方形を呈する。主軸方向はN－38°－Eを指す。確認面からの深さは42cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。覆土は灰黄褐色粘土による単一層（1層）で、床面直上には炭化物が帯状に堆積していた。柱穴は4つ確認された。床面からの深さは37～49cmを測る。

壁溝、貯蔵穴はみられない。

カマドは北東壁ほぼ中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱し



第213図　E・F区71号住居跡出土遺物

第102表　E・F区71号住居跡出土遺物観察表　（第213図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	12.8	5.4	-	③①④	②	橙	一部欠	
2	土師器杯	(12.6)	-	-	③①④②⑥	②	橙	1/4	
3	土師器杯	(12.2)	5.4	-	④③①②	②	橙	1/3	
4	土師器杯	(13.2)	6.2	-	③①④	②	橙	口縁部3/4欠	外面黒斑有。
5	土師器杯	(13.2)	5.0	-	③①④⑥	②	明赤褐	1/2	外面煤付着。
6	須恵器高杯	(15.0)	-	-	①	②	灰	器受部のみ	櫛描波状文。
7	土師器高杯	(17.0)	-	-	③①④	②	橙	1/3	
8	土師器高杯	12.2	-	-	③①②	②	橙	1/3	
9	土師器高杯	-	-	(10.6)	①②⑥	②	橙	脚部2/3	
10	土師器椀	(8.2)	-	-	①⑥②	②	明赤褐	上半1/4	磨滅。
11	土師器椀	(10.2)	-	-	⑥①④③②	②	明赤褐	1/4	
12	土師器甕	(16.8)	-	-	⑥④③	②	橙	1/5	
13	土師器甕	16.0	-	-	②①④⑥	②	橙	上位のみ	
14	土師器甕	-	-	6.6	①④⑥②③	②	橙	1/3	
15	土師器甕	15.6	-	-	③⑥①	②	橙	3/4	外面黒斑有。剝離。二次加熱。
16	土師器甕	17.7	30.1	5.8	③⑥④①	②	橙	一部欠	外面煤付着。磨滅。二次加熱。
17	土師器甕	16.2	30.9	4.5	⑥③	②	にぶい黄橙	3/4	外面黒斑有。二次加熱。磨滅。
18	土師器甕	21.7	-	-	⑥④②①	②	橙	口縁部3/4	磨滅。
19	土師器甕	12.3	15.8	7.6	③①④⑥	②	明赤褐	一部欠	
20	土師器鉢	(16.1)	-	-	①②⑥④	②	明赤褐	1/5	磨滅。

た箇所が確認された。焚口部の幅は54cm、燃焼部は52cm程を測る。焚口部から燃焼部はほぼ平坦である。燃焼部からは、土師器甕（No.6・8～10）が多数出土した。燃焼部と煙道部の境は、壁際付近で立ち上がっていることから、他の住居跡同様に段が設けられていたと考えられる。覆土は図示できなかったが、焼土、炭化物を含む層が検出された。

出土遺物（第217図）には、土師器杯（No.1～4）、椀（5）、甕（6～11）、鉢（12）、土錘（13）等がある。主にカマド及びその周辺から多数検出された。3・11・12・13は覆土中からの検出である。杯は口径大きく、身の浅い模倣杯（1～3）と、丸底で内湾しながら立ち上がるタイプ（4）がみられた。4は口径が大きく、器高が低い。内外面に煤の付着がみられた。5は体部が無調整であり、底部にヘラ削りが施されている。外面に黒斑を有する。甕はすべて長胴甕である。11は底部に木葉痕が残る。12は底部を欠く。土錘は1点のみ検出された。完形品。

74号住居跡（第218図）

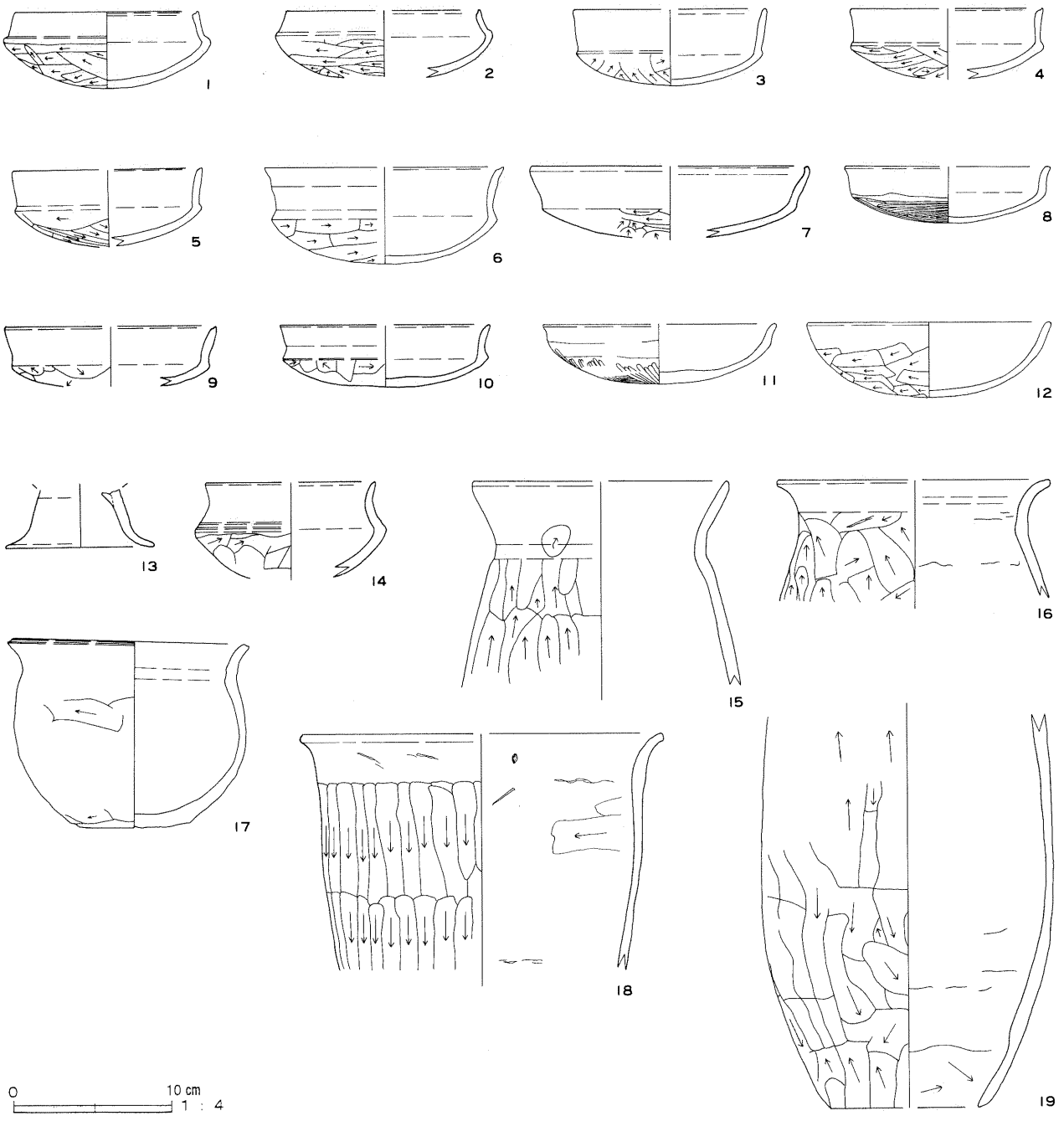
AH・AI－23グリッドに位置する。南東部で76号住居跡、北西部で77号住居跡を切っている。

長軸5.65m、短軸5.35mの方形を呈する。主軸方向はS－38°－Eを指す。確認面からの深さは49cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。覆土は褐色系の粘土と炭化物層の三層（4～6層）からなる。上層（4層）が厚く堆積しており、床面直上には炭化物層（5層）が薄く堆積していた。壁溝は、南東隅と北東隅を除くすべての壁沿いにみられた。北東壁沿いの壁溝のみ壁から7～14cm離れて巡っている。幅7～9cm、床面からの深さは3～5cm程を測る。柱穴は4つ検出された。床面からの深さ20～38cmを測る。

カマドは南東壁中央からやや北東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内



第214図　E・F区72号住居跡



第215図　E・F区72号住居跡出土遺物

面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は44cm、燃焼部は40cmを測り、煙道は先端で23cmを測る。焚口部から煙道部は先端に向かって緩やかに立ち上がる。壁外へは69cmほど張り出す。覆土に天井部崩落土等はみられず、焼土・炭化物を含む1層下から焼土層(2層)、焼土・炭化物等をブロック状に含む層（3層）が検出された。

カマド北西脇には、径70×63cmの円形の貯蔵穴が確認された。床面からの深さは35cmを測る。上層（7層）に焼土ブロック、中下層（8・9層）に炭化物を含んでいた。

出土遺物（第219図）には、土師器杯（No.1・2）、甕（3・4）等がある。杯はともに身の深い模倣杯である。2は外面に黒斑を有する。甕はともに長胴甕である。上部のみの検出である。4は摩滅が顕著であったため、調整は図示不可能であった。

第103表　E・F区72号住居跡出土遺物観察表　(第215図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	11.6	4.8	-	①④③⑥	②	赤褐	口縁部1/3欠	内外面煤付着。
2	土師器杯	(12.2)	-	-	①③④⑥	②	明赤褐	上位1/4	外面煤付着。
3	土師器杯	(12.2)	4.8	-	⑥①③④	②	橙	1/2	
4	土師器杯	(12.0)	-	-	①③④⑥	②	橙	1/4	
5	土師器杯	(12.0)	-	-	①③④⑥	②	橙	1/3	
6	土師器杯	(15.2)	6.1	-	①⑥③④	②	橙	1/4	内外面煤付着。
7	土師器杯	(17.6)	-	-	③①②⑥	②	明赤褐	1/5	
8	土師器杯	(12.8)	3.5	-	①③④②	②	橙	1/4	内外面煤付着。
9	土師器杯	(12.4)	-	-	①④②⑥	②	にぶい褐	1/5	
10	土師器杯	(13.2)	-	-	①④②⑥	②	橙	1/3	
11	土師器杯	(14.7)	3.7	-	①③④⑥	②	橙	1/2	内外面煤付着。
12	土師器杯	15.4	4.7	-	①③⑥④	②	橙	1/2	外面黒斑有。
13	土師器高杯	-	-	9.4	③②①④	②	橙	脚部2/3	
14	土師器盌	(10.6)	-	-	④①⑥②	②	橙	1/3	
15	土師器甕	(13.8)	-	-	①③④②	②	明赤褐	上位1/4	
16	土師器甕	(17.0)	-	-	⑥①③②④	②	明褐	上位1/2	
17	土師器甕	15.3	12.0	7.0	⑥③④①	②	橙	4/5	外面剝離。
18	土師器甑	(23.0)	-	-	⑥①②③④	②	橙	上位1/5	
19	土師器甑	-	-	(10.2)	⑥①④②③	②	橙	1/3	

75号住居跡　AI－23・24グリッドに位置する。北側で77号住居跡を切っている。

(第220図)　長軸6.43m、短軸5.53mの長方形を呈する。主軸方向はN－3°－Eを指す。確認面からの深さは42cmを測り、床面はやや凹凸がみられ、西側にやや傾く。覆土は褐灰色粘土による単一層（4層）である。壁溝はみられない。柱穴は4つ確認された。床面からの深さは38～43cmを測る。

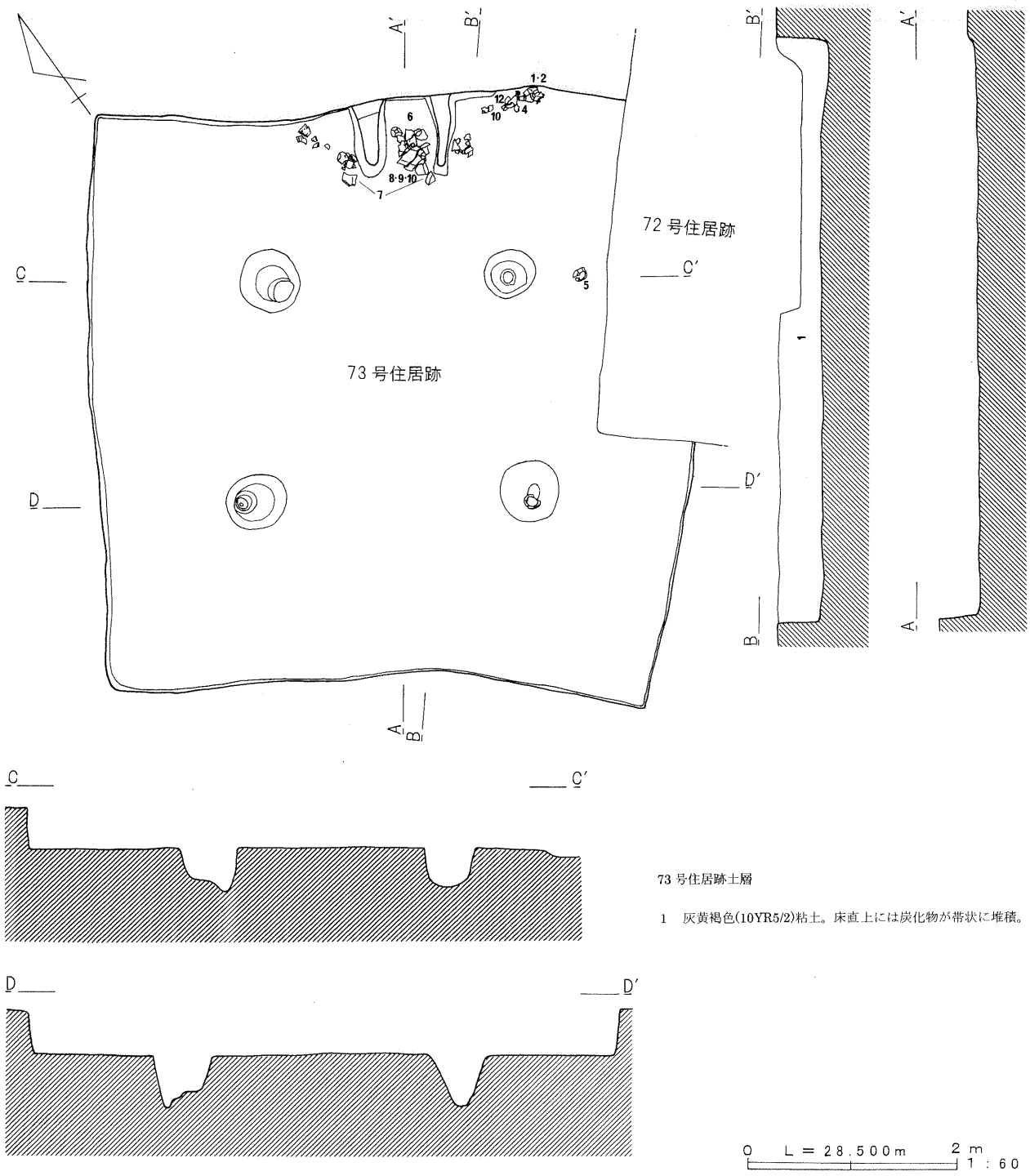
カマドは北壁中央からやや東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は49cm、燃焼部は43cmを測る。焚口部には、被熱して赤色化した地山が顕著であった。焚口部から燃焼部は、ほぼ平坦である。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は8cmを測る。煙道部の幅は30～36cmを測り、先端近くで20cmとすぼまる。壁外へは確認されている長さで1.01m程張り出している。覆土に天井部崩落土等はみられず、住居跡覆土の下から、焼土・炭化物を含む層（3層)、焼土層（2層)、焼土ブロックを含む層（1層）の順で検出された。

カマドの東側には貯蔵穴がみられた。径70cm前後、床面からの深さ20cmの円形を呈する。

出土遺物（第221図）には、土師器杯（No.1～4)、甑（5)、石製紡錘車（6)、土錘（7～11)等がある。1・3が床面出土遺物であり、その他のものはすべて覆土中からの検出である。杯はすべて模倣杯であり、1のみ杯身模倣杯である。その他は杯蓋模倣杯である。口径が大きく、器高が低い。1～3は内外面に煤の付着がみられた。5は底部のみの残存である。摩滅が顕著であった。6は側面に放射状の線刻、底面には規則性のない線刻が描かれている。土錘は5点検出された。長さ5cm前後、径1.5cm前後を測る。

76号住居跡　AH・AI－22・23グリッドに位置する。北西部を74号住居跡に切られている。

(第222図)　長軸5.53m、短軸4.22mの長方形を呈する。南北軸方向はN－32°－Wを指す。確認面からの深さは38cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。覆土は図示でき

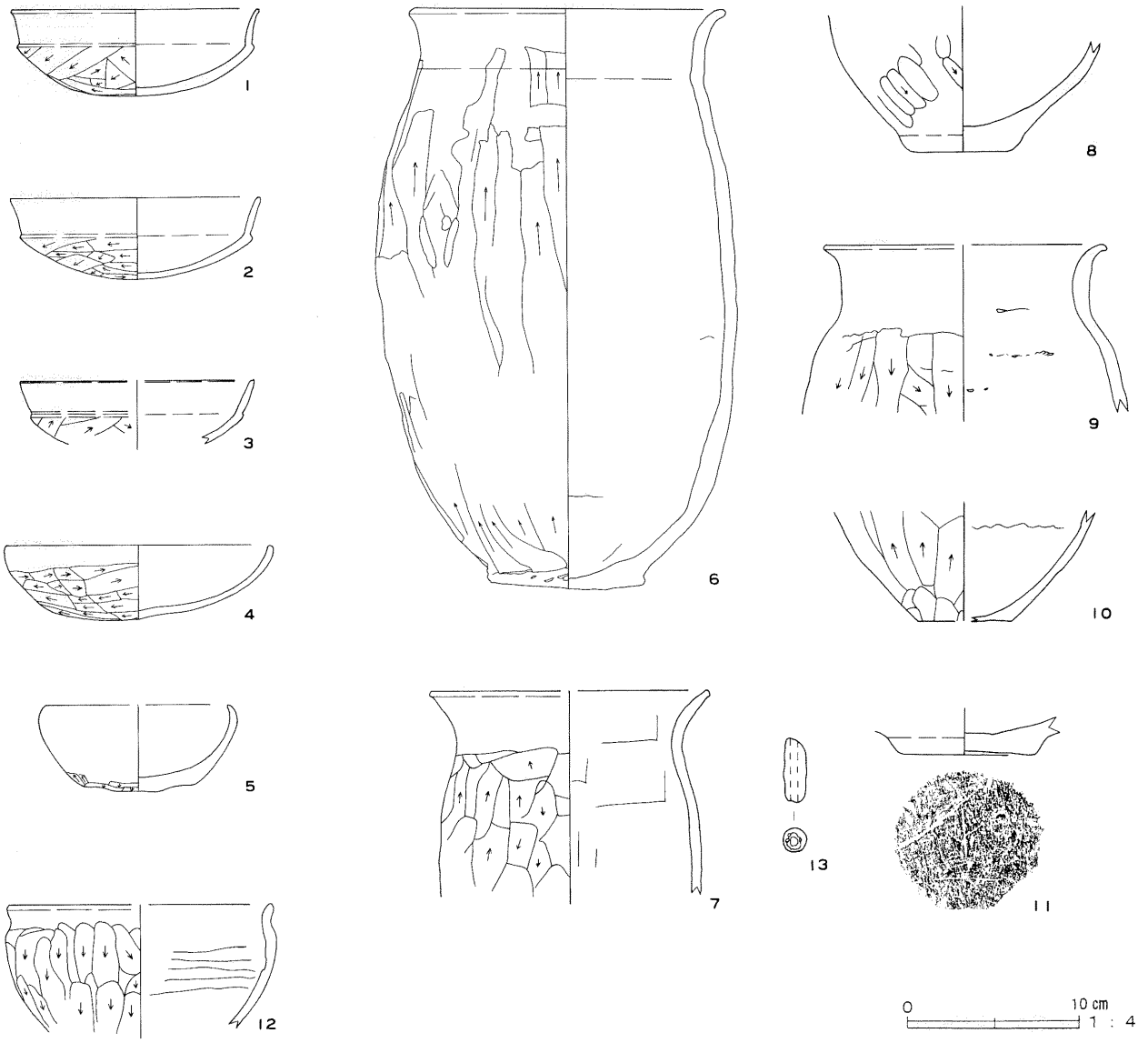


第216図　E・F区73号住居跡

なかったが、黄褐色系の粘土を主体とし、焼土・炭化物を含んでいた。自然堆積と考えられる。壁溝は北西壁以外すべてにみられるが、所々で途切れている。また、南東壁以外は壁から3～8cm離れている。幅は6～10cm、床面からの深さは4cm程を測る。

柱穴、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

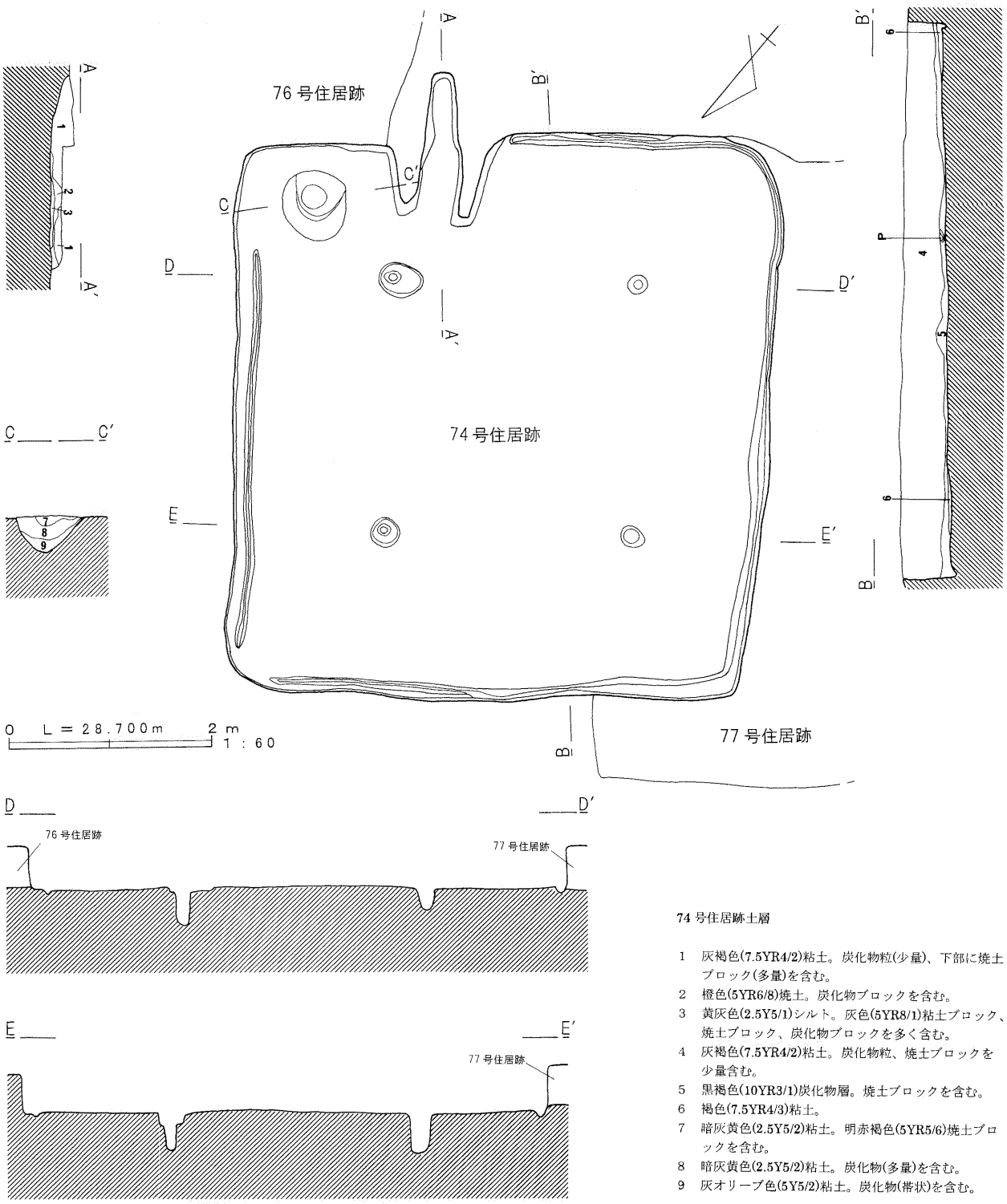
出土遺物（第222図）は、土師器甕（No.1）のみである。長胴甕。上部のみの残存である。覆土中から検出された。



第217図　E・F区73号住居跡出土遺物

第104表　E・F区73号住居跡出土遺物観察表　（第217図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	14.4	4.9	-	③①⑥	②	明赤褐	口縁部1/2欠	
2	土師器杯	14.5	4.7	-	③①④⑥	②	明赤褐	口縁部1/4欠	
3	土師器杯	(13.6)	-	-	③①②④⑥	②	橙	1/4	
4	土師器杯	15.5	4.4	-	①③④⑥	②	明赤褐	3/4	内外面煤付着。
5	土師器椀	(10.6)	4.7	-	⑥①③④	②	明黄褐	口縁部2/3欠	外面黒斑有。
6	土師器甕	18.4	34.2	9.1	③⑥①	②	橙	2/3	胴部外面剝離。
7	土師器甕	(16.0)	-	-	②⑥①④	②	にぶい黄橙	上位1/2	
8	土師器甕	-	-	5.6	②⑥③①	②	明赤褐	底部のみ	
9	土師器甕	(16.0)	-	-	⑥②	①	にぶい黄橙	上位1/4	
10	土師器甕	-	-	(5.6)	⑥①④③②	②	にぶい橙	下位1/2	
11	土師器甕	-	-	8.0	④③①②⑥	②	灰白	底部のみ	
12	土師器鉢	(15.2)	-	-	①⑥④②③	②	赤褐	2/3	
13	土錘	長さ　3.7	最大径　1.3	孔径　0.5				完形	



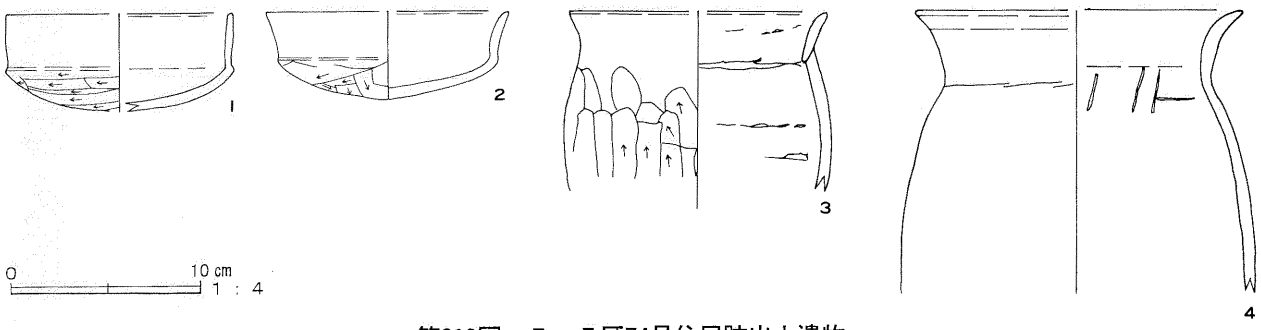
74号住居跡土層

1　灰褐色(7.5YR4/2)粘土。炭化物粒(少量)、下部に焼土ブロック(多量)を含む。
2　橙色(5YR6/8)焼土。炭化物ブロックを含む。
3　黄灰色(2.5Y5/1)シルト。灰色(5YR8/1)粘土ブロック、焼土ブロック、炭化物ブロックを多く含む。
4　灰褐色(7.5YR4/2)粘土。炭化物粒、焼土ブロックを少量含む。
5　黒褐色(10YR3/1)炭化物層。焼土ブロックを含む。
6　褐色(7.5YR4/3)粘土。
7　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。明赤褐色(5YR5/6)焼土ブロックを含む。
8　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。炭化物(多量)を含む。
9　灰オリーブ色(5Y5/2)粘土。炭化物(帯状)を含む。

第218図　E・F区74号住居跡

77号住居跡（第220図）　AH・AI－23グリッドに位置する。北東部を74号住居跡、南西部を75号住居跡に切られている。

長軸は不明であるが、短軸は6.53mを測る。平面形は長方形を呈する。南北軸方向はN－3°－Eを指す。確認面からの深さは45cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は確認した箇所で三層（6～8層）が確認された。色調は様々であるが、



第219図　E・F区74号住居跡出土遺物

第105表　E・F区74号住居跡出土遺物観察表　（第219図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(12.0)	-	-	③①④⑥	②	橙	1/4	
2	土師器杯	(12.8)	4.6	-	①④③	②	明赤褐	2/5	外面黒斑有。
3	土師器甕	(17.0)	-	-	①④⑥②③	②	にぶい黄橙	上位1/2	
4	土師器甕	(13.6)	-	-	④①③②	②	明赤褐	上半1/2	磨滅。

全層中に炭化物を含んでいた。特に床面直上にみられた7層は、炭化物が帯状に堆積しており、焼土もブロック状に含んでいた。また上層（6層）には、火山灰らしき混入物もみられた。

壁溝、柱穴、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

出土遺物（第223図）には、土師器杯（No.1～4）、甑（5）、石錘（6）、土錘（7）等がある。住居跡中央付近及び南東隅から検出された。杯はすべて模倣杯であるが、1のみ深身であり、他は浅身のものである。2～4は内外面に煤の付着がみられた。5は小型のものである。底部を欠く。6は完形品。土錘は1点のみ検出された。片側先端を欠くが、大きい部類に入るものである。

78号住居跡
（第224図）

AJ－24・25グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

長軸5.71m、短軸3.68mの長方形を呈する。南北軸方向はN－64°－Eを指す。確認面からの深さは24cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は灰色系の粘土（1～3層）からなる。壁溝は、南東隅及び北東隅を除いてほぼ全周する。北西壁では一部途切れており、壁から4～10cm離れて巡っている。幅6～20cm、床面からの深さは3～5cmを測る。ピットは南西部から1つ確認されたが、床面からの深さは6cmと浅く、柱穴かどうか不明である。

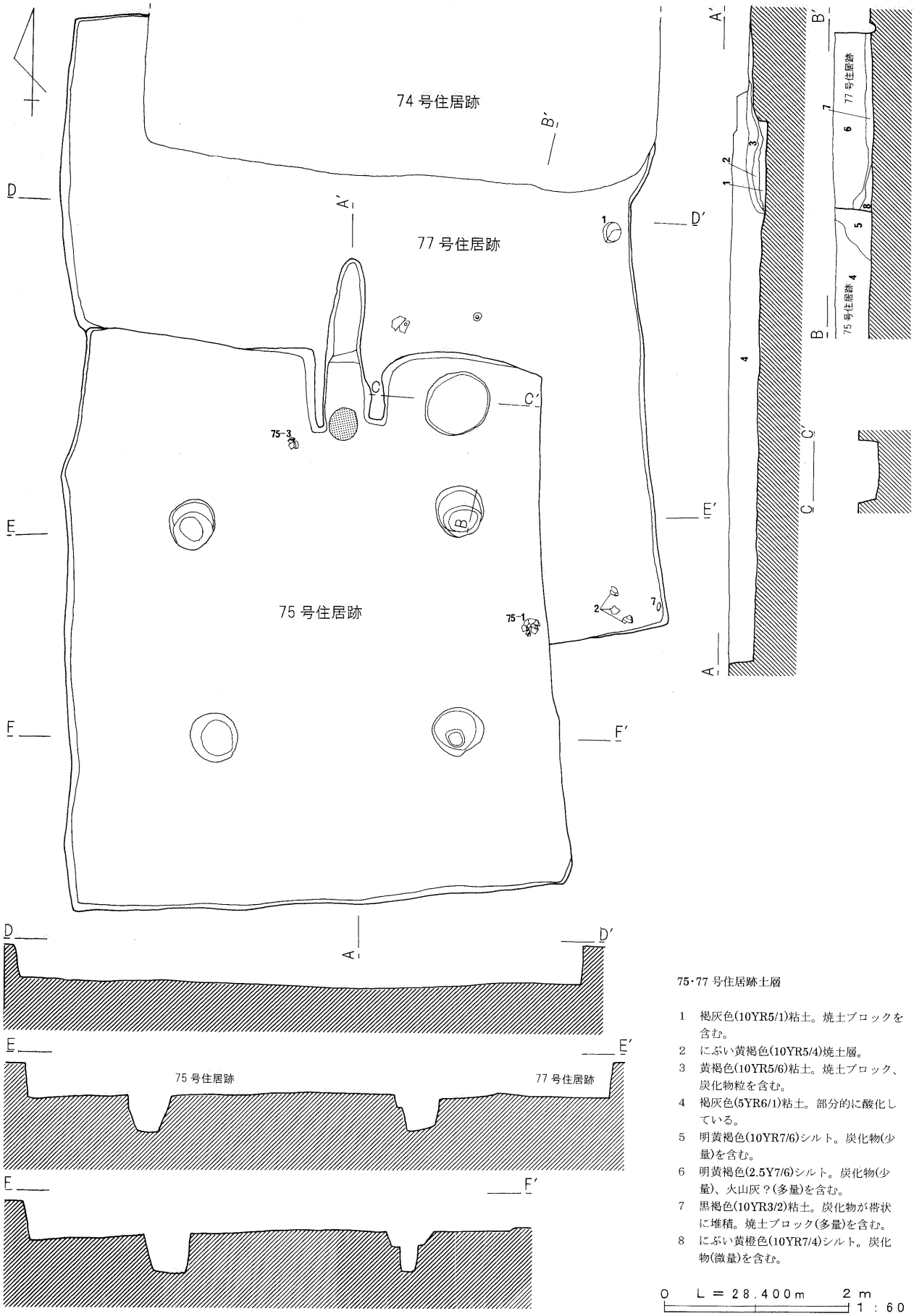
カマドは確認されなかった。北東隅からは、径58×43cm楕円形で、床面からの深さは5cmの貯蔵穴が確認された。覆土上層から土師器甕（No.1）が検出された。

出土遺物（第225図）は、貯蔵穴出土の土師器甕（No.1）のみである。長胴甕。下部を欠く。他に土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

79号住居跡
（第226図）

AJ・AK－22グリッドに位置する。北東部大半が調査区域外にあり、南側で80号住居跡を切っている。

規模・平面形は不明であるが、北西壁は6.45mを測る。主軸方向はN－31°－Eを指す。

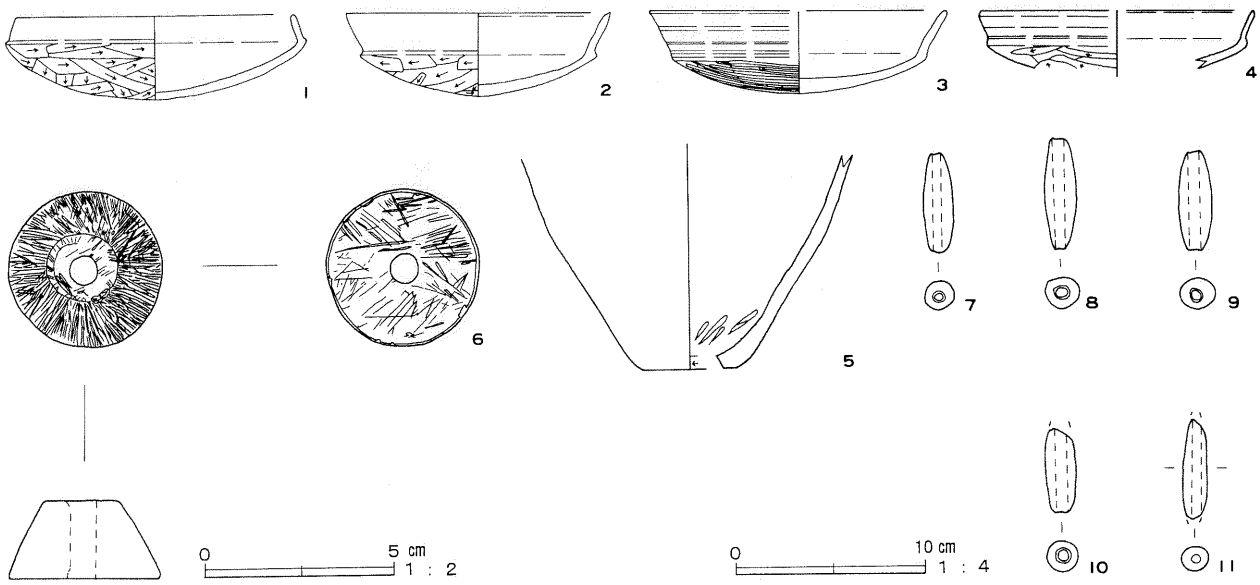


75・77 号住居跡土層

1　褐灰色(10YR5/1)粘土。焼土ブロックを含む。
2　にぶい黄褐色(10YR5/4)焼土層。
3　黄褐色(10YR5/6)粘土。焼土ブロック、炭化物粒を含む。
4　褐灰色(5YR6/1)粘土。部分的に酸化している。
5　明黄褐色(10YR7/6)シルト。炭化物(少量)を含む。
6　明黄褐色(2.5Y7/6)シルト。炭化物(少量)、火山灰？(多量)を含む。
7　黒褐色(10YR3/2)粘土。炭化物が帯状に堆積。焼土ブロック(多量)を含む。
8　にぶい黄橙色(10YR7/4)シルト。炭化物(微量)を含む。

0　L＝28.400m　2 m
1：60

第220図　E・F区75・77号住居跡



第221図　E・F区75号住居跡出土遺物

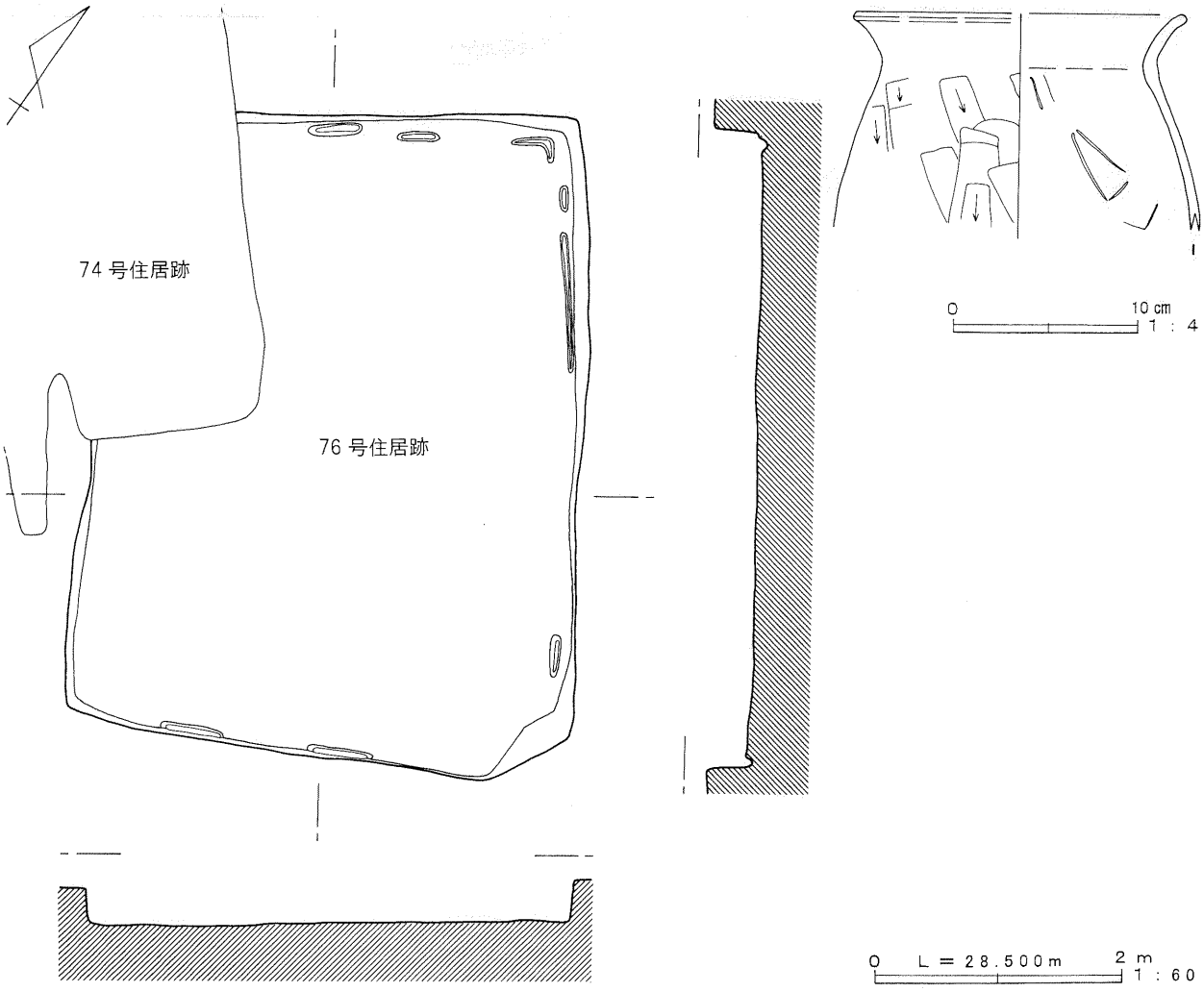
第106表　E・F区75号住居跡出土遺物観察表　（第221図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	14.8	4.4	-	①③④	②	明赤褐	口縁部1/2欠	内外面煤付着。
2	土師器杯	14.0	4.4	-	①③④	②	明赤褐	1/2	内外面煤付着。
3	土師器杯	(15.8)	4.3	-	③①④	②	橙	1/4	内外面煤付着。
4	土師器杯	(14.3)	-	-	③①②	②	明赤褐	1/5	
5	土師器甑	-	-	5.0	①④②⑥③	②	にぶい橙	下位2/3	磨滅。
6	石製紡錘車	上端径 2.0	下端径 4.0	高さ 2.1	孔径 0.7			完形	滑石製。
7	土錘	長さ 5.4	最大径 1.6	孔径 0.4				完形	
8	土錘	長さ 5.9	最大径 1.8	孔径 0.6				完形	
9	土錘	長さ 5.4	最大径 1.9	孔径 0.5				完形	
10	土錘	長さ 4.5	最大径 1.6	孔径 0.6				一部欠	
11	土錘	長さ 5.4	最大径 1.4	孔径 0.5				両端欠	

確認面からの深さは54cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は、確認した範囲では三層（1～3層）みられ、褐色系の粘土及びシルトを主体とする。上層（1層）は厚く堆積しており、全層中に焼土等の混入物を含んでいた。壁溝、柱穴はみられないが、住居跡中央からやや南西に径91×63cm、床面からの深さ24cmの掘り込みがみられた。遺物が検出されたことから、柱穴とは考えられない。本住居跡南西にある80号住居跡の貯蔵穴の可能性も考えられる。

カマドは北東壁に設けられている。調査区域外との境にみられ、北東部半分を欠く。袖部は北西側のみ検出され、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部等の幅は不明であり、焚口部から煙道部先端までは緩やかに立ち上がる。壁外へは1.13m程張り出している。覆土は図示できなかったが、天井部崩落土等は確認されず、焼土・炭化物を含む層が確認された。

出土遺物（第225図）には、須恵器杯（No.1）、土師器杯（2～9）、甕（10～11）、壺（12）、盌（13）、甑（14）、土錘（15・16）等がある。1・5～9・14が掘り込みから検出されたものであり、その他のものは覆土中からの検出である。1は完形品である。末野産。土師器杯はすべて模倣杯であり、2のみ杯身模倣杯である。その他は身の深い杯蓋模倣杯であ



第222図　E・F区76号住居跡・出土遺物

第107表　E・F区76号住居跡出土遺物観察表　(第222図)

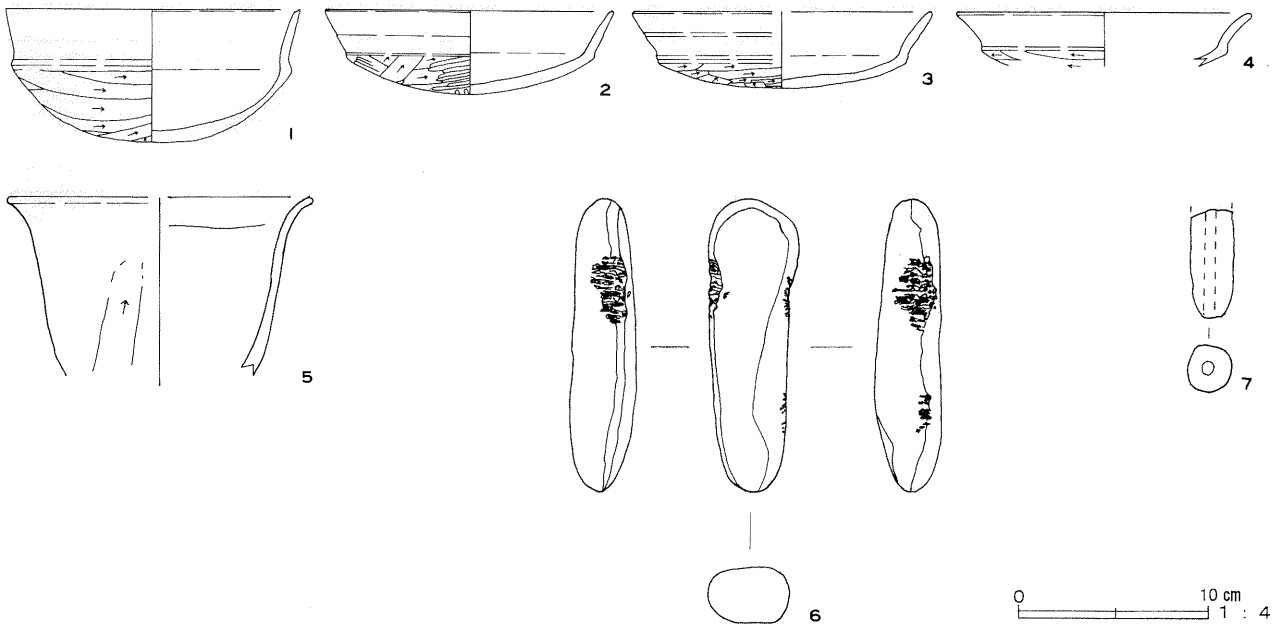
No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　考
1	土師器甕	(17.8)	-	-	①⑥④②③	②	にぶい橙	上位1/2	

るが、3のみ他と比べて大型である。黒斑を有するものや煤が付着しているものがみられた。甕は長胴甕である。ともに上部のみの検出である。12は短頸壺である。口縁部のみの検出である。13は口縁部が屈曲していることから、盌とした。底部を欠く。14は把手を持たないタイプである。土錘は2点検出された。長さ4cm前後、径1.4cmを測る。

80号住居跡
(第226図)

AK－22グリッドに位置する。北東部で79号住居跡に切られ、またその大半が調査区域外にあるため、南西隅のみの検出である。

規模・平面形等は不明である。確認面からの深さは53cmを測り、床面はやや凹凸があるが、ほぼ平坦であった。覆土は色調の異なる三層（4～6層）が確認された。上層（4層）は厚く堆積しており、火山灰らしき混入物がみられた。また、床面直上及び壁際には炭化物が薄く堆積しており、特に中央付近は焼土とともに多く堆積していたことから、焼失住



第223図　E・F区77号住居跡出土遺物

第108表　E・F区77号住居跡出土遺物観察表　(第223図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	15.6	7.0	-	③①④	②	橙	2/3	
2	土師器杯	15.4	4.4	-	①③④	②	橙	口縁部1/3欠	内外面煤付着。
3	土師器杯	(16.0)	4.0	-	①⑥③④	①	灰褐	1/2	内外面煤付着。
4	土師器杯	15.6	-	-	③①④②	②	橙	上位1/2	内外面煤付着。
5	土師器甕	(13.2)	-	-	⑥①④③②	②	橙	上半1/4	磨滅。
6	石錘	長さ 15.6 幅 4.3 厚さ 3.0						完形	
7	土錘	長さ - 最大径 2.4 孔径 0.6						一部欠	

居の可能性が考えられる。

壁溝、柱穴、カマド等は検出されなかったが、79号住居跡内から確認された掘り込みは、本住居跡の貯蔵穴の可能性がある。

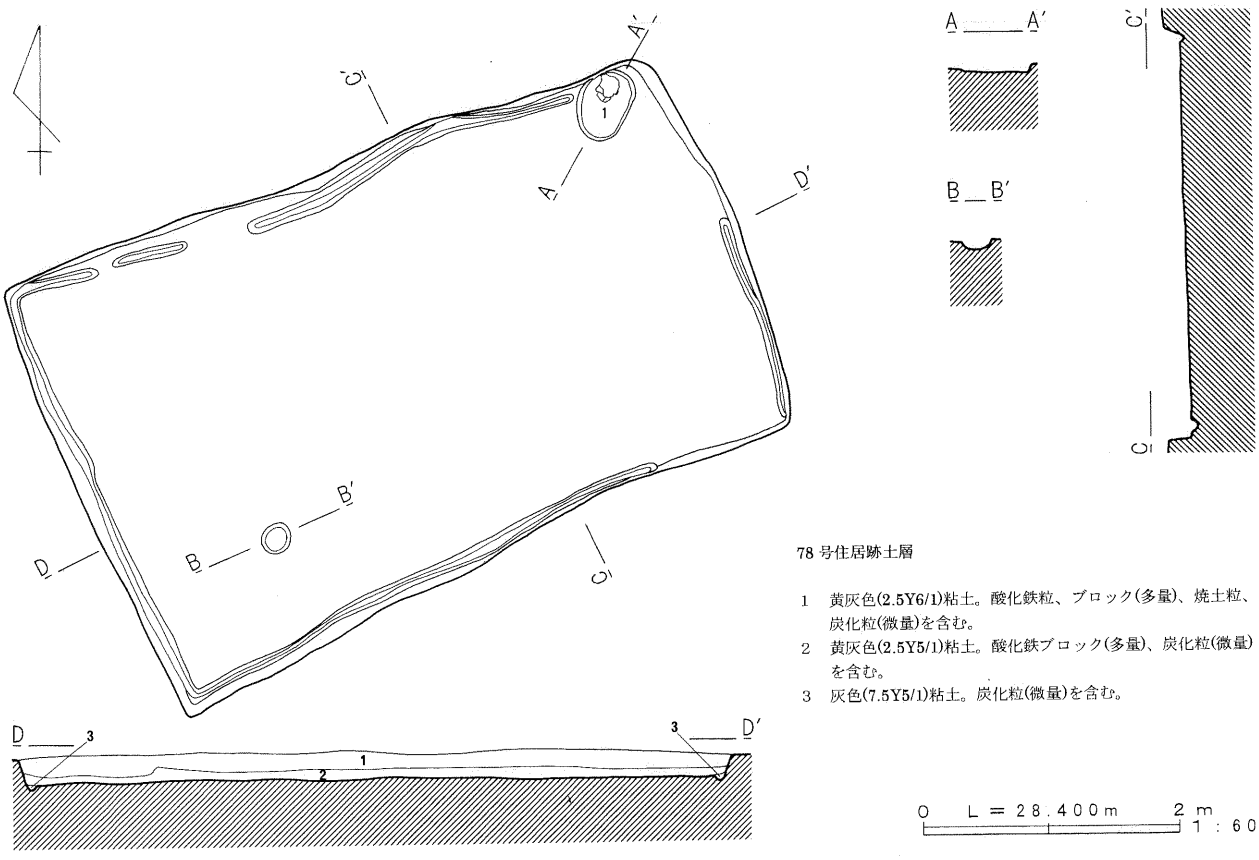
出土遺物（第226図）は、土師器杯（No.1）のみである。模倣杯。焼土・炭化物に混じって検出された。

81号住居跡
(第227図)

AJ・AK－25・26グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

長軸4.38m、短軸4.32mの方形を呈する。主軸方向はN－30°－Eを指す。確認面からの深さは44cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄灰色の粘土二層（4・5層）からなり、上層（5層）は厚く堆積していた。自然堆積と考えられる。柱穴は3つ確認された。南東部に位置すべき柱穴はみられなかった。

カマドは北東壁ほぼ中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部から燃焼部の幅は42～45cm、煙道部は中央で22cmとやや狭くなり、先端で30cmと膨らむ。焚口部から燃焼部は床面とほぼ同じレベルであった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は17cmを測る。煙道部はほぼ平坦であり、先端でピット状の掘り込みとなっている。壁外へは1.45m程張り出している。覆土は薄く、



第224図　E・F区78号住居跡

天井部崩落土等はみられない。焼土を含む層（1層）の下から灰層（2層）、焼土ブロックを含む層（3層）が検出された。

カマドの北西脇には、径80×44cmの半円状を呈し、床面からの深さ9cmを測る貯蔵穴が検出された。南西部は柱穴に接している。底面からは土師器杯（No.1）が検出された。

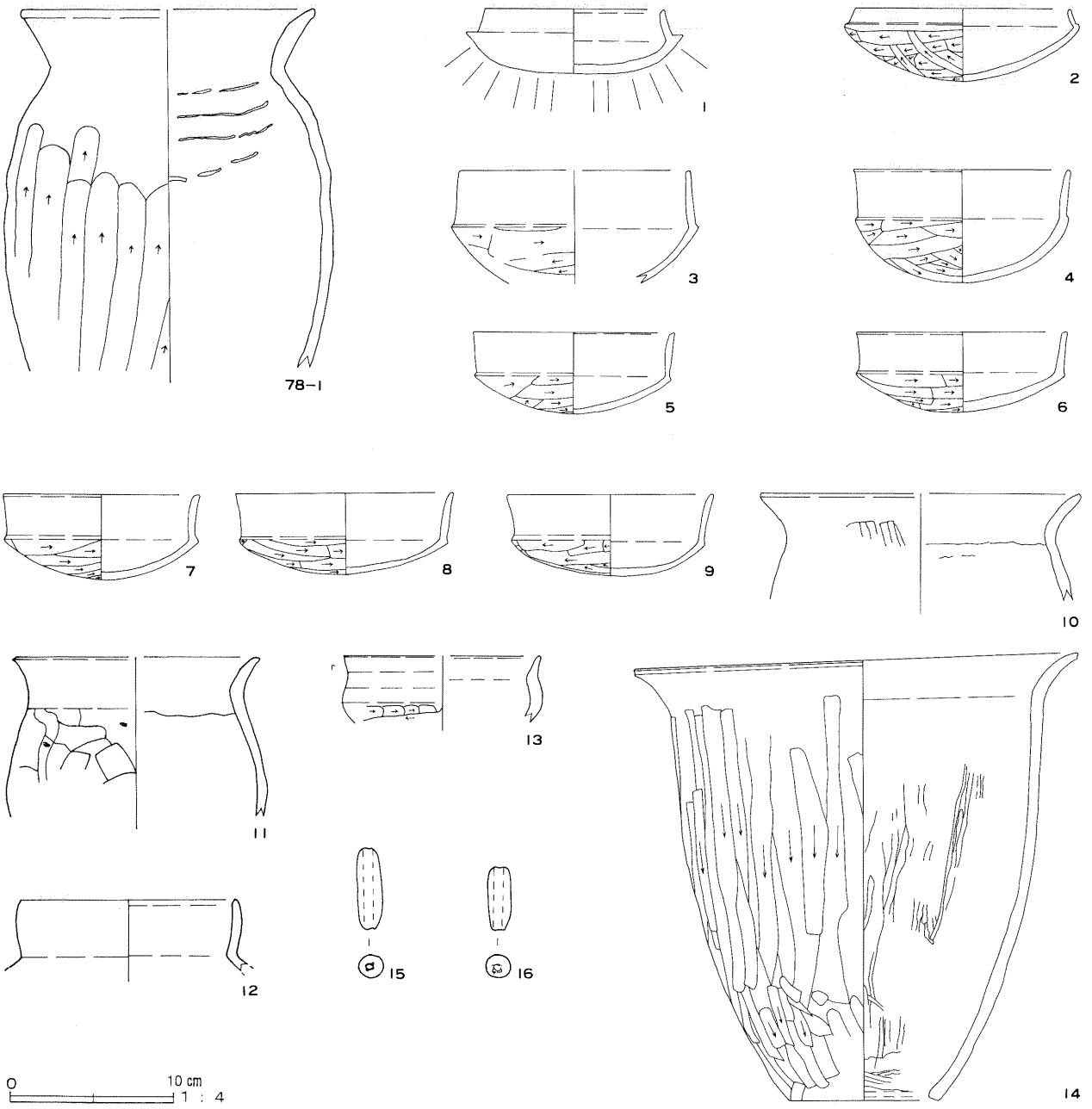
出土遺物（第227図）には、土師器杯（No.1～4）がある。1が貯蔵穴、3が貯蔵穴南側の床面上、その他は覆土中から検出された。杯はすべて模倣杯であり、1～3が杯身模倣杯、4のみ杯蓋模倣杯である。いずれも口径大きく、器高が低い。1・2・4は内外面に煤の付着がみられ、3・4は黒斑を有する。

82号住居跡
（第228図）

AJ・AK－23・24グリッドに位置する。南東隅で86号住居跡を切っている。

長軸・短軸ともに5.02mを測り、方形を呈する。主軸方向はN－47°－Eを指す。確認面からの深さは52cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄色系のシルト（1・2・9・10・19層）を主体とし、下層になるにつれて焼土・炭化物を含む割合が高くなる。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と考えられる。柱穴は4つ確認された。柱痕は確認されなかったが、炭化物層（3層）及び炭化物を多量含む層（5層）がみられた。壁溝はみられない。

カマドは北東壁中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部から燃焼部の幅は42cm、煙道部先端は20cmを測り、徐々に狭まる。



第225図　E・F区78・79号住居跡出土遺物

焚口部は被熱によって赤色化した地山が確認された。焚口部から燃焼部は床面と同じレベルであった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は14cmを測る。焚口部から燃焼部からは、土師器が多数検出された。煙道部は先端に向かって緩やかに立ち上がる。壁外へは1.06m程張り出している。覆土に天井部崩落土等はみられず、焼土・炭化物等を含む層（10～13・16層）の下から、灰層（14層）が検出された。

カマド南東脇には、径89×54cmの楕円形で、床面からの深さ28cmの貯蔵穴が確認された。覆土には焼土・炭化物を含んでおり、覆土上層からは須恵器蓋（No.1）、土師器杯（6・11）、甑（25）が検出された。

第109表　E・F区78号住居跡出土遺物観察表　（第225図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器甕	(19.0)	-	-	①④⑥③②	②	橙	上半1/3	

第110表　E・F区79号住居跡出土遺物観察表　（第225図）

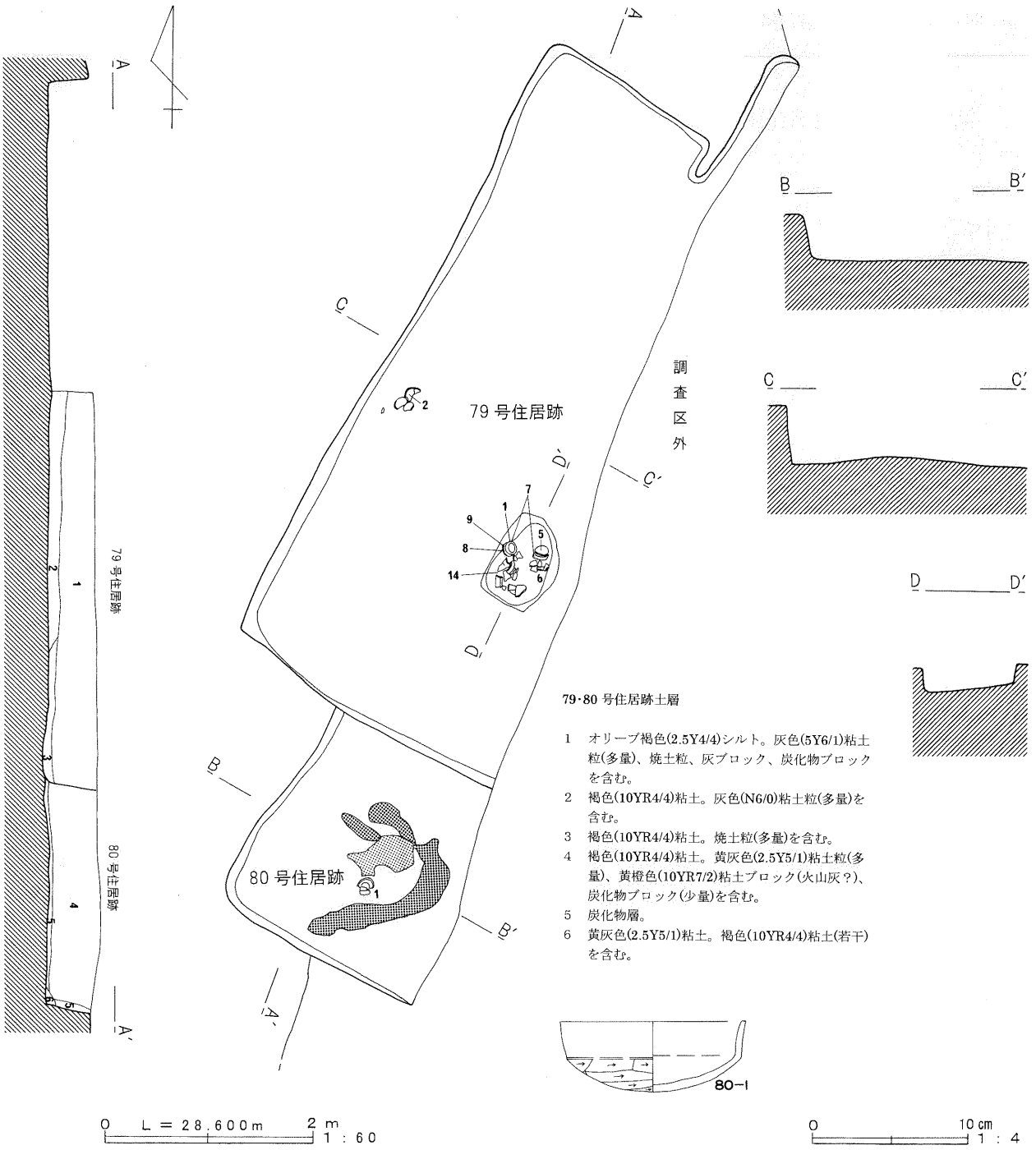
No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	須恵器杯	11.0	4.0	-	①③④⑥	③	灰褐	完形	
2	土師器杯	13.1	4.5	-	①③④	②	にぶい褐	一部欠	外面黒斑有。内外面煤付着。
3	土師器杯	(14.2)	-	-	③①④②	②	橙	上位1/4	
4	土師器杯	13.2	6.9	-	①④③	②	赤褐	3/4	外面黒斑有。
5	土師器杯	12.4	5.0	-	③①④	②	橙	完形	
6	土師器杯	12.8	4.9	-	③①④	②	橙	一部欠	外面煤付着。
7	土師器杯	12.0	5.3	-	③①④⑥	②	明赤褐	完形	
8	土師器杯	13.4	5.0	-	③①④⑥	②	明赤褐	一部欠	
9	土師器杯	12.6	5.0	-	③①④	②	橙	3/4	
10	土師器甕	(9.4)	-	-	③②①	②	にぶい橙	口縁部1/3	磨滅。
11	土師器甕	(14.6)	-	-	⑥③④	③	赤	上位1/2	
12	土師器壺	13.2	-	-	⑥②③④	②	明赤褐	口縁部のみ	
13	土師器盌	(12.0)	-	-	①④③②	②	明赤褐	上位2/3	
14	土師器甑	27.2	27.8	9.2	③⑥④①	②	浅黄橙	4/5	
15	土錘	長さ　5.0　最大径　1.1　孔径　0.6						完形	
16	土錘	長さ　3.4　最大径　1.5　孔径　0.6						完形	

出土遺物（第229・230図）には、須恵器蓋（No.1）、杯（2）、土師器杯（3～15）、高杯（16～18）、甕（19～22）、壺（23・24）、甑（25・26）、石製紡錘車（27）、土錘（28・29）等がある。カマド及びその周辺、貯蔵穴などからまとまって検出された。1は完形品、2は一部欠くがほぼ完形品である。ともに末野産。土師器杯はすべて身の深い模倣杯である。7のみ大型である。黒斑を有するものや煤が付着しているものがみられた。高杯は口縁部が大きく外反し、脚部はやや高く、裾が大きく広がるタイプ（16・17）と、模倣杯に低い脚部が付くタイプ（18）がある。甕は長胴甕（19～21）と小型のもの（22）がある。20は外面に煤が付着し、黒斑を有する。22も外面に黒斑を有する。壺はともに口縁部が直立する。24は外面に黒斑を有する。甑は把手の付くタイプ（25）と把手の付かない器高の低いタイプ（26）がある。25は外面に煤が付着しており、26は黒斑を有する。27は上・底面には放射状、側面には不規則な線刻が施されている。完形品。土錘は2点検出されている。長さは5cm前後、最大径1.5～1.9cmを測る。

83号住居跡
（第231図）
（第232図）

AK・AL－23・24グリッドに位置する。南西隅付近で86・88号住居跡を切っている。

長軸6.32m、短軸6.27mの方形を呈する。主軸方向はN－32°－Eを指す。確認面からの深さは43cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系の粘土（9・10・14層）が主体となり、9・10層中には焼土・炭化物がブロック状に含まれていた。また、カマド部分も含めて床面直上には灰層（5層）が全面にみられた。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。壁溝は南西壁を除いたすべての壁沿いにみられ、そのほとんどが壁から3～15cm離れて巡っており、カマド北西側の袖をも切っている。幅は6～14cm、床面からの深さは3～6cmを測る。ピットは7つ検出された。南東壁に最も近いピット以外は、柱穴と考えられる。このうち、コーナー対角線上に位置する4つの柱穴は、径60～106cm、床面からの深さ57～68cmでしっかりした掘り込みであった。中間にあるピットは径25cm前後、深さ22～31cmと小さく、支柱穴の可能性が考えられる。

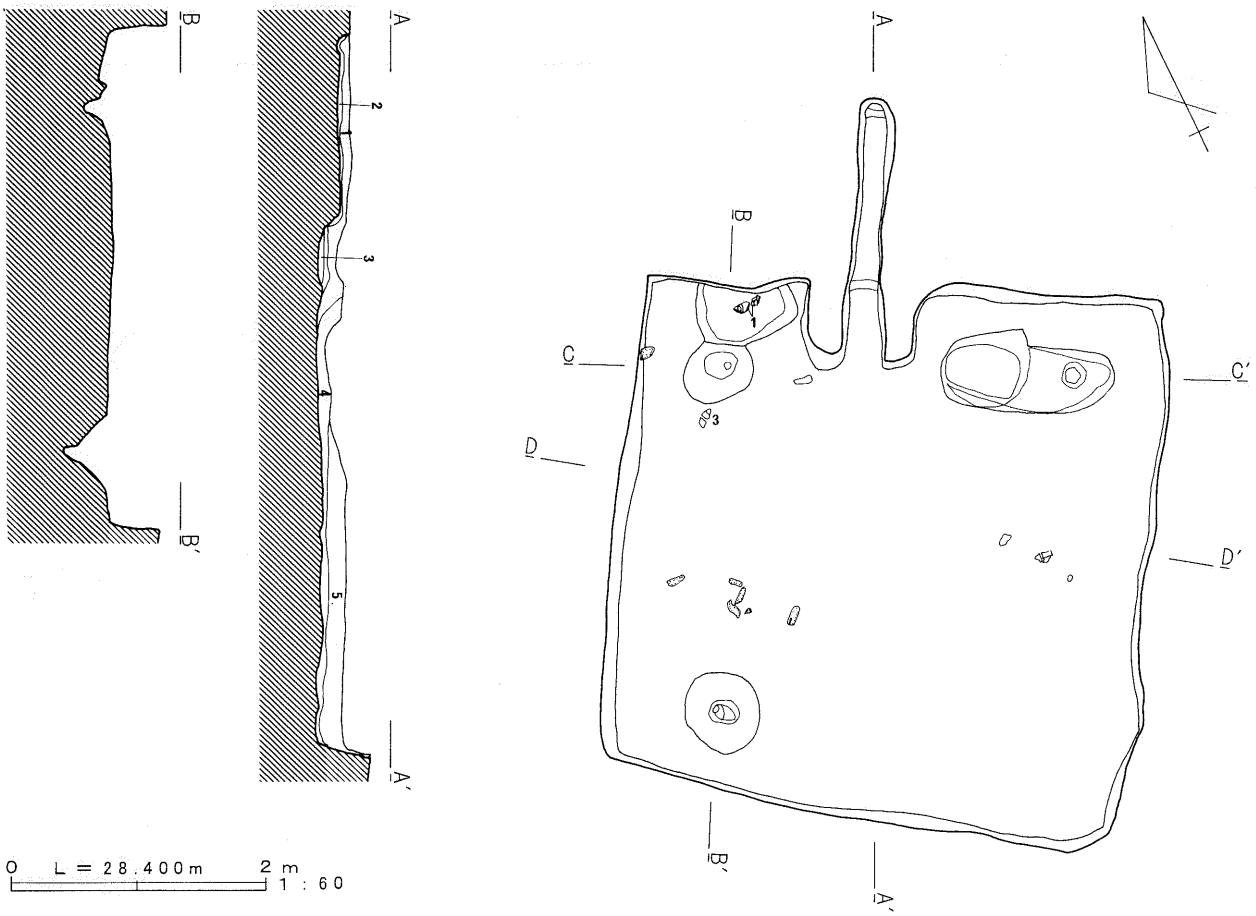


第226図　E・F区79・80号住居跡・80号住居跡出土遺物

第111表　E・F区80号住居跡出土遺物観察表　(第226図)

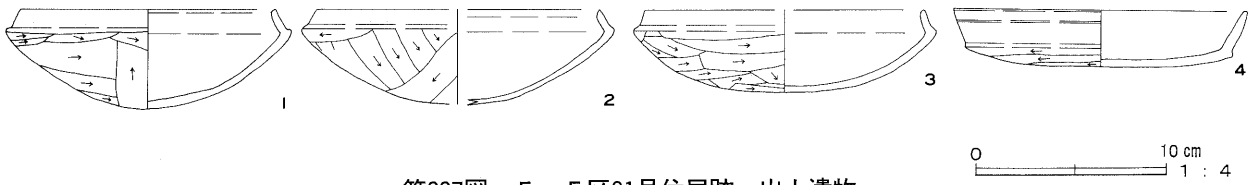
No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　考
1	土師器杯	12.0	4.4	-	③①④	②	橙	口縁部1/6欠	

カマドは北東壁の中央に設けられており、残存状態は良好であった。袖部は地山の掘り残しで、煙道部中央まで内面に被熱した箇所が確認された。焚口部から燃焼部の幅は45cmを測り、煙道部は29～36cmで進み、先端手前で18cmと狭くなり、先端で再び27cmと広がる。焚口部から燃焼部は床面と同レベルで、平坦であった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は7cmを測る。焚口部地山は被熱して赤色化しており、その上から土



81号住居跡土層

1　灰色(5Y6/1)粘土。酸化鉄ブロック、焼土粒・ブロック多く含む。
2　灰色(N5/0)灰層。焼土粒・ブロック多く含む。しまり悪い。粘性強い。
3　灰色(5Y6/1)粘土。2の焼土ブロック(少量)を含む。しまり良い。
4　黄灰色(2.5Y5/1)粘土。酸化鉄粒(多量)、炭化物(微量)を含む。しまり良い。
5　黄灰色(2.5Y5/1)粘土。酸化鉄ブロック(多量)、焼土粒、炭化物を含む。

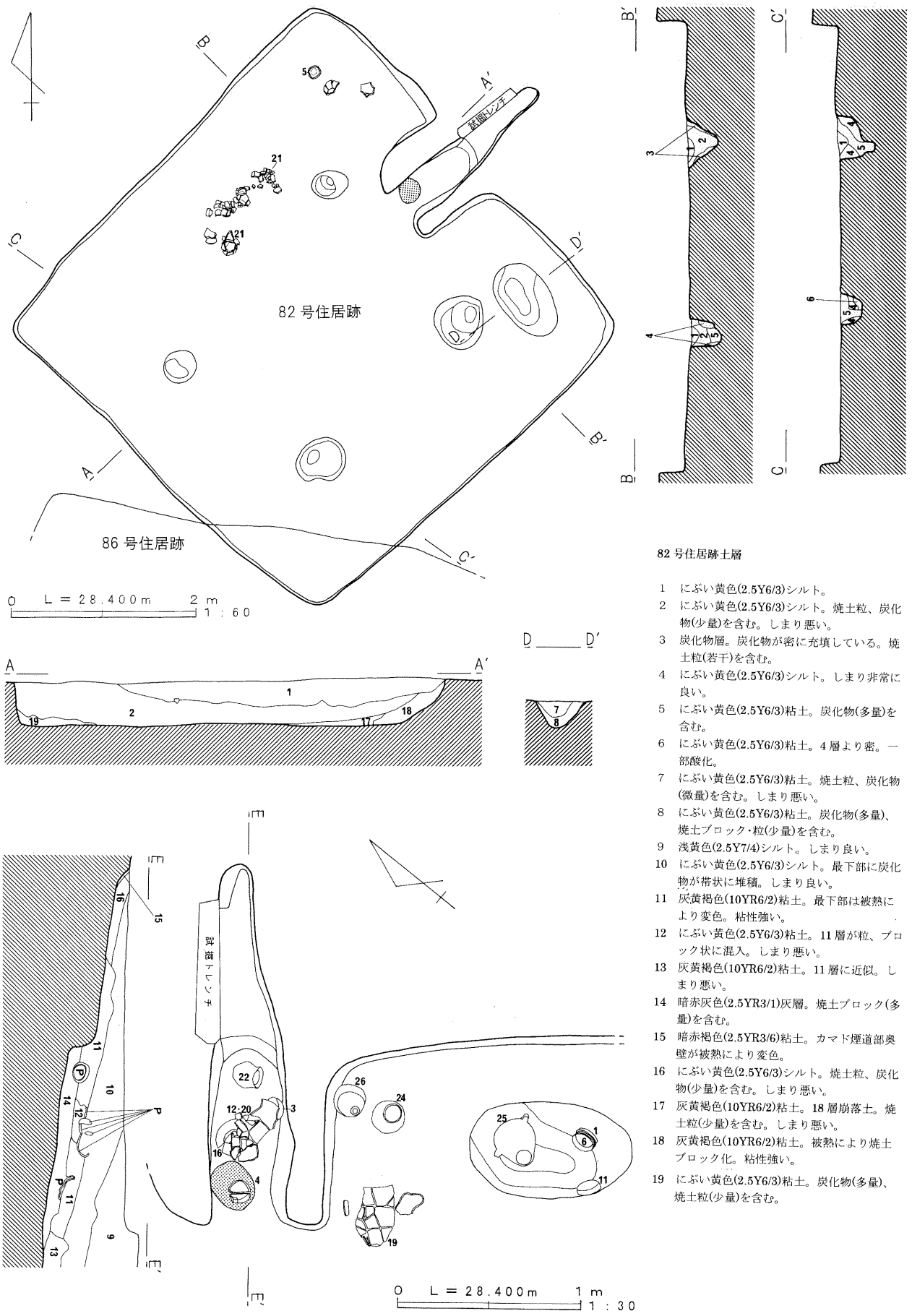


第227図　E・F区81号住居跡・出土遺物

第112表　E・F区81号住居跡出土遺物観察表　(第227図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	13.6	5.2	-	①④③	②	にぶい赤褐	3/4	内外面煤付着。
2	土師器杯	(15.0)	-	-	①④③	②	明赤褐	1/2	内外面煤付着。
3	土師器杯	(14.8)	4.3	-	③①④⑥	②	明赤褐	1/2	外面黒斑有。
4	土師器杯	15.5	3.0	-	③①④	②	赤褐	5/6	内外面煤付着、黒斑有。

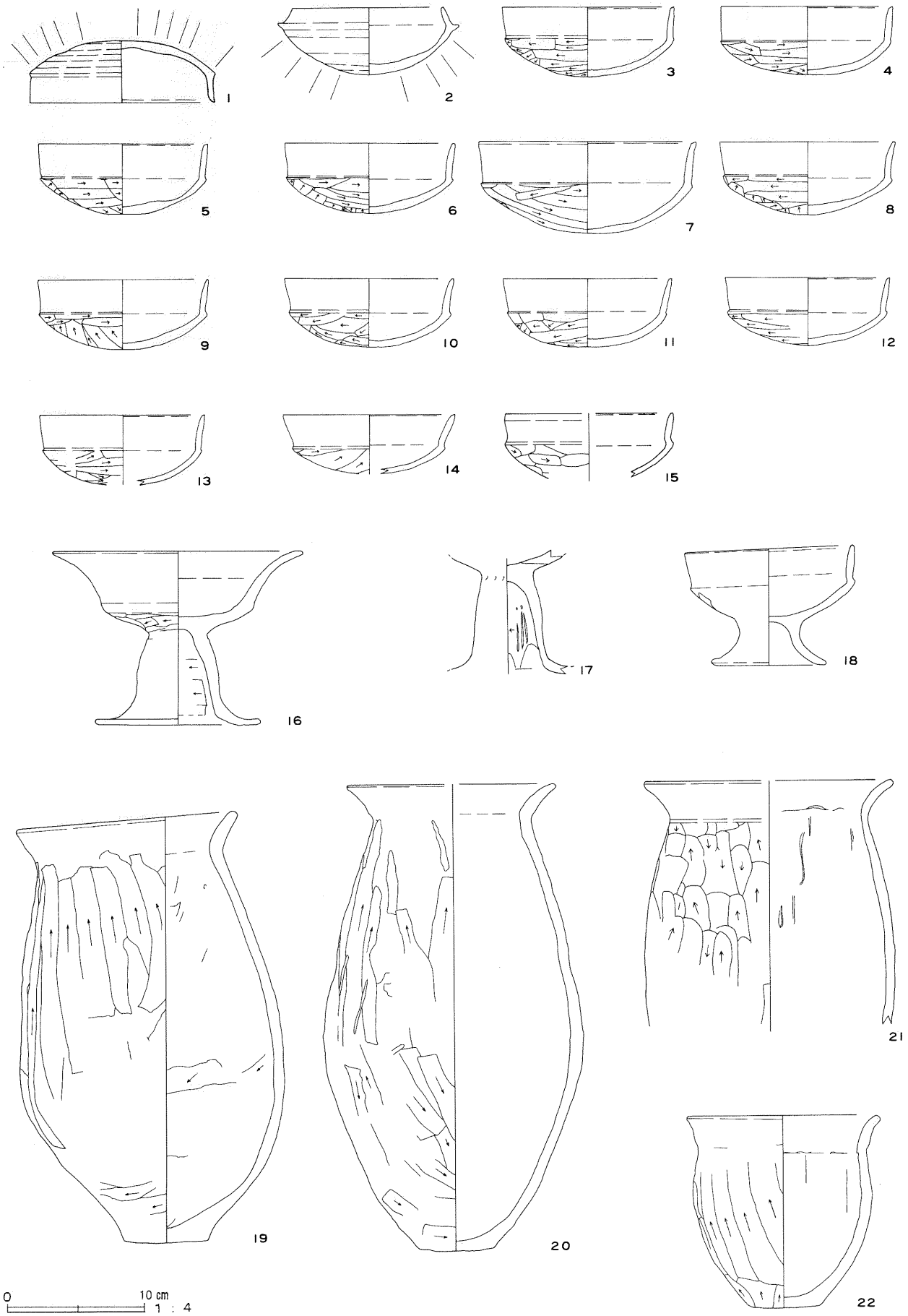
師器杯（No.5）と土製支脚（19）が検出された。煙道部はほぼ平坦であり、先端で直角に立ち上がる。壁外へは1.57m程張り出している。覆土は、1・2・6・7層が天井部となり、その下及び周りから焼土・炭化物を含む層（3・4・8・10・11層）と灰層（4・5



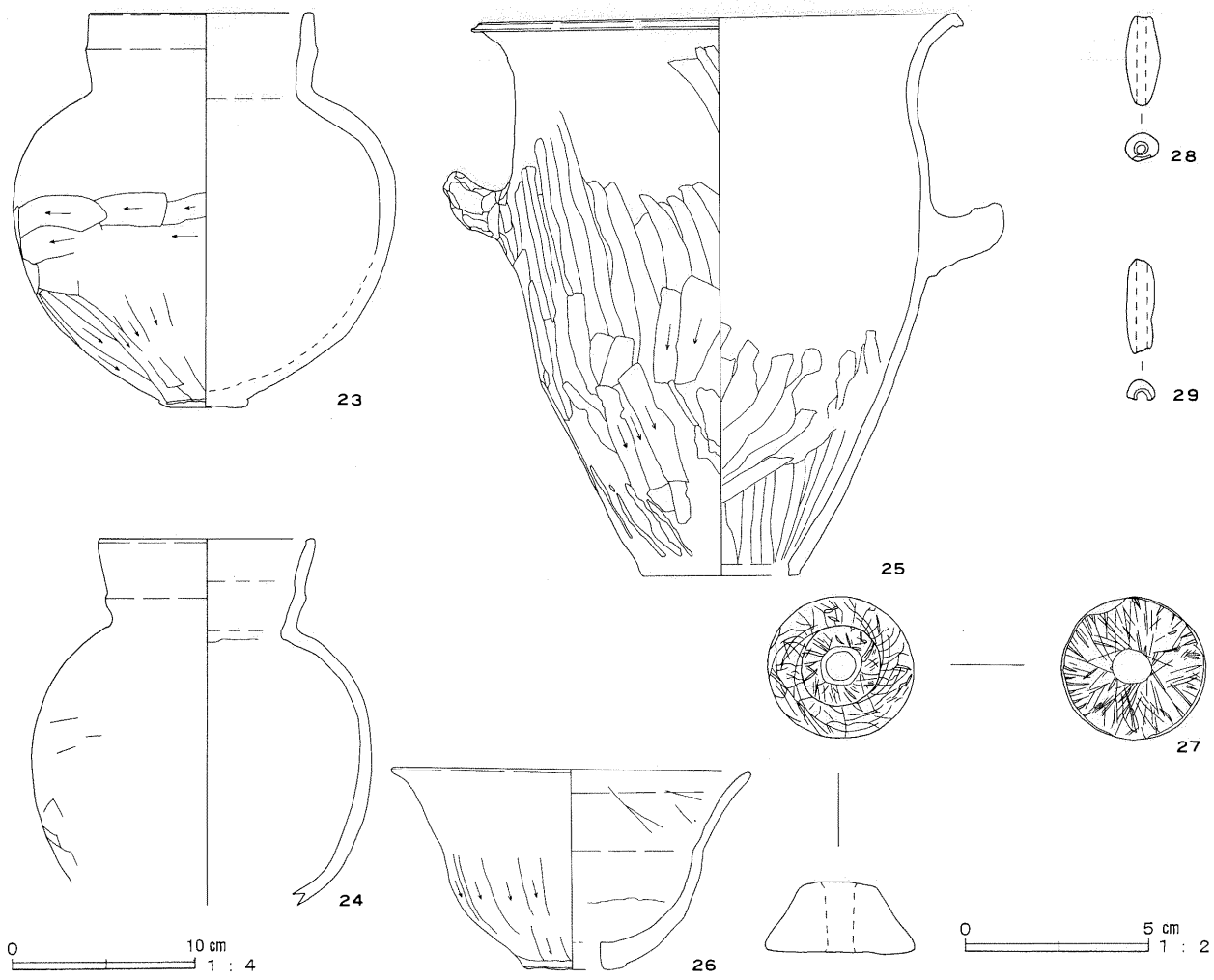
82 号住居跡土層

1 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト。
2 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト。焼土粒、炭化物(少量)を含む。しまり悪い。
3 炭化物層。炭化物が密に充填している。焼土粒(若干)を含む。
4 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト。しまり非常に良い。
5 にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土。炭化物(多量)を含む。
6 にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土。4 層より密。一部酸化。
7 にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土。焼土粒、炭化物(微量)を含む。しまり悪い。
8 にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土。炭化物(多量)、焼土ブロック・粒(少量)を含む。
9 浅黄色(2.5Y7/4)シルト。しまり良い。
10 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト。最下部に炭化物が帯状に堆積。しまり良い。
11 灰黄褐色(10YR6/2)粘土。最下部は被熱により変色。粘性強い。
12 にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土。11 層が粒、ブロック状に混入。しまり悪い。
13 灰黄褐色(10YR6/2)粘土。11 層に近似。しまり悪い。
14 暗赤灰色(2.5YR3/1)灰層。焼土ブロック(多量)を含む。
15 暗赤褐色(2.5YR3/6)粘土。カマド煙道部奥壁が被熱により変色。
16 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト。焼土粒、炭化物(少量)を含む。しまり悪い。
17 灰黄褐色(10YR6/2)粘土。18 層崩落土。焼土粒(少量)を含む。しまり悪い。
18 灰黄褐色(10YR6/2)粘土。被熱により焼土ブロック化。粘性強い。
19 にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土。炭化物(多量)、焼土粒(少量)を含む。

第228図　E・F区82号住居跡・カマド



第229図　E・F区82号住居跡出土遺物(1)



第230図　E・F区82号住居跡出土遺物(2)

層）が検出された。5層は住居跡の床面にも広くみられ、灰層が流出したものと考えられる。

カマド北東脇には、径1.05×0.91mの楕円形を呈し、床面からの深さ37cmの貯蔵穴が確認された。覆土中から土師器杯（№7）が検出された。

出土遺物(第233図)には、須恵器高杯(№9)、土師器杯(1～8)、手捏ね土器(10～13)、甕（14～17)、砥石（18)、土製支脚（19)、滑石製臼玉（20）等がある。5・19はカマド、18はカマド北西脇、7は貯蔵穴、7・10・12・13は床面上、11は北西部の柱穴から検出された。その他は覆土中からの検出である。1～7は身の深い模倣杯、8は底部が円柱造りによるものであり、内湾しながら立ち上がるものである。体部は無調整である。赤彩が施されている。煤が付着しているものや黒斑を有するものがみられた。9は脚部のみの検出であり、長方形の透かし孔を持つ。産地は不明である。手捏ね土器は4点検出された。10は底部に2つ穿孔がみられる。甕は長胴甕（14・15）と小型のもの（16・17）がある。16は外面に黒斑を有し、底部に木葉痕が残る。18は一面のみ使用している。完形品。19は中央に孔がみられ、柱状を呈する。臼玉は1点のみ検出された。

第113表　E・F区82号住居跡出土遺物観察表　（第229・230図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器蓋	13.5	4.5	-	①④⑥	③	灰黄	完形	
2	須恵器杯	11.1	4.9	-	⑥①③④	②	橙	一部欠	外面黒斑有。
3	土師器杯	12.6	5.1	-	①④③②	②	橙	完形	内外面煤付着。
4	土師器杯	12.5	5.0	-	③①④	②	橙	一部欠	外面煤付着。
5	土師器杯	12.4	5.1	-	③①④	②	橙	一部欠	外面黒斑有。
6	土師器杯	12.5	5.1	-	③①⑥	②	橙	完形	
7	土師器杯	16.0	6.7	-	③①④	②	橙	3/4	
8	土師器杯	12.8	5.3	-	③①④②	②	橙	2/3	
9	土師器杯	12.5	5.1	-	③①④②	②	橙	口縁部1/3欠	外面黒斑有。
10	土師器杯	12.4	5.0	-	③①⑥②	②	橙	2/3	外面煤付着。
11	土師器杯	12.4	5.0	-	①③④②	②	橙	完形	内外面煤付着。
12	土師器杯	12.0	5.0	-	①③④②⑥	②	橙	1/2	内面黒斑有。
13	土師器杯	12.1	-	-	①③⑥④	②	橙	下位1/3欠	
14	土師器杯	12.6	-	-	③①④②	②	橙	1/2	
15	土師器杯	(12.3)	-	-	③①④②	②	橙	1/5	
16	土師器高杯	18.4	12.7	-	③④	②	明褐	脚部1/2欠	
17	土師器高杯	-	-	-	①④②③	②	にぶい黄橙	脚部2/3	
18	土師器高杯	12.4	8.6	8.3	③①④	②	橙	2/3	
19	土師器甕	16.1	31.8	6.0	⑥③①	②	浅黄橙	5/6	
20	土師器甕	(15.3)	34.6	5.5	③⑥①	②	明赤褐	1/2	胴外面煤付着、黒斑有。
21	土師器甕	(17.3)	-	-	①②⑥③④	②	にぶい橙	上半のみ	
22	土師器甕	14.2	14.1	5.3	③①⑥④	②	にぶい黄橙	完形	黒斑有。
23	土師器壺	12.3	21.7	4.9	③①	②	橙	3/4	胴部外面黒斑有。磨滅。
24	土師器壺	11.9	-	-	③①④	②	橙	3/4	胴部外面黒斑有。磨滅。
25	土師器甑	26.9	31.0	8.6	③①⑥④	②	橙	一部欠	胴部外面煤付着。
26	土師器甑	19.7	21.2	5.7	③①⑥	②	明褐	一部欠	胴部黒斑有。
27	石製紡錘車	上端径 2.2	下端径 4.0	高さ 2.0	孔径 0.9			完形	滑石製。
28	土錘	長さ 4.9	最大径 1.9	孔径 5.0				完形	
29	土錘	長さ 5.2	最大径 1.5	孔径 6.0				一部欠	

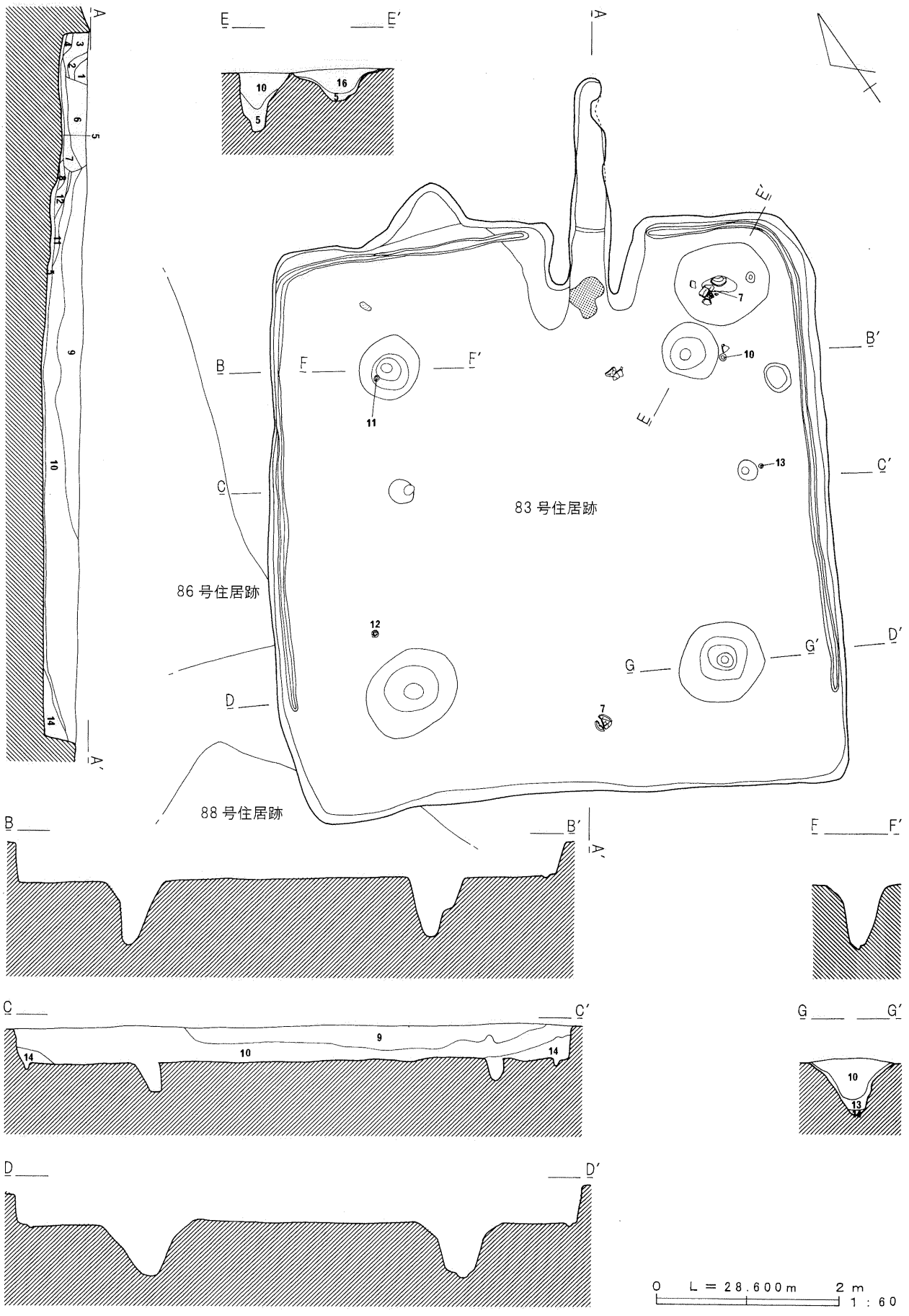
84号住居跡（第234図）

AK・AL－24グリッドに位置する。カマドを含む北東部で88号住居跡を切って構築している。

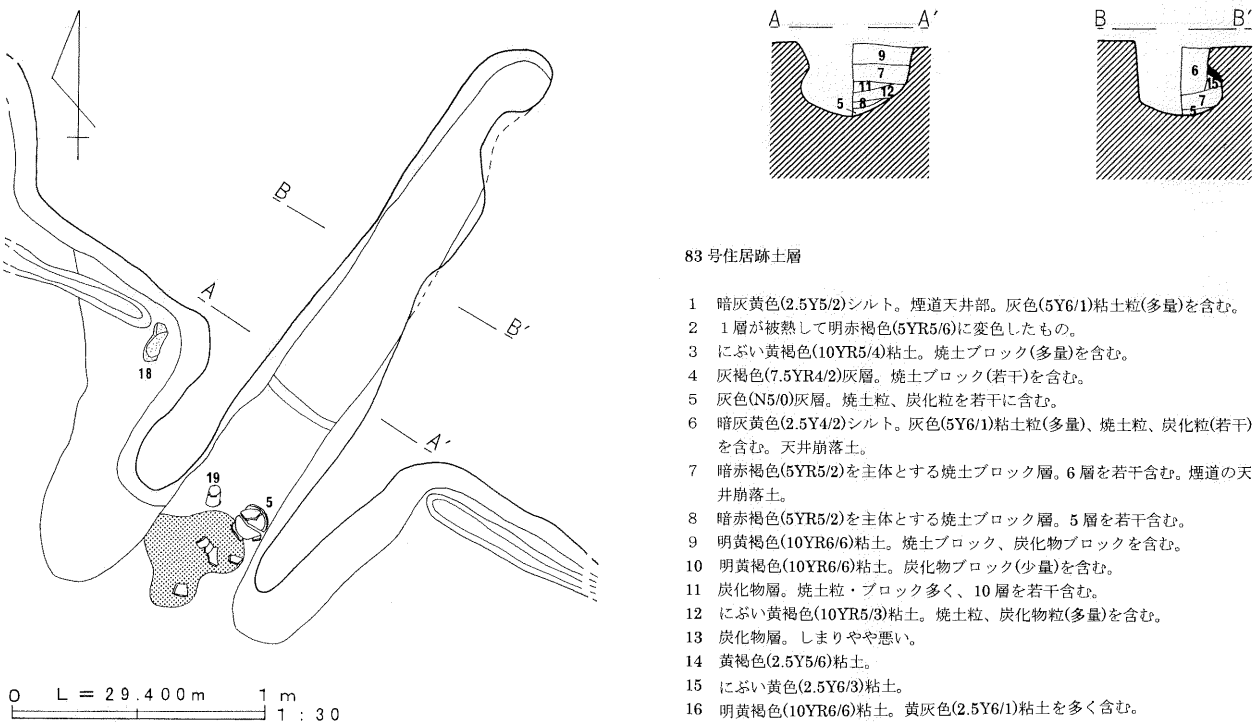
長軸4.49m、4.74mのほぼ方形を呈する。主軸方向はN－40°－Eを指す。確認面からの深さは18cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄色ないし灰色系の粘土（7・9～11層）を主体とする。焼土・炭化物を含む層が多くみられるが、上層（7層）には火山灰らしき混入物がみられた。また、中層（8層）には炭化物層が薄くみられた。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。柱穴は4つ確認された。径18～32cm、床面からの深さは29～43cmを測り、しっかりした掘り込みであった。壁溝はみられない。

カマドは北東壁中央から南東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は42cm、燃焼部は31cmを測り、煙道部は25cm程度で進み、先端で32cmとやや広がる。焚口部から燃焼部は床面とほぼ同じレベルであった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は7cmを測る。煙道部はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であり、先端で急速に立ち上がる。壁外へは1.29m程張り出している。覆土は、焼土・炭化物を含む層（1・2層）や粘土層（4・5層）がランダムに堆積しており、その下から灰層（3・6層）が検出された。

カマドの南東脇には、径72×64cmの円形を呈し、床面からの深さ21cmの貯蔵穴がみられた。覆土中層からは土師器杯（No.8）、甕（11・12・15）が検出された。



第231図　E・F区83号住居跡



第232図　E・F区83号住居跡カマド

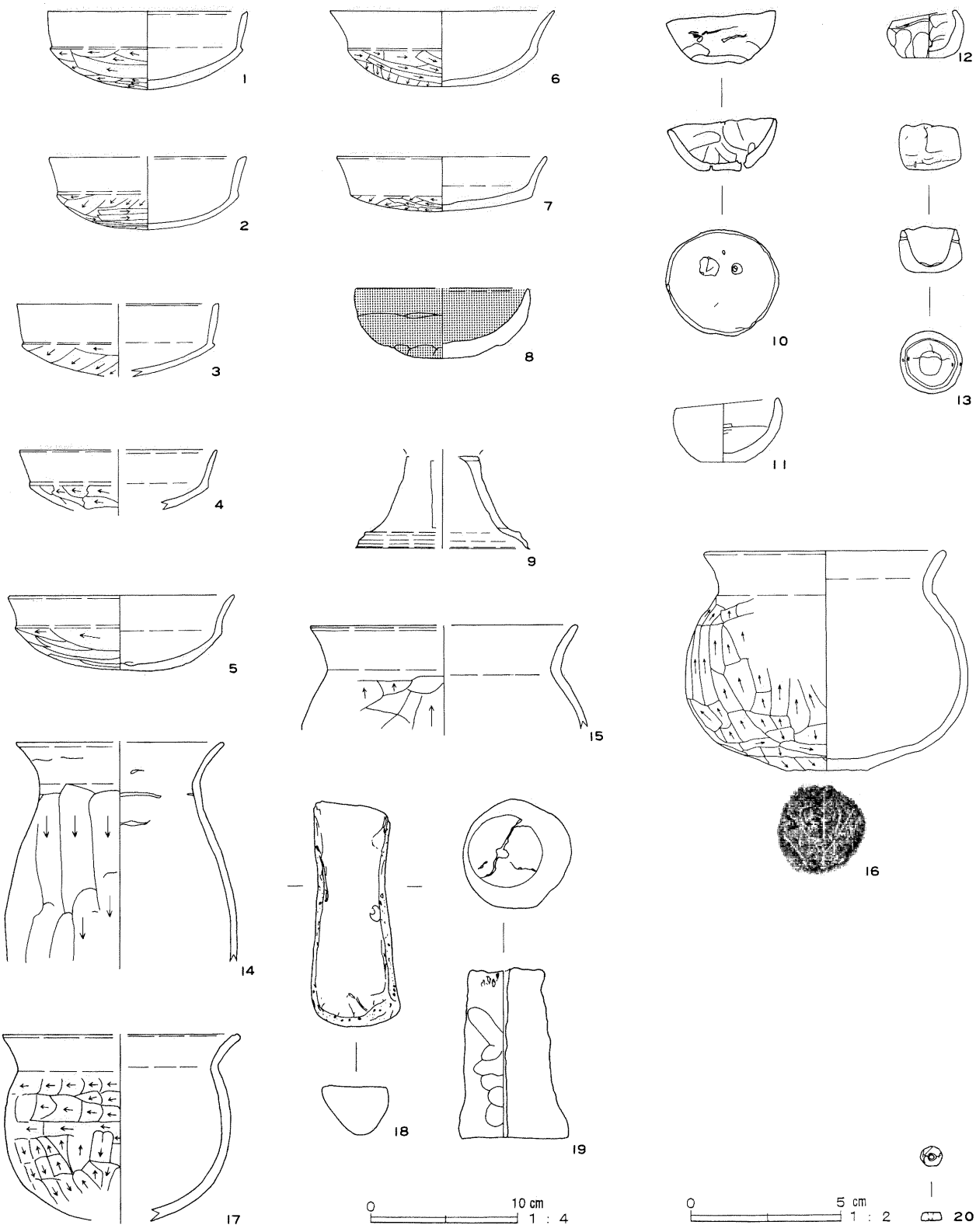
出土遺物（第235図）には、土師器杯（№1～8）、盤（9）、甕（10～12・14・15）、壺(13)、管玉（16）等があり、杯が多数みられた。主にカマド及び貯蔵穴とその周辺、住居跡南西部床面から検出された。10・13・16は覆土中からの検出である。杯はすべて模倣杯である。1～3は杯身模倣杯、その他は杯蓋模倣杯であり、いずれも口径が大きく、器高が低い。煤が付着しているものや黒斑を有するものが多い。9は口縁部が短く、僅かに外反している。底部を欠く。甕は丸胴甕（10・11）と小型のもの（12・14）がある。15は長胴甕の底部であるかもしれない。外面に黒斑を有する。13は口縁部がほぼ直立している。上部のみの検出である。管玉は1点のみ検出された。長さ1.4cmと短い。完形品。

85号住居跡
（第236図）
（第237図）

AL・AM－23・24グリッドに位置する。複数の同時期の住居跡と重複関係にある。本住居跡が最も新しい。北側で87号住居跡、西側で102号住居跡、南側で99号住居跡をそれぞれ切っている。

長軸6.47m、短軸6.37mのほぼ方形を呈する。主軸方向はN－39°－Eを指す。確認面からの深さは40cmを測り、床面はやや凹凸がみられる。覆土は黄褐色ないしは黄色系の粘土及びシルト（6～11層）を主体とし、炭化物の他に焼土や粘土粒を含んでいた。最上層（6層）は厚く堆積しており、南西部床面直上には炭化物が帯状にみられた。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。ピットは6つ検出され、北東壁沿いにみられる2つのピットはカマドに関連するものと考えられる。その他の4つのピットは柱穴と考えられるが、南西部に位置すべき柱穴はみられなかった。壁溝はみられない。

カマドは北東壁中央からやや南東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、北



第233図　E・F区83号住居跡出土遺物

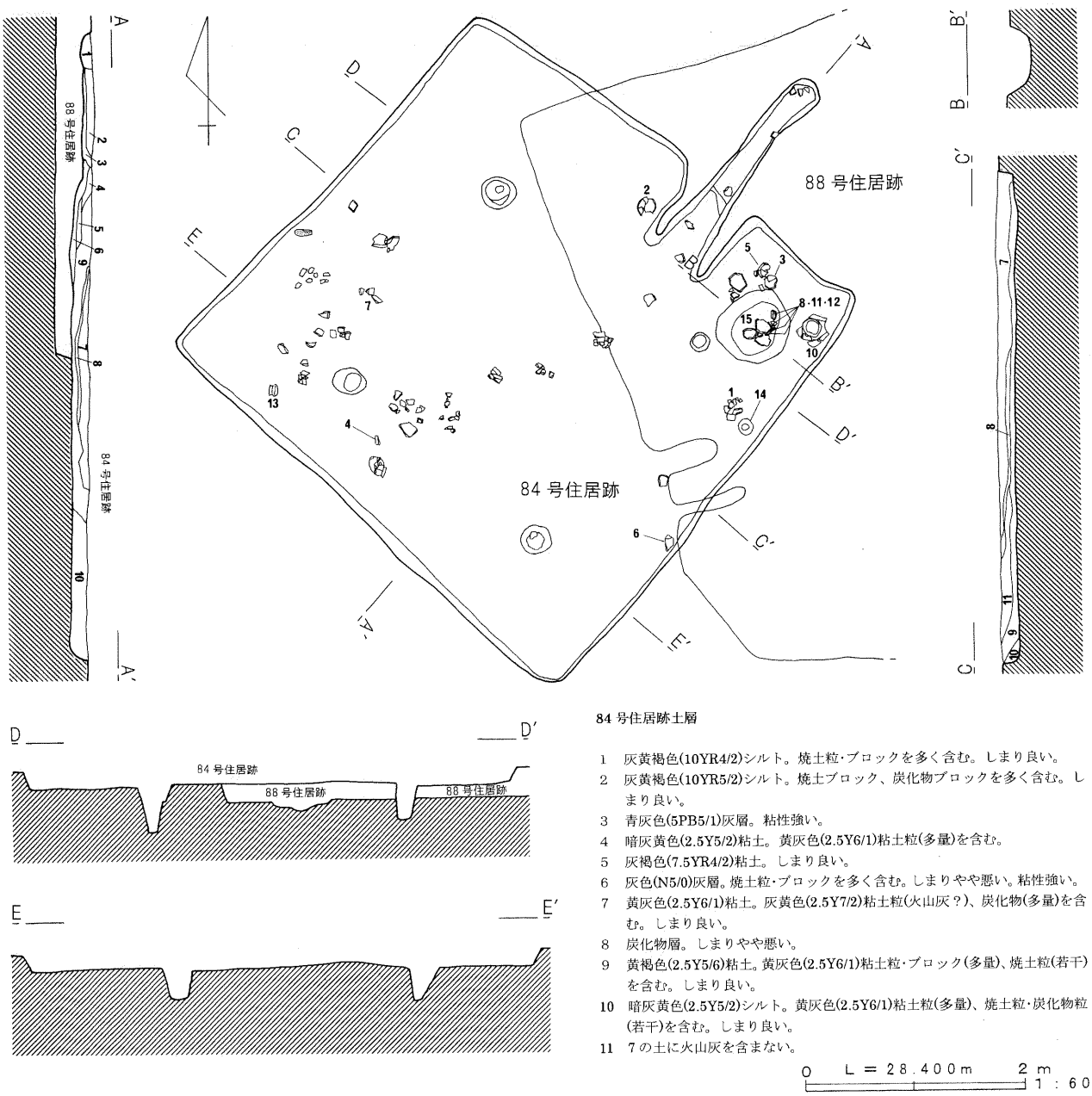
第114表　E・F区83号住居跡出土遺物観察表　(第233図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	13.6	5.2	-	①③④	②	にぶい褐	完形	内面剝離。内外面煤付着。
2	土師器杯	(13.5)	4.9	-	①③②④	②	橙	1/3	外面黒斑有。
3	土師器杯	(13.7)	-	-	①③④	②	明赤褐	1/2	内外面煤付着。
4	土師器杯	(13.4)	-	-	③②①④⑥	②	橙	1/4	
5	土師器杯	15.3	5.1	-	④①②⑥③	②	明赤褐	一部欠	
6	土師器杯	15.4	5.1	-	③①④	②	明赤褐	1/2	内外面煤付着。
7	土師器杯	14.3	3.6	-	①③④	②	明赤褐	一部欠	外面黒斑有。
8	土師器杯	(11.6)	4.8	-	⑥①②	②	橙	1/3	赤彩。
9	須恵器高杯	-	-	(11.8)	③②⑥①	②	にぶい橙	脚部1/4	
10	手捏ね土器	7.7	3.6	1.9	④②①⑥	②	橙・黒橙	完形	
11	手捏ね土器	6.9	4.0	3.3	②①④	②	明赤褐	完形	
12	手捏ね土器	4.3	3.3	2.8	②①④③⑥	②	明赤褐	完形	
13	手捏ね土器	3.8	3.2	1.7	①②④⑥	②	橙	完形	
14	土師器甕	(14.0)	-	-	②⑥④①	②	にぶい橙	上位1/4	
15	土師器甕	(18.0)	-	-	②④③①	②	浅黄橙	上位1/4	
16	土師器甕	(16.4)	15.0	5.4	③①⑥④	②	にぶい褐	1/2	胴部黒斑有。
17	土師器甕	(16.0)	-	-	⑥③②①④	②	明赤褐	4/5	
18	砥石	長さ　15.3　幅　6.0　厚さ　3.4						完形	一面使用。デイサイト製。
19	土製支脚	上部径　5.1　器高　11.6　底径　7.4						完形	
20	石製臼玉	径　0.7　孔径　1.5　厚さ　0.3						完形	滑石製。

西側の袖には土師器甕（No.11・12）が補強材として使用されていた。袖部内面には被熱した箇所が確認された。焚口部から燃焼部の幅は46cm、煙道部先端は22cmを測り、徐々に狭まる。焚口部から燃焼部は床面よりやや窪んでいるが掘り込みとまではならない。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は8cm程を測る。煙道部は先端に向かって緩やかに立ち上がり、壁外へは1.25mほど張り出している。覆土に天井部崩落土は確認されず、焼土を含む層（1～3層）の下から灰層（4層）が検出され、燃焼部では火床面（5層）が検出された。

カマド南東脇には貯蔵穴が2つみられた。北西側の貯蔵穴は、径89×72cmの不整円形を呈し、床面からの深さ49cmを測る。南東側のものは、径80×46cmの楕円形を呈し、深さは18cmを測る。ともに焼土・炭化物を含み、覆土上層から土師器が検出された。

出土遺物（第238図）には、土師器杯（No.1～10）、甕（11～13）、鉢（14）、甑（15）、土製支脚（16）、磨石（17）、土錘（18～33）等がある。11・12はカマド補強材であり、7・14・17が床面上、4・15が北西側の貯蔵穴、13・15が南東側の貯蔵穴からそれぞれ検出された。その他は覆土中からの検出である。煤が付着しているものや黒斑を有するものが多い。杯はすべて模倣杯である。1～4は杯身模倣杯、その他は杯蓋模倣杯である。いずれも口径大きく、器高が低い。甕はすべて長胴甕である。11は底部に木葉痕を残す。摩滅が顕著であった。14は底部を欠く。甑の可能性も考えられる。15は器高低く、把手を持たないタイプであろう。16は中心に孔が設けられている。上面を欠く。17は完形品。土錘は16点検出された。長さ4.2～7.1cm、径0.5～1.9cmと大きさに幅がみられるが、主体となるのは長さ5cm前後、径0.6cm前後のものである。

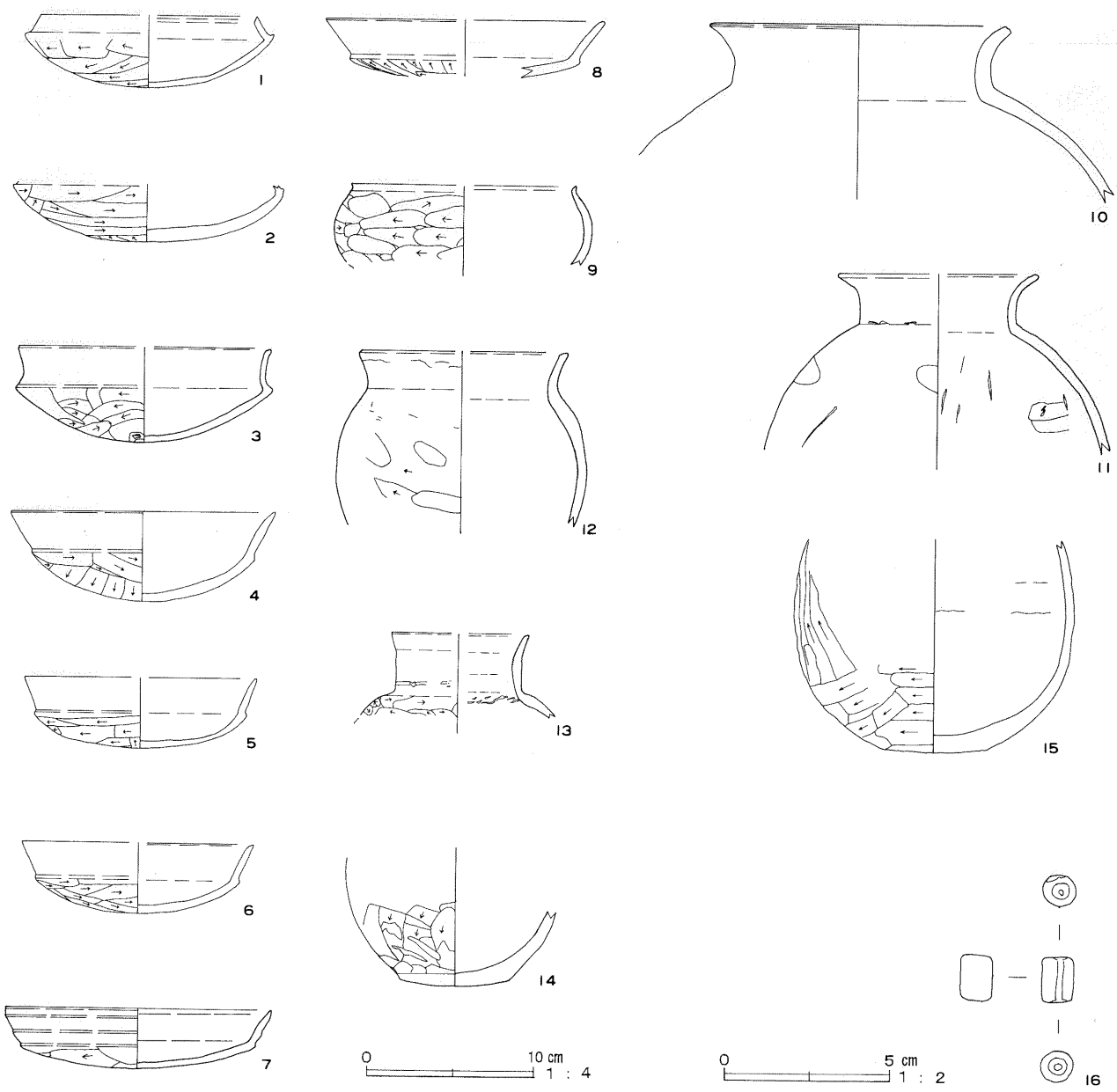


第234図　E・F区84号住居跡

86号住居跡（第239図）　AK－23･24グリッドに位置する。北東壁中央で82号住居跡、南東隅で83号住居跡に切られている。また、南西壁上にあるカマドは試掘トレンチによって煙道部の大半を欠く。

長軸5.15m、短軸5.04mのほぼ方形を呈する。主軸方向はS－16°－Wを指す。確認面からの深さは34cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は褐色系の粘土（1・3・4層）を主体とする。壁溝は南西隅付近で少し確認された。幅7～13cm、床面からの深さは6cm程であった。柱穴は4つ確認された。径50～60cm、床面からの深さは、22～27cmとほぼ均一となっている。

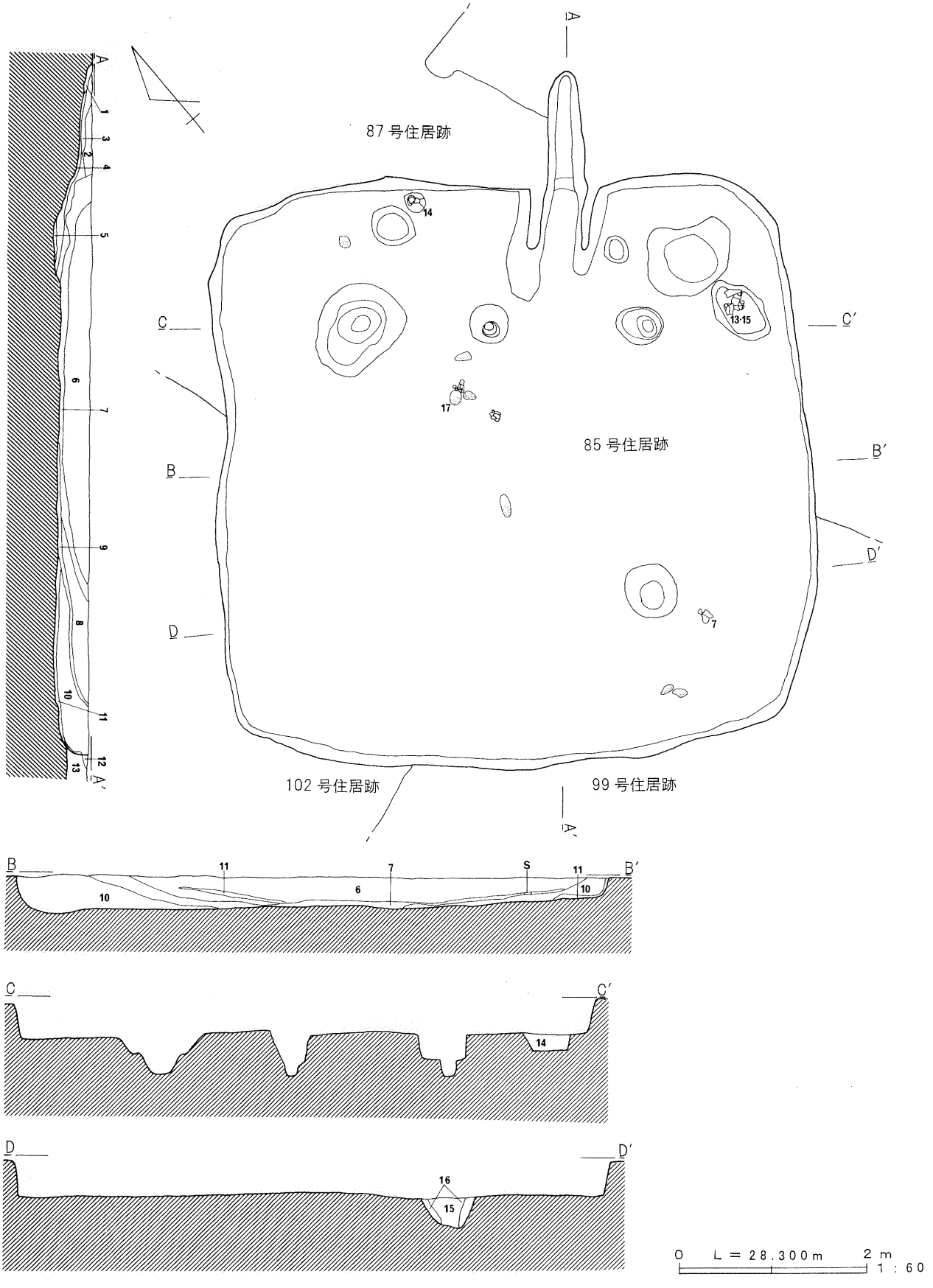
本住居跡に伴うカマドは2つみられ、1つは北西壁中央、もう1つは南西壁中央からやや北西寄りに設けられている。北西壁中央に設けられたカマドは煙道部のみの検出である。



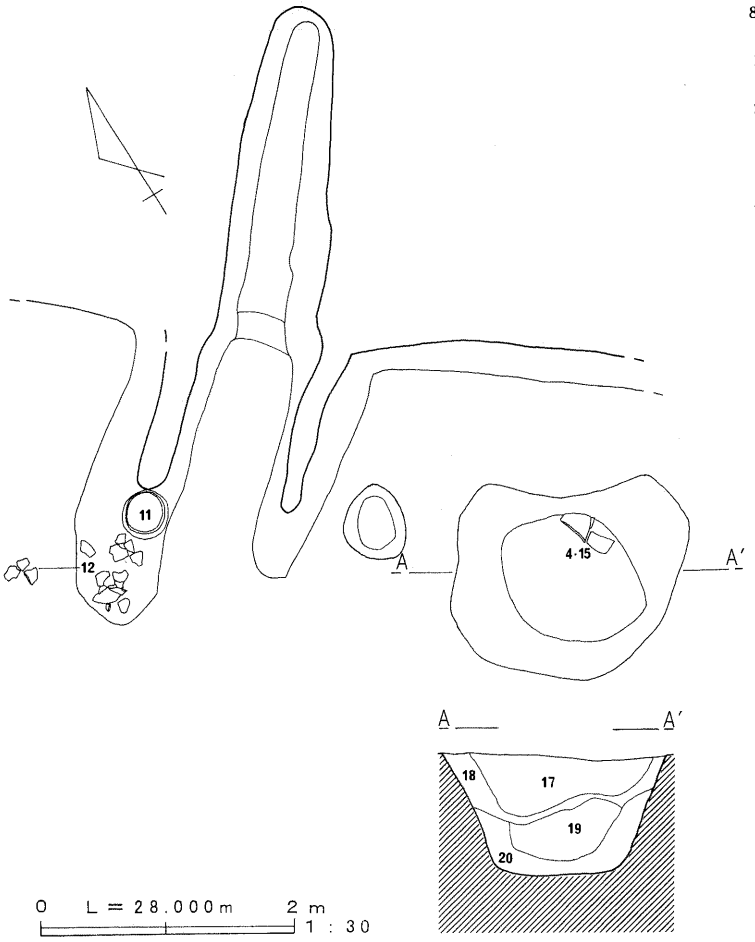
第235図　E・F区84号住居跡出土遺物

第115表　E・F区84号住居跡出土遺物観察表　(第235図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(13.0)	4.3	-	③①④	②	明赤褐	1/2	内外面煤付着。
2	土師器杯	-	-	-	③①④②	②	橙	下位3/4	内外面煤付着。
3	土師器杯	(15.2)	5.8	-	③①②	②	明赤褐	3/4	
4	土師器杯	16.0	5.4	-		②	橙	一部欠	内外面煤付着。
5	土師器杯	(14.0)	4.2	-	①③④②	②	橙	1/2	外面黒斑有。
6	土師器杯	(14.0)	4.2	-	③④①②	②	橙	1/3	外面黒斑有。
7	土師器杯	16.0	3.6	-	④①⑥②	②	にぶい赤褐	4/5	
8	土師器杯	(16.8)	-	-	③④①②	②	橙	1/4	
9	土師器盌	(13.9)	-	-	⑥②①④	②	にぶい橙・橙	口縁部1/3	
10	土師器甕	18.0	-	-	③①④	②	にぶい黄橙	上位のみ	磨滅。
11	土師器甕	(12.0)	-	-	①④②③	②	にぶい橙	上半1/2	磨滅。
12	土師器甕	(12.5)	-	-	①②⑥	②	にぶい赤褐	1/5	磨滅。
13	土師器壺	(8.2)	-	-	①③②④⑥	②	にぶい橙	口縁部1/3	
14	土師器甕	-	-	6.5	①④⑥③②	②	明褐灰	下位のみ	
15	土師器甕	-	-	5.2	③①⑥	②	にぶい橙	1/2	胴部外面黒斑有。磨耗。
16	管玉	長さ 1.4	最大径 1.0	孔径 0.2				完形	碧玉製。



第236図　E・F区85号住居跡



85号住居跡土層

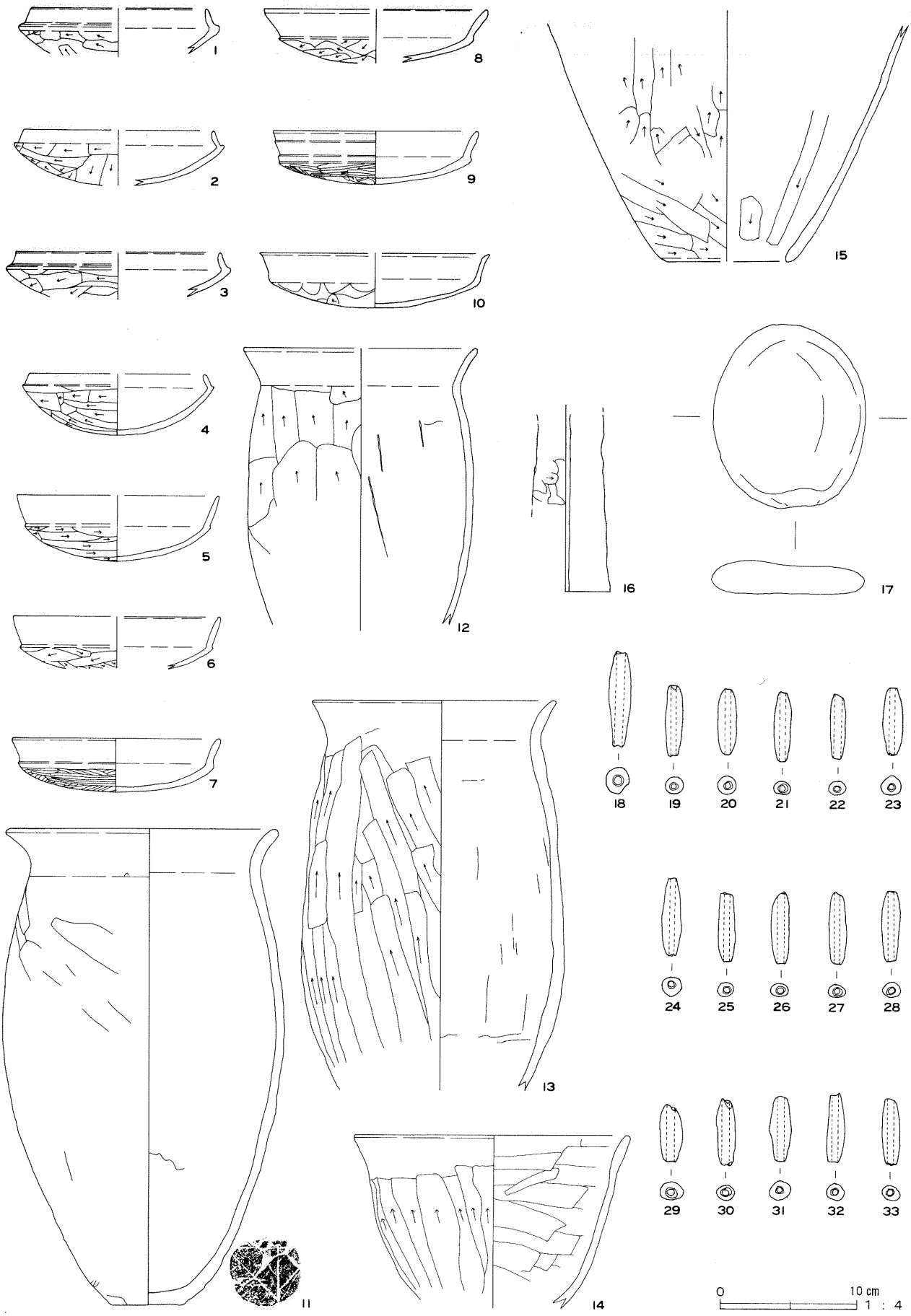
1 褐灰色(10YR5/1)粘土。黄褐色(10YR5/6)粘土粒、焼土ブロックを多く含む。しまりやや悪い。
2 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。明赤褐色(5YR5/8)焼土ブロックを帯状に含む。
3 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土。明赤褐色(5YR5/8)焼土ブロックを帯状に含む。
4 灰色(N6/0)灰層。粘性強い。
5 にぶい赤褐色(5YR4/4)粘土。火床面。しまり良い。
6 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。灰色(5YR6/1)粘土粒(多量)、焼土粒、炭化物粒(微量)を含む。しまり良い。
7 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。炭化物を帯状に含む。しまり良い。
8 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。灰色(5YR5YR6/1)粘土粒(多量)、黄褐色(2.5YR5/6)粘土粒、炭化物粒を含む。しまり良い。
9 黄灰色(2.5Y6/1)粘土。炭化物粒(多量)を含む。粘性強い。
10 灰黄褐色(10YR5/2)シルト。黄灰色(2.5Y6/1 粘土)粘土粒(多量)、焼土粒、炭化物粒(微量)を含む。しまり良い。
11 炭化物層。
12 黄褐色(10YR5/6)粘土。炭化物ブロックを帯状に含む。
13 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。しまり良い。
14 明褐色(7.5YR5/6)粘土。焼土・炭化物ブロック(極少量)を含む。しまり良い。
15 炭化物層。灰黄褐色(10YR5/2)粘土ブロック、焼土粒・ブロックを多く含む。しまり悪い。
16 灰黄褐色(10YR5/2)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、炭化物粒(少量)を含む。しまり良い。
17 明黄褐色(10YR6/6)粘土。炭化物粒、焼土粒を微量含む。
18 明黄褐色(10YR6/6)粘土。大部分が炭化物。しまりやや良い。
19 黄褐色(10YR5/6)粘土。炭化物ブロック(少量)を含む。しまり良い。
20 黄褐色(10YR5/6)粘土。大部分が炭化物、焼土ブロック。しまりやや良い。

第237図　E・F区85号住居跡カマド

覆土が焼土により赤褐色を呈し、炭化物を含んでいた。袖部や灰層等は確認されなかったことから、こちらのカマドの方が古い。壁外へは45cmを測り、段を持ちながら緩やかに立ち上がる。

新カマドは、南西壁試掘トレンチにより燃焼部から煙道部の大半を欠くが、残存状態は良好であった。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。特に南東側の袖部内側には被熱した箇所が著しかった。焚口部の幅は41cm、燃焼部は33cm、煙道部は残存する先端で34cmを測る。焚口部から燃焼部のかけて落ち込みはなく床面とほぼ同じレベルであった。被熱して赤色化した地山が顕著であった。燃焼部からは土製支脚(No.14)が検出された。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は6cmを測る。煙道部は大半を欠くが、その様子からみてほぼ平坦であり、先端で急速に立ち上がる。壁外へは1.38m程張り出している。覆土は上部を欠くが、燃焼部で天井部崩落土（12層）が確認され、その下から焼土層（13層）、灰層（14層）が検出された。貯蔵穴はみられない。

出土遺物（第240図）には、土師器杯（No.1～12）、甕（13）、土製支脚（14）等があり、杯が多数検出された。1・5・6・8・10が新カマドの北西脇から、14はカマドから検出された。その他のものは覆土中からの検出である。煤が付着しているものや黒斑を有する



第238図　E・F区85号住居跡出土遺物

第116表　E・F区85号住居跡出土遺物観察表　(第238図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(12.8)	-	-	④①③	②		1/5	
2	土師器杯	(14.0)	-	-	③①④	②	にぶい橙	1/4	内外面煤付着。
3	土師器杯	(14.8)	-	-	①④③②	②		1/5	
4	土師器杯	(13.0)	4.5	-	①③④	②	明赤褐	1/4	内外面煤付着。
5	土師器杯	(14.8)	4.8	-	③①④⑥	②	橙	1/3	外面黒斑有、煤付着。
6	土師器杯	(15.2)	-	-	③①④	②	明赤褐	1/2	外面黒斑有。
7	土師器杯	15.2	3.9	-	①③④	②	黒褐	2/3	外面黒斑有。内外面煤付着。
8	土師器杯	(16.2)	-	-	①④②③⑥	②		1/4	
9	土師器杯	15.0	3.8	-	①④②③	②	明赤褐	1/2	内外面煤付着。
10	土師器杯	(16.6)	4.0	-	①③②⑥	②		1/2	
11	土師器甕	19.9	35.2	5.2	⑥③①④	②	橙	3/4	外面煤付着。磨滅。
12	土師器甕	(17.0)	-	-	①⑥③④②	②		2/3	
13	土師器甕	17.8	-	-	⑥③	②	黄橙	1/2	外面黒斑有。
14	土師器鉢	20.2	-	-	①③④⑥	②	にぶい赤褐	上位のみ	内外面煤付着。
15	土師器甑	-	-	(8.8)	①④②③⑥	②		下半1/2	
16	土製支脚	上部径 -	器高 -	底径 -				上下位欠	
17	磨石	長さ 13.5	幅 11.0	厚さ 2.4				完形	砂岩製。
18	土錘	長さ 7.0	最大径 1.7	孔径 0.6				完形	
19	土錘	長さ 5.2	最大径 1.3	孔径 0.4				完形	
20	土錘	長さ 4.9	最大径 1.4	孔径 0.4				完形	
21	土錘	長さ 5.1	最大径 1.2	孔径 0.4				完形	
22	土錘	長さ 4.8	最大径 1.1	孔径 0.4				完形	
23	土錘	長さ 5.0	最大径 1.5	孔径 0.5				完形	
24	土錘	長さ 5.2	最大径 1.4	孔径 0.3				完形	
25	土錘	長さ 5.0	最大径 1.2	孔径 0.4				完形	
26	土錘	長さ 5.3	最大径 1.3	孔径 0.4				完形	
27	土錘	長さ 5.3	最大径 1.3	孔径 0.4				完形	
28	土錘	長さ 5.2	最大径 1.3	孔径 0.4				完形	
29	土錘	長さ -	最大径 1.7	孔径 0.6				一部欠	
30	土錘	長さ 5.0	最大径 1.4	孔径 0.5				完形	
31	土錘	長さ 4.8	最大径 1.5	孔径 0.5				完形	
32	土錘	長さ 5.2	最大径 1.4	孔径 0.5				完形	
33	土錘	長さ 4.9	最大径 1.3	孔径 0.4				完形	

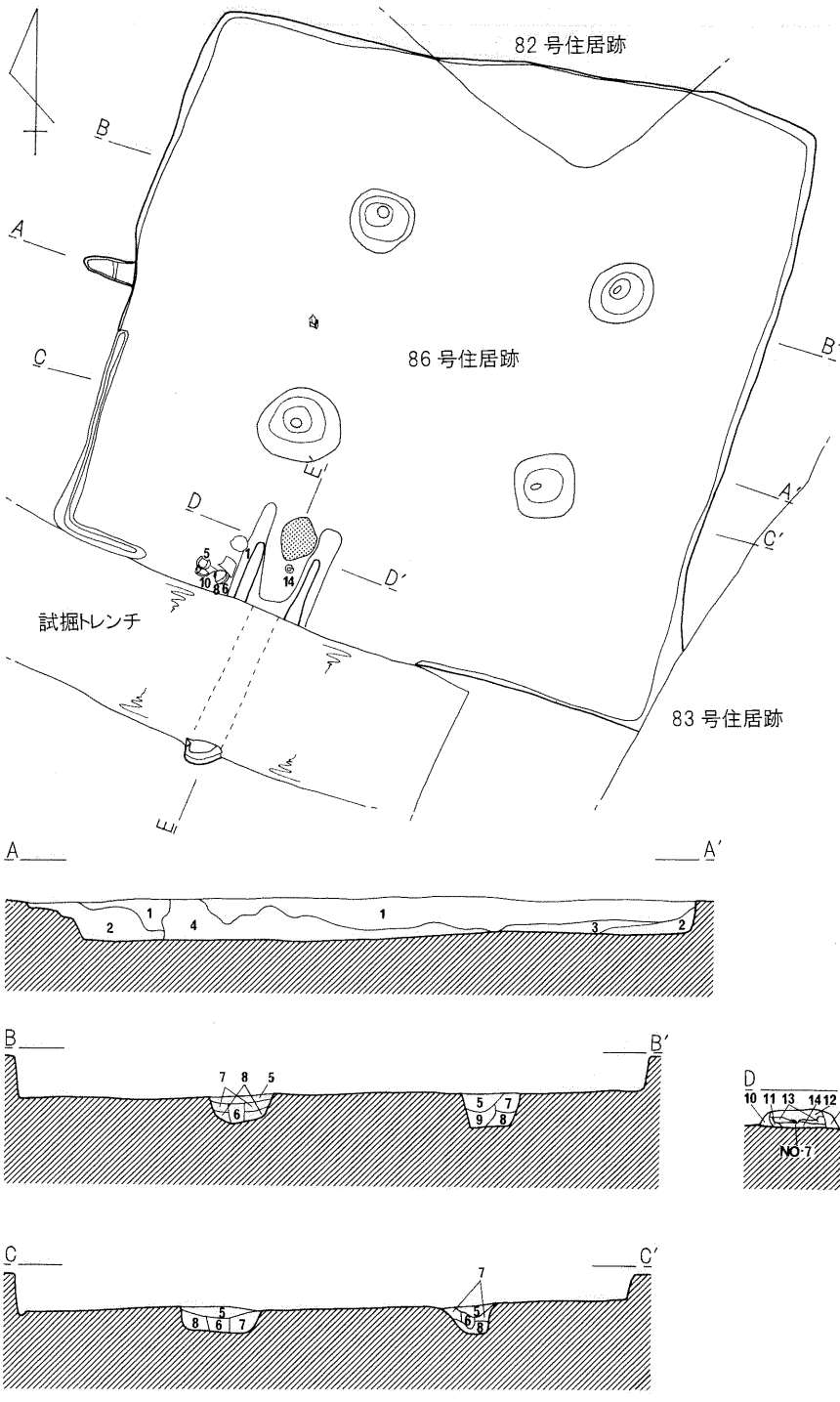
ものが多い。杯はすべて模倣杯である。1～3は杯身模倣杯、その他は杯蓋模倣杯である。このうち、11は口縁部が大きく外反し、12は稜が不明瞭で、器高も他のものと比べて低い。皿としても良いものかもしれない。13は長胴甕である。上部のみの検出である。14は柱状を呈する。完形品。

87号住居跡　(第241図)

AL－23･24グリッドに位置する。南西部から南東部にかけて85号住居跡に切られ、北西部で88号住居跡を切っている。

長軸は不明であるが、短軸は4.73mを測り、長方形を呈するものと思われる。主軸方向はN－73°－Eを指す。確認面からの深さは43cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄色及び灰色系の粘土とシルト（1・3・4・6・7層）を主体とする。カマド近辺がややランダムな層位を成すが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と考えられる。ピットは85号住居跡との境に1つみられるが、柱穴とは考えられない。壁溝はみられない。

カマドは北東壁のほぼ中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、壁際から僅かに張り出している。内面には被熱した箇所が確認された。焚口部から煙道部先端手前までの幅は32～35cmとほぼ一定となっており、先端で20cmにすぼまる。焚口部から煙道部先端までは緩やかに立ち上がる。壁外へは1.23m程張り出している。覆土は薄く、天井部崩落



86 号住居跡土層

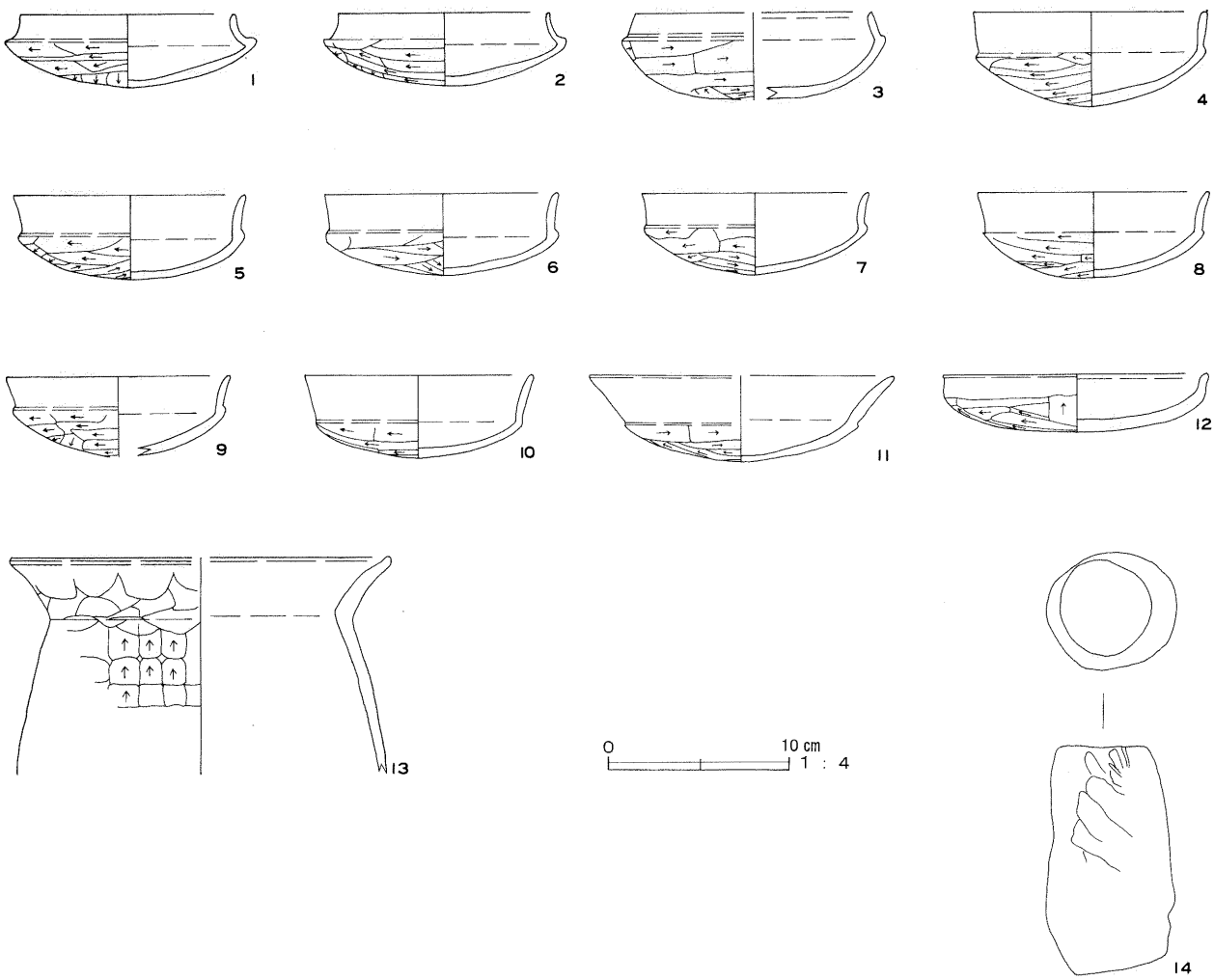
1　灰褐色(7.5YR4/2)粘土。炭化物粒(極少量)を含む。しまり良い。
2　にぶい赤褐色(5YR4/3)粘土。炭化物粒(少量)を含む。しまり良い。
3　褐色(7.5YR4/3)粘土。下層に炭化物混入。しまり良い。
4　褐灰色(7.5YR6/1)粘土。ところどころ酸化。
5　褐灰色(7.5YR6/1)粘土。炭化物(多量)を含む。しまり悪い。粘性強い。
6　明褐灰色(7.5YR7/1)粘土。粘性非常に強い。
7　褐灰色(10YR5/1)粘土。炭化物・焼土粒(極微量)を含む。しまり良い。
8　灰色(5Y5/1)粘土。しまり良い。粘性強い。
9　明褐灰色(7.5YR7/1)粘土。炭化物(少量)を含む。6層に比べしまり悪い。
10　にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト。しまり良い。カマド袖。
11　にぶい赤褐色(2.5YR4/4)粘土。カマド袖の燃焼部内側が被熱により焼土ブロック化。
12　褐灰色(7.5YR6/1)粘土。焼土ブロック(少量)を含む。カマド天井崩落土。粘性強い。
13　橙色(2.5YR6/6)粘土。12層が被熱により焼土ブロック化。
14　褐灰色(5YR4/1)灰層。
15　褐灰色(7.5YR6/1)粘土。炭化物(少量)を含む。しまり悪い。

第239図　E・F区86号住居跡

土等は検出されなかった。住居跡覆土下から焼土・炭化物を含んだ層（2層）、カマド前に灰層（5層）が確認された。

カマド南西脇には貯蔵穴があり、径71×54cmの三角形状を呈し、床面からの深さ41cmを測る。

出土遺物（第242図）には、土師器杯（No.1～5）、甕（6）、甑（7）等がある。2が床面中央から、1・4～6は貯蔵穴の南東から検出された。その他は覆土中からの検出であ

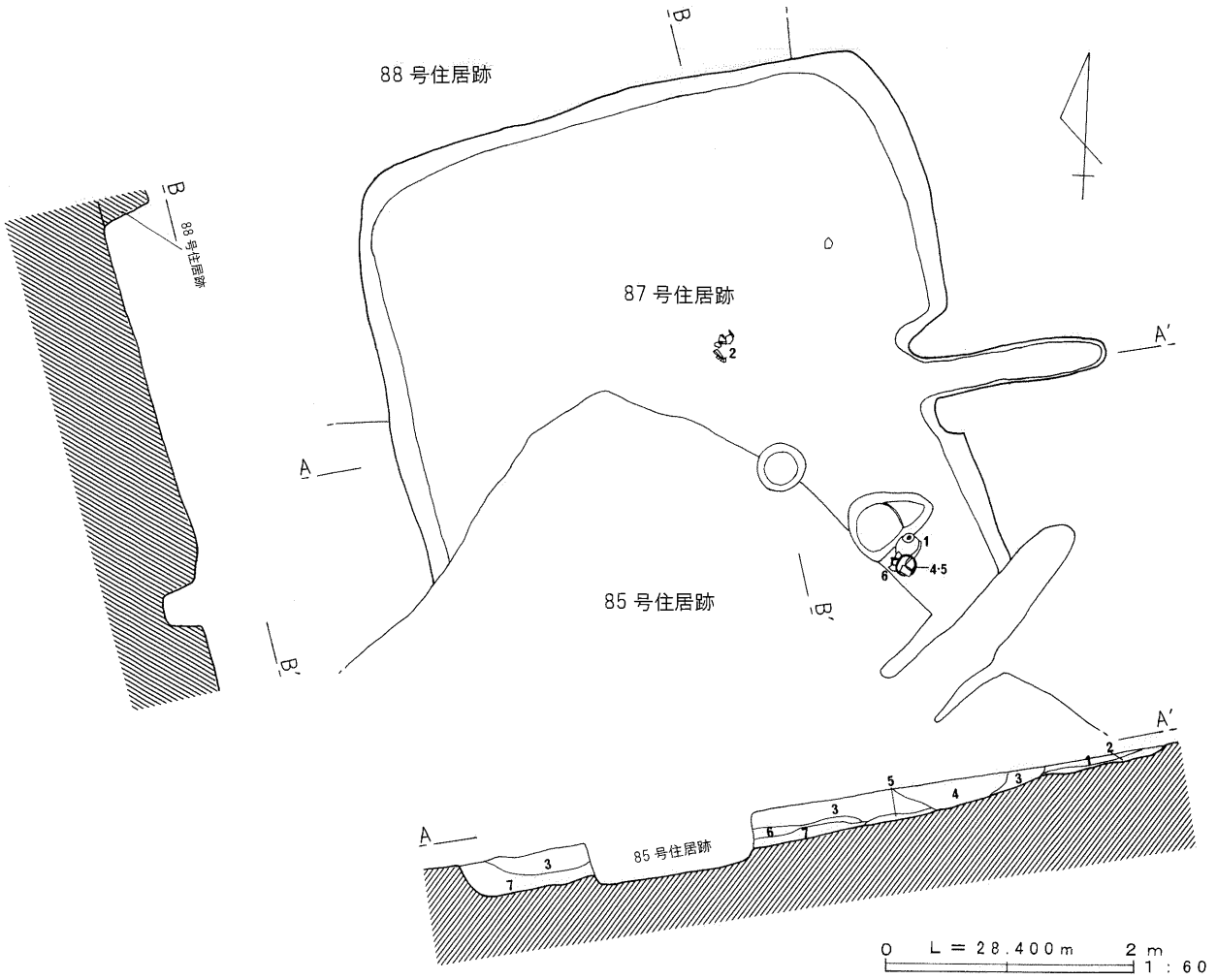


第240図　E・F区86号住居跡出土遺物

第117表　E・F区86号住居跡出土遺物観察表　（第240図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	11.8	4.0	-	③①⑥④	②	にぶい赤褐	2/3	内外面煤付着。
2	土師器杯	11.6	4.0	-	①③④⑥	②	にぶい橙	口縁部1/2欠	内外面煤付着。
3	土師器杯	(13.0)	-	-	⑥①③④	②	にぶい橙	1/3	外面黒斑有、煤付着。
4	土師器杯	12.7	5.2	-	①⑥③④	②	橙	3/4	外面黒斑有。
5	土師器杯	12.7	4.6	-	③①④⑥	②	明赤褐	3/4	外面黒斑有。
6	土師器杯	12.8	4.5	-	③①④⑥	②	橙	3/4	
7	土師器杯	12.5	4.5	-	③⑥①④	②	明赤褐	口縁部1/2欠	外面黒斑有。内外面煤付着。
8	土師器杯	12.6	4.6	-	③①④	②	明赤褐	1/2	内外面煤付着。
9	土師器杯	12.4	-	-	③①④⑥	②	明赤褐	2/3	外面黒斑有。
10	土師器杯	12.5	4.5	-	⑥③①④	②	橙	1/2	
11	土師器杯	(16.8)	4.7	-	⑥①③④	②	橙	1/2	
12	土師器杯	14.6	3.1	-	⑥①③④	②	橙	2/3	外面黒斑有。内外面煤付着。
13	土師器甕	(20.8)	-	-	⑥②①④③	②	橙	上位1/2	
14	土製支脚	上部径　5.0　器高　12.6　底径　4.9						完形	

る。煤が付着しているものや黒斑を有するものがみられた。杯はすべて模倣杯である。1は杯身模倣杯、その他は杯蓋模倣杯である。口径大きく、器高が低い。4・5は口縁部に複数の稜を持つ。6は小型のものである。上位のみの検出である。7は小型で、把手を持たないタイプである。丸底である。



87 号住居跡土層

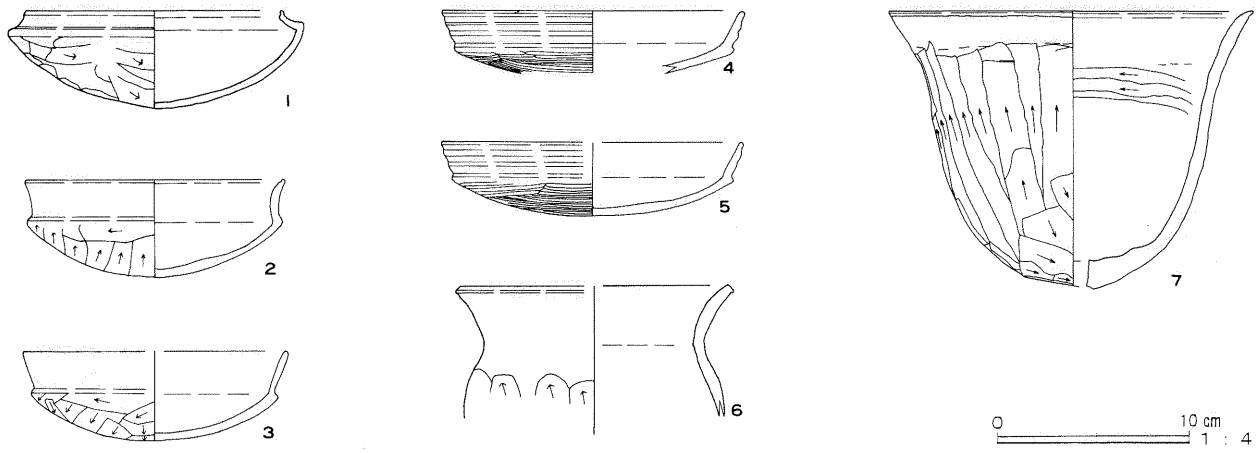
1　黄褐色(2.5Y5/3)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。
2　暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト。焼土粒・炭化物ブロック(多量)を含む。しまり良い。
3　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒を含む。しまり良い。
4　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒・炭化粒(微量)を含む。しまり良い。
5　灰色(N6/0)灰層。しまり悪い。
6　黄灰色(2.5Y6/1)粘土。しまり良い。
7　黄褐色(2.5Y5/3)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、炭化粒(微量)を含む。しまり良い。

第241図　E・F区87号住居跡

88号住居跡（第243図）　AK・AL－23・24グリッドに位置する。複数の同時期の住居跡と重複関係にある。北西部は84号住居跡、北東部は83号住居跡、南東部は87号住居跡にそれぞれ切られている。

南西壁は5.43mを測り、長方形を呈するものと推測される。主軸方向はS－69°－Wを指す。確認面からの深さは32cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系の粘土（1～5層）を主体とする。1層以外は焼土・炭化物を含んでいた。壁溝は北東壁のほぼ中央の壁から12～15cm離れた箇所にみられるが、83号住居跡に切られている。幅は8～10cm、床面からの深さは7cm程を測る。ピットは3つ確認された。いずれも柱穴と考えられる。

カマドは南西壁中央からやや南東寄りに設けられている。上面を84号住居跡によって切られているため、煙道部は検出されなかった。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱し



第242図　E・F区87号住居跡出土遺物

第118表　E・F区87号住居跡出土遺物観察表　(第242図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	13.6	5.2	-	②③①④	②	橙	2/3	
2	土師器杯	13.7	5.1	-	③①④	②	橙	下位1/2欠	
3	土師器杯	(14.0)	4.6	-	③①④	②	橙	1/2	内外面煤付着。
4	土師器杯	16.0	3.8	-	①④③②	②	橙	1/2	内外面煤付着。
5	土師器杯	(16.0)	-	-	①④③⑥	②	橙	上位1/2	外面煤付着。
6	土師器甕	(12.2)	-	-	②①③④⑥	②	にぶい橙	上位1/3	
7	土師器甑	19.2	14.8	3.3	③①	②	明褐	完形	胴部外面黒斑有。

た箇所が確認された。焚口部から燃焼部の幅は29cmを測り、床面からは掘り込まれておらず、ほぼ平坦である。燃焼部は住居跡壁のラインで立ち上がることから、他の住居跡と同様、燃焼部と煙道部の境には段が設けられていたと考えられる。覆土は図示できなかったが、焼土・炭化物を主体とする層が検出されていた。

カマド南東脇には、径1.02m×0.8mの不整楕円形を呈し、床面からの深さ49cmの貯蔵穴がみられた。

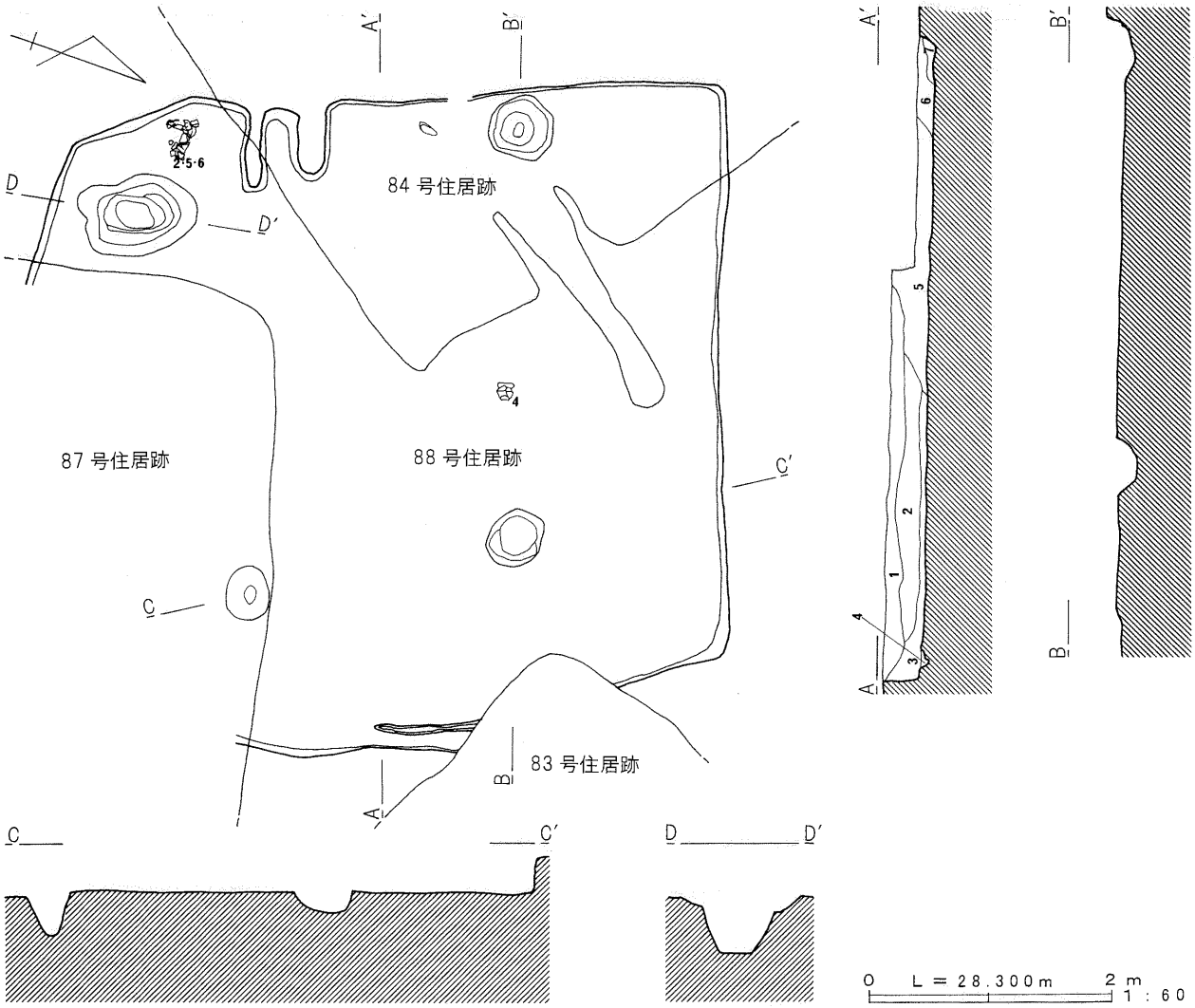
出土遺物（第244図）には、土師器杯（No.1～3）、盌（4）、甕（5～7）、砥石（8）等がある。2・5・6はカマド南東脇、4は床面ほぼ中央から検出された。その他は、覆土中からの検出である。杯はすべて身の深い模倣杯である。1は外面に黒斑を有する。4は口縁部が屈曲していることから、盌とした。甕は長胴甕（5・6）と小型のもの（7）がある。5は煤の付着や黒斑がみられた。8は全面を使用している。

89号住居跡
(第245図)

AL・AM－25グリッドに位置する。南東部で100号住居跡、南西部で103号住居跡を切っている。

長軸6.24m、短軸5.12mの長方形を呈する。主軸方向はS－50°－Eを指す。確認面からの深さは41cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は色調が様々であるが、三層（1～3層）からなる自然堆積層である。レンズ状に堆積していた。全層中に焼土・炭化物を含んでいたが、最下層（3層）下部の床面直上には炭化物が帯状に堆積していた。柱穴は2つ検出された。北西側の柱穴は18cmと浅い。

壁溝、貯蔵穴はみられない。



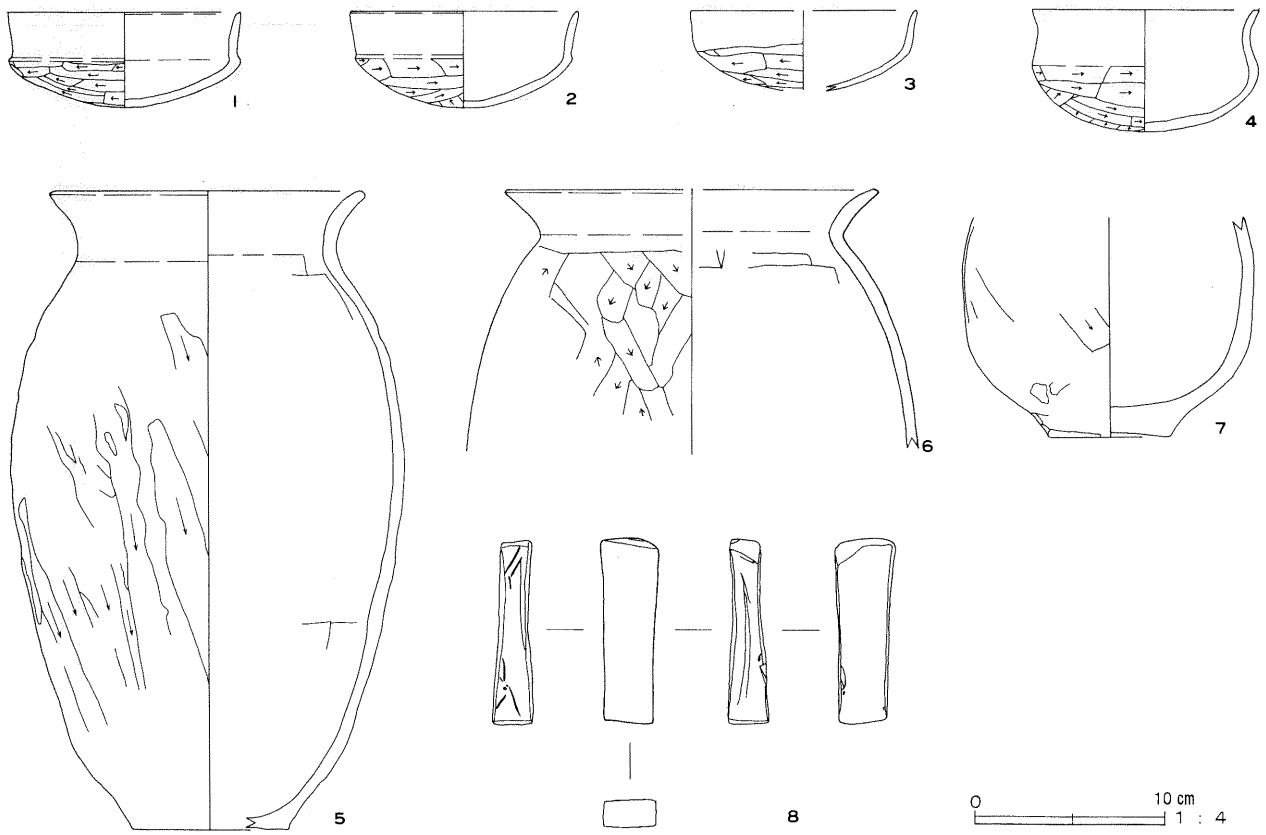
88 号住居跡土層

1　灰黄褐色(10YR4/2)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。
2　1の土に焼土粒、炭化粒(少量)を含む。
3　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土。焼土ブロック、炭化物を帯状に含む。しまりやや悪い。
4　黄灰色(2.5Y5/1)粘土。炭化物粒(少量)を含む。しまりやや悪い。
5　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、炭化物粒を含む。しまり良い。
6　灰色(5Y5/1)粘土。酸化鉄粒(多量)を含む。しまり良い。
7　6の土に炭化物を帯状に含む。しまり良い。

第243図　E・F区88号住居跡

カマドは南東壁中央からやや南西寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所があった。焚口部の幅は40cm、燃焼部は19cmと狭くなり、煙道部は25～33cmと一定しない。燃焼部と煙道部の境に段はみられず、焚口部から煙道部に向かって緩やかに移行し、先端で急速に立ち上がる。壁外へは1.38m程張り出している。覆土は焼土・炭化物を含む4層の下から灰白色の粘土（5層）、焼土層（6層）、灰層（7層）の順で検出された。このうち、5層は天井部崩落土の可能性がある。

出土遺物（第246図）には、土師器杯（№1～4）、高杯（5）、甕（6・7）等がある。



第244図　E・F区88号住居跡出土遺物

第119表　E・F区88号住居跡出土遺物観察表　（第244図）

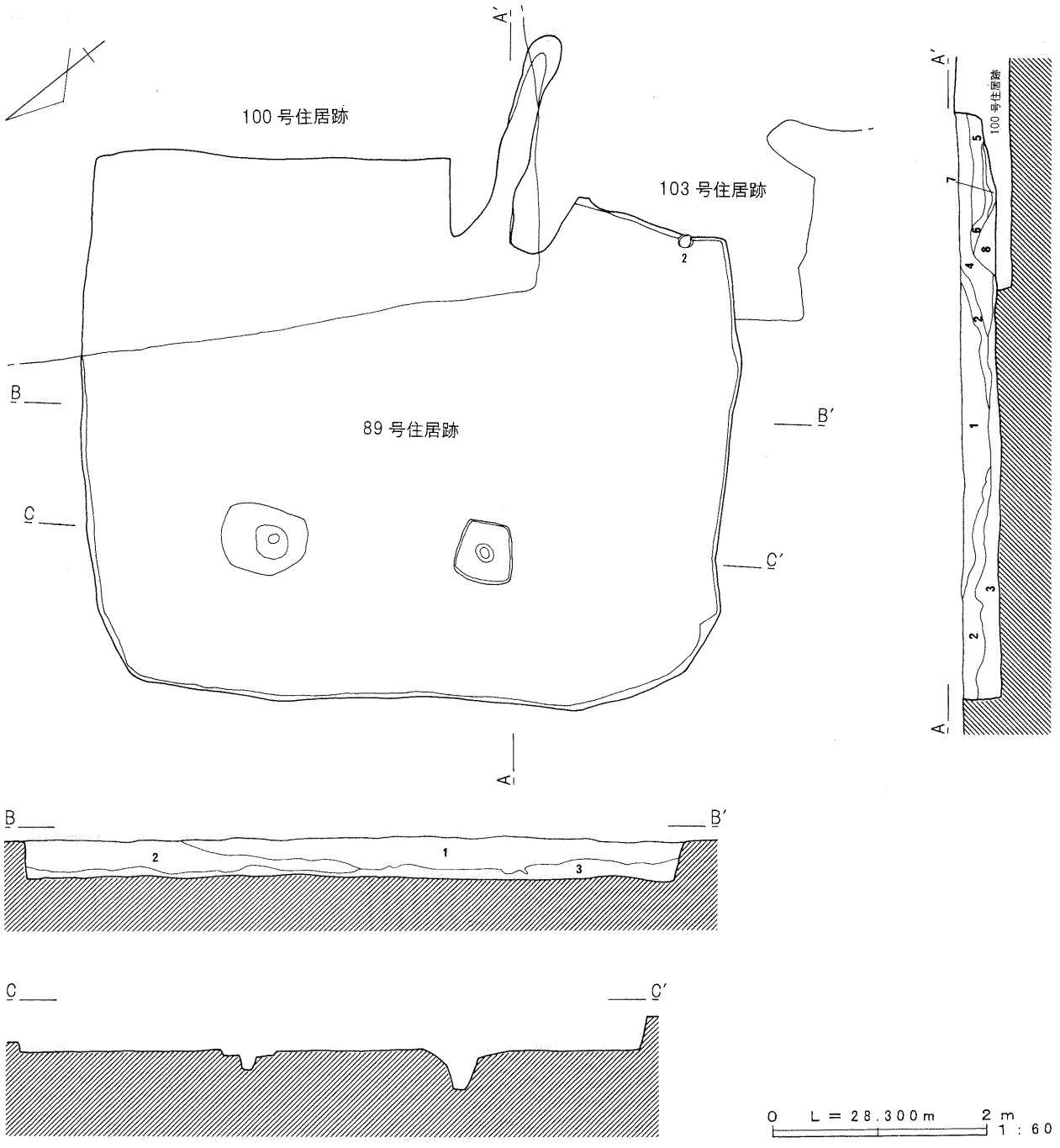
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	12.3	5.0	-	①③⑥	②	橙	1/2	外面黒斑有。
2	土師器杯	12.1	5.1	-	③①④	②	橙	一部欠	
3	土師器杯	(12.0)	-	-	③①④⑥	②	橙	1/2	
4	土師器盤	11.9	6.4	-	③①④⑥②	②	橙	一部欠	
5	土師器甕	16.6	34.1	8.0	③①⑥	②	浅黄橙	3/4	外面黒斑有。内外面煤付着。磨滅。
6	土師器甕	(18.6)	-	-	⑥①②③	②	橙	上位のみ	
7	土師器甕	-	-	6.0	⑥①	②	橙	下半のみ	磨滅。
8	砥石	長さ 9.8	幅 2.7	厚さ 1.5				完形	全面使用。流紋岩製。

2が南西隅から検出された以外は、すべて覆土中からの検出である。杯はすべて模倣杯である。2は内外面に煤が付着していた。5は低い脚部のみの検出である。6・7は長胴甕である。6は下位のみ、7は上位のみの検出である。

90号住居跡　AM－23･24グリッドに位置する。複数の同時期の住居跡群内にあるが、本住居跡が最も新しい。93号住居跡の大部分を切っている。また、本住居跡カマドの北西に隣接するカマドを91号住居跡としたが、これは本住居跡カマドの付け替えである。

（第247図）
（第248図）
（第249図）

長軸5.03m、短軸4.96mのほぼ方形を呈する。主軸方向はN－64°－Eを指す。確認面からの深さは47cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系の粘土五層（1～5層）からなる自然堆積層であり、レンズ状に堆積していた。1層下部、及び床面直上には炭化物が堆積していた。壁溝は北東隅から南西壁中央にかけて確認でき、南東隅は途切れている。幅8～13cmで、床面からの深さは5～11cmを測る。本住居



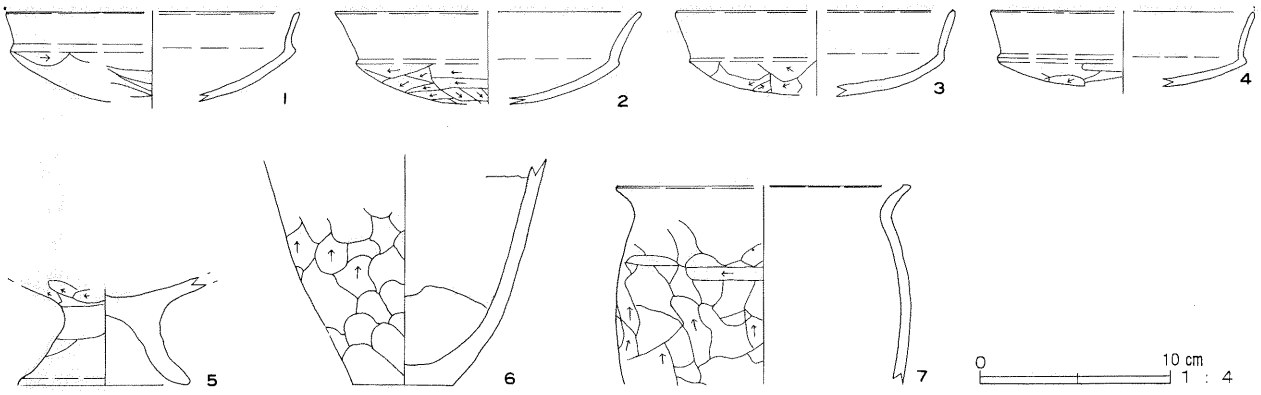
89 号住居跡土層

1　灰褐色(7.5YR5/2)粘土。焼土粒、炭化物(少量)を含む。粘性やや強い。
2　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。炭化物(少量)を含む。粘性やや強い。
3　灰白色(2.5Y8/1)粘土。床直上に炭化物が帯状に堆積。粘性強い。
4　黄褐色(2.5Y5/4)シルト。炭化物(少量)、焼土粒(極微量)を含む。しまり良い。
5　灰白色(10YR8/1)粘土。粘性非常に強い。
6　赤色(10R4/6)粘土。5層が被熱により焼土ブロック化したもの。
7　暗赤灰色(10R3/1)灰層。
8　カマド袖。

第245図　E・F区89号住居跡

跡に付随する柱穴はみられない。

カマドは北東壁中央から北西寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。北西側の袖部は、前段階のカマド（91号住居跡）の袖部を利用している。焚口部の幅は52cm、燃焼部は43cm、煙道部先端は17cmを測り、先端に向かっ



第246図　E・F区89号住居跡出土遺物

第120表　E・F区89号住居跡出土遺物観察表　(第246図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(15.5)	-	-	④②①③	②	明赤褐	1/4	
2	土師器杯	(16.2)	-	-	④①③②	②	橙	2/5	内外面煤付着。
3	土師器杯	(14.6)	-	-	①④②③	②	橙	1/3	
4	土師器杯	(13.8)	-	-	④①③	①	橙	1/6	
5	土師器高杯	-	-	8.8	③②①⑥	②	明赤褐	脚部、杯一部	
6	土師器甕	-	-	5.3	②④⑥①③	②	橙	下位のみ	
7	土師器甕	(14.0)	-	-	④⑥①②	②	にぶい赤褐	上位1/6	

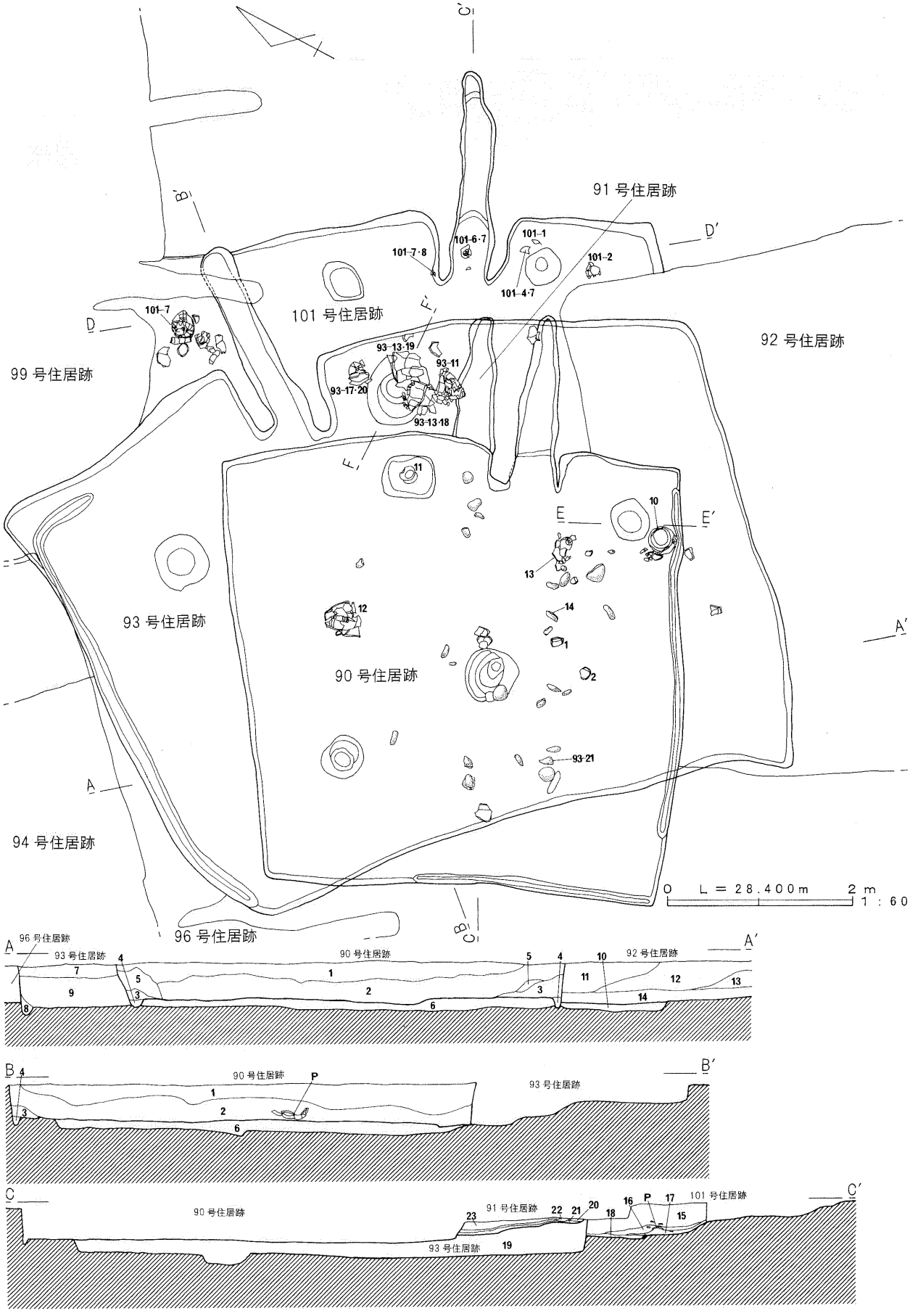
て徐々に狭まる。焚口部から燃焼部は床面から掘り込んでおらず、ほぼ平坦である。焚口部から燃焼部にかけて土師器甕・甑がつぶれた状態で多数検出された。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は9cmを測る。煙道部はやや凹凸がみられるが、先端に向かって緩やかに立ち上がる。壁外へは1.52cmほど張り出している。覆土に天井部崩落土や灰層等は確認されず、焼土・炭化物を含む層（24～28層）が検出された。

貯蔵穴は2つみられた。1つはカマド北西脇にあり、径0.59×0.47mの長方形を呈し、床面からの深さ16cmを測る。覆土中から土師器甕（No.11）が検出された。もう1つは、南東脇にあり、径0.46×0.4mの円形を呈し、深さ22cmを測る。

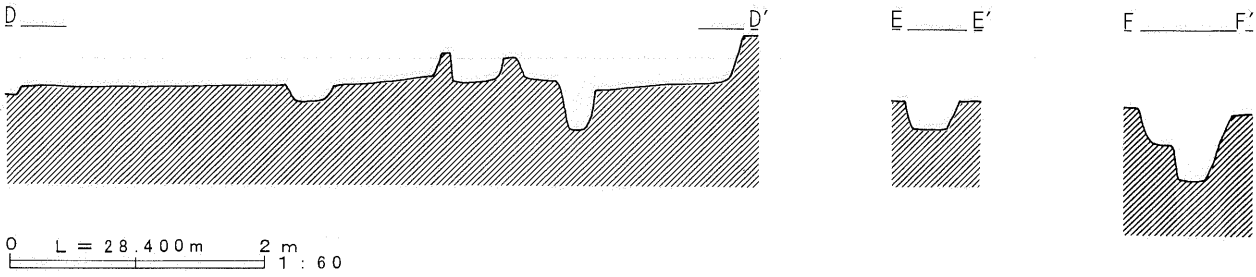
出土遺物（第250・251図）には、土師器杯（No.1・2）、盌（3）、甕（4～11）、甑（12・13）、石錘（14）、土錘（15～18）等がある。4～8・13はカマド、（1・2・10・12～14）は床面上、11は貯蔵穴から検出された。その他は覆土中からの検出である。黒斑を有するものや二次加熱を受けているもの、煤が付着しているものが多い。1は模倣杯、2も模倣杯に近いが、体部と底部境の稜が不明瞭であり、丸みを帯びている。3は底部のみの検出である。甕は長胴甕（4～8）、小型のもの（9・11）、丸胴甕（10）がある。5・7は摩滅が顕著であった。甑はともに把手を持たないタイプである。14は川原石を使用している。土錘は4点検出された。長さ5.3cm前後、最大径1.5cm前後、孔径0.4～0.5cmを測る。

91号住居跡（第247図）　AM－23・24グリッドに位置する。90号住居跡新カマドの前段階のものであり、90号住居跡とは同一の住居跡である。新カマドの北西に位置する。

北西側の袖部が残存するが、これは90号住居跡カマドの袖部に再利用されているためで



第247図　E・F区90・91・93・101号住居跡(1)



90・91・93・101号住居跡土層

1 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土。下部に炭化物が帯状に堆積。しまり良い。
2 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土。1層と同質。色調やや明るい。下部に炭化物が堆積。
3 灰黄褐色(10YR5/2)粘土。しまり悪い。
4 灰黄褐色(10YR5/2)粘土。3層よりしまり悪い。
5 灰黄褐色(10YR5/2)粘土。焼土粒、炭化物を少量含む。しまり悪い。
6 明黄褐色(10YR7/6)粘土。炭化物(少量)を含む。上面は硬くしまる。
7 にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。焼土粒、炭化物を少量含む。しまり悪い。
8 灰黄褐色(10YR5/2)粘土。しまり悪い。
9 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土。炭化物(少量)を含む。しまり悪い。
10 明黄褐色(10YR7/6)粘土。炭化物(少量)を含む。上面は硬くしまる。
11 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。焼土粒(少量)、炭化物(微量)を含む。しまり悪い。
12 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。11層と同質。しまり悪い。
13 にぶい黄橙色(10YR7/4)粘土。11層が粒状、ブロック状に多量含まれる。
14 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。焼土粒(少量)、炭化物が帯状に堆積。土器を包含。
15 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土。炭化物粒(少量)を含む。しまり良い。
16 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土。焼土・炭化物ブロックを含む。しまり良い。
17 黄灰色(2.5Y5/1)粘土。焼土ブロックを含む。しまり悪い。
18 暗赤褐色(2.5YR3/6)粘土。焼土ブロックを含む。しまり良い。
19 明黄褐色(10YR6/6)粘土。焼土・炭化物ブロックを含む。しまり良い。

第248図　E・F区90・91・93・101号住居跡(2)

(第248図)　ある。側面に被熱箇所はみられない。焚口部から燃焼部の幅は不明、煙道部幅は燃焼部との境で47cm、先端で25cmを測る。燃焼部と煙道部の境には段が設けられおり、高低差は4cmを測る。煙道部は先端に向って緩やかに立ち上がる。壁外へは1.39mほど測る。覆土は焼土・炭化物をブロック状に含む層（20～23層）がみられた。

(第249図)　遺物は、土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

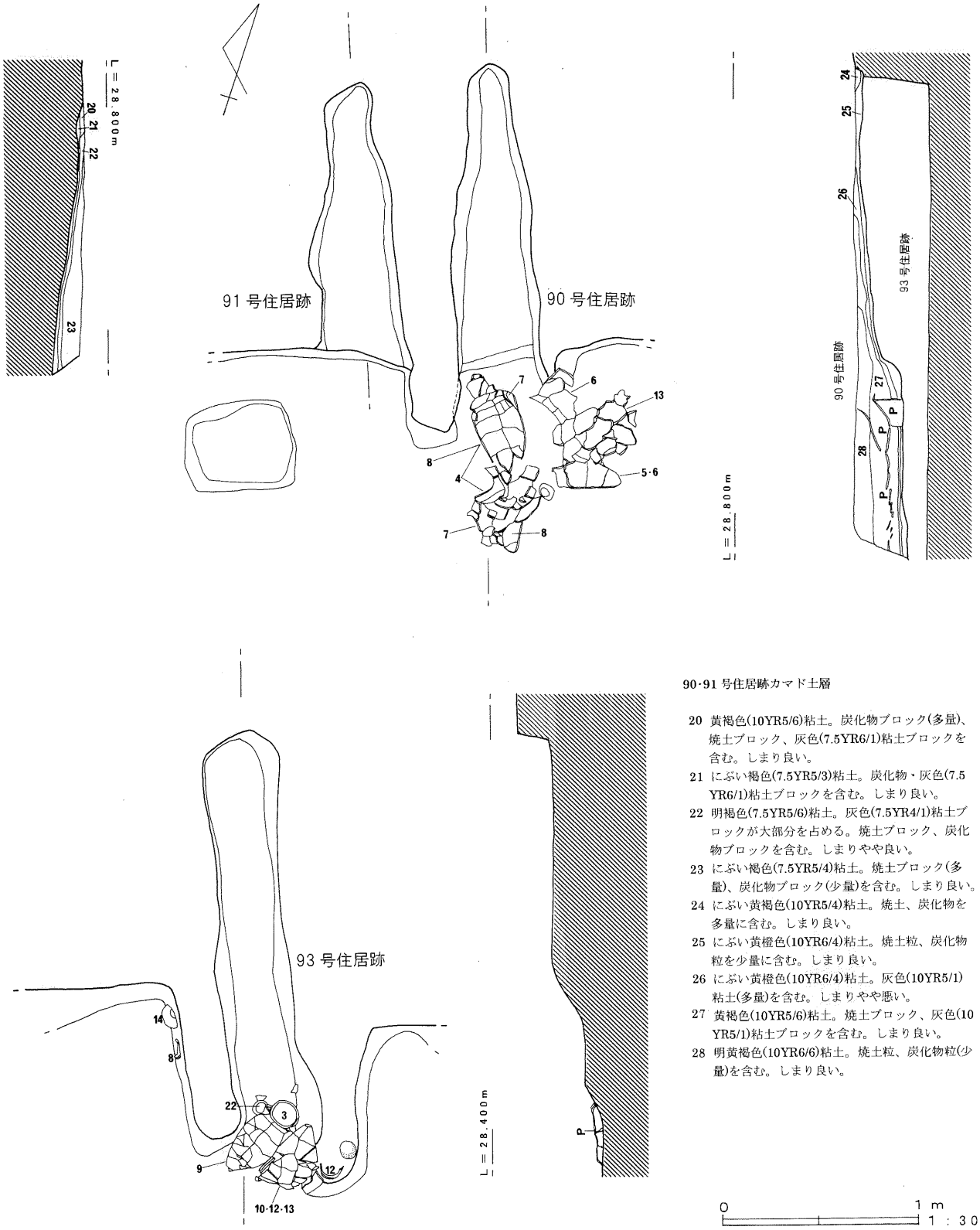
92号住居跡　AM・AN－23・24グリッドに位置する。北西部で90号住居跡に切られており、北西部から北東部にかけて93・101号住居跡を切っている。

(第252図)　長軸6.01m、短軸5.84のほぼ方形を呈するが、南東隅は貯蔵穴に沿って壁が20cm程張り出している。主軸方向はS－34°－Eを指す。確認面からの深さは52cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系の粘土三層（6・7・9層）からなり、上層（7層）は厚く堆積していた。ともに焼土・炭化物を含んでいたが、自然堆積と考えられる。壁溝はみられず、カマドの南西部にピットが3つ確認されたが、その位置から柱穴ではないと考えられる。

カマドは南東壁中央から北東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は52cm、燃焼部の幅は40cm程を測る。焚口部から燃焼部にかけて土師器が多数検出された。覆土は燃焼部下部のみの確認であり、焼土・炭化物を含む層（1～5層）の下から、しまりのよい焼土層（8層）が検出された。

カマド北東脇には、径1.1×1mの円形を呈し、床面からの深さ26cmの貯蔵穴がみられた。底面から覆土上層にかけて土師器がまとまって検出された。

出土遺物（第253・254図）には、土師器杯（№1～16）、盌（17）、高杯（18）、甕（19～21・

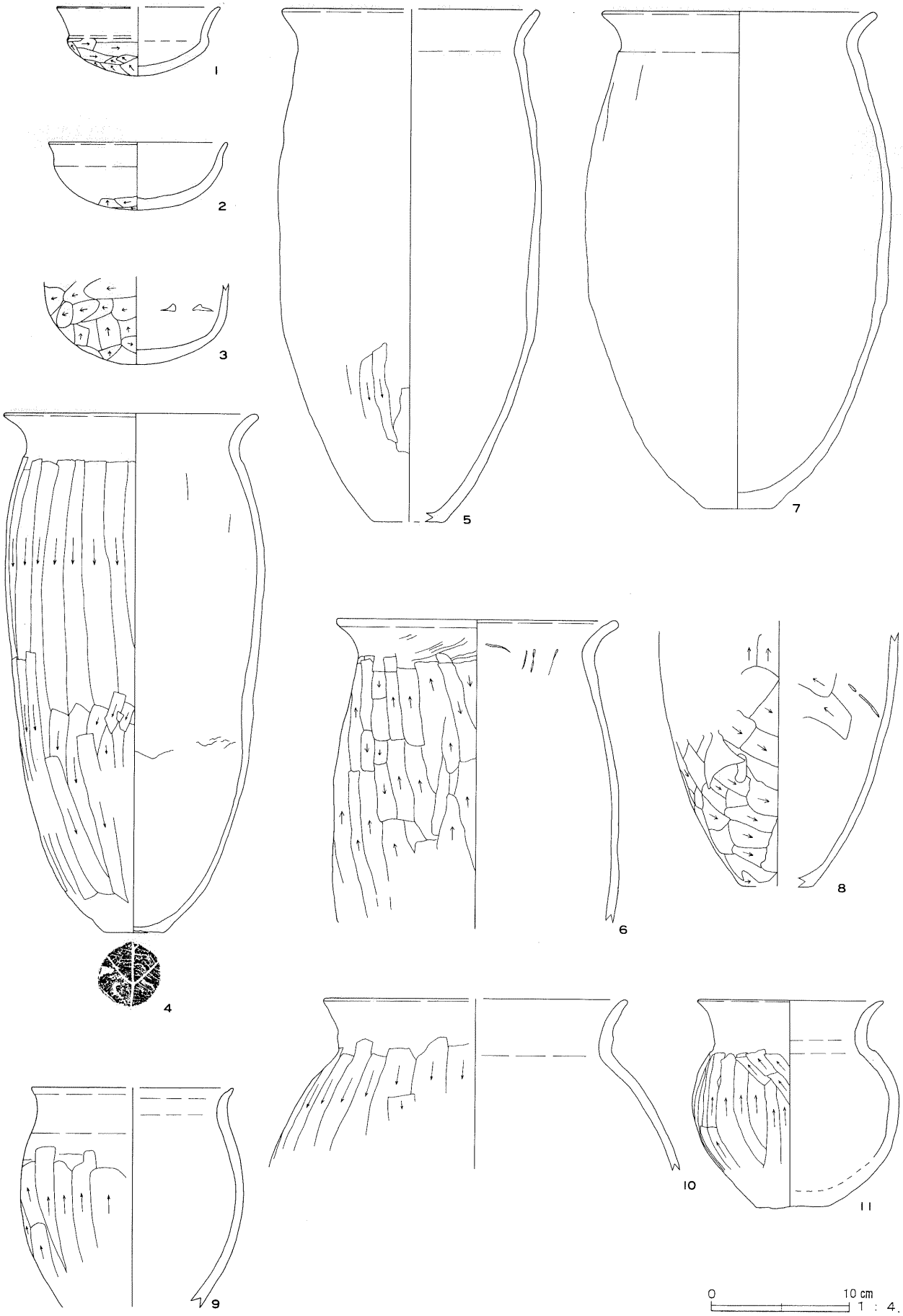


90·91 号住居跡カマド土層

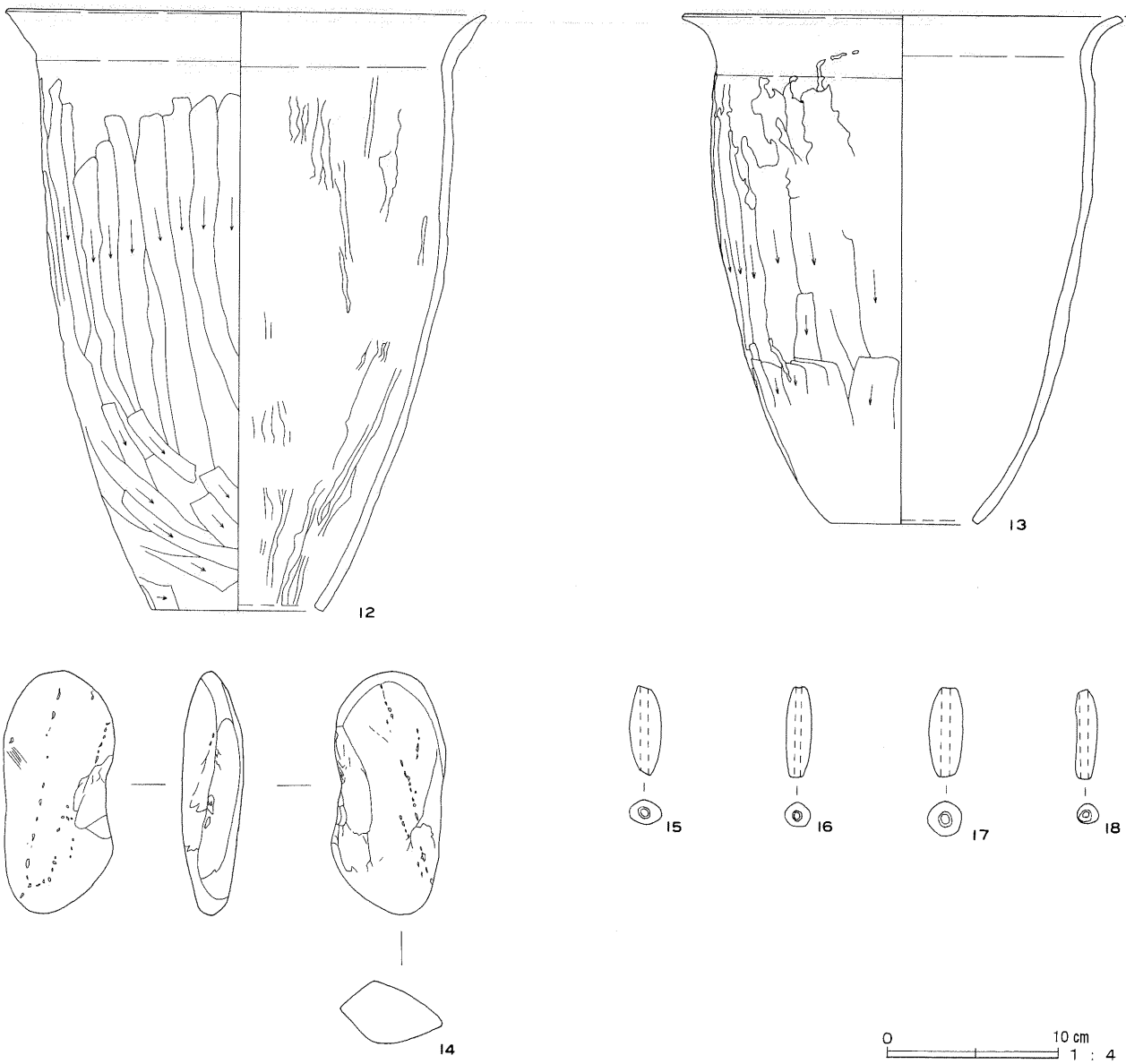
20 黄褐色(10YR5/6)粘土。炭化物ブロック(多量)、焼土ブロック、灰色(7.5YR6/1)粘土ブロックを含む。しまり良い。
21 にぶい褐色(7.5YR5/3)粘土。炭化物・灰色(7.5YR6/1)粘土ブロックを含む。しまり良い。
22 明褐色(7.5YR5/6)粘土。灰色(7.5YR4/1)粘土ブロックが大部分を占める。焼土ブロック、炭化物ブロックを含む。しまりやや良い。
23 にぶい褐色(7.5YR5/4)粘土。焼土ブロック(多量)、炭化物ブロック(少量)を含む。しまり良い。
24 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土。焼土、炭化物を多量に含む。しまり良い。
25 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土。焼土粒、炭化物粒を少量に含む。しまり良い。
26 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土。灰色(10YR5/1)粘土(多量)を含む。しまりやや悪い。
27 黄褐色(10YR5/6)粘土。焼土ブロック、灰色(10YR5/1)粘土ブロックを含む。しまり良い。
28 明黄褐色(10YR6/6)粘土。焼土粒、炭化物粒(少量)を含む。しまり良い。

0　1 m
1 : 30

第249図　E・F区90・91・93号住居跡カマド



第250図　E・F区90号住居跡出土遺物(1)



第251図　E・F区90号住居跡出土遺物(2)

第121表　E・F区90号住居跡出土遺物観察表　(第250・251図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(12.0)	5.0	-	③①④		橙	1/3	
2	土師器杯	13.1	5.0	-	①④③⑥	②	橙	口縁部1/2欠	外面黒斑有。
3	土師器盌	-	-	-	②①③⑥	②	橙	下位のみ	
4	土師器甕	18.6	38.4	4.2	③⑥①④	②	浅黄橙	4/5	
5	土師器甕	18.8	37.9	5.1	③④①	②	にぶい黄橙	1/3	二次加熱。磨滅。
6	土師器甕	20.6	-	-	⑥①②④③	②	明赤褐	上半3/5	
7	土師器甕	20.0	36.8	4.8	③⑥①④	②	にぶい黄橙	1/2	外面煤付着。磨滅。
8	土師器甕	-	-	(5.0)	⑥④⑤②	②	橙	下半3/4	
9	土師器甕	(14.8)	-	-	①③④	②	橙	1/2	外面黒斑有。
10	土師器甕	(22.4)	-	-	⑥③①	②	橙	口縁部のみ	外面黒斑有。
11	土師器甕	13.7	15.5	(5.8)	③①④⑥	②	にぶい橙	一部欠	黒斑有。下位剝離。
12	土師器甑	28.3	35.9	10.2	①③⑥④	②	橙	5/6	胴部外面黒斑有。
13	土師器甑	25.8	30.4	8.7	③①⑥	②	浅黄橙	4/5	外面黒斑有。
14	石錘	長さ 14.4	幅 6.5	厚さ 3.1				完形	
15	土錘	長さ 5.2	最大径 1.9	孔径 0.5				完形	
16	土錘	長さ 5.4	最大径 1.5	孔径 0.4				完形	
17	土錘	長さ 5.3	最大径 2.0	孔径 0.5				完形	
18	土錘	長さ 5.3	最大径 1.3	孔径 0.4				完形	

23～25)、甑（26･27)、須恵器甕（22)、石錘（28）等がある。主にカマド及びその周辺と貯蔵穴から多数検出された。煤が付着しているものや黒斑を有するものがみられた。杯はすべて身の深い模倣杯である。１のみ杯身模倣杯であり、その他は杯蓋模倣杯である。17は口縁部が屈曲していることから、盌とした。18は口縁部が外反し、脚部が高く、裾が大きく広がるタイプである。甕は長胴甕（19～21)、丸胴甕（23・24)、小型のもの（25）がある。甑はともに把手を持たないが、27は小型である。26は摩滅が顕著であった。22は頸部に波状文が施文されている。末野産。28は円形を呈する川原石を使用している。完形品。

93号住居跡
（第247図）
（第248図）
（第249図）

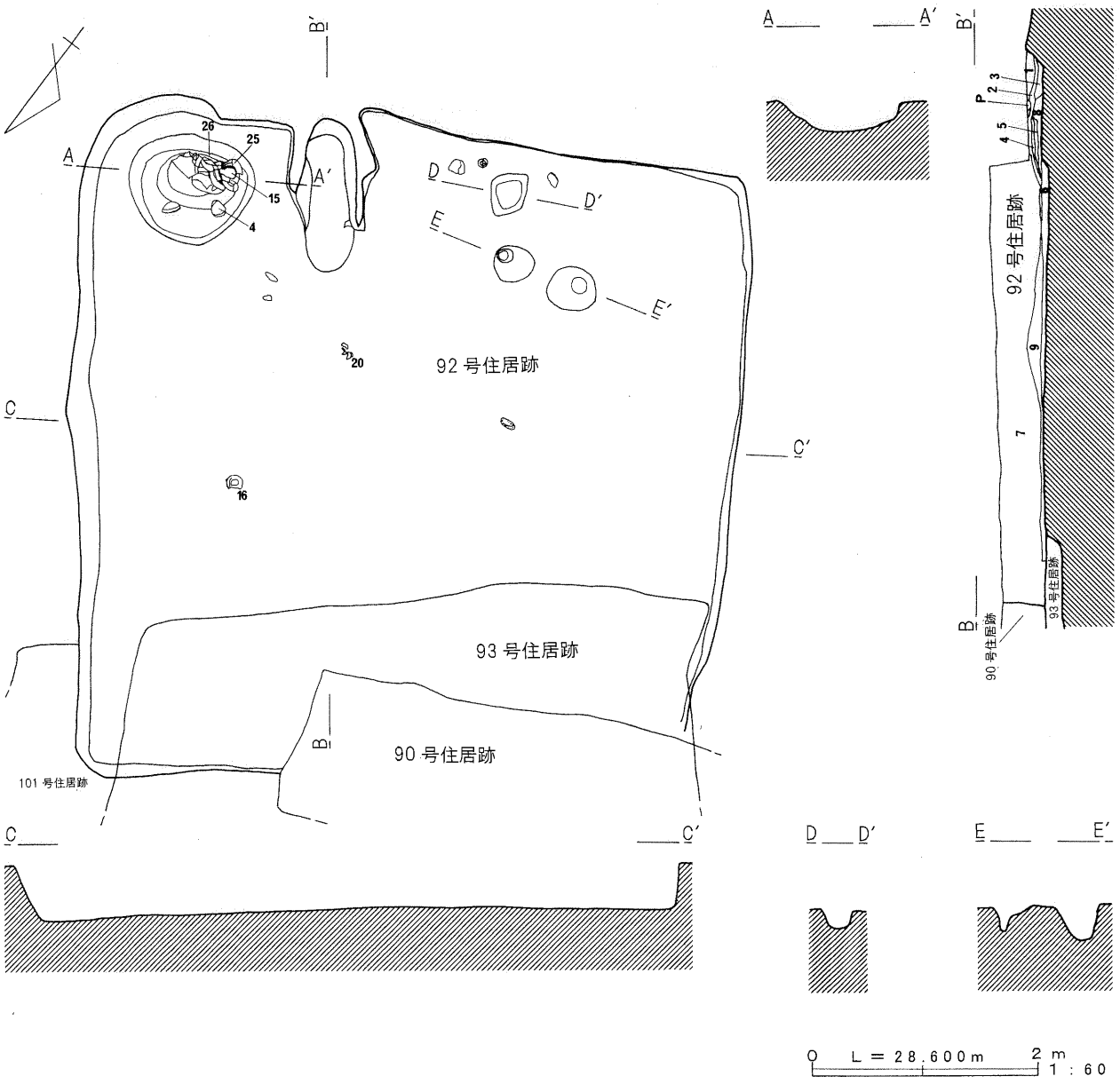
AM･AN－23･24グリッドに位置する。複数の同時期の住居跡と重複関係にある。南西壁中央付近で90・91号住居跡、南東部で92号住居跡に切られ、北西部で94・99号住居跡、北東部で101号住居跡を切っている。

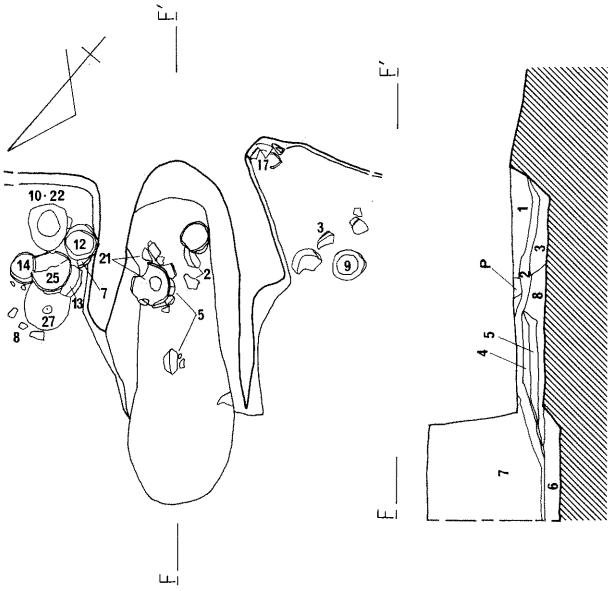
長軸7.27m、短軸5.71mの長方形を呈する。主軸方向はＮ－33°－Ｅを指す。確認面からの深さは55cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は色調の異なる粘土（６～９・19層）がほぼ水平に堆積していた。いずれの層にも焼土・炭化物を少量含んでいた。自然堆積と考えられる。壁溝は北西壁にみられ、北西隅では壁から14～32cm離れて巡っている。幅10～22cm、床面からの深さは８cm程である。本住居跡の伴うピットは４つ確認された。南東壁に近いピット以外は柱穴と考えられる。北東部に位置すべき柱穴は、90号住居跡の貯蔵穴に切られているため、残存しない。

カマドは、北東壁中央からやや北西に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部から煙道部の幅は40～42cmを測り、ほぼ一定となっている。焚口部から煙道部に向かってやや凹凸があるものの緩やかに上り、先端で直角に立ち上がる。壁外へは1.36mほど張り出している。焚口部からは、土師器、土製支脚等多数検出された。覆土は図示できなかったが、天井部崩落土は確認されず、焼土・炭化物を含む層が認められた。

カマド北東脇には、径87×63cmの円形を呈し、床面からの深さ54cmの貯蔵穴がみられた。覆土上層から土師器が多数検出された。

出土遺物(第255･256図)には、土師器杯(№１～７)、高杯(８)、甕(９～17)、甑(18～20)、石錘（21)、土製支脚（22)、土錘（23～27）等がある。３・９・10・12・13・22はカマド、８・14はカマド北西脇、11・13・17～20は貯蔵穴から検出され、その他は覆土中から検出された。黒斑を有するものや煤が付着しているもの、二次加熱を受けているもの等がみられた。杯はすべて模倣杯であるが、１のみ口径が小さい。８は口縁部が外反し、脚部高く、裾が大きく広がるタイプである。甕は長胴甕(９～14)、丸胴甕(13)、小型のもの(15～17)がある。９・13は底部に木葉痕を残す。11・12・15は摩滅が顕著であった。13は下部のみの検出である。壺の可能性もある。17は丸底である。甑は18が把手を持つが、その他は持たない。20は小型のものである。21は川原石を使用している。22は上面に木葉痕を残す。土錘は５点検出された。長さ５cm前後、最大径1.5～1.6cm、孔径0.4～0.5cmを測る。

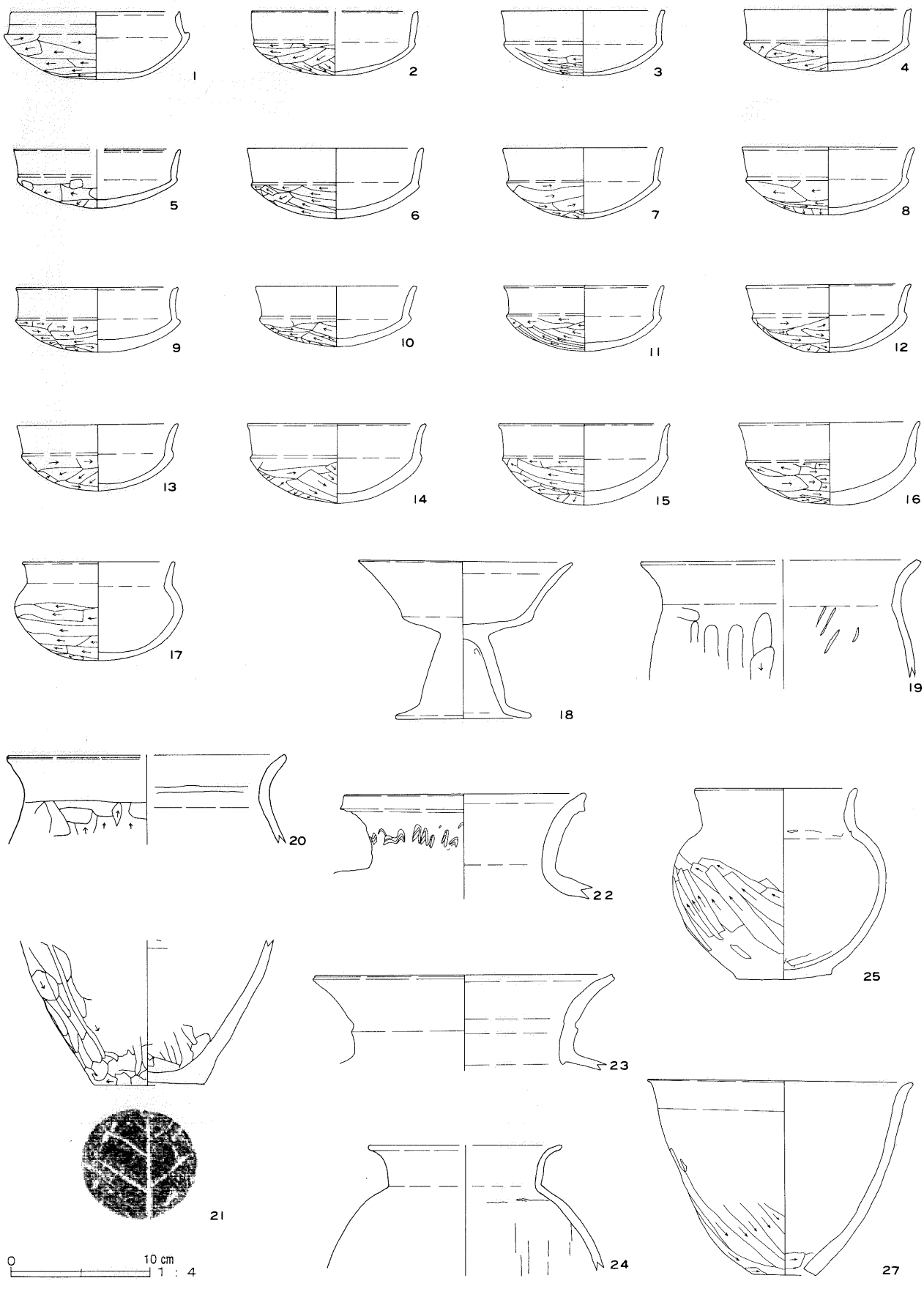




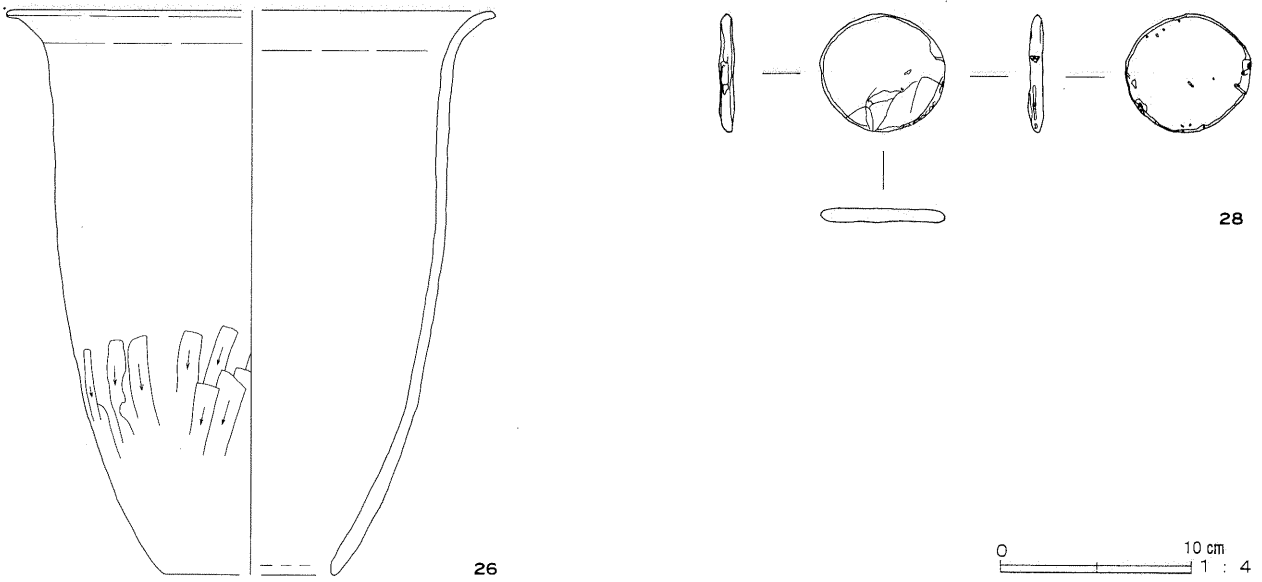
92 号住居跡土層

1　褐灰色(10YR6/1)粘土。焼土ブロック(少量)を含む。しまり良い。
2　暗赤褐色(5YR3/6)粘土。焼土・灰色(7.5YR5/1)粘土ブロックを含む。しまり良い。
3　灰色(5Y4/1)粘土。焼土ブロックを含む。しまり良い。
4　灰色(N4/1)砂。焼土粒(少量)を含む。しまりやや悪い。
5　灰白色(7.5YR8/1)粘土。灰色(N4/1)粘土粒を含む。しまりやや悪い。
6　黄褐色(2.5Y5/4)粘土。炭化物、焼土ブロックを含む。しまり良い。
7　明黄褐色(2.5Y6/6)粘土。焼土粒、炭化物粒を極少量含む。しまり良い。
8　橙色(5YR7/8)焼土。灰色(10YR6/1)粘土ブロック(少量)を含む。しまり良い。
9　黄褐色(2.5Y5/6)粘土。炭化物ブロック(多量)、焼土ブロックを含む。しまり良い。

第252図　E・F区92号住居跡・カマド



第253図　E・F区92号住居跡出土遺物(1)



第254図　E・F区92号住居跡出土遺物(2)

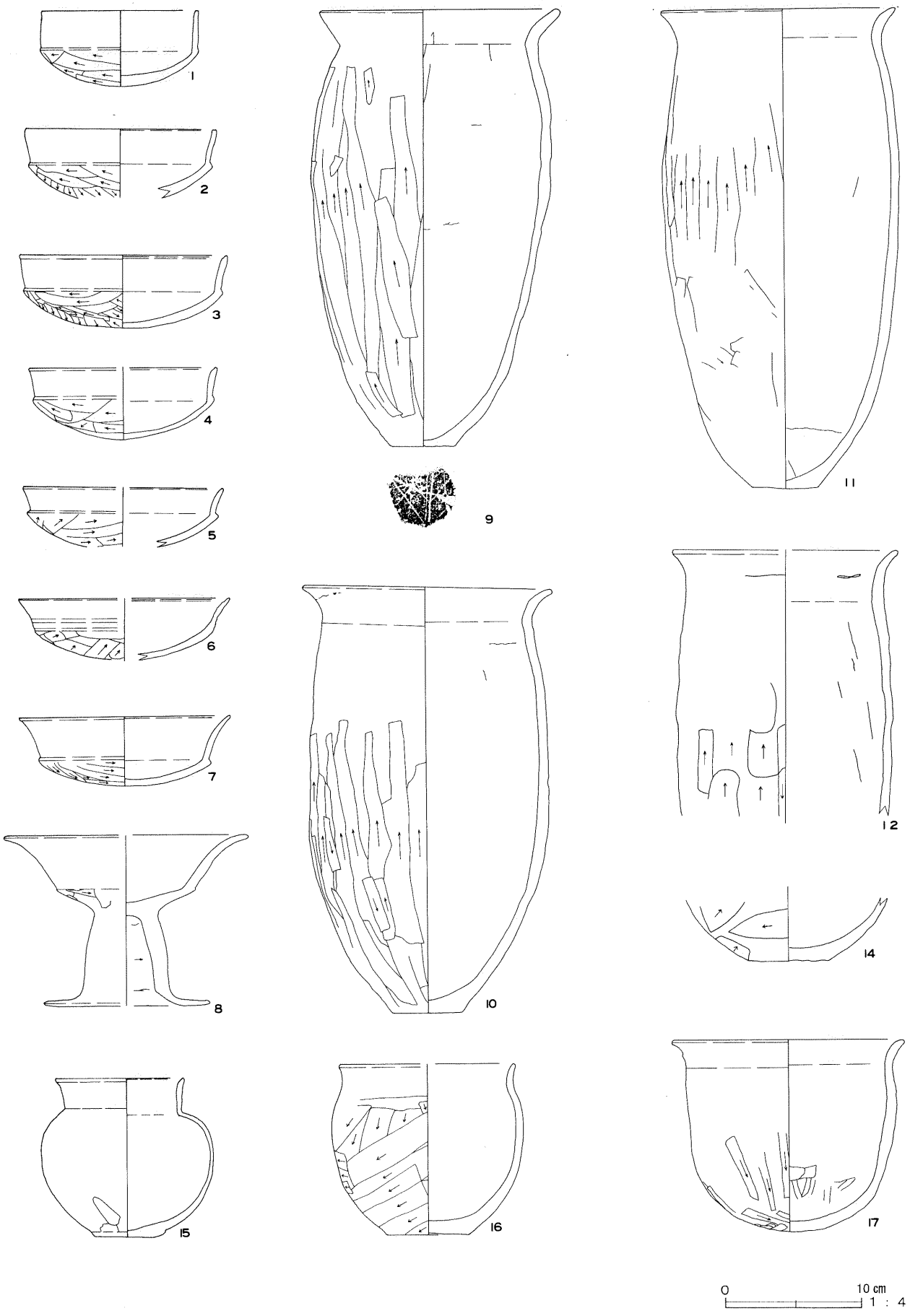
第122表　E・F区92号住居跡出土遺物観察表　(第253・254図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	12.2	4.9	-	①③④⑥	②	にぶい橙	一部欠	内外面煤付着。
2	土師器杯	(12.0)	4.6	-	③①④②	②	橙	1/2	内外面煤付着。
3	土師器杯	11.8	4.7	-	①③④②⑥	②	橙	一部欠	内外面黒斑有。
4	土師器杯	12.0	4.4	-	③①④⑥	②	橙	完形	
5	土師器杯	(12.0)	(4.3)	-	①④③②	②	橙	1/2	
6	土師器杯	12.8	5.0	-	③①④②	②	橙	口縁部1/2欠	
7	土師器杯	11.7	5.1	-	③①④②⑥	②	橙	一部欠	
8	土師器杯	12.4	4.9	-	③⑥①④	②	橙	完形	外面黒斑有、煤付着。
9	土師器杯	11.7	4.5	-	①③④⑥②	②	橙	完形	
10	土師器杯	11.6	4.3	-	③⑥①④	②	橙	完形	内外面黒斑有。
11	土師器杯	11.6	4.7	-	③①④②⑥	②	橙	一部欠	内外面煤付着。
12	土師器杯	11.8	4.8	-	①③④②⑥	②	橙	完形	
13	土師器杯	11.6	4.7	-	⑥①④③②	②	橙	一部欠	
14	土師器杯	13.0	5.7	-	①⑥③④	②	橙	完形	内外面黒斑有。
15	土師器杯	12.4	5.8	-	①⑥③④	②	橙	一部欠	
16	土師器杯	13.1	5.9	-	①③④⑥②	②	橙	口縁部1/2欠	内外面煤付着。
17	土師器盌	11.0	7.1	-	③①④	②	橙	一部欠	
18	土師器高杯	15.5	11.4	9.8	③①	③	橙	4/5	
19	土師器甕	(20.1)	-	-	②①④③⑥	②	橙	上位一部のみ	
20	土師器甕	(20.0)	-	-	⑥④①②	②	明赤褐	上位1/2	
21	土師器甕	-	-	7.9	①④②⑥	②	橙	下位のみ	
22	須恵器甕	17.8	-	-	⑥③①	②	灰	口縁部のみ	
23	土師器甕	21.8	-	-	⑥③①④	②	橙	口縁部のみ	
24	土師器甕	(13.6)	-	-	③①②④	②	橙	上位1/3	外側磨滅。
25	土師器甕	11.8	13.9	6.9	③①⑥	②	橙	5/6	内外面黒斑有。
26	土師器甑	(25.8)	30.2	(9.0)	③⑥①	②	にぶい黄橙	4/5	内外面黒斑有。磨滅。
27	土師器甑	19.2	14.4	4.5	③①⑥④	②	橙	完形	胴上部外面磨滅。
28	石錘	長さ 6.2	幅 6.5	厚さ 7.0				完形	

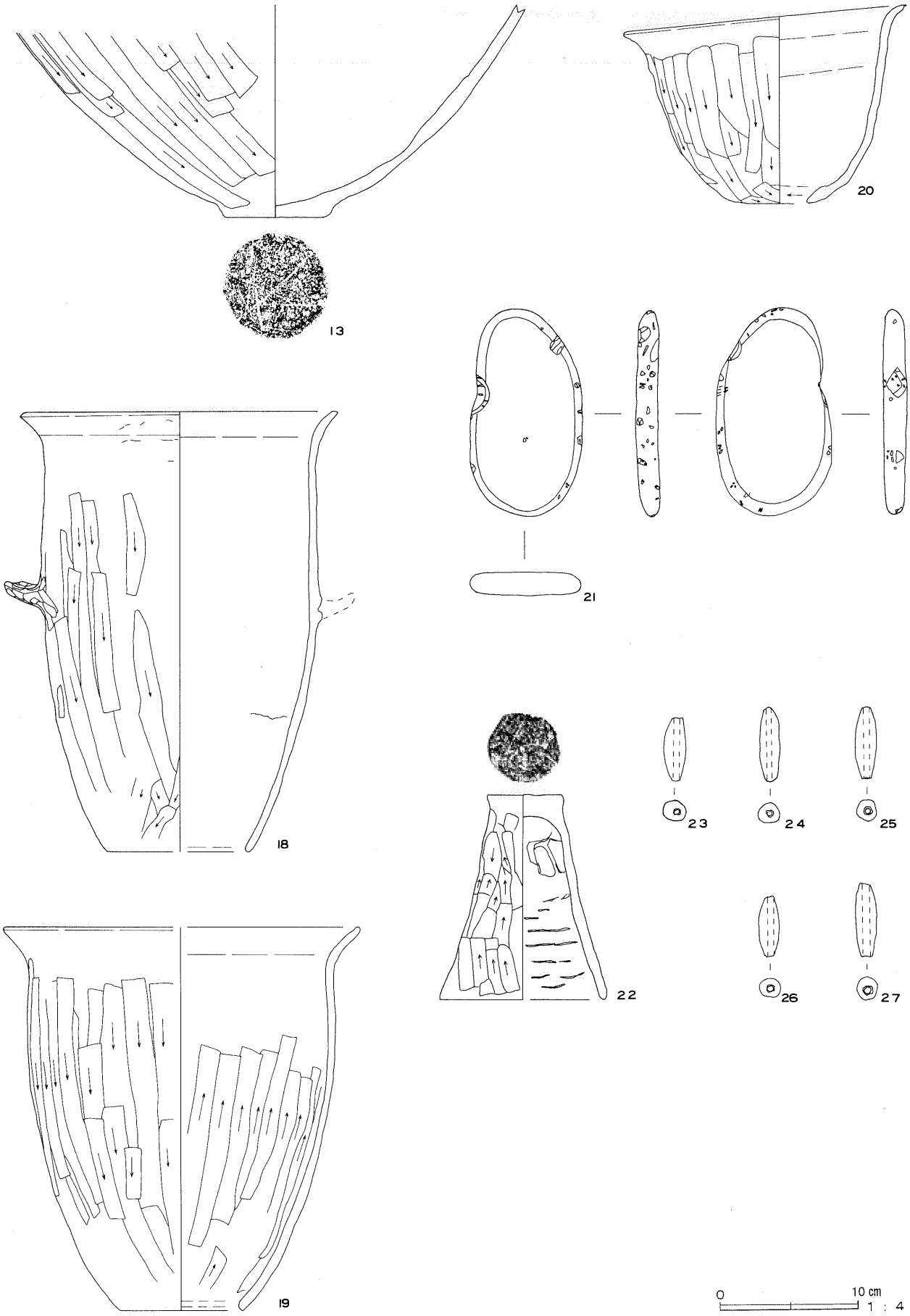
94号住居跡　(第257図)　(第258図)

AL・AM－24・25グリッドに位置する。複数の同時期の住居跡と重複関係にあるが、本住居跡が最も新しい。北西部で95・100号住居跡、南東部で93号住居跡、北東にあるカマド先端部分で102号住居跡をそれぞれ切っている。また、本住居跡の中央から南東部半分で、ほぼ同軸方向の96号住居跡の大部分を削平して構築している。

長軸3.69m、短軸3.32mのほぼ方形を呈する。主軸方向はN－50°－Eを指す。確認面か



第255図　E・F区93号住居跡出土遺物(1)



第256図　E・F区93号住居跡出土遺物(2)

第123表　E・F区93号住居跡出土遺物観察表　（第255・256図）

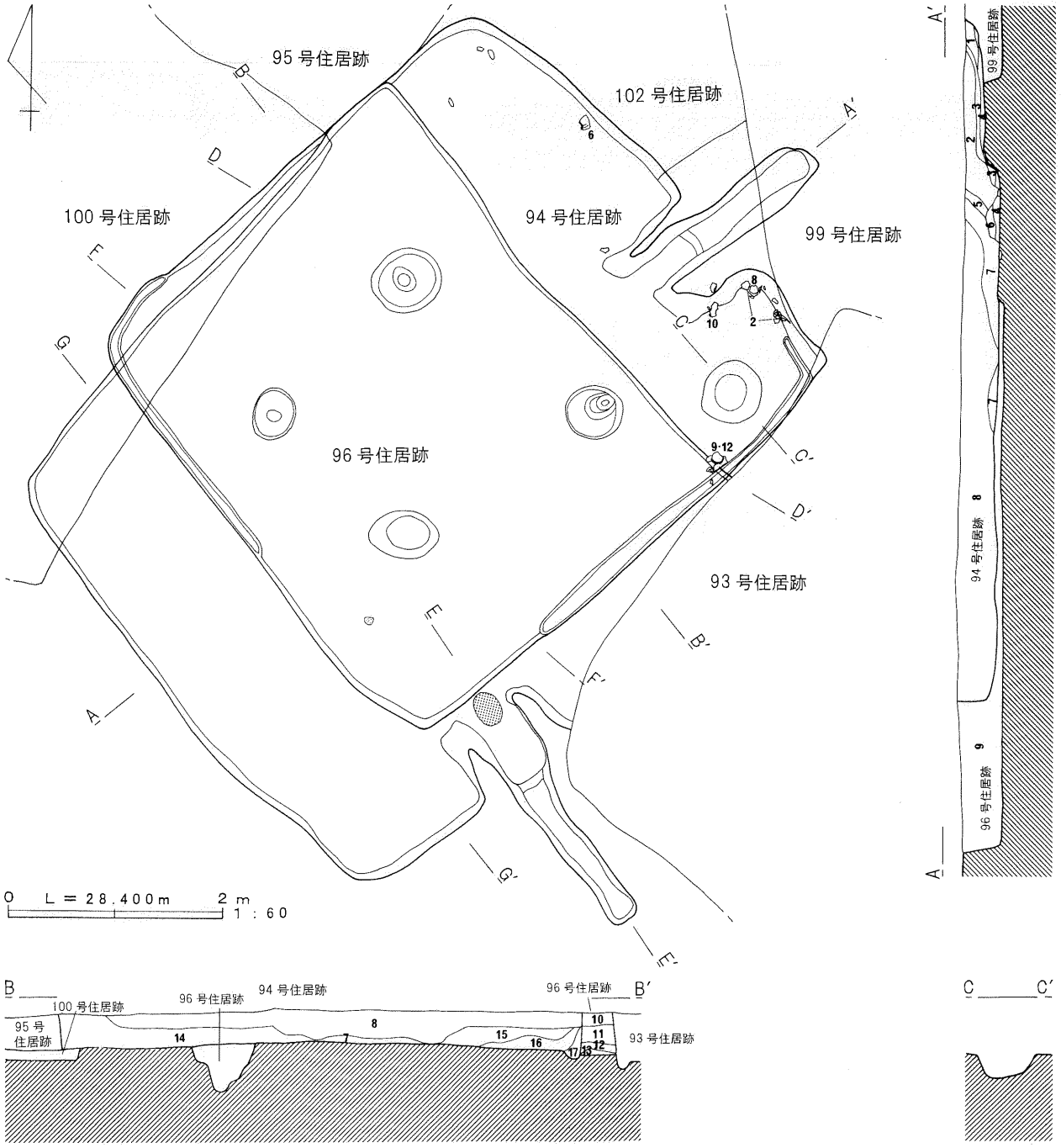
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	11.4	5.6	-	①④③	②	橙	口縁部1/3欠	外面黒斑有。
2	土師器杯	14.0	-	-	③④①②	②	橙	2/3	外面黒斑有。
3	土師器杯	15.2	5.3	-	①④③②	②	橙	完形	外面煤付着。
4	土師器杯	(13.8)	5.2	-	③①④②	②	橙	1/2	
5	土師器杯	(14.7)	-	-	⑥①③④	②	橙	1/2	
6	土師器杯	(15.4)	-	-	⑥④①	②	明赤褐	1/3	
7	土師器杯	15.6	5.0	-	①②③④	②	橙	一部欠	内外面黒斑有。
8	土師器高杯	(18.0)	12.6	(12.2)	③①	②	橙	2/3	脚部外面煤付着。
9	土師器甕	12.6	32.4	4.6	③⑥①④	②	橙	一部欠	口縁部内面黒斑有。
10	土師器甕	18.2	31.8	5.1	③⑥①④	②	橙	一部欠	外面黒斑有、煤付着。
11	土師器甕	17.0	35.6	4.8	③⑥④①	②	橙	4/5	外面黒斑有。胴部煤付着。磨滅。
12	土師器甕	(16.4)	-	-	②①④③⑥	②	橙	上半1/3	胴上部外面磨滅。
13	土師器甕	-	-	7.8	③①④⑥	②	浅黄橙	下位のみ	内面剝離、黒斑有。二次加熱。
14	土師器甕	-	-	5.8	①②③⑥	②	にぶい橙	下位のみ	
15	土師器甕	(9.4)	11.7	(5.0)	④①③⑥	②	にぶい赤褐	3/4	磨滅。
16	土師器甕	12.8	12.5	6.0	①③④②⑥	②	橙	1/3	外面黒斑有。
17	土師器甕	17.0	14.2	-	⑥③①④	②	明赤褐	5/6	底部外面黒斑有。磨滅。
18	土師器甑	23.1	32.5	(10.2)	③①⑥④	②	明赤褐	4/5	外面煤付着。
19	土師器甑	26.0	28.3	9.0	⑥③④①	②	橙	4/5	内外面黒斑有。
20	土師器甑	20.4	14.6	4 .0	③④⑥①	②	赤褐	一部欠	外面黒斑有。
21	石錘	長さ 15.2 幅 8.1 厚さ 1.7						完形	
22	土製支脚	上部径 5.3 器高 15.0 底径 (12.0)						完形	
23	土錘	長さ 4.6 最大径 1.6 孔径 0.4						完形	
24	土錘	長さ 5.4 最大径 1.6 孔径 0.4						完形	
25	土錘	長さ 5.3 最大径 1.5 孔径 0.4						完形	
26	土錘	長さ 4.3 最大径 1.5 孔径 0.5						完形	
27	土錘	長さ 5.3 最大径 1.5 孔径 0.5						完形	

らの深さは24cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系のシルトと粘土（7・8・14～16層）を主体とし、炭化物を含んでいた。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。壁溝は北東隅から南東壁のほぼ中央までと南西隅から南西壁中央付近で確認された。幅10～21cm、床面からの深さは8cm程である。柱穴は4つ確認された。

カマドは北東壁中央からやや南東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部から煙道部の幅は40～45cmを測り、ほぼ一定となっている。焚口部から燃焼部はほぼ平坦であった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は10cmを測る。煙道部はやや凹凸がみられるものの、ほぼ平坦であり、先端で直角に立ち上がる。壁外へは1.21m程張り出している。覆土は2層が天井部崩落土となり、2層下からは焼土層（3層）と灰層（4層）が検出された。焼土層と灰層は、燃焼部から煙道部まで検出されており、焼土層は非常に固くしまった状態であった。

カマド南東脇には、径60cm×56cmの円形を呈し、床面からの深さ22cmの貯蔵穴が検出された。

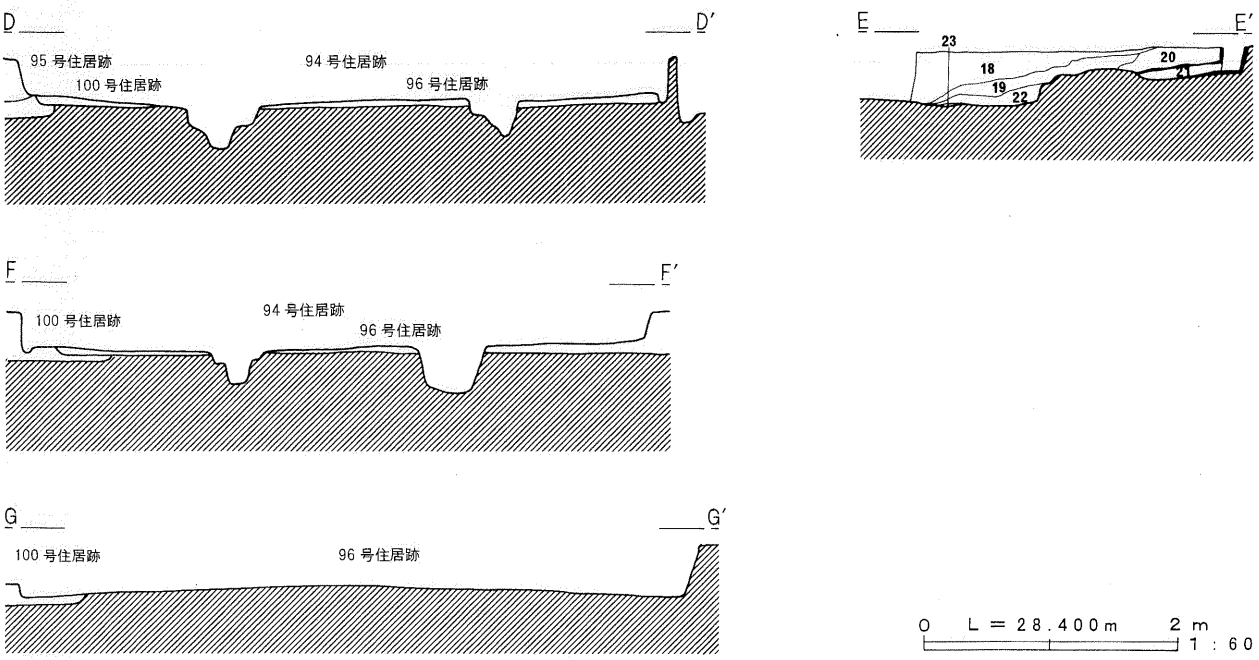
出土遺物（第259図）には、土師器杯（No.1～7）、高杯（8）、甕（9～11）、甑（12）、石製紡錘車（13）等がある。主に北東隅の貯蔵穴周辺から検出された。杯はすべて模倣杯である。1のみ杯身模倣杯であり、その他は杯蓋模倣杯である。後者のうち、2のみ口径小さく、深身である。煤が付着しているものが多い。8は低い脚部のみの検出である。甕はすべて長胴甕である。12は胴部に把手を持つタイプである。13は半分を欠く。



94・96 号住居跡土層

1　黄褐色(2.5Y5/4)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、灰褐色(7.5YR4/2)粘土ブロックを帯状に含む。しまり良い。
2　黄褐色(2.5Y5/4)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。煙道の天井土。
3　2の土が被熱により明赤褐色(5YR5/6)に変色した部分。固くしまる。
4　灰色(N5/0)灰層。粘性強い。
5　褐灰色(10YR4/1)粘土。焼土粒、黄褐色(2.5Y5/4)粘土粒を多く含む。
6　明赤褐色(5YR5/8)焼土。
7　黄褐色(10YR5/6)シルト。黄灰色粒・ブロック(多量)を含む。しまり良い。
8　黄褐色(10YR5/6)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、炭化物を帯状に含む。しまり良い。
9　黄褐色(2.5Y5/3)粘土。焼土粒、炭化物粒を少量に含む。床直上に炭化物が帯状に堆積。しまり悪い。
10　黄褐色(2.5Y5/3)粘土。
11　明黄褐色(2.5Y7/6)シルト。炭化物が帯状に堆積。しまり良い。
12　明黄褐色(2.5Y7/6)シルト。11層と同質。焼土粒、炭化物を多量に含む。しまり悪い。
13　黒色(2.5Y2/1)粘土。床直上に炭化物が帯状に堆積。
14　黄褐色(2.5Y5/3)粘土。
15　明黄褐色(2.5Y7/6)シルト。炭化物(多量)を含む。しまり良い。
16　明黄褐色(2.5Y7/6)シルト。15層と同質。炭化物を帯状に含む。
17　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。焼土粒(少量)を含む。
18　黄褐色(2.5Y5/3)シルト。灰白色(5Y7/1)粘土(多量)をブロック状に含む。最下層に炭化物が帯状に堆積。
19　灰黄色(2.5Y6/2)粘土。カマド天井崩落土。最下部が被熱により焼土ブロック化。しまり良い。粘性やや強い。
20　灰黄色(2.5Y6/2)粘土。19層と同質。しまり良い。
21　灰黄褐色(10YR6/2)粘土。焼土粒・ブロック、炭化物(少量)を含む。
22　極暗褐色(7.5YR2/3)灰層。焼土ブロック(少量)を含む。
23　赤色(7.5R4/6)粘土。火床。

第257図　E・F区94・96号住居跡(1)



第258図　E・F区94・96号住居跡(2)

95号住居跡　AL・AM－24・25グリッドに位置する。複数の同時期の住居跡と重複関係にある。北東部で97号住居跡、本住居跡の中央から南西部半分で100号住居跡を切っている。また、南東部では96号住居跡を切った94号住居跡に切られている。

（第260図）
（第261図）

長軸は現長5.4m、短軸は4.25mを測り、長方形を呈する。主軸方向はN－47°－Eを指す。確認面からの深さは40cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は明黄褐色の粘土2層（9・10層）からなり、自然堆積と考えられる。本住居跡に付随する柱穴は4つ確認された。床面からの深さは18～83cmとバラツキがみられた。壁溝はみられない。

カマドは確認されなかったが、北東壁中央に炭化物がまとまってみられたことから、この位置にあったものと推測される。炭化物範囲の南東には、径1.1m×0.88mの長方形を呈し、床面からの深さ34cmの貯蔵穴が確認された。

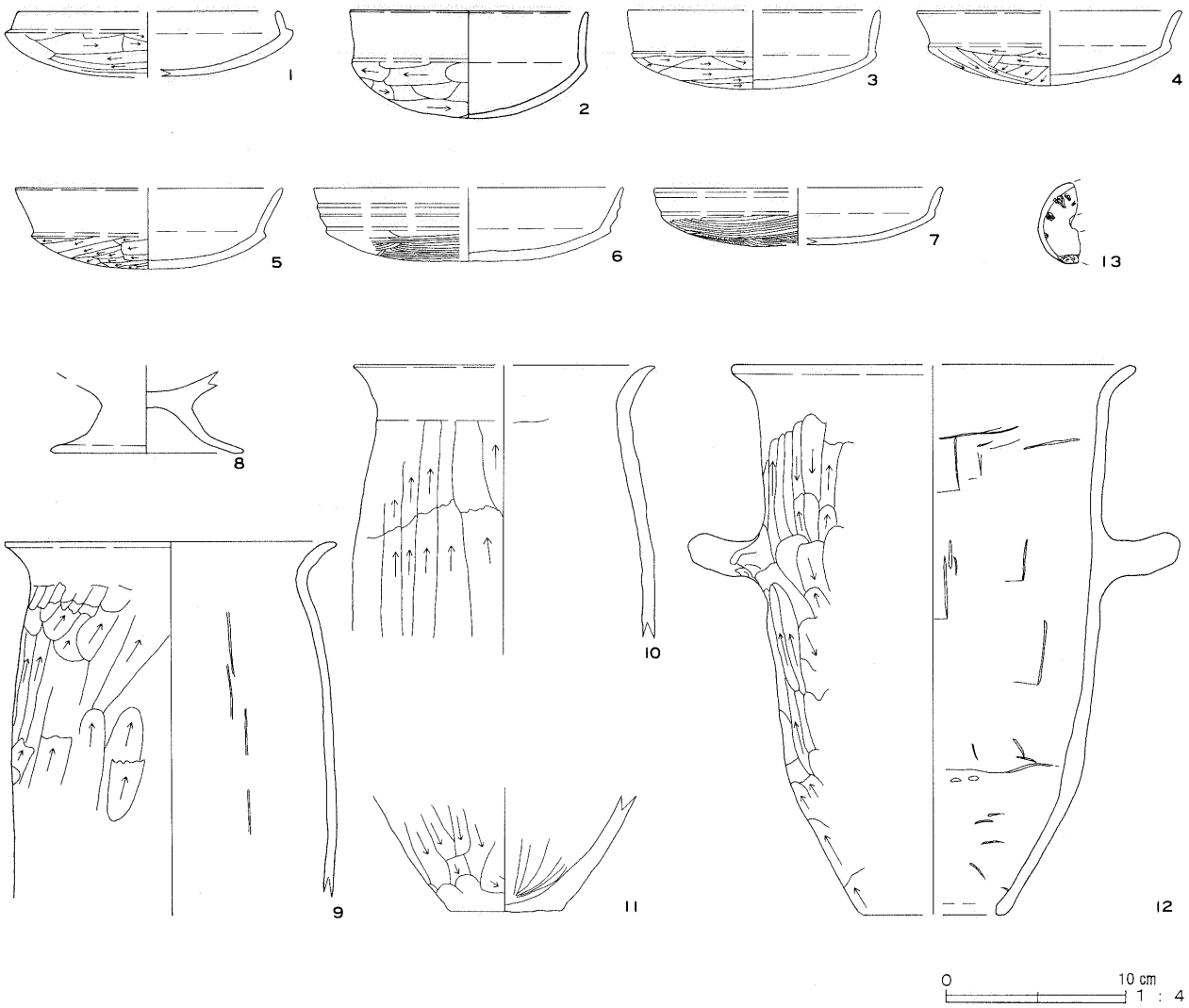
出土遺物（第262図）には、土師器杯（№1）、土錘（2・3）等がある。1が床面ほぼ中央、2・3は覆土中から検出された。1は口径大きく、浅身の模倣杯である。土錘は2点検出された。ともに完形品である。

96号住居跡　AL・AM－24・25グリッドに位置する。複数の同時期の住居跡と重複関係にある。本住居跡中央から北東部の大半を94号住居跡、南東部では93号住居跡にそれぞれ切られている。また、北西部では100号住居跡を切って構築している。

（第257図）
（第258図）

長軸5.46m程、短軸5.38mのほぼ方形を呈する。主軸方向はS－38°－Eを指す。

確認面からの深さは42cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系の粘土ないしはシルト（10～12層）からなる。全層中に焼土粒、炭化物を含み、床面直上には炭化物



第259図　E・F区94号住居跡出土遺物

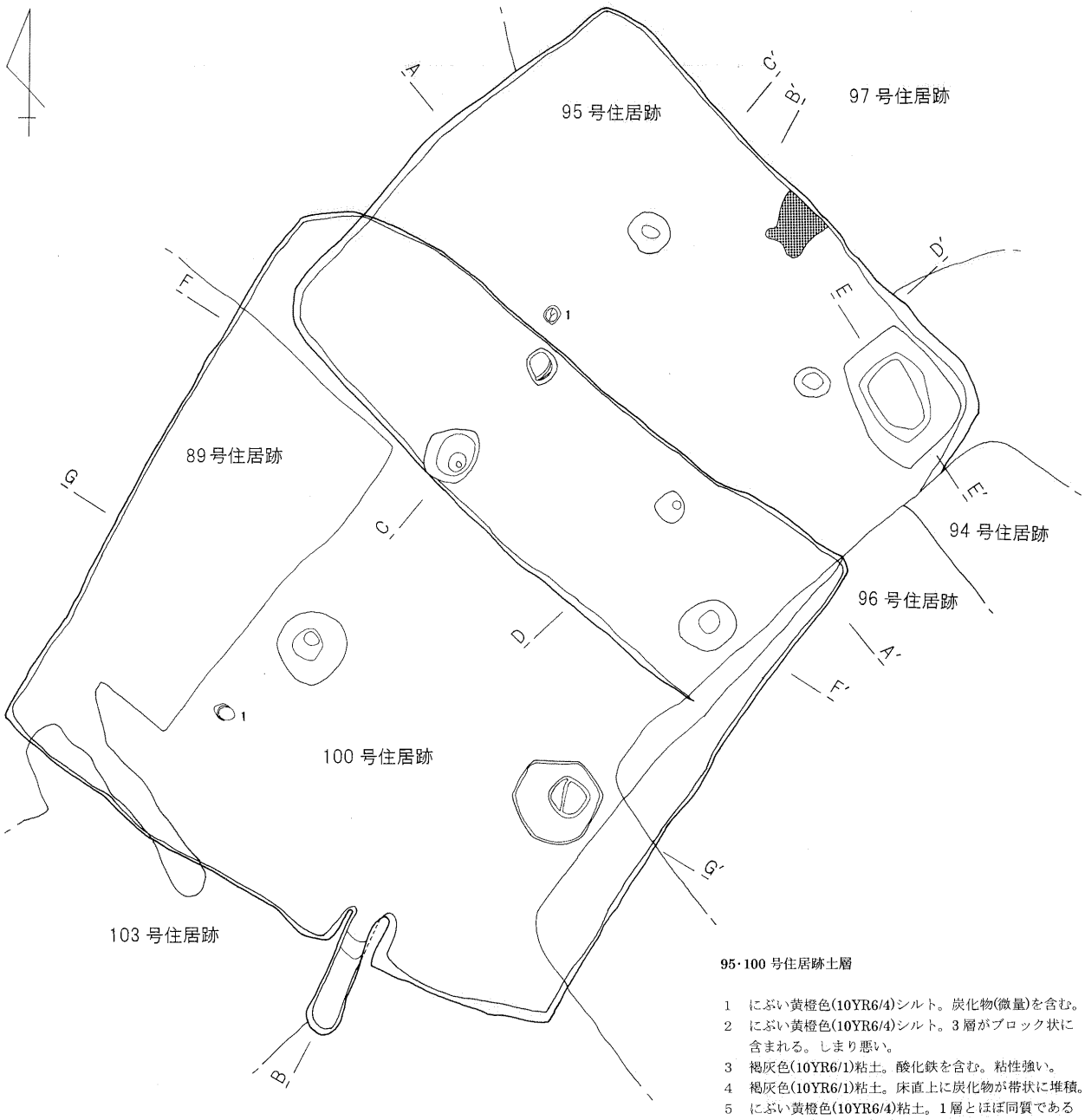
第124表　E・F区94号住居跡出土遺物観察表　（第259図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	(14.4)	-	-	①④③	②	橙	1/3	内外面煤付着。
2	土師器杯	13.2	6.1	-	②①④⑥③	②	明赤褐	7/10	
3	土師器杯	(14.2)	4.4	-	①④③②	②	橙	口縁部2/3欠	
4	土師器杯	(14.8)	4.1	-	③①②⑥	②	にぶい橙	1/3	
5	土師器杯	(15.0)	4.5	-	①④②③	②	暗赤褐	1/3	内外面煤付着。
6	土師器杯	(17.4)	4.1	-	①③④	②	明赤褐	1/6	内外面煤付着。
7	土師器杯	(16.2)	-	-	④①③	②	明赤褐	1/4	内外面煤付着。
8	土師器高杯	-	-	10.5	③②①④	②	明赤褐	脚部のみ	
9	土師器甕	18.6	-	-	③①②⑥	②	明赤褐	2/3	
10	土師器甕	(16.6)	-	-	⑥①	③	明赤褐	上半1/2	
11	土師器甕	-	-	6.2	⑥②①③	②	明赤褐	下位のみ	
12	土師器甑	(22.0)	31.0	(7.8)	③①②⑥	③	にぶい橙	1/3	
13	石製紡錘車	上部径 -	器高 -	底径 -				半分欠	

が帯状に堆積しているのが確認された（13層）。自然堆積と考えられる。

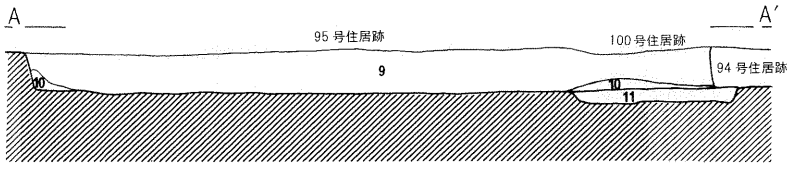
壁溝、柱穴、貯蔵穴等はみられない。

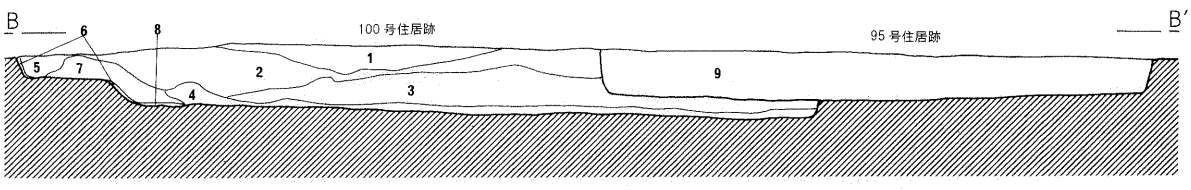
カマドは、南東壁中央からやや南西寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は58cm、燃焼部は51cmを測り、煙道部は



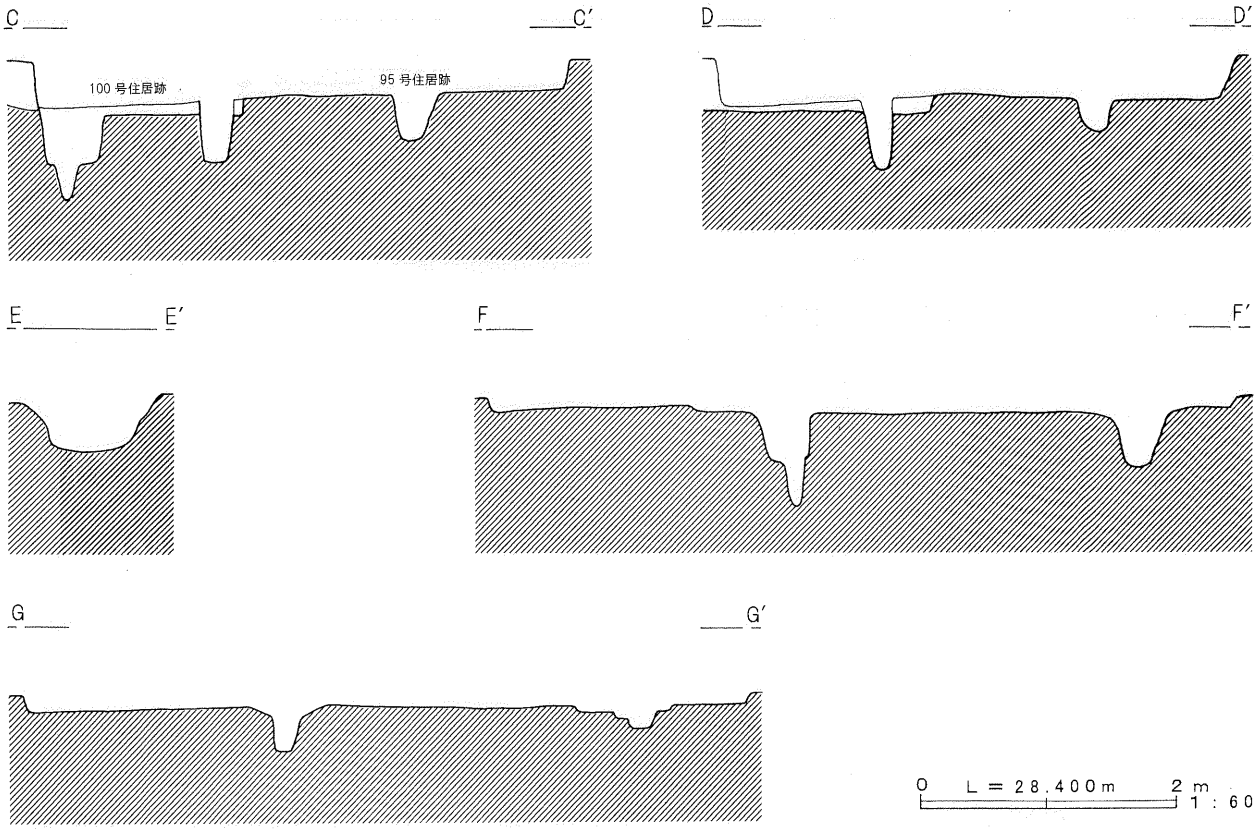
95・100 号住居跡土層

1 にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト。炭化物(微量)を含む。
2 にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト。3 層がブロック状に含まれる。しまり悪い。
3 褐灰色(10YR6/1)粘土。酸化鉄を含む。粘性強い。
4 褐灰色(10YR6/1)粘土。床直上に炭化物が帯状に堆積。
5 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土。1 層とほぼ同質であるが粘性が強い。炭化物(多量)を含む。
6 赤色(7.5R4/8)粘土。カマド燃焼部奥壁が被熱により変色したもの。
7 明赤灰色(7.5R7/1)粘土。カマド天井崩落土。粘性非常に強い。
8 褐灰色(7.5YR4/1)灰層。
9 明黄褐色(10YR6/6)粘土。粘性の強い灰白色(7.5Y7/1)粘土をブロック状に含む。しまり悪い。
10 明黄褐色(10YR6/6)粘土。9 層と同質。炭化物(多量)を含む。
11 黄褐色(10YR5/6)粘土。炭化物、焼土粒を少量含む。粘性強い。





第260図　E・F 区95・100号住居跡(1)



第261図　E・F区95・100号住居跡(2)

25～32cmとほぼ一定である。焚口部から燃焼部は床面から掘り込んでおらず、ほぼ平坦であった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は16cmを測る。焚口には被熱して赤色化した地山が顕著であった。煙道部は凹凸がみられ、先端で急速に立ち上がる。壁外へは1.73m程張り出している。覆土には天井部崩落土（19・20層）があり、20層下には被熱層が薄く確認された。天井部崩落土の下には、燃焼部では灰層（22層）、火床面（23層）がみられ、煙道部では焼土・炭化物を含む層（21層）がみられた。

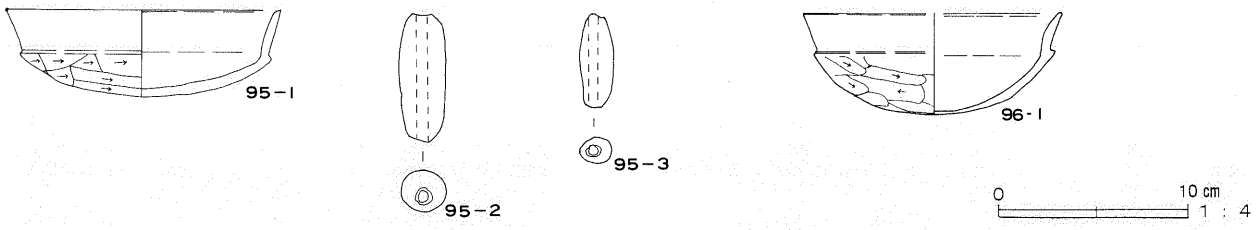
出土遺物（第262図）は、土師器杯（№1）のみである。模倣杯。覆土中から検出された。

97号住居跡（第263図）

AL－24･25グリッドに位置する。南西隅付近を95号住居跡に切られており、南東部では102号住居跡を切っている。

長軸5.26m、短軸5.25mの方形を呈する。主軸方向はN－70°－Eを指す。確認面からの深さは32cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は浅黄色の粘土三層（2～4層）からなる。上層（2層）と下層（4層）の床面直上には、炭化物が帯状に検出され、覆土の主体となる中層（3層）には、炭化物の他に焼土粒・ブロックも少量ながら認められた。自然堆積と考えられる。壁溝は北東隅から北西隅にかけてみられた。幅8～22m、床面からの深さは、10cm前後を測る。

柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。



第262図　E・F区95・96号住居跡出土遺物

第125表　E・F区95号住居跡出土遺物観察表　(第262図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	14.5	4.5	-	③①④	②	橙	完形	
2	土錘	長さ 6.7	最大径 2.4	孔径 0.6				完形	
3	土錘	長さ 5.0	最大径 1.7	孔径 0.5				完形	

第126表　E・F区96号住居跡出土遺物観察表　(第262図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(13.1)	10.4	-	③②①④	②	橙	1/2	

カマドは、北東壁中央からやや南東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。燃焼部の幅は44cm、煙道部幅は35～44cmで進み、先端で20cmにすぼまる。焚口部から煙道部へは平坦であり、先端でやや段をもって立ち上がる。壁外へは1.61mほど張り出している。覆土は7層が天井部であり、7層直下には天井部被熱層が帯状にみられた。そして、その下に焼土ブロック、炭化物を多量含む8層と灰層（9層）が検出され、最下層には被熱して橙色化した地山が確認された。

出土遺物（第265図）には、土師器杯（No.1～3）、甕（4～7）等がある。1・3～6が南壁沿いの床面から検出された。その他は覆土中からの検出である。杯はすべて模倣杯である。1のみ杯身模倣杯であり、2・3は杯蓋模倣杯である。2は外面に煤が付着していた。甕は長胴甕（4～6）と小型のもの（7）がある。5は摩滅が顕著であった。7は外面に黒斑を有し、煤の付着がみられた。

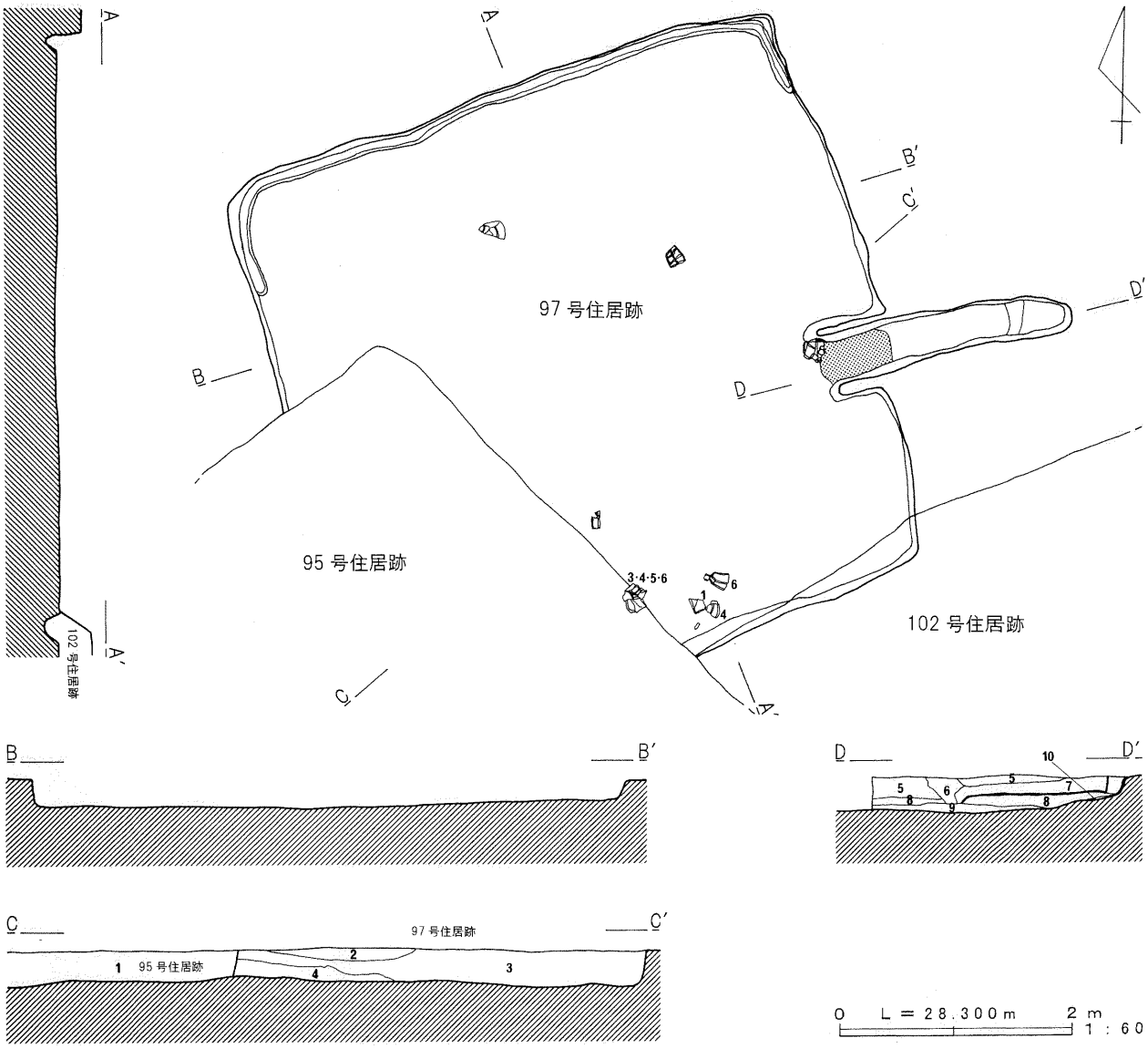
98号住居跡
(第264図)

AL・AM－23・24グリッドに位置する。本住居跡の南西には99号住居跡があるが、軸方向が同じ上に、床面のレベルも同じであることなどから、一つの住居跡とみなした。しかし、南東壁が直線でなく、微妙な変換点がみられることなどから99号住居跡を拡張させて造られた可能性が高い。住居跡中央から北東部の大半は、85号住居跡に切られている。

長軸・短軸ともに不明で、主軸方向はS－31°－Eを指す。確認面からの深さは46cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は図示しなかったが、99号住居跡と同様、褐色粘土を主体とし、自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴、貯蔵穴等はみられない。

カマドは南東壁に設けられている。袖部は残存しないため、焚口部及び燃焼部の幅は不明である。煙道部は30cm程の幅で、ほぼ一定となっている。煙道部と燃焼部には段が設けられており、高低差は29cmを測る。煙道部はほぼ平坦であり、先端で緩やかに立ち上がる。壁外へは1.26mほど張り出している。覆土は焼土ないし炭化物を含む層（7～9層）が確



97 号住居跡土層

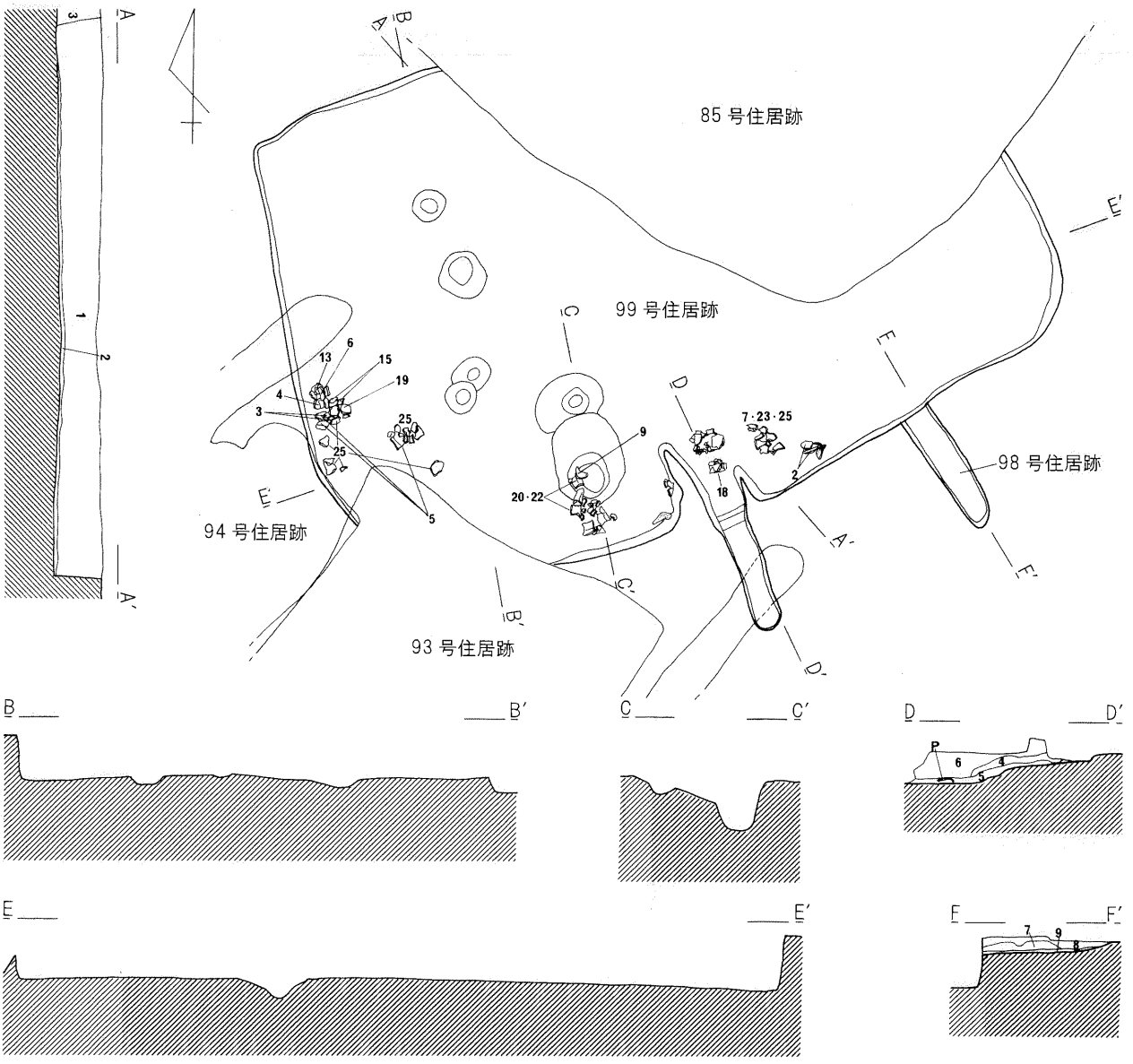
1　灰褐色(7.5YR5/2)シルト。焼土粒(多量)を含む。95 号住居跡覆土。
2　浅黄色(2.5Y7/4)粘土。最下部に炭化物が帯状に堆積。
3　浅黄色(2.5Y7/4)粘土。焼土ブロック・粒、炭化物を少量に含む。
4　浅黄色(2.5Y7/4)粘土。床直上に炭化物が帯状に堆積。
5　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト。焼土粒(少量)を含む。
6　明褐灰色(5YR7/1)粘土。
7　にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土。カマド天井部。5 層に近似。しまり良い。
8　黄褐色(2.5Y5/4)粘土。焼土ブロック、炭化物を多量に含む。
9　褐灰色(10YR4/1)灰層。焼土粒(少量)を含む。
10　橙色(2.5YR6/8)粘土。煙道部床面が被熱したもの。

第263図　E・F区97号住居跡

認された。

出土遺物（第265図）は、土師器杯（No.98－1）のみである。模倣杯。カマド煙道部から検出された。

99号住居跡（第264図）　AL・AM－23・24グリッドに位置する。複数の同時期の住居跡と重複関係にある。拡張の可能性のある98号住居跡以外では、北東部で85号住居跡、南西部では93・94号住居跡に切られている。

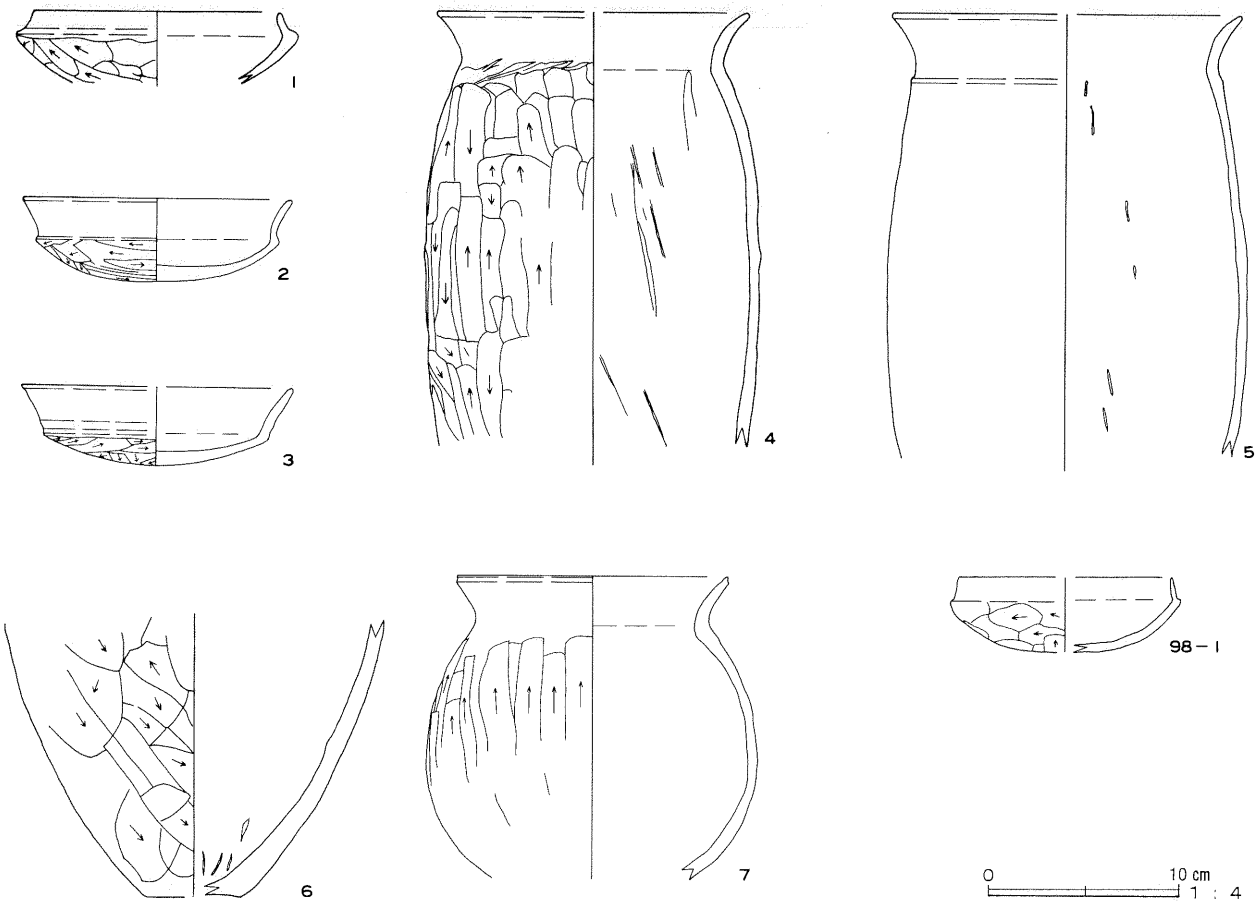


1 褐色(10YR4/6)粘土。しまり良い。
2 黒色(10YR2/1)炭化物層。焼土ブロックを含む。しまり良い。
3 にぶい黄褐色(10YR2/1)粘土。炭化物ブロックを含む。しまり良い。
4 明黄褐色(2.5Y7/6)粘土。焼土粒を含む。しまり良い。
5 黄褐色(10YR5/4)粘土。焼土ブロック(多量)を含む。しまりやや悪い。
6 にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。焼土粒、炭化物粒を少量含む。しまり良い。
7 黄色(2.5Y8/6)粘土。下部に焼土ブロック(多量)を含む。しまり良い。
8 明黄褐色(2.5Y7/6)粘土。焼土粒、炭化物粒を少量含む。しまり良い。
9 褐灰色(10YR4/1)粘土。焼土ブロックを含む。しまり良い。

第264図　E・F区98・99号住居跡

長軸4.6m、短軸は不明であるが、長方形を呈する。主軸方向はS－21°－Eを指す。確認面からの深さは42cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は褐色粘土（1層）と炭化物層（2層）からなるが、1層が厚く堆積していた。2層は床面全面に薄く広がっていた。自然堆積と考えられる。柱穴は3つ確認された。床面からの深さはいずれも5cm前後と浅い。壁溝はみられない。

カマドは南東壁の北東寄りに設けられていた。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部から燃焼部の幅は35cm、煙道部は25～28cmとほぼ一定となっ



第265図　E・F区97・98号住居跡出土遺物

第127表　E・F区97号住居跡出土遺物観察表　(第265図)

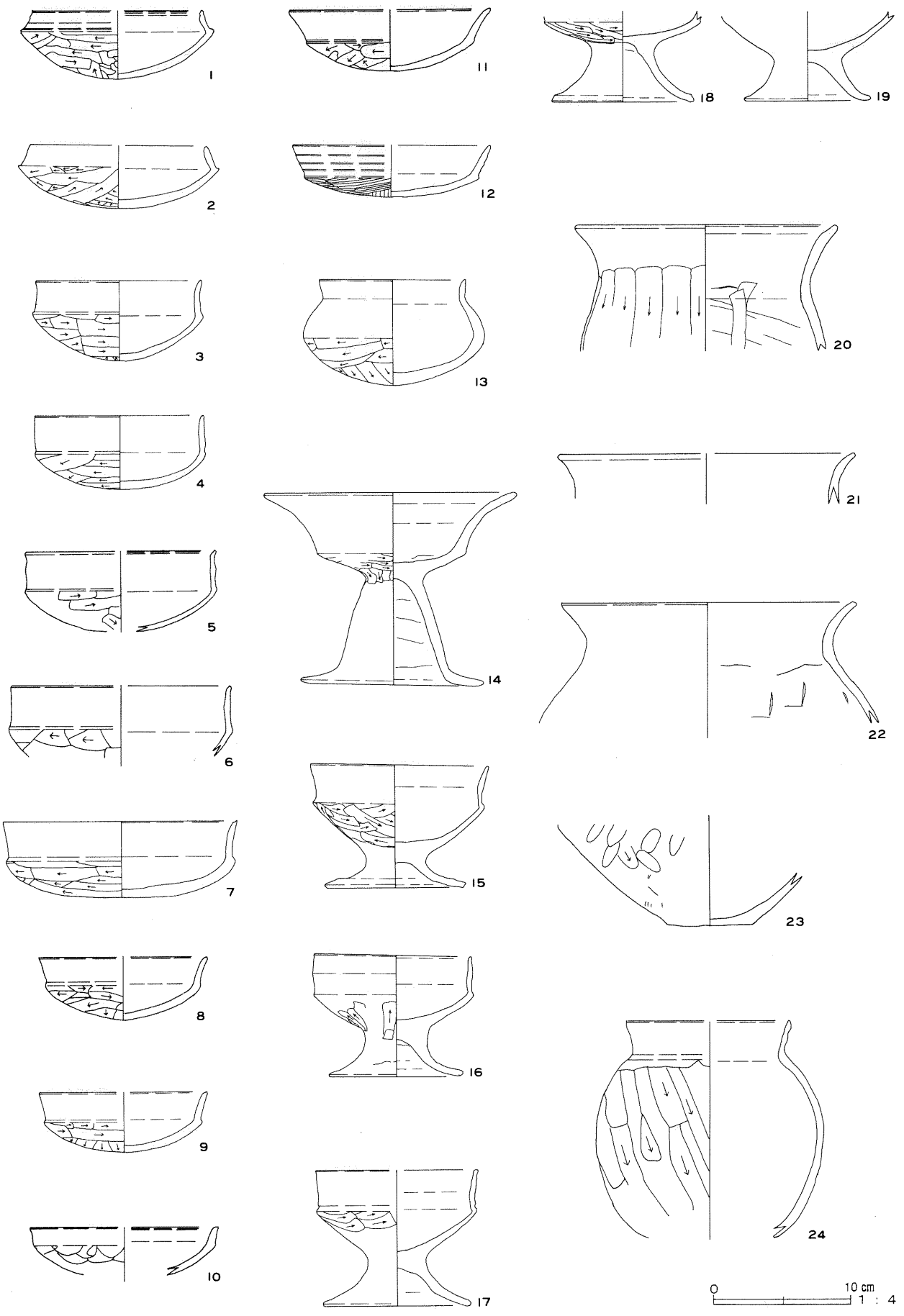
No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　考
1	土師器杯	(12.9)	-	-	④①③⑥	②	橙	1/5	
2	土師器杯	14.2	4.3	-	①③④	②	橙	1/2	外面煤付着。
3	土師器杯	(14.4)	4.1	-	①③②④	②	橙	1/2	
4	土師器甕	(15.9)	-	-	⑥③②①④	②	淡橙	1/3	
5	土師器甕	(18.2)	-	-	⑥①④③②	②	橙	上半1/2	磨滅。
6	土師器甕	-	-	(4.8)	⑥②③①④	②	橙	下位1/2	
7	土師器甕	14.4	-	-	③⑥①④	②	浅黄橙	上位のみ	外面黒斑有、煤付着。

第128表　E・F区98号住居跡出土遺物観察表　(第265図)

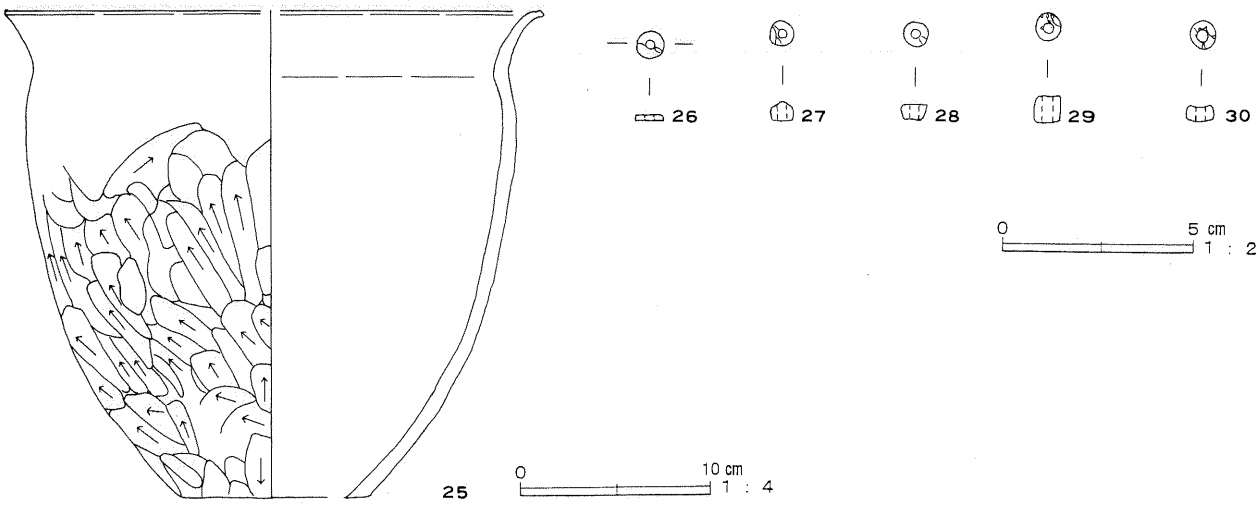
No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　考
1	土師器杯	(11.0)	(4.0)	-	①②④③⑥	②	赤	1/4	

ている。焚口部から燃焼部は床面とほぼ同レベルで平坦であり、土師器高杯（No.18）が検出された。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は8cmを測る。煙道部は先端に向かって緩やかに立ち上がる。壁外へは1.23m程張り出している。覆土に天井部崩落土等は認められず、焼土ないし炭化物を含む層（4～6層）がみられ、最下層（5層）に焼土がブロック状に多量含まれていた。

カマド南西脇には貯蔵穴があり、径80cm×61cmで楕円形を呈し、床面からの深さ44cmを測る。土師器杯（No.9）、甕（20・22）が検出された。さらに、その北西に長径64cm、深さ15cmの掘り込みがあったが、性格は不明である。



第266図　E・F区99号住居跡出土遺物(1)



第267図　E・F区99号住居跡出土遺物(2)

第129表　E・F区99号住居跡出土遺物観察表　(第266・267図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(12.4)	5.1	-	①②③④	②	暗赤褐	1/4	
2	土師器杯	(13.0)	4.6	-	①④③	②	にぶい橙	1/2	外面煤付着。
3	土師器杯	12.2	5.9	-	③④①⑥	②	明赤褐	完形	
4	土師器杯	12.5	5.4	-	①④③②	②	明赤褐	5/6	
5	土師器杯	(14.8)	-	-	①④③②	②	橙	1/4	
6	土師器杯	(16.0)	-	-	④②①⑥③	②	橙	2/5	
7	土師器杯	17.3	5.6	-	③④①②	②	橙	2/3	外面煤付着。
8	土師器杯	(12.4)	4.6	-	②③①④⑥	②	明赤褐	1/2	
9	土師器杯	(12.4)	4.4	-	③④①⑥	②	橙	1/2	
10	土師器杯	(13.8)	-	-	①④③②	②	にぶい黄褐	1/4	
11	土師器杯	(14.8)	4.5	-		②	橙	1/3	
12	土師器杯	(14.6)	3.8	-	①④③②⑥	②	橙	1/3	外面煤付着。
13	土師器盌	10.8	7.8	-	③④①②	②	橙	完形	
14	土師器高杯	18.6	14.3	13.4	③①④	②	橙	5/6	
15	土師器高杯	13.2	9.1	10.4	③①④	②	橙	2/3	
16	土師器高杯	11.7	9.0	9.9	③①④	②	橙	4/5	
17	土師器高杯	(12.0)	10.0	10.9	③①④	②	橙	2/3	
18	土師器高杯	-	-	10.5	③①④	②	橙	1/2	
19	土師器高杯	-	-	(9.2)	③①④	②	橙	1/2	
20	土師器甕	19.3	-	-	④③①	②	にぶい橙	上位のみ	外面煤付着。
21	土師器甕	(21.4)	-	-	①②③⑥④	②	にぶい橙	口縁部1/2	
22	土師器甕	21.5	-	-	①②⑥④	②	にぶい橙	上位のみ	外面磨滅。
23	土師器甕	-	-	6.3	①②⑥③	②	にぶい黄橙	下位のみ	
24	土師器甕	(12.0)	-	-	⑥①④②③	②	橙	上半1/2	
25	土師器甑	(28.7)	25.8	(10.0)	②③①④⑥	②	橙	2/3	
26	石製臼玉	径 0.7	孔径 0.3	厚さ 0.2				完形	滑石製。
27	石製臼玉	径 0.7	孔径 0.5	厚さ 0.3				完形	滑石製。
28	石製臼玉	径 0.7	孔径 0.3	厚さ 0.5				完形	滑石製。
29	石製臼玉	径 0.7	孔径 0.3	厚さ 0.7				完形	滑石製。
30	石製臼玉	径 0.7	孔径 0.3	厚さ 0.5				完形	滑石製。

出土遺物(第266・267図)には、土師器杯(No.1～12)、盌(13)、高杯(14～19)、甕(20～24)、甑(25)、滑石製臼玉(26～30)等がある。主にカマド及びその周辺、貯蔵穴、南東壁沿いの床面から検出された。杯はすべて模倣杯である。1・2は杯身模倣杯であり、その他は杯蓋模倣杯である。後者のうち、12のみ口縁部に複数の稜を持ち、浅身のものである。2・7・12は煤の付着がみられた。13は胴上部が無調整で、胴下部にヘラ削りが施されている。高杯は14以外は模倣杯に低い脚部がつくタイプである。甕は長胴甕(20・21)、丸胴甕(22・

23)、小型のもの（24）がある。20は外面に煤が付着していた。25は胴部に把手を持たないタイプである。滑石製臼玉は5点検出された。すべて完形品である。

100号住居跡（第260図）（第261図）　AL・AM－24・25グリッドに位置する。北東部を95号住居跡、北西部を89号住居跡、南東部を94・96号住居跡にそれぞれ切られており、南西部では103号住居跡を削平して建てられている。

長軸5.98m、短軸5.92mの方形を呈する。主軸方向はＳ－34°－Ｗを指す。確認面からの深さは53cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄橙色シルト及び褐灰色粘土四層（１～４層）を主体とし、４層の床面直上には炭化物が帯状に堆積していた。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。本住居跡に付随する柱穴は４つ確認された。床面からの深さは18～83cmとバラツキがみられた。

壁溝、貯蔵穴はみられない。

カマドは、南東壁中央からやや南東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部幅は22cm、燃焼部幅は25cm、煙道部幅は26cm前後で進み、先端で34cmに広がる。焚口部から燃焼部はほぼ平坦であった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は18cmを測る。煙道部は平坦であり、先端で直角に立ち上がる。壁外へは0.79m程張り出している。覆土は７層が天井部崩落土で、その下に灰層（８層）がみられた。燃焼部と煙道部の奥壁部分は、地山が被熱して赤色化していた（６層）。

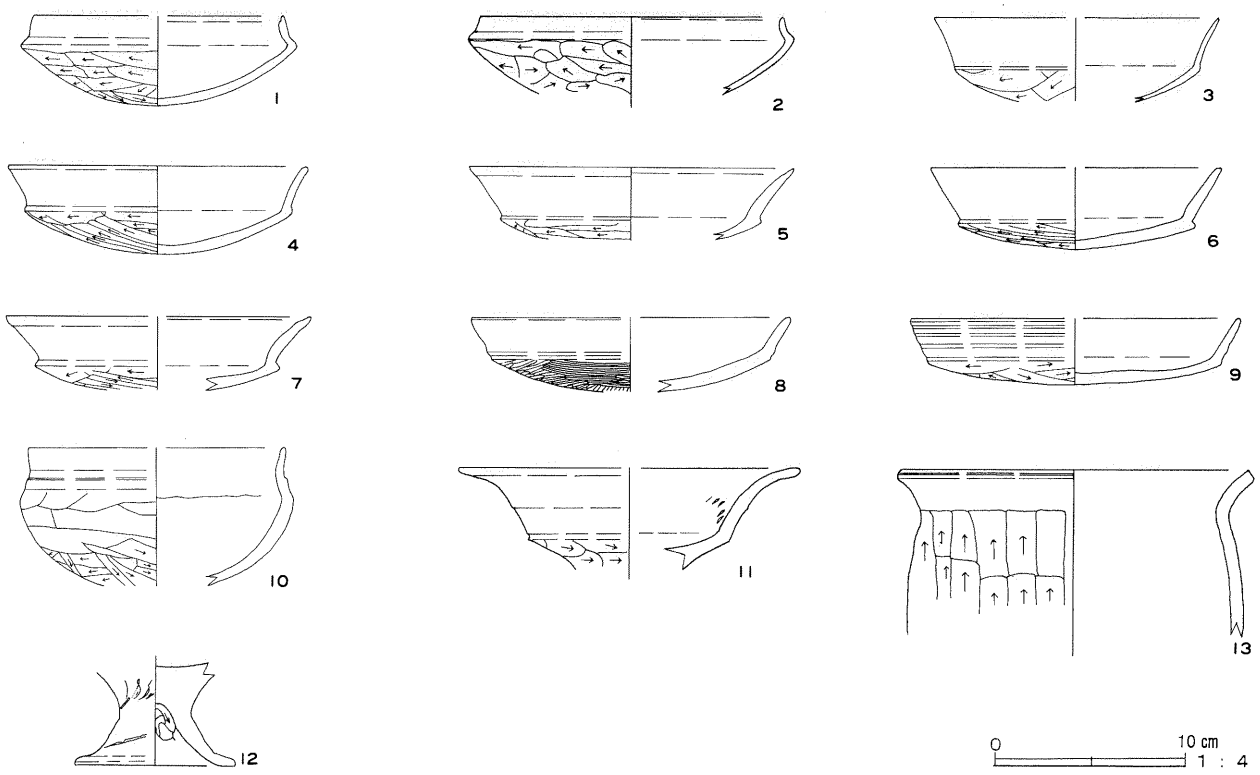
出土遺物（第268図）には、土師器杯（No.１～９）、椀（10）、高杯（11・12）、甕（13）等があり、杯類が多く検出された。１が床面南西部から検出された以外は、覆土中からの検出である。杯はすべて口径大きく、浅身の模倣杯である。１・２が杯身模倣杯であり、その他は杯蓋模倣杯である。10は口縁部が直立する。11は杯部のみ、12は低い脚部のみの検出である。13は長胴甕である。上部のみの検出である。

101号住居跡（第247図）（第248図）　AM－23・24グリッドに位置する。複数の同時期の住居跡と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。南東部で92号住居跡、南西部で90・93号住居跡、北西部で99号住居跡に切られている。カマド付近のみの検出である。

規模・平面形は不明である。主軸方向はＮ－58°－Ｅを指す。確認面からの深さは43cmを測り、床面は検出された範囲内では概ね平坦であった。カマドの両脇にピットが確認できたが、性格は不明である。

壁溝、貯蔵穴はみられない。

カマドは北東壁中央から南東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は40cm、燃焼部幅は48cmを測り、煙道部先端では急速に狭まって23cmとなる。焚口部から燃焼部は床面とほぼ同レベルで平坦であった。燃焼部からは土師器甕（No.６・７）が検出された。燃焼部と煙道部の境の段差は６cmを測る。煙道部はほぼ平坦であり、幅狭の先端でさらに４cm程の段をもって緩やかに立ち上が



第268図　E・F区100号住居跡出土遺物

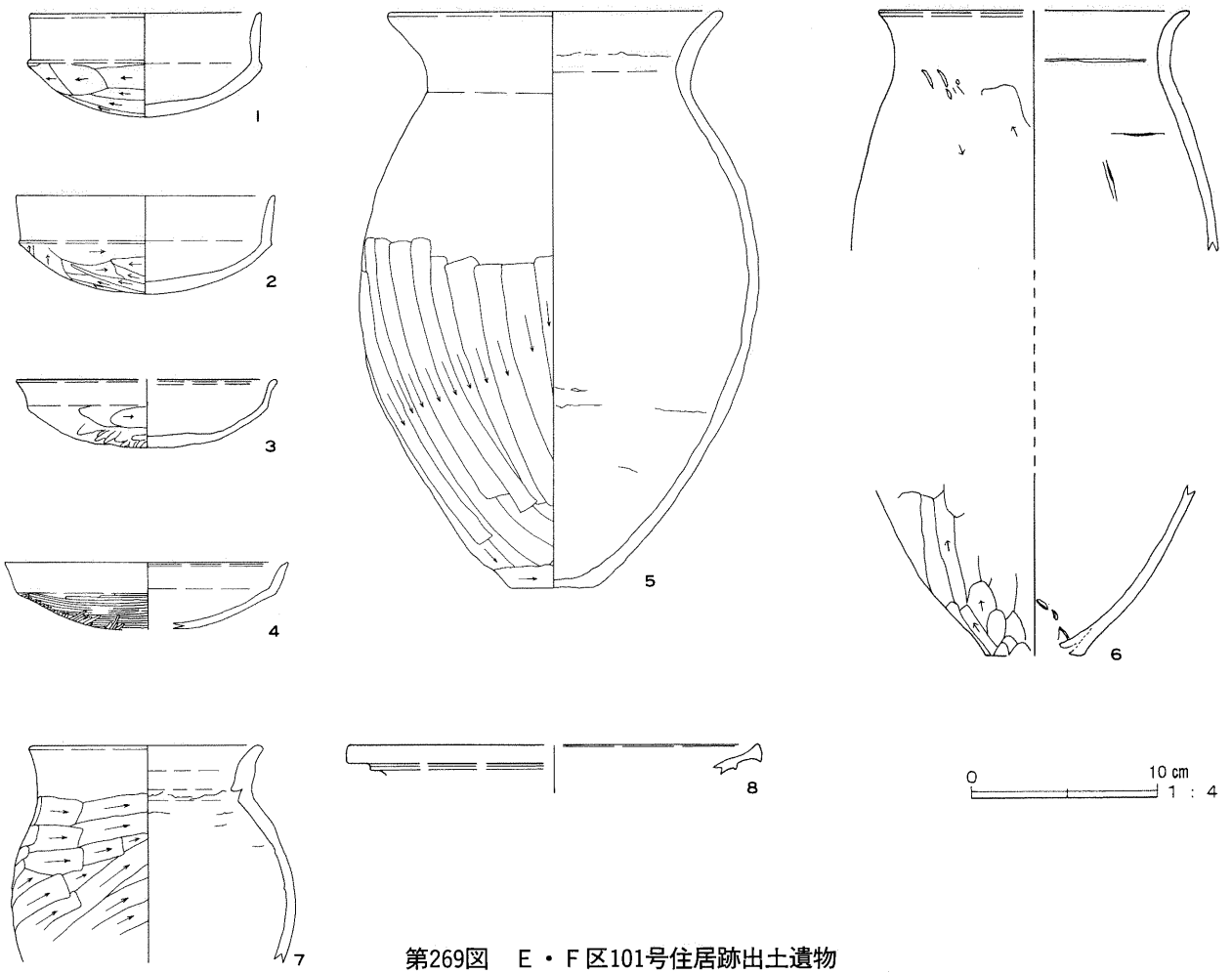
第130表　E・F区100号住居跡出土遺物観察表　（第268図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　考
1	土師器杯	(13.2)	4.7	-	①③④	②	にぶい褐	1/4	内外面煤付着。
2	土師器杯	(16.0)	-	-	①④2③⑥	②	にぶい赤褐	1/3	
3	土師器杯	(15.2)	-	-	③④①⑥	②	橙	1/4	二次加熱。
4	土師器杯	15.9	4.6	-	①③④	②	にぶい赤褐	3/4	内外面煤付着。
5	土師器杯	17.2	-	-	③①②④⑥	②	橙	1/2	内外面煤付着。
6	土師器杯	(15.4)	4.3	-	①④②③	②	橙	2/5	外面黒斑有。
7	土師器杯	(16.2)	-	-	④③①②	②	にぶい橙	1/4	内外面煤付着。
8	土師器杯	(17.0)	-	-	①③④	②	にぶい赤褐	1/4	内外面煤付着。
9	土師器杯	(17.4)	3.4	-	③①②④⑥	②	明赤褐	1/2	内外面煤付着。
10	土師器椀	(13.6)	-	-	③①④②	②	明赤褐	1/3	内外面煤付着。
11	土師器高杯	(17.8)	-	-	①③②④⑥	②	明赤褐	杯部1/4	
12	土師器高杯	-	-	8.5	①②④③	②	明赤褐	脚部2/3	
13	土師器甕	18.4	-	-	⑥①②③④	②	橙	上部のみ	

る。壁外へは1.59m程張り出している。覆土は図示できなかったが、天井部崩落土等は確認できず、焼土・炭化物を含む層（15～18層）が確認された。

出土遺物（第269図）には、土師器杯（No.1～4）、甕（5～7）、須恵器壺（8）等がある。1・2・4・6～8がカマド及びその周辺から、7が北西部から検出された以外は、覆土中からの検出である。煤が付着しているものや黒斑を有するものが多い。杯はすべて模倣杯である。1・2は口径小さく、深身であるが、3・4は口径大きく、浅身である。甕は長胴甕（5・6）と小型のもの（7）がある。8は口縁部のみの検出である。末野産。

102号住居跡（第270図）　AL・AM－24グリッドに位置する。複数の同時期の住居跡と重複関係にあり、検出できたのは北西壁と南東壁の一部のみである。北東部から南東部にかけては85・99号住居跡、



第269図　E・F区101号住居跡出土遺物

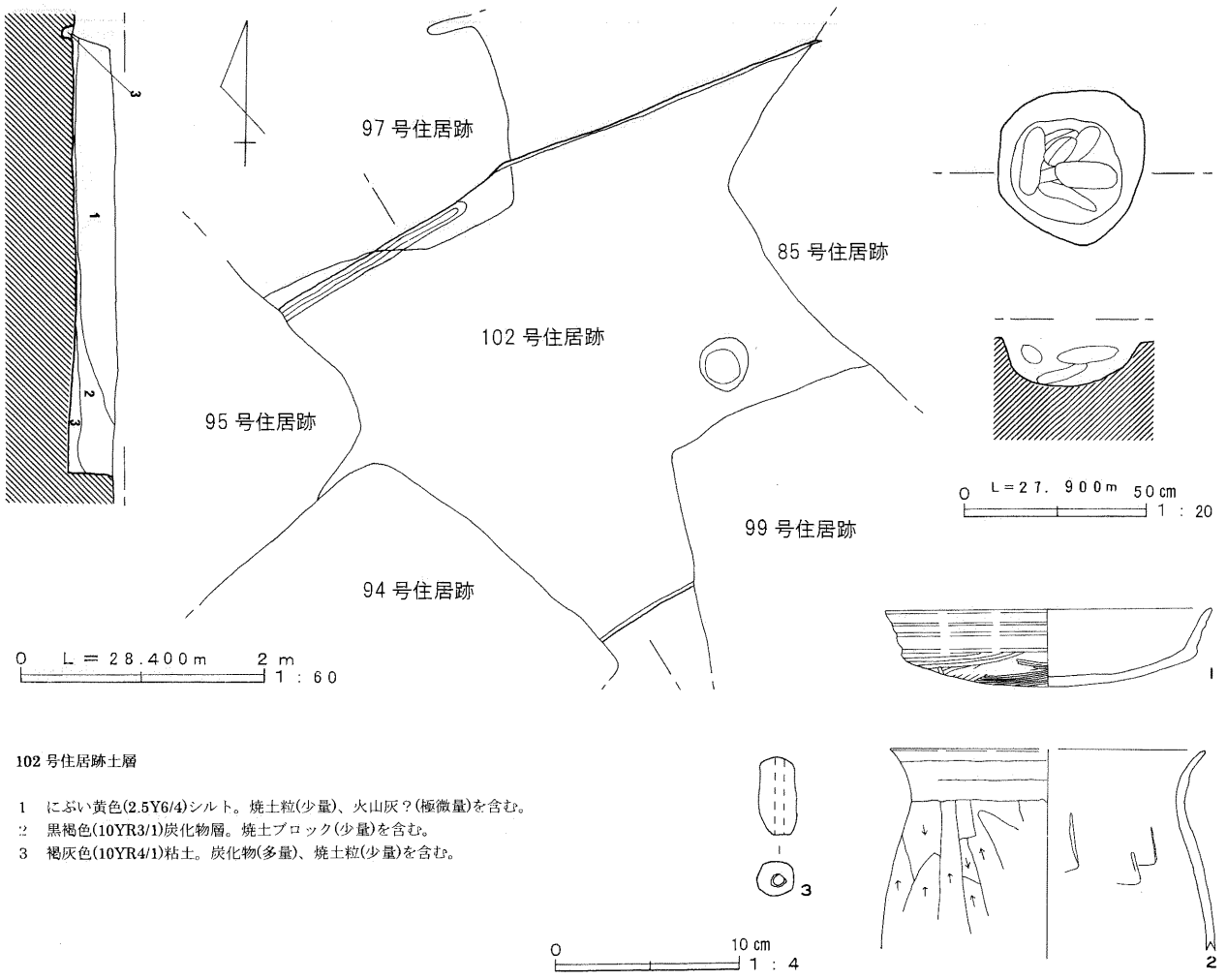
第131表　E・F区101号住居跡出土遺物観察表　（第269図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	12.5	5.6	-	③①④	②	橙	一部欠	外面黒斑有。
2	土師器杯	14.0	5.3	-	③①④②⑥	②	橙	口縁部1/3欠	外面煤付着。
3	土師器杯	(13.8)	3.7	-	①②	②	明赤褐	1/3	
4	土師器杯	15.3	-	-	①④③⑥	②	明赤褐	2/3	内外面煤付着。
5	土師器甕	18.1	31.4	4.3	③⑥①	②	浅黄橙	9/10	内外面煤付着、黒斑有。
6	土師器甕	(16.7)	(35.0)	(5.4)	①④②③⑥	②	赤褐	2/10	胴上部外面磨滅。
7	土師器甕	12.7	-	-	③①④⑥	②	橙	1/2	外面黒斑有。
8	須恵器壺	(22.2)	-	-	①④	①	青灰	口縁部一部	

北西部から南西部にかけては94・95・97号住居跡にそれぞれ切られている。

長軸は不明であるが、短軸は3.81mを測る。平面形は長方形を呈すると思われる。南北軸方向はN－67°－Eを指す。確認面からの深さは36cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は色調の異なる三層（1～3層）からなる。上層（1層）には火山灰らしき混入物がみられ、中層（2層）は炭化物層であり、下層（3層）は多量の炭化物、焼土粒などを含んでいた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と考えられる。壁溝は北西部において検出された。幅10～13cm、床面からの深さは8cmである。住居跡の中央付近に径40cm前後、深さ12cmを測る落ち込みが確認されたが、覆土中に編み物石が検出されたことなどから、貯蔵穴と思われる。カマドは検出されなかった。

出土遺物（第270図）には土師器杯（No.1）、甕（2）、土錘（3）等がある。すべて覆土



第270図　E・F区102号住居跡・出土遺物

第132表　E・F区102号住居跡出土遺物観察表　(第270図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	17.8	4.1	-	①③④②	②	明赤褐	1/2	内外面煤付着。
2	土師器甕	(17.0)	-	-	③⑥①④②	②	橙	上位1/2	
3	土錘	長さ 4.2	最大径 2.0	孔径 0.5				完形	

中から検出された。1は口径大きく、浅身の模倣杯である。内外面に煤の付着がみられた。2は長胴甕。上部のみの検出である。土錘は1点のみ検出された。完形品。

103号住居跡　AM－25グリッドに位置する。北西部は89号住居跡、北東部は100号住居跡にそれぞれ切られており、住居跡の大半を欠く。

(第271図)

長軸・短軸ともに不明であるが、周辺の住居跡に比べると小型のものである。

主軸方向はS－45°－Wを指す。確認面からの深さは22cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、黄褐色系の粘土からなる自然堆積層である。

壁溝、柱穴、貯蔵穴等はみられない。

カマドは南西壁の中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しであるが、南東部の袖一部を確認した。燃焼部の幅は推定で29cm、煙道部の先端幅は34cmを測り、先端に向かっ

て広がっている。壁外へは0.43mと非常に短い。焚口部から煙道部へは緩やかに立ち上がる。焚口部から土師器甕（No.6）が検出された。覆土は図示できなかったが、天井部崩落土等はみられず、焼土・炭化物を含む層が確認された。

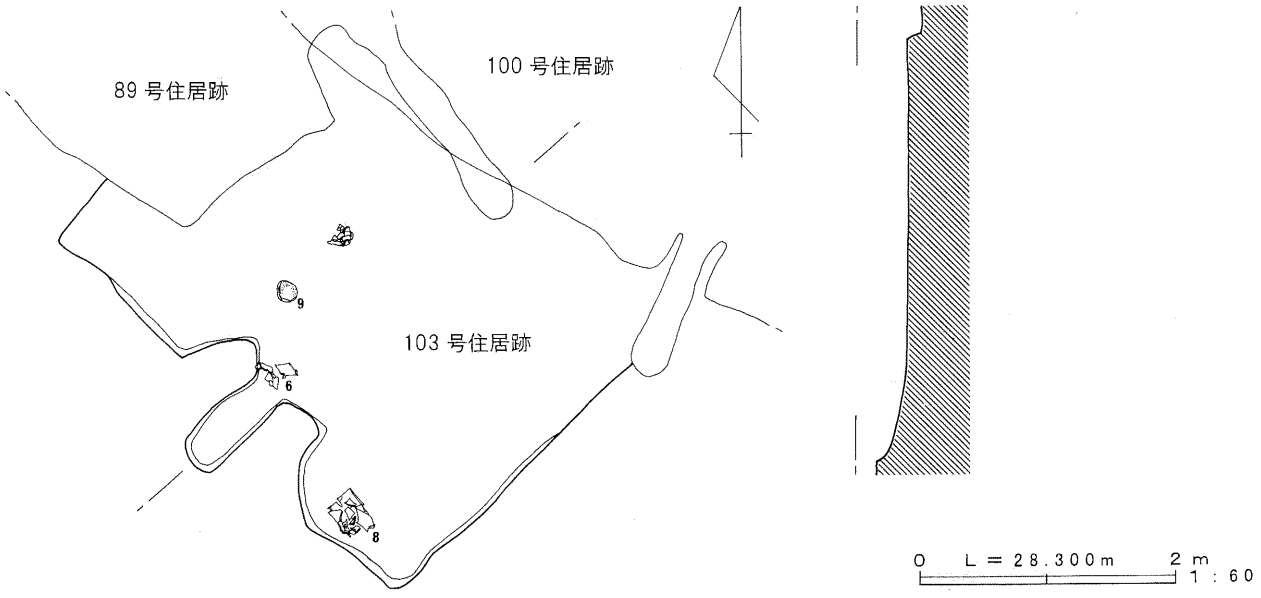
出土遺物（第272図）には、土師器杯（No.1～5）、甕（6・7）、甑（8）、磨石（9）等がある。6がカマド、8が南東隅、9がカマド前から検出された。その他は覆土中からの検出である。杯はすべて模倣杯である。1・2は杯身模倣杯、3～5は杯蓋模倣杯である。1は内外面に煤が付着していた。甕はともに長胴甕である。6は外面に黒斑を有する。8は胴部に把手を持つタイプである。摩滅が顕著であった。外面に黒斑を有する。9は川原石を使用している。不整円形を呈する。完形品。

104号住居跡　AM－23グリッドに位置する。北東隅で105号住居跡を切っている。

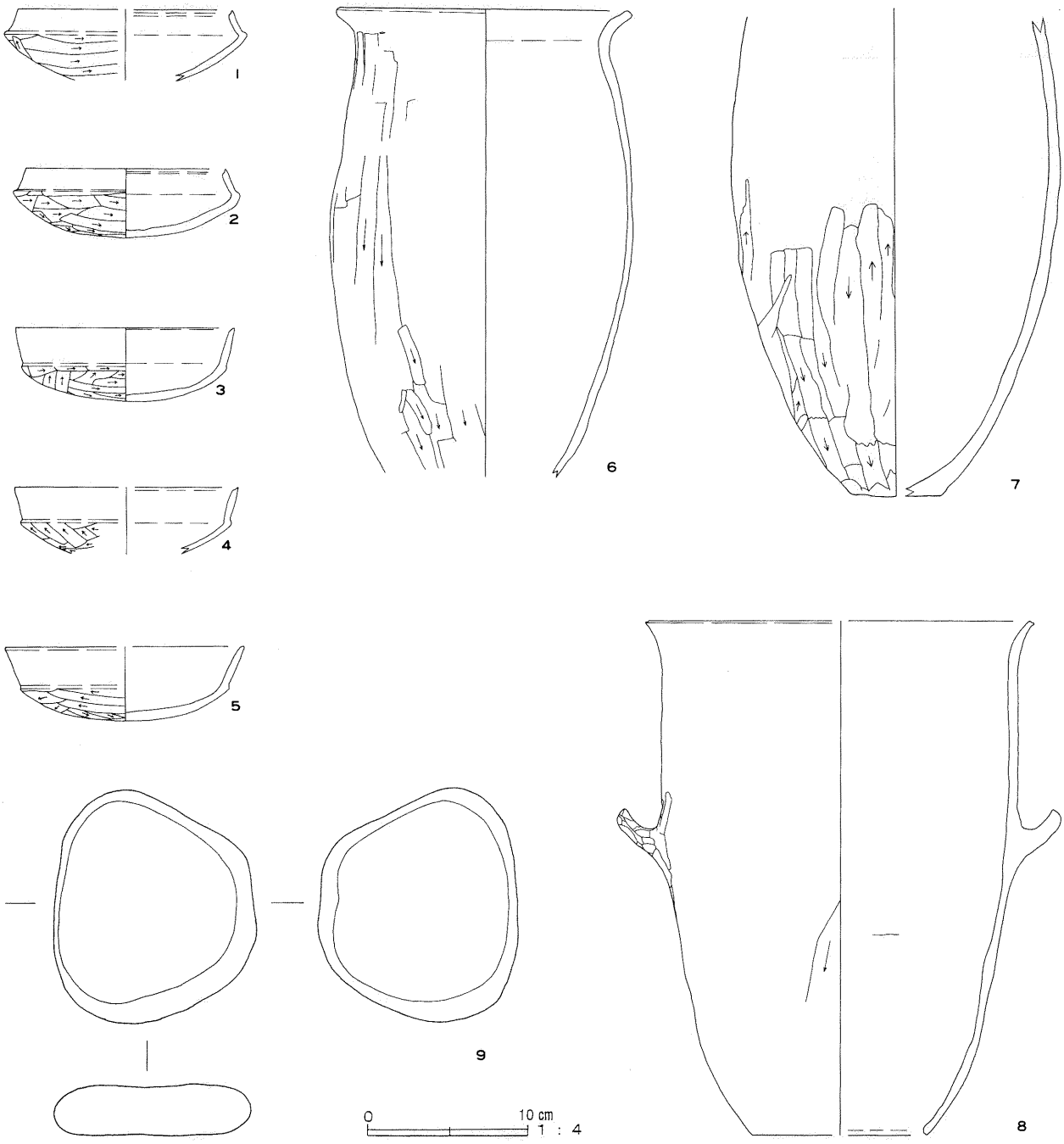
（第273図）　長軸は5.35m、短軸は4.79mの長方形を呈する。主軸方向はS－56°－Eを指す。確認面からの深さは42cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は色調の異なる粘土七層（1～7層）からなり、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と考えられる。1層が厚く堆積し、上中層には混入物がみられた。このうち2層は焼土ブロックを含む炭化物層で帯状に堆積していた。また、床面直上には、灰色の粘土（7層）が一部広がっていた。

壁溝、柱穴はみられない。

カマドは南東壁の中央からやや南西寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部から燃焼部の幅は39cm、煙道部の幅は燃焼部との境で36cm、煙道部の幅は中心辺りで23cm、先端は径34cmのピット状となる。焚口部から燃焼部は床面とほぼ同一レベルであった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は17cmを測る。煙道部はほぼ平坦であり、先端でピット状となる。壁外へは1.67m



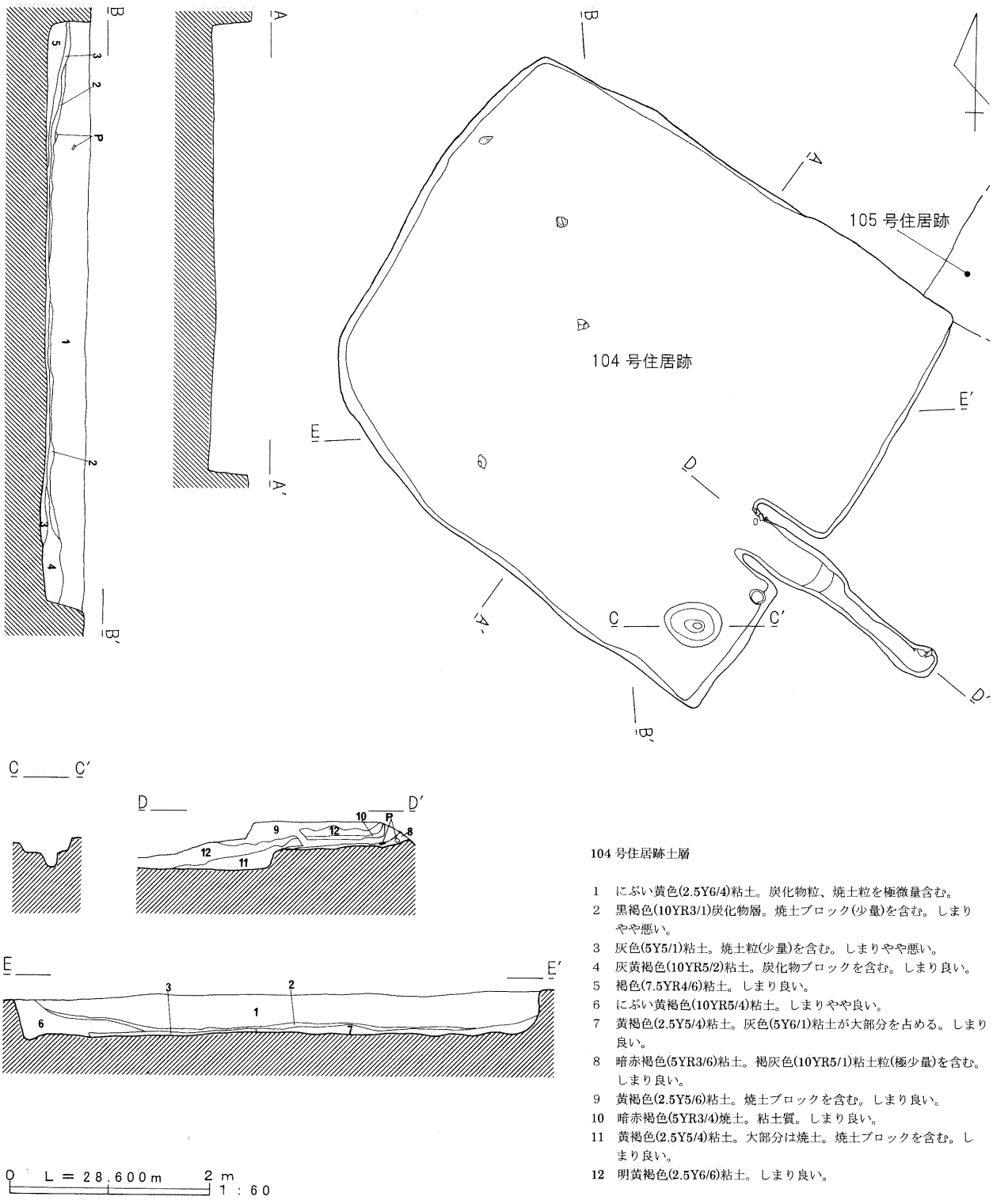
第271図　E・F区103号住居跡



第272図　E・F区103号住居跡出土遺物

第133表　E・F区103号住居跡出土遺物観察表　（第272図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(13.4)	-	-	③①④②⑥	②	にぶい褐	1/4	内外面煤付着。
2	土師器杯	12.5	4.3	-	③①④	②	橙	3/4	
3	土師器杯	13.7	4.6	-	③①②④⑥	②	橙	一部欠	
4	土師器杯	(14.0)	-	-	③①②④	②	にぶい橙	1/4	
5	土師器杯	(15.0)	4.6	-	③①②④	②	橙	1/3	
6	土師器甕	18.3	-	-	⑥③①	②	浅黄橙	3/4	外面黒斑有。磨滅。
7	土師器甕	-	-	(5.6)	②①④③⑥	②	明赤褐	下半2/3	胴上部外面磨滅。
8	土師器甑	(24.2)	32.4	(10.9)	③①⑥	②	橙	2/3	外面黒斑有。磨滅。
9	磨石	長さ　14.6　幅　12.4　厚さ　3.2						完形	花崗閃緑岩製。



104 号住居跡土層

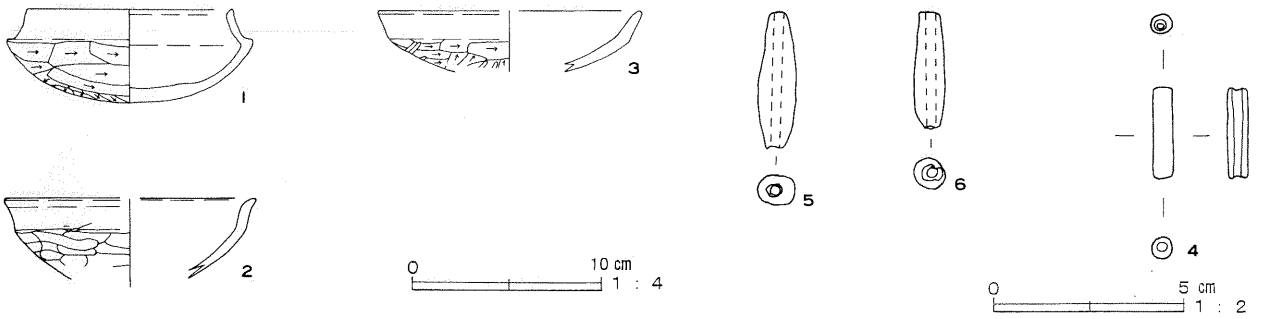
1 にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。炭化物粒、焼土粒を極微量含む。
2 黒褐色(10YR3/1)炭化物層。焼土ブロック(少量)を含む。しまりやや悪い。
3 灰色(5Y5/1)粘土。焼土粒(少量)を含む。しまりやや悪い。
4 灰黄褐色(10YR5/2)粘土。炭化物ブロックを含む。しまり良い。
5 褐色(7.5YR4/6)粘土。しまり良い。
6 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土。しまりやや良い。
7 黄褐色(2.5Y5/4)粘土。灰色(5Y6/1)粘土が大部分を占める。しまり良い。
8 暗赤褐色(5YR3/6)粘土。褐灰色(10YR5/1)粘土粒(極少量)を含む。しまり良い。
9 黄褐色(2.5Y5/6)粘土。焼土ブロックを含む。しまり良い。
10 暗赤褐色(5YR3/4)焼土。粘土質。しまり良い。
11 黄褐色(2.5Y5/4)粘土。大部分は焼土。焼土ブロックを含む。しまり良い。
12 明黄褐色(2.5Y6/6)粘土。しまり良い。

第273図　E・F区104号住居跡

程張り出している。覆土に天井部崩落土等はみられず、粘土層(12層)、焼土を含む粘土層（9・11層)、焼土層（10層）等により構成されている。

カマド南西脇には、径57cm×45cmの楕円形で、深さ28cmの貯蔵穴が確認された。

出土遺物（第274図）には、土師器杯（№1～3)、管玉（4)、土錘（5・6）等がある。床面上から検出されたものもあるが、図示したものはすべて覆土中からの検出である。杯



第274図　E・F区104号住居跡出土遺物

第134表　E・F区104号住居跡出土遺物観察表　(第274図)

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	10.9	4.9	-	①③④②⑥	②	橙	口縁部1/4欠	内外面煤付着。
2	土師器杯	(13.2)	-	-	①④②⑥	②	明赤褐	1/7	
3	土師器杯	(14.0)	-	-	③①④②⑥	②	明赤褐	1/4	外面煤付着。
4	管玉	長さ 2.4	最大径 0.5	孔径 0.2				完形	滑石製。
5	土錘	長さ 7.2	最大径 2.0	孔径 0.4				完形	
6	土錘	長さ 6.3	最大径 1.6	孔径 0.5				完形	

はすべて模倣杯である。1は杯身模倣杯であり、その他は杯蓋模倣杯である。1・3は煤の付着がみられた。4は細身のものである。土錘は2点検出された。ともに完形品である。

105号住居跡　AM－22・23グリッドに位置する。北東部大半が調査区域外にあり、北西部で106号住居跡を切り、南西隅で104号住居跡に切られている。

(第275図)

規模・平面形等は不明であるが、南西－北東軸は3.08mを測る。確認面からの深さは40cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土はランダムな層位(11～13層)をなしているが、自然堆積と考えられる。壁溝、柱穴はみられず、カマドも検出されなかった。ただ、106号住居跡との境で、径1.03×0.72mの楕円形で、深さ8.5cmの貯蔵穴と思われる掘り込みが検出された。覆土から土師器が検出された。

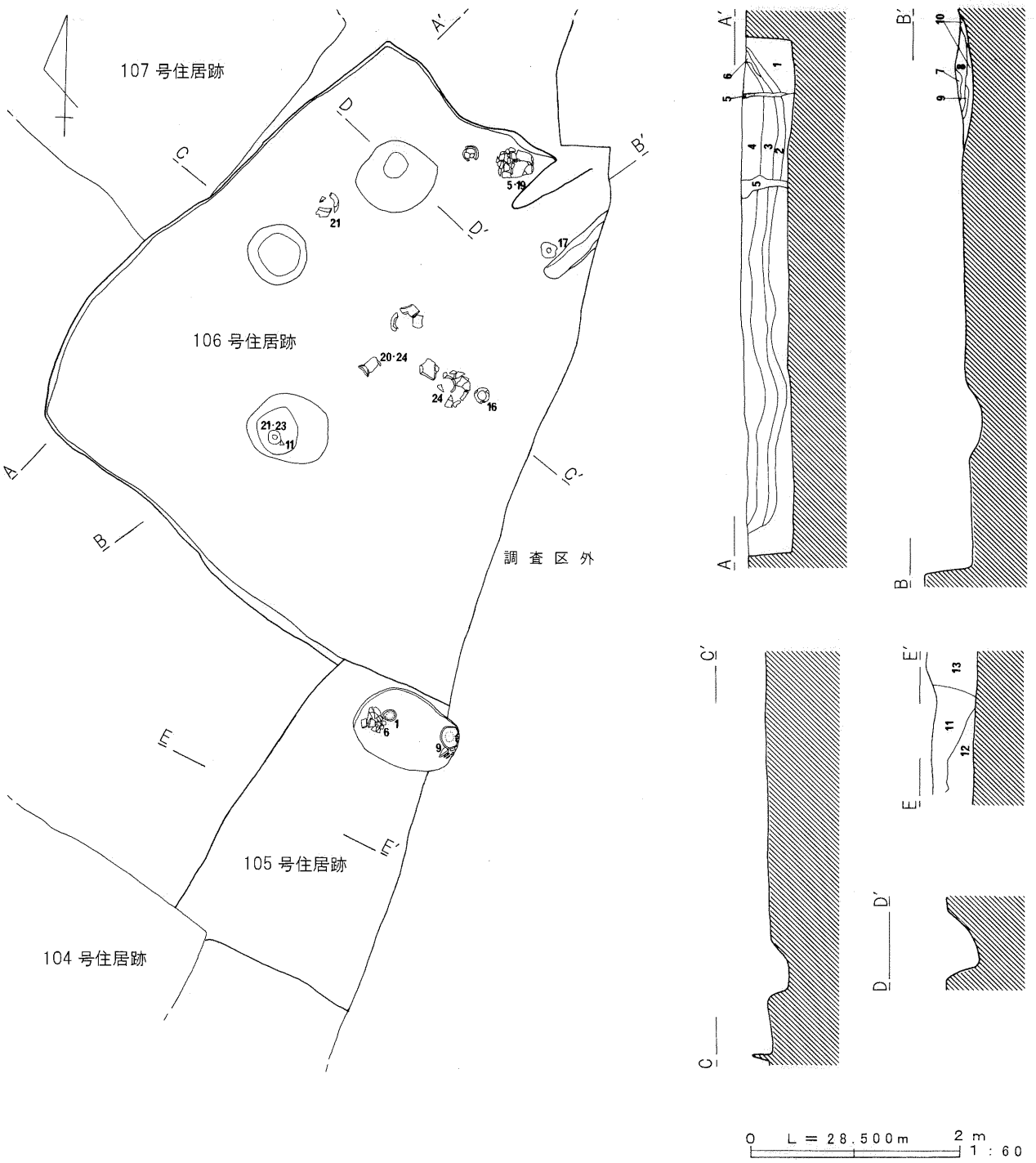
出土遺物(第276図)には、土師器杯(No.1～6)、甕(7～9)、甑(10)等がある。1・6・9が掘り込みから、その他は覆土中からの検出である。杯は口径小さく、身の深い模倣杯である。煤が付着しているものや黒斑を有するが多い。甕はすべて長胴甕である。7は外面に黒斑を有し、摩滅が顕著であった。10は把手を持たないタイプである。

106号住居跡　AL－22・23グリッドに位置する。本住居跡の南北東半分が調査区域外にあり、北西部では107号住居跡を切り、南東部で105号住居跡に切られている。

(第275図)

規模や形状は不明であるが、北西壁は4.95mを測る。主軸方向はN－44°－Eを指す。確認面からの深さは49cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は黄褐色ないし褐灰色の粘土(1～4・6層)を主体とし、焼土や炭化物を含むが、特に中層(3層)に多く含まれていた。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積層と考えられる。

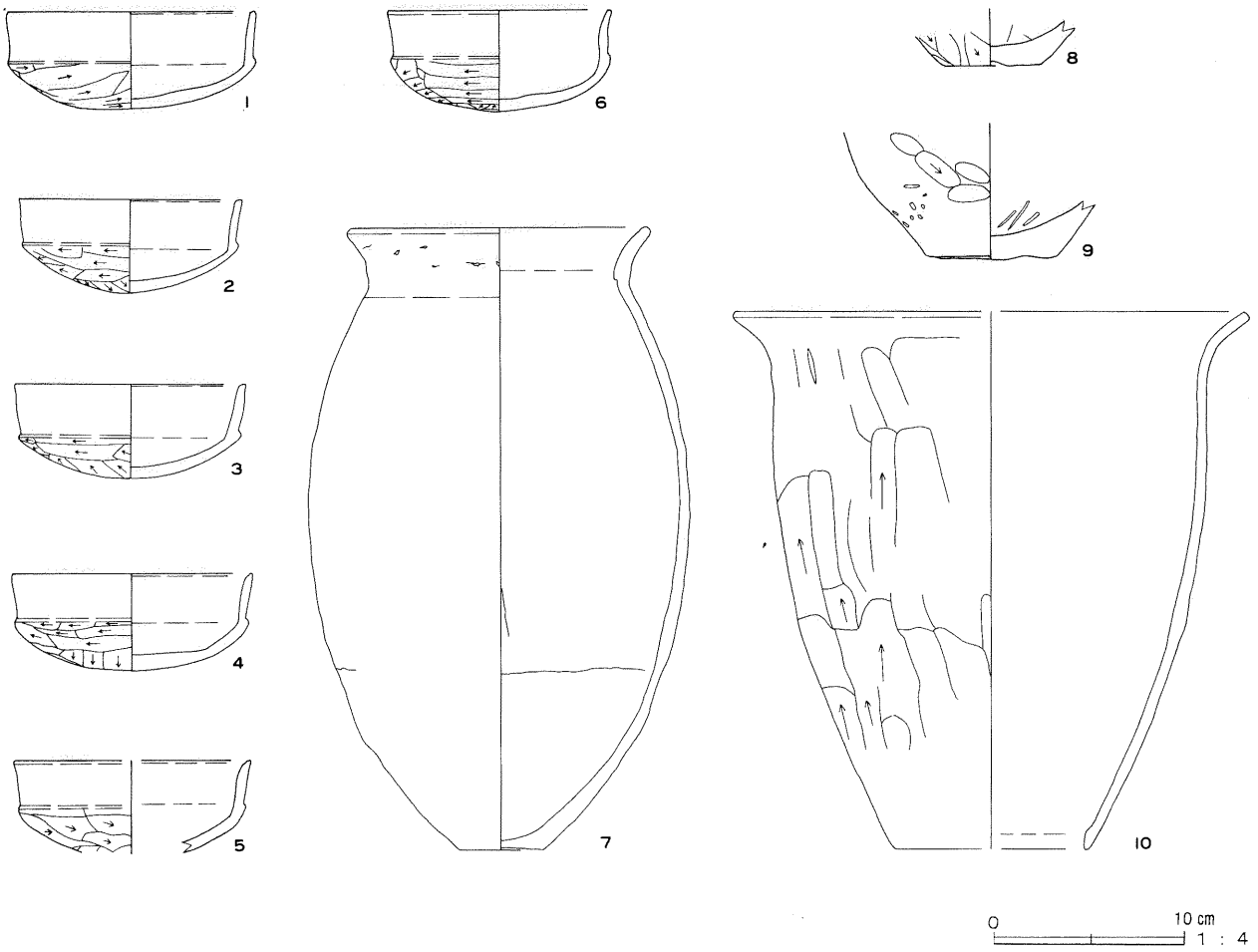
壁溝はみられない。ピットが2つ検出されたが、浅く柱穴かどうかは分からない。



105·106 号住居跡土層

1 黄色(5Y7/6)粘土。炭化物ブロック、焼土粒を少量含む。しまり良い。
2 褐灰色(7.5YR5/1)粘土。炭化物粒、焼土粒を極少量含む。しまり良い。
3 黄色(2.5Y8/6)粘土。炭化物ブロック(多量)、焼土ブロック、灰色(10YR5/1)粘土ブロック(少量)を含む。しまりやや良い。
4 褐灰色(5YR5/1)粘土。焼土粒(少量)を含む。しまり良い。
5 黄色(2.5Y7/8)砂。しまり悪い。
6 黄色(5Y7/6)粘土。しまり良い。
7 明黄褐色(2.5Y7/6)粘土。大部分は焼土。炭化物粒を含む。しまり良い。
8 褐灰色(10YR5/1)粘土。焼土ブロックを含む。しまり良い。
9 明赤褐色(5Y5/8)焼土。しまり良い。
10 黄橙色(10YR8/6)粘土。焼土ブロック、灰色(10YR5/1)粘土ブロックを含む。しまり良い。
11 褐灰色(7.5YR5/1)粘土。最下部に炭化物を薄く含む。しまり良い。
12 黄褐色(2.5Y5/3)粘土。炭化物粒(少量)を含む。しまり良い。
13 浅黄色(10YR7/4)粘土。しまり良い。

第275図　E・F区105・106号住居跡



第276図　E・F区105号住居跡出土遺物

第135表　E・F区105号住居跡出土遺物観察表　(第276図)

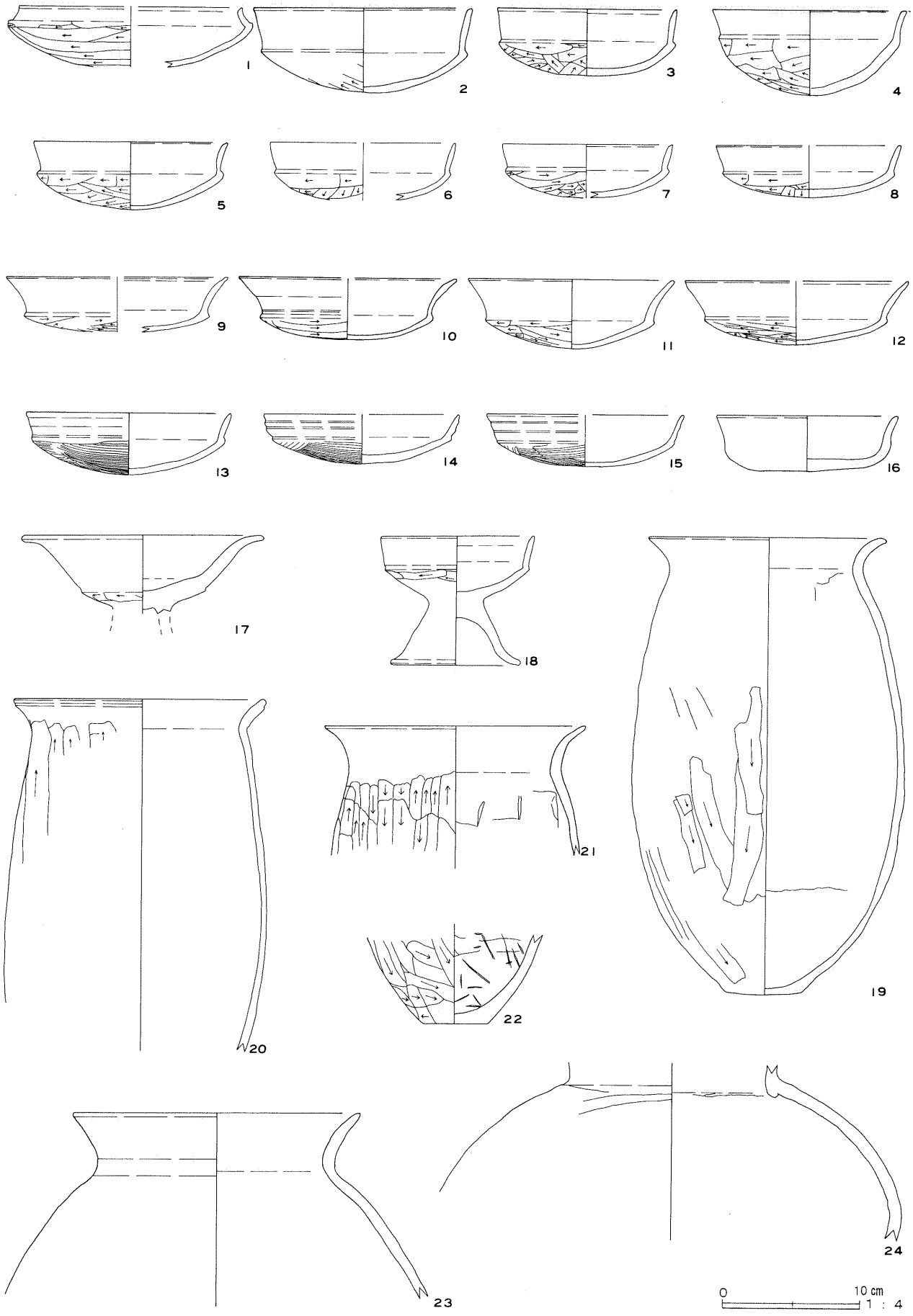
No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	13.2	5.1	-	③①④	②	橙	一部欠	
2	土師器杯	11.8	4.9	-	①③④②⑥	②	橙	一部欠	外面黒斑有、煤付着。
3	土師器杯	12.2	5.0	-	①④③②	②	橙	1/2	外面黒斑有、煤付着。
4	土師器杯	12.7	5.1	-	③①④②	②	橙	一部欠	外面煤付着。
5	土師器杯	(12.4)	-	-	⑥①④	②	橙	1/3	
6	土師器杯	11.9	5.3	-	③①⑥④	②	明赤褐	完形	内外面煤付着。
7	土師器甕	16.0	33.3	4.4	③①⑥④	②	橙	2/3	外面黒斑有。磨滅。
8	土師器甕	-	-	5.0	⑥④①	②	橙	下位のみ	
9	土師器甕	-	-	6.8	⑥④②	②	橙	下位のみ	磨滅。
10	土師器甑	(27.0)	(28.0)	(10.4)	③①⑥②④	②	橙	1/2	

カマドは北東壁に設けられている。煙道部及び南東側の袖一部は、調査区域外にあるため、形状は分からない。袖部は地山の掘り残しと考えられるが、北東部の袖を確認したのみである。燃焼部は僅かに窪んでおり、土師器高杯（No.17）が検出された。焚口部の幅は推定59cm、燃焼部は推定で61cmを測る。覆土は焼土層（7～10層）を中心とする。

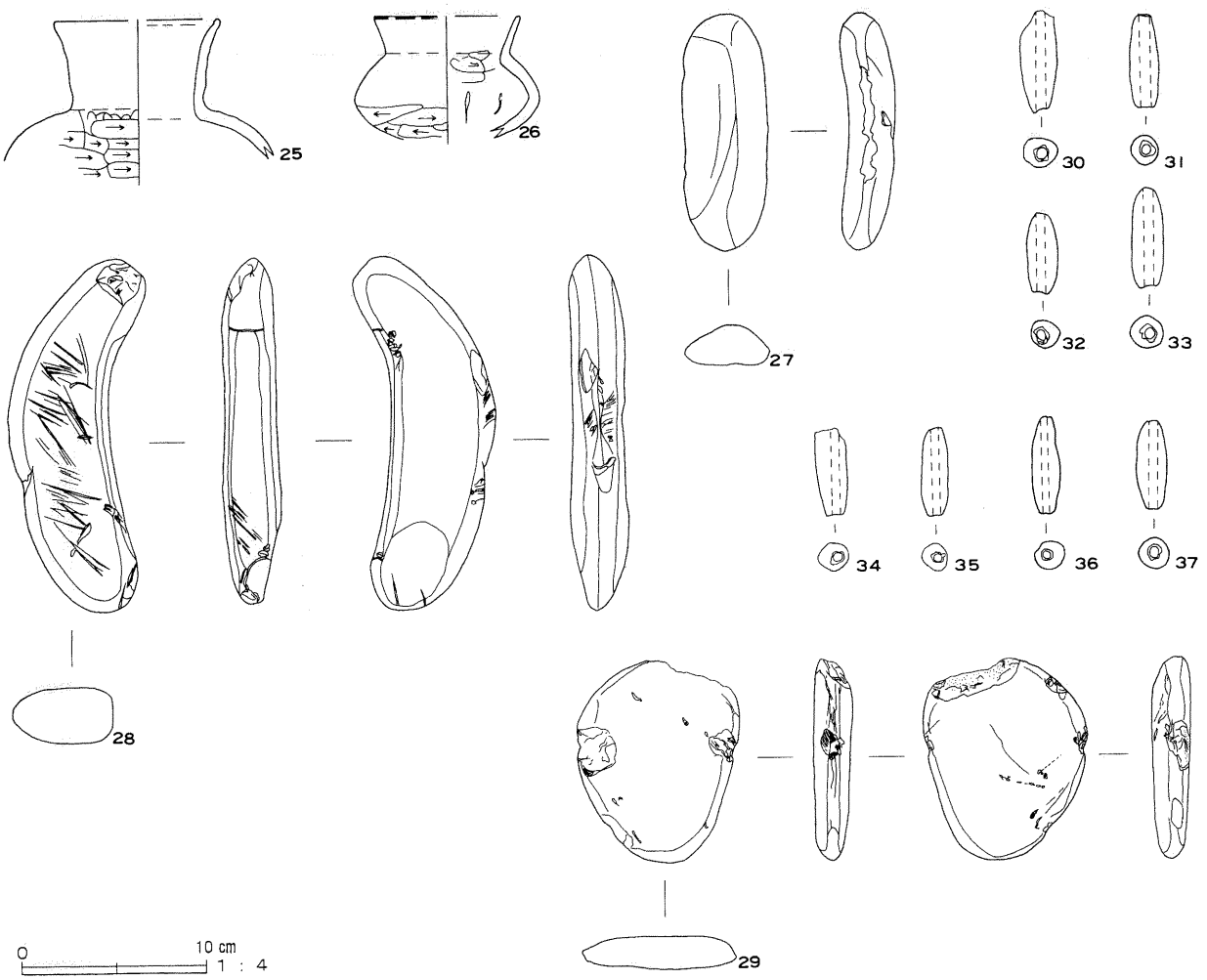
カマド北西脇には、径72×68cmの不整円形で、深さ31cmの貯蔵穴が検出された。

出土遺物（第277・278図）には、土師器杯（No.1～16）、高杯（17・18）、甕（19～24）、壺（25・26）、砥石（27・28）、石錘（29）、土錘（30～37）等がある。17がカマド、5・19がカマド脇、11・21・23がピット、16・20・21・24が床面上から検出された。

その他は覆土中からの検出である。煤が付着しているものや黒斑を有するものが多い。



第277図　E・F区106号住居跡出土遺物(1)

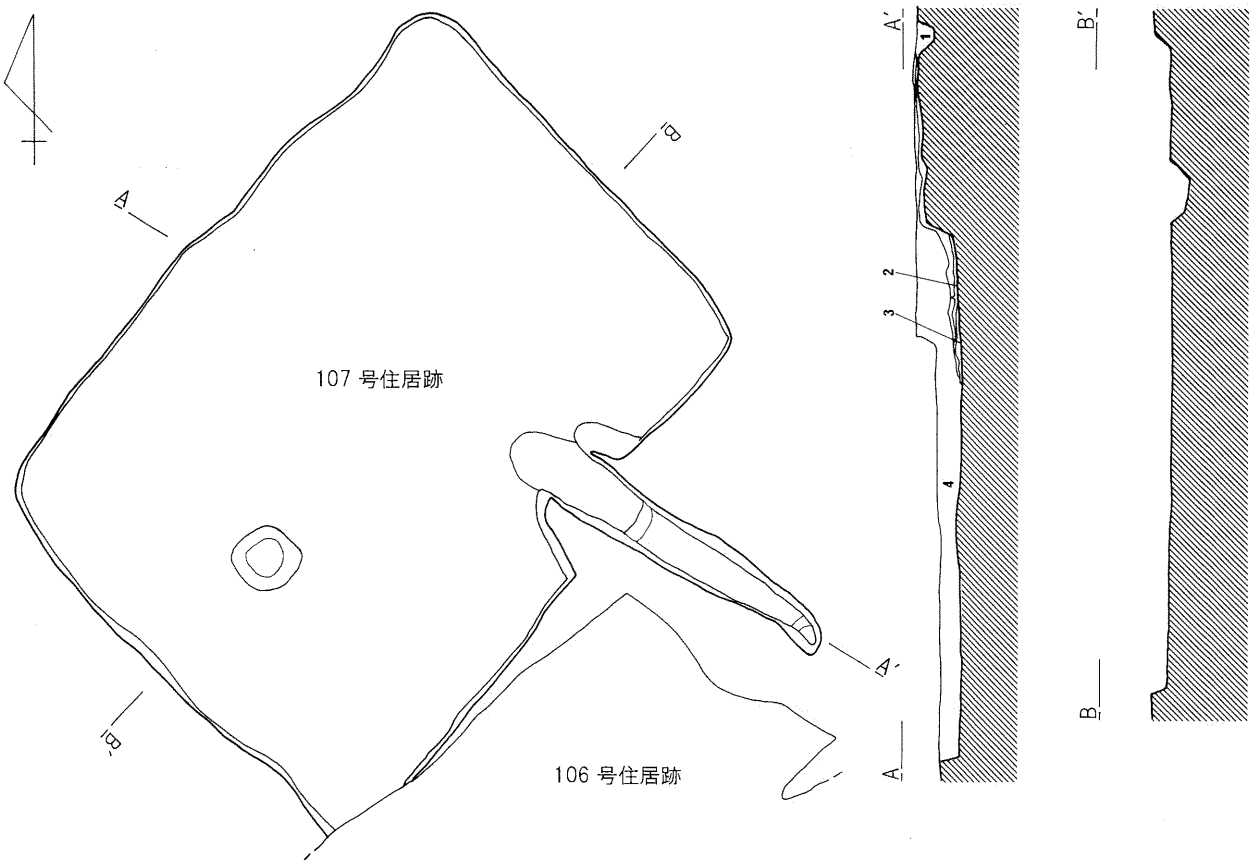


第278図　E・F区106号住居跡出土遺物(2)

第136表　E・F区106号住居跡出土遺物観察表　(第277・278図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(16.4)	-	-	③①④⑥	②	橙	1/4	内外面煤付着。
2	土師器杯	16.0	6.2	-	③①④②⑥	②	橙	口縁部1/3欠	内外面黒斑有、煤付着。磨滅。
3	土師器杯	13.2	4.9	-	③①④②	②	橙	口縁部1/3欠	外面黒斑有。
4	土師器杯	14.2	6.2	-	①③④⑥	②	橙	一部欠	外面黒斑有。
5	土師器杯	14.2	4.9	-	③①④②	②	橙	4/5	
6	土師器杯	(13.6)	-	-	③①④②	②	橙	1/4	
7	土師器杯	12.5	-	-	①④③⑥	②	にぶい赤褐	2/3	内外面煤付着。
8	土師器杯	(13.6)	3.8	-	③①④②	②	明赤褐	1/3	
9	土師器杯	(16.3)	-	-	③①④②	②	橙	1/2	内外面煤付着。
10	土師器杯	(16.0)	4.5	-	③⑥①④	②	明赤褐	2/5	内外面黒斑有。
11	土師器杯	15.2	5.1	-	③①④②	②	橙	3/4	内外面黒斑有。
12	土師器杯	(16.4)	4.7	-	③①④⑥	②	橙	1/2	外面黒斑有。
13	土師器杯	15.0	4.5	-	①③④⑥	②	にぶい赤褐	1/4	内外面煤付着。
14	土師器杯	(14.4)	3.5	-	①③④⑥	②	にぶい橙	1/3	内外面煤付着。
15	土師器杯	(14.5)	3.8	-	③①②④	②	にぶい橙	1/2	外面煤付着。
16	土師器杯	13.2	4.1	-	③①④	②	橙	一部欠	
17	土師器高杯	17.8	-	-	③①④	②	橙	杯部3/5	
18	土師器高杯	11.3	9.6	9.6	③①④	②	橙	4/5	
19	土師器甕	17.4	34.0	5.4	③①⑥	②	浅黄橙	一部欠	内外面煤付着。磨滅。
20	土師器甕	18.5	-	-	③⑥①	②	橙	1/2	胴部外面煤付着。磨滅。
21	土師器甕	19.0	-	-	②①④③⑥	②	橙	上位のみ	
22	土師器甕	-	-	4.7	⑥①④②	②	にぶい橙	下位のみ	
23	土師器甕	21.0	-	-	②①④③⑥	②	橙・にぶい橙	上位のみ	磨滅。
24	土師器甕	-	-	-	③④①⑥	②	橙	上位のみ	外面黒斑有。磨滅。

25	土師器壺	(8.8)	-	-	③⑥	②	にぶい橙	口縁部 1 / 2	
26	土師器壺	(7.9)	-	-	①④②③	①	にぶい橙	2 / 5	
27	砥石	長さ 12.9	幅 4.1	厚さ 2.2				完形	二面使用。花崗閃緑岩製。
28	砥石	長さ 18.8	幅 3.1	厚さ 5.5				完形	全面使用。輝緑岩製。
29	石錘	長さ 11.0	幅 8.3	厚さ 1.8				完形	
30	土錘	長さ 5.3	最大径 1.8	孔径 0.6				完形	
31	土錘	長さ 5.0	最大径 1.5	孔径 0.5				完形	
32	土錘	長さ 4.3	最大径 1.5	孔径 0.5				完形	
33	土錘	長さ 5.3	最大径 1.8	孔径 0.6				完形	
34	土錘	長さ 4.6	最大径 1.6	孔径 0.5				完形	
35	土錘	長さ 4.7	最大径 1.4	孔径 0.4				完形	
36	土錘	長さ 5.3	最大径 1.5	孔径 0.4				完形	
37	土錘	長さ 4.8	最大径 1.6	孔径 0.5				完形	



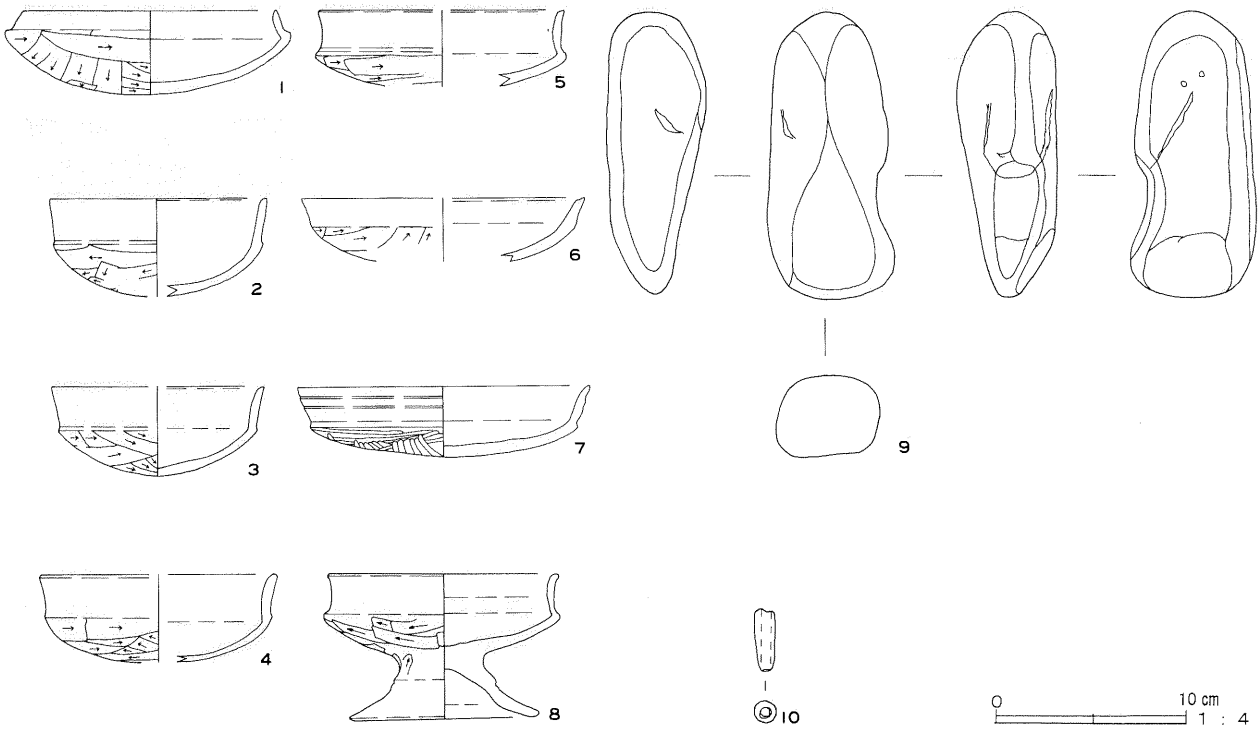
107 号住居跡土層

1　明黄褐色(2.5Y7/6)粘土。大部分は焼土。焼土ブロックを含む。しまり良い。
2　褐灰色(10YR5/1)粘土。焼土ブロックを含む。しまり悪い。
3　暗赤褐色(5YR3/6)粘土。しまり良い。
4　明黄褐色(2.5Y7/6)粘土。炭化物ブロック、焼土粒を含む。しまり良い。

0　L＝28.400m　2 m
1 : 60

第279図　E・F区107号住居跡

杯はすべて模倣杯である。1のみ口径大きく、浅身の杯身模倣杯であり、その他は杯蓋模倣杯である。後者のうち、2～8は口径小さく、深身であり、9～16は口径大きく、浅身である。17は杯部のみの検出であり、大きく外反している。18は模倣杯に低い脚部がつくタイプである。甕は長胴甕（19～22）と丸胴甕（23・24）がある。壺はともに小型の部類



第280図　E・F区107号住居跡出土遺物

第137表　E・F区107号住居跡出土遺物観察表　(第280図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	13.4	4.4	-	④①③	②	にぶい橙	2/3	内外面煤付着。
2	土師器杯	11.5	-	-	⑥③①④	②	橙	1/2	
3	土師器杯	(11.2)	4.7	-	⑥③①④	②	橙	1/2	内外面煤付着。
4	土師器杯	(12.6)	-	-	③①④	②	にぶい橙	1/3	内外面黒斑有。
5	土師器杯	(13.0)	-	-	③①④⑥	②	橙	1/4	内面黒斑有。
6	土師器杯	(15.0)	-	-	①③④⑥	②	明赤褐	1/4	内外面煤付着。
7	土師器杯	15.5	3.7	-	③①④⑥	②	橙	4/5	内外面煤付着。
8	土師器高杯	12.2	7.7	10.0	③①⑥	②	橙	3/4	外面黒斑有。
9	砥石	長さ 15.3 幅 6.7 厚さ 4.3						完形	全面使用。
10	土錘	長さ 3.3 最大径 1.2 孔径 0.5						完形	

に入るが、26はさらに小型のものである。砥石はともに完形品である。27は二面、28は全面を使用している。29は川原石を使用している。完形品。土錘は8点検出された。長さ4.5cm前後、最大径1.5cm程、孔径0.5cm程を測る。

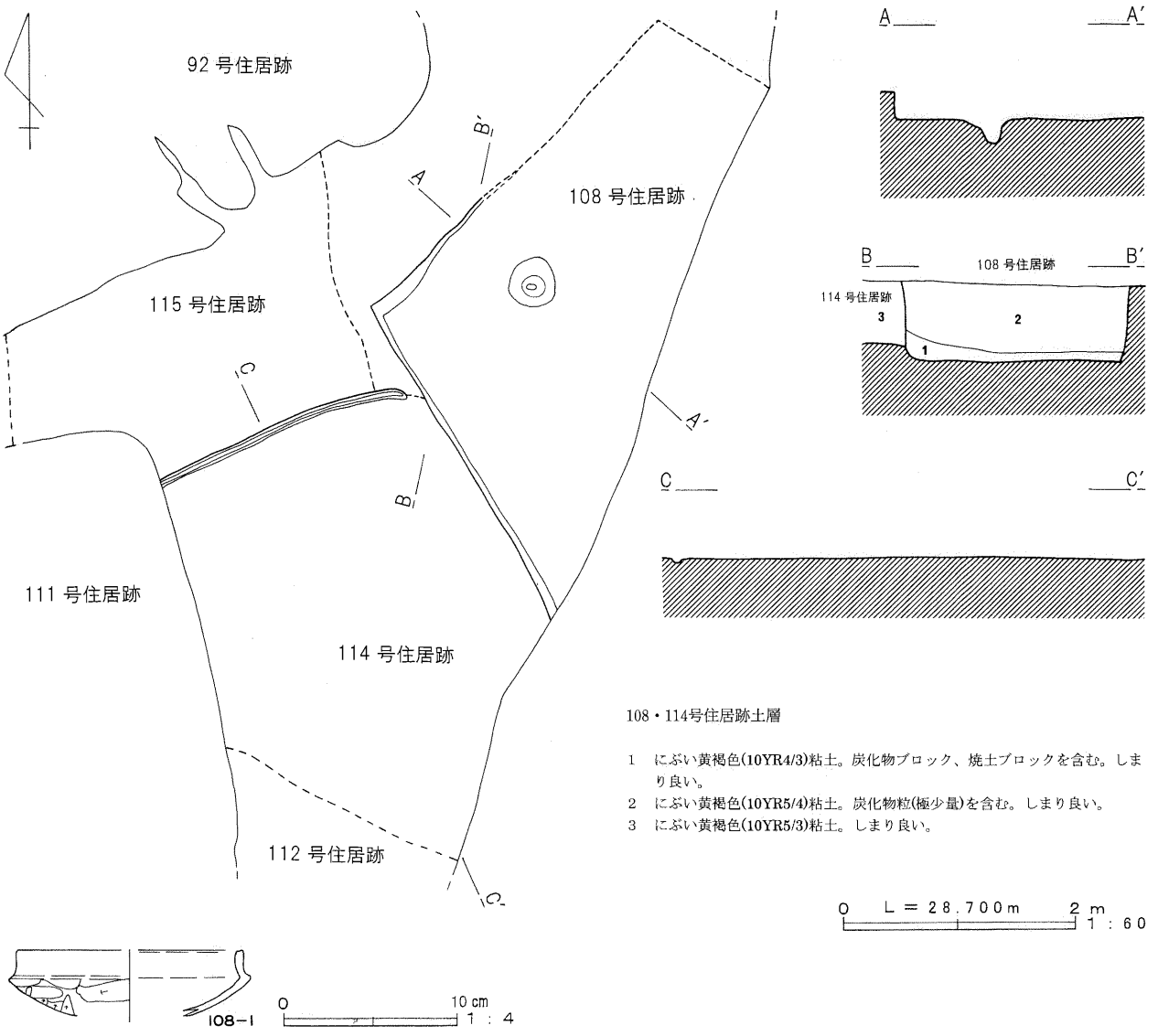
107号住居跡
(第279図)

AK・AL－22・23グリッドに位置する。南西隅を106号住居跡に切られている。

長軸5.32m、短軸4.08mの長方形を呈する。主軸方向はS－49°－Eを指す。確認面からの深さは34cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は明黄褐色土による単一層（4層）で、焼土と炭化物を含む。自然堆積と考えられる。ピットが1つ確認されている。床面からの深さは18cmを測るが、性格は不明である。

壁溝、貯蔵穴はみられない。

カマドは、南東壁中央からやや北東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、北東側の袖一部を欠くが、内面には被熱した箇所が確認された。燃焼部はやや窪んでいる。焚口部の幅は44cm、燃焼部幅は42cm、煙道部先端は23cmを測り、徐々に狭まる。燃焼部は



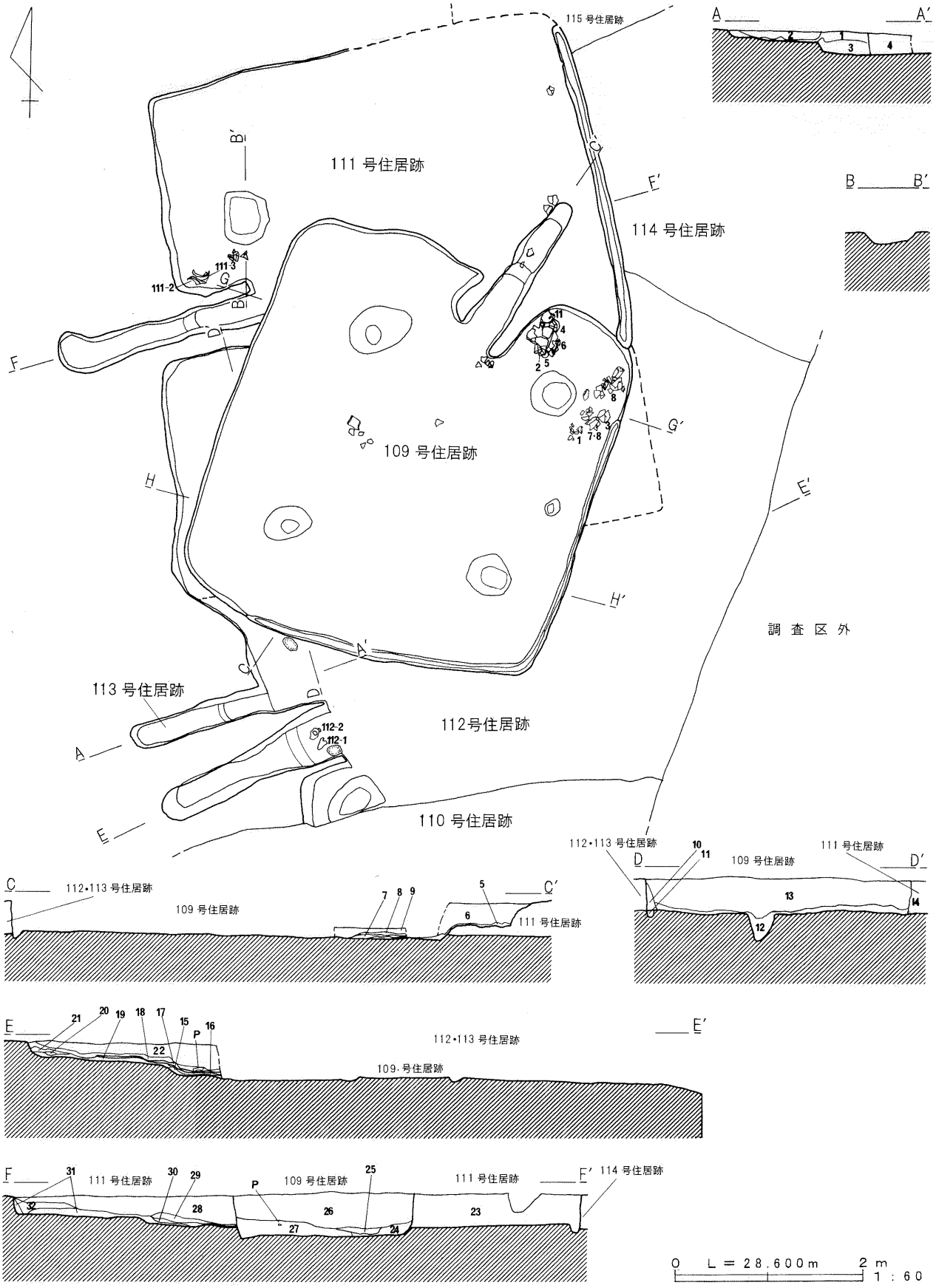
第281図　E・F区108・114・115号住居跡・108号住居跡出土遺物

第138表　E・F区108号住居跡出土遺物観察表　（第281図）

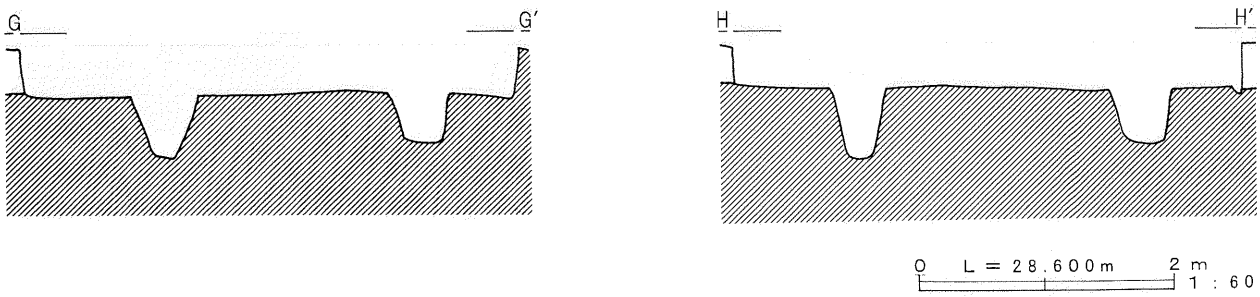
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(13.0)	-	-	①③④⑥	②	橙・黒褐	1/5	

ほぼ平坦である。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は22cmである。煙道部は確認面から5～7cmと浅く、ほぼ平坦であり、先端底面でピット状の掘り込みとなって立ち上がる。底面からの深さは9cmを測り、壁外へは2.05m程張り出している。カマド上層の覆土は住居跡の覆土と同じであり、天井部崩落土等は確認されず、焼土主体の層（1～3層）が検出された。

出土遺物（第280図）には、土師器杯（No.1～7）、高杯（8）、砥石（9）、土錘（10）等がある。すべて覆土中から検出された。杯はすべて模倣杯である。1のみ口径大きく、浅身の杯身模倣杯であり、その他は杯蓋模倣杯である。後者は口径小さく、深身のもの（2～4）と口径大きく、浅身のもの（5～7）がある。8は模倣杯に低い脚部がつくタイプ

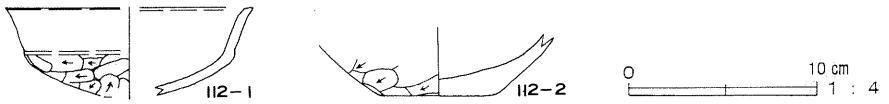


第282図　E・F区109・111・112・113号住居跡(1)



109・111・112・113号住居跡土層

1 赤褐色(5YR4/8)粘土。焼土ブロック、炭化物ブロックを多く含む。しまり良い。
2 橙色(7.5YR6/6)粘土。焼土ブロック(極少量)を含む。しまり良い。
3 黄橙色(10YR7/8)粘土。灰色(10YR7/1)粘土ブロックを含む。しまり良い。
4 明黄褐色(10YR7/1)粘土。灰色(10YR7/1)粘土ブロックを含む。しまり良い。
5 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土。焼土(多量)、炭化物ブロック、焼土ブロックを含む。しまり良い。下部には薄く灰色(10YR4/1)粘土を含む。
6 明黄褐色(10YR6/8)粘土。しまり良い。
7 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土。炭化物(多量)、焼土ブロックを含む。しまり良い。
8 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土。大部分は焼土。炭化物ブロックを含む。しまり良い。
9 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土。しまり良い。
10 灰色(10YR6/1)粘土。明黄褐色(10YR7/8)粘土ブロックを含む。しまり良い。
11 灰色(10YR6/1)粘土。炭化物ブロックを含む。しまり良い。
12 明黄褐色(10YR6/6)粘土。大部分は炭化物が占める。焼土ブロックを含む。しまり良い。
13 明黄褐色(2.5Y7/6)粘土。焼土ブロック(少量)を含む。しまり良い。
14 黄褐色(2.5Y5/4)粘土。炭化物ブロック(少量)を含む。しまり良い。
15 黄褐色(10YR5/8)粘土。焼土ブロック、灰色(10YR5/1)粘土ブロックを含む。しまり良い。
16 灰色(5Y5/1)粘土。焼土ブロックを含む。しまり良い。
17 明黄褐色(10YR6/6)粘土。焼土ブロックを含む。しまり良い。
18 明黄褐色(2.5YR7/6)粘土。焼土ブロック、炭化物ブロックを含む。しまり良い。
19 黄褐色(2.5Y5/4)粘土。炭化物ブロック、灰色(10YR5/1)粘土・焼土ブロックを含む。しまり良い。
20 にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。しまり良い。
21 にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。焼土ブロック、炭化物ブロックを含む。しまり良い。
22 黄色(2.5Y7/8)粘土。焼土ブロック、炭化物ブロックを含む。しまり良い。
23 明黄褐色(2・5Y6/6)粘土。しまり良い。
24 黄褐色(2.5Y5/6)粘土。炭化物、焼土が多く、焼土ブロック、灰色(10YR5/1)粘土ブロックを含む。しまり良い。
25 黄褐色(10YR5/6)粘土。焼土(多量)を含む。しまり良い。
26 黄褐色(10YR5/6)粘土。焼土ブロックを含む。しまり良い。
27 黄褐色(2.5Y5/4)粘土。下部に薄く炭化物を含み、炭化物ブロック、灰色(2.5Y6/1)粘土ブロックを含む。しまり良い。
28 明黄褐色(2.5Y6/8)粘土。しまり良い。
29 灰色(10YR5/1)粘土。焼土(多量)、灰色(10YR5/1)粘土ブロックを含む。しまり良い。
30 灰黄褐色(10YR4/2)粘土。焼土ブロックを含む。しまり良い。
31 黄褐色(10YR5/6)粘土。焼土ブロック、炭化物ブロックを含む。しまり良い。



第283図　E・F区109・111・112・113号住居跡(2)・112号住居跡出土遺物

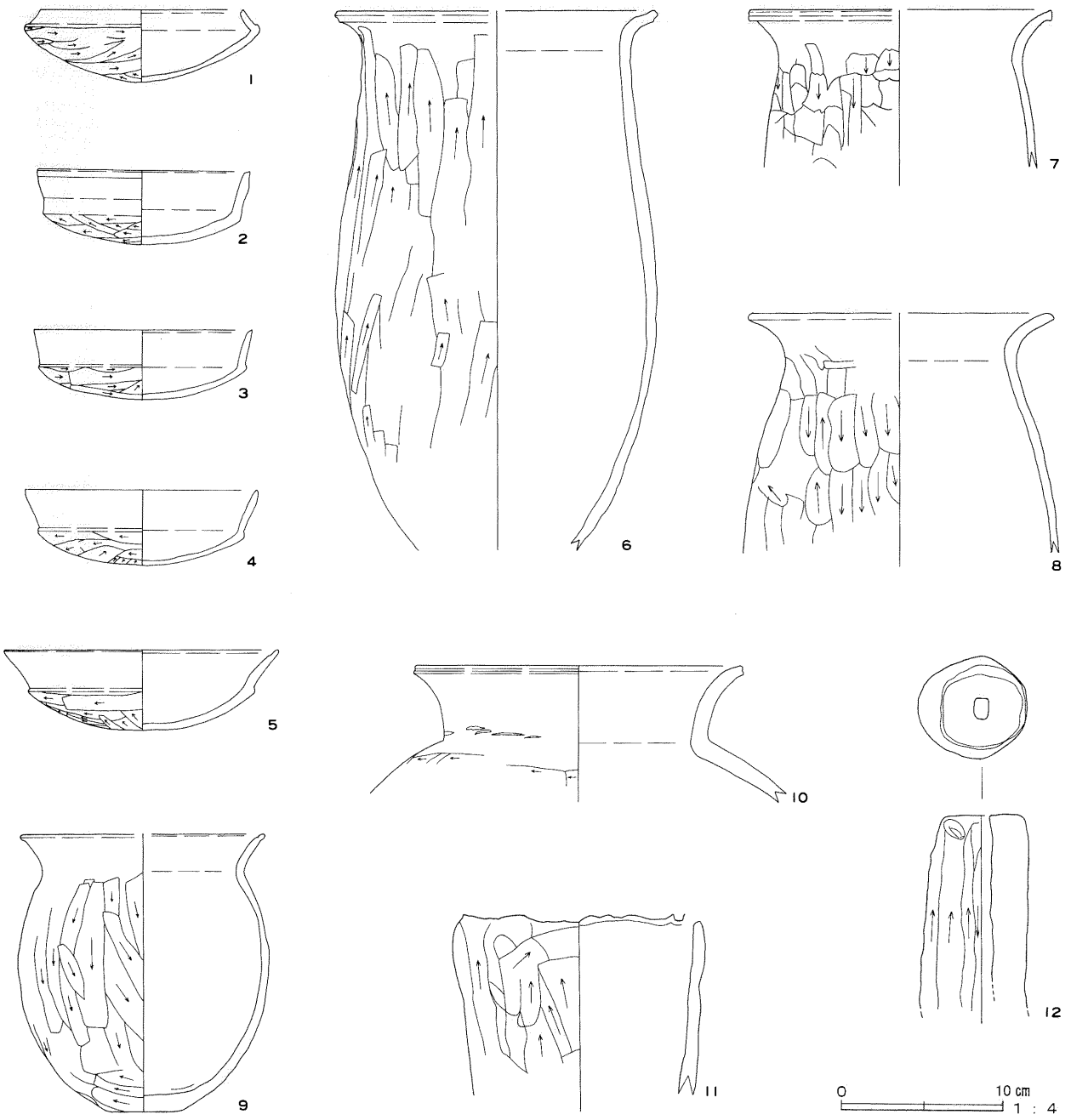
である。9は川原石によるもので、全面を使用している。土錘は1点のみ検出された。

108号住居跡（第281図）　AN－23グリッドに位置する。南東部大半が調査区域外にあり、南西部で114号住居跡を切っている。

規模・平面形等は不明である。北西隅付近は推定ラインを示しており、北西壁は3.56m程を測るものと思われる。確認面からの深さは69cmを測り、床面はほぼ平坦である。覆土はにぶい黄褐色土二層（1・2層）からなる。上層（2層）は厚く堆積しており、炭化物、焼土をブロック状に含む。下層（1層）は炭化物を粒状に少量含んでいた。自然堆積と考えられる。ピットが1つ検出されたが、性格は不明である。

壁溝、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

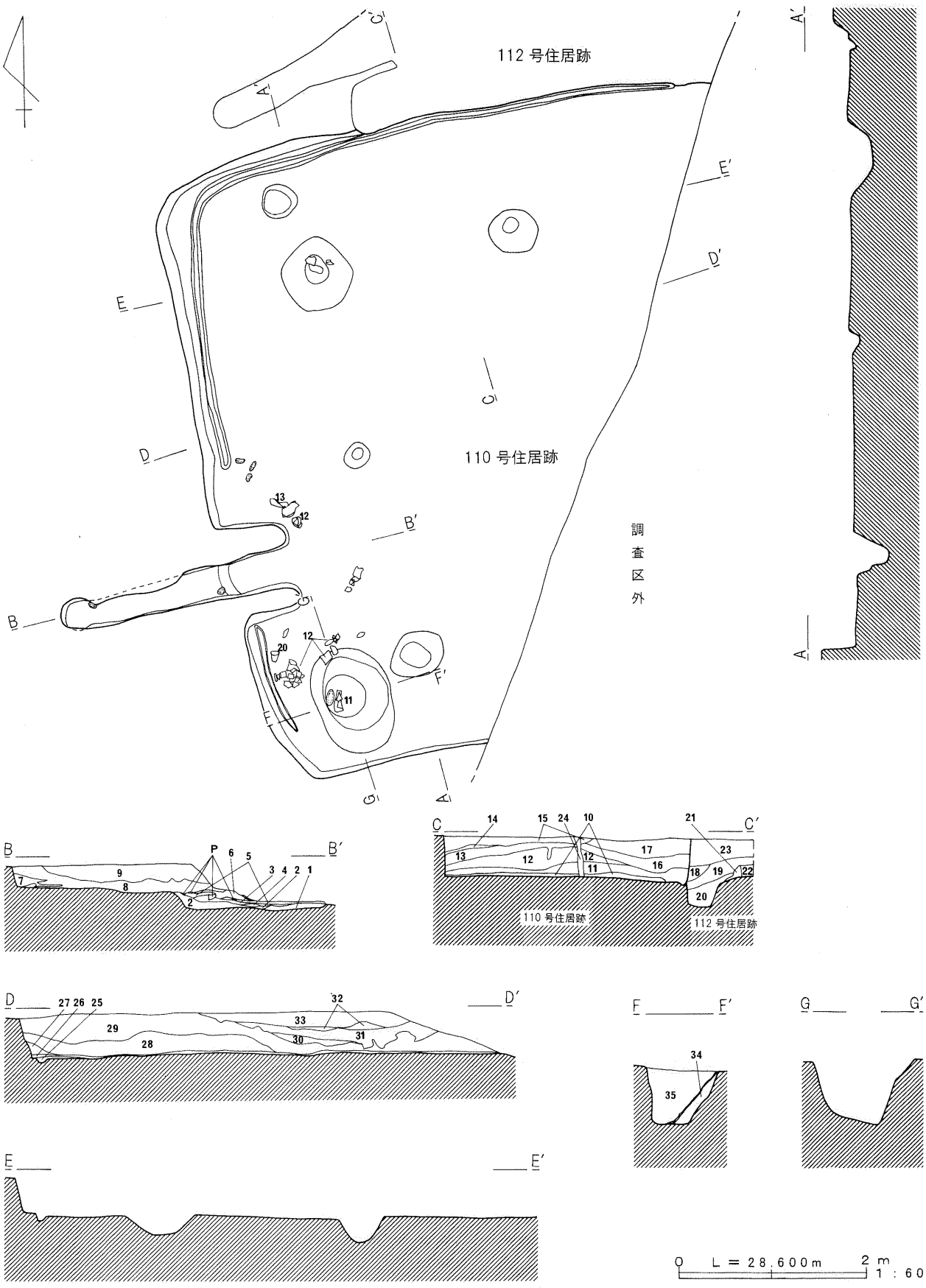
出土遺物（第281図）は、土師器杯（108－1）のみである。模倣杯。覆土中から検出された。



第284図　E・F区109号住居跡出土遺物

第139表　E・F区109号住居跡出土遺物観察表　(第284図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	12.6	4.5	-	①③④②	②	にぶい橙	3/4	内外面煤付着。
2	土師器杯	13.3	4.6	-	③①⑥④	②	橙	完形	
3	土師器杯	13.6	4.3	-	①⑥③④	②	橙	一部欠	
4	土師器杯	14.5	4.7	-	③①④⑥②	②	橙	一部欠	内外面煤付着。
5	土師器杯	17.1	5.0	-	①④③	②	にぶい赤褐	一部欠	内外面煤付着。
6	土師器甕	(20.0)	-	-	③①	②	浅黄橙	4/5	外面煤付着。
7	土師器甕	(18.7)	-	-	②①④③⑥	②	橙	口縁部2/5	
8	土師器甕	(18.6)	-	-	⑥②①④③	②	橙	上半2/3	
9	土師器甕	(15.2)	17.3	3.8	③①	②	明黄褐	1/3	外面黒斑有。
10	土師器甕	20.6	-	-	③①④	②	赤褐	口縁部のみ	
11	土師器鉢	14.9	-	-	⑥①②④	③	橙	上半7/8	
12	土製支脚	上部径　4.8　孔径　0.9　底径　-						上位のみ	



第285図　E・F区110号住居跡

110号住居跡土層

1　黄色(5Y7/6)粘土。焼土ブロック(少量)を含む。しまり良い。
2　オリーブ色(5Y5/4)粘土。灰色(2.5Y6/1)粘土ブロックを含む、しまり良い。
3　黄灰色(2.5Y5/1)粘土。焼土ブロックを含む。しまり良い。
4　オリーブ色(5Y5/4)粘土。大部分は焼土が占める。しまり良い。
5　オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土。焼土ブロック、炭化物ブロックを含む。しまり良い。
6　オリーブ黄色(5Y6/4)粘土。焼土ブロック、灰色(2.5Y6/1)粘土ブロックを含む。しまり良い。
7　灰色(5Y4/1)粘土。焼土・炭化物ブロックを含む。しまりやや良い。
8　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土。焼土・炭化物ブロックを含む。しまり良い。
9　明黄褐色(2.5Y7/6)粘土。焼土ブロック(少量)を含む。しまり良い。
10　明黄褐色(2.5Y7/6)粘土。大部分は炭化物が占め、焼土・灰色(5YR7/8)粘土ブロックを含む。しまり良い。
11　黄色(2.5Y8/6)粘土。焼土・炭化物ブロックを少量含む。しまり良い。
12　黄色(2.5Y8/8)粘土。焼土・炭化物ブロックを少量含む。しまり良い。
13　明黄褐色(2.5Y6/6)粘土。大部分は炭化物が占める。しまり良い。
14　にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。炭化物(少量)を含む。しまり良い。
15　浅黄色 2.5Y7/4)粘土。焼土・炭化物ブロックを含む。しまり良い。
16　明黄褐色(2.5Y6/6)粘土。灰色(2.5Y6/1)粘土ブロック(多量)を含む。しまり良い。
17　浅黄色(2.5Y7/4)粘土。焼土・炭化物ブロックを極少量含む。
18　褐色(7.5YR4/6)粘土。焼土ブロック(少量)を含む。しまり良い。
19　褐色(7.5YR4/6)粘土。焼土ブロックを含む。しまり良い。
20　黄褐色(10YR5/6)粘土。炭化物(多量)・焼土ブロック(少量)を含む。しまり良い。
21　明黄褐色(10YR6/6)粘土。灰色(10YR5/1)粘土ブロック(少量)を含む。しまり良い。
22　褐色(7.5YR4/6)粘土。焼土ブロックを含む。しまり良い。
23　明黄褐色(10YR6/6)粘土。炭化物ブロック(極少量)を含む。しまり良い。
24　黄橙色(10YR7/8)粘土。炭化物ブロック(少量)を含む。しまり良い。
25　浅黄色(2.5Y7/4)粘土。しまり良い。
26　明黄褐色(2.5Y7/6)粘土。大部分は炭化物・焼土ブロックが占める。しまり良い。
27　浅黄色(2.5Y7/4)粘土。焼土・炭化物ブロックを含む。しまり良い。
28　浅黄色(5Y7/4)粘土。焼土・炭化物ブロックを少量含む。しまり良い。
29　黄色(5Y7/6)粘土。焼土・炭化物ブロックを極少量含む。しまり良い。
30　にぶい黄橙色(10YR7/3)粘土。焼土・炭化物ブロックを含む。しまり良い。
31　にぶい黄橙色(10YR7/3)粘土。大部分は炭化物ブロックが占める。焼土ブロックを含む。しまり良い。
32　灰黄褐色(10YR6/2)粘土。炭化物ブロックを含む。しまり良い。
33　褐灰色(7.5YR5/1)粘土。焼土・炭化物ブロックを含む。しまり良い。
34　黄褐色(10YR5/8)粘土。炭化物(少量)を含む。しまり良い。
35　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土。下部に炭化物を含む。しまり良い。

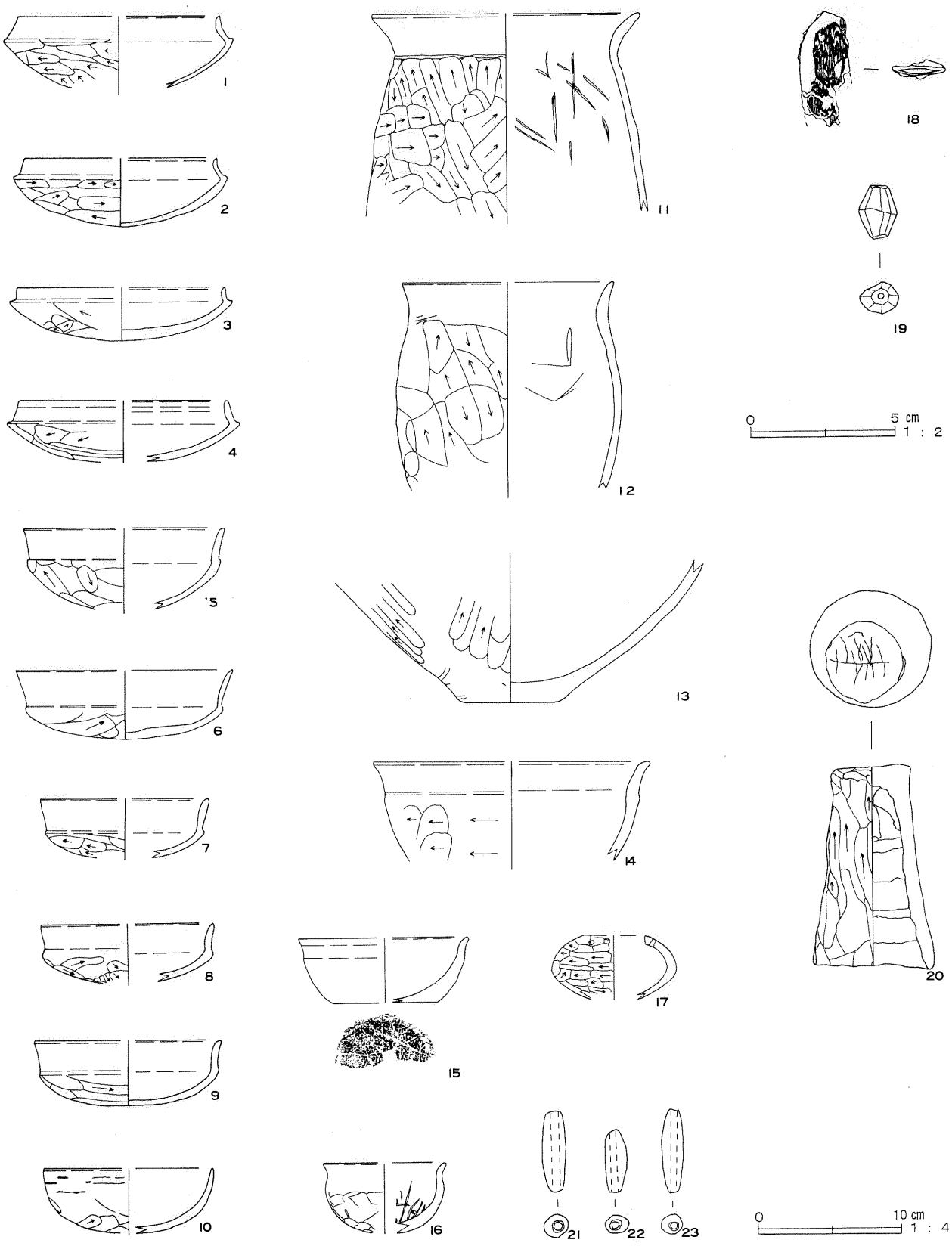
109号住居跡　AN・AO－23・24グリッドに位置する。複数の住居跡と重複関係にあるが、本住居跡が最も新しい。111号住居跡の南東部大半、112・113号住居跡の北西部を切っている。

(第282図)
(第283図)

長軸4.52m、短軸4.04mの長方形を呈する。主軸方向はN－19°－Eを指す。確認面からの深さは53cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系の粘土（12・13・24～27層）を主体とし、各層に焼土を含んでいた。また、床面直上の12・27層には炭化物が薄く堆積していた。自然堆積と考えられる。壁溝は南東壁と南西壁にみられる。幅は7～13cmで、床面からの深さは5～8cmを測る。床面からの深さ39～54cmを測る柱穴が4つ確認された。

カマドは北東壁のほぼ中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は53cm、燃焼部の幅は38cm、煙道部先端の幅は20cmを測り、先端に向かって徐々に狭まる。燃焼部は床面と同レベルでほぼ平坦であった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は16cmを測る。煙道部はほぼ平坦であり、先端で緩やかに立ち上がる。壁外へは1.04m程張り出している。覆土に天井部崩落土等はみられず、住居跡覆土下から焼土・炭化物を含む層（5・7～9層）が確認された。貯蔵穴はみられない。

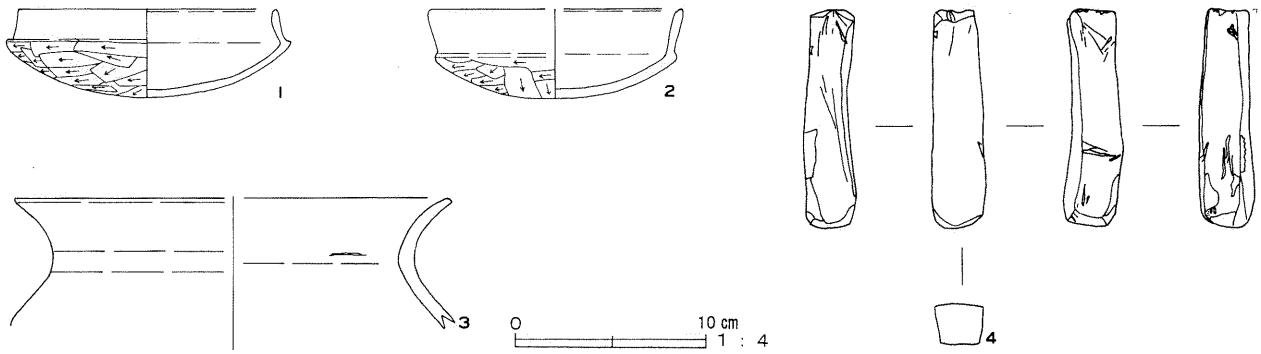
出土遺物（第284図）には、土師器杯（No.1～5）、甕（6～10）、鉢（11）、土製支脚（12）等がある。主に北東隅の貯蔵穴周辺から多数検出された。煤が付着しているものや黒斑を有するものが多い。杯はすべて口径大きく、浅身の模倣杯である。1のみ杯身模倣杯であり、その他は杯蓋模倣杯である。甕は長胴甕（6～8）、小型のもの（9）、丸胴甕（10）がある。11は上部のみの検出であるが、口縁部がほぼ直立する。12は柱状を呈し、中心に孔がみられる。下部を欠く。



第286図　E・F区110号住居跡出土遺物

第140表　E・F区110号住居跡出土遺物観察表　（第286図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	(14.0)	-	-	①④	②	明赤褐	1/6	
2	土師器杯	(13.4)	4.8	-	②①⑥	②	明赤褐	1/4	
3	土師器杯	(14.4)	3.8	-	①③	②	赤褐	2/5	
4	土師器杯	(14.6)	-	-	④①③	②	橙	1/3	
5	土師器杯	(14.0)	-	-	③④①	②	橙	1/3	
6	土師器杯	(15.0)	4.9	-	④①②⑥	②	橙	1/3	
7	土師器杯	(11.7)	-	-	③④⑥①②	②	明赤褐	1/3	
8	土師器杯	(11.8)	-	-	②①③④	②	明赤褐	1/3	
9	土師器杯	(13.0)	4.6	-	①③②④⑥	②	橙	1/3	
10	土師器杯	(11.9)	-	-	⑥④①	②	橙	1/4	
11	土師器甕	(18.6)	-	-	③①④②⑥	②	明赤褐	上位1/3	
12	土師器甕	(14.8)	-	-	①④③②⑥	②	橙	上半2/3	
13	土師器甕	-	-	6.8	①④②⑥	①	橙	下位のみ	
14	土師器鉢	(19.2)	-	-	⑥①④③②	②	橙	上半2/3	
15	土師器椀	(11.8)	4.1	(7.2)	①⑥④	②	赤褐	1/3	
16	土師器盌	(8.6)	-	-	②①④⑥	②	明赤褐	1/4	
17	土師器無頸壺	(4.2)	-	-	③①④	②	明赤褐	1/2	
18	鉄鏃	長さ　4.0　幅　1.8　厚さ　0.3						先端のみ	
19	切子玉	長さ　1.9　最大径　1.3　孔径　0.2						完形	
20	土製支脚	上部径　5.7　器高　14.5　底径　8.5						完形	
21	土錘	長さ　5.7　最大径　1.7　孔径　0.6						完形	
22	土錘	長さ　3.4　最大径　1.6　孔径　0.5						完形	
23	土錘	長さ　5.8　最大径　1.5　孔径　0.4						完形	



第287図　E・F区111号住居跡出土遺物

第141表　E・F区111号住居跡出土遺物観察表　（第287図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	13.6	4.6	-	③①④⑥	②	橙	一部欠	外面黒斑有、煤付着。
2	土師器杯	(13.4)	4.7	-	③①④②⑥	②	橙	1/2	
3	土師器甕	(22.9)	-	-	①④②⑥③	②	橙	口縁部一部	磨滅。
4	砥石	長さ　11.7　幅　2.8　厚さ　2.8						完形	全面使用。輝石安山岩製。

第142表　E・F区112号住居跡出土遺物観察表　（第283図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	(13.0)	-	-	②④③①⑥	②	橙	1/8	
2	土師器甕	-	-	7.0	④①③②	②	橙	下位のみ	

110号住居跡　AO・AP－23・24グリッドに位置する。東半分が調査区域外にあり、北東部で112号住居跡を切っている。

（第285図）

規模・平面形は不明であるが、北西壁は6.47mを測る。主軸方向はS－78°－Wを指す。確認面からの深さは48cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄色系の粘土（10～17・25～33層）が主体となる。入り組んだ層位を呈するが、概ねレンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。壁溝は南東壁以外にみられ、北西壁は壁

からやや離れて巡っている。幅は６～14cm、床面からの深さは３～８cmを測る。ピットは５つ検出された。北西隅にみられるピット以外は、柱穴と考えられる。

カマドは南西壁中央から南東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は45cm、燃焼部の幅は37cm、煙道部は中央で25cm程と狭くなり、先端で径35cmほどのピット状となる。焚口部から燃焼部は床面とほぼ同一レベルで平坦であった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は17cmを測る。煙道部はほぼ平坦であり、先端で直角に立ち上がる。壁外へは1.87m程張り出している。覆土には天井部崩落土等はみられず、焼土・炭化物を含む層（１～９層）が重なって検出された。

カマド南東脇には、径1.25×0.82mの楕円形を呈し、床面からの深さ72cmを測る貯蔵穴が確認された。底面から土師器甕（№11）が検出された。

出土遺物（第286図）には、土師器杯（№１～10）、甕（11～13）、鉢（14）、椀（15）、盌（16）、無頸壺（17）、鉄鏃（18）、切子玉（19）、土製支脚（20）、土錘（21～23）等がある。11は貯蔵穴、12・13・20はカマド周辺、その他は覆土中からの検出である。杯はすべて模倣杯である。１～４は口径大きく、浅身の杯身模倣杯であり、５～10は口径が小さく、深身の杯蓋模倣杯である。甕は長胴甕（11・12）と丸胴甕（13）がある。前者は上部のみ、後者は下部のみの検出である。14は甑の可能性もある。15は平底で器壁が厚い。底部に木葉痕を残す。16は小型のものである。内面にヘラナデの痕跡が残る。17は小型のもので、算盤玉状を呈する。口縁部に穿孔がみられる。18は刃部のみの検出である。19は完形品。20は上面に木葉痕を残す。土錘は３点検出された。22のみ小型である。

111号住居跡（第282図）（第283図）　AN・AO－23・24グリッドに位置する。複数の住居跡と重複関係にある。南東部大半を109号住居跡に切られ、北東部で114・115号住居跡、南西部から南東部にかけて112・113号住居跡を切っている。

長軸は不明、短軸は5.14mを測り、長方形を呈する。主軸方向はＳ－77°－Ｗを指す。確認面からの深さは37cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系の粘土による単一層（14層）と思われる。壁溝は北東壁にみられ、幅は13～18cm、床面からの深さは８cm程である。柱穴はみられない。

カマドは北西壁中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部から煙道部までの幅は28～35cmとほぼ一定であるが、先端で径55cmのピット状となっている。焚口部から燃焼部は床面とほぼ同一レベルで平坦であった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は５cmを測る。煙道部はほぼ平坦であり、先端で急速に立ち上がる。壁外へは1.23mほど張り出している。覆土下層に、焼土・炭化物を含む層（28～32層）が確認された。

カマド北東脇には、径57×49cmのいびつな長方形を呈し、床面からの深さ13cmの貯蔵穴がみられた。

出土遺物（第287図）には、土師器杯（№１・２）、甕（３）、砥石（４）等がある。２・

3がカマド脇から検出された以外は、覆土中からの検出である。杯はともに模倣杯であるが、1は杯身模倣杯、2は杯蓋模倣杯である。やや浅身である。1は外面に黒斑を有し、煤の付着がみられた。3は丸胴甕である。上部のみの検出である。4は全面を使用している。完形品。

112号住居跡（第282図）（第283図）　AN・AO－23・24グリッドに位置する。複数の住居跡と重複関係にあり、北西部は109・111号住居跡、南西部は110号住居跡に切られている。南東部は調査区域外にある。

規模・平面形は不明である。主軸方向はS－64°－Wを指す。確認面からの深さは36cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土はほとんど図示できなかったが、黄色粘土による自然堆積層（22層）であった。

壁溝、柱穴は検出されなかった。

カマドは南西壁に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は58cm、燃焼部幅は50cmを測り、煙道部幅は35cm前後で一定となっている。焚口部から燃焼部は床面とほぼ同一レベルであった。土師器杯（№1）、甕（2）が検出された。燃焼部と煙道部の境には10cmほどの段差がある。煙道部はほぼ平坦であり、先端で直角に立ち上がる。壁外へは1.4m程張り出している。覆土に天井部崩落土等はみられず、住居跡覆土の下から焼土・炭化物を含む層（15～21層）が検出された。

カマド南東脇には貯蔵穴がみられたが、南側半分を110号住居跡に切られているため、規模・平面形は不明である。

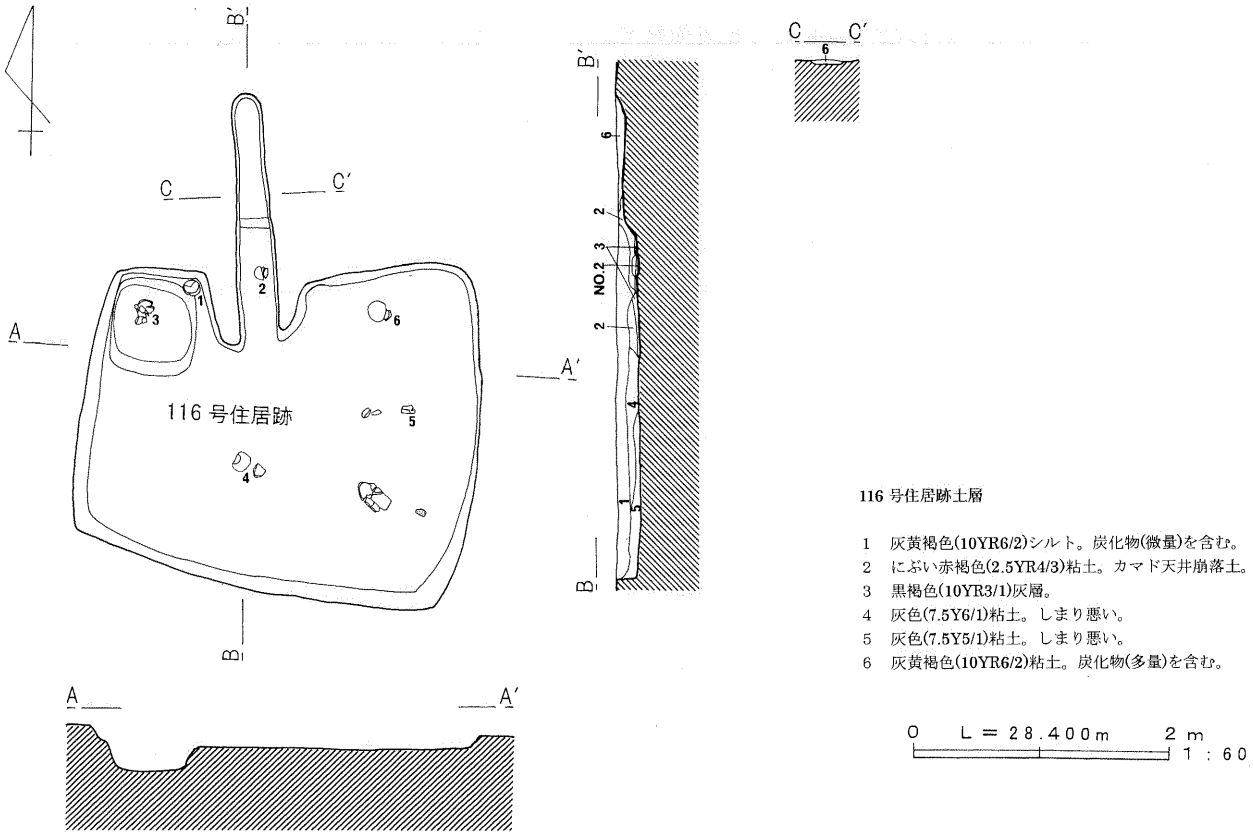
出土遺物（第283図）には、土師器杯（№1）、甕（2）の2点のみである。1は口径小さく、身の深い模倣杯である。2は長胴甕の底部である。カマドから検出された。

113号住居跡（第282図）（第283図）　AN・AO－23・24グリッドに位置する。113号住居跡と単独住居にしたが、112号住居跡と同一で、カマドを造り替えたものである。113号住居跡としたものが、古い段階のカマドである。

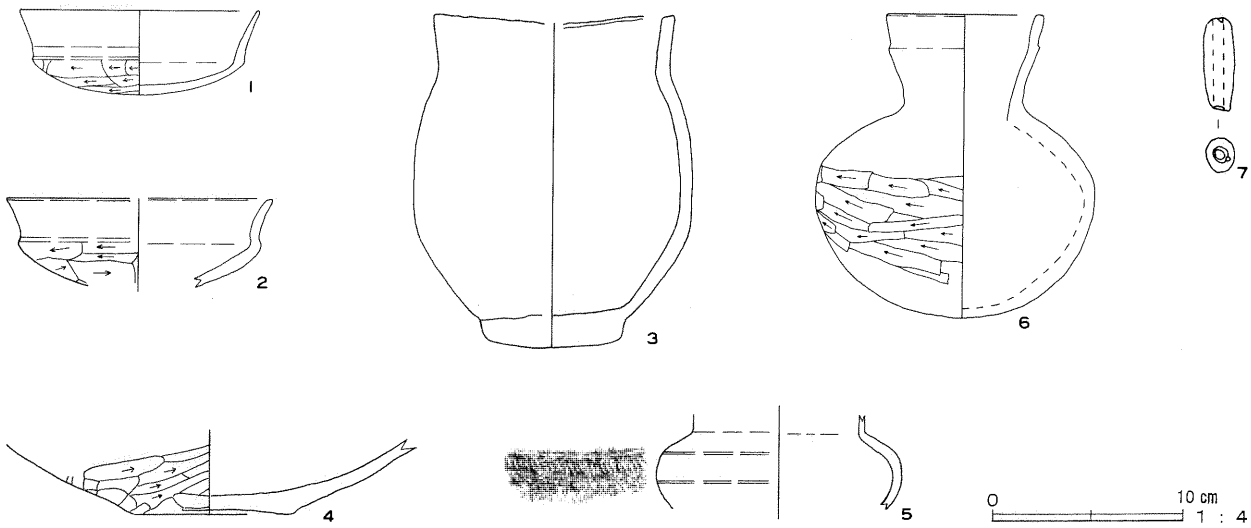
カマドは南西壁に設けられており、112号住居跡カマドの北西に位置する。袖部は南東に一部残るのみである。煙道部は30cm前後で一定となっている。燃焼部は床面と同一レベルであった。燃焼部と煙道部の境には6cmほどの段を持つ。壁外へは1.5m程張り出している。覆土に天井部崩落土等はみられず、焼土・炭化物を含む層（1～4層）が検出された。

遺物は、土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

114号住居跡（第281図）　AN－23グリッドに位置する。複数の住居跡と重複関係にあり、また南東部が調査区域外にあることから、規模・平面形等は不明である。北東部は108号住居跡、南西部は111・112号住居跡に切られ、北西部では115号住居跡を切っている。確認面からの深さは53cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土はほとんど図示できなかったが、にぶい黄褐色粘土層（3層）による自然堆積層である。壁溝は北西部において検出された。幅は7cm前後、深さは床面から4cmを測る。



第288図　E・F区116号住居跡



第289図　E・F区116号住居跡出土遺物

第143表　E・F区116号住居跡出土遺物観察表　(第289図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	12.6	4.4	-	③①④	②	橙	一部欠	外面煤付着。
2	土師器杯	(14.0)	-	-	①④③②	②	橙	2/3	
3	土師器甕	(12.6)	17.7	(7.3)	⑥④①③	②	にぶい橙	2/3	磨滅。
4	土師器甕	-	-	8.8	③①④⑥②	②	橙	底部のみ	
5	須恵器壺	-	-	-	①④③⑥	②	灰白	1/3	
6	土師器壺	8.4	16.1	-	③①	②	橙	完形	
7	土錘	長さ 4.9 最大径 1.5 孔径 0.5						完形	

柱穴、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物は、土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

115号住居跡　AN－23グリッドに位置する。複数の住居跡と重複関係にあることから、その大半を欠く。北西部は92号住居跡、南東部から南西部にかけては111・114号住居跡に切られており、重複関係にある住居跡の中では最も古い。
(第281図)

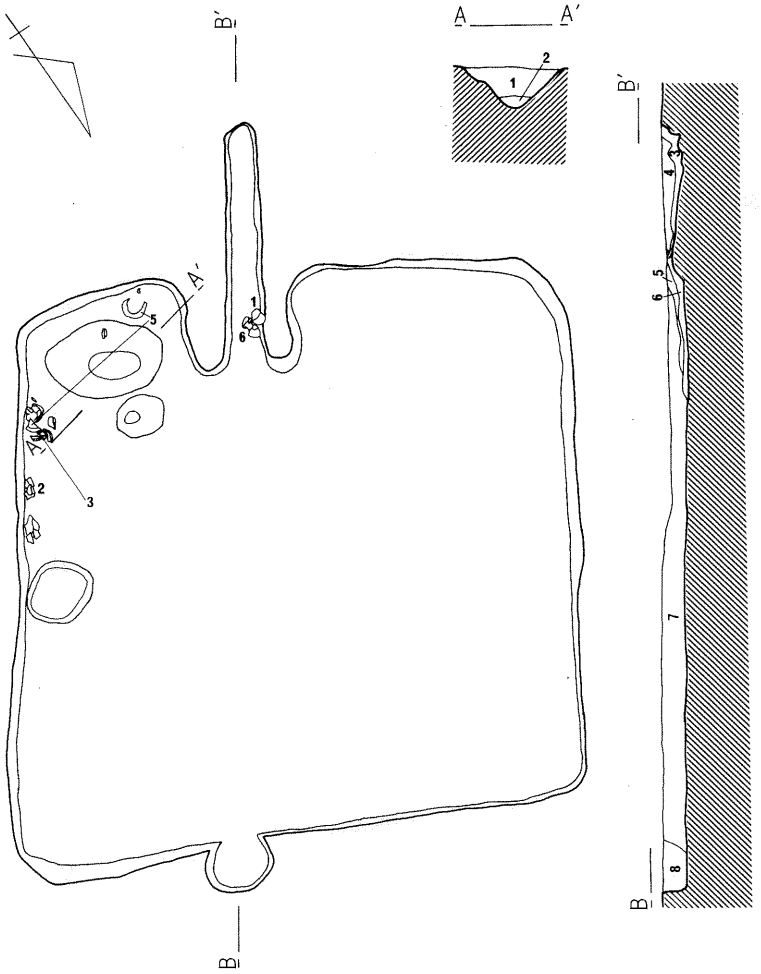
規模・平面形は不明であるが、南西－北東軸は3.03m程を測る。床面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、黄褐色系の粘土による自然堆積層であった。

壁溝、柱穴、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物は、土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

116号住居跡　AN－25グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。
(第288図)

長軸3.18m、短軸2.78mの長方形を呈する。主軸方向はN－2°－Wを指す。確認面から

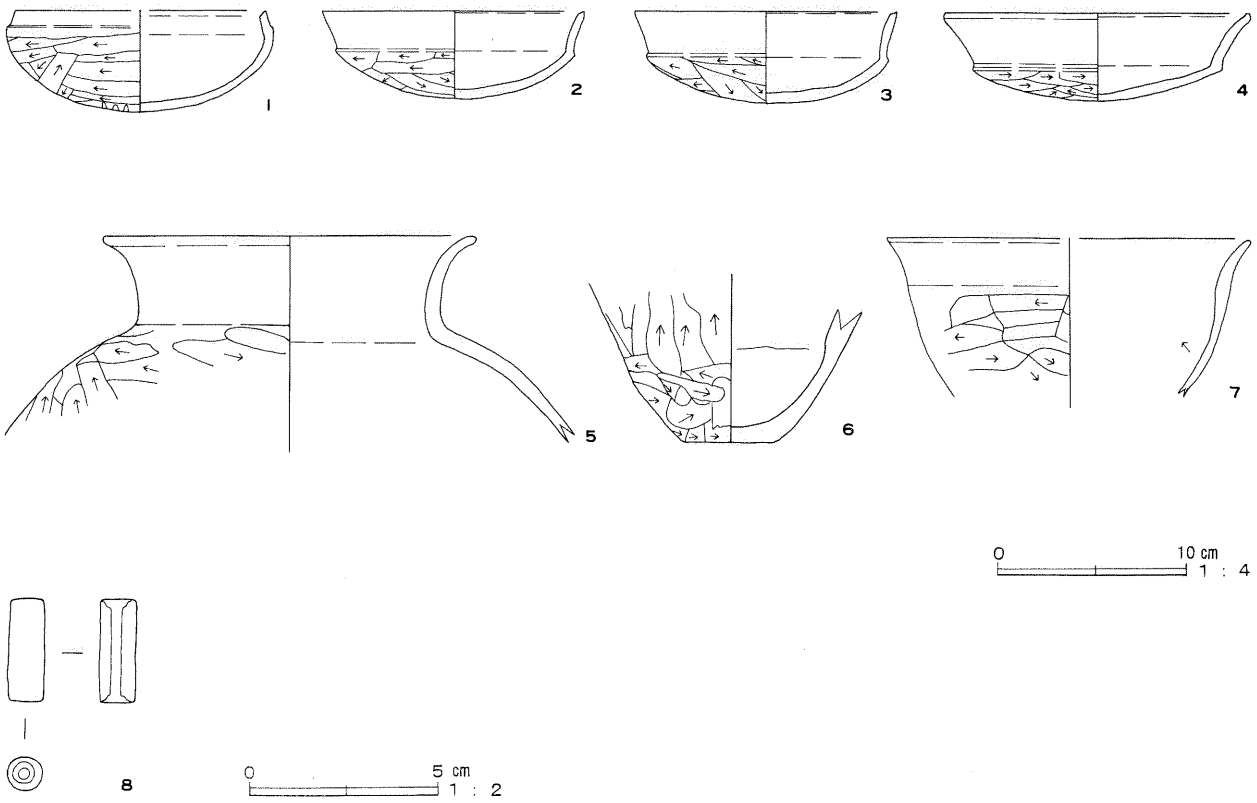


117号住居跡土層

1　にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土・焼土ブロック、炭化物を少量含む。しまり良い。
2　褐灰色(10YR5/1)粘土。焼土・炭化物ブロックを含む。しまり良い。
3　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。焼土・炭化物ブロックを含む。しまりやや良い。
4　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土。焼土ブロック、灰色(10YR5/1)粘土ブロックを含む。しまりやや良い。
5　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土。焼土ブロックを含む。しまりやや悪い。
6　灰色(10YR5/1)粘土。焼土・炭化物ブロックを含む。しまりやや悪い。
7　にぶい黄褐色(10YR5/1)粘土。焼土ブロック(少量)を含む。しまり良い。
8　褐色(7.5YR4/4)粘土。しまり良い。

0　L＝28.600m　2m
1：60

第290図　E・F区117号住居跡



第291図　E・F区117号住居跡出土遺物

第144表　E・F区117号住居跡出土遺物観察表　（第291図）

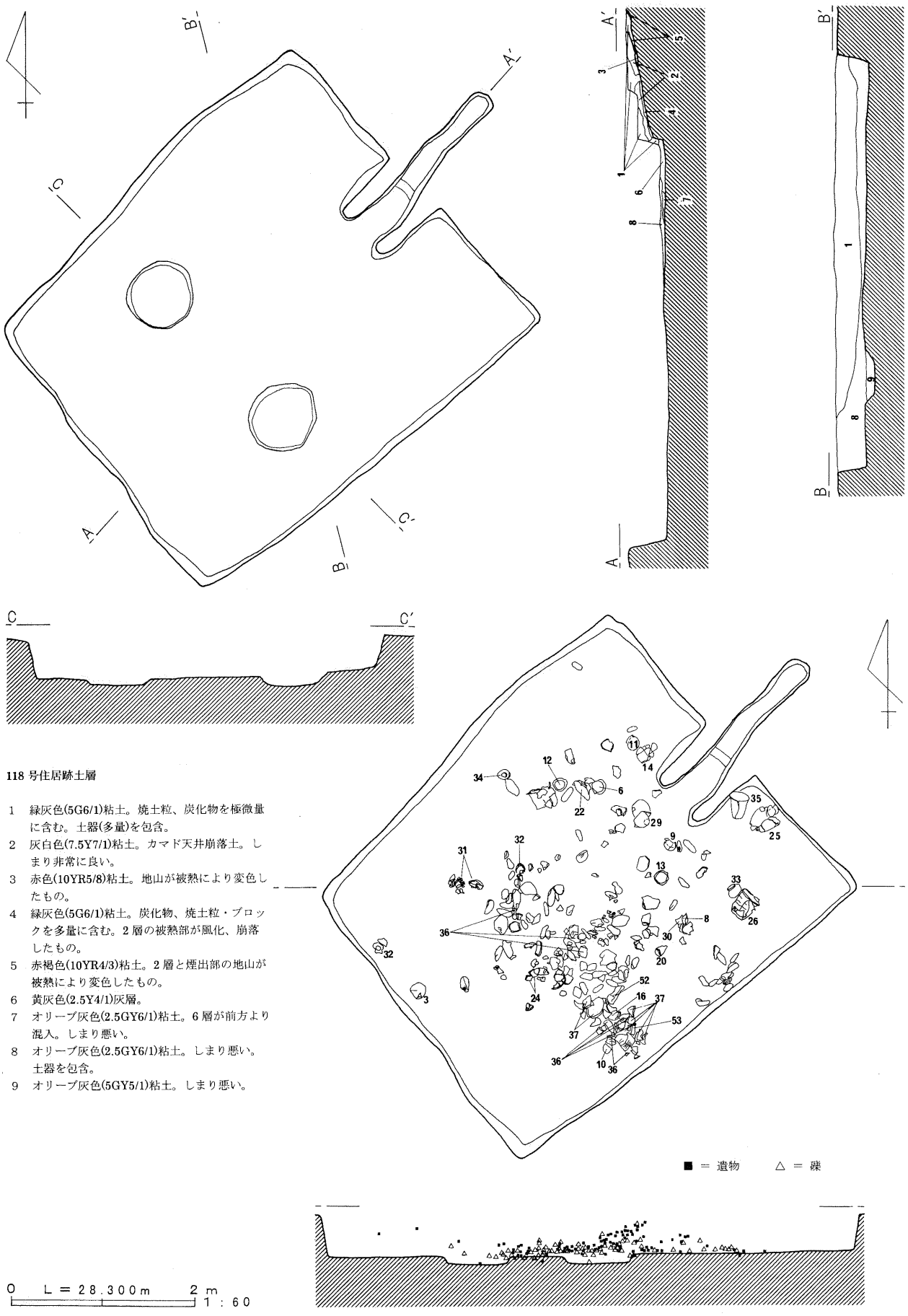
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	13.2	5.4	-	①②③④	②	にぶい赤	2/3	
2	土師器杯	13.7	4.6	-	①②③④⑥	②	橙	一部欠	
3	土師器杯	13.8	4.8	-	②①③④⑥	②	明赤	一部欠	
4	土師器杯	16.0	4.7	-	①②④③	②	橙	一部欠	
5	土師器甕	19.7	-	-	⑥③②①	②	橙	上位2/3	
6	土師器甕	-	-	4.6	②①③⑥④	②	浅黄橙	下位4/5	
7	土師器鉢	(19.1)	-	-	⑥②①③	②	明赤褐	上半1/4	
8	管玉	長さ 2.7	最大径 1.0	孔径 0.3				完形	凝灰岩製。

の深さは18cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は上層（1層）に灰黄褐色シルト、下層（4・5層）に灰色粘土を含む自然堆積層であった。壁溝、柱穴はみられない。

カマドは北壁中央からやや西寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。煙道部の幅は30cm前後でほぼ一定となっている。煙道部中央までは、住居床面からの掘り込みはみられない。燃焼部からは土師器杯（No.2）が検出された。煙道部の中央付近には、段が付けられていた。高低差は10cmを測り、壁外へは1.44mほど張り出している。炭化物を含む層（6層）の下から、僅かに天井部崩落土（2層）、灰層（3層）が検出された。

カマド西側には、径76×67cmの方形を呈し、床面からの深さ22cmを測る貯蔵穴が確認された。土師器甕（3）が検出された。

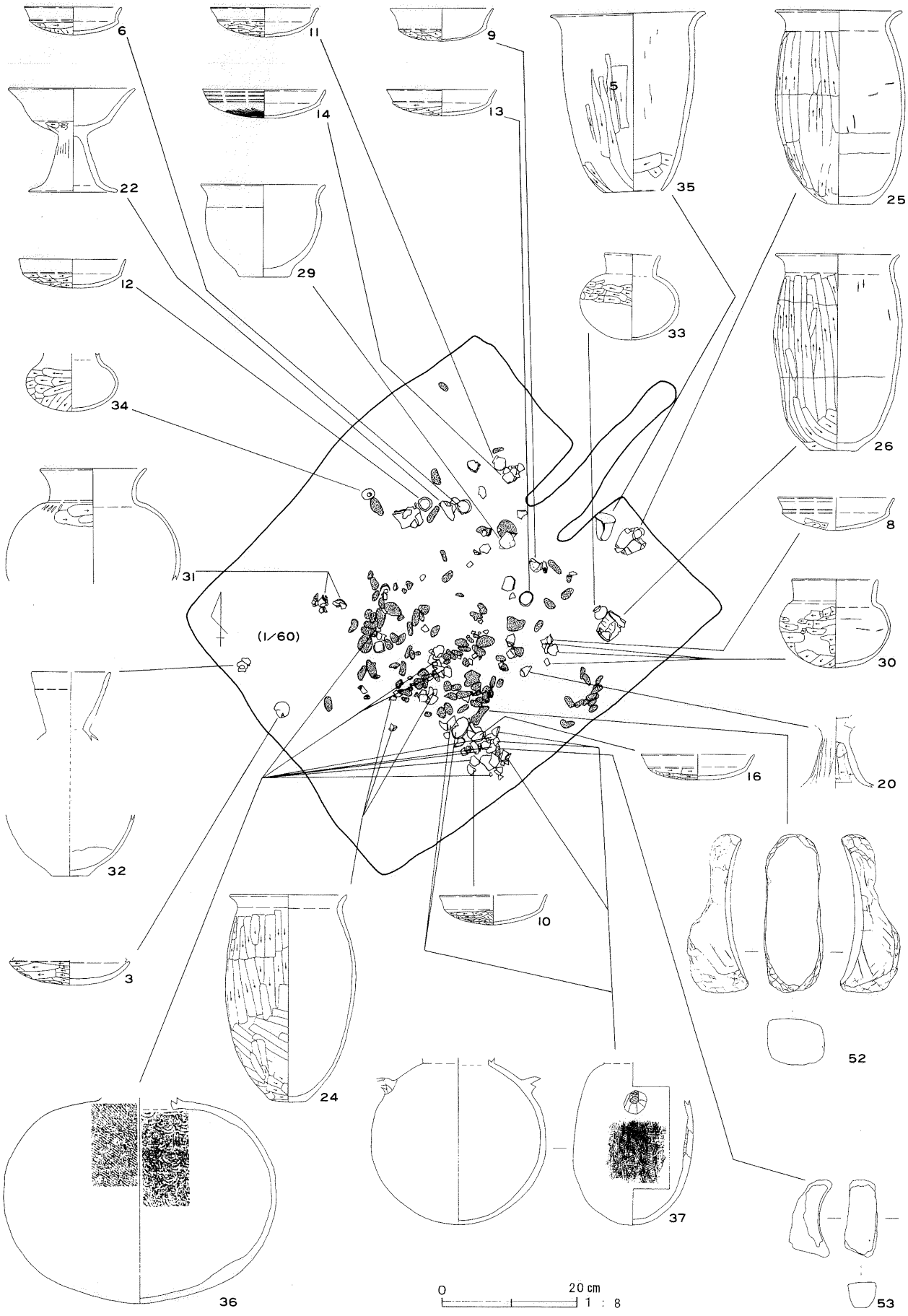
出土遺物（第289図）には、土師器杯（No.1・2）、甕（3・4）、壺（6）、須恵器壺（5）、土錘（7）等がある。1・2がカマド及びその周辺、3が貯蔵穴、4～6が床面上から検



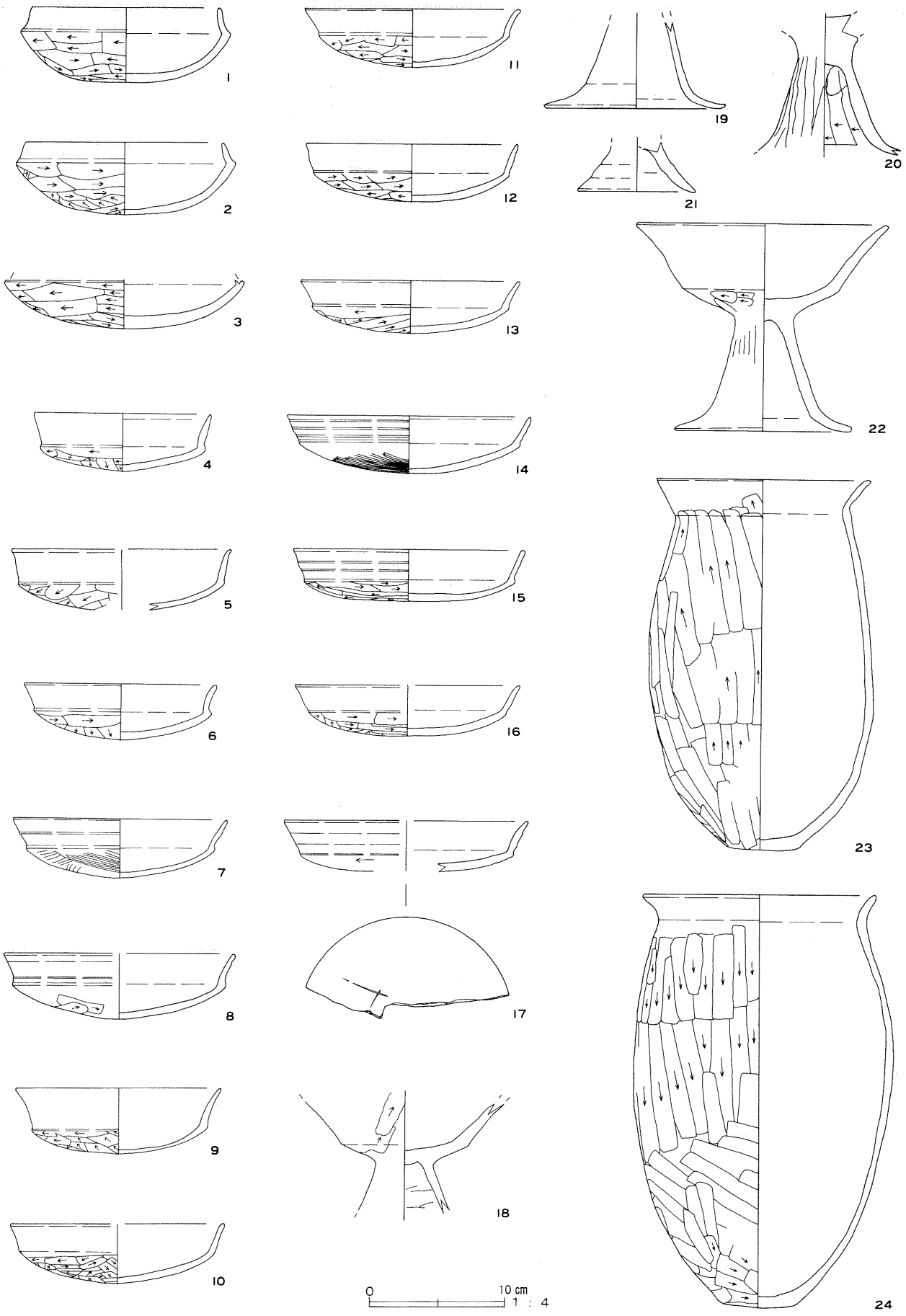
118 号住居跡土層

1　緑灰色(5G6/1)粘土。焼土粒、炭化物を極微量に含む。土器(多量)を包含。
2　灰白色(7.5Y7/1)粘土。カマド天井崩落土。しまり非常に良い。
3　赤色(10YR5/8)粘土。地山が被熱により変色したもの。
4　緑灰色(5G6/1)粘土。炭化物、焼土粒・ブロックを多量に含む。2 層の被熱部が風化、崩落したもの。
5　赤褐色(10YR4/3)粘土。2 層と煙出部の地山が被熱により変色したもの。
6　黄灰色(2.5Y4/1)灰層。
7　オリーブ灰色(2.5GY6/1)粘土。6 層が前方より混入。しまり悪い。
8　オリーブ灰色(2.5GY6/1)粘土。しまり悪い。土器を包含。
9　オリーブ灰色(5GY5/1)粘土。しまり悪い。

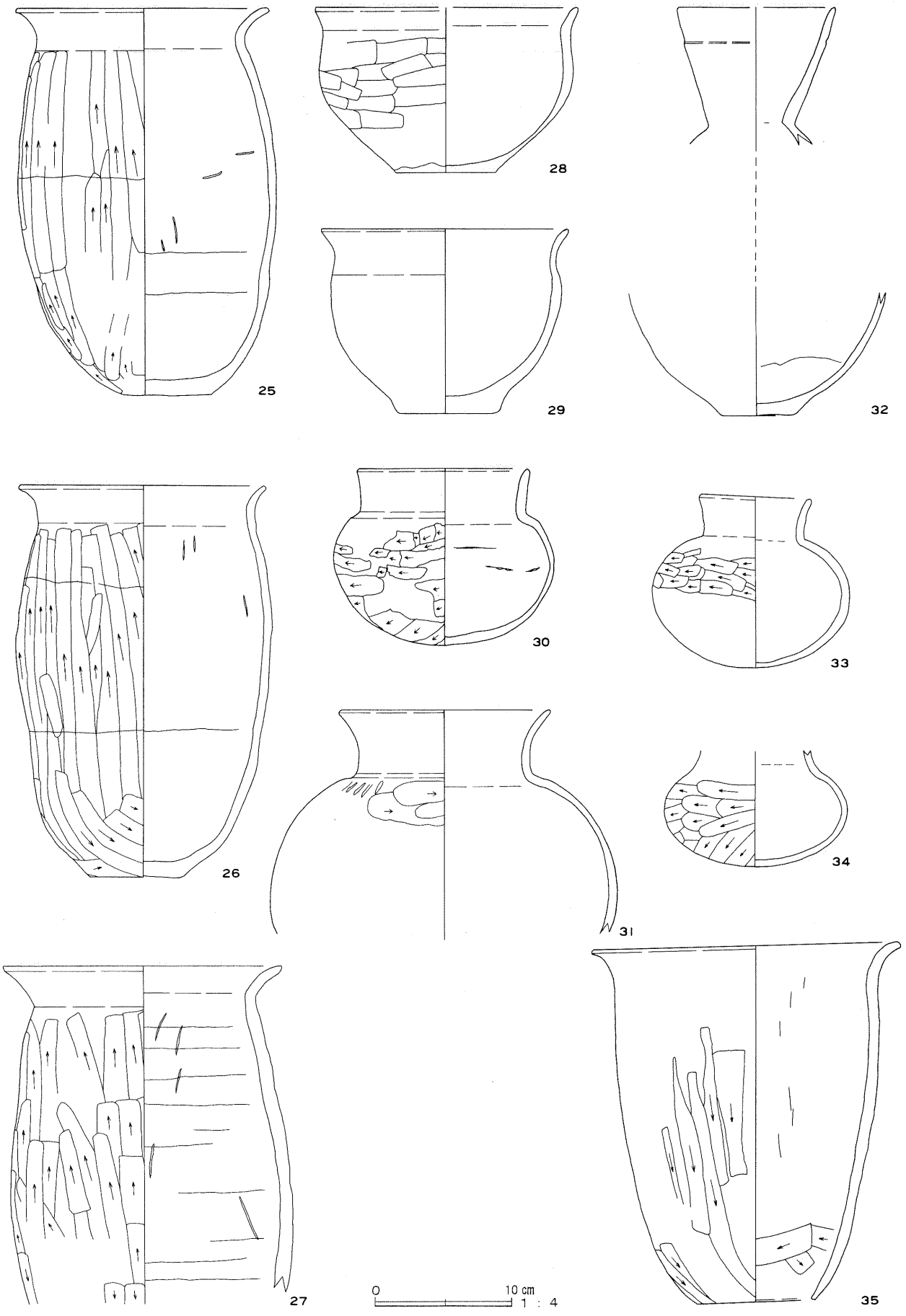
第292図　E・F区118号住居跡・遺物出土状況(1)



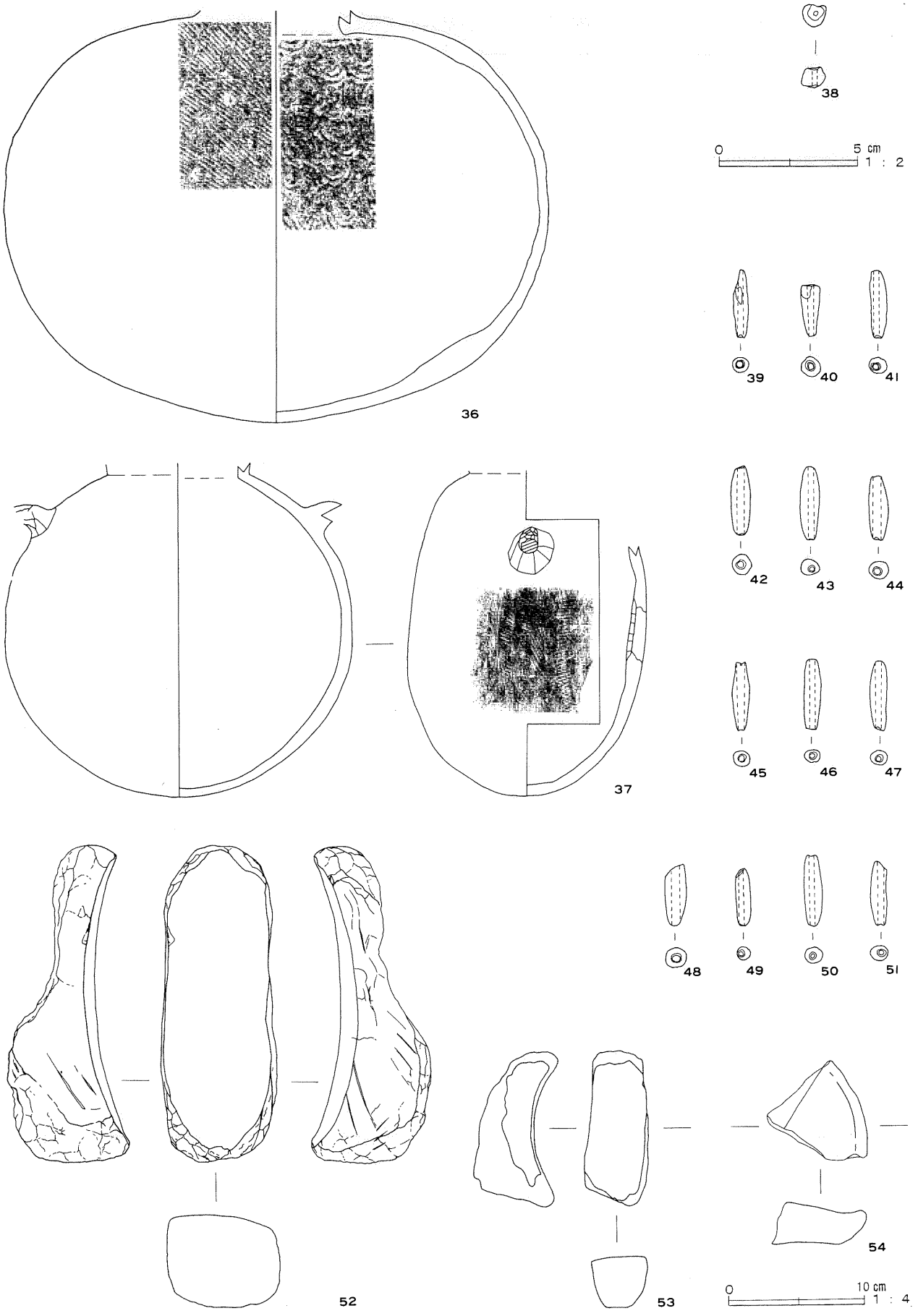
第293図　E・F区118号住居跡遺物出土状況(2)



第294図　E・F区118号住居跡出土遺物(1)



第295図　E・F区118号住居跡出土遺物(2)



第296図　E・F区118号住居跡出土遺物(3)

第145表　E・F区118号住居跡出土遺物観察表　（第294～296図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	13.6	5.6	-	④①②③⑥	②	明赤	一部欠	
2	土師器杯	14.2	5.4	-	④①②③⑥	②	にぶい赤	完形	
3	土師器杯	-	-	-	④①②③⑥	②	にぶい褐	口縁部欠	
4	土師器杯	12.8	4.2	-	④①②③	②	にぶい橙	2/3	
5	土師器杯	(16.0)	-	-	④①②③	②	明赤褐	1/3	
6	土師器杯	14.0	4.1	-	④①②④⑥	②	褐灰	5/6	
7	土師器杯	15.0	4.3	-	④①②	②	黒	2/3	
8	土師器杯	(16.8)	4.8	-	①④③	②	橙	1/4	
9	土師器杯	15.0	4.8	-	④①②③	②	橙	2/3	
10	土師器杯	(15.6)	4.4	-	④①②③	②	褐灰	1/2	
11	土師器杯	15.6	4.3	-	③①④②	②	明赤褐	3/4	
12	土師器杯	15.4	4.2	-	③①②④⑥	②	橙	完形	
13	土師器杯	16.0	3.8	-	③①④②⑥	②	橙	完形	
14	土師器杯	17.7	4.2	-	④①②③⑥	②	赤褐	一部欠	
15	土師器杯	17.0	3.8	-	④①②③⑥	②	黒赤灰	3/4	
16	土師器杯	(16.6)	3.7	-	①④②③	②	橙	2/3	
17	土師器杯	(17.8)	(3.8)	-	①③⑥	②	にぶい橙	1/3	磨滅。
18	土師器高杯	-	-	-	①③	②	橙	1/4	
19	土師器高杯	-	-	13.0	①④⑥	②	橙	脚部のみ	
20	土師器高杯	-	-	-	②①④③	②	明赤褐	脚部のみ	
21	土師器高杯	-	-	8.6	②③⑥①④	②	浅黄橙	脚部のみ	
22	土師器高杯	18.5	15.6	13.0	③①	②	橙	5/6	二次加熱。磨滅。
23	土師器甕	15.6	27.3	4.8	②①	②	橙	3/4	
24	土師器甕	17.1	30.4	5.3	②①	②	灰褐	4/5	
25	土師器甕	18.5	28.4	6.0	②①	②	橙	7/8	
26	土師器甕	18.1	28.8	6.6	②①④	②	橙	3/4	
27	土師器甕	20.3	-	-	②①③	②	にぶい橙	2/3	二次加熱。
28	土師器甕	(19.2)	12.2	7.3	①③②	②	にぶい橙	1/2	
29	土師器甕	18.1	13.6	7.5	③②①⑥	②	橙	5/6	磨滅。
30	土師器壺	12.3	13.1	-	⑥①②	②	明赤褐	4/5	
31	土師器壺	15.0	-	-	③②①④⑥	②	明赤褐	上半のみ	磨滅。
32	土師器壺	(11.6)	-	5.5	①③②④	②	明赤褐	2/10	磨滅。
33	土師器壺	8.0	12.8	-	③①	②	橙	一部欠	
34	土師器壺	-	-	-	③①	②	橙	口縁部欠	
35	土師器甑	22.7	26.2	8.6	③①	②	明赤褐	4/5	黒斑有。
36	須恵器横瓶	-	-	-	②①	②	灰	2/3	内外面剝離。
37	須恵器提瓶	-	-	-	①③	②	灰白	3/4	内面剝離。
38	土製丸玉	長さ　0.8　径　0.9　孔径　0.2						完形	
39	土錘	長さ　5.0　最大径　1.2　孔径　0.7						完形	
40	土錘	長さ　3.9　最大径　1.5　孔径　0.7						完形	
41	土錘	長さ　5.0　最大径　1.3　孔径　0.6						完形	
42	土錘	長さ　5.1　最大径　1.2　孔径　0.9						完形	
43	土錘	長さ　5.4　最大径　1.4　孔径　0.4						完形	
44	土錘	長さ　4.8　最大径　1.4　孔径　0.5						完形	
45	土錘	長さ　5.1　最大径　1.2　孔径　0.4						完形	
46	土錘	長さ　5.2　最大径　1.2　孔径　0.4						完形	
47	土錘	長さ　5.1　最大径　1.2　孔径　0.4						完形	
48	土錘	長さ　5.1　最大径　1.5　孔径　0.6						完形	
49	土錘	長さ　4.3　最大径　1.0　孔径　0.4						完形	
50	土錘	長さ　5.3　最大径　1.3　孔径　0.4						完形	
51	土錘	長さ　4.7　最大径　1.3　孔径　0.4						完形	
52	砥石	長さ　23.2　幅　8.3　厚さ　7.2						完形	三面使用。流紋岩製。
53	砥石	長さ　11.4　幅　5.2　厚さ　6.0						完形	二面使用。流紋岩製。
54	砥石	縁辺部　1.5　厚さ　3.0						大半欠	一面使用。

出された。7は覆土中からの検出である。杯はともにやや深身の模倣杯である。1は外面に煤が付着していた。甕は小型のもの（3）と丸胴甕（4）がある。3は摩滅が顕著であった。4は底部のみの検出である。5は口縁部と底部を欠くが、胴部が扁平な球形を呈する。胴上部には波状文が施文されている。末野産。6は小型のものである。口縁部がほぼ直立する。土錘は1点のみ検出された。完形品である。

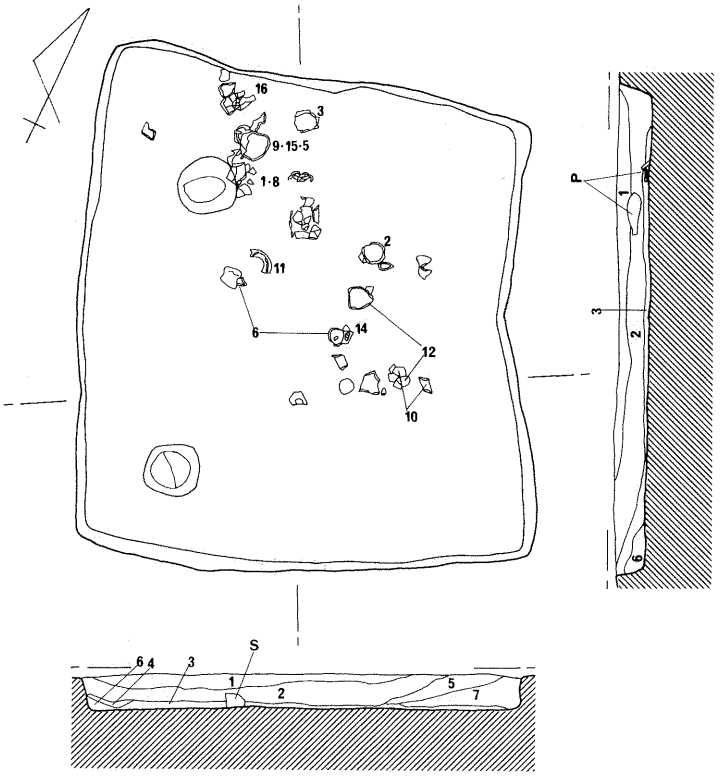
117号住居跡（第290図）　AN・AO－24・25グリッドに位置する。北東壁中央でピットに切られている以外は、他の遺構との重複関係はみられない。

長軸4.7m、短軸4.51mの方形を呈する。主軸方向はS－33°－Wを指す。確認面からの深さは19cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土はにぶい黄褐色土の単一層（7層）で、自然堆積と考えられる。壁溝はみられない。ピットは2つ確認されているが、その位置から柱穴とは思われない。

カマドは南西壁ほぼ中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部から燃焼部の幅は34cm、煙道部は27cm程でほぼ一定となっている。焚口部から燃焼部は床面と同一レベルで平坦であった。燃焼部と煙道部の境には段は設けられており、高低差は9cmを測る。燃部からは、土師器杯（No.1）、甕の底部（6）が検出された。煙道部は先端に向かって徐々に下る形状を呈する。壁外へは1.21m程張り出している。覆土に天井部崩落土等は確認されず、焼土・炭化物を含む層（3～6層）が検出された。

カマド南東脇には、径95×62cmの楕円形を呈し、深さ33cmの貯蔵穴が検出された。覆土に焼土・炭化物を含んでいた。

出土遺物（第291図）には、土師器杯（No.1～4）、甕（5・6）、鉢（7）、管玉（8）等がある。主にカマド及びその周辺、南東壁沿いの床面直上から検出された。杯はすべて模倣杯である。1のみ杯身模倣杯であり、その他は杯蓋模倣杯である。いずれも口径大きく、浅身である。甕は丸胴甕（5）と長胴甕（6）があるが、5は上部、6は下部のみの

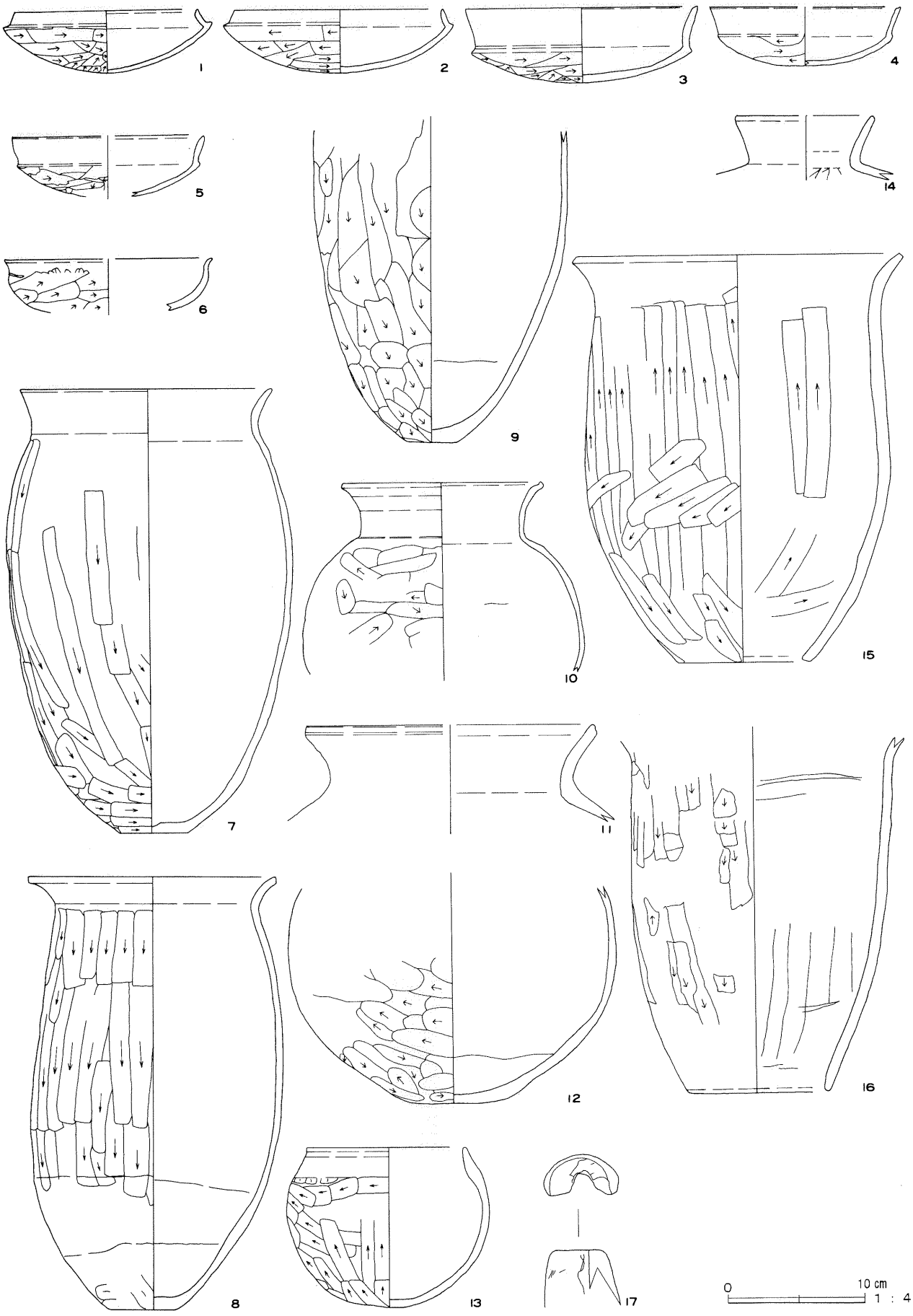


119 号住居跡土層

1　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト。焼土粒、炭化物を微量に含む。
2　灰黄褐色(10YR5/3)粘土。1層と同質。しまり悪い。
3　黒褐色(10YR3/1)炭化物層。焼土粒(少量)を含む。
4　黒褐色(10YR3/1)炭化物層。3層と同質。焼土ブロックを含む。
5　灰黄色(10YR5/3)粘土。炭化物(極微量)、灰色(N6/0)粘土(ブロック状)を含む。
6　にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。壁際崩落土。地山に近似。しまり悪い。
7　灰色(N6/0)粘土。しまり悪い。粘性強い。土器を包含。

0　L＝28.300m　2m
1：60

第297図　E・F区119号住居跡



第298図　E・F区119号住居跡出土遺物

第146表　E・F区119号住居跡出土遺物観察表　(第298図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	13.4	4.5	-	②①④③⑥	②	にぶい赤褐	2/3	
2	土師器杯	15.2	4.5	-	④①②③	②	褐灰	完形	
3	土師器杯	17.0	5.5	-	①②③④⑥	①	褐	3/4	
4	土師器杯	(6.9)	4.3	-	③①②④	②	橙	1/2	
5	土師器杯	(13.9)	-	-	②①⑥③④	②	橙	4/5	
6	土師器杯	(15.1)	-	-	②①⑥③④	①	にぶい赤褐	1/4	
7	土師器甕	18.4	32.7	5.0	②③	②	にぶい橙	4/5	
8	土師器甕	18.0	31.9	4.7	②①	②	橙	4/5	煤付着。
9	土師器甕	-	-	3.5	⑥①③	②	にぶい橙	1/2	
10	土師器甕	14.4	-	-	③②⑥	②	にぶい橙	上半2/3	
11	土師器甕	(21.1)	-	-	②①③⑥	②	橙	口縁部1/2	
12	土師器甕	-	-	7.0	⑥②①③	②	にぶい橙	下半1/3	
13	土師器鉢	11.7	11.8	-	⑥②③	②	橙	5/6	
14	土師器壺	9.8	-	-	⑥②①③	②	にぶい橙	口縁部のみ	
15	土師器甑	24.1	30.0	9.6	③①②	②	橙	9/10	黒斑有。
16	土師器甑	-	-	10.1	②①	②	にぶい橙	下半3/4	
17	土製支脚	上部径　3.3　上部孔径　0.8　器高　-						上位のみ	

検出である。7は鉢としたが、甑の可能性もある。8は完形品。

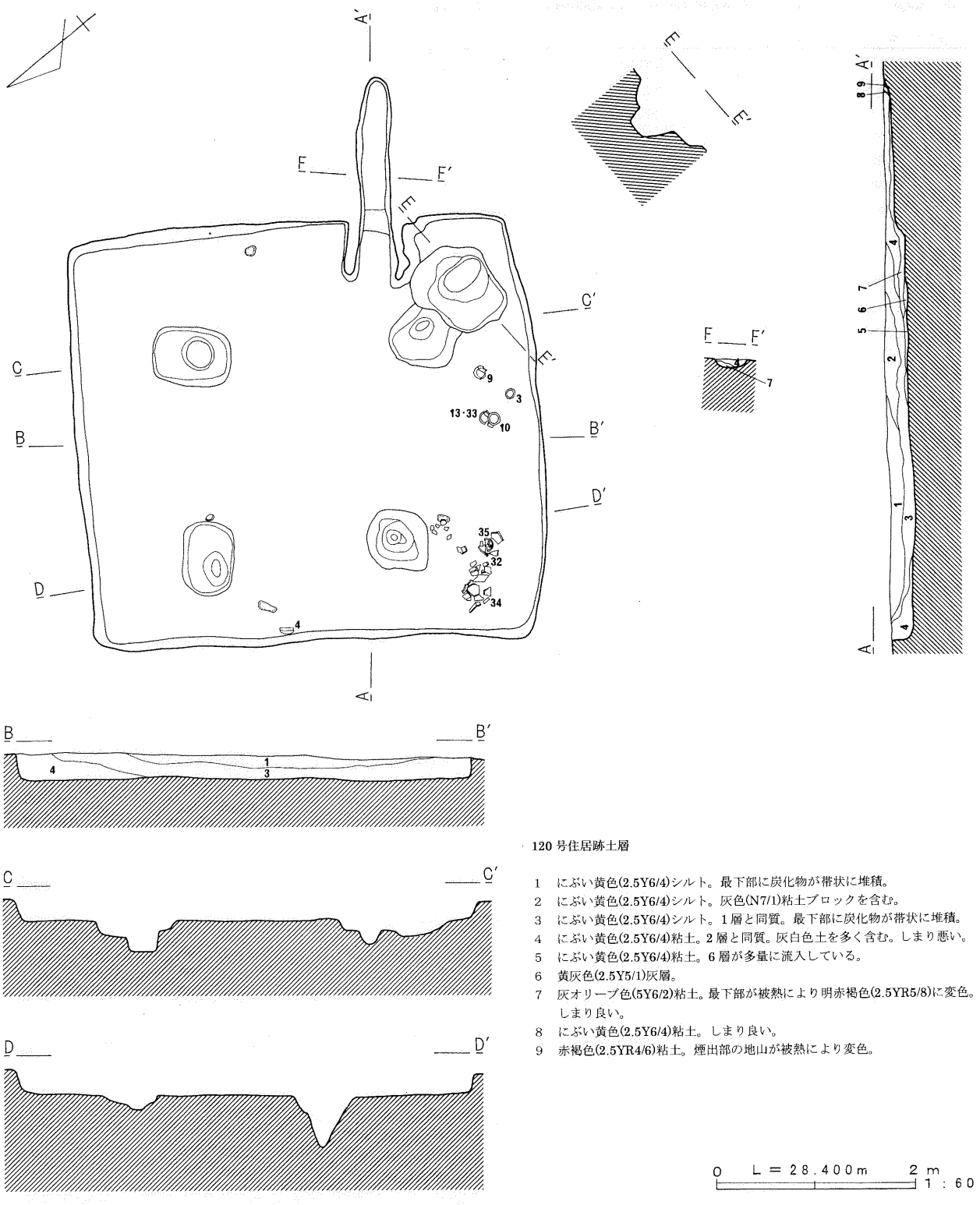
118号住居跡　AN・AO－26グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

(第292図)　長軸4.77m、短軸4.22mの長方形を呈する。主軸方向はN－48°－Eを指す。確認面からの深さは42cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は灰色系の粘土(1・8層)二層からなる自然堆積層である。ピットは2つ検出された。ともに径70～80cmと大きく、深さは4～11cmと浅い。その位置からみて柱穴の可能性が考えられる。

(第293図)　壁溝、貯蔵穴はみられない。

カマドは北東壁中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所がわずかに確認された。焚口部から燃焼部の幅は38cm、煙道部はやや蛇行するが、幅約28cm程を測る。焚口部から燃焼部は床面とほぼ同一レベルで平坦である。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は13cmを測る。煙道部は先端に向かって緩やかに立ち上がる。壁外へは1.26m程張り出している。覆土は2層が天井部崩落土で、その下に焼土・炭化物を含む4層と灰層(6層)がみられた。焚口部と煙道部の奥壁は、被熱して赤色化していた。

出土遺物(第294～296図)は、土師器杯(No.1～17)、高杯(18～22)、甕(23～29)、壺(30～34)、甑(35)、須恵器横瓶(36)、提瓶(37)、土製丸玉(38)、土錘(39～51)、砥石(52～54)等多数みられた。ほぼ全面から散らばって検出されたが、主に1層から検出されていることから、8層堆積後に投棄されたものと考えられる。土師器杯はすべて模倣杯である。1～3は杯身模倣杯、その他は杯蓋模倣杯である。口径が大きく、浅身のものが多い。17は内面にヘラによる刻みがみられた。高杯は脚部のみの検出が多いが、すべて器高が高く、裾が大きく広がるタイプである。18・22は口縁部が大きく外反している。22は摩滅が顕著であり、二次加熱を受けていた。甕は長胴甕(23～27)と小型のもの(28・29)がある。後者は鉢としても良いものかもしれない。27は二次加熱を受けている。壺は器形



120号住居跡土層

1　にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト。最下部に炭化物が帯状に堆積。
2　にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト。灰色(N7/1)粘土ブロックを含む。
3　にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト。1層と同質。最下部に炭化物が帯状に堆積。
4　にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。2層と同質。灰白色土を多く含む。しまり悪い。
5　にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。6層が多量に流入している。
6　黄灰色(2.5Y5/1)灰層。
7　灰オリーブ色(5Y6/2)粘土。最下部が被熱により明赤褐色(2.5YR5/8)に変色。しまり良い。
8　にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。しまり良い。
9　赤褐色(2.5YR4/6)粘土。煙出部の地山が被熱により変色。

第299図　E・F区120号住居跡

にバラエティがみられる。30は鉢、31は丸胴甕に近い。32は器高が高い。胴上部を欠く。33・34は小型のものである。丸底。35は胴部に把手を持たないタイプである。黒斑を有する。須恵器はすべて末野産である。36・37はともに口縁部を欠く。剝離している箇所がみ

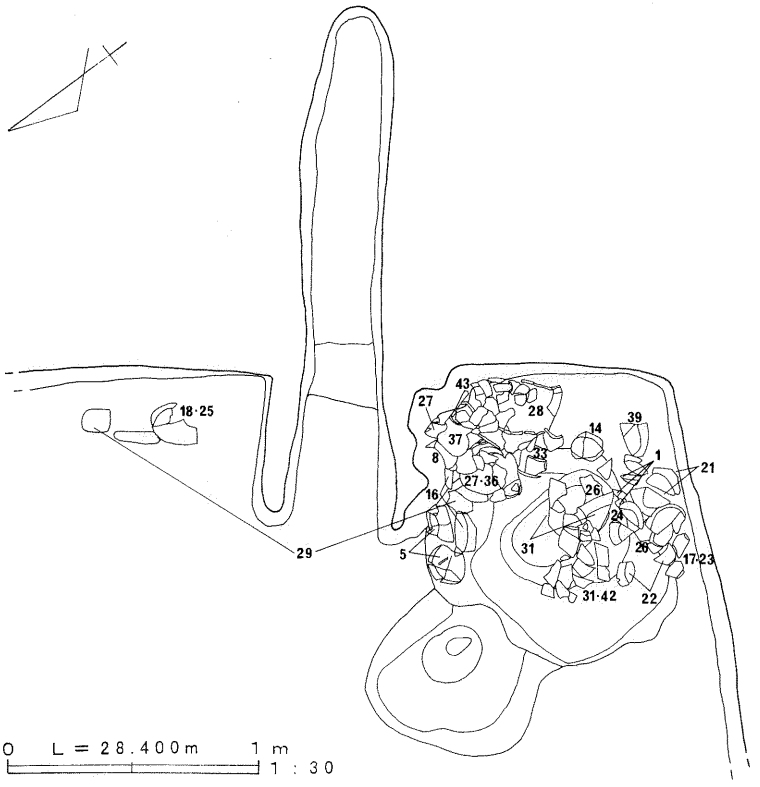
られた。土製丸玉は1点、土錘は13点検出された。土錘は長さ5cm前後、最大径1.2～1.5cm、孔径0.5cm前後を測る。すべて完形品である。砥石は3点検出された。52は三面、53は二面、54は一面のみ使用している。52・53は完形品、54は大半を欠く。

119号住居跡　AN・AO－25グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

(第297図)　長軸4.12m、短軸3.67mのいびつな方形を呈する。南北軸方向はN－22°－Eを指す。確認面からの深さは28cmを測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は色調が様々であるが、レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。床面直上には炭化物層（3・4層）がみられた。ピットは2つ検出された。その位置からみて柱穴の可能性があるが、北東方向に対になる柱穴はみられなかった。

壁溝、カマド、貯蔵穴等は確認されなかった。

出土遺物（第298図）には、土師器杯（No.1～6）、甕（7～12）、鉢（13）、壺（14）、甑（15・16）、土製支脚（17）等がある。住居跡中央から北西辺中央の床面直上にかけて多数検出された。杯はすべて模倣杯である。1・2は杯身模倣杯、3～6は杯蓋模倣杯である。6は体部と底部境に稜が不明瞭である。甕は長胴甕（7～9）、丸胴甕（10～12）がある。8は煤の付着がみられた。13は口縁部が内傾している。14は小型のものである。甑はともに胴部に把手の付かないタイプである。15は黒斑を有する。17は中心に孔がみられる。上部のみの検出である。



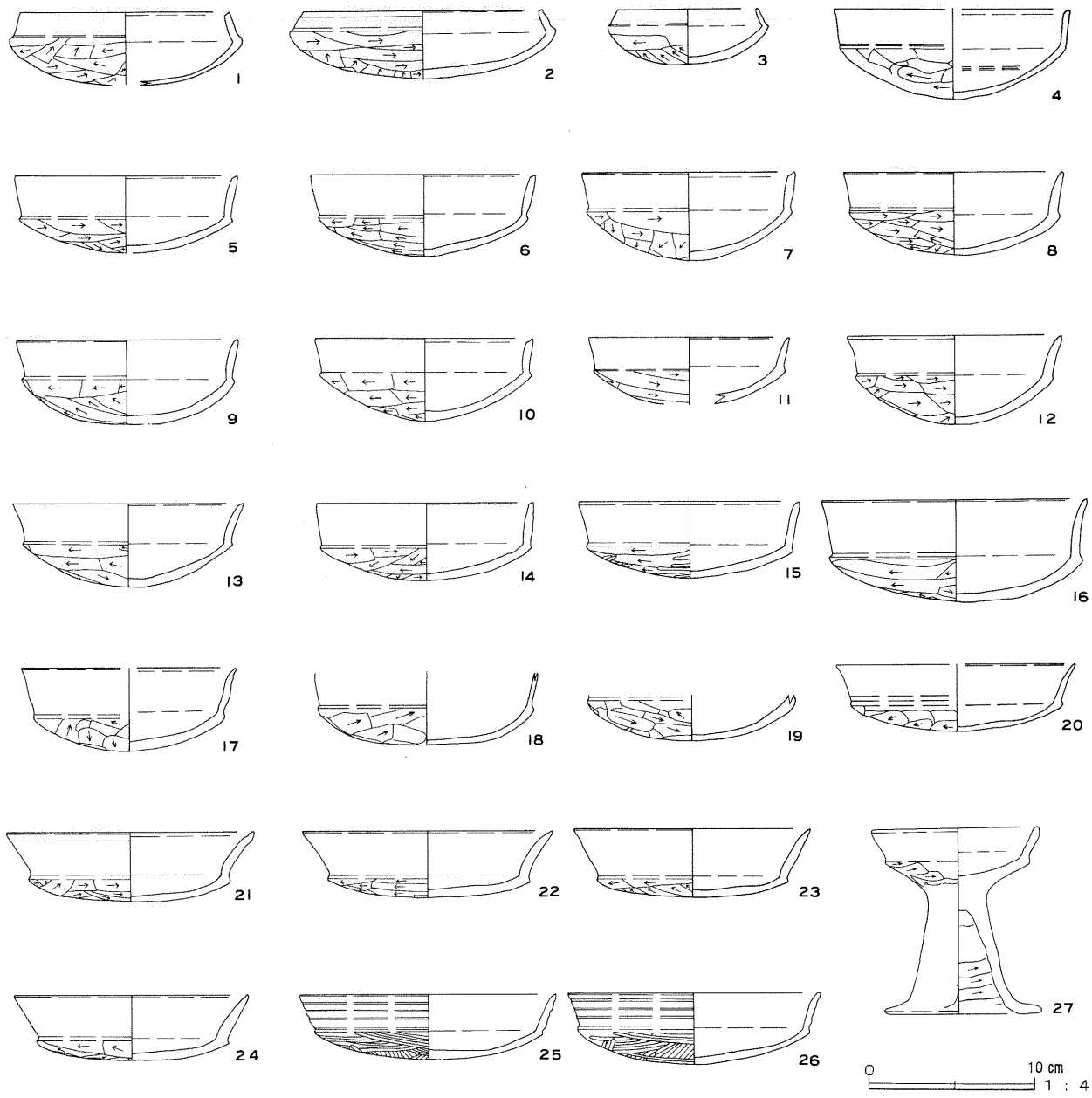
第300図　E・F区120号住居跡カマド脇遺物出土状況

120号住居跡　AO－25・26グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

(第299図)
(第300図)

長軸4.76m、短軸4.35mの長方形を呈する。主軸方向はS－54°－Eを指す。確認面からの深さは27cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土はにぶい黄色のシルトや粘土（1～4層）からなり、3層下部には炭化物が帯状に堆積していた。壁溝はみられない。ピットは4つ検出された。いずれも柱穴と考えられる。

カマドは、南東壁中央からやや南西に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は42cm、燃焼部の幅は32cm、燃焼部と煙道部の境では30cm

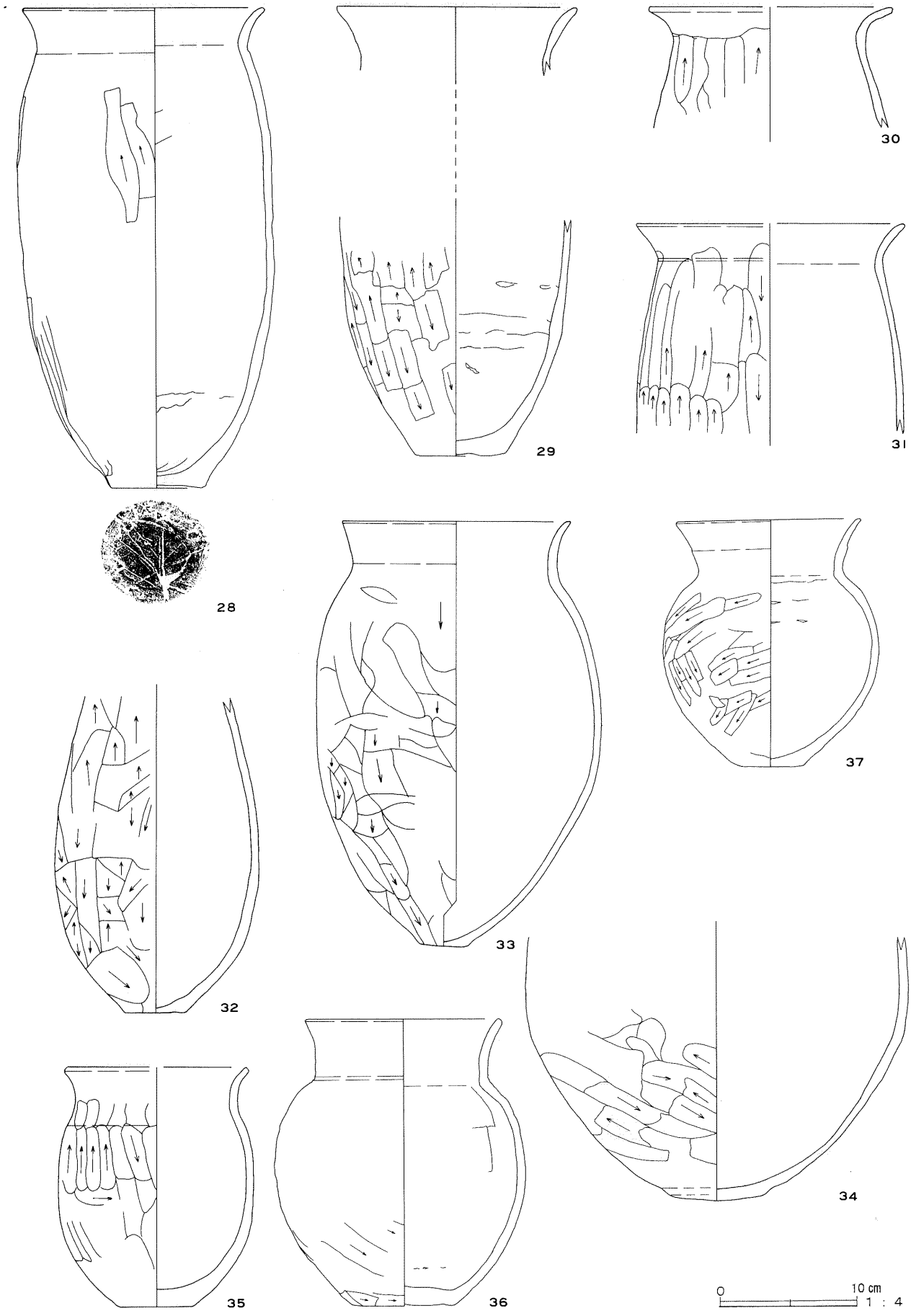


第301図　E・F区120号住居跡出土遺物(1)

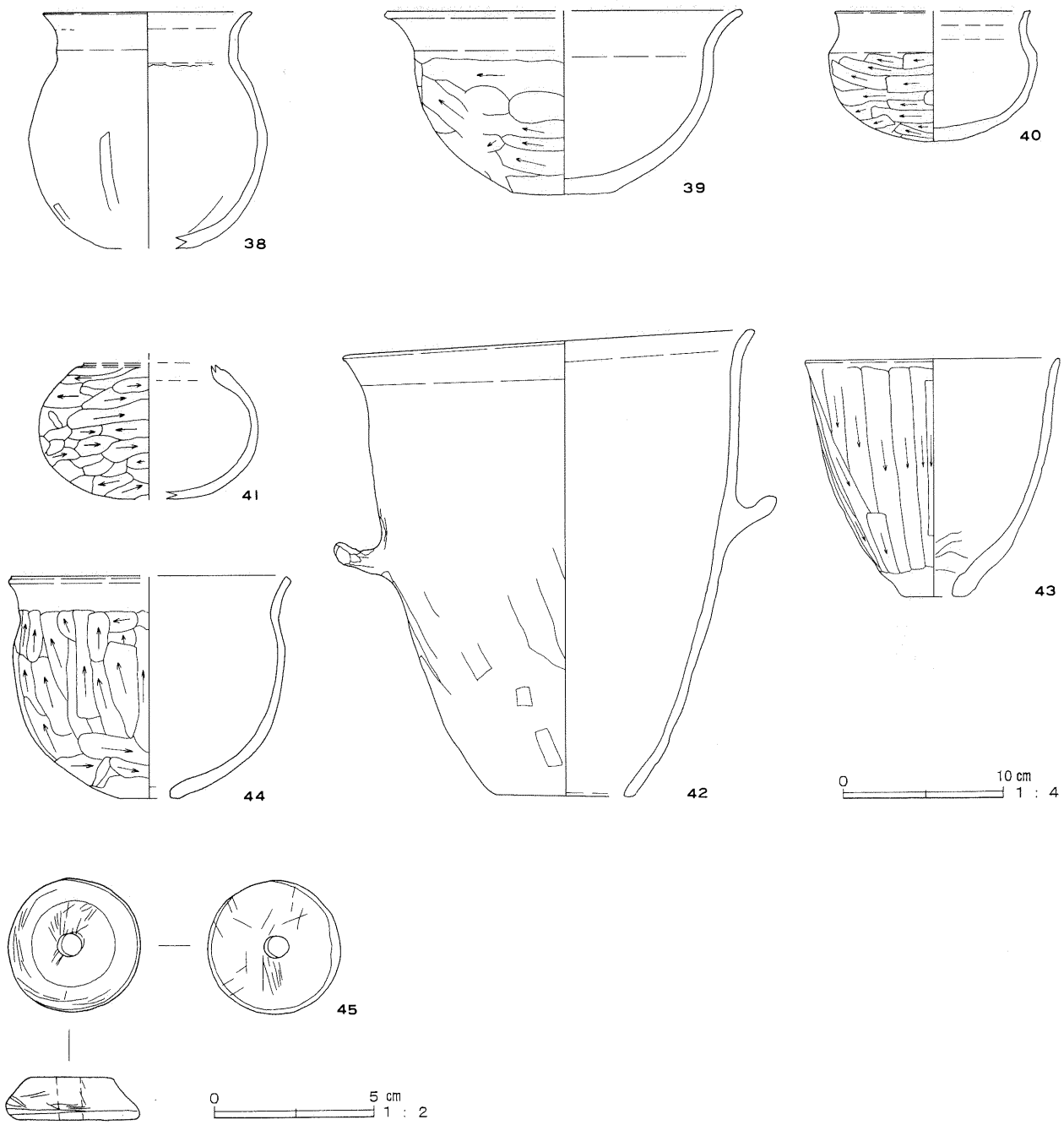
と狭くなり、煙道の中ほどで再び34cmと膨らんで、先端で23cmにすぼまる。焚口部から燃焼部は床面と同一レベルであった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は9cmを測る。煙道部はほぼ平坦であり、先端で緩やかに立ち上がる。壁外へは1.45mほど張り出している。覆土に天井部崩落土等はみられず、住居跡覆土の下から、被熱層（7層)、灰層（6層）が検出された。

カマド南東脇には、径96×84cmの不整円形を呈し、深さ38cmの貯蔵穴が検出された。底面から周辺にかけて土師器が多数検出された。

出土遺物（第301図）には、土師器杯（No.1～26)、高杯（27)、甕（28～38)、鉢（39)、盌（40)、壺（41)、甑（42～44)、石製紡錘車（45）等がある。主に貯蔵穴及びその周辺、北西隅の床面上から多数検出された。杯はすべて模倣杯である。1～3は杯身模倣杯、そ



第302図　E・F区120号住居跡出土遺物(2)



第303図　E・F区120号住居跡出土遺物(3)

第147表　E・F区120号住居跡出土遺物観察表　(第301～303図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	12.6	(4.4)	-	④①②⑥	②	にぶい赤褐	2/3	
2	土師器杯	14.4	4.1	-	④①②⑥	②	にぶい橙	1/2	
3	土師器杯	8.5	3.4	-	④①⑥	②	明赤褐	完形	
4	土師器杯	(14.0)	5.5	-	②③①⑥④	②	にぶい橙	1/2	
5	土師器杯	13.4	4.7	-	④①②⑥	②	橙	完形	
6	土師器杯	13.5	5.0	-	④①②	②	にぶい橙	2/3	
7	土師器杯	13.0	5.3	-	⑥④①②	②	橙	一部欠	
8	土師器杯	13.2	5.1	-	②③①④	②	浅黄橙	一部欠	
9	土師器杯	13.3	5.1	-	①④⑥②	②	にぶい橙	一部欠	
10	土師器杯	13.1	5.1	-	①④②⑥③	②	橙	完形	
11	土師器杯	12.0	(4.1)	-	①④②⑥	②	橙	2/3	
12	土師器杯	12.9	5.4	-	④①②⑥	②	橙	一部欠	
13	土師器杯	13.8	5.0	-	④①②⑥	②	にぶい橙	2/3	
14	土師器杯	13.1	4.8	-	①④②③⑥	②	にぶい橙	一部欠	

15	土師器杯	13.3	4.6	-	①④②⑥③	②	橙	一部欠	
16	土師器杯	16.1	6.2	-	①④②⑥③	②	橙	一部欠	
17	土師器杯	(13.0)	5.1	-	①④⑥②	②	橙	1/2	
18	土師器杯	-	(4.4)	-	②③①	②	黒褐	3/4	
19	土師器杯	-	-	-	③①④	②	にぶい赤褐	1/2	
20	土師器杯	(14.4)	4.1	-	①③⑥②④	②	橙	1/2	
21	土師器杯	15.0	4.2	-	①④	②	灰褐	一部欠	
22	土師器杯	15.0	4.0	-	①④⑥②	②	灰褐	一部欠	
23	土師器杯	14.2	4.2	-	①④⑥③②	②	にぶい褐	一部欠	
24	土師器杯	14.3	3.9	-	④①⑥③②	②	褐	一部欠	
25	土師器杯	15.4	3.9	-	④①②	②	黒褐	2/3	
26	土師器杯	15.3	4.3	-	⑥①	②	褐	2/3	
27	土師器高杯	10.1	11.3	9.5	③①④	②	橙	5/6	
28	土師器甕	17.6	35.6	7.0	③①⑥④	②	橙	5/6	胴部外面黒斑有、煤付着。磨滅。
29	土師器甕	17.2	-	6.6	⑥①②	②	にぶい橙	4/6	
30	土師器甕	(17.8)	-	-	②①③⑥	②	にぶい橙	上位	
31	土師器甕	(19.6)	-	-	⑥②①④	②	灰白	上位	
32	土師器甕	-	-	4.4	⑥①②	②	明褐灰	下半1/2	
33	土師器甕	16.8	31.3	3.3	⑥③①②	②	橙	3/5	
34	土師器甕	-	-	7.2	①②③⑥④	②	にぶい褐	下半1/2	
35	土師器甕	(13.2)	17.7	5.0	②⑥①③④	②	にぶい橙	1/2	
36	土師器甕	14.5	21.1	7.6	⑥③①	②	橙	一部欠	二次加熱。全面磨滅。
37	土師器甕	13.5	18.4	4.6	③①	②	橙	一部欠	胴下部外面黒斑有。
38	土師器甕	13.1	-	-	③①⑥	②	橙	2/3	二次加熱。胴下部剝離。
39	土師器鉢	(22.4)	11.6	-	①③④②	②	明赤褐	1/2	
40	土師器盤	(12.2)	8.2	-	③①④	②	橙	2/3	
41	土師器壺	-	-	-	①②④③⑥	①	褐	1/3	
42	土師器甑	25.8	29.5	8.6	③①	②	浅黄橙	一部欠	内外面黒斑有。磨滅。
43	土師器甑	16.0	14.9	3.9	③①⑥	②	浅黄橙	3/4	外面黒斑有。
44	土師器甑	(17.6)	14.0	(3.8)	⑥②①③④	②	にぶい橙	1/4	
45	石製紡錘車	上端径　2.6　下端径　4.2　厚さ　1.3　孔径　0.7						完形	滑石製。

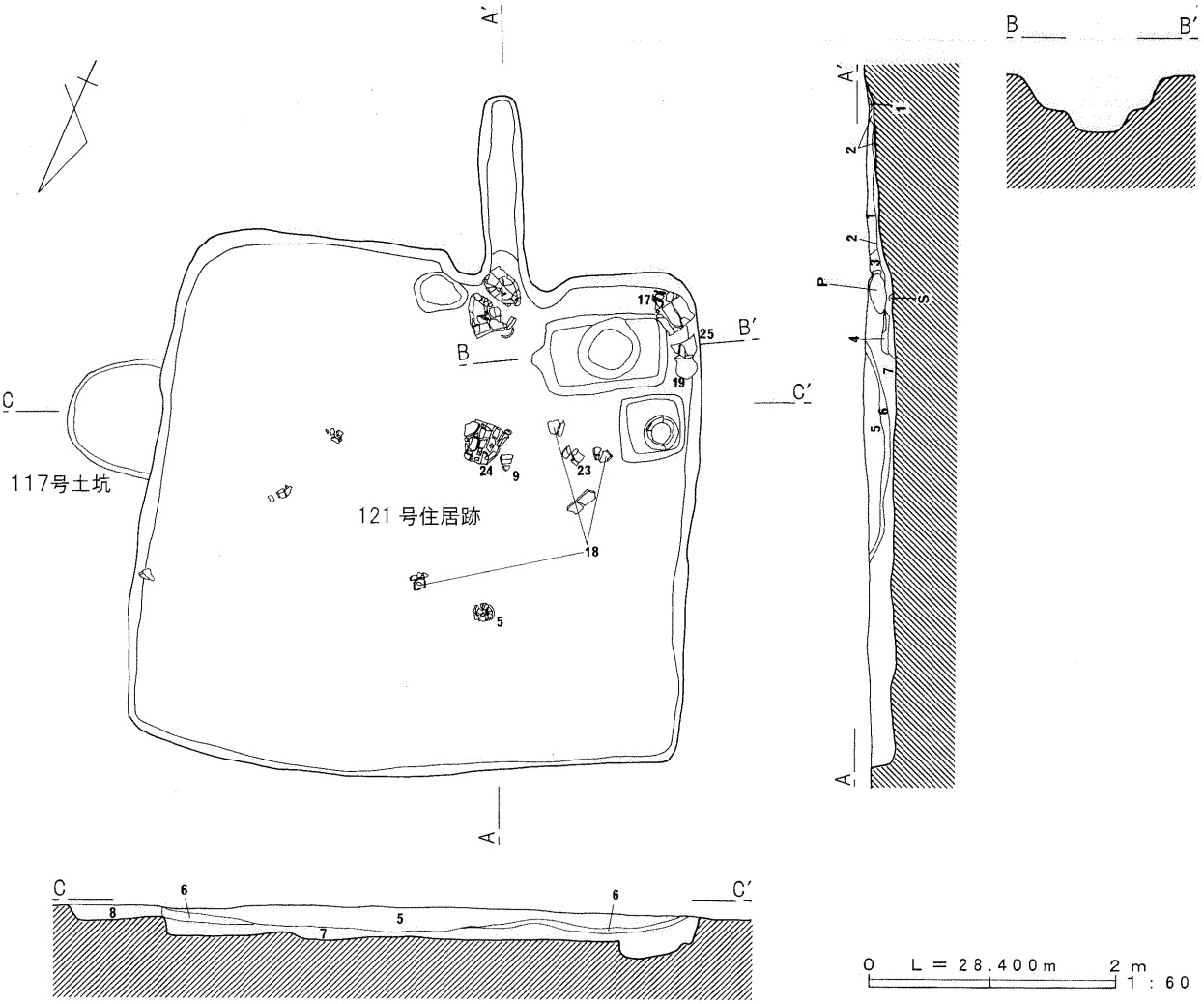
の他は杯蓋模倣杯である。口径大きく、浅身のものが主体となる。高杯は1点のみ検出された。模倣杯に高い脚部がつく。甕は長胴甕(28～33)、丸胴甕(34)、小型のもの(35～38)がある。煤が付着しているものや黒斑を有するもの、二次加熱を受けているものがみられた。28・36・38は摩滅が顕著であった。28は底部に木葉痕を残す。39は平底、40・41は丸底である。41は小型のものである。甑は42のみ胴部に把手を持ち、43・44は把手を持たない。42・43は黒斑を有する。45は外面に不規則な線刻がみられる。

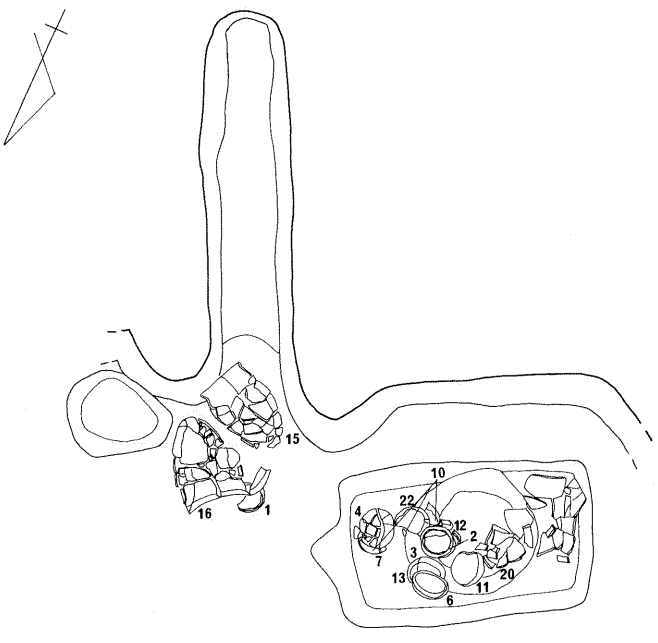
121号住居跡
(第304図)

AO－25グリッドに位置する。北東壁中央で117号土坑を切っている。

長軸4.59m、短軸4.45mの方形を呈する。主軸方向はS－20°－Eを指す。確認面からの深さは27cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色系のシルトと粘土（1・5～7層）を主体とする。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。壁溝はみられない。柱穴は1つ検出された。カマドの南東に隣接することから、カマド関連のものの可能性がある。

カマドは、南東壁中央からやや南西に設けられている。袖部は地山の掘り残しであり、壁から僅かに張り出した程度であったが、本来はもっと長かったと考えられる。内面には被熱した箇所が確認された。燃焼部からは土師器杯（№1）、甕（15・16）が検出された。燃焼部の幅は46cmを測り、煙道部幅は35cm前後で進み、先端で26cmにすぼまる。燃焼部は床面と同レベルで平坦であった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は

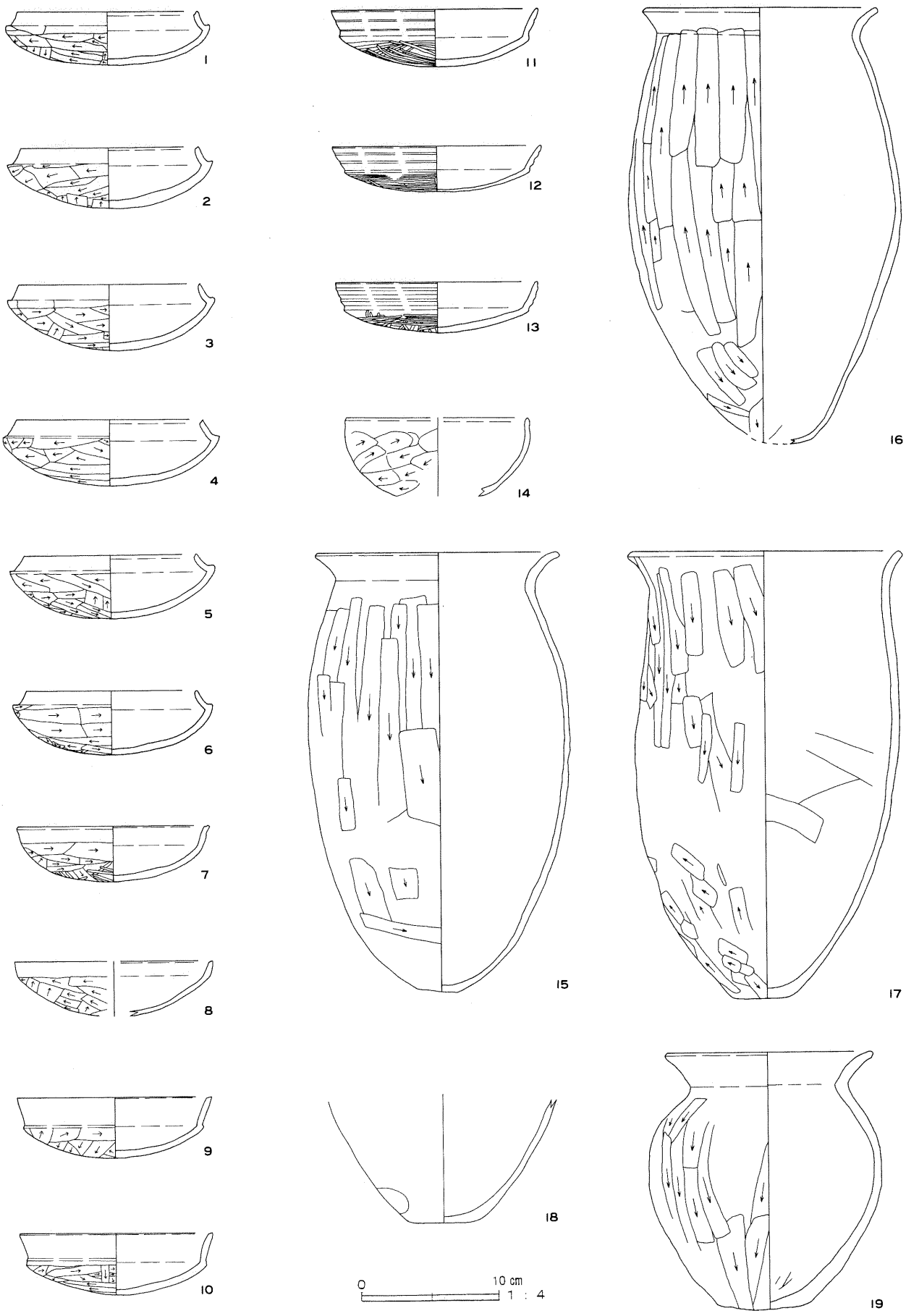




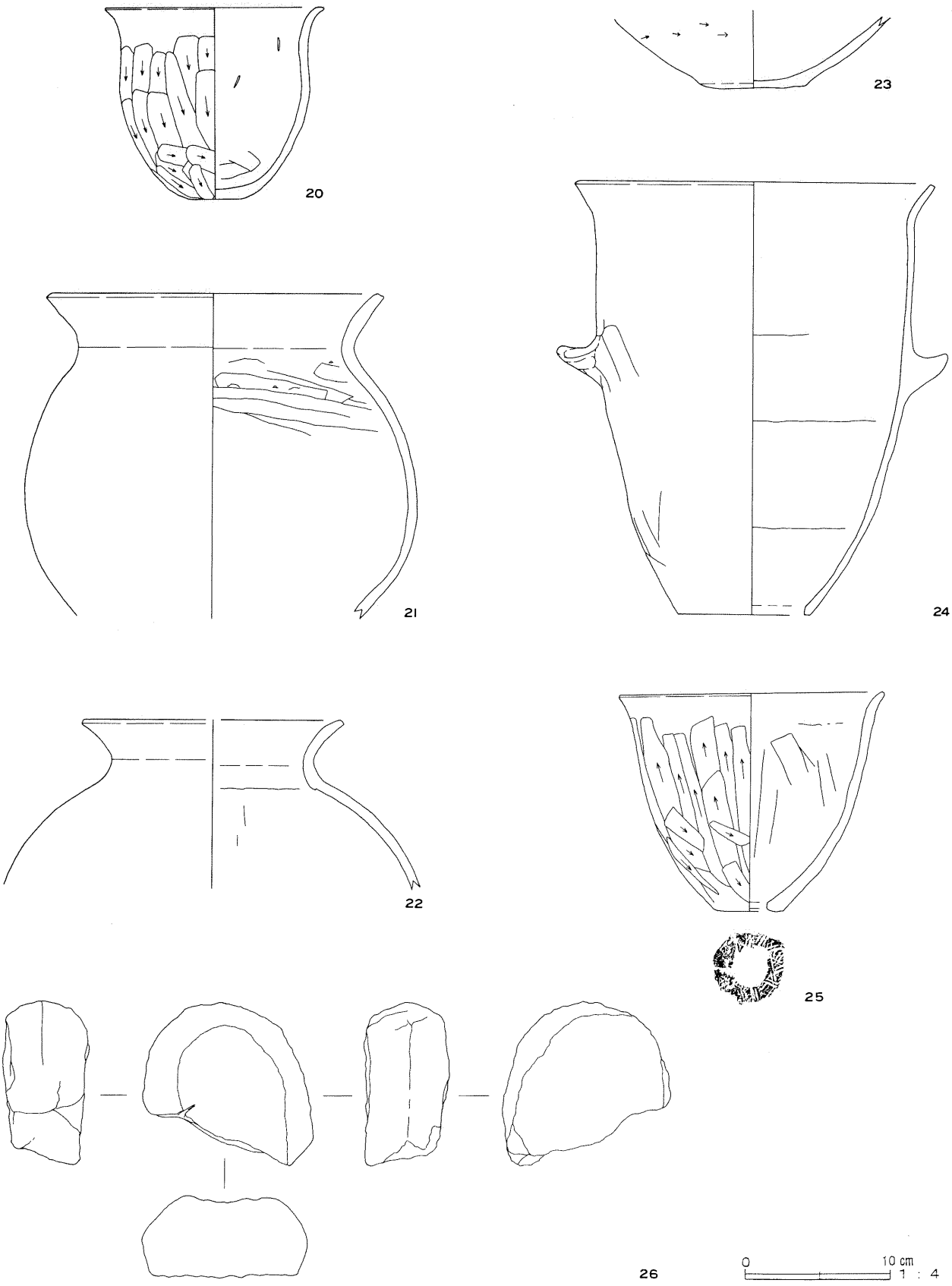
121 号住居跡土層

1　黄褐色(10YR5/6)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。
2　灰色(N5/0)灰層。1層のブロック(少量)を含む。しまりやや悪い。
3　1に明赤褐色(5YR5/8)焼土ブロック(多量)を含む。しまり良い。
4　黄灰色(2.5Y5/1)粘土。5層のブロック(少量)を含む。しまり悪い。
5　黄褐色(10YR5/6)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、しまり良い。
6　褐灰色(10YR6/1)シルト。炭化物(多量)、焼土粒(少量)を含む。しまりやや悪い。
7　灰黄褐色(10YR5/2)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。
8　117 号土坑覆土。

第304図　E・F区121号住居跡・カマド



第305図　E・F区121号住居跡出土遺物(1)



第306図　E・F区121号住居跡出土遺物(2)

第148表　E・F区121号住居跡出土遺物観察表　（第305・306図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残　存　率	備　　考
1	土師器杯	13.2	3.9	-	④①③②	②	明赤褐	2/3	
2	土師器杯	13.1	4.4	-	④①	②	黒褐	一部欠	
3	土師器杯	13.4	4.8	-	④①②	②	黒褐	一部欠	
4	土師器杯	13.6	4.9	-	④①②	②	黒褐	一部欠	
5	土師器杯	12.6	4.6	-	⑥①④②	②	にぶい褐	一部欠	
6	土師器杯	12.4	4.7	-	④①②	②	黒	完形	
7	土師器杯	14.2	4.0	-	④①②	②	褐	一部欠	
8	土師器杯	(15.0)	(4.0)	-	④①	②	にぶい褐	1/4	
9	土師器杯	14.2	4.4	-	⑥④①	②	明赤褐	2/3	
10	土師器杯	14.0	4.5	-	③②①④⑥	②	橙	一部欠	
11	土師器杯	15.0	4.2	-	④①	②	黒	一部欠	
12	土師器杯	15.4	3.3	-	④①⑥②	②	褐	2/3	
13	土師器杯	14.8	3.7	-	④①	②	黒	一部欠	
14	土師器杯	(13.3)	-	-	②	②	橙	1/5	
15	土師器甕	17.9	32.3	3.0	③①	②	橙	一部欠	黒斑有。外面煤付着。二次加熱。
16	土師器甕	17.2	(32.2)	(4.2)	③①	②	橙	5/6	
17	土師器甕	20.0	33.0	4.1	③①	②	黄橙	5/6	胴外面煤付着。
18	土師器甕	-	-	5.4	①④②③	②	灰褐	下位のみ	磨滅。
19	土師器甕	15.2	18.9	6.6	③①	②	橙	一部欠	二次加熱。
20	土師器甕	15.2	13.4	3.6	②①	②	橙	3/4	
21	土師器甕	22.8	-	-	③④①	②	橙	上半のみ	磨滅。
22	土師器甕	(18.2)	-	-	③①	③	にぶい橙	上位3/4	黒斑有。磨滅。
23	土師器甕	-	-	7.5	⑥③④①	②	にぶい橙	下位のみ	磨滅。
24	土師器甑	26.0	30.4	9.1	①②③	②	浅黄橙	9/10	底部外面黒斑有。磨滅。
25	土師器甑	18.5	15.5	4.8	③①	②	橙	一部欠	黒斑有。
26	砥石	長さ - 幅 11.5 厚さ 5.2						半分欠	全面使用。

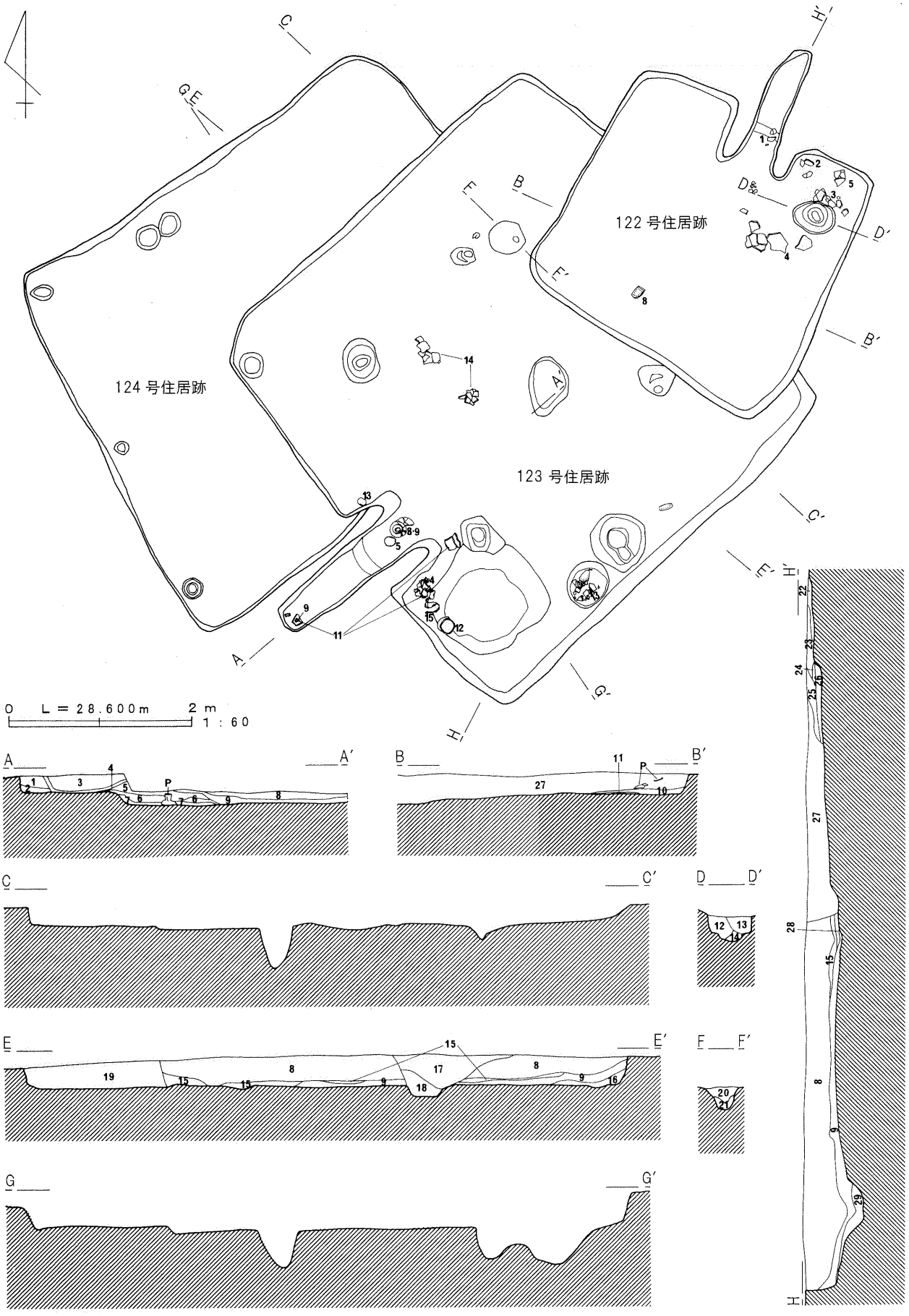
7cmを測る。煙道部は凹凸がみられるが、先端に向かって緩やかに立ち上がる。壁外へは1.6mほど張り出している。覆土に天井部崩落土等はみられず、住居跡覆土下から、焼土を含む層（3層）、灰層（2層）が検出された。

カマド南西脇には貯蔵穴が2つみられた。南東側の貯蔵穴は、径1.13×0.66mの長方形を呈し、床面からの深さ44cmを測る。覆土中から土師器杯類が多数検出された。北西部の貯蔵穴は、径53cm前後の方形で、深さ14cmを測る。

出土遺物（第305・306図）には、土師器杯（No.1～14）、甕（15～23）、甑（24・25）、砥石（26）等がある。住居跡ほぼ全面から検出されており、特にカマド及び貯蔵穴とその周辺に多数みられた。甕と甑は煤が付着しているものや黒斑を有するもの、二次加熱を受けているものがみられた。杯はバラエティがある。1～6は杯身模倣杯、7・8は北武蔵型杯、9～13は杯蓋模倣杯である。いずれも口径大きく、浅身である。7は口縁部が僅かに外反している。11～13は口縁部に複数の稜を持つ。14は丸底で深身であることから、椀とした。甕は長胴甕（15～18）、小型のもの（19・20）、丸胴甕（21～23）がある。甑は胴部に把手を持つタイプ（24）と持たないタイプ（25）がある。26は全面を使用している。半分を欠く。

122号住居跡（第307図）　AO－24グリッドに位置する。本住居跡中央から南西部にかけて123号住居跡を切っている。

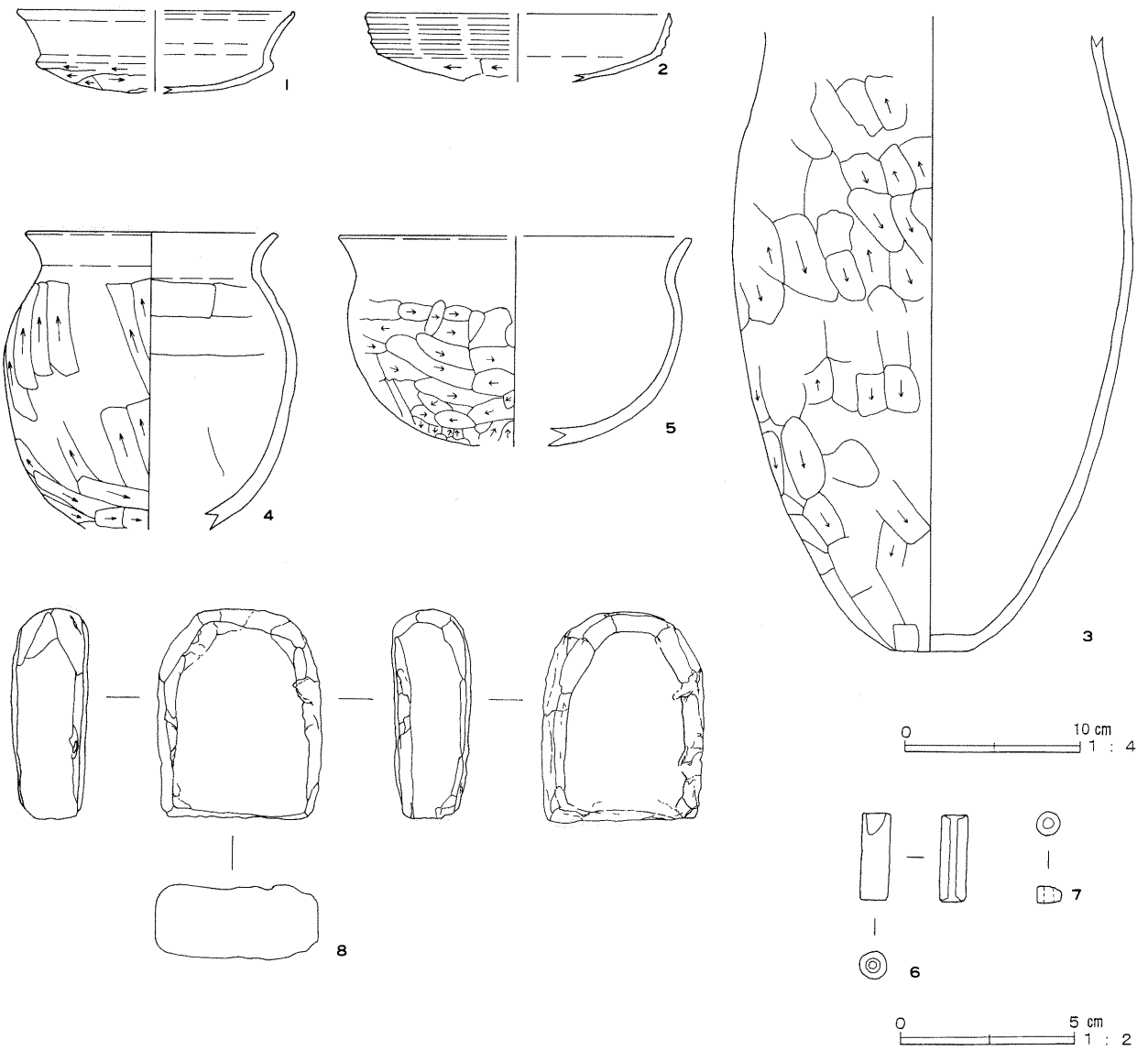
長軸3.06m、短軸2.99mの方形を呈する。他の住居跡に比べると小型である。主軸方向はN－27°－Eを指す。確認面からの深さは32cmを測り、床面は凹凸がみられ、南西部に向かってやや下る傾向にある。南東部では貼り床が顕著であった。覆土は暗灰黄色シルト（27



第307図　E・F区122・123・124号住居跡

122・123・124号住居跡土層

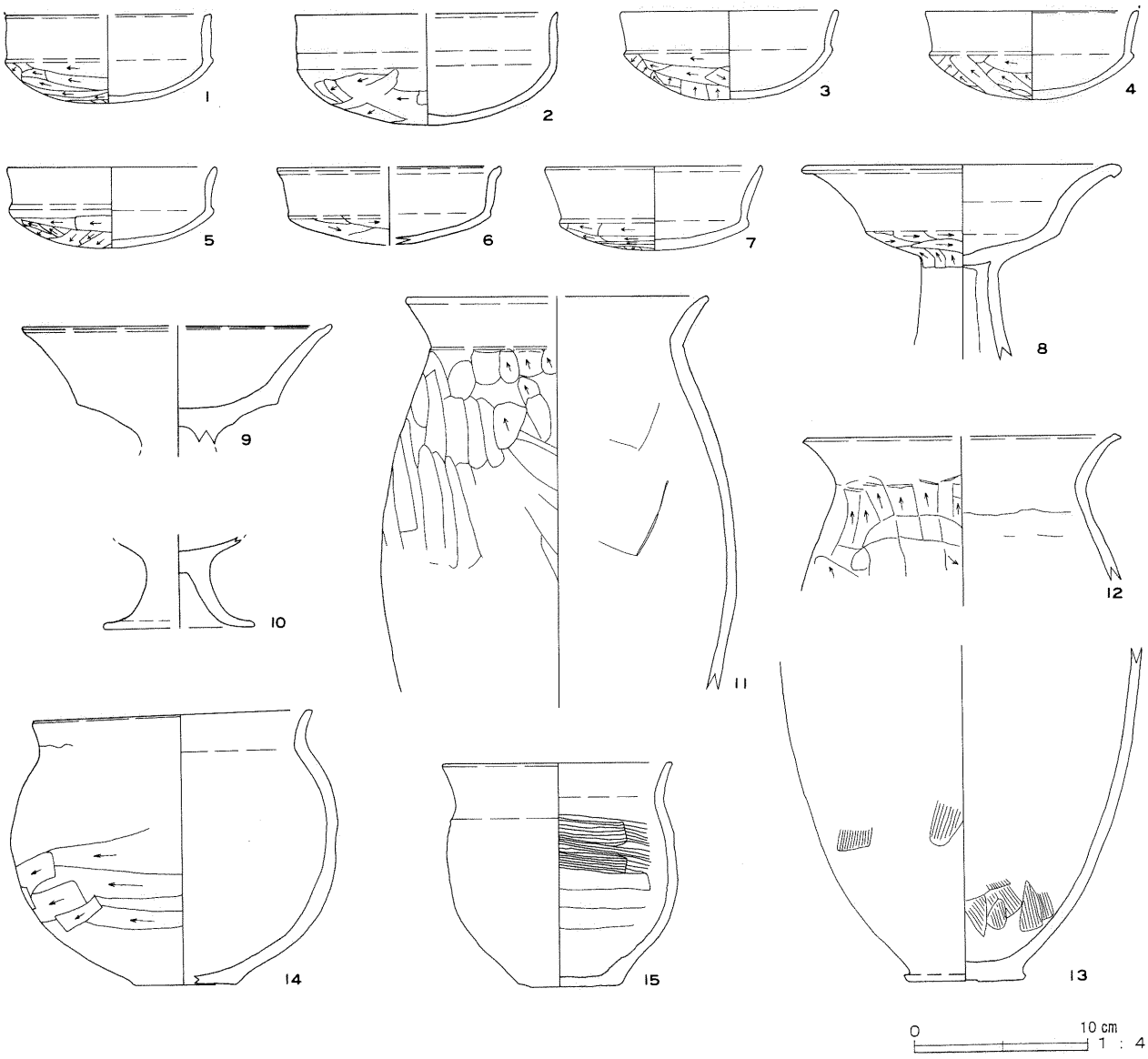
1　黄褐色(2.5Y5/3)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒(少量)を含む。しまり良い。
2　灰色(N4/0)灰層。焼土粒・ブロックを少量含む。しまり悪い。
3　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。煙道の天井崩落土。しまり良い。
4　3層が火を受けて変色した部分。
5　褐色(10YR4/4)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒(少量)を含む。しまり良い。
6　5層に焼土ブロック(多量)を含む。しまりやや良い。
7　灰色(N6/0)灰層。焼土粒(多量)を含む。しまり悪い。粘性強い。
8　灰黄褐色(10YR5/2)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土・炭化物粒、にぶい黄橙色(10YR7/2)粘土ブロック(火山灰?)を含む。しまり良い。
9　灰色(N4/0)粘土。灰黄褐色(10YR5/2)粘土粒(多量)、焼土・炭化物粒を含む。しまりやや良い。
10　灰色(7.5Y5/1)粘土。黄褐色(2.5Y5/6)粘土粒(多量)、炭化物粒(少量)を含む。しまりやや良い。
11　黄褐色(10YR5/6)粘土。貼床が明確な部分。しまり非常に良い。
12　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。黄褐色(10YR5/6)粘土ブロック(多量)、焼土・炭化粒(少量)を含む。しまりやや良い。
13　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土・炭化物粒(微量)を含む。しまり良い。
14　黄灰色(2.5Y6/1)粘土。炭化物粒(微量)を含む。しまりやや悪い。
15　黄灰色(2.5Y6/1)灰層。しまり良い。粘性強い。
16　黄褐色(10YR5/6)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、炭化物(帯状)を含む。しまり良い。
17　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。焼土・炭化物粒(少量)を含む。しまり良い。
18　8層に焼土粒を若干含む。
19　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。
20　炭・灰層。しまり悪い。粘性強い。
21　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土。20の土を粒状に含む。
22　黄褐色(2.5Y5/2)シルト。灰色(N5/0)粘土ブロック(少量)を含む。
23　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒を含む。
24　赤褐色(5YR4/6)粘土。火を受けて変色した部分。
25　暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト。灰色(N6/0)粘土・焼土粒を多量に含む。
26　灰色(N5/0)灰層。焼土粒(多量)を含む。しまり悪い。
27　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土・炭化物粒(少量)を含む。しまり良い。
28　にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト。炭化物ブロック(少量)を含む。
29　黄灰色(2.5Y6/1)粘土。炭化物ブロック(多量)を含む。しまり良い。



第308図　E・F区122号住居跡出土遺物

第149表　E・F区122号住居跡出土遺物観察表　(第308図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(16.0)	-	-	⑥②①	②	明赤褐	1/4	
2	土師器杯	(17.4)	-	-	④①③⑥	②	灰褐	1/5	
3	土師器甕	-	-	4.9	⑥③①④	②	にぶい黄橙	2/3	
4	土師器甕	14.6	17.2	-	①③⑥④	②	灰黄	1/2	
5	土師器鉢	(20.4)	(12.3)	-	①②③⑥④	②	明赤褐	1/3	
6	管玉	長さ 2.5	最大径 0.8	孔径 0.2				完形	凝灰岩製。
7	石製臼玉	径 0.7	孔径 0.3	厚さ 0.5				完形	滑石製。
8	砥石	長さ 12.0	幅 9.3	厚さ 4.0				完形	全面使用。軽石製。



第309図　E・F区123号住居跡出土遺物

層）を主体とする自然堆積層である。

壁溝、柱穴はみられない。

カマドは北東壁中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は43cm、燃焼部から煙道部は36cmを測り、煙道部先端で24cmにすぼまる。焚口部から燃焼部は床面と同レベルで平坦であった。燃焼部と煙道部の境には8cmほど段が設けられている。煙道部はほぼ平坦であり、先端で緩やかに立ち上がる。

第150表　E・F区123号住居跡出土遺物観察表　（第309図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(12.0)	5.1	-	③④①⑥	②	にぶい橙	2/5	内外面煤付着。
2	土師器杯	(15.1)	6.7	-	⑥①②③④	②	明赤褐	1/3	
3	土師器杯	12.6	5.1	-	③①④	②	橙	口縁部1/4欠	内外面煤付着。
4	土師器杯	12.3	5.1	-	③①④②	②	橙	一部欠	内外面煤付着。
5	土師器杯	12.2	4.7	-	③①④②	②	橙	完形	内外面煤付着。
6	土師器杯	(13.0)	4.6	-	③②①④⑥	②	明赤褐	1/3	
7	土師器杯	12.6	4.8	-	③④①	②	橙	口縁部1/2欠	
8	土師器高杯	18.4	-	-	②③①④	②	橙	3/4	
9	土師器高杯	(18.0)	-	-	③②①④	②	橙	杯部2/3	
10	土師器高杯	-	-	(8.6)	③②⑥①④	②	橙	脚裾部1/3	
11	土師器甕	(17.4)	-	-	⑥①④③	②	にぶい赤褐	1/2	
12	土師器甕	(18.2)	-	-	③②①④⑥	②	橙	上位のみ	輪積痕。
13	土師器甕	-	-	6.6	①⑥④	②	橙	下半1/2	磨滅。
14	土師器甕	16.3	15.9	6.0	③①	②	橙	3/4	内外面黒斑有。
15	土師器甕	13.3	13.0	6.0	②①④⑥	②	にぶい赤褐	9/10	磨滅。

壁外へは88cm程張り出している。覆土に天井部崩落土等はみられず、焼土等を含む層(22・23・25層）の下から焼土層（24層)、灰層（25層）が検出された。

カマド北東脇には、径49×36cmの楕円形を呈し、深さ28cmを測る貯蔵穴が検出された。覆土は三層（12～14層）みられ、すべてに焼土・炭化物が含まれていた。

出土遺物（第308図）には、土師器杯（No.1・2)、甕（3・4)、鉢（5)、管玉（6)、臼玉（7)、砥石（8）等がある。主に貯蔵穴周辺から検出された。杯はともに口径大きく、浅身の深い模倣杯である。甕は長胴甕（3）と小型のもの（4）がある。5は丸底である。6はほぼ完形品、7は完形品である。8は全面を使用している。

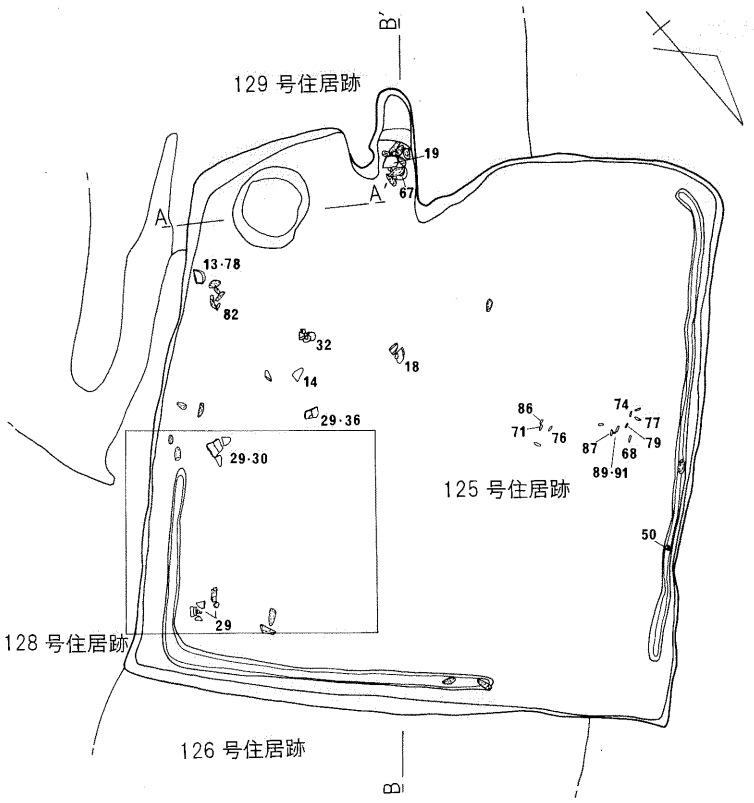
123号住居跡（第307図）

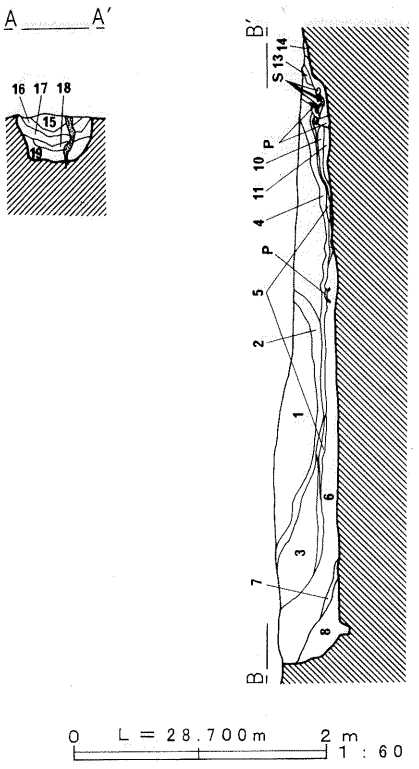
AO・AP－24・25グリッドに位置する。北東部では122号住居跡に切られており、南西部では124号住居跡を切っている。

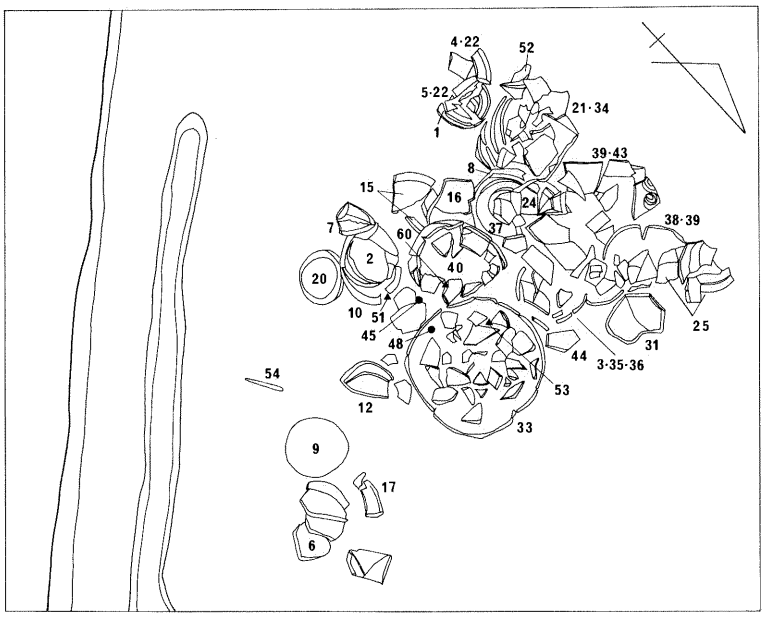
長軸5.18m、短軸は4.86m程の方形を呈する。主軸方向はS－48°－Wを指す。確認面からの深さは45cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。壁溝はみられない。ピットは7つ確認された。コーナー対角線上のものは柱穴と考えられる。それ以外のものは柱穴かどうかは不明である。

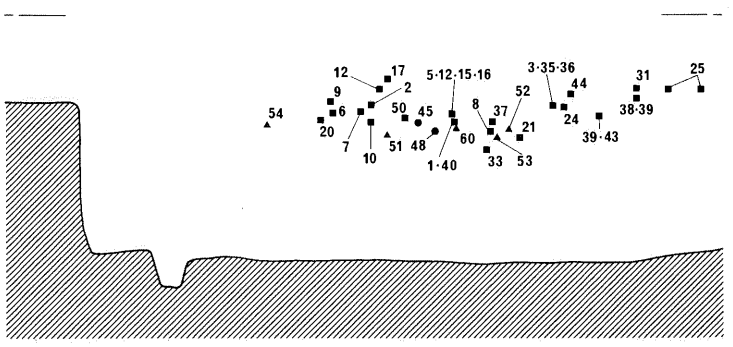
カマドは、南西壁ほぼ中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。焚口部の幅は52cm、燃焼部の幅は48cm、煙道部は46cmで進み、煙道部先端で36cmにすぼまる。焚口部から燃焼部は掘り込まれおらず、床面とほど同レベルであった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は6cmを測る。煙道部はほぼ平坦であり、先端で直角に立ち上がる。燃焼部からは土師器杯（No.5)、高杯（No.8・9)、先端からは土師器高杯（9）が検出された。壁外へは1.2m程張り出している。覆土は3層が天井部崩落土であり、その下に被熱層（4層）がみられた。ともに煙道部での確認である。煙道部先端では、4層と奥壁との間に上から焼土を含む層(1層)、灰層(2層)の順で検出された。焚口部から燃焼部では、焼土等を含む層(5層)の下から、焼土層(6層)、灰層（7層）が検出された。

カマド南東脇には、径1.18m前後の方形を呈し、床面からの深さ39cmの貯蔵穴が検出された。この貯蔵穴北東の壁沿いに2つ掘り込みがみられるが、これらも貯蔵穴と考えられ









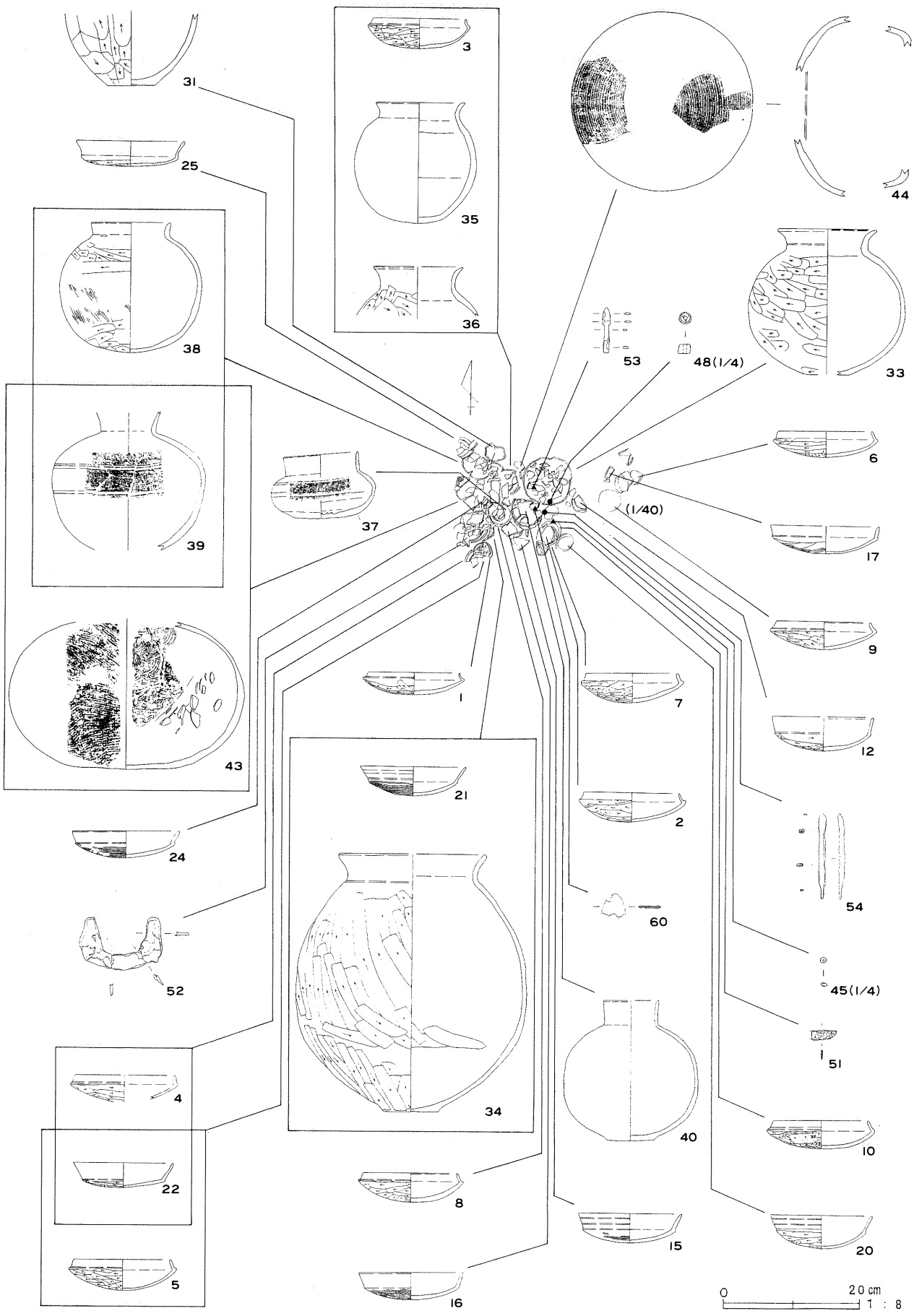
125 号住居跡土層

1 灰黄褐色(10YR5/2)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒(少量)を含む。土器群包含層。
2 灰色(5Y5/1)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土ブロック、炭化物粒を多く含む。しまり良い。
3 褐色(10YR4/4)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量) を含む。しまり良い。
4 褐灰色(10YR6/1)灰層。粘性強い。
5 灰層。焼土粒・ブロックを多く含む。しまり悪い。
6 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒、焼土粒、炭化粒を多く含む。しまりやや良い。
7 灰色(N6/0)灰層。焼土粒(多量)を含む。
8 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒を含む。しまりやや良い。
9 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒、焼土粒、炭化物粒を多く含む。しまり良い。
10 黄褐色(2.5Y5/6)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒、焼土粒・ブロックを多く含む。しまりやや悪い。
11 灰色(N5/0)灰層。焼土粒(多量)を含む。しまり悪い。粘性強い。
12 黄褐色(2.5Y5/3)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒、黄褐色(2.5Y5/6)粘土粒を多く含む。しまり良い。
13 赤褐色(5YR4/6)粘土。黄褐色(2.5Y5/3)粘土を若干含む。しまりやや悪い。
14 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒(少量)を含む。しまりやや悪い。
15 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土。灰色(5Y5/1)年度粒(多量)、炭化物粒(少量)を含む。しまり良い。
16 炭化物層。焼土粒を多く含む。しまり悪い。
17 黄褐色(2.5Y5/3)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒、炭化物粒を多く含む。
18 炭化物層。焼土粒(少量)を含む。しまり悪い。
19 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒、炭化物粒を多く含む。しまり悪い。

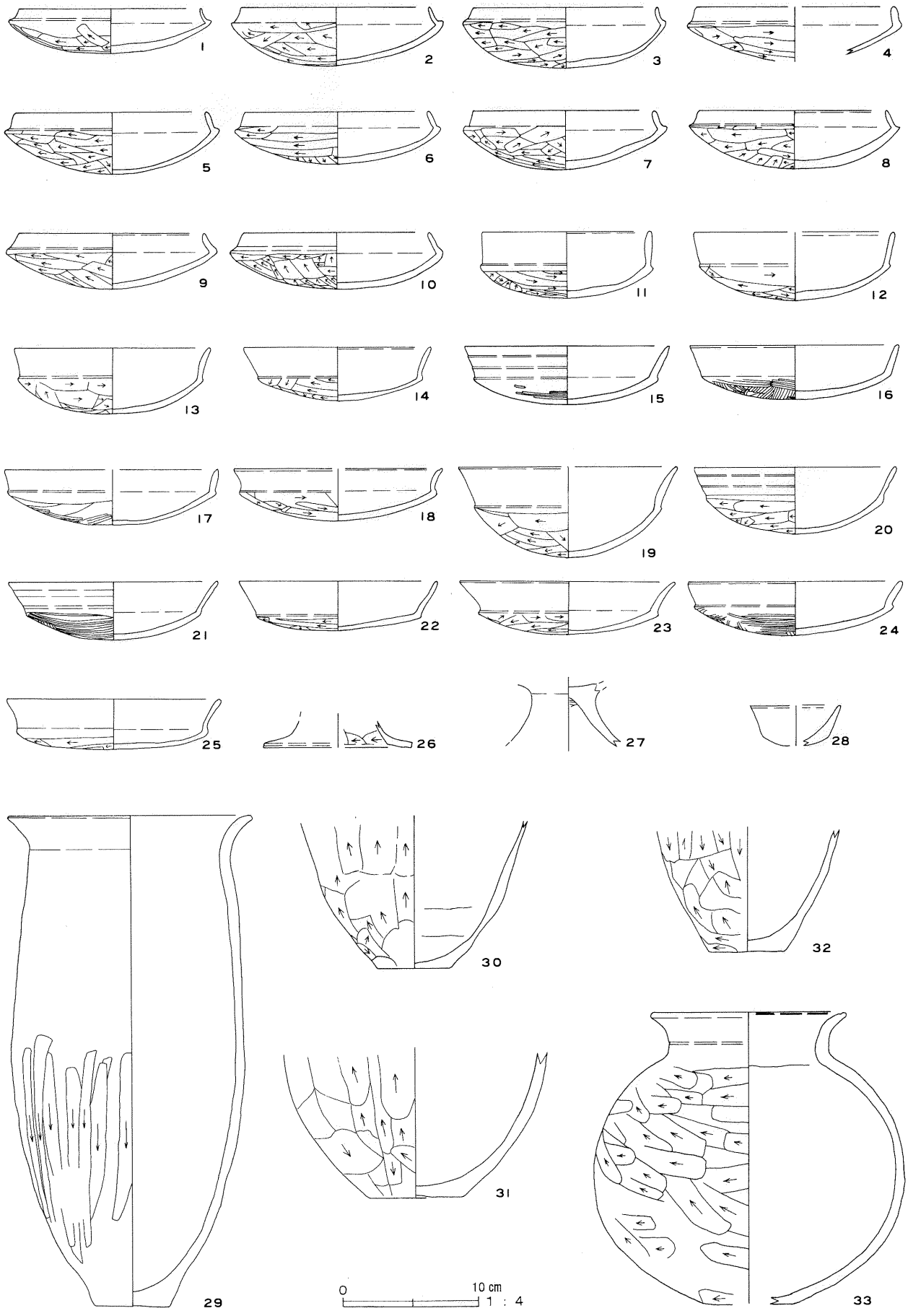
■＝土器　●＝玉類　▲＝鉄鏃類

0 L = 28.700m 50 cm
1 : 20

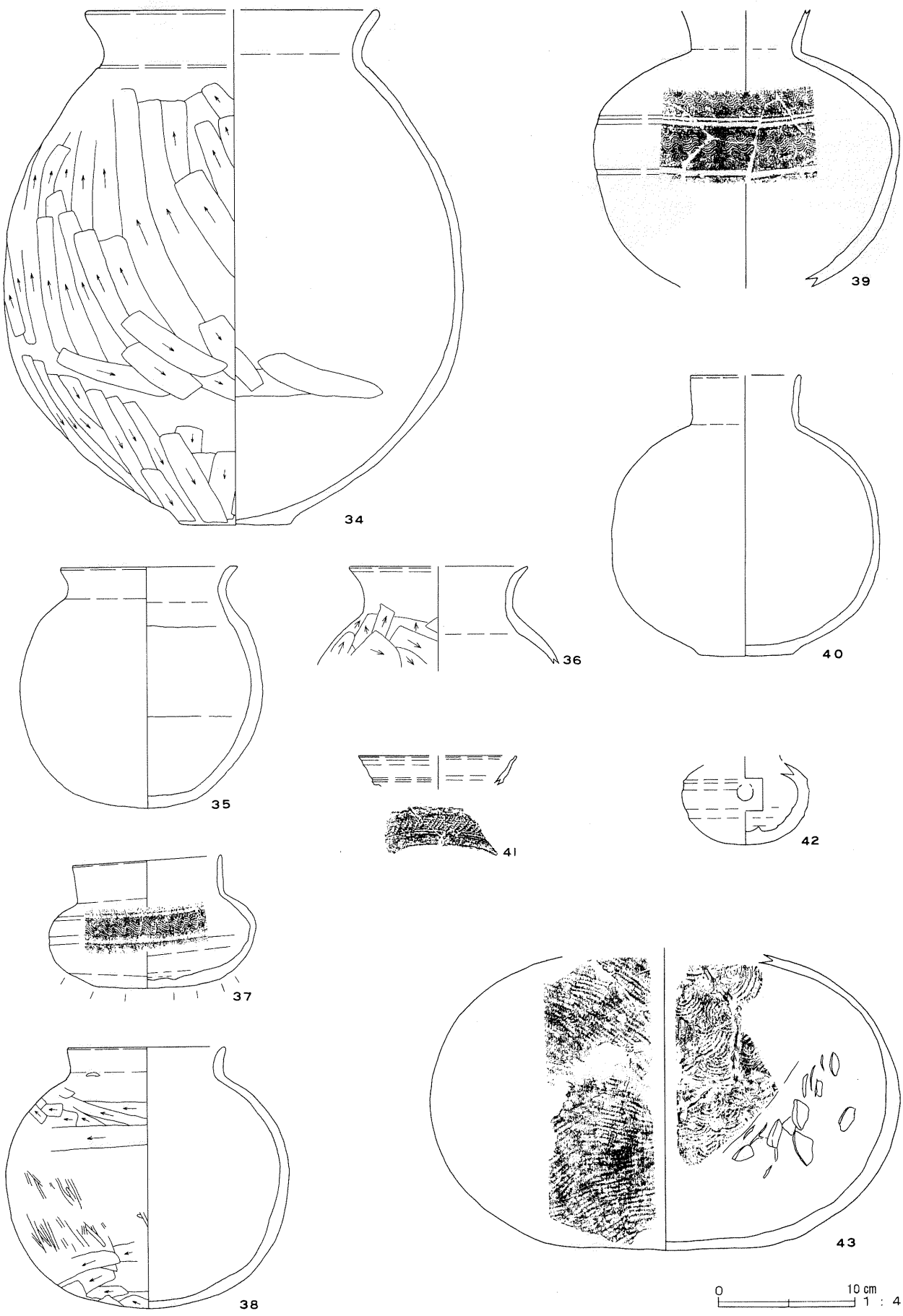
第310図　E・F区125号住居跡・遺物出土状況(1)



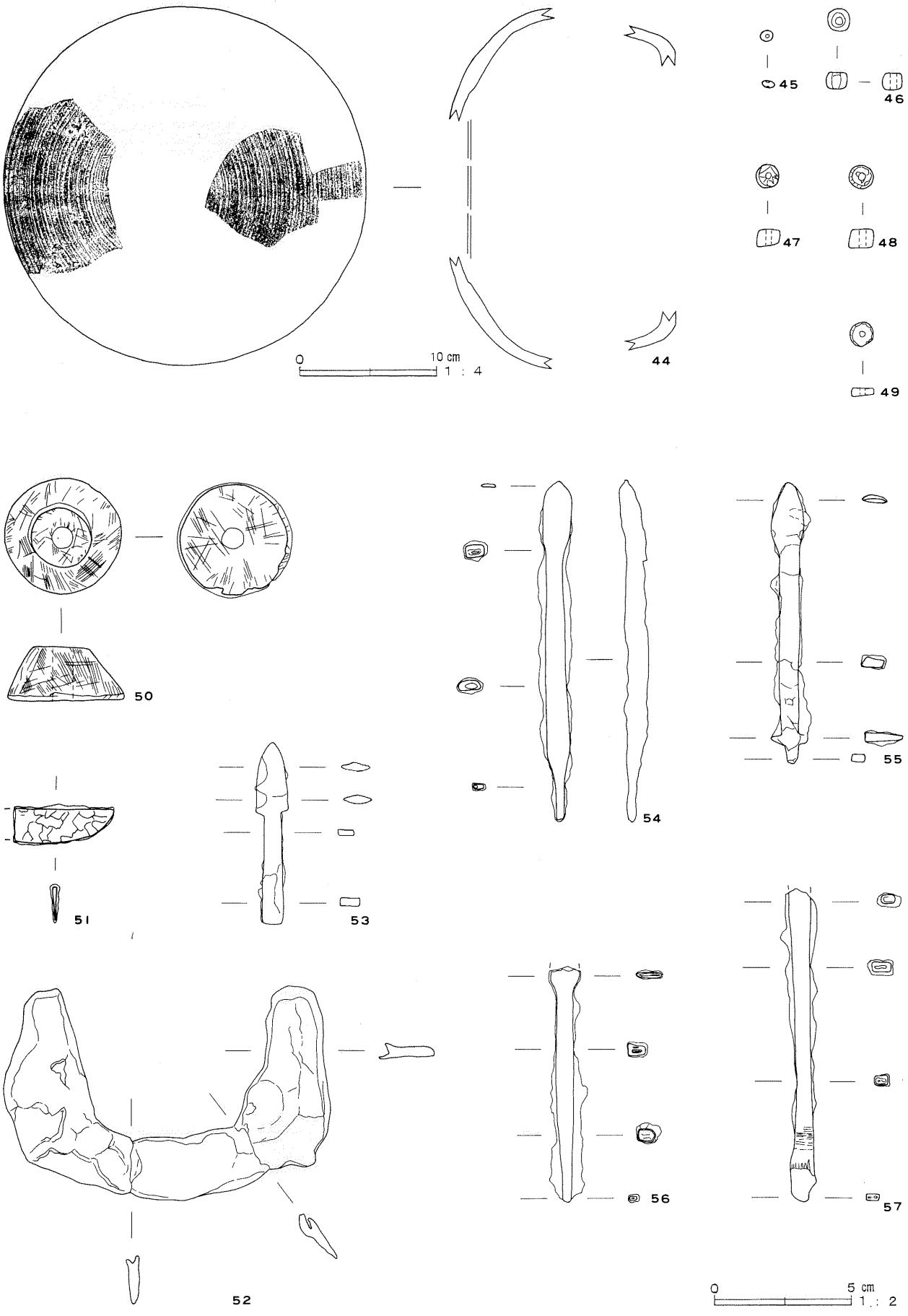
第311図　E・F区125号住居跡遺物出土状況(2)



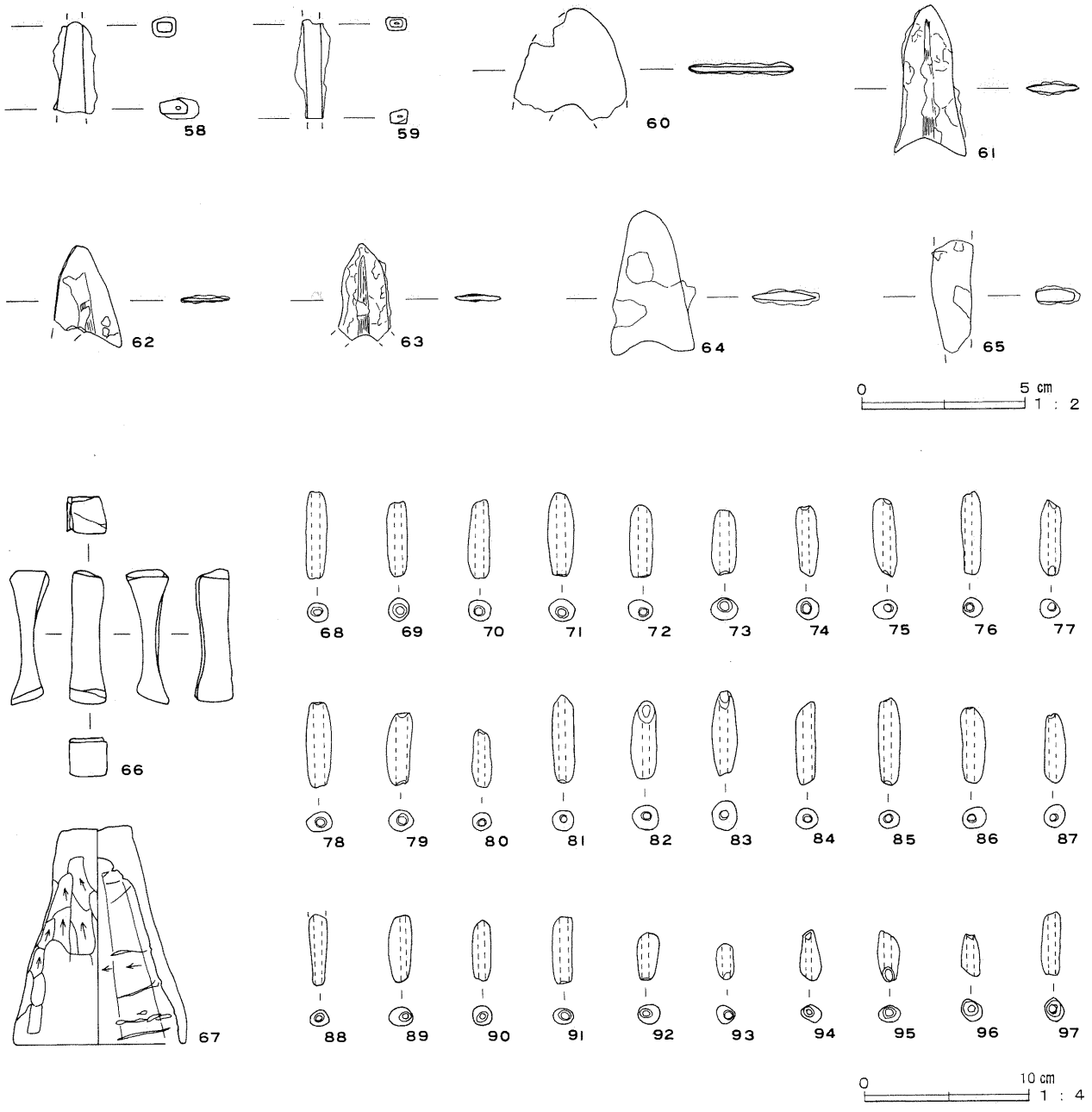
第312図　E・F区125号住居跡出土遺物(1)



第313図　E・F区125号住居跡出土遺物(2)



第314図　E・F区125号住居跡出土遺物(3)



第315図　E・F区125号住居跡出土遺物(4)

る。南西側は径52×45cmの円形を呈し、土師器甕（13）が検出された。北東側は径63×59cmの円形を呈している。

出土遺物（第309図）には、土師器杯（№1～7）、高杯（8～10）、甕（11～15）等がある。主にカマド及びその周辺、貯蔵穴等からまとまって検出された。杯はすべて身の深い模倣杯である。このうち、2のみ他と比べて大きい。内外面に煤の付着がみられた。8・9は口縁部が大きく外反する。10は低い脚部のみの検出である。甕は長胴甕(11～13)、小型のもの（14･15）がある。13は摩滅が顕著であるが、内外面ともに刷毛目調整であった。14は内外面に黒斑を有する。

第151表　E・F区125号住居跡出土遺物観察表　（第312～315図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	13.2	3.3	-	④①②③⑥	②	黒褐	完形	
2	土師器杯	13.7	4.3	-	①④②③⑥	②	明赤褐	一部欠	
3	土師器杯	13.5	4.5	-	②④①③	②	赤灰	4/5	
4	土師器杯	(14.4)	4.0	-	①④⑥②③	②	明赤褐	4/5	
5	土師器杯	13.9	4.6	-	④①②③	②	赤灰	完形	
6	土師器杯	13.5	3.8	-	④①	②	灰褐	2/3	
7	土師器杯	13.3	4.4	-	④①②③	②	赤灰	一部欠	
8	土師器杯	13.6	4.3	-	④①②③	②	にぶい赤褐	完形	
9	土師器杯	13.5	4.0	-	④①②③	②	暗灰	完形	
10	土師器杯	13.6	4.1	-	④①②	②	明赤褐	一部欠	
11	土師器杯	12.4	4.8	-	②③①④⑥	②	橙	一部欠	
12	土師器杯	(14.6)	5.0	-	③①④②⑥	②	にぶい橙	2/3	
13	土師器杯	14.3	4.8	-	①④③	②	明赤褐	一部欠	
14	土師器杯	13.6	4.0	-	④①②③⑥	②	明赤褐	1/2	
15	土師器杯	15.0	4.4	-	④①③②	②	黒褐	完形	
16	土師器杯	15.2	4.0	-	①④	②	にぶい赤褐	3/5	
17	土師器杯	(15.5)	4.1	-	①④②③⑥	②	明赤褐	2/3	
18	土師器杯	(15.2)	3.8	-	④②①③⑥	②	橙	1/2	
19	土師器杯	(16.0)	6.7	-	④①②③⑥	②	にぶい赤褐	1/2	
20	土師器杯	14.8	4.8	-	①②④③⑥	②	にぶい赤褐	完形	
21	土師器杯	15.3	4.3	-	④①⑥②	②	にぶい褐	4/5	
22	土師器杯	14.4	3.7	-	⑥①④②③	②	明赤褐	2/3	
23	土師器杯	15.7	3.9	-	④①②	②	にぶい赤褐	4/5	
24	土師器杯	15.6	3.9	-	④①②	②	にぶい赤褐	4/5	
25	土師器杯	15.5	3.7	-	①④②⑥	②	明赤褐	4/5	
26	土師器高杯	-	-	(10.8)	①⑥④	②	明赤褐	裾部1/2	
27	土師器高杯	-	-	-	①⑥②③	②	橙	脚部4/5	
28	手捏ね土器	(6.6)	3.0	-	①④②	②	にぶい黄褐	1/4	
29	土師器甕	18.0	36.2	5.4	③①	②	橙	3/4	胴上部外面磨滅。
30	土師器甕	-	-	5.4	②①④⑥	②	黒・明赤褐	下位1/2	
31	土師器甕	-	-	6.9	⑥③①④②	②	にぶい橙	下位1/3	
32	土師器甕	-	-	5.3	⑥②①	②	明赤褐	下半	
33	土師器甕	(21.5)	(37.8)	8.2	③①	②	明赤褐	1/2	胴下部外面吸炭。
34	土師器甕	(14.3)	21.4	6.6	②①③	②	明赤褐	1/2	
35	土師器甕	12.9	17.7	-	①②	②	橙	1/2	磨滅。
36	土師器甕	(13.2)	-	-	⑥⑤②③④	③	赤	上位	
37	須恵器短頸壺	11.0	9.8	-	②	①	灰	口縁部1/2欠	
38	土師器壺	11.4	19.1	-	③①	②	にぶい橙	3/4	
39	須恵器短頸壺	-	-	-	②①③	②	明赤褐	1/2	二次加熱。
40	須恵器短頸壺	(8.0)	20.6	6.8	③	③	橙	4/5	胴下部黒斑有、磨滅。
41	須恵器高杯	(11.6)	-	-	②	①	褐灰	口縁部1/3	
42	須恵器甑	-	-	-	①②⑥	②	灰	頸部欠	
43	須恵器横瓶	-	-	-	①②⑥	②	黄灰	胴部1/2	
44	須恵器提瓶	-	-	-	①②⑥	②	青灰	一部	
45	ガラス小玉	径 0.5	孔径 0.2	厚さ 0.3				完形	
46	ガラス小玉	径 0.8	孔径 0.2	厚さ 0.8				完形	
47	石製臼玉	径 0.8	孔径 0.2	厚さ 0.7				完形	滑石製。
48	石製臼玉	径 0.9	孔径 0.2	厚さ 0.7				完形	滑石製。
49	石製臼玉	径 0.8	孔径 0.2	厚さ 0.3				完形	滑石製。
50	石製紡錘車	上径 2.1	下径 4.3	高さ 2.0	孔径 0.7			完形	滑石製。
51	刀子	長さ —	幅 1.2	厚さ 0.2				先端のみ	
52	鋤先	長さ 12.0	幅 7.8					完形	
53	鉄鏃	全長 -	鏃身長 2.7	最大幅 1.2				半分欠	
54	鉄鏃	全長 12.5	鏃身長 2.9	最大幅 1.1				完形	
55	鉄鏃	全長 10.4	鏃身長 2.2	最大幅 1.3				完形	
56	鉄鏃	全長 —	鏃身長 —	最大幅 1.15				鏃身欠	
57	鉄鏃	全長 11.6	鏃身長 —	最大幅 1.4				鏃身欠	
58	鉄鏃	全身 —	鏃身長 —	最大幅 1.3				両端欠	
59	鉄鏃	全身 —	鏃身長 —	最大幅 0.9				両端欠	
60	鉄鏃	鏃身長 —	最大幅 -					先端のみ	
61	鉄鏃	鏃身長 4.7	最大幅 2.2					先端のみ	
62	鉄鏃	鏃身長 —	最大幅 —					先端のみ	
63	鉄鏃	鏃身長 —	最大幅 1.6					先端のみ	

64	鉄鏃	鏃身長　4.5　最大幅　2.6	先端のみ	
65	鉄鏃	短頸長　3.5	両端欠	
66	砥石	長さ　8.3　幅　2.4	完形	全面使用。流紋岩製。
67	土製支脚	上径　4.4　器高　13.4　底径　10.5	完形	
68	土錘	長さ　5.4　最大径　12.5　孔径　0.5	完形	
69	土錘	長さ　4.2　最大径　1.2　孔径　0.5	完形	
70	土錘	長さ　4.9　最大径　1.3　孔径　0.5	完形	
71	土錘	長さ　5.2　最大径　1.6　孔径　0.6	完形	
72	土錘	長さ　4.5　最大径　1.4　孔径　0.5	完形	
73	土錘	長さ　4.0　最大径　1.6　孔径　0.6	完形	
74	土錘	長さ　4.4　最大径　1.3　孔径　0.4	完形	
75	土錘	長さ　4.7　最大径　1.4　孔径　0.4	完形	
76	土錘	長さ　5.1　最大径　1.2　孔径　0.4	完形	
77	土錘	長さ　4.8　最大径　1.3　孔径　0.4	完形	
78	土錘	長さ　5.2　最大径　1.5　孔径　0.6	完形	
79	土錘	長さ　4.4　最大径　1.6　孔径　0.5	完形	
80	土錘	長さ　3.6　最大径　1.2　孔径　0.4	完形	
81	土錘	長さ　5.5　最大径　1.4　孔径　0.4	完形	
82	土錘	長さ　4.7　最大径　2.0　孔径　0.4	完形	
83	土錘	長さ　5.2　最大径　1.7　孔径　0.4	完形	
84	土錘	長さ　5.2　最大径　1.4　孔径　0.4	完形	
85	土錘	長さ　5.4　最大径　1.4　孔径　0.4	完形	
86	土錘	長さ　4.2　最大径　1.5　孔径　0.5	完形	
87	土錘	長さ　4.3　最大径　1.3　孔径　0.4	完形	
88	土錘	長さ　4.3　最大径　1.2　孔径　0.4	一部欠	
89	土錘	長さ　4.2　最大径　1.4　孔径　0.4	完形	
90	土錘	長さ　3.8　最大径　1.2　孔径　0.4	完形	
91	土錘	長さ　4.2　最大径　1.2　孔径　0.4	完形	
92	土錘	長さ　2.9　最大径　1.3　孔径　0.4	完形	
93	土錘	長さ　2.2　最大径　1.2　孔径　0.5	完形	
94	土錘	長さ　3.2　最大径　1.3　孔径　0.4	完形	
95	土錘	長さ　3.2　最大径　1.5　孔径　0.5	完形	
96	土錘	長さ　2.7　最大径　1.8　孔径　0.5	完形	
97	土錘	長さ　3.9　最大径　1.2　孔径　0.4	完形	

124号住居跡　AO・AP－24・25グリッドに位置する。北東部で123号住居跡に切られている。

(第307図)　長軸5.04m、短軸4.29mの長方形を呈する。南北軸方向はN－57°－Eを指す。確認面からの深さは28cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は、確認箇所ではにぶい黄褐色シルトの単一層（19層）である。自然堆積と考えられる。ピットは北西壁沿いに2つ、南西壁沿いに3つ並んでみられるが、柱穴かどうかは不明である。

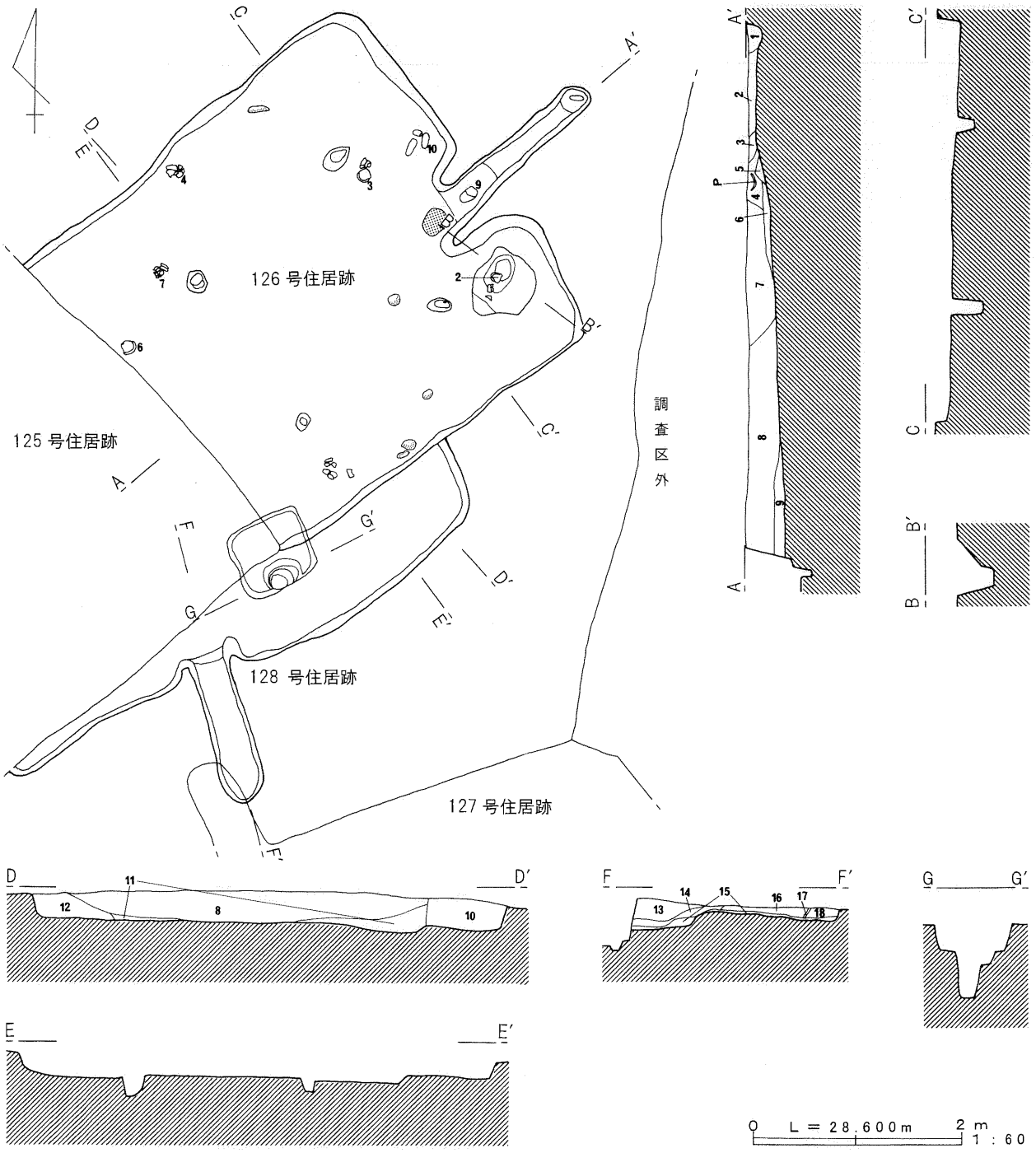
壁溝、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物は、土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

125号住居跡　AP－24・25グリッドに位置する。南東部で129号住居跡、北東部から北側にかけて126・128号住居跡にそれぞれ切っている。

(第310図)

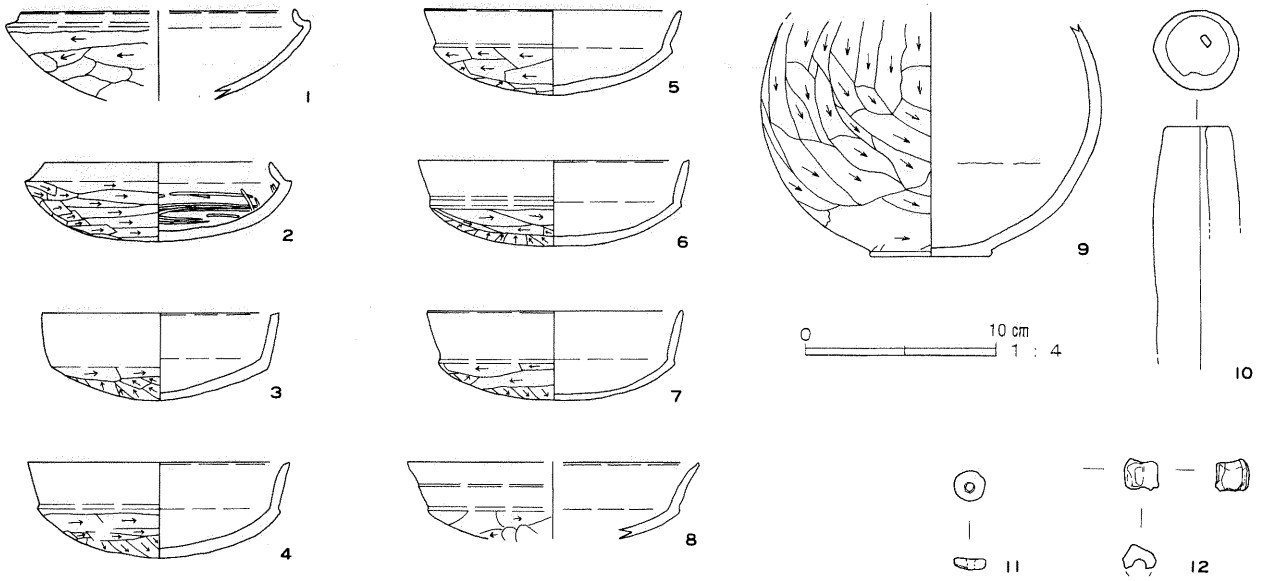
(第311図)　長軸4.58m、短軸4.32mの方形を呈する。主軸方向はS－45°－Wを指す。確認面から1.39mと深い。床面は凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。壁溝は南西壁沿いと南東壁中央から北東壁中央にかけてみられ、ともに壁からやや離れて巡っている。壁との距離は2～15cm、壁溝の幅は7～19cm、床面からの深さは8～22cmを測る。覆土は色調が様々であるが、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。中層と床面直上には灰層（4・5・7層）がみられた。柱穴はみられない。



126・128 号住居跡土層

1 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。灰色(N6/0)粘土粒、炭化物ブロックを多量に含む。しまり良い。
2 黄褐色(2.5Y5/3)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒、炭化物粒・ブロックを多量に含む。しまり良い。
3 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒(少量)を含む。
4 黄褐色(2.5Y5/3)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒を多量に含む。しまり良い。
5 灰褐色(5YR4/2)粘土。灰をブロック状に含む。
6 灰色(NN5/0)灰層。4 層のブロック、焼土粒を多量に含む。しまり悪い。
7 黄灰色(2.5Y5/3)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒(微量)を含む。しまり良い。
8 黄褐色(10YR5/6)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、炭化物(帯状)を含む。しまり良い。
9 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。
10 黄褐色(2.5Y5/8)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。
11 炭化物層。焼土粒(多量)、2 のブロック(少量)を含む。しまりやや悪い。
12 灰黄褐色(10YR5/2)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。
13 にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。
14 13 の土に焼土ブロック(多量)を含む。
15 灰色(N5/0)灰層。焼土ブロック(多量)を含む。しまりやや悪い。
16 黄褐色(10YR5/6)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。煙道天井土。しまり良い。
17 16 層が被熱により灰褐色(5YR4/2)に変色したもの。
18 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。

第316図　E・F 区126・128号住居跡



第317図　E・F区126号住居跡出土遺物

0　5 cm
1 : 2

第152表　E・F区126号住居跡出土遺物観察表　(第317図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(14.7)	-	-	①③②④⑥	②	橙	1/3	
2	土師器杯	12.0	4.2	-	①②④③	①	明赤褐	2/3	
3	土師器杯	12.4	4.6	-	①④②③	①	橙	完形	
4	土師器杯	13.7	5.1	-	①②④③	②	橙	一部欠	
5	土師器杯	13.6	4.5	-	①④②③⑥	②	にぶい黄橙	4/5	
6	土師器杯	14.2	4.5	-	①③②④⑥	①	橙	4/5	
7	土師器杯	13.5	4.8	-	②①③④⑥	②	橙	4/5	
8	土師器杯	(15.4)	-	-	③①④②⑥	③	橙	2/3	
9	土師器甕	-	-	6.0	②①④③⑥	②	にぶい黄橙	下半1/2	
10	土製支脚	最大径　4.4　孔径　0.5						底部欠	
11	臼玉	径　0.8　孔径　0.2　厚さ　0.3						完形	
12	臼玉	径　0.9　孔径　0.35　厚さ　0.8						半分欠	

カマドは南西壁のほぼ中央に設けられている。袖部は地山の掘り残しであるが、内面には被熱した箇所が確認された。南東側の袖は北西側に比べて短いが、本来は同様の長さであったと思われる。燃焼部から煙道部の幅は30～32cmを測る。燃焼部は床面と同レベルでほぼ平坦であった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は僅かに3cmを測る。燃焼部からは土師器杯（No.19）、土製支脚（67）等が礫に混じって検出された。煙道部はほぼ平坦であり、先端で急速に立ち上がる。壁外へは42cm程張り出している。覆土に天井部崩落土等はみられず、住居跡覆土下から焼土等を含む層（10・13・14層）と灰層（11層）が確認された。

カマド南西脇には、径68×55cmの円形を呈し、床面からの深さ37cmの貯蔵穴が検出された。上層（16層）と中層（18層）に焼土を含む炭化物層がみられた。

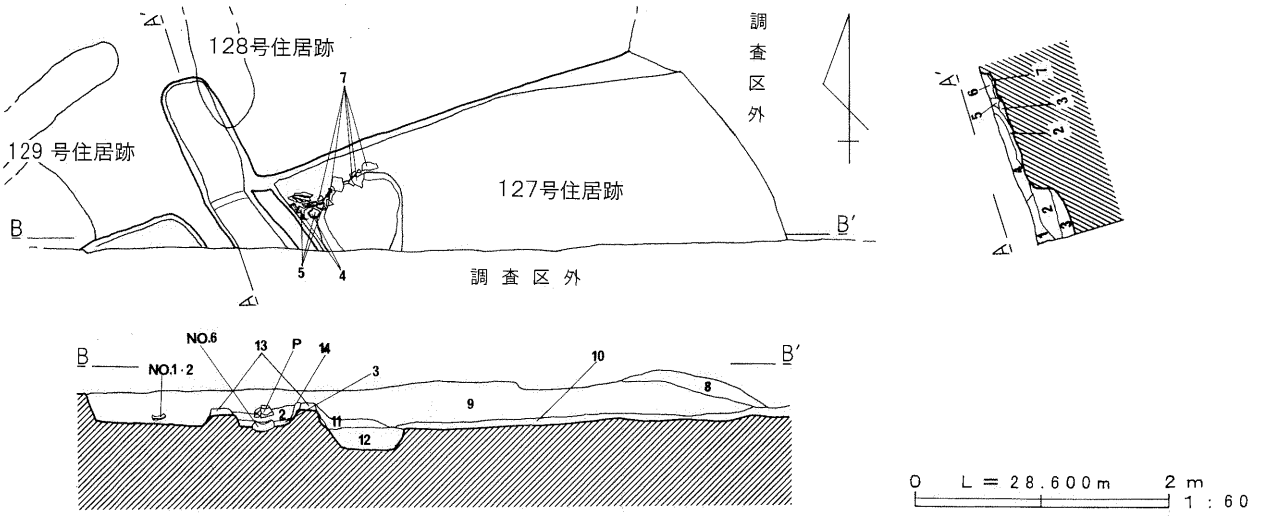
出土遺物（第312～315図）には、土師器杯（No.1～25）、高杯（26・27）、手捏ね土器（28）、甕（29～35）、壺（38）、須恵器短頸壺（37・39・40）、高杯（41）、瑞（42）、須恵器横瓶（43）、提瓶（44）、ガラス小玉（45・46）、滑石製臼玉（47～49）、石製紡錘車（50）、鉄製刀子（51）、鉄製鋤先（52）、鉄鏃（53～65）、砥石（66）、土製支脚（67）、土錘（68～97）等がある。カマドから検出された19・67以外は、床面直上から検出されたものと覆土上層から検出され

たものの二者に分けられる。前者は南東壁と北西壁沿いにみられ、北西壁沿いからは土錘がまとまって検出された。後者は住居跡北東部に集中してみられ、1層中から検出された。

土師器杯はすべて模倣杯である。1～10は杯身模倣杯、その他は杯蓋模倣杯である。口径大きく、浅身のものが多い。高杯はともに低い脚部のみの検出である。28は無調整である。甕は長胴甕（29～32）、丸胴甕（33・34）、小型のもの（35・36）がある。38は短頸壺である。須恵器は末野産である。37・39は胴上部、41は口縁部に波状文が施文されている。42は胴部に穿孔がみられる。43は胴部が大きく膨らむ。底部は平底状を呈する。44は破片での検出である。臼玉は3点検出された。径0.8cm程のものが主体となる。50は全面に斜位及び格子状の線刻がみられる。51は先端のみ、52は完形品、53～65は鉄鏃であるが、完形品は54のみである。66は全面を使用している。67は完形品。土錘は30点と多数検出されている。88以外は完形品である。長さ4.5cm前後、最大径1.5cm前後、孔径0.4cm程のものが主体となる。

北東部出土遺物は、投棄されたものとは考えられず、ある程度覆土が堆積した段階で埋設されたものと考えられる。遺物には、多量の土器の他に玉類、鉄製品等も検出されたことから、祭祀的性格が強い遺構である。

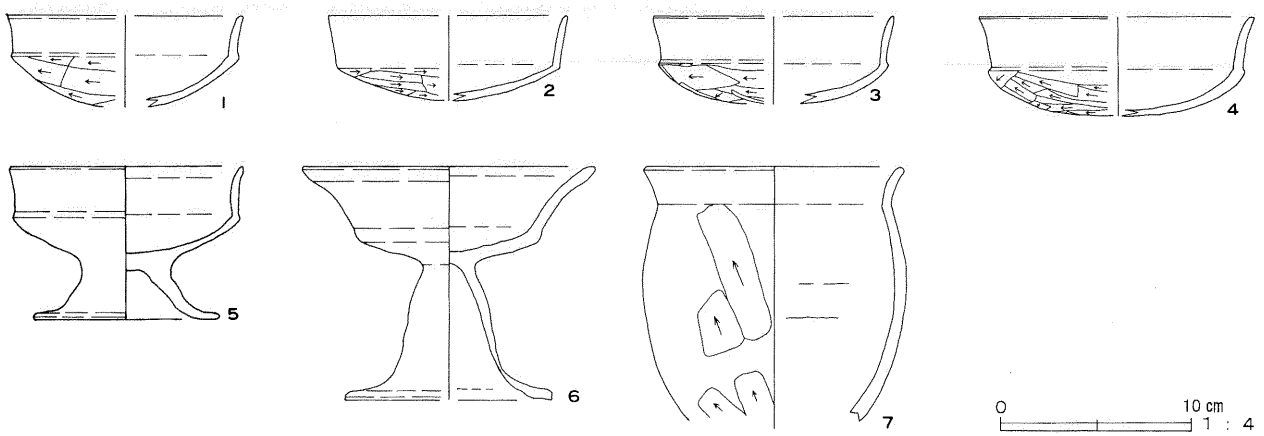
126号住居跡　AP－24グリッドに位置する。南西部で125号住居跡に切られ、南東部では128号住居跡を切っている。
（第316図）



127号住居跡土層

1　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒、にぶい黄橙色(10YR7/2)粘土ブロック(火山灰？)を多く含む。しまり良い。
2　明赤褐色(5YR5/6)焼土層。灰を少量含む。しまりやや悪い。
3　青灰色(5PB5/1)灰層。焼土ブロックを多く含む。粘性強い。
4　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。2層との境は被熱により変色。しまり良い。
5　黄灰色(2.5Y6/1)粘土。焼土・炭化粒を微量に含む。
6　明褐色(7.5Y5/6)粘土。しまり良い。
7　黄灰色(2.5Y5/1)粘土。焼土粒(若干)を含む。粘性強い。
8　黄褐色(2.5Y5/4)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒(少量)を含む。しまり悪い。
9　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒、にぶい黄橙色(10YR7/2)粘土ブロック(火山灰？)を多量に含む。しまり良い。
10　灰色(N6/0)粘土。黄橙色(10YR7/2)粘土ブロック(火山灰？・多量)、炭化物(帯状)を含む。しまりやや良い。
11　灰色(N5/0)粘土。焼土粒(多量)を含む。
12　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。しまり良い。
13　灰褐色(5YR4/2)シルト。しまり良い。
14　明赤褐色(5YR5/8)粘土。焼土ブロックを含む。しまり悪い。

第318図　E・F区127号住居跡



第319図　E・F区127号住居跡出土遺物

第153表　E・F区127号住居跡出土遺物観察表　(第319図)

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　考
1	土師器杯	(12.4)	(4.8)	-	④①⑥	②	にぶい橙	3/5	
2	土師器杯	(12.6)	(4.5)	-	⑥④①②	②	明赤褐	3/5	
3	土師器杯	(12.6)	(4.6)	-	④①②	②	橙	3/5	
4	土師器杯	(14.4)	(5.3)	-	④①②	②	橙	3/5	
5	土師器高杯	12.4	8.1	-	③①	②	橙	3/4	杯部内外面磨滅。
6	土師器高杯	15.5	12.5	-	②④①	②	橙	4/5	
7	土師器甕	13.8	-	-	③①	②	赤褐	2/3	二次加熱。胴下部内面輪積痕。磨滅。

長軸は不明であるが、短軸は4ｍを測り、長方形を呈すると思われる。主軸方向はＮ－52°－Ｅを指す。確認面からの深さは38cmを測り、床面は凹凸がみられ、南西方向に下る傾向にある。覆土はランダムな層位をなしているが、シルト層（7～9・11層）を主体とする自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴はみられない。

カマドは、北東壁中央からやや南東寄りに設けられている。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。北西側の袖は南東側に比べて短い。燃焼部の幅は37cm、煙道部幅は30cm前後を測り、先端で径28cmのピット状の掘り込みとなる。燃焼部から煙道部にかけては緩やかな傾斜となっており、煙道先端はピット状となっている。壁外へは1.28cm程張り出している。なお、燃焼部からは甕の底部（No.9）が出土した。覆土は、焚口部から燃焼部では、シルトないし粘土層（4・5層）、そしてその下から灰層（6層）が検出された。煙道部では炭化物を含む層（1・2層）と焼土を含む層（3層）がみられた。

カマド南東脇には、径68×57cmで不整円形を呈し、深さ35cmの貯蔵穴が検出された。覆土上層からは土師器杯（No.2）が検出された。

出土遺物（第317図）には、土師器杯（No.1～8）、甕（9）、土製支脚（10）等がある。9はカマド、2は貯蔵穴、3・4・7・10は床面上から検出された。その他は覆土中からの検出である。杯はすべて模倣杯である。1・2は杯身模倣杯、その他は杯蓋模倣杯である。3は体部と底部境の稜が不明瞭である。9は小型のものである。10は棒状を呈する。臼玉は2点検出された。12は半分を欠く。

127号住居跡　AP－24グリッドに位置する。F区南東端に位置し、大半が調査区域外にある。北西部で
（第318図）　129号住居跡、カマド先端で128号住居跡を切っている。

規模・平面形は不明である。主軸方向はN－20°－Wを指す。確認面からの深さは37cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は暗灰黄色シルト（9層）が、厚く堆積していた。床面直上には、灰色粘土層（10層）が薄く堆積していた。ともに火山灰らしき混入物を含んでいた。自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴は検出されなかった。

カマドは北西壁に設けられている。両袖部の先端は調査区域外にある。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。燃焼部の幅は38cmを測り、煙道部幅は47cmでほぼ一定となっている。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は17cmを測る。煙道部はほぼ平坦であり、先端で直角に立ち上がる。壁外へは98cm程張り出している。覆土に天井部崩落土等はみられず、住居跡覆土下から焼土層（2層）、灰層（3層）等がみられた。

カマド北東脇には、貯蔵穴がみられた。長軸は不明、短軸は72cm、床面からの深さは16cmを測る。平面形は不整円形を呈する。

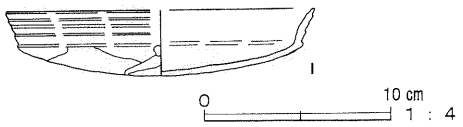
出土遺物（第319図）には、土師器杯（1～4）、高杯（5・6）、甕（7）等がある。カマド北東脇の貯蔵穴周辺からまとまって検出された。4・5・7以外は、覆土中からの検出である。杯はすべて口径小さく、深身の模倣杯である。高杯は模倣杯に低い脚部がつくタイプ（5）と、口縁部が大きく外反し、脚部が高く、裾が大きく広がるタイプ（6）がある。ともに摩滅が顕著であった。7は小型のものである。二次加熱を受けている。

128号住居跡　AP－24グリッドに位置する。大半を他の住居跡に切られており、検出できたのは南東壁
（第316図）　とカマドのみである。北東部は126号住居跡、北西部は125号住居跡に切られており、南西壁にあるカマドは、127号住居跡のカマドに切られている。

規模は不明であるが、南東壁は5.2mを測る。平面形は不明であるが、126号住居跡の範囲内に収まることからみて長方形を呈すると思われる。主軸方向はS－27°－Eを指す。確認面からの深さは28cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄褐色シルトによる単一層（10層）である。自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴は検出されなかった。

カマドは南東壁のほぼ中央に設けられている。袖部は壁際から僅かに確認されたのみであるが、本来はもっと長かったと思われる。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。燃焼部から煙道部は30cm前後を測り、ほぼ一定となっている。燃焼部



第320図　E・F区128号住居跡出土遺物

第154表　E・F区128号住居跡出土遺物観察表　（第320図）

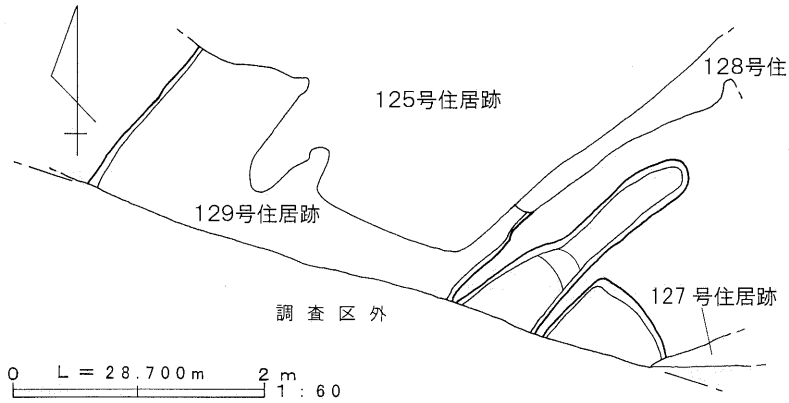
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(16.2)	3.5	-	①③④	②	にぶい赤褐	1/4	

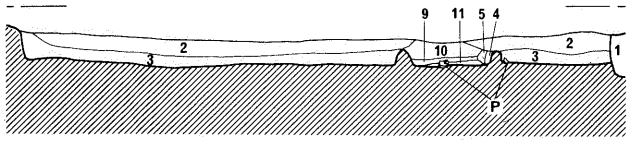
は床面と同一レベルでほぼ平坦であった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は9cmを測る。煙道部は先端に向かって緩やかに下る傾向にある。壁外へは1.3m程張り出している。覆土は煙道部に天井部（16層）が確認され、その下から被熱層（17層）、灰層（15層）が検出された。焚口部から燃焼部では、下位に焼土層（14層）、灰層（15層）がみられた。

カマド北東脇には、径74×70cmで長方形を呈し、深さ72cmの貯蔵穴が検出された。

出土遺物（第320図）は、図示可能なものは土師器杯（No.1）のみであった。口径大きく、浅身の模倣杯である。口縁部には複数の稜を有する。覆土中から検出された。

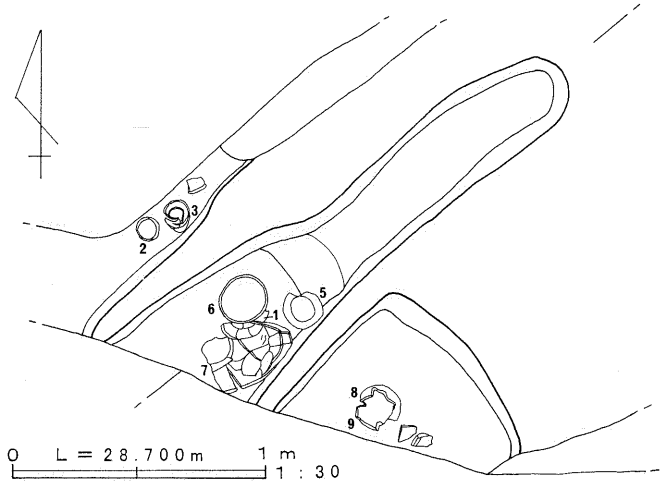
129号住居跡（第321図）　AP－24・25グリッドに位置する。調査区南端に位置し、その大半が調査区域外にあるため、検出できたのは北西部の一部とカマドのみである。北西部は125・128号住居跡、北東部は127号住居跡に切られている。

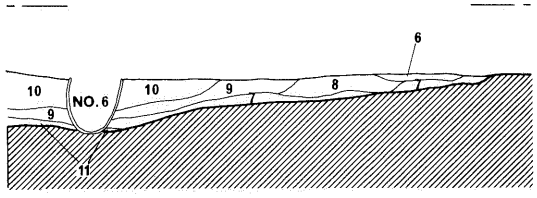




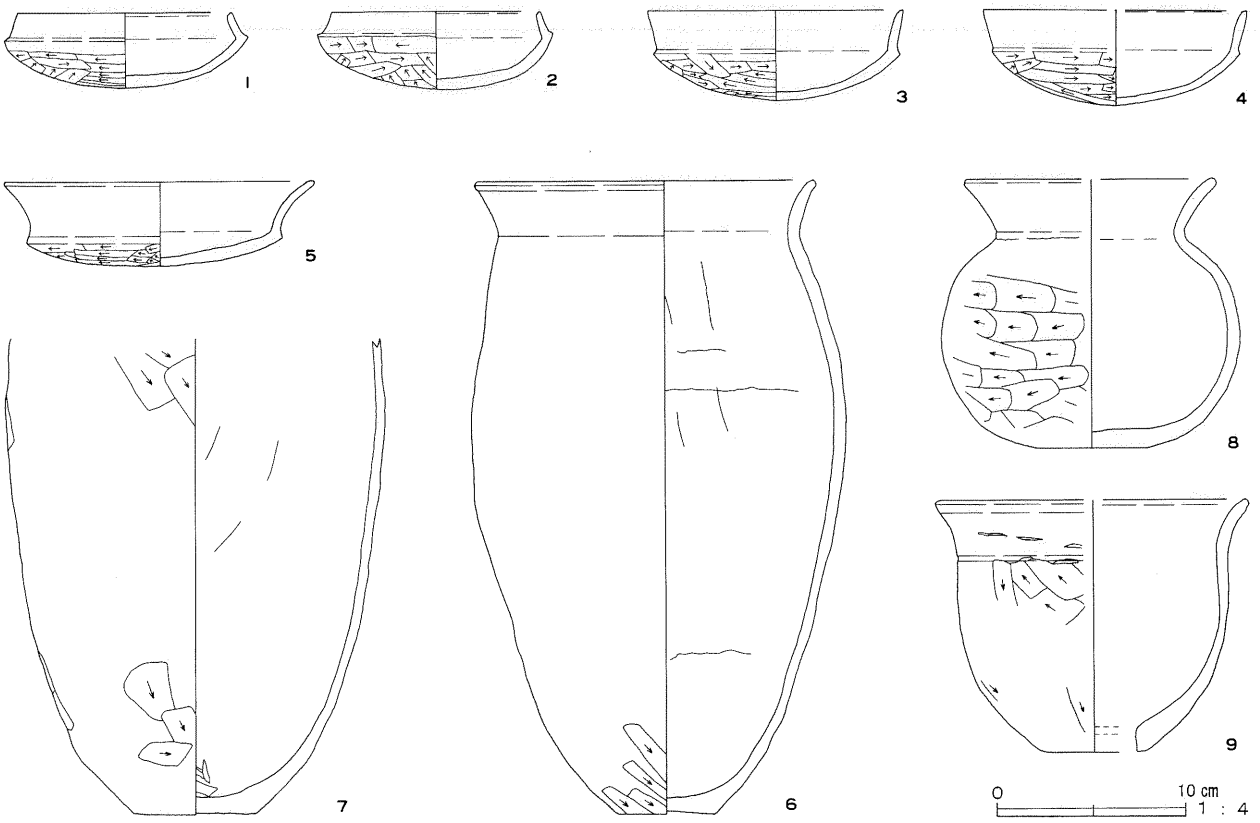
129 号住居跡土層

1　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒、にぶい黄橙色(10YR7/2)粘土ブロック(火山灰？)を多量に含む。しまり良い。
2　黄褐色(2.5Y5/3)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒(少量)、炭化物(帯状)を含む。しまり良い。
3　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒・ブロック(多量)を含む。しまり良い。
4　灰褐色(5YR4/2)シルト。地山が被熱により変色。しまり良い。
5　明赤褐色(5YR5/6)粘土。焼土ブロックを含む。しまり良い。
6　黄褐色(2.5Y5/6)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒、焼土ブロックを多量に含む。
7　灰色(N5/0)灰層。黄褐色(2.5Y5/6)粘土・焼土ブロックを多量に含む。
8　黄褐色(2.5Y5/6)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒、焼土ブロックを多量に含む。しまり良い。
9　黄褐色(10YR5/6)粘土。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒、焼土ブロックを多量に含む。しまり悪い。
10　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト。黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。
11　灰色(N6/0)灰層。粘性強い。





第321図　E・F区129号住居跡・カマド



第322図　E・F区129号住居跡出土遺物

第154表　E・F区129号住居跡出土遺物観察表　（第322図）

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　考
1	土師器杯	11.3	3.9	-	④①⑥	②	橙	一部欠	
2	土師器杯	11.0	4.1	-	①④⑥②	②	橙	一部欠	
3	土師器杯	13.5	4.8	-	①④②	②	橙	一部欠	
4	土師器杯	(13.8)	5.0	-	①④②	②	橙	3/5	
5	土師器杯	16.3	4.5	-	①④⑥	②	橙	一部欠	
6	土師器甕	18.1	33.6	5.1	①③	②	浅黄橙	4/5	二次加熱。胴下部内面煤付着。磨滅。
7	土師器甕	-	-	6.5	③	②	にぶい黄橙	下位4/5	煤付着。磨滅。
8	土師器甕	(13.3)	14.3	5.6	①③②	②	橙	7/8	二次加熱。
9	土師器甑	(16.6)	13.4	5.6	③①	②	橙	2/3	黒斑有。胴下部外面磨滅。

規模・平面形は不明である。主軸方向はN－41°－Eを指す。確認面からの深さは21cmを測り、床面はやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。覆土は黄色系のシルト二層（2・3層）からなる。上層（2層）に焼土・炭化物等を含んでいた。自然堆積と考えられる。

壁溝、柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

カマドは北東壁に設けられている。両袖部の先端は調査区域外にある。袖部は地山の掘り残しで、内面には被熱した箇所が確認された。燃焼部の幅は53cm、煙道部幅は32～35cmを測る。燃焼部は床面と同レベルでほぼ平坦であった。燃焼部と煙道部の境には段が設けられており、高低差は11cmを測る。燃焼部からは、土師器多数が検出された。煙道部は先端に向かって緩やかに立ち上がる。壁外へは1.12m程張り出している。覆土に天井部崩落

土等はみられず、焼土を含む層（8・9層）と、その下から灰層（7・11層）が検出された。

出土遺物（第322図）には、土師器杯（№1～5）、甕（6～8）、甑（9）等がある。1・5～7はカマド、2・3・8・9はカマド両脇から検出された。4は覆土中からの検出である。杯はすべて模倣杯である。1・2は杯身模倣杯、3～5は杯蓋模倣杯である。いずれも口径が大きく、身が深い。甕は長胴甕（6・7）と小型のもの（8）である。6・8は二次加熱を受けている。6・7は煤が付着していた。9は小型のもので、把手を持たない。黒斑を有する。

2　掘立柱建物跡・柵列

掘立柱建物跡は、F区から5棟が検出されている。また、3・4号と5号には、柵列が伴っていた。これらはF区中央の北端から南端までに位置し、F区東側の住居跡群の間に点在する形で確認された。いずれの掘立柱建物跡も出土遺物が伴わないため、時期決定に苦しむ。特徴としては、住居跡群の西側に位置すること、掘り方が小さいこと等が挙げられる。

1号掘立柱建物跡
（第323図）

AB－19・20グリッドに位置する。27～28・33～37号住居跡に囲まれている。他の遺構との重複関係はみられない。

本建物跡は二間×二間の総柱建物跡で、東側に庇と思われる柱穴が付随する。桁行3.00m、梁行2.8mの東西棟である。柱間は、北側の桁行が西から1.3m、1.5m、中央が西から1.5m、1.5m、南側が西から1.4m、1.6mを測る。梁行は、西側が北から1.5m、1.3m、中央が北から1.5m、1.3m、東側が北から1.3m、1.5mを測る。建物跡と庇の柱穴との柱間は2.3m、庇柱穴間の柱間は1.3mを測る。主軸方向はN－43°－Eを指し、周辺の住居跡とほぼ同軸方向を向く。

柱穴は、いずれも径30cm前後で、深さは70～80cmと深い。

いずれの柱穴からも柱痕、遺物は検出されなかった。

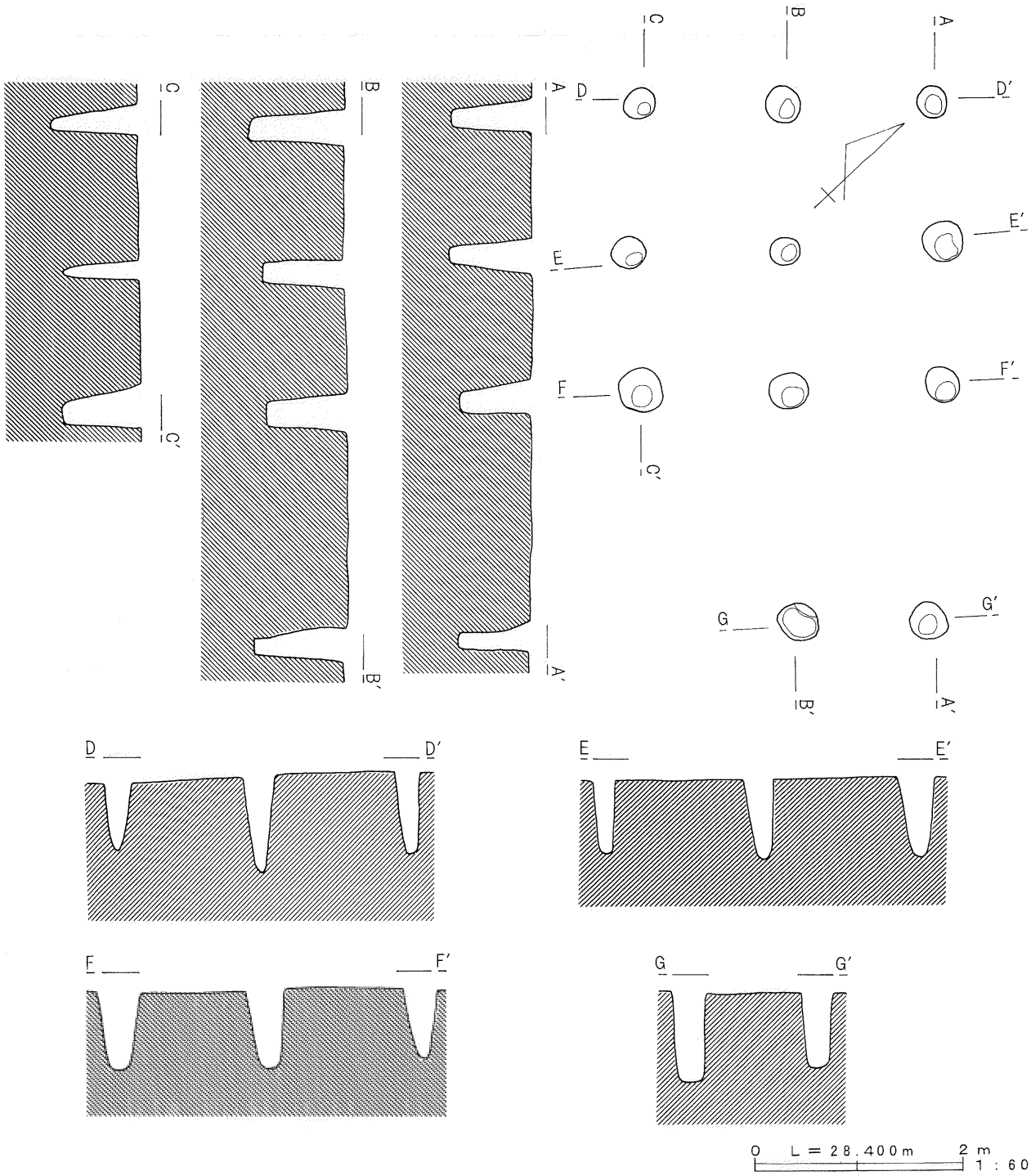
2号掘立柱建物跡
（第324図）

AD・AE－21・22グリッドに位置する。45号住居跡の西側にあり、他の遺構と重複関係はみられない。

本建物跡は二間×二間の側柱建物跡であるが、東側梁行中央の柱穴を欠く。桁行4.4m、梁行3.5mの東西棟である。柱間は、桁行の南側が西から2.1m、2.3m、北側が1.7m、2.2mを測る。梁行は、西側が南から1.5m、2.05m、東側が3.3mを測る。主軸方向N－58°－Wを指し、周辺の住居跡とほぼ同軸方向を向く。

柱穴は、径40cm程のものが主体となるが、北側桁行中央のもののみ他のものより大きい。深さは26～65cmを測り、バラツキがみられる。

いずれの柱穴からも柱痕、遺物は検出されなかった。

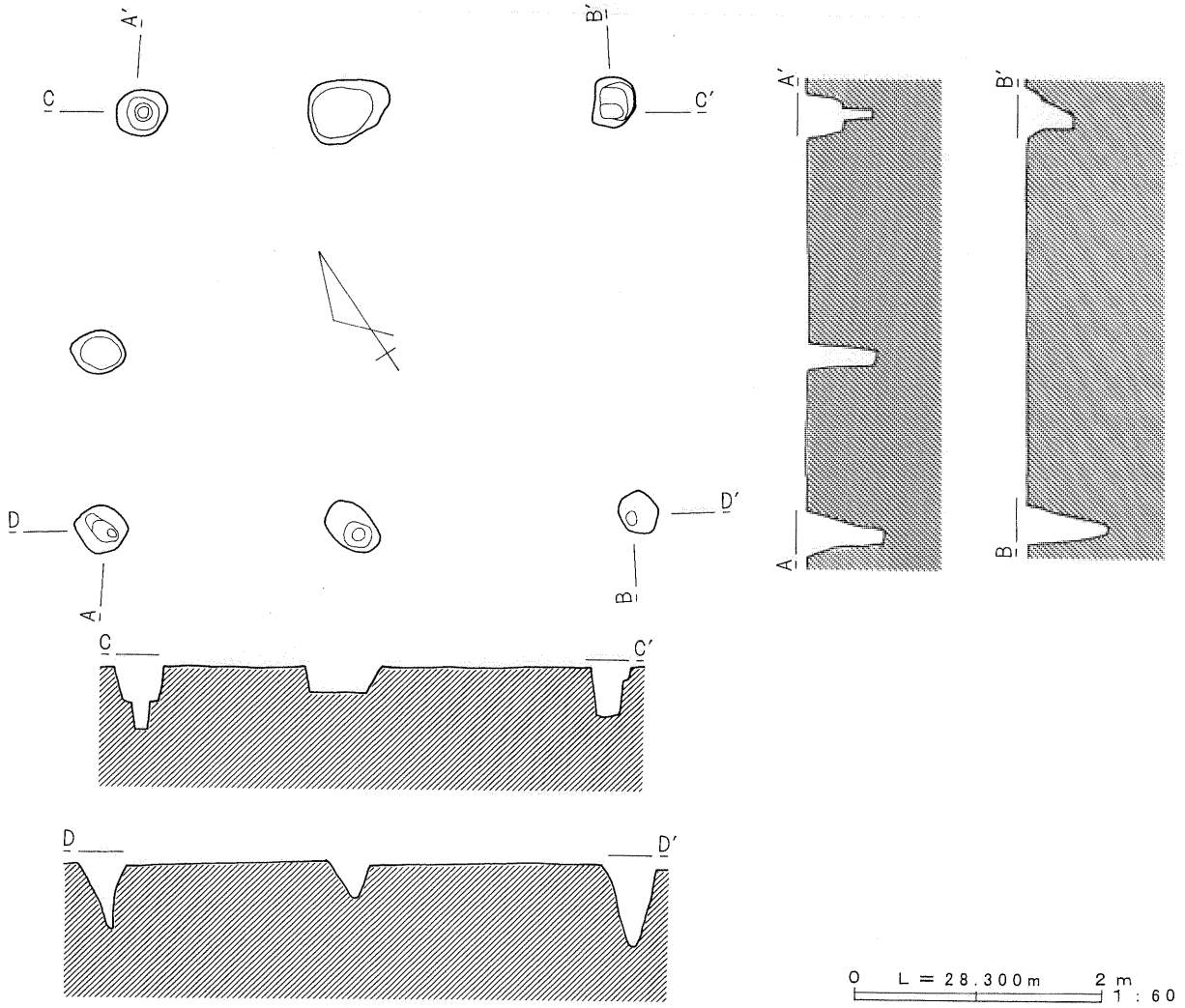


第323図　E・F区1号掘立柱建物跡

3号掘立柱建物跡（第325図）

AE－24グリッドに位置する。東側に並行して1号柵列、4号掘立柱建物跡が隣接しており、住居跡群とはやや離れた箇所にある。周辺には柱穴がみられるが、本建物跡に付随するものかどうかは不明である。

本建物跡は一間×二間の側柱建物跡で、桁行3.2m、梁行2mの東西棟である。柱間は、北側の桁行が西から1.6m、1.6m、南側が1.7m、1.45mを測る。梁行は、西側が2m、東側が1.8mである。主軸方向はN－1°－Eを指し、隣接する4号建物跡、



第324図　E・F区2号掘立柱建物跡

1号柵列も含めて他の建物跡や住居跡と軸が異なる。

柱穴は、径30cm程のものが主体となる。深さは4～25cmとバラツキがみられる。いずれの柱穴からも柱痕、遺物は検出されなかった。

4号掘立柱建物跡　(第325図)　AE－23グリッドに位置する。西側に1号柵列、3号掘立柱建物跡が並行して隣接している。3号建物跡同様、住居跡群とはやや離れた箇所にある。本建物跡の南側に2つ、建物内に1つ柱穴がみられるが、付随するものかどうか不明である。

本建物跡は2間×2間の総柱建物跡で、桁行3.2m、梁行3mの南北棟である。柱間は、西側の桁行が北から1.5m、1.7m、真中が1.3m、1.6m、東側が1.5m、1.7mを測る。梁行は、北側が西から1.55m、1.45m、真中が1.4m、1.6m、南側が1.35m、1.45mを測る。主軸方向はN－4°－Wを指し、3号掘立柱建物跡や1号柵列とほぼ同軸方向を向く。

柱穴は径35cm前後のものが主体となり、深さは15～27cmとバラツキがみられる。

いずれの柱穴からも柱痕、遺物は検出されなかった。

5号掘立柱建物跡（第326図）　AM・AN－24・25グリッドに位置する。89～117号住居跡に囲まれており、他の遺構との重複複関係はみられない。本建物跡の東西には柱穴がみられるが、付随するものかどうかは不明である。また、南西には2号柵列がみられるが、軸がややずれている。本建物跡に付随するものかどうかは不明である。

本建物跡は二間×三間の総柱建物跡で、桁行3.6～3.9m、梁行2.4mの南北棟であり、東側の桁行は西側にいくにつれて長くなる傾向にあり、かなりいびつである。柱間は、西側の桁行が北から1.2m、1.5m、0.9m、真中が0.9m、1.5m、1.2m、東側が1m、1.5m、1.4mを測る。梁行はすべて1.2mである。主軸方向はN－1°－Wを指し、周辺の住居跡群とはほぼ同軸方向を向く。

柱穴は、径30～55cmとバラツキがみられるが、40cm前後のものが主体となる。深さも28～62cmとバラツキがみられるが、40cm前後のものが主体となる。なお、建物跡の中心に位置する2つの柱穴は、径が大きいことから土層断面を観察した所、2つの柱穴が切り合っていることが確認された。よって、本建物跡は建て替えが行われていたと考えられる。

いずれの柱穴からも柱痕、遺物は検出されなかった。

1号柵列（第325図）　AD･AE－23グリッドに位置する。3号掘立柱建物跡と4号掘立柱建物跡の間に位置し、前者とは2.3m、後者とは1mの距離にある。周辺には単独の柱穴がみられるが、付随するものかどうかは不明である。

柱間は、北から2.8m、1.5m、2.35m、1.5m、1.5mを測る。主軸方向は、N－5°－Eを指し、3・4号建物跡とほぼ同軸方向を向く。

柱穴は、径22～43cm、深さ4～24cmを測り、バラツキがみられる。

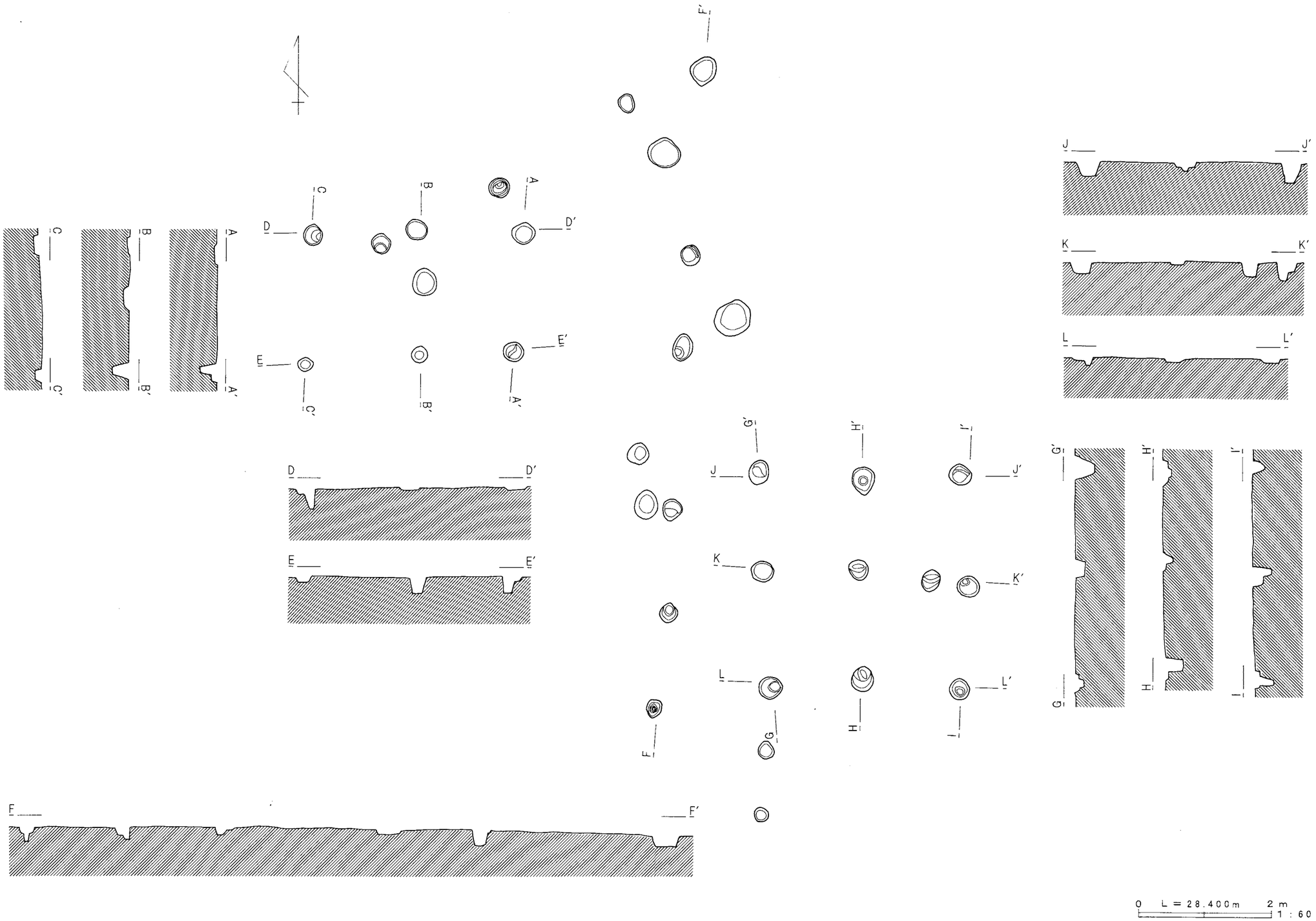
いずれの柱穴からも柱痕、遺物は検出されなかった。

2号柵列（第326図）　AN－25グリッドに位置する。5号掘立柱建物跡の南東にあり、5号建物跡同様、89～118号住居跡群の間に位置する。

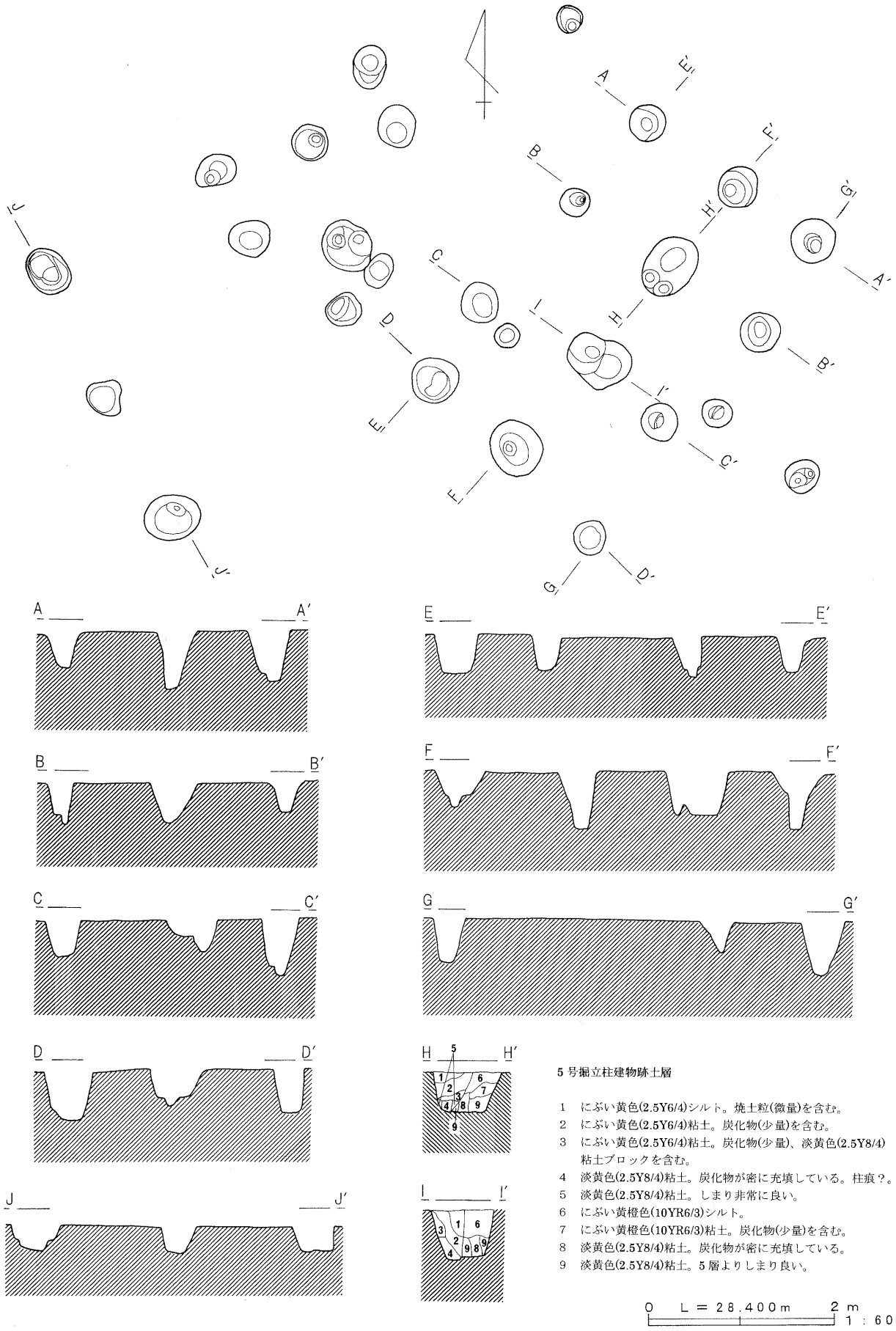
柱間は、西側から1.45m、1.45mを測る。主軸方向は、N－30°－Wを指し、5号建物跡とはややずれることから付随するものかどうかは不明である。

柱穴は、径40～60cm程で、深さは、25cm前後である。

いずれの柱穴からも柱痕、遺物は検出されなかった。



第325図　E・F区3・4号掘立柱建物跡・1号柵列



第326図　E・F区5号掘立柱建物跡・2号柵列

3 溝　跡

溝跡はE・F区合わせて14条が検出された。ほぼ南北方向に走るものと北東方向から南西方向に走るものがみられた。E区ではすべて第一確認面からの検出である。F区では調査区の東側に集中し、土坑同様、住居跡の群在する東側とは反対の西側にみられた。

1号溝跡
(第327図)
(第329図)

AC・AD－15グリッドに位置する。E区の第一確認面から検出された。北東方向から南西方向へ走っており、北東側は調査区域外にある。AD－15グリッドで11号住居跡を切っており、直接的な重複関係にないが、下部に畠跡がみられた。

検出された長さは6.90m、幅は0.4m前後であり、確認面からの深さは20cmを測る。断面形は舟底状を呈する。覆土は灰色シルトの単一層（1層）である。酸化鉄を多量含んでいた。自然堆積である。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

2号溝跡
(第327図)
(第329図)

AC・AD－16グリッドに位置する。E区の第一確認面から検出された。北東方向から南西方向へ走っており、南北両方とも調査区区域外に伸びている。14・15号住居跡を切っている。

検出された長さは10.4m、幅は2.5～3mと他の溝跡に比べて幅広である。確認面からの深さは31cmを測る。断面形は舟底状を呈する。覆土は灰色砂の単一層（1層）であった。酸化鉄を多量含んでいた。自然堆積である。

遺物は土器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。ただし、14号住居跡から平安時代の須恵器高台椀が出土しており、本溝跡からの流れ込みと考えられる。

3号溝跡
(第327図)
(第329図)

AB・AC－19・20グリッド境に位置し、E区とF区の境から検出された。第一確認面からの検出である。ほぼ南北方向にやや蛇行しながら走っており、南側は調査区域外にある。28号住居跡を切っている。

検出された長さは6.4m、幅0.5～0.8mであり、確認面からの深さは4cmと浅い。断面形は幅広の逆台形状を呈する。覆土は褐灰色粘土による単一層（1層）であった。自然堆積と考えられる。

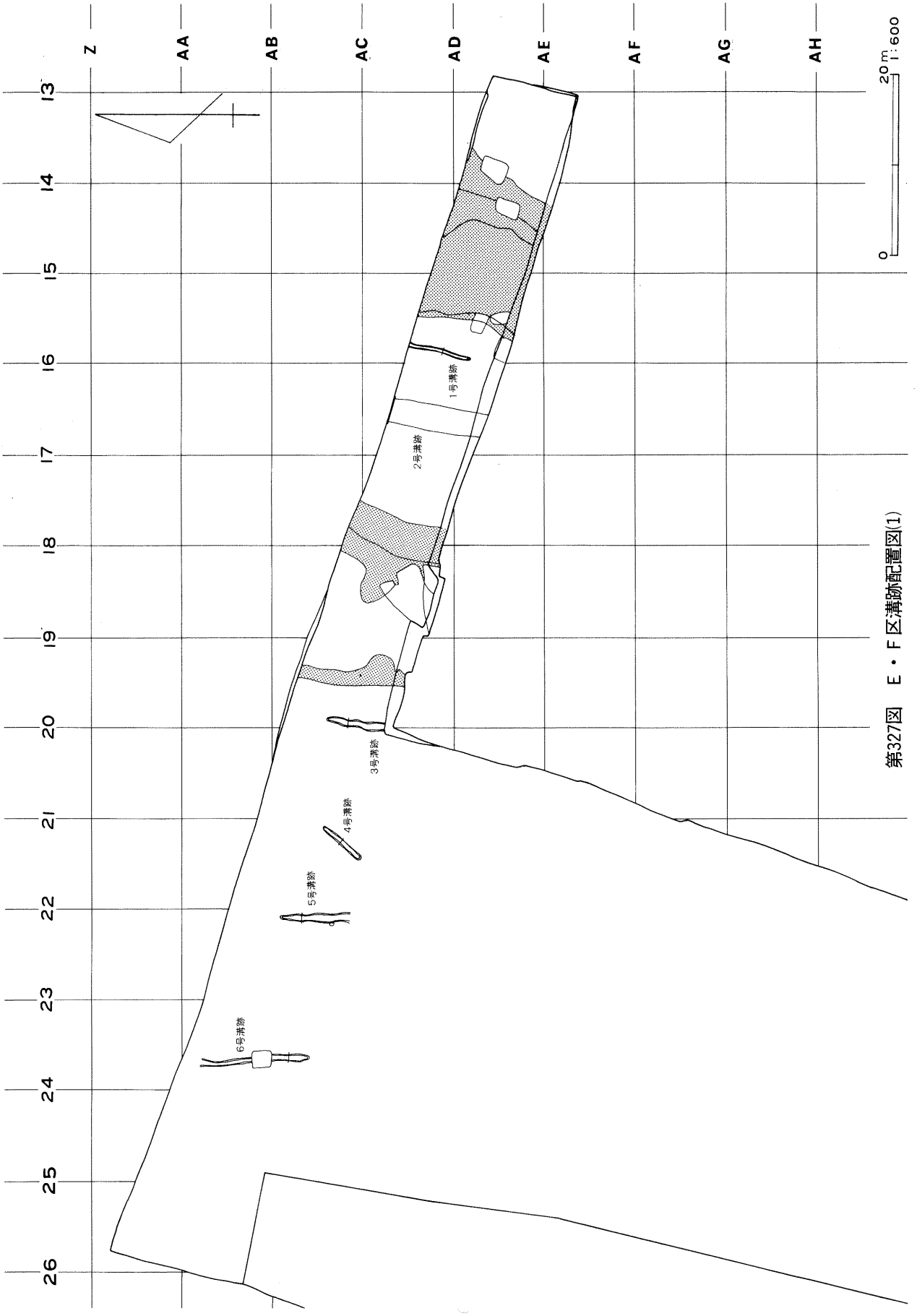
遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

4号溝跡
(第327図)
(第329図)

AB－21グリッドに位置する。F区からの検出である。北東方向から南西方向へ走る。他の遺構との重複関係はみられない。

長さ5.04m、幅0.5m前後、確認面からの深さは13cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。覆土は暗赤褐色粘土による単一層（1層）であった。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。



第327図　E・F区溝跡配置図(1)

5号溝跡　AB－22グリッドに位置する。F区からの検出である。ほぼ南北方向に走るが、南側では途切れている。他の遺構との重複関係はみられない。

(第327図)
(第329図)

検出された長さは7.49m、幅0.4～0.98m、確認面からの深さは7cm程と浅い。断面形は舟底状を呈する。覆土は灰色砂による単一層（1層）であった。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

6号溝跡　AA・AB－23グリッドに位置する。F区からの検出である。ほぼ南北方向に走るが、北側は途切れており、確認不可能であった。26号土坑に切られている。

(第327図)
(第329図)

検出された長さは10.22m、幅は0.5m前後、確認面からの深さは7cmを測る。断面形は舟底状を呈する。覆土は暗灰色粘土による単一層（1層）でった。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

7号溝跡　AE・AF－26・27グリッドに位置する。F区からの検出である。北西方向から南東方向へ走っている。他の遺構との重複関係はみられない。

(第328図)
(第329図)

長さは10.14m、幅0.5m、確認面からの深さは7cm程と浅い。断面形は舟底状を呈する。覆土は暗灰黄色粘土による単一層（1層）であった。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

8号溝跡　AI～AK－25・26グリッドに位置する。F区からの検出である。北東方向から南西方向へ走っている。他の遺構との重複関係はみられない。

(第328図)
(第329図)

長さ28.70m、幅0.6m前後、確認面からの深さは9cm程である。断面形は舟底状を呈する。覆土は灰色粘土による単一層（1層）であった。酸化鉄を多量含む他、炭化物も微量含んでいた。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

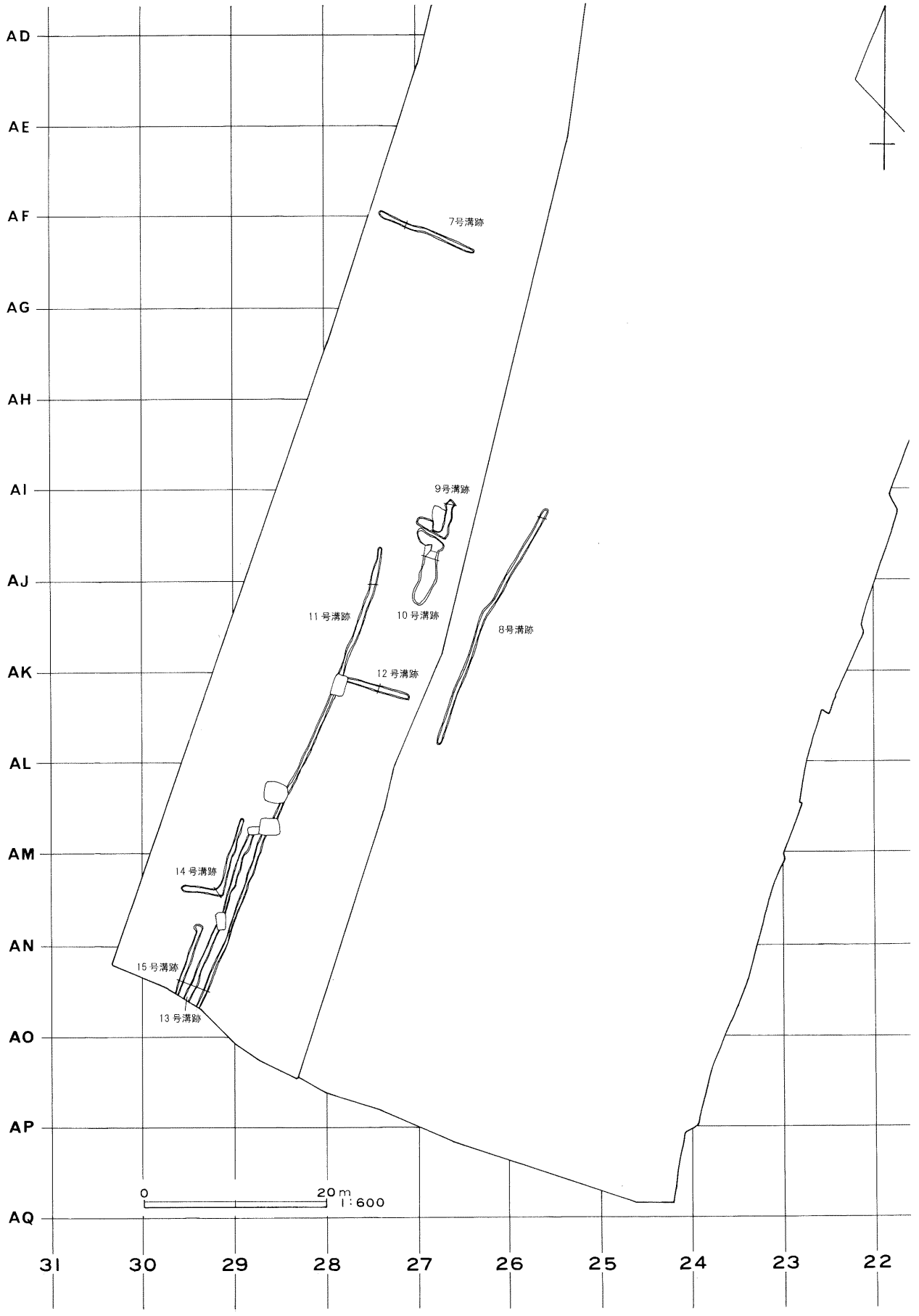
9号溝跡　AI－26グリッドに位置する。F区からの検出である。南西方向に同形態の10号溝跡がある。73号土坑に切られている。北東方向から南西方向へは4.2m、北西方向から南東方向へは3.7mを測り、平面形がL字状を呈している。幅0.7～1.2m、確認面からの深さは5cm程と浅い。断面形は幅広の逆台形状を呈する。覆土は図示しなかったが、灰色粘土による単一層であった。自然堆積と考えられる。

(第328図)
(第329図)

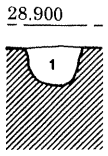
遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

10号溝跡　AI・AJ－26グリッドに位置する。F区からの検出である。同形態の9号溝跡の北東に位置する。北東方向から南西方向へは7.5m、北西方向から南東方向へは3.3mを測り、平面形はL字状を呈する。幅1.2～2.0m、確認面からの深さは19cmを測る。断面形は底面がややいびつであるが、ほぼ逆台形状を呈する。覆土は灰色系の粘土二層（1・2層）からなる自然堆積層であった。所々酸化していた。

(第328図)
(第329図)

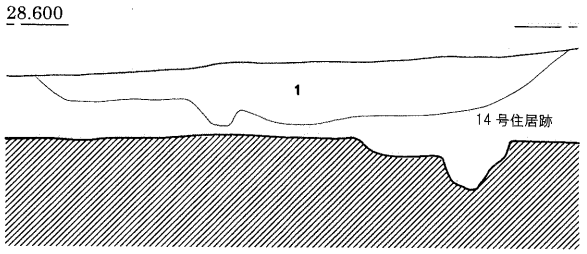


第328図　E・F区溝跡配置図(2)



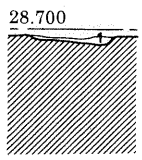
1号溝土層

1　灰色(5Y6/1)シルト。
酸化鉄粒(多量)を含む。



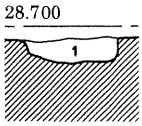
2号溝土層

1　灰色(5Y7/1)砂。酸化鉄粒(多量)を含む。



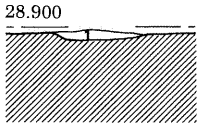
3号溝土層

1　褐灰色(10YR5/1)粘土。黄色(2.5Y8/8)粘土粒、灰色(2.5Y8/1)粘土ブロックを密に含む。



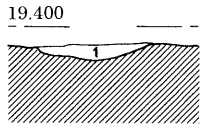
4号溝土層

1　暗赤褐色(2.5YR3/3)粘土。黄色(2.5Y7/8)・黄灰色(2.5YR3/3)粘土粒を密に褐灰色(10YR5/1)粘土ブロックを粗に含む。しまりやや良い。



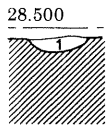
5号溝土層

1　灰色(5Y4/1)砂。暗赤褐色(5YR3/6)粘土ブロックを含む。しまりやや悪い。



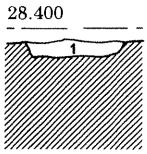
6号溝土層

1　暗灰色(N3/0)粘土。暗赤褐色(2.5YR3/6)・黄褐色(10YR8/8)・褐灰色(7.5YR6/1)粘土ブロックを含む。しまり良い。



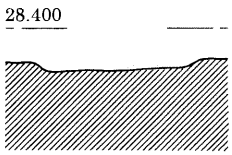
7号溝土層

1　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。酸化鉄、マンガン、炭化物(微量)を含む。しまり非常に良い。粘性弱い。

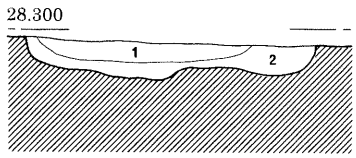


8号溝土層

1　灰色(5Y6/1)粘土。
酸化鉄ブロックを(多量)、炭化物粒(微量)を含む。

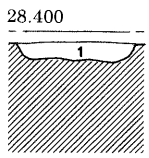


9号溝



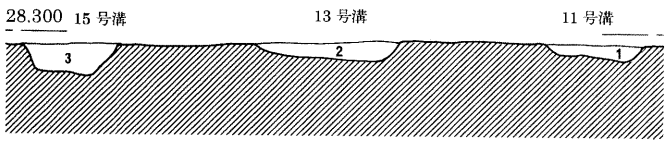
10号溝土層

1　灰色(5Y6/1)粘土。暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土ブロックを含む。ところどころ酸化している。しまり良い。
2　黄灰色(2.5Y6/1)粘土。ところどころ酸化している。しまり良い。



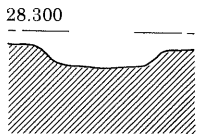
12号溝土層

1　灰色(7.5Y6/1)粘土。炭化物粒(少量)を含む。ところどころ酸化している。しまり良い。

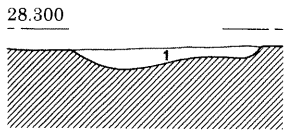


11・13・15号溝土層

1　灰色(5Y6/1)粘土。灰色(N5)粘土ブロックを含む。ところどころ酸化している。しまり良い。
2　灰色(7.5Y5/1)粘土。灰色(N5)粘土ブロックを含む。ところどころ酸化している。しまり良い。
3　灰色(7.5Y5/1)粘土。ところどころ酸化している。しまり良い。



11号溝



14号溝土層

1　オリーブ灰色(2.5GY6/1)粘土。
灰色(N4)粘土ブロックを含む。しまり良い。



第329図　E・F区溝跡断面図

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

11号溝跡
(第328図)
(第329図)

AI～AN－27～29グリッドに位置する。F区からの検出である。北東方向から南西方向に走っており、AL～AN では13～15号溝跡が西側に並行して走っている。AK－28グリッドでは86号土坑に切られており、同箇所で本溝跡から東側に12号溝跡が派生している。AL－29グリッドでは108号土坑に切られている。

検出された長さは50.47m、幅0.5m前後、確認面からの深さは９cm程である。断面形は逆台形状を呈する。覆土は灰色粘土による単一層（１層）であった。自然堆積と考えられる。所々酸化していた。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

12号溝跡
(第328図)
(第329図)

AK－27グリッドに位置する。F区からの検出である。AK－28グリッドで11号溝跡から派生して北西方向から南東方向に走っている。

長さ7.01m、幅0.7m前後、確認面からの深さ11cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。覆土は灰色粘土による単一層（１層）であり、所々酸化していた。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

13号溝跡
(第328図)
(第329図)

AL～AN－28・29グリッドに位置する。F区からの検出である。北東方向から南西方向へ走っており、西側に14・15号溝跡、東側に11号溝跡が並行して走っている。北側はAL－28グリッドで107号土坑に切られているが、その延長上にはみられないことから、土坑内で収束すると考えられる。また、AM－29グリッドでは115号土坑に切られている。

検出された長さは10.84m、幅0.2～0.5m、確認面からの深さは11cmを測る。断面形は舟底状を呈する。覆土は11号溝跡同様、灰色粘土による自然堆積層であった。所々酸化していた。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

14号溝跡
(第328図)
(第329図)

AL・AM－28・29グリッドに位置する。F区からの検出である。13号溝跡の西側を北東方向から南西方向へ並行して走っているが、AM－29グリッド中央で北西方向へ向きを変えている。平面形はL字状を呈する。

長さは北東方向から南西方向へは8.9m、AM－29グリッド中央から北西方向へは4.6mを測る。幅は0.2～0.6m、確認面からの深さは11cmである。断面形は舟底状を呈する。

覆土はオリーブ灰色粘土による単一層（１層）であった。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

15号溝跡
(第328図)
(第329図)

AM・AN－29グリッドに位置する。F区からの検出である。13号溝跡の西側を北東方向から南西方向へ並行して走っており、北東方向延長上に14号溝跡が位置する。

検出された長さは7.8mを測る。幅は0.4m前後、確認面からの深さは14cm程である。断

面形は逆台形状を呈する。覆土は灰色粘土による単一層（１層）であった。所々酸化していた。自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

4　土　坑

土坑はＥ・Ｆ区合わせて117基が検出された。Ｅ区からは、調査区中央から東側にかけて多数検出された。住居跡をはじめとする他の遺構のほとんどを切っている。Ｆ区からは、住居跡の群在する東側とは反対の西側から列をなして検出された。確認面が二面あるＥ区では第一確認面より検出されている。

Ｅ・Ｆ区から検出された土坑も、Ｂ区同様、タイプ別に述べることとする。なお、５つのタイプ中、主体となるのはやはり４タイプである。各土坑の詳細については、第156表を参照のこと。

１タイプ　１タイプに属する土坑は、41号、43号、58～60号、84号、109号、116号、117号土坑等である。すべてＦ区からの検出であり、Ｆ区西側の４タイプ土坑群と東側にある住居跡群の中間に位置している。

覆土は、黄色ないし褐色系の粘土及びシルトで、酸化鉄ブロックを多量含むものが主体となる。自然堆積によるものである。

遺物は、59号から土師器杯（第352図№59－１）、高杯（59－２）、甑（第353図59－３）が検出された以外にはみられなかった。これらは土坑底面からやや浮いて状態で確認され、59－３の中から１と２が検出された。59－１は口径大きく、やや身の浅い模倣杯である。59－２は、模倣杯にやや高い脚部がつき、脚部には三角形の透かし孔を３つ有する。59－３は胴部に把手を持つタイプである。

２タイプ　２タイプに属する土坑は、５号、６号、８号、15～20号、24号、29号、55号、71号、85号、96～102号、107号、111号土坑等である。

Ｅ区では、東・西端から検出され、Ｆ区では調査区西側から４タイプに混じって検出された。４タイプとは、ほぼ同じ分布状況を示しており、確認面の関係も踏まえると、同じものしてとらえられるべきものが多い。ただし、19号及び20号のみ同タイプの他の土坑とは様相が異なっており、19号からは人骨が検出された。

19・20号はＥ区のほぼ中央に位置し、南側が調査区域外にあるため、半分を欠く。両土坑は、土層断面の観察から19号が20号よりも新しいことが確認されたが、ともに同軸方向を向いており、人骨の検出された範囲からみて、19号は木棺の痕跡と考えられる。よって、別々に名称をつけてしまったが、本来は同一のものであろう。詳細については第Ⅵ章で述べることとする。

他の土坑は、覆土が褐色系のシルト及び粘土で、酸化鉄ブロックを多量含むものが主体と

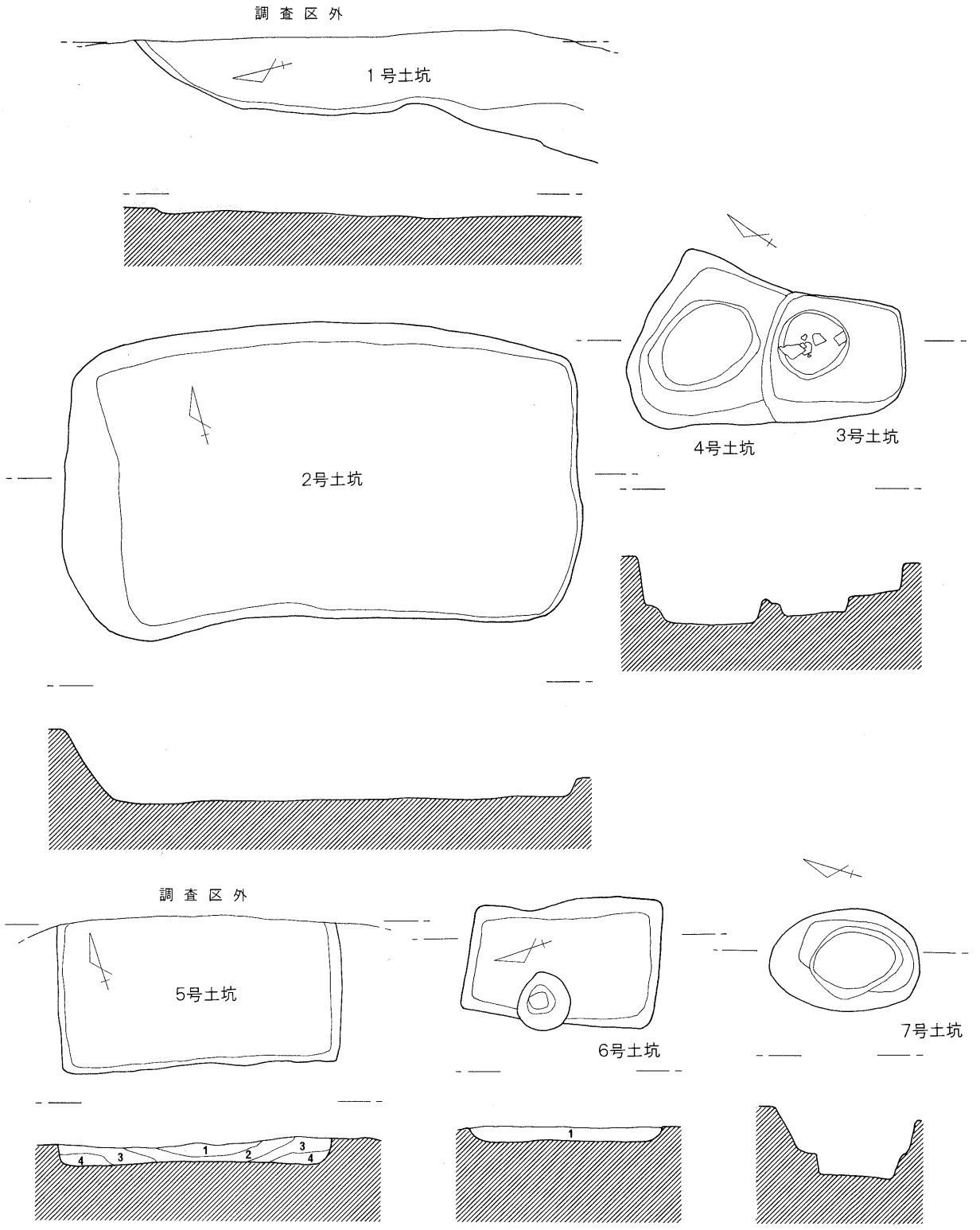
第156表　E・F区土坑一覧表

土坑番号	挿図番号	グリッド	平面形	タイプ	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備　　考
1号土坑	第330図	AE-12・13	長方形？	4	—	—	0.07	
2号土坑	第330図	AD-12	長方形	4	3.48	1.98	0.52	2・9号住より新。
3号土坑	第330図	AE-13	方形	5	0.93	0.85	0.37	4号土坑、1・7号住より新。
4号土坑	第330図	AE-13	不整形	5	—	1.17	0.45	1・7号住より新。3号土坑より古。
5号土坑	第330図	AD-12・13	長方形？	2	1.90	—	0.18	3号住より新。
6号土坑	第330図	AD-13	長方形	2	1.27	0.87	0.10	4・5・8号住より新。
7号土坑	第330図	AD-13	円形	3	1.00	0.69	0.40	3号住より新。
8号土坑	第331図	AD-13	長方形	2	1.26	0.80	0.13	4・7・8号住、9号土坑より新。
9号土坑	第331図	AD-13	不整形	5	2.27	1.70	0.43	1・4・5・7号住より新。8号土坑より古。
10号土坑	第331図	AD-13	長方形	4	3.38	2.44	0.65	4～6・8号住より新。
11号土坑	第331図	AD-13	方形	4	2.56	2.21	1.12	4・6号住、河川跡より新。
12号土坑	第331図	AD-14	長方形	4	2.80	1.98	0.51	河川跡より新。
13号土坑	第332図	AD-14	円形	3	1.06	0.87	0.38	河川跡より新。
14号土坑	第332図	AD-14・15	方形	4	2.53	2.35	0.93	10号住、河川跡より新。
15号土坑	第332図	AD-15	長方形	2	—	0.61	0.18	河川跡より古。12・13号住、16号土坑より新。
16号土坑	第332図	AD-15	長方形	2	—	1.31	0.11	河川跡、15号土坑より古。12・13号住より新。
17号土坑	第332図	AD-15	長円形	2	—	1.33	0.13	河川跡より新。
18号土坑	第332図	AD-15	長方形？	2	—	—	0.14	河川跡より古。11～13号住より新。
19号土坑	第333図	AD-15	長方形	2	1.38	—	0.19	20号土坑より新。
20号土坑	第333図	AD-15	長方形？	2	2.40	—	0.11	19号土坑より古。
21号土坑	第333図	AC-17	不整形	5	—	1.82	0.08	
22号土坑	第333図	AC-17	不整形	5	—	2.96	0.09	
23号土坑	第333図	AC-17	円形	3	1.11	0.89	0.29	河川跡より新。
24号土坑	第334図	AD-21	長円形	2	1.04	0.64	0.12	
25号土坑	第334図	AA-23	長方形	4	2.00	1.16	0.50	
26号土坑	第334図	AA-23	方形	4	2.28	1.98	0.55	5号溝より新。
27号土坑	第334図	AB-23	長方形	4	1.51	1.02	0.29	
28号土坑	第334図	AA・AB-24	長方形	4	2.52	1.22	0.37	
29号土坑	第334図	Z-25	長方形？	2	1.59	—	0.19	30号土坑より新。
30号土坑	第334図	Z-25	長方形	4	2.24	1.22	0.46	29号土坑より古。
31号土坑	第335図	AA-25	長方形	4	2.52	1.27	0.40	
32号土坑	第335図	AB-25	長方形	4	2.87	1.58	0.46	
33号土坑	第335図	AB-25	長円形	4	2.04	0.96	0.47	
34号土坑	第335図	AB-25	長方形	4	1.94	1.66	0.44	
35号土坑	第335図	AB-26	方形	4	3.32	1.68	0.35	
36号土坑	第335図	AB-26	長方形	4	2.16	1.58	0.46	
37号土坑	第336図	AC-26	長方形	4	2.46	1.80	0.35	
38号土坑	第336図	AC-26	円形	3	1.05	0.95	0.48	
39号土坑	第336図	AC-26	長方形	4	1.99	1.34	0.50	
40号土坑	第336図	AC-26	長方形	4	2.02	—	0.45	
41号土坑	第336図	AE-25	円形	1	0.82	0.81	0.11	
42号土坑	第336図	AD-26	長方形	4	1.69	1.22	0.45	
43号土坑	第336図	AE-26	円形	1	0.82	0.71	0.20	
44号土坑	第336図	AE-26	方形	4	1.26	1.23	0.48	45号土坑より新。
45号土坑	第336図	AE-26	長方形	4	2.55	1.74	0.50	44号土坑より古。
46号土坑	第337図	AE-26	方形	4	1.76	1.66	0.51	
47号土坑	第337図	AE-26	長方形	4	2.48	1.49	0.37	
48号土坑	第337図	AE・AF-26・27	長方形	4	2.67	1.59	0.65	
49号土坑	第337図	AF-26	長方形	4	2.26	1.57	0.38	
50号土坑	第337図	AF-23	長方形	4	1.79	1.11	0.42	
51号土坑	第337図	AF-26	長方形	4	2.76	2.17	0.57	52号土坑より新。
52号土坑	第337図	AF-26	長方形	4	2.72	—	0.59	51号土坑より古。
53号土坑	第338図	AG-27	長方形	4	2.56	1.23	0.40	
54号土坑	第338図	AG-26	長方形	4	2.46	1.79	0.59	
55号土坑	第338図	AF-24	長円形	2	1.73	1.11	0.19	
56号土坑	第338図	AG-26・27	長方形	4	3.20	1.72	0.69	57号土坑より新。
57号土坑	第338図	AG-26・27	長方形	4	3.40	—	0.57	56号土坑より古。
58号土坑	第339図	AH-24	円形	1	1.23	1.17	0.16	
59号土坑	第339図	AH-24	円形	1	0.71	0.65	0.19	
60号土坑	第339図	AH-24	円形	1	1.12	0.82	0.11	
61号土坑	第339図	AG・AH-26・27	長方形	4	3.09	1.69	0.52	
62号土坑	第339図	AH-26・27	長方形	4	3.47	1.48	0.50	63号土坑より新。
63号土坑	第339図	AH-26・27	長方形	4	2.85	—	0.42	62号土坑より古。
64号土坑	第340図	AH-26・27	長方形	4	2.47	1.42	0.46	65号土坑より新。
65号土坑	第340図	AH-26・27	長方形	4	—	2.41	0.84	64号土坑より古。

土坑番号	挿図番号	グリッド	平面形	タイプ	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備　　考
66号土坑	第340図	AH-27	長方形	4	—	1.05	0.46	69号土坑より古。65号土坑より新。
67号土坑	第340図	AH-27	長方形	4	1.90	1.02		68・69号土坑より新。
68号土坑	第340図	AH-27	長方形	4	3.26	2.30	0.91	67・69号土坑より古。
69号土坑	第340図	AH-27	長方形	4	3.06	—	0.47	66・67・68号土坑より古。
70号土坑	第341図	AI-25	長方形	4	2.82	1.58	0.44	
71号土坑	第341図	AH-25	長円形	2	2.09	1.37	0.09	
72号土坑	第342図	AI-25・26	長方形	4	3.30	2.10	0.70	
73号土坑	第342図	AI-26	長方形	4	2.79	1.35	0.58	9号溝より新。
74号土坑	第342図	AI-26・27	長方形	4	2.35	1.84	0.29	
75号土坑	第343図	AI-27・28	長方形	4	4.17	2.42	0.59	76号土坑より新。
76号土坑	第343図	AH・AI-27	長方形	4	3.28	2.04	0.61	75号土坑より古。
77号土坑	第343図	AH・AI-28	長方形	4	3.05	2.17	0.49	
78号土坑	第343図	AJ-24	長方形	4	1.35	0.79	0.36	
79号土坑	第344図	AJ・AK-24・25	長方形	4	2.31	1.12	0.31	
80号土坑	第344図	AI・AJ-27・28	長方形	4	3.08	2.32	0.90	
81号土坑	第344図	AJ-27・28	長方形	4	2.00	1.46	0.26	
82号土坑	第345図	AJ-27・28	長方形	4	3.69	2.52	0.58	83号土坑より新。
83号土坑	第345図	AJ-27・28	長方形	4	3.99	—	0.65	82号土坑より古。
84号土坑	第344図	AJ・AK-27	円形	1	1.49	1.43	0.10	
85号土坑	第344図	AJ・AK-27	長円形	2	2.99	1.74	0.21	
86号土坑	第344図	AK-27	長方形	4	2.34	1.51	0.38	11号溝より新。
87号土坑	第346図	AJ・AK-27・28	長方形	4	3.32	2.23	0.54	88・89号土坑より新。
88号土坑	第346図	AJ・AK-28	長方形？	4	—	1.24	0.22	87号土坑より古。89号土坑より新。
89号土坑	第346図	AK-28	長方形	4	3.02	—	0.42	87・88号土坑より古。
90号土坑	第347図	AK-28	長方形	4	2.77	1.78	0.53	91・92号土坑より新。
91号土坑	第347図	AK-28	長方形	4	2.18	—	0.32	90号土坑より古。92号土坑より新。
92号土坑	第347図	AK-28	方形	4	1.56	—	0.37	90・91号土坑より古。
93号土坑	第347図	AK・AL-25	長方形	4	1.99	1.60	0.24	
94号土坑	第347図	AL-26	長方形	4	1.80	1.29	0.23	
95号土坑	第347図	AL-26	方形	4	1.41	1.24	0.16	
96号土坑	第348図	AL-26・27	長方形	2	1.17	0.83	0.10	
97号土坑	第348図	AK-27	長方形	2	1.76	1.17	0.14	
98号土坑	第348図	AK・AL-27	長円形	2	1.37	1.69	0.09	
99号土坑	第348図	AK-27	長円形	2	3.14	1.26	0.09	
100号土坑	第348図	AK-27	長円形	2	1.17	0.80	0.19	
101号土坑	第348図	AK・AL-27	長方形	2	2.18	1.42	0.06	102号土坑より新。
102号土坑	第348図	AK・AL-27・28	長方形	2	—	1.76	0.07	101号土坑より古。
103号土坑	第349図	AK-28	長方形	4	2.34	1.89	0.50	104号土坑より新。
104号土坑	第349図	AK-28	方形？	4	—	—	0.22	103号土坑より古。
105号土坑	第349図	AL-28	長方形	4	2.36	1.74	0.26	
106号土坑	第349図	AL-28	長方形	4	2.67	2.16	0.39	11号溝より新。
107号土坑	第349図	AL-28	長方形	2	1.69	0.98	0.17	108号土坑、13号溝より新。
108号土坑	第349図	AL-28	長方形	4	—	1.78	0.29	13号溝より新。107号土坑より古。
109号土坑	第350図	AM-25	円形	1	0.88	0.85	0.12	
110号土坑	第350図	AM-26・27	長方形	4	3.18	1.51	0.25	
111号土坑	第350図	AM-27	長方形	2	1.52	0.94	0.12	
112号土坑	第350図	AM-27	長方形	4	2.41	1.37	0.24	
113号土坑	第350図	AM-28	長方形	4	2.86	1.87	0.51	114号土坑より新。
114号土坑	第350図	AM-28	長方形	4	3.20	—	0.42	113号土坑より古。
115号土坑	第351図	AM-29	長方形	4	1.98	1.22	0.45	13号溝より新。
116号土坑	第351図	AO-24	円形	1	—	—	0.11	121号住より古。
117号土坑	第351図	AO-25	円形？	1	0.86	0.86	0.21	

なる。覆土が浅いため、自然堆積かどうかは不明なものが多い。

遺物がほとんど検出されなかったため、時期は不明であるが、19・20号以外は古墳時代後期の住居跡を切っているものが多いことから、これよりは新しいものが主体となる。



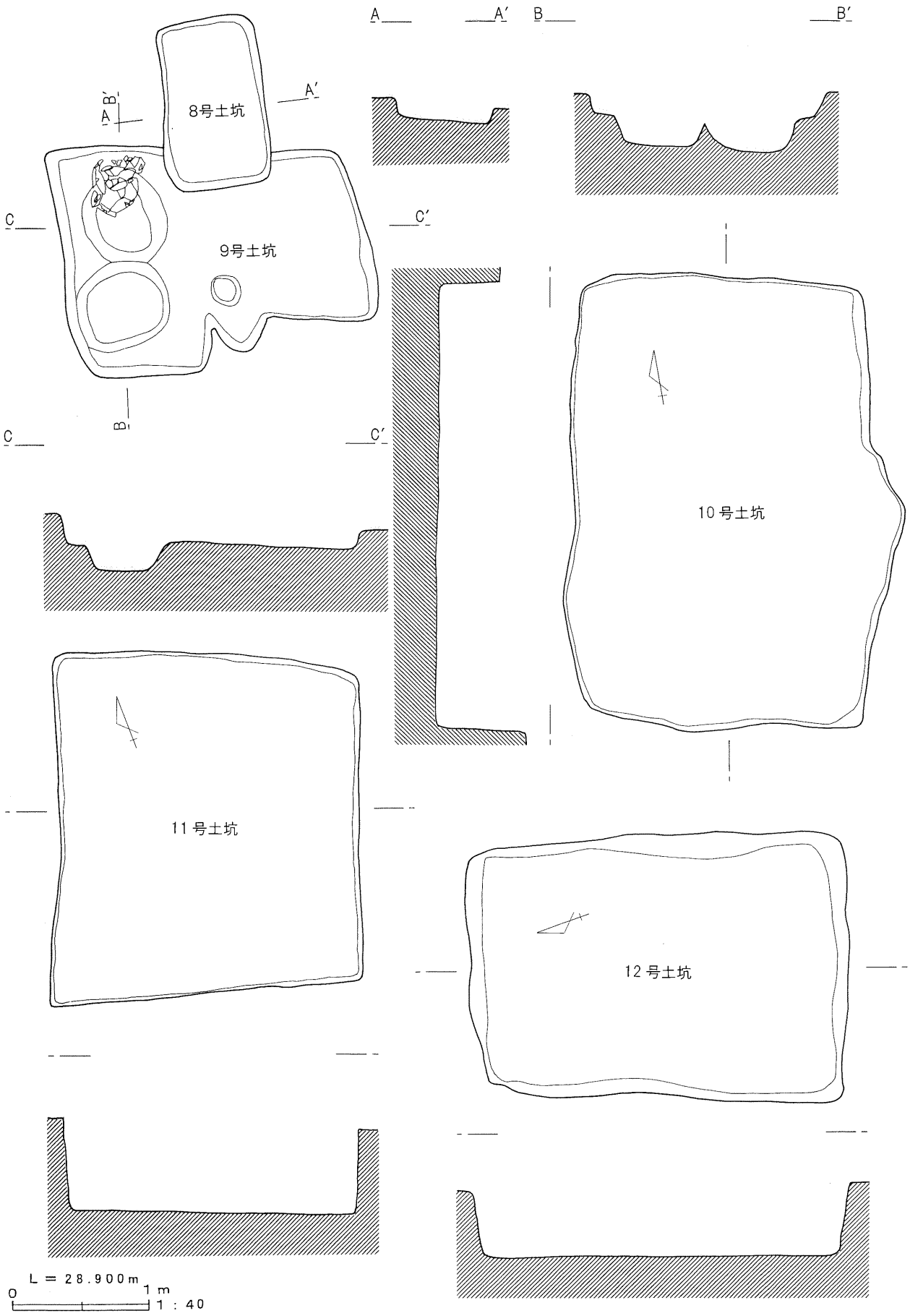
5号土坑土層

1　黄褐色(10YR5/6)シルト。灰白色(2.5Y7/1)粘土粒(多量)を含む。しまり良い。
2　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。灰白色(2.5Y7/1)粘土粒(多量)、炭化物(帯状)を含む。しまり良い。
3　黄褐色(10YR5/6)シルト。灰白色(2.5Y7/1)粘土粒(多量)、褐灰色(10YR5/1)粘土ブロック(若干)を含む。しまりやや悪い。
4　灰黄褐色(10YR5/2)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒、炭化物粒(微量)を含む。しまり良い。

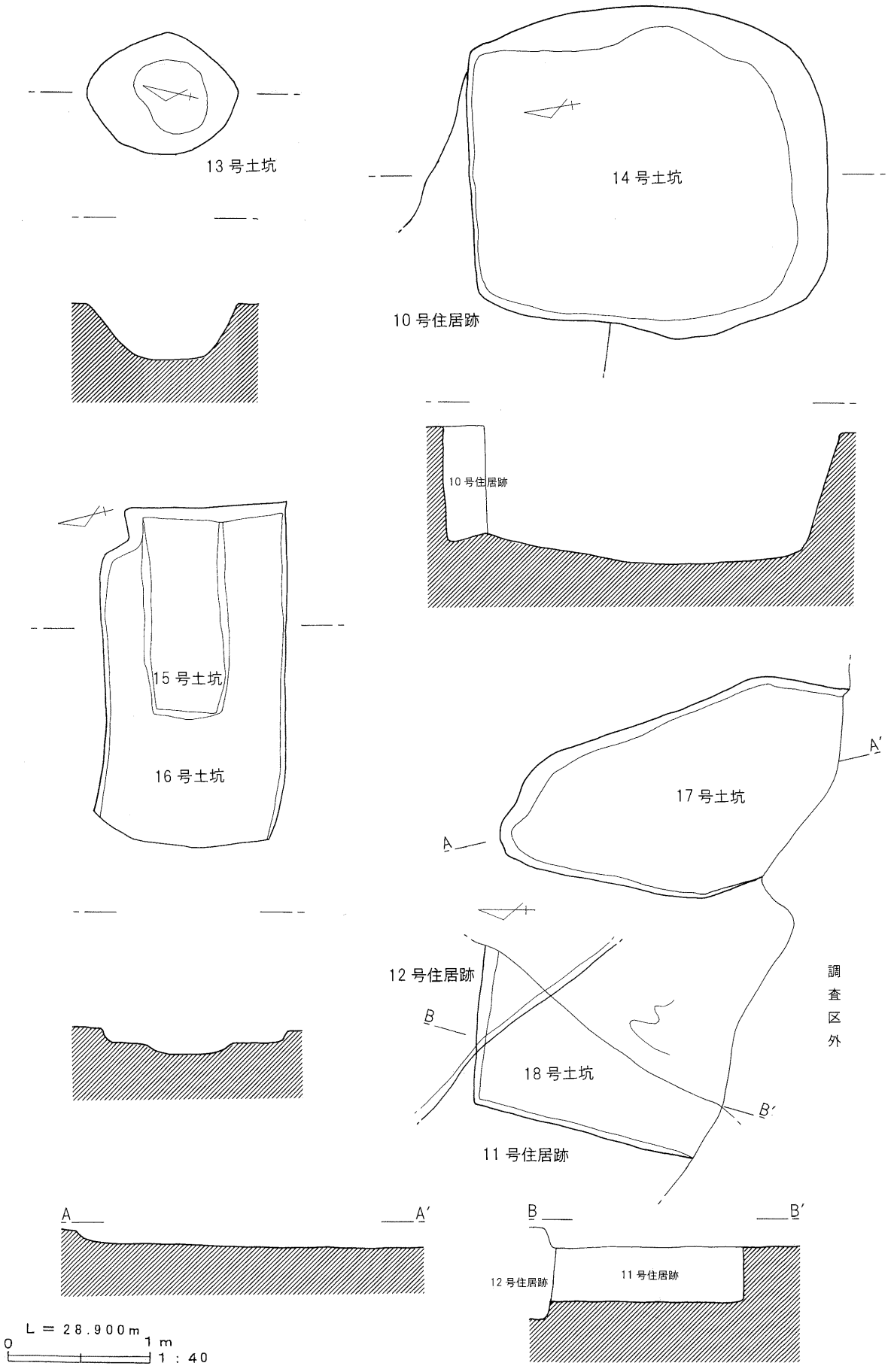
6号土坑土層

1　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト。灰色(5Y6/1)粘土粒(多量)、焼土粒、炭化物粒(微量)を含む。しまり良い。

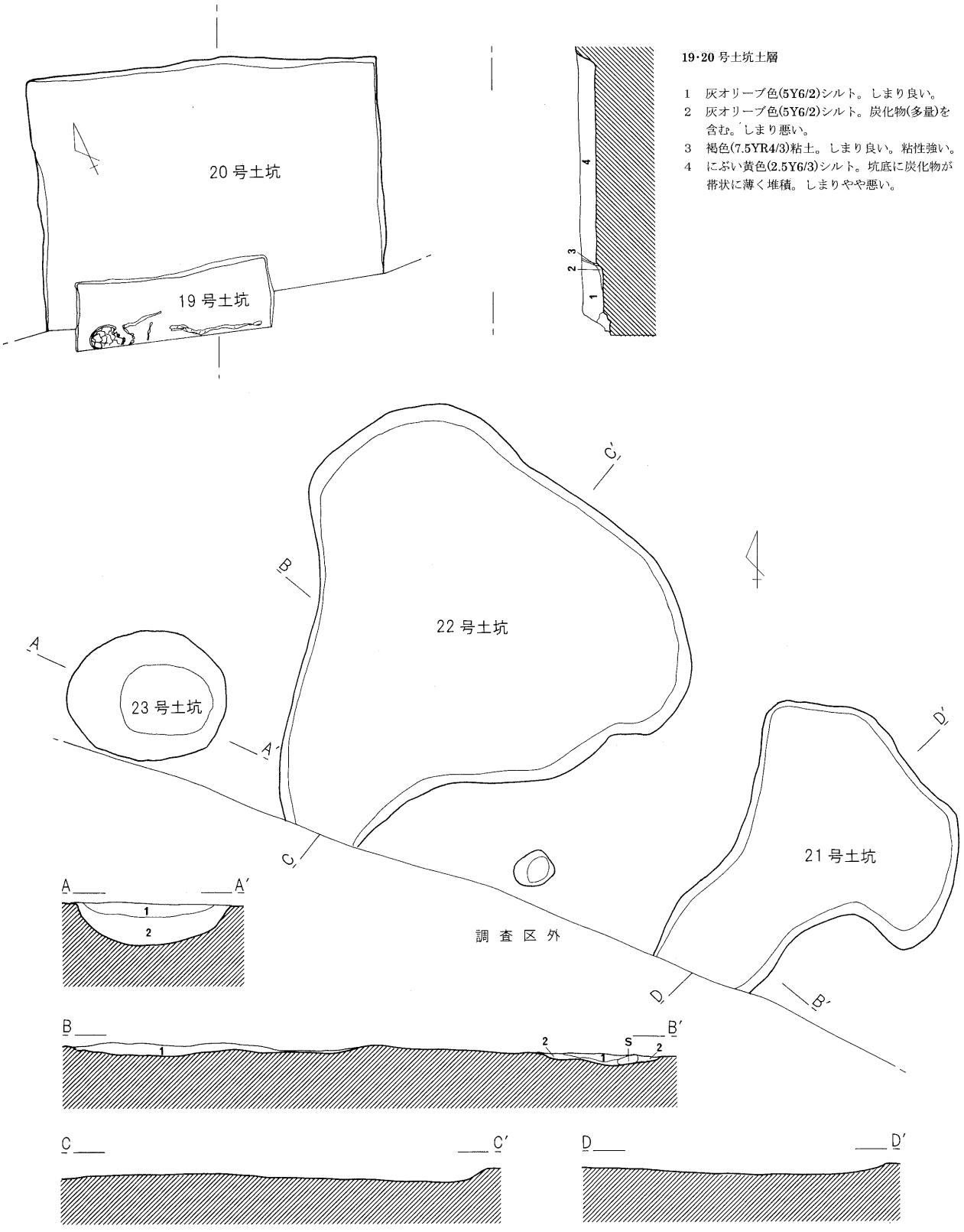
第330図　E・F区土坑(1)



第331図　E・F区土坑(2)



第332図　E・F区土坑(3)



19·20 号土坑土層

1 灰オリーブ色(5Y6/2)シルト。しまり良い。
2 灰オリーブ色(5Y6/2)シルト。炭化物(多量)を含む。しまり悪い。
3 褐色(7.5YR4/3)粘土。しまり良い。粘性強い。
4 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト。坑底に炭化物が帯状に薄く堆積。しまりやや悪い。

21 号土坑土層

1 黄灰色(2.5Y5/1)粘土。焼土粒・ブロック、炭化物ブロック(多量)を含む。

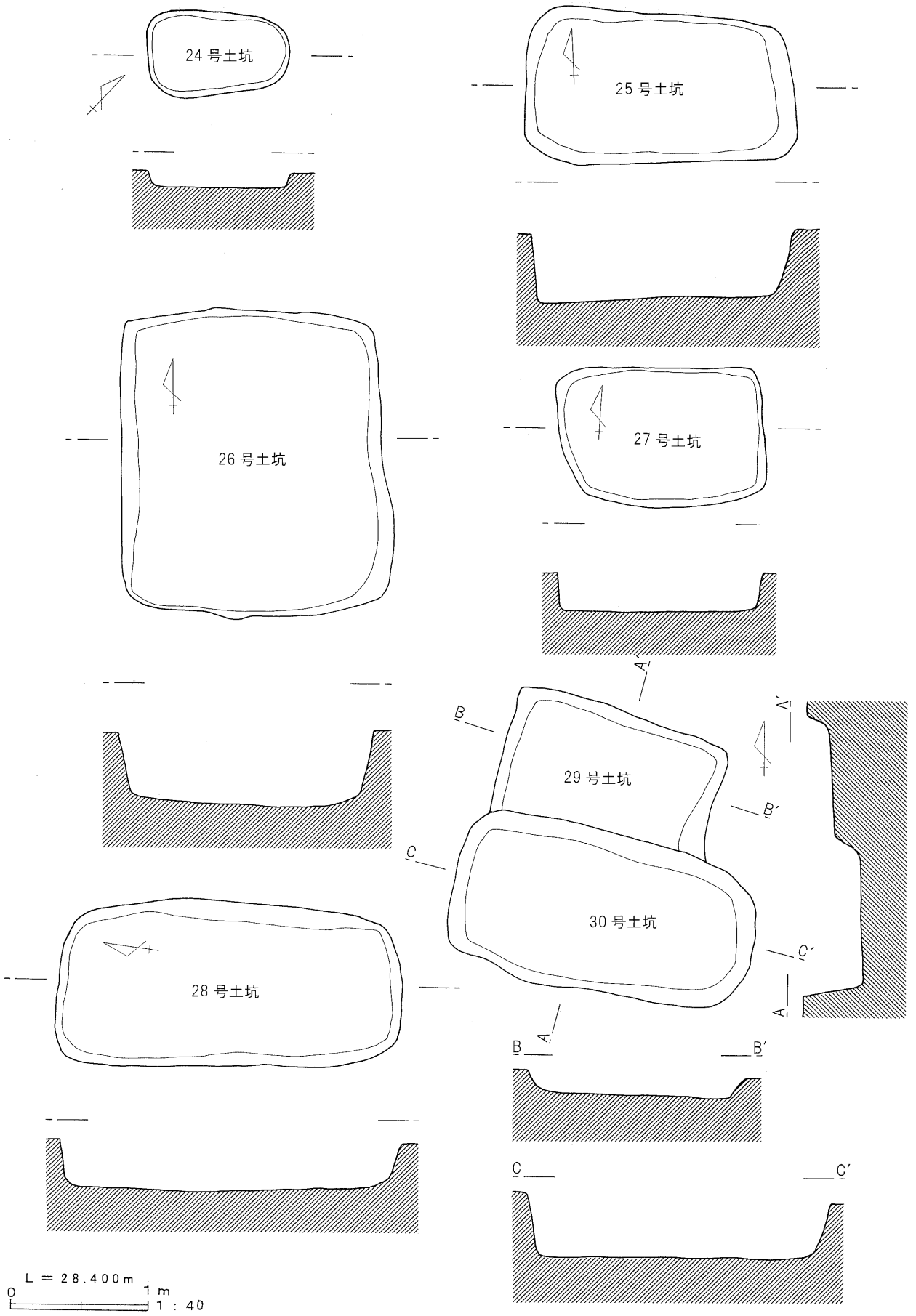
22 号土坑土層

1 黄褐色(2.5Y5/4)粘土。酸化鉄粒、灰色(5Y6/1)粘土粒を多量に含む。
2 灰色(5Y5/1)粘土。焼土・炭化物粒(少量)を含む。

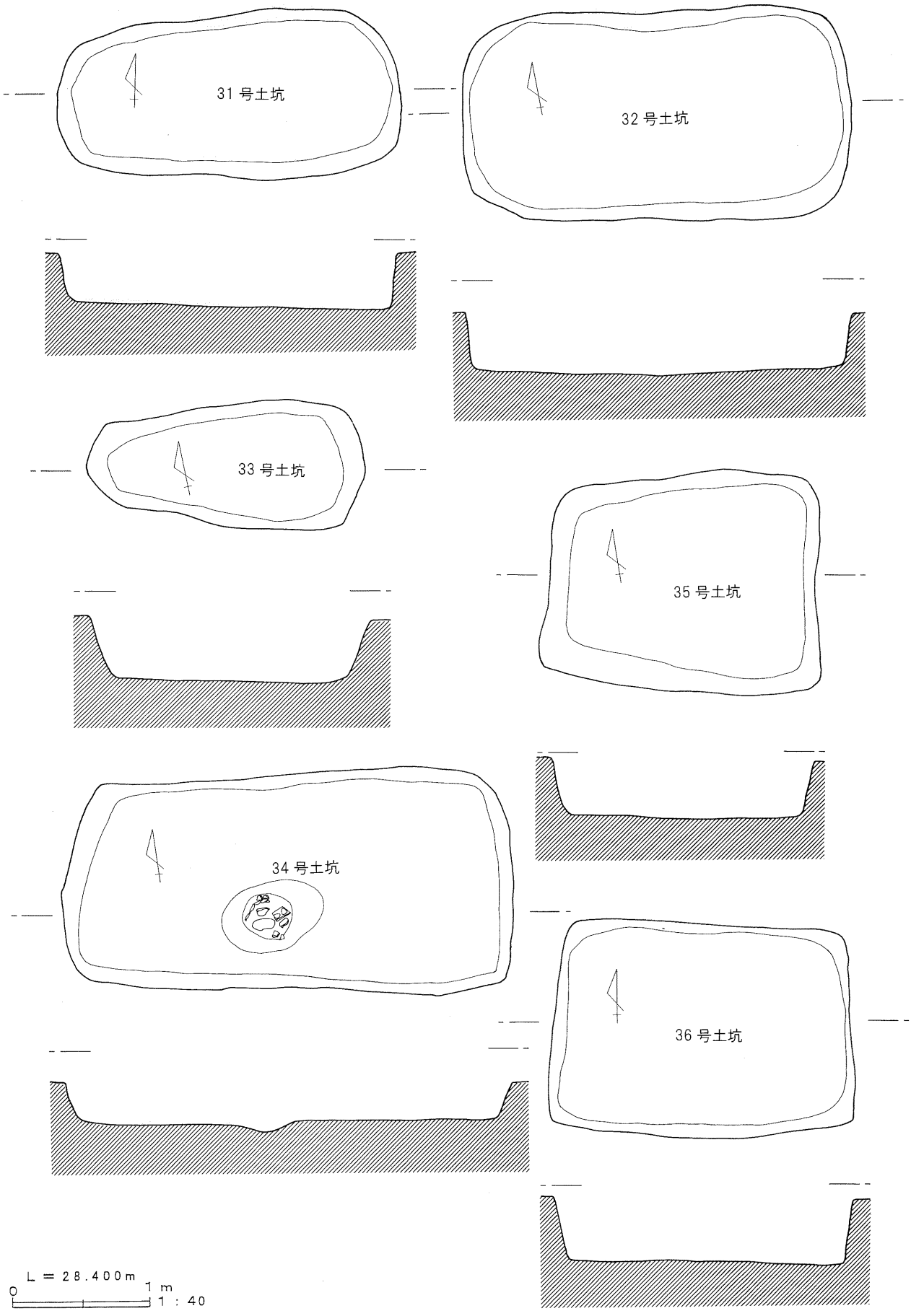
23 号土坑土層

1 灰色(7.5Y5/1)粘土。酸化鉄粒、黄褐色(2.5Y5/6)粘土ブロックを多量に含む。しまりやや悪い。
2 1 層に灰色(7.5Y7/1)粘土粒(多量)を含む。

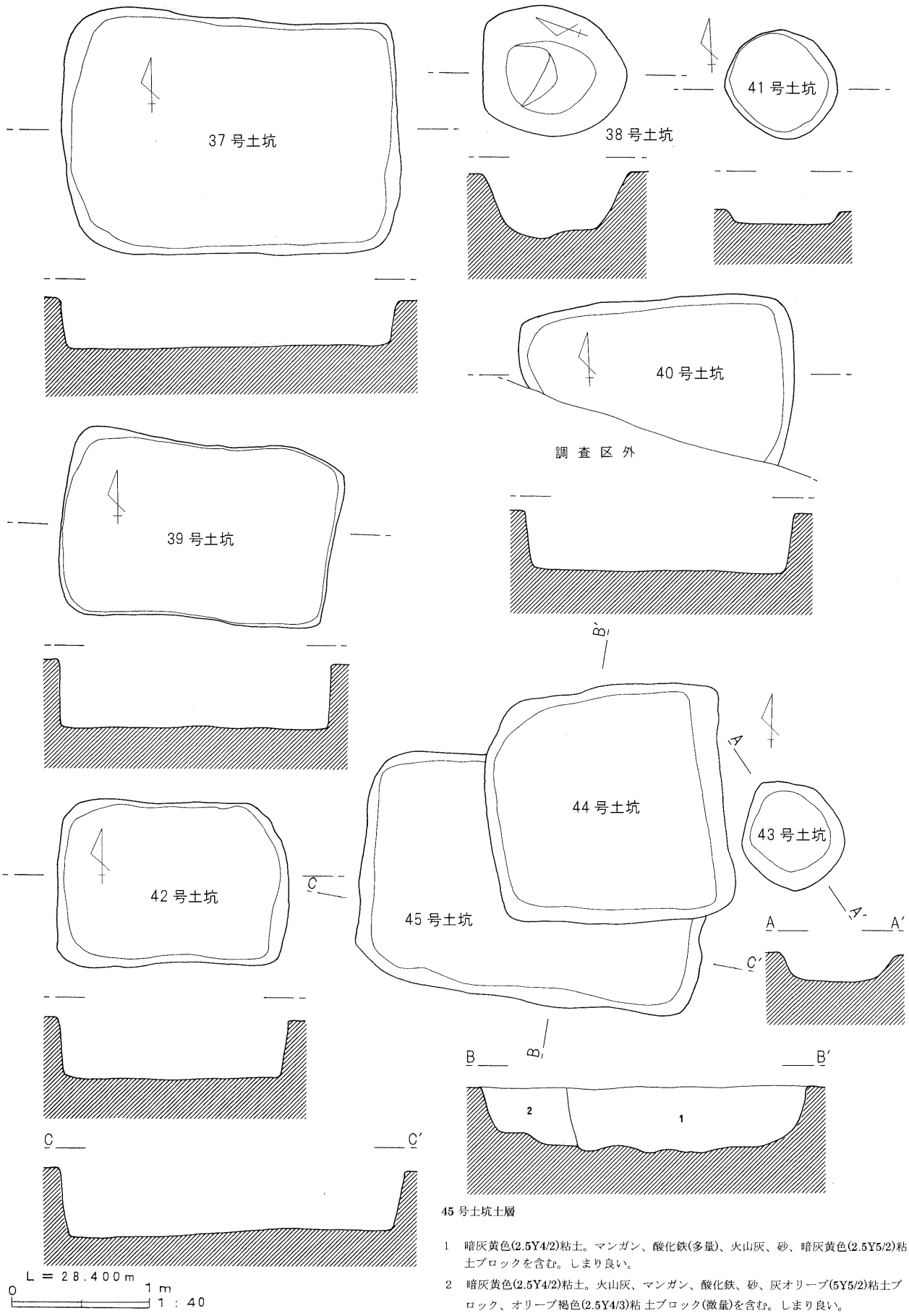
第333図　E・F 区土坑(4)



第334図　E・F区土坑(5)



第335図　E・F区土坑(6)

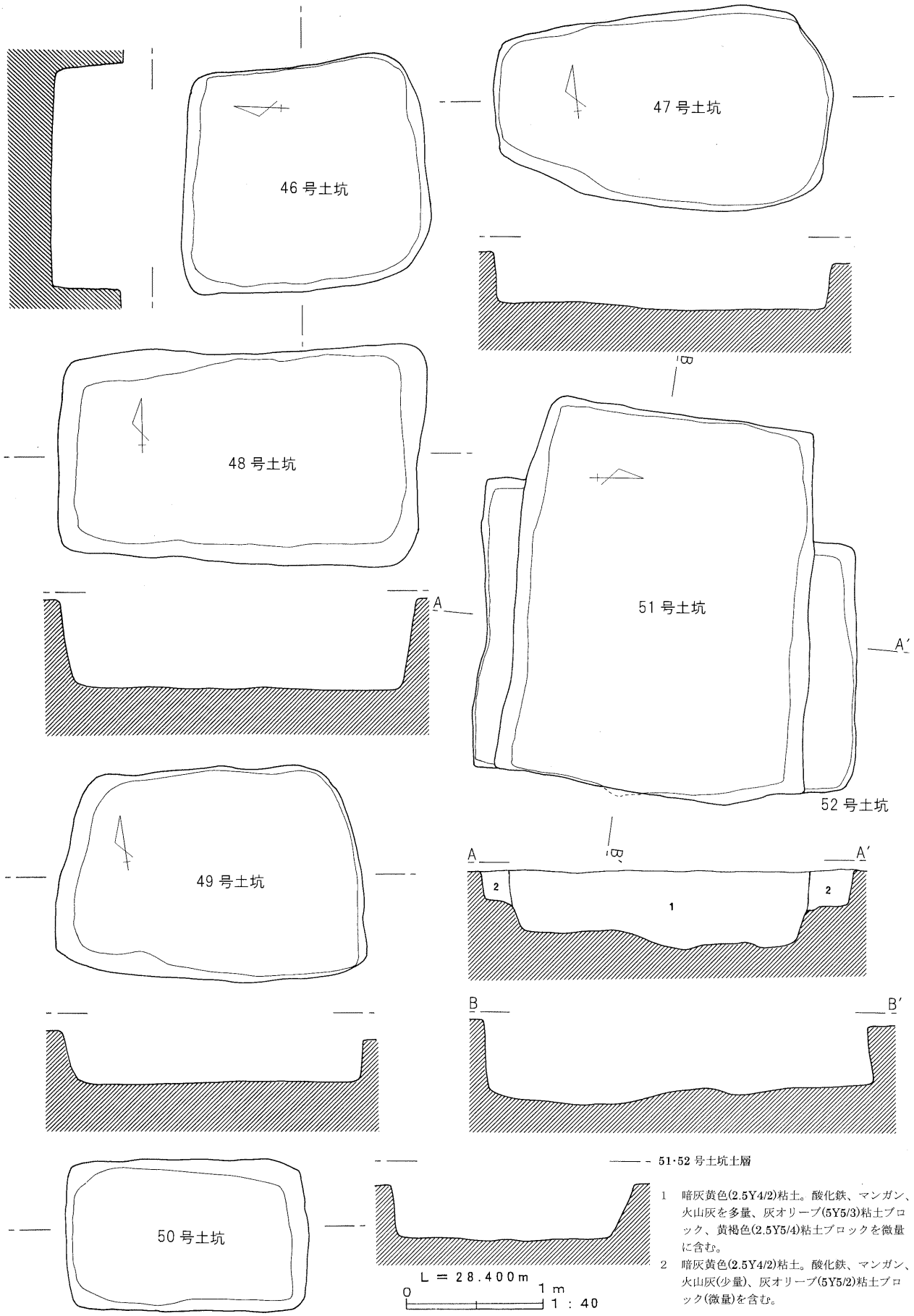


45 号土坑土層

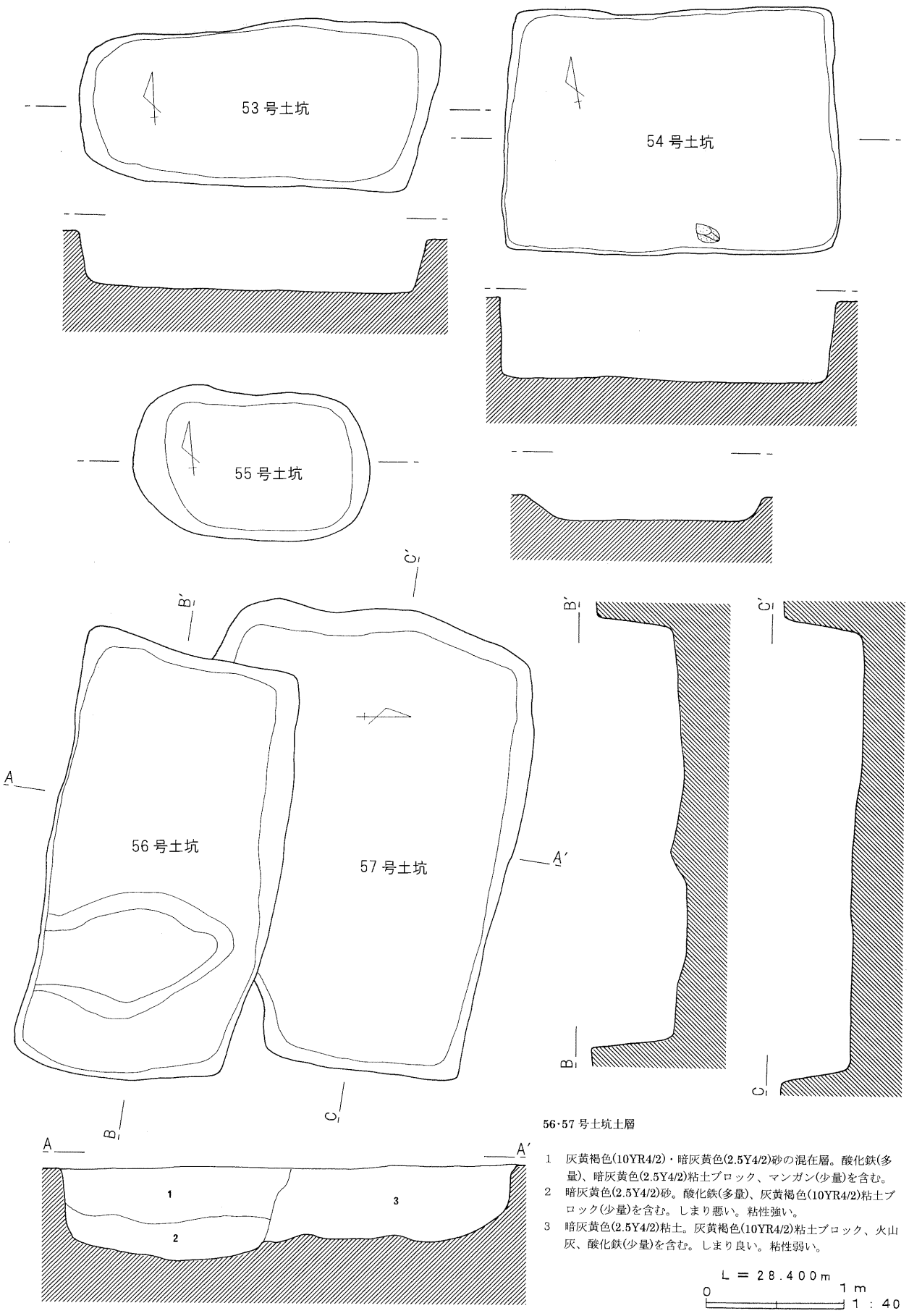
1　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土。マンガン、酸化鉄(多量)、火山灰、砂、暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土ブロックを含む。しまり良い。

2　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土。火山灰、マンガン、酸化鉄、砂、灰オリーブ(5Y5/2)粘土ブロック、オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土ブロック(微量)を含む。しまり良い。

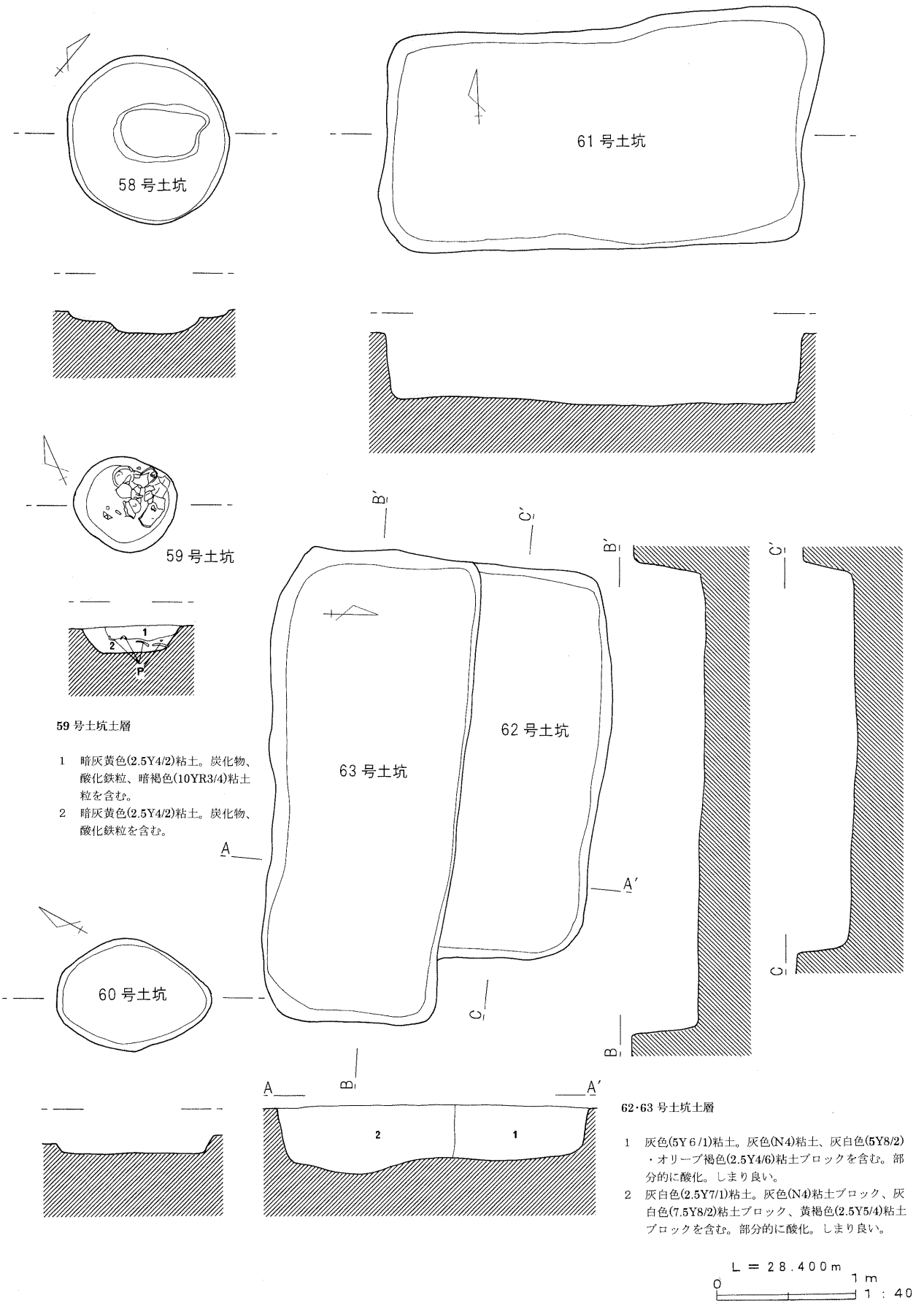
第336図　E・F区土坑(7)



第337図　E・F区土坑(8)



第338図　E・F区土坑(9)



59 号土坑土層

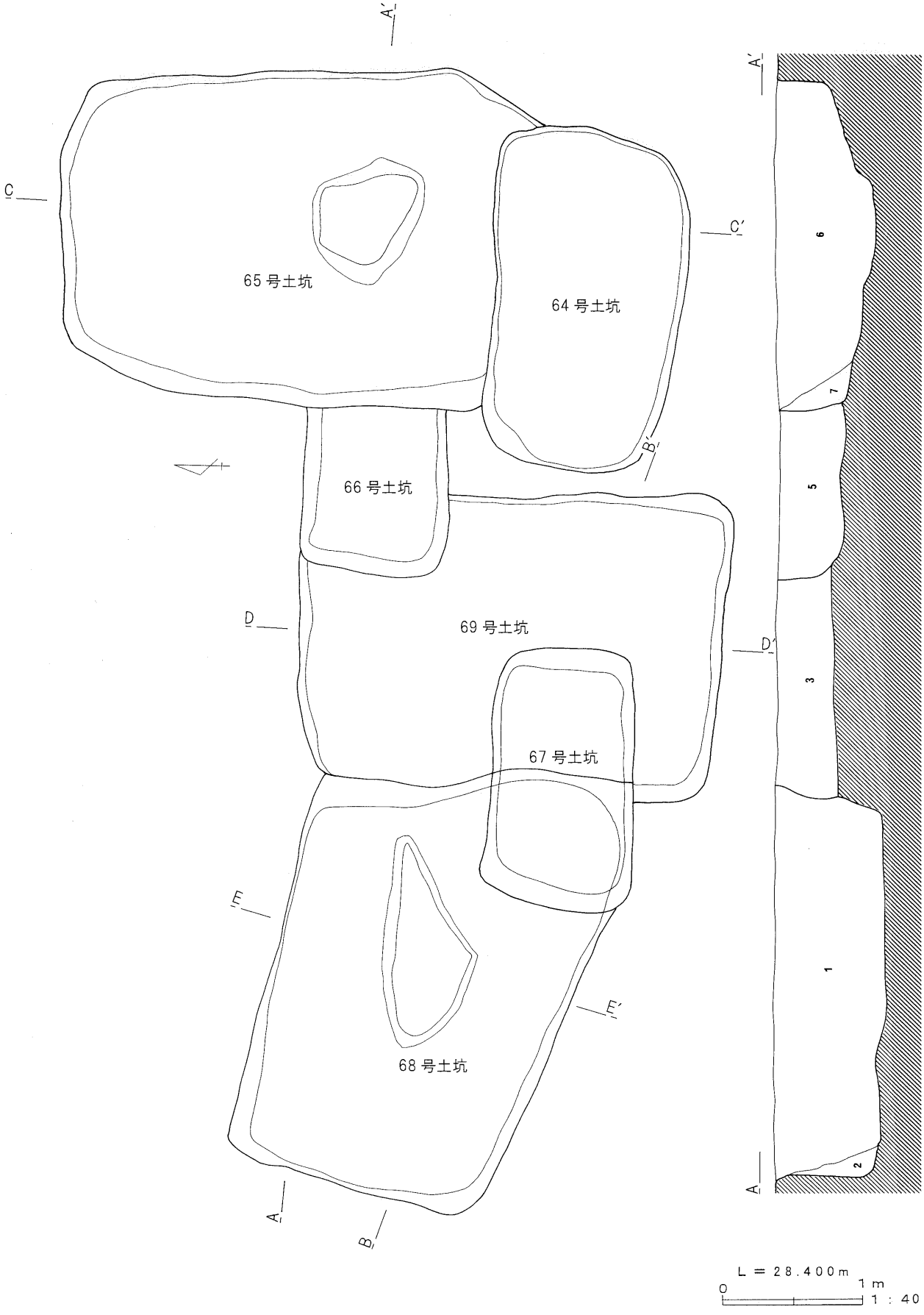
1　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土。炭化物、酸化鉄粒、暗褐色(10YR3/4)粘土粒を含む。
2　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土。炭化物、酸化鉄粒を含む。

62・63 号土坑土層

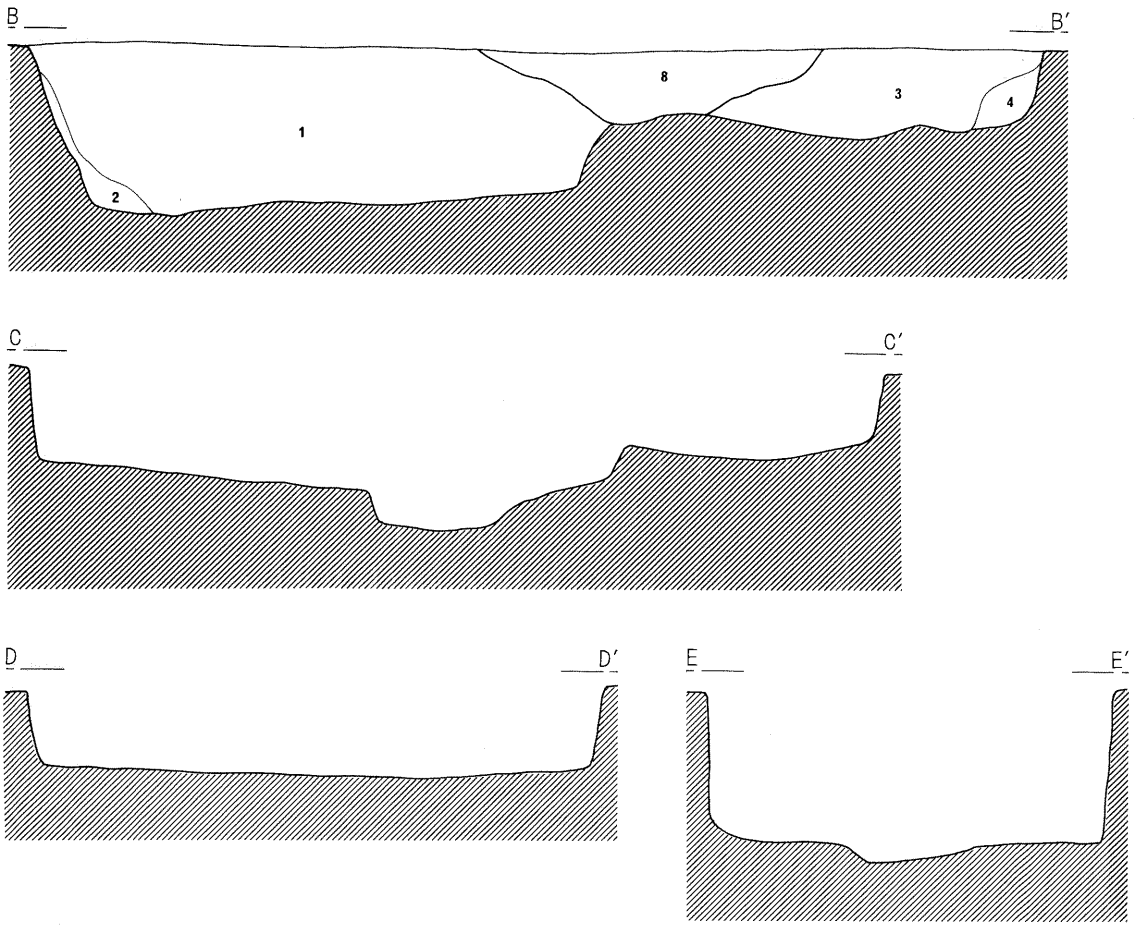
1　灰色(5Y 6/1)粘土。灰色(N4)粘土、灰白色(5Y8/2)・オリーブ褐色(2.5Y4/6)粘土ブロックを含む。部分的に酸化。しまり良い。
2　灰白色(2.5Y7/1)粘土。灰色(N4)粘土ブロック、灰白色(7.5Y8/2)粘土ブロック、黄褐色(2.5Y5/4)粘土ブロックを含む。部分的に酸化。しまり良い。

L = 28.400m
0　1m
1 : 40

第339図　E・F区土坑(10)

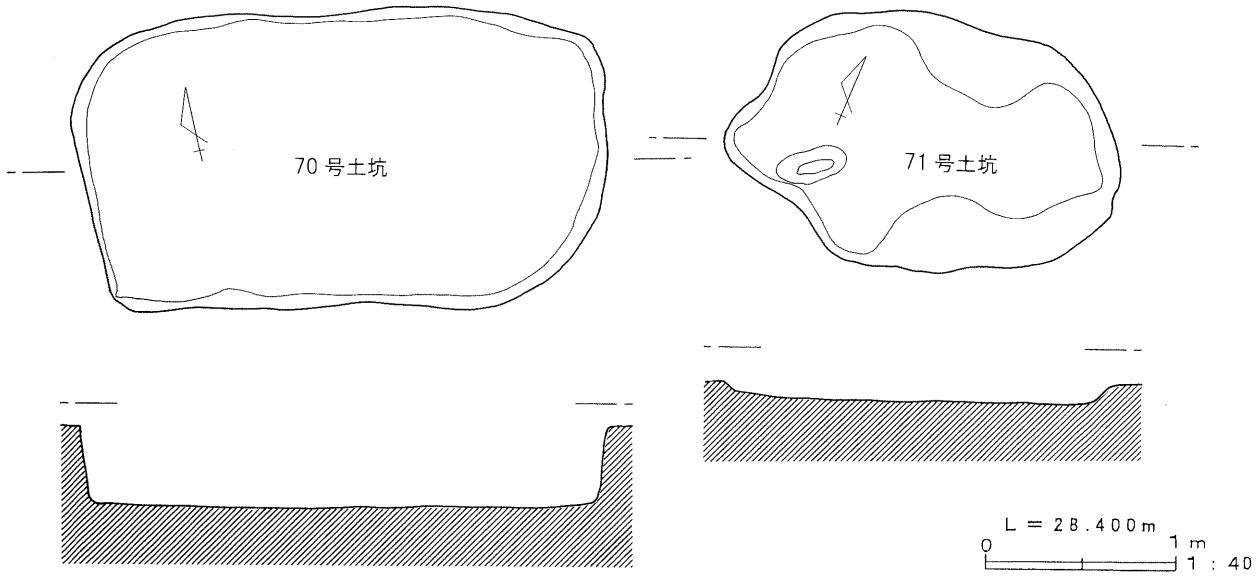


第340図　E・F区土坑(11)

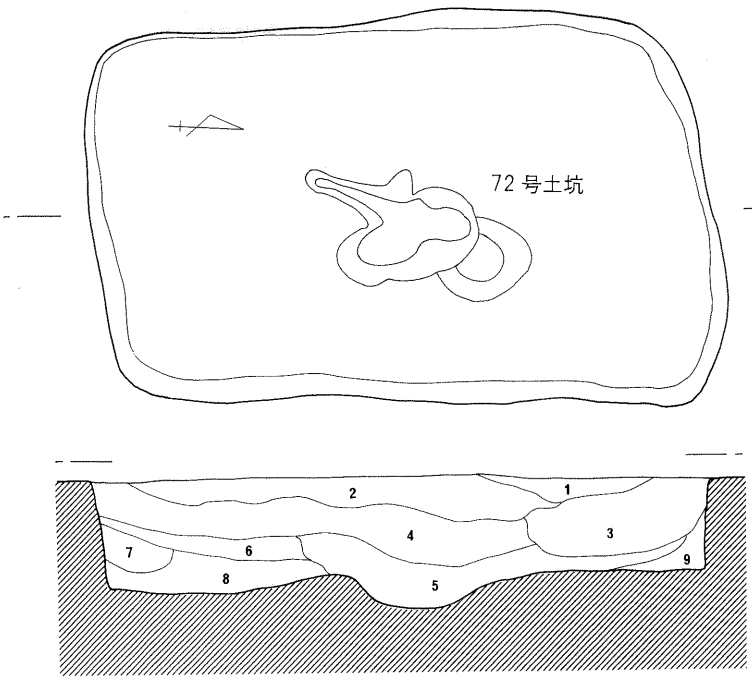


65·66·67·68·69 号土坑土層

1　灰白色(5Y7/1)粘土。灰白色(5Y8/2)・灰色(N4)粘土ブロックを含む。下部に酸化鉄層が入る。
2　黄灰色(2.5Y6/1)粘土。
3　灰色(7.5Y6/1)。灰白色(7.5Y8/2)・灰色(N4)粘土ブロックを含む。
4　灰黄色(2.5Y7/2)粘土。
5　灰オリーブ色(7.5Y6/2)粘土。にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土ブロックを含む。
6　灰色(10Y6/1)粘土。灰白色(7・5Y8/2)粘土ブロック(少量)、灰色(N4)粘土ブロックを含む。
7　灰オリーブ色(5Y5/4)粘土。灰色(N4)粘土ブロックを含む。
8　にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。灰白色(2.5Y7/1)を含む。

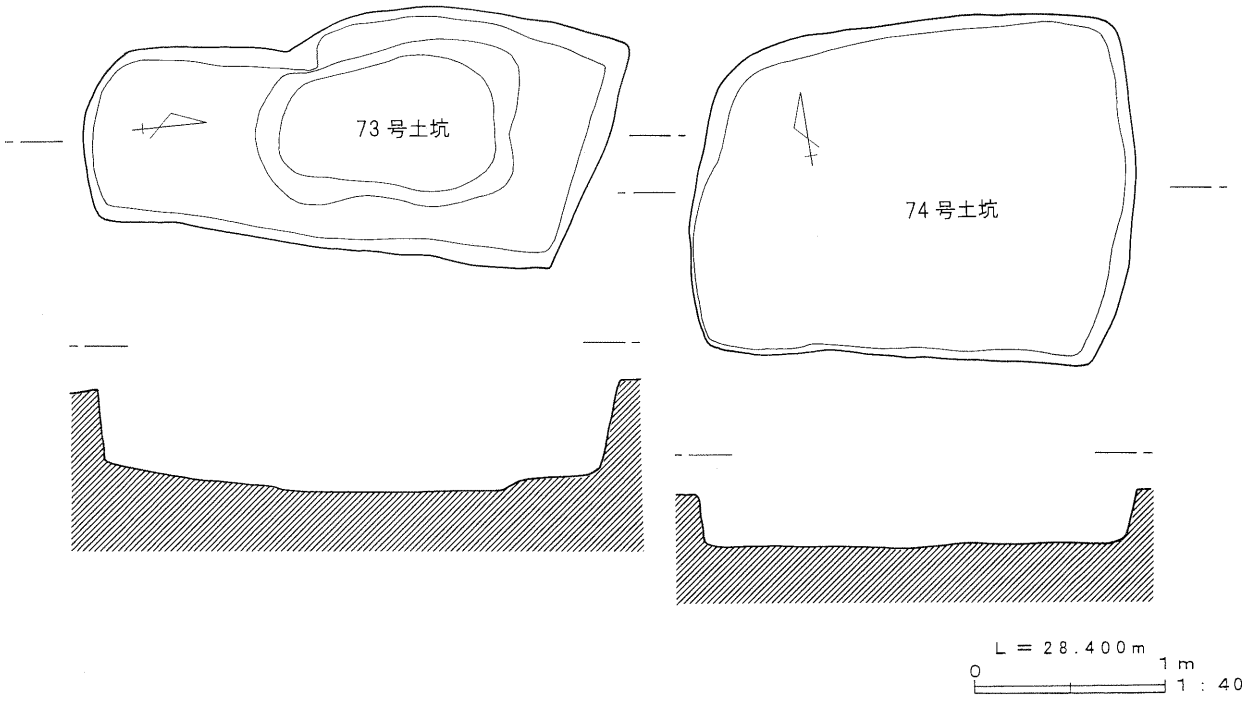


第341図　E・F区土坑(12)



72 号土坑土層

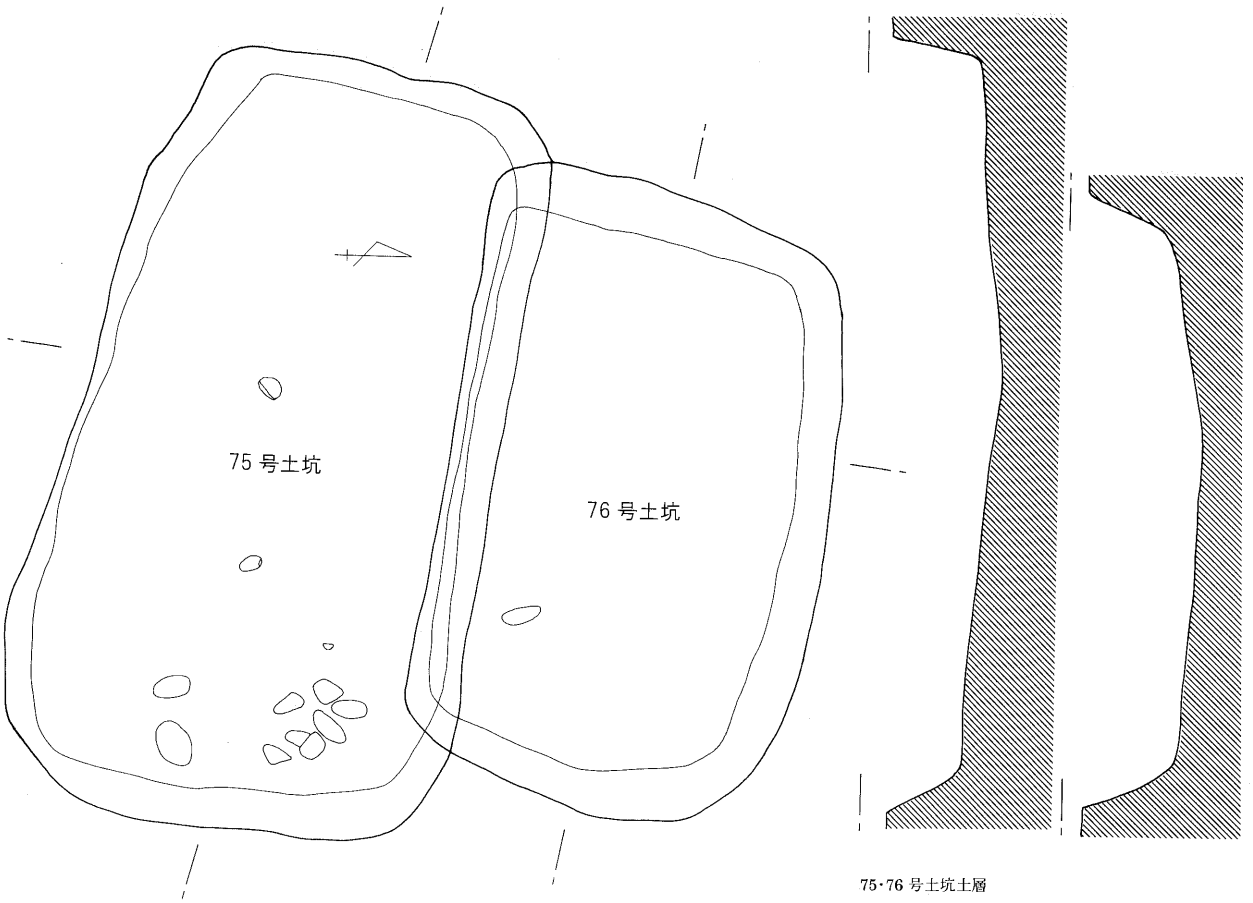
1　暗灰黄色(2.5Y5/2)砂。酸化鉄(多量)を含む。
2　オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂。暗灰黄色(2.5Y4/2)・黄褐色(2.5Y5/3)粘土ブロック、酸化鉄を多量に含む。
3　暗灰黄色(2.5Y5/2)砂。灰黄色(2.5Y6/2)・暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土ブロック、酸化鉄を(多量)、黄灰色(2.5Y4/1)粘土ブロック(少量)を含む。
4　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂。灰黄色粘土ブロック、酸化鉄を多量に含む。
5　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。黄灰色粘土ブロック(多量)、酸化鉄(少量)を含む。
6　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘土。黄灰色粘土ブロック(多量)、酸化鉄(少量)を含む。
7　灰オリーブ色(5Y4/2)粘土。褐色(10YR4/4)粘土ブロック、暗灰黄色粘土粒(多量)、酸化鉄(少量)を含む。
8　灰オリーブ色(5Y4/2)粘土。黄灰色粘土ブロック、酸化鉄を多量に含む。
9　褐色(10YR4/4)粘土。酸化鉄(多量)を含む。



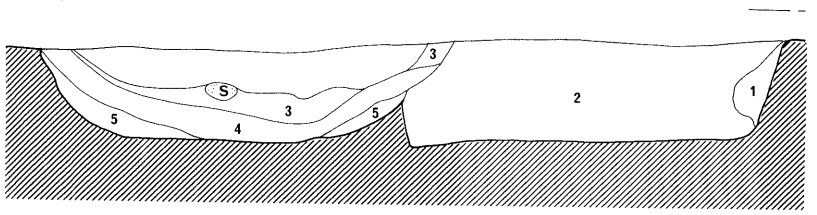
第342図　E・F区土坑(13)

3タイプ　3タイプに属する土坑は、7号、13号、23号、38号土坑等であり、E・F区では最も検出数が少ない。E区からは4基が点在する形で検出され、F区からは1基のみ検出された。

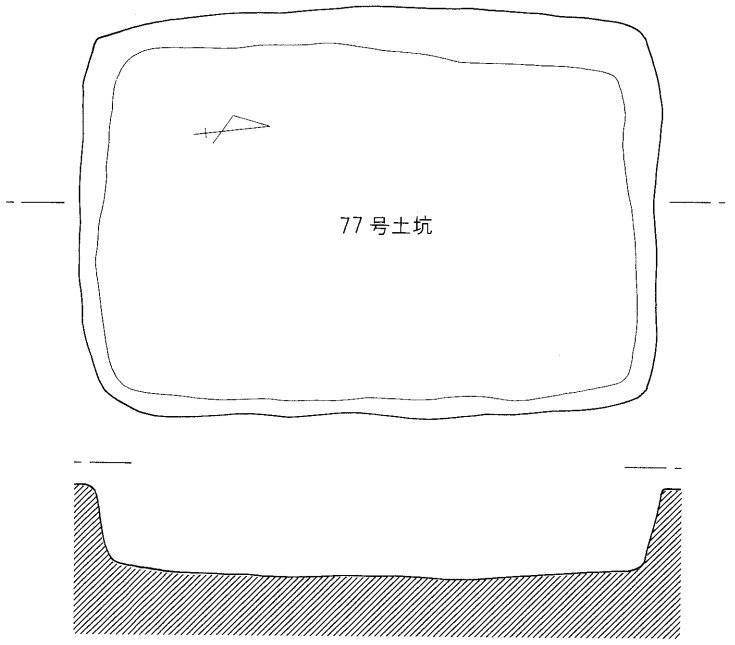
覆土は、1・2タイプ同様、褐色系のシルト及び粘土であり、酸化鉄ブロックを多量含む。自然堆積によるものである。

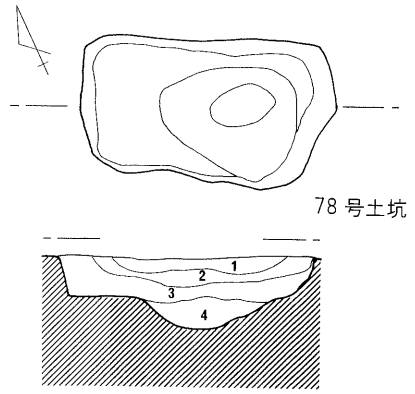


75・76 号土坑土層



1　にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土。灰白色(2.5Y7/1)粘土ブロックを含む。ところどころ酸化している。
2　灰白色(7.5Y7/1)粘土。灰色(N4)・灰白色(7.5Y8/1)粘土ブロックを含む。ところどころ酸化している。下層に酸化鉄層が入る。
3　オリーブ黄色(5Y6/3)シルト。ところどころ酸化している。
4　灰白色(5Y7/2)粘土。上層がところどころ酸化している。
5　灰色(7.5Y5/4)粘土。ところどころ酸化している。



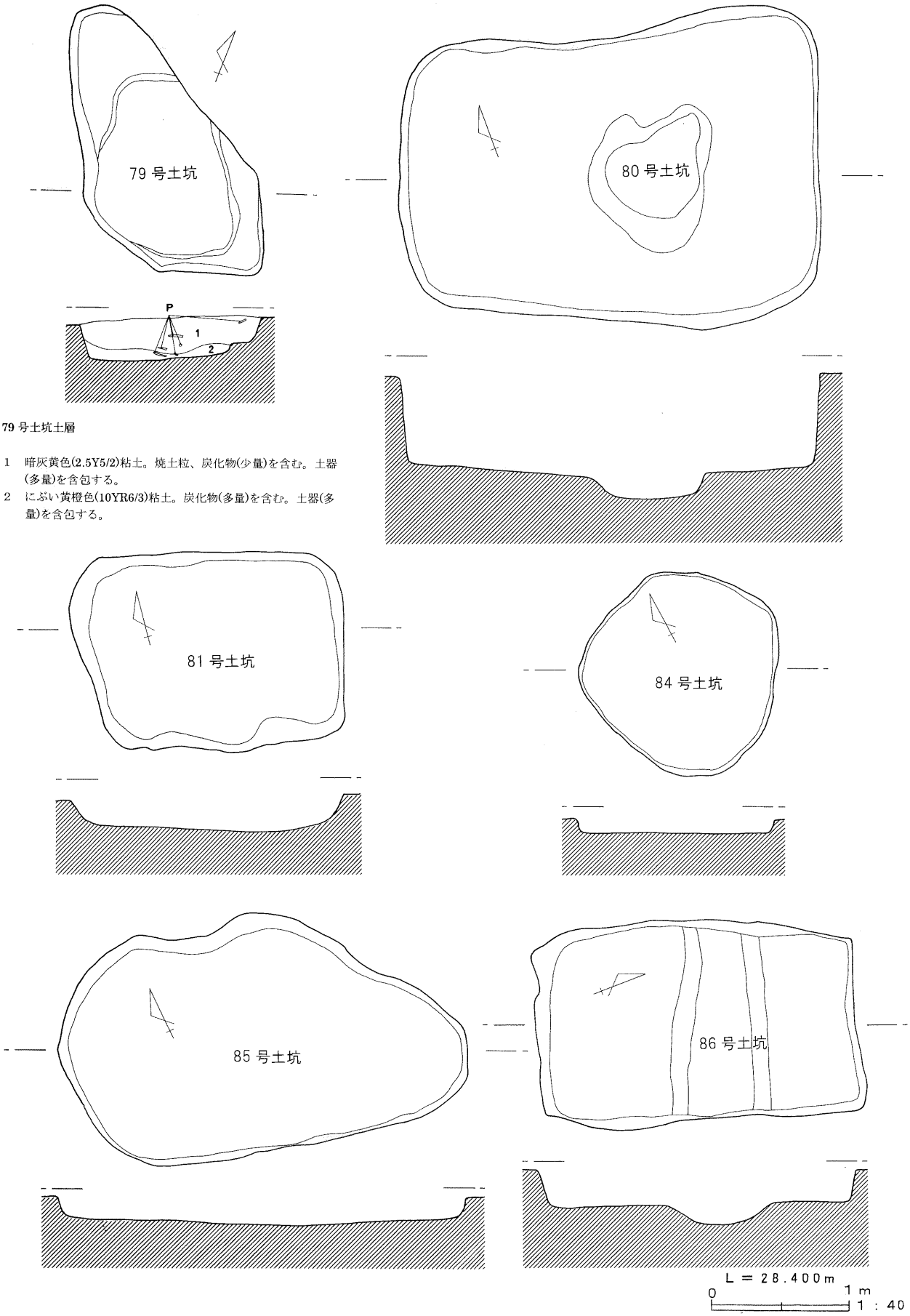


78 号土坑土層

1　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。焼土粒(多量)を含む。
2　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。焼土粒、炭化物を少量に含む。
3　灰色(5Y4/1)粘土。炭化物(少量)を含む。土器(多量)を含包する。
4　にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト。炭化物(多量)を含む。土器(少量)を含包する。

L = 28.400m
0　1m
1 : 40

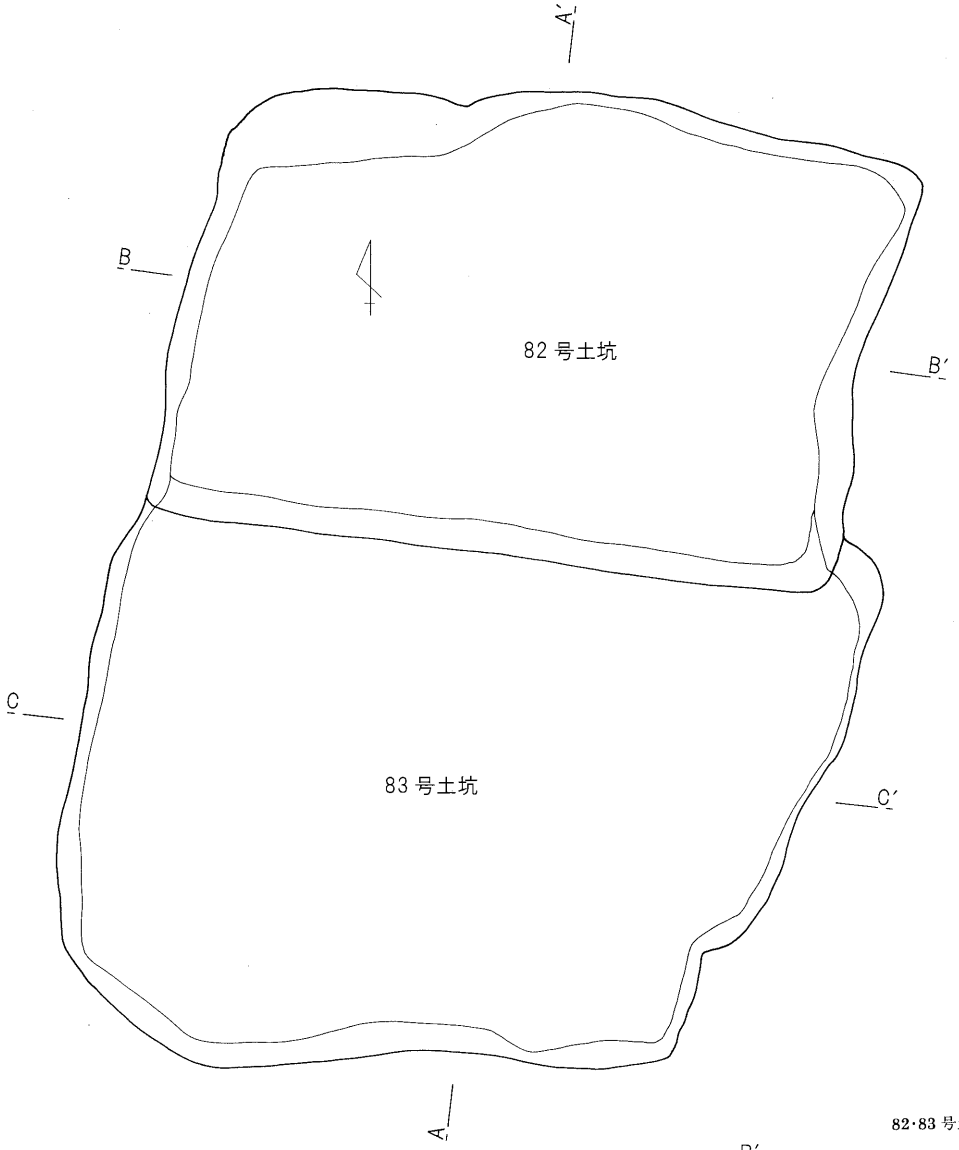
第343図　E・F区土坑(14)

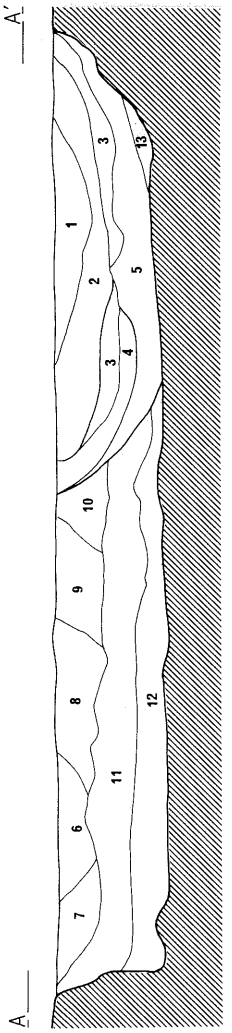


79 号土坑土層

1　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。焼土粒、炭化物(少量)を含む。土器(多量)を含包する。
2　にぶい黄橙色(10YR6/3)粘土。炭化物(多量)を含む。土器(多量)を含包する。

第344図　E・F区土坑(15)

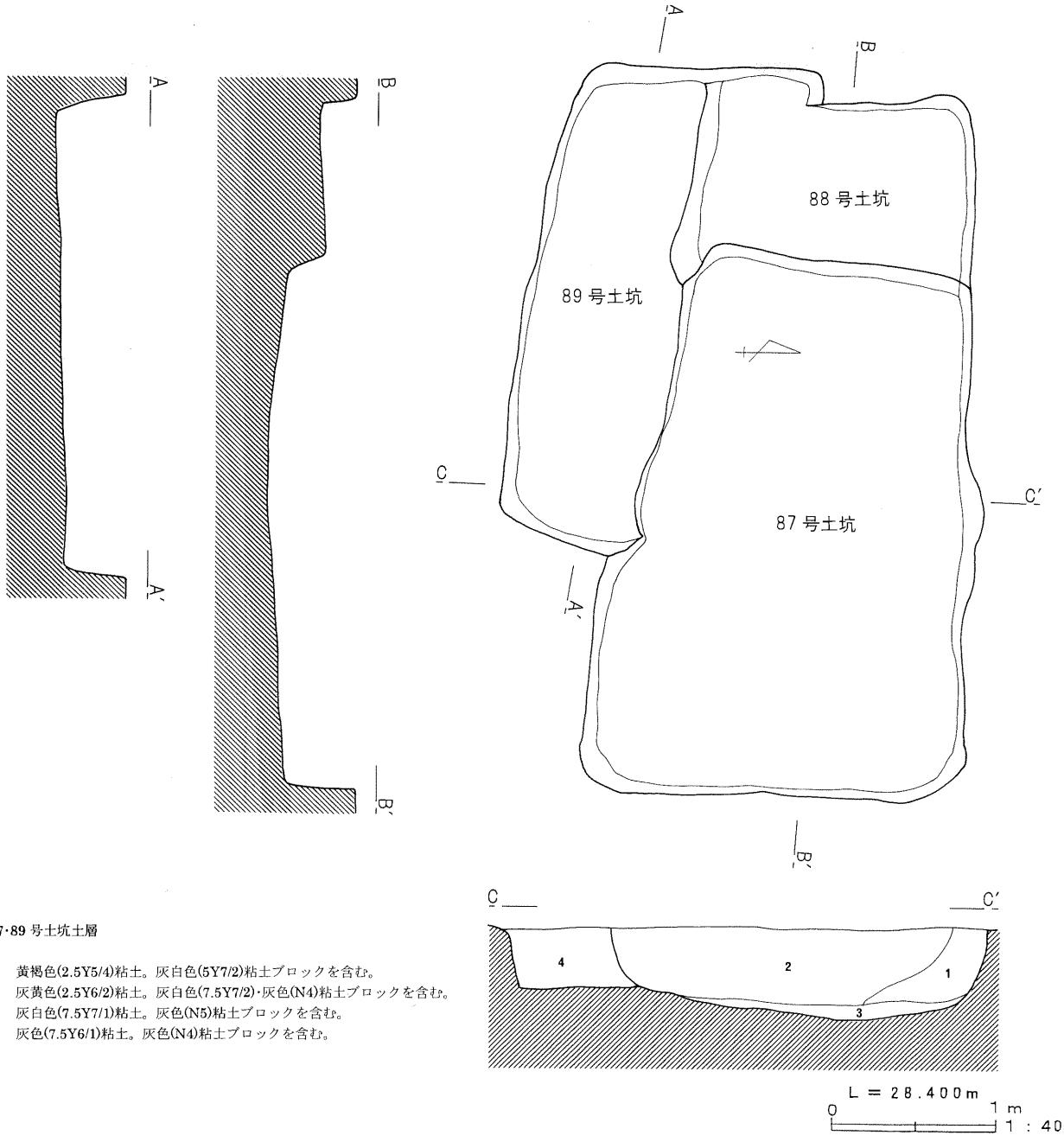




82・83 号土坑土層

1 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂。マンガン(多量)を含む。
2 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂。マンガン、酸化鉄を多量に含む。
3 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。マンガン(多量)、酸化鉄(少量)を含む。
4 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。マンガン(多量)、酸化鉄(少量)を含む。
5 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土。マンガン(多量)、酸化鉄(少量)を含む。
6 褐灰色(10YR6/1)砂。酸化鉄(多量)、マンガン(少量)を含む。
7 灰黄褐色(10YR4/2)粘土。マンガン(多量)、酸化鉄(少量)、砂を含む。
8 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土。暗灰黄色(2.5Y4/2)・黒褐色(2.5Y3/2)ブロック、酸化鉄、マンガン(多量)を含む。
9 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。酸化鉄、マンガンを多量に含む。
10 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂。
11 黄灰色(2.5Y4/1)粘土。酸化鉄棒(多量)、暗灰黄色(2.5Y5/2)ブロックを含む。
12 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土。酸化鉄(多量)を含む。
13 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト。酸化鉄(多量)を含む。

第345図　E・F区土坑(16)



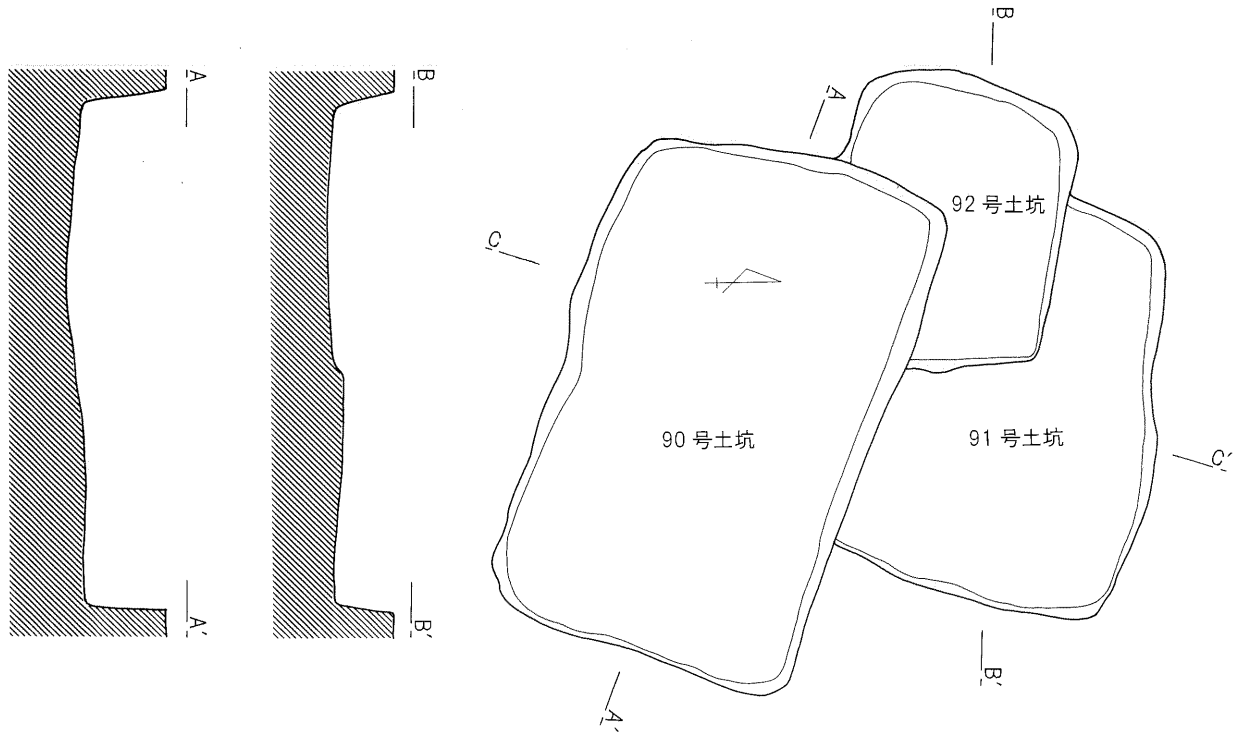
87·89 号土坑土層

1　黄褐色(2.5Y5/4)粘土。灰白色(5Y7/2)粘土ブロックを含む。
2　灰黄色(2.5Y6/2)粘土。灰白色(7.5Y7/2)・灰色(N4)粘土ブロックを含む。
3　灰白色(7.5Y7/1)粘土。灰色(N5)粘土ブロックを含む。
4　灰色(7.5Y6/1)粘土。灰色(N4)粘土ブロックを含む。

第346図　E・F区土坑(17)

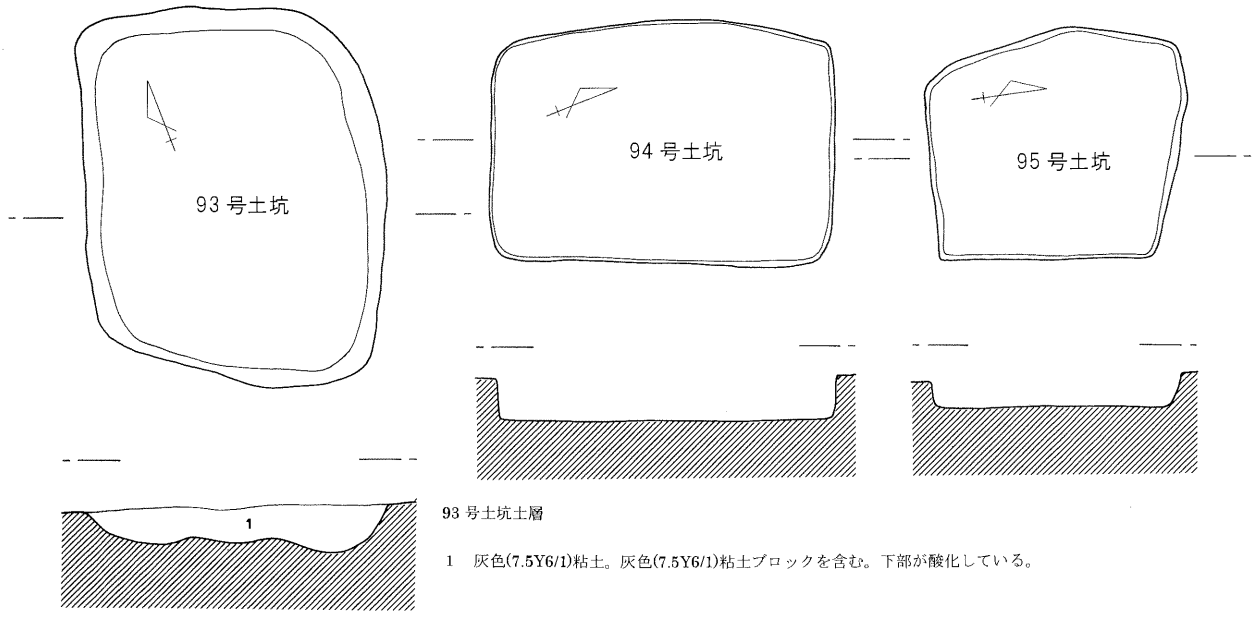
遺物はほとんど検出されなかったため、時期は不明であるが、古墳時代後期の住居跡を切っているものが多いことから、これよりは新しい。

4タイプ　4タイプに属する土坑は、1号、2号、10～12号、14号、25～28号、30～37号、39号、40号、42号、44～54号、56号、57号、61～70号、72～83号、86～95号、103～106号、108号、110号、112～115号土坑等であり、最も多く検出されている。E・F区ともにみられるが、中でもF区西側に集中してみられ、南北に列をなしている。主に長軸方向を東西に向けており、また同タイプの土坑同士で重複関係にあるものもみられる。



90・91 号土坑土層

1　黒褐色(10YR3/2)粘土。黄褐色(2.5Y5/3)粘土ブロック、カーボン、酸化鉄、火山灰を含む。
2　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。酸化鉄、マンガン(多量)、黄灰色(2.5Y4/1)粘土ブロック(微量)を含む。
3　黄灰色(2.5Y4/1)粘土。暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土ブロック(多量)、酸化鉄、マンガン、下層に火山灰を含む。
4　黄褐色(2.5Y5/3)粘土。暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土ブロック、酸化鉄、マンガン(多量)、火山灰(微量)を含む。
5　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土。酸化鉄(少量)、炭化物(微量)を含む。
6　黄灰色(2.5Y4/2)粘土。黄褐色(2.5Y5/3)粘土ブロック、酸化鉄、マンガン、火山灰(多量)、黒褐色(10YR3/2)粘土ブロック(少量)を含む。
7　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土。酸化鉄、マンガン(多量)を含む。
8　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。炭化物(微量)を含む。

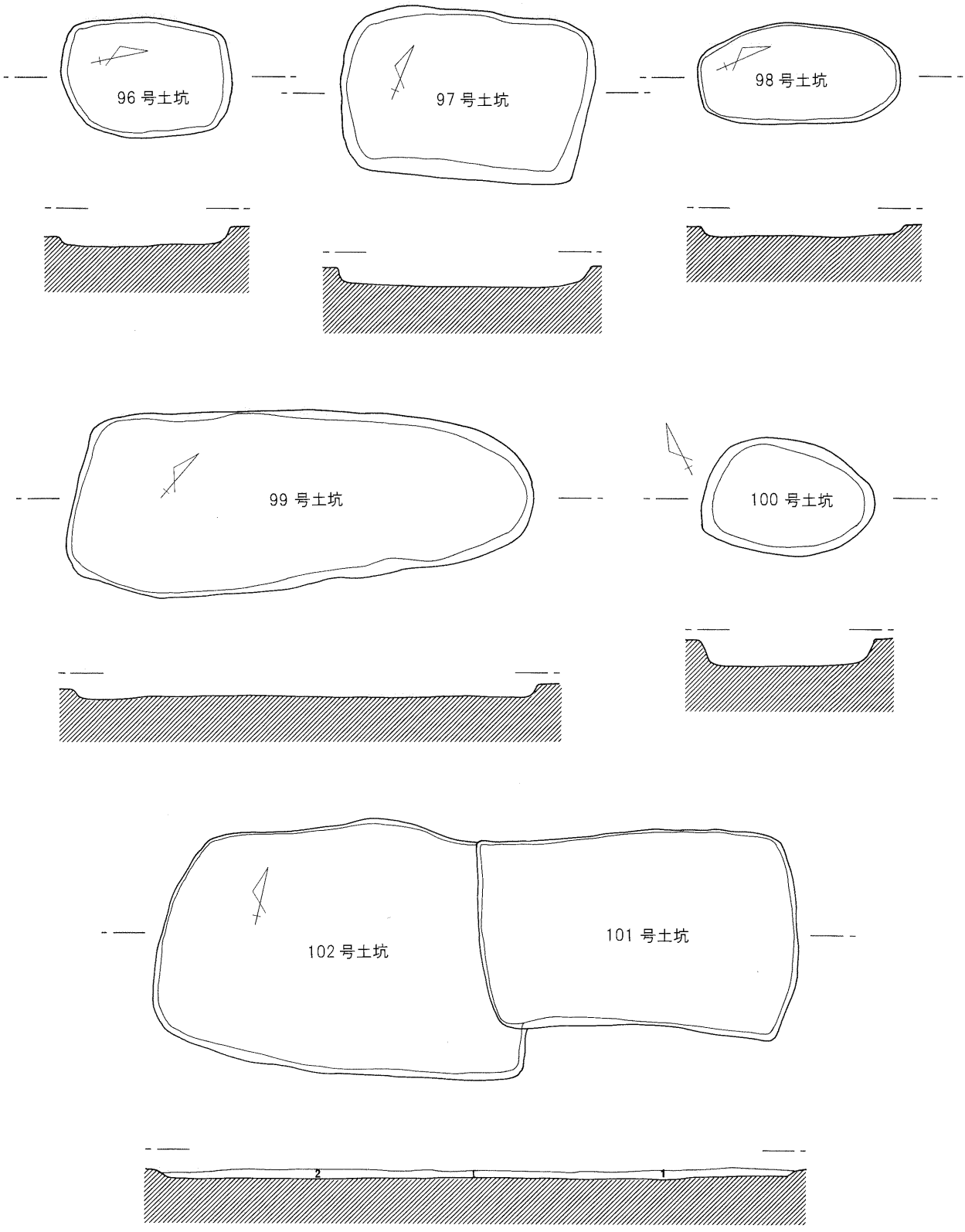


93 号土坑土層

1　灰色(7.5Y6/1)粘土。灰色(7.5Y6/1)粘土ブロックを含む。下部が酸化している。

L = 28.400m
0　1m
1 : 40

第347図　E・F 区土坑(18)

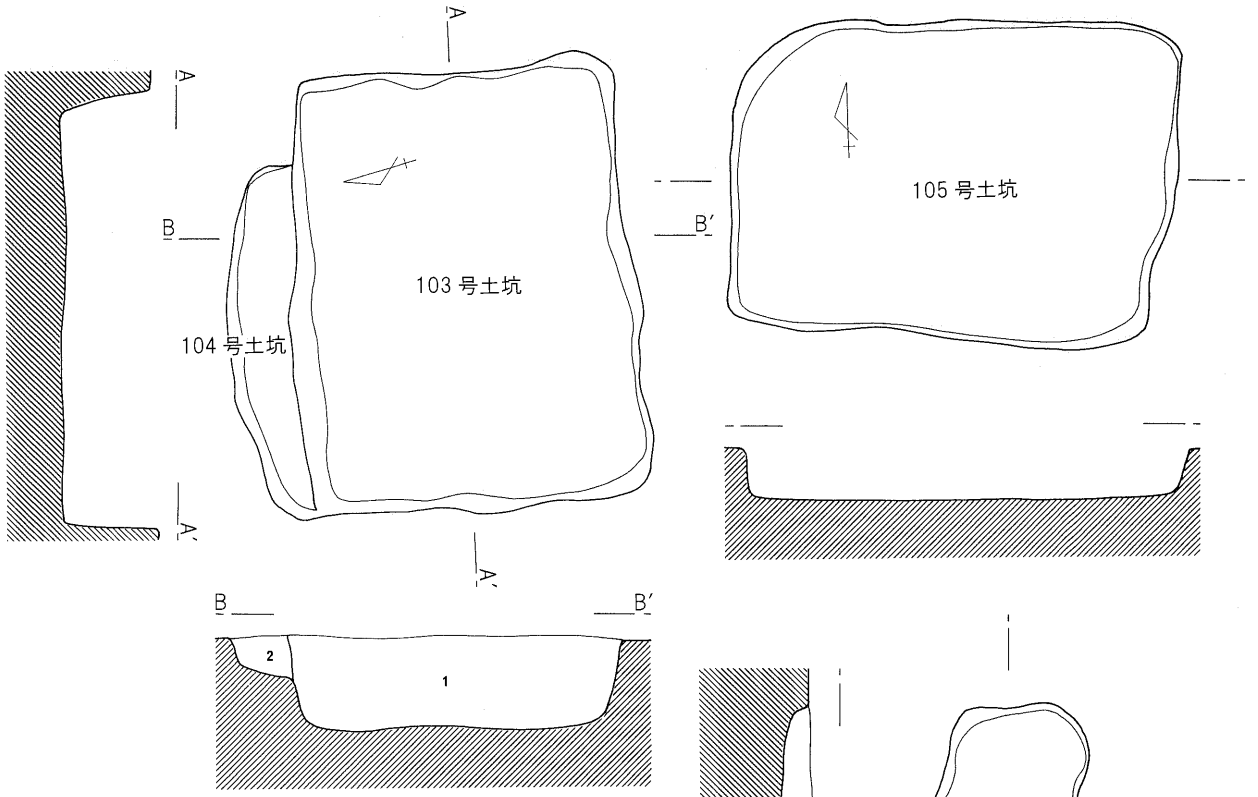


101・102 号土坑土層

1　灰色(10Y5/1)粘土。
2　灰色(10Y4/1)粘土。

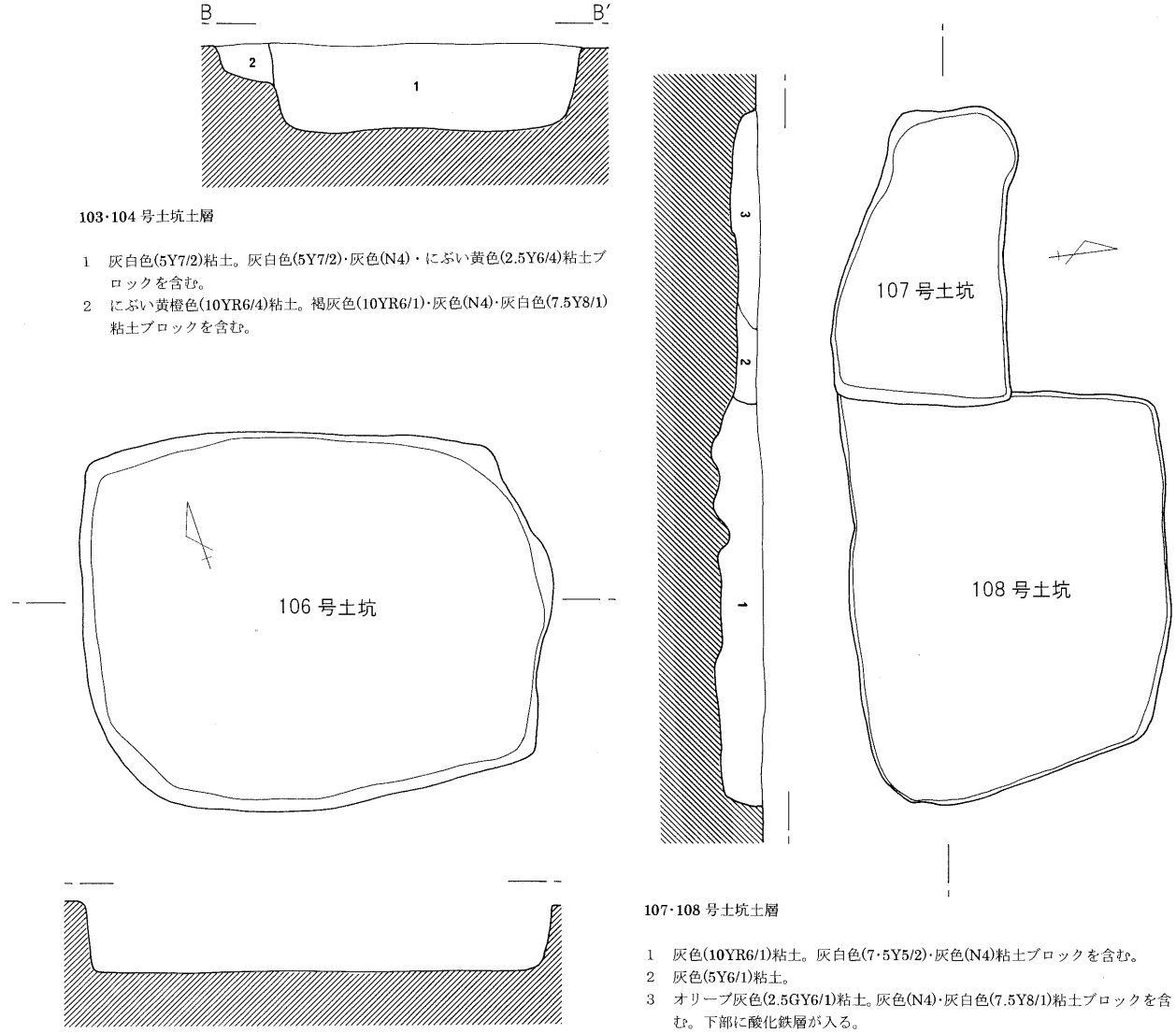
L＝28.400m
0　1m
1：40

第348図　E・F区土坑(19)



103・104 号土坑土層

1　灰白色(5Y7/2)粘土。灰白色(5Y7/2)・灰色(N4)・にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土ブロックを含む。
2　にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土。褐灰色(10YR6/1)・灰色(N4)・灰白色(7.5Y8/1)粘土ブロックを含む。

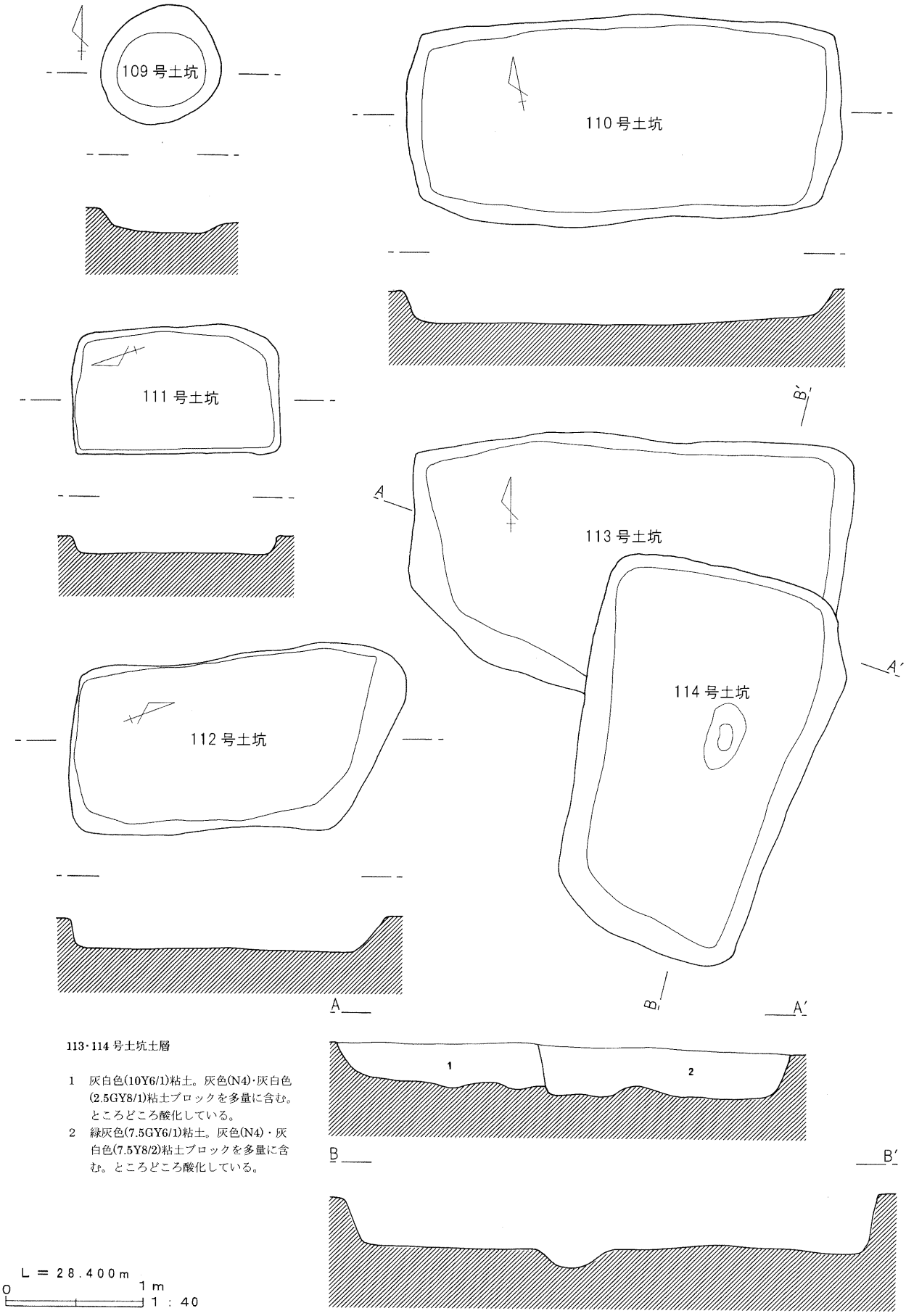


107・108 号土坑土層

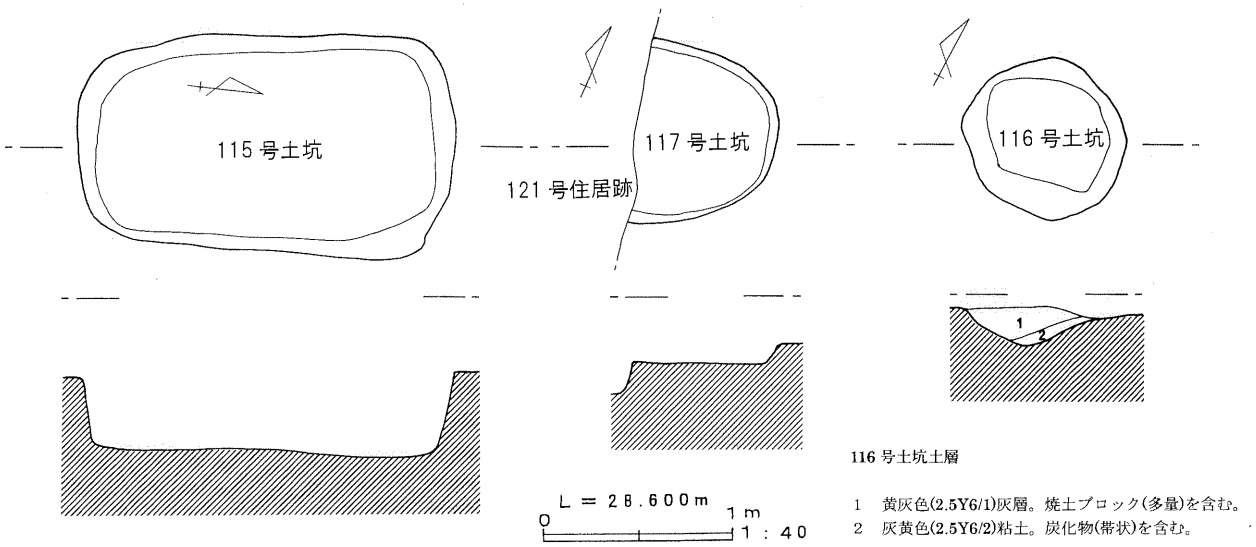
1　灰色(10YR6/1)粘土。灰白色(7・5Y5/2)・灰色(N4)粘土ブロックを含む。
2　灰色(5Y6/1)粘土。
3　オリーブ灰色(2.5GY6/1)粘土。灰色(N4)・灰白色(7.5Y8/1)粘土ブロックを含む。下部に酸化鉄層が入る。

L = 28.400m
0　1m
1 : 40

第349図　E・F区土坑(20)



第350図　E・F区土坑(21)



第351図　E・F区土坑(22)

覆土は、黄色系の粘土及びシルトをブロック状に多量含み、人為的に埋め戻されたものと思われる。

遺物は、14号、79号からのみ検出された。14号からは、土師器高台椀（第352図14－1）、79号からは、土師器杯（第352図79－1～3）、石錘（第353図79－4）が検出された。14－1は高台部のみの検出である。79－1～3は、口径大きく、やや身の浅い模倣杯である。4は川原石によるものである。完形品。

B区でも同タイプの土坑から、平安時代の土器片が検出されており、他の遺構との重複関係も踏まえると、4タイプの土坑は平安時代以降のものと考えられる。よって14号出土土器は流れ込みと考えられる。

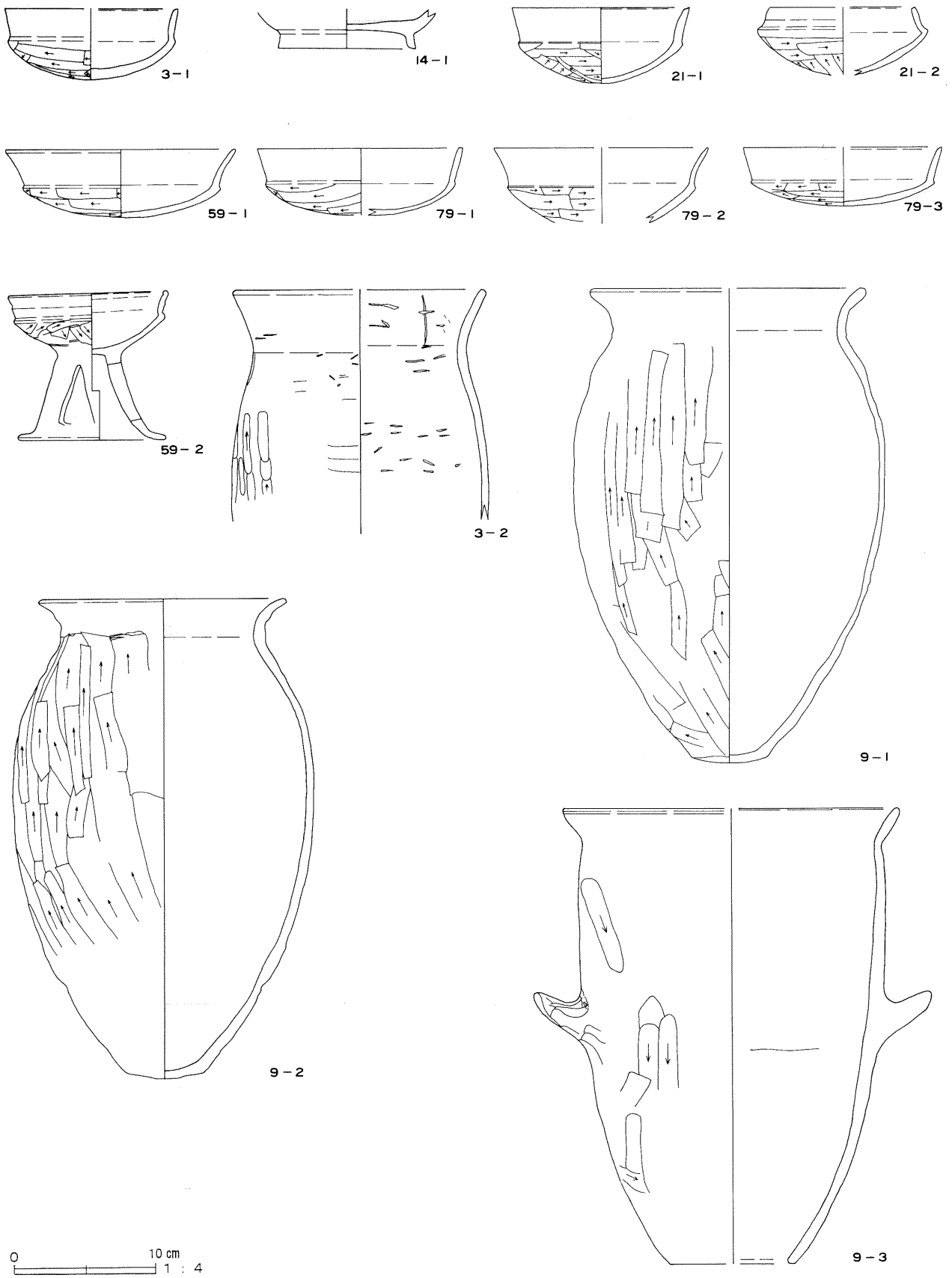
5タイプ　5タイプに属する土坑は、3号、4号、9号、21号、22号土坑等である。それぞれ形態が異なるため、分布状況は見出せないが、すべてE区から検出されている。

覆土は、褐色ないし黄色系のシルト及び粘土を主体とし、酸化鉄ブロックを多量含んでいた。3号、4号、9号は自然堆積によるものである。21号、22号は浅いため自然堆積によるものかどうかは不明である。

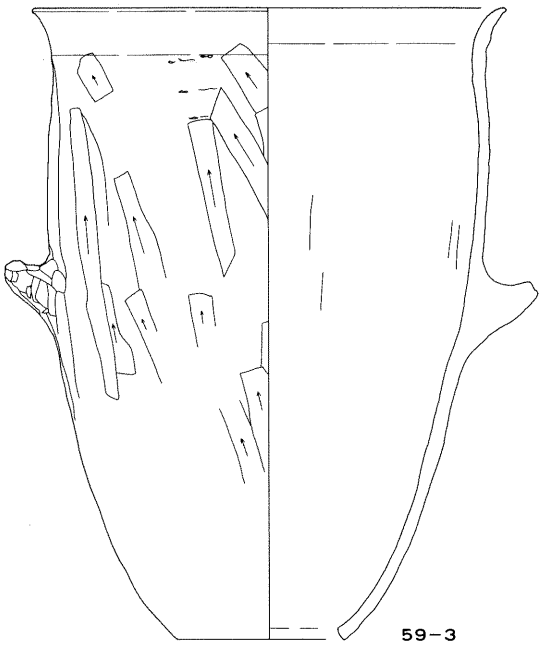
遺物は、3号から土師器杯（第352図№3－1）、甕（3－2）、9号からは甕（第352図9－1・2）、甑（第353図9－3）、21号からは、土師器杯（第352図21－1・2）が検出された。出土土器はすべて古墳時代後期のものである。土師器杯はすべて模倣杯であるが、21－2のみ杯身模倣杯であり、その他は杯蓋模倣杯である。甕はすべて長胴甕であり、甑は胴部に把手を持つタイプである。

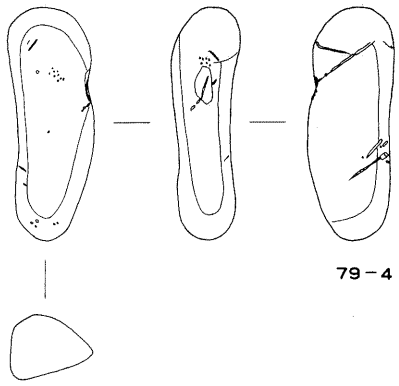
3号、4号はともに重複関係にあり、新旧関係は3号が4号を切っているが、同時に同時期の住居跡も切っている。

9号は2タイプである8号に切られており、両土坑は3、4号と同じく、同時期の住居跡



第352図　E・F区土坑出土遺物(1)







第353図　E・F区土坑出土遺物(2)

第155表　E・F区土坑出土遺物観察表　(第352・353図)

No.	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　考
1	土師器杯	(12.2)	5.0	-	①④②⑤⑥	②	橙	1/2	3号土坑出土。
1	土師器杯	-	-	9.8	⑥②①④	②	灰白	底部のみ	14号土坑出土。
1	土師器杯	12.5	5.3	-	①④⑥	②	橙	完形	21号土坑出土。
2	土師器杯	(10.2)	-	-	①④	②	明赤褐	1/2	21号土坑出土。
1	土師器杯	16.3	4.8	-	⑥②①④	②	橙	一部欠	59号土坑出土。
1	土師器杯	14.6	-	-	④①②	②	明赤褐	1/2	79号土坑出土。
2	土師器杯	(15.2)	-	-	⑥①④②	②	明赤褐	1/4	79号土坑出土。
3	土師器杯	(14.0)	4.1	-	⑥①④②	②	橙	1/4	79号土坑出土。
2	土師器高杯	11.3	10.6	10.4	③④	②	赤褐	一部欠	59号土出土。内外面煤付着。三方透かし。
2	土師器甕	(17.8)	-	-	④①③⑥②	②	橙	上位1/2	3号土坑出土。
1	土師器甕	(19.6)	33.8	5.2	③①⑥	②	浅黄橙	1/2	9号土坑出土。内外面黒斑有。
2	土師器甕	17.5	34.2	5.4	②①⑥	②	橙	4/5	9号土坑出土。胴下部外面磨滅。
3	土師器甑	(23.8)	32.3	(8.8)	①②④③⑥	②	橙	1/3	9号土坑出土。磨滅。
3	土師器甑	25.0	33.7	8.8	③⑥①	②	浅黄橙	5/6	59号土坑出土。内外面黒斑有。
4	石錘	長さ　12.4　幅　4.0　厚さ　2.9						完形	79号土坑出土。

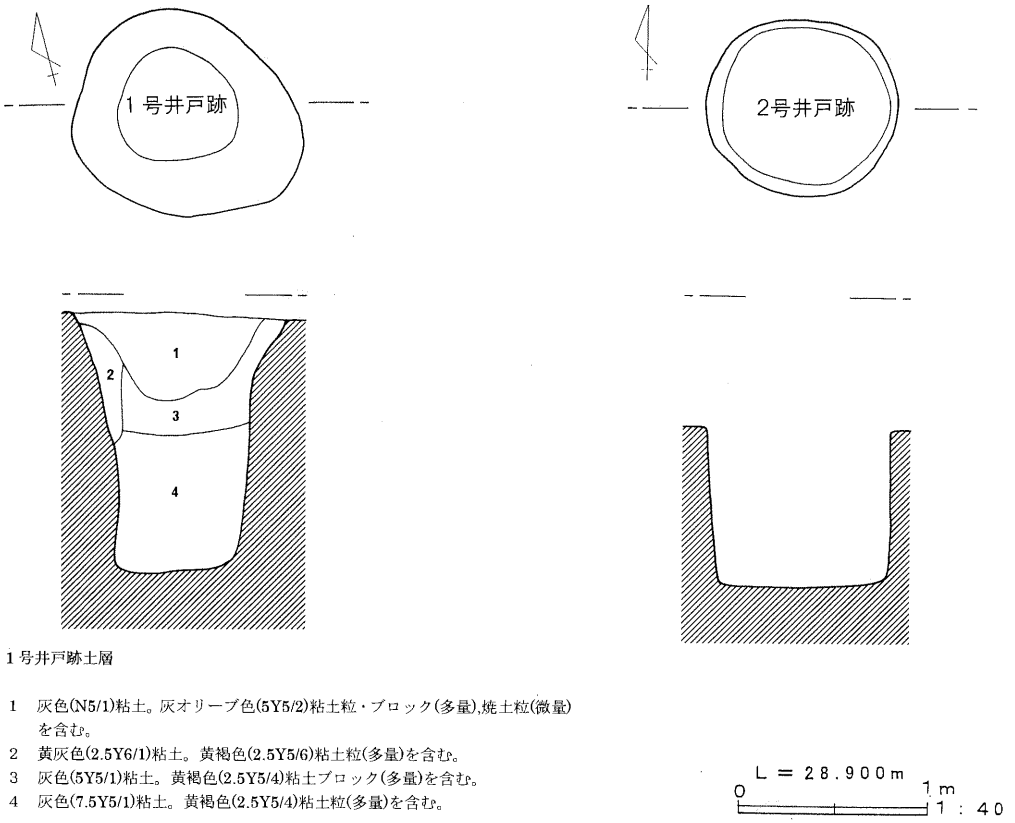
を切っている。9号はL字状を呈していることから、土坑が2基重複している可能性が考えられる。

21・22号は不整形を呈すが、これらも土坑が2基重複していた可能性が考えられる。

出土遺物からみて、3号、4号、9号は古墳時代後期のものと考えられる。

5　井戸跡

井戸は2基のみ検出された。E・F区それぞれから1基ずつ検出された。タイプ（B区参照）はともに違うが、2基とも調査区の北側より検出された。



1号井戸跡土層

1　灰色(N5/1)粘土。灰オリーブ色(5Y5/2)粘土粒・ブロック(多量),焼土粒(微量)を含む。
2　黄灰色(2.5Y6/1)粘土。黄褐色(2.5Y5/6)粘土粒(多量)を含む。
3　灰色(5Y5/1)粘土。黄褐色(2.5Y5/4)粘土ブロック(多量)を含む。
4　灰色(7.5Y5/1)粘土。黄褐色(2.5Y5/4)粘土粒(多量)を含む。

第354図　E・F区井戸跡

1号井戸跡　AB－18グリッドに位置する。23号住居跡を切っている。2タイプに分類される。

(第354図)　長軸1.23m、短軸1.05mの楕円形を呈する。確認面からの深さは1.38mを測る。

覆土は、灰色粘土を主体とする自然堆積層である。上層（1・2層）には焼土を含んでいた。

遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

2号井戸跡　AD－22グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。1タイプに分類される。長軸1.03m、短軸0.94mの円形を呈する。確認面からの深さは85cmを測る。

(第354図)

覆土は図示できなかったが、灰色系の粘土を主体とする自然堆積層であった。

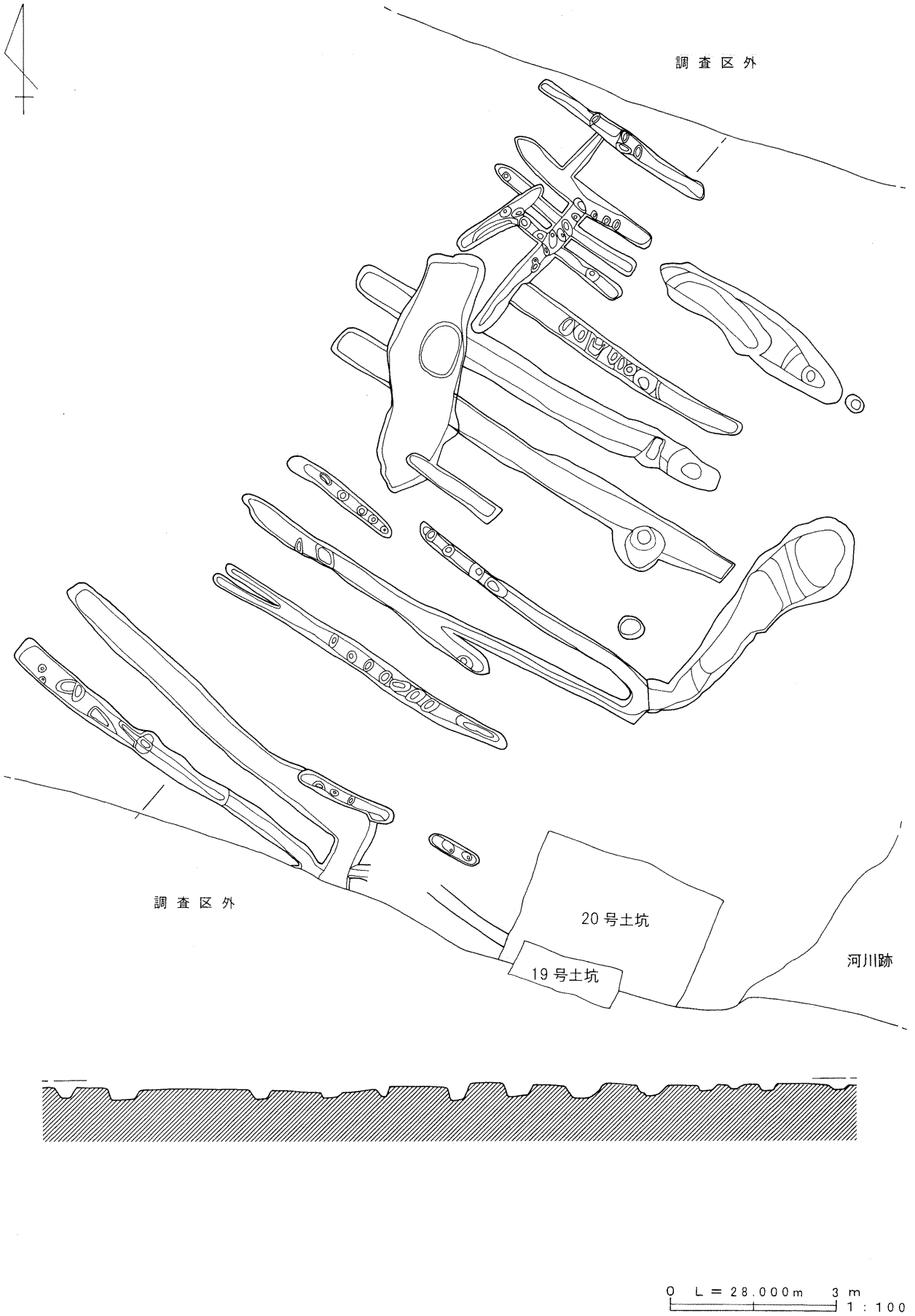
遺物は土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

6　畠　跡

畠跡は、遺構確認面が二面みられたE区のほぼ中央から1箇所のみ検出された。確認されたのは第二面であるが、出土遺物がないため、B区同様、時期決定に苦しむ。

1号畠跡　AC・AD－15・16グリッドに位置する。約16×12mに亘って検出されたが、南側は調査区域外にある。上部には古墳時代後期の住居跡が多数みられたが、新旧関係は不明である。

(第355図)



第355図　E・F区1号畠跡

南東部では19・20号土坑に切られている。

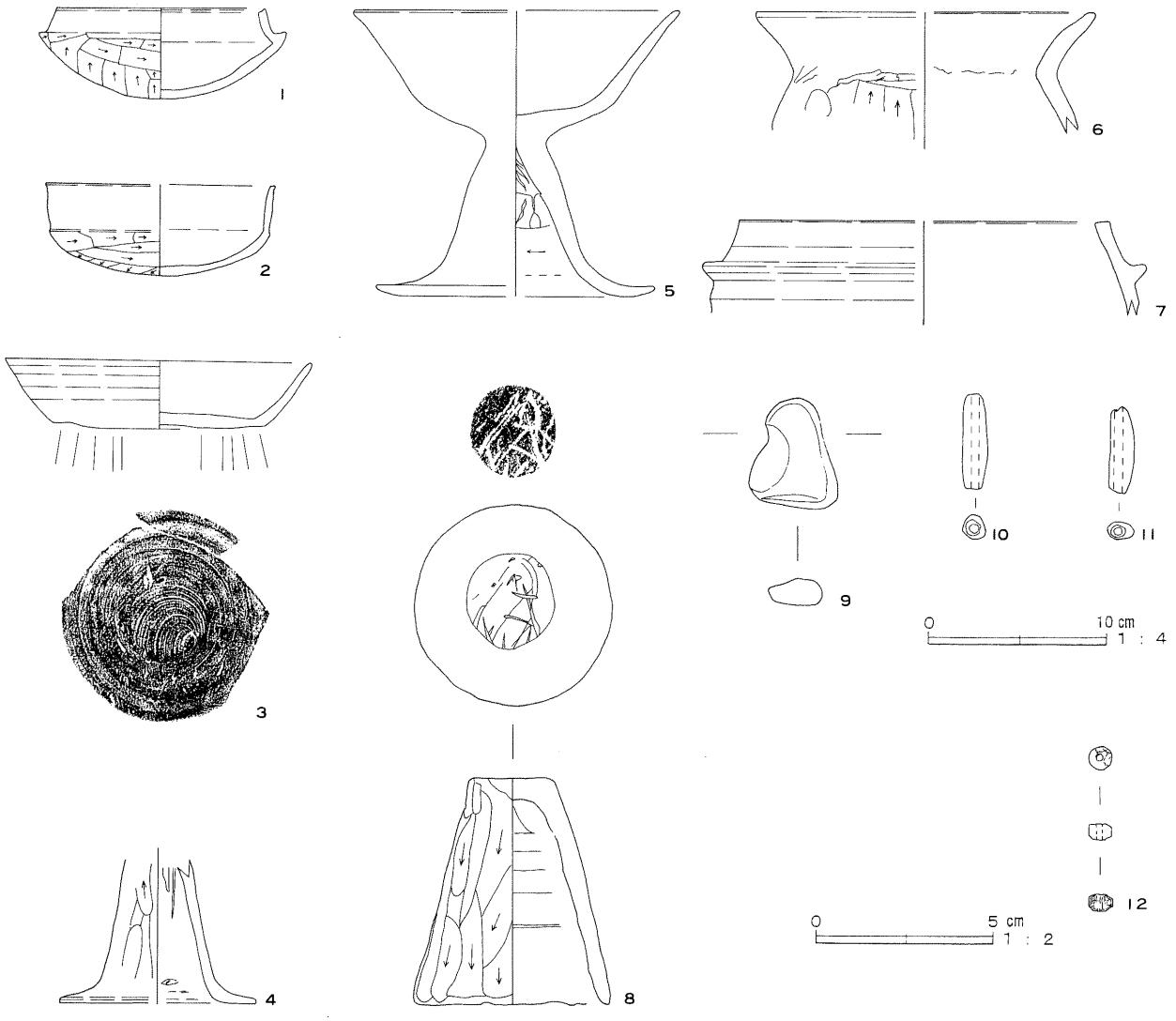
畝は、北西方向から南東方向へ走るものが主体となるが、一部これらに交差するものもみられた。新旧関係は不明である。

畝の幅は26～69cmと幅がみられるが、概ね40cm前後のものが主体となる。畝間は19～92cmと幅がみられた。確認面からの深さは6～18cmを測り、底面には所々でピット状の掘り込みがみられた。覆土は図示しなかったが、黄色系の粘土による単一層であり、自然堆積であった。

遺物は古墳時代前期から後期までの土師器片が少量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

7　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物（第356図）には、古墳時代後期から平安時代までの遺物がみられた。図示可能なものは、土師器杯（No.1・2）、高杯（4・5）、甕（6）、甕（6）、羽釜（7）、



第356図　E・F区1号畠跡

第156表　E・F区遺構外出土遺物観察表　（第356図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	11.8	5.1	-	①②③⑥	②	褐灰	1/2	
2	土師器杯	(13.0)	5.1	-	③②①④⑥	②	橙	口縁部1/2欠	
3	須恵器杯	17.4	3.9	12.0	①⑤②	②	灰白	2/3	
4	土師器高杯	-	-	11.0	②①④③⑥	②	にぶい褐	脚部1/2	
5	土師器高杯	(18.4)	16.2	(15.8)	③①④	②	橙	3/5	内面一部剝離。
6	土師器甕	(18.8)	-	-	②①④⑥	③	橙	口縁部1/2	
7	土師器羽釜	(20.7)	-	-	①②③④	②	灰白	口縁部1/5	
8	土製支脚	上径 4.8	器高 12.8	底径 11.0				完形	
9	石錘	長さ 6.3	幅 3.0	厚さ 1.5				一部欠	
10	土錘	長さ 5.4	最大径 1.3	孔径 0.5				完形	
11	土錘	長さ 4.9	最大径 1.4	孔径 0.4				完形	
12	滑石製臼玉	径 0.7	孔径 0.2	厚さ 0.5				完形	

土製支脚（8）、石錘（9）、土錘（10･11）、滑石製臼玉（12）、須恵器杯（3）等がある。3が奈良時代、7が平安時代、その他は古墳時代後期のものである。

1・2はともに口径が小さく、深身の模倣杯であるが、1は杯身模倣杯、2は杯蓋模倣杯である。高杯はともに脚部が高く、裾が大きく広がるものである。5は口縁部まで残存しており、深身で大きく開いている。6は長胴甕の上部のみの検出である。7は口縁部が内傾している。ロクロ成形による。上部のみの検出である。8は上面に木葉痕を残す。完形品である。9は側面一部を欠いている。土錘はともに完形品である。長さ5cm前後、最大径1.3～1.4cm、孔径0.4～0.5cmを測る。12は完形品。3は口径17.4cmと大きく、身が浅い。底面には回転糸切り後に外周にヘラ削りがなされている。南比企産で、8世紀前半のものである。

VI　調査のまとめ

一本木前遺跡における発掘調査報告は、今回で３回目となる。これまでの調査により、遺跡が古墳時代後期から平安時代までを中心とした集落跡であることは確認されていたが、今回Ｂ区から古墳時代前期の住居跡がまとまって検出されたことにより、集落が古墳時代前期にまで溯ることが明確となった。

発掘調査は、未調査区域を含めた調査総面積61,280㎡のうち、約３分の２が終了したわけであるが、徐々に遺跡の全貌が明らかになってきており、それと同時に各時代別の様相もおおよそ把握できる状況になってきた。また、引き続き行われている発掘調査では、古墳時代前期の方形周溝墓が検出されるという新たな成果も得られたことで、これまでの調査で検出された遺構の評価を修正する必要が生じてきた。よって、ここでは、これまでの調査成果と現段階における新たな成果を踏まえて、修正点をはじめとして簡単にまとめておきたい。

古墳時代前期の住居跡は、Ａ区及びＤ・Ｅ区でも１軒ずつ検出されていたが、今回Ｂ区の調査で11軒、Ｅ・Ｆ区で１軒が検出された。また、今年度実施された発掘調査では、新たに方形周溝墓も検出されたことで、同時代の集落と墓域が存在することが明らかとなった。

住居跡はＡ区では南東部にみられ、Ｂ区では北東部に集中している。また、発掘調査中のＢ区西側のＣ区からも住居跡が10数軒検出されている。よって、集落はＡ・Ｂ・Ｃ区南側からＤ・Ｅ・Ｆ区北側にかけて広がっており、遺跡範囲内ほぼ中央に分布していたと考えられる。

方形周溝墓は、Ｃ区南東部のＢ区との境から４基が検出された。確認面からの深さ約1.5m程で、溝が全周するタイプが多く、方台部からは主体部と思われる墓壙も検出された。このうち、２号墓の主体部からは、長さ4.3cmを測る大きな翡翠製の勾玉１点と碧玉製の管玉２点、人の歯が検出された。これらは墓壙底面西側から検出されたことから、頭部を西側に向けて埋葬したものと考えられる。

ここで問題となるのが、既に報告済みのＤ・Ｅ区51号土坑や、今回報告するＥ・Ｆ区19・20号土坑等の人骨が検出された土坑の存在である。これらは単独墓であるとの見方をしていたが、今回、方形周溝墓が検出されたことで、その評価を変えざるを得ない状況となった。というのも、これらは方形周溝墓の近くに位置し、土坑の軸が方形周溝墓群の主体部とほぼ同一方向を向いており、人骨頭部が西側を向いていること、51号土坑は古墳時代後期の住居跡の下から検出されていること等の点から考えると、方形周溝墓の主体部であった可能性が極めて高く、周溝等は調査区域が狭かったために確認することができなかったものと考えられる。これらを主体部ととらえると、方形周溝墓は最低でも６基は存在していたこととなり、墓域はＢ・Ｃ区南端からＤ・Ｅ区北側にかけて広がっていたと想定される。

集落と墓域はほぼ同箇所に存在するが、方形周溝墓出土土器と住居跡出土土器には若干の型式差がみられることから、集落廃絶直後に墓域として方形周溝墓が築造されたものと考えられる。現時点ではまだ不明な点が多いが、Ｄ・Ｅ区51号土坑とＥ・Ｆ区19・20号土坑につ

いてはここで修正しておきたい。方形周溝墓をはじめとする古墳時代前期の詳細については来年度報告することとしたい。

古墳時代後期以降の遺構については、これまでの調査同様、住居跡、溝跡、土坑、井戸跡などが多数検出され、今回新たに掘立柱建物跡、畠跡も検出された。

古墳時代後期の住居跡は、これまでの調査でも多数検出されているが、今回報告するB区及びE・F区でも多数検出された。B区では主に南東部に集中してみられ、重複関係はほとんどみられなかったが、E・F区ではこれまでの調査軒数を凌ぐ数の住居跡が検出され、かつ住居跡同士で重複関係にあるものが非常に多く、かなり密集した状況を呈している。また、F区では東側にのみ集中して分布しており、西側にはみられないことから、集落跡の西端を把握することができた。古墳時代後期の住居跡は、A・B区では南側、D・E区ではほぼ全面、F区では東側に住居跡がみられることから、これらの範囲が集落の中心になると考えられる。なお、B区では調査区のほぼ全面、E・F区ではE区において河川跡がみられたが、住居跡は河川埋没後に構築されたものと河川跡に切られているものの二者が存在し、住居跡出土土器にはかなり幅がみられることと合わせて考えると、集落は長期間にわたって営まれていたことが想定される。また、河川跡の年代については、古墳時代後期の住居跡との新旧関係から、同時期のものと判断されるが、氾濫等により数回流れを変えている。

奈良・平安時代以降は、住居跡の検出数が少なかったが、B区、E・F区ともに溝跡、土坑、井戸跡等が多数検出され、掘立柱建物跡が今回初めて検出された。住居跡以外は出土遺物がほとんどないため、具体的な時期については不明なものが多い。しかし、そのほとんどが河川埋没後のものであることから、奈良・平安時代のものと判断した。

住居跡はB区では5軒、E・F区ではE区から1軒のみ検出された。出土遺物からB区の住居跡はすべて平安時代末頃、E・F区は平安時代前半のものである。奈良・平安時代の住居跡はB～F区では検出数が少なく、主にA区から多数検出されていることから、集落の中心となるのはA区と考えられる。

掘立柱建物跡は今回初めて検出された。出土遺物がないことから時期決定に苦しむが、F区では古墳時代後期の住居跡の間に位置するものもみられることから、古墳時代後期の可能性も考えられる。

また、畠跡も今回の調査で初めて検出された。溝が数条並行して走っていることから、畠跡としたが、時期決定が難しい。確認したのは古墳時代前期の住居跡が多数検出された第二面であるが、本来は第一面で検出されるべき遺構であったものと考えられる。

溝跡、土坑、井戸跡等については、これまでの調査同様、多数検出された。土坑は4タイプとした方形土坑が主体となり、F区では住居跡が密集する東側にはみられず、西側に列をなして検出された点が興味深い。井戸跡はB区で多数検出され、河川埋没箇所に多くみられた。溝跡は河川埋没後のものであるが、河川跡に沿って北東から南西方向に走るものが多い。

以上、現時点における各時代の様相について簡単にまとめた。発掘調査は現在も継続中であり、今後また新たな成果が出てくるかもしれない。各時代の詳細については、発掘調査が終わった段階で改めて行ってみたい。

引用・参考文献

熊谷市　1963　『熊谷市史』前編
熊谷市教育委員会　1979　『中条遺跡条里遺跡調査報告書Ⅰ』
1980　『中条遺跡群・中島遺跡』
1982　『中条遺跡群III　権現山古墳・常光院東遺跡』
1982　『三尻遺跡群　上辻・下辻遺跡』
1984　『三尻遺跡群　上辻・下辻遺跡』
1984　『中条遺跡群』
1985　『三尻遺跡群　黒沢館・樋ノ上遺跡』
1988　『天神遺跡』
1989　『中耕地・西通・東通』
1992　『西別府廃寺』
1994　『西別府廃寺（第二次）』
1999　『横間栗遺跡』
2000　『一本木前遺跡』
2001　『一本木前遺跡II』
熊谷市遺跡調査会　2001　『諏訪木遺跡』
熊谷市籠原裏遺跡調査会　2000　『籠原裏古墳群10号墳』
埼玉県遺跡調査会　1971　『横塚山古墳』
1976　『弥藤吾新田遺跡』
埼玉県教育委員会　1982　「三尻中学校遺跡」『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和55年度
埼玉考古学会　1976　「三ヶ尻上古遺跡」『埼玉県土器集成』4
㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1983　『三ヶ尻天王・三尻林(1)』
1986　『樋の上遺跡』
1987　『下辻遺跡』
1989　『北島遺跡』
1989　『北島遺跡II』
1989　『新田裏・明戸東・原遺跡』
1989　『光屋敷遺跡』
1990　『東川端遺跡』
1991　『北島遺跡III』
1991　『小敷田遺跡』
1993　『上敷免遺跡』
1995　『根絡・横間栗・関下』
1998　『北島遺跡IV』
1998　『樋の上／皇山』
1999　『天神東遺跡』

報告書抄録

ふりがな	いっぽんぎまえいせき
書名	一本木前遺跡III
副書名	平成13年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
巻次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編集者名	松田　哲
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会
所在地	〒360—8601 熊谷市宮町２-47-１　TEL048-524-1111
発行年月日	西暦2002（平成14）年３月29日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯（°′″）	東緯（°′″）	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
一本木前遺跡	熊谷市大字東別府1340番地他	11202	105	36°11′17″	139°21′39″	20000601～20010331	14,771	調節池掘削

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
一本木前遺跡Ｂ区	集落跡	古墳時代前期	住居跡　13軒	土師器 石製品（砥石）	古墳時代前期の集落跡が検出された。
		古墳時代後期	住居跡　19軒	土師器 須恵器 石製品（砥石、磨石、滑石製模造品、石錘、臼玉） 土製品（支脚、土錘）	
		奈良・平安時代	住居跡　５軒 掘立柱建物跡　３棟 溝跡　24条 土坑　44基 井戸跡　17基	土師器 須恵器 石製品（砥石） 鉄製品（刀子） 銅製品（刀具）	
		中世以降	不明遺構　１基	土師器 陶磁器 石製品（臼玉、砥石） 土製品（土錘）	
		時期不明	畠跡　８箇所	土師器 土製品（土錘）	
一本木前遺跡Ｅ・Ｆ区	集落跡	古墳時代前期	住居跡　１軒 土坑　２基	土師器	19･20号土坑から頭部を西側に向けて埋葬された人骨が検出された。
		古墳時代後期	住居跡　127軒 土坑　４基	土師器 須恵器 石製品（管玉、紡錘車、滑石製模造品、石錘、臼玉、砥石、磨石） 土製品（支脚、土錘、丸玉、紡錘車 鉄製品（鋤先、鉄鏃）	
		奈良・平安時代	住居跡　１軒 掘立柱建物跡　５棟 柵列　２列 溝跡　15条 土坑　111基 井戸跡　２基	土師器 須恵器 石製品（石錘）	
		時期不明	畠跡　１箇所		

平成13年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
一本木前遺跡Ⅲ

平成14年3月29日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会
印刷／朝日印刷工業株式会社



さくらのまち“熊谷”